

ハンス・ファラダ著『豺狼の群れ』翻訳

ファラダ, ハンス

恒吉, 法海
九州大学大学院言語文化研究院 : 名誉教授 : ドイツ文学

<https://hdl.handle.net/2324/4795152>

出版情報 : ジャン・パウル 研究書・翻訳書, pp.1-786, 2022-08-03
バージョン :
権利関係 :

ハンス・ファラダ著『豺狼の群れ』翻訳
Hans Fallada: Wolf unter Wölfen (1937)
恒吉法海訳

九州大学リポジトリ「ジャン・パウル研究書・翻訳書」(付録 3)
Jean Paul Study: (appendix 3) Fallada: Wolf Among Wolves
恒吉法海訳 2022年 8月3日

目次

第一部 都市とその不安軽佻の民	...5	
第一章 ベルリンや他の所での目覚め	...5	
1 娘と男	2 娘は半ば目覚める	3 ある騎兵隊長がベルリンへ向かう
4 ベルリンは朝食を摂る	5 森林官のクニーブッシュは薪泥棒に出会う	
6 マイエンブルクの監獄での空腹暴動	7 侍女ゾフィーは一通の手紙を書く	
8 娘と男は目覚める		
第二章 ベルリン衰退	...12	
9 騎兵隊長は人を求める	10 朝食の待機	11 ペートラは賭博者に鍛えられる
12 騎兵隊長は人々を雇う	13 パーゲル夫人は朝食を摂る	
14 パーゲル夫人の結婚生活と孤独	15 失敗した賭けの夜	
16 愛する二人の対話		
第三章 狩人と追われたもの達	...42	
17 検査官マイヤーは面識を得る	18 質屋訪問	19 騎兵隊長は戦友に出会う
20 ペートラはある発見をする	21 ブラックヴィッツはベルリンに反吐を感ずる	
22 パーゲルはツェッケに対し躊躇う	23 パーゲルは金を得られない	
24 パーゲルは付いて行く	25 パーゲル夫人は結婚について知る	
第四章 町と田舎での蒸し暑い午後	...80	
26 監獄でのインタビュー	27 ペートラ追放	28 マイヤー検査官は取り入る
29 警察本部室の騎兵隊長	30 豊かな人々の許のパーゲル	
31 恋の使者としての黒人マイヤー	32 パーゲル夫人はフォン・アンクラーム夫人を訪問する	
33 門道のペートラ		
第五章 雷雨が勃発する	...115	
34 巡査長グーバルケがペートラを逮捕する	35 母親の許への途上のヴォルフガング・パーゲル	
36 母との諍い	37 侍女ゾフィーの解雇	
38 森林官クニーブッシュはニュースを知る	39 村長ハーゼ宅にて	
40 フォン・シュトゥットマンは階段から転げ落ちる	41 パーゲルは絵を売る	
42 交番のペートラ	43 パーゲルはペートラについて新たなことを知る	
第六章 雷雨は過ぎるが、蒸し暑さは残る	...185	
44 ブラックヴィッツはシュトゥットマン事件を片付ける	45 黒人マイヤーは自分の食事をハルティヒ夫人に贈る	
46 レーダーとクニーブッシュと策謀中のヴァイオ	47 灰鷹の看護婦としてのペートラ	
48 枢密顧問官フォン・テッシューは請求書を書く	49 晩祷のアマンダ	
50 パーゲル夫人とミンナは荷造りをする	51 キリスト教徒宿坊のゾフィー	
52 ブラックヴィッツはシュトゥットマンを雇う	53 両友人はパーゲルに出会う	

第七章 蒸し暑い満月の夜	...243
54 アマンダとハルティヒ夫人はマイヤーのことで一致する	55 枢密顧問官夫妻は眠りに就く
56 黒人マイヤーは酩酊を手に入れる	57 少尉は踏み込む。しかしアマンダが注視している。
58 少尉は手紙を見つける	59 森林官クニーブッシュは密猟者を捕らえる
60 賭博クラブ前の路上で	61 パーゲルは賭けに失敗する
62 騎兵隊長はパーゲルの弟子となる	

第八章 夜中の混乱	...282
63 アマンダはハンス君に逃亡するよう説得する	64 少尉はマイヤー氏を訪ねる
65 マイヤーは発砲する	66 少尉は急いでいる
67 クループス夫人は彼女の見方を説明する	68 ペートラはクループス夫人の代理人になる
69 外貨妖婦との喧嘩	70 フォン・シュトゥットマンの迷いの外出
71 パーゲルは偉大な賭けをする	72 アレックス[アレクサンダー広場の警察本部]での三人
73 守衛所のパーゲル	

第九章 新たな一日への新たな出発	...330
74 ゴフィーは目覚める	75 黒人マイヤーはすんでの所で死を免れる
76 パーゲルは自分の荷物を受け取る	77 リーブシュナーは屋外作業を手に入れる
78 ペートラも起きる	79 ヴァイオは野蛮なことを報告する
80 騎兵隊長とその郎党	81 ゴフィーは騎兵隊長を救う

第二部 田舎炎上	...349
第十章 田畑の平穏	...349
82 シュトゥットマンはハルティヒ夫人に窓拭きを教える	83 シュトゥットマンと枢密顧問官の諍い
84 ほら二人が行く	85 中尉の驕り
86 レーダー、老練な外交官	87 ゴフィーの冒険
88 枢密顧問官は肖像紙片を見つける	89 パーゲルは一通の手紙を見つける
90 畑泥棒の捕獲	91 新聞、新聞

第十一章 悪魔の軽騎兵達がやって来る	...406
92 騎兵隊長は一通の手紙のせいで叫ぶ	93 パーゲルの解雇
94 パーゲルはヴァイオに接吻する	95 シュトゥットマンは請負契約を説明する
96 軽騎兵達の侵入	97 枢密顧問官は厄介事を持ち込む
98 煉瓦十字架と鷺鳥殺害	99 鷺鳥殺害の後
100 騎兵隊長とヴァイオは一つの発見をする	101 レーダーはヴァイオの許で一つの成果を得る
102 騎兵隊長は抵抗する	103 夜のヴォルフガングとヴァイオ
104 新聞から	

第十二章 探せ	...494
105 騎兵隊長のいないノイローエ	106 ミンナはペートラを見つける

107	巡査長マロフケは幽霊を見る	108	五人の幽霊が駆ける	
109	パーゲルは救助を呼ぶ	110	マロフケ失墜	111 騎兵隊長の帰還
112	枢密顧問官シュレックの手紙	113	フランクフルトの裁判期日	
114	車を巡る夫婦の情景	115	エーファ夫人とシュトゥットマンはより親密になる	
	116	パーゲルは森で黒人マイヤーに出会う		
第十三章 失われ、見棄てられ				...567
117	シュトゥットマンは旅し、エーファ夫人はとても孤独	118	エーファ夫人は従者に情報を求める	
	119	老テッショー夫妻は旅立つ	120	オスターデの「黄金の帽子亭」で
	121	追い詰められた少尉	122	平常心の喪失
123	騎兵隊長は行方不明になり、エーファ夫人は待機する	124	或る少尉の最期	
125	ブラックヴィッツ一家の帰宅	126	ヴィオレット行方不明	127 夜の捜査
第十四章 生活は更に続く				...664
128	君主としてのパーゲル	129	或る寝室への入場	
130	結婚生活のないささやかな結婚生活	131	戦うゾフィー	
132	沈黙するようになったクニーブッシュ	133	パーゲルの意気阻喪の時	
134	騎兵隊長は目覚める	135	エーファ夫人とその検査官	
136	騎兵隊長がまた話すようになる			
第十五章 最後の者でも一人ではない				...723
137	ノイローエでの金の逼迫	138	ある臆病者の英雄的死	
139	パーゲルの理解は後の祭り	140	パーゲルは金の工面をしなければならない	
141	テッショー息子は遺産継承を夢見る	142	郎党間での別離の気分	
143	太った刑事が報告する	144	一人の娘の帰還	
第十六章 レンテンマルクの奇蹟				...756
145	心機一転	147	セイレーン[蠱惑の歌姫]としてのペートル	
148	ファッションサロン・エーファ・フォン・ブラックヴィッツ			
149	アマンダ・ボックスは婚約を解消する	150	枢密顧問官との別れ	
151	水泳の心得がない	152	夜の夫と妻	
解説				...771
あとがき				...786

第一部
都市とその不安輕佻の民

第一章
ベルリンや他の所での目覚め

1
娘と男

狭い鉄製のベッドに一人の娘と一人の男が眠っていた。娘の頭は右腕の肘枕にあった。口は穏やかに息をしながら、半ば開けられていた。顔は不満な案じた表情を浮かべていた。

— 心の重荷から解放されない子供のようにであった。

その娘は男から離れて寝ていた。男は腕を緩めて、精根尽きた状態で仰向けに眠っていた。その額には、カールしたブロンドの頭髪の中にまで小さな汗の玉が見られた。美しい反抗的な顔は少しばかり空虚に見えた。

部屋の中は — 窓が開けられていたけれども — とても暑かった。掛け布もなく、パジャマも着ずに、両人は眠っていた。

ベルリンの、ゲオルゲ教会通り、第三中庭、五階、一九二三年七月のことで、今ドルは — 朝の六時に — 差し当たりまだ 414000 マルクであった。

2
娘は半ば目覚める

両人の眠りの中に裏庭の暗い底から、数百もの住まいの気の抜けた臭いが漂って来た。数百もの物音が、まだ穏やかなものであるが、開けられた窓から侵入して来た。窓の前には黄ばんだ灰色のカーテンが静止して掛かっていた。突然中庭の別の側から、八メートルも放れていない所から、ルール地区からの避難民の子供が不安の泣き声を上げた。

眠っている娘の臉がぴくついた。頭が少しばかり持ち上がった。肢体が緊張した。その子供の泣き声はもっと小さくなった。ある女性の声が鋭く叱りつけ、ある男がぶつくさ行った。 — 娘の頭は沈んで、肢体は新たに緊張が緩み、娘は更に眠り続けた。

家屋では動きが生じた。ドアが音を立てて、中庭では人の足音がした。階段では物音がし、鉄の手すりに琺瑯バケツが当たった。隣りの台所では水道管の水が流れた。地階のブリキ打ち抜き機工房では一つの鐘がけたたましく鳴り、歯車が呻り、ベルトが磨いた。... 両人眠っていた。...

3
ある騎兵隊長がベルリンへ向かう

町の上には — 早朝で晴天にもかかわらず — 陰鬱な靄がかかっていた。惨めな民

衆のすえた臭いは天に昇らず、だらしなく家々に張り付いていた。すべての路地を這って、家々から漏れ滴り、呼吸するすべての口の中へ入って行った。荒れた公園の木々は褪せた葉を垂らしていた。

[ベルリンの]シュレーゲン駅に、帝国の東部から早朝の遠距離列車が近付いて来た。かたかた音を立てる窓に、割れた窓ガラス、破れたクッションで、一 無残な列車であった。がたがたと軋みながら、押し込むように列車はシュトララウ・ルンメルスブルクの転轍機と踏切を越えて行った。

ある紳士、退役の騎兵隊長にして莊園請負人のヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツ＝ノイローエが、白髪 of 瘦身であるが、黒く輝く目をして、自分がどこにいるか身を乗り出して見つめた。彼は身を引いた、一 熱い煤の粒が彼の目に跳んで来た。ハンカチで彼は拭いて叱った。「詰まらぬ汚れた町だ」。

4

ベルリンは朝食を摂る

竈では火が、ふわふわした黄色の紙とマッチとで点火された。マッチは臭いものか、あるいは頭先が欠けたものである。湿った海綿状の薪か劣等な石炭がくすぶっていた。いかさまのガスが温めもせずポツポツと燃えていた。ゆっくりと水っぽい青色の牛乳が温められ、パンは生焼けか乾きすぎていた。住まいの暖房の中で柔らかくなったマーガリンが酸敗した臭いを発していた。

急いで人々は無愛想な食物を食し、急いで、何度もしみ抜きをされ、洗われ、埃を落とされた衣服をまとった。急いで、人々の目は新聞をざっと読んだ。グライヴィッツとブレスラウ、マイン河畔のフランクフルト、ノイルツピン、アイスレーベン、ドラムブルクで物価上昇の暴動、騒擾、略奪が生じていた。六人の死者と数千人の逮捕者が見られた。その後政府は野外での集会を禁じた。憲法裁判所は内乱罪と偽証罪に関する犯人蔵匿罪故に一人の王妃に判決を下していた。一 しかしドルは二十三日の 350000 に対して 414000 マルクになっていた。「一週間した月末に給料だ。一 そのときドルは幾らになっているだろう。食べ物を買えるだろうか。二週間分か、十日分か、三日分か。靴底を買えるだろうか。ガス代を、乗車券代を払えるだろうか。細君よ、急げ、ここにまだ一万マルクある。これで何か買うがいい。買うのは何でもいいのだ。一ポンドの人参であれ、カフスポタンであれ、レコードの『バナナが欲しいと言われても』であれ、一 あるいは我らの首つり用の綱であれ。ただ急ぐことだ、さあ行け」。

5

森林官のクニーブッシュは薪泥棒に出会う

ノイローエの騎士領にも早朝の陽が照らし出していた。畑ではライ麦が禾束堆に積まれていて、小麦は実り、燕麦も実っていた。二、三台の機械が音立てて遠くの畑へ消えて行った。畑では雲雀が倦むことなくトリルの連打を奏でていた。

森林官のクニーブッシュは、赤茶けた皺の多い老齢の顔で、禿頭であったが、白黄色の

丸い顔一面の髭で、暑い開けた野原から森の中へ進んで行った。彼はゆっくりと進み、片手で散弾銃の紐を肩にしっかり掛けて、もう一方の手で額の汗を拭った。彼の歩みは陽気でなく、急いでもいず、力強くもなかった。彼は、自身の、それ故少なくとも自分が面倒を見ている森を穏やかな足取りで、びくびくしながら、用心深く進んだ。彼の目は途中すべての枝に注がれた。枝を踏むことを避けて、こっそりと進もうと思っていた。

しかしあらゆる用心にもかかわらず、道の曲がり角で、茂みの背後から出現した小さな手押し車の行列、男達と女達に出会った。車輪の上には新たに伐採された木が、ただ丈夫な幹が積まれていた。一 枝木には手を出していなかった。森林官のクニブッシュの頬に怒りの朱が差した。彼の唇は震え、老齢で色褪せた青い目には一層深い輝き、少しばかりの炎が若々しく生じて来た。

最前列の車輪の男は、一 勿論あのボイマーであるが、一 びくとした。それでもさっさと進んで行った。間近の、ほとんど一メートルもない距離の所を盗んだ薪の小車輪が森林官の側をガタガタ通り過ぎた。人々は宙を凝視したり、脇を見ていた。あたかもようやく息をして立っている彼などいないかのようであった。...それから彼らは茂みの角に消えた。

「貴方も老いたな」と森林官はフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長の声を聞く思いがした。

その通りと彼は悲しく考えた。私はとても老いた、自分のベッドで死にたい思いだ。

そう考えて、先に進んだ。

彼は自分のベッドで死ねないであろう。

6

マイエンブルクの監獄での空腹暴動

マイエンブルクの監獄では警報が鳴って、巡査達が監房から監房へ走って、所長は帝国国防軍に増員を頼んで電話し、管理の役人達はピストル付きのベルトを腹に巻いて締め、ゴムの棍棒を握った。十分前に367号室の囚人が巡査の足許に自分のパンを投げたのであった。「パンが欲しいのだ。規定通りの重さの、忌々しいギプス泥ではないパンを」と彼は叫んだ。

同じ時に、暴動、反乱が勃発した。二百もの監房から叫ばれ、喚かれ、嘆かれ、歌われ、吠えられた。「腹減った、食い物よこせ、腹減った、食い物よこせ」。

高く築かれた監獄の輝く白い壁の下に首をすくめて、マイエンブルクの小都市が横たわっていた。一 どの家にも、どの窓の中にも叫び声が届いた。「腹減った、食い物よこせ」。そこでがたと音がした。千人もの囚人が彼らの床几を持って鉄のドアへぶつかって行った。

通路を巡って巡査や模範囚人が走り、暴動者のドアに静まるようささやいた。善良な囚人の監房が開けられた。「落ち着け、ドイツでは誰も他の食べ物は得ていない。...ドルが、...ルール地区が、...早速収穫分遣隊が派遣され、大きな荘園に送られている。毎週一箱の煙草が、毎日肉が、...立派に統率されている囚人に対してな、...」。

次第に騒動は収まった。収穫分遣隊、...肉、...煙草、...良い統率。...壁から漏れ出て、

ぐうぐう言う腹が静まった。よい見込み、満腹への希望、自由な野外、ひょっとしたら逃走も。...残りの騒動者達、自らの憤怒に駆られている者達を巡査達は拘禁室へ引っ張って行った。「ギプス泥なしに生きられるか試すがいい」。

鉄のドアが音立てて閉まった。

7

侍女ゾフィーは一通の手紙を書く

早朝にもかかわらずベルリンのバイエルン街区ではムッツバウアー伯爵夫人の住まいで、侍女ゾフィーがすでに目覚めていた。まだ深く眠っている料理女と共有している彼女の部屋はとても狭く、二台の鉄の寝台の他にはただ二脚の椅子を置けるのみで、一 それで彼女は開けられた窓の枠で彼女の手紙を書いていた。

ゾフィー・コヴァレフスキーは美しく手入れされた両手を有していたが、しかし鉛筆の運用は下手であった。下への撥ね、上への撥ね、省略符、コンマ、上への撥ね、下への撥ね。...いや彼女には一杯言いたいことがあった。..どんなにハンスが恋しいか、どんなに時間が退屈か、ほとんどまだ三年あるのに、やっと半年過ぎたばかり。...しかし仕様がな。感情を文章に変えること、これをゾフィー・コヴァレフスキーは、コヴァレフスキー代官の娘であるが、学んでいなかった。いや彼がここにおれば、会話ならば、触れ合えさえすれば。それなら何でも表現できよう。一回接吻すれば、彼は野蛮になろう。こっそり握りさえすれば、幸せにできよう。...しかしこれでは。

彼女は宙を見つめた。いや彼女はそのことをこの手紙で彼に感知させたかった。窓ガラスに色褪せた色で二番目のゾフィーを見つけた。思わず知らず彼女はそれに素早く微笑みかけた。二、三の巻き毛が外れて、黒っぽく額に掛かっていた。目の下の隈も黒っぽかった。彼女はまた一度時間を使って、しっかりと眠り尽くす必要があったろう。一 しかしすべてが見る間に消えて行く、姿を見せる間もなく消えて行く時節に、眠る時間があるうか。すべてが碎ける、瞬刻を大事にしなさい、今日まだ生きるのよ、ゾフィー。

彼女は朝方まだとても疲れていたかもしれない。両足が痛くて、口にはすべての気の抜けたリキュールやワインや接吻の味が残っている。一 夕方にはまた彼女はバーの一つに誘われ、踊り、飲み、騒いだのであった。多くの紳士達、彼らは金のように安物で、数十万マルク、彼女の侍女報酬の五十倍を、各自がジャケットのポケットにばらで持っている。彼女は昨夜もこれらの紳士達の一人と出かけた、一 何が目当てか。時は移り、過ぎ、去って行く。ひょっとしたら彼女はハンスをも、三年と三ヶ月の間消えているハンス（紳士詐欺罪で服役）を反復されるすべての抱擁の中に、彼女の顔同様に、貪欲に休みなく、彼女の顔に迫って来るすべての顔の中に探していたのかもしれない。...しかしこのハンス、輝かしく、迅速で、すべての者に勝るハンスは二度と現れるものではない。

ゾフィー・コヴァレフスキーは、騎士領のきつい仕事から逃れて来て、町で、一 何とは言えなかったが、自分をもっときつく魅了するものを探していた。この人生は一度っきりだ、無常のものだ。死んだら、長いことお仕舞いだ。うちらは年取ったら、もう、二十五歳を過ぎたら、誰も見向きもしなくなる。ハンスよ、ああ、ハンス。...彼女は恵み深い夫人の夜会服を着ていた。料理女が気付こうと知ったことじゃない。この料理女が納入

者からくすねるように、彼女は絹の靴下や絹の下着をくすねている。お互い相手を非難できない。すぐ七時だ、急いで後、結びを書く。... 「熱い接吻を込めて、永遠にあなたを愛するあなたの許嫁、ゾフィーより」。...

彼女は許嫁という言葉に価値を置いていなかった。彼女は彼と結婚したいのか定かですらなかった。しかしそう書かざるを得なかった。監獄で彼に実際手紙が渡されるようにするためであった。

この監獄囚人のハンス・リーブシュナーは彼の許嫁の手紙を得ることであろう。彼は荒れた狼藉故に拘禁室に連れて行かれる者達の一人ではなかった。いや、彼はまだマイエンブルクの監獄に半年もいないのに、すべての所内規定に反して、すでに模範囚に出世していて、格別の確信を抱いて、収穫分遣隊について話す術を心得ていた。これができたのは、ノイローエはマイエンブルクから離れていず、ノイローエはゾフィーという名前の可愛い娘の故郷であると知っていたからである。...

うまく片付くことだろう、と彼は考えた。

8

娘と男は目覚める

その娘は目覚めた。

頭を手で支えて、娘は横たわっていて、窓の方を見やっていた。黄灰色のカーテンは動かなかつた。娘は、悪臭の熱気が中庭から感じられると思った。娘は軽く身震いした。

その際娘は自分の下半身を見た。寒さのせいで身震いしたのではなかった。一 忌まわしい暑さのせいで、ひどい悪臭のせいで身震いしたのであった。娘は自分の体を見つめた。体は白く、欠点がなかった。腐敗したような、すえたような大気の中で、何かかくも欠点のない状態は不思議であった。

娘は、何時か正確には分からなかった。物音からすると九時か十時か十一時かもしれなかった。一 午前中の物音は八時以降かなり同じようであった。女将のトゥーマン夫人がすぐに朝のコーヒーを持参しそうであった。ヴォルフガングの願いに従えば、彼女は起床して、上品に身繕いをして、彼に掛け布をしてやる必要があったろう。今はいい、そのうちにしよう。ヴォルフガングは上品さについて奇妙な自説を有するのだから。

「構わないわよ」と彼女は彼にこう言ったことがある、「トゥーマン夫人はあんな人で、全く別様に慣れているのよ。金さえ貰えば、何の支障もない。...」

「支障がない」とヴォルフガングは優しく笑っていた。「おまえのそんな姿を見て支障がないというのか」。

彼は彼女を見つめていたのであった。いつも彼女は彼のそのような視線を感じると、弱って、優しくなった。彼を体に引き寄せたかったことであろう。しかし彼は早速もっと真面目に言うのであった。「我らのためだ、ペーター、我らのための作法だ。たとえ今零落していてもな。もはや作法を構わなくなったら、本当に零落していることになる」。

「服を着たら上品というわけではないし、服を着ていないから不作法というわけではないわ」と彼女は始めた。

「服だけのことがあろうか。服は問題ではない」と彼はほとんど性急に言ったのであつ

た。「我々が戒めとするものがありさえすれば。我々は零落者ではない。私も違うし、おまえも違う。いつか成功しさえすれば、万事はるかに容易となろう。ここで不快な思いをしていても、この零落の穴蔵で。ただこの連中と一緒にあつてはならない」。

彼はなおただ口ごもった。彼の言葉は不分明なものとなった。彼は再びどうしたら「成功」するであろうか、考えた。彼は彼女から離れた。(彼は度々彼女から、つまり彼のペーターから離れた)。

「あなたが成功したら、もはやあなたの側にはおれない」と彼女はあるとき言ったことがあった。

一瞬沈黙があった。それからやはり彼の物思いの中に彼女の言葉が浸透した。

「ペーター、おまえは私の側にいて欲しい」と彼は激しく答えたのであった、「いつまでも一緒に。おまえが毎夜私のことを待ってくれたことを忘れると思うのかい。おまえがここに — この穴蔵に — 何もなしに座っていることを忘れるとでも。私がどんな状態で来ようとも、おまえは私に決して問わず、責めなかったことを忘れるとでも。ペーターよ」と彼は叫んだのであった。彼の目は輝きを帯びたが、それは彼女の好まない輝きで、というのもそれは彼女の点火した輝きではなかったからである。「昨夜はほとんど成功しそうだった。山のように金が私の前にあつた瞬間であつた。...ほとんど間近だった。ただ後、一、二度だと感じた。...いや、私は嘘八百を並べていない。私は何ら明確なことを考えていなかった。家とか庭とか、車とか、おまえのことも考えていなかった。...一瞬の光輝が眼前にあつた。私の中の輝かしい明るみだ。人生が、太陽が昇るときの天のように、広々と澄んでいた。すべてが純粹であつた。

それから、...」と彼は額を垂らした、「一人の娼婦が私に語りかけたそのときから一切がおじゃんだ。...」

彼は額を垂らして窓辺に立っていた。彼女は彼の震える手を自分の両手に収めたとき、何と彼が若くて、何と彼の熱狂、彼の絶望が若いことか、何と若くて、何の責務もないことを、彼は彼女に語っていることか、と感じた。...

「あなたは成功するわ」と彼女は小声で言った、「でもあなたが成功したら、私はもはやあなたの側にはおれないでしょう」。

彼は彼女の両手の中の自分の手を引き出した。

「私の許にいてくれよ」と彼は冷たく言った、「私は何も忘れない」。

彼女は、彼が丁度彼の母親のことを思い出していると分かった。母親は一度彼女の顔を叩いた。彼女は彼の母親がかつて叩いたので、彼の許に留まりたくなかった。

それでも今日から、自分は彼の許に留まることだろう、永久に。確かに彼はまだ成功していなかった。彼女は夙に分かっていた。これまでのやり方では何も達成できないだろう、と。しかしそれがどうしたことか。これからもこの汚い部屋で、これからも明日どうして生きるか、何を着るか分からないし、これからも一切分からない。 — しかし今日の昼一時からは彼と共に生きよう。

彼女はベッドの側の椅子を握って、靴下を掴み、それを上に引き伸ばし始めた。

突然彼女は恐ろしい不安に襲われた。一切どうしようもないかもしれない。昨日一切が失敗に終わったのかもしれない、完全に失敗、最後の千マルク紙幣に至るまで。彼女は納得にいたるために、立ち上がる気はなかった。彼女は燃える目で、椅子の上、ドアの横に

掛かっているヴォルフガングの服を見つめた。彼女は、彼が金を入れているジャケットの右のポケットの膨らみを正確に計ろうとした。

手数料が払われなければならないと彼女は不安一杯に考えた。手数料が払えなければ、どうしようもない。

空しい考えであった。時々彼はこのポケットにハンカチも入れていた。今またどんな新紙幣になっているだろうか。五十万マルクの紙幣だろうか。百万マルク紙幣だろうか。どうして分かって。結婚式はいくらかかるのかしら。一百万か、二百万か、五百万、一 どうして分かって。ポケットを掴む度胸があったとしても、自分は相変わらず何も分からない。自分は何も知らないのだ。

ポケットは十分な厚みはなかった。

ゆっくりと、ベッドのバネが軋まないように、ゆっくりと、注意深く、不安一杯に彼女は彼の方を向いた。

「お早う、ペーター」と彼は楽しげな声で言った。彼の腕は彼女を自分の胸に引き寄せた。彼女は自分の口を彼の口に置いた。彼女は彼が言うことを聞きたくなかった、今は聞きたくなかった。

「ペーター、私は完全に無一文だ。一マルクももはやないのだ」。炎が音もなく上昇した。その純粋な、白青色の熱気が部屋の古びた空気を純に燃やした。相変わらず、慈愛の両腕が恋人達を、靄と不穏の、闘争や空腹、絶望の、罪と破廉恥のすべての愛の臥所から、高く、成就という純な涼しい天へと持ち上げた。

第二章 ベルリン衰退

9

騎兵隊長は人を求める

シュレーゲン駅周辺の多くの通りが劣等である。当時、一九二三年、身も蓋もない、悪臭、悲惨、荒涼たる乾燥した舗石の砂漠に加え、野蛮な絶望した破廉恥、悲惨あるいは無関心から来る欲情が見られた。うるさく混乱した往来の中、誰をも未知の暗闇へ拉致する世界において、ともかく自らを感知し、自ら何者かになりたいという貪欲さの欲情である。

フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、余りに上品に明るいグレーの紳士服を着て、ロンドンの仕立屋が送付された寸法に従って仕上げたものであるが、それに瘦身の体で余りに目立つもので、褐色に日焼けした顔の上の真っ白な頭髪、濃く太い眉と、黒っぽく輝く両目であり、
— このフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、用心して進んだ。真っ直ぐに身を起こし、歩道に沿って、誰にも触れないように注意していた。彼は真っ直ぐに宙を見据えていた。目の高さで、遠く彼から離れて、通りの下にある想像上の点に置かれていて、誰も何も見ないようにするためであった。彼は両耳でも聴覚を逸らしたかっただことであろう。例えば相変わらずほとんど刈り取られていない、収穫間近のノイローエの穀物畑の重々しいざわめきを聞いていたかっただことであろう。彼は自分に嘲笑や嫉妬、貪欲が浴びせている物音から耳を逸らそうと努めていた。

突然彼は一九一八年の不幸な十一月の日々のように思われた。彼が二十名の戦友と共に、
— 彼の中隊の残兵と共に、
— やはりベルリンの通りを、帝国議会の間近で行進していた時で、
— 突然、窓や屋根、暗い戸口からこの小さな列に寂寞たる射撃がなされた。不規則な野蛮な臆病な狙撃であった。当時も彼らはこのように行進して行った。顎を突き出して、口を固く閉じて、目は通りの果ての想像上の点に据えていた。多分到達しないであろう点であった。

そして騎兵隊長にとっては、それ以来この五年間の狂った年月の間、いつもそのように行進して行ったかのように思われた。想像上の点を見据えて、眠っているかのように目覚めていた。というのはこの年月の間、夢のない眠りはなかったからである。いつも情けない通りで、敵意や憎悪、卑俗さ、無様さに満ちていて、すべての予想に反して、角にぶつかっても、ただ単に新たな、全く同様の道が通じていて、同じ憎悪、同じ卑俗さが見られた。しかもまた目指さなければならない点があった。この点は実在しない点で、単に想像上の点であった。

あるいはこの点は、全く外部、彼の外側にはないもので、彼の中、彼自身の胸にあるものだったのか。
— 率直に言えば、彼の心にあるものだったのか。彼は男たる者、憎悪や卑俗さに耳を傾けずに、行進しなければならないが故に、千もの窓から一万もの邪悪な目が彼を見ていても、彼がただ一人つきりであろうと、
— 戦友はどこにもいないのだから、行進したのであろうか。人は単にそうしてのみ、この世であるべき者になるというので、つまり、他の人々が期待している者ではなく、自分自身が期待している者になると

いうので、彼は行進したのか。自分自身が。

そして突然、フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長には、ベルリンのシュレーゲン駅のここランゲ通りで、この騎兵隊長にして騎士領請負人には、売春宿でしかない十もの臆面もない喫茶店の看板を眼前にして、つまり騎兵隊長兼騎士領請負人の男ヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツ＝ノイローエには、ここに来たのは、意志に反してここに来たのは、少なくとも六十人の人々を取獲用に確保するためであったが、一 その彼には、あたかも今や本当に行進の終点間近であるように思われた。今や本当にもう顎を引きつけて、視線を落とし、足許を見て、主なる神のようにこう言える気がした。見よ、すべてがとても素晴らしい。

その通り、立派な、ほとんど豊作の収穫が穀物畑に見られた。町のこれらの飢餓人にとっても役立つような収穫であった。彼はすべてを放棄して、若い、若干身を持ち崩した若者の検査官に任せて、町へ来て、人々を募らなければならなかった。奇妙な全く納得できないことであった。町の惨状が大きくなるにつれ、町でパンが少なくなり、ただ田舎だけが少なくとも十分な養分を供給できるようになるにつれ、一層町に人々は押し寄せた。実際蛾のようなものであった。身を焦がす炎に誘われる蛾である。

騎兵隊長は笑い声を上げた。いやまことに、全く間近で第六の創造の日の天上的主なる神の休みが手招きしているように思われた。一つの蜃気楼、オアシスの空中楼阁である。渴きが全くひどくなった時の。

彼が思いがけずその顔に笑いかけた女性は、彼の背後に全くの雑言、下肥の樽を、いや野卑な罵りの一連の下肥を降り注いだ。しかし騎兵隊長はある店に入った。店の上には、汚れて斜めに、一つの看板が掛かっていた。「ベルリン刈り手斡旋所」

10

朝食の待機

炎は上昇し沈下した。まさにまだ燃えていた炎が消えた。一 熾きを長く保っている竈は幸いである。火花が灰の上を走り、炎が共に沈み、熾きが収まった。しかしまだ温かさは残っていた。

ヴォルフガング・パーゲルは地のグレーの、すでにひどく使い古された軍服の上着を着ていて、テーブルの許に座っていた。彼は両手を空のオイルクロスの覆いに置いていた。さて彼は頭でドアを示した。彼は一方の目でウィンクして、ささやいた。「おまるマダムがもう嗅ぎつけたな」。

「えっ」とペートラは尋ねた、そして、「トゥーマン夫人におまるマダムと言っちゃいけないでしょう。私どもを追い出すわよ」。

「そうだな」と彼は言った、「今日はきっと朝食がもはやないだろう。彼女はもう嗅ぎつけた」。

「尋ねていい、ヴォルフ」。

「だーめ。うるさく質問するとコーヒーは手に入らない。待つことにしよう」。

彼は椅子を後ろに傾げた。シーソーにして、口笛を吹き始めた。眠れる者どもよ、立ち上がれ。...

彼は全く屈託がなかった。全く心配していなかった。窓から　－　カーテンは今や開けられていた、　－　太陽らしきものが灰色の荒涼たる窪みにあった。ベルリンで太陽と呼ばれるもので、大気圏が陽光にまだ恵んでいるものであった。...彼が上下に揺すっている、あるときは幅広の、容易に波打つ髪の毛の房が輝き、あるときは明るく、今や陽気にきらめく、灰緑色の目の顔が輝いた。

ペートラは、ただ彼の色褪せた夏のコートをもとっていただけであったが、まだ戦前からのコートで、　－　そのペートラは彼をじっと見つめた。彼を見つめるのに飽きなかった。彼女は彼を愛でた。彼女は彼がどうして半リットルの水の小鉢で身を洗い、そしてあたかも一時間浴槽で体をこすったかのように仕上げるのか不思議に思った。彼女は自分が彼に比べて老いて古びたように思った。自分は彼より一歳若いのに。

突然彼は口笛を止めて、ドアに聞き入った。「敵が近付いて来る。コーヒーだろうか。私は空腹が続いているのだ」。

(彼女は自分も空腹だと言いたかった。すでに数日前から。というのは二切れのゼンメル[パン]のつましい朝食が何日も前から彼女の唯一の養分であったからである。　－　しかし自分はそう言いたくない)。

廊下の引きずる足音が響いた。廊下のドアが閉まった。「ほらね、ペーター。おまるマダムはただまたトイレに自ら行ったのだ。時代の一つの特徴だな。すべての仕事が回りくどく片付けられる。おまるマダムがおまる[鍋]の仕事をする」。

彼は椅子をまた後ろに傾けた。彼はまた口笛を吹き始めた。屈託なく、陽気に。

彼は彼女をだませなかった。彼女は長いこと、彼の語ることのすべてを理解できなかった。彼女は正確にそれを理解しようとするしなかった。それは彼の声の調子であった。ほんの微かな震え、彼自身すらほとんど自覚しないもので、しかし彼女は聞き分けた。彼は彼の見せかけほど陽気ではなかった。そう振る舞いたいほど屈託ないのではなかった。しかし彼が発声すると、　－　彼女と以外誰を相手に発声しよう。彼女相手に彼は恥じる必要はなかったし、嘘をつく必要はなかった。彼女は彼のすべてを理解している、

　－　いや、必要はない。しかし彼女はすべてを容認した。前もって、盲目に。すべてを許した。許したとは。とんでもない。一切は正当なことなのだ。たとえ今彼が荒れ狂い、彼女をなぐることになっても、それはきっと理由があることだろう。

ペートラ・レーディヒ[独身] (運命であるように見える名前があるものである) は一人親の子供であった。父親はいなかった。後にささやかな売り子となって、今や再婚した母親の許で、月給を最後の一文まで食費として入れながら、我慢されて来た。しかし母親がこう言う日が来た。「このはした金でしのいでいきなさい」。そして声を後からかけた、「どこで寝たらいいか、分かっているでしょうね」。

ペートラ・レーディヒは (この勿体ぶった名前ペートラは彼女の人生への備えのための未知の父親の唯一の加勢と思われるが)　－　このペートラ・レーディヒは二十二歳でもはや無垢の白紙ではなかった。彼女は穏やかな時代に成長したのではなかった。戦争、戦後、インフレの時代であった。紳士達が靴屋で靴を彼女の膝に意味深に入れてくるとき、何を意味するか彼女は知っていた。時々、彼女は頷いて、夕方閉店後にあれこれの男と会って、自分の小舟を丸一年間まことこ勇敢に、完全に沈没することなく、操縦してきた。それどころか彼女はある種の選択の自由があった。自分の趣味というよりは病気感染を恐

れての選択であった。あるときドルがとんでもなく上昇し、家賃として貯めていたものすべてが無の価値となったとき、彼女は一度路上をぶらついたこともあった。いつも「風紀」警察を恐れていた。このようにぶらつく際、ヴォルフガング・パーゲルと出会ったのであった。

ヴォルフガングは良い晩を得ていたのであった。彼は金を少し得て、少し酔っていた。すると彼はいつも陽気になって、矢でも鉄砲でも来いとなるのであった。「一緒に行こう、ブルネットの小娘よ、一緒に行こう」と彼は通り全体に呼びかけた。口髭の風紀警察と彼女との間で競走のようなものが生じていた。しかしタクシーが、恐ろしいぼろ車が、彼女を一晩へと導いてくれたのであった。素敵な晩であるが、元来すべてのこのような晩と変わらない一晩であった。

それから朝となっていた。この灰色の、慰めのない朝で、いつも意気消沈させられる連れ込み宿の部屋であった。ここでは実際次の問いが頭に浮かぶものである。こうしたすべてはどういうこと。何のために生きているの。

殿方が急いで服を身に着けると、然るべく彼女は眠っている振りをするのであった。男もこっそりと着て、彼女を起こさないようにした。事後、朝の会話は気まずく、面白くないからである。突然もはや言うことは何もないと悟るし、いや大抵勘弁してくれとなるのである。彼女はただ臉から覗いて、男が果たして金をサイド・テーブルに置いたか見るだけであった。いや、彼は金を置いていた。万事は通常の経過をたどっていて、また[さようなら]の言葉は述べられず、彼はすでにドアの所にいた。

彼女はどのような次第なのか、何が自分の身に起きたのか分からなかったが、ベッドで身を起こし、どもった声で小さく尋ねたのであった。「あなた　—　貴方は　—　あら、一緒に行っていいかしら」。

彼は最初分からずに、全く当惑して振り向いた。「何だって」。

それから彼は察した。彼女は、このような状況は新米で、ひよっとしたら宿の女将や守衛の前を通るのが恥ずかしいのかもしれない、と。彼はすでに彼女が急ぐなら、待つよと言明していた。しかし彼女が急いで身繕いをする間に、そそくさと通りに出るという単純なことが問題ではないと分かってきた。出ることは慣れていると彼女は言っていた。(彼女は最初の出会いのときから全く彼に対して正直であった)。いや、彼女はそもそも、すっかり彼と一緒にいきたいのであった。駄目かしら、お願い連れて行って。

彼が何と考えたか、誰が知ろう。突然彼は急がなくなった。彼は灰色の部屋の中に立っていた。　—　丁度五時直前の恐ろしい朝の時刻であった。この時刻に殿方はいつも出て行こうとする。この時には一番電車で住まいに帰れるからである。すると事務所に出る前にさっぱりできるし、多くの者が事実、あたかもベッドの中に眠っていたかのような振りをして、急いでベッドで今一度のたうつのである。

彼は指で憂わしげにテーブルを叩いた。彼の明るい緑色の目が沈思して垂らした額の下から彼女を見つめた。彼女は彼が金を持っているか期待しているのではあるまいな。

いいえ、私はそんなことを考えていません。私にとってもそれはどうでもいいのです。

自分は退役の士官候補生だ、だから何の年金もない、職もない、定まった収入もない、いやそもそも収入はないのだと彼は言った。

いや、構わないわ。そのことを私は気にしていません。

彼は何故彼女が問い合わせたのか、調べなかった。彼はそもそも更に尋ねなかった。後に彼女はようやく思いついた。彼は多くの質問をしたかったであろうに、と。とても不愉快な質問を。例えばすでに何人もの男にそのような依頼をしたことがあるのか、とか、子供ができているのか、とか。 — 千もの反吐の出る事柄について。しかし彼はただ立っていて、彼女を見つめていた。すでに彼女は彼が拒否しないであろうと確信していた。しないに違いないと。彼に問い合わせるに至った必然性は何かとても神秘的なことであった。以前そのようなことを考えたことはなかった。彼女は実際、 — 当時 — 彼に惚れた痕跡はなかった。全く通常の夜であった。

「コンスタンツェ、仕上がったかい」と彼は当時大いに流行っていた芝居のタイトルを引用した。初めて彼女は、彼が冗談を言うときの、片方の目での瞬きと目の隅の小皺を見た。

「はい」と彼女は言った。

「それは結構」と彼は言葉を引き延ばして言った、「一人の口にも十分でなくても、二人の口を養える。それでは出発。用意はいいかい」。

彼の側、階段を下りて行くのは奇妙な気分であった。反吐の出る宿で、今や一緒になる男の側である。一度彼女が劣等に敷かれた長絨毯につまずいたとき、彼は「おとと」と言った。全く上の空のもので、多分彼は彼女が間近にいることをさほど自覚していなかったのであろう。

それから彼は突然立ち止まった。彼女は正確に覚えている。二人は下に着いた。入口の模造大理石と石膏のスタッコの所であった。「ところで私はヴォルフガング・パーゲルと申します」と彼は軽くお辞儀を仄めかして言った。

「初めまして[とても快適です]」と彼女は全く似つかわしく答えた。「ペートラ・レーディヒです」。

「快適かどうか保証の限りではない」と彼は笑っていた、「行こう、小娘さん。私はおまえをペーターと呼ぼう。ペートラは一つには余りに聖書的で、もう一つには余りに石のようだ。しかしレーディヒは結構、そのままで行こう」。

11

ペートラは賭博者に鍛えられる

ヴォルフガング・パーゲルがそのように彼女に語ったとき、ペートラはまだ大いに出来事に飲み込まれていて、彼の言葉に余り注意を払っていなかった。後に彼女は彼から、ペートラという名前は岩といった意味であり、その名前は最初かの使徒ペトロが使っていたものであり、キリストはその教会を岩の上に建てるように彼の上に築こうと欲していたということを知った。

彼女はそもそも同棲の一年間の間に沢山ヴォルフガングから学んだ。彼が何か沢山教えたというわけではない。しかし二人の同棲の長い時間の中に、 — というのは彼はまともな仕事に就いているのではなかったから、 — 彼は沢山彼女と会話せざるを得なかったのである。必ずしも二人は黙って穴蔵に寄り添っているだけでは済まなかったのである。ペートラはまず信用を獲得すると、彼によく尋ねた。ただ彼の物思いを逸らしたいからで

あったし、あるいは彼の語る調子に耳傾けるのは楽しかったからである。例えば、「ヴォルフ、チーズはどうやって作るの」とか、「ヴォルフ、月に一人の男が住んでいるのは本当」とか。

彼は彼女を笑い飛ばすことはなかったし、質問を拒絶することもなかった。彼は彼女にゆっくりと、熟考しながら、真面目に答えた。 — というのは、士官学校での彼の知識も褒めたものではなかったからである。そして答えられないとき、彼は彼女を連れて、一緒に大きな図書館の一つに入り、本を開き、読んだ。彼女はそんなとき全く静かに何か小本を持って座り、それを読まずに、厳かに胸詰まって大きな部屋を見回した。そこでは人々が静かに座っていて、慌てず頁をめくっていて、とても静かなこと、あたかも眠りの中で動いているかのようにであった。彼女にとってはいつも、自分、小さな売り子が、まさに沈没しつつあった私生児の子供が、今やこのような建物に入ることが許されているとメルヘンのように思われるのであった。この建物の中には教養ある人々が座っていて、この人々は、まさに彼女が肌身に知らなければならなかったそのような物事についてきっと経験したことがなかったことであろう。壁際の — 黙って受け入れられている惨めな者達が、ここでは英知だけが探されているのではなく、温かさ、明かり、清潔さも、そしてまさに彼女にも諸本の中から立ち上がって来る厳かな安らぎも求められていると証していたけれども、一人では彼女はこちらに来る勇氣はなかったであろう。

ヴォルフは十分に知識を得ると、二人はまた出て行った。彼は自分が調べたことを彼女に語った。彼女は彼の言に耳を傾け、またそれを忘れてたり、記憶したりした、しかし正しく記憶したのではなかったが、 — しかしそれは全く問題ではなかった。大事なものは、彼が彼女のことを本気に受け取って、彼女が彼にとって一つの体とは別なものであるということだった、彼がとても好きな、彼にとって良い味の体とは別な。

ときどき彼女が何かを全く無分別に述べてしまって、自らに愛想をつかして、叫ぶことがあった。「あら、ヴォルフ、何て私は馬鹿なんでしょう。私は学んでも、何も学べない。私は永遠に馬鹿かもしれない」。

しかし彼はそのときでもそのような叫び声を笑わず、優しく、真面目に対応して、言った。チーズがどのように作られるか知っているかどうかは勿論根本的にはどうでもいいことだ。だってチーズ職人ほどには誰も上手に把握できないのだから。自分が思うに、馬鹿というのは全く別なものだ。つまり自分の人生を方向付けられないときとか、自分の間違いから何も学べないときとか、再三不必要にすべてのガラクタに怒るとき、つまり二週間するとそれは忘れられると丁度良く知っているときに怒るとき、 — 周りの人との付き合いができないとき、 — いや、こうしたことすべてが自分には本当の馬鹿に思われる。本当の馬鹿の模範例は自分の母親だ。彼女は、とても本を読み、経験を積み、賢い女であるけれども、今や幸い、盲目に愛して、知ったか振りで、意のままに自分を追い出している。彼自身は本当は辛抱強い、付き合いの良い人間だというのに。(そう彼は言った)。私、ペートルは馬鹿かしら。そうだな、二人は今まで喧嘩したことすらないし、たとえよく一文無しになっても、だからと言って、不機嫌な日々は経験したことがない。形相を変えて怒った顔をしたこともない。馬鹿かって。ペーター、何を言っているのだい。

勿論丁度ヴォルフが言ったような具合であった。不機嫌な日々なんてない、形相を変えたことなんてない。

二人は世にも素晴らしい時を一緒に過ごして来た。彼らの全人生で最も素敵な時であった。 — そもそもこれ以上に素敵にはなれ得なかったであろう。根本的に彼女にとっても、自分が馬鹿か、馬鹿でないか、(賢いかは彼のすべての説明にもかかわらず問題とならなかった)、彼が彼女をただ好いていて、本気にしている限り、全くどうでも良かった。

不機嫌な日々となろうか、 — なり得ない。彼女はその人生で、主に昨年、骨身に染みて分かった。金のない日々は実際不機嫌な日々になる必要はない、と。すべての日々、ドル相場に熱を上げて、ほとんどすべての考えが金、金と回り、数字や、印刷された紙幣、ますます多くの零が印刷される紙幣に関しておだを上げている丁度この時代、この小さな馬鹿げた娘は、こう発見した、金は何の価値もない、と。金を求めて、 — つまり欠如した金を求めて、 — 一分間であれ想いを巡らすことは阿呆なことである、と。 — それは全くどうでもいいことだ。

(ただ今朝はそうではない、とても不快な気分にする空腹状態であったし、一時半には手数料が支払われなければならなかったからである)。

翌日の支出代を求めて、震えながら、どうして一分間であれ静かな至福の時を退役士官候補生のヴォルフガング・パーゲルの側で過ごすことができたであろうか。彼はすでに豊かな一年を乗り切っていて、彼らのすべての生活費を、 — 世にも最小の資金で — 毎晩賭博台から稼いで来たのであった。毎晩十一時頃に彼は彼女に一回接吻して言った。「それじゃ、行ってくる」。そして彼女がただ微笑して頷く間に彼は出掛けた。彼女は一言も発してはならなかったからである。どんな言葉も不幸を招く意味になりかねないからであった。

最初の頃、こうした永遠の夜歩きが「浮気」目的でなく、二人の支出代の「仕事」であると分かった後、彼女は三時、四時と起きていた。...すると彼が帰宅して来た。青白く、神経質に動いて、こめかみがくぼんで、髪はまだ湿っていて、視線が落ち着かなかった。彼女は彼の熱に浮かされた報告に聞き入った。上手く行ったときは彼の凱歌を、負けたときは、彼の絶望を聞いた。黙って彼女は彼の賭け金を盗んだあれこれの女についての苦情を聞いた。あるいは、何故まさに今晚黒が十七回連続したのか、賛嘆の詮索を聞いた。この連続ですでに富を手中に収めようとしていた二人は完全な貧窮に突き返されたのであった。

彼女は賭け、彼の賭博、ルーレットについて何も知らなかった。彼は何度も説明したのであるが(彼はきっぱりと彼女を「そこへ」連れて行くことを拒んだ)。しかし彼女はそれは二人の生活へ支払う税であると良く理解していた。彼が彼女とかくも優しく、気さくに、静かに過ごすのは、賭博台で過ごす時、彼のすべての力、この挫折した、目的のない、それでいて一回きりの人生に対する彼の絶望をぶちまけることができるようにするためであると。

いや、彼女は更にそれ以上に理解していた。彼女は彼が自らを欺き、少なくとも再三情熱的に自分は賭博者ではないと請け合うとき、自らを欺いていると知っていた。...

「私をもっとまじなことが出来るか、言って御覧。簿記係として帳面に数字を走り書きせよと私に言うのかい。月末には給料を貰って、それで飢えてしまうようにと。靴を売ったり、記事を書いたり、運転手になったりしろと言うのかい。ペーター、奥の手はこうだ。余り欲を抱かぬこと、すると人生の時間が得られる、だ。ルーレット台に三、四時間、い

や単にしばしば三十分立ちさえすれば、一週間、一ヵ月暮らせるのだ。私が賭博者だと。こんな惨めな仕事はない。私はむしろ壁石材を運びたい。立って、待っていて、つきに一度見舞われたら、夢中になってしまうよりもな。私は冷徹で勘定高いのだ。奴等は私のことを五分五分の豹と呼んでいる。奴等は私を憎んでいる。私を見かけさえすれば、もう顔をしかめている。まさに私が賭博者ではなくて、私では商売にならないと知っているからだ。毎日私はちょっと儲けて、儲けてからは更に賭けようとはしないからな、結論を言えば、...」

そしてたった今口にしたことを忘れて、奇妙な矛盾したことを言った。「待っているよ。」

一 とにかくまずは大もうけに挑むことだ。甲斐のある本当の額にな。そうしたら何を始めることになるか分かつ。だから私が賭博者ではないと合点が行こう。二度と奴等に騙されない。何で騙されるものか。一 考えられる最も卑劣な苦役だ 一 賭博者以外誰があんな所に好き好んで行くものか」。

そんな具合に彼女は彼が家に帰って来るのを見た、夜な夜な外に内に、こめかみは窪み、髪は湿って、目を輝かせて。

「ペーター、もう一息だった」と彼は叫んだ。

しかし彼のポケットは空であった。それから彼は二人の有するすべてを質に入れて、体にまとうものだけを持って（彼女はこのような日々ベッドで休むよう強いられた）、出掛け、まさに最少額の賭博証を購入するだけの金をポケットに入れていた。また帰って来る時、全く些少の儲けとか、時には、一 極めて稀であるが、一 一杯金をポケットに収めていた。すべてが終わったと見えるとき、彼女は認めざるを得なかったが、彼はいつもわずかにしろ沢山にしろ金をもたらしした。とにかくもたらしした。

彼はルーレットの球面の回転について何らかの「体系」を有していた。体系のない或る体系で、球面はすべての蓋然性に従えば、必然であるように見えることをしばしばしないということに基づく体系であった。彼は彼女にこの体系を百度となく説明していた。しかし彼女はルーレットを見たことがなくて、彼の語ることをすべてに正しいイメージを抱くことができなかった。彼はいつも自分独自の体系に頼っていると、やはり彼女は危ぶんでいた。

しかしそれはともかく、彼はいつも成功して来たのであった。夙に彼女は、成功を信じて、静かに寝床に就き、彼の帰りを待たない習慣になっていた。いや、たまたま起きてみると、寝た振りをするのがましでさえあった。というのは、彼は賭博から帰って来ると、賭博で熱くなっていて、ともかくまず話し出して、夜眠らなかったからである。

「よくこのようなことが我慢できるね、娘さん」と時々トゥーマン夫人、おまるマダムは頭を振った。「いつも毎晩出て行き、いつもすべての小銭をポケットに入れて行く。そこには高級売春婦が集まっているとか。私なら夫をそうはさせない」。

「でもトゥーマン夫人、貴女は旦那さんを建築現場へ向かわせていらっしゃる。梯子の段が崩れるかもしれないし、板が割れるかもしれない。売春婦はどこにでもいるわ」。

「神様、六階で働いている私のヴィレムがそんな目に遭わないよう、頼みますよ。心配で堪らない。でも娘さん、ちょっと違いがあるよ。建築はなくちゃならないもの。賭博はなくていいもの」。

「でもあの人には必要なのよ、トゥーマン夫人」。

「必要だって、いつも必要、必要と聞くわね。私の夫もよく沢山の必要なものを口にす。カルタに煙草に沢山のビール、時には更に若い小娘まで（私には言わないけどね）。しかし私は言ってやるの。おまえさんに必要なものは、しっかりとした命令で、金曜日には建築事務所で貰う給料袋を私の手に渡すことだ、と。それがおまえさんには必要なことだと。娘さん、あなたは彼に優しすぎる、しかしこの優しさは弱点。朝コーヒーのサーヴイスにあなた達の部屋に入って行くと、あなたは目で惚れ惚れと見ているけど、あの人は少しも気付いていない。この結末はどうなるか、お見通しだからね。賭博が仕事だなんて、

ー そんなこと聞いていられない。賭博は仕事じゃない。仕事は賭博じゃない。本気で彼のことが好きなら、娘さん、彼の金を取り上げなさい。ヴィレムと建築現場に行かせなさい。石ぐらいまだ運べるだろうに」。

「まあ、トゥーマン夫人、彼の母親とそっくりな話し方です。母親も私が優しすぎて、彼の悪徳を支えていると言っています。そのせいで私は平手打ちを受けたのです」。

「平手打ちとはまた良くないね。あなたは義理の娘なんだろう。いやきっとただあなたは惚れ込んでいるんだね。阿呆らしくなったら、逃げ去るだろう。いや、やはり平手打ちは良くないよ。裁判所に訴えな」。

「でも少しも痛くなかったのです、トゥーマン夫人。彼の母親の指はとても華奢なもので。私の母は別でした。そもそも、...」

12

騎兵隊長は人々を雇う

木の柵がベルリン刈り手幹旋所の部屋を二分割していた。二つのとても偏った半分であった。今フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長が立っている前方部分はとても小さくて、入口のドアは更に中へ開けられていた。ブラックヴィッツはほとんど動けなかった。

奥の、より多くの半分の有していたのは、小さな、太った、黒っぽい男であった。ー 騎兵隊長はこの男の黒っぽい印象は、彼の黒っぽい髪の色か、それとも不潔さから来ているのか、正確には言えなかった。黒っぽい紳士服の黒っぽい肥満者は、野蛮な身振りで、コール天の紳士服の三人の男達と激しく話していた。男達はグレーの帽子を被り、口の端に葉巻をくわえていた。男達も同様に激しく答えていた。彼らは大声で話していなかったが、叫び声のようであった。

騎兵隊長は一言も分からなかった。勿論彼らはポーランド語を話していた。このノイローエの莊園請負人は、毎年五十人のポーランド人を雇っていても、だからと言って、二、三の司令の言葉を除いて、ポーランド語を勉強してはいなかった。

「認めるよ」と彼はポーランド語の片言を話す彼の妻のエーファに言うものだった、「実用性を考えれば、ポーランド語を学ぶ必要があると認める。それでも私は、今日からだっでずっと、この言語を学びたくない。私は拒否する。我々はここで国境に余りに近い。ポーランド語を学ぶなんて、ー バーカ」。

「でもあの人達はあなたに面と向かってとても聞くに堪えないことを述べていますよ、アヒム」。

「それで。私はポーランド語を学んで、彼らの聞くに堪えないことを理解することにな

るのか。そんなことは御免だ」。従ってこの四人が隅で激しく交渉していることを騎兵隊長は何も理解しなかった。興味もなかった。しかし彼は辛抱強く待つ男ではなかった。なされる必要のあることは、速やかになされなければならない。彼は昼にノイローエに戻りたかった。五十人あるいは六十人の人々を連れて。外の穀物畑では豊作の収穫が刈り取られないままで、太陽は輝き、彼は小麦のパチパチ弾ける音を耳にする想いであった。

「知らせだ、農園だ」と騎兵隊長は叫んだ。

四人は更に話していた。全く、生死を賭けて論争しているかのようで、すぐに互いの首を絞めかねないように思われた。

「おい、諸君」と騎兵隊長は鋭く叫んだ、「今日とは私は挨拶したぞ」（彼は今日とは挨拶していなかった）。全くまともな連中かね。まだ八年前は、いや五年前でも、彼の前では哀願されて、奴隷のように、彼の手に接吻しようと寄って来たものだ。忌々しい時代だ、忌々しい町だ。 — 待っている、おまえらをまず田舎に連れ出してな。

「聞かんか、おいこら」と彼は極めて鋭い司令の声で叫んだ。拳で柵を叩いた。

その通り、 — 彼らは耳を傾けた。彼らはこの種の声を知っていた。この世代の者にとってこのような声はまだ何ほどかの意味を有していて、声調は記憶を蘇らせた。早速彼らはおしゃべりを止めた。騎兵隊長は心の中で微笑した。その通り、古くからの電光石火だ。これは効き目があって、まだ有効だ、 — このような零落者どもに最も効く。多分最後の審判の最初のラッパのように彼らのだらしない体に響くのであろう。まさにいつも悪しき良心を有しているのだ。

「刈り手を必要としている」と彼は太った黒っぽい男に言った、「五十人から六十人、二十人が男で、二十人女。残りは娘達に若造達」。

「承知しました、旦那さん」と太っちょはお辞儀した。丁重ににやりと笑った。

「一人の有能な刈り手職長、 — これは二十ツェントナーの重さにライ麦に匹敵する保証金を呈示しなければならない。女は女性報酬代で郎党の料理をすることになる」。

「承知しました、旦那さん」と相手はにやりとした。

「旅代と貴方の手数料は私が払う。郎党が蕪の収穫まで残るならば、旅代は差し引かれない。他に,...」。

「承知しました、旦那さん」。

「そうか、 — それで少し急ぐのだ。十二時半に列車が出る。急げ、速やかに、分かるか」。騎兵隊長は、心のつかえが取れて、奥の三人の姿にさえ頷きかけた、「今契約書を仕上げてください。三十分後にまた来る。まあ腹ごしらえをするつもりだ」。

「承知しました、旦那さん」。

「それでは万事問題ないな」と騎兵隊長を締め括って言った。相手の何らかの挙措をそれでも彼は訝しく思った。恭しい微笑は、突然恭しく思えなかった。むしろ策謀的であった。「万事問題ない、 — いやそれとも」。

「万事問題ありません」と太っちょは宥めた。話し相手に視線を素早く輝かせた、「万事旦那さんの命令のままです。五十人の郎党、 — よろしい、います。鉄道、 — 十二時三十分、 — よろしい、出発します。きちんと、定刻に、命令通りに。 — しかし郎党抜きです」。彼はにやりと笑った。

「何だと」とほとんど騎兵隊長は叫んで、彼の顔を大いにしかめた。「何を言っておら

れる。ドイツ語で話されたい。何故、郎党抜きなのだ」。

「上手に命令なさる旦那様は、私がどこから郎党を連れて来るかも命令なさいますか。五十人の郎党を、一　いいか、見つけて、用意しろ、早く、速やかに、素早く。そう行きますか」。

今や騎兵隊長はその男をもっと正確に見つめた。彼の最初の当惑は過ぎて、すでに最初の怒りが、爆発寸前なのを彼は感じた。奴は十分にドイツ語が分かるのに、と彼は考えた。その相手はますます奇妙な慌てた話し方をしている。奴はただその気がないのだ。

「それで奥の方々は」と彼は尋ねて、コール天の三人の男達を示した。彼らの葉巻は相変わらず消えたかのように口の端にあった。「貴方らは刈り手職長だろう。こちらに来て頂きたい。新しい刈り手兵舎に、上品なベッド、南京虫はいない」。

一瞬、このような自賛が情けなく思われた。しかし事は収穫だ、ある日、とても間近なある日、雨となるかもしれない。いや、すでにここベルリンでは雷雨の気が空中に感じられる。太っちょの黒っぽい男はもはや計算に入れられない。これとは駄目になってしまった。多分自分の命令口調のせいだ。「それで、どうかい」と彼は鼓舞して尋ねた。

三人は、何の言葉も聞かなかつたように、動かず立っていた。刈り手職長に違いない。騎兵隊長は確信があった。彼はこうした突き出した下顎、こうした決然たる、若干野蛮な、それでいて物悲しい視線の天職の叱咤激励人達を知っていた。

黒っぽい男はにやりと笑って立っていて、側から騎兵隊長を見つめていた。その男はそもそも男達の方を見ていなかった、自分のやり方に自信を持っていた。(ここは通りで、これが私の目を据える点だ、私は進んで行かねばならないと隊長は考えた)。「良い仕事、一　良い報酬、一　良い出来高給、一　良い現物給与だ、どうだい」と言ったが、彼らは聞いていなかった。「それに刈り手職長には三十、つまり三十枚の立派な、真のドル紙幣を支給する」。

「私が郎党を仲介します」と黒っぽい男は叫んだ。

しかしすでに遅かった。職長達は柵の側に立っていた。

「私の郎党を使ってください、旦那さん、雄牛のような郎党で、強くて、敬虔、...」。

「いや、ヨゼフの奴等は駄目だ。皆怠惰なペテン師で、ベッドから朝起きず、女には目はないが、仕事にはとろい、...」。

「旦那さん、ヤブロンスキーと話しても意味ない。刑務所から出て来たばかりで、ナイフで検査官の旦那を刺したのでっせ、...」。

「血みどろの地獄ぞ」。

一人の者が他の者に向かい、ポーランド語の言葉の洪水となり、一　ここでも刃傷沙汰が生ずるのであろうか。中に太っちょがいて、絶えず喋り、身振りをし、叫び、押し返し、騎兵隊長をにらみつけてもいた、一　その間に、三番目の男がそっと騎兵隊長に忍び寄って来た。

「立派なドル紙幣、そうなんだろう。三十枚な。出発の際貰うのか。旦那は十二時きっかりにシュレーゲン駅へ行きなされ。俺も行く。郎党連れて。何も言うな。すぐずらかるのだ。ここの連中はひどい」。

彼はすぐにまた他の連中の所へ行つた。喚く声がし、四人の形姿があちこち引っ張り合いながら揺れた。...

騎兵隊長は、ドアが間近に素直にあるのを見て喜んだ。彼はほっとして通りに戻った。

13

パーゲル夫人は朝食を摂る

ヴォルフガング・パーゲルは相変わらず彼の穴蔵のオイルクロスの覆いのテーブルの許に座っていて、椅子を上下に揺すり、知る限りの兵士の歌をぼんやりと口ずさみ、トゥーマン夫人のエナメルのコーヒーポットを待っていた。

一方彼の母親はタンネン[縦]通りの立派な住まいの、美しく黒っぽいルネサンス様式のテーブルの前に座っていた。黄色のボビンレースのカヴァーの上に銀製のコーヒー食器セット、新鮮なバター、蜂蜜、本物の英国製ジャムがあった、一すべてあった。ただ二つ目の食器の前にはまだ誰も座っていなかった。パーゲル夫人はその席と、時計を見た。それから彼女はナプキンに手を出し、それを銀のリングから抜き、言った。「ミンナ、頂きます」。

ミンナは、初老の黄色っぽく褪せた人物で、ドアの所にいたが、二十年以上前からパーゲル夫人に仕えていて、頭で頷き、やはり時計を見て、言った。「きっとそうでしょう。定刻に来られない方は、...」。

「あの子は、朝食時間は分かっているはずだし、...」。

「勿論、一若様が忘れるはずはありません」。

老夫人は、精力的な顔で、澄んだ青い目をしており、老齢だからと言って何らきっちりとした挙措や確固とした原則を失っておらず、間を置いて言った。「今日は朝食で会えると思っていたのよ」。

ミンナはかの諍い以来、つまりその諍いの最後に何ら関係のないペートルが平手打ちを貰ったのだが、毎日その一人息子のために食器を置かなければならず、毎日また不使用のまま片付けなければならず、そして毎日恵み深い夫人はこの待機を口にしたのであった。しかしミンナは承知していた、毎日幻滅しても、老夫人は（息子に一步も歩み寄らずに）息子との関係を新たなものにするという確信を失うことはない、と。ミンナは夙に、どんなに話しても無駄であると知っていた。それでミンナは黙っていた。

パーゲル夫人は卵を叩いた。「それで、あの子は今日のうちにも来るでしょう、ミンナ。今日の食事は何」。

ミンナは報告した。恵み深い夫人は満足した。皆あの子の好きなものだ。

いずれにせよあの子はもうすぐにも来るかもしれない。いつかこの忌々しい賭け事は失敗に終わることだろう。恐ろしい結末、...

それでも私は一切非難しないつもり、...

ミンナはもっと良く承知していた。しかしそれを口にする必要はない。そこで彼女は黙っていた。しかしパーゲル夫人は分別がないわけでもなく、嗅覚がないわけでもなかった。彼女はドアの許の忠実な老女性の方へ頭を鋭く回して、尋ねた。「あなたは昨日の午後暇だったのでしょ、ミンナ。多分また行った一の」。

「どこへこの老いぼれが参りましょう」とミンナは不機嫌に答えた、「あの人は我が息子同然ですし」。

恵み深い夫人は苛立ってスプーンでカップを叩いた。「あの子は全く愚かな若者よ、ミンナ」と彼女は鋭く言った。

「若者に説教はできません」とミンナは全く動じずに答えた、「恵み深い奥方様、私が若いとき、どんな愚かなことをしたか考えてみれば」。

「あなたがどんな愚かなことをしたと言うのよ、ミンナ」と恵み深い夫人は怒って叫んだ。「何もそんなことをあなたはしていません。いいえ、愚かなことと言うのであれば、それは勿論ただ私のことを指しているのよね。 — それは我慢ならない、ミンナ」。

ミンナはそれに対し黙っていた。しかし人は不満があるとき、他人の沈黙は火に油となり得る、 — まさにただこの沈黙が。

「勿論平手打ちをするべきじゃなかったことでしょう」とパーゲル夫人は更に熱くなって続けた。「あの娘はただの愚かな小娘にすぎない、あの娘は彼を愛している、犬が飼い主を愛するようには言いたくないけど、まさにこのように愛している。そうよ、ミンナ、頭を振ってはなりません、まさにこのように、...」（パーゲル夫人はミンナの方を向いたのではなかったが、ミンナは本当に頭を振っていた）「あの娘は彼を愛している、女性なら夫に対してまさに愛してはならないやり方で」。

パーゲル夫人は怒ってジャム付きパンを見つめていた。もっともらしいことを言いながら、彼女はスプーンをジャム缶に入れて、指の太さに塗りつけた。「自らを犠牲にして」と彼女は怒って言った、「そうなのよ。皆がそうしたがる。それが快適だから、怒らなくて済むから。しかし不愉快なことを言うこと、『我が息子、ヴォルフガングよ、賭け事はもうお仕舞い、一文ももう私は上げません』とそのようなことを言ってやること、それが本当の愛でしょう、...」。

「でも恵み深い奥方様」とミンナはゆっくりと言った、「あの娘は与えられる金なんか持っていませんよ。あの娘の息子でもありませんし、...」。

「何それ」とパーゲル夫人は憤然として叫んだ、「何それ。出て行きなさい。恩知らずの人だね。あなたの永遠の知ったかぶり口答で私の朝食全体が台無しだわ。 — ミンナ、どこへ行くの。即刻片付けなさい。こんなに私を怒らせて、私がまだ食事をすると思うの。私の怒りの胆汁は敏感だと知っているでしょう。 — もうコーヒーも結構。これでコーヒーが飲めるなんて。 — 十分に立腹しました。あなたにとってはこの娘は自分の娘のように思われても構わない。しかし私は古くさいの。結婚前にあんななんて、心が綺麗とは思われない、...」。

「奥方様はおっしゃいました、...」とミンナは少しも発作に動じずに言った、というのはこのような発作は日常茶飯であって、恵み深い奥方はすぐにかっとなり、すぐに収まるからである、...「誰かが好きな場合、何か不愉快なことをその人に面と向かって言うとおっしゃいました。それで私も言ってよろしいかと存じます、ヴォルフはペートル嬢の息子ではない、と」。

そう言って、ミンナはカタカタ言う盆を手を持って去って行った。これでようやく「自分の台所」で休むという印として、彼女は固くドアを閉めた。

パーゲル夫人これを理解した。彼女は忠実なこの女性の昔からの印を尊重していた。ただなお速やかにこう呼びかけていた。「馬鹿ね。いつもすぐに侮辱を感じて、いつもすぐに怒る」。彼女は思わず笑った。彼女の怒りは消えていた。この老いた馬鹿な女は、他人

に不愉快なことを言うことが愛なのだと思いますわ。

彼女は一度部屋の中をあちこち歩いた。彼女は満腹であった。怒りの発作は、すでに十分食したとき始まったからである。彼女は最良の気分であった。些細な喧嘩で気が晴れたからである。今や彼女は小さな戸棚の前に立ち止まって、入念に長くて黒いブラジル葉巻を選び、長く用心深く点火して、それから夫の部屋へ移った。

14

パーゲル夫人の結婚生活と孤独

ブロンズの呼び鈴のリング（ライオンの口）の上の住居のドアに接して、陶器製の表札が打ち付けられていた。「エトムント・パーゲル ー 公使館員」。パーゲル夫人はすでに七十歳に向かっていて。それ故彼女の夫は人生でそれほど出世したようには見えない。高齢の公使館員は珍しい。

ちなみにエトムント・パーゲルはとても出世していて、最も有能な大使館参事官や全権公使に劣ることなく、 ー つまり墓地に眠っていた。パーゲル夫人は彼の部屋に行くとき、彼女は夫を探しているのではなく、彼がこの世に残したものを探していた。 ー これこそが彼の名声を世に、小さな家の壁を越えて広めたものである。

パーゲル夫人は部屋の窓を広く開けた。庭から明かりや大気が侵入して来た。ここ小さな通りでは、とても往来に間近で、夕方には高架鉄道がノレンドルフ広場駅へ侵入して来て、昼夜分かたずバスがガタガタ音を立てた。ここは高い木々の古い庭園が広範囲に入り混じっていて、それらは八十年代、九十年代からほとんど変わっていない時代遅れの庭園であった。ここに住むことは、 ー 高齢者にとって結構なことであった。高架鉄道ががなり立てようと、ドルが上がりようと、 ー 落ちていて未亡人のパーゲル夫人は庭園を眺めた。彼女の窓際までブドウの木が上昇して来ていた。その下ではあらゆるものが更に生長し、更に花咲き、種を蒔いていた。 ー 向こうの騒がしい者達、急ぐ者達、休みない者達は、騒ぎと営みとに紛れて、そのことを知らなかった。彼女は眺めて、昔を偲んでよかった。彼女は急ぐ必要はなく、庭園は彼女を引き留めてよかった。しかし彼女が相変わらずここに住むことが出来て、急ぐ必要のないこと、 ー そのことを可能にしたのは夫で、その作品はここ、この部屋にあった。

四十五年前に二人は初めて会って、互いに惚れ、後に結婚した。彼ほど輝かしいもの、楽しげなもの、速やかなものはなかった。彼女が思い返してみると、彼女はいつも彼と一緒に明るい風の許、花の通りを駆けて行ったような気分であった。壁を越えて小枝が二人に垂れて来た。二人は一層速く駆けた。家々の立っている丘の先端の上では ー 二本の糸杉の間に ー 天のテントがはためていた。...

二人は駆けさえすれば、すぐに青色の絹のカーテンが二人の前で開くことだろう。

いや、まことに彼の本性の印であったもの、それは彼の素早さで、それは急いだものではなく、力から来るもの、全き健康な快適さから来るものであった。

二人はイヌサフランの草原へ来た。一瞬夫人は静かにこの厳粛な、緑色の、ライラック色[紫]の星々の絨毯に立ち止まった。そして彼女はしゃがんで摘んだ。しかし彼女が二十本の花を手に取りかけたとき、彼は花束を持って、軽快に、速やかに、急ぐことなく、こ

の大きな楽しげな花束を持って来た。

「どうして出来たの」と彼女は息を飲んで尋ねた。

「分からない」と彼は言った、「いつもそうだ、全く軽々と、風に吹かれているようだ」。

カーテンがざわめいた。半年が過ぎ去った、二人は今や結婚してしばらく経っており、若い夫人は寝室で嘆きの呼び声を聞いた。彼女は目覚めた。彼女の若い夫はベッドに座っており、彼は全く変貌して見えた。この顔はまだ見覚えのないものであった。

「あなたなの」と彼女は小声で尋ねた、こう発して夢が現実になることを恐れているようであった。

彼女の側の異様な馴染みの夫は、微笑しようとした。当惑した、許しを請う微笑であった。「起こしてしまい、済まない。とても奇妙で訳が分からない。とても不安だ」。そして疑わしげに彼女を見つめながら、長い間を置いて言った。「起き上がれないのだ、...」。

「起き上がれないの」と彼女は信じられず尋ねた。とても非現実的で、彼の一つの冗談、ナンセンス、勿論ひどいナンセンスだわ。突然起き上がれないなんて、考えられない。

「そうなのだ」と彼はゆっくりと言って、やはり信じられないように見えた。「もはや両腕を有しないかのようだ。いずれにせよ、両脚の感じが無い」。

「阿呆なことを」と彼女は叫び、飛び跳ねた、「風邪を引いたのよ。それとも体が眠り込んだのか。待って、助けてあげる、...」。

しかしこう言う間にも、ベッドを回って彼の許に行く間にも、冷たい感情に彼女は襲われた、...。これは現実だ、これは現実だ、これは現実だ、...

彼女は感知したのであろうか。今なお窓辺のこの老夫人は怒りで肩を震わせた。どうしてこのあり得ないことを感知できよう。最も速やかな男、最も楽しげな男、最も生氣ある男が動くことが出来ないなんて、立つことさえ出来ないなんて。これを感知することは出来ない。

しかしぞっとする寒さが残った。あたかもこの冷気を生命の息と共にますます吸い込むかのように思われた。心が抗おうとした。しかしすでに心は冷たくなっていて、氷の甲冑が一層きつく締め付けた。

「エトムント」と彼女は懇願して叫んだ、「起きて、立ちなさいよ」。

「出来ないのだ」と彼は口ごもった。

彼は本当に出来なかった。かの朝ベッドに座っていたように、今や来る日も来る日も、年がら年中座っていた、一ベッドに、車椅子に、寝椅子に、...全く健康で、少しも痛みはないのに座っていた。ただ彼は歩くことが出来なかった。燃え上がるように始まった人生、気ぜわしい、速やかな、照らし出す人生、陽気な幸福な人生、青い絹のテントの空、花々、一これらが去った。過ぎ去った、一度っきりで、反復することなく。何故反復しないのか。答えはなかった。いや、主よ、主よ、一体何故なのです。それが必然ならば、何故かくも突然なのです、何故何の警告もなく、移行過程もないのです。幸せに眠りに滑り落ちて、一惨めに目覚めた。果てしもなく惨めに。

いや、彼女はこれに屈しなかった。決して屈しなかった。このことが続いた二十年間ずっと、彼女はそれを許容しなかった。彼が夙にすべての希望を棄てていたとき、相変わらず彼女は彼を医師から医師へと引き連れて行った。奇蹟的な治療の知らせがあると、新聞に情報があると、彼女の希望が点火した。次々に彼女は鉱泉や照射、湿布、マッサージ、

服薬を、 — 奇蹟を起こす聖人を信じた。彼女はそれを信じようと思って実行した。

「ほっとけよ」と彼は微笑した、「ひょっとしたらこれでいいのかもしれない」。

「これに甘んずるなんて」と彼女は怒って叫んだ、「これに甘んずるなんて、 — 謙譲に。これが快適かしら。謙譲は、不適な者達、幸福な者達には、手綱が必要だから、結構なものかもしれない。私は、幸せを求めて神々と戦った古代人に与します」。

「しかし私は幸せだ」と彼は好意的に言った。

しかし彼女はこの幸せを欲しなかった。彼女はこの幸せを軽視した。この幸せに彼女は怒った。彼女は一人の公使館員と結婚したのである。ドアには表札「エトムント・パーゲル — 公使館員」が掛かっていた。 — そしてそのままであった。彼女は新しい表札に変えなかった。「パーゲル — 画家」でいいか。いや彼女は絵師、へぼ絵描きと結婚したのではなかった。

いや、彼は今や座って、絵を描いた。彼は車椅子に座って、微笑して、口笛を吹き、描いた。苛々して彼女は怒った。こんな滑稽な絵を描いて、皆がただ微笑するだけの絵を描いて、自分の生涯が無駄になると分かっているのだろうか。

「彼のことは放っとけよ、マティルデ」と親戚の者は言った、「病人にはそれは大変結構なことだ。自分の手仕事、気散じになるのだから」。

いや、彼女は放っておかなかった。彼女が彼と結婚したとき、絵描きは話題にならなかったのだ。彼がかつて絵筆を手にしたことがあると聞いたことはなかった。彼女はこの一切が嫌いであった。すでに油絵の具の臭いが嫌いであった。彼女は絶えず楔付きカンバス枠にぶつかり、画架はいつも邪魔であった。彼女はそれに馴染めなかった。湯治場の客室や、賃借の住まいの床に彼女は彼の絵を置き去りにし、木炭デッサンは散らばって散逸した。

時に、ある仕事の最中、憂いの最中、自分自身の自我の狭い牢獄から出たとき、彼女は目を上げることがあって、このような絵を、初めて目にするかのように眺めることがあった。何らかのものが軽く彼女の琴線に触れそうであった、 — あたかも何か眠りの中 — 目覚めに向かう具合であった。待って、待ちなさい。とてもすべて明るく、例えば澄んだ夏空に対して、一本の木が陽光の中に、大気の中にある。待ちなさい。この木は上昇するように見えるわ、風が穏やかに吹いて、この木は動いている、 — 跳ぶのかしら。そう大地全体が跳んで行く、太陽に、そして光と大気の戯れ。小声で、急いで、優しく — 待ちなさい、辛辣な暗い地球というのに。

彼女はもっと間近に近寄った。神秘的なものの前のカーテンがそよいだ。それはカンバス、臭う油絵の具、地球の素材、固い、固い地球の素材であった。しかし旋風が響き、風が吹き、木は枝を動かし、生命が流れ、漂っていた。 — 飛びなさい、待たずに、逃げ、飛びなさい。我々哀れな現世のものが去り、飛んで行くように。我々は心配事や希望やプランの重い鉛を我らの足裏に引き下げ、時間にしがみつこうとして空しい。我々は消え去って行く、我々は海の中に流れる。...

一人の萎えた者によって描かれたもの、無から創造されたものだ。勿論動きを知っている愛している男によるもの、この男は今ベッドから椅子へ転がされる無様な肉体でしかない者である、 — いや待つことはない、我々は消え去り、飛んで行く。

いや、静かにこの観察する夫人は感動した。あたかもかつてないほどにこのとき、自分

の夫が不滅で、輝かしく、速やかであるかのような一つの予感に襲われそうであった。

一 しかし彼女はそれを振り切った。彼女は再び眠りに陥った。カンバスと色彩、ある種の規則に従って多彩に塗られた一つの平板な平面にすぎない。動きは何もない。夫のものは何もない。

更に鉱泉に行こう。もっと多くの医者を見つけよう。世間は何と言っているか。二回あるいは三回、ささやかな展覧会が開かれた。一 誰もそれについて耳にせず、誰もそれに目を留めなかった。一 一枚の絵も売れなかった。やれやれ、誰も少なくともそれを必要としない。時折地上の施療所を通じてのせわしい旅の途次、二人に面会する者があり、どこかの若者で、寡黙で不器用、陰気な者であったり、別な者は、突然言葉の洪水になって、落ち着きのない動作で、新たな時代を告げる作品と言ったりするが、一 こんな人は彼女に必ずしも彼の絵を大事と思う勇気を与えてくれなかった。

「天気がとてもいいわ、車で出掛けましょう」。

「明かりの具合がいい。絵を描かせてくれ、一時間」。

「外の具合はどんなか、ほとんど忘れてしまいそう。外気不足で死にそうよ」。

「分かった、窓辺に腰掛けなさい、窓を開けて、一 長いこといつかおまえを描こうと思っていたのだ、...」。

彼はそのようであった。親切で、快活で、決して怒らず、一 しかし揺るがなかった。彼女は説得し、頼み、怒り、また気を取り直し、策謀し、許しを請うた。一 彼は畑のようであった。風や雷雨、陽光、夜の霜、雨を凌いで行った。畑はすべてを受け入れた。変わらないように見てた。最後に一つの収穫となる。

いや、収穫となった。しかし実る前に、更に何か別なことが生じた。彼女が二十年間求めて戦い、喧嘩し、争い、懇願した当のものであった。ある日彼は立ったのである。彼は二、三步、歩んだ。最初ためらって、二十年前と同じ少しばかり困惑し、許しを請う顔をしていた。「本当に、上手く行くと思う」。

病気は発症した時と同様に、不可解に、何故かも分からないまま消え去った。彼女のどんな熱意も、どんな心配も、この過程に寄与していなかった。これらの一切は人間的努力、彼女の努力を無視していた、一 絶望的なほどであった。

その間に、人生の半ばが、一 より良い人生の部分が、一 消え去っていた。彼女は四十歳の始めて、側には四十五歳の公使館員の夫がいて、一 過去の枯れた、消えた存在となっていた。活動的人生、努力する人生、休みなく、プランや希望を沢山抱く人生、... 今やその希望が満たされた。もはや希望するものはなかった。すべてのプラン、すべての心配事が形のないものとなった。人生がまるごと、エトムントが起きて歩いた瞬間に塵となって消えた。

不可解な女心。「エトムント、そこにあなたの絵があるわ。ただ後二、三タッチが必要よ。一 その気はないの」。

「絵か、そうだな、絵か」と彼は思わず言って、ちらと見て出て行った、すでに彼はすっかり外にいた。

いや、彼には三十分も描く時間はなかった。彼は二十年間暇があって、辛抱強く、不平を言わず、病人を続けた。今やもはや一分も暇がないのである。外で人生がまるごと彼を待っていた。祭典の渦で、次々にもっと輝かしい祭典で、一緒に話すことが素晴らしい数

百人の人々が相手であった。 — 美しい夫人達や若い娘達が相手に、目にしさえすれば、背筋がぞくぞくするほどとんでもなく若い者達であった。

彼自身若くなかったろうか。彼は二十五歳であった。その後生じたもの、それは勘定されなかった。それは単に待機にすぎなかった。彼は若かった。人生は若かった。果実を掴み、待ち、味わい給え。 — 待て、待ちなさい。更に、...

絵を描けと。勿論、いや、それは助けとなったよ。快適な暇つぶしだったな。今やタフな重荷の時間を潰すに何も必要ない。 — 点滅して、千もの目から輝いて、数百万の歌を歓呼しながら、奔流が過ぎ去って行く、 — 彼と一緒に、なおも彼と一緒に、ようやくまた彼と一緒に。

時々、夜に彼は出て行く、死ぬほど疲れて、過度に目覚めていた者達の最初の、熱に浮かされた眠りからほとんど目覚めないうちに。彼は火照るこめかみを熱い手で支えていた。彼は、時の流れる音が聞こえると言った。時は流れ去る。彼は眠っておれない。時がかくも速やかに流れるのに、誰が眠っておれよう。眠りは遅滞である。こっそりと、こっそりと、彼女を起こさないよう、彼は起き上がって町へ行く。もう一度、明かりの燃えている町へ行く。彼は一つのテーブルに着席していて、息も吐かず、他人の顔を見つめていた。向こうの顔か、それとも汝か。消えないでくれ、 — 待ってくれ。

彼女は彼を行かせた。彼女は彼の声を聞いた。しかし彼女は昼も夜も彼を行かせた。最初は彼女も一緒に出掛けた。彼女は、今や自分の希望が実現したのであった。彼女の戦いは勝利していた。彼女は彼が、友人の家庭の庭園でのパーティーに、午餐に居合わせるのを見た。 — 立派に着込んで、痩身で、速やかに、楽しげに、 — 白髪で、二本のカミソリのように鋭い、深い皺が、鼻翼から口の縁を経て、顎まで達していた。彼は踊った。立派に、安定感を、完成された戯れを保っていた。四十五歳と彼女は口にした。彼は冗談を言い、おしゃべりをし、話した。 — いつも若い者達を相手にしていると彼女は見た。ほとんど彼女は一つの戦慄に襲われた。ほとんどあたかも一人の死者が蘇ったかのようにではないかしら。逝った人が生命の糧を要求しているかのようで、その人の口ではすでに塵が軋んでいる。待ちなさい。彼女の嫉妬する怒った心が内奥で大事にしていたもの、彼女にとって二十年間幸せのパンであり、生命の糧であったもの、つまり彼女の最初の祝典の時への思い出、 — それが今や消えた。彼女はもはやそれを維持できなかった。

夜は彼女の周りに壁のようにあった、狭い牢獄で、出口が見えない。サイド・テーブルの時計は待機されなければならない無益な時を吹き飛ばして進み、震える手で彼女は明かりを点してみる。 — すると壁から彼の明るい、迅速な絵が彼女に挨拶する。

彼女は、あたかもこれらの絵を初めて目にするかのように見つめる。彼女はこの時やはり、彼の絵の前に立ち止まって、その絵を見ることを始めた外部世間と同じであった。突然これらの絵の時代がやって来た、 — しかしその創作者にとっては、時は過ぎ去っていた。時代の矛盾、敵対、ナンセンス、不合理である。 — 彼がその作品を創作したとき、二十年間、不断に、辛抱して、穏やかに創作したとき、彼はそれを目にする唯一の者であった。今や世間がやって来た。手紙や模写と共に、美術商や展覧会と共に、金や黄金の称賛と共にやって来た。...しかし彼の時は過ぎ去っていた。彼は時を汲み尽くし、泉は空であった。...

「そうだな、絵か、...」と彼は言って、出て行った。

子供が腹にいて、夫人はベッドに寝ていた。今やそれらの絵を凝視するのは彼女であった。今や、その絵の中の真実の彼の模写を見るのは、彼女であった。彼の速やかさ、彼の陽気さ、彼の穏やかな真面目さ、 — それは消え去った、過ぎ去った、去った。ここにそれらはいる、高められて、永遠が生命に与える光輝を帯びて。

彼の「快復」の直前に描かれた一つの作品、彼が絵筆を放す前、最後に完成した作品がそこにある。彼は彼女を窓辺に座らせた。窓は開いていた。彼女はかつて彼女の活動的人生にはほとんど見られないほど静かに、凝然として座っていた。それは彼女の絵で、彼女がまだ彼の側にいた時の彼女で、彼女がまだ彼にとって幾ばくか大事であった時、彼によって描かれたものであった。窓辺の若い女性に他ならない、待機していて、ひよっとしたら待機しているかもしれない女性、外では世間がざわめいている。窓辺の若い女性、 — 彼の最も美しい絵の、 — 彼女。

彼がまだおまえの許にいた時の、彼によって描かれた絵だわ。彼は今どこにいるの。その朝は騒がしい世間であって、輝いていて、陽光が一杯で（しかしおまえにとっては陰る）、そのとき、彼らが夫を家に運んで来た。汚れて、賢い両手は曲げられて、顎は緩み、こめかみには血の凝固が見られた。警察官と犯罪取締官の殿方は彼女に対しても用心深かった。ある通りでの出来事であって、その通りの名前は勿論彼女には心当たりがなかった。不慮の出来事、いや、事件。他言無用。

時よ、去るがいい、急ぐがいい。息子が生まれる。父親は輝く星座として昇り、それから長く穏やかに輝き、そして突然消えた。彼は消えた。息子を迎えるというのに。

夜の小さな明かり、一つの無、温かさのない炎。でも一人っきりでないわ。

窓辺の夫人、老夫人は向きを変えた。そこに絵があった。その通り、すべてはその通り。待っている窓辺の若い夫人。

老夫人は葉巻の残りを灰皿に置いた。

本当に今日はあの愚かな息子がやって来る気がする。

その時が来ることだろう。

15

失敗した賭けの夜

トゥーマン夫人、石工のヴィルヘルム・トゥーマンの最愛の妻は、ぶくぶくぶよぶよで、緩い衣装を着て、ぶくぶくぶよぶよの顔で、その顔にはそれでも酸っぱい厳格さの面影が見られたが、 — このトゥーマン夫人が、不可欠のおまるを持って廊下を足引きずりながら、トイレへ、下の半階段分低い、三家族用のトイレへ向かった。トゥーマン夫人は、極めて評判の悪い娘達を連れと一緒に泊めることに全く無頓着であったが（目下アレクサンダー広場からの粋なイーダがパーゲル達の向かいの部屋に住んでいた）、トイレに関しては完全な衛生観念を持っていた。

「あのね、バクテリアというのが発見されたのだよ。それはそのまま放置していてもいいのだろうけど、でも出してしまったものはさ。それにここにいる人達は繊細な人達じゃないし。時々私がトイレに来てみると、息が詰まりそうになるのよ。何がその中でとぐる巻いているか分かりゃしない。あるときなんざ、黒い甲虫がいて、私を見つめて、脅すの

だよ。いや、私は南京虫や家の虫を見たことはありませんてえのじゃないよ。あなたはね、そんなのは知りませんで済むけど、私と南京虫はね、一緒に育った仲なの。しかしバクテリアが発見されてからはね、私はヴィレムにこう言うの。おまるは大事よ、健康あつての命。用を足すときは、用心しなさい。虎のように菌がかみつくからね。気付かないうちに、体の中に病原菌のすべてを入れてしまうからね。でも何と言ったものか、あのね、人間は滑稽なものよね。私はおまるを手に入れてから、毎日それを持って走り回っている。私は不平を言っているのじゃないよ。でもすごいよ。あの若様は、小さな青白いブルネット娘を連れていて、でもあれは妻じゃないね。単にあの娘は妻になると妄想しているけど、中にはその妄想が楽しいのがあるのよね。ヒルブリヒ店のケーキのような味がしてね。あの若様は私のことをいつもおまるマダムと呼んでいる。ただあの娘はそう呼んじゃいけないと叱っている。これはまた立派なことだけど。でもあの人が私のことをそう呼んでも構わない。だってあの人は何故そう呼ぶのだろう。冗談を言いたいからよ。何故冗談を言いたいのだろう。若いからよ。若いとね、何も信じない。牧師さんのことも信じない。私もそうだけど。そしてバクテリアを信じないのよ。でもどうなる。私がおまるを持つように、あの人達は後で診察所に駆け込むの。何の相談か、言う必要もないわ。分かっているのよね、あのね、中にはただカタルだと言うわね。それで阿呆なくせに、突然分かった気になるのよね。そしてカタルに関しては、突然くしゃみして、お大事にと行って貰いたいのよね。でもそれは流行らない。私はむしろおまるを持って走るわね。...」

そこでこの手のトゥーマン夫人は、ぶくぶくぶよぶよで、しかし顔には沢山の胃酸を浮かべて、足引きずりながら廊下に行くのである。

パーゲル達の部屋のドアが開いて、ドアには若いヴォルフガング・パーゲルが、背は高く、肩幅広く、腰は細く、明るい陽気な顔をして、グレーの地の、細く赤い縞のリテフカ[折り襟の上着]を着ていた。 — それは五年経った今でもまだ上等に見える布地で、幾つかのシナノキの葉のように、穏やかな銀色に輝いていた。

「お早う、トゥーマン夫人」と彼は全く陽気に言った。「コーヒーのことでちょっとお話ししませんか」。

「まあ、あなた」とトゥーマン夫人は憤慨して言って、半ば顔を背けて進んで行った。「分かるでしょう。忙しいのよ」。

「勿論です、済みません、トゥーマン夫人。腹が減って、ただちょっと尋ねたのです。待ちますよ、まだ十一時になろうとするところ」。

「十二時まで待っても無駄ですよ」とトゥーマン夫人は入口のドアで警告の運命の女神のように言った。おまるがその手の中で揺れた。「十二時には新しいドルになるの。八百屋の亭主が言っているよ、ドルは上がるって。ベルリンはまた下落だ。一瞬のうちに更に百万マルクテーブルに出して貰わなければね。現金なしのコーヒー、 — 考えられないわね」。

こう言って彼女の背後のドアは閉まった。判決が下された。ヴォルフガングは部屋の中へ戻って、想いに耽り、不承不承言った。「彼女の言う通りではある、ペーター。コーヒーのことで夫人を説得しないうちに、十二時になってしまうだろう。ドルが本当に上がるのであれば、 — どう思うかい」。

しかし彼は彼女の返事を待たず、半ば当惑して言った。「安心してベッドに寝ていな。

すぐ叔父さんに相談しよう。二十分したら、遅くとも、三十分後にまた戻って来る。そして心地よくシュリッペ[割れ目のあるパン]とレバーソーセージを食べよう、 — おまえはベッドの中で、私はベッドの端で、どう思う、ペーター」。

「まあ、ヴォルフィー」と彼女は弱々しく言った、彼女の目は大きくなった。「丁度今日、...」

二人は今朝この件については一言も言及していなかったが、彼は彼女の言うことが分からない振りは一瞬もしなかった。少しばかり罪悪感を抱いて彼は言った。「愚かだったと分かっている。しかし正直私のせいではないのだ。いやほとんど私のせいではない。昨夜はすべてついていかなかった。全く素敵に勝利寸前だった。しかし突然狂った考えにとりつかれたのだ。ゼロが勝つに違いない、と。それでもはや自分を見失った。...」

彼は言うのを止めた。彼は現前に賭博台を見た。すり切れた緑色のクロスその他には何もなかった。立派な市民の部屋の食卓に敷かれていた。隅には雑然と、ルークや彫られた騎士、女王、ノブやライオンの口の見られるビュフェであった。というのはかの日々、賭博クラブや賭場は、 — 刑事警察の賭博取り締めり部局を絶えず恐れて、 — 場がコロコロ変わったからである。夜な夜な変わり、 — 昔の場所が嗅ぎつけられると — どこかの零落した事務員の食堂やサロンが借りられたのである。「ただ数日、夜の時間だけ、 — 貴殿は使用なさないのだから。貴殿はベッドにいて眠っていなされ。我々が使用するが、貴殿には何の関係もない」。

そんな具合で、かの簿記掛長の許、この課長の義理の母親が求めていた戦前の部屋が、スモーキングやジャケット、ブラウス、夜会服の集合場所となる次第となった。 — 夜の十一時以降である。静かな、悠然として上品な通りであって、ポン引きや見張り番がその狼藉を働き、目当ての観客を集めていた。田舎のおじに、ほろ酔いの殿方達、どこへ行くのか優柔不断の者達。毎日の外貨の酩酊でもまだ十分でない相場の仲買人達である。守衛は金を貰っていて、しっかり眠っていた。玄関のドアは何度開いても構わないのである。素っ気ない廊下のクロークには緑に塗られた真鍮の鉤があり、大きな賭博チップの箱用の小さな卓が置かれて、それを巡查風髭の、悲しげに見える巨漢が管理していた。トイレのドアには紙の標示、「こちら」が掛かっていた。ただ囁かれるのみで、誰もが家の中で「何ごと」にも気付かれないように配慮している。飲み物は何もない。酩酊者は若干騒がしいので呼びでない。ただ賭博のみがあった。十分な酔いである。

とても静寂であるので、すでに控えの間でも球のかすれる音が聞こえた。クルーピエ[仕切人]の背後にはジャケットを着た二人の男が立っていた。いつでも介入し、どのような諍いであれ通りへ出るようにとの恐ろしい指示によって、賭博からの排除によって、調停する用意があった。クルーピエは燕尾服を着ていた。しかし彼ら三人は似ている。彼とその背後に立っている両助っ人の助っ人、これら三人の男達は、痩せていようと太っていようと、ブルネットであろうとブロンドであろうと、似ている。皆冷たい、素早い目をしており、曲がった、意地悪な鼻で、灰鷹のくちばしのように、薄い唇である。彼らはほとんど互いに話さない。彼らは視線で了解し合い、せいぜい肩で指示するだけである。彼らは意地悪で、貪欲、冷たい。 — 山師、盗賊騎士、巾着切り、重懲役服役者で — 正体不明。彼らが私生活を有するとは想像できない。妻とか子供達がいて、彼らに手を差し出し、「お早う」と言うとは信じられない。彼らが一人っきりのとき、ベッドから起き

て、髭を剃ろうと鏡を覗くとき、どんな具合か思い描けない。彼らは賭博台の背後に、意地悪に、貪欲に、冷たく立っているよう定められているように見える。三年前には彼らはまだいなかった。一年後にはもはやいないだろう。彼らは使えるので、人生が彼らを洗い出して来ている。人生はまた彼らを連れ去るであろう。彼らの時代が過ぎ去ったら、どこへと分からぬまま拉致するであろう。しかし人生は彼らを有する。人生は使える者をすべて有する。

台の周りには一列の賭博者が座っている。金持ち、巻き上がられることになる太く膨らんだ札入れを持った人々に、新参者達、青臭い鯨ども。彼らが常に座席に座れるよう、三人の毛を逆立てた猛禽どもはすでに手配している。彼らの背後に、二、三列になって他の賭博者達が、密に寄り添って立っていた。彼らは賭け[張り込み]を前列の男達の肩越しに、腕の下を通じて、かろうじて見える賭博台の一端へ置く。あるいは他の人々の頭上高く、賭博チップを、三人の男達の一人に自分の指示をつぶやきながら渡す。

しかしこうした混雑、こうした押し合いにもかかわらず、ほとんど諍いは生じない。というのは、賭博者は自らの賭けに、球の回転に深く没頭していて、他人に余り注目していないからである。それに様々な色の賭博チップが多様な種類にあるので、どんなにはなはだ殺到しても、せいぜい二、三人の賭博者が同じ色彩を賭けるにすぎないのである。彼らは密に接近して立っている。美しい夫人や立派な外見の男達が居合わせる。彼らは密着している。手が胸に触れ、手が絹服の腰に当たる。彼らは何も感じない。大きな熾きがあれば、小さな炎の輝きはさえなく、小暗くなるように、密に押し合う人々はただ球のかする音、象牙のコインのカタカタの音をわずかに聞くのみである。世界は静かで、胸は息を止めて、時は立ち止まり、その間に球が走り、カタカタ言い、穴へ向かい、思い直し、更に飛び、カタカタ言う。

ほう、赤った。奇数。二十一。突然また胸は呼吸する。顔は弛緩し、 — いやこの娘は美しい。...「皆さん、張り込みです。張り込み、張り込み。 — はい締め切り」。球が走り、かすり、カタカタ言い。...世界は静止する。...

ヴォルフガング・パーゲルは立っている賭博者達の二番目の列に押し寄せていた。それ以上前に彼は決して来られなかった。すでに三人の猛禽どもが、彼の姿を見かけさえすれば、不機嫌な視線を互いに交わしていて、前に来られないよう注意していた。彼はまっぴら御免の賭博者であった。彼は五分五分の豹で、用心深く賭けて、夢中にならない男であった。ポケットには最低額の軍資金しか有しない男で、その金は一瞥にすら値しない金、いわんや巻き上げるには値しない金であった。夜な夜な自分が翌日生活する分だけをまさに胴元からせいしめようと固く計画して来る男であって、 — 大抵それに成功する男であった。

パーゲルにとって、このクラブを替えることは、全く無用であった。(というのはこの時節、賭けクラブは海の真砂ほどに、どこにでも、雪、つまりヘロインやコカインが見られるようなものであったからである。至る所にヌードダンス、フランス・シャンパン、アメリカ煙草があるようなもの、どこでも風邪や飢餓、絶望、姦淫、犯罪があるようなものであった)。いや賭博台の先端の猛禽どもは、彼の正体を知っていた。彼らは彼の正体を彼の入場の仕草で、見知らぬ風によびの顔をかすめて、賭場に落ち着く吟味するような視線で分かった。彼の正体は、過度の落ち着き、装われた無造作な振る舞い、彼の賭けの

仕方、つまりチャンスの間隔を調停しながら、連続を掴もうとする長い休止で分かった。彼らは別な羽毛であっても、同じ鳥は分かるのである。

この晩ヴォルフガングは神経質になっていた。二回ポン引きは玄関のドアを彼の鼻先で閉めて、望ましくない賭博者を追いだそうとしていた。彼はようやくある一行に紛れて入ることが出来た。悲しげな巡査[曹長]風顔の男は、賭博チップを求める彼の声が聞こえない振りをした。ヴォルフガングは大声を上げないよう、とても集中しなければならなかった。それでもとうとう彼はコインを入手した。

賭場で彼は、ある種の闇世界[花柳界]のレディー、通からは外貨妖婦と呼ばれる者が居合わせることに早速気付いた。彼はすでに何度か様々な所でこの注文の多い、声高な娘と衝突していた。彼女は不運が重なり、資金が尽きそうになると、連れの新規の賭け[張り込み]に無遠慮に相乗りする習慣であったからである。

彼は引き返したかったことであろう。一枚のチップが床に落ちた。これは縁起でもなかった。というのはこの賭場は自らの金を維持したいと告げていたからである。(この種の前兆は様々にあった。 — 一つ二つを除き、すべて悪しき前兆であった)。

それでも彼は賭け台に向かい、賭けた。いずれにせよ、 — 彼の習慣の範囲内で、 — とにかくここへ来たのであるから、試すことにした。すべての賭博者同様に、ヴォルフガング・パーゲルも、自分のしていることは本当の賭けではない、これは「本当ではない」と揺るぎなく確信していた。彼はいつかある時、閃光のように、瞬時に、今が汝の時だという感情に襲われるであろうと固く信じていた。この時に彼は本当に賭博者となるであろう、盲目の幸運の寵児となるであろう。賭けると、回転盤の球がきしるだろう、金が流れ込もう。 — すべてを、一切を私が得るのだ。 — 彼はこの時を考えると、時に、しょっちゅうではなかったが、余りに頻繁に前もって味わうと、偉大な幸運の享受が色褪せてしまうので、 — ヴォルフガングはその時のことを思うと、自分の口が渴き、こめかみの上の肌が羊皮紙のようにかさかさになるのを感じた。

彼は自分の姿が見えるような思いがした。軽く前に屈んで、目を輝かせて、 — そして少しばかり開いた両手から紙幣が、風に引き飛ばされたかのように、途方もない数のこの様々な紙幣が、ゼロの連なる紙幣が、呆然とする、全く把握し得ない富、天文学的富が — 舞うのである。

この時が来るまでは、彼は幸運のささやかな無料賄いの食客である。飢餓の民で、五分五分の賭けのか細い勝ちのチャンスで我慢しなければならない。喜んで我慢しよう。偉大な富の展望が見えているのだから。

この晩、彼の状況としては金額は悪くなかった。彼が少しばかり用心して賭ければ、十分な勝ちを家に持って帰れよう。ヴォルフガング・パーゲルは賭博の際、ある種の入念な観察に基づいて考案された体系を有していた。ルーレットの三十六の数のうち、十八が赤で、十八が黒である。三十七回のチャンスを計算すると、ゼロはこの場合、すべての賭け金が胴元に入るのであるが、計算から除外して、赤にしる黒にしる、チャンスは同じである。無限に長く賭けられたルーレットでは、蓋然性の計算としては、赤と黒、同等に生ずるに違いない。これは事実確実にそうである。しかし賭けの過程で、どのように赤と黒が交替するか、これについては半ば観察され、半ば感情に抱かれているよりも、はるかに神秘的な規則に支配されているように見える。

ヴォルフガングが — いつも最初に賭ける前に、そうするように、 — 観察しながら賭博台の許に立っていると、例えば赤になり、また赤になり、再度赤になることがある。四回、五回、六回と赤で、十回まで行き、十五回となる。いや全く稀なことに更に伸びる。赤また赤である。それはすべての感覚、分別に反するものである。すべての蓋然性の計算に合わず、すべての「体系を持った賭博者」の絶望を誘うものである。

それから一度黒となる。六回、八回の赤の後、黒となる。二回、三回黒となり、それからまた赤となる。それから倦むことなく連綿と交替が続く、赤と黒、黒と赤、と。

しかしヴォルフガングは相変わらず待っていた。何も言えない。勝ちの若干の見込みを持って張り込むことができない。

しかし彼は突然、自分の中で何か緊張するのを感じた。自分の視界に開けた賭博台の一端を見つめていた。いつとは知らず、あたかも賭博に目を向けていなかったような、しばらく物思いに耽っていたかのような、気がした。それでも今三回続けて黒になったと承知していた。彼は今や自分が賭けなければならない、今黒の連続が始まったと分かった。

— 彼は賭けた。

彼は三回、四回、賭けた。それ以上彼は自信がなかった。いや、十二回、十五回、赤というのは例外だ。このときは大きな勝ちのチャンスである。張り込みをそのままにしておく、勝ち、— 倍になる。そのままにしておく、— 倍になる。...更に続けて、途方もない数字になる。しかし彼の資本は小さすぎる。自分は失敗を冒すことはできない。自分は自家製の確実さで我慢しなければならない。しかしいつか、— いつかきつと例の晩が来るだろう。自分は賭け続けるだろう、ずっと、ずっと。...十七回赤になると自分は分かるだろう。自分は十七回賭けるだろう、それで最後だ。

そうになったら自分は二度と賭けないだろう。すると二人は金で何か平穏なことを始めよう。例えば古美術[アンティーク]商だ。自分はそのようなことにセンスがある。こうした物を扱うのは好きだ。人生はそれから穏やかに静かに流れよう。もはや極端な緊張はない。もはや深刻極まる絶望はなく、毛を逆立てながら観察する猛禽どもの顔を見ることもない。自分の金を盗む全く明白な闇世界のレディーを見ることもない。

彼は外貨妖婦の女の近くにならないよう賭博台の別の端に席を探した。しかし無駄であった。彼が丁度賭けたとき、すでに彼女の声聞いた。「席を空けてよ。そんなに占領しないで。他に賭けたい人もいるのよ」。

彼はお辞儀をして、彼女を見ずに、席を空けた。彼は別の席を見つけて、また賭け始めた。彼は今日格別用心して賭けなければならない。いつもより沢山家に持って帰らなければならないと考えていた。明日十二時半に結婚するつもりなのだ。

さて上々、さて上々。彼女は素晴らしい娘だ。自分をこれほど利己心なく、あるがままの自分を、他の嫌な理想の男と比べないで愛してくれる娘は決していないであろう。それで二人は明日結婚するつもりだ。何故明日か。差し当たり明確に言えない。それは問題ない。きっと上手く行くであろう。しかし少しばかり用心深く賭けようと彼は願った。今は絶対黒に賭けてはいけなかったのだ。負けだ、負けだ。それで今度は、...

突然彼はまた意地悪な、鋭敏な声を背後に聞いた。彼女は今や別の殿方と諍っていて、とても甲高く怒って話していた。勿論彼女の鼻は全く白く、「雪」を嗅いでいる、あばずれのコカイン女。彼女と関わるのはやばい。彼女は素面であっても、自分の欲することが

分からないのだ。さあ今度こそ。

彼はまた別の席を求めて、新たに賭け始めた。

今回はすべてが上手く行った。彼は用心して賭け、注ぎ込んだ分をまた取り戻した。いや彼はすべての運転資金を引き揚げて、勝った分で賭けてよかった。彼の横には落ち着かない目のせわしい動きの若者がいた。正真正銘の初賭博をしている者であった。このような者は幸運を呼ぶ。彼は、若者に気付かれずに、若者の背中に触れることができた。左手で、左手だ、 — このようなことは勝ちの見込みを競り上げる。その後彼はいつもより長く同じ張り込みを続けた。彼はまた勝った。猛禽は彼に短い、意地悪な視線を注いだ。結構。

彼は今や十分に明日の分、更に数日後の分を有していた（ドルが余りに高騰しなければの話である）、彼は家に帰って良かろう。しかしまだ全く早すぎる。彼は自分が後数時間ベッドで目覚めたまま、賭けのことを振り返るであろうと分かっていた。彼は自分がこの幸運の時に十分に利用し尽くさなかった後悔するであろうと分かっていた。

彼は静かに立っていた。勝ったコインを手にして、球の音に、クルーピエの掛け声に、緑のテーブルの熊手の微かなきしる物音に聞き入っていた。半ば夢の中にいる思いがした。彼は自分はここ、この賭場にいると分かっていた。しかしひょっとしたら全く別の所かもしれない。球のカタカタ言う音はカタカタ言う水車を思い出させた。いや、眠りを誘う。人生は、人が人生を感じるとき、いつも水を、流れる水を思い出させる。万物は流転する [パンタ・レイ]、すべては流れると学校では言われていた、まだ士官学校に入る前に。やはり流れ去ったことだ。

彼はとても疲れていると感じた。その上彼の口蓋は干涸らびて革状であった。ここに何も飲み物がないのはたまらない。トイレの水道栓の許まで行かねばなるまい。しかしそうすると賭けの経過が分からなくなる。赤 — 黒 — 黒 — 赤 — 赤 — 赤 — 黒。勿論その他はない。赤い生に黒い死。それ以外のものは考えられない、発明されていない。好きなように発明するがいい。生と死、それ以上のものは何もない。...

ゼロだ。

勿論 — ゼロを彼は忘れていた。勿論それもある。五分五分の賭博者はいつもゼロを忘れる。突然彼らの金が持って行かれる。しかしゼロのときは、ゼロは死だ。これも全く正当なことだ。すると赤は愛となる。若干誇張されているが、しかし結構。それを得たら快適だ。しかし黒は、 — すると黒は何だ。いや黒にもまだ生はある。これはまた誇張されているが、しかし別な面に向けてだ。完全に黒ではないが、灰色も考えられよう。しばしば明るい、ほとんど銀色の灰色だ。確かにペーターは良い娘だ。

熱があるな、と彼は突然考えた。しかし私は、思うに、毎晩熱を帯びている。本当に水を飲まなくちゃ。今すぐ行こう。

そうする代わり、彼は手の賭博チップを揺すって、ポケットから急いで出して添え、丁度クルーピエが「締め切り」と叫んだとき、すべてをゼロに賭けた。ゼロに。

彼の心臓は止まった。私は何をしているのだ、と彼は狼狽して自問した。彼の口の中の干涸らびた感じは耐え難いほどに高まった。両目が燃えて、こめかみの上の肌は羊皮紙のようにかさかさ強張った。とてつもなく長く球はきしり、皆が彼に注目しているように思われた。

皆が私に注目している。私はゼロに賭けたのだ。二人が所有しているすべてをゼロに賭

けた。 — ゼロは死を意味する。明日は結婚式[入籍]だ。...

球は相変わらず軋んでいた。息を更に長く止めたまま待つのは不可能であった。彼は深く息をした — 緊張が解けた。...

「二十六」とクルーピエは叫んだ、「黒、偶数、終わり、...」。パーゲルは鼻から息を出した。ほとんど気が楽になっていた。その通りだったのだ。賭場はその金を維持した。外貨妖婦が彼を惑乱させたのは無駄なことではなかった。丁度この女は思わず声に出していた、「小者ばかり。賭けをしたがって、 — 砂場で遊んでいりゃいいのよ」。猛禽のようにクルーピエは鋭い勝ち誇った視線を彼に投げた。

一瞬ヴォルフガングはまだ待機して立っていた。悩ましい緊張からの解放の感じが去った。まだ賭博チップがあればいいのにと彼は考えた。いや、どうでもいい。いつかチャンスの日が来よう。

球がすでにまた軋んだ。ゆっくりと彼は、悲しげな巡査[曹長]の側を通り過ぎ、暗い階段を下って、外に向かった。長いこと彼は家の玄関に立っていて、一人のポン引きに追い出された。

16

愛する二人の対話

こうしたことすべてについて何を小娘の善良なペーターに話せよう。ほとんど何も話せない。一文にまとめられよう。まず勝って、それから不運に見舞われた、と。それで格別話すことはない。最近彼はよくこう言わざるを得なかった。勿論彼女はこう言われてもほとんど見当が付かないだろう。彼女はひょっとしたら、誰かがスカート[トランプ]で負けたか、あるいは富くじで空くじに当たったようなものだと考えるかもしれない。アップダウン、幸運と絶望について彼女に理解を求めることは難しいだろう。ただ結果のみを報告すべきだろう、空のポケット、 — これは惨めだ。

しかし彼女はこうしたことすべてについて、彼が思っているよりも承知していた。余りに頻繁に彼女は彼の顔を眺めていた。夜、彼が家に帰って来たとき、まだ半ば熱を帯びているときに。それに眠っているときの疲労困憊した顔を。そして彼が賭博の夢を見ているときの、邪悪な動揺した顔を。(彼は本当に、自分がほとんど毎夜、その夢を見ていることに気付いていないのかしら。自分は賭博者ではないと自分と彼女に説得しようとしている本人は気付いていないのかしら)。それに彼が彼女の話しに耳を傾けず、思わず「何と言った」と尋ねながら、それでも聞いていないときの、彼の遠方を見ている上の空の顔を。これは彼の幻視がくっきりと表情に現れているもので、形をとったもののように呈示出来る顔であった。それに自分が一体何という顔をしているか彼が突然気付くことになる調髪の際の鏡前の顔を[彼女は眺めていた]。

いや彼女は十分に良く知っていた。彼は何も言う必要はない、釈明や詫びを言って自ら苦しむことはない、と。

「ヴォルフ、全く構わないわよ」と彼女は速やかに言った、「私どもには金はいつだってどうでも良かったのだから」。

彼は彼女をただ見つめて、釈明の労を省いてくれたことに感謝した。「勿論」と彼はそ

れから言った、「きっとまた取り戻すよ、ひょっとしたら今晚にもな」。

「ただね」と彼女は言って、そして初めてこだわった、「私どもは今日十二時半に戸籍係に行かなくちゃならない」。

「それで私は」と彼は素早く言った、「おまえの服を叔父さんの許、質に入れようと思う。――戸籍係の人はおまえを一人の重病人扱いで、ベッドでの入籍ができないだろうか」。

「でも重病人でも入籍費を払わなくちゃならないでしょう」と彼女は笑った、「死んでもただでは済まない知っているでしょう」。

「しかしひょっとしたら病人の場合まず後払いになるかもしれない」と彼は半ば笑いながら、半ば物思いに耽って、言った。「金がなくても、入籍は入籍だ」。

しばらく二人は黙っていた。古びた、陽光の上昇と共にますます暑くなる空気がほとんど掴める具合に室内にあって、肌を感じられるほどに乾いてきた。静寂の中、ブリキを打ち抜く物音が甲高くなって、突然、ドアの前で隣人の女性とおしゃべりするトゥーマン夫人の喚くような、泣くような声が聞こえてきた。家の過剰な人間蜂の巣が、多くの声と共に、ぶんぶん言い、金切り声を上げ、歌い、カタカタ言い、叫び、泣いた。

「あなたは私と結婚する必要はないのよ」と娘は突然決然として言った。間を置いてから、「あなたほど私のために尽くしてくれた人はいなかった」。

彼は少しばかり当惑して脇を向いた。陽を受けて輝いている窓は白い熾きとなって燃え上がった。一体私は彼女のために何をしたか、彼は当惑して考えた。ナイフとフォークの持ち方、――それに正しいドイツ語を教えた。

彼は頭を向けて、彼女を見つめた。彼女は更に何か言おうとしたが、唇がびくついた。嗚咽と戦っているようであった。彼は自分を見つめている暗い視線にとても熱いものを感じて、むしろ目を背けたかった。

そのときすでに彼女は言葉を発していた。彼女は言った、「あなたがただ義務感から私と結婚するのだったら、私は嫌よ」。

彼はゆっくりと否定して、頭を振った。

「あるいは母親に対する反抗心から結婚するのも」と彼女は続けた、「あるいは私が喜ぶと思って結婚するのも嫌よ」。

彼は更に否認して行った。

(しかし彼女は何故我々が結婚するのか分かっているのだろうか、と彼は不思議に、我を忘れて考えた)。

「でも私はいつも思っているの、あなたも結婚を欲するのは、私ども二人が相性がいいと感じているからだ、と」と彼女は突然言った。彼女はそれを吐き出して、今や両目に涙が浮かんでいた。今や、最も難しいことを述べたかのように、彼女はより自在に話せた。「ねえ、ヴォルフ、愛しい人、そうでなくて、あなたが別の理由から結婚するのだったら、止めて、お願いだから、止めて。止めても私は辛い。あなたが」と彼女は素早く言った、「私と結婚しても、全く相性がなかったら、これほど辛いものはないわ」。

彼女は彼を見つめた。突然彼女は微笑し始めた。彼女の両目にはまだ涙があった。「ご承知のように、私はレーディヒ[独身]と言うの。ずっとレーディヒと呼ばれて来た。――あなたはいつもこの名前には納得していた、ただペートルの名はあなたには余りに石ば

かったのよね」。

「いや、ペートラ、ペーター、ペーター・レディヒよ」と彼は叫んだ、彼の孤独な利己心の洞穴の中で彼女の謙譲な愛らしさに幾らか圧倒されていた。「何について話しているのだい」。彼は彼女を捉え、彼の腕の中に抱き、子供のように彼女を揺すって、笑いながら言った。「我々は戸籍係手数料の金がないのだ。それなのにこんな難解な話しをして」。

「その話しをする必要はないのかしら」と彼女はより小声で言って、頭を彼の胸に隠した、「あなた自身そのことは、いつも、毎日、毎時間黙っているから、 — 私は話す必要はないのかしら、 — あなたが今このときのように私を両腕に抱いて、今のように接吻してくれるときでさえ、あなたは全く私から遠く離れている、 — すべてから遠く離れているとよく私は考えるの」。

「でも今、おまえは賭けのことを話しているのだろう」と彼は言って、彼女に対する力を弱めた。

「違うわ、賭けのことは話していない」と彼女は素早く否認して、一層固く彼に寄り添った。「それともひょっとしたら賭けのことかもしれない。あなたは知っているに違いないだろうけど、私にはあなたがどこにいて、何を考えているのか分からないの。好きなだけ、賭けなさい。 — でも賭けをしていないときは、少しばかりここにいてもいいのじゃないの。ねえ、ヴォルフィー」と彼女は言った。今や彼女は彼から滑り出ていたが、彼の両腕を肘の上に持っていて、彼をしっかりと見つめた。「あなたはいつも考えている、金のことで詫びなければならぬとか、私に釈明しなければならぬ、と。 — 何も釈明することないわ。詫びる必要はないのよ。私どもの相性が良ければ、万事は正しい。相性がなければ、すべては間違い、 — 金があろうと、なかろうと、結婚[入籍]しようとしまいと」。

彼女は期待一杯に彼を見つめた。彼女は一言を彼に望んだ。いやただ正しく彼が彼女を両腕に引き寄せさえすれば、きっと相性を感じたことだろう。

彼女は私に何を望んでいるのか、彼は彼女の話しについて考えていた。しかし彼は彼女の欲していることを良く知っていた。彼女は一切を彼の手に委ねていた。以前から、かの最初の朝、一緒に行っていいか彼に尋ねた朝から委ねていた。彼女に残っているものは何もなかった。今、彼女は、彼女に一度、ほんの一度彼の暗い、遠くにある心を打ち明けるよう頼んでいる。...

しかし私はどうしたらいいのだろう、と彼は自問した。どうしよう。閃光のように気が楽になった。自分が分からないのは、彼女の言い分が正しいせいだろう。私は彼女を愛していないのだ。ただ結婚しようと思っているだけだ。自分が昨日、と彼は更に急いで考えた、ゼロに賭けさえしなかったら、戸籍係の金は残っていたことだろう。このような議論も生じなかったろう。勿論今は、こう分かったからには、我々は結婚しないのが、より正しいことだろう。しかしどのようにしてこのことを言ったらいいか。もはや後戻りはできない。彼女は相変わらず見つめている。何と言ったらいいだろう。

静寂は二人の間で重苦しいものとなった。彼女はまだ彼の腕を持っていた。ただ緩く持っていて、持っていることを忘れていたかのようであった。彼は咳払いした。「ペーター、...」と彼は始めた。

そのとき廊下のドアが動いて、トゥーマン夫人のすり足が聞こえてきた。

「急いで、ヴォルフ、ドアを閉めて」とペートラは素早く言った、「トゥーマン夫人が来る。今あの人は必要ないわ」。

彼女は彼を放した。彼は廊下へ向かった。しかし部屋のドアを掴む前に、すでに家主の夫人が目に入った。

「まだ待っているの」と夫人は尋ねた、「もう言ったでしょう。コーヒーは現金がなければ、駄目です」。

「トゥーマン夫人、お聞きください」とヴォルフは素早く言った、「私はコーヒーは要りません。私は早速私どもの質草を持って叔父さんの所へ行きます。その間ペートラにシュリッペ[パン]とコーヒーをください。彼女半ば飢えています」。

彼の背後で物音はしなかった。

「そして金をもってすぐに貴女の許に来て、すべてを支払います。ただ私の分、つまりグルーネヴァルトへ向かい車賃を残して支払います。そこに一人の友人が、軍隊以来の友がいます。ツェッケと言って、フォン・ツェッケ、彼からきつと若干の金を借りて、...」。

彼は今や敢えて部屋に視線を向けた。音もなくペートラはベッドに座っていて、頭を垂れていた。彼女の顔は見えなかった。

「そうですか」とトゥーマン夫人は、半ば問うように、半ば脅すように答えた。「娘さんの朝食は用意しましょう。ー 今日明日もね。でも結婚式はどうなったの」。彼女は、無様な形の流れるような衣服を着ていて、垂れた手におまるを持って立っていて、ー そのように立っていると、今や彼女は勿論、すべての結婚式や長い人生の市民生活確立への意欲をどの人に対しても萎えさせることが出来たであろう。

「ほう」とヴォルフは軽く言って、瞬時にまた気を取り戻した。「ペーターへの朝食が問題ないのであれば、結婚式も問題ありません」。

彼は素早く娘の方を見た。しかしペーターはまだ先と同様に座っていた。「質屋じゃ並ばなきゃならないだろうし、グルーネヴァルトは遠いね」とトゥーマン夫人は言った、「いつも結婚式と聞くけど、本当かね」。

「本当ですよ」とペートラは突然言って、立ち上がった、「本当にしていいですよ、トゥーマン夫人、金のことも、結婚式のことも、両方とも。ー ねえ、ヴォルフ、質草を積みましょう。また小さなスーツケースに入れて、そうしたらあの人は一にらみすればいいだけでしょ。ほら、全部また入れた。すぐにあの人なら分かるわ」。そして彼女は彼に微笑みかけた。

トゥーマン夫人は二人へそれぞれ観察しながら、頭をゆっくりと、老いた、聡い鳥のように向けた。ヴォルフはとても気楽になって叫んだ、「いや、ペーター、おまえはいつも素敵だ。ひよっとしたら本当に十二時半までにできよう。ツェッケに会いさえすれば、彼はきつと私に車に乗れるような金を十分に貸してくれよう。...」

「確かにね」とペートラの代わりにトゥーマン夫人が言った、「そしたらベッドから娘さんは出てきて、一緒に戸籍係へ走るんだろう。殿方のコートを着て、その下は何も着ていない今のままの姿でね。見ものだね」。彼女は毒々しく目を輝かせた。「そんなのを聞くのは飽き飽きしたね。もっと悪いことに、殿方のそんな戯言を信じてしまう阿呆な鷺鳥どもが絶えやしないということだね。それでこの娘さんときたら、この後ずっと台所に座って、私の手伝いをする振りをするけどね。でも手伝う気はないのよ、毛頭。ただ台所の

時計だけを見ているね。そして十二時半になったら、きっかり言うのよ。あの人が帰って来たと思うの、トゥーマン夫人、と。 — いや、全然帰って来ないね。多分丁度そのときは、立派なお友達の所に座り込んで、とても心地良げに一杯飲んでいるか、一本煙草を吸っているのよね。それで何を考えているかと言うと、毎日結婚式[入籍]はあることだし、だね。そして今日出来ないことは、明日する必要は全くないのだね」。

そう言ってトゥーマン夫人はヴォルフガングに抹殺する視線を送り、ペートラに軽蔑しながら同情する視線を送って、おまるを持って、結論として同時に感嘆符と疑問符となるささやかな動作をして、ドアを閉めた。しかし兩人はかなり当惑して立っていて、互に見つめる勇気がなかった。というのはどのように家主の夫人の言葉の渦を考えようと、それは快適なものではなかったからである。

しかし結局ペートラは言った、「気にしないで、ヴォルフガング。あの夫人や他の皆は好きなように言えばいいのよ。だからといって何も変わらない。先ほど私は泣きそうになったけど、忘れてね。時に全く独りぼっちの気分がするの。そしたら恐くなって、慰めを聞きたくなるの」。

「で、もう独りぼっちではないのかい、ペーター」と珍しく動揺してヴォルフガングは尋ねた。「今はもう慰めはいいのかい」。

「あら」と彼女は言って、困惑当惑して彼を見つめた、「あなたはだって、...」。

「しかし」と彼は突然迫った、「ひょっとしたらおまるマダムと言う通りかもしれない。十二時半に座って、考えているかも。結婚式は毎日あるわけだし、と。 — どう思うかい」。

「あなたを信じています」と彼女は叫んで、頭を上げ、大胆に彼を見つめた、「私がたとえあなたを信じなくても、何か変わるかしら。あなたを縛ることは出来ないし。結婚式か、あるいは出来ないか。 — あなたが私のこと好きなら、何でも構わない。あなたが私のこと好きでなかったら、...」と彼女は打ち切って、彼に微笑した。「で、急いで、ヴォルフ。叔父さんは十二時に昼休みを取るし、ひょっとしたら本当に大勢並んでいるかもしれない」。彼女は彼の手にはスーツケースを渡し、更に接吻をした。「頼むわね、ヴォルフ」。

彼は彼女にまだ何か言いたかったが、何も思い浮かばなかった。それで彼はスーツケースを取って、出て行った。

第三章 狩人と追われたもの達

17

検査官マイヤーは面識を得る

ノイローエの騎士領には小さな田畑検査官のマイヤー、黒人マイヤーという綽名の者が、午前の十一時から十二時の間、すでにとても疲れていて、短い上着とゲートルのまま、ベッドに寝て、翌朝まで眠っていたい按配であった。しかし彼はライ麦畑の縁に座っていて、二、三の松林で上手く視界を遮られて、長くて枯れた森の草の中、思わずうとうととしていた。

三時に起きて、家畜小屋の温かい靄の中（とても疲れて、いやはや疲れて）、餌を与え、餌やりを監視し、乳搾りを視察して、掃除を点検した。四時には菜種畑へ入った。菜種畑には、菜種の種がこぼれないよう、朝露の中、侵入しなければならない。六時四十五分に、立ったまま、コーヒーを飲み、何か食べ物を急いで喉に入れる（相変わらず疲れている）。七時からいつもの日中の仕事である。

するとライ麦畑から、二台の結束機が故障していると知らせが入った。鍛冶屋と急いで、機械を繕う。するとまだがたがた言いだし、今もがたがた言っている。ー いや、何と疲れたことか。今や昨日からの疲れが残っているばかりでなく、すでに今日の分の疲れが出ている。いや、今はここで、日焼けしながら、眠り込みたいところだ。しかし十二時前に今一度砂糖大根の畑へ行って、代官のコヴァレフスキーがその一団と共にやはりきちんと耕しているか、手を抜いていないか確認しなければならない。...

マイヤーの自転車は数歩離れた松林保護区の周りの通りの溝にあった。しかし今彼は大層大儀で、更に乗って行けない。彼はただ出来ない。太った、羊毛の、少しばかり傷みのある塊のように、彼の全身に疲れが溜まっていた。殊に喉がひどかった。彼が全く静かに座っていると、疲れはある程度眠り込む。しかし一脚でも動かすと、すぐに剛毛のように引っ掻き、刺激した。

彼はゆっくりと一本の煙草に点火して、気持ちよく二、三回吸って、自分の埃っぽい古びた靴を見つめた。新しい靴が必要であった。しかし騎兵隊長は偉い男で、500,000マルクは田畑検査官にとっては前代未聞の額となっていた。しかしドルがまずどんな額になるか待っていようものなら、ひょっとしたら靴の底を付けることすら出来なくなろう。ノイローエの騎士領では多くが不足していよう。ー 少なくとも、まだ二人の役人の補充が必要だろう。しかし騎兵隊長は偉い男で、自分が一人で仕切ると言っている。ー とんでもないことだ。今日奴さんはベルリンへ、刈り手募集に行った。それでいずれにせよ哀れな検査官に対し、午前のうち寝を禁止できないわけだ。ー しかし奴さんが、どんな郎党を連れて来るか、興味があるな。そもそも連れてくるか、どうか。いや、くだらん。

マイヤーは仰向けになった。煙草はすっかり口の端に滑った。中折れ帽が熱い日差しに対し、目の上へ引き上げられた。...砂糖大根の女どもが、そのコヴァレフスキーと共に難儀な目に遭おうとも、構やしない。厚かましい一味だ。しかしコヴァレフスキーは良い娘を持っている。奴には信じられないほどだ。娘はまた澄まして休暇でベルリンから戻って

来よう。あの娘を可愛がってやろう。温かくなるし、熱くなるし、パン焼き窯の気分だ。雷雨にならなければいいが。来ると、穀物畑全体がびしょりだ。厄介なことになる。勿論今日畑に入らなければならないのだが、しかし騎兵隊長は偉い男だ。それに天気予報官でもある。雨は降らない、我々は入らない、アーメン。

有り難い。結束機はまだ動いている。それでまたここに寝ておれる。ただ眠り込んでいけな。そうしたら夕方前にまた目が覚めない。騎兵隊長がすぐに気付いて、明日外に投げ出されよう。その方がましかもしれない。少なくとも十分に眠り尽くせるだろうから。

いやさ、コヴァレフスキーの娘は悪くない。小娘はベルリンでも上手いことやっていることだろう。しかしアマンドは、アマンド・ボックスは本当に不可欠な娘だ。小さなマイヤー、黒人マイヤーは横向きになって、執拗な思いを追い払った、つまり騎兵隊長は、入るべきではないと言ったのではなく、天気と相談しながらやれとむしろ言っていたという思いである。

いや、今はそのことを考えたくない。自分はむしろアマンドのことを考えたい。何か元気が出て来る。彼は膝を引きつけて、満足してぶつぶつ言う物音を吐き出した。その際、煙草が口から外れた。しかし構わない。―― 煙草に何の用がある。自分にはアマンドがいる。いやさ、皆は自分のことを小さなマイヤー、黒人マイヤーと呼んでいる。自分が鏡を見ると、その通りと認めざるを得ない。丸く、大きな、ドーム状の眼鏡レンズの奥に丸く、大きな、黄色のフクロウの目があって、鼻は押し潰され、ソーセージの唇、額はほとんど二本指もないほどの狭さで、耳は立っている。―― その上マイヤーの全身は一メートル五十四なのである。

しかしそれがまさにいいのである。自分はとても頓狂に、禁制品に見え、醜くグロテスクで、その上とても厚かましく甘美な口を有していて、娘達は皆、彼に飛びついてくるのだ。彼女が昔女友達と一緒に彼の側を通り過ぎたとき、―― 彼はまだノイローエへ来たばかりであったが、―― その女友達が言った、「アマンド、彼に近づくには、段取りがあるからね」。するとアマンドが言った、「そんなのは構わない。とても接吻が上手いのだ」。―― それは彼女流の愛の告白だった。ここいらの娘どもはそんなものだ。厚かましく、天上的に無造作だ。娘達は一人の男に食欲があるか、どうかだ。いずれにせよ、そのことでうるさく話さない。皆結構な娘だ。

アマンドが昨夜、彼の許へ窓から入ったとき、―― 元来彼はその気がなくて、余りに疲れていたが、―― 恵み深いご夫人が茂みから出て来た。(騎兵隊長の若いご夫人ではなく、このご夫人なら単に笑っていたろうが、このご夫人自身いかす人だ。いや、老夫人で、姑の、宮殿からのご夫人)。他の娘なら皆、金切り声を上げたり、隠れたり、彼の助けを求めていたことだろうが、アマンドはそうしない。彼は全く第三者として留まって、楽しむことができた。「いや、恵み深い奥様」とアマンドは全く無邪気に言った。「私は検査官の許にただ家禽の数の勘定に来たのです。日中彼は暇がありませんので」。

「それで窓から入ったの」といとも敬虔な恵み深い老夫人は金切り声を上げた。「恥知らずですよ」。

「家はもう閉まっていたのです」とアマンドは答えた。

そして恵み深いご夫人が相変わらず、飽きもせず、自分が今日日の若者に対して太刀打ちできない、敬虔さを持ってしても、厳格さを持ってしてもできないと察せずに行ったとき、

彼女はこう言い放った。「ちなみに今は仕事仕舞いの時間です、奥方様。私が仕事仕舞いの後、何をするかは、私の自由です。それに奥方様が（このような安い給金で）私よりましな家禽用小間使いを見いだされるのであれば、 — いないでしょうが — 私は去りましょう、でも明日以降です」。

それに彼女は彼が窓を閉めないことを頑固に望んでいた。「あの人が近寄って、聞き耳を立てたいのであれば、ハンス、そうすればいい。構わないわ。あの人にとってはひょっとしたら、楽しいのかも。 — お祈りで娘さんを授かったのではないでしょう」。

小さなマイヤーは思わず元気になって、忍び笑いをし、頬を一層固く腕に押し当てた。あたかも彼のアマンドの柔らかくて、しかも固い体を感じている按配であった。このような娘は彼のような無一文の独身者にはまさにお誂えであった。愛とか誠実、結婚について喋々せず、しかし常に上機嫌で、仕事が堅く、口が堅い。いかす、時に身震いするほど、いかす女だ。しかしどのような育ちをしたか考えれば不思議なことではない。四年の戦争と五年の戦後を経ている。それで。

「自分で食い物を調達しなかったら、何も食べられないのよね。私があなをぶたないときは、私をぶてばいいのよ。青年よ、いつも刃向かえ、老いたレディーに対しても。何も問題ない。あの人はいい思いをした。 — 私はいい思いをしてはいけないのかしら。間抜けな戦争やインフレがあるからといって。笑ってしまうわ。私は私。私がもはやいなくなったら、誰ももういない。私が健気な娘だったと墓場で泣いて貰う涙と引き換えに（ただの無理した涙だし）、私の蛆の棺に置くブリキの花輪と引き換えに、私は何も買えやしない。だからむしろ今日を楽しみましょう、ね、ハンス君。老いたレディーに同情して、少し優しい気分になっているの？ あのね、誰が私に同情してくれた？ いつも張り飛ばされて、鼻血を出して、それでお仕舞い。ほんの少しでも喚こうものなら、すぐにこう言われた。いい加減に黙れ、もっとひどい目に遭うぞ、と。そうよ、ハンス君、意味があったら、言わないわ。意味なんかないのよ。卵を産んで私どもを喜ばせる雌鶏のように阿呆なこと。結局はシチュー鍋に入れられてね。 — 私はいいの、いえ、有り難う。あなたが好きなら、どうぞ。私はいいの」。

「あの娘の言う通りだな」と小さなマイヤーは今一度笑って、すでに深い眠りに陥った。そして今や本当に夜露のときにまで、 — 農作業も、騎兵隊長もどうでも良くなって、 — 突然余りに暑くなって、とりわけ息苦しくなってしまうのでなければ、寝過ごしていたことだろう。

飛び起きながら、 — もはや疲れを見せずに、一気に、即座に両脚で立って、 — 彼は自分が極めて素敵な山火事の端緒に寝ていると察した。彼は、白く、低く侵食して来る煙りの中、一人の姿が飛び込み、踏み付け、叩くのを見た。早速彼自身一緒に飛び込み、炎の中やはり踏み付け、唐檜の枝で叩きながら、この相手に呼びかけた。「結構に燃えている」。

「煙草のせいだ」とこの男はただ言って、更に消し続けた。

「私も一緒に燃えるところだった」とマイヤーは笑った。

「それも悪くはない」と相手は言った。

「言うなあ」と煙りで咳き込みながら、マイヤーは叫んだ。

「黙っておれ、いいか」と相手は命じた、「煙中毒はこたえるぞ」。

今や両人は力尽くで、消し続けた。黒人マイヤーはその際向こうの両結束機に、更に働き続けているか、注意して聞き耳を立てた。人々が何か気付いて、騎兵隊長に告げ口したら、全く面白くないことであつたらうからである。

しかし両機械は全く予想に反して、平静に進行し、刈り取っていた。これはこれでまた検査官にとっては苛立たしいことに違いなかつたらう。というのは、奴等は座席でうたた寝をしており、馬どもに仕事ばかりでなく、分別をも任せていること、そしてノイローエの騎士領全体がすべての建物と八千モルゲンの森と共に焼け落ちて構わないことを証していたからである。一 奴等は灰となった馬小屋を、仕事から帰ったとき、あたかも魔法に出会ったかのように、見つめるのではあるまいか。しかし今回マイヤーは立腹しなかつた。更にガタガタ働き続けていること、そして減少して行く煙りのことを喜んだ。結局彼と彼の救助者は部屋ほどの広さの黒い斑点の上で向かい合うことになった。少しばかり息を切らして、煤けて、互いに見つめ合った。救助者は少しばかり野蛮に見えた。確かにまだ若かったが、しかし鼻と顎の周りに赤い髭をひらひらなびかせて、まことに強力に覗き込む青い目をしていて、古く灰色の兵士の上着に、同様のズボンを着て、腹の周りに立派な黄色の革ベルトと、同じように立派な黄色の革のピストルケースを有していた。この中には何かが入っているに違いなかつた、つまりピストルケースの中で、甘いボンボンばかりでなく、重たげにそれは下がっていた。

「煙草はいかがです」と懲りないおっちょこちょいのマイヤーは相手に尋ね、彼のケースを差し出した。救助者に何かしなければならぬと思ったからである。

「戦友、貰おう」と相手は言った、「私の手は汚れている」。

「私のものだ」とマイヤーは笑った。しかし彼は二本の指先で掴み、早速煙草に火が点されて、両人は焼けた箇所から少しばかり離れた、わずかな松影の中、乾いた草の上に上手く腰を下ろした。しかし体験からまさに心得て、一方は古い松の切り株を、もう一方は平らな石を灰皿として使用していた。

灰色の地の服の男は、数回深呼吸をして、背伸びし、遠慮なくあくびして、二、三の低いアーの音を出して、意味深く、「ヤー、...ヤー...」と言った。

「まあまあ、かな」と検査官マイヤーは同意した。

「まあまあ、だと。最悪だ」と相手は言って、目を細めて、今一度暑く燃えている風景を点検し、仰向けに草の中へ落ちた。見たところ、とても退屈していた。

元来マイヤーは、更に午前のうたた寝の付き合いをする気も時間もなかつた。しかしこの男の隣りでしばらく過ごす責務を感じていた。それで会話を全く途切れさせないよう、こう述べた。「暑くないかい」。

彼はただぶつぶつ言った。

マイヤーは彼を吟味しながら側面から見つめていて、察した、「バルト三国軍からですか」。

しかし今度はぶつぶつの返事すらなかつた。その代わり松林がざわめいた。マイヤーの自転車を押しながら、森林官のクニブッシュが現れた。白髭で、しかし禿頭、マイヤーの足許に自転車を投げて、汗を拭きながら、言った。「おい、マイヤー、また自転車を公道に放置していたな。これはおまえの自転車ではないぞ。公用自転車だ。なくしてみろ、騎兵隊長が荒れるぞ、それでおまえは、...」。

しかしそれから森林官は黒く焼けた地点を見つけて、即刻怒りの朱が点火され、(というのは同僚の役人に対しては、薪窃盗犯の場合、命の危険があって出来ないようなことも出来たからである)、罵り始めた。「忌々しいシラミ野郎だ。また臭い安煙草を吸って、わしの森に火を点けたのか。待て、優男よ、もはや仲間だとか、夕方のスカート[トランプ]遊びの連れと言ってはおれん。ー 仕事は仕事だ。今晚騎兵隊長の耳に入ったら、...」。

しかし今度は森林官クニブッシュは文を最後まで述べられない定めであった。というのは、今や、見たところ眠っている、極めて怪しげな、だらしない灰色地の男が草むらにいてのを見つけて、こう言ったからである。「放浪者、森の放火犯を捕らえたのか、マイヤー。でかした。騎兵隊長からお褒めの言葉を頂くぞ。しばらくは、手ぬるいとか、放置とか、郎党恐怖という小言は消えるな。ー 目を覚ませ、豚野郎」と森林官は叫んで、足でこの男の肋骨を強く蹴った。「起きろ、すぐに監獄だ」。

しかしこの蹴られた男は単に戦闘帽を顔から上げて、憤然とした男に鋭い視線を送って、更に鋭い声で言った。「森林官クニブッシュか」。

黒人マイヤーにとっては、この単なる名前の呼びかけが、このスカート仲間、おとなしい、臆病兎のクニブッシュに何という効果をもたらしたか見るのは、とても驚くべきことで、それ以上に面白いことであった。この男は雷に打たれたかのように文字通り縮み上がって、すべての悪態は消え去り、瀕死の直立不動で言った。「少尉殿」。

相手はゆっくりと体を伸ばし、乾いた茎や小枝を上着とズボンから払って、言った。「今晚十時に村長の許に集合だ。人々に知らせるのだ。ここの小さな奴も連れて来い」。彼は立ち上がって、ベルトを動かし、更に言った。「それに武器がノイローエで幾つ手に入るか、使用可能な武器と弾薬を、これも報告するのだ。分かったな」。

「畏まりました、少尉殿」とひげ面の老公はどもって言った。しかしマイヤーは、彼が一撃を食らっているのに気付いた。

しかし正体の分からぬ男は手短かにマイヤーに頷いて、言った。「万事異常なしだ、戦友」。そして茂みへ、松林へ、松の枝へ、森へ消えた。ー 夢のように消えた。

「たまげた」とマイヤーは少しばかり、息を失って、言い、緑の方を見つめた。しかし緑はすでにもう動かず、昼の輝きがきらめいた。

「いや、たまげたと言ったな、マイヤー」と森林官は毒づき始めた、「しかし私は今日の午後、村中を駆けなければならん。皆に都合がいいのか、さっぱり分からん。中には顔をしかめて、こう言うものがある。すべてくだらん、と。奴等はカップ[の一揆、1920]でもう飽き飽きなのだ。ー しかし」と森林官は更に情けないと思える調子で続けた、「おまえは彼のやり方を見ていたろう。面と向かって、彼に誰も言う勇氣はない。彼が口笛を吹くと、皆がやって来る。ただ私はいつも人の文句を聞かされるのだ」。

「彼は一体誰なのだ」と好奇心を起こしてマイヤーは尋ねた、「少しも偉そうに見えないぞ」。

「彼が誰だと」と苛立たしく反論して森林官は叫んだ、「彼が何と名乗るか全くどうでもいいのだ。彼の本当の名前は我々に決して言わんだらう。彼はまさに少尉で、...」。

「少尉は今日日、もはやそんなに大層なものではない」とマイヤーは言ったが、彼が森林官をどやしつける様に畏敬の念を抱いていた。

「少尉が偉いか、偉くないか、分からん」と森林官はつぶやいた、「いずれにせよ、人々は彼の言うことを聞くのだ。そして、…」と彼は神秘めかして続けた、「きっと奴等は大事[おおごと]を計画している。そしてそれが上手く行くと、エーベルトと赤い連中の一味がお仕舞いだ」。

「そうか」とマイヤーは言った、「すでに何人もがそう練っていた。赤は洗っても落ちない色に見えるな。簡単には掻き落とせそうにないぞ」。

「今回は消せる」と森林官は囁いた、「帝国国防軍を背後に持っているようだ。奴等は自らを黒い帝国国防軍と称している。辺り一帯が奴等で一杯だ。バルト三国、上部シュレーゲン、ルール地方からもな。奴等は作業班と呼ばれていて、軍は持たないとされている。しかしおまえは自ら見たり聞いたりしたろう、…」。

「それでは一揆だな」とマイヤーは言った、「私も参加しろと言うのか。まずはじっくり考えてみなければならない。ある者がただ、万事異常なし、戦友と言ったからと言って、一 いやだからといってそうは行かない」。

森林官はすでに先へ及んでいた。彼は憂慮して考え込んでいた。「老領主殿は四丁の散弾銃と二丁の三連銃を有する。それに猟銃、騎兵隊長は、…」。

「その通り」とマイヤーは言った、突然気楽になっていた、「騎兵隊長の立場はどうなのだ。それとも彼はそのことについて何も知らないのか」。

「それが分かれば苦労しない」と森林官は嘆いて、言った。「しかし皆目分からんのだ。すでに至る所で尋ねたのだ。オスターデへ騎兵隊長は出掛けて、時に帝国国防軍の将校達と酒を飲んでいる。ひょっとしたら、我々はまずいことになって、この件が上手く行かず、私は職を失うかもしれない。そして晩年を刑務所で終えるかもしれない、…」。

「まあ、泣くなよ、セイウチの御老体」とマイヤーは笑った、「その件は全く単純だ。ただ騎兵隊長に、我々と一緒に行動する気があるかどうか尋ねればいだろう」。

「何ということ」と森林官は叫んで、本当に両手を絶望して、頭上で打ち合わせた。「おまえは本当にこの世で最大のおっちょこちょいだな、マイヤー。騎兵隊長は、つまり、この件全体何も知らないのだ。奴等のことを彼にばらしてみろ。新聞を読んで知っているだろう。密告者はフェーメ[秘密裁判]にかけられる、と。それで私は、…」と彼は突然思いついた。天は真っ黒になり、すべての肌が鳥肌立って、彼の腕は凍った。…「羊頭のわしはおまえにすべてをばらした。いや、マイヤー、私に好意を見せて、即刻誓ってくれ。誰にもこのことはばらさない、と。私もおまえが森に火を点けたとは騎兵隊長に言わないから、…」。

「まず第一に」とマイヤーは言った、「私は森に火を点けていない。少尉がしたことだ。」

一 少尉のことをばらしたら、どういうことになるか分かるな。第二に私が本当に火を点けたとしても、私も今晚十時に村長の許に行き、そこで黒い帝国国防軍の一員になるのだ。それで私をおまえがばらしたら、クニブッシュ、密告者は秘密裁判にかかると知っていよう、…」。

そしてマイヤーはにやりと笑って、森の区画線の真上に立って、おしゃべり女の臆病兎、クニブッシュを厚かましく挑発的に見つめた。この一揆話しの全体が更に全く結構なものにならなくても、これでこの情けないはさみむし野郎は片付けられると彼は考えた、

一 奴は金輪際老領主殿や騎兵隊長に私のことで口だしはしまい。

彼に向かい合って老森林官のクニーブッシュは立っていた。彼の顔は交互に赤くなったり青くなったりした。こう考えたかもしれない。今や、四十年間の奉公で、紐に掛けられたり、紐で絞められたりしてきて、やっと落ち着くだろうと思っていた。いや、違う、ますます悪くなる。今、夜、何か起きたと不安に思って、眠りから飛び起きても、何も生じていなかった。以前の不安は、単に材木の数勘定と、果たして本当に合計が合っているかの不安だった。それに雄山羊が、老領主殿が待場で構えているとき、いつものように獣道を行ってくれるかどうかだった。

しかし、今、夜、暗闇の中にいると、心臓がますますひどく動悸する。薪泥棒に少尉ども。これらの下輩が今や更に厚かましくなって、一揆になるそうだ。...結局、ムシヨに入ることになる。帝国大統領には何の異存もないのに。...

しかし大きな声で彼は言った。「マイヤー、我々は同僚だ。楽しいスカート遊び何度かした。私はまだ一度もおまえのことで騎兵隊長殿に注進したことはない。森の火事の話は、とっさに怒って発したことにすぎない。おまえのことはばらさないよ、勿論」。

「勿論そうこなくちゃ」とマイヤーは言って、厚かましくにやりと笑った、「まもなく十二時だ。もはや砂糖大根の所へは行けない。しかし餌やりに行かねばならない。だから私は自転車に乗る。おまえさんは後から駆けて来な、クニーブッシュ。構わないだろう」。

そう言って、マイヤーはすでに自転車にまたがって、漕いだ。出発の時、彼は今一度叫んだ、「戦友、万事異常なし」。そして彼は去った。

森林官は彼を凝視して見送った。そして悲しげに頭を振って、考えた。むしろ大きな通りよりは杉道を通って森林官地に帰ろう、と。通りではひよっとしたら薪泥棒に出会うかもしれない、それは辛いことだ、一 森林官にとっては。

18

質屋訪問

質屋の親父、叔父さんは、高い帳場の椅子に座って、帳簿に記入していた。一人の店員が小声で二人の女性と交渉していた。女性の一人は、シーツに入った羽布団の束を持っていた。別の女性は黒いマネキン人形、裁縫の女性達が使用するものを握っていた。二人の女性とも鋭い顔つきで、稀にしか質屋を利用しない女性達のことさらに無造作な視線をしていた。

質屋そのものは繁盛する建物の中二階にあって、だだっ広い所であったが、いつものように汚れて、埃っぽく、雑然と見えた。窓の白い乳白ガラスを通じて来る光は灰色で死滅していた。いつものように巨大な金庫が広く開けられて、白い紙に包まれた小袋の小さな重なりが見えた、高価な宝石が入っていると思われた。いつものように、質屋の現金在高の入っている壁の中の小さな金庫には鍵が差し込まれていた。

ヴォルフガングはこうした一切を一瞥で察した。何十回も通って、馴染んでいて、よく見なくても分かった。叔父さんがその細い金縁眼鏡越しに彼をさっと見て、それから記入し続けることもいつものことであった。

ヴォルフガング・パーゲルも、マネキン人形を入質しようとしている夫人と見たところ、折り合いが付かないでいる店員に向かって、テーブルの上にスーツケースを持ち上げて、

小声で軽く言った、「またいつものものを持って来た。調べたいなら、どうぞ、...」。

そして彼はスーツケースの錠を開けた。

実際すべていつもの通りであった。二人の所有するすべてである。彼の二本目の、座部のすでに薄くなったズボン、二枚の白い紳士用シャツ。ペートルアの三枚のドレス。彼女の下着（わずかな数のもの） — そして立派な品物、 — 本物の銀製ハンドバッグ、恐らく彼女の崇拝者からの贈り物であろうが、 — 彼は尋ねたことがなかった。

「いつものように三ドルでどうです」と彼は更に言った、店員がその品をためらいがちに見ているように思われたので、ただ言葉を添えたのである。

すると店員は早速言った、「いいですよ、少尉殿」。

すべて異常なしと思われたとき、全く思いがけず帳場の椅子から高い声が叫んだ、「駄目です」。

ここでは単に少尉と呼ばれているヴォルフガングと、店員は、びっくりして見上げた。

「駄目です」と叔父さんは今一度威勢良く頭を振った、「残念ですが、少尉殿、今回はそう行きません。私どもに甲斐のないことです。貴方はいつも翌日にはまた請け出される。すべて面倒なことです。 — それにです、これらのドレスはもう時代遅れです。 — ひょっとしたら、別な折、 — 何かもっと流行に合ったものならば、またいいでしょう」。

叔父さんはパーゲルを今一度見つめ、ペンでもってその先を彼に向けた。そのようにヴォルフには見えた、そして更に書き続けた。店員はゆっくりと、見上げずに、スーツケースの蓋を閉めて、錠をぱちんと嵌めた。両夫人は当惑してヴォルフガングを見ていたが、少しばかり他人の不幸を喜ぶ風であった。生徒達が失敗した同級生が先生に叱られるのを脇から見つめている感じであった。

「フェルトさん、まあお聞きください」とパーゲルは威勢良く言って、質屋を横切って、静かに書き続けている主人に向かって行った。「西の方に豊かな友が一人いるのです。きっと助けてくれます。車代をください。私は品をここに置いて行きます。今晚店が閉まる前にも戻って来て、金を返しましょう、五倍でも構いません、あるいは十倍でも」。

叔父さんはヴォルフガングを眼鏡越しに思案して見つめ、額に皺寄せて、言った。「残念です、少尉どの。私どもはここでは貸付をしません。ただ担保貸しです」。

「しかしほんの数千マルクのわずかな車代ですよ」とヴォルフはこだわった、「品をここに置いておきますから」。

「担保なしに品を受け取れません」と質屋は言った、「その品を担保とはしたくないのです、残念です、少尉殿」。

彼はヴォルフガングを今一度、額に皺寄せて、見つめた。自分の言葉の効果を彼の額から読み取ろうという風で、それから軽く頷いて、自分の帳簿に戻った。ヴォルフガングも額に皺寄せた。しかし彼は記入している者に軽く頷いて、自分がその拒絶に切れていないことを示して、ドアに体を向けた。突然彼は何かを思い付いた。彼は素早く向きを変えて、今一度フェルト氏に向かって行き、言った。「あのですね、フェルトさん。私のがらくた全体を買い上げてください。三ドルで。すると一安心です」。金持ちのツエツケが彼にかなりの額を貸して助けてくれるであろうとひらめいた。全く新しい嫁入り支度でペーターをびっくりさせるのはとても楽しいことだろう。古いガラクタに何の用がある。いや、この屑さらばだ。

フェルトは更にしばらく書き続けていた。それからペンを壺に差し込み、少しばかり後ろにもたれて、言った。「スーツケースは一ドルです、少尉殿、申したように、その品は
一 流行ではありません」。彼の視線は壁時計に落ちた。十二時十分前であった。「昨日のドル相場となります」。

一瞬ヴォルフガングは立腹しそうになった。世にも破廉恥な詐取である。一瞬ヴォルフガングは軽く激した、あたかもペーターのことも考えなければならぬかのように、軽く激した。一 下着と彼のとても古い夏の上着だけしか目下彼女は有しないのである。しかし同じように速やかにこう考えた。ツェッケが彼に金を貸す。彼が貸してくれなくても、少なくとも金が手に入る。一 彼は素早く手を動かして、言った。ほとんど気にして見ないと思わせるものであった。「分かった、了解。金を頂こう。414000マルクだ」。

昨夜ほとんど三千万マルクをゼロに賭けてすったことを思い出すと、それは本当にはした金であった。このようなはした金に苦心している、このような笑うべき額に苦心しているフェルトのような微生物に笑わざるを得なかった。

叔父さん、意地悪で、タフな叔父さん、この微生物は、ゆっくりと自分の帳場椅子から下りて、金庫へ行き、しばらく中をかき回して、それからヴォルフガングに400000マルクを数え上げた。

「まだ14000マルク足りない」とヴォルフガングは言った。

「四%の割引が現金払いのとき、商習慣です」とフェルト氏は言った。「本来398000マルクになるのです。2000マルクはお馴染みさんですから、差し上げます」。

ヴォルフガングは笑った、「叔父さん、しっかりしていますね。きっと一廉の者になりましょう。そうなったら、私は貴方の許で運転手になりましょう」。

フェルト氏はそれを真面目に受け取った。彼は抗議した。「少尉殿、貴方の運転では乗りません。いいえ、ただであっても御免です。貴方は何も大事になさらない。自分の品でさえそうです。いや、御免です、...」。そしてまたすっかり質屋になった、「それではまた御用の節は、少尉殿、ではまたご鼻眞に」。

パーゲルは商人ゲオルク・ギーセの立派なホルバインの手になる肖像画の紙幣を
一 この商人も自分の姿の乱用に抵抗する術を知らなかったのであるが、
一 手の中でパリパリ言わせて、笑いながら言った。「ひょっとしたらこれで自家用車が手に入るかもしれない」。

質屋の主人は案じたままの表情で、書いていた。笑いながらヴォルフガングは通りに出た。

19

騎兵隊長は戦友に出会う

刈り手斡旋所での反吐の出る交渉の後、フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、少しばかりリラックスするに値すると感じた。しかしこんな早朝どこに行こうか。この時間帯に、騎兵隊長は、これまでベルリンにほとんどまだ来たことがなかった。結局フリードリヒ街のホテルのカフェが思い浮かんだ。そこで快適に座って、ひょっとしたら、二、三の身なりのいい夫人を眺められるかもしれない。

騎兵隊長がホテルのホールで会う最初の人間は勿論知人であった。(ブラックヴィッツは「彼の」一帯で、一 勿論それはシュレージエン駅ではないが、一 いつも諸々の知人と出会った。連隊の戦友であったり、親戚であったり、親戚の知人であったり、連隊の戦友であったり、戦争時の戦友であったり、バルト三国軍の者であったり、シュネッフェルであったりした。これは以前の連隊用語で歩兵のことである。彼は世界中で、世界のすべてを知っていた)。

今回は実に連隊の戦友、フォン・シュトゥットマン中尉であった。

フォン・シュトゥットマン氏はホールの中に立っていた。非の打ち所のないフロックコートに、ぴかぴかの靴(こんな早朝に)。そして一瞬再会に少しばかりうろたえたように見えた。しかし騎兵隊長は二時間の待機時間の間の連れを見つけて、喜ぶ余り、このことに少しも気付いていなかった。

「シュトゥットマン懐かしい 一 ここで会えて、素晴らしい。二時間一緒におれるぞ。コーヒーをもう飲んだかい。私は丁度 一 二回目となるのだが。しかし一回目、シュレージエン駅のは勘定に入れない。ひどいものだった。我らが最後に会ったのは、いつだった。フランクフルトか、一 将校会するときか。まあ、どうでもいい。いずれにせよ、君に再会できて嬉しい。まあ、あそこでくつろぐことにしよう、よく思い出してみると、...」。

フォン・シュトゥットマン中尉はとても小声で、明確に、しかし若干ためらって言った。「嬉しいよ、ブラックヴィッツ、一 時間が許せばな、一 つまり私は、一 いやな、一 この店の応接課長なのだ。まずはまだ九時四十分の列車の客人に対して、...」。

「それはいかんな」と騎兵隊長は突然同じように小声で、全く悄然と言った、「インフレのせいか、こんな香具師は。まあ私も身に覚えがある」。

フォン・シュトゥットマンは、自分でもこの苦労は夙に昔のものであるかのように、悲しげに頷いた。長くて、滑らかな、精力的な顔を見ていると、ブラックヴィッツは、このシュトゥットマンの一級の鉄十字勲章を祝ったある晩のことを思い出した。それは一九一五年初頭のことで、実際に連隊が受けた最初の一級の鉄十字勲章であった。...彼は、笑って、陽気な、はしゃいだ、勿論八年若いこのシュトゥットマンの顔を思い出そうとした。しかしまさにこの男が言った。「分かった、守衛殿、すぐに、...」。彼は、遺憾そうな、慰謝する仕草で、フォン・ブラックヴィッツの方を向いて、それから埃っぽいグレーの絹のコートの太ったレディーに歩んで行った。「何でございましょう、恵み深いご夫人」。

一瞬騎兵隊長は、友人がそこに立ち、軽く前傾して、真面目な、しかし好意的表情で、レディーの激しく発する願い、あるいは苦情に耳を傾ける様を見つめた。すると深い悲しみの感情が湧いて来た。もっとましなことはないのか、と彼は自問した。何か羞恥心のような思いに襲われ、あたかも戦友の何か屈辱的なもの、恥辱的なものを目にしている気がした。彼は素早く向きを変えて、カフェーに入った。

ホテルのカフェーは、早朝、午前の静寂が見られた。これはただまずホテルの客人のみがいて、往来からの客がまだ入場しない時間にいつも感じられるものである。数人の客がペアあるいは個別に、遠く隔たって置かれているテーブルに着席していた。新聞をめくる音がし、あるペアが押さえた声で話っていた。洋銀のコーヒーポットが鈍く輝いていて、一本のスプーンがカップに当たって軋んだ。少し暇な給仕達は静かに持ち場に立っていた。一人の給仕が慎重に食器セットを数えて、無用の音を立てないよう気を配っていた。

騎兵隊長は素早く、気に入った席を見つけた。早速注文に従って出て来たコーヒーは結構なもので、シュトゥットマンに二、三の褒め言葉をかけようと思った。

しかしこの考えを早速また取り消した。彼が恥ずかしい思いをするだろうと彼は考えた。フォン・シュトゥットマン中尉と本当に出来立てのホテルのコーヒーとは。

騎兵隊長、何故またこの羞恥の思いが生ずるのか、シュトゥットマンが何か禁じられたこと、不作法なことをしているような思いがするのか、その理由を調べようとした。

これは他のすべての仕事と変わらない仕事ではないかと彼は不審に思った。ある仕事を別な仕事より低く見るような狭い料簡では、我々はもはやない。結局私といえども、単に義父の恩寵に与って、ノイローエにいるわけで、義父のために請負に励んでいるわけだ――大いに苦心して。だから理由は何だ。

突然彼は、シュトゥットマンはこの仕事を単に強制されてしているのであって、それが理由かもしれないと思った。確かに、自らに存在の権利を主張したければ、男は働かなければならない。しかし仕事の選択の際、自由意志がある。単に金のための厭わしい仕事は恥だ。――自分だったらこの仕事は選ばなかったであろう。シュトゥットマンは選択の余地がなかったのだ。

無益な憎悪の感情に騎兵隊長ヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツは襲われた。この町のどこかに一台の機械があって、――つまりただの機械で、人間ならば決してそのようなものに使役されてはならないのであろうが、――それが昼も夜も町や人々に紙幣を吐き出すのだ。皆はそれを「金」と呼んで、数字を印刷している。多くのゼロのある奇妙な滑らかな数字で、ますますゼロの桁が多くなる。たとえおまえが働いたとしても、さんざん苦勞して若干貯めたとしても、すでにすべてが無価値になったのだ、紙幣、紙幣――くだらん。

そしてこのくだらぬ金のために戦友シュトゥットマンはホテルのホールに立っていて、従僕さんをしている。よろしい、彼はそこに立って、従僕さんをする定めでよろしい、――しかしくだらん金のせいではいかん。痛々しく明確に騎兵隊長はまた、見たばかりの友人の好意的に真面目な表情を思い出した。

突然それは薄暗くなり、ゆっくりとまた一層明瞭になった。小さな菜種油のランタンが粗野な、切り揃えられていない天井の梁からぶら下がっていた。それは温かい赤い光を直接シュトゥットマンの顔に投げかけていた。――この顔は笑っていた、笑って。目は喜びに輝き、百もの小皺がその隅で撥ね、痙攣した。

この笑いには、生命の蘇生もあったと騎兵隊長の中である声が語った。

何でもないことで、ある待避壕でもある夜の思い出にすぎない。――どこだったろうか。ウクライナのどこかだ。そこは豊かな国で、カボチャやメロンが何百も畑に育っていた。彼らはこの潤沢なものを待避壕に取って来ていた、壁の棚に置いていた。彼らは眠っていた。一匹の鼠が（千匹もの鼠がいた）棚からカボチャを一つ突き落としたりした。それが眠っている者の頭に、睡眠者の顔に落ちた。睡眠者はぎゃっと叫んだ。更に回転して行くカボチャが音立てて行った。彼らは皆目覚めて、息もせず横になっていた。毛布をしっかりと掴んで、爆発の直撃を予期していた。死の不安の数秒であった。――生命がざわめき、今まだ私は生きている、何か甲斐のあることを考えることにしよう。妻に子供、娘のヴァイオ、私はまだ一五〇マルクポケットに有する。ワインの付けを払っておけば良かった。

金もなくなる。...

そのときフォン・シュトゥットマンの笑い声がした。カボチャだ、カボチャだ。

彼らは笑いに笑った。この笑い声には生命の蘇生もあった。小さなガイヤーは血の付いた鼻を拭って、やはり笑った。その通り、ガイヤーという名の男だ。彼はすぐその後戦死した。カボチャは戦争では例外だ。

しかしそれは昔の事実だ。本物の恐怖に、本物の危険、本物の勇気。震えて、しかしその後飛び起きて、単にカボチャに過ぎないと分かる。そしてまた笑い声。自分を笑い、恐怖を笑い、馬鹿げた人生を笑う。 — 通りを更に、存在しない点を見つめて、進んで行くのだ。しかし紙幣を吐き出すものに脅かされること、世界のゼロ増殖機に強制されること、 — これは恥辱だ。そうされる男は痛ましい。そうされる他人を眺めている男は痛ましい。

ブラックヴィッツは注意深く、友人を見つめていた。フォン・シュトゥットマンはすでにしばらく前に入って来て、しばらく慎重に食器セットを数えていた給仕人の話しに耳を傾けていた。この給仕人は今や興奮して何か述べていた。きっと誰か同僚の苦情であろう。ブラックヴィッツは自分の経験からこのような咎めるような熱いしゃべり方について知っていた。(ノイローエの彼の役人達もこれと変わりがない。永遠の口喧嘩、永遠の陰口である。先々ただ一人の役人を雇って、農場経営して行くのが最も好ましいであろう。少なくともこの種の憤りは免れる。しかし自分はまだ他に誰か雇わなければならないだろうと実際悟らざるを得ない。泥棒は増加している。マイヤーは対処できない。クニーブッシュは老いて、使いものにならない。いや、これは次回だ。今回はもはや時間がない。十二時にはシュレージエン駅に着いていなければならない)。

その給仕人は相変わらず話していた。燃えて炎を出す話しぶりであった。フォン・シュトゥットマンは、好意的に、注意深く耳を傾けて、時折短い言葉を挿んで、頷くこともし、頭を振った。もはや彼は生きていない、と騎兵隊長は決めつけた。燃え尽き、消え失せている。 — しかし突然びっくりして考えた。ひょっとしたら自分も燃え尽きて、消え失せていないか — 単に自分で気付いていないのではないか。

それから突然、 — 全く驚いたことに — シュトゥットマンが一言述べた。給仕人は全くうろたえて、すぐに打ち切った。シュトゥットマンは今一度彼に頷き、友人のテーブルに向かって来た。

「やれやれ」と彼は言って、腰を下ろし、 — 早速彼の顔はより生气のあるものとなった。「まあ三十分ほどの時間がある。何もその間に起きなければな」。彼はブラックヴィッツに威勢のいい微笑を送った。「しかしいつもよく何か起きるのだ」。

「仕事が多いのかい」とブラックヴィッツは、少しばかり当惑して尋ねた。

「いや、仕事なんて」とシュトゥットマンは短く答えた、「君が他人にここのエレベーター係や、給仕人や、守衛に尋ねたら、私には何の仕事もなく、ただ歩き回っていると話すだろう。しかし夕方にはヘトヘトになっている。丁度昔、我々が騎兵中隊の演習をして、老公がしごいていた時のような具合になる」。

「老公のような者が一人ここにもいるのかい」。

「一人なんて。十人、いや、十二人だ。総支配人、三人の支配人、四人の副支配人、三人の課長、二人の業務代理人」。

「いや、勘弁してくれ」。

「しかし、結局、そんなに悪くない。軍隊ととても似ている。命令と服従。 — 完璧な組織化だ、...」。

「しかしいずれにせよ民間人で、...」とフォン・ブラックヴィッツは憂わしげに言って、ノイローエのことを考えた。服従はとうにもはや命令に従うものではなかった。

「勿論だ」とシュトゥットマンも証した、「昔の軍隊より若干ルーズで、強制が若干弱い。それ故個々人にとってもっと難しいと言って良い。命令を下す者がいるが、その者が命令を下す権利があるのか、判然としない。全く明瞭には規定されていない権能なんだな、分かるかい」。

「軍隊でもそれは見られた」とブラックヴィッツは言った、「ある特別任務の将校の場合とかな」。

「確かにな。しかし全体に、驚くべき組織と言ってよい。模範的な巨大企業だ。例えば我らのシーツの棚とか見てみるといい。あるいはキッチン、あるいは購入規制。驚くべきものと言えよう」。

「それでは少しばかり楽しいのか」と騎兵隊長は慎重に尋ねた。

フォン・シュトゥットマンの快活さは消えた、「いや、楽しいなんて。そうだな、ひよっとしたら楽しいかもな。しかしそんなのは問題ではない、だろう。我々は生きなければならぬ、 — 何故かって、 — とにかく生き続けなければならない、ただ全く生き続けるのだ。時に別な風に考えるけれども」。

ブラックヴィッツは相手の翳りのある顔を吟味するように見た。いや何故その必要があると彼は咄嗟に考えて、少しばかり苛立った。そして唯一可能な説明を見だし、声高に尋ねた。「君は結婚したのか、子供がいるのか」。

「私がか」とシュトゥットマンははなはだ驚いて尋ねた、「いや、考えたことはない」。

「そうだな、勿論そうじゃない」と騎兵隊長は言って、少しばかり咎の意識が生じた。

「結局、それも考えられる。しかし実はそうではない」とフォン・シュトゥットマンは思いに耽って言った、「それに今日日、いや、マルクの価値が日々なくなって、はした金をかき集めるために苦労している今日日には無理だ、...」。

「金か、つまらん」と騎兵隊長は鋭く言った。

「いや、勿論」と小声でシュトゥットマンは答えた。「つまらんと君の言うことは分かる。君の先ほどの質問はとても良く分かった、あるいはむしろ君の考え方はよく分かる。何故私がこのような『つまらん』金のためにここで働いているのか、いやいや働いているのか、と君は言うのだろうが、...」。ブラックヴィッツは慌てて反論しようとした。「いや、話さなくていい、ブラックヴィッツ」とフォン・シュトゥットマンは初めてより温かく言った、「君のことは良く分かっている。金 — つまらん。これは単にインフレのせいでの君の科白ではない。以前からすでに君は少しばかりそう考えていた。君だけではない。我々皆がそうだ。金は昔いずれにせよ自明のものであった。人は家からの手形を持っていたり、連隊から数グロッシェン貰ったりした。人々はそれについて話さなかった。一度すぐに支払えないような時には、まさに待って貰えば良かった。そうだろう。金は、考え込むに値するものではなかった、...」。ブラックヴィッツは懐疑的に頭を傾げ、若干反論しようとした。しかしシュトゥットマンが一層素早く言った。「なあ、ブラックヴィッツ、

昔は大体そんなものだった。しかし今日日私は自問 ― しはしない、私は確信を持ってこう言える。我々は皆、金に対し間違っていたのだ、世の中が少しも分かっていなかったのだ、と。金は、次第に分かったのだ、何かとても大事なもの、何か考え込むに値するものだ、と」。

「金がか」とフォン・ブラックヴィッツは怒って言った、「少なくともまともな金ならばな。しかしこの紙幣ときたら、...」。

「ブラックヴィッツよ」とシュトゥットマンは非難一杯に言った、「まともな金とは何だい。まともでない金がないように、そんなものは存在しない。金とは単純に、生活のために必要なもの、生存の唯一の基盤だ。生存のために毎日食べなければならないパンだ、凍えないよう着なければならない服だ、...」。

「しかしそれは神秘だ」とブラックヴィッツは苛立って叫んだ、「金はとても単純なものだ。 ― 金はまさに ― いずれにせよ、昔の金のことだが、 ― 金貨一枚有していたら、しかし紙幣も通用していたな、紙幣はそれで金貨と交換できたから、今とは価値が違ったし、...つまり金は、即ちどの金であろうと全く変わらず、 ― 言いたいことは分かるだろう、...」。すると彼は自分自身に全く腹が立って、この情けない訥弁に腹立った。自分が正しく明瞭に感じていることを、正しく明瞭に言うことが出来ないなんて。「つまりだ」と彼は結んだ、「金を持っていたら、それで何が買えるか分かるはずだ」。

「勿論そうだ」とシュトゥットマンは言って、友の混乱に全く気付かず、威勢良く自分の思弁を続けた。「勿論我々は以前間違っていた。私は発見したのだ、つまり九十九%の人間が金のことで腐心しなければならない、人間は日夜金について考え、金について話し、金を分配し、蓄え、またやり始めている。要するに、金は、それを中心に世界が回っているものだ、と。金について考えない、金について話そうとしないのは、単純に笑うべき処世上の無知だ、と。この最も重要なものについて、考えないとは」。

「しかしそれがまともかね」とブラックヴィッツは叫んだ、友の新たな精神状態について絶望感を抱いていた、「それが素敵なことか。ほんの少しの空腹を満たすためにだけ、生きることが」。

「確かにまともではない、確かに素敵ではない」とシュトゥットマンは同意した、「しかしそれは問題ではない、差し当たりそうだ。そういう次第だから、見ぬ振りをしてはならないし、それと取り組まなければならない。それが素敵でないと思うなら、それをどう変えるか、自問しなければならない」。

「シュトゥットマンよ」とフォン・ブラックヴィッツは全く狼狽し、絶望して尋ねた、「シュトゥットマン、君は社会主義者になったのではあるまいな」。

かつての中尉は一瞬狼狽し、呆然として見えた、あたかも暗殺の嫌疑を受けたかのようなであった。「ブラックヴィッツよ」と彼は言った、「昔からの戦友よ。社会主義者の金の考え方は、 ― 全く君と変わらないぞ。ただ奴等は金を得ようと、君から金を奪おうと考えている。いや、ブラックヴィッツよ、私は社会主義者なんかではない。そうなるつもりもない」。

「しかし君は何かね」とフォン・ブラックヴィッツは尋ねた、「何らかのグループあるいは党に、どっちみち所属しなければならないのだから」。

「どうしてかい」とフォン・シュトゥットマンは尋ねた、「何故所属しなければならない

いかね」。

「いや、分からんが」とフォン・ブラックヴィッツは少しばかり当惑して言った、「何らかのものに結局我々各人所属するだろう。選挙もあるしな。何らかのものに加入し、会員にならなければならん。それが多分 ー 普通だろう」。

「しかし私が普通でなかったら」とフォン・シュトゥットマンは尋ねた。

「そうだな、...」とブラックヴィッツは考え込んで言った、「私が知っているのは」と彼は思い出した、「騎兵中隊に一人いたな。一人の歩兵だ。我々はいつも分派主義者と言っていたが、何という名前だったかな、グリゴライト、そうグリゴライトだ。全く正規の、きちんとした男だ。しかし奴はカービン銃、腰の銃剣を手にするのを拒んだ。頼んでも、すかしても、処罰しても、聞かなかった。『畏まりました、少尉殿』と奴は言った、 ー 私は少尉だった、まだ平時だ、 ー しかし『私は出来ません。貴方は貴方の普通の考えがあります。私は私の普通の考えで行きますので、その考えを汚すことは出来ません。いつか私の普通の考えが、貴方の普通の考えになることでしょう、...』。しかしこやつは、何らかの分派主義者で、平和主義者、上品な質の者で、卑怯者ではない、臆病故に『二度と戦争反対』と叫ぶ輩ではなかった。...勿論奴を痛めつけてやることも出来ただろうが。しかし老公は分別があつて、言った。「奴は哀れな白痴にすぎない」。それで十五条の欄に記入されたよな、精神疾患の故をもって、と、...」。

騎兵隊長は思いに耽って黙っていた。ひょっとしたら薄いブロンド髪の太った丸頭のグリゴライトを、少しも殉教者には見えない男を眼前に見ていたのかもしれない。

しかしシュトゥットマンは明るく笑い声を上げた。「ブラックヴィッツよ」と彼は叫んだ、「君は昔から変わらない。君はまさにここで全く無邪気に私を白痴呼ばわりし、精神疾患紛れもないと決めつけている、 ー それに気付きもしないでな、 ー それで君が演習の後、我らの老公に対して、ものすごくまずい演習の老公に対して、君が慰めにある少佐の話しをしたのをまざまざと思い出すな。つまりこの少佐は演習のとき、並み居る將軍の前で馬から落ちたのだが、それでも解雇通知は受けなかった、とな。覚えているかい」。

そう言って両友人は一緒の思い出話しに耽った。彼らの声は一層活発になった。しかし問題なかった。今やカフェーは一杯になり始めた。忙しげに給仕人達が走り、すでに最初のビールグラスが運ばれ、声が飛び交った。両人の会話は多くの会話の一つに過ぎなかった。

しばらくして、二人が十分に思い出し、十分に笑った後、騎兵隊長が言った。「君に今一つ尋ねたい、シュトゥットマン。私は私の田舎屋敷に一人きりでいて、いつもただ同じ郎党のことを見聞している。しかし君はここ大都会にいる、その上このような企業だ。それできっと我々皆より見聞が広かろう」。

「しかし今日日誰が分かるか」とシュトゥットマンは尋ねて、微笑した。「いいかい、首相のクーノ [Wilhelm Cuno 1876-1933] でさえ、明日何が起きるか分からんだろう」。

しかしブラックヴィッツは惑わされなかった。彼は少しばかり後ろに反って、長い脚を組んで、快適に煙草を吸って、言った。「君は、ひょっとしたら、ブラックヴィッツは、君の心配事とは無縁だ。奴は騎士領を持っていて、偉い男と思うかもしれない。しかし確固たるものではないのだ。とても用心しなければならん。ノイローエは私のものではない。私の義父のものだ。フォン・テッシュー老公のものだ。 ー 私はすでに戦前に小さなエ

ーファ・テッシュォーと結婚した。ー いや、済まん、君は私の妻を知っているな。それで義父からノイローエを請け負っているのだ。ー 老公はこの請負料を負けてはくれん。そう言っている。時々ひどく心配事がある。ー いずれにせよ用心しなくちゃならん。ノイローエは我らの唯一の基盤だ。私に何か起きると、ー 老公は私が嫌いで、どんな些細な事でも、私の田舎屋敷を取り上げかねない」。

「それで何が起きるのかね」とシュトゥットマンは尋ねた。

「いいかい、私は隠者じゃないし、エーファは元来違う。それで我々は一帯で若干付き合いがある。勿論帝国国防軍の戦友達ともな。すると色々なことを耳にするのだ。囁かれもする、直接、間接に」。

「何を聞き、何を見るのだい」。

「何か起きるといふのだ、シュトゥットマン、またしても。人々は盲目ではない。至る所に我々の許、奴等が潜んでいる。作業班と呼ばれている。君も分かるに違いない。『黒い帝国国防軍』と囁かれている」。

「それは国家間協商[秘密警察]や監視委員会のせいかもしれない、スパイ・コミッションだな」とシュトゥットマンは言った。

「勿論ー それに彼らは武器を埋葬し、また掘り出し、持って行く。そのためかもしれない。しかしそのためばかりでなく、シュトゥットマンよ、もっと囁かれている。もっと注目すべきなのだ。疑いもない。民間人も徴募されている。ひょっとしたら私自身の村でもな。所有者はいつも最後に、農園中庭が燃えていると気付くのだ。ノイローエにアルトローエは接している。アルトローエには多くの工場労働者がいて、それはつまり我々農園の者やノイローエの農民とはナイフ間近の敵対という意味だ。というのは一方の者は食べ物を有し、他方の者は空腹だからで、火薬庫の中のようなものだ。ー それが爆発すると、私も吹き飛ぶ」。

「何か阻止しようというの、無駄なことではないか」とシュトゥットマンは言った。

「阻止か、...しかしひょっとしたら協力するかしらないか私は決心しなければならないのだろうか。拱手傍観もならんだろう。帝国国防軍には昔馴染みの戦友もいるしな、シュトゥットマン。奴等が何か冒険しようと思って、泥沼から手押し車を引き出そうとするとき、その時協力しなかったら、ー 死ぬほど恥ずかしい思いをしよう。いやひょっとしたらすべては単におしゃべり、二、三の跳ね上がり者の冒険、見込みのない一揆かもしれない。

ー そんなことのために農園中庭や支出や家族を危険に晒してもな、...」。

騎兵隊長はシュトゥットマンを問うように見つめた。シュトゥットマンは言った。「帝国国防軍に、ちょっと脇へ呼んで、名誉と良心に訴えて尋ねられる知人はいないのか」。

「いや、尋ねるなんて、シュトゥットマン。勿論尋ねられる。しかし誰が何について知っていよう。そのような件では、ほんの三、四人が本当に内実を知っている。そいつらは決して答えないよ、ー 君はリュッケルト少佐について聞いているかい」。

「いや」とシュレージエンは言った、「帝国国防軍のか」。

「そうだ、シュトゥットマン、まさに彼の事だ。このリュッケルトは、その男だという噂だ。しかし彼が帝国国防軍に属するか、属しないのか、それすら判然と聞き出せないのだ。ある者はそうだと言ひ、別の者は違ふと言う。全くずる賢い者達は両肩をすくめて、こう言う。『それは本人自身知らないかもしれない』と。それを聞くとまた、彼の背後に

別な者達がいるかのように聞こえる、 — 本本当にどうしようもない、シュトゥットマン」。

「そうだな」とシュトゥットマンは言った、「分かるよ、必要ならば、迅速にだが、間違った跳ね上がり、 — これはいや結構だ」。

「その通り」とブラックヴィッツは言った。

それから両人は黙った。しかしブラックヴィッツは更に期待に満ちて、シュトゥットマンを、かつての中尉、今のホテル応接課長を（連隊では『子守娘』の綽名だったのである）、見た。結局最近では金と神の試練の貧乏についてとても珍しい、本来すでにいかがわしい見解を有する男である。彼を見つめていた。あたかも彼の答えからすべての懐疑からの解放を期待している風であった。

そして結局このシュトゥットマンは果たしてゆっくりと言った。「思うに、そんな心配は必要ないよ、ブラックヴィッツ。単純に待てばいい。このことは戦場から承知していることだ。心配事とか、まあ不安というもの、これは休んでいる時とか、静かに塹壕にいるときにのみ生ずることだ。しかし一端、出発、前進と命じられたら、 — すると肝が据わって、出発する、すべては忘れられる。君はその合図を聞き逃しはしないよ、ブラックヴィッツ。戦場で結局たたき込まれたのだ、詮索しないで、静かに待機することを、 — 何故それが今できないことがあるだろう」。

「その通りだな」と騎兵隊長は感謝した、「私もそれを覚えよう。今、もはや待てないというのは、滑稽だな。この詰まらぬドルのせいだと思う。走れ、駆けろ、素早く何か買え、狩り立て、追い立てろ、...」。

「そうだな」とシュトゥットマンは言った、「狩り立てながら、狩り立てられる。獵師と同時に野獣だな。それで邪悪に性急になる。しかし両方とも必要ない。そうだ、...」と彼は微笑した、「しかし私はまた始めなければならない。私も自由というわけではない。あそこで守衛が私に合図している。ひょっとしたら支配人が何故どうして私の姿が見えないのだとすでに私を狩り立てておるのかもしれない。それで私は客室係の娘達を少しばかり狩り立てて、出発者達の部屋が十二時には完了するようにさせよう。君が今日七時にまだ町にいて、予定がないのであれば、...」。

「そのときにはどうにもまたノイローエだ、シュトゥットマン」とフォン・ブラックヴィッツは言った。「しかし本当に君と再会でできて、滅茶嬉しかった、滅茶嬉しかった、シュトゥットマン。そして私がまた町に来たら、...」。

20

ペートルはある発見をする

その娘は一人っきりで座っていた。動かず、仕事もせず、相変わらず部屋のベッドにいた。頭を少しばかり傾げていて、背中からうなじを越え、頭に向かうラインは穏やかで柔らかかった。小さな澄んだ清楚な顔が優しく空気の中にあって、唇は半ば開いていて、傷んだ床板に向けられた視線は何も見えていなかった。はだけた外套から剥き出しの肉体が微光を発していた。軽い褐色で、とても引き締まっていた。空気はむせるようで、悪臭に満ちていた。

完全に目覚めた家は、叫びながら、呼びかけながら、泣きながら、日中ドアを開閉しな

から、階段をどしどしと進行していた。生命はここではとりわけ物音で表現していた、更には腐敗、悪臭が見られた。地階のブリキ打ち抜き工房では打ち抜かれたブリキが音を上げ、猫か虐められた子供のような叫び声を上げていた。それからまたほとんど静かになり、ただベルトが伝動の上でうなり声を上げた。娘は時計が十二回打つのを聞いた。

娘は思わず頭を上げて、ドアの方を見た。彼が「叔父さん」の後、今一度彼女の許に顔を出し、何か彼女に食べ物を持って来るような場合、今来るに違いなかった。彼は一緒に朝食のようなことを言っていた。しかし彼は来なかった。彼女は、彼は来ないだろうという確かな予感がした。彼はきっと直接友人の所へ行くのだろう。そこで彼が金を得たら、ひょっとしたらまた彼女の許に戻って来るかもしれない。ひょっとしたらやはり直接賭博に行くかもしれない。朝になってようやく戻って来よう。すっからかんになってか、あるいはポケットに金を入れて、いずれにせよ、また再会するだろう。

いや、彼女は突然察した、また再会することが確実だろうか。自分はこれに慣れて来た。あの人はいつも出掛けて、いつもまた戻って来た。たとえ何に駆られようと、どこに行こうと、あの人の道はここゲオルゲ教会通りの彼女の許で終わっていた。あの人は中庭を越えて、階段を上がって来た。 — あの人は彼女の許に帰って来た、喜ばしく興奮して、あるいは全く疲れ切って。

しかし初めて奥深く震撼されて彼女は考えた。あの人がいつも戻って来るのは確かなことだろうか。いつか戻って来ないこともあり得る。ひょっとしたら今日かもしれない。いや、今日は勿論また戻って来る。あの人は彼女の座っている様、とても腹ペこで、裸に彼のみすぼらしい夏の上着を着たままで、何の生活必需品も有せずに、大家の女将の許に借金を抱えている様を、承知しているのだから。今日はまだきっと戻って来るだろう。 — しかしひょっとしたら明日はもう戻って来ないのでは。

あの人にこれまで何かを要求したことはないと彼女は考えた。何故戻って来ないことがあろう。私はあの人にとっては重荷ではないのだから。

しかしそれでも自分が彼に何かを要求したこと、いつも更に要求し続けていること、言葉で要求したのではないが、つまり戻って来るようにと、それ故少なからず要求していることを察した。

これがいつかやはりあの人にとって重荷となるかもしれない、と彼女は考えて、果てしない悲しみに包まれた。私の愛もいつかあの人にとっては重荷となるかもしれない。そうなると家に戻って来ない。

暑く、次第に暑くなった。彼女は一気にベッドの端から起き上がって、鏡の所に行き、鏡の前に立った。いや、これは自分 — ペートラ・レーディヒだ。 — しかしこれでもあの人を獲得できない。髪の毛と肉、素早い匂い、欲望、成就、 — でも世界はこれで一杯。一瞬彼女にとって千もの部屋が思い浮かんだ。その部屋ではこの時間、すでにまた午前の欲望が侵入して来て、接吻が交わされ、女達はゆっくり脱がされ、ベッドがぎいぎい言い、欲望の須臾の溜め息が漏れ、消えて行く。接合され、完成され、分離する、 — いかなる時でも、いかなる瞬間でも、 — 千もの部屋だ。

自分は大丈夫と思ったのだろうか。このままの通りであろうか。奥深く自分は承知している、ずっと承知していた、これは続かない、と。人々は同様に通りを駆け、急ぎ、列車を掴まえようと、娘に出会おうと、この紙幣を完全な失効前に使い切ろうと、走っている。

これが続くだろうか。愛が続くだろうか。

突然彼女は、自分が心にかけているすべてがナンセンスであると察した。自分にとって今朝とても重要に見え、それ故彼に対して一芝居したこの戸籍係での結婚式、――これで何が変わろう。お仕舞い、結構。自分はここに何も持たず、半裸で座っていて、とてつもなく飢えて、借金している、だから今日あの人は戻って来なければならないのか。いや、あの人が仮に戻って来なかったら、自分がここに座っていても、――仮に自動車を持って、グルーネヴァルトに別荘を有する自分であったとしても、――全く何の甲斐もない。

――あの人が戻って来ない、それが唯一の重大事だ。帰って来ないからと、窓から飛び出ようと、また靴を売ろうと、あるいは通りの女となろうと、――何の甲斐もない、あの人は戻って来ないのだ。

彼女は相変わらず鏡の前に立っていた。そしてあたかもそこに十分注意しなければならない余所の危険な女が立っているかのように見つめた。鏡の中のその女性はとても青ざめて、内面の蝕まれた褐色の青ざめた女で、黒っぽい目は燃え、髪の毛は二、三の緩い房が額に掛かっていた。彼女は息を止めて見つめた。すべてが息を止めているようであった。

――家は今一度眠たげに溜め息をつき、黙した。彼女は更に息をした。彼女は両目を閉ざした。ほとんど痛々しい至福の戦慄に彼女は襲われた。彼女は、両頬に温かさが上昇して来るのを感じた。彼女は暑くなった。立派な温かさ、素晴らしい熱気。いや、生命、生きる意欲。それが私を導いて来た、あそこから向こうを越えて、こちらへと。家々や顔、殴打、諍い、汚れ、金、不安。ここに私は立っている――甘美な、甘美な生命。あの人を二度と離さない。あの人は私の中にいる。

うなり声がし、ざわめいた。絶えず階段を上下する音がする。どの舗石でも物音がした。窓から漏れ出て、盗み見され、叱り声がする。笑い声がし、笑い返される。生命、甘美な、素晴らしい、不滅の生命。あの人を私は二度と離さない。あの人は私の中にいる。二度と思索し、希望し、願望しはしない。あの人は私の中にいる。空の手で私どもは横たわっている。人生は駆けて行く。どこかに到達することはない。すべてが滑り落ちる。すべてが去って行く。消える。しかし何かが残っている。すべての足跡に草が生えるわけではない。すべての溜め息が消えるわけではない。私が残っている。あの人が残っている。二人が残っている。

彼女は見つめた。彼女はまた両目を開けて、見つめた。これが私だ、と彼女は人生で初めてそう考えた。いや、彼女は指で自分を指した。彼女は何の不安もなかった。彼はきっと戻って来よう。彼もいつか、彼女が、自分でそう察したままの「自分」であることを察しよう。彼女は、自分がもはや「自分」ではなく、二人の「私ども」であると、察したのであった。

21

ブラックヴィッツはベルリンに反吐を感ずる

フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、ベルリンに来るたびに、彼の主要な楽しみ事の一つとして、一度フリードリヒ通りとライプツィヒ街をぶらつき、店を覗くことを数え上げていた。大きな買い物をするとか、それを意図していたというようなことではなくて、

単にショーウィンドウを見て喜んでいたのである。それらはまことに田舎者にとって素晴らしく出来ていた。幾多の所で、うっとり眺められる品があった。ただ店の中に入って、指でそれを指して、これと言いたくなる品であった。別の所にはまたとても身震いするような代物があって、更にもっと長く立ち止まって、いつも新たに笑い出したりかねないのであった。何度か、このような品を家に持ち帰って、せめて一度エーファか、ヴァイオが、このガラス製の男性の頭部、その口が灰皿となっているものにどのように興ずるか見てみたいという誘惑に駆られたものである。(この頭部は電気線に接続出来て、接続すると恐ろしい赤と緑に輝くのであった)。

しかし、これらの品はすでに一日経つと、全く忘れられて、家に放置されるという経験をしていて、騎兵隊長は用心深くなっていた。 — 彼は自ら笑うことで満足していた。何か土産を用意しようというとき、たとえ退任した、白髪の騎兵隊長であろうと、女達にささやかなものを持参したいのであり、かくて彼はランジェリー店の前に立って、何か絹製品とかレースの小物を買いたがった。そのようなものを買うのは歓喜であった。このような店に入るたびに、万事更により軽快に、より香り高くなっていて、更に色合いが華奢になっていた。このような下着は片手で軽い、小さなボールに丸めることが出来、それから柔らかな音を立ててまた伸びるのである。生活はなおも灰色の慰めのないものとなってしまっても、女性の美は更に軽やかに、華奢に、この世ならぬものになるように見えた。ただレースだけのこのようなブラジャーときたら、 — 騎兵隊長はまだ戦前のドリル織りの灰色コルセットを思い出すことが出来た。夫は妻に対し、抗う馬に手綱をかけるように、紐を結ばなければならなかったものである。

あるいは珍味の店へ入った、 — 金はとても無価値なものとなってしまっても、この仕切りには溢れるほどあった。イタリアからの緑色のアスパラガス、フランスからのアーティチョーク、ポーランドからの肥育鷺鳥、ヘルゴラント産のロブスター、ハンガリーからのトウモロコシ、イギリス製のジャム、 — 全世界がここで逢い引きをしていた。

— ロシアからのキャビアでさえもまた見られた。 — 単に「友情」から、無闇に高い値段でわずかに得られる外貨を、ここではツェントナーの重量単位で食することが出来る。 — 全く謎めいたことだ。

騎兵隊長はシュトゥットマンとの会話の後、更に十分時間があつた。それで彼はまた昔の路をぶらついた。しかし今回喜びはぶち壊された。フリードリヒ通りを進んで行った。例えば中近東の市場の趣であった。小物商、乞食、売春婦が、ほとんど肩を並べて、家の壁沿いに、歩道の縁に立っていた。若い者がスーツケースを開けると、その中に磨かれた香水瓶が穏やかに輝いていた。ズボン吊りを別の者が、大声で叫びながら、振り回していた。一人の女性が、ベトベトした、毛むくじゃらの女で、果てしもなく長い、微光を発する絹の靴下を商っていて、殿方に厚かましく微笑して差し出していた、「伯爵、可愛い娘御にいかがです。穿かせてやってみなさい。全くのはした金の紙幣で、仰山楽しみが得られますよ、伯爵」。

保安警察の姿が見えた。ラックを塗られたチャコ[筒型軍帽]の下からうんざりと視察していた。形式的にスーツケースが閉じられ、警察が二歩先に進むと、また開かれた。家の壁には乞食達が座り、うずくまり、横になっていた。彼らの持っている看板を信ずれば、皆傷痍軍人であった。しかし戦時にはまだ学校に行っていたに違いない若者もその中には

いた。そしてすでに戦前に負傷していたであろう年寄りもいた。盲人達は慰めようもなく単調に喚いており、中風者達は頭や腕を振っていて、負傷者は傷口を見せていた。恐ろしい傷跡が灰色のうろこ状の肉から火のように輝いていた。

最も劣等な者達は娘達であった。至る所、娘達はうろつき、叫び、ささやき、誰彼となく腕を取り、一緒に駆け、笑っていた。中にはすでにもう酩酊している者もいた。皆が、暑さと仕事のせいで、一 はなはだ露出しており、見ておれなかった。肉体の市場で、一 脂身の白い、リキュールで浮腫んだものだった。強い火酒で焼けてしまったように見える痩せて黒ずんだ肉体もあった。しかし最も劣等なのは、全く鉄面皮な女どもで、ほとんど性別のない者どもであった。瞳孔が鋭くピンの頭に収縮したモルフィネ常習女ども、白い鼻の嗅ぎ煙草常習女ども、顔を絶えずぴくつかせている叫び声のコカイン注射常習女どもであった。

彼女達は身悶えし、自分達の体を広い胸開きのブラウスや、巧みに浮き彫り細工されたブラウスに揺すっていた。彼女は避難したり、角を回ったりして、膝までしかないスカートを持ち上げて、靴下とパンツの間の鈍い白色の肉体の筋を見せていた。その肉の許では緑色やあるいは薔薇色の靴下留めが見られた。彼女達は遠慮なく通り過ぎる男達の品定めをし、通り越しに猥談を交わし、彼女達の貪欲な目は、ゆっくりと側を通り過ぎる人々の中に、外国人を探し、そのポケットの中の外貨を狙っていた。

悪徳と悲惨、物乞いの間、空腹とペテン、毒の間を、若い、ほとんど学校を出たばかりの少女達が、それぞれの店からボール紙や札入れを持って歩いていた。彼女達の素早い、確実な視線は何も見逃さなかった。彼女達の野心は、先の女達に負けず、厚かましく、何ごとにも畏敬の念を抱かず、何ごとにも臆せず、負けずに、短いスカートを履き、負けずに外貨を狙うことであった。

何も畏れないと彼女達の視線は語っていた。年配だからともはや畏れない。その通りと言って、カバンや箱を振って、うちらはまだ店の小間使い、売り子、帳場員だけだ。でもうちらに目を向けていいのは、あそこの小さなジャップ、あるいは腹をチェックのフランネルのズボンに揺すっている羊肉形ほおひげのこの太っちょ。一 そしてうちらもここ路上でボール紙を棄てて、そうよ、今夜もう一軒のバーに入り、明日は一台の車を所有している。

騎兵隊長にとって、彼女達が皆、大声で呼び、叫び、狙っているかのように聞こえた。金の他に大切なものはない、金だ。しかしこの金も大事ではない。いかなる時でも、金から最大限の享受が絞り出されなければならない。何のために蓄えるのか一 明日のためか。明日はドルが幾らするか誰が知ろう。明日我々がまだ生きているか誰が知ろう。明日は早速また若い娘らが押し寄せる。もっと若い娘らが始める。一 老旦那、来なされ、確かに白髪だが、一 それだけに時を失ってはならない。一 来なされ、旦那さん。

騎兵隊長はウンター・デン・リンデンからフリードリヒ通りへのアーケードの入口を探した。彼はいつも是非蠟人形館を見たいと思っていた。一 それでアーケードに入った。しかし地獄の前庭から地獄へ入ったような按配であった。密集した人混みが果てしなくゆっくりと輝く照明のトンネルの中を押し合っていた。店では裸の女達の巨大の油のハム肉写真が晒されていた。厭わしく裸で、厭わしく甘美で、薔薇色の胸と共にあった。至る所不作法な絵葉書が長い三角旗の鎖となっていた。老放蕩者をも赤面させるような代物で、

ある者の手に湿った声で囁きかける男達が押し付けるこれらのヌード写真に勝る破廉恥なものはない。

しかし最も劣等な者は若者達であった。滑らかな胸を出した水兵服を着て、生意気に口に煙草をくわえて、彼らは至る所、徘徊して、話さず、ただ見つめたり、触れたりしていた。

切り込みの深い服の、とても上品な、大柄の明るいブロンド髪の女性が、これらの若者の一群全体を引き連れて、群衆の中を進んでいた。彼女は甲高い声で笑って、激しく語った。騎兵隊長は彼女を全く間近で見た。彼の視線は厚かましく剥き出しの厚化粧の胸に落ちた。そのレディーは不自然に拡大された瞳孔で、笑いながら彼を見つめていた。その目の下は青黒く塗られていた。 — そして彼は、この着飾った女が一人の男であること、このすべての厭わしい若造達の中の女が、一人の男であるを知って、突然体を揺する吐き気に襲われた。

騎兵隊長は闇雲に人混みの中を進んで行った。一人の売春婦が叫んだ。「このおいぼれはおかしいよ。エーミール、一発かましてやんな。あたしゃ殴られたよ」。しかし騎兵隊長はすでに外に出ていて、一台のタクシーを掴まえた。「シュレーゲン駅まで」と彼は言って、全く疲れ切って、クッションに寄りかかった。それから彼は、白い、まだ全く使用されていないハンカチを上着から取り出して、ゆっくりと顔と両手を拭った。

そうだな、と彼は集中して別のことを考えるよう自制した。 — 自分の心配事より他に集中するものがあるだろうか。そうだな、実際この時代、ノイローエの農園経営は楽なものではない。

義父がずるい奴である（義母ときたら敬虔ぶりがやりきれない）ことは度外視しても、請負料はまことに高すぎる。昨年のように全く不作であるか、何か今夏のように育っても、人手不足だ。

しかし哀れなシュトゥットマンとの会話の後、このシュトゥットマンはすでに感化されていて、実際まことに狂った考えを抱いているが、それにフリードリヒ通りとアーケードを通過してこのささやかな散歩の後、騎兵隊長はノイローエのことを純粋なすれていない島のように思った。確かに永遠の立腹がある、郎党への立腹、税への立腹、金への立腹、職人への立腹がある。（すべての中で最悪なのは、義父への立腹だ）。しかしエーファとヴィオレットがいるのではないか、この娘は子供時代以来ただヴァイオと呼ばれているが。

確かにエーファは、少しばかり俗気が強い、彼女の踊る作法、オスターデの将校達といちゃつく作法は、以前全く不作法に見えたことだろう。それにヴァイオもかなり荒っぽい調子に慣れ親しんでいる。（時に祖母が見たら失神しそうなほどだ）。 — しかしこれも白昼ベルリンでのさばっているこの悲惨、この鉄面皮、この風紀の墮落と比べたら何ほどのものか。騎兵隊長ヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツはこのような者であり、この見解を維持する、自分はこの見解を変えるつもりは全くない。一人の女というものは一人の男よりも繊細な素材で出来ているのだ。何か華奢なもの、何か甘やかされるものだ。フリードリヒ通りのこれらの娘どもときたら、いや、これらはもはや女ではない。現実の男なら戦慄なしにはこれらの娘を考えられない。

ノイローエで我らは庭園を有し、夕方この庭園に腰を下ろす。従者のフーベルトが火屋付き蠟燭と一瓶のモーゼル・ワインを持って来る。せいぜい更に「バナナが欲しいと言わ

れても」の蓄音機が大都会の音波を葉擦れの音や花々の香りに寄せるぐらいだ。しかし女どもは守られる、純粹に清潔に。

実際もはやレディーと一緒にフリードリヒ通りを歩くことは出来んな。このレディーが自分自身の娘だったら、特に無理だ。それにシュトゥットマンのような素敵な奴が、通りのこの屑を幸せにしてやろうとか、対等に振る舞おうとする様を考えると、それが単に金を得るためにすぎないとしても、いやはや、御免だ。ノイローエの故郷では、「ドイツ日刊新聞」がベルリンを罪のバベルの塔とか、アスファルトの沼、ソドムとゴモラと形容していたら、ひょっとしたら誇張と思うかもしれない。しかしただ一度ベルリンに来てみさえすれば、一切はまだ弱すぎる形容だ、いや御免だ。

そして騎兵隊長ははなはだ落ち着いてきて、煙草に火を点け、できあがった仕事とすぐの帰還に満足して、駅へと向かった。

勿論彼はまず待合室で、二、三杯の強いコニャックを飲んだ。というのは、新規募集者の刈り手達との面接は至極満足を覚えるものではなかろうとかなり確信していたからである。しかしそれでも全くまずいこととは言えない。元来普通のことであろう、ひょっとしたら面貌は少しばかり以前よりもっと生意気で、粗野で、鉄面皮であるかもしれない。

一 しかしそれが問題か。奴等はただ、働いて、収穫を仕上げてくれさえしたらいい。私の許で奴等は悪い思いをしない筈だ。結構な現物給与に、毎週一頭の去勢羊の屠殺、月に一度の太った豚の屠殺があるのだ。

ただ刈り手職長は、まさに騎兵隊長にとって全く厭わしい種類の間人であった、一 正真正銘の上にへつらい、下に横柄なタイプであった。彼は騎兵隊長におべんちゃらを行い、自分の郎党の力と有能さを称える半分ドイツ語、半分ポーランド語の弁舌をまき散らし、その際いつの間にか一人の娘の尻を蹴っていた。娘は荷物を持って十分に素早くドアから出て行けなかったのであった。

ちなみに騎兵隊長が全員の乗車券を購入しようとしたとき、刈り手職長は五十人集めたのではなく、単に三十七人に過ぎないことが判明した。しかし騎兵隊長の質問に対して、彼はまたバケツのように混乱した演説の水をぶちまけ、次第にポーランド語が多くなり、不分明になった。(勿論エーファが私にポーランド語を学ぶように勧めたのは、全く正しいことだが、私にはその気が全くないのだ)。刈り手職長は何か誓っているように見え、彼は上腕筋を緊張させ、笑いながら、媚びるように、小さな、鼠のようにすばしこい、黒い目を輝かせて、騎兵隊長を見つめた。結局ブラックヴィッツは両肩をすくませ、券を購入した。三十七人はいないよりましであろう。いずれにせよ、熟練の農作業人なのだ。

それから騒がしい、叫ぶ一行が駅のホームへ来た。すでに停車している列車への積み込みとなった。罵る車掌が来た。彼はドアをせき止めている束を列車の中へ押し込もうとしたが、その束を内側からまた運び手の女性が押し込もうとした。二人の若者の諍いがあった。刈り手職長の野蛮な身振りと呼び声が聞かれた。彼はその間、絶えず騎兵隊長に話しかけ、三十ドルを願い、要求し、請うていた。...

騎兵隊長は最初、二十ドルで十分だと言った、郎党の四分の一が欠けているからと。彼らは熱く計算し始めて、結局、諍いに疲れて、騎兵隊長は刈り手職長の手に十ドル紙幣を三枚数えてやった。最後の男が席に着いてからである。今や刈り手職長は感謝の念で溢れ、お辞儀して、あちこち跳ね、結局本当に騎兵隊長の手を掴み、勢いよく接吻してのけた。

「閣下、恵み深い旦那様」。

若干反吐を覚えて、騎兵隊長は列車の全く前方、二等の喫煙のコンパートメントに席を見つけて、ある隅に心地よく腰を下ろして、新しい一本の煙草に火を点した。全体として、自分が仕上げたのは悪くない一日仕事だ。明日収穫はまともに始められよう。

ぽっぽっとガタガタ言いながら、列車がようやく動き出し、悲しげな、煤けた、落魄した駅ホールからその砕けた窓ガラスと共に出発した。騎兵隊長はただ、車掌が通り過ぎるのを待っていた。その後少しばかり眠ろうと思っていた。

ようやく車掌がやって来て、券を切って、騎兵隊長に戻した。しかし車掌はすぐには出て行かず、立ち止まっていた。

「何か」と騎兵隊長は眠たげに尋ねた、「外は少しばかり暑いな」。

「貴方は」と車掌は尋ねた、「ポーランド人の刈り手達の旦那でしょう」。

「そうだ」と騎兵隊長は言って、もっと真っ直ぐに姿勢を正した。

「それでしたらお伝えしようと思います」と車掌は言った（他人の不幸を喜ぶ痕跡があった）、「郎党は皆すぐにまたシュレーゲン駅で降りました。全く秘かに」。

「何だと」と騎兵隊長は叫んで、コンパートメントのドアに飛んだ。

22

パーゲルはツェツケに対し躊躇う

列車は次第に速く進んだ。列車はトンネルに入り、照明されたプラットホームは背後になった。

ヴォルフ・パーゲルはすし詰めの喫煙車両の消火ボックスに座っていて、煙草のパッケージから一本のラッキー・ストライクに点火した。このパッケージはまさに二人の全財産の売り上げから購入したものであった。彼は深く吸った。

「素敵な煙草だ」。最後の煙草を彼が吸ったのは、昨日の夜、賭博からの帰路であった。それだけに、この煙草は、ほぼ十二時間の後で、味がした。ラッキー・ストライクは、彼の学校英語に間違いがなければ、幸運の一撃、幸運の当たりだ。 — この幸運を約束する煙草は、一日中、予言的意味を有することだろう。

そこの太っちょは、短気に深い息をして、新聞をガサガサさせて、落ち着かない視線を送っている。そんなことをしても無駄だ、我々皆が承知している。ドルは今日、760000マルクだ。 — 50%の値上がり。煙草屋の叔父さんはまだ有り難いことにそのことを知らなかった。知っていたらこの煙草は買えなかったことだろう。太っちょのおまえさんは、負け戦だ。おまえさんの深い息で分かる。腹を立てているな。しかし無駄なことだ。これは全く利口な、完全にモダンな戦後の発明だ。おまえさんのポケットに有する金の半分が盗まれるのだ、ポケットと金に触りもしないで、 — いや、利口な頭だ、利口な頭だ。

さて問題は、友のツェツケが勝ち戦か、負け戦かだ。彼が負け戦ならば、聞く耳は持たないだろう（これは少しも確かなことではないが）。新しい価値暴落が都合のいいものならば、一握りの百万マルク紙幣を与えることは問題あるまい。数日前から、二百万マルク紙幣まで出て来た。 — パーゲルは賭博クラブでそれを見た。その紙幣はまた正しく両

面に印刷されていて、お金のようには見えた。当世の片面印刷の白い紙切れではない。一人々はこれが永遠に最高額の紙幣だろうとすでに言っていた、— このようなお伽噺のせいで、太っちょは深い息をしている。奴はお伽噺を信じていたのだ。

ツェッケが負け戦とはほとんど想定しがたいことである。パーゲルが思い出す限り、ツェッケはいつも勝ち戦であった。彼は決して一人の教師に対する判断で誤らなかつた。彼はまさに、どのような問題が出されるであろうか、試験でどのような主題が「肝要」か、それに対する予感を有していた。戦時では彼が最初に、利口な休暇者システムを作成し、バルカンやトルコへのサルバルサン[梅毒特效薬]の分配を考案したのであった。この商売が不景気になり始めると、彼はまた最初に、これをすべて諦める前に、サルバルサンのパックに何らかの屑を、多分、砂と蜂蜜の混ぜ物を詰めたのであった。それから八等級の歌と踊りの娘達をボスポラス海峡方面へ送った。つまり全体として、愛敬ある人物で、ある面では阿呆であるが、別な面ではカミソリのように抜け目ない。戦後彼は罫を仕掛けていた、— 今何を商っているか、誰も知らない。— それが何かは問題ではない、— 彼は金が儲かるならば、象の雄どもの闇取引をしよう。

この男、つまり所謂良き友ツェッケのことを正確に考えて見ると、本来この男が他人に金を与えることは予見されない。— パーゲルはそのことを突然認めた。彼はこれまで、彼に接触しようと試みたことはなかつた。しかしまた今まさにヴォルフガング・パーゲルの胸に別な感情が、つまりツェッケは今や機が「熟して」いて、絶対そうするであろうという感情が生じていた。ある種賭博者の勘で、突然引かれたシグナルであり、何故か悪魔しか知らないことである。きっと彼は金を渡すであろう。人生にはこのような瞬間がある。昨日までは絶対しなかつたであろうことを突然するのだ。そしてそれをなしたことから、全く自ずと何か別なことが、生ずる。— 例えば、今晚、とてつもない額を得るのだ、— すると突然一切が変わる。人生はある片隅からこれまでの軌道へと更に通ずる。町で二十軒の賃貸家屋を購入できたり（これらの小屋ははした金で得られる）、あるいは巨大なバーを開ける（バーカウンターの奥に八十人の娘だ）、— まあ、悪くない考えだ、— あるいは何かをする必要もないかもしれない。— 一度席に着いて、のんびりして[親指を回して]、しっかり休み、良いものを食べて、飲み、ペーターを楽しめばいいだろう。あるいはもっと良いのは、車を買って、ペーターと世界一周だ。彼女にすべてを見せよう、教会に、絵画、何でも見せよう。この娘は伸びる可能性がある、— 勿論のことだ。これを誰が論駁するだろうか。いずれにせよ、自分はしない。利口な娘だ、不快なことではない（ほとんどない）。

退役士官候補生のヴォルフガング・パーゲルはポトビールスキー並木道で降りて、二、三の通りを行き、ツェッケの別荘までぶらぶら下って行った。暑さの中、まことにぼんやりとゆっくりとしていた。さて彼は家の前に立って、つまり勿論、前庭の前で、庭園や緑地、公園の前であった。直接その前ではなく、勿論、鍛えられた格子があり、何らかの彫刻された石があり、柱状に据えられていた。貝殻石灰岩と呼ばれるものである。全く小さな真鍮の表札があつて、それにはただ「フォン・ツェッケ」と記されていた。そして真鍮の呼び鈴のボタン。良く磨かれている。家に関しては余り見えない。家は茂みと木々の背後にあり、大きな、良く反映する窓ガラスと、高すぎずに、軽快に構成された正面が予感された。

パーゲルはこの別荘の件を考えた、彼は時間があつた。それから彼は向きを変え、このお屋敷を別な通りの側から眺めた。豪華である、つまりここには貴顕氏が住んでいて、彼らはアレクサンダー広場に接する裏の中庭などには絶対に住みそうにない輩である。ヴォルフガング・パーゲルは、自分はそのどちらも出来る、ダーレム[貴顕氏達の許]にも住めるし、アレクサンダー広場にも住めると思った。自分にとってそれは問題ない。しかしひょっとしたら、自分はそれが問題でないが故に、ダーレムには住まず、ゲオルゲ教会通りに住んでいるのかもしれない。

彼はまた帰って来て、表札、ボタン、花壇、緑地、正面を観察した。何故ツェッケはこのような些事に煩わされているのか、謎が残った。このようなことは煩わしいからである。一軒の家を所有すること、巨大な邸宅、永遠に煩わしさが絶えない半ば宮殿に住むこと、これは、税を支払い、掃除を頼み、電気配線の故障に対処し、コークスを購入しなければならぬということである。―― いずれにせよ、ツェッケは変貌したに違いない。以前なら彼も、これは煩わしいと考えた筈である。彼と最後に会ったとき、ツェッケはクーアフュルステンダム[選帝侯築堤通り]に極めて優雅な独身者部屋を二部屋有していた(恋人、電話機、バス付きで)、―― これはツェッケに似合っていた。

この邸宅は似合っていない。しかし多分彼は結婚したのであろう。ある男にくだらなさが見られるようになるのはすべて、この男が結婚したことから説明されることである。まあ、多分この彼女にお目にかかれるであろう。そして彼女は勿論、すぐに、彼女の夫のこの旧友は金を汲み出しに来ていると察しよう。それで彼女は彼を半ば苛立って、半ば軽蔑して扱うことだろう。しかしそれは構わない。夕方五分五分の豹として狩りに出掛ける男は、女性の気まぐれに対して全く平気である。

パーゲルは早速呼び鈴のボタンを押そうとしていた―― いつかはそうしなければならない、ここでのんびりと日差しを浴びて、ツェッケからすぐに受け取るであろう多くの素敵な金を考えていることは、とても快適なことであっても。しかし自分がまだほぼ十万マルク、ポケットに有していることを、まさに丁度思い出した。確かに金は金を呼ぶという命題があるが、この言い方では、この命題は正しくない。多くの金が更に多くの金を呼ぶと言わなければならないだろう。しかしそのためには、パーゲルがポケットに有する金は問題にならない。こうした状況下では、自分が全く無一文でツェッケの前に立つのがはるかに良いであろう。家への乗車賃すらポケットに有しないとき、絶対に借金依頼はもっと説得力のあるものとなろう。この十万マルクで二本の小さなコニャックを買うことにしよう。この二本のコニャックがあれば、借金依頼はもっと確かなものとなろう。

パーゲルは向きを変えて、また通りを下へぶらぶら歩いて行った。右手に行き、それから左手に、また右手にとあちこちした。―― しかしこの金をアルコールに変えるのは難しいと分かった。このとても上品な別荘一帯では、店や居酒屋はないように見えた。勿論このような人々はすべてを家に買い上げていて、ワインや火酒は地下室に保管されている。

パーゲルはただ新聞売りを見いだした。しかし新聞に金を投じたくない。いや、結構。これは関係ない。すでに見出しを読んでも、「占領区の封鎖遮断解除」、―― 自分には関係ない、好きにすればいい。くだらぬことだ。

次に花売り女に出会った。この女はバス停に立っていて、薔薇の辻売りをしていた。薔薇で一杯の庭を有するフォン・ツェッケ氏の鼻先に薔薇の花束を差し出すことは、結構な

ことで、パーゲルはほとんど買おうと思った。しかし彼はそれから両肩をすくめて、先へ進んだ。ツェツケが彼の借金依頼をただ軽く、ユーモラスに受け取るか、全く確信を抱けなかったのである。

しかしこの金は処分しなければならない、――それは確かだ。パーゲルは乞食にやりたかったことであろう、これはいつも幸運を呼ぶ。しかしここダーレムには乞食すらいない。乞食達はむしろアレクサンダー広場の貧しい民の許に来たがる。貧しい民の方がいつもむしろ少しの金を分かち合う。

しばらくヴォルフガングは、中年の、干涸らびたレディーの後ろを歩いていた。彼女は色褪せたライラック[紅藤]色の折り返しの付いたグレーに見えるジャケットに黒いガラスの管玉を下げていて、「憐れみを乞う貧民」の印象であった。しかし彼はその後、彼女の手に金を押し付けるのを断念した。金を一回で手放せずに、まずまた戻されては、極めて不吉な前兆となったであろうからである。

とうとうパーゲルは犬と出会った。静かに自足して彼がベンチに座っていて、勢い良く、白い、褐色の斑点のフォックス・テリアが口笛で呼び寄せられ、可愛がられることになった。この動物はとても生命力が漲っていて、可愛がる男に反抗的に挑戦的に吠え掛かり、それから突然愛敬を振りまき、頭を確かめるように片方へ置き、尾の端を振った。ほとんどヴォルフが取り押さえたかと思うと、犬はまた飛び離れて、嬉しげに吠え、公園の向こう側へ行った。その間小間使いの娘が、綱を振りながら、絶望的に「火酒、火酒」と叫びながら、犬を追いかけていた。

落ち着いて煙草を吸っている男と興奮した娘のどちらを選ぶかとなって、フォックス・テリアは男の方に決めた。犬は鼻先を挑戦的にパーゲルの脚に押し付け、その目には、新しい遊びを始めてくれという澄んだ催促が見られた。丁度ヴォルフが犬の首輪の下に紙幣を押し込んだとき、熱く興奮して娘がやって来て、息も吐かず、吐き出した。「犬を放してください」。

「いや、お嬢さん」とヴォルフガングは言った、「火酒には我々男どもは皆いつだって賛成ですし、それに」とこう付け加えた、新しく洗われたドレスに喜ばしい娘が収まっていたからである、「恋愛にも賛成です」。

「いや、あなた」と娘は言った、彼女の怒った顔は突然変わっていて、ヴォルフガングも微笑せざるを得なかった、「ご存じでしょうか」と彼女は言って、小躍りし、遠吠えするフォックス・テリアを綱に掛けようとした。「この犬にはとても手こずります。いつも殿方に寄って行くのです、――これは何かしら」と彼女は驚いて尋ねた。首輪の下に紙幣を感じたからである。

「手紙ですよ」とパーゲルは去りながら言った、「貴女への手紙です。貴女も気付いていたでしょうが、すでに一週間毎朝貴女の後を付けているのです。一人っきりのとき、後で読んでください、すべて書いてあります。さようなら」。

彼は急いで角を曲がった。彼女の顔が余りに輝いたので、彼は真実の発見と一緒に体験したくなかったのである。また一つ角を曲がって、今や多分もっとゆっくり歩けるであろう。今や彼女の恐れはない。彼もまた汗ばんでいた。本来彼は、ポトビールスキー並木道で降りたときから、ずっと汗をかいていたのであった。ゆっくりと歩いていたのではあったが。突然彼は、自分がかくも暑い思いにさせたのは、日差しのせいではなく、つまり単

なる日差しのせいばかりではないと思ひ当たった。いや、違う。少し別なもの、もっと別なもののせいだ。彼は興奮している。不安なのだ。

一旦、彼は立ち止まって、周りを見た。昼の輝きの中、黙して別荘は松林に庇護されて立っていた。どこかで掃除機の音がした。彼が呼び鈴を押すことを躊躇いながらこれまでなしたことすべては、不安に由来するものだった。それはもっと早くに始まっていた。自分に不安がなければ、自分はラッキー・ストライクを買わずに、二人分の朝食を買っていただろう。不安がなければ、質草を叔父さんに引き取らせはしなかったであろう。

「そうだ」と彼は言って、ゆっくりと先へ歩いた。「終わりに向かっている」。彼は突然二人の状況が分かった。ありのままの状況で、借金があり、明日への何の展望もなく、ペートルはほとんど裸で臭い洞穴にいて、自分はここ金持ちの一角に色褪せたグレーの地の着を着ていて、ポケットには乗車賃すらない。

私は、我らに金を渡すように彼を説得しなければならない、と彼は考えた。ほんの些少の額であろう、と。

しかしフォン・ツェッケから貸与を期待することは、戯言だ、狂気の沙汰だ。ツェッケについて承知していることすべてから判断するに、彼が金を貸すことを期待することは、

一 取り戻せるという見込みがほぼない以上、全くできない。しかし彼が「できない」と言ったらどうなるか。(勿論彼は「できない」と言うだろう。ヴォルフガングにとって疑う余地はない)。

長い、かなり幅広の並木道がパーゲルの前に開けていた、その終わりにツェッケの別荘があった。彼は下って行き始め、まずはかなりゆっくりで、それから次第に急いだ。山腹を下りて行くかのように、自分の運命に向かった。

彼は「いいよ」と言うに違いない、とヴォルフガング・パーゲルは今一度考えた。たとえ少額であろうとも。それで私は賭けを終わりとしよう。まだタクシー運転手になれるし、

一 ゴットシャルクは私に二台目の車を固く約束してくれた。そうなったら、ペートルはもっと楽になろう。

今や別荘が間近になった。彼はまたもや貝殻石灰岩と鉄格子、真鍮の表札、呼び鈴のボタンを目にした。新たに躊躇いながら、彼は通りを横切った。

しかし彼は勿論「駄目だ」と言った。一 いや、忌々しい。忌々しい。というのは見回すと、通りの端に一人の娘がやって来るのが見えたからである。綱で引かれて、きゃんきゃん吠えるフォックス・テリアがどこの娘かすでに明らかにしていた。ここでの問答と別荘での依頼との間に、追われている者と追う者との間にあって、彼は呼び鈴のボタンを押した。そしてドアの錠が微かに音を立てて外され、彼はまずほっとして息をした。近寄って来る娘を一瞥もせずに、彼は中へ入り、丁寧にドアを閉めて、深呼吸した。道が曲がっていて、彼は茂みの中へ隠れた。

ツェッケは結局ただ「駄目だ」と言うことだろう、この娘っ子はがんがん言いかねない。

一 ヴォルフガングは女達との諍いを嫌っていた。これはいつでも終わりが無い。

「いや、パーゲル本人だな」とフォン・ツェッケは言った、「大体君を予期していた」。ヴォルフガングがある仕草をすると、「丁度今日というわけではなかったのだが、一しかし満期にはなっていたらう」。

そして勝ち誇ってツェッケは微笑した。しかしヴォルフガング・パーゲルは苛立った。ツェッケは以前からこうした勿体ぶった秘密めかしたやり方を好み、以前から勝ち誇った微笑をしてきたことに気付いた。そして自分パーゲルは以前からこのことに苛立つていたと気付いた。ツェッケは、自分が格別抜け目ないと思うとき、このような微笑をした。

「まあ、私が思うにだ」とツェッケはにやりと笑った、「結局君は本当にここ私の許に来ている、一これは否認しようと思わないだろう。まあ、いいよ、私は自分が知っていることは知っている。シュナップス[火酒]を飲み、煙草を吸い、私の絵を見るかね」。

パーゲルは夙にその絵を見ていた。彼らは大きな、とても上品に設えられた、庭に面する部屋に座っていた。日差しを受けたテラスに面する二、三のドアが開放されて、陽光と緑が見えた。しかしここの内部は快適に涼しかった。窓の前の緑色のブラインドから入ってくる美しい光は、明るく、同時に暗く、とりわけ涼しかった。

彼らは素敵な安楽椅子に座っていた。今どこにでも見られる例の恐ろしい、滑らかで、冷たい革の椅子ではなく、深く広々とした箱状のもので、何らかの花柄の英国製の素材が張られていた、一多分インドサラサであった。壁の三分の一の高さまで本があって、その上に絵が、立派なモダンな絵があった。パーゲルはそれを見取った。しかし彼はツェッケの問いには答えなかった。彼はすぐに気付いた、この雰囲気は自分にとって全く不都合というわけではなく、フォン・ツェッケ氏にとって、彼の訪問は何か都合のいいものである、と。勿論ツェッケ氏は彼の何かを欲している、だから落ち着いて待ち、少しばかり厚かましくしていいだろう（金は手に入れられよう）。

パーゲルは本を指し示した、「立派な本だ、良く読むのかい」。

しかしフォン・ツェッケはやはりしたたかであった。彼は陽気に笑った、「私が読書か。相変わらず冗談言うな。私がそうだと言おうものなら、君はそこのニーチェに何と書かれているか尋ねて、冷やかすつもりだろう」。突然彼の表情は変わって、思わしげになった、「思うに、それは全く立派な資本の投下なのだ。全革製の製本だ。自分の投資が価値に見合うものか、確かめなければならない。本のことは何も分からん、一サルバルサンはもっと簡単だ。しかし小さな学生がいて、助言してくれて、...」。彼は一瞬この小さな学生が自分の支払った金に値する者であるかどうか、多分考え込んでいた。それから彼はまた尋ねた。「それで、一絵はどうかね」。

しかしパーゲルはただその気がなかった。彼はそこにある二、三の木彫品を指した。使徒の象に、幼子と一緒の聖母、十字架、二体のピエタ。「中世の木彫品も集めているのかい」。

ツェッケは苦しげな顔をした。「収集じゃない。違う、投資だ。しかしどういうことになるか分からん。突然楽しくなったのだ。これを見ろ、ここの鍵を持った若造、ペトロだ、その通り。これはヴェルツブルクからのものだ。私は知らん、このことは何も分からん。これは実際大したものではない、少しも立派ではない、一しかし気に入っているのだ。この燭台の天使は、一腕はきっと修復されたものだが、私は騙されていると思うかい」。

ヴォルフガング・パーゲルはフォン・ツェッケを吟味するよう見つめた。ツェッケは

小男で、二十四、五歳であるが、すでに丸みを帯びていて、額は髪の毛が後退して広がった。それに彼は黒っぽく、ブロンドでなかった。 — こうしたことすべてが、ヴォルフガングの気に入らなかった。それにまた、フォン・ツェッケが木彫品を鼻屑にしている、自分の絵に関し、一見大いに気を遣っている点も気に入らなかった。ツェッケは粗野な闇屋である。それ以上の者ではない、それであってはならない。彼が芸術に興味を示すのは滑稽である。腹立たしい。しかしヴォルフが最も立腹したのは、自分がこの変貌したツェッケに金を請わなければならない点である。こやつには出来て、それを上品に差し出す。いや、ツェッケは闇屋であってはならない、変わってはならない。彼が金を貸す場合、暴利を取るべきだ。さもなければ、ヴォルフガングは彼と関係したくない。ツェッケのような者から自分は金を贈られたくない。

そのようにパーゲルは[内心で]言って、燭台の天使をうさん臭そうに見つめた。「それで今では燭台の天使か、 — 淫売寄席を君はもう扱っていないのか」。

パーゲルは早速ツェッケの反応から、自分が言い過ぎて、決定的失敗を犯したことに気付いた。彼らはもはや、下手なため口をスポーツのように我慢しなければならない学校にいたのではなかった。ツェッケの顔はひどく赤くなったのに、鼻は白くなった。この印をパーゲルは先の学校時代から知っていた。

しかしフォン・ツェッケは相変わらず、本を読むことを学んでいなかったが、自制する術を学んでいた、(そしてこの点ではパーゲルよりはるかに進んでいた)。彼は何も耳にできなかったように見えた。ゆっくりと彼は燭台の天使をまた置いて、更に憂わしげに恐らく修復された腕をさすって、言った。「そうだ、絵のことだ、まだとても素敵な絵を家に持っているだろう、 — 親父さんの絵を」。

そうか、それじゃこれが所望かとパーゲルは深く満足して考えた。そして声高に言った、「そうだな、とてもいいのがまだ幾つかある」。

「承知している」とツェッケは言って、更に一杯シュナップス[火酒]を注いだ、まずはパーゲルのグラスに、それから自分のグラスに。彼は快適に腰掛けた。「それで君が金を必要とするときには、 — 分かるだろう、絵を買うよ、...」。

これは一撃であった。まさに生意気な言葉への最初の返事であった。しかしパーゲルは何も察知させなかった、「今売るとは思えないな」。

「すっかり知らされているわけではないな」とツェッケは彼に愛想良く微笑した、「先月君の母親は『秋の木々』をイギリス、グラスゴーの画廊に売却したばかりだ。では、乾杯」。彼は飲んで、それから満足して背もたれにかかり、無邪気に言った、「それで、老夫人は結局何を頼りに生きているのかね。紙幣は今日では屑同然だ」。

ツェッケはにやりとはしなかったが、パーゲルは、今朝彼に対して使用した「良い友」という称号が全く誇張であったという感じを強く抱いた。二回の一撃をパーゲルははね除けた。三回目を長く待つ必要はない。よろしい、フォン・ツェッケは昔から毒蛙であった、劣等な敵だ。だから、彼を途中で迎え撃つ方が、もっと良い。 — するとこの件は少なくともけりが付いて、終わってしまう。彼は言った、そしてできるだけ軽く言うように試みた。「私は少しばかり、困っているのだ。少し金を貸してくれるかい」。

「少しとはどれほどの金かい」とツェッケは尋ねて、彼のパーゲルを見つめた。

「いや、実際、沢山ではない、君にとっては些細な額だ」とパーゲルは言った、「十万

マルク、どうだい」。

「十万マルクね」とツェッケは夢見るように言った、「淫売寄席でもそれほどは儲けなかったな、...」。

三回目の一撃で、今回はノックアウトに見えた。しかしヴォルフガング・パーゲルはそう易々と倒されない。彼は笑い始めた、全く陽気に、構わず笑い始めた。それから言った、「その通り、ツェッケ、見上げたものだよ。私は阿呆だ、生意気に偉そうなことを言って、それで君から金を借りようとしている。厚かましい。しかしここに入ってから、何かすぐに苛立ったのだ、...君に分かるか、分からんが、...私はアレクサンダー広場の穴蔵にいて、...」。ツェッケは承知しているかのように頷いた、「無一文でな、...するとこの中は豪華ではないか。成金や成り上がりものじゃないかのようで、本当に素敵だ。一腕が修復されているとすら思えないな、...」。

彼は打ち切って、試すようにツェッケを見た。それ以上彼は何もできなかった、ただもはや口にできなかった。しかしツェッケも今や動かなかったので、彼は言った、「まあ、いい、ツェッケ、金を与えなくてもな。私が悪い、阿呆だった」。

「与えないとは言っていない」とツェッケは釈明した、「ただ聞きたいだけだ、金は金だし。恵んで貰いたくはないのだろう」。

「いや、出来るだけ早く、返す」。

「いつかい」。

「状況によるな、上手く行けば、明日にでも」。

「そうかい」とツェッケは言った、格別喜んでいなかった、「そうかい、一まあ、一杯シュナップス[火酒]を飲もう一その金は何に使うのか」。

「いやな」とパーゲル言って、当惑し、苛立ち始めた、「宿の女将に若干借りがあって、本来少額なのだが、一十万マルクは巨大に響くが、しかし結局は百ドル以上のものではない、とてつもないものではない、...」。

「それでは女将への借財か」とツェッケは全く動ぜずに言って、友を黒っぽい目から注意深く見つめた、「その他には」。

「そうだな」とパーゲルはうんざりして言った、「叔父さんにまだ質入れしているのがある、...」。

すぐに彼はこれは本当ではないと気付いた。しかしこの時は、売却は質入れとは違うと思わずに、放置した。実際、厳密に考えることはない...

「それで、叔父さんに質入れか」とフォン・ツェッケは言って、更に薄暗く試すように見つめた。「いいかい、パーゲル」と彼はそれから言った、「まだちょっと聞かなければならない、一済まんが、金はやはり金だから。ほんのわずかな金といえども、(例えば百ドルだが)何人かの者にとっては大きな金だ。一例えば君にとっては」。

パーゲルは、もはやこの切っ先にもはや注意しないと決めた。結局肝要なことは金を得ることだ。彼は口ごもって言った、「それで質問というのは」。

「君は何をするのだい」とツェッケは尋ねた、「つまり、何で生活するのか、一何か収入のある職があるのか。手数料を取る代理人とか、給料を貰う勤め人とか」。

「今のところ何もない」とパーゲルは言った、「しかしいつでもタクシー運転手になれる」。

「そうか、ならば勿論暮らせる」とツェッケは言って、全く満足しているように見えた。「もう一杯シュナップス[火酒]を所望なら、どうぞ。私は午前の分としては十分だ。一それでタクシー運転手は、…」と彼はまた虐め始めた。この腐肉、この闇屋、この追剥屋、この犯罪者め。(サルバルサンの代わりに砂なのだ)。「タクシー運転手は一確かに食い扶持はいい、そこそこの稼ぎだ、…」。(この意地悪な猿が嘲ること)、「しかし確かにそこそこであって、君が明白に私の金を返せるとは思えない。上手く行ったら、明日にでもと言ったのは覚えているだろう。タクシー運転手ではそうは行くまい」。

「親愛なるツェッケよ」とヴォルフガングは言って、立ち上がった、「君は少し私を虐めようとしているな。しかし今やもうまた金は大した問題ではない、…」。

彼はほとんど怒りで震えた。

「しかし、パーゲルよ」とツェッケは叫んで、全く驚いていた、「私が君を虐めていると。どうしてだい。いいかい。君は明白に恵んで貰うつもりはないと言ったよな。恵んでよければ、夙に若干の紙幣は得ていたろう。君は貸し出しを望み、返済申し出たのだ。一だから尋ねて、返済をどう考えているか聞いているのだ、一それで君は罵っている、分からん」。

「先にただ」とパーゲルは言った、「そう言ったかもしれない。実際はただ週の分割払いで返せるだけであろう。例えば週に二百万マルク、…」。

「昔からの友よ、それは問題ではない」とフォン・ツェッケは楽しげに叫んだ、「昔からの友の間では、そんなのは問題じゃないだろう。肝要なのはただ、君が二度と金を賭博には使わないということだろう、パーゲル」。

両人は見つめあった。

「パーゲル、君が叫んでも」とツェッケは急いで、小声で言った、「無駄だ。私はよく吠えられるのだ。全く意に介さない。君は吠えたいのであれば、さっさと吠え給え。一ほら、私はもう呼び鈴のボタンを押した、一いや、ライマースよ、この殿方は退出なさりたいそうだ。ご案内してくれ。さようなら、パーゲル、昔からの友よ。いつか父親殿の絵を一枚売りたいなら、いつでも会おう、いつでも、...何だと、気でも狂ったのか」とツェッケは突然中断した。

パーゲルは笑い始めていた、軽快に、全く満足して彼は笑った。

「いや、ツェッケ、何とも素晴らしい豚に成り上がったな」とパーゲルは笑いながら叫んだ、「私が淫売寄席と言ったのが、よほど応えたのに違いない、その後詰まらぬ御託を並べやがる。一こいつは昔淫売寄席をやっていたのだよ、貴殿のボスはな」と背後の従者に言った、(従者とボスにとっては磔である)、「知らん振りしていやがる。しかしそれについて言われるとまだ応えるのだ。しかし、ツェッケよ」とパーゲルは突然専門家風に真面目に言った、「今思うに、この明かりの天使の腕は修復されているな、それも劣等に。こうしてやろう、…」。

ツェッケとその従者が防御できないうちに、天使の腕はなくなった。フォン・ツェッケは、あたかも切断の痛みを感じているかのように、叫んだ。従者ライマースはパーゲルに向かって来た。しかしパーゲルは、栄養不良であったが、まだ丈夫な若者であった、片手でその従者を防ぎ、もう一方の手で切断された腕を明かりの受け口と共に持った。「この劣等な偽造を君の思い出の印に持って行こう。旧友のツェッケよ」とヴォルフガングは満

足して言った、「ほら、消えた明かりが[The Light That Failed、キプリング作]。...そう言うわけだ。さようなら、お二人さん、結構な昼食をどうぞ」。

パーゲルは去った。陽気で満足していた。というのは、フォン・ツェッケは実際、金を渡さずに済んで嬉しく思うにしても、パーゲルのポケットに取まっている燭台の天使の腕を思い出さざるを得ないだろう。そしてその痛みの方が大きいだろう。

24

パーゲルは付いて行く

危害を加えられずにパーゲルはツェッケの別荘の門に達した。門を開けると、一人の娘が立っていた。綱にせわしく動くフォックス・テリアを連れた娘で、とても赤い顔をしていた。

「おや、まだいらしたか、お嬢さん」と彼は驚いて、叫んだ、「貴女のことは忘れていた」。

「お聞きなさい」と彼女は言った。彼女の怒りは陽の中で待っていても、その熱さを少しも失っていなかった。「お聞きなさい」と彼女は言って、彼に紙幣を差し出した。「私がそんな女だとお考えなら、結構、御免蒙ります。お金を受け取ってください」。

「ほんの少しですよ」とパーゲルは言った。全く構わなかった、「一足の絹の靴下すらそれで買えません、...いや」と彼は素早く言った、「貴女の腕を取ろうともはや思いませせん。聞いてください。それどころか助言を頼みたいのですが、...」。

彼女は立ち止まって、彼を見つめた。片手に紙幣を持って、引っ張るフォックス・テリアの手綱をもう一方の手に持って、彼の打って変わった調子に全く当惑していた。「お聞きなさい」と今一度彼女は言ったが、しかし脅しは弱いものにすぎなかった。

「ここをずっと行きましょうか」とパーゲルは提案した、「それでは出発。詰まらぬことを言わずに、ちょっと一緒に行きましょう。リーナ、あるいはトリーナ、シュテーナさん。ここ公道で私は何もしません。それに私は狂っていない、...」。

「私は時間がありません」と彼女は言った、「夙に家に帰っていなければならないのに、恵み深いご夫人が、...」。

「恵み深いご夫人には、消えたシュナップス[火酒]を探していたと言えればいいのです。聞いてください。私はたった今、この別荘のいかした奴の許にいて、金を借りようとしたのだが、...」。

「それなのにあなたはお金を私の犬に差し込んで、...」。

「阿呆なこと言わないで、ミーツイ」。

「リースベトよ」。

「聞いて欲しい、リースベト。勿論何も得られなかった、一 貴女が私の金を持ってドアの前に立っていたからな。何か所有する限り、金は手に入らない。だから貴女の犬の首輪に差し込んだのだ、分かった」。

しかし明らかに飲み込むのに時間がかかった、「それじゃ一週間、後を付けたわけじゃないの。手紙を差し込んだわけじゃないのね。犬がそれをなくしたと思って、...」。

「違うよ、リースベト」とパーゲルは厚かましくにやりと笑ったが、しかし情けない気

分であった、「手紙は違う、 — それにお金で貴女の純潔を買おうと思ったのでもない。しかし私に教えて欲しい。質問はこうなのだ、私は今どうしたらいいか。もはや一文無しだ。アレクサンダー広場に小屋があって、その家賃を払っていない。そこに担保として私の彼女が残っている。ただ私の夏の上着をまとめてな。すべての品を売却して、こちらまで来たのだ」。

「本当に」と娘リースベトは尋ねた、「冗談じゃないの」。

「冗談じゃないのだ。まじ本当なのだ」。

彼女は彼を見つめた。彼女は信じがたいほど洗い立てで、清潔に見えた、 — 暑かったけれども、 — 一種サンライト石鹸の匂いがした。ひよっとしたら彼女は彼がまず思ったようにはとても若い娘ではなかったかのかもしれない。その上、彼女は実に精力的な顎を持っている。

彼女は今やそれが実に本当のことだと分かった。彼女は彼を見つめ、それから手の中の金を見つめた。

彼女は今それを返すだろうか、と彼は考えた。それならばペーターの許に帰って、何かしなければならぬ。しかし何をしたらいいか、本当に分からない。何もする気が起きない。いや、どうしたらいいか、教えて貰おう。

彼女はその金を平らに延べて、ポケットに仕舞った。

「それでは」と彼女は言った、「まずは私と一緒に行きましょう。私は家に帰らなくちゃ。 — あなたはやはり私どものキッチンで昼食が必要なように見えますね。とても顔色が悪いし。料理婦は反対しません。恵み深いご夫人も了解です。しかしあなたの彼女があなたの夏の上着を着て、小屋に残っていて、やかましい女将さんがいるかもしれないのに、ひよっとしたら胃の中も空っぽかもしれないと考えると — それなのに、犬の首輪に金を差し込んで、すぐまた新しい女になれなれしく話そうとするなって、 — あなた達男はどうしようもないわね」。

彼女はますます早口で話して、犬を引っ張り、ますます急いで行ったが、彼も付いて来るであろうことに一瞬も疑念を抱かなかった。

そして実際彼は付いて行った、ヴォルフガング・パーゲル、無名とは言えない画架の息子、退役士官候補生、とどのつまりの賭博人は付いて行った。

25

パーゲル夫人は結婚について知る

十一時の二回目の配達の際に、郵便夫はすでにその手紙を配達していた。しかしこの時間の頃、まだパーゲル夫人は用事の途中であった。それでミンナはその手紙を控えの間の鏡の下、作り付けのテーブルに置いた。そこにその手紙はあった、灰色の封筒で、何らかの加工された、かなり豪華の手漉きの紙で、アドレスはまことに几帳面な筆跡で、直立してとても大きく書かれ、前面も背面も隙間なく、切手が、千マルクの印を押されて、一面に張られていた。単に市内郵便であったのであるが。

パーゲル夫人は幾らか遅く、町からまことに暑くなって戻って来たが、手紙にちらと視線を送っただけであった。あら従姉妹のベッティーからだと彼女は考えた。まずは食事に

しまししょう。あのおしゃべり女の用件を聞くのはまだ早すぎる。

彼女がテーブルに座ると、手紙がまた思い浮かんだ。彼女はミンナに取りに行かせた。ミンナはいつものように、彼女の背後のドアの所に立っていた。いつものように別のテーブルの端にヴォルフガングのための食器を無益に置いていた。「フォン・アンクラム夫人からよ」と彼女は手紙を開けながら、ミンナに肩越しに言った。

「急ぐことはなかったでしょうに、恵み深い奥方様、食事が冷めてしまいましょう」。

しかし恵み深い夫人の静寂、強張った姿勢、手紙を見つめる身動きしない様から、大事なことであったと察した。

ミンナは長く、静かに、動かず待っていた。それから咳払いをして、最後に警告して言った、「食事が冷めてしまいます、奥方様」。

「何と言った」とパーゲル夫人はほとんど叫んで、振り向き、全く見知らぬ女性を見るかのように、ミンナ見つめた。「いや、そうね」と彼女は始めた、「ただね、...ミンナ、フォン・アンクラム夫人はこう書いてきたの、...ただ、我らの若君は今日結婚なさる、と」。

そして時間が過ぎた。白髪の頭はテーブルの角にあった。意志の力で再三保たれてきた真っ直ぐな背中が曲がっていた、一 老夫人は泣いていた。

「まあ」とミンナは言った、「まあ」。

彼女はもっと間近に寄った。確かに彼女はこの結婚にさほど悪しきことを感じなかったが、それでも奥方の侮辱、痛み、寄る辺なさを察した。用心して彼女は自分の仕事で草臥れた手を背中に置いて言った、「嘘かもしれませんよ、奥方様、フォン・アンクラム夫人の話はすべてが本当とはかぎらないでしょう」。

「今回は本当よ」とパーゲル夫人は囁いた、「誰かが張り出された公告を読んで、そのことを話したそうよ。今日の十二時半に結婚だって」。

彼女は頭を上げて、探すように壁に沿って見た。それから気を取り直し、視線は自分の腕に探している時計を見いだした。「すでに一時半だ」と彼女は叫んだ、「手紙はそこに置かれたままで、丁度の時に知ることができたはずなのに、...」。

真の痛みはどんなものにも痛みを感じず、意味のないものにさえ痛みを感じず。彼女は十二時半に、今二人が結婚すると間に合って考えることが出来なかったと分かって、一 それでこのパーゲル夫人の苦悶は更に募った。涙を流しながら、震える唇で彼女は座っていて、ミンナを見つめ、語った。「これからは食器の用意は必要ないわ。ヴォルフは今や去ってしまった、ミンナ。あの恐ろしい女、一 あの人が全く私同様にパーゲル夫人なのよ」。

彼女はこの名前の下で歩いて来た道のりのことを考えた。最初は嵐のような急いだ花の道だった。それから萎えた夫の側での果てしない長い年月、夫はますます疎遠な者になりながら、落ち着いて優しく小さな絵を描いており、一方彼女は彼のために健康を追い求めていた。彼の方はその健康にはもはや無関心に見えたのであった。最後に彼女は起床を思い出した。その時またこの白い髪で蘇った夫は、とても詰まらぬ戯言に巻き込まれて、見苦しく死んで家に運ばれて来たのであった。

この遠い道のりの一步一步を彼女は苦勞して歩いて来た。心配のない年はなかった。苦難が彼女のベッドの伴であった。彼女の影は苦悶と言った。しかしこれを経て彼女はパーゲル夫人となったのだ。若い肉体の優しい錯覚から堅固な女性を勝ち取った。今や永遠に

パーゲル夫人と言うのだ。天国に行っても彼女はパーゲル夫人であろう。神が彼女をいつかパーゲル夫人以外のものにするとは全く考えられない。しかしこうしたすべての戦い取ったもの、自分の使命への痛々しい覚醒であったこの変身が、この若い娘の懐の中へ、何でもないもののように落下して行く。一緒になったときのように、だらしなく、二人は結び付けられている。あなたがどこへ行こうとも、私は付いて行きます。あなたの立ち止まる所、そこに私も立ち止まります。あなたの民は私の民です。あなたの民が私の神です。あなたの死ぬところで、私も死にます。そこに私も埋葬されます。主よ、私のためにこれをおこなえ給え。そして死ぬときにのみあなたと私を離し給え。 — そう、こんなものだったの。でも二人はこれについて何も知らない。パーゲル夫人、これは名前ではない、運命なのよ。でも二人は掲示をして、十二時半に登録されるようにしている、 — それで十分なのだ。

ミンナもまさに、彼女を慰めて、正しく言った、「単に戸籍係でしょう、恵み深い奥方様、教会ではないでしょう」。

奥方は少しばかり起き上がって、もっと熱を込めて尋ねた。「そうよね、ミンナ、あたかもそう思う。ヴォルフガングは深く考えていないのよ、単に娘にせかされて、しているにすぎない。彼も戸籍係を十二分なものと思っていなくて、私につらい思いをさせないようにしているのよ」。

「多分」と買収されないミンナは説明した、「戸籍係は必要なもので、教会は必要ないからでしょう。若様は金が足りないのでしょうか」。

「そうね」とパーゲル夫人は言って、自分に都合の良いことのみ聞いていた、「いい加減なものは、また同じように解消されるでしょう」。

「若様は」とミンナは言った、「いつも気楽に考えすぎです。哀れな人間の金の稼ぎ方をご存じないのです。まず奥方様が甘えさせて来られました。 — 今やあの娘がそうしています。 — 男達のがんがんなもので — 生涯この男達は子守娘を必要とします、 — それでもこの男達が一人の娘を見つけるのは、滑稽なほどです」。

「お金を」と老夫人は繰り返した、「二人はほとんど持っていないでしょう。若い娘は虚栄心があって、着飾りたがるものです。 — あの娘にお金を渡そうかしら、ミンナ」。

「でもただ若様に渡るだけでしょう、奥方様、そして賭博ですってしましましょう」。

「ミンナ」とパーゲル夫人は驚いて叫んだ、「何てこと考えているの。彼はもう賭博はしないでしょう、結婚した今となっては。子供も生まれるでしょうに、...」。

「子供はその前に生まれますよ、奥方様。子供は賭博と関係ありません」。

恵み深い夫人は、それを聞き入れたくなくて、テーブル越しに空の席を見つめた。「ミンナ、片付けなさい」と彼女は叫んだ、「もうあの食器は見たくない。私がここで小鳩を食しているときに、 — 彼は結婚を済ませていたなんて」。嗚咽がまた生じた。「ねえ、ミンナ、どうしたらいいでしょう。私はもうここに座ってたくない、部屋にいて、何も起きなかったかのようにしていただきたい。何かしなければならぬでしょう」。

「一緒に出掛けましょうか」とミンナは用心深く尋ねた。

「出掛けるの、一緒に。彼の方は来ていないのよ。結婚するとさえ書いて寄越してないのに。いや、それは全く出来ない」。

「何も知らないかのような振りをすればいいのですよ」。

「私がヴォルフを騙すの、ミンナ。そんなことはできません。私を騙して彼が平気なのに、それに私は気付いているなんて、とても情けないわ。　ー　だめよ」。

「それでは私一人が出掛けましょうか」とミンナはまた用心深く尋ねた。「二人は私には慣れていて、少しばかり騙すことを私は重大に考えていませんから」。

「情けないわよ、ミンナ」とパーゲル夫人は鋭く言った、「それはひどい考えよ。　ー　私は少しばかり今、横になります。ひどい頭痛がしてきた。錠剤のために一杯の水をお願いします」。

そして彼女は自分の夫の部屋へ行った。しばらく彼女は若いレディーの絵の前に静かに立っていた。彼女はこう考えたかもしれない。「私がエトムントを愛したように、あの娘は彼を愛せないでしょう。二人はまた別れるかもしれない。とても速やかに」。

彼女はミンナが向こうで片付けるために行き来する物音を聞いた。彼女は苛立って考えた。ミンナは老いたへそ曲がりだ。一杯の水を持って来るように頼んだのに、いや、まず片付けにかかっている。ミンナの思いのままにさせないわ。明後日ミンナは午後暇になる。その時は好きなようにしていいでしょう。ミンナが今日行ったら、あの若い娘はすぐに、ただそのことで来たと気付くことだろう。これらの若い娘どもがどんなに勘定高いかは分かっている。ヴォルフ[狼]は羊だ。私でも彼に言えよう。彼は娘が自分に惚れて自分を受け入れていると思っている。しかしこの娘はこの住まいと絵とを見たのだ。この絵の額については当然もう承知していることでしょう。この絵も本当は彼のものだとも。彼がまだ一度もその絵のことで要求しないのは、おかしなことだ。でもヴォルフはまさにそんな者で、勘定高くない、....

彼女はキッチンで水道流れる音を耳にした。ミンナは多分冷たい水を持って来ることだろう。速やかに彼女はソファの許に行き、横になった。彼女は毛布を被った。

「もう五分前に水を持って来られたでしょう、ミンナ。私がここにひどい頭痛で寝ているのは知っているでしょう、...」。

彼女はミンナを意地悪く見つめた。しかしミンナは老いた、皺の多い木彫の顔を見せていた。彼女はその気がないときには、何もその心を察せられない。

「それじゃ、分かった、ミンナ。キッチンでは物音を立てないでね、　ー　ちょっと眠りたいから。洗い終わったら、出て行っていい。今日は午後を自由時間としなさい。窓拭きは明日に延ばして。あなたは、まとめて、こっそりとすることができないから。いつもバケツをがちゃがちゃ言わせて。それで私は眠れやしない。じゃあ、さようなら、ミンナ」。

「さようなら、恵み深い奥方様」とミンナは言って、出て行った。彼女はドアをとてこっそりと、少しもがちゃがちゃ言わず閉めた。

浅はかな女とパーゲル夫人は考えた。なんて目をして私を見つめていたことでしょう。老いたフクロウのよう。出て行くか注意していよう。出て行ったら私はすぐにベッティの所へ行こう。ひょっとしたら彼女は戸籍係の所に打ったのかもしれない、あるいは誰かをやったのかもしれない。　ー　ベッティほど詮索好きはいない。そしてミンナより先に戻って来よう。　ー　何でもミンナに知らせることはないのだから。

パーゲル夫人は今一度壁の絵を見つめた。窓辺の女は彼女から目を逸らしていた。こちらから見ていると、女性の頭部の背後の暗い影が分離して来て、輝き、　ー　あたかも一人の男性の頭部がその口を女性のうなじに近付けるかのように思われた。パーゲル夫人は

すでによく経験していた。この度はこれに苛立った。

忌々しい官能性だ、と彼女は考えた。これで若い人は皆駄目になる。永遠に彼らはそれにはまって行く。

それから彼女は今や両人が結婚したからには、この絵は本来半分、若い妻のものだと考えた。そうなるのかしら。

しかし娘がまずこちらに来るべきだ、来るべきよ。昔平手打ちをしたけど、一こちらではもっと待っているものがある、...

ほとんど微笑して彼女は向きを変え、一分後には眠り込んだ。

第四章

町と田舎での蒸し暑い午後

26

監獄でのインタビュー

「聞き給え」と所長のクロツチェ博士はジャーナリストのカストナーに言った。カストナーは選りに選って今日プロイセンの要塞訪問でマイエンブルク監獄に来ていたのであった。「聞き給え。下の町の人々が我々について喋っていることに注意する必要はない。十人の囚人が少しばかり喚くと、セメントと鉄で出来たこの建物では、千人が吠えているように響くのだ」。

「いずれにせよ帝国国防軍に電話なされたのでしょう」とジャーナリストのカストナーは指摘した。

「信じがたいな、...」とクロツチェ所長は発して、長距離電話にまで及んでいる報道機関のスパイ疑惑を問題視しようとした。しかし丁度このとき更に、このカストナー氏は司法大臣殿の推薦状を持参していることに気付いた。更に確かに首相殿はクーノと言ったが、すでにまた大臣は不安定な地位にあって、カストナー氏がその報道を代弁している社民党[SPD]によって、その地位を危ういものにしてはならなかった。「信じがたいことです」とそれ故全くより温厚に続けた、「このおしゃべり網は、公務規定を単に遵守しているのに、大きな事件に仕立てています。監獄で暴動の恐れがあると、私は前もって警察と帝国国防軍に伝達しなければならないのです。五分後に私はまた警報を解除出来たのです。御覧なさい、博士殿」。

しかし博士の称号で呼ばれてもこの男には効かなかった。彼は尋ねた、「いずれにせよ、貴方の見解では暴動の恐れがあったのですか。何故です」。

所長ははなはだ怒った、 — しかしどうしようもない、 — 「パンのせいなのです」と彼はゆっくりと言った、「一人の男にとってそのパンが十分なものでなく、叫んだのです。そしてその叫び声を聞いて、二十人が一緒に叫んだのです」。

「二十人ですか、十人でなく」とジャーナリストは言った。

「百人でも構いません」と煮えくり返った所長は叫んだ、「構いませんよ、千人でも、皆です。変えようがありません。パンは上等なものではない、 — しかし私に何が出来ます。我々の食事予算は、貨幣暴落の後、四週間ふらふら歩いております。上等の小麦を買えないのです。 — 何が出来ましょう」。

「立派なパンを供給すること、 — 役所に文句を言うこと、司法当局に対して借用すること、すべて至急でしょう。 — この人々は規定通りに十分な食べ物を得るべきでしょう」。

「その通りです」と所長は辛辣に言った、「私は首をかけて、ここの連中が立派に食事出来るように努めています。外では無辜の民が飢えているのに、ですよ」。

しかしカストナー氏には皮肉や辛辣さは通じなかった。彼は通路を磨いている囚人服の一人の男を見つけた。彼は、突然まことに好意的に叫んだ、「そこの貴方、お聞きください、お名前は何と仰有います」。

「リーブシュナー」。

「まあ、聞いてください、リーブシュナーさん。正直にお答えください。食事はいかがです、特にパンは」。

囚人は素早く目を所長から市民服の黒っぽい紳士に向けた。まだ何を聞かれないのか確信を抱けなかった。この余所者は検察関係かもしれない。大口叩こうものなら、ぶち込まれるだろう。彼は用心することに決めた。「食事ですか、美味しいです」。

「いや、リーブシュナーさん」とジャーナリストは言った。囚人と話すのは始めてではなかった、「私は報道機関の者です。私に気兼ねする必要はありません。率直にお話しなされても、何の損害も受けません。私どもは貴方に注目することでしょう。それで今朝のパンはいかがでした」。

「そこまでなさるのか」と所長は、怒りで青ざめて、叫んだ、「扇動に近い」。

「ご冗談は仰有らないでください」とカストナー氏は吠えた、「この男の方に真実を話すよう要請することが、扇動ですか。構わず、遠慮なくお話してください。ー 私は社会民主党の報道機関のカストナーです。いつでも私宛手紙を書いてください、...」。

しかしこの囚人はもう心を決めていた、「いつも不平たらたらの方がいます」と彼は言っていて、ジャーナリストの目を誠実に見た、「パンは普通のもので。好んで食べています。ここの中にいる者達が最も声高に叫んで、外部に大抵腹減ったと叫び、尻に満足なズボンがないと言います」。

「そうですか」とジャーナリストのカストナーは眉に皺寄せて、明らかに不満げに言った。一方所長は息がより楽になった、「そうですか、ー 貴方は何の刑ですか」。

「紳士詐欺」とリーブシュナー氏は答えた、「それで今収穫分遣隊が出発するそうだ、好きなだけ、煙草と肉を得られて、...」。

「結構」と手短かにジャーナリストは言っていて、所長の方を向いた、「更に進みましょうか。もう一房覗きたいのです。模範囚のおしゃべりには傾向があるのが分かりますからね。皆今の地位を失いたくないのです。紳士詐欺か、ー 紳士詐欺師に売春婦のひも、これは世にも信用できない輩です」。

「まずはこの紳士詐欺師の陳述は貴方にとって無視できないように見えますな」、ー 所長はブロンドの髭の背後で微笑した。

ジャーナリストは見ていず、聞いていなかった。「それに収穫分遣隊ですと。大農場主のために奴隷作業をさせるとは、ポーランド人でさえ嫌がるというのに。低賃金で、貴方の発案ですか」。

「違いますよ」と所長は好意的に言った、「違います。プロイセンの司法当局、貴方の党派の人達が考えたことです、カストナーさん、...」。

27

ペートルア追放

「トゥーマン夫人」とペートルアは女将のキッチンで言った。彼女はみずぼらしい夏の上着を固く上から下までボタンを掛けて、少しも部屋向かいの女性のこと、つまり粋な、しかし飲んだくれのアレクサンダー広場のイーダのことを気にしていなかった。イーダはキ

キッチンのテーブルの許に座っていて、立派な砂糖衣の渦巻パンをミルクコーヒーに浸していた。 — 「トゥーマンさん、少し私に出来ることないかしら」。

「まあ、あなた」とおまるマダムは流しの所で呻いた。「また何をしたいと言うの。あの人が帰って来るのか時計を見るつもり、それとも腹が減っているの」。

「その両方よ」とイーダは、その低い、火酒でいがらっぽくなった声で言って、口の中の一個の砂糖の上に注ぎながらコーヒーをすすった。

「新鮮なニシンの内臓を取って、うろこも取ったし、あなたではヴィレムの好みのポテトサラダは作れないわ。 — 他には、と」。

彼女は見回した、しかし何も思い浮かばなかった。

「懸命に働いて来たから、まだ上品な結婚式に間に合って、教会のドアの所に立てることでしょう。それが、今は一時四十分で、花嫁ときたら、まだ裸の脚に男物の上着を着て歩いている。いつも騙されてばかり」。

ペートラは一脚の椅子に腰掛けた。突然少しばかり胃が痛んで、来るべき苦痛のかすかな予兆の感じがし、膝が弱って、再三汗が噴き出した。これは単に窒息性の蒸し暑さによるものではなかった。しかしそれでも彼女の気分はまことに良かった。彼女の内部に大きな、幸せを得る確信があった。彼女は両人が話すがままに任せた。もはや以前の誇りもなかったし、恥じらいもなかった。彼女はどこへ道が進むのか知っていた。その道が目標に通じていること、それが肝要であった。その道が困難であることは、問題ではなかった。

「ただゆっくりと椅子に座りなさいよ、レディーの方」と粋なイーダはまた嘲った、「さもないと椅子は保たないわよ、貴女を結婚式に連れに、新郎が戻って来るまで、保つか保証できない」。

「イーダ、私のキッチンでこの娘を虐めないでよ」と流しでおまるマダムが警告した、「これまであの方はすべて支払ったのだし、支払うお客には愛想良くしないと」。

「皆終わりがあるのよ、トゥーマンさん」とイーダは賢明に言った、「私は男のことは承知している。いつ銭がなくなるか、分かるわ。離れて行くのよ。 — この娘の男は今日帰って来ない」。

「そんなこと言っちゃだめよ、イーダ」とトゥーマン夫人は泣きそうに嘆いた、「上着と裸の脚の娘さんをどうしたらいいの。 — まあ、いや」と彼女は大声で叫んで、深鍋を投げ、がたがた音がした。「すべて思いのままに行かない。出来れば、一枚の服を買って、縁切りしたいわ」。

「服を買うなんて」とイーダは馬鹿にした、「阿呆の上塗りよ、トゥーマンさん。近くの警察にかくかくしかじかと言えればいいのよ。 — すぐこの家の前面に一人住んでいるじゃない。 — 例えば詐欺と言えればいいのよ、 — すると娘と一緒に交番のあるアレクサンダー広場に連れて行かれる。すると、お嬢さん、何か着られるわよ、分かるでしょう、青い制服にスカーフ」。

「私のことは心配して頂かなくていいです」とペートラは穏やかに、少しばかり弱々しく言った、「昔あなたは一人の方に棄てられたのでしょう」。彼女はそれを言いたくなかった。しかし心が一杯になっていると、口が滑ってしまう、 — それで彼女は言ってしまった。

一人の男にしたたかに胸を殴られたかのように、イーダの息が止まった。

「言い当てたね、娘さん」とトゥーマン夫人はくすくす笑った。

「一人の方って、娘さん」とイーダは声を高めて、言った、「一人の方と言ったわね。百人と言いなさい。百回ときかないのだからね。私は凍えた脚と太り膝で立っていて、大きな時計の針が進んで行ったよ。阿呆な私とやっと気付いたね。またも騙された、とね。でもね」と彼女は憂鬱な思い出から攻撃に移った、「だからと言って、結婚式の日に着るもの一つない娘から、とやかく言われたくないね。私が渦巻パンを口にに入れるたびに、物欲しげに見つめていて、コーヒーをすすむたびに回数を数えている女になんか、...」。

「その調子、その調子」とトゥーマン夫人は喜んだ。

「そもそもの話し。上品な娘さんが、追い詰められた状況のとき、鼻を利かせて他人のキッチンにやって来て、澄ました伯爵夫人のように、私に何かすることないかしらなんて尋ねて、いかがなものかね。何も無いときは、物乞いしなければならないと私の親父にしっかりたたき込まれたものだよ。あんたが『イーダ、とても腹減ったの。渦巻パンを一個頂戴』と言っていたら、一個恵んでやったよ。そもそもトゥーマン夫人。この南京虫の小屋のために私は毎日一ドル支払っています。それなのに階段には夜の明かりもなく、殿方達はいつも文句言っています。 — 笑ってこう言っている場合じゃないのよ。『言い当てたね、娘さん』と。あなたは私に愛想言ってかばうべきでしょう。生意気に一人の娘は、いつもただで自分の彼氏と眠って、楽しんでいてよ。トゥーマン夫人はその娘が金を稼げるか分かっているの。私どもは働きません、通りでは引っかけません、そんなことはしません、お上品でございますから、と。 — いえね、トゥーマン夫人、あなたが不思議でならない。私には男運がないと私を嘲って言う厚かましい小娘を、これを通りに放り出さないのなら、 — 私が出て行きます」。

粹なイーダは怒りで赤くなっていた。渦巻きパンをまだ手に持っていて、真っ赤であった。自分がどんなに侮辱されたか明らかになるにつれ、ますます赤くなった。トゥーマン夫人とペートラはこの発生した嵐を、全く当惑して見ていた。誰も、どうして何故生じたのか分からなかった。(粹なイーダも、ただ良く考えて見さえしたら、自分のおしゃべりの結末に、この兩人同様にびっくりしたことであろう)。

ペートラは起き上がって、自分の部屋に滑り込みたかったことであろう。鍵を閉めて、ベッドに身を投げたかったことだろう、 — ベッドがいい。しかし彼女はますます気力がなくなった。時々耳鳴りがし、目が回った。それから怒りの声は全く遠方のものに聞こえた。しかし突然その声がまた間近になり、直接耳許に響いた。そして新たに目が回った。それから彼女のうなじから背中にかけて、炎が走り、不安の汗が噴き出した、...。彼女がより正確に計算してみると、長いことはやまともな食事をしていなかった。いつも単に、ヴォルフがまさに金を持っているときに、ベッドの端で、サラダ付きのボックヴルスト[合挽ソーセージ]かシュリッペ[ロールパン]とレバーヴルストであった。そして昨日の朝からそもそも何も食していなかった、食事を摂ることが大事だったのに。彼女は素早く部屋に行こうとした。それから鍵を閉め、とりわけ固く閉ざそうと欲した。警察がノックしても開けない、ヴォルフ GANG が来たとき、ようやくまた開けよう、と。...

「どうしたのよ」と全く遠方でトゥーマン夫人の嘆きを聞くように思われた、「娘さん、生意気なおしゃべりをするから困ってしまうよ。一文無しの人他の人々の渡世について話してはなりません。イーダは毎日一ドル入れている大事なレディーです。 — 非難す

るなんて、とんでもない。私のキッチンから出て行きなさい。もう少し手早く。さもないともっとひどいことに、...」。

「駄目よ」とイーダは耐え難いほどに鋭く叫んだ、「そんなのは駄目。この娘が出て行くか、私が出て行くか。こんな小娘に侮辱されるなんて、住まいから追い出さな。さもないと私が出て行く、...」。

「でもイーダ、お願い」とトゥーマン夫人は嘆いた。「分かるでしょう、この娘の様が。漆喰の上の唾よ。体に何も着ていない。 — こんな状態で追い出せない」。

「出来ないの、トゥーマン夫人、あなた出来ないの、 — だったらはっきりさせましょう、 — 私がすぐに玄関に出ます、トゥーマン夫人」。

「イーダ」とトゥーマン夫人は頼んだ、「彼氏が戻って来るまで、待ちましょう。頼むわ。 — そしたら即刻兩人を直ちに追い出しましょう。早く出て行きなさいよ、阿呆な女だね、あんた」と彼女は興奮してペートルに囁いた。「あなたの姿が見えなくなりさえすれば、落ち着くのよ」。

「すぐに出て行きます」とペートルは囁いて、立ち上がった。突然彼女は立ち上がることが出来て、暗い廊下へ通ずる開放されたキッチンのドアの黒い穴をよく見る事が出来た。しかし女性達の顔を彼女は見ていなかった。彼女はゆっくりと歩いた。二人はまだ何か話していた。ますます早口で、ますます声高に、しかし彼女はそれを正確に聞いていず、それ故理解も出来なかった。

その代わり彼女は歩くことが出来て、ゆっくりと明るい蒸し暑さの中、黒い穴へ向かって行った。その奥に「彼女らの」ドアのあるほとんど暗い廊下があった。彼女は単に足を踏み入れ、鍵を閉めさえすればよかった、 — するとベッドがある、...

しかし彼女は通り過ぎた。夢の中のようにであった。彼女の肢体は、頭が考えていた所とは別な所へ進んだ。彼女は通り過ぎながら、更に部屋を一瞥した。 — ベッドをもっと整理しなければ、と彼女は考えて、すでに通り過ぎていた。すでに入口のドアの許に来ていた。彼女はそれを開けて、敷居を一步越えて、また背後を閉めた。

左右の明るみの中に近隣の女性達の顔があった。

「喧嘩でもしたの」と一人の女性が尋ねた。

「追い出されたんだろう、お嬢さん」。

「まあ、どうしたの。蒸された死体のよう」。

しかしペートルはただ軽く否定するように頭を動かした。自分は話してはならない、さもないと目が覚めて、またキッチンにいることだろう、二人が自分に叱責して、呼びかけることだろう、....。こっそりと、ほんのこっそりと、さもないと夢が消える。彼女は用心深く手すりを握って、一段低く下りた、 — そして実際より低く行った。それはまことに夢の階段であった。その階段をより低く、上がらずに行った。

それから彼女は更に下って行った。

彼女は急がなくてはならない、上の方でドアがまた開かれた。彼女らが何か彼女の背後に呼びかけた、「娘さん、巫山戯たことしないで、どこへ行くの。そんな裸で、また上がって来なさい。イーダも許しています、...」。

ペートルは手で拒否の仕草をして、更に低く進んだ。降りて行き、井戸の底に来た。しかし下の方には明るい門があった、 — メルヘンのようであった。そんなメルヘンがあ

って、ヴォルフガングが彼女に語ったことがあった。さて彼女は明るい門を通過して、陽光の方へ出た、一 通路を通過して、陽の当たる中庭を越えて、...そこには通りがあった。

一 ほとんど人気のない、とてもまぶしい通りであった。

ペートラは上を見、下を見た、一 ヴォルフはどこにいるの。

28

マイヤー検査官は取り入る

田畑検査官マイヤー 一 黒人マイヤーは 一 仕事始めの後すぐ一時に外の砂糖大根の畑へ赴いた。丁度彼が思い描いていた通りであった。代官のコヴァレフスキーは、監視が緩く、女性達の単に表面的な草むしりを大目に見ていた。雑草の半分はまだしっかりと大地にあった。

早速小さなマイヤーは大きく息をして、真っ赤になって、罵り始めた。「淫らな様だ、立ち回って、女達に取り入り、監視の目は向けず 一 情けない意気地なしだ、...」等々で、全体すっかりお馴染みの、しまりのないときいつも繰り返される調子の波であった。

代官のコヴァレフスキーは怒りの急流を、一言も反論せず甘受していた。灰色の、ほとんど白い頭を垂れて、その際一本、二本の詰まらぬ雑草を自らの手で、埃っぽい、固い地面から引き抜いていた。

「いちゃいちゃしちゃならん、監視するんだ」とマイヤーは叫んだ、「勿論いちゃいちゃが楽しいだろうが」。

老男性に対する全く根拠のない嫌疑であった。しかしマイヤーは郎党間で笑いを誘い、唐檜の林へ向かった。そこで彼の七面鳥の赤みはすぐに通常の顔色となった。一 健康な赤茶色で、一 そして腹が揺れるほどに笑った。間抜けな老公を笑ってやった。少なくとも三日間、この嘲りは有効であろう。怒りの痕跡を留めずに、怒りを爆発させる術を会得しなければならない。さもないと郎党に怒って、死んでしまう。

騎兵隊長は、老将校で、徴募兵判定者であったが、これが出来ない。彼は怒って、真っ白になり、真っ赤になる。そしてこのような発作の後、二十四時間全く仕事にならない。本当に滑稽な奴、偉大な男。

今日彼がどんな郎党を連れて来るか、興味がある。そもそも掴まえられたらの話のだが。連れて来たら、勿論素晴らしい連中だろう、騎兵隊長殿は義務契約を結んで来るのだから

一 そして自分マイヤーは連中とどう付き合うか考えなければならない。文句を言うことはない。

きっと上手く行くだろう。自分、小さなマイヤーは、いつだってすべての大きな男達とやって行ける。肝要なことは、二、三の可愛い娘が付いて来るということだ。アマンダは今の所注文はない。しかしポーランド女ときたら、全く別な趣向で、情熱がある。一 とりわけ 一 何の計算もしていない。黒人マイヤーは自分を忘れて思わず歌った。「薔薇と娘は手折られたがるのだから」。

「若造よ、一 聞かれておるぞ」と脅すような声がした 一 そしてびっくりして田畑検査官のマイヤーは道端の一本の唐檜の下に自分の雇主の義父たるフォン・テッシュー農業顧問官が立っているのを見た。

下の方に老領主が、それにこのようにうんざりするほど暑い夏の日、完全に服をまとして、つまり高い折り返し長靴に、緑のローデックロスのズボンを着用して立っていた。しかし腰の方は、太鼓腹で、単に絵柄のピケ織りの狩猟用シャツを着ていた。それは広く開いて、灰色のもじゃもじゃ毛に、汗の浮き出た胸が見えていた。それから更に上の方は羊毛となっていた。つまり赤みがかった、灰色の — 白黄色の、羊毛のようか顔一面の髭である。赤い団子鼻に、両の、策謀的で、満足げに輝く小さな目、それから上に緑色のシャモア毛の総付きローデックロス帽子。全体、枢密農業顧問ホルスト＝ハイント・フォン・テッシュォーで、二つの騎士領と八千モルゲンの森の所有者、要するに人呼んで「老領主」であった。

勿論この老領主はまた手に二、三本の力強い棍棒を持っていて、彼の狩猟用馬車はきつとどこか隅の方に止めてあるのであった。田畑検査官のマイヤーは、老領主は彼の義理の息子の役人を嫌っていないと知っていた。彼はすべての小さな追従者と上品さを憎んでいたからである。それ故マイヤーはすぐ遠慮なく言った、「ちょっと薪をお探しですか、農業顧問官殿」。

フォン・テッシュォー氏は晩年二荘園を請負に出していた。ノイローエは義理の息子に、ビルンバウムは息子に出していた。自分用には単に「二、三の唐檜」を所有していた。自分の八千モルゲンの森をそう呼んでいたのである。彼は息子と義理の息子から最も高額な請負料を巻き上げて（奴等が私をペテンにかけようとしたら、愚かなことだ）、それに自分は悪魔のように哀れな代物を追いかけていた、つまり森の利用を心にかけていた。何も無駄にできない。外出のたびに彼は自ら狩猟馬車に枯れた薪を一杯積み込んだ。「私は婿殿のように上品な育ちじゃない。薪は買わない。自らの唐檜からも買わない。貧者の権利を求めるのだ、 — ハッハッハッ」。

しかし今回彼は薪収集の意図を知らせる来はなかった。手に棍棒を持って、彼は憂わしげに髭の老公の肩の窪みまでの高さの若造を観察していた。ほとんど案じて彼は尋ねた。「また巫山戯たことをしたんだろう、若造。私の妻は憤激している。手折られた薔薇とは少なくとも小間使いボックスか」。

健気な息子のように丁重に上品にマイヤーは答えた、「枢密顧問官殿、本当に二人でただ家禽の数を数えていたんです」。

唐突に老公はすみれ色になった。「貴方と私の家禽の数と何の関係がある、おい。私の小間使いと何の関係がある。貴方は私の義理の息子の役人だ。私の小間使いとは関係ない、分かったか、私とも関係ない」。

「その通りです、枢密顧問官殿」と小さなマイヤーは従順に穏やかに答えた。

「私の妻の小間使いでなくちゃならんのか、マイヤー。若造のアポロよ」と老領主はまた嘆いた、「娘は多いだろうに。老人の気持ちも考えてくれ。その娘でなくてはならんとしても、何でまた妻がそれを目にするように仕向けるのだ。私は事情は分かっている。私も昔は若かったからな。私も我慢できなかったものだ。 — しかし貴方がカサノヴァだからと言って、私が怒らにゃいかんのか。私は貴方を追い出すようにと言われたんだ。私は妻に言った。そうは行かん。私の役人ではない。私は追い出せない。おまえが小間使いを追い出せ、と。 — 『そうは行きません。ただ誘惑されたのですから』と妻は言っている。『その上この娘は有能です。立派な家禽の小間使いは数が少ないのです。田畑の役

人は濱の真砂ほどおもしろいでしょう。 — そう言って私に仏頂面をするのだ。私の義理の息子が戻って来たら、早速妻は彼の耳に入れるぞ — ほら見ろ」。

「単に家禽の数を数えていたのですよ」と小さなマイヤーはともかく主張した。「何も白状しないこと」がすべての卑小な犯罪者達の合い言葉であるからである。「バックス嬢は数え方が下手で — 教えてやったのです」。

「そうか」と老人は笑った、「きっとおまえから做うことだろう、息子よ、面倒な計算をな」。そして大声で笑った、「ちなみに義理の息子が電話して来た。郎党を得たそうだ」。

「有り難や」とマイヤーは期待して言った。

「ただまた取り逃がしたそうだ。ただ少しばかりまた高圧的に司令したのだろう。私には分からん。何のことか分からん。私の孫のヴィオレットが電話に出た。彼はフルステンヴァルデに居座っている。 — 分かるかね。いつからフルステンヴァルデはベルリンなのだ」。

「質問してよろしいですか、枢密顧問官殿」と小さなマイヤーはいつも上司や上役に対して用いるすべての丁寧な言葉で言った、「今晚駅まで乗り物を出すべきでしょうか、どうでしょう」。

「分からん」と老公は言った、「私がおまえらの荘園もことに介入して欲しいのだろうがな、息子よ。後でしくじったと分かったら、私の指示だったとなるのだ。 — いや、

— ヴィオレットに尋ねろ。孫が知っている。あるいは孫も分からん。おまえらの荘園では誰も分からんのだ」。

「その通りです、枢密顧問官殿」と上手なマイヤーは言った。

(老公とは上手く付き合う必要がある。騎兵隊長がいつまで請負をするか誰も分からない。 — ひょっとしたら老公は私に役人として任せるかもしれない)。

老領主は二本指で鋭く口笛を吹いた。「棍棒を私の荷車に載せてくれ」と彼は恵み深く言った。「砂糖大根はどんな具合だ。今頃耕しているんだろう。大きくならんのか。おまえらは偉くて、硫酸塩のアンモニアを全く忘れてしまったのだろう。待てども待てども、誰も肥料をやらない。ほっとけ、賢い子なら教えずとも分かろう、とな。阿呆な老いぼれと笑うがいい。良い朝をな」。

29

警察本部室の騎兵隊長

アレクサンダー広場の警察本部の蒸し暑さには卒倒されそうであった。通路では発酵した尿や、腐った果実、風通しの悪い、湿った衣服の臭いがした。至る所に人々が立っていた、灰色の、皺の多い顔と、消光した、あるいは野蛮にきらめく両目の灰色の人影であった。疲れた警官達は鈍くなったり、あるいは苛立っていた。フォン・ブラクヴィッツ騎兵隊長は、憤怒で逆上し、二十人ほどの人々に尋ねて、何ダースもの通路を走り、果てしない階段を上がり、再び下った末に、ようやく最後に、三十分後に、大きな、不潔な、臭いのする職務室に座ることになった。向こうでは、ほとんど数メートル離れていない所に、窓の前を市電がガタガタ走っていた。その音は、灰色のくたびれた窓から見えるよりももっと聞こえた。

フォン・ブラックヴィッツは自分が一人役人を相手にしているのではなかった。隣のテーブルでは平服の別の役人が青ざめた顔の大きな鼻の男を何らかの拘摸の件で訪ねていた。奥の別のテーブルでは四人の男達が頭を付き合わせて、休みなく互いつぶやいていた。その中に「犯罪者」もいるか分からなかった。皆がワイシャツ姿だったからである。

騎兵隊長は自分の報告をした。まず手短かに、正確に、自分の怒りを抑えて、それからまことに活発に、ほとんど声高に、あたかもまた突発事件に対する憤激に駆られているかのように語った。役人はくつろいで見える平服の男であったが、目を垂らして、質問を挿まざ聞いていた。あるいは聞いていなかったかもしれない。いずれにせよ彼はずっと三本のマッチを組み合わせて、それが倒れないように気遣っていた。

さて騎兵隊長が終わると、その男は見上げた。色合いのない目で、色合いのない顔、短い口髭で、一切が少しばかり悲しげで、ほとんど埃っぽく、しかし無愛想ではなかった。

「どうしたらいいのです」と彼は尋ねた。

騎兵隊長にとっては一つのショックであった。「奴等を掴まえるのです」と彼は叫んだ。

「何の罪で」。

「契約を守らなかったから」。

「しかし彼とは契約を結んでいなかったのでしょうか」。

「いや、口頭で結んでいる」。

「それは否認されるでしょう。証人がいますか。斡旋所の主人は貴方の主張を保証しないでしょう」。

「保証しない。しかし刈り手職長、かやつは三十ドル私からだまし取ったのです」。

「それは聞かなかったことにしましょう」と小声で役人は言った。

「何ですと」。

「貴方は外貨を合法的に得たという銀行の証明を持っていますか。外貨を購入することが許されたのですか。外貨を更に与える許可を得ていたのですか」。

騎兵隊長は、かなり白くなって座っていて、唇を噛んだ。これが国家が彼に許す援助なのだ。自分は騙された、一そして自分は脅される羽目になる。こやつらは皆、屑紙幣の代わりに外貨を持っているのに。自分の前の灰色のこの男もポケットに外貨を有することは、賭けても良からう。

「その男はほっときましょう、フォン・プラクヴィッツさん」と役人は宥めて言った、「その男を捕らえて、ぶち込んで、何の益がありましょう。金はどうになくなっていて、その件で奴等を掴まえることもできません。事件につぐ事件、日々刻々と続いて行きます。毎日の捜査記事はとても長くて、一意味のないことです。そうでしょう」。しかし突然仕事を申し出た、「勿論、お望みでしたら、乗車券に関しては、...処分をお望みならば、...私は文書を起草しましょう、...」。

フォン・ブラックヴィッツは両肩をすくめて、結局言った、「私は収穫が待っています。お分かりのように、パンにつぐパンです。数百人分の十分なパンがあります。私は外貨を趣味で彼に与えたわけではなく、単に刈り手がいないものですから、...」。

「その通りですな」と相手は言った、「分かります。それではその件は没としましょう。シュレーゲン駅の周辺には十分斡旋人がいます。きっと刈り手は見つかりましょう。前払いしないことです。斡旋人にもそうしてはなりません」。

「そうですな」と騎兵隊長は言った、「それじゃ試してみましよう」。

隣のテーブルでは、大きな鼻の泥棒が今や泣き出した。惨めな様であった。彼はもはや嘘が言えずに、きっと泣くほかなかったのであろう。

「それでは、有り難う」とフォン・ブラックヴィッツはほとんど自分の意志に反して言った。そして突然低い声で相手に、同病者に対するように、ほとんど戦友的に言った、「まだ　－　ここいらは　－　皆こんなものですか」と彼は曖昧な手の仕草をした。

相手は両肩を上げて、また絶望的に落とした。彼は躊躇いがちに始めて、結局こう言った、「昼からドルは760000マルクです。人々は何が出来ましよう。空腹は辛いですから」。

騎兵隊長は同様に絶望的に両肩を落として、無言でドアに向かった。

30

豊かな人々の許のパーゲル

活動的な人間でも、人生の一、二時間、無気力な感情に襲われて、ある実存の転換に達し、両手を落とすものである。防ぐ術もなく、対抗する考えすらなくて、成り行きに任せて進む、　－　自分に襲って来るかもしれない一撃を前にうなじを引き込めることすらしない。人生の奔流での一枚の葉よ、行くがいい。急流に従って、その葉は汝を岸辺の斜面の下、より静かな川へ運ぶことだろう。汝には旋回に任せることしか残っていない、没落か、新たな停滞か、　－　分かるはずもない。

ペートラ・レーディヒは半裸で追放されたが、数語発していたら、キッチンでの二人の女性の嵐は静まっていたことだろう。　－　彼女が語ってさえいたら、すべてはかくもひどいことにはならなかったであろう。言葉はすべてを変える。言葉は鋭い縁の角をそぎ落とす。　－　すでにすべては全く変わってしまった。今はどんな具合か。この頑なな沈黙さえなければ良かった。この沈黙は高慢さを絶望同様に、空腹を軽蔑同様に覆い隠してしまう。

ペートラ・レーディヒが、自分の部屋の開けられたドアを通り過ぎるよう強制するものは何もなかった。入って、鍵を回す。これを彼女はして良かった。しかし彼女はそうしなかった。人生の波がその葉を持ち上げ、高く持ち上げた。すでに余りに長く、その葉は岸辺の隅に置かれていて、ただ時折震えて旋回の最後の流れに従っていた。今や波はこの無意志の女性を外へ押し出し、　－　外の通りの、完全に得体の知れない所に至った。

午後であった。ひょっとしたら三時か、三時半かもしれなかった。　－　労働者達はまだ工場から戻って来なかった。女達はまだ家事の手配をしていなかった。店の窓の奥、店の小暗い、かび臭い奥の部屋に店主が座っていて、頷き、うたた寝をしていた。顧客は一人も見えなかった。とても暑かった。

一匹の猫が瞬きしながら階段の石上にいた。通りの反対側から一匹の犬が眺めていた。しかしその甲斐はなく、犬は穏やかな薔薇色の喉を大きく開けて、あくびした。

まだ多分に明かりがまぶしい太陽は、ただ靄の背後に見えた。赤く、縁を越えて煮立つ白熱のボールのようであった。何であろうと、家の壁であれ、樹皮であれ、ショーウィンドウであれ、舗石であれ、バルコニーの格子の洗濯物であれ、車道の一頭の馬の放尿であれ、　－　すべてが息づき、あえぎ、汗ばみ、臭った。暑く、灼熱の暑さであった。立ち

止まっている娘にとって、町のうなり声を聞いている按配であった。ある小声の、単調な、いつも思わずうめく物音で、町中が煮立っている按配であった。

ペートラ・レーディヒは待っていた。両目を物憂く明かりに向けて、どこ、いずこであれ、構わず、葉を更に押し進めて行く筈の何らかの衝撃を待っていた。しばらく彼女は、この犬から何らかの衝撃が発生するかのように、努めて向こうの犬を凝視していた。この犬は見返した、— それから犬は寝そべり、暑さにあえぎながら、四肢を伸ばし、眠り込んだ。ペートラ・レーディヒは立っていた。いや、彼女はうなじを引き込めなかった、— 一撃でも今は救いとなったろう、— しかし何も生じなかった。町は暑さでうなっていた。

そして彼女が何かを待ちながら、過度に暑いゲオルゲ教会通りに立っていたとき、彼女の最愛の者、ヴォルフガング・パーゲルは、ある他人の家の中、ある他人のキッチンに待機して座っていた、— 何を待機しているのか。彼の案内者、洗いたてのリースベトは家の奥に消えていた。クロムメッキされた金具付きの真っ白な竈の許、一人の別の若い娘が歩き回っていた。リースベトはこの娘に二、三言ささやき、告げていた。鍋が電熱器の上でカタカタ熱く煮立っていた。ヴォルフガングは座って待っていて、待ちきれぬ思いで、肘を膝の上に立てて、顎を手で支えていた。

このようなキッチンを彼はまだ見たことがなかった。舞踏会場のように広く、白く、銀製、赤銅色、電気釜が鈍く堅実な黒色であった。— その中程を手すり走りが走っていて、腰の高さで、白い材木、これが一種の演台を区切っていて、仕事部屋と座席場所を区別していた。二段の階段があった。下の方に竈、台所台、鍋、戸棚があった。しかしパーゲルの座っている上の方には、長い食台があって、真っ白で、それに快適な白い椅子があった。いや、暖炉でさえ、ここでは、清潔な、白い継ぎ目のある美しい、赤く焼かれた煉瓦から出来ていた。

上の方にヴォルフガングは座っていた。下の竈の所で、その見知らぬ娘が働いていた。

彼は無関心に、高く明るい窓から、ぼんやりと、陽光で輝く庭を眺めていた。窓の前にはブドウの木が掛かっていた。— 勿論窓の前に格子があった。彼はとりとめもなく考えざるを得なかった。犯罪者を格子の中に囲うように、富裕者も格子の背後に隠れ、そこでようやく安心を得る、— 銀行の格子、金庫の鋼の壁、やはり格子に違いない装飾品の鑄造の鉄、その別荘の鋼製の巻き上げブラインド、警報装置の背後で安心を得る。奇妙な類似だ— 元来それほど珍しくはないが、しかし私はとても疲れた、...

彼はあくびした。丁度娘は竈から彼の方を見た。彼は頷き、軽く微笑した。真面目さを強調していないわけではなかった。それで更に一人の娘か。この娘も感じが悪くない。いや娘達は十分だ。いつでも頷いて、共感してくれる。— しかし一体私は何をするべきか。ここに座っていてはなるまい、...。私はそもそも何を待っているのだ。このリースベトではないだろう。この娘は私に何と言うのだろう。祈り、働きなさい。早起きは三文の得。仕事と勤勉、これが翼となります。仕事は市民の誇り、仕事で人生が素敵になります。...しかし仕事はやはり恥ではない。どの労働者もその報酬に値する。それ故彼もブドウ畑で働くべきであろう、働いて絶望しないことか、...

いや、ヴォルフガングはまた考えて、はなはだ気弱に微笑した。ほとんど少しばかり反吐を覚えるほどであった。何と人間どもはすべてを格言にまとめて、単にこう納得してい

ることか、人間は働かなければならない、仕事は何か善なるものである、と。最も良いのは人間どもが、皆ここで私のように、何もしないで座っていて、何かを待つことだろう、それが何か私自身分らないが。ただ夜の賭博台では分かる。球がカタカタ音立ててきしり、すぐに穴に落ちるとき、――そのとき自分が何を待っているか分かる。しかし球がそれから穴に落ちるとき、望み通りのものであれ、別のものであれ、――そのときにはもはやまた分からなくなる。

彼はぼんやり凝視した。彼は劣等な頭の持ち主ではなかった。いや、頭の中で想念が生じた。しかし彼は零落し、怠け者になっていて、徹底して考えることを好まなかった。何故か。私はこんな者であり、あり続けた。永遠のヴォルフガング・パーゲル。自分は全く無意味に彼女の財産を売り飛ばして、ただ金を借りにツェツケを訪問した。しかしツェツケの許に着くと、自分は同様に無意味に、ただ意地悪な言葉のせいで、金の見込みをすべて不意にした。そして――また無意味に――道で出会った最初の人間に従って、ここに今座っている。――陰鬱な、浅い死んだ川の無意志な葉、すべての無意志な葉っぱどもの象徴。ぐったりとして、才気がないわけでもなく、財産さえ欠けるわけでもなく、愛敬に欠けるわけでもない、――しかし実に老ミンナの言った通りだ。今やまた子守娘が来るに違いない、彼の手を取って、何をすべきか告げるに違いない。実際、今や約五年前からの退役士官候補生に他ならない。

彼がここにいるという知らせは多分リースベトを通じて家中に広まっているのであろう。今や太った女性が入って来た。レディーではなく、一人の女性。彼女はヴォルフに素早く、ほとんど当惑した視線を向けて、大きな声でキッチンの竈の許で言った。「ご主人の電話がたった今ありました。食事は丁度三時半です」。

「分かった」と竈の側の娘は言った。女性は再び出て行った。ヴォルフガングに二度目の吟味の視線を投げかけることはなかった。

詰まらぬ野次馬だ。すぐにずらかるよ。

新たにドアが開いた。お仕着せを着た、一人の従者が入って来た。従者である。彼は太った女性のように何らかの口実を使わず、キッチンを横切って、両階段を上げて、テーブルのヴォルフガングに近寄って来た。従者はすでに中年の男性で、しかし色艶のいい好意的顔をしていた。

彼はヴォルフガングに、少しも当惑せずに手を差し出して、言った。「ホフマンと申します」。

「パーゲルです」と少し躊躇った後、ヴォルフガングは言った。

「今日はとても蒸し暑いです」と従者は親しく言った。微かな、しかしとても明瞭な訓練された声であった。「ちょっと冷たいものをお持ちしましょうか、――一本のビールとか」。

ヴォルフガングは一瞬考えて、それから言った、「グラス一杯の水を願いできますか」。

「ビールはだるくなります」と相手は賛同して言った。そして一杯の水を持って来た。グラスは盆の上に置かれて、水の中には氷もあって、すべて然るべきものであった。

「これはいい」とヴォルフガングは言って、食欲に飲んだ。

「ごゆっくりとどうぞ」と相手は言った。いつも同じような親切な真面目な調子であった。「まだ水を飲みきっていません――氷もです」と彼は間を置いて、付け加えて、目

の隅に小さな皺が生じた。しかし彼は二杯目の水を持って来た。

「とても有り難う」とヴォルフガングは言った。

「リースベト嬢は今することがあります」と従者は言った、「しかし直に参ります」。

「そう」とヴォルフガングはゆっくりと言った。一決心して言った、「もう行こうかな。また元気になった」。

「リースベト嬢は」と相手は優しく言った、「とても良い娘です。とても善良で有能です」。

「確かに」とヴォルフガングは丁重に同意した。ただリースベト嬢のポケットにある彼の金を考えて、まだここにぐずぐずしていた。この数枚の詰まらぬ紙幣があると、速やかにアレクサンダー広場に戻れるのだ。「多くの善良な娘達がいる」と彼は賛同して言った。

「いいえ」と相手は決然と言った、「抗弁して済みません。私の言う立派な娘の有り様は、稀なものです」。

「本当」とヴォルフガングは尋ねた。

「本当です」と相手は言った、「つまり良いことをするとと言っても、たまたま楽しいからするのではないのです、良いことを愛しているから、いつもするのです」。彼はヴォルフガングを今一度見つめた。もはや今までのようには少しも好意的でなかった（変わった奴とヴォルフガングは思った）。従者は締め括って言った、「余り長くお待たせはしないでしょう」。

彼はまたキッチンから出て行った。先ほどと同様に、穏やかで、思慮深かった。ヴォルフガングは、自分はほとんど話さなかったが、この従者は自分に関し、少しも良い印象を抱かなかつたらうと感じた。

今や彼は少し動かなければならなかった。竈の娘はテーブルクロスを持って来、それから盆を持って来、食卓を準備し始めた。「静かに座っていただきます」と彼女は言った、「邪魔ではありませんから」。

彼女は快適な声をしていた。この家の人々は立派な話し方をするとヴォルフガングは気付いた。彼らはとても純粋に、とても明確に話す。

「これは貴方の食器です」と少女は言った。ヴォルフガングは何も思わず、目の前のナプキンを凝視していた。「今日の昼はここで食べてください」。

ヴォルフガングは空ろな、しかし拒絶する仕草をした。何らかのことが彼には支障に思われ始めた。ここの家はツェッケの邸宅とそれほど離れていない、しかしやはり遠く離れた居心地である。彼らは彼を病人扱いすべきではあるまい、あるいは、狂った状況にあって犯罪を犯した者、性急に目覚めないようまだ注意して話さなければならない人物のように扱うべきではあるまい。

娘は言った、「リースベトをがっかりさせないでください」。そして間を置いて言った、「恵み深いご夫人は了解されています」。

彼女は準備し、少しばかり食器をカタカタ言わせた。 — ほんの少しで、彼女はすべてを速やかに、軽快に片付けた。ヴォルフガングは動かず座っていた。一種の麻痺状態に違いなく、勿論熱くなった。それでは一種の乞食だ、通りからやって来て、空腹で、ご主人方の同意を得て、昼食が提供される。彼の母はミンナにサンドイッチを作らせ、乞食はキッチンに入ることを許されなかった。せいぜい一皿のスープがドア越しに渡され、それ

は階段の踊り場で食されなければならなかった。

さて、ここダーレムでは人々はより上品であるが、乞食にとってそれは余り問題にならない。乞食は乞食である。ドアの外であろうが、中のキッチンであろうが、今から永劫乞食である、アーメン。

彼は自分が去らないのを憎んだ。彼は食事を欲しなかった。食事が何で大事か。自分は母の許で食べられるのである。ミンナは彼のためにいつも食器が置かれていると語っていた。自分は恥ずかしく思っているのではない。しかしこの人々は、大事に保護しなければならない病人であるかのように、自分に語りかけるべきではあるまい。 — 自分は病人ではない。ただこの忌々しいお金。何故自分は先ほどこの情けない紙幣を彼女の手から奪わなかったのか。今頃はもう地下鉄に乗っていただろうに。...

苛々して彼は一本の煙草を取り出した。すでに煙草に点火しようとしたとき、娘は言った、「我慢出来るのでしたら、今やめてください。食事を片付けたら、どうぞすぐその後で。ご主人が匂いに敏感なのです、...」。

ドアが開いた。一人の少女が、家の娘が入って来た。十歳から十二歳。明るく、陽気で、軽快である。この娘は外界の邪悪な灰色、臭う町について皆目知らないことだろう。乞食を一度見たくなくなったのか。乞食はダーレムでは実に珍しい代物なんだろう。

「パパはもう帰る途中だって、トゥルットヒェン」と子供は竈の娘に言った、「十五分したら食事だよ。 — 何なの、トゥルットヒェン」。

「鍋を嗅ぎつけたのね」と娘は笑って、蓋を開けた。蒸気が上がって、子供は熱心に嗅いだ。それから言った、「またただの古いグリーンピース。いや、違う、教えて、トゥルットヒェン」。

「スープに肉に、グリーンピース」と偽善者めいてトゥルットヒェンは言った。

「それに」と子供は執拗に尋ねた。

「それに好奇心は災いのもと」と娘は半ば歌いながら笑った。

まだこんな世界があるのだ、とヴォルフガングは半ば微笑しながら、半ば絶望しながら考えた。従ってまだこうした世界がすべてあるのだ。私はただもはやこうした世界を目にしなくなっていた。ゲオルゲ教会通りの穴蔵にいて。それ故、忘れていた。しかし正しい子供達、無垢、墮落していない無知の無垢がまだ存在している。美味しい食事への質問が重大事とは。何十万という民が日々のパンへの質問をもはやしない時節に。グライヴィッツとブレスラウでは略奪があり、マイン河畔のフランクフルト、ノイルツピン、アイスレーベン、ドラムブルクでは食料品暴動が起きているというのに。...

彼はその子供を拒絶して観察した。これはペテンだ、と彼は更に考えた。無垢の装い、不安げに守られた無垢だ、 — 丁度窓の前に格子を置いているようなものだ。人生はいずれにせよ侵入して来る、 — この無垢は二、三年後にはどうなることだろう。

「今日は」とその子供は彼に言った。彼が椅子を動かして、立ち上がり、去ろうとしていることに今ようやくその子供は気付いたのかもしれない。子供が差し出した手を彼は握った。子供は澄んだ、美しい額の下に黒っぽい目をしていて。子供は真面目に彼を見つめた。「あなたは、うちのリースベトといらした方ですか」と子供はしつこく尋ねた。

「そうだよ」と彼は言って、このような真面目さに微笑して対処しようとした。「何歳なのかな」。

「十一歳よ」と彼女は丁重に言った、「そしてあなたの奥さんは殿方の上着しか着ていないの」。

「その通り」と彼は言って、相変わらず微笑し、軽く振る舞おうとした。しかし自分の行為が他人の口にかかる、それも何と子供の口にかかってしまうと、呪うべき事態となる。「そして奥さんは何も食べていないの、 — 多分何も口にできないの、マカロンさえも」。

しかし彼が彼女に仕返しをしようとしていることに彼女は気付かなかった、「ママは沢山持っているわ」と憂わしげに彼女は言った、「大抵それをママは着ないの」。

「その通り、全く異常なしだ」と彼は再び言って、自らの安っぽい科白が惨めに思われた、「人生はそんなものなのだ。学校では習いはしないだろう、な」。

ますます情けなくなり、ますます惨めになり、とりわけ彼を見つめているこの真面目な目の前では — ほとんど悲しい。

「私は学校へ行っていません」とその子供は、小さな、少しばかり勿体ぶった真面目さで言った。「つまり私は盲目なのです」。再び視線が向けられた。それから、「パパも盲目です。でもパパは以前まだ見えていました。私は見えたことがないのです」。

彼女は彼の前に立っていた、 — そして自分の安っぽい嘲りの報いを受けたヴォルフは、あたかも少女が彼を見つめているかのような感じをますます強く抱いた。いや、両目ではなく、ひょっとしたら澄んだ額で、大胆に反った、少しばかり青白い口で見つめているのかもしれない。あたかも盲目の子供は目の見える彼のペートルよりも彼のこともっと見ている按配である。

彼女は語った、「ママは見えます。でもママは同じように見えない方がいいと言います。パパや私がどんな具合なのか、分からないのです。でも二人ともそれには反対です」。

「そうだね」とヴォルフガングは同意した、「二人は反対だろう」。

「女中さんとリースベトとトゥルートヒェンとホフマンさんが、目に見えることを二人に語ってくれます。でもママが話すと、少し別です」。

「まさにママだから、だろう」とヴォルフガングは用心して尋ねた。

「そう」と子供は言った、「パパと私、二人ともママの子供よ。パパもそう」。

彼は黙った。しかしこの子供は返事を待っていなかった。子供が語るこれらの事柄は、彼には自明なことに思えた。これに対して言うべきことはない。さて、子供が言った、「あなたの奥さんにもママがいるの — それとも誰もいないの」。

ヴォルフガングは立っていた、彼の口許には薄い微笑が浮かんだ。「いや、誰もいない」と彼はきっぱりと言った。そして考えた。去ることだ、今すぐに。一人の子供によって、自分の無愛想、中途半端さがノックアウトされていた。

「パパはきっとあなたにお金を上げます」と子供は言った、「ママは今日の午後、あなたの奥さんの所へ車で行くでしょう。どこですか」。

「ゲオルゲ教会通り、17」と彼は言った。「二番目の中庭」と彼は言った、「トゥーマン夫人の許」と彼は言った。

彼の中で何かが沸騰した。彼女が助かりさえすればいい。彼女は救われるべきだろう。彼女はどんな救援にも値する。

哀れな男よ、汝が、巻き込みつつ、巻き込まれて、追い込まれて行く世界は脱線しつつ

ある。突然、汝は世界が自分から離れて行くのを感じ、世界がどんなに大事なものだっただか気付いている。暗闇の中へ追放され、遠くにまだ澄んだ明かりがあったが、――今やそれは消えた。汝は一人っきりだ、――汝が戻れるか、その気があるか、――汝には分からない。二人は良い時を有して来た。しかしその時は砂の中へ消えた。時々なお唇に一種の味覚がある。須臾のもの、甘美なものであるが、去ってしまった。消えた。哀れなペートラ。まことに乞食だ。しかし今や転換点が生じた。ひょっとしたら救いかもしれない。しかし救いは自分を救助できないと彼は感じた。自分は空ろで、燃え尽き、空虚であるからである。過ぎた、去った。

「私は出て行く」とキッチンを通じて言った。彼は子供に手を差し出し、尋ねた、「住所を覚えているかい」。そして去った。蒸し暑さの中へ、狭隘な喧噪の狩り立てる町の中へ、再び金とパンを求めての戦いに挑むために進んだ。何のためか、誰のためか。彼には分からなかった。相変わらず、長いこと分からなかった。

31

恋の使者としての黒人マイヤー

人々がノイローエの「宮殿」と呼んでいるのは、老領主殿の家であった。フォン・プラックヴィッツ騎兵隊長は、優に五百メートル先に住んでいて、すでに田畑の間にあり、農園中庭の外部で、小さな別荘であった。六部屋の近代的左官親方様式の、最初のインフレ時代の安普請の、すでに草臥れた建築であった。老領主が転居を好まない宮殿は、自分の好きな唐檜の間近に留まるためと、――ついでに――少しばかり義理の息子に目を光らせるためで、すでにこの宮殿も単なる黄色の箱に過ぎなかったが、部屋は若い娘夫婦の三倍の数で、いずれにせよまともな屋外階段と地面まで届くガラスのドアの付いた、広間と呼ばれる庭園テラスを有していた。

黒人マイヤーは宮殿の側を通り過ぎた。そこで求めるものは何もなかった、それに今回はやはり何も求めたくなかった――意地悪な恵み深いご夫人のせいである。すぐに、不快なほど間近に、監視下に置かれた官吏の家があって、そこに事務所と彼の部屋があった（その他一切は騎兵隊長的儉約方針で空であって、――しかし騎兵隊長は偉い男なのである）。マイヤーは父との電話の件で恵み深いご令嬢に尋ねる所存であったが、彼はまず自分の部屋へ行き、両手と顔を洗った。それから香水「ロシアの革」を十分に胸にかけた。

――これは地方ではまことに正しい香水であった。能書きによれば、「渋く、男らしく、いかす」。

その後彼は鏡を覗いた。自分の背の低さ、ソーセージの唇、ひしゃげた鼻、浮き出た目を恥辱と感じていた昔の時は、勿論とうに過ぎ去っていた。女達の許での成功を得て、彼は美貌は大事でないと承知していた。逆に、少しばかり風変わりな外見は、娘達を、塩の地が野獣を惹き付けるように誘うのである。

勿論ヴィオレットは、アマンダ・バックスとかゾフィー・コヴァレフスキーという女性のように簡単ではない。しかし小さなマイヤーは、――再び彼の雇主の騎兵隊長を避けながら、――こう確信していた、小さなヴァイオは十五歳ではあるが、すでにあばずれである、と。あの目つき、あの若々しい、故意に見せびらかす胸、あのしゃべり方、生意

気で、数秒後には全くしらばっくれるカマトト。 — これは彼のように経験を積んだ漁色家には紛れもなかった。それに自明であった。昔まだ未婚の母親の寝室からフォン・テッシュの老領主は一人の恋人を鞭で追い出したことがあり、後にはこの母親も鞭を味わうことになったのである。人々はそう語っている。 — まあ、世間は広く、世間では何でも有りである。林檎は幹から離れて落ちない[この母にして、この娘]。この小さな田畑検査官マイヤーを鏡の前での想念故に、一人の陰謀家とか生意気な誘惑者と呼ぶことはいささか誇張であろう。これは計画ではなく、青春な馬鹿話、虚栄心 — 白昼夢である。若い犬のように彼は途方もなく食欲があつて、何でも囓りたがっていた。 — それにヴァイオレットはまことにとても可愛かったのである。

しかし丁度若い犬同様、彼の不安は少なくとも彼の食欲同様に大きなものであった、 — ただぶたれたくなかった。身寄りのないアマンダに対するようには、このヴァイオレットに対することが出来なかった。彼女の背後にはカッとしやすい父親が控えている。自分の夢想の中では誘拐と秘かな結婚に至るまで万事片付けても、 — 義理の父親の前に帰省する自信はなかった。父親との帰省時会話すら思い描けなかった。若い妻とならこの会話は出来た。妻に対しては不安も敬意も抱く必要はない。一人の男と寝た者は、一緒に寝た男以上のものではない。貴族の出自といえども、 — 神秘的に、畏敬を要求しているが、 — しかし寝たら工房家具のワニスのように剥げ落ちる、 — すべては単に卑俗な唐檜材にすぎない。

黒人マイヤーは鏡の自分を見てにやりとした。おまえは大した奴だといった感じである。自負心の証明のように、今朝早く「少尉」が自分と、こそこそした老森林官クニーブッシュとは全く別な、大いに戦友的調子で話したことを思い付いた。

マイヤーは鏡の自分に手で挨拶した。彼は優しくウインクした。成功を祈る、幸運の寵児よ。そしてヴァイオレット・フォン・ブラックヴィッツの許へ行軍した。

事務室では、御者の妻、ハルティヒ夫人が片付けていた。まだ十分にいける口で、遊びたかたであろうが、しかし女は二十五歳を過ぎると超古い。善良なハルティヒは、およそ二十七歳で、八人を下らぬ子供を持っている。今日は口をしっかりと締めていた。目は邪悪に輝き、額に一杯皺を寄せている。マイヤーは構わずにいたが、しかし彼女の側を通り過ぎるとき、鑄鉄のフロアスタンドが書き物机から音立てて落ち、緑色の笠が百もの破片に砕けた。

そこでマイヤーは立ち止まり、言葉を発せざるを得なかった。

「まあ、な」と彼はにやりと笑って言った、「破片は幸せを呼ぶとか。 — 幸せはあんたの方か、それとも私の方か」。彼はただ黙った、しかし邪悪な目が見つめていたので、言った、「どうしたのかい。嵐になるのか。爆発しそうだな」。

彼は全く自動的に晴雨計を見た。それは昼からゆっくりと、しかし持続的に下がっていた。

「畜生道を私に向けないでね」とハルティヒは甲高く、意地悪に言った、「これから先あんたら二人の汚れを始末するのは御免だね」。彼女は前掛けのポケットに手を入れ、それを開けた。 — 三本のヘアピンを持っていた、(一九二三年にはまだ断髪スタイルは低地に浸透していなかった)。「あんたのベッドにあったのよ」とほとんど金切り声を上げた、「あきれた下種。もう始末しないで、恵み深いご夫人に見せましょう」。

「どちらのご夫人かい、ハルティヒ夫人」とマイヤーは笑った。「老夫人はご存じで、
一 もう私のために祈りを上げておられる。若夫人の方もお察しになって、まずは笑われることだろう」。

彼は彼女を嘲笑的に勝ち誇って見つめた。

「ひどい女」とハルティヒ夫人は喚いた、「去る前に点検しないのかね。私に、家禽小間使いの後始末をさせるなんて。恥知らずの女」。

「その通り、その通り、ハルティヒ夫人、全く仰せの通り」と黒人マイヤーは真面目に言った。そして再びにやりと笑った、「しかしあんたの末の坊やは素敵な赤毛だね。給餌長とそっくりだ。坊やは父親同様御者になるのかい、それとも継父のように給餌長になるのかい」。

そう言って、マイヤーは去った。含み笑いをしながら、全く満足していた。一方中では邪悪な、しかし半ば収まったハルティヒ夫人が手の中の三本のヘアピンを見つめていた。かやつは屑だ、しかしあんなに小さいのに、抜け目ない。

彼女は今一度ヘアピンを見つめて、それから振ってカタカタ言わせ、そして決然と自分の髪に挿した。

いつかあんたをものにしてみせる、と彼女は考えた。アマンダに永久に支配されない。

彼女は更に笠の破片を片付けて、突然満足した。この破片は自分に幸運をもたらすであろうと確信したからである。

マイヤーも破片とその破片が自分に即刻もたらしてくれるであろう幸運とを考えた。極めて上機嫌で、騎兵隊長の別邸に達した。彼はまず庭園を覗いた、一 というのはヴァイオに会うのに母親の耳の届く所はまずいからで、一 しかし庭園には見当たらなかった。これは簡単に確定できた。庭園は全く小さなものではなかったが、一瞥して見渡せたからである。これは数年前に空いた畑を固めたもので、恵み深い夫人による、すでに半ばまた干涸らびた即興的造作であった。

ちなみに所有者と請負人の間の、ノイローエにおける身分の堅牢さと距離とを象徴するものとして、テッシュォー家の宮殿の公園とブラックヴィッツ家の庭園の描写に勝るものはないであろう。向こうでは百年級の大きな木々が、とても密に、葉や樹液で満ちあふれているのに対し、こちらでは二、三ダースの剥き出しの棒が、わずかな、すでに黄色くなった葉と共にあるにすぎない。向こうでは広大な芝地が暗緑色にあり、こちらでは乏しい草が、固く、黄色で、またせり出して来る三色スマレ、カモジグサ、トクサとの展望のない戦いをしている。向こうでは全く小さいとは言えない池が、櫂付きボートや白鳥と共にあり、こちらではゾルンホーフェンの自然石による所謂幼児用プールが緑色の水肥と共にある。向こうでは遺産継承の生長が、時代と共に次の時代に向けて見られる。こちらでは生まれたばかりのものが、すでにまた死滅して行く、一 しかし騎兵隊長は偉い男である。

田畑検査官のマイヤーが呼び鈴のボタンをすでに押そうとしていたとき、側面から呼びかけられた。キッチン建て増しの平たい屋根（単なるタールフェルト）にデッキチェアと大きな庭園用傘とがあり、この建て増しには梯子がかかっていた。上の方から呼び声がした。「マイヤーさん」。

マイヤーは然るべく奉仕の仕草をした、「そうですが」。

恵み深くない声が上の方からした、「何の用。ママは暑さで参っていて、寝ようとして

いるの、 — 邪魔しないでよ」。

「恵み深いご令嬢、ただお聞きしたいのです、 — フォン・テッショー殿が、騎兵隊長殿からの電話があったと仰有いまして、...」。少しばかり苛立って言った、「乗り物の件です、...私は今晚駅まで乗り物を出したのか、どうかです」。

「そんな大声を出さないで」と上から大きな声がした、「私は貴方の小間使いではありません。ママは休みたいのだと言ったでしょう」。

マイヤーは絶望的に上の平らな屋根を見上げた。しかしそれは高すぎて、彼の位置は低すぎた。彼は夢の中で誘拐し、結婚する女性の姿を何も見ることが出来ず、単に一つのデッキチェアと大きめの一本の茸状傘を目にしていた。それで — 出来る範囲の声で、 — 囁くことに決めた、「乗り物を出すべきか — 今晚 — 駅まで」。

間があって、静寂、待機。

それから上から声がした、「何か仰有ったの。駅なら分かります[大筋では分かる]」。

「ハッハッハッ」。マイヤーは義務的に、当時流行っていた話し方のことを笑った。それから幾らかもっと声高に自分の質問を繰り返した。

「叫ばないでください」と早速この非難を受けることになった。

彼は立っていた。勿論彼女がただ彼をしつこく虐めるつもりだと良く分かった。彼はまさにパパの田畑役人にすぎない。父親の命令を実行しなければならない。恵み深い御令嬢の仰せに従って立ち、待たなければならない。愛しい娘よ、まあ待っておれ、いつの日かおまえが立って、待たなければならないのだ、 — 私をな。

勿論今や彼は十分に待ったように思われた。というのは上から彼女が叫んだからである。(ちなみにかくも配慮深い娘にしては驚くほどの大声であった)。「マイヤーさん、もう何も仰有らないけど、まだ立っていらっしゃるの」。

「はい、恵み深いご令嬢」。

「太陽の日差しであなたは溶けてしまったかと思った。バターが溶けるほど頭が暑いでしょう」。

(彼女は勿論承知していた。しかし何の害もない、 — ただ彼女の食欲が増すのみだ)。

「マイヤーさん」。

「はい、恵み深いご令嬢」。

「そこにそんなに長く立っていらしたら、ひょっとしたら梯子があるのに気付いたでしょう。何をなさりたいのか、ここの上で仰有ってください」。

今一度、「はい、恵み深いご令嬢」。そして階段を上がった。

「はい、恵み深いご令嬢」はいつでも結構で、彼女の気に入り、費用はかからず、距離を強調し、何でも許す。低いネックラインの彼女を覗けるし、その際全く謙虚に、「はい、ご令嬢」と言えるし、それを言いながら、接吻することさえできる。 — 「はい、ご令嬢」は騎士的で、護衛風、軍人風、 — オスターデの将校のようだ、と黒人マイヤーは考えた。

彼は今やデッキチェアの足許に立っていて、従順に、しかし厚かましく眺めながら、彼の若い女主人を見ていた。彼女はとても短い水着しか着ずに彼の前に横たわっていた。ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツは、十五歳で、すでに少し豊満、年齢を考えると、重たい胸と肉付きのいい腰、強力な臀部は余りに充実していた。彼女は柔らかな肉体と、

リンパ性の娘の余りに白い肌、それに母親譲りの少しばかり浮き出た目を有していた。彼女は青い目で、青白い、眠たげな目であった。この善良な、無邪気な子供は裸の腕を持ち上げ、少しばかり伸びをした。悪い眺めではなかった。このあばずれは可愛い。そして

「いやはや」何という肉体か。これは男の腕にぴったりするに違いない。眠たげに、ほとんど閉ざした瞼から物欲しげに瞬きしながら、彼女は検査官の額を観察していた。「何をそんなに覗いているの」と彼女は、それから挑発的に尋ねた、「家庭用バスで他に何も着ていないの。そんなにじろじろしないで」。彼女は彼の顔を観察した。それから、「いや、ママに二人がここにいるのを見られたら、...」。

彼は自らと戦った。太陽がじりじり暑く照りつけ、ちかちかして、今や彼女は再び体を伸ばした。彼は一步近付いた、...「...ヴァイオ、ヴァイオ、...」。

「オー、ヴァイ[嫌]、オー、ヴァイ[嫌]」と彼女は笑った、「駄目よ、マイヤーさん、また梯子の許に立っていてください」。突然女主人になった。「あなたはおかしいわ。何か勘違いしているでしょう。叫ぶわよ、ママが窓辺に飛んで来るから」。

彼がまた服従するのを見ると言った、「今日は駅へ乗り物を用意する必要はありません。多分明日の朝一番列車のときね。パパがもう一度電話します」。

彼女は先からすべて了解していたのだ。生意気なあばずれ。ただ彼を誘って、なぶろうと思ったのだ。しかし待っておれ、おまえを奪ってやる。

「何故収穫に取りかからないの」と今やこの若い娘、誘拐し、秘かに結婚しようと思っている娘は尋ねた。

「まず郎党が収穫を束にして、並べる必要がありますので」、一 かなり不機嫌に言った。

「雷雨になって、すべて濡れたら、パパがあなたに雷を落とすわよ」。

「雷雨にならず、私が収穫させたら、やはり雷でしょう」。

「でも雷雨よ」。

「正確には分かりません」。

「でも私には分かる」。

「それでは恵み深いご令嬢は、私が収穫させることをお望みですか」。

「そんなことは知らない」と彼女は甲高く笑った。彼女の強力な胸がまさに水着の中で弾けた。「パパに都合が悪いことになるよ、後でそれを私のせいにするのでしょう。いいえ、自分一人で失敗してください」。

彼女は彼を、好意的に勝ち誇って見つめた。十五歳のこのお転婆はこのように生意気である。何故生意気か。彼女がたまたま生来のフォン・ブラックヴィッツ、ノイローエの遺産継承人であるからである。ただそれ故に生意気なのである。

「それでは去ってよろしいでしょう、恵み深いご令嬢」と黒人マイヤーは尋ねた。

「そうね、まあちょっと農園を頼みますよ」。

彼女は横向きに転がって、今一度彼を嘲笑的に見つめた。彼はすでに去った。

「マイヤーさん」と彼女は叫んだ。

「はい、恵み深いご令嬢」、一 仕方ない、そう言わざるを得ない。

「肥料を運んでいるの」。

「いいえ、恵み深いご令嬢、...」。

「何故そんな奇妙な臭いがするの」。

彼女が彼の香水のことを言っていると気付くまでかなり時間がかかった。それから彼は黙って、しかし真っ赤に怒って、背を向け、できるだけ急いで梯子を下りた。

くそつたれ。こんなくそつたれとは付き合うべきでない。赤の連中は全く正しい。壁にこの生意気な奴等を立たせろ。貴族だと。倍、忌々しい。厚かましい、破廉恥に厚かましい。 — 偉そうに気取りやがって。...

彼は梯子から離れて、進んで行った。彼の短い脚は憤然と大地を蹴った。するとまた上から声がした。天からの声、女主人の声である。「マイヤーさん」。

彼はすくんだ。憤激に駆られて、 — またしても仕方ない。憤激に駆られて彼は叫んだ、「はい、恵み深いご令嬢」。

はなはだ恵み深くない声が上からした。「すでに三回言いましたよ。そんなに叫ばないでください。ママが眠っているの」。そして無邪気に、「もう一度上がって来てください」。

マイヤーは再び梯子を登った。腹は憤激に駆られて、はい、あんたの天気通りに、あんたの雨蛙として梯子を上下致します。まあ、待っている、おまえをまず掴まえたら、きつとおまえをほたっておく、子供と一緒に、一文なしでな。...

しかしまた直立不動の姿勢で、「何でしょう、恵み深いご令嬢」。

彼女は今やもはや、自分の体を彼に披露することを考えていなかった。彼女は熟慮して、しかしその件を心で決めていた。ただどのように彼に伝えたものかまだ迷っていた。最後にできるだけ穏やかに説明した。「私の手紙を届けてくださいな、マイヤーさん」。

「はい、恵み深いご令嬢」。

突然彼女は彼の両手に、どこからかは不明のまま、青色の紙の長目の封筒を渡した。マイヤーの見限りでは、宛先は記されていないかった。

「今晚まだ村へ行くのでしょうか」。

彼は全くびっくりして、不安になった。彼女は単にそう言っているだけなのか、それとも何か知っているのだろうか。しかし知っているなんてあり得ない。

「分かりません、ひょっとしたら行くかもしれません。お望みでしたら、恵み深いご令嬢、いずれにせよ行きましょう」。

「ある殿方から手紙のことを尋ねられることでしょうか。その方に渡してください」。

「どなたです。分かりませんが、...」。

彼女は突然苛立って、不機嫌になった。「分からなくていいのです。私の言ったようにすればいいのです。ある殿方が手紙のことを尋ねるでしょう。その方に渡すのです。とても簡単なことです」。

「はい、恵み深いご令嬢」と彼は言った。しかし若干弱々しく、はなはだ考え込んでいた。

「それじゃ」と彼女は言った、「頼みますよ、マイヤーさん」。

彼は手紙を手にしていた。彼はまだ信じられなかった。しかし今や手紙を、彼女に対して武器となる手紙を手にしていた。待っているよ、私の子羊ちゃん。何とも愚かな奴だ。

彼は気を取り直した。「お任せください、恵み深いご令嬢」。

そして彼は再び階段を下りた。

「お任せしますからね」と上の方から彼女の声はかなり挑発的に追いかけて来た、「さ

もないと祖父とパパに、誰が森を焦がしたか告げますからね」。

声は黙した。マイヤーは梯子の中程で立ち止まって、一言も聞き逃さないようにした。

そうか、分かった。これだ。焦がしたと言ったな。腑に落ちた。万歳。十五歳にしては上出来だ。いかした者になりそうじゃないか。いや、この程度の娘のままだ。

「少尉殿は冗談が嫌いですよ」と更に声がした、 — そして今や彼は、彼女が上の方でその太って無精な肉を横向きに転がす様を耳にした。デッキチェアが軋んだ。ヴィオレット・フォン・プラクヴィッツ嬢は上の方で快適にあくびした。田畑検査官のマイヤーは下の方で仕事に取りかかることを許された。 — その通り、万事異常なしだ。

しかし小さなマイヤーは、黒人マイヤーは、まだ仕事に取りかからなかった。全くゆくりと、深く考え込んで、彼は自分の小屋までの道をとぼとぼ歩いた。手紙を彼は防水リンネルの上着の外ポケットに入れて、その滑らかな表面に手を置いて、絶えずその手触りを確かめていた。彼は自分が本当に手紙を有し、それがあることを実感しなければならなかった。この手紙をすぐに読んでやろう。彼女は、この小さな、すれっからしのあばずれは、言葉を濁していた。しかし彼にとっては十分な言葉であった。夙に了解だ。彼女は少尉と面識があるわけだ。この謎めいた、若干みすぼらしい、しかしまことにきびきび振る舞う殿方と。この殿方は村長宅での夜の集会を呼びかけており、森林官クニーブッシュはこの殿方の前では直立不動だ。彼女はこの少尉殿と今日の十二時から三時の間に会っている、さもないとボヤのことは何も知らない筈だから。

しかしこの少尉殿が田畑検査官のマイヤーに戦友的に頷きかけたのは、黒人マイヤーをカリエスの老クニーブッシュよりも有能と見なしたからではないわけだ。すでにこう承知していたのだ。マイヤーが内密の手紙の使者として選ばれている、と。この少尉殿は、ノイローエについてあらかた熟知しているのだ。かなり長いこと、こっそりと情報を得ている。

汝ら両人は、すでに良い仲になっているわけだ。私には何でも察せられる。そしてまずこの手紙を読んでしまえば、 — おまえはやはり阿呆な、高慢ちきな娘だ、馬鹿な鷺鳥。私が手紙をそのまま渡すと考えて、中身を私が覗かないと思っている。私は事情を探ろう。そしてどうするか考えよう。ひょっとしたら騎兵隊長に全部ばらしてもいい。 — ちょっと森を焦がしたくらい構うことではない。そんなことで私は脅されはしない。しかし騎兵隊長に黙っているとしてもいい。というのは小娘のおまえは阿呆で、少尉のような奴は勿論おまえを袖にするかもしれないなんて思いもしないのだから。まあ奴を一度泳がせてこれを見届けよう。しかしそうになったら、私が、 — いや小娘ちゃんよ、これは支障ない。このようなことは何でもない。若い馬どもを馴らすのは難儀で、苦勞する。 — 馬どもは自然に歩みを覚えさせればいい。しかしそうになったら、おまえに弁償させるぞ、生意気な高慢ちきなすべての言葉に対して、すべての「はい、恵み深いご令嬢」に対して、とりわけこの手紙に対してな。 — そもそもこのような手紙の開け方はどうやるのだ。水蒸気ですと聞いたことがある。 — しかしこの急いでいるとき、私の小屋で水蒸気が得られようか。何、簡単にナイフで折り返しを剥がしてみよう。封筒が駄目になったら、自分の封筒を使えばいい。黄色か青色か、 — そんなことは奴は気にしないだろう。...

彼は事務所に着いた。帽子を取ることをすらせずに、彼は書き物機の椅子に沈み込んだ。彼は手紙を眼前の、使い古された、インクの染みのある緑色のフェルト製覆いの上に置き

た。それを見つめた。彼は汗で濡れていた。彼の肢体は垂れ下がり、彼の口は渴いていた。完全に草臥れていた。中庭の鶏でもがクックと鳴いていた。雌牛小屋ではバケツと牛乳缶を持った乳搾り人がカタカタ音を立てていた。(是非そうしてくれ ー 乳搾りの潮時だ)。

手紙が彼の前にあった。蠅がぶんぶんと単調に呻った。耐え難く蒸し暑い。彼は壁の晴雨計に目を向けようとした。(ひよっとしたらやはり雷雨か)。しかし彼は見上げなかった。どうでもいい。

青白い封筒は、斑点の緑のフェルト製覆いの上に四角形にある。彼女の手紙だ。

ぞんざいに、半ば戯れて、彼はペーパーナイフに手を伸ばして、手紙を引き寄せ、再び両者を置いた。彼はまず上着で汗びっしょりの両手を乾かした。

それから彼はペーパーナイフを取って、ゆっくりと楽しみながら、鈍い先端を折り返しの蓋と封筒の間の小さな隙間に入れた。彼の目は強張っていて、彼の太い唇の周りには、軽い満足した微笑が浮かんでいた。その通り、自分は封筒を開けている。注意深く押しながら、上げて、突いて、圧して、彼はぞんざいにくっ付けられた折り返しを剥がした。今やすでに手紙の角が見えている。そこには毛のような、従順でない繊維質のものがあつた。

ー 同時に彼は彼女を見ていた。たった今日にしたばかりのデッキチェアのヴァイオを。...彼女は体を伸ばした。彼女の白い肉体全体が少しばかり震えた。...彼女は腕を高く上げ、腋の下に、明るく見える、縮れた毛が見えた。...

「オー」と黒人マイヤーは呻いた、 ー 「オー」。

彼はずっと手紙を凝視していて、そして開けたのであつた。 ー しかし彼はその間ここから五百メートル離れた、平らな、日差しで汗ばむタール厚紙の屋根にいた。 ー 肉体に肉体を重ね、肌を肌を重ね、毛髪に毛髪を絡めていた、 ー 愛しいおまえ。

波はより平静になった。今一度、美しい生氣のある肉体の色合いで輝きながら、夕陽を浴びたように、その波は砂の中に散った。黒人マイヤーはあえぎながら息をした。いや、何てことだ。今や怪訝な気持ちになった。この小娘に全くのぼせてしまった。しかし暑さのせいもあつたかもしれない。

手紙は問題なく開封されていた。折り返しには後で新たに糊付けする必要すらない。ヴァイオレット・フォン・ブラックヴィッツ令嬢はかくもぞんざいに糊付けしていた。それじゃ読むか。...しかしその前に今一度両手を上着で拭った。両手はすでにまた汗びっしょりであつた。

それから彼は実際に紙片を封筒から取り出して、紙片を開けた。手紙は長いものではなかつた。しかしその代わり実のあるものであつた。彼は読んだ。

最愛の人、超、愛する人、唯一の方。あなたはたった今去られた。でも私はまたあなたを求めて物狂おしい。全身で飛んでいます。ずっと目を閉じているという声がします。するとあなたが見えるのです。こんなにとってもあなたが大好きです。パパは今日きつと戻りません。だからあなたを十一時から十二時の間、白鳥の家の側の池で待っています。それまでに、詰まらぬ集会を是非とも終わらせてください。あなたに会いたくて堪らない。

100,000,000の接吻を、更にそれ以上の接吻を送ります。あなたを私の心に抱き締めています。心が動悸して止まない、

あなたのヴァイオレット。

「おや、おや」と小さなマイヤーは言って、紙片を凝視した。「小娘は本気で奴を愛し

ている。三回ゼロを重ねて、「あなたの」を強調して愛している。おむつの取れない小娘のくせに。 — 奴は上手く引っかけることだろう。まあ、それだけ結構なことだ。

彼はその手紙をタイプライターで打って、その際接吻の数のゼロを丁寧に数えた。(全くのインフレだ、 — これも作用している)。そしてまた封をした。清書した紙片は職務上の郡報の一九〇〇年の巻に挿み、手紙をまた上着のポケットに入れた。彼は完全に満足していた。そして完全に農園の準備が出来ていた。彼は晴雨計を見た。それはまた少しばかり下がっていた。

やはり雷雨になるのか。収穫させた方がいいのか。いや、下らぬこと、小娘の戯言だ。彼は刈り取り機の許へ行った。

32

パーゲル夫人はフォン・アンクラーム夫人を訪問する

「今日にもあなたの訪問があるだろうと思っていましたよ、愛しい、哀れな私のマティルデ」。

フォン・アンクラーム夫人は、陸軍少将の未亡人で、七十歳を越え、雪のように白く、不格好に太っていて、午後の睡眠を取っていた。深い寝椅子からゆっくりと起き上がった。両手で彼女は訪問の女性の手を握って、同情し気遣い、大きな褐色の、相変わらず美しい目で、彼女の目を見つめた。差し当たり単に重々しく、 — 弔意の時のように語った。しかしまた別の調子も弁えていた、それは連隊のすべてのレディー達を躰けて、秩序づけ、作法通りにさせる連隊司令官夫人の調子である。

「私どもは年取った。でも私どもの荷が軽くなることはない。私どもの子供は、若い頃は膝に乗るけど、後には心の重荷になるわね」。

(フォン・アンクラーム夫人には子供なかった。それに彼女は子供に我慢ならなかった)。

「さあ、こちらのソファーに腰掛けて、マティルデ。呼び鈴を押しましょう。 — お手伝いがすぐにコーヒーと菓子を持って来ます。今日ヒルブリヒの菓子を取り寄せさせたの。これがやはり最高よね。ただ一人分はもったいない。 — 40,000マルクの車代よ。分かる。40,000マルク。泥棒だわ。 — いや、お手伝いさん、クッキーとコーヒーを、たっぷりとお濃いのをね。私の従姉妹は悲しい知らせを得ていますから。 — ねえ、マティルデ、丁度寝椅子に寝て考えていたの。お手伝いは私が眠っていると考えたのでしよう。でも勿論眠っていない。私はキッチンの物音を聞き逃さないの。洗うと一枚の皿が割れたら、すぐに飛んで行くの。あなたのミンナもそんなに割るかしら。古いニンフェンブルクの陶器で、祖父クーノが亡き皇帝からダイヤモンド婚の時に頂いたものよ。あなた — もう私のような老婆には十分なことですよ。それでもね、その遺産継承人のことも考えなくちゃならなくてね。元々はイレーネに約束していたの。でも最近また考え直すようになったの。イレーネは子供の教育についてとても変わった見方をしているね — 直接に言うと、何というのか、革命的なのよね」。

「それでその知らせというのは確かに本当なの、ベッティー」とパーゲル夫人は尋ねた。真っ直ぐな姿勢で、痩せていて — そして間近のかくも同情的な親戚の女性でも、夫人が涙を流して来たことを察せられなかったことであろう。

「知らせ、何の知らせ。あらあの知らせね。親愛なるマティルデ、あなたにわざわざ手紙を書いたのだったわね」。これはかなり司令官夫人めいた言い方であったが、しかしまた共感的に言った。「いえね、勿論本当のことよ。一 善良な若衆、自惚れのフリッツがあそこに掛けたのよ。自分の目で見たのだから。結婚予告と言うものよ。勿論彼がそこに何の用があったのか知らないのだけど。私はとても興奮していて、そのことを尋ねなかった。でも自惚れフリッツのことはご存じよね。とても風変わりで、とても珍奇な所に出没するの、一 注意遊バセ、召使ヨ」。

「お手伝い」がコーヒー食器と盆、ダイヤモンド婚の祖父のニンフェンブルク陶器を持って現れた。レディー達は黙した。そして音もなくお手伝いは食卓の準備をした。初老の鼠灰色の人物である。

いつも単に「お手伝い」である一フォン・アンクラーム少将夫人の許のこれらの頻繁に交替する人物は皆名前がない。お手伝いが準備し、お手伝いが腸詰めし、お手伝いが朗読し、お手伝いが何ごとか話し、とりわけお手伝いが傾聴する。お手伝いは朝から晩まで、連隊のレディー達、つまり夙に亡くなって忘れられた者達の話しを傾聴する。(私は言うてやるのよ、あなた、いい、作法の適否は私が決めるのよ、と)。その子供達の話しを、夙に自分の子供達として話すのを傾聴する。(この天使の子が私に向かって言うのよ、...)。親戚達、夙に疎遠になった親戚達の話し、警告状や昇進の話し、命令の話し、負傷の話し、結婚生活の不倫や離縁の話し一 全くの戯言や陰口と化した人生の塵芥を、ごく内密なこと、内緒のことを傾聴する。

お手伝いは色合いがなく、鼠灰色で、傾聴し、はい、とか、あらいやと言ひ、まあ、とか、素晴らしいと言う。一 しかし陛下の許に訪問があると、お手伝いは何も耳にしない。少将夫人はローザンヌの寄宿学校フランス語の残滓で、「注意遊バセ、召使ヨ」と囁き、レディー達は黙する。訪問があると一 お手伝いは空気と化し、それが然るべきものとなる。(訪問が終わると、お手伝いにすべてが語られる)。

しかし最初の沈黙の後、フォン・アンクラーム夫人は今や黙っていなかった。これはまた然るべきものではなかった。彼女は天候について話した。今日はそれほど蒸し暑かった。ひよっとしたら雷雨になるかも、ひよっとしたらそうかもしれないし、そうでないかもしれない。昔一人のお手伝いがいて、その人は雷雨の前、リウマチになったものよ。一 とても珍しいでしょう。

「いつも当たってね。あるとき、そのお手伝いが休暇を取って、私どもは当時まだ莊園を持っていてね、それで収穫が全部台無しになるとんでもない霰の雷雨に見舞われたのよ。

一 このお手伝いが休暇を取っていなければ、前もって分かっただろうけど、一 そしたらとても都合良かったらうけどね、親愛なるマティルデ。でも勿論、丁度お手伝いは休暇だったのよ。

お手伝いさん、すべてO.K.よ、有り難う。これからは私の黒いタフタのドレス、そのレースのフリルにアイロンをかけて頂戴。もうアイロンをかけたことは承知しています。そう仰有らなくて結構です。でも私が馴染んでいるやり方ではありません。息吹のようではなくちゃね、..頼みますよ、息吹のようによ。そうなさってください」。

そしてお手伝いの背後でドアが閉まると、フォン・アンクラーム夫人はまた全く共感的にパーゲル夫人の方を向いた、「あれこれ考えたのだけど、親愛なるマティルデ、でも変

わらないわ。あの娘はただの端女よ」。

パーゲル夫人はすくんで、不安げにドアの方を見た、「お手伝いさんのこと」。

「まあ、マティルデ、ちょっとしっかりしてよ。何について話していた。あなたの息子さんの結婚のことよ。私がそんなにぼんやりしようものなら。私はいつも私のレディー達に言ってきましたよ、...」。

パーゲル夫人は相変わらず何か肯定的なことを聞きたいと願っていた。何とははっきり言えなかったが。彼女は口を挿んだ、「あの娘はひよっとしたらそんなにひどくないかもしれない、...」。

「マティルデ、端女よ、ただの端女」。

「あの娘はヴォルフガングを愛していて、 — あの娘なりに、...」。

「そのことは一切聞きたくありません。不作法です、いえ、私の家には決して、...」。

「でもヴォルフガングは賭け事をして、ベッティー、すべてをふいにして、...」。

フォン・アンクラム夫人は笑った、「あなたの顔を見ていたら、いい、マティルデ。若者は少し遊びます。 — 『賭け事をする』と言ってはなりません、『賭け事』はとてもありふれて聞こえますから、 — 若い人々は皆少し遊ぶのです。シュトルプに連隊があった頃を思い出すけど、若い人達はとて遊びました。フォン・バルデンヴィーク陛下は私に仰有いました、『どうしたものだろう、恵み深いフォン・アンクラム夫人。我々は若干手を打たなければなるまい』。私は言ったの、『陛下』と私は言った、『何も手を打つ必要はありません。若い人々は遊ぶかぎり、他の愚かなことはしません』。早速私に了解なさって、...お入り」。

ドアの所でそっと用心深くノックがなされた。お手伝いが頭を入れた、「エルンストが戻りました、陛下」。

「エルンストですか、何の用です。また珍しい流儀ですね。訪問客があると分かっているでしょう。エルンスト — とんでもない」。

この非難にもかかわらず、お手伝いは何か言うべきことがあって、罨にかかった鼠のように鳴いた、「戸籍係から戻ったのです、陛下」。

フォン・アンクラム夫人の顔が輝いた。「あら、勿論、すぐに入れなさい、両手を洗ったらすぐに。何ともたまた話すの、あなた。ちょっと待ちなさい。そうすぐに消えなくていいから、 — ちょっと私の指示を聞きなさい。まずエルンストに二、三滴オーデコロンを振りかけなさい。そう香水オーデコロン。そこで誰と一緒にだったか分かりゃしない」。

再び従姉妹と二人だけになった。「結婚がどのようなになったか、知りたかったのよ。誰をそのような所に送ったものか、長いこと考えたの。エルンストを送ったのよ。これから聞くことにしましょう、...」。

そして彼女の目は輝き、重たい体の中身を安楽椅子であちこち動かし、全く期待に溢れていた。何か新奇なことを耳にすることだろう、また何かガラクタ部屋にふさわしいものだろう、 — 神様、何と素晴らしい。

従者のエルンストが入って来た。中年の男で、六十がらみ、小男、すでに長いこと、ほぼ生涯をフォン・アンクラム夫人の許で過ごしている。

「ドアの許にいなさい」と彼女は叫んだ、「ドアの許に立っているのよ、エルンスト」。

「承知しています、陛下」。

「すぐ後でバスを使って、新しく着替えなさい。何のばい菌が付いているか知れたものじゃない。 — それで話しなさいよ、結婚はどうなった」。

「全くなかったのです、陛下」。

「ほら、御覧、マティルデ、 — いつも言っているでしょう。あなたの空騒ぎです。三分前に言ったばかりよ。全く普通の端女だ、と。その娘が袖にしたのよ」。

パーゲル夫人は弱々しく言った、「エルンストに尋ねていいかしら。親愛なるベッティー」。

「勿論よ、親愛なるマティルデ。 — エルンスト、何でそう棒のように突っ立っているの。聞いたでしょう、パーゲル夫人がすべて知りたい、と。話しなさい、語りなさい、 — 彼女が勿論彼を袖にしたのよ、 — それで彼は何と言ったの」。

「お許しください、陛下。思うに若様が娘さんを — つまり現れなかったのです、...」。

「ほらね、マティルデ、私の言った通りでしょう。若者は全く異常ないわ。ちょっとした『遊び』は何でもないのよ。逆に — 全く分別があって、このような端女とは結婚しないのよ」。

ようやくパーゲル夫人が発した、「エルンスト、本当にその通りなの。確かに結婚とはならなかったの。ひょっとしたら、あなたが少しばかり遅刻したのじゃない」。

「いえ、恵み深いご夫人。確かに行われていません。私は間に合って、期限まで待っていました。そして役人にも尋ねました。二人とも現れなかったのです」。

「ほらね、マティルデ」。

「でも、エルンスト、どうしてそれは私の息子のことと分かったのです。あなたが分かっているのは、...」。

「私は確かめようと思いましたが、恵み深いご夫人。何かが起こったのかもしれない、と。戸籍係で住所を確認しました。それで出掛けたのです、恵み深いご夫人、...」。

「エルンスト、絶対すぐバスよ、完全に新しい下着になさい」。

「畏まりました、陛下。 — 若様は今朝早朝から姿が見えなくなっています。娘さんは追い出されていました。家賃が支払われていないからです。娘さんはまだ戸口の下に立っていて、私は娘さんに、...」。

パーゲル夫人は一気に立ち上がった。突然彼女はまた完全に決然としていた。薄暗く、精力的で、不屈であった。

「有り難う、エルンスト。お蔭で安心しました。済まないわね、親愛なるベッティー。こんなに愛想なく出て行くことになって。でもすぐ家に戻らなくちゃ。ヴォルフガングが家に座っていて、全くどうしようもなく、私を待っていると確信して来たの。何かが生じたに違いない。あら、ミンナも出ている。でも彼は住まいの鍵は持っているだろうし。済まないわね。全く混乱していて、親愛なるベッティー、...」。

「愛想よ、愛想。お作法、親愛なるマティルデ、どんな状況でもお作法。勿論こんな午後には家にいなくちゃならなかったと思うわ。勿論彼が待っていますよ。私だったら勿論こんな日に外出しなかったでしょう。それで特に一つのことを言います、 — お願い、マティルデ、あとちょっと、そんなに慌てて出て行ってはなりません。 — 彼に厳しくすることよ。間違っても優しくしてはいけない。特に金を渡さないこと、一文もね。住まい、食事、服装、 — これは結構。でも金は駄目。ただ賭けに使うだけだから。マティ

ルデ、マティルデ、行きなさい。愛想は構わない。 — 聞いて、エルンスト、...」。
上流の一万人のトゥーマン夫人は更に語った、延々と、...

33

門道のペートル

犬は相変わらず眠っていた。猫も眠っていた。更にゲオルゲ教会通りも眠っていた。

娘のペートルは家の中庭への門道の所、影の中に立っていた。彼女の前では通りが、白い、容赦ない暑さできらきらしていた。どぎついその明かりが両目に痛かった。彼女の目にしているものは、輪郭を失って、溶け去るように思われた。それから彼女は瞼を閉じた。すると頭の中に黒いものが生じた。突然燃え上がる、痛々しい深紅を伴った黒いものであった。

その中で時計の打つ音を聞いた。 — 時が過ぎるのは、結構なことだ。最初彼女はどこかへ向かって、何かしなければならぬと考えた。しかし半ば黄昏の瞬刻に、時が流れ去るのを感じると、自分はただここに立っていて、待つべきだと分かった。あの人は戻って来るに違いない。今にも戻って来るに違いない。金を持って来る。そうなれば二人は出発することだろう。角にはパン屋がある。その横は肉屋だ。彼女は自分が新鮮なシュリッペ[堅焼きロールパン]にかみつくのを感じた。彼女は嘔んだ、その黄褐色の外部、そのカリカリの覆いを砕いた。ちいさな、平たい、とがったかけらが縁に残っていた。その内部は白く、もっと柔らかい。

さて再び何か赤いものがその間に混じった。彼女は目を閉ざして、それを見分けようとした。果たしてそう出来た。それは彼女の外部にはなく、内部に、脳の中にあつたからである。丸い小さな赤い斑点である。これは何かしら。突然彼女は察した。これはイチゴだ。勿論、彼女は先に進んでいたのだ。もはやパン屋にはいない。八百屋にいる。籠の中にイチゴがある。それは新鮮な香りがして、彼女は匂いを嗅いだ。 — まあ、何て良い匂い。イチゴは、これもやはり新鮮な緑の葉の上にあつた。...すべてがとても柔らかく、とても新鮮だ、 — さて更に水も流れた。全く澄んで涼しげに、....

苦労して彼女は夢の像を払いのけた。しかし水は浸透して流れて来て、パチャパチャ音を立てた。何か彼女に告げたように思われた。ゆっくりと彼女の目は開いて、ゆっくりと彼女はまた、自分が相変わらず立っている門道を、きらきらした通りを見分けた。 — 最後に何か彼女に言っている眼前の男の人を見分けた。初老の男性で、黄色の痩せた顔、黄灰色の羊肉形ほおひげ、頭に糊の利いた黒い帽子を被っていた。

「何と仰有いました」と彼女は努めて、尋ね、今一度尋ねなければならなかった。というのは最初、干涸らびて乾いた口では単に小さな不明瞭な物音になったからである。

彼女がここに立っている今の時、何人かの男が側を通り過ぎた。この男達は、開け放たれた門扉の影になって、門道にいる人影を實際目にしても、ただより急ぎ足で去って行くのみであった。貧しい一帯で、悲惨な時代で、いつでも、どの時刻であれ、女達や娘達、未亡人達の悲惨な人影が立っていて、顔に空腹さと惨めさを浮かべて、体にあり得ない襤褸をまとって、この体に対する — 最後の救出として、 — 一人の買い手が更に現れることを待っていた。年金を失った戦争未亡人や、労働者の妻達で、たとえごく真面目な、

勤勉な夫が週給を持ち帰っても、ドルに対する暴落のたびに、手持ちの値が崩れるのであった。それに娘達、ほとんどまだ子供で、幼い兄弟姉妹の悲惨さをもはや見ておれないのであった。一 毎日、毎刻、毎秒、彼女達は、空腹が仲間であり、不安が同床者である彼女らの小屋のドアを開け、一 そして最終的に背後のドアを閉め、こう語るのである。「今からやって見る。何のための体面かしら。待っているのは、もっと大きな悲惨、あるいは次の流感、あるいは貧窮医と貧窮棺というのに。すべてが逃げ、去り、急ぎ、変わって行く、一 体面を守るなんて」。

そこで彼女らは、どこの隅にも、どの時刻にも、破廉恥に、あるいは不安げに、お喋りしながら、あるいは黙って、請いながら、物乞いしながら立っている。「せめて一杯のコーヒーと一個のシュリッペをください、...」。

貧しい一帯、ゲオルゲ教会通りである。ガス協会の集金人とか既製の仲買人、郵便配達人、一 彼らは娘が立っているのを見ると、単にわずかにより急ぐのみである。彼らは顔をしかめないし、破廉恥な言葉も、冗談も言わず、娘どものことを考えない。ただ更に急いで通り過ぎるだけである。一言、一つの嘆願、一つの心に響く嘆願のせいで、自分らの心が与えてはならぬ贈り物へと心動かされてはならないからである。どの人も家では同じ心配事が待っているのであり、どの人も心に邪悪な小鬼を住まわせている。一 いつか自分の妻が、自分の娘が、自分の少女がこのように立つかもしれないのである。門扉の影に、朝になると早速明るい公道に。何も見ず、過ぎ去ることだ、つぶやきを耳に入れてはならない。汝は一人っきりだ、私も一人っきりだ、我々皆が一人っきりで死ぬ。一 出来る者は、自らを助けよ。

しかし今や一人の男がペートルの前に立ち止まっていた。山高帽の殿方で、黄色のフクロウの顔、黄色のフクロウの目をしている。

「何と仰いました」と彼女は結局、明瞭に尋ねた。

「お嬢さん」。彼は少しばかり不同意げに頭を振った、「こちらにパーゲル達が住んでいますか」。

「パーゲル達」。この人はそれではあのことは望んでいない。パーゲル達を尋ねている。パーゲル達、幾人かのパーゲル。少なくとも二人。彼女はこの人が誰で、何を欲しているか知りたいと思った。ひょっとしたらヴォルフガングにとって重要な人かもしれない、... 「そうですね」。彼女は自分を確かにしようと試みた。この殿方は自分達に対して何か望まれている。自分が、門道にこんな姿でいる自分が、ヴォルフガングの関係者であると知られてはまずい。「パーゲル達ですか」と彼女は今一度尋ねて、時間を稼いだ。

「そう、パーゲル達です。ご存じないようですな。少しばかり飲んでいるんでしょう」。彼は目を瞬きした。この人は全く気の良い男に見える。「お嬢さん、日中には良くありませんよ。夕方には構いません。しかし日中は体に良くない」。

「いえ、パーゲル達はここに住んでいます」と彼女は始めた、「でも彼らはいません。二人は去って行きました」。(この人は上のトゥーマン夫人の許に行ってはいけない、一 どんなことを耳にするか知れない。ヴォルフガングのためにならない)。

「そうですか、二人とも去った。多分結婚のためでしょう。でしょう。しかしそれなら遅刻したに違いない。戸籍係はすでに閉まっています」。

このことも承知なさっている。どなたかしら。ヴォルフガングは常々言っていた、もは

や知り合いはいない、と。

「何時に二人は去ったのです」と殿方は再び尋ねた。

「三十分ほど前です。いいえ、すでに一時間前」と彼女は急いで言った、「二人は言いました、今日は戻って来ない、と」。

（この人はトゥーマン夫人の許へ上がってはならない。それだけは駄目）。

「そのように二人は話したのですか、お嬢さん」と殿方は尋ねた。突然、不審げであった、「パーゲル達と仲良かったのですか」。

「いいえ、違います」と彼女は急いで否定した、「私の外見を知っているだけです。ただ私はいつもここに立っているものですから。そう私に二人は語ったのです」。

「そうですか、...」と殿方は思案して言った、「まあ、感謝申し上げます」。そして彼はゆっくりと門道を通って、最初の中庭へ向かった。

「待ってください」と彼女は弱々しい声で叫んだ。数歩彼の後を追うことさえした。

「何のことです」と彼は尋ねて、振り向いたが、しかし再び戻って来なかった。（この人は全く上の方へ行く気なのだ）。

「お願いします」と彼女は嘆願して言った、「上にいる人々はひどい方です。パーゲルさんについてこの人達が言うことを信じてはいけません。パーゲルさんはとても上品な、とても礼儀正しい方です。一 私は彼とは関係ありませんが、単に本当に外見だけ存じているのですが、...」。

この男はぎらつく陽光の中、中庭に立っていた。彼は鋭くペートルアを見返した。しかし彼はきっと良く見分けられなかったことだろう、つまり彼女が黄昏れの門道に立って、軽やかに弱々しい人影となって、頭を少しばかり前方に傾げて、唇を半ば開け、緊張して自分の言葉の効き目を見つめながら、両手を嘆願するように、胸に置いている様を見分けられなかったことだろう。

彼は思案げに黄灰色の髭を親指と人差し指の間で揉んでいた。長く考えた後で、彼は言った、「お嬢さん、心配いりません。私も、人々が語ることをすべてを信ずるわけではありません」。

それは辛辣な調子ではなかった。ひょっとしたら少しも彼女のことを当てこすったものでなかったろう。それどころか好意的に聞こえた。

「私は若様のことは十分に良く存じています。まだとても小さい頃から存じ上げています、...」。

そして彼は地上からあり得ないほどの小さな距離を示した。しかしそれで十分であった、一 彼はペートルアに今一度頷いて、最後に二番目の中庭への通路に消えた。

しかしペートルアはすぐに門扉の背後の安全な隅に戻った。彼女は今や勿論、自分が失敗したこと、ヴォルフガングを夙に子供時分から知っているこの老殿方に情報を与える必要はなかった、いや、自分はこう言わなければならなかった、ここにパーゲル達が住んでいるかは知りません、とだったと、すでに気付いていた。...

しかし彼女は余りに疲れていて、余りに打ちのめされ、余りに病んでいて、更にこのことについて思いを巡らすことができなかった。彼女はここにただ立ち止まっていて、彼がまだ戻って来るまで待つつもりであった。それから彼女は彼が得た情報をその顔から読み取ろうと思った。ヴォルフガングはどんなに素敵な人間か彼に告げようと思った。決して

悪いことをする人ではなく、誰かに悪さをする人ではありません、と。...そして彼女が頭を涼しく壁に寄せていて、目を閉じて、そして今回は不快に黒いものが、つまり自分の自我や心配事からの乖離を意味する黒いものがやって来るのを感じ、一 その間に彼女は、その老殿方が奥の中庭を越えて進んで行くのを頭の中で追いかけた。階段を上がって、トゥーマン夫人のドアまで行く。彼が呼び鈴を押す音が聞こえる気がし、トゥーマン夫人との会話について考えて見よう。...夫人は話すことだろう、きっと話すことだろう。すべてを洗いざらい話すことだろう、自分達二人を屑扱いすることだろう、金を損したと嘆くことだろう。...

しかし突然二人の部屋が浮かんだ。この醜い洞穴が二人の愛の輝きで黄金色になった。...おまるマダムの声は次第に遠くへ消えた。この部屋で両人は笑い、眠り、話し、読んだのだ。...彼は歯を磨きながら洗面台に立っていて、彼女が何ごとか言った。...

「何のことか分からない」と彼は叫んだ、「もっと大きな声で」。

彼女はそうした。

彼は歯を磨いていた、「もっと大きな声で。一 一言も分からん、もっと声を上げて」。

彼女はそうした。彼は磨いて、泡を出した、「もっと大きな声でと言っているだろう」。

彼女はそうした。二人は笑った。...

ここで二人は一緒にいた。一緒だった。彼女は彼を待っていて良かった。甲斐のないことではなかった。...

そして突然彼女は、素早い、痛みを伴う瞬きの中に、通りを目にした。それが分かって、彼女は[頭の中で]進んで行った。...メルヘンの泉、...ヘルマン公園、...更に進み、ずっと進み、相変わらず町である、...それから今や田舎、果てしない田舎、田畑に森、橋、茂み、...そしてまた門道のある家で一杯の町、...そしてまた陸と河川、途方もない海、...そしてまた地方、田舎と町、とてつもない、...そして外に出て、すべてを後にする夢、人生の千もの夢、すべての角、すべての村での夢、...でもこうしたことすべてを、彼女の頭の中では混乱していて、私は放棄することにしましょう。そして御身に祈りましょう。御身が二人の部屋をまた贈ってくださり、その部屋で彼を待つことを許されますように、...

ゆっくりと黒くなった。すべてが消え失せた。世界は果てしなくなった。黒い切れ端は向こうへ飛び去って、世界を覆った、...。一瞬、更に部屋のカーテンを見たように思った。途方もない蒸し暑さの中に、黄灰色で、たるんで、動かず掛かっていた、一 それからこれも夜の中に消えた。

しかし夜でも彼女に安らぎをもたらさなかった。今や彼女の中で赤く火照った。輝く、邪悪な赤色であった。一 いや、向こうの犬が起き上がった。ますます大きくなって、犬は通りを越えて、彼女に向かって来た。鋭く尖った犬歯のそのあくびする喉はすでに彼女の頭上にあった。邪悪に赤い目で、邪悪に赤い脅かす牙である。そして犬は途方もない重さの前足を彼女の肩に置いて、彼女は不安の余り叫んだが、しかし彼女の耳までその音は出て来ない。彼女は沈んだ、...

従者のエルンストは、彼女の肩に手を置いて、警告するように言った、「お嬢さん、しっかりして、お嬢さん」。

遠くの方からペートルは彼が来るのが見え、それでも、すぐに問いかけた、あたかも彼が去ってから、彼女の中でその質問が切迫して待っていたようであった、「あの人達は何

と言いました」。

従者は疑わしげに両肩を動かした。それから言った、「若様はどこへ行ったのです」。彼女が躊躇うのを彼は見た。宥めて言った、「私に気兼ねする必要はありません。私は彼の伯母さんの従者にすぎないのです。私は言いたくないことは、話しません」。

上ですでに耳にしたであろうことよりも、ひどいことは考えられないので、彼女は言った、「行きました、金の工面に」。

「そして戻って来ないのですか」。

「そうです。まだです。待っているのです」。

二人はしばらく黙って立っていた。運命と、それにひよっとしたらこの男が彼女のために用意しているかもしれないものを、彼女は辛抱強く待っていた。彼は、単純に立ち去って、女主人に報告したものか、決断が付かず、待っていた。...フォン・アンクラム少将夫人がこの娘について考えていること、救助活動について言うであろうことを推察するのは難しいことではなかった。それでも、...

従者エルンストはゆっくりと門道から通りへ向かって、決断が着かず、あちこち見回した。待たれている男[ヴォルフガング]は見えなかった。一瞬、ただ立ち去ることを考えた。この娘は一言もかけず彼が立ち去るのを見ているであろうことは良く分かるように思われた。これが最も簡単な解決法であろう。それ以外の方法は陛下の許で、彼にとって面倒なことになる。 — それとも自分で金を使うか。 — この年で従者エルンストが貯ええた小さな資産はいかにも価値のないものであろうとも、それでもそれだけに彼はとてつもない数字のこれらの紙幣を頼りとしていた。家では自分の小さな部屋で、ブリキの紅茶缶に次々とこれらの紙幣を詰めていた。...

それでも、...

彼は今一度通りをあちこち見回した。何も現れない。躊躇いながら、自身の行為に少しばかり不機嫌になって、彼は門道に戻って、同じように不承不承尋ねた、「若様が金を持って来なかったら、...」。

彼女はただ彼を見つめた。頭を微かに動かした。金はなくても、ヴォルフガングが帰って来るかもしれないというこの言葉に見られる淡い展望で、彼女は元気になった。

「それに彼が戻って来なかったら、どうなさるのです」。

彼女の頭は少しばかり前方へ沈み、臉は閉ざされた、 — 一言も発せられなかったが、彼女にとってその場合すべて一切どうでもいいと十分に明瞭であった。

「お嬢さん」と躊躇いながら彼は言った、「従者の稼ぎは知れています。それで私の貯えはすべてなくなるのですが、しかしこれを貰って頂けるなら、...」。

彼は一枚の紙幣を彼女の手に押し付けようとした。彼はそれをすり切れた、薄い札入れから抜き出した。「50,000マルク」。彼女が手を引っ込めると、より切迫して言った、「いや、いや、落ち着いて受け取ってください。これは単に乗車代です。あなたが家に帰るための」。彼は不審に思って、考えた。「ここにずっと立っているつもりじゃないでしょう。どこかに親戚があって、ともかく行けるところが」。

再び彼は打ち切った。この恰好では、脚は腰上まで裸で、ただ草臥れた家庭靴を履いて、情けない紳士用上着で、胸は余りに露わで、電車には乗れないと思いがたった。

彼は当惑し、狼狽し、ほとんど苛立って立っていた。自分は助けてやりたい、しかしこ

の様では、 — どのような手助けができるか、自分が連れて行って、着せることはできない、 — 結局そうしてもその後どうなる。

「いや、お嬢さん」と彼は突然悲しげに言った、「若様は一体なぜこんな事態を招いたのです」。

しかしペートラが考えたのはただ一つのことであった、「それでは、彼は戻らないと思っているのですか」。

従者は両肩をすくめた、「それは分かりません。喧嘩なされたのですか。お二人は今日結婚の予定だったでしょう」。

結婚 — その通りだ。その言葉を受け止めたが、彼女はもはやその言葉を考えていなかった。「今日は結婚なのですが、...」と彼女は言って、曖昧に微笑した。彼女は今日、ずっと何か欠点のようなものであった「レーディヒ[独身]」という名前を棄てる予定であったことを思い出した。自分が目覚めて、彼の財布を覗く勇気がなくて、それでもまだ、今日結婚するであろうと確信を抱いていた様子を思い出した。それから最初の疑念が生じ、彼に迫ったときの彼の煮え切らない振る舞いが生じ、それから要求し、そして頼んだのであった。...そしてドアを閉めるとすでに、今日は結婚にならないだろうと彼女は感じていたのであった。

しかしそれから突然、(それも不思議な具合に、実際生じたのであるが、空腹のせいで彼女の燃える脳自身がそのことを忘れていたのであった) — つまり突然、鏡の前での認識が彼女に生じた、即ち、彼は確かに出掛けるが、しかし彼は彼女のものであり、永遠に不壊に彼女の中に残るといった思いが生じたのであった。それから後は、トゥーマン夫人の台所に物乞い風にうずくまって、イーダの渦巻きパンを盗み見して、追放され、この通り道にぼんやり待っていたのであった。これは単に空腹のせいでしたことであり、空腹は体と脳の不埒な敵であって、この敵のせいで、彼女は自分が決して忘れてはならないこと、彼女の中での彼に対する確信をただ忘れてしまったのであった。

彼女は一体どうしたのか。彼女は魔法にかけられ、誑かされたのであろうか。彼女はこれまでずっと生活を凌いで来た。母親がどれほど粗野に彼女を扱おうとも — 二、三の涙を流し、それでもけろっと生きて来た。鋭いズボンの折り目の娘狩りの愛敬ある紳士どもが、その後卑俗な吝嗇家に変貌しようとも、 — 歯をくいしばって、けろっと生きて来た。ヴォルフガングが戻って来ようとも、来ないとしても — これはひどい、悲しい、いけない、...。しかし二十二年間、ただ自分の身柄のために、どんなまずいものをも食して来た。 — そして今彼女はここに立っている、ぼんやりとここに置かれて、迎えがない、 — 人生で初めて、彼女は、全く一人っきりの自分が乗っ取られて、世の中で自分の身代わりになる女性がない、 — 全く滑稽な事態だ。

色々な想念が彼女に流れ込んで来た。彼女はこうしたすべてを即座に把握することは出来なかった。空腹のせいで、彼女の哀れな頭がしばらく黒いもの、漠とした夢に沈んでいた後、この空腹のせいで、今や頭が異常に生氣あるものとなり、全く目覚めて、明瞭になった。すべては簡単なことだ。自分は誰かのために生きなければならない。この誰かは自分の中にいるので、まず自分のために生きなければならない、 — これほど自明なものはない。それ以外のことはそれから解決する。

彼女はこうしたことを考えている間に、頭の中で別なことも考えていた。自分がなすべ

き計画を、後で、しかしまた同時に練っていた。それ故彼女は突然、全く明瞭にはっきりと言った、「私にお金をくださろうというのは、ご親切なことです。大事に使いましょう。有り難うございます」。

従者はあっけにと取られて、彼女を見つめた。彼が、今日は結婚するつもりだったと彼女に思い出させてから、一分と経たないうちであった。一体この一文が彼女の脳の中でどのような想念を呼び起こして、このわずかな数秒のうちに彼女は何を全体体験し、練ったのか、従者エルンストは想像出来なかった。彼は単に彼女の顔の中に変化を認めた。その顔は突然、弛緩を止めて、生氣溢れるものとなり、色合いさえも帯びることになった。彼は突然、躊躇いがちな小声の言葉の代わりに、精力的な調子、ほとんど命令のようなものを聞いた。何も考えずに、彼は彼女の手の中に金を置いた。

「まあ、お嬢さん」と彼はびっくりして、またこっそり怒って言った、「突然元気になりましたな。どうしてです。戸籍係はすでに閉まっています。思うにあなたは酔っ払っていますね」。

「そうではありません」と彼女は答えた、「ただ突然善いことを思い付いたのです。とても奇妙に思われましようが、それは飲んでいいるせいではありません。何も食べていないのです。すでにかかなり長い間、それで頭が変と思われるのでしょうか、...」。

「何も食べていないのですか」と今や本当に従者エルンストは怒った。彼は生涯いつも決まった時刻に決まった食事を食べていた。「何も食べていないとは。若様がそのようなことを本当になさってはいけません」。

彼女は半端な、やり場のない微笑で彼を見つめていた。彼女は、彼の頭の中で生じていること、彼が頭の中で考えていること、全く憤慨して感じていることが分かった。彼女は彼に対して微笑せざるを得なかった。というのは今回、健気な、躰け正しい従者のエルンストは、上流階級の彼の交際の中で年老いていながら、実際初めて彼女の立場に賛同し、若様に反対したからである。今回、人間はいかに互いに隔たって生きているか、彼女は実感した。若様は彼女を劣等に取り扱ってよろしいでしょう。若様は彼女を騙してもよろしいでしょう。彼女を袖にしてもよろしいでしょう、 — これらのことすべてに対して、善良な従者エルンストは（それに彼の大抵の同輩達は）それほど怒らなかったことであろう。しかし若様が彼女に何も食べ物を与えないとは。いや、そのようなことは実際なされるべきではない。

彼は額に皺寄せて、彼女を観察していた。彼女は彼がいかに大きな決意の前に立っているか、見てとれた。そこで彼女は彼を気楽にさせた。「二、三個のシュリッペを買って来てください」と彼女は言った、「このすぐ角にパン屋があります。それで私のことは心配無用となります。ちょっと食べれば、元気になります。計画があるので、...」。

「勿論シュリッペを買って来よう」と彼は熱心に言った、「ひょっとして他に何か飲み物も、牛乳はどうです」。

彼はそれを急いでした。三、四軒の店へ行った。バターに、パン、ゼンメル、ソーセージ、二、三個のトマト。...彼はもはや自分の金、貯金のことを考えていなかった。...一人の人間が空腹で、食べ物がないという事実には彼は全く混乱していた。そのようなことを若様がなさってはならない、と彼は再三考えた。彼女は彼女の思うままに構わない、しかし空腹のまま放っておかれること、 — これは許されない。

彼は走って、懸命に眠たげな店主にせつつき、早く、急げと思っていた。彼はこう言いたかったことだろう、つまり飢えた人間のためなのだ、と…。しかし彼が戻って見ると、彼は更に混乱した。彼女はいなかった。門道には、通りにも、中庭にもいなかった。彼女は去っていた。

躊躇いながら、彼は今一度トゥーマン夫人の許へ上がって行く決心をした。確かに気は進まなかったが、というのはこの止めどもなく喋る女性は彼にとって、彼の陛下、ベッティーナ・フォン・アンクラーム少将夫人と余りに瓜二つであったからである。しかしただイーダと会えたのみであった。彼女はすでに半分商売風の、半分まだ家庭風の、着替え中であって、彼はかなり驚いた。この若いレディーは、彼の頭の中はおかしいのではないかとはいまだ無愛想に問い合わせた。こう言ったのである、「あの売女がまたここに来るわけないでしょう。あの女が呼び鈴を押そうものなら、一発ぶたれているわよ。全くこんな連中は何を考えているか知れたものじゃない」。

従者エルンストはまた階段を下りて、また中庭を越えて、門の入口にまた戻って来た。

門扉の影には誰もいなかった。頭を振りながら、彼は通りへ出た。何も見当たらない。食料品の入った袋や小袋、牛乳で一杯のこの瓶、これを自分の主人の許へ持って行くことはできなかった。お手伝いがきつと目にして、お手伝いはきつと陛下に語ることだろう。

彼は再び向きを変え、彼の手配した品を門扉の背後のごく深い、真っ暗の隅に置いて、更にしばしば振り返って見ながら、ようやく後にした。地下鉄に乗っているとき、初めてもはや思い返さず、再び先のことを考えた。

陛下には何と申し上げようか。

慎重に考えて、彼はできるだけ余り話さないことに決めた。

第五章 雷雨が勃発する

34

巡査長グーバルケがペートルを逮捕する

保安警察の巡査長レオ・グーバルケは三時頃によく車両駅ルンメルスブルク近くの自分の家庭菜園[シュレーバー菜園]からゲオルゲ教会通りの住まいに戻って来た。公務のために、綺麗に体を洗い、着替える十分な時間があった。しかし更に、本来いつも欲していたように、仮眠を取るには、もはや時間がなかった。というのは、彼のまことに骨の折れる勤務は、午後の四時頃から未明の二時まで続いて、その前に少しばかり横になることが、いつも望ましかったからである。すると公務に、とりわけ公務中の神経に効き目があった。

巡査長レオ・グーバルケはその二部屋の住まいに全く一人っきりであった。妻はすでに朝から家庭菜園（北極コロニー）にいて、二人のお転婆は学校から直接菜園へ向かっていた。この警官は大きな垂鉛の盥を台所へ持って来た。これは普通彼の妻が洗濯に使うものであった。そしてゆっくりと丁寧に上から下へこすって行った。

どのようにしたら最良に体を洗えるかというのは、彼の妻との間で昔からの論争となっていた。彼は上の方からした。頭から首、肩、胸と順に、下の足まで進んだ。これは実際きちんとしていて、清潔であった。というのはすでに洗われた箇所は、次の体の部分を洗うとき、再び触られることがないからである。その上、儉約にもなった。というのは上の方から豊かに滴り、石鹸を付けられた水が後に洗われるべき体の部分を早速浸して行くからである。

グーバルケ夫人はこれを察しようとしないうか、あるいは察していても、そうはしなかった。彼女は全く順番を無視して洗った。あるときは背中、次は足、今度は胸、そして股であった。巡査長のグーバルケは公務でほとんど毎日興奮した女性とやり合っていて、女性も分別を持ち得ることは固く確信していた。しかしいづれにせよ、男達とは全く別な流儀の分別である。女性に、女性が納得したくないことを、納得するように仕向けることは全く無意味である。

グーバルケ夫人は素敵に几帳面な女性である。キッチンはまだこぎっぱりしている。グーバルケは、すべての丁寧に仕舞われた引き出しには、そしてすべての確実に閉ざされた戸棚のドアの背後には、すべての品がとてもきちんとかまっていると承知していた。しかし体洗いの順番はそうならない。そのようなことはとにかく女性では仕方ないのである。それならば、それを認めるよう試みるべきではあるまい。さもないと女性はすぐに立腹する。しかしいづれにせよ父親は、二人の子供、両娘が、彼の流儀で洗うという勝利を得ていた。

巡査長グーバルケは四十代初めの男で、赤みがかかったブロンドで、すでに少しばかり太っていて、とても几帳面で、ともかくそれが大事なとき好意に欠けていなかった。彼はもはや自分の職業に格別の熱情を感じていなかった。もっともこの職業は元来彼の規律嗜好に合致していたのであるが。車の運転手に交通規則違反を咎めるときにせよ、狼藉の酔っ

払いを交番に連れて来るときにせよ、禁じられたケーニッヒ通りから売春婦を追い出すときにせよ、――彼はベルリンの町の秩序を守っているのもあって、通りで皆が正しく振る舞うよう気を配っていた。勿論公の秩序は、例えば彼の住まいにおけるような私的秩序の位階を保つことはできなかった。ひょっとしたらこのせいで、自分の職業に対する喜びが減じていたのかもしれない。

むしろ彼はデスクワークが好みであったろう。索引を作ったり、カード目録をきちんとしたものにしたかったことだろう。その場合、紙やペン、場合によってはタイプライターで、この世での自分の理想像に最も良く合致するものを得たことだろう。しかし彼の上司達は彼を路上から解放しようとしなかった。この平静な、思慮ある、ひょっとしたら少しばかり遅鈍かもしれないこの男は、殊に当時の難しい混乱した時期に、代え難い人物だったのであろう。

レオ・グーバルケは自分の幾らか薔薇色の脂身をこすって、赤くしている間に、この件にとにかく可能性がありそうな転回を与えて、度々表明してきた内勤への自分の配置転換を実現させるには、どうしたものか今一度考えた。たとえ上司が欲しくなくても、この配置転換を可能とさせるには、色々な手段がある。例えば臆病である、――しかし勿論臆病は問題にならない。あるいは、興奮して、神経、分別を失うことだ、――しかし巡査長グーバルケは勿論路上の皆の前で、神経、分別を失うことはできない。余りに苛烈になって、どんな屑をも指弾して、皆を交番に引っ張って来ることだ。――しかしこれもまた同僚に悪い。あるいは失敗を犯して、粗野な大胆な失敗で、警察の威信を損ない、幾多の新聞を喜ばせる失敗を犯すこと、――こうすれば路上勤務はきっとお払い箱となるだろう。――しかしそうするには、この制服、自分が夙に長く慣れ親しんだ「警察」という概念が余りに愛おしい。

巡査長は溜め息を付いた。この件をもっと仔細に見れば、規律を重んずる一人の男にとって、いかにこの世界があべこべのものになっているかまことに驚かされる。余り良心的でない者が毎日行っている数百ものことが、彼にとってはあり得ないものである。他面で彼は、それなしには生きて行けない感情、つまり自分は世界を規律付けているばかりでなく、いや、世界とも調和して生きているという感情も絶えず抱いているのである。

グーバルケは亜鉛の盥を丁寧に拭いて、最後の水滴も吸い取った。そして盥をトイレの鉤に掛けた。キッチンの床を今一度拭いた。もっともいづれにせよ、数滴の滴は不快な蒸し暑さで乾いていたであろうが。さて、更にベルトを締め、最後にチャコ[軍帽]を被った。いつものようにレオ・グーバルケはそれをまず、ほとんど手の大きさしかない台所用鏡の前で試して、いつものように、これではチャコを規則通りに被っているか見えないと悟った。そこで薄暗い廊下の大鏡の前に出た。このような短い瞬間のために電気の明かりのスイッチを入れなければならないのは、苛立たしい。(電気消費はスイッチ入れの瞬間が最も高いそうではないか)。しかし仕方ない。

さて、すべての準備ができた。四時二十分前である。――四時一分前に巡査長レオ・グーバルケはパトロールに就く予定である。彼は階段を下りて行き、一方の白い手袋を嵌めていて、もう一方は緩く片手に持っている、――そのようにして彼は門道と娘ペートル・レーディヒに近付いた。

この娘はまた目を閉ざして、壁に寄りかかっていた。彼女がたった今、従者エルンスト

にシュリッペ[堅焼きロールパン]を頼んで、彼がそれを取りに去ったとき、彼女は今や間近な焼きパンを生き生きと思い描いていた。... それを嗅ぐ思いがし、実際新鮮な滋養ある味覚が、草臥れて、しみたれた口の中に入って来た、 — 彼女は嚙下せざるを得なかった、そして吐き気がした。

再び彼女の頭の中が黒くなり、もはや支えきれないかのように肢体が崩れ、膝がぐらつき、腕と肩が絶えず震えて動いた。

「来て頂戴、来て頂戴」。しかし誰に来て欲しいと囁いているのか、全くの飢餓地獄に一人残されて、 — 従者なのか、恋人なのか分からなかった。

保安警察の巡査長、レオ・グーバルケは勿論立ち止まらざるを得なかった。彼はこれをまずともかく目撃した。彼はこの娘の外見を知っていた。彼女は、奥の方ではあるが、彼と同じ家に住んでいたからである。彼女に関して、何か不都合なことは、仕事のせいで、彼には伝えられていなかった。いずれにせよ彼女は、時に売春婦達をも泊める女将の許に住んでいて、結婚せずに、ただ賭博をしているように見える若い男と暮らしている。女達の陰口を信ずれば、 — 職業賭博人。従って、総じて格別厳格にも、寛大にも接する理由はない。 — そうこの役人は観察し、考えた。

勿論彼女は余りに酩酊している、 — しかし彼女の住まいは近いし、きっと階段を上がって行くことだろう。その上自分の公務は四時になってからようやく始まる。何も見とがめる必要はない、ここは自分の管轄ではないし、彼女に気付かれたわけでもない、それだけ事は容易だ。グーバルケはもう去ろうとしていた。そのとき、新たな激しい窒息の発作で、彼女の上体は揺れ、前方へ傾いた。グーバルケは上着の切れ込みを直接目にし、 — 見続けた。

これはいかんだろう。これを彼は見過ごすことはできない。清潔できちんとした全生活がこれには異議を称えよう。巡査長はこの娘に向かって行き、目を閉ざして吐いている女性の肩を手袋の指で叩いて、言った。「どうした — お嬢さん」。

警官はすべての人間達に対し警戒心を抱く職業であり、従って警官の自己判断に対しても全き信頼を置いているわけではない。これまで巡査長レオ・グーバルケは、この娘は完全に酩酊していると思っていた。彼女の着衣、あるいはもっと正確に言えば、脱衣は、この思いをただ強めるだけであった。ほんの少しでも自身と周囲に対し規律を重んずる娘であれば、こんな恰好で通りには出ない。

しかしこの視線、彼が彼女の肩に手を置いたとき、娘の目から放たれた視線、この燃えるような、それでいて澄んだ眼差し、苦悩した人物、しかし苦悩を見下している、 — この視線を見ると、アルコールの疑いはすべて消える。全く別の調子で彼は尋ねた、「病気ですか」。

彼女は壁に寄りかかっていた。彼女にとって、制服、チャコ、眼前の赤っぽいブロンドの、もじゃもじゃ髭の薔薇色のふっくらした顔は、ただ不明瞭であった。誰が彼女に質問をし、誰に彼女は答えているのか、何を答えるべきか、不明瞭であった。しかしひよとしたら、毎日世間のあらゆる混乱との戦いを引き受けている人間ほど良く、この混乱がどれほどの広がりを持つものか理解している者はいないかもしれない。わずかな質問と、しどろもどろの返事から、巡査長グーバルケは事の概要の顛末を組み立てて、すぐに察した、つまりただ二、三個のシュリッペを待っているところであり、その後この娘は角の「叔父

さん」の許へ行って、きっと一着のドレスを得られるであろうこと、その後夫の何らかの友人とか親戚を訪問するであろうことを察した、(乗車賃を彼女は手にしていた)。一
要するに、遺憾なことはすべての見込みから数分で片付けられることであろう。...

こうしたことすべてを巡査長は知って、納得し、すでに彼は、それじゃ結構、お嬢さん、今回は見逃すことにしましょう、と言おうとして、交番に行き、公務に就こうとしたとき、一体何時に交番に着くことになるかという手痛い考えに襲われた。腕時計をちらりと見ると、四時三分前と分かった。四時十五分前よりはどうしても早く交番に着けないであろう。十五分の公務への遅刻。何と弁解するのか。この十五分間、まことにだらしのない服装の女性とお喋りしてしまって、公務へ赴けなかった。あり得ない、一 誰もがこう思うだろう。グーバルケは単に寝過ごしたのだ、と。

「駄目です、お嬢さん」と彼は仕事口調で言った、「あなたを路上に放置できません。まずは私と一緒に来て貰いましょう」。

穏やかに、しかししっかりと彼は手袋をした手を彼女の上腕に置いて、穏やかに、しかししっかりと掴みながら、彼は彼女と通りを進んだ。通りで彼は彼女を手放すことができなかった。(秩序のためには無様なことをせざるを得ない)。

「あなたには何も起きません、お嬢さん」と彼は慰めて言った、「何も食べていないのでしょう。しかしあなたを路上に放置していたら、公序良俗違反となりましょう、つまり軽犯罪となりましょう」。

娘は彼の側を嫌がらずに進んだ。配慮を示しながら彼女を導くこの男は、制服を着ているとは言え、人を不穏な思いにさせなかった。さほど昔でない以前、どんな警官に対しても無闇に恐れていたペートラ・レーディヒは、その当時まだ少しばかり不法に路上を歩いていたのであったが、そのペートラは気付いた、つまり警官は近くでは何も案ずる必要はないこと、それどころか何か父親的なものであることに気付いた。

「交番では我々は確かに食事の用意はしていないが」と彼は率直に言った、「しかしすぐに何か食べられるよう、手配しましょう。受付係の人々は大して空腹ではないので、そこできっとバターパンが手に入りましょう」、彼は笑った。「ちょっと慣れないバターパンで、少しばかり乾いていて、くしゃくしゃのサンドイッチ用紙に入っている、まあ結構なものだ。私のお転婆どもに持って帰るたびに、娘らはいつも元気にかぶりつくものだ。兎パンと娘らは呼んでいる。あなたもそう呼んでいるかな」。

「そうです」とペートラは言った、「パーゲルさんが兎パンを持って来るたびに、私もいつも嬉しかった」。

パーゲルさんと言及したとき、巡査長のレオ・グーバルケはごく公務然とした顔をした。男達は常に協力しなければならず、殊に女性に対しては、そうしなければならないが、しかし彼はこの若い紳士に合点が行かなかった。この紳士はその上賭博者という噂だ。この若い娘にそのことを言うつもりはなかった。しかしこの若紳士の行状をもっと詳しく観察しようと思った。このパーゲル氏はとても品行方正に行動して来たとは思えない。この無責任男は、自分が見張られていると気付くだけでも、結構なことだろう。

巡査長は黙して、彼は歩調を速めた。娘も嫌がらず一緒に歩いた。彼女が注視の対象とならないよう処理することは、ただ結構なことである。そこで両人は、交番の方に消えた。

一 そして従者エルンストがシュリッペを持って来ても空しくなり、公使館員パーゲル

夫人の小間使いミンナが彼女のことを問い合わせても空しくなり、ダーレムから高級車マイバッハが出発しても空しくなった。その車には一人のレディーが盲目の子供と一緒に座っていたのである。

この頃ヴォルフガング・パーゲルも、彼女の母親と最後の喧嘩をして、空しかった。ペートラ・レーディヒは初めて、すべての市民的影響圏から去っていた。

35

母親の許への途上のヴォルフガング・パーゲル

ヴォルフガング・パーゲルは一步一步、格別急がずに、それにまた一度も休まずに、ダーレムの金持ち達の別荘からシェーネベルクの群衆の通りを経て、古いベルリンの西部までの長い道のりを進んだ。彼は自分の他にはほとんど人間の歩かない多くの通りを通って、人気のない、見棄てられた、太陽によって干涸らびたような通りを通って来た。そしてまた彼は往来で賑わう別な道を進み、群衆と群れ、当てもなく、当てのある人々の間を縫って行った。

彼の上には町の蒸し暑さと吐息の靄がかかっていた。パーゲルがダーレムの並木道の間を歩むとき、彼はまだ、澄んだ鋭い影を投げかけていた。しかし彼が深く町の中へ入り込むと、一層その影は薄れ、灰色に影は歩道の花崗岩の灰色と溶け合った。蝸集して来る人々だけがその影を消したのではなく、ますます急に、ますます密になる上にそびえる家の壁が消した。いや、靄は一層濃くなり、陽は一層薄くなった。絶えず人影を過度に暑い町へ投げ出す暑さが、人影を消していた。

まだ何も雲は見えなかった。ひょっとしたら雲は家並みの背後に、隠れた地平線に押し込まれて、待機していて、上昇し、炎と雷鳴、奔流の滴と共に流れ込む用意をしていたのかもしれない。自然の、人為的世界への空しい侵入である。

ヴォルフガング・パーゲルは、だからと言って、更に急ぐことはなかった。最初彼は決まった目標もなく出発した。ただ、かの上流のキッチンにもはや座っていることを許されないと感じて出たのであった。それから突然、自分の行進の目標が明確になったとき、だからと言って、更に急ぐことはなかった。彼はいつもゆっくりとした人間であった。知識と意識はゆっくりと始動した。ある質問に返事をするとき、彼はよく手の仕草をした。これで返事は少しばかり先送りされた。

今回も彼はゆっくり歩いた。彼は決定を少しばかり先送りした。キッチンでの盲目の娘との会話の際、ペートラに関する心配は他の人々の手に委ねなければならないと彼はまだ思っていた。つまり彼はこう考えたのである、自分にはペートラを助ける力がないと。衣服のない、食べ物のない、借財を抱えた娘を助け出せるのは、金だけであって、自分には金がない、と。しかしそれから自分には金がある、と、あるいは金はなくても、金と同等の価値のあるものを持っていると思いついた。正確に言うと、フォン・ツェッケが思い付かせたものであった。自分には一枚の絵がある、と。「窓辺の若い夫人」のこの絵は疑いもなく自分のものだ。彼の母が、彼が戦場に赴くとき、こう言ったのを多分に思い出したのであった。「この絵は今、あなたのものよ、ヴォルフ。戦場でいつも思い出しなさい。父親の一番素敵な絵がここであなたを待っている、と」。

彼はそれをとても素敵だとは思わなかった。しかし市場価格はあるだろう。ツェッケにはいい思いをさせたくない。しかしパーゲルのものなら引き受ける画商は十分にいるであろう。ヴォルフガングはベルヴェー通りの大画商を選ぶことにした。あそこなら自分を騙して儲けようとはしないだろう。パーゲルのものなら騙さなくても良い商売となろう。

支払いの前代未聞の大きな額となろう。多分数億（十億単位）となろう、しかし自分はその金に手を出さない。一紙幣たりとも両替しない。それどころか徒歩でゲオルゲ教会通りへ向かおう。一 ダーレムから徒歩で町へ向かったのであるから、この最後のちょっとした道のりは大したものではない。いや一紙幣も両替しない、一 途方もない全額を持って、待っているペートルをびっくりさせよう。

パーゲルは火照る町ベルリンを通過して、急がず、立ち止まらず向かった。彼は自分の計画を何度も考えた。色々なことを考量した。しかし最も気に入ったのは、この途方もない金、紙幣に次ぐ紙幣を、テーブルに置く瞬間、更に良いのは、ベッドに横たわっているペートルに雨と降らせる瞬間であった。そのとき彼女は全く金の中に消えて、屑小屋で金に覆われるのである。この瞬間を彼はしばしば夢想した。以前彼は賭博の儲けでそうしようと考えていた。今やそれは別の金となって、父親の絵の売却金となった。賭博による金、三人の猛鳥達からいわば強奪した金ならば、勿論もっと素敵であったろう。今やこの考えは最終的に消えた。「このやり方」はもはや考えない。

そのようにして彼、ヴォルフガング・パーゲル、退役士官候補生、退役賭博人、退役恋人は進んで行った。彼はまたしても何もなしていなかった。彼はただ歩いた、ここから向こうへと歩き、向こうからここへと歩いた。午前にはまだ乗車して出掛けた。午前中には計画もあった。しかし今まずこの計画が正しい計画だ。彼は最も立派な意図を有していた。彼は急がなかった。彼は用心深く、平常心を持っていて、完全に自分に満足していた。自分は一枚の絵を売ろう。金にしよう。その金をペーターの許に持って行こう、一 すごく立派なことだ。自分のペーターにとって、ひょっとしたら金のことは何の問題でもないかもしれないとは一瞬たりとも考えなかった。自分は彼女に金を、沢山の金を、彼女が生涯かつて有したよりも多くの金をもたらすのだ、一 自分の女性にこれ以上のことが出来ようか。世界は狩り立てていて、ドルは上昇し、娘は飢えている。一 彼はゆっくりと歩いた。彼が実行するであろうことは、すでに実行されたも同然であったからである。彼は急がなかった。物事には然るべき時間がある。いつでも正しく熟すのである。

さて彼はタンネン[縦]通りへ折れた。それは単に袋小路となっていた。彼は数歩進んで、玄関のドアを開けて、母の住まいの古い階段を上った。公使館員の古い陶器の表札がドアにあった。彼自身よりも古いもので、角が欠けていた。彼がかつて、はるか昔に、スケート靴で壊したものであった。廊下は昔からの臭いがして、薄暗い長持ちや、檜の戸棚、古い気まぐれな置き時計、壁際に高く積まれた父親の走り書きの大きなスケッチがあって、これらのスケッチは雲のように明るく、薄暗い世界の上に漂っているように見えた。

しかし新たに、古風な鏡台に、二束の大きな祝祭風アスターの花束があった。ヴォルフガングがそれを見ていたとき、二つの中国青磁の花瓶の間に母親のメモを見つけた。「今日は、ヴォルフ」と彼は読んだ、「コーヒーがあなたの部屋にあります。それでくつろぎなさい。ただもう一用事出掛けます」。

一瞬、彼は決断出来ず、この挨拶の前で立ち止まった。ミンナの報告から、母親が彼を

毎日、毎時間待っていることを承知していた、 — しかしこれはやり過ぎに思われた。彼はこの待ち方を別な風に、格別目的のない、むしろたまたまのものと考えた。彼は自分の部屋でコーヒーを飲まずに、絵を取りに行き、そして出ようと思った。しかしこれもまた出来なかった。夜に泥棒のようだ、 — 駄目だ。彼は両肩をすくめた。緑色の鏡の、彼の向かい側の青白い鏡像も同じことをし、ほとんど当惑して微笑した。それから彼はメモを畳んで、ポケットに入れた。すると母親はメモがないことから察することだろう。 — 彼が来たのだ、と。 — そして彼を探す。早いほど、一層良い。

彼は自分の部屋へ向かった。

ここにも花があった。ここはグラジオラスであった。彼はぼんやりと、かつて母に、自分はグラジオラスが好きだと言ったことがあると思い出した。勿論母はこれを心に留めていた、彼のためにこれを置いたのである、今度も好きになりなさい、と。しかしこうも感じなさいよ、こうしたことすべてを忘れないとは何とあなたの母はあなたを愛していることでしょう、と。

その通り、その点母は偉大だ。母は愛しながら、計算している。私はこうするから、そのことを感知しなさい、と。自分は少しもそうは考えないぞ、グラジオラスは素敵ではない。これらは薄い色合いで、強張っていて、人工的だ、 — 描かれた蠟製ではないか。ペーターなら愛して、計算はしないだろうに。

何故自分は突然かくも鋭敏に母親のことを考えるのだろうと彼は実際まだ熱いコーヒーを注ぎながら考えた。(母はたった今これを用意したに違いない。母と階段が通りで出会わなかったのは不思議だ)。まじ母には頭に来る。家のせいか、古い臭いのせいか、すべての思い出のせいか。私がペーターと住むようになってから、母が私をいつも自分の言いなりになるよう、干渉してきたことに初めて気付いた。...母の望んでいることは、すべて結構なものだ。自分が選んだ友達は皆役に立たない。そして今やこの厚かましい接待。...その通り、夙に気付いているぞ、向こうの書き物机にまたしてもメモがある。椅子の上には新たにアイロンをかけられたばかりの平服と下着がある。一枚の絹のシャツ、これには勿論母がすでにボタンを縫い付けてある。...

彼は三個目のシュリッペを味わっていた。素晴らしく美味しい。コーヒーは濃く、同時にマイルドだ。全き味覚が穏やかに口蓋全体を満たす。おまるマダムのが抜けた、それでいて酸っぱい混ぜものとは若干別だ。(ペーターは今頃コーヒーを飲んだらうか。勿論とうに済ましたことだろう。ひょっとしたら午後のコーヒーかもしれない)。

ヴォルフガング・パーゲルが快適に寝椅子で肢体を広げている間に、彼はそのメモに何と書かれているか推察しようとした。勿論例えばこんなものだろう。ネクタイは自分で探しなさい、戸棚のドアの内側に掛かっています。あるいは、浴槽にお湯が沸いています。

勿論そんなものが書かれていることだろう。そして果たして彼が覗くと、浴槽のストープは温められていますと読めた。苛立って、 — メモを次々丸めて除けた。自分が母のこと良く察知していたことは嬉しくなかった。ただ一層苛立たせただけであった。

勿論、自分は母のことを良く知っているから、良く察知できるのだと彼は考えた。所有欲。後見欲。いつも自分が学校から帰って来ると、すぐに両手を洗って、新しいカラーを付けなければならなかった。「他も者達」と一緒だったのだから、 — しかし我らは別なもの、もっとましなものなのだ。これは私に対する素っ気ない厚かましさだ。とりわけ、

ペーターに対するもので、母がまた考え出した厚かましさだ。今回は着替えだけでは十分ではない。バスに入らなければならない。母が素っ気なく平手打ちしたような女と私は一緒だったというのだ。厚かましい、――これは受け入れがたい。

彼は憤慨して、自分の若い時分の部屋の、黄色の白樺の書き物机や、白樺の書架、その前に半分掛かっている濃い緑色の絹のカーテンを凝視した。白樺のベッドは銀や黄金のように微光を発していた。明かりに、喜び、――窓の前には実際、木々、古い木々も見えた。すべては綺麗に片付けられていた。清潔に新鮮に。――トゥーマン夫人の洞穴を考えると、何故こうしたすべては、こざっぱりと準備が整っているのか、すぐに分かる。息子殿は比較されたい。この娘といたら、あんなざままで、でもここではあなたのために忠実に愛する母親が案じているのです。素っ気ない厚かましさと挑戦だ。

待てよ、と彼はまた言って、ブレーキをかけようとした。待て、おまえは行き過ぎている。おまえの馬は逐電するぞ。幾多のことは調和している。花とメモは反吐が出る。しかし部屋は昔ながらのものだ。何故私はかくも憤激するのだ。母がペーターを平手打ちしたことを考えざるを得ないからか。いや、このようなことは母の場合、深刻に考えることはない。ペーターも一瞬たりとも、深刻に考えなかった。何か別なことに違いない。...

彼は窓辺に近寄った。遠くに近隣の家々が見えた。ここから天が見える。実際、地平線上、高く積もって、黒い雲がうずくまっている。明かりはぼんやりして、風は吹かず、木の葉はそよぎもしない。向こうのマンサード[二重勾配]屋根には二、三羽の雀が止まっていて、喧嘩好きな仲間の雀が羽を逆立てて、動かずにいる。これらもすでに間近の天の脅威に臆している。

素早く去るようにしなければならない、と彼は考えた。絵を腋に抱えて、雷雨の中を走って行くのは、快適なことではなかろう。...

そして突然察した。彼は、すでに何らかの使い古しの梱包用紙に包まれた絵を持って、通りを歩いて、画商の許へ走る自分の姿を見た。タクシーさえ使えない。数百万、いや数十億する作品を、腋にしっかり収めて、泥棒のように進むのである。秘かに、呑み助が妻の許、家からベッドを持って、秘かに「叔父さん」の許へ向かうように。

しかしこれは私の所有物だと彼は反論した。私は恥じることはない。

しかしそれでも恥ずかしいと彼は言った。正しいことではない。

何故正しくないのか。母は私に贈ったのだ。

母がこの絵に執着しているのは、良く分かっているだろう。だから母はおまえにそれを贈ったのだ。母はおまえをもっと自分にしっかり結び付けておきたいのだ。それを持ち去ったら、致命的に母を傷付けることになるだろう。

だったら母はまさにそれを贈るべきではなかったのだ。今や私は自分の好きなようにしていいだろう。

これまでおまえはよく難儀な目に遭って来た。おまえはすでに何度かこの売却を考えて来た。しかし実行はしなかった。

まだそれほど差し迫っていなかったからな。今はまさにひどい。

本当にひどいのか。このような予備を有していない他の者達はどう考えるだろう。

他の者達ならこれほどひどい事態には達しなかったことだろう。他の者達なら、最後の手段として母親を傷付けてまで、恋人にパンを贈ることはしなかったであろう。他の者達

なら無茶の賭けはしなかつたらう、一 絵の予備があるからと言って、無茶なことは。他の者達なら無造作に質入れし、借りて、物乞いに出掛けることはしなかつたらう。他の者達なら、自分は何を与えるか考えることすらせずに、一人の娘からただ奪うだけ奪うことはしなかつたらう。

天は今もっと上の方まで黒くなった。ひよっとしたら奥の方ではすでに稲光したかもしれない。靄のせいでそれは見えない。ひよっとしたらすでに遠方で雷鳴が轟いたかもしれない。しかしそれは聞こえない。町では更に甲高く雷鳴がし、叫び声がする。

おまえは臆病だという声がする。おまえは二十三歳で、貧して、干涸らびている。何でもおまえのためにある、愛も、穏やかな配慮も。しかしおまえはそれから逃げ去る。確かに、確かにおまえは若い。若さは休みがない。若さは幸福から逃げる。若さは幸福を少しも欲しない。幸福は休息の謂だから。若さは休みがない。しかしおまえはどこへ逃げるのだ。若さへと逃げるのか。いや、まさに向こう、老人達が座っている所、肉のトゲをもはや感じない老人達、空腹をもはや有しない老人達の所だ。...人為的情熱の、乾留した、乾いた、砂漠の中だ、一 乾留した、乾いた、人為的な、一 若くない所。

おまえは臆病だ。今や決心すべき時だ。すでにおまえは立っていて、躊躇っている。母親を傷付けたくないが、それでもペーターを助けたいと思っている。いや、おまえにとっては、絵を売るようにと母親に懇願され、絶えず両手を上げて懇願されることが、最も好ましいことであろう。いや、母親はそんなことはしない。おまえから決断を奪うことはしないだろう。おまえ自身男ではないか。中間はない、逃げ道、妥協、尻込みはないのだ。おまえは余りに長く放置して来た、一 今や決断だ。母かペーターか。

雲がますます高く上がった。ヴォルフガング・パーゲルは相変わらず決断が付かず、窓辺に立っていた。彼は見栄えが良かった。細い腰に広い肩幅、闘士の姿である。しかし彼は闘士ではなかった。彼は率直な顔と、善良な額、力強い真っ直ぐな鼻を有していた。一 しかし彼は率直ではなく、真っ直ぐではなかった。彼の中で多くの考えが去来した。すべての考えが不快で、痛々しいものであった。すべての考えが彼に何かを要求していた。彼はこのようなことを考えなければならず、立腹した。

他の者達ならもっとまじな考え方をしよう、と彼は考えた。彼らは自分達に合ったことをする、そして更に考えない。私の場合、すべてが厄介だ。今一度熟考してみよう、逃げ道はないのか、一 母かペーターかの他には。

しばらく彼は立ち止まっていて、努力し、今回は責任を回避しないと決めた。しかし次第に逃げ道が見つからず、再三万事が自分に決断を求めていると気付いて、疲れてきた。彼は煙草に火を点けて、更に一口、コーヒーを飲んだ。彼はこっそりと部屋のドアを開けて、住まいの音を窺った。すべては静かで、母はまだ戻っていなかった。

彼はブロンドの縮れた毛髪で、彼の顎は強靱なものではなかった。一 彼は柔らかく緩かった。彼は微笑し、決心を固めた。今一度彼は決心を躊躇った。自分は母親の不在を利用し、相談せずに、絵を持ち去ることになろう。彼は微笑し、突然全く自分と了解し合っ、悩ましい考えは去った。

彼は真っ直ぐに廊下を進んで、父親の部屋に向かった。一刻の猶予もない。雷雨は勃発しそうで、母親は今にも戻って来そうである。

彼は父親の部屋のドアを開けた。すると彼の眼前の大きな背もたれ椅子に、黒く、強張

った、垂直に母親が座っていた。

「今晚は、ヴォルフガング」と彼女は言った、「嬉しいわ」。

36

母との諍い

彼は全く嬉しくなかった。反対であった。現行犯逮捕の盗人のように思われた。

「母さんは外に買い物とっていた」と彼は当惑して言って、彼女に緩く手を差し出した。その手を母は精力的に大事に握った。

彼女は微笑した。「あなたに、また家に戻った実感の時を与えたかったのよ。すぐにあなたの時間を奪いたくなかったの。まあ、ヴォルフガング、お掛けなさい。そんなにうろろしないで、...今何も計画はないのでしょうか。訪問に来たのではなく、家に戻って来て、...」。

おとなしく彼は腰掛け、早速また息子に、母親の命令と後見の許に、戻っていた。「いや、訪問なのだ。ちょっと飛んで来て」と彼は口ごもったが、しかし母はこれを聞き逃した。意図的なのか、実際そうなのか、自分[彼]は後で分かろう。

「コーヒーはまだ冷めていなかった。そう、結構。あなたが来た丁度のときに、熱湯をかけたのよ。バスと着替えはまだなのでしょう。まあ、時間はあるわ。まず家を覗きたかったと分かるわね。あなたの家なんだから、私どもの」と声を落としながら、付け加えた。彼の顔を観察していたからである。

「母さん」と彼は始めた、というのはここで家を強調し、トゥーマン夫人の洞穴はペートルの家だと仮定しているのだから、彼は苛立ったからである。「母さん、とても間違っているよ。...」

しかし母は彼を遮った、「ヴォルフガング」と彼女は別な、遙かに温かい調子で言った、「ヴォルフガング、あなたは何も話さなくていいのよ、全く何も。大方私は分かっている、すべてを知る必要はない。でも最初から何もかも曖昧にしないために、今回釈明しておきましょう。あなたの恋人に対する私の振る舞いも全く非のないものではなかった、とね。私が述べた多くのことを遺憾に思っているし、それ以上に私がなした一つのことを遺憾に思っています。分かるわね。それで満足した、一 ヴォルフガング。こちらに来て、あなたの手を頂戴」。

ヴォルフガングは彼の母の顔を吟味するように見た。彼は最初信じられなかった。しかし疑い得なかった。彼は母のことを知っていたし、母の顔も知っていた。母は率直にそう述べていた。母は遺憾に思い、後悔していた。母は彼とペーターと和平を結んでいた、一 従って和解していた。どうしてそうなったのか分からなかった。ひょっとしたら待っている間に和らいだのかもしれない。

ほとんど信じられないことである。彼は母の手を握って、今やもはや偽装しなくなかった。彼は言った、「母さん、それは素敵なことだ。でもまだきつとご存じないだろうが、我々二人は今日結婚しようと思ったのだ。ただ、...」。

またしても母は彼を遮った、一 何という用意、何という迎合、とても御しやすい。「結構なこと、ヴォルフガング。今やすべて片付いたのね。あなたがまたここに座ってい

て、とても嬉しい、...」。

途方もない安堵の思いに彼は襲われた。たった今まで彼は自分の部屋の窓辺に立っていて、誰を傷付けることになるかの疑念で悩まされていた。母かペートルかと。逃げ道はないように見え、ただこの二つの可能性があるようにのみ見えた。すでに万事変わっていた。母親は自分の過ちに気付いていた。この秩序ある家への道は彼ら兩人に開いている。

彼は立ち上がった。彼は母の白い繊細なこめかみを見下ろした。毛髪はどれも清潔に、明確に並んでいる。突然彼は、感動のようなものを感じた。彼は呑み込んで、何か言おうとしてほとんど叫んだ、「人生がちょっとだけ別な風であれば良かった。いや自分ももっと別な風であれば良かった。もっと別な道を歩んでいただろう」。

老夫人は木彫りのような強張った顔でテーブルの側に座っていた。彼女は息子を見つめず、鋭く、指関節でテーブルを叩いていた。木製の音がした。

「いや、ヴォルフガング」と彼女は言った、「子供のような言い方はやめて。あなたは復活祭のとき、進級できなかつたら、いつも叫んでいた、『一 すれば良かった』と。あなたの機関車が壊れたとき、どんな扱いをしたか後で後悔していた。でもそれは無益なこと、もはや子供ではないのだから。後で後悔しても何の役にも立たない、一 いい、そろそろ悟らなくてはね、人生は進んで行く、これから先ずっと進んで行く。過去は変えられないけど、しかし自らを変えられるのよ 一 未来のためにね」

「そうだね、母さん」と彼は健気に言った、「ただ良かったのと思ったのは、...」。

しかし彼はそれ以上話さなかった。外で鍵が開けられ、急いで閉ざされ、慌ただしかった。素早い足音が廊下を渡って来た。...

「ただミンナよ」と母は彼に釈明して言った。

ドアがロックなしに開けられて、ドアがさっと開き、ドアの中に初老のミンナが立っていた。黄色く、灰色で、干涸らびていた。

「有り難う、ミンナ」とパーゲル夫人は素早く言った。というのはこの時、母はゲオルゲ教会通りからの知らせを望んでいなかったからである。そこで関心のあるものは、すべて、今ここに有していたからである。「有り難う、ミンナ」とそれ故できるだけ厳格に言った、「すぐに夕食を準備して頂戴」。

しかしミンナは今回従順な使い走りではなかった。彼女は邪険な猜疑心の目で、ドアの許に立っていて、その黄灰色の皺の寄った頬には赤い斑点が見られた。彼女は恵み深い夫人を全く見ずに、いつもは可愛がっている若様を邪険に見つめていた。

「何てことでしょう」と息も吐かず彼女は言った、「何てことでしょう、ヴォルフガング、ここに座っているなんて、...」。

「気でも狂ったの、ミンナ」とパーゲル夫人は怒って叫んだ。このようなことは二十年間一緒にいて体験したことがなかった。「邪魔です。さっさと行って、...」。

しかし彼女は聞き入れなかった。ヴォルフガングはすぐに、「向こうで」何かあったと察した。予感に襲われた。彼はペーターを眼前に見、彼女が「頼むわね、ヴォルフ」と彼に言ったときの様子を思い浮かべた。スーツケースを持って叔父さんの許へ行き、その際彼女は接吻までしてくれた。...

彼はミンナの肩を掴んだ。「ミンナ、あそこへ行ったのかい、何かあったのか。すぐ話してくれ、...」。

「言っはなりません、ミンナ」とパーゲル夫人は叫んだ、「さもないと即刻解雇です」。

「解雇する必要はありませんよ、恵み深い奥方様」とミンナは言った、突然表面的に全く冷静になった。「私が出て行きます。母親が息子に劣等なことをそそのかす所に、私が残ると思われますか。それを息子がする所に。まあ、ヴォルフィー、何てことをしたの。あんなひどいことが出来たなんて」。

「ミンナ、何を血迷っているの。何を思い上がって、...」。

「私にまたお女中とか鷺鳥と冷淡に仰有ってください、慣れていますから、恵み深い奥方様。今までは単に冗談で仰有っていると思っていました。でも今は本気で奥方様と私も別人である、私はキッチンの女で、奥方様はお上品なレディーであると思っていられっしゃるのだと承知しています」。

「ミンナ」とヴォルフガングは叫んで、老いた、完全に我を忘れていた小間使いを力強く揺すった、「ミンナ、ペーターに何があったか、話してくれないか。あの娘は、...」。

「そうですか、本当に気になるのですか、ヴォルフィー。あなたがあの娘の許を去ったのは、丁度結婚の日ですよ。あの娘のすべての服を体から奪って、売却し、あの娘は古い草臥れた殿方用上着しか着るものがなくて、一 恵み深い若様のものです、恵み深い奥方様、一 その下には着るものがなく、靴下も、何もないのです。...それで警察が連れて行ったのです。こんなにひどいことは見たことがありませんし、決してあなたを許しませんよ、決してヴォルフィー。完全に飢えていたのです。絶えず吐き気がして、階段をほとんど落ちて行ったのです、...」。

「しかし何故警察なのだ」とヴォルフガングは絶望して叫び、ミンナを思い切り強く揺さぶった、「警察がそれと何の関係があるのだ」。

「私には分かりませんよ」とミンナはそれに対して叫び、若様から身を離そうとした。彼はミンナを思わず知らずますます強く掴んでいた。「あなたがあの娘に仕出かしたことは知りません、ヴォルフィー。ペートルが自分から何か悪いことをするはずはありません。その点は保証できます。それで同じ階に住んでいるはしたない女が余計なことを言ったのです。ペートルがそうなったのはいい気味だ。お上品ぶって、通りを歩いて売春しないからだ。私は一発お見舞いしましたよ」。ミンナは一瞬勝ち誇っていた。しかしまたすぐに、げんなりして言った、「あの娘がそうしなかったのは、幸いです。あなたや男どもは皆あの娘に少しも値しないけど」。

ヴォルフガングは突然ミンナを手放して、彼女はよろけた。そしてすぐに彼女は黙った。

「母さん」と彼は興奮して言った、「母さん、何が起こったのか、さっぱり分からない。思いもよらないことだ。私は昼頃出掛けて、少し金を工面しようとした。私がペートルの服を売却したというのは嘘ではない。女将の許に借金があったのだ。ひょっとしたら最近彼女は本当に何も食べていなかったのかもしれない。正直言って、それに注意していなかった。一 外出が多くて、一 出ていたから。しかしこんなことと警察の関係なんて、...」。

彼は次第に小声で話していた。母よりミンナに対してこうしたことすべてを語る方がはるかに容易であったろう。母は木製のように、厳しく座っていて、ちなみに例の絵の下にいた。一 さてこの絵は済んだ、もはや必要ない。

「それで、警察とどんな経緯があろうとも、私はそのことを早速片付けることにしよう」。

母さん、何か現実の問題があるとは思われない。 — 我々は何も犯していない。何も。私は早速出掛けよう。間違いに違いない。ただ、母さん、...」。薄暗い夫人に話しかけるのはますます面倒なことになった。母は全く動じずに、座っていた。遠くに、余所余所しく、完全に突っばねていた。...「ただ母さん、残念なことに今全く金がないのだ。乗車賃とか必要だし、ひよっとしたら女将の許で借金をすぐに支払わなければならないのかも知れない。保釈金とか、例えば、ペートルのための服、食事、...」。

彼はしつこく母親を見つめていた。彼は急いでいた。あの娘を解放しなければならない、すぐに去らなければならない、 — 何故母はライティング戸棚へ行って、金を取って来ないのか。

「あなたは今、興奮しています、ヴォルフガング」とパーゲル夫人は言った、「それだから無分別に行動してはなりません。すぐにあの娘のために何か講じなければならないとは、私も全くあなたと同じく思っています。しかし、殊に今のあなたの状態では、あなたがそれにふさわしい男だとは思えません。ひよっとしたら警察とのややこしい取引が必要かも知れません。 — あなたは少し自制心がない、ヴォルフガング。すぐに法律顧問官のトーマスに電話しましょう。彼はこのようなことに通じています。あなたよりも彼の方がはるかに速やかに、スムーズに片付けることでしょう」。

ヴォルフガングは彼の母の口を緊張して見ていた、あたかも一言一言聞くばかりでなく、唇の動きで読み取っている按配であった。彼は手で顔を拭いた。彼は肌が実際カサカサ音を立てるかのような乾いた感情を抱いた。しかし手は湿ってきた。

「母さん」と彼は頼んだ、「しかし私はこの件を母さんの法律顧問官の手に委ねて、その間ここに静かに座っていて、バスに入り、夕食を食べるなんてできない。お願いだから、今回だけは、私の好きなようにさせて、私を助けて欲しい。一人でこれは片付け、一人でペーターを助け、一人で連れ出し、自ら彼女と話しをしなければならない、...」。

「それは考えました」とパーゲル夫人は言って、再び強く指関節でテーブルを叩いた。木製の音がした。それからより落ち着いた声で言った。「残念ながら、ヴォルフガング、あなたに銘記させなければならないけど、今回限りは一度自分の思い通りにさせて欲しいと私に百回、あなたの人生で頼んでいるのよ。私がそうするたびに、いつも間違いだった、...」。

「母さん、今回のことはかつての子供っぽい些事とは比較にならないだろう」。

「あなたね、あなたが何か願うとき、いつもその他のことはすべてあなたにとって、些事なのよ。今回は、骨折って交渉しても、あなたをまたあの娘と結び付けることになるから、すでにこの点で絶対譲歩できません。あの娘と別れたことを喜びなさい。何らかの警察の誤認や、何らかの馬鹿な階段でのお喋りのせいで、あの娘とまた関わり合ってはなりません」。鋭い視線がミンナに放たれた、ミンナは黄色く干涸らびていて、ドアの下に、

— いつもの場所に動かず立っていた。「あなたは今日やっとあの娘と縁が切れたのよ。この滑稽な結婚を諦めた。そしてあなたは私の許に戻って来た。私は質問もせず、非難もせず、あなたを受け入れます。私がただ傍観して、またあの娘とあなたが一緒になるのを認めると思いませんか。あり得ない、ヴォルフガング、考えられない」。

彼女は真っ直ぐに、痩せこけて座っていた。燃える目で彼女は彼を見つめていた。彼女の中には疑いの予感はなかった。彼女の決意は固かった。自分がかつて軽快で、うきうき

としていたことがあったろうか。自分がかつて笑ったろうか、かつて一人の夫に愛を感じたことがあったろうか。空しく消えて行った。父親は彼女の助言を軽視した。しかし彼女は迷わず、自分の道を更に進んで行ったのだ。 — 今、息子に従うべきであろうか。自分が正しいと思わないことをすべきだろうか。違う。

ヴォルフガングは彼女を見つめた。彼も今、ちなみに丁度母親と同じように、下顎を少しばかり突き出して、彼の目は微光を発して、全く穏やかに尋ねた。「どういうことですか、母さん。私が今日やっとペーターとの縁を切った、と」。

彼女はっけんどんな仕草をした。「それについては話さないことにしましょう。私は釈明を求めています。あなたはここにいる。それで十分です」。

彼は、ほとんどもっと穏やかに尋ねた、「私がこの滑稽な結婚を諦めた、と」。

今や彼女は更に鋭くなった。彼女は危険を感じた。しかしだからと言って慎重にならず、攻撃的になった。彼女は言った、「若い新郎が戸籍係に現れなかったら、普通そう思うでしょう」。

「母さん」とヴォルフガングは言って、テーブルの別の側に腰掛けて、テーブル越しに離れて背もたれにかかった。「私の進退を立派に吹き込まれているように見えます。それでしたら、花嫁も現れなかったと承知でしょう」。

外は真っ暗になった。最初の突風が樹冠にざわざわと吹き寄せ、二、三枚の黄色の葉が旋回して窓の中に入って来た。ドアの下では痩せこけて、動かずに小間使いのミンナが立っていた。母も息子もミンナのことを忘れていた。今や一気に鈍く黄色に光って、黄昏の中、緊迫して、白く、諸々の顔が浮かび、更に深い黄昏の中へ沈んだ。長いことまだ遠方の雷が余韻を残して轟いた。

四大は吹き荒れそうであった。しかしパーゲル夫人は今一度自制しようとした。「ヴォルフガング」とほとんど懇願して彼女は言った、「どれほどペートルからあなたがすでに縁を切ったか、話し合う必要があるかしら。警察とのこの幕間劇が生じなくても、あなたはこの娘のことはほとんど忘れていたことであろうと、固く私は確信しています。この件は弁護士に任せなさい。お願い、ヴォルフガング。あなたにまだ頼んだことはないけど、今回ばかりは私の思い通りにさせて」。

息子は母親の頼みを聞いていた。丁度数分前自分が母親にした頼みと同じであった。しかし彼はそのことに少しも気付かなかった。彼は深い黄昏の中に暗く、眼前に母の顔を見ていた。頭の背後で天が硫黄色に光って、黒く沈み、また新たに光った。

「母さん」とヴォルフガングは言った。そして彼の意志は母の抵抗でますます強く点火した。「決定的勘違いをしています。私がこちらに来たのは、ペートルと完全に、あるいは部分的に別れたからではありません。私がこちらに来たのは、この滑稽な結婚のために資金を調達しようと思ったからで、...」。

母は一瞬、動かず座っていて、返事をしなかった。しかしどれほどひどい打撃を受けようとも、彼女はそれを察知させなかった。彼女は邪険に辛辣に言った、「ではね、こう言うだけです。あなたの方策は無駄です、と。そのためには、一文も出しません」。

彼女の声はとても小声であった。しかし少しも揺るぎがなかった。ほとんどもっと小声で、一滴の温かさも見せずに、彼は答えた。「母さんのことは承知しているから、別の返事は期待していなかった。母さんは、母さんの流儀で幸せになろうとするような人々を愛

するだけだ。でも元来こう言わざるを得ない、母さん自身この人生で、とても幸せな思いをしたことがない、と」。

「ひどい、...」と夫人は深く呻いた。自分の全生涯、全結婚生活、母親のすべてが、自身の息子によって死の宣告を受けていた。

しかし痛みのこの一言は息子をただ焚きつけるのみであった。外では早朝以来、靄、蒸し暑さ、臭気で発酵してきて、今や勃発間近であった、一 そのように、彼自身の生涯で、母親の地位と出納管理人による、後見や、人心操作、知ったかぶり、強引な利用によって発酵してきていた。そして彼の怒りを最も危険なものにしていたのは、まだこの点ですらなく、ペートルアに対する母親の軽視でもなかった。(ペートルアはこのような軽視がなくても、さほど彼にとって重大ではなかった)。そうではなく、自身の弱さから、彼自身の臆病さから、最も強烈な怒りの炎がくすぶってきた。自分が母親に百度も譲歩してきたこと、そのことの復讐を自分にはしなければならない。自分がこの議論を恐れていたこと、このことが彼をすさまじいものにした。自分がこの絵を「こっそりと」持ち去ろうと欲したこと、このことが彼の怒りを破廉恥なものとした。

「ひどい、...」と母親は呻いた。しかし彼の中でただ深い喜びが解放された。飢餓の時代で、狼の時代であった。息子どもは自身の両親に刃向かった。飢えた狼の群れが互いに歯をむき出した。一 強い者が生きよ、しかし弱い者は、死ね。その者は私がかみ殺す。

「ひどい、...」。

「更に言っておかねばなりません、母さん。私がこっそりこの部屋に来たとき、実際母さんはいないと考えていたのです。つまりこっそりこの絵を持ち出そうとしたのです。この絵です。ご存じのように、母さんが私に贈ってくれた絵です、...」。

とても素早く、しかし明らかに声を震わせて、彼女は言った、「あなたに絵を贈ったことはありません」。

ヴォルフガングは多分これを耳にした。しかし彼は更に語った。彼は復讐心に酔っていた。もはや恥を知らなかった。

「私はこっそりそれを売ろうと思ったのだ。それで沢山の金を、素敵な金を、仰山の金を、外貨を、ドルを、ポンドを、デンマーク・クローネを得るのだ。一 そしてすべての金を私の愛しい、立派なペートルアに持って行きたい、...」。

彼は母を嘲笑した、しかし自分をも嘲笑した。彼は阿呆であった。いや、一 これは実際まだ賭けよりはいい。彼は興奮し、野蛮になった。暗闇の中に向かって話し、稲光がし、今やほとんど休みなく遠方で脅威の雷鳴がしていた。すべての人間的存在の根底から、劣等な時代故解放された、両親に対する子供の根源の憎悪が、老齢に対する青春の憎悪、ゆっくりした思慮に対する激情の憎悪が、枯れた肉に対する花と咲く肉の憎悪が高く上昇してきた。...

「こっそりと持ち去ろうと思ったのだ。勿論たわけたことだ。ようやく一度一切を、洗いざらい一切を母さんに言うことができ、とても結構。...言い終わったらこの絵を持って行きます、...」。

「渡しません」と彼女は叫んだ、「駄目です」。彼女は飛び上がって、絵の前に立った。

「持って行くよ」と彼は迷わず言って、座り続けた、「母さんの目の前で持って行き、売却します。すべての金をペートルアが貰う、すべての金を、...」。

「強引に持って行ってはなりません、…」と彼女は素早く言った。しかし彼女の声には不安が混じっていた。

「強引に持って行くことになるう」と彼は叫んだ、「所有したいのだから。母さんは分別を持ちなさい。私が所有したいとなったら、実際手に入れることになるし、…」。

「警察を呼びます」と威嚇して言い、電話機と絵との間で迷った。

「警察は呼べないよ」と彼は笑った、「ご承知のように、私はこの絵を貰い受けたのだから」。

「ミンナ、彼を見ていなさい」とパーゲル夫人は叫んで、今や彼女もそこに立っているのは息子であることを忘れていた。そうではなくて、それは夫[男]であった、いつも抵抗して振る舞う夫[男]、妻[女]の反対物、原初からの敵であった。

「彼を見ていなさい、自分の愛しい娘の許に行きたくて、待ちきれないでいるのよ。警察から娘を請け出したくて。すべては嘘で芝居。娘のことは彼にとってこの世のことすべてと同様どうでもいいの、 — ただ金だけが問題なんだから」。

彼女は彼の真似をした、「素敵な金、沢山の金、ドルにポンド、 — でもブタ箱の愛しい素敵な立派なペートラ、レーディヒ嬢のためではない。違います、賭博台のためよ、…」。

彼女は二歩進んで、絵から離れ、テーブルの側に立って、指関節でコツコツ木製の音を響かせた。「絵を持って行きなさい。私はあなたに対してできる最悪のことをしましょう。絵を任せます。売却して、金を得なさい。沢山の金を。でもこの愚かな、頑迷な、独善的母亲でもいつかまた自分の言う通りだと気付くでしょう。 — 娘をあなたはこれで幸せにするつもりではない。あなたはその金を賭けで失うのよ、すべてを今まで失ったようにね、愛も、礼節も、情熱も、名誉心も、労働意欲も」。

彼女は息も吐かず、そこに立っていた。目は燃えていた。

「いずれにせよ感謝するよ、母さん」とヴォルフガングは言った。突然疲れて、すべての諍いに、すべての語りにうんざりしていた。「それで片付いたな。その他のすべてのことも。私の品は今晚取りに寄越そう、こんなものでこれ以上迷惑かけたくない。しかし母さんの予言に関しては、…」。

「全部持って行きなさい」とより甲高く彼女は叫んだ。そして全身を震わせながら、彼がその絵を壁から外すのを見ていた。「銀製のものも若い嫁の身支度に欲しいなら、持って行きなさい。あなたらパーゲル達のことにはよく分かっているのだから」と彼女は叫んで、突然また若い娘となった。花嫁や結婚生活以前のはるか前の娘となった。 — 外見は好意的に穏やかになって、内心では貪欲に乾いていた。「さっさと行きなさい。二度と会いたくありません。あんたらに生涯を捧げて来て、挙げ句、私は泥を投げつけられる。父親も息子も、変わりがない、…さあ、行きなさい、一言も言わず、一瞥もせず、行きなさい。あなたのお父さんもそうでした。余りにお高くて議論しなかった。でも夜良心が咎めるときには、靴下だけで部屋から忍び出た」。

ヴォルフガングはすでに、腋に絵を持って進んでいた。彼は見回して、ミンナに包装紙や紐を頼もうと思った。しかし彼女は凝然としてドアの下に立っていた。そして相変わらず、この声が、鋭い、容赦ない声が、鉄製の醜く響く鐘のように、金属的に、しかし倦むことなく、彼の子供の日々以来倦むことなく聞こえてきた。

彼はその絵をそのまま腋に抱えた。さて、急いで去るしかない、 — まだ雨は降っていない。

しかし彼が部屋の敷居を越え、相変わらずこの野蛮な荒れ狂う声を背後にしたとき、老小間使い、勿論納得して貰うことは難しいこの阿呆な鷺鳥が言った、「何てことでしょう」と彼に向かって言った。ほとんど彼の顔めがけて、厳しく邪険に言った、「何てことでしょう」。

彼は単に両肩をすくめた。自分はペートルのためにしたのだ。ミンナの見解に従っても、自分はペートルのために何かなすべきであろう。しかし構わない、二人は好きなように話すがいい。

さて彼は住まいから出て、ドアを閉めた。かつて陶器の表札の角を彼は傷付けたのであった。今や彼は階段を下りて行った。

この絵で幾らの金を得るだろうか。

37

侍女ゾフィーの解雇

一九二三年七月二十六日のこの日、離婚したムッツバウアー伯爵夫人、旧姓フィッシュマン嬢は、当時の恋人、ベルリンの家畜商、クヴァルクス氏と地方を越えて、農園中庭の視察に出掛けようと思っていた。

この家畜商は、四十代末の男で、ずんぐりして、縮れ毛の、ブルネットの、すでに若干薄くなった毛髪、皺の寄った額、同様に皺の寄った脂肪のうなじを有し、長年の、ほとんど銀婚式の結婚生活を経た夫で、五人の子供達の父親であったが、この家畜商はまずはこのインフレのお蔭でますます豊かになることを喜んでいた。数ヵ月すると彼は週の売り上げが一車両の豚と二ダースの牛にすぎない男から、部下の仕入れ人が南ドイツまで、いやそれどころかオランダにまで旅する卸商人になっていた。つまり購入され、支払い済みの家畜が、ベルリンに運ばれるまでに、いや、単に積み込まれる間に、二倍、いや三倍、五倍に値が上がったのである。自分の仕入れ衆にこう告げていたのは、いつでも間違いのないことであった。「欲しがるだけ、金を払うことだ、 — それでも安すぎるぞ」。

そんなわけで、最初クヴァルクス氏にとって、この金儲けは純然たる楽しみであった。二ヵ月経つと、村長居酒屋やベッター飲み屋、アシンガー酒場で飲むことは嫌気が差した。彼は古いフリードリヒシュタットや新西区のすべてのバーの大盤振る舞いの、それどころか好評判の客人となって、本当に上品に食べられる所はベルリンではただ三軒のレストランにすぎないと確信を持って主張するようになっていた。そして本物の伯爵夫人が彼を両腕に抱き締める事態に至って、彼はこう言った。現世の望みで叶えられていないものはもうない、と。

しかし次第に彼が金持ちになって、次第に金が余り大事でなくなると、家畜商クヴァルクスは一層慎重になった。未来を一切顧慮せずに、マルクの零落と共にますます確かなものと見える彼の能天気な楽観主義は、マルクが現実ドルに対して見せる跳躍によって、陰鬱な翳りを帯びた。一匹の蚤がウルムの大聖堂を越えるような跳躍であった。

「あんまりではないか」と彼の豚が購入価格の二十倍の収入となると知ってつぶやいた。

数十万人が、一個のパンのための金をどうして手に入れたらいいか分からない時代に、彼は一体自分の金をどう使えばいいか考えて眠られなかった。

「実質価格」という言葉が多方面で囁かれて、クヴァルクスの耳にも達した。誰も自分の青春の出自を消せない。若者エーミールは（クヴァルクスという姓は、彼の周囲にとって二十五歳以降によく意味を持つようになったのである）、若者エーミールは多くのドイツの国道に沿って、一頭の雌牛を追い、三頭の豚の番をしなければならなかった。家畜商になる前は、家畜番であった。いつも空腹でへばっていた腕白は、憧れの目で国道沿いの百姓屋敷の方を眺めていた。それらの戸口からはベーコン付きの焼きジャガイモの匂いがして美味しそうであった。風が吹き、雨や雪が降り、凍てつく寒さとなっても、いつも農園中庭は快適に道脇に身を潜めていて、その幅広の麦わら屋根や煉瓦屋根は、庇護、暖房、快適さを約束していた。エーミール・クヴァルクスが追う雄牛でさえ、これに気付いていた。雄牛は雨の中、尻尾を自ら固く伸ばしながら、口を上げ、農園中庭の方に羨望の様子でほえかかった。

少年エーミールにとって、すべての庇護と快適さの権化であったものが、大人のクヴァルクスにとって、確固とした要塞として残った。跳躍し、飛躍し、落下するマルクの時代に、百姓農園ほどに、一せいぜい五つから十の百姓農園であるが、より安定したものはなかった。クヴァルクスはそれらを購入する決心をした。

ムッツバウアー伯爵夫人は、旧姓フィッシュマン嬢であるが、（勿論彼女の恋人のクヴァルクスには語っていないことで）、無論むしろ宮殿や、屋外階段、競走馬厩舎付きの騎士領が好みであった。しかし今回クヴァルクスは頑固であった。「十分に騎士領から家畜を買った」と彼は語った、「しかし面倒なものを買う気はない」。

彼は確信していた。財布を一つ持って、いやもっと正確には、金の詰まったトランクを持って、農園に行き、一頭の雌牛を買うといい、十頭買い、金を投げ与え、金を自慢し、金で誘うのだ、一所有者は誰も抵抗できないことだろう。十頭の雌牛に加えて、牛小屋に、麦わら、麦わらの育つ土地を、結局、農園全体を購入する。そして自分が所有者に、所有者は住み続けていいし、更に農園経営を続け、収穫物は自分の好きなようにするがいいと告げると、所有者は頭がおかしいのではと言い、自分を別な、一望外の数の、売却者の許に案内することだろう。勿論ある日、マルクが、実際に同じ日にそのマルクが変わらない日がやって来ることであろう。しかしこれは想像すらできないことだ。しかしいづれにせよ、そのときでも農園は残るであろう、いや、諸農園だ。

これがクヴァルクスの思慮といったものであった。これを彼は何度も伯爵夫人ムッツバウアーに述べた。騎士領が断られたので、この話しは夫人にとって本来余り面白いものではなかった。しかしムッツバウアー伯爵夫人は、関心がないからといって、夫人の恋人を一人で遠出させるほど、うかつではなかった。いつでも近くに寄り添っている方がましであろう。いつでも卑俗な女達があつたむろして、この女達は、食糞コガネムシが糞を好むように、金を好むのだ。そして最後にこう思った。彼が十の農園中庭を買うなら、ひょっとしたら十一番目のものが自分のになるかもしれない。一つの百姓農園を所有するという考えは、一台の機関車を所有するようなものであろうとも、いづれにせよまたそれは売却できる。何であれ売却できる。（ムッツバウアー伯爵夫人はすでに三台の車を、恋人から貰っていたが、次々にこれを売却して、クヴァルクスには次のような途方もない説

明を行っていた。「あなたは、クヴァルクス、名誉ある騎士だから、このような古い、モダンでない車を私に押し付けないわよね」。彼は実際、はなはだ名誉ある騎士で、その上そのようなことには関心がなかった)。

十一番目の百姓農園を考えて、伯爵夫人は侍女のゾフィーが田舎の出であることを思い出した。それで昼頃に十分寝て、目覚めると、彼女は侍女を呼び鈴で呼び出し、次のような会話をを行った。

「ゾフィー、あなたは田舎の出でしょう」。

「はい、伯爵夫人、でも私は、田舎は好きではありません」。

「百姓農園の出ですか」。

「いいえ、伯爵夫人、私は騎士領の出です」。

「ねえ、ゾフィー。私はクヴァルクスにこう言ったのよ。騎士領を購入したら、と。でもただ百姓農園を買うつもりだと言われました」。

「そうですね、伯爵夫人。私のハンスもそうです。彼はハーベル亭と山鶉の金を持っていても、アシンガー酒場でのベーコン付きの豆スープを好むものです。男達はそんなものです」。

「でも、ゾフィー、あなたは騎士領の方がずっと良いとお思いなの」。

「勿論です、伯爵夫人。騎士領の方がはるかに大きいし、それを所有していたら、働く必要はなく、働くのは郎党ですよ」。

「それでは百姓農園では働かなければならないの」。

「恐ろしいほどです、伯爵夫人、仕事ばかりで、肌が荒れます」。

十一番目の百姓農園を諦めて、その代わりにダイヤモンドの指輪をプレゼントに貰おうと伯爵夫人はすぐに決めた。同時に遠出に関するすべての個人的興味も、立派な購入すべてに関する興味、従って、ゾフィーを助言者として遠出に連れて行こうとする興味も消えた。

「いい、ゾフィー、クヴァルクスさんがお尋ねになっても、そのことを言っちゃいけませんよ。あの人を諫めても何にもならない。気分を害するだけだから。それでも購入するのよ」。

「全く私のハンスと同じですね」とゾフィーは溜め息を吐いて言った。彼女はハンスが彼女の助言に従っていれば、ハンス・リープシュナーは警察に逮捕されなかっただろうにと悲しく思いだしていた。

「有り難う、ゾフィー。万事異常なし。あなたが田舎に詳しいと知っていたのよ。クヴァルクスさんは私と一緒に百姓農園を買いに出かけるの。元来私も一つ欲しかったのよ。それであなたを助言者として同乗させようと思っていたの。農園中庭は不都合となると、...」。

ゾフィーは自分が早まって話したと気付いたが、手遅れであった。金持ちのクヴァルクスと地方をドライブするのは悪いことではなかったろう。彼女は今更試みた、「でも、伯爵夫人、勿論百姓農園といっても色々な種類がありますから、...」。

「駄目、駄目」と旧姓フィッシュマン嬢は言った、「すべてをととても素晴らしく説明して頂いた。私は買いません」。

もはやどうしよもなく、ゾフィーは別な面での利点を求めた。「それでは、伯爵夫人

は、かなり長くご不在ですか」。

その通り、ムッツバウアー伯爵夫人としては明日の夕方以前には戻れないでしょう。

「伯爵夫人のお許しが頂けるのであれば、...ノイケルンの私の叔母が重い病気で、もう何日も前にお見舞いに伺うべきであったのですが、...今日の午後、お休みを頂けないでしょうか。ひよっとしたら明日の昼まで」。

「そうね、ゾフィー」と伯爵夫人は恵み深く言った。もっともノイケルンの叔母に対する夫人の真剣さは、ゾフィーの農園中庭に関する夫人言及の「取得」に対する真剣さと変わりがなかった。「本来ならマティルデが外出の順番だけど。でもあなたが先ほど立派に助言してくれたから、...でもマティルデが私に対して文句がなければの話ですわね」。

「いえ、伯爵夫人、マティルデには映画券をプレゼントしますから、きっと喜ぶます。とても締め屋ですから。最近靴屋がマティルデに言っていました。『お女中、外出されないのでしょうか。その靴底はもう二年間保っている』と。本当にそんな具合、...」。

ひよっとしたら、料理女マティルデは、吝嗇、外出、映画に関しては、本当にその通りだったかもしれない。ひよっとしたらゾフィー・コヴァレフスキーは有り体に報告していたのかもしれない。しかしゾフィーはいずれにせよ、この午後、非番の順番から外れることに関してのマティルデの反応の計算を誤っていた。ゾフィーはまことに軽蔑して安い映画券について語っていて、それでマティルデはすぐに納得するであろうと言っていた。しかしそうはならなかった。全くそうはならなかった。料理女マティルデは荒れ狂った。そんなの我慢ならない。マティルデ、儉約家、堅い女が、非番の日に関して、このような売女に遅れを取るなんて。三杯のシュナップスのためならどんなタンゴの若衆とも出掛ける売女に。即刻ゾフィーはこのせしめた外出を諦めた。さもないとマティルデは早速伯爵夫人の許に行こう。伯爵夫人に何と告げ口されることか。ゾフィーはたまったものではない。やむを得ない時以外二度とこのような雑言を吐くものではない。

その後マティルデはすぐ彼女の前で雑言を吐いた。

いや、この太った、丸まった、快適なマティルデが、 — ゾフィーは何故マティルデがかくも荒れるのか、さっぱり分からなかった。自分はすでに十回非番の日を譲っているのであり、自発的に、あるいは不承不承、諦めてきた。マティルデが本当に口をとがらすたびに、一箱のチョコレート菓子や映画券を贈ると、いつもおとなしくなった。この蒸し暑さのせいで、老嬢は全く狂ったのだろうか。

一瞬、自分はやはり譲歩してみるか、ゾフィーは考えてみた。マティルデがあらゆる戯言を伯爵夫人にぶちまけたら、かなり悪臭を発することだろう。ゾフィーはもっともこれには恐怖を感じなかった。自分はもっと面倒な酩酊者どもを片付けてきた。この連中は雑言の女性に負けず劣らず劣等な奴等である。

それでゾフィーは一瞬考えた、...それからまことに冷静に意地悪く言った、「何を考えているのか、マティルデ、私には分からない。何故外出したいの。着る物も何もないじゃない」。

この穏やかな油が注がれると、炎が上がること、上がること。「勿論、着る物は何もないわ。あなたのように恵み深い奥方様の衣装タンスを利用する人はね、...」。

「マティルデ、あなたもそうしたら。でもあなたには何も合わない。あなたは脂肪太りだし」。

すでに一九二三年に、女性にとって、太っていると呼ばれることは、はなはだ侮辱であった。― それも脂肪太りである。即刻マティルデは涙を放出して、憤然と喚いた。「売女、淫売、雌豚」。そして恵み深い奥方の許に駆け込んだ。夫人の許には丁度クヴァルクスが到着したところであった。田舎に出発する予定だったのである。

ゾフィーは肩をすくめて留まっていた。何が起ころうと平気であった。元来ここでの生活はまことに飽きた。全く突然に飽きた。数分前まではまだ何も自覚がなかった。出て行く気はなかったであろう。しかし今ではよくこういう事が生ずる。何も永続性がない。まだ有効であったものが、すでにまた無効となる。この時代ほどにしばしば、突然にガスコックが開かれたことはかってない。

突然ゾフィーは自分が疲れ果て、草臥れているのを感じた。ノイローエの両親の許で二、三週休暇を取るという考えが彼女の中で生じた。これは実際素敵だろう。― 眠り尽くし、何もせず、何も飲まない、― とりわけ紳士探しをしない。その上以前の嫉妬深い女子同級生達の前に町からの完成されたレディーとして登場すること、丁度この人らが収穫のために死ぬ思いで働かなければならないときに。それに結局、とどのつまり、最も大事なことは、ノイローエの間近に、小都市マイエンブルクがあるということだ。そこには堅牢な建物があって、小さなゾフィーは稀にこの町に出掛けたとき、その建物を見て戦慄を覚えたものだった。しかし今そこにハンスが住んでいる。突然彼女はこの友への、血迷った、全く肉体的な憧憬を感じた。― 彼女の体全体が彼を求めて震え、彼女は暑く、冷たくなった。自分は彼の許に行かなければならない、彼の近くで暮らさなければならぬ、自分はまた一度彼を感じなければならぬ。― 少なくとも彼に会わなければならぬ。きっと彼と連絡を取ることはできるだろう。― 牢屋番は単に男どもにすぎないし、...

とうにゾフィーは銀器を磨くのを止めていた、― 何でまだこんなことをする必要があろう。自分は今日、こんないかがわしい酒場とはおさらばするのだ。満足の微笑を浮かべて彼女はあらためて、マティルデの吠える、しわがれ声と、その間の伯爵夫人の少しばかり鋭く、絶えず苛立ちがちな声と、クヴァルクス氏の稀に発するかすれた酒焼けの声を聞いていた。あの人らはこちらに来て、自分を非難すればいい。― 自分はぶちまけてやろう、そうぶちまけてやろう。あの人らは、自分を路上に放り出すしか残る手はない。

― でも月末までの給料は払って貰おう。あの愚図なマティルデは、休暇が貰えるか見ものだ。― 自分一人でこれからはやって行かなければならないのだから、あの愚図。

しぶしぶ伯爵夫人ムッツバウアーは、恋人クヴァルクスをキッチンに送って、ゾフィーを呼び寄せた。夫人は少しも自分の侍女との諍いを望んでいなかった。恋人の耳に入れたくはない。数日前に住まいで何か奇妙な泥棒の家宅侵入があったばかりである。クヴァルクス氏は気前よく消えてしまった装身具の補填をしてくれた。しかし彼はそのとき、警察に連絡する気であった。ゾフィーにこの窃盗の一部始終を話されたら、面白くないことになるわ。勿論、寝室に出入りする何人かの男達について話されたら、もっとやばい。

ムッツバウアー伯爵夫人は、名誉の騎士クヴァルクスはこの点になると、冗談を解さないと確信していた。別れた恋人を追う必要はないと分かっていたけれども、というのはブレイム・父[動物学者(1787-1864)]の想定以上に乳を出す雄牛[パトロン]は至る所に見つかるであろうからであるが、― 散々殴られる事態に対して、夫人は明白に臆して

いたのである。

しかしどうということになるか。マティルデはクヴァルクス氏の両耳の前で、詳細に、夫人と侍女による衣装棚ばかりでなく、下着棚の利用について報告していた（これは伯爵夫人もとうに気付いていた）、更にある「乱痴気騒ぎ」についても報告していた。これは夫人の二日間の不在の折、ムッツバウアー伯爵夫人の部屋で騒がれたものであった。その際、余所の「ガキ大将やあばずれ」ばかりでなく、またムッツバウアー伯爵夫人の煙草や、リキュール、シャンパンも — これを聞いて、クヴァルクス氏は飛び上がり、かすれ声で叫んだ、「畜生、くそつたれ」 — それに残念ながらムッツバウアー伯爵夫人のベッドも一役果たしたのだ、と...

伯爵夫人は極めて無分別にも、ゾフィーなら分別正しく振る舞ってくれるであろうと期待した。いずれにせよ、ゾフィーの側から、物事を極端なものにすることはあるまい。

その後、上述の事柄が、最初の三分間で極端なものにされ、そこからめまいのする深淵へと落下して、そこで強烈な悪臭を放った。家畜商のクヴァルクスは確かに甘やかされたボンボンではなくて、自分の生涯で幾つかの糞まみれのものを消化しなければならなかったのであるが、それに時代が、繊細さを培うものではなかったのであるが、...しかしこれらの三人の女が互いの頭に数分間投げ付け合ったものは、耐え難い悪臭を発して、すべての彼の将来の百姓農園の堆肥の山よりも悪臭を放った。

クヴァルクスも叫んで、荒れ狂った。彼は三人の女を一人ずつ自らの手で外に掃き出して、それからまた憤激で吠えながら、また連れて来て、聴取し、弁明させた。彼は三人の頭をぶつけさせて、再び鉤爪でにらみ合っている女達を離した。彼は警察に電話しようとし、また電話を元に戻した。彼はゾフィーのトランクを点検して、すぐにまた伯爵夫人の寝室に突進し、殺害は必定と見られた。彼は帽子を取って、軽蔑の叫び声を発して、「糞忌々しい女ども。皆、俺の尻を舐めやがれ」、そして家から出て、階段を下り、車に乗って、早速またその車を停止させた。こう思い付いたのである。この卑俗な女中[伯爵夫人]に「自分の装身具」を残すものか、と...

最後に彼は完全に草臥れ、疲れ果て、何もできなくなり、長椅子に寝た。まだ頬を赤らめて、目をきらきらさせながら、ムッツバウアー伯爵夫人はあちこち歩き回り、彼女のエーミールに気付けた酒を調合した。

「こんな卑俗な女中達の言うことは、 — 皆、勿論でたらめよ。あなたが二人をすぐに解雇なさったのは、正しいことです、クヴァルクス」(彼はそのようなことは何もしていなかった)、「警察に電話しなかったのも、正解」(彼はそうしたかったことであろう)「あなたの奥さんの耳にまで入ったら、どうなったことか。先は読めるでしょう、...」。

マティルデはまずキッチンで自分の手提げバスケットに座っていた。そっと鼻で嗅ぎながら、彼女はこのバスケットを取りに来る予定の、電話済みの小荷物発送を待っていた。それから彼女はワルシャワ橋の側に住んでいる義兄の家へ地下鉄で行くつもりであった。姉はこの不意の訪問をさほど喜ばないであろう。市電の車掌の給料はさほど十分なものではない。しかし彼女は、自分の料理で丸め込まれたクヴァルクス氏から段々とせしめたかなりの外貨の小山を有していたので、どんなに姉が不機嫌な様子を見せても、自信があった。根本的にマティルデにとっても解雇はまさに都合が良かった。今や、自分の私生児、十五歳になるハンス・ギュンターの世話を若干する時間が現に得られたからである。この

息子に関して、今朝の新聞で、彼がベルリン市の養育施設での暴動の扇動者として逮捕されたと読んだのであった。いや、ただそのせいで、ゾフィーが自分の休日を奪ったと荒れ狂ったのであった。今や彼女は休暇を得ていた。彼女は満足していた。

しかし最も満足していたのは、ゾフィー・コヴァレフスキーであった。タクシーは彼女を乗せて、ますます強気に勃発しそうな雷雨の中、クラウゼン通りのキリスト教徒宿坊に向かっていた。(ゾフィーは殿方と一緒にいるときは、どんなに汚らしい連れ込み宿でも構わなかった。しかし一人で旅する若いレディーとしては、単にキリスト教徒宿坊を利用した)。彼女は夏期休暇の旅であった。彼女のトランクは伯爵夫人の所有物の極上の品で一杯であった。彼女は月額の給料を得て、その上更に十分な金を持っていた。彼女はハンスと連絡を取り、ひょっとしたら会えるかもしれないと思っていた。ゾフィーはとても満足していた。

ただクヴァルクス氏だけは三人の女性達ほど完全に満足しているとは言えなかった。しかしそのことはそれほど彼の意識に上がらなかった。今や急いで百姓農園を購入しなければならぬ。彼は、女性達よりも強く、マルクに追われていた。

38

森林官クニーブッシュはニュースを知る

森林官クニーブッシュはゆっくりとノイローエの村を通って行った。綱でポインター[探知犬]を引いていた。何が起きるか分からない。いずれにせよ、大抵の人は、どういうわけか人間よりもむしろ犬を恐れるものである。

老クニーブッシュは以前から村へ行くのが好きでなかった。一 森林官地は少し脇にあって、森の境界にあった。一 今日彼は殊にうんざりしていた。彼は、村長宅に十時に人々を集合させるようにとのお触れをできるだけ引き延ばしていた。しかし今、雷雨がすでに黒々と西の空全体を覆っていて、一 ベルリン一帯からの雷雨で、勿論ベルリンから来るものは緑でもないものばかりで、一 もう出発するしかなかった。どうしようもない。自分は誰をも傷付けてはならない。

クニーブッシュはアルトローエを有り難いことに放置[左側]して良かった。(比喩的に言ったもので、その村は彼の道の右側にあった)、アルトローエにはこのような秘密の軍事的案件を大事と思う人間は住んでいなかった。アルトローエにはただ炭鉱員、産業労働者が、つまりスパルタクス団や共産党員が、要するに畑泥棒、薪泥棒、密猟者が住んでいるだけだ、とクニーブッシュは思っていた。

クニーブッシュ氏は、何故自分が今朝薪泥棒と出会っても無視したのか、全く良く分かっていた、一 まさにアルトローエ人だったからである。彼らは容易に憤激する。彼らは全く公然と窃盗の権利といったものを主張する。森林官のクニーブッシュは何故自分が散弾銃を家に置いて、代わりに犬を連れて来たのか、それも全く良く分かっていた。武器はただ人々を苛立たせるだけで、人々は一層邪険になるのである。しかし犬はズボンを引きちぎるだけであって、ズボンは高い品なのだ。

鬱々とゆっくりと森林官はますます迫って来る雷雨の中、村を忍んで行った。「穏やかにベッドの中で死にたいものだ」と彼はまさにまたリューマチでほとんど萎えた妻に言っ

たばかりである。彼女は頷いて、こう言った。「私どもは皆、神様の手にお任せしましょう」。

「そうだね、おまえ」と彼は心底答えたかったことであろう。というのは神様がこうした厭わしいごたごた全体とは何の関わりもないことを、彼は長いこと以前から確信していたからである。壁の多彩な主の晩餐を見ながら、彼はむしろ黙っていることにした。夙に長いこと自分の妻にさえ、本当に考えていることをもはや話せなくなっていた。

彼、森林官クニーブッシュは自分の晩年を少し違った風に考えていた。戦争がなくて、この十倍も忌々しいインフレがなければ、彼は夙にマイエンブルクで自分の小さな家に住んでいたことであろう。公務や薪泥棒はそのままに放置して、ただ蜜蜂の世話をしておれば良かったであろう。しかしそうしたら、誰でも、この時代、年金だけではどんなに立派に飢えてしまうか、容易に試算できることである。確かに貯金簿は相変わらず、泥棒を恐れて、彼の妻の下着棚の中のシーツの下に隠されている。しかしその合計額、幾らか七千マルク強は、一マルクずつ四十年のご奉公の間に貯えたものだが、確かめたくもない。さもないとすぐに目に涙が浮かぼう。これはマイエンブルクの小さな家になるはずだったのである。人形のように小綺麗な家。そして生活の足しに、抵当権の利子を得ていたことだろう。ここノイローエの村長ハーゼの農園中庭への一級の抵当権、立派な抵当権で、一万マルクの資本に対する四パーセントの、確実な利子だ。わずかばかりの遺産とそれにまたせっせと貯えたものの合計であり、一年に四百マルクの収入となるものだ。これは年金への素敵な補助金となっていたことだろう。

お仕舞い、台無し。何故か、お仕舞い、台無し。疲れて、草臥れた老公は更に歩き、働き、注意し、郎党の襲撃と上司の叱責の間をくぐり抜けなければならない。今や、この休養を必要とする者は、休養を命ぜられることだけを恐れていた。一二人の老夫婦を飢餓から救い出すものがあるだろうか。二人の息子は戦死した。ランツベルク鉄道事務員と結婚した娘自身は、子供達の腹を満たしてやることで精一杯だ。娘が両親に手紙を書くのは、屠殺が近いときで、脂身を送ることを忘れないでの謂である。

かくて彼は更に歩かなければならない。この老公は、愛想良くして、追従を言い、謙らなければならない。一このようにして解雇の危機を未然に防がなければならない。生意気な少尉が合図したら、まさに踵を打ち合わせて、従順に言うのだ、「畏まりました、少尉殿」。上司がこれを望んでいるのかは、分からない。村に行くのは難儀な巡回だ。森林官が伝えなければならない男達は皆、すでに六時に向かっていて、餌やりの時間なのであるが、まだ田畑にいる。あるいは汗かきながら、森林官の側を通り過ぎて行き、ほとんど手で合図することもない。時間がないのだ、雷雨が迫っているから、中に収穫物を急いで取り入れなければならない。

かくて森林官は彼の伝言を妻達に伝えなければならなかった。女達は勿論遠慮なく言う。こんなに超忙しい収穫の時に、夫達を夜の十時に村長宅に呼びつけるのは、頭がおかしいのではないの。勿論、お宅は気楽で、骨が痛むことはなくて、散歩していき、男衆は死ぬほど働いているのに。お宅は朝の六時が起床、夫達は二時半よ。こんな戯言を決めるなんて、いい気な人達だね。もっと阿呆な余所の人に当たりなさいよ。一両手を腰に当てている。ほら見ろ、こんな具合だ。

森林官は説得して、請わなければならない。そしてようやく農園中庭から出て来たとき、

彼女達が伝言を本当に伝えてくれるか確信を持てなかった。

しかし女達の中には口を邪険にきつと結んで、黙って森林官の伝言を聞き、邪悪な、小さくなった目をしているものがいた。彼女らは振り返って、離れて行ったが、なお彼女達をつぶやく声が森林官の耳に入った。このようなことを一緒に画策するなんて、老公は恥ずかしくないのかしら。大戦でもう十分に死人が出ているのに。一人の頑固じじいによる秘密の陰謀だ、むしろ自分の穏やかな死を考えていたらいいのに。

森林官の顔は、更に進むにつれて、ますます憂慮に満ちたものとなって、ほとんど怒りで引きつっていた。彼は激しく自分の灰白色の髭の中で口ごもった。何らかの方法で自分の憤怒を表明せざるを得なかった。彼は独り言を言うのに慣れていた。普段彼は自分の思いの丈をぶちまけられる相手を誰も有していなかった。妻は何を言っても、聖書の語句を口にした。彼が、咀嚼する、ほとんど歯のない顎の間で、切れ切れに発するのは無力な怒りのようなものであった、 — 自分がかくも無力であることが、更にただなお彼を苦しめた。

さて彼は、村長屋敷、小売商、料亭、学校、牧師館のある村の広場にやって来た。本来これらすべてに用はなかった。小売商や居酒屋は、余りに用心深くて、顧客の一人でも傷付くような何らかの催しに参加することはなかった。合唱隊長のフリーデマンは高齢過ぎて、牧師のレーニツヒは、勘定高くせに、いつも、世間慣れしていない風をするのであった。しかし村長ハーゼはきつと情報を得ていよう。さもないと村長宅への集合という指令はあり得ない。

それでも森林官クニブッシュは躊躇いながら、この広場を眺めていて、更に進まず、ただ村長屋敷に目を向けていた。一度村長にしつこく迫って、利子や抵当権についてじっくり話すことは、結構なことであろう。しかし決心にまで至らないうちに、居酒屋の窓の一つが上に開いた。小さな黒人マイヤーの醜い頭が、眼鏡のレンズを煌めかせながら、かなり赤面して出て来た。マイヤーが叫んだ、「クニブッシュ、老いぼれ大鷓よ、こちらに来て、一緒に私の別れ、ノイローエからの別れを祝おう」。

本来、森林官は飲む気分ではなかった。それに酩酊した黒人マイヤーは、老いた雄牛のように邪険であると承知していた。しかしこの呼びかけははなはだニュースの色合いがあって、ニュースを聞くことは森林官にとって嫌ではなかった。万事に対応するためには、万事を承知してはならない。かくて彼は居酒屋に赴いた。犬は極めて犬らしい恭順さで運命に従い、テーブルの下に這って、今や、三十分であれ、四時間であれ、音もなく耐える覚悟を示した。森林官はテーブルをノックして、警告して言った。「しかし金は持ち合わせていない」。

「私もそうだ」とすでにかなり出来上がっていた黒人マイヤーはにやりと笑った、「しかしだから招待したのだ、クニブッシュ。構わないとも。他は皆、田畑に出ている。それで私は一本コニャックをカウンターから取り寄せたのだ。それでビールを注ごう。嫌いでなければ」。

森林官はこの勝手なセルフサービスの結末にぞっとした。当惑して彼は言った、「いや、結構、私はむしろ何も飲まない」。

早速、田畑検査官のマイヤーはもっと赤みを帯びた、「いや、私が盗むと思っているのかい。私が、取って来たものの支払いをしないと思っているのかい。それは許せんぞ、ク

クニブッシュ。いつ私が盗んだか言ってみろ、...いつだ」。

「いつだ」は特定されなかった。というのは森林官がすぐに、万事異常なし、自分は一杯コニャックを飲みたいと請け合ったからである。

「一杯のコニャックなんて大したことない」と小さなマイヤーは叫んで、小さな矛盾ながらも相変わらず器用に一杯のビールを注いで、葉巻の箱を取って来た。彼自身は一箱の煙草を携帯していた。

「乾杯、クニブッシュ。我らの子供が長い首を持ちますように[そして見たい王様を見られますように]」。

森林官はこの乾杯の辞に濃い眉を寄せた。というのは自分の二人の戦死した息子達を思い出さざるを得なかったからである。しかし黒人マイヤーのような人間の許で抗議しても意味がない。それでむしろこう尋ねた、「こんなに突然自分の別れを祝うとは、今日の昼から何があったのだ」。

すぐにマイヤーの顔が曇った、「雷雨が来たのだ」と彼はつぶやいた、「これは忌々しいベルリンの糞雷雨だ。西風のときは、雷雨にはならないはずなのに。しかし今日は来ている」。

「そうだな、十分後には、土砂降りだ」とクニブッシュも言って、暗い窓の方を眺めた、「収穫の乗り入れをさせなかったのか。村中が乗り入れている」。

「私も気付いている、この薄ら馬鹿」とマイヤーは苛立って叫んだ。これに気付かないのは実際難しい。丁度また一台の荷車が疾駆して、ハーゼの村長中庭へ消えた。

「しかしだからといって、おまえを騎兵隊長が放り出すとは限らないだろう」とクニブッシュは慰めた、「勿論私がおまえの立場なら、むしろ乗り入れさせていざらうが」。

「おまえが私の立場なら、抜け目なく、ドジは踏まなかったというのかい」と黒人マイヤーは憤然と叫んだ。彼は急いで飲み、もう一度飲み、それから一層落ち着いて言った、「皆、げすの後知恵だ。何故今日の昼に私に言わなかったのだ。収穫の乗り入れをさせたらどうだ、と。ああ、おい」。彼は勝ち誇って、微笑し、それからあくびして、今一度飲んだ。それから目を細めて、森林官を見て、秘密めかして瞬きしながら、自重して言った、「もっともそのせいだけで騎兵隊長に放り出されるのではないのだ」。

「違うのか」と森林官は言って、尋ねた。「ちなみに、村長が屋敷にいるか、知っているかい」。

「知っているよ」と黒人マイヤーは言った、「先ほど少尉と中に入った」。

これはクニブッシュにとって少しも都合良くなかった。少尉が中にいるのであれば、村長の許に行って、抵当権のことを話しても、仕様がな。しかしいつか必要であろう。五日後にまた半年分の利子が満期になる。二百マルクの[屑]紙幣を受け取ってはならない。

「つんぽか、森林官」とマイヤーは叫んだ、「ヴァイオは何歳かと聞いているのだ」。

「恵み深い御令嬢か。彼女は五月で十五歳だ」。

「オー、嫌[ヴァイ]、オー、嫌[ヴァイ]」とマイヤーは強調した。「それで騎兵隊長はきっと私を放り出すのだ」。

「どうしてまた」とクニブッシュは理解できなかった。しかし告げ口屋とスパイの鋭敏な好奇心にクニブッシュは襲われていた。「どういう意味だい」。

「いや、うるさいな」とマイヤーは大仰な、投げ棄てる仕草をした。「知らぬが仏だ」。

彼は飲んで、森林官をまた臉を細めて、破廉恥に嘲笑しながら見つめた。「しかしあの娘の胸は立派なものだ。保証できるよ、クニーブッシュ、昔の色男」。

「どの娘だい」と森林官はあっけにと取られて、尋ねた。これは信じられない。

「いやさ、小さな女の子、ヴァイオだよ」とぞんざいに黒人マイヤーは言った、「可愛い人形だぜ。先ほどの寝椅子での挨拶はたまらなかった。キッチンの張り出しの上でな。ただ水着だけで。それから肩の紐を緩めて、それから、 — いや、話すことはないな。一応騎士だからな」。

「おまえは法螺を吹いている、マイヤー」と森林官クニーブッシュは怒って言った、「嘘を言っている。酔っ払っているな」。

「勿論、嘘だ」と黒人マイヤーは平静を装って言った、「勿論私は酩酊している。しかしクニーブッシュ、おまえさんは誰かに尋ねられたら、私から聞いたと言ってな、ヴォイオはここに」 — と彼は胸を示した、腋のかなり下の方であった、 — 「小さな褐色の母斑を有する、可愛いキスマークだと言えればいいのだ、クニーブッシュ、内緒だが、...」。

マイヤーは森林官を期待一杯に見つめた。

森林官は声高に思弁した、「マイヤー、おまえが水着姿を見たことは信じよう。キッチンの張り出しですでに何度かあの娘を見たことがある。恵み深い奥方様はとても嫌がっているが。料理女のアルムガルトからそのことは聞いている。しかしそれ以外におまえと、...

いや、マイヤー、そのことは信じられない。森林官クニーブッシュよりももっと阿呆な奴に話すことだな」。

森林官はにやりと笑った。今や彼は勝ち誇っていた。彼は半分空のシュナップスのグラスを押し退けて、立ち上がった。「行こう、ツェーザー[犬の名]」。

「信じられないだと」と黒人マイヤーは叫んで、やはり飛び上がった、「クニーブッシュ、女どもがどんなに私に夢中か、知らんだろう。すべての女を俺は知っているのだ、すべてを。それで小さなヴァイオは、...」。

「いや、いや、マイヤー」とクニーブッシュは言った、軽蔑してにやりと笑って、こう述べて、小さなマイヤーの永遠の不倶戴天の敵となった、「家畜番の女や家禽番の娘はひょっとしたらおまえの手に入るかもしれない。しかし恵み深い御令嬢は、いや、マイヤー、おまえは酔っている、...」。

「証明しようか」とマイヤーは紋切り型で叫んだ、彼はアルコールと憤怒と屈辱で、完全にいかれていた。「文書を見せようか。これを読んでみろ、阿呆な屑。この手紙は私に恵み深い御令嬢が書いたものだ。彼はポケットから手紙を取り出し、開けた。「読めるか、おまえのヴァイオレットだ。『あなたの』と強調してある。これを見ろ、出目金。ほら、読め。『最愛の人、超、愛する人、唯一の方』。 — この感嘆符を見ろよ。 — いや、全部を読む必要はない、 — ここのこれだ、『こんなにとってもあなたが大好きです』」。

— 彼は繰り返した、「大好き、な。これは愛だろう。これを見て何と言うかい」。

彼は勝ち誇って立っていた。彼の厚い唇は震えていた。彼の目は煌めいた。顔は紅潮していた。

しかし彼の言葉の効果は期待していたよりも別であった。森林官クニーブッシュは彼から離れて行った。居酒屋のドアへ向かっていた。 — 「いや、マイヤー」と彼は言った、「そんなことをするべきじゃなかった。私に手紙を見せて、すべてを語るべきじゃなかつ

た。おまえは何という豚だ、マイヤー。いや、それを見たと言うつもりはない。これについては関知しない。私の首があぶない。いや、マイヤー」とクニーブッシュは言って、彼をまじまじと敵対的に、老いた若干色褪せた目で見つめた。「私がおまえなら、即刻、トランクに詰めて、旅立つよ。辞去も告げずに、できるだけ遠くへな。騎兵隊長がこのことを知ったら、...」。

「そんな大げさな、老いた臆病兎よ」とマイヤーはぶつぶつ言った。しかし手紙をまたポケットに入れた。「騎兵隊長が知ることはないだろう。おまえが黙っていてくれたら、...」。

「私の口はかたい」と森林官は言って、今回は本当にその気であった、「出過ぎたことは言わない。しかしおまえが黙っていないと、...いや、マイヤー、とにかく分別を持って去れ。今すぐにだ。 — それで、本当に来そうだ、...」。

両人はもはや外の天候に注意を払っていなかった。天はますます暗くなった。丁度そのとき日中のように客室が照らし出された。それから耳を聳する雷の音がして、それから幾千もの天の泉から、ざわざわ、ばらばらと落ちて来た。

「荒天の中へ出て行く気ではないだろう」とマイヤーは思わず言った。

「いや、行く」と森林官は急いで言った、「急いで向こうの村長宅へ行く。ここにはいたくない、...」。彼はすでに駆けていた。

黒人マイヤーは彼が濃い雨のカーテンの背後に消えるのを見ていた。客室はアルコールや酸っぱいビール、汚物の匂いがした。ゆっくりとマイヤーは窓を一つずつ開けた。彼は両人が座っていたテーブルの許に寄って来た。無意識に彼は瓶に手を伸ばした。

彼が瓶を口に持って来ると、アルコールの匂いで身震いがした。彼は瓶を持って行き、それを村の広場へどくどくと流し空にした。それからテーブルに戻って、一本の煙草に火を点けた。彼はポケットを探って、手紙を取り出した。開封された封筒は遂に駄目になっていた。そして手紙、 — 彼はこれを酩酊者のゆっくりした慎重な動作でテーブルに置いたが、 — これは完全にくしゃくしゃになっていた。彼は皺を手で滑らかにしようとした。その際疲れて、こう考えていた。どうしたものだろう、どうしたものだろう。

彼はそれが次第に滑らかにする手の下で湿ってくるのに気付いた。彼はよく見てみた。彼はその手紙をこぼれたコニャックの上に置いていた。すべてが汚れてしまった。

どうしたものだろう。彼は新たに考えた。

彼はその汚れたものをまたポケットに入れた。それから彼は自分の杖を手にとって、やはり奔流の雨の中へ出た。彼はひとまずベッドに入って、酔い潰れて眠るつもりであった。

39

村長ハーゼ宅にて

老森林官クニーブッシュは、できるだけ早く駆けて、ますます強く落下する雨の中、ハーゼ家の屋敷へ向かった。肌まで濡れることは老公にとってとても不快なことであったが、こやつ、黒人マイヤーの側に座って、彼のおぞましいことを耳にするよりもまだ十倍ましであった。

ハーゼ家の納屋の雨の少ない側に立っていた。今の姿のままでは村長宅に上がれない。

彼は深い息をしながら丁寧に顔を拭いて、濡れた髭の房を整えようとしていた。彼はこうしたことすべてを全く機械的にしながら、絶えずこう考えていた。丁度向こうの居酒屋の黒人マイヤーと同じであった。どうしたものだろう。どうしたものだろう。

再び、自分には思いの丈をぶちまけられる相手が誰もいないと思って暗くなった。ただ一人でもこの面白い話を打ち明けられる相手がいたら、もっととても気楽になったろう。すでに今でもこの耳にしたことの刺激でほとんど心の裡に留めておけないほどであった。指の傷付いた箇所のようなもので、それは絶えずいじられるのである。搔かざるを得ないかゆい湿疹のようであった、 — 血が出ようともし。

森林官のクニブッシュは — 幾多の辛辣な経験から、 — 自分にとってこの絶えず増大して行くお喋り屋、告げ口屋嗜好がいかほど危険なものかよく承知していた。すでにそれは最悪の事態を引き起こして、最も不快な場面を引き出していた。彼はかなり安全に、ハーゼ家の納屋の切妻板に寄りかかって、再三自分の服を拭いて、乾かしながら、自分の年寄りのお喋り癖の起爆薬を撤去すべく、熱心に試みた。絶対話してはならないぞ。一切はこの女には目のない奴、小さなマイヤーの酔っ払った戯言にすぎない。

しかし自分が大いに努めて、全く平静に、身の内に何ら危険な衝迫もなく、村長の部屋へ入って行く覚悟ができたとき、天から稲光がした。居酒屋の客室に検査官マイヤーは立っていて、手紙をポケットから取り出し、それを千切って開け、読んだ、...

森林官クニブッシュは全く甲高く、長く、口笛を吹いた。本当は息が詰まっていたけれども。彼の脚許の、冷たく濡れて震えている犬は縮み上がって、そこに前足を高く上げて立っていた。野獣を嗅ぎつけたかのようなようであった。しかし森林官クニブッシュはすでに犬より先にいた。彼は水溜まりの中の忌々しい黒い猪、剛毛の豚、雄豚を見分けていて、その心臓の箇所の紙に銃を向けていた。黒人マイヤーは嘘を言ったのだ。

それ以外考えられない。森林官クニブッシュはほっとして呻いた。肉厚の唇のこの黒人と我らの恵み深い御令嬢、これはあり得ない。考えるまでもない。こんな阿呆の自慢屋、ペテン師、奴は、私には見抜けないと思っている。私の目の前で手紙を開封しながら、すでにその中身を承知していた。丁度ヴィオレット嬢と一緒に言ったとあって、彼女の手紙をポケットに持っていた。勿論、ただ手紙を渡してくれと彼女は頼んだのだ。それを奴はこっそりと覗きやがった。この件は今日のうちにも全く冷静沈着に考えてみなければならぬ。この件を解明せずにおくものか。マイヤー君、君を縛り首にできなかつたら、特に私の男がすたる。おまえにこれから臆病兎とか出目金と呼ばせないぞ、 — 不安を抱いて目をぎよろつかせているのはどちらの方か、見てやろうじゃないか。

クニブッシュは振り向いて、料亭[居酒屋]の正面を見た。しかし居酒屋はもうまた見えなくなっていた。雨のヴェールが濃すぎた。

その方が良いとクニブッシュは考えた。ただ今は急ぎすぎないことだ。よく考えてみなければならぬ。この件は、恵み深い御令嬢に褒められるよう、事を運ぶべきなのは自明なことだからな。いつかこの件は私にとってとても有益なものとなろう。

かくてクニブッシュは覚悟を決めてこう合図の口笛を吹いた、「攻撃だ、進め、進め」。そして真っ直ぐに村長の部屋へ進んだ。犬ですら彼は普段のように台所の煉瓦床に導かず、濡れた足で汚れた斑点を描きながら、ワックス塗りの床板に踏み込むことを許した。そのように彼は勝利を確信していた。

しかし部屋で動揺することになった。そこには背の高い村長ハーゼが座っているばかりでなく、中央の、へこんだ寝椅子に少尉がしゃがんでいたからである。少尉の古ぼけた略帽が寝椅子の背の鉤針編みのカバーの上に見られた。少尉は無造作に座って、もじゃもじゃ毛で、しかし常に警戒していた。大きなカップのコーヒーと共に、彼はベーコン付きの目玉焼きを食べていた。脂身の中にパンを千切って入れ、完全に田舎風、下品であった。ただ午後の六時という時間だけが、本来目玉焼きには必ずしも適合していなかった。

「命令通りに致しました」と森林官は伝えて、気を付けの姿勢をした。何らかの命令権を有していると思われるすべての人の前で彼がまさに行う振る舞いであった。

「休め」と少尉は命じた。しかし全く好意的で、脂身の付いた卵をフォークの上に乗せていた。「それで森林官クニーブッシュ、その老いた足で、相変わらず元気に触れて回ったのか。皆に伝えたのか、皆、いたのか」。

「仰せの通り」と森林官は言って、突然また自信がなくなり、一先ほど村を触れ回ったとき、体験したことを、つまりピープロー夫人とペープロー夫人が話したことを語った。

「よぼよぼの意気地なしだな」と少尉は言って、落ち着いて更に食べ続けた、「それじゃ、もう一度、奴等が家に帰ったとき、村中を触れ回らなければなるまい。分かったか。女どもにそのようなことを話すとは、一私がいつも言っている通りだ、よぼよぼは、よぼよぼだ」。

そして彼はまた平静に食事にかかった。

森林官は健気に「畏まりました、少尉殿」と言って、自分がいかに憤激しているか、悟られないようにした。いや、彼はこの若造に問いたいところであったろう、何の権利があってここで自分を叱り付けているのか、何故ここで自分に命令を与えているのか、と。一しかし甲斐のないことである。むしろ放置していよう。

その代わりクニーブッシュは村長に向かった。村長は背が高く、皺だらけで、いつものように黙って、ウイングチェアに座って、表情を変えずに、いざこぎに耳を傾けていた。彼はぶっきらぼうに尋ねた、「いや、村長、ここに来たら、尋ねようと思っていたのだ。我らの、あの私の利子はどうなっているのだ。五日したら満期になる。どうする気なのか、知りたいと思ってな」。

「合点が行かないのか」と村長は尋ねて、注意深く少尉の方を見た。しかし少尉は平静に食べ続けていて、目玉焼きと皿の上にかくパン屑の他には気にしていなかった。「すべて抵当権証書に書かれているだろう」。

「でも村長よ」と森林官はほとんど懇願するように言った、「喧嘩する気はないのだ、二人とも年寄りだからな」。

「クニーブッシュ、喧嘩になりようはないだろう」と村長は驚いて尋ねた、「記載されている通りに払っているぞ。ところでおまえさんほど私はまだ老いていない」。

「私の一万マルクはな」と森林官は震える声で言った、「おまえさんの農園中庭のために出したのだが、立派な平和時の金だ。一二十年以上貯蓄して、集めたものだ。先の利子の満期日にはあんなぼろ紙幣を貰った、一まだ引き出しにある。切手一枚、釘一本それでは買えなかったぞ、...」。

クニーブッシュは抑えられなかった、それは今回弱った高齢のせいばかりでなく、正直

な苦悶のせいであって、目に涙がこみ上げて来た。かくて彼は村長ハーゼを見つめた。村長はゆっくりと両手を膝の間に滑らして、まさに答えようとしたとき、ソファから鋭い命令の声がした。

「森林官」。

森林官は突然、自分の苦悶、懇願から引き裂かれ、ぎくりとした。「畏まりました、少尉殿」。

「火を点けてくれ、森林官」。

少尉殿はお食事が終わっていた。彼は皿の最後の脂身の残滓を綺麗にし、コーヒーの残りを飲んで、一今や四肢を伸ばして、汚れた長靴のままハーゼ家の寝椅子に横たわっていて、目を閉じていた。しかし唇の間に一本煙草があって、火を欲していた。

森林官は火を点けた。少尉は最初の煙を吸い込むと、瞼を開け、間近の、森林官の涙目を見つめた。「どうしたのだ」と少尉は言った、「泣いているようだな、クニーブッシュ」。

「ただ煙のせいです、少尉殿」とクニーブッシュは当惑して答えた。

「それなら結構」と少尉は言って、再び両目を閉ざして、横向きになった。

「クニーブッシュ、どうして永遠におまえさんの不平不満を聞いていなければならんのか、さっぱり分からんぞ」と村長は、森林官が再び彼の許に戻って来たとき、言った。「二百マルクをおまえさんには抵当権証書に基づいて渡した。前回は一枚の千マルク紙幣だった。おまえさんがおつりを出せないから、そのままにしておいたが、...」。

「それで釘一本買えなかったのだぞ」と森林官は怒りで引きつって繰り返した。

「今回も誠意を示すつもりだ。おまえさんのために一万マルク用意したのだ。今回も誠意を見せて、おつりを貰うつもりはない。一万マルクと言えば、おまえさんの抵当権の額に当たるのだが、...」。

「いや、村長よ」と森林官は叫んだ、「すべてただの嘲笑、軽蔑に聞こえるぞ。今度の一万マルクは半年前の千マルクにはるかに及ばないと承知していよう。私の立派な金を渡したときには、...」。

苦悶で彼の心はほとんど折れた。

「しかし私にどうしろと言うのだ」と村長ハーゼも今や苛立って叫んだ、「おまえさんの立派な金を私が無駄にしたか。ベルリンの偉いさんに向かって言えばいいのだ。私の責任ではない。記載通りにしているのだ、...」。

「しかし正義に従って貰いたいものだ、村長」と森林官は頼んだ、「代わりに尻拭き紙を貰うのであれば、二十年間の貯蓄がふいになる」。

「そうかい」と村長は毒づいた、「そんなことを言うのかい、クニーブッシュ。昔、凶作のときがあって、私が金に苦労したときはどうだったか、一『記載通りだ』と言ったのは誰だった。太った豚がツェントナー当たり十八マルクのと、『金が高すぎる、少しまけてくれ、クニーブッシュ』と私が言ったら、一誰がこう答えたかね。『金は金だ。払って貰えなかったら、村長、差し押さえさせるぞ』と。一これを言ったのは誰だ。おまえさんだったのだ、クニーブッシュ。それとも他人だったか」。

「しかしそれは少し話しが違う、村長」と森林官はかなり小声で言った、「昔の違いは小さなものだった。今日の違いは、そもそも何も貰わないような違いだ。完全な元値を保

証しろと言うつもりはない、しかし二百マルクの代わりに二十ツェントナーのライ麦を私に与えてくれるなら、...」。

「二十ツェントナーのライ麦だと」とハーゼは高笑いに弾けた、「クニーブッシュよ、気でも狂ったのではないか。二十ツェントナーのライ麦、これは二千万マルク以上になるぞ」。

「それでも義務分としては、まだ大したことない量だ」とクニーブッシュは固執した、「平時では大方三十ツェントナーに相当しよう」。

「そう、平時ではな」と村長は全く激昂して言った。村長は、相手が一向に引っ込めず、本気でぶんどる気であると気付いたからである。「しかし今は平時ではない。インフレーションだ。誰もが必死なのだ。それで私はこう言うつもりだ、クニーブッシュ。私はおまえさんの永遠の不平不満に聞き飽きた、と。村で相変わらず我らのことを喋り散らして、最近パン屋でこう言ったそうじゃないか。何で村長は鷺鳥の焼き肉を食べられるのだ。利子も正直に払っていないぞ。(黙っている、クニーブッシュ、おまえさんはそう言ったのだ、すべて耳にしている)。しかし私は明日マイエンブルクへ自転車で出掛ける。弁護士を通じておまえさんに利子を送ろう。きっかり二百マルクだ。義務通りにな。その上、抵当権の解約をおまえさんに通知しよう。大晦日にはそれでおまえさんに金が支払われる。丁度一万マルクだ。それで何が買えるか、私の知ったことじゃない。いや、そうするよ、クニーブッシュ。おまえさんの永遠の愁嘆と貯蓄の話しにはうんざりだ。そうするとも、実行する、...」。

「それをしてはならん、村長ハーゼ」とソファーから鋭い声がした。「依頼通りにしろ」。

少尉はまた真っ直ぐに座って、完全に目覚めていて、口の隅にまだもうもうたる煙草をくわえていた。

「満期に森林官に二十ツェントナーのライ麦を与えてやれ。今紙切れに書き留めておくことにしよう。これからも、この屑紙幣が流通している間、同じ支払いを義務とするものである、と...」。

「いや、少尉殿、それは書きません」と村長は決然として言った、「貴方といえども、私にそのような司令はできません。それ以外は従います、これはできません。少佐殿に話をつけて、...」。

「...少佐から蹴りを尻に貰い、放り出されることだな、あるいは壁に裏切り者として立たされよう。このどちらも考えられる、村長、いいか、こら」と少尉はより威勢良く叫んで、飛び上がり、村長の許へ行き、村長の上着のボタンを掴んだ。「何のことは承知していよう。古参兵の貴方は、素早くどさくさに紛れて、ベルリンの同志の汚いやり方で一儲けしようとしている。恥を知れ、村長」。

彼は振り向いて、テーブルの許へ行き、新たに煙草を取った。彼は命じた。「火をくれ、森林官」。

クニーブッシュは、何千倍も心が軽くなり、奴隷的に感謝して、駆け寄った。少尉に火を差し出しながら、彼は囁いた、「抵当権は解約通知してはならないと文書にする必要があります。さもないと今、はした金で支払われてしまいます、私の全貯蓄なのです」。

自分自身に対する同情に襲われ、思いがけない救助者の出現に喜び、彼は更に軟弱にな

った。森林官クニブッシュはすでにまた泣いていた。

少尉はそれを厭わしく見ていた、「クニブッシュ、お喋り老女よ」と彼は言った、「うせやがれ、一 さもないと一言も話さないぞ。おまえのことを気にしていると思うか。おまえや、おまえのはした金を。一 そんなのは、どーでもいいのだ。大義が問題なのだ、大義名分なのだ」。

森林官は当惑して窓の隅へ行った、一 自分の権利は明々白々ではないか。なぜ自分がどやされなければならないのか。

少尉は村長向かった。「それで、どうだ、ハーゼ」と煙を吐きながら彼は尋ねた。

「少尉殿」と村長はほとんど請うように言った、「何故私が他の者達よりも割を食わなければならないのです。こちら一帯の者は皆、今、抵当権を解約しています。クニブッシュだけが、実際、面倒見なければならない人間ではありません」。

今度は少尉が言った、「クニブッシュが問題なのではない。ハーゼよ、貴方が問題なのだ。ベルリン人達のペテンで一儲けしてはならないし、この同じペテン故にベルリン人達を倒せなくなろう。これは明白なことだ。どの子供でも分かろう。貴方も分かろう、ハーゼ。一 そして心の中では」と彼は軽く村長のチョッキを叩いた。そして不快そうに村長は後ずさった。「そして心の中では貴方も自分が間違っているとよく分かっているよ」。

村長ハーゼは重大な闘いの中にいた。彼は長い、労働の多い生活の中で、維持し続ける術を学んでいた。放り出す術を学んでいなかった。ようやくゆっくりと言った、「彼に対して、抵当権の解約通知をしないことと、半年ごとに十ツェントナーのライ麦相当分を支払うと書きましょう。...それ以上はこの農園ではできません。少尉殿、時代がひどいので、...」。

「村長、何という言い草だ」と少尉は小声で言って、その老いた男をまじまじと見つめた。「ペテンを丸ごとするのは良心が咎めるようだな。しかし小さなペテンは構わない、そうだろう。一 私をよく見ろ、おい。私は実際他に取り柄はないが、しかしこの点になると。...私は無一文だ、村長。五年前から、この身に着けているものしか有しない。時々給料を貰う。時々は何も貰わない。どうでもいいのだ。ある大義を信ずる者がいると、その人はすべてを差し出してくれる。あるいは信じてくれないかだ。一 それで、村長、この場合それであるとすれば、我々両人はもはや互いに話し合う余地はない」。

村長ハーゼは長いこと黙っていた。最後にうんざりして言った、「貴方は若い方で、私は年寄りです。私は一つ農園中庭を有します、少尉殿。これを守らなければなりません。我々ハーゼ家はすでにここに果てしない昔から居を構えています。この農園中庭を台無しにしたら、父や祖父に会わず顔がありません」。

「しかしそれを一つのペテンによって維持するとなると、一 それでも構わないのか、どうだ村長」。

「ペテンではありません」と村長は再び熱くなって叫んだ、「誰もがそうしています。その上、少尉殿」と彼は言って、穏やかに目の周りに小さな皺を寄せてあざ笑った、「我々は皆人間で、天使ではありません。父はあるとき馬を頑丈な馬として、そうではないのに、売却しました。我々は騙されますし、時に騙しもします。一 神も許されましようし、これは聖書の頁に書かれているばかりではありませんまい」。

少尉はすでにまた次の煙草にかかっていた。村長が神について語ったことは、関心がな

かった。彼にとって大事なものは、ともかくこの世が改善されることであった。「火をくれ、森林官」と彼は命じた。カーテンの総で遊んでいた森林官は飛び上がった。

「隅へ戻れ」と少尉は命じた。クニブッシュは再びカーテンの許へ飛んだ。

「私が言ったようにしないのであれば」と少尉は苦々しく説明した、―― というのは彼は少なくとも老いた百姓村長のように強情であったろうからで、―― 「すべての弁えのある奴等の簡単な義務を果たさないのであれば、貴方は我らの大義とは縁のないものとなろう、村長」。

「貴方には我々が必要であろうといつも考えていました」と村長は動じずに言った。

「たとえ貴方が我らの大義に加わらなくとも、村長」と少尉は全く構わずに続けた、「我々は四週間か二ヵ月後には支配権を得る、―― それでも貴方にとって都合がいいと思えるのか、どうだ」。

「いやはや」と村長ハーゼはのんびりと言った、「参加しなかった者すべてを罰するご意向であれば、少尉殿、すべての村々から怨嗟の音が上がりましょう。それに」と彼は嘲笑した、「貴方は必ずしも農業大臣になれるわけではありませんまい、少尉殿」。

「分かった」と少尉は短く言って、安楽椅子から自分の帽子を取った、「それではその気がないのだな、村長」。

「私の意向は申しました」と頑固に村長は繰り返した、「解約通知はしない、それと十ツェントナーのライ麦相当と」。

「話し合いは終わりだ、村長」と少尉は言った。「森林官、行こう。今日の集会が行われる所を伝えよう。いずれにせよ、ここではない」。

村長ハーゼは更に何か言いたかったであろうが、その細い唇をしっかりと閉じていた。少尉は商売人ではなく、何も取引をせず、要求するものは一切か、それとも皆無であった。村長は一切の方に同意したくなかったので、むしろ黙っていた。

少尉は村長の家のドアの所に立っていて、中庭を覗いていた。彼の背後には黙って森林官クニブッシュとその犬が控えていた。少尉は弱まっているが、相変わらず十分に強く降る豪雨の中へ出て行くことをためらっているように見えた。しかし彼は少しも雨のことを考えていなかった。彼は物思いに耽って、開いた納屋の三和土を見ていた。そこでは人々が素早く、仕事仕舞いの前に、最後に雷雨から守られたライ麦の荷車降ろしをしていた。

「少尉殿」と森林官クニブッシュは慎重に言った、「ひょっとしたら集会は百姓のベンツィエンの許で行いましょうか、...」。

「ベンツィエン、そうか、ベンツィエン、...」と少尉は考え込みながら、更に荷車降ろしを見つめていた。パリッと乾燥した麦わらが彼の側でガサゴソ行き来した。少尉は先の大戦に出征した年ではなかった。彼は若すぎた。しかしバルト三国であれ、上部シュレージエンであれ、最後に決するのは粘り強さだと十分に教わって来ていた。少尉は村長にすでに言っていた、両者の話し合いは終わった、と。しかしハーゼがそう思おうとも、少尉はまだ村長との話しを終えていなかった。まさに終えていない。「ベンツィン[ガソリン]、...」と彼は今一度つぶやいて、それから無愛想に言った、「ここで待っておれ、森林官」。

そう言って少尉は戻り、再び家へ入った。

五分もしないうちに、森林官も中へ呼ばれた。村長はテーブルの許に座っていて、一枚

の証書を書いていた。自分は抵当権の解約通知を断念し、四十ツェントナーのライ麦の利子支払いの責務を負う、二回の半年分割払いである、と。村長からは何も窺われなかった。少尉からも何も窺われなかった。森林官は嬉しくて泣きたくなった。しかしそうすることは許されなかった。さもないとこの件はまた撤回されるかもしれない。それで彼は自分の感情を抑えて、赤く塗られた胡桃割りのような顔をしていた。

「それで荷下ろし異常なしだ」と少尉は言って、そして更に「証人として」下手くそな字で署名した。「それで郎党を呼んで来い、クニーブッシュ。こちらだ、勿論こちらだ。百姓ベツツイエンか。ペンツイン[ガソリン]はここでは問題にならない」。

彼は笑った。村長は黙っていたが、少しばかり意地悪な笑いであった。

少尉と村長の間の会話はとても短いものであった。

「村長、答えてくれ」と少尉は部屋に入りながら、尋ねた。「丁度思い付いたのだ、火災保険はどの程度だ」。

「火災保険ですか」と村長は全く当惑して尋ねたのであった。

「言ってくれ」と少尉は苛立って言った。子供が聞きたがっている按配であった。「幾らかけているのだ」。

「四万マルクです」と村長は言った。

「紙幣のマルクか」。

「そうなんですー」と長く伸びた。

「およそ四十ポンドのライ麦に当たるな」。

「そうなんですー」。

「とんでもなく軽率だな。今乾いた干し草と麦わらで一杯の納屋を持っているというのに」。

「しかし他に保険がないのです」と村長は絶望して叫び声を上げた。

「いや、ある、村長、いや、あるぞ」と少尉は言ったのである。「つまりだ、貴方がクニーブッシュを中に呼んで、私の言うように書けばな」。

その後森林官クニーブッシュが中に呼ばれたのである。

40

フォン・シュトゥットマンは階段から転げ落ちる

この日の午後、ホテルの応接課長、フォン・シュトゥットマン退役中尉はまことに不愉快な体験をした。午後の三時頃、列車からの旅行客が全くない時間に、入口のホールにかなり大柄の、頑丈な体型の紳士が現れた。非の打ち所のない、イギリス製品の服で、手に豚革の小さなトランクを持っていた。

二階の電話のない、バス付きのシングルをこの紳士は希望した。

ホテルの部屋すべてに電話がありますと彼に告げられた。およそ三十代のこの紳士は、輪郭の整った、しかし黄色く色褪せた顔をしていて、この顔をぴくつかせると恐怖感を抱かせるのであった。彼は今そうして、このような恐怖感を広め、守衛は後ずさった。

シュトゥットマンはもっと近寄った。お望みでしたら、勿論電話は部屋から取り外せましょう。いずれにせよ、...

「そう望む」と突然、出し抜けにこの余所の男は叫んだ。そしてそのままの調子で全く平静に、部屋の呼び鈴のボタンも外して欲しいと述べた。「こうしたモダンな仕掛けは望まない」と彼は顔をしかめて言った。

フォン・シュトゥットマンは黙ってお辞儀をした。次に電気の明かりの撤去も要求されるであろうと予期していた。しかしこの紳士は電氣的明かりをモダンな仕掛けと思っていないのか、あるいはこの点を忘れていた。彼はつぶやきながら階段を上がって行った。豚革の小さなトランクを持ったボーイを従えて、宿泊登録用紙を持った室内係に案内されていた。

フォン・シュトゥットマンは、もう長いこと、大都会の隊商宿の応接課長をしていて、様々な客の要望にさほど驚くことはなかった。小猿のために室内トイレを大声で要求する一人旅の南アメリカの女性に始まって、夜の二時にパジャマ姿で現れて、早速小声で「しかし至急の願いだと言って、一部屋に一人のレディーの手配を頼む（そんなに澄ました振りをすることないだろう、我々は皆男ではないか）中年の気品ある紳士に至るまで、ほとんどどんなことであれ、シュトゥットマンは悠然と対処できた。

それでもこの新しい客人には、用心すべしと警告する何ものかが感じられた。平均してホテルには平均の者が訪れ、平均の者はスキャンダルを実体験するよりも、むしろ新聞で読む方を好むものである。応接課長の胸の中で何ものかが警告を発した。突飛な望みの方よりも、むしろしかめっ面、突然の叫び声、客人の目の中の、落ち着きのない、破廉恥であったり、こそこそしたりする視線にそれが感じられた。

いずれにせよ、フォン・シュトゥットマンがしばらくして受け取った報告は満足できるものであった。ボーイはすべてアメリカドルの紙幣でチップを貰っていた。客人の財布は異常に立派な厚みがあった。室内係は宿泊用紙を持って来た。この紳士は「帝国男爵フォン・ベルゲン」と記入していた。

用心深い室内係のズースキントは、その上、客人のパスポートを呈示させていた。警察長官の規定により査察の資格を有していたのである。このパスポートは、一国内用パスポートで、ヴルツェンの地区当局によって発行されたもので、一疑いもなく、問題ないものであった。早速ゴータ年鑑が調べに用いられて、年鑑は帝国男爵フォン・ベルゲンは実在して、ザクセンに居を構えていると証していた。

「それで、万事問題ない、ズースキント」とフォン・シュトゥットマンは言って、ゴータ年鑑をまたパタンと閉じた。

ズースキントは不安げに頭を振った、「分かりません」と彼は言った、「あの方は変です」。

「どう変なのだ。紳士詐欺師か。支払いさえすれば、我らにはどうでもいい、ズースキント」。

「紳士詐欺師、とんでもありません。でも思いますに、気がふれています」。

「気がふれているか」とフォン・シュトゥットマンは尋ねた。ズースキントが彼自身と同じ印象を抱いていることに苛立った、「あり得ない。ズースキント、ひよっとしたら少しばかり神経質なのだろう。あるいは酔っている」。

「神経質とか、酔っているとか。考えられません。気がふれています、...」。

「どうしてなのだ、ズースキント、上で何か変な行動をしたか」。

「していません」とズースキントは素直に認めた、「ちょっとしたしかめっ面や馬鹿なまねは、何のこともありません。そうすると我々が怖がると思う者もいますが」。

「それで」。

「そう予感がするのです、課長殿。半年前に四十三号室のトリコット製品叔父さんが首をつったように、今回も予感がしたのです」。

「何だと、ズースキント。不吉な絵を描いてくれるなよ。ー まあ、他にも仕事がある。最新の情報を私の耳に入れてくれ。絶えずこの方には注意してな、...」。

フォン・シュトゥットマンはとても気骨の折れる午後を過ごしていた。新しいドル相場で、すべての値段の新しい表示が必要であるばかりでなく、いや、すべての予算が新しく計算されなければならなかった。シュトゥットマンは部門の会議室にやきもきして座っていた。総支配人フォーゲルはくどくどと丁寧に説明した、更なるドルの上昇に備えて、「零落」しないように、現在の相場に対してある種の値上げを勘定しなければならないのではないか、考慮する必要があるでしょう、と。

「諸君、我々は資産を維持しなければなりません、資産を」。そして彼は説明した、例えば我らのアラバスターの軟石鱈の備蓄は昨年十七ツェントナーからその半分に落ちてしまっています、と。

上司の不満げな視線にもかかわらず、シュトゥットマンは再三ホールへ走り出た。四時を過ぎると、旅行者の流れははなはだ増大して来て、受付ではすべての社員が天手古舞いしていた。そして到着者の流れは、突然旅立つことに決めた者達とぶつかり停滞した。

ズースキントが彼にこう囁いたとき、シュトゥットマンはただ短く頭で頷いた。三十七号室の紳士は、バスに入り、それからベッドに入って、一本のコニャックと一本のシャンパンを取り寄せました、と。

それでは呑み助か、と彼は忙しい中で考えた。奴が馬鹿騒ぎを始めたら、ホテルの医師を派遣して、睡眠薬を処方させよう。

更に彼は忙しかった。

シュトゥットマンはまさにまた会議室から出て来た。会議室では総支配人のフォーゲルが今やこう議論していた。石灰保存の卵はホテル業の破滅です、いずれにせよ今日の状況では、ある種の備蓄に関し、...考慮すべきでありましょう、...新鮮な卵の供給に関しましては、...残念ながら冷蔵の卵も、...

阿呆な、とフォン・シュトゥットマンは走り出ながら、考えた。そして不思議に思った。何故私はこんなに苛立っているのだ。こうしたのろのろ仕事には永劫の昔から慣れているのに、...雷雨で痛みがするのかもしれない、...

室内系のズースキントが彼を引き留めた。「勃発しました、課長殿」と黒い燕尾服のリボンの上の顔を悲しげに歪めて言った。

「何があったのだ。どうしたいのか、すぐに言ってくれ、ズースキント。時間がないのだ」。

「三十七号室の方なんですよ、課長殿」とズースキントは非難一杯に言った、「シャンパンに蝸牛がいると言うのです」。

「蝸牛か」とフォン・シュトゥットマンは笑わざるを得なかった。「あり得ない、ズースキント。からかわれているんだよ。シャンパンに蝸牛がいるはずなからう。聞いたこ

とがない」。

「でも中にいるんです」とズースキントは苦悶一杯に言い張った、「私自身の目を見たのです。大きな、黒いナメクジが、...」。

「見たのか」、突然シュトゥットマンは真面目になった。彼は熟慮した。このホテルのシャンパンに蝸牛がいることは全く考えられない。ここでは混ぜ入れた闇のシャンパンを出していない。「では奴が中に入れたのだ。我らに茶番を演ずるために」と彼は決めつけた。「無料で別な瓶をお出ししろ。ここに ー ワイン主任に対して書いておく」。

彼はさっと引換券を記入した。

「よく注意するんだぞ、ズースキント。二度と冗談をさせないことだ」。

ズースキントは全くうなだれて頭を振った、「どうか一度御自身で彼の許に行ってくださいませんか。案ずるに、...」。

「つまらん、ズースキント。私はこのような冗談に付き合っておれない。自分でこの始末が付けられないのであれば、ワイン主任を証人として連れて行け、あるいは他の誰でも連れて行きたい者と行け、...」。

シュトゥットマンはすでに駆けていた。ホールでは周知の鉄鉦王ブラハヴェーデが叫んでいた。彼は毎日一千万マルクで部屋を借りていて、今勘定には一千五百万と書かれているとか、...。

彼は鉄鉦王に、彼が夙に承知していること、つまり値上がりしたドルについて教えなければならなかった。あるときは説得し、あるときは微笑し、あるときはもっとよく注意しろとボーイに怒りの合図をし、あるときは萎えたレディーの車椅子での移送を見守り、あるときは三回、電話の呼び出しを断った、...そのときすでにまた悲しげにズースキントが背後に立っていた。

「課長殿、お願いします、課長殿」と彼は囁いた。古いスタイルの真に神経に障る舞台での策謀者の囁き声であった。

「一体またどうしたのだ、ズースキント」。

「三十七号室の方が、課長殿、...」。

「何だまた、何だまた、まだシャンパンに蝸牛がいるのか」。

「トゥーフマンさんが」（これはワイン主任であった）「十一本目の瓶を開けたのです。すべてに蝸牛がいます」。

「すべてにだと」とフォン・シュトゥットマンは文字通り叫んだ。そして客人達の視線を感じると、もっと小声で言った、「気でも狂ったのではないか、ズースキント」。

ズースキントは悲しく頷いた、「あの方は叫んでいます。黒いナメクジは嫌いだと叫んでいます、...」。

「行こう」とシュトゥットマンは叫んで、すでに二階への階段を駆け上がっていた。かくも上品な企業の応接課長、副支配人としてどのような状況下であれ守るべき品位ある姿勢を棄てていた。苦悶に満ちたズースキントが後から走って来た。

彼らはあっけに取られた客人達の間を駆け抜けた、 ー するとすぐにどこからともなく、噂が広がった。コロラチュラ歌手のヴァゲンツァ伯爵夫人が、今晚コンサート・ホールで歌う予定であったが、たった今分娩となった、と。

彼らは十七号[三十七号]室の前に同時に着いた。入手した報告を基に、フォン・シュト

ウットマンはすべての時間潰しの丁重さは無用と思っていた。ただ手短にノックして、お入りの返事も待たずに、入室した。彼に踵を接して、給仕人のズースキントが続いた。給仕人は丁寧にクッション付きの二重扉を閉めて、生ずるであろうやり取りの騒音が他の客人達の耳に入らないようにした。

まことに大きな室内では電気の明かりが煌々としていた。両窓のカーテンは密に閉まっていた。同様に隣接の浴室のドアも閉まっていた、一　すぐに判明することになったが、やはり施錠されていた。鍵は抜かれていた。

広い、全くモダンなクロム鋼の金属ベッドの中に客人は横たわっていた。シュトゥットマンがすでにホールで注目していたその顔の黄色さは、白い枕と比較すると更に病的に見えた。その上この客人は一見極めて高価な金襴の深紅のパジャマを着ていて、一　そのパジャマの黄色く、太い刺繍は、不機嫌な顔に比べて、生气なく見えた。一方の手、顕著に美しい印章用指輪の力強い手を客人は青い絹のキルティングの掛け布団の上にあからさまに置いていた。もう一方の手は掛け布団の下にあった。

こうしたことすべてをフォン・シュトゥットマンは一瞥して把握した。彼は更にベッドの側へ押しやられたテーブルを見た。その上にある無数のコニャックとシャンパンの瓶を見てあっけにとられた。ズースキントの言及した十一本の瓶よりもはるかに多くの瓶が運び込まれたに違いなかった。

苛立って、同時に、シュトゥットマンは、不安におびえるズースキントが証人としてワイン主任だけを連れて来たのではないと確認した。ボーイも、メイドも、エレベーター係も、多分臨時の部屋掃除の女性も、テーブルの近くに立っていた。小さな、とても不安げな当惑した一群であった。

まずは若干のスキャンダルに対するこれらの証人をドアの外へ出そうかと一瞬、シュトゥットマンは考えた。しかし客人の恐ろしげにびくつかせる顔を見て、事は緊急を要すると察した。それで彼は一礼してベッドに近寄り、自分の名を名乗り、待機した。

すぐにこの殿方の顔は落ち着いた。「不愉快だ」と彼はかの傲慢な少尉の調子で鼻声で言った。フォン・シュトゥットマンはどうに死滅したものと思っていた調子であった。「はなはだ不愉快だ　一　貴方らにとって。シャンパンに蝸牛　一　とんでもなく不潔だ」。

「蝸牛は見当たりませんが」とフォン・シュトゥットマンはシャンパングラスと瓶をちらっと見て言った。彼がひどく不安に思ったのは、このたわけた難癖ではなく、客人の暗い目からの果てしない憎悪の視線であった。この目は破廉恥で同時に臆病なものであり、シュトゥットマンがまだかつて見たことのない目であった。

「しかしその中にいるのだ」と客人は突然叫んだ。皆がビクツとした。彼は今やベッドに座っていた、キルティングの掛け布団を片方の手でぎゅっと掴み、もう片方は掛け布団の下にあった。

(用心、用心とフォン・シュトゥットマンは自らに言った。奴は何か計画している)。

「皆が蝸牛を見ている。瓶を取ってみろ、違う、それだ」。

無造作にシュトゥットマンは瓶を手にとって、明かりにかざした。彼はシャンペンに全く異常なこと、一　それに客人も自分と同じ思いであることを完全に確信していた。何らかのトリックで給仕人やワイン主任の単純な輩を騙したのだ。一　ある意図からで、これはシュトゥットマンにはまだ分からないが、しかしすぐに分かることであろう。

「注意してください、課長殿」と早速室内係のズースキントが叫んだ、一そしてシュトゥットマンは振り向いた。しかしすでに遅すぎた。瓶の点検に没頭して、シュトゥットマンは客人から目を離していた。まことにこっそりとこの客人はベッドから抜け出て、ドアの方へ滑って行き、施錠した。一かくて彼はそこに立っていて、片手に鍵を持ち、もう一方の、高く上げた手に、ピストルを持っていた。

フォン・シュトゥットマンは何年か戦場に赴いていて、自分に向けられた銃に格別うろたえることはなかった。しかし彼を驚かせたのは、この得体の知れない余所者の顔に浮かぶ憎悪と、癒やしがたい絶望の表情であった。それでいてこの顔は今や全く平静で、もはやしかめっ面をしておらず、むしろ微笑、勿論とても嘲笑的微笑を浮かべていた。

「どういうことです」と短くシュトゥットマンは尋ねた。

「つまりだ」と客人は小声で言った。しかしとても明瞭であった、「この部屋は今や私の司令下にあるということだ。服従しない者は、射殺する」。

「我らの金が目当てですか、ほとんど利はありませんぞ。貴方はフォン・ベルゲン男爵ではないのですか」。

「室内係[給仕人]」とこの余所者は言った。きらびやかに彼は、黄色の刺繍のある深紅のパジャマを着て立っていた。その上の黄色の病的な顔に対しては余りにきらびやかなものであった。「室内係、これからシャンパングラス七杯にコニャックを注ぐのだ、一三つ数えるうちにな。その間に飲み干さない者は、射殺される、一いいか」。

フォン・シュトゥットマン殿に助けを請う眼差しでズースキントは命じられた酒注ぎをした。

「この冗談は何のつもりです」とフォン・シュトゥットマンは不機嫌に尋ねた。「貴方らは飲むんだ」とホストの客人が言った、「一 一 二 一 三。飲むんだ。いいか、飲むんだぞ」。

今や彼は再び叫んだ。

他の者達はシュトゥットマンを見ていた、一シュトゥットマンは躊躇った、...

余所者は今一度叫んだ、「飲め、飲み干すのだ」。そして撃った。女達ばかりが叫んだのではなかった。一人つきりであればフォン・シュトゥットマンはこの男との闘いに乗り出していたであろう。しかし室内のうろたえた人々を慮り、ホテルの評判を考えると、自制を強いられた。

彼は振り向いて静かに言った、「それでは飲もう」。そして不安げな顔に向かって勇気づけの微笑を浮かべて、自ら飲んだ。

シャンパングラスにはかなりの量の一口コニャックが収まっていた。シュトゥットマンは速やかに済ませた。しかし背後で他の者達が、飲み込み、むせる声を耳にした。

「飲み干すんだぞ」と余所者はがみがみ言った、「飲み干さない者は、射殺される」。

フォン・シュトゥットマンは振り向くことが許されなかった。彼は客人を注視していなければならなかった。相変わらず彼はまだ、この客人が一瞬隙を見せて、武器を奪えないか期待していた。

「天井に発砲されました」と彼は丁重に言った、「ご配慮に感謝致します。何故我々はここで飲まなければいけないのか教えて頂けますか」。

「貴方らを射殺することは関心がない、射殺しようとしまいとどうでもいいことだ。関

心があるのは、貴方らが酩酊することだ。すべての滴のアルコールが飲み干されるまで、誰も生きてこの部屋を去ってはならん、　－　室内係、今度はシャンパンを注げ」。

「そうですか」とフォン・シュトゥットマンは言った。会話を続けて行くことが大事であった。「それは確かに了解しました。それで何故我々は飲まなければいけないのか、今や聞きとうございます」。

「冗談をしたいからだ。　－　さあ、飲め」。

ある手が背後から一杯のシャンペングラスをフォン・シュトゥットマンの手に渡した。彼は飲んだ。それから彼は言った。「冗談をしたいからというわけですか」。そしてできるだけ無造作に言った。「思いますに、貴方は精神を病んでおられるのでしょうか」。

「私は」と相手も同様に平静に言った、「すでに六年前から禁治産宣告を受けていて、気違い病院に押し込まれていた。　－　室内係、今度もまた、そうだな、グラス半分のコニャックだ」。その説明をした、「余り急ぎたくない。享樂は引き延ばせたいからな」。そして再び平静に告げた、「私は戦場での射撃に耐えられなかった。皆がいつも私を目がけて撃ってくる。それ以来私は一人で撃つのだ。　－　飲め」。

フォン・シュトゥットマンは飲んだ。彼はアルコールがまず上品な霧のように鬱然と脳の中に上昇して来るのを感じた。頭を動かさずに、彼は目の隅で、部屋の別の隅の方に室内係のズースキントが現れて、浴室へ忍び込むのが見えた。しかし男爵も彼を見ていた。「残念ながら施錠してある」と彼は微笑して言った。そしてズースキントがまた応接課長の視界から消えた。両肩で遺憾の仕草をしていた。

それからフォン・シュトゥットマンは一人の女性が背後で穏やかに金切り声を上げ、男達がひそひそ囁く声を聞いた。注意しろ、中尉、注意しろよ、と彼の中で声がした。そして彼の頭は再び綺麗に澄んだ。

「分かります」と彼は言った、「しかし光榮にもこのホテルで貴方と飲む機会を得たのはどういうわけです。貴方は施設に隔離されていたのでしょうか」。

「脱走だ」と男爵は短く笑った、「奴等は阿呆だ。老枢密顧問官は私を取り戻したら、立派な悪態を吐くことだろう。二、三の結構な仕掛けを準備したのだ。一発ぶん殴ってやった番人のことは全く別にしてもな。　－　ちょっとのんびりすぎるな」と彼は突然不機嫌につぶやいた。「余りののんびりすぎる。更に一杯のコニャックだ、室内係、グラス一杯にな」。

「シャンパンをお願いしたい」とシュトゥットマンは試みた。

しかしそれは失敗であった。

「コニャックだ」と客人は更に野蛮に叫んだ、「コニャックだ、　－　コニャックを飲まない者は、射殺する。　－　どうでもいいのだ」と彼は強調してシュトゥットマンに向かって叫んだ。「私は条項五十一の者だ。私には手出しできない。私は帝国男爵フォン・ベルゲンだ。警察は私を捕らえられない。私は精神病患者なのだ、　－　飲め」。

これはやばい、とフォン・シュトゥットマンは絶望して考えた。その一方油性液体はゆっくりと彼の喉を下って行った。女達は背後ですでに笑い、くすくす声を上げていた。五分したら私も奴が意図している通りの者となろう。奴は浅はかな動物並みに健康な者達が精神病患者の前で這うのを目にすることになる。どうするか、　－　しかし打開策は見えない。頑丈に注意深くこの阿呆はドアの下に立っている、ピストルを片手に、引き金に指

を置いて、一 隙を見せていない。

「注ぐんだ」とまさにまた彼は命じた、「グラス一杯にシャンペンをな、するとまた口がさっぱりする」。

「その通り、親方、その通り」と誰かが叫んだ。多分ボーイであろう、しかし他の者達も同意して笑った。

「貴方は名誉ある紳士だ」とシュトゥットマンは今一度試みた。「提案申し上げるが、少なくとも二人のレディーは部屋の外に出したらどうです。我々他の男どもはその間誰も外に出ようとはしませんから、誓いますよ、...」。

「レディーを外に、一 それは駄目だ」と背後からどら声がした、「そうだろう、ミーツェケン。こんな上等な、こんな高貴なもの、我々は毎日飲めやしねえ、...」。

「聞いたかね」と男爵は嘲笑的に微笑した、そして言った、「飲め、一 今度はコニャックだ。そしてもう腰掛けてよい。その通り、ソファーにだ。さあ行け、ベッドもいいぞ。貴方もお掛けなさい、課長殿。さあ、私がからかっていると思うのかい。撃つぞ、ほら」。発砲された。彼らは叫んだ。「そうだ、一 まずまた飲め。そしてゆっくりしろ。上着を脱いで、カラーを外せ。メイドもだ。前掛けを外せ。そう、ゆっくりとブラウスを脱いで、...」。

「男爵殿」とフォン・シュトゥットマンは立腹して言った、「ここは遊郭じゃない。私は断る、...」。

その際しかし彼は、アルコールの影響で、意志と行為とがもはや思いに任せられないと感じていた。フロックコートはすでに安楽椅子の背に掛かっている、彼はネクタイを外そうとしていた。

「私は断る、...」と彼は今一度弱々しく叫んだ。

「飲め」と相手は叫んだ。そして嘲笑的に添えた、「五分したらもはや断らないだろう。一 今度はシャンパンだ」。

弾ける音がした。砕けたグラスの音がした。室内系のズースキントがテーブルの上を横切って崩れ、床に落ちた。今や彼は伸びていた。喉をごろごろ鳴らし、明らかに意識を失っていた。...

ワイン主任は、太くごつい手をしっかりメイドの胸に置いて、笑いながらベッドに座っていた。初老の掃除婦はそれぞれの腕に若者を一人ずつ抱え、真っ赤になって、もはやこの世のことに構っていないように見えた。

「皆、飲むんだ」と狂人は叫んだ、「お主が今度は注げ、シャンパンだ」。

シャンパンの瓶を持ちながら、三分後にはお仕舞いだとシュトゥットマンは考えた。三分したら他の皆と同じようになって、...

彼は瓶の末端を冷たくしっかりと手に感じた。突然頭が明瞭になった。

すべては全く簡単な事だ、...と彼は考えた。

シャンパンの瓶が手榴弾となった。彼はピンを引き、それを赤い巻き髪男の頭に投げた。彼は後から飛んだ。

男爵は鍵とピストルを落としてしまっ、転げ落ち、叫んだ。「私に手出しは許されないぞ。私は精神病なのだ。第五十一条項なのだ。殴らないでくれ、お願いだ。処罰されるぞ。私は免責証を持っているのだ」。

フォン・シュトゥットマンは絶えず新たに、酔った勢いでこの情けない野郎をぶちのめしながら、憤然と考えていた。こやつに騙されてしまったのか。単なる臆病者にすぎないのに。戦場で陣太鼓が叩かれるたびに、ズボンに糞尿で一杯にする奴に。最初の数分でこやつを張り倒しておけば済んだのだ。

それからこの軟弱な臆病泣き虫を殴りつけることが嫌になった。彼は自分の横の床に鍵を見つけ、それを取り、よろよろと立ち上がって、ドアを開け、そして廊下に出た。

篠突く雷雨を恐れて、大きなホテルホールに庇護を求めている数多くの客達は、びっくりして竦み上がることになった。彼らは幅広の、赤い絨毯を敷かれた二階への豪華階段の上の方に一人のよろめく男が、千切れたシャツの袖姿で、顔から血を流して浮かび上がって来るのを目撃したのである。最初気付いたのはわずか数人に過ぎなかったが、彼らは固唾を呑んで静かに見守っていた。すでに他の者達も振り向いて、信じられないという風に見つめた。

その紳士、その男は上の最初の段でバランスを取って立っていて、人々の蝟集するホールをじっと見下ろして、これが何なのか、自分はどこにいるのか分からない風であった。彼は何ごとかつぶやいた。人々には分からなかったが、下の方では次第に静まった。今や喫茶店から明瞭に音楽家のバイオリンの音が聞こえて来た。

フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、安楽椅子から起き上がって、信じられない思いでその出現を見つめた。

ホテルの社員は上を見上げ、凝視し、何かしようと思いつきながら、どうしたものか分からずにいた、...

「阿呆ども」と今やこの酩酊者が上の方で叫んだ、「狂っている、免責証を持っているぞ、と。しかしやっつけてやった、...」。

より弱々しい声で、今一度、下から凝視している者達に、彼は叫んだ、「痴呆どもめ、やっつけてやった」。

彼は姿勢を保てなかった。陽気に彼は叫んだ、「おっとっと」。六段、彼はそれでも真っ直ぐであった。それから前のめりに崩れた。かくて彼は階段を転げ落ちて、退く客人達の足許に至った。

そこに彼は今や横たわっていた、動かず、意識を失っていた。

「どこに運ぼうか」とフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、急いで尋ねて、すでに彼の腋の下を掴んでいた。

突然社員が倒れた男の周りを囲んだ。客人達は退けられた。階段の下、食堂貯蔵庫への入口に運び手達は — シュトゥットマンとブラックヴィッツを連れて、消えた。最初のニュースが駆け巡った。若いドイツ系アメリカ人。アルコールに不慣れ。禁酒法だ。ドルの十億万長者。完全な酩酊、...

万事はその後三分経つと、正常に戻った。お喋りがなされ、退屈し、郵便が尋ねられ、電話し、雨が眺められた。

ヴォルフガング・パーゲルが夕方の六時から七時の間、ベルヴェー通りの美術商の店から出て来たとき、まだ相変わらず雨が、もっと穏やかになっていたが、降っていた。懐疑的に彼は通りの上手と下手を見つめた。エスプラナーデ・ホテルの側も、ローラントの泉の側でもタクシーが止まっていた。これに乗れば十分速やかにペートルの許へ戻れたであろう。しかし融通の利かない頑固さのため、このただ自分の良い娘のためにだけと思い定めた金を使うことができなかった。

彼は古い略帽をよりしっかりと押し込み、出発した。 — 三十分したら立派に良くペーターの許に戻れるだろう。先ほど、金がないときには、電車に乗ってとても快適にポツダム広場に着くことができた。彼の持つ絵のせいでどの車掌の目にも留まったことであろうが。しかし雷雨のために電車に殺到した人々のお蔭で、こんなに人目についても無賃乗車のできたのであった。今は、ポケットに途方もない数の百万マルクを有しているのに、無賃乗車する勇気がなかった。 — 逮捕されて、精算となると、数百万に手を付けなければならなくなるであろう。

パーゲルは満足して思わず口笛を吹いた。そして帝国宰相宮殿の果てしない庭園の壁に沿って歩いた。乗車券を払うか、払わないかのこうしたすべての思弁は阿呆な戯言であり、ペーターに速やかに救いをもたらすことがはるかに大事であり、(礼儀にもかなっている)と良く承知していた。 — しかしと彼は両肩をすくめた。

彼はまたしても賭博者となっていた。彼は決めていた、一晩中、何が起きようとも、ただ赤に張る。と。 — 自分はただ赤にだけ張るのである、悪魔にさらわれようと、機会が自分に敵対しようと、構わない。赤が勝つのだ。かくて自分がただ、ペートルの両手に無傷の760,000,000マルクを渡すという自分の計画通りにするならば、二人の件は立派な結末を迎えるであろう。しかし一万マルクでも、ほんの千マルクでも金が欠けたら、黒い結末しか予測できない。

ひょっとしたらこれはばかげているかもしれない、多分に迷信的であろう。 — しかし誰に分かる。この人生はとても込み入っていて、いつも後から思いがけないことが起こり、すべての論理、すべての正確な計算が挫折する。 — 迷信や馬鹿げた計算や、反抗や無分別で、人生の策謀を出し抜く最も確実な展望はあり得ないのであるか。だから、ヴォルフガングよ、すべてが正しいやり方なのだ。それが正しくなくても、やはり正しいのだ。論理で間違えるか、無分別で間違えるかは、個々人の私的な楽しみごとだ。 — 自分、ヴォルフガング・パーゲルは無分別に賛成。

私はこのようなものであり、永遠にそうであろう、アーメン。

760,000,000マルク。およそ千ドル。平和時のマルクで、4200マルク。昼にはまだ「叔父さん」の許でただ一ドルを物乞いしなければならなかった者にとって、夕刻のちょっといかす額だ。二個のシュリッペと一個の — はなはだ厭わしい — 珉瑯ポットのごたまぜコーヒーに対しても朝食時、何の支払い能力もなかった男なのである。

パーゲルはブランデンブルク門の下に来ていた。彼はここで束の間、永遠に降り続く雨から一息吐き、顔を拭いたかった。しかしできなかった。 — 門のアーチの下には乞食や行商人や傷痍軍人が押し寄せていた。皆が — ティーア・ガルテンの入口やパリ広場から出て来て、 — 雨のせいでここに避難して来ていた。パーゲルは彼らの下に身を置くと、「いや」と言わないでおくことが難しくなり、自分の神聖な現金移送の不可侵性が

脅かされそうであった。かくて彼は自らと、乞食達の物乞いから逃れた。多くの人間達が、厳しさからではなく、弱さから、逃れるように、厳しく逃れ、一そして再びまた雨の中に出た。

彼は一少しばかりこの姿勢を強いられて、一両手を丁寧に軍服のポケットの上に置いた。ズボンのポケットの中ではなく、内ポケットの中でもなく、しかし多分に外側のポケットでは、自分の金が濡れてしまう恐れがある。彼は一瞬たりとも、(まさに彼が何を考えようとも)、この額、760,000,000マルクを携帯していることを忘れなかった。その中の四分の一は、つまり250ドルは、立派なアメリカの発行紙幣なのである。立派な紙幣のドルで、今日ベルリンにあるものの中で最も欲しがられているものである。...

この金があれば、今夜この町を踊らせることができよう、とヴォルフガングは考えて、満足して口笛を吹いた。残りの一570,000,000マルクはドイツ紙幣で、部分的には信じられないほど少額の寄せ集めである。

しかしこれはどのようにして掻き集められたことか。画商からこの額を今晚中に奪うことは大層難儀なことであった。もはやそれほどの金は店にはごぞいません。諸銀行にももはや人を派遣できません、すでに閉まっています。初回金は、勿論払います、残りは明日早朝、九時半に、パーゲルさんのお望みの所に、ベルリンのどこであれ、使者を派遣致しますので。パーゲルさんにはこの額で十分ではありませんか、いかがです。

そう言って、画商は、重そうな、がっしりした男で、かなり赤ら顔で、その上アッシリア人風の黒い髭であったが、自分の壁に目を送っていた。愛おしい誇りの目であった。

ヴォルフガングはこの視線を自分の目で追った。彼がやはり自分の父の息子であるかぎり、彼はこの誇りが理解できたし、本来少しも芸術向きには見えないこの重たげな男の自分の諸絵画に対する愛も理解できた。

向こうの、二街区先の、ポツダム通りには、「シュトゥルム[嵐]」店があって、そこでも絵が売られていた。その店に時々、長時間、ペーターと一緒に入り、これらのマルクやカンペンドクやクレーやノルデの絵を眺めたものであった。時には笑い出さざるを得ず、あるいは頭を振ったり、嘲笑したりせざるを得なかった。というのは多くが単純に勿体ぶって破廉恥であったからである。一立体派や未来派、表現主義者の時代であった。彼らは絵の中に新聞紙の切れ端をくっ付けたり、世界を諸三角形に砕いて、それらをまたジグソーパズルのように合成しようとしていた。しかし時には、立ち止まって、何かむずがゆさを覚えた。ある感情が生じて、何かが人の琴線に触れ、一つの弦が鳴った。これはやはり何ごとかではないか。この腐った時代から何か生氣のあるものが生まれたのではないか。

しかしここでは、この裕福な男の許では、彼は気に入ったら買うだけであって、獲得したものの売却にはさほど関心がなくて、一ここではそのような実験は見られず、手探りの試みはなかった。ここにあるのは、すでに応接室でも、コローといったもので、何らかの池で、赤っぽい光線の中に全く浮かんでいて、岸边から小舟を櫂の棒で棹さず孤独な船乗りの帽子は更にもっと赤い。素晴らしいヴァン・ゴッホもある。緑色と黄色に燃える畑の果てしない広さがあり、その上には天の更にもっと広大な青さが見られ、その青さはすでに上昇して来る雷雨で黒くなり始めている。ゴーギャンもある。穏やかな褐色の、美しい胸の少女達の絵である。いや、点描作家、シニャックの絵、ルソーの子供っぽく、無

器用な男の絵、チューゲルの動物の静止画、ライスティコーの赤い日差しの中の松の絵がある。...しかし、こうしたものは夙に実験を離れている。 — 吟味を経て、理解を得ており、愛するに値すると評価済みであり、今やこうしたものすべてが愛されている。この画商には信頼が置ける。

しかしヴォルフガング・パーゲルがこうしたことすべてを察し、理解したとしても、それでも彼はまた、ここでは自分の望むように要求できると分かっていた。六時が過ぎて、もはや店に金がないとき、760,000,000マルクの額を掻き集めるといっておよそ不可能事さえ要求できよう、と。すでに彼が店に入って、ずぶ濡れの猫のように滴らせながら、軍服の下から、できるだけ上手く雷雨から守って来たその絵を取り出し、 — その絵を、対応してくれた何かスモモのように柔らかな紳士に見せ、この紳士が、具体的に、しかし不審げな視線を彼に向けて、こう言ったとき、つまり「確かにパーゲルのものとお見受けします、 — 最良の時代の作品です。 — 売却されるご依頼主はどなたで、...」と言ったとき、ここでこの絵はどのような事情であれ、購入されるであろう、自分は条件を付けて良いと感じ取っていた。

それからこのスモモのような柔らかい男は、 — パーゲルの答え、「私は自分の委託で売却します」に対して、 — 経営者を呼んだ。経営者は軍服の男に対してさほど驚かず（この時代にはとんでもなく惨めな姿の者達がとんでもなく高価なものを売るものであって） — この経営者はただ手短かに言った、「その絵を向こうへ置きなさい、 — 勿論それは承知している、マイントツ博士。家庭所有のものだ。全く尋常でなく立派なパーゲル作品だ。 — 時にパーゲルは自らをも凌ぐ。そんなに度々ではないが、 — 三回か四回かな。...大抵は私には愛らしすぎる。滑らかで、人当たりがいい、 — だろう」。

彼は突然ヴォルフガングに向かって言った、「しかし貴方はこれには関心がない、そうですか。ただ金が欲しい、そうなんですか。できるだけ沢山の金を、ですか」。

この突然の攻撃でパーゲルはすくんだ。彼はゆっくりと両頬に赤みが差すのを感じた。

「私は息子です」と彼はできるだけ平静に言った。

それで十分であった。

「幾重にもお詫び申し上げます」と商人は言った、「これはうかつなことでした。お目もとで分かったに違いないのですが、 — 他はともかく、お目もとでは。お父上殿はこちらによくお見えになりました。そうです、車椅子に乗って、絵をよく御覧になられた。絵を御覧になるのが好きでした。 — 貴方も絵を御覧になるのが好きですか」。

またしても突然の不意打ち。 — これも本来攻撃に当たる。少なくともヴォルフガングはそう感じた。彼は自分が母親も許から持ち去ったこの絵が素敵な絵か考えたことがなかった。根本的にこの画商は全く正しく推察している。彼が「息子」であろうと、息子にとっては単に金だけが、 — 勿論ペーターのための金だが、問題なのだ。

自分は現実にも評価通りの者にすぎないという少しばかり悲しみの混じった怒りがヴォルフガングの中に生じた。

「いや、見るのは好きです」と彼は不機嫌に言った。

「素敵な絵です」と画商は熟考して言った、「私はすでに二回、いや三回見たことがあります。私が見つめるのを、貴方のお母上は好まれなかった。 — お母上はこの売却に同意なさっていますか」。

またしても攻撃だ。パーゲルは苛立った。一枚の絵に何と面倒なことだ。半平方メートルもないカンバスの絵なのに。絵というものは、見たいと思うとき、見ればいいものである。見なければならぬというものではない。少しも必要ない。絵なしに人は生きることができようが、金なしには生きられない。

「いや」と彼は邪悪に言った、「私の母はこの売却には全く同意していません」。

画商は彼を丁重に見つめていたが、何も言わず待っていた。

「母はこの」(平静さを装っていた)「品をあるとき、私にプレゼントしました。家族間で様々な品をプレゼントするようなものです。私は丁度金が必要になったので、これを思い出したのです。私は」と彼は強調した、「私の母の意志に反して売却します」。

画商は黙って聞いていた。それからさりげなく、ただ明確に冷静に、「そうですね。分かります。勿論」と言った。

いつの間にか消えていたかのスモモのように柔らかな男、マインツ博士がまた現れた。画商はこの美術史の助手を見つめた。助手はこの視線に答え、短く頷いた。「いずれにせよ」と画商は言った、「貴方のお母上は売却に何の反対も称えていません」。パーゲルの問い質す視線に対して言った、「私はたった今、電話させたのです。いや、信用していないからではありません。私は商売人です。用心深いのです。面倒なことを好みませんので、...」。

「それで支払われますか」とパーゲルは短く、立腹して言った。

彼の母は電話口で一言言えば、売却を阻止できたことであろう。母はそうしていなかった。 — ヴォルフガングは最終的な決裂を感じた。彼は自分の道を行けばいい、今や永久に彼の道は一人つきりになる。母は何の関心もない。

「私は」と画商は言った、「千ドル出します。これは760,000,000マルクになります。

— その絵を私の仲介になさって、私とその絵をこの店に掛け、貴方の委託での販売という形になさいますならば、私はもっと高額を得ることになりましょう。しかし私の聞いたことに間違いなければ、貴方は今直ちに金が入用なのでしょう」。

「即刻です、今この時に」。

「それでは、明日早朝と申しましょう」と画商は微笑して、「これも迅速なうちです。私は貴方の望まれる所に、使者を派遣致します」。

「今です」とパーゲルは言った、「この時間です、やむを得ず、...」と彼は打ち切った。

画商は彼を注意深く見つめていた。「私どもは現金在高をすでに銀行に送りました」と彼は、子供に何かを説明するかのように、親切に言った。「私は夜の間、現金を店に置かないのです。しかし明日の早朝ですと、...」。

「今なのです」とパーゲルは言って、手を絵の枠に置いた。「さもないと売却はなかったことになります」。

いや、パーゲルは状況を正しく把握していた。確かに画商は、母親の最愛の絵を奪って来たこの反抗的息子に不同意であったが、確かに、このことを知ってから、会話の熱気を冷静なものとしていたが、それでも一瞬たりとも遅滞せずに、この縁を、どんな不同意であろうとも、利用し、この絵を購入せずにはおくまい、と。この大きな、確実な、金持ちの黒いアッシリア人風髭の男も、やはり皆と同じように、弱みがあった。彼の前で恥じ入るいわれは、一切ない、 — 逆だ。自分、パーゲルは売却しなければならない。しかし

この偉い男は少しも購入する必要はないのだ。

「私は」とパーゲルは落ち着いて言った、「全額を三十分で頂かなくてはなりません。今晚その金が必要なのです。明日早朝ではいけない。買い手は他にもありますし、...」。

画商は払い除ける手の仕草をした。いずれにせよこの絵は他の画商には譲れない。

「その金は用意しましょう。どうしたものか、まだ分かりませんが。しかし用意します」。彼は、一瞬、助手のマインツに囁いた。彼は頷き、出て行った。

「私と一緒に来てください、パーゲルさん。いや、その絵はここにそのまま置いていてください。私が購入しました」。

パーゲルはこの男の仕事部屋に案内された。大きな、ほとんど陰気な部屋であった。ただどこかの未知の画家の大きなタッチの木炭画が幾つか壁に掛かっていた。

「どうぞお掛けください。あちらでも構いません。ここに煙草があります。手の届くところにウィスキーとソーダ瓶を置いておきます。ひよっとしたら」...微かに嘲笑して...「三十五分もかかるかもしれません。それじゃ、ごゆっくりどうぞ。お入り」。

さて次々に入って来たのは、店の従業員達であった。一 大学で教育を受けた美術史家から、すでに夕方の仕事に掛かっていた、全く学的素養のない店の掃除婦に至るものであった。マインツ博士が事情を説明していた。彼らは一言も言わずに、店主の書き物机に近寄って、服のポケットやチョッキのポケット、財布や小銭入れから現金を取り出し、数え上げ、店主が書き留めた。「マインツ博士、百万と435,000。ズィーベルト嬢[さん]、260,000。プロッシ嬢[さん]、733,000。有り難うございます、プロッシ嬢[さん]、...」。この店の店主と従業員の間には良好な関係が築かれているに違いなかった。誰もが一言も言わず、自明な感じで、好ましいものであった。彼らはひよっとしたら今晚予定していたことを断念したかもしれない。彼らは速記タイピスト嬢や簿記係、画廊の奉公人であった。彼らは時に安楽椅子の殿方に視線を向けた。彼はそこでウィスキーソーダを飲んで、煙草を吸っていた。敵意ある視線といったものではなく、全く無関心な視線であった。

何故みすばらしい軍服のこの男がかくも急いで金を必要としていて、自分達が夕方の楽しみ事を断念せざるを得ないのか、それは彼らにはどうでも良かった。一 店主が買おうと願っている一枚の絵が、再び店から持ち去られることになること、それはどうでも良いことではなかった。金を提供し、数え上げ、記録することは、その双方にとって、とても自明なことであった。一 店主の側からも何の懸命な謝罪も、安価な冗談も、当惑した説明もなかった。一 それでまさにこの自明性故に、パーゲルはほとんど、釈明して、こう詫びたい気持ちになった。私は本当に今晚のうちにその金を必要としているのです。つまり私の恋人が牢獄にいて、私はやむを得ず、...。

いや、彼は本来何をしなければならぬのか。いずれにせよ、すぐに金を得ることだ、沢山の金を。

ヴォルフガング・パーゲルは何も言わなかった。

「待って、ビエルラ嬢[さん]」と画商は言った、「あなたの小銭入れにまだ50,000見えます。一 済みません、しかし今晚はすべてのマルクを掻き集める必要があるのです、...」。

当惑してブルネットの美女は何か乗車代のことを口ごもった。

「勿論乗車代は要りません。マインツ博士が仕事仕舞いするとき、二、三台タクシーを玄

関に呼びます。運転手が、お望みの所に乗せて行きます」。

ゆっくりと紙幣の固まりが書き物机の上で増大していった。画商は自らの財布を引っ掻きまわし、それを空にしなから、マインツ博士に不満げに言った、「新聞を読んだり、人々の言うことを聞いていると、皆金が溢れているようだ。すべてのポケットに見られ、すべての手の中でざわざわ音立てているという。ここに、貴方と私を含めて、二十七人が携帯している分がある。しかしここには平時の金で、七百マルクもない。滑稽に誇張された、この時代の出来事だ。人々がとにかく、多くのゼロの前にある数字はいかに乏しいものであるか悟ってしまえば、魔法は解けよう」。

マインツ博士は若干小声で囁き、素早く言った。

「そうだな勿論、すぐにここから電話し給え。私はその間妻の許へ行く。きっと金が見つかるだろう」。

マインツ博士がどこかのノルテ支配人殿に電話している間、この殿方は本来今晚中に二百五十ドル紙幣を得る見込みだが、しかし今となつては明日早朝まで待つて貰うことにする話であったが、パーゲルは自分の要求がこの店に何という混乱をいつになく引き起こしているか考えていた。しかしながら、一 この混乱でさえ何ときちんと展開しているかと一 不思議に納得していた。こっそりと、自明な風に、一 車はドアの前で待機し、従業員はそれでも、自分の望むところに向かう。一枚の紙に綺麗に個々人の額が記入される。...混乱が生じている間に、すでに万事が、その混乱をできるだけ短時間にまた片付けようとしている。

私は、とパーゲルは陰気に考えた。同じように混乱を引き起こしながら、それを片付けることを一度も考えてこなかった。混乱は次第に大きくなり、自分が考えたこともない領域に拡大した。今や私の許ではすべてが混乱だ。もはや私の許では何も秩序だったものがない。

一瞬彼は自分がよくペートルアに対して、トゥーマン夫人がコーヒーを持って来ないうちに、朝、服を着るよう要求していたことを思い出した。

私は自分ととりわけ彼女に対して、何か見せかけを演じたのだ。掛け布団をまとったところで、混乱は秩序とはならない。逆だ。混乱はもはや弁護できない混乱となる。偽りの、臆病な混乱となる。ペーターはそれで何か分かったのだろうか。彼女は一体どう思ったのだろうか。だから、我々が互いに結婚することが大事と思ったのだろうか。それはやはり彼女の場合、秩序への願いだったのだろうか。いつも彼女は一言も言わずに、私が提案することをした。根本的に私は彼女が考えていたことを何一つ知らない。...

画商は笑いながら、厚い一束の紙幣を振りながら、戻って来た。

「今晚は私のところでは、皆が家に残る。私の妻は有頂天だ。何かすさまじい初演に行つて、それに続き、すでに今や一廉の食用蛙に膨張した詩人のパーティーの予定だった。我々がもはや行けなくなって、妻は喜んでいて、妻はすっかり感激して、我々はすっかり一文無しになったと全世界に電話している。一 明日、私は新聞で私の支払い停止を読むことになる。一 それで貴方の方は、博士」。

マインツ博士も上手く行つたと判明した。ノルテ支配人殿は自分の250ドルを明日早朝まで待つことにするというのであった。

「どうぞ、パーゲルさん」と画商は言った、「千ドルです、一 760,000,000マルク。

しかし勿論」と彼は時計を取り出した、「三十八分かかってしまいました。八分間のお詫びを申し上げます」。

なぜこの男は私をそもそも嘲笑するのか、とパーゲルは立腹して考えた。何のためにその金を必要とするのかとむしろ尋ねるべきであろう。すぐに金が必要な状況に追い込まれることがあるのだ。彼の中で一つの声がした。確かにこのような状況に追い込まれることはあろうが、しかしまた責任の有無の問題もあろう、...阿呆な警察のやり方に責任を負えと言われてもと彼は立腹した。...

「若干紙幣が多ございます、時代の流れに合わせまして」と画商は微笑した、「それを小荷物にして紐をかけさせましょうか。むしろポケットに入れますか。外は雨が強うございます。お車に乗られることでしょうか、..私どもの玄関を出て、すぐ右手に、ホテル、エスパラーデの前に,,それとも一台呼びましょうか」。

「いや、結構です」とパーゲルは不機嫌に言って、紙幣を強引にポケットに入れた、「歩いて、...」。

かくて彼はすでにケーニツヒ通りを過ぎ、かなりずぶ濡れになって、両手を両外側ポケットにかざして広げた。母のように彼に対して意地悪のことをしようと、あるいはこの画商のように嘲笑的に振る舞おうと、あるいは更にペーターのように困窮しようと、一自分は全く、好きなように、しゃにむに進むのだ。彼は金に手を付けない。彼は車に乗ろうと思わない。たとえ自分のポケットが金で弾けても。自分が望まなければ、雨が降ろうが、槍が降ろうが、自分に強制はできない。

彼は今や、ペートラがいる交番に直行しようとしなかった。まずはとにかく、トゥーマン夫人の許に一調べるために赴いた。彼は後にも先にも、人生では万事、時間があると確信していた。彼は一頭のラバであった。ぶたればぶたれるほど、彼は片意地になった。

しかしそれとも一ひよっとしたら自分はただ、交番で知るであろうことに不安を抱いているのだろうか。この惨めな状況にあるペートラと再会したとき、感ずるに違いない羞恥を恐れているのだろうか。

吟味しながら、彼はアレクサンダー広場を横切って、ランツベルク通りへと折れて行った。彼はペートラがもっと喜ぶのは何であろうかと集中して考えていた。葉巻店であろうか、花屋であろうか。それとも更には、アイスクリーム・パーラーであろうか。

42

交番のペートラ

警察巡查長のレオ・グーバルケは確かに一公務のときであろうが、非番のときであろうが、一攻撃や些細な憎まれ口、嫌がらせに傾くような男ではなかった。その口許に権力の言葉、「服従するか死ぬかだ」を有するすべての男にとって、危険極まるかの誘惑に、彼は決して乗らなかった。それでも家とか公務中に時に、どの人間の自尊心にも免れがたい些細な卑俗な思いが過るとしても、彼を誘惑するのは、常に秩序や几帳面さへの過度なセンスの方であった。

このセンスのために彼は娘ペートラ・レーディヒをゲオルゲ教会通りの門道から連行す

ることになったのであり、この同じセンスのために、やはり彼の警察署長の非難に満ちた問いかけ、つまり「いや、何ということだ、グーバルケ。選りに選って貴方が二十分の遅刻とは」に対して、直立不動で告げたのである、「娘を一人逮捕致しました、一 賭博者達と関係しております」。

この後文は、遅刻していなかったら述べなかったであろうもので、一 というのはこのペートラ・レーディヒに何か悪さをする気は毛頭なかったからであるが、一 これは交番が、差し当たり数時間の間、この逮捕に関して耳にした唯一のものであった。彼は彼女を交番のベンチに座らせて、何か食べ物を用意する心積もりであった。その後、本来この娘にとって何が肝心であるか、夕方の時の経過の中で明らかになり、どこかの救護協会からか、二、三枚の服を得て、この娘に公序良俗について真面目な説教を垂れた後、再び娘は生活に戻っていたことであろう。

この善良な意図を遂行する代わりに、グーバルケ殿はこう告げた、「賭博者達との関係がある」と。単に善意のせいで、単に同情からと弁解していた遅刻は、几帳面さの欠如とされた。賭博者云々のこの後文は、几帳面さの欠如から、公務執行の必要性を生み出した。この後文が、二度と回収不能となって、彼の舌尖からこぼれ出るこの瞬間にまで、グーバルケは娘ペートラに、彼自身、単に女達の陰口で承知していた彼女の恋人の賭博癖との何らかの共犯関係を押し付けようとは、夢にも思っていなかった。しかし人間は弱い被造物である。一 そして大抵の 一 男達や女達は 一 舌尖が弱さの最も弱い点である。弁解する必要上、グーバルケはペートラの運命を賭博者の運命と混ぜ込み、そして単にそれをもっともらしくするために、賭博者が複数の賭博者とされた。

巡査長レオ・グーバルケがこの瞬間、自分がペートラ・レーディヒにこの一つの文で添加した影響範囲を少しも見通していなかったことは、全く確かである。彼は急いでピストルをベルトに収めて、ゴムの棍棒を留め、大急ぎで小フランクフルト通りの自分の同僚達に合流しなければならないとだけ考えていた。同僚達はそこで何らかの反乱ギャング達[ベルリン・マフィア、印章指輪団]と揉み合っていた。彼は急いでいたので、交番のその娘に、外出の際、一瞥も与えなかった。今一度彼女のことを思い出したとしても、きっと悪しき良心はひとかけらも見られなかったであろう。いずれにせよ彼女はとにかく街路から連れ去られ、安全な交番にいるわけである。遅くとも二時間したら自分は戻って来て、この話しはきちんと片付けられるであろう。

しかし残念ながら巡査長レオ・グーバルケは二時間の後、フリードリヒスハインの病院ベッドで瀕死の状態にあった。邪悪な必殺弾で内蔵がぐちゃぐちゃにされ、刻一刻とはなはだ痛々しく、はなはだ緩慢に、かくも清潔な、かくも几帳面な男には耐えられない、無秩序極まる、不潔この上ない死を迎えていた。ペートラ・レーディヒの事件は彼の影響が及ばなくなってしまった。

瀕死の者はそれでもこの事件に影響を与えていた。二時間して、グーバルケ死傷の知らせが交番に伝えられ、騒ぎとなるまで、ペートラ・レーディヒはまだかなり落ち着いて、煩わされずに過ごした。些細な偶発事を除いて、特段のことは彼女の身に生じなかった。どこかの取るに足りない制服の男が 一 善良でも意地悪でもなく 一 彼女を小さな独房に押し込んだ。ほとんど動物園の動物の檻に見えるもので、三方の固い壁と、四番目の監視室の側の、格子棒付きの開かれた面があった。自分に何か食べ物を持って来て欲しい、

警察官様が約束なさいましたもので、何でも構いませんという彼女の依頼にこの取るに足らぬ男は最初ぶつくさ言っていた。ここではそんなものは準備していない、アレクサンダー広場へ連行されるまで、待たなければなるまい、と。――しばらくしてから彼はそれでも乾いたパンの強固な端切れと、一杯のコーヒーを持って現れた。両方を彼は、鍵を開けずに、かなり広い格子棒の間から渡した。

半ば飢えたペートラにとって、まず滋養を摂ることほど合理的なことはなかったであろう。古く、とても固いパンの端切れは、小さな破片を嚙むためには、長いこと咀嚼する必要があった。最初彼女はこのゆっくりとした食事の際、絶えず新たに波状の悪寒に襲われた。胃は、食事を受け付け、またその活動を再開することを拒んだ。腰掛け板にうづくまって、目を閉じたまま頭を独房の隅へ押し付けて、衰弱の発汗に次々と追われながら、ペートラは英雄的にこの悪寒に対処した。絶えず新たに彼女は食べ物を胃の中へ押し戻した。

私は食べなくてはいけない、と彼女は鈍く、果てしなく疲れて考えた、しかし少しも挫けなかった。私はただ自分一人のために食べているのではないのだから。

三歳児でも五分で片付けていたであろうこのパンの端切れの消化は、ペートラの場合、ほぼ三十分要した。しかしこれを全部食べてしまうと、彼女は身体に温かい気持ちが満ちるのを感じた。これは心の幸せな感情にとっても近いものであった。

彼女はそれまで周囲に何も気付かなかったが、今や、ほとんど完全に回復して、監視室の生活を注意深く見守った。この世界は彼女にとって何の恐怖ももたらさなかった。彼女が馴染んで来た世界からの者にとって、貪欲も卑俗さも、悪徳も醜陋も恐怖ではなかった。

――こうしたことすべては人間的な生活の一部であり、この人生の一つの表面であった。勿論ヴォルフガングの微笑や抱擁も、新しいドレスへの喜びも、花屋の窓も生活の一部であったようなものである。

次の三十分の間でも、彼女が恐怖しなければならないような格別なものは生じなかった。一人の尖った鼻の、飢えたように見える若造が連れて来られた。この若者は、小声の聴取から判明したように、商店で一足の靴をくすねようとしたのであった。かなり醜陋した無銭飲食者がいた。ショールを掛けた不幸そうに見える一人の女、彼女は一見して営業用[プロ、玄人]の家具付き部屋を借りながら、そこで何かをくすねようとしたのであった。金張の時計を純金製として売り、十分に買い手を見いだしていた一人の男。さばけたのは、今回に限り売る品は窃盗品だと称していたのであった。

こうしたすべて、休息へ向かう一日の波によって監視室へ打ち寄せられた漂着物は、尋問を泰然自若とやり過ごして、おとなしく自分の檻へ向かい、檻の戸が制服の男によって無造作に閉められた。

それから甲高くなった。二人の警官が一人の荒れ狂う、完全に醜陋した女性を連れて来た。その女性は警官の間を歩くというよりは、むしろ運ばれていた。警官は下品な悪罵を、ほとんど好意的に悠然と聞いており、この娘が同じく酔っ払った伊達男[名誉の騎士]から財布を「抜き取った」と告げた。

三人目の警官が、青白い、愚鈍に見える伊達男を連れて来た。この男は自分の身に起きたことを明らかにほとんど理解していなかった。彼は自分の体の中で生じていることにほぼ集中していたからである。彼はとても具合が悪かった。

娘は酔っ払った金切り声で、すべての聴取を拒んでいた。黄色い、ただ小声の書記官は、

彼女を冷静にさせることができなかった。再三彼女は長い、赤く塗られた、しかし汚れた鉤爪を、警官や書記、更には自分の伊達男の顔に向けていた。

ペートラ・レーディヒはこの娘を見てはなはだ驚いた。自分が零落したと思い、今日でも恥ずかしく思う彼女の人生の中のある時代を思い出させた。彼女はこの娘の名前を知らなかったが、しかしタウエンツィーン通りや、クーアフルステンダム、つまりより上等の西地区での、酒場が閉まってからはアウクスブルク通りでの、その娘の活動を知っていた。彼女は自分のそのこの猟区では単に灰鷹[チュウヒ]と呼ばれていた。多分はその細く、曲がった鼻と、すべての競争相手の女への放恣な憎悪のせいで、そう呼ばれていた。

ペートラがヴォルフガングに、自分を一緒に連れて行って欲しいと頼む以前のまだひどかったかの日々、彼女は、金に困窮する余り、時折、(ほんの稀にであったが)、自ら金払いの良い殿方を追い求めることがあって、二回か三回、この灰鷹と衝突したことがあった。その娘は当時まさに監視下に置かれていて、この時から「営業用[プロ]」の女達の一員でないすべての女に、燃えるような、甲高い、どんな卑劣さをも辞さない憎悪をぶつけていた。彼女の「猟区」を荒らして、殿方に話しかけ、いや単に視線を向ける小娘を見つけようものなら、彼女はまず、警察にこの出来事を通告しようとした。これが成功しないと、あるいは、保安警察が近くにいないと、伊達男の目にその「縄張り荒らし女」が低級に見えるよう強引に行い、劣等な主張を次々にエスカレートさせて発した。最初は単に泥棒女、それからやがて、性病女、疥癬病み、等々となるのであった。

すでに当時この灰鷹の最後の武器が吠えるような金切り声であった。ヒステリーの憤怒の叫びで、コカインとアルコールのせいで、得体の知れないものに高められていた。 — 彼女がそれを始めると、どんな伊達男も退散した。

ペートラは、自分が特段にこの灰鷹の不興を買っていて、一段と強い憎悪でこの女から迫害を受けているといつも感じていた。あるときは、現実の攻撃を、単に夜の通りをパニックになって逃れながら、ヴィクトリア・ルイーゼ広場の下にまで避難したことがあった。結局その半円の柱の影に隠れ場を見いだしたのであった。しかし別な時にはこれほど幸運ではなかった。灰鷹は彼女を、彼女が一人の殿方と乗り込んだタクシーから引きずり下ろした。そして二人の間で諍いが始まって、(この殿方はその車で逃げ)、ペートラの服は千切れて、傘が壊れたのであった。

こうしたことすべては、かなり前のことで、ほぼ一年前で、 — あるいは一年以上前であったろうか、 — その後、無限に多くのことをペートラは経験した。それ以来、別世界の門が彼女のために開かれていた。しかし昔ながらの不安を抱いて、彼女は昔日の敵の女を見つめた。この女もそれ以来変わっていた。しかしもっと劣化していた。すでに猟区が豊かな西地区から貧しい東地区に移っていることが、灰鷹の魅力の零落を十分に告げていた。多分、主に、有毒な酩酊剤、 — コカインとアルコール — これが若い女に害をもたらしたのであろう。昔はまだ穏やかな、丸みのあった頬が、痩せて皺になっており、柔らかな赤い口は、裂けて、乾いていた。すべての動作がせかせかして、混乱している。

彼女は叫び、よだれを飛ばし、息も吐かず罵っていた、 — それから黄色い書記官は何かを問い、彼女はまた発した。あたかも絶えず、神秘的に汚辱が彼女の中で更新されるかのようであった。とうとう書記官は二人の警官にある仕草をして、二人は娘を取り調べ

のテーブルから檻の方へ向かわせた。一人の警官が静かに言った、「それじゃ、来なさい。眠って酔いを覚ませ」。

彼女はちょうどまた罵り始めたが、その視線が格子棒越しにペートルに落ちた。ガクンと彼女は立ち止まって、勝ち誇って叫んだ、「このアマをようやく捕まえたんかい。やれやれ、この忌々しい淫売は、 — もう監視下に置かれているんかい。豚だよ — ちゃんとした娘からすべての殿方をかっさらって、その上病気を移すんだ。 — この売女、あばずれ、通りを歩いてさ、巡査長さんよ、 — 昼も夜も — 体は病気だらけで、屑の豚、この女」。

「来なさい、来なさい」と警官は落ち着いて言い、彼女が巻き付けていた手の指を一本一本ペートルの独房の格子棒から外した。「少し眠った方がいい」。

書記はテーブルの背後から起き上がって、間近に寄って来た。「むしろ奥の方へ連れて行ってくれ」と彼は言った、「さもないと自分の言葉も聞き取れない。コカイン — これがまず抜けたら、濡れ雑巾のように潰れるだろう」。

警官達は頷いた、がっしりして二人の間でその娘はわめき、手当たり次第に発散する無意味な憤激で、まだ姿勢を保っているだけであった。まだ肩越しに、そしてとうに目に見えなくなってからも、彼女はペートルに対して罵っていた。

書記官はゆっくりとその黒っぽい、疲れて、病んだ視線を（彼の目の白っぽいところも胆汁の黄色であった）ペートルに向けて、小声で尋ねた。「あの娘が言ったのは本当かい。通りで拾っていたのかい」。

ペートルは、すぐに決心して、頷いた、「はい、以前には。一年も前のことです。今はどうに止めています」。

書記官も頷いた、はなはだ無関心であった。彼は再びテーブルの許に向かった。しかし今一度立ち止まり、振り返って尋ねた、「本当に病気持ちなのか」。

ペートルは威勢良く頭を振った、「いえ、一度もありません」。

再び書記は頷き、すっかりテーブルの許へ行き、自分の中断された筆記に取りかかった。

監視室の生活は更に続いた、ひよっとしたら逮捕者のかなりが、不安に、そして落ち着きのない心配に陥り、ひよっとしたら酩酊者は悪夢にうなされたかもしれない、 — 外面的には万事、滑らかに、平静に、無関心に過ぎた。

六時過ぎ、すぐに、巡査長のレオ・グーバルケが腹部を撃たれて見込みがないという電話の知らせが入った。多分真夜中まで保たないであろう、と。そのときから警察署の顔つきが変わった。絶えずドアが開閉され、市民服や制服の役人がずっと出入りした。互いにひそひそと会話が交わされた。三番目の者が加わり、呪い声を発する者がいた。それから六時半にグーバルケの同僚が戻って来た。両ギャング団との警官の戦いに彼はまさに参入しようとして、致命傷の弾を受けたのであった（そもそも発砲された唯一の射撃であった）。囁き声、ひそひそ話しが盛んになった。テーブルが叩かれ、一人の警官は陰気に隅に立って、絶えずそのゴムの棍棒を上下に揺すった。囚人達に向けられる視線は、もはや無関心なものではなく、陰鬱なものであった。

しかしペートル・レーディヒに注がれる視線は、全く格別に重々しいものになった。書記はすべての人に、これが「レオの最後の公務執行」であると語った。グーバルケはこの娘を逮捕したが故に、二十分遅刻したのである。彼が定刻に来て、他の者達と一緒に出動

していたら、ひよっとしたら致命傷の弾は、一 いやきつと、一 当たらなかったことであろう。

重傷の難儀な臨終者は今やひよっとしたら自分の妻や子供達のことを考えていたかもしれない。ひよっとしたら痛みの地獄の中で、少なくとも自分の娘達が自分と同じほどの背丈に成長したことを喜んでいたかもしれない。自分はこの世に自分の存在の痕跡を、つまり自分が普通と見なしてきたものの小さな印を残した、と。あるいは、死の予感に怯えながら、自分はもはや生涯、綺麗な事務室に座って、きちんとしたリストを整える生活を送ることはないであろうと考えていたかもしれない。あるいは市民菜園のことを考えたかもしれない。あるいは、葬儀共済の人々は、現今の貨幣暴落のインフレの中で、きちんとした葬儀を出せるほど支払い能力があらうかと考えていたかもしれない。この臨終者は色々なことを考えたかもしれないが、一 しかし彼が「最後の公務執行」のペートラ・レーディヒのことを考えたか、その蓋然性ははなはだ低い。

しかし臨終者はこの事件を支配していた。彼はこの事件を他のすべてと区別することになった。同僚の目は、もはや取るに足りない若い娘が向こうのベンチに座っているとは見なさなかった、一 臨終者が無駄に彼女のせいで二十分遅刻したことはあり得ない。グーバルケの最後の公務執行は重要なことであつたに相違ない。

灰色の巡査髭の重たい、大柄の、悲しげに見える警察署長は部屋に入って来て、書記のテーブルの横に腰掛け、目で合図しながら尋ねた。「あの娘がそうか」。

「あの娘がそうです」と書記は小声で証した。

「賭博者達と関係しているとだけ私に言った。それ以上は何も言ってない」。

「私はまだ尋問していません」と書記は囁いた、「彼が戻って来るまで、待とうと思ったのです」。

「彼女を聴取してくれ」と警察署長は言った。

「先ほど大騒ぎを起こしたあの酔っ払いの女は、あの娘を知っていました。あの娘は通りで拾っていたそうで、私に認めもしました。勿論最近はしていないと主張しています」。

「そうか、彼の目は鋭い。少しでも異常があると、何も見逃さない。彼は余人をもって代え難い」。

「皆にとって損失です。大変勤勉で、立派な同僚でした。出世者じゃないし」。

「そうだな、一 皆にとってだな。一 彼女を聴取してくれ。彼の言った唯一のことは、何か賭博者達と関係があるということだ、忘れるな」。

「確かに覚えています。忘れましょうか。厳しく問い詰めましょう」。

ペートラはテーブルの許に案内された。すでにしばしば視線が向けられ、彼女の独房に立ち止まることが多いことから、何かが生じていると彼女が察しなくても、今や黄色の書記官が彼女と話す際のやり方から、ここでの気分が変化していることに気付いたに違いない。それも彼女にとって不利な具合に。人々が彼女のことを悪く思うような何かが生じたに違いない、一 ヴォルフと関係しているのであろうか。こう不審に思って、彼女は不安になり、疑心にとらわれた。一回か二回、彼女は、「私どもの家に一緒に住んでいらっしゃる」好意的な巡査長について言及した。しかし警察署長も書記もこの言及に対し、陰気な沈黙を保っていたので、彼女は更に恐れを抱いた。

聴取がただ彼女一人にのみ関する限り、従って真実を述べる事が出来る限り、まだ何

とかなった。しかし質問が彼女の恋人の収入源に及び、「賭博者」という言葉が生ずると、彼女はひどく困惑し、混乱した。

彼女は躊躇わず認めていた、何度か「例えば八回から十回、正確にはもはや覚えていませんが」通りで殿方に話しかけ、一緒に付いて行き、その代償に金を貰ったことがある、と。しかし彼女は、ヴォルフガングは賭博者であり、金を賭けているとか、そしてこの賭博が長いこと二人の主な収入源であると認めたくなかった。

彼女は賭博が禁止なのかすらも、全く定かには知らなかった。ヴォルフガングが少しもそのことを隠さなかったからである。しかしむしろ彼女は用心して、嘘を付いた。いや、この点に関して、臨終の男は彼女にひどい仕打ちをしていた。「賭博者」という言葉は、ベルリンの東側では西側とは全く別なことを意味していた。通りを拾って行き、決まった恋人を持ち、その上、「賭博者達と関係のある」一人のいかがわしい娘、これは東側では単にトランプ詐欺師、つまり三枚トランプ仕掛けの百姓騙しの恋人に思われるのであった。二人の警察の目に彼女は、恋人のために囚として、むしり取るべき犠牲者を罠に誘う娘と映っていた。

ベルリンの西側の交番では、賭博者へのこの言及は全く別の響きを持っていただであろう。西側では、そこでは誰もが承知していたが、単に賭博クラブに人々は蝟集していた。ほとんど生活世界の半数が、確かに半数世界の全体が、このクラブに出掛けた。警察の賭博担当部局は多分夜ごと、倦むことなく、これらのクラブを追求していた。しかしこれは一種シシュフォスの仕事であった。十のクラブが閉じられたかと思うと、二十の新規のクラブが弾けた。関与した賭博者達は処罰されなかった。さもないと、西側の半数の住民がいなくなったであろう、経営者や賭博台係員が逮捕され、すべての見つかった現金が押収された。

自分の恋人は西側の賭博クラブへ出入りしているとペートラが白状していたら、この件は東側の警察にとって、何ら関心を更に引くことはなかったであろう。そうしないで、彼女は言い逃れし、無知を装い、嘘を付き、その嘘の証拠を二回、三回掴まれ、どうしようもなくなって、全く沈黙した。

臨終の者が曖昧にこの事件を差配しているのでなかったら、多分この事件は片付いていたことだろう。さほど多く隠匿されているとは思えない。無器用に嘘を付き、嘘のたびに赤面し、言い間違ふ一人の娘は、すれっからの百姓騙しの仕掛け娘とは考えられない。そもそもひどい若造の助手たり得ない。しかしそれでも何か未知のこと、重大なことが潜んでいる可能性はある。ペートラは叱り付けられ、父親めいた警告を受け、ひどい結末を指示された。しかしどのようにしても彼女は白状しなかったので、自分の独房へ連れ戻された。

「七時にアレクサンダー広場まで移送だ」と署長は決断した、「記録にこの事件の重大性を指摘しておくように」。

書記は何ごとかつぶやいた。

「そうだな、若造を捕まえられるか調べてみよう。とうに姿を消したと思われるが。しかしいづれにせよ、ゲオルゲ教会通りへ男を一人送ろう」。

七時に警察の収監車が交番の前に止まると、ペートラも中に入れられた。雨が降っていた。彼女は座席で、敵の女、灰鷹の隣りに座ることになった。しかし書記の言った通りで

あった。コカインの酩酊は覚めて、この娘は完全に崩れ落ちていた。ペートルは移動の間、彼女を支えて、座席から落ちないように配慮しなければならなかった。

43

パーゲルはペートルについて新たなことを知る

ランツベルク通りから彼はゴルノー通りへ折れた。右手にヴァイン通りを、左手にラントヴェーア[後衛軍]通りを見て進んだ。更に行くと、右手にフリーダー通りがあり、その通りは二、三軒の家々がある小さな路地で、その隅に「大・洋酒バー」があり、そこにパーゲルはまだ入ったことがなかった。

ゆっくりと、不審げに彼はその階段を上がり、カウンターの許へ行き、一杯のベルモット[ワイン]を頼んだ。ベルモットは70,000マルクであって、フーゼル油の味がした。パーゲルは支払い、ドアの許へ行き、煙草を切らしていると気付いた。彼は戻って、小箱のラッキー・ストライクを頼んだ。しかしラッキー・ストライクはなく、代わりにカメル[ラクダ]があった。それも悪くないとパーゲルは考えて、カメルを買い、一本火を点け、更に一杯のベルモットを頼んだ。

しばらく彼はカウンターの前に立っていた。服が濡れていて、少しばかり寒気がした。フーゼル油の味のベルモットは寒気に効かなかった。それで、倍の高さの、ダブルのコニャックを頼んだ。しかしこれはおぞましい火酒の味がした。しかし今や彼の胃から、軽い温かさが上昇して来て、ゆっくりと彼の中で広がって行った。これは自分のものでない、身体的な温かさで、ペートルがパンの端切れをむさぼった後感じた寛いだ幸福のかの感情を伝えるものではなかった。

パーゲルは物憂げに立っていた。彼は、騒ぎ回る人影の臭う居酒屋を無関心に眺めていた。彼は、すぐに今、ペートルのために一步も尽力しないうちに、すべては駄目であると確信していた。この入念に守られて来た金が今や囓られることになっても、もはや何のこともない。いや、彼はむしろそれが流れ去り、散って行くことを欲していた。一 出来ることなら、自分が何か無理してしなくても、一 だって、金が助けになろうか。しかし金が助けにならないのであれば、一 何が助けになろう。いや、そもそもいつも助けられなければならないのであろうか。すべては全くどうでもいいのだ。

そのように彼は立っていた。ずっとそのまま立っていたかったことであろう。彼が一步踏み出すたびに、それは彼が下したくない決断へ近付けた。最後まで引き延ばしたいと思う決断である。彼は本来、一日かかって、ただ引き延ばすことだけをしてきたと思い付いた。まず金を得たら、何かをやろう、金を得たら、偉大に出発だ。今自分は金を得ている、一 そしてゆっくりと待機してカウンターの許に立っている。

斜めに、片耳の方に鳥打ち帽を被った一人の若造が、彼に近寄って来た。煙をクンクン嗅いで、一本煙草を請うた。「一本くれないか。甘いイギリス製には目がないのだ。いや、そうしないで、せめて吸い殻をくれよ」。

ヴォルフガングは軽く微笑して、一言も言わず頭を振った。若造の顔は突然陰気になった。彼は振り向き、去った。ヴォルフガングはポケットに手を入れ、ポケットの小箱から一本煙草を取り、鋭く叫んだ、「取りな」。そして若造に煙草を投げた。彼はそれを掴み、

短く頷いた。一　すると三人、四人の若者がパーゲルの周りに集まり、やはり煙草を請うた。彼は素早くカウンターで支払いをして、彼の太い紙幣束への若者達の視線を眺め、彼の許に迫って来る一人の若者を、出て行きながら、ぐいと肩で強く押した。

自分の住まいまでは後わずか三分ほどであった。今回実際要したのは、三分であった。彼はおまるマダムの許で呼び鈴を押した。呼び鈴が鳴ると、洋酒バーでの衝突から上昇して来ていた些細な活気がすでにまた消えていることに彼は突然気付いた。一　新たに果てしない悲しみに捉えられた。この悲しみは彼の中で、重たく煩わしく広がるように見えた。今日の午後の空のどんよりした雷雨の雲のようであった。

彼は廊下でおまるマダムの厭わしい引きずり足の音を、彼女の粘って脂ぎった軽い咳払いを耳にした。この物音はすでにまた彼の中の悲しみの雲を変えた。何かが一箇所に集まった。彼は自分がこの夫人に更に何かするであろうこと、生じたことに対して、何が生じたかお構いなしに、何か報復するであろうと感じた。

ドアが用心深く、ほんの少しの間、開いたが、しかしパーゲルは足で蹴って、すっかりドアを開け、びっくりした夫人の前に大きな彼が立つことになった。

「まあ、パーゲルさん、びっくりさせないでください」と彼女は嘆いた。

彼は物も言わず夫人の前に立っていた。ひょっとしたら、夫人が何か言うのを、起きたことについて話し始めるのを彼は待っていたのかもしれない。しかし多分夫人は恐怖を覚えて、夫人は一言も言わず、ただ両手で前掛けをいじっていた。

突然　一　パーゲル自身一秒前まで自分のなすであろうことを承知していなかったのであるが、一　暗い廊下の中へ入って行き、先ほどの洋酒バーでのように肩で金切り声の夫人をぐいと押し、躊躇わず、暗い廊下の中、自分の部屋に向かって行った。

金切り声のトゥーマン夫人が彼の後を駆けて来た。「パーゲルさん、パーゲルさん、ちょっとだけ待ってください」と夫人は興奮して囁いた。

「何ですか」と彼は尋ねて、さっと振り向いて、突然夫人の前に立ち止まった。それで夫人は新たに驚いた。

「おや、何をなさるのです。パーゲルさん、何のことか分かりません」。そしてまた彼が進もうとするので、すぐに言った、「ただ、またあなたの部屋を貸したのです。イーダの友の女です。その女の人が今、中にいます、一　一人ではありません。分かるでしょう。一　何故私をにらむのです。ヴィレムがいたらいいのだけど。だって中にあなたの品物は何もないし、警察にあなたの娘[ひと]は連れて行かれましたし、...」。

おまる夫人はまた話し始めていた。しかしパーゲルはもはや聞いていなかった。彼は自分の部屋のドアをさっと開けた。一　施錠されていても、強引に開けたことであろう、しかし施錠されていなかった。一　そして部屋に入った。

ベッドには半裸の一人の女性が座っていた、勿論売春婦である、一　それは彼が今朝まだペトラと寝ていた同じ狭い鉄のベッドであった。部屋には若者がいた。どこかの取るに足りないやつれたピッケルヘーリング[道化役、酢漬けニシン]で、丁度ズボン吊りのボタンを外していた。

「出て行け」とパーゲルは二人のすくんだ者達に言った。

トゥーマン夫人は戸口で嘆いていた、「パーゲルさん、お願いしますよ。泣きっ面に蜂です。警察を呼びます。ここは私の部屋で、あなたは支払っていません。私はぜにこが必

要です。 — いやね、ロツテ、話さないで、この方は狂っています。この人の恋人が警察に連れて行かれて、それで今この方、頭にきているのです、...」。

「黙っている」とパーゲルは鋭く言って、拳で若者の尻を殴った。「いいか、すぐに、私の部屋から出て行け、即刻だ」。

「お尋ねしたいのですが、...」と若者はハーハー言ったが、ただびくびくしていた。

「私は、...」とパーゲルは小声で、しかし明瞭に言った、「まさに私は、おもいきりぶん殴りたい気分だ。一分してこの娼婦と部屋から出て行かないと、...」。

突然彼は自分がもはや話せないと気付いた。彼は憤怒で全身が震えていた。確かに、この忌まわしい屑の巣穴を自分のものと宣言することを、ついぞ思ったことすらなかった。しかしこのくだらない澄ました若衆が一言でも抗弁しようものなら、まさにそう主張してやろう。

しかしこの若衆はその勇気がなかった。一言も言わず、臆病に急いで、彼はズボン吊りのボタンをかけて、チョッキと上着を探した、...。

ドアの所でおまるマダムが消沈して嘆いた、「パーゲルさん、パーゲルさん、分かりません。あなたは教養ある人間なのに。いつも仲良くやって来ましたよね。私は今日の昼娘さんに一個の渦巻きパンと一ポットのコーヒーを出そうと思っていました。でもイーダが我慢ならないと言って、...そもそもすべてイーダのせいです。あなた達に含むところはなかったのです。 — まあ、それが、 — 住まいに火を点けるのですか」。

パーゲルはお喋りに気を留めず、窓辺に立っていた。注意して、ぼんやりと、彼はベッドのその娘がそそくさとブラウスを着るのを見守っていた。それから自分がもはや煙草を吸っていないと気付いた。彼は一本の煙草を取って、それに火を点け、手の中の燃えるマッチを物憂く眺めていた。すぐ側にカーテンがあった。厭わしい、黄灰色のカーテンで、彼がずっと嫌っていたものであった。彼は燃えるマッチをそれに近付けた。縁取りの端が焦げて、反り返った。そしてそこから明るい炎が走った。

トゥーマン夫人とその娘が叫んだ。その男が彼に一步近寄ったが、躊躇って立ち止まった。

「そうだな」とパーゲルはそれから言って、カーテンを丸め込んで、そうして炎を消した。「つまりこれは私の部屋だ。トゥーマン夫人、請求はいくらです。月末まで払います、ここに、...」。

彼は夫人に金を渡した。若干のもので、二、三枚の紙幣、構わなかった。その小束をまたポケットに仕舞おうとしていたとき、その娘の悲しげに物欲しげな視線がそれに注がれているのに気付いた。この女に話しが通ずるのであれば、と彼は考えた。しかしこれは六束の金のうちの一束にすぎないと考えて、若干満足していた、 — 最も価値のない束だし、...。

「ほら」と彼は娘に言って、彼女にその束を差し出した。

彼女はその金を見つめていて、それから彼を見つめた。彼は彼女が彼を信じていないと分かった。「それじゃなしだ」と彼は平然と言って、金をまたポケットに収めた。「とても阿呆だな。掴んでおれば、自分のものになったのに。もう駄目だ」。

彼はまたドアの所へ行った。

「私はこれから警察へ行く、トゥーマン夫人」と彼は言った、「一時間したら私は妻と

またここに戻る。夕食の準備を頼みます」。

「分かりました、パーゲルさん」と彼女は言った、「しかしカーテンは、この分の支払いが必要です。一十五分前に更に一人警察があなたをお探しでした。私は話したのです、あなたは逃げた、と、...」。

「分かった、分かった」とパーゲルは言った、「私は今から行く」。

「それで、パーゲルさん」と夫人は彼の背後から急いで声をかけた、「私のことを悪く取らないでください。交番でお聞きになることでしょう。私はただ一言言ったのです。貴方らはまだ少しばかり未払いがある、と。すぐ私は何か署名しなければならなかったのです。でもパーゲルさん、取り消します。そのようなことはしたくなかったのです。すぐに交番に行き、撤回致します。私はしたくなかったのです。騙されたからと処罰申請とかは。でも警察の方がそうしろと言ったのです。すぐに行きますよ。でもまずはこの娘さんを住まいから出さなくては。こんな娘は駄目、家賃を入れませんから。それにあの伊達男、パーゲルさん御覧になりました、胸当てをボタンで留めて、...」。

パーゲルはすでに階段を降りていた。最後の所は犬どもに食われていた。トゥーマン夫人が騙されたからと処罰申請をしたのは全く仕方ない。これは自分には関係しない、単にペートルに関してであり、...

彼は再び振り返り、今一度上って、おまるマダムに向かって言った。夫人は階段の踊り場でまずは隣の女に出来事を伝えていた、「トゥーマン夫人、二十分して交番に来ないと、怒鳴りつけるぞ」。

警察事務室の黄色の書記にとってひどい一日であった。すでに朝方、起床時、恐れていた通り、正確に胆汁症発作が生じた。胆汁の辺りの鈍い圧迫、微かな吐き気が警告を発していた。彼はよく分かっていた。医者は何度も彼に伝えていた、病気外来に来て、治療を受けなければならない、と。しかし今日、既婚者の誰が、家族にインフレ後追いのわずかな疾病手当を受けるようにするであろうか。

さてグーバルケ事件に対する興奮で、彼は本格的胆石疝痛に見舞われていた。彼はアレクサンダー広場への七時移送用の書類をほとんどまだ仕上げられなかった。しかしトイレに腰をかかめて座ることになり、外では再三彼の名前が呼ばれた。彼は痛みの余り吠えたいことろであったろう。勿論病気のときは家に帰れる。警察署長の誰も、殊にこの署長は、それに文句は言わないだろう。しかし自分の仕事をかくも突然には放棄できない。まさに今は出来ない。今、仕事仕舞いとなった時、何千人もの社員や商人が路上に出て、何千軒もの酒場で、ネオンが輝き、娯楽や、熱気、不安からの酩酊が人々を拉致し、警察の主要業務が始まる。きっと十時に解放されるまで続くことだろう。

彼は今またテーブルの奥に座っていた。胆汁症発作の痛みは確かに止んでおたが、しかしその代わり極度に苛ついた状態が続いていると気付いて、案じていた。何に対しても怒りが湧いた。ほとんど憎悪して、彼は行商人の青白い海綿状の顔を眺めていた。この商人は許可証なしにスーツケースから出所のいかがわしい浴用石鹸を販売し、警察官にこれを咎められると、喧嘩を始めたのであった。私は気を確かに持たなければならない、と書記は考えた。気ままにしてはならない、だから彼を見つめてはいけない、...

「行商許可証を持たずに路上で品物を安売りしてはなりません」と彼は、できるだけ穏やかに、十回目言った。

「警察ではすべて禁止だ」と商人は叫んだ、「何でも駄目にしやがる。ただ許されているのは、飢えてくたばることだけだ」。

「私が法律を定めているわけではありません」。

「くだらぬ法律で、取り締まって、それで金を貰っているんだらう。ぼろ儲けた、こん畜生」と男は叫んだ。

男の背後、半ば左手に、若い、風采の立派な若者が、灰色の地の軍服を着て、立っていた。若者は率直な、まことに知的な顔をしていた。彼は書記に、爆発せずにこのような悪罵に耐える力を与えてくれた。「どこで石鹼を仕入れたのです」と書記は尋ねた。

「自分の糞を嗅ぎやがれ」と商人は喚いた。「おまえらは何にでも介入せんとすまんのか。我らのことをただ潰そうと思っている。死体にたかる虫けらだ。我らが皆くたばれば、おまえらは丸太りだ」。

一人の保安警察が彼の肩を掴んで、独房への廊下を押して行く間に、彼は更に罵り続けた。書記官は悄然として石鹼入りスーツケースの蓋を閉め、それをテーブルの上に置いた。「次の方」と灰色の地の軍服の若い男に向かって言った。

若者は額に皺を寄せて、顎を前に出して、荒れ狂う商人の搬送を見守っていた。この時、書記は、この顔は、自分が思っていたほど率直ではないと気付いた。この顔には反抗心が見られた。頑迷な頑固さが見られた。書記は引きつったような顔の表情について熟知していた。一人の制服着用者が一人の市民服のものに対して権力をかざそうものなら、この表情を浮かべる手合いである。このような男達は 一 権威に無駄な抵抗を生まれながらに試みる者達で、 一 その場合、赤くなり、少しばかり酔っている場合、格別にそうなる。

しかしこの若者は立派に自分を抑えていた。奥の独房への廊下の鉄のドアが再び閉まると、ほとんど息を吐いて、視線を移送から転じた。彼は若干窮屈そうな軍服の中で、一方の肩を揺すって、テーブルに近付き、少しばかり挑戦的に、かすかに反抗心を浮かべながら、しかし完全に礼儀正しく言った、「パーゲルと申します。ヴォルフガング・パーゲルです」。

書記は待っていた。しかし更に何も続かなかった。「そうですか」とそれから書記は言った、「御用は」。

「私はここに呼び出されていると思います」とほとんど苛立って若者は答えた、「パーゲルです。ゲオルゲ教会通りからのパーゲルです」。

「あ、そう」と書記は言った、「そうですね。私どもは一人の男を貴方の許に送りました。話したいと思ったのです、パーゲルさん」。

「で、その男の方は私の家の女将に、私に対する処罰申請への署名をさせたとか」。

「させたわけではありません。ほとんどさせる必要はなかったのです」と書記は訂正した。この若者とは調子を合わせようと固く決めていた。「私どもは処罰申請に格別関心を持っていません。もみ消します」。

「それでも完全に根拠なく私の妻が逮捕されています」と若者は激しく言った。

「貴方の奥さんじゃありません」と書記は再び訂正した、「独身の娘さんです、 一 ペートラ・レーディヒ、でしょう」。

「私どもは今日の昼、結婚しようと思ったのです」とパーゲルは言って、少しばかり赤くなった、「私どもの結婚予告は戸籍係に張り出されています」。

「逮捕は今日の午後になってからですよ。それでは正午には結婚されなかったのですか」。

「できなかった」とパーゲルは言った、「しかしすぐに遅れを取り戻します。今日の午前中は単に金がなかったのです」。

「分かりました」と書記はゆっくりと言った。しかし胆汁の痛みのために、それでも更に口に出た、「でもやはり独身の娘さん、でしょう」。

書記は黙った。そして目の前の緑色のインクの染みの付いたテーブル掛け[フェルト]を見ていた。それから左手の書類の山に手を入れ、一枚の紙を取り出し、それを見た。書記は若者を見ることを避けたが、再びこう言わざるを得なかった。「それで、根拠なく逮捕というわけではありません。違います」。

「女将の騙されたとかの申請のことであれば、一丁度支払いは済ませました。女将が十分以内にここに来て、処罰申請の撤回をするでしょう」。

「今晚は金があるのですか」と書記の驚かす返事があった。

パーゲルはこの件が何の問題があるかとの胆汁色の黄色い男に尋ねたかった。しかし彼はそうしなかった。その代わり彼は尋ねた。「処罰申請が取り消されられたら、レーディヒ嬢の釈放にもはや支障はない、そうでしょう」。

「支障は残るでしょう」と書記は言った。

書記はとても疲れていた。こうしたことすべてに疲れていて、とりわけ彼は諍いを恐れていた。彼はベッドに寝ていたかったことであろう。お湯の瓶を腹に乗せて、自分の妻が新聞の今日の小説の続きを朗読してくれたらいい。そうではなくて、この若者との喧嘩が必定。若者は興奮している。彼の声はますます鋭くなって来る。しかし病気の書記の休養願望よりも強かったものは、その苛ついた感じで、それは絶えず胆汁から滴って、彼の血を毒した。

しかし更に書記は自制した。彼はすべての議論の中で最も無難なものを選んで、これ以上パーゲル氏を立腹させないようにした。「彼女が逮捕されたとき、彼女には宿がなく、単に紳士用の上着を着ていたのです」。彼は自分の言葉がパーゲルの顔に及ぼす影響を見ていた。彼は説明した、「公序良俗違反です」。

若者はとても赤くなった。彼は素早く言った、「部屋はすでにまた借りて、支払いを済ませています。それで宿はあります。一衣服に関しては、三十分、十五分で、望み通りの衣服や下着を購入することができます」。

「それではその金もあるのですか、かなり沢山の金が」。

書記は、被聴取者がついでに認めたことをすべてすぐに確認するほどに十分な犯罪学専門家であった。

「十分です、それには十分あります」とヴォルフガングは性急に言った、「ですからすぐに釈放できましょう」。

「店は今、閉まっています」と書記は答えた。

「構いません」とパーゲルは叫んだ、「それでも服は用意します」。そしてほとんど頼んだ、「レーディヒ嬢を釈放してくださいませすよね」。

「申しましたように、パーゲルさん」と書記は答えた、「私どもはこの件とは別個に貴方とお話ししたかったのです。それでやはり一人の職員を貴方の許に送ったのです」。

書記は一瞬、一人の制服の者に囁いた。制服の者は短く頷いて、消えた。

「しかしずっと立っていらっしゃる。どうぞお掛けになってください」。

「座りたくない。私の恋人がすぐ釈放されることを望んでいます」。

しかしすぐその瞬間彼は気を取り直した。

「済みません」と彼はもっと小声で言った、「二度とかつとなりません。私はとても心配しています。レーディヒ嬢はとても良い娘です。この娘の非難される点は、すべて私に責任があります。私は家賃を滞納していた。私は彼女の服を売ってしまった。どうか、彼女を釈放してください」。

「どうぞ、お掛けください」と書記は答えた。

パーゲルは激昂しかかったが、自制して、座った。

犯罪学専門家の聴取にはやり方があって、このやり方にかかると、ほとんどすべての人間が、確実にすべての初心者が、完全に砕けるものである。そのやり方はすべての穏やかさ、すべての人間らしさを欠いている。それは仕方のないものでもある。聴取者は、被聴取者が絶対認めようとしないうる事実を大抵の場合引き出さなければならず、被疑者の感覚、分別を奪って、この事実を意志に反して漏らすように導かなければならない。

漠然とした容疑によれば、自分の金をいかさまランプの生業で得ている一人の男を書記は眼前にしていた。この男はこの容疑が正しいことを、平静な分別ある状態では決して認めないであろう。この男を無分別にするには、苛つかせなくてはならない。一人の容疑者を苛立たせて、それで分別を失わせるに足る何かを見つけ出すのは、しばしば難しいことである。この男は本当に、偽りなく、自分の恋人の娘を案じているように見える。これを梃子にして、ドアをこじ開け、白状させるよう利用する必要があるだろう。しかしこのような梃子は優しく用いてはならない。東側の百姓どもを一人の三枚ランプ仕掛け人から解放するに穏やかなやり方は手ぬるい。この若者は格別力を込めて、掴まなければならない。この男には自制心があるし、まさに荒れ狂わないし、椅子に腰掛けている。

「二、三の事を質問したいのですが」と書記は言った。

「どうぞ」とパーゲルは答えた、「ご随意にどうぞ。ただ前もってレーディヒ嬢は今晚にも釈放できよう保証して頂きとう存じます」。

「それについてはまた話し合うことにしましょう」と書記は言った。

「しかしそのことを即刻仰有って頂きたい」とパーゲルは頼んだ、「私は落ち着けません。どうぞ」と彼は言った、「無慈悲なことをなさらないでください。私を苦しめないでください。いいよ、と言ってください」。

「私は無慈悲ではありません」と書記は答えた、「私は役人です」。

パーゲルは落胆して、苛立って、背もたれに寄りかかった。

ドアの間から一人の大きな、重たい、制服の男が入って来た。彼は灰黒色の巡査長の口髭をしていて、悲しげに見え、大きな目の下に、太く腫れぼったい涙嚢を有していた。その男は書記の椅子の背後に歩いて来た。彼は口から葉巻を取り、尋ねた、「彼がそうなのか」。

書記は頭を振り向けて、上司を見上げて、よく聞き取れる声で囁きながら言った、「そうです、彼が」。

警察署長はゆっくりと頷いた、パーゲルを長いこと睨むように見つめて、言った、「続

けなさい」。彼は葉巻を吸い続けた。

「それでは私どもの質問に関して、…」と書記は始めた。

しかしパーゲルは遮った、「済みません、煙草を吸っていいですか」。彼は小箱をすでに手にしていた。

書記は片手でテーブルをノックした、「公務室では喫煙は禁止です、 — 一般人は」。

警察署長は力強く葉巻を吸った。立腹して、いや、憤然としてパーゲルは煙草をまた仕舞った。

「さて私どもの質問に関して、…」と書記はまた始めた。

「ちょっと」と警察署長は遮って、その大きな手を書記の肩に置いた、「この男の自分の件に関して尋ねているのか、それとも娘の件のことか」。

「それでは私はここで自分の件の問題があるのですか」と驚いてパーゲルは尋ねた。

「そのうち分かるでしょう」と書記は言った。そして上司に向かって、再びこの阿呆な、聞き取れる囁き声で言った、「彼自身の件です」。

奴等はどこでおまえをつるし上げようとしている、と立腹してパーゲルは考えた。しかし、煽られてはいけない。肝要なことは、今晚にもペートルを解放することだ、とすぐに考えた。そして更に考えた、母さんはひょっとしたら正しかったかもしれない。ここには弁護士を連れて来る必要があったろう。そうしたらこいつらはもっと注意を払っていたことだろう。

彼は注意深く、外見上冷静に座っていた。しかし心の中では落ち着かなかった。かの洋酒バーに行つて以来、すべては無駄であるかのような悲しい絶望感が去らなかった。

「さて私どもの質問に関して、…」と執拗な書記がまた言うのが聞こえた。

そして今や本当に始まった。

「貴方のお名前は」。

パーゲルは述べた。

「生年月日は」。

パーゲルは述べた。

「出生地は」。

彼は述べた。

「職業は」。

無職であった。

「住まいは」。

パーゲルは述べた。

「証明書類をお持ちですか」。

パーゲルは持っていた。

「お見せください」。

パーゲルは呈示した。

書記はそれを見つめた。警察署長も見つめた。警察署長は書記に何か示し、書記は頷いた。彼はパーゲルにそれらの書類を戻さず、手前のテーブルの上に置いた。

「それで」と書記は言って、背もたれに寄りかかって、パーゲルを見つめた。

「さて、私どもの件に関して、…」とパーゲルは言った。

「何と言いました」と書記は尋ねた。

「さて、私どもの件に関して、と言ったのです、…」と丁寧にパーゲルは答えた。

「その通り」と書記は言った、「さて私どもの件に関して、…」。

パーゲルの皮肉が両役人に印象を与えたかは、確定できなかった。

「貴方の母親はベルリンに暮らしているのですか」。

「書類から分かる通りです」とパーゲルは答えた。そして考えた。「私を混乱させようと思っているのか。しかし阿呆な奴等だ。いや、きっと阿呆に違いない」。

「貴方は母親の許には暮らしていないのですか」。

「私はゲオルゲ教会通りと述べております」。

「それで母親の許ではないのですか」。

「ゲオルゲ教会通りの方です」。

「タンネン[樅]通りの方がもっと快適ではないですか」。

「趣味の問題でしょう」。

「母親とは何か仲が悪いのですか」。

「それほどでは」(全くの嘘を付くことはパーゲルには難しかった。そうするほどこの件はまだ十分に重大なものではない。しかし本当のことを言うこともできない。本当のことを言うと、終わることのない質問の連鎖を引き起こすであろう)。

「母親は貴方がご自分の許に住むことを望んでおられないのでしょうか」。

「私は私の恋人と一緒に住んでいます」。

「そして母親はそれを望んでおられない」。

「私の恋人です」。

「それで、彼女は母親とは親しくないのですね。それでは母親は結婚の意向に反対なのでしょう」。

書記は警察署長を見つめ、警察署長は書記を見つめた。

それを探り出して、何と奴等は得意げなのだろう、とパーゲルは考えた。しかし奴等は阿呆ではない、いや、全く違う。それでどう展開する気か見守ろう。しかし奴等は探り当てて来る、もっと注意しなくてはなるまい。

「母親に財産があるのですか」と書記はまた始めた。

「今このインフレの時に、誰が財産を有しましょう」とパーゲルはそれに対して尋ねた。

「それでは貴方が母親を支援なさっているのですか」と書記は尋ねた。

「いいえ」とパーゲルは怒って言った。

「母親は暮らしていけるのですか」。

「確かに」。

「そしてひょっとしたら貴方を支援していらっしゃる」。

「いいえ」とパーゲルはまた言った。

「貴方は自ら食い扶持を得ているのですか」。

「そうです」。

「そして貴方の恋人の食い扶持をも」。

「それもです」。

「どのようにして」。

待て、待て、とパーゲルは考えた。奴等は私を捕まえようとしている。何か耳にしたのだな。私に何か起きるとは、まず考えられない。賭博は処分されない。しかしこれについては何も言わないのがいいだろう。ペートルが何もばらしていないことは確かだ。

「私は品物を売却します」。

「どんな品です」。

「例えば、私の恋人の品です」。

「誰に売ります」。

「例えば、ゴルノー通りの質屋フェルトです」。

「何も売却するものがないときには」。

「いつも何かあります」。

役人は一瞬思案した。彼は上司を見上げた。上司は軽く頷いた。

書記は一本の鉛筆を取って、それを芯の上に立て、思案して眺めていて、それから鉛筆を倒した。軽く彼は尋ねた、「貴方の恋人は何も売らないのですか」。

「何も売しません」。

「絶対何も売ませんか」。

「全く売しません」。

「まさに品物より他のものも売れることは、貴方もご承知でしょう」。

一体全体、とパーゲルは啞然として考えた、奴等がかくも愚かに聞くとはいわゆる何を売ったのか、と。

声高に彼は言った、「品物とは単に衣服とかそんな類いのものではありません」。

「それ以外、例えば」。

「絵画です」。

「絵画ですか」。

「その通り、絵画です」。

「一体全体どんな絵画です」。

「例えば、油絵です」。

「油絵ですか。...それでは貴方は画家ですか」。

「私は違います、 — しかし私は画家の息子です」。

「そうですか」と書記はとても不満げに言った、「それでは貴方の父親の絵を売りますか。そうですか。これについてはまた話すことにしましょう。ただ今一度確認です、レーディヒ嬢は何も売ませんか」。

「何も売しません、売却できるものは、すべて私が売ります」。

「そうも考えられませんが」と書記は言った。そして彼の胆汁の痛みがまたとてもひどくなった。 — この若造はとても偉そうな振りをしている、「レーディヒ嬢は貴方の知らないところで、何か売っているかもしれませんよ、 — 貴方には内緒に」。

パーゲルは熟考した。あらゆる不穏なこと、あらゆる薄暗い懸念が再三彼の中で湧いて来たが、彼はそれを押し戻した。彼は認めた、「理論的には考えられませんが」。

「現実的には」。

「現実的には考えられません」。彼は微笑した。「つまり私どもは大して所有していないのです。どんな些細のものが欠けても、すぐに私は気付くでしょう」。

「そうですか、...そうですね、...」と書記は言った。彼は警察署長に振り向いた。署長は視線に答えた。ー パーゲルにとって、両人の目の隅に微笑の影が生じたかのように思われた。彼の不穏、彼の邪推はますます募った。書記は顔を半ば閉じた。「私どもの見解で一致していたのは、品物や手に取れる品々ばかりが、売れるばかりでなく、ー また別なものもあるということです」。

再び薄暗い脅迫である、ほとんど隠していない。一体ペートルが何を売ったというのだ。

「例えば、何です」とヴォルフガングは邪険に尋ねた、「私の恋人が明らかに売ったと思われる手に掴めない品とは想像もできません」。

「例えば、...」と書記は始め、また警察署長を高く見上げた。

警察署長は目を閉ざして、その悲しげな顔を一度右から左に否定的に動かした。パーゲルはそれをはっきりと見た。書記は微笑した。まだ完全な微笑ではなかったが、ほとんど微笑であった。

「例えば、ー それはすぐに分かりましょう」と書記は言った、「まずは今一度私どもの質問に戻りましょう。それで、食い扶持は絵画の売却によるものとお認めになりました、...」。

「よろしいですか」とパーゲルは言って、立ち上がり、椅子の背後に立った。彼は背もたれを自分の前にしっかり両手で握った。彼はこの両手を見下ろした。指関節が白く、赤い肌の上に浮いていた。「よろしいですか」と彼は決然と言った。「貴方らは私の存知しないある理由から私をもてあそんでおられる。私はこれ以上我慢できません。レーディヒ嬢が何らかの愚行を犯したのであれば、そのように見えますが、それはただ私の責任です。私は彼女の面倒を十分には見て来なかった。私は彼女に金を渡したことがなく、多分食事すら十分には与えなかった。すべて私は責任を負います。損害が生じたのであれば、損害を弁償します。ここに金があります、...」。

彼はポケットから、次々と束を引っ張り出し、テーブルに投げた。「損害が生じたのであれば、支払いましょう、しかし何が起きたのか、いい加減言ってください」。

「金か、沢山の金、...」と書記は言って、途方もなく、ますますかさばる山を邪悪に見つめていた。

警察署長は目を閉じた。あたかも立ち去りたいかのようで、直視できないかのようであった。

「ここに更に二百五十ドルあります」とパーゲルは叫んで、自ら新たに金の量に圧倒されていた。彼はその束を最後にテーブルに投げた。「今それで支払いができないような損害は考えられません。すべてを出しましょう」と彼は頑固に言った、「しかしレーディヒ嬢を今晚にも釈放してください」。

彼もその金を見つめた。ドイツ紙幣の単調な白色と褐色、アメリカ紙幣の虹色であった。

ドアの間から制服の男がトゥーマン夫人、おまるマダムを中に入れた。彼女のだらしなく豊満な体がだぶだぶの服の中にあった。彼女のスカートの裾は、女達がスカートをもはや膝の所までしか着用しなくなった時代に、靴のヒールの所まで、勿論すり切れて、達していた。彼女の灰色のぶよぶよの皺の多い顔は震え、下唇は垂れ、内部を外に剥き出しにしていた。

「やれやれ、間に合いましたかね、パーゲルさん。どんなに走ったことでしょう。とて

も慌てましたよ。また火を点けられたらたまりませんからね、脅されたように。もっと早く着く予定だったのです。でもゴルノー通りに来て、ただあなたのことだけを考えて、間に合いますようにと書いていたら、車が馬にぶつかったのですよ。それで勿論立ち止まることになって。馬の内臓が外にはみ出していて、私は自分に言いました。 — アウグステ、よく見なさい。皆が人間と獣は比較にならないと言います。でもね、内側はとても似たものよ。それでこう考えたわけ、いつも私ほ膀胱の悩みがあるけど、燕麦を食うこのエンジンも膀胱を持っているわね、と...」。

「それでパーゲルさんは、貴女がすぐこちらに来て、申請を撤回しないと、貴女の住まいに火を点けると脅したのですか」。

しかしトゥーマン夫人は海千山千である。彼女は沢山喋るが、しかし尻尾は握られない。彼女はテーブルの金を見ていて、状況を正しく把握していた。そしてすぐに話し始めた。

「誰がそう言いました。この人が私を脅したなんて。そんなことは言っていません。記録に残しておいてくださいよ、少尉さん。それはご自分の口からの出任せですよ。私を脅すなんて。この人はとても丁寧で、良い方です、パーゲルさんは。この人と娘さんへの処罰申請には署名なんかしなかったことでしょうか、ただあなたの所の警察の方が何やかや分からぬことを仰有るものですからね。法律なのだと言有って、 — 金を貰っているのに、法律もあろうものかと思ひましてね。騙しとか話しになりませんよ。いえ、私は処罰申請を取り消します、あなたらのせいですよ」。

「静かにしなさい」と警察署長が一喝した。というのは書記がおずおずと中断させようとしてもこの言葉の洪水には効果がなかったからである。

「パーゲルさん、ちょっとドアの外でお待ちください。女将さんとだけで話したいので、...」。

パーゲルは一瞬、兩人を見つめ、それからテーブルの上の金と書類を見つめた。彼は黙って、礼をして、廊下へ出た。さて、彼の向かい側には受付部屋へのドアがあって、若干先の通りに面して、すぐ出口のドアの所に監視室があった。彼は開放されたドアを通じて、外の路上の通行人を眺めた。雨は止んだように見えた。涼しい一陣の風が吹いて来て、廊下のよどんだ空気と揉み合っていた。

パーゲルは壁に寄りかかって、長いこと望んでいた煙草に火を点けた。最初、幾度か深く吸い込むと快適であった。しかしそれからすぐにまた喫煙のことを忘れた。

まだ彼らは自分を逮捕していない、と彼は考えた。さもなければ、私を一人っきりでドアの外に出すだろうか。

内側で再び、トゥーマン夫人の声がした。しかし前より泣き声であった。その間に警察署長の声が吠えた。 — 何と上手にこの悲しげな男が叱り付けられるのか、滑稽であった。しかし、そのようなことは職業上必要で、彼はできるのに違いない。 — ちなみに、彼らが自分をドアの外に出したからと言って、何もまだはっきりしたわけではない。私の金はすべて、テーブルの上にあるから、こんな金を置いて逃げるとは、彼らも全く思っていないだろう。しかし自分を逮捕するとしたら、何故であろう。ペートルアはどうしたのだ。何故ペートルアは逮捕されたのだろうか。

彼は詮索した。再三彼は、彼女がひよっとしたらトゥーマン夫人のものを何か売ったのかもしれないと考えた。ベッドのシーツか、その類いで、食べ物を得ようとした。しかし

これは考えられない。そんなことをしたら、おまるマダムが黙ってしまい。その他、ペーターには、何らかのものをせしめる機会はない。

考え込んで、彼は出口のドアから出た。廊下の空気は頭痛を引き起こし、書記の部屋の声がうるさかった。

彼は路上に立っていた。アスファルトは鏡のようにピカピカであった。タクシー運転手には難しい一日だ、と彼は考えた。車がゆっくりと彼の側を、手探りのように通り過ぎて行った。いや、自分はタクシー運転手にはなりたくない。しかし一体自分は何になりたいのか。自分はもはや何の用にも立たない。自分は一日中、単に阿呆なことをして、今でもペーターを釈放できないだろう。そう感じられる。ペーターは何をしたのだろう。

彼は車道の端に立ち止まっていた。雨で濡れたアスファルトに明かりが反映していた。どの明かりも彼を照らさなかった。そのとき誰かが彼を押した。勿論おまるマダムであった。

「まあ、パーゲルさん、あなたをここで見つけて良かった。あなたはとうにずらかったと思っていましたよ。そんなことをしては駄目です。立派なお金を取り戻さなくちゃ。あんな人らに金を残してどうするんです。信じられない。お役人て何を考えているのかさっぱり分からない。鋭い探偵の目をして、給料も何もかも貰っているのに、どこかの阿呆に吹き込まれてしまって、貴方は三枚トランプ仕掛けの百姓騙しだと言うのよ。そんなんは、ご承知のように、大事なトランプを引き出させて、テーブルの上に置かせて、相手は何のトランプか当てるんでしょうけど。...馬鹿丸出し。貴方のようなしゃれた男がさ。でも彼らの耳からちゃんと耳垢を綺麗に掃除しておきました。豪華なルーレットの賭けだと言ってやりました。しゃれた胴元に燕尾服の紳士達なんだって。こんな紳士達じゃなければ、お金は掴めませんよ、勿論貴方のことじゃありません。すべてよくドア越しに聞いていたことで、貴方がペーターに語っていましたもの、...」。

「それでペーターはどうしたんだろう」。

「そうね、パーゲルさん、あの娘がどうなったか、私にも分かりません。一言も話してくれません。でもペーターは危ない。しかし騙しへの処罰申請とかその類いはもう関係ありません。彼らに撤回をさせましたから。書類はあの黄色い目の人、あのマルメロ色の人の前で破りました。それで、カーテンのことですけれど、これは貴方の陽気な冗談だったとも言いましたよ。それで新しいカーテン代に幾らか出して頂けるなら、...」。

「まずは私の金を取り戻すことにしよう、トゥーマン夫人」とパーゲルは言って、奥の部屋へ戻った。

今や書記だけがそこにいた。警察署長はもはやそこにいなかった。いや、興味も薄れていた。臨終の者は錯覚していたように思われることになった。これは何も重要な件ではない。単に瑣末な事件だ。今は瑣末な事件の時代ではない。書記は、犯罪学専門家の手管を思案する気をもはや失っていた。レオ・グーバルケの最後の公務執行は、この臨終者がまだ存命のうちに、しぼんでしまった。

無関心に書記は、画商の購入証の写しを調べていた。これはきっと正しいであろう。彼はもはやそこに電話すらしなかった。 — 誰かが三枚トランプ仕掛けで午後の数時間のうちに千ドル儲けることはあり得ないであろう。

「しかし賭博クラブで賭博してはなりませんよ」と彼は退屈して言い、パーゲルに購入

証を戻した。「賭博は法的に禁止されています」。

「確かに」とパーゲルは丁寧に言った、「これからはしません。ひょっとして、レーディヒ嬢のために保釈保証金を出してよろしいでしょうか」。

「その娘さんはもはやここにはいません」と書記は言った。彼にとって彼女は実際もはや存在していなかった、「すでにアレクサンダー広場の警察拘置所です」。

「しかし何故です」とパーゲルは叫んだ、「何故か、いい加減教えてください」。

「監視下以外で、淫らなことを行ったからです」と書記は疲れ果てて言った、「ちなみに性病もあるそうです」。

椅子がまだそこにあったのは、結構なことであった。パーゲルはそれをしっかり掴んだ、それは碎けるに違いないと彼には思われた。「それは考えられない」とようやく声を絞り出した。

「そうなのです」と書記は説明し、ようやく仕事に取りかかろうとした。「同じ生業の別の娘から告げられました。ちなみに彼女も認めました」。

「認めたのですか」。

「認めましたよ、...」。

「有り難う」とパーゲルは言って、椅子を離し、ドアへ向かった。

「貴方の金と、書類を」と書記は苛立って叫んだ。

パーゲルは拒否の仕草をしたが、しかし思い直して、すべてをまたポケットに詰めた。

「お金は消えることでしょうか」と書記は無造作に言った。

パーゲルはまた拒否の動作をして、ドアから出て行った。

五分後によりやく、その機械的筆記の最中に、書記は思い付いた。自分はパーゲル氏に一つの嘘の、少なくとも誤解の情報を与えてしまった、と。ペートルは単に、自分はおよそ一年前に、数回、稀に、淫らなことを犯したと認めたに過ぎなかった。性病はそもそも認めていなかった。

書記は一瞬、考え込んだ。ひょっとしたらそれは少しもまずいことではないかもしれないと彼は考えた。今やひょっとしたら彼は彼女と結婚しないかもしれない。このような娘とは結婚すべきではない。いや、決してすべきではない。

そして彼は自分の筆記に戻った。最終的に彼にとって、レーディヒ事件、...巡査長レオ・グーバルケの最後の公務執行が消えた

第六章

雷雨は過ぎるが、蒸し暑さは残る

44

ブラックヴィッツはシュトゥットマン事件を片付ける

ホテルの下級や上級の社員がまず殺到した後、ブラックヴィッツとシュトゥットマンの二人の友の周りは静かになった。応接課長はホテルの食堂貯蔵庫の古い、まことに穴だらけの寝椅子の上に横たわっていて、眠っていた。彼は酩酊者の鉛のような醜い眠りを眠っていて、顎は垂れ、口は湿っぽく、顔は青ぶくれして、顔の肌は、長いこと剃っていないかのように、突然、無精髭に見えた。額の上には階段から落ちたときの、赤い傷跡が走っていた。

フォン・ブラックヴィッツは友人を見つめ、それから貯蔵室を見つめた。応接課長が運ばれた部屋は居心地良くは見えなかった。大きな電気の洗濯仕上機が大方の場所を塞いでいた。隅に空の洗濯籠がまとめられていて、二台のアイロン台が壁に立てかけられていた。

一人の給仕人が覗き、 — 皆が遠慮なく覗き込んで、ドアの所で気兼ねなく意見を述べて、笑っていい権利があると思っている風に見えたが、 — 騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツはまことに苛立って尋ねた、「フォン・シュトゥットマン氏はここのホテルで自室を有するはずだ。何故自分の部屋に運ばれなかったのだ」。

給仕人は両肩をすくめて、睡眠者に好奇の視線を注ぎながら言った、「私には分かりません。私が運んで来たものではありません」。

フォン・ブラックヴィッツは自重した、「頼むから、 — 誰か責任者を呼んでくれ」。

給仕人は消えた。ブラックヴィッツは待っていた。

しかし誰も来なかった。長い時間誰も来なかった。騎兵隊長は台所用椅子に寄りかかって、両脚を組んで、あくびした。彼は疲労困憊していた。彼は、今朝自分の列車がオスターデの方から来て、シュレーゲン駅に着いて以来、まことに多くのことを体験したと思った。本来、大都会の喧噪に慣れていない素朴な田舎人にとって、余りに多くのことを体験した、と。

騎兵隊長は一本の煙草に火を点した。ひょっとしたらこれで少し爽やかになるかもしれない。いや、相変わらず、誰も来ない。応接課長にして副支配人が人混みのホテルのホールで、 — 若干もつれた喋りの後、 — 階段から転げ落ちたということは、本来ホテルの責任者にも伝わっていることに違いないのだが。それでもお歴々の誰も姿を見せない。騎兵隊長は、不機嫌に額に皺を寄せた。疑う余地なく、この件には何か合点の行かない点がある。運命のいたずらによって、 — 何か最良の教養人でも出会いかねない階段からの単純な落下ではない。下級のホテル従業員が厚かましく押し寄せ、上級の者達が遠ざかり、睡眠者の呼吸から十分に察せられることは、フォン・シュトゥットマン中尉は酔っ払っている、正体なく酔っ払ってしまったということだ。今もそうだ。

フォン・ブラックヴィッツは考えた。シュトゥットマンはひょっとしたらアル中になったのだろうか。そうかもしれない。この忌まわしい時代には何でもありだ。しかし騎兵隊長は通常の酩酊の考えを、それでもすぐに撤回した。とにかく普通の酩酊者は階段を転げ

落ちない。 — そのようなことは、単に飲み方の素人の場合に生ずるだけである。他方、大きなホテルの責任者は、アル中者を仕事に雇わない。

いや、 — そしてフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は立ち上がって、仕上機の部屋をあちこち歩き始めた。 — このシュトゥットマン事件は何か別だ。何か全く思いがけない事が生じたのだ。何か、それは、きっと判明することだろう。これについて今頭を患わずことは徒労だ。ただ、大事なことは、この件がシュトゥットマンに対して及ぼすであろう結果だ。社員達の振る舞いからブラックヴィッツは、この結果がはははだ不都合であろうと結論づけた。彼は、友が自ら交渉できない間、この友を守ることに決めた。 — 牙を剥き、鉤爪を立ててだ。

牙を剥き、鉤爪を立てて、と騎兵隊長は自らの許で繰り返した。この戦闘的文言でとても満足していた。

しかし、と更に自らの許で考えた、 — 一切が無駄であっても（これらの金庫番は冷酷だから）、それでもこれは全く不都合ではないかもしれない、ひょっとしたら彼を説得できよう、...

今や騎兵隊長はランゲ[長い]通りを通っての刈り手斡旋所までの孤独な道のを思い出していた。軍隊時代以来いかほどの道を孤独に、いつも眼前にかの意図的空想の点を浮かべて、行軍して来たことかと考えた。士官学校で、兵役で、戦争中、 — いつも自分には同僚がいて、一緒にお喋りできた。同じ志操、同じ関心、同じ名誉心の仲間である。戦争以来、すべてが終わってしまった。誰もが一人っきりである。もはや何の連帯も、合意もない。

しかし客として自分は来ることはないかもしれないと騎兵隊長は考え、更に考えを続けた。何故自分は何かを計画するのだろうか。今朝自分は刈り手斡旋所で失敗をした。そしてシュレーゲン駅で刈り手職長にドルを渡してまた失敗をした。警察本部での自分の振る舞いもひょっとしたら全く正しいとは言えなかったかもしれない。そして、一時間前に、果てしなく駆けずり回り、話した末に、ある斡旋者から六十人の話しを聞いて、この郎党とは明日早朝ようやく面会するという段取りであって、単にこのつまらない話しにけりを付けるためであったが、ひょっとしたらこれも賢明ではなかったかもしれない。

彼はまさに熱くなっていて、無分別で、あちこち歩き、藪から出るツイーテン[名将、1699-1786]であったが、しかし突然退屈し、一切に反吐を覚えた。その上、自分は多くのことが十分良く分かっていない。自分の義父、フォン・テッシュー枢密顧問官はひょっとしたら正しいのかもしれない。自分は決してまともなビジネスマンにはなれないだろうと言われている。

騎兵隊長は自分の消えた吸い殻を隅に投げて、新しい煙草に火を点した。いや、自分は自らに我慢を強いている。大好きなものの代わりにこの屑を吸っているわけだ。妻とも、妻がまた二足の絹の靴下を買ったときは、喧嘩したものだ。しかし家畜商が来て、自分と太った雄牛どものことで交渉し、一時間話し、次の一時間交渉し、去って、また来て、つきまとい、文句言われて、遡ると、 — 結局騎士領請負人フォン・ブラックヴィッツ氏は、譲歩することになる。自分は軟弱になり、あるいは退屈し、反吐を覚え、立派な雄牛どもをある価格で手放すことになる。この値段は、老枢密顧問官が耳に挟みさえすれば、微かに歓声を上げるものである。勿論彼は早速こう言う、「済まない、ヨアヒム。勿論私

は貴方の経営に口を挿まない、 — ただ、 — 金を窓から棄てるほどの金は十分に持ったことはないのだ」。

いや、自分は容易にシュトゥットマンにこう説得できよう。彼はノイローエで、非常に必要な、とても有益な、どんなに高く支払っても十分ではない協力者となれるであろう、もともと仲間であることは全く言うまでもない、と。マイヤーは長続きしないだろう。ヴィオレットが先に電話口で話したこと（自分は明日の午前の車のことで電話したのだが）、マイヤーは刈りの乗り入れをさせなかったし、代わりに午後の早くから泥酔していたとのこと、仕事の最中に、このことはとんでもないことだ。

騎兵隊長の血は、仕事中に酩酊した田畑検査官マイヤーのことを考えて、熱く騒いだ。こやつは明日早朝叩き出してやる。奴等に私はいつも甘すぎた。叩き出してやるとも。

そして彼の視線は眠っている友に落ちて、この男も仕事中に酩酊したのだが、自分の感覚は公正に判断しているか疑わしく思われた。

勿論シュトゥットマンの場合、全く事情が異なると騎兵隊長は納得しようとした。彼の場合は特別な事情があるに違いない。

しかし結局、田畑検査官マイヤーの場合も特別な事情があったと仮定できないわけではない、 — 彼もこれまで普段、仕事中に飲んだわけではない。

勿論単に、私が旅に出たからであろう、と騎兵隊長は苛立って言った。しかしこれも余り効果がなかった。彼はこれまで旅に出たが、類似のことは生じていなかった。かくて彼は一方ではシュトゥットマン事件の推測に陥り、他方ではマイヤー事件の推測に陥ったが、その時、いや、ノックの音がして、黒っぽい服の中年の紳士が入って来て、一礼して、「ホテルの医師、ドクトル・ツェチェ」と自己紹介した。

フォン・ブラックヴィッツも自分の名を名乗り、自分はシュトゥットマンの友人であり、昔からの連隊の戦友であると説明した。

「この事故が起きたとき、偶然ホールにいたのです」。

「事故、そうですね」と医師は言って、憂わしげに指で鼻を撫でながら、騎兵隊長を見つめた、「それでは貴方は事故と呼ばれるのですね」。

「誰かが、階段から落ちたら、そうですね」と騎兵隊長は待機しながら言った。

「酩酊です」と医師はフォン・シュトゥットマンの許で確言した、「完全な酩酊です。アルコールの毒にやられています。額の擦り傷は何でもありません」。

「分かりますか」と騎兵隊長は用心深く始めた。

「オイメトとか、アスピリン、あるいはピラミドンといったもの — 丁度手許にあるものを、目覚めたときに、でしょう」と医師は処方した。

「ここには」と騎兵隊長は仕上機部屋をチラと見て言った、「何も手もとにありません。私の友が部屋に運ばれるよう、手配できませんか。ひどい出来事だ」。

「ひどい出来事です」と医師は強調して叫んだ、「上に六人 — 同じように酩酊して、 — 皆ホテルの従業員です。乱痴気騒ぎで、 — 貴方の友の指示です。唯一酩酊していない参加者は、ホテルの客で、帝国男爵のフォン・ベルゲン殿です、 — 貴方の友によって叩きのめされています」。

「しかし理解できない、...」と騎兵隊長は言った、このメルヘンのような暴露話しに全く混乱していた。

「私も理解できませんし」と医師ははっきり言った、「理解しようとも思いません」。

「しかし説明してください、…」と騎兵隊長は頼んだ。

「説明の要はありません」と医師はたじろがずに言った、「お客は帝国男爵で、一
酩酊した応接課長に叩きのめされています」。

「きっと」と騎兵隊長はより熱くなって言った、「特別な事情があったに違いありません。長いことフォン・シュトゥットマン氏を知っています。彼は常に、どんな難しい状況の下でも、自分の責務を果たして来ています」。

「確かにそうでしょう」と医師は丁重に言って、興奮した男の前からドアの所へ引き下がった。

彼はドアの取っ手を手にすると、突然興奮して叫んだ、「一人の女性従業員は半裸でした、一 帝国男爵のいる所で」。

「私は要求します」と強い声で騎兵隊長は叫んだ、「フォン・シュトゥットマン氏が人間らしい部屋に運ばれることを」。

彼は逃げて行く医師の後を追った。

「ドクトル、貴方に責任を負って貰います」。

「拒否します」と医師は逃げながら、肩越しに叫んだ、「この乱痴気騒ぎとその参加者に対するどんな責任も私は拒否します」。

そして彼は枝通路へ駆けた。

騎兵隊長は彼の後を追った。

「ドクトル殿、彼は病気です」。

ドクトルは目的地に達していた。この老紳士は軽快に空いた鎖エレベーターに飛び乗った。

「彼は酩酊しています」と彼は叫んだ。すでに両足が駆け込んで来る相手の腹の高さにあった。この相手はドクトルを強引にその義務へと連れ戻したかったことであろう。一
しかし無駄である。すでに次のエレベーターの箱が彼の前に浮かんで来て、義務を忘れた医師はとうとう彼の視線から消えてしまった。

フォン・ブラックヴィッツは、懸命に努めたが、一 詰まらぬピラミドンの処方その他には、一 友のために何も達成できず、一言呪いを発して、仕上機部屋へ戻ろうとした。しかしずっと同じドアの並ぶ白い通路で混乱し、彼は途方に暮れた。医師を追いかけて、彼はこの兎がどこを曲がったか注意していなかった。彼は覚束なく探してあちこち歩き、
一 とにかくすべての通路を試さざるを得なかった。ただそうこうしているうちに、ドアを見つけることだ、それが開放されていたぞと、正確に思い出した。

彼は歩き続けた。白いドアに、白い通路。彼の方向感覚では、目的地からますます遠ざかっていると思われた。しかし、結局、大きなホテルの貯蔵室といえども、いつかは終わるに違いない。しかし今や階段になっている。先ほどは階段を通ったか。上がったか、それとも下ったか。彼は下って行った。これは間違いだと確信していた。そして一人の初老の女性と出会った。鼻眼鏡の奥に厳しい視線の見える女性で、全く一人っきりで戸棚に洗濯物を整理していた。

この女性が彼の足音で振り向き、真面目にこの余所者を観察した。

フォン・ブラックヴィッツは、ここを全く無資格なのに歩いていると自覚して、はなは

だ丁重に挨拶した。洗濯物管理のこの女性は一言も言わず真面目に頭を下げた。フォン・ブラックヴィッツは決心して言った、「仕上機部屋へはどう行ったらいいでしょう」。

彼が丁重に微笑しても、このレディーの真面目さが和らぐことはなかった。彼女は考え込んだ風に見え、それから大きな手の仕草で言った、「ここには仕上機の部屋は沢山あります」。

ブラックヴィッツは、シュトゥットマンのことを口にせず、その部屋のことを描写しようとした。「隅に洗濯籠があって」と彼は説明した、「そうだ。青い花柄で覆われた寝椅子があって、かなり破れています」と彼は若干辛辣に言った。

再び彼女は考え込んだ。結局払い除けるように言った、「こちらに破れた寝椅子があるとは思えません。こちらではいつもすぐにすべて修理されます」。

これは元来ブラックヴィッツが自分の質問に対して望んでいた知識ではなかった。しかし彼は自分の以前の職業でも今の職業でも常に人間と関わって来ていて、ある質問に決してまともな答えを与えないこうしたタイプは馴染みであった。

それでも彼は今一度試した、「ホテルのホールはどこでしょう」と彼は尋ねた。

すぐに返事があった。「ホテルのお客は食堂貯蔵庫に入ることを完全に禁止されています」。

「すべて」と騎兵隊長は真面目に言った。

「何と言いました」と彼女はほとんど叫んで、完全に挙措を忘れて、若干追い立てられた鶏のように赤くなった。

「すべて、あるいはもっと良く言って、厳格に禁止ですか」と騎兵隊長は訂正した。「完全にではなく、一 それでは良い晩を。有り難う」。

彼は品位を持って挨拶した、あたかも彼女が連隊の司令官か、あるいは自分が若い少尉であるかのようであった。彼は去った。すべて、あるいは完全に、彼女は混乱したままであった。

騎兵隊長は今やもっと落ち着いて迷路を行った。小さな幕間劇で彼は元気になっていた。確かにまたしても友のために何もしてやれなかった、と遺憾ながら自分で認めた。しかしいずれにせよそのようなことは結構なことだ。その上、彼は今や絨毯の上を歩いていた。ひょっとしたら相変わらずシュトゥットマンから遠ざかっているかもしれないが、ホテルの関係者の一带に近付いているかもしれない。

突然彼は鈍く磨かれた樫の木からなる長いドアの列の前に立っていた。確固たる信頼性のあるドアであった。

企業の出納課であった。購入A、購入B、従業員問い合わせ、法律顧問、医師。

騎兵隊長は医師の表札を不満げに見つめ、それから両肩をすくめ、更に進んだ。

「事務局」

もっと上級へ、と騎兵隊長は決めた。

「ハッセ支配人」。

彼は考えた、いや、更に、もっと上だ。

「カイツ支配人」、「ランゲ支配人」、「ニーダーゲゼス支配人」。

彼は熟慮した。ニーダーゲゼス[下座]支配人は魅力的に違いない、一 このような名前でも支配人になる人間は、きっと大層有能なんだろう。

しかしこれは是非とも自慢したいのだろうと騎兵隊長は思い付いた。彼は更に一つ先のドアへ進んだ。それは正しかった。このドアには「総支配人フォーゲル[鳥]」の表札が掛かっていた。

このフォーゲル[鳥]に歌って貰おう、と騎兵隊長は考えて、すぐに決心してノックし、部屋に入った。

書き物机の奥に一人の味気ない、青白い、大柄の、どっしりした男が、一人の可愛い若い女性に何かタイプの口述筆記をさせていた。彼は騎兵隊長が自己紹介したとき、ほとんど見上げなかった。

「初めましてどうぞお掛けください」と彼は素早く、散漫なありきたりの丁寧さで言った。これは職業上絶えず新たな人々と面会する必要がある男達に見られるものである。

「ちょっと待って、— どこまで行きましたかな、お嬢さん。どうぞお煙草を、どうぞお楽に」。

電話が鳴った。

とても小声で彼は電話口で語ったが、しかし明瞭であった。「フォーゲルです、— はい、フォーゲル本人です。— 彼の医師が来たのですか。— 何という名前ですか。何ですって。綴りを言ってください。何という名前です。シュレックですか、枢密顧問官シュレック。— いつ来ます。五分して。いいです。すぐ私の所へお出でください。いや、いい、構いません。— ただ後少し口述筆記があつて、短い面会があります」。彼は憂わしげに、電話越しにぼんやり見つめて、言った、「三分で済みます。— 分かりました。だから決して上の三十七号室へやっつてはいけません。私の許です。有り難う」。

受話器は急いで、しかし丁寧に置かれた。

「どこまで行きましたか、お嬢さん」。

令嬢は何かつぶやいた。総支配人はまた口述筆記を始めた。

私には三分か、と騎兵隊長は苛立って考えた。まあ、待っている、当てが外れるからな。言わずにおくものか、...

総支配人は途切れた。彼はある名前を聞き、びっくりし、もっと正確に耳を澄ました、...

支配人は急いで、口述筆記をした。単調であった。「私どもははなはだ遺憾に存じますが、フォン・シュトゥットマン氏は、この一年半の当企業での勤務の間に、人間的、また専門的資質の面で常に高い評価を得ていながら、...」。

総支配人は息を継いだ。...

「ちょっと待って」と勢いよく騎兵隊長は叫んで、立ち上がった。

「ちょっと待って」と支配人は単調に言った、「すぐ終わります。— どこまで行きましたか、お嬢さん」。

「いや、お嬢さん」と騎兵隊長は抗議した、「済みません、— 私の理解が正しければ、貴方はフォン・シュトゥットマン氏への所見を口述筆記なさっている。フォン・シュトゥットマン氏は私の友です」。

「素晴らしい」と支配人は味気なく言った、「それでは貴方は彼の面倒を見られることでしょう。私どもは困惑してしまつて、...」。

「フォン・シュトゥットマン氏はアイロン部屋の破れた寝椅子に横たわっています」と立腹して騎兵隊長は嘆いた、「誰も彼のことを気遣っていません」。

「はなはだ遺憾です」と支配人は丁重に認めた、「咄嗟の出来事で生じた混乱による不手際です、お許し願います。ー お嬢さん、電話してください。フォン・シュトゥットマン氏を人目に触れないよう自分の部屋に運ぶように、と。人目に触れないようにです、お嬢さん、人目に触れないように」。

「フォン・シュトゥットマン氏を追いだそうとなさっている」と騎兵隊長は怒って叫んで、速記の用紙を示した。「聴取せずに、被告人を処分してはいけません」。

令嬢は電話した。総支配人は動じず、味気なく、言った。「フォン・シュトゥットマン氏をすぐに自分の部屋に運ぶのです」。

「彼を即刻、解雇することは許されません」とフォン・ブラックヴィッツは叫んだ。

「私どもは解雇しません」と総支配人は反論した。

フォン・ブラックヴィッツは、この味気ない巨人は、どんな興奮、どんな依頼、どんな人間的感情に直面しても動ずることはないという印象を得た。

「私どもはフォン・シュトゥットマン氏に長めの休暇を認めます」。

「フォン・シュトゥットマン氏は休暇の必要はありません」と騎兵隊長は、確かに無鉄砲ではあったが、激しく、請け合った。しかしすぐに、自分の怒りが、この動じない、情熱に欠けた、味気ない男の前で砕けるのを感じた。

「フォン・シュトゥットマン氏は休暇を必要としています」と相手は固執した、「彼の神経は疲れています」。

「聴取せずに、判決を下しています」と騎兵隊長は弱々しく叫んだ。

「帝国男爵フォン・ベルゲン氏の宿泊の部屋で」と総支配人は単調に言った、あたかも調書を読み上げているかのようであった、「十九本のシャンパンが見つかり、そのうち十五本が空でした。四本のコニャックの瓶がー 空でした。二名のホテルのボーイが完全に酩酊しています。ホテルの他の二名の男性、成人の従業員がー 完全に酩酊しています。ホテルの一名の衣服の欠けたメイドがー 完全に酩酊しています。一名の臨時の掃除婦がー 完全に酩酊しています。客人のフォン・ベルゲン男爵はー 完全に素面ですが、しかし目に青い隈があり、頭を何度か残酷に殴られてほとんど意識を失っています。どこで私どもが貴方の友人、フォン・シュトゥットマン氏を見つけたか、貴方は多分ご存じでしょう」。

しかし幾らか当惑して、フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、頭を下げた。

「一方では」と総支配人はもはやそれほど素っ気ない調子ではなく言った、「貴方の友への忠誠を尊重します。他方ではこうお尋ねします。健康な神経を持った教養ある人間がこのようなバッカス祭に参加するであろうか、と」。

「しかし特別な理由があったに違いありません」とフォン・ブラックヴィッツは絶望して叫んだ、「そうでなければ決してフォン・シュトゥットマン氏は、 ...」。

「特別な理由が考えられますか、貴方自身がこのような乱痴気騒ぎに加わるような、... フォン、お名前は、 ...」。

「ブラックヴィッツです」とフォン・ブラックヴィッツが言い足した。

「フォン・ブラックヴィッツさん。これ以上私どもの企業で汚点を残した男を働かせることはできないとお分かり頂けるでしょう。従業員の手前すでに、 ...」。

短くノックがあった。戦闘的であった。

ドアがさっと開いて、小さな、がに股の老人、高く美しい額で、輝くような青い目と、黄色くなった、以前は多分燃えるように赤かった顔一面の髭の男が、突入して来た。彼に続いて、ゆっくりとずんぐりした力強い男が入って来た。この男のジャケットはプロのボクサーのように肩の上にぴったりと収まっていた。

「まだ彼を捕まえていますか」と赤面した老人はカラス声で叫んだ、「どこに彼はいます。後生ですから逃さないでください。テュルケ、気をつけてくれ。急ぐのだ。彼を放すな。さあ、行け。 — 二十四時間前から私はベルリン中この若者を追いかけているのです。この惨めな町で、私が嘆きの鼻を突っ込んだことのない売春宿は一軒もない。忌々しい」。

彼は手で言及した鼻を掴み、息も吐かずに周囲の呆気にとられた者達を見つめていた。彼の背後に相変わらず、急ぐことなく、ごつい男が控えていた。窮屈なジャケットで、多分テュルケ氏であろう。

最初に総支配人が気を取り直した。 — 多分職業柄どんな野蛮な人間の種類にも慣れていたのであろう。

「フォーゲルと申します」と彼は自己紹介した、「枢密顧問官シュレックさんでしょうか」。

「いや、私の話しが先だ」と老人は叫んだ。彼は鼻から手を離した。平静さからより強い発声への移行はとても突然で、皆が、 — 不動のテュルケ氏を除いて、 — 驚いた。このがに股の老人は奔放な気質が潜んでいるに違いなかった。「三分前から、かやつはまだここにいるか尋ねていますぞ」。

「帝国男爵フォン・ベルゲン殿のことでしたら」と味気なく、遅れて総支配人は再び始めた、「私の知る限り、三十七号室にいます、...」。

「テュルケ」と枢密顧問官シュレックは叫んだ、「聞いたろう、三十七号室だ。上がって行き、悪漢野郎[ベンゲル]を下へ連れて来なさい、着の身着のまま。注意するんだぞ。奴の手管は承知だな。仲間を部屋に閉じ込めたということを忘れるなよ」。

がっしりした男はつぶやいた、「私からは逃れられません。そのようなことはさせません、枢密顧問官殿、...」。彼はゆっくりとドアから出て行った。

「素晴らしい精神病者看護人です」と枢密顧問官はつぶやいた、「みじんも感傷性のない男です」。そして突然新たに心配が生じて来て言った、「また逃げたのではないでしょうな」。

「いえ、いえ」と総支配人は慎重に精神科医を落ち着かせた、「逃れられません。残念ながら若干事がありました、...」。騎兵隊長に視線を向けた、「すぐ報告致しますが、まずこの方を、...」。

ほっと嘆息して枢密顧問官は安楽椅子に沈み込んだ。彼は額の汗を拭いた、「では逃れられないのですな、有り難い。何か事があった、と。この若造はどこへ行こうと、事が置きます」と観念した溜め息を吐いた、「警察の方ですか、検事の方ですか」。

「いえ、いえ」と総支配人はすぐに言った、「それは必要ありません。この殿方がきつと許しを請われるでしょう」。騎兵隊長に素早く意地悪な視線を向けた、「私どもはどんな弁償もします。私どもの従業員の一人が残念ながら、我を忘れて、男爵殿を殴ったのです」。

老人は安楽椅子から飛び上がった。「どこにおられる、誰です」、騎兵隊長を見て、「貴方のことですか」。

「彼の頭にシャンパンの瓶を投げ付けたと思われます」と章支配人は鈍く、無愛想に沈み込んで嘆いた。

「素晴らしい」と老人は叫んだ、「シャンパンの瓶、一でかした。貴方ではないのですか、貴方の友人ですか。貴方の友人に会わせてください。お礼を言わなければならぬ。出来ないのですか。どうして出来ないのです」。

「貴方の患者は、私の友を一それに六人ほどの他の者達を一不可解な仕方で酩酊させています」。

「まあ、そうですね」と枢密顧問官シュレックは言った、「普通の悪辣な奸計です」と彼は観念して座った、「正常な状態に戻しましょう。誰も損害を受けてはなりません。貴方は、いとも尊い総支配人殿、まだ『帝国男爵』の肩書き等々で騙されているようにお見受け致します。お話ししましょう。この帝国男爵は世にも最もいい加減な、最も墮落した、最も卑怯極まる、最も加虐的な若造です。その上臆病なのです」。

「枢密顧問官殿」と総支配人は文字通り頼んだ。

「そうなのです」と枢密顧問官は輝いた、「彼は自惚れているのです。浪費癖で禁治産宣告を受けたが故に、一度邪悪な事件で、五十一条項により無罪になったが故に、自分は何でも出来ると思っっているのです。怠惰で何の敬意も抱かず、一滴の人間の感情もありません、...」。彼は新たに燃え上がった、「朝に晩にこの若造は痛い目に遭わなければなりません。牢獄に、少なくとも国の精神病院に入れる必要があります、...。すると悪事は止むでしょうが、...」。

「しかし彼は貴方の施設での、一哀れな患者なのでしょう」と総支配人は頼んだ。

「残念ながら」と枢密顧問官は罵った、「残念ながら今でもそうなのです。彼を酸いビールのように、私の同僚に差し出すのですが、誰も引き受けようとしません。もっとも一番支払いの高い患者です。しかし患者なもんか。単に意地悪な猿だ。一私が今また私の施設に連れて帰り、勿論鍵のされた区画に、格子があって、確実なドアの背後に入れたら、四週間は保ちましょう。八週間も、静かにしていきましょう、一殊に貴方の友人がきちんと殴ったのであれば、...」。

「十五分前、彼はほとんど意識がありませんでした」と方向転換の総支配人は言った。

「素晴らしい。一しかしまたいい気になることでしょう。彼は無抵抗の病人をとことん苦しめます。煙草を盗み、すべての看護人をからかい、私と私の助手達を狂気に駆り立てます。...それというのも馬鹿ではないからで、悪魔のようにずる賢い。そしてまた飛び出すのです。我々は精一杯注意します。常に彼は一人の愚か者を見つけて、ペテンにかけるのです、...彼は金を借り、金を盗みます、...私は何もできない」と老人は歯ぎしりした、「私は見張ることにします。法は彼の味方です。彼の精神力を完全に抑えることはできません、...」。

彼は突然老いて、まことに疲れ果てて、座っていた。「二十四時間私は車で彼の後を追って来ました」。枢密顧問官は疲れて周りを見回した、「彼と縁を切りたいところです」と彼はまた絶望して呻いた、「しかし彼が自由になったら、一いや、それに責任は負えない」。彼は思案した、「少なくとも、最終的なこと、費用を、算定することにしまし

よう。ひょっとしたら彼の母親にとって、
一 彼には残念ながら一人の母親がいて、
一 彼のために支払うことがいつか嫌になるかもしれません。支配人殿、算定をお願いしたい、リストを、...」。

「そうですね」と支配人は躊躇いながら言った、「沢山のアルコールが消費せられていまず、シャンペン、コニャック、...」。

「阿呆な」と枢密顧問官は立腹した、「それは些事です。シャンペン、コニャック、いや、損害者は皆賠償の権利を有します。彼が酩酊させた六名ほどの人間と耳にしました、...例えば貴方の友人」。

「私の友人については分かりませんが、...」とフォン・ブラックヴィッツは躊躇いながら言い始めた。

「後生です」と枢密顧問官は立腹した、「阿呆なことはしないでください。済みません、勿論、私の言うてはならないことですが、本当に阿呆なことはしないでください。費用が高くつくほど、母親がこの若造を本当にある日、しっかりした精神病施設に閉じ込める見込みが早く生ずるのです。人類にとって一つの貢献をなさるのです、...」。

騎兵隊長はまず総支配人を見、それからまだ差し込まれている解雇所見のタイプライターを見つめた。

「私の友は、ここで副支配人兼応接課長ですが、勿論こちらのホテル責任者から解雇されることになっています、勤務中に酩酊したが故に、...」と彼は躊躇いながら言った。

「素晴らしい」と枢密顧問官は叫んだ、しかし今度は総支配人が遮った。

「フォン・ブラックヴィッツ氏に残念ながら反論しなければなりません」と彼は急いで言った、「私どもはフォン・シュトゥットマン氏に長めの休暇を要請します。三ヵ月でしょうか、それどころか半年でしょうか。この期間にフォン・シュトゥットマン氏は有能ですから、すぐに別の職を見いだせましょう。私どもは彼の解雇を」と総支配人は精力的に、しかし味気なく言った、「勤務中の酩酊故とはしません。別な活動へ転職するよう依頼します。ホテルマンというのは、どのような状況下でも目立ってはならないからです。フォン・シュトゥットマン氏は残念ながらとても目立ってしまいました。多くの従業員や更に多くの客人の前で、だらしない服で、完全に酩酊して、ホールの階段から転げ落ちましたので」。

「それでは」と枢密顧問官は満足して言った、「失職した職の弁償の他に、明らかに慰謝料も問題となりましょう。それは率直に嬉しい明かりが見えます。これがまずようやくベルゲン少年にとどめを刺すことになっても、不思議には思われません。貴方の友人にはどう連絡できますか。貴方の許ですか。有り難うございます。貴方の住所をメモしましょう。二、三日したら、私が連絡致します。本当に素晴らしい。ちなみに勿論支払いは安定した通貨です、
一 保証致しますが、費用はいくらかかっても構いません、
一 いや、案じないでください。私が気兼ねすると思いますか。私は金輪際、気兼ねしません。誰も、残念ながら、痛まないのです」。

騎兵隊長は起き上がった。この人生は奇妙だ。ここでとにかく現実に一人階段から転げ落ちて、そのことで心配事が消えた。フォン・シュトゥットマン氏はノイローエへ来られよう、気苦労のない男だ、何なら支払う客人だ、自分はもはや一人っきりでない。

彼は辞去した。今一度枢密顧問官は、立派な殴打をなした友人と握手することができな

いことを残念がった。

フォン・ブラックヴィッツがドアから出ようとしたとき、ドアが開いて、半ば看護人のテュルケに支えられ、半ば連行されて、赤い地に黄色の模様のある人物がよろよろ入って来た。青い隈の目で、情けない表情の腫れた顔をしていた。臆病げに這う視線で見苦しかった。

「ベルゲン」と枢密顧問官の声が鶏の声のように甲高く鳴いた、「ベルゲン、こちらに来なさい」。

臆病者が膝を付いた。パジャマ姿で、豪華で情けなく、彼は跪いた。

「枢密顧問官殿」と彼は懇願した、「何もしないでください。私を精神病院へ入れないでください。私は何もしていません。彼らはシャンパンを全く楽しんで飲んだのです、...」。

「ベルゲン」と枢密顧問官は説明した、「まず煙草を取り上げよう」。

「枢密顧問官殿、お願いします、そうしないでください。私は我慢できないとご承知でしょう。煙草なしには生きられません。それにただ天井に発砲したのです。あの殿方が飲むとしないので、...」。

フォン・ブラックヴィッツは、こっそりと背後のドアを閉めた。それは二重の、クッション付きのドアであった。惨めな奴の泣き声、子供の純真さと無邪気さを失った一人の子供の泣き声が反響した。

まずはまたノイローエへ帰ろう、とフォン・ブラックヴィッツは考えた。ベルリンには反吐が出る。いや、ここは狂った紙幣印刷機であるばかりではない、と彼は更に考えて、薄暗い、手入れされた檜の木のドアの並ぶ清潔な通路に沿って眺めた。すべてはまだきちんとした、清潔な人生に見える。しかし腐っている。腐食している。彼らの骨に刺さっているのは、相変わらず戦争なのだろうか。私には分からない。いずれにせよ、理解できない。

彼は通路をゆっくりと歩いて、ホールに来て、友の部屋を尋ねた。一台のエレベーターが屋根裏まで彼を連れて行った。ベッドの縁に、頭を両手に置いて、フォン・シュトゥットマンが座っていた。

「ひどい二日酔いだ、ブラックヴィッツ」と彼は見上げて言った、「私と一緒に三十分、新鮮な空気を吸いに出掛ける時間があるかい」。

「私はいつでも暇だ」と騎兵隊長は突然、陽気に言った、「君のためなら、新鮮な空気のためなら。まずは君のカラーを結ばせてくれ、...」。

45

黒人マイヤーは自分の食事をハルティヒ夫人に贈る

小さな田畑検査官マイヤーは、酩酊で頭がガンガンしながら、いつものようにベッドに身を投げ出していた。汚れの付いた靴を履き、衣服は雨で濡れていた。開いた窓の外では相変わらず天から雨音がした。牛小屋や豚小屋から罵る声がした。マイヤーは聞くとともに、ぼんやり聞いていた。

奴等は何をしているのだ、と彼は考えた。何を考えている、いや、私は眠ろう。眠って、忘れなければならない。目覚めたら、すべて嘘だと分かる。

彼は手を眼前に置いた。すると周りが暗くなった。いや、この暗さは結構。暗さは黒い、黒いのは無だ。無のあるところ、そこには何もなかったのだ、何も起きなかったし、何もしくじっていない。

しかし暗さは灰色となり、灰色はもっと明るくなる。もっと明るくなるとはつきりしてくる。そこに机があり、瓶があり、グラスがある、...そこに手紙がある。

いや、一体どうしたらいい、と小さなマイヤーは考えて、手で目をよりしっかりと押さえた。ほら、また黒くなった。しかしこの黒から明るい歯車が回転する。多彩な色で回転し、ますます速く回る。目眩がし、気分が悪い。

今や彼はベッドで半ば起き、まだ日中の明るさの部屋を凝視した。反吐を覚えた。彼は多くを克明に見分けた。洗面台の隣りの、永遠に臭うトイレのバケツから、鏡の周りの娘達の全身の裸の写真に至るまで。この写真は彼があらゆる雑誌から切り抜いて壁紙にピン留めしたものであった。

彼の部屋には吐き気がした。彼の状態は、過ぎた出来事同様に吐き気がした。彼は、自分の今の状況から抜け出る何かをしたかったし、何か全く別様になりたかった。しかし彼はただそこに座っていた。だらしなく、腫れた顔をして、下唇は垂れて、湿っていて、目は突き出ていた。 — 彼は何一つ出来なかった。すべてが彼の身に降りかかって、ただ彼は耐え、待たなければならなかった。 — 何も意地悪なことをする気はなかったのに。少なくとも眠れたらいいのだが。

有り難い、ノックの音がする — 願ってもない小さな変化、 — 接続している事務室のドアの方だ。彼はかすれ声で「お入り」と吠えた。ノックの男が躊躇っているのも、更に彼は声を上げた、「入れ、ド阿呆」。

しかしすぐにちょっとショックを受けた。ひょっとして、自分がド阿呆と呼んではならない人、枢密顧問官とか恵み深いご夫人であるかもしれない、と。そうになったらまたドジを踏むことになる。 — ああ—あ。

しかし単に老代官のコヴァレフスキーであった。

「何の用だ」とマイヤーはすぐに叱り付けた。自分の憤慨を吐き出す相手を見つけて喜んでいた。

「検査官殿、ただお聞きしたいのです」とこの老公は帽子を手に、謙虚に言った、「つまりベルリンの娘から電報を貰いまして、明日早朝十時の列車で着くというのです、...」。

「そうかい、それではそのことを聞きたかったわけだ、コヴァレフスキー」とマイヤーは嘲笑して言った、「それで聞いたのだな、だからまた行ってよろしい」。

「ただ荷物のことなのです」と代官は言った、「明日一台乗り物が駅へ行きますか」。

「確かに行くだろう」とマイヤーは言った、「明日は一杯乗り物が駅へ向かうことだろう。オスターデでも、マイエンブルクでも、フランクフルトでも、きつとな」。

「私が聞きたいのはただ」とコヴァレフスキーは執拗に説明した。「娘の荷物を載せられる我らの乗り物の一台が駅へ向かうかどうかです」。

「そういうことか」とマイヤーは嘲った、「我らの乗り物について話すとは、代官よ、大して洒落ているな」。

老代官は諦めなかった。彼は数世代の検査官を経験していた。今の検査官はきっと歴代最悪であったろう。しかし哀れな男は強い男が一度「いいよ」と言うまで百度頼まなけれ

ばならない。時に小さなマイヤーも変わることがある。彼はとにかくそんな風で、郎党をからかうのが好きである。これを悪く考えてはならない。

「ただトランクのことなのです、検査官殿」と彼は頼んだ。「ゾフィーは歩くことは構いません。歩くのは好きです」。

「でもそれより長々と寝そべっていたいのだろう、な、コヴァレフスキー」とマイヤーはにやりと笑った。

老公は静かに立っていた、彼は顔を歪めなかった、「ひょっとしたら、百姓達の中の一人が駅へ向かうかもしれない」と彼は小声で独り言を言い、考えた。

しかし今やマイヤーは満足していた。彼は自分の憤懣を少しばかり発散させていて、自分に全く力がないわけではないと感じていた。

「そうだな、もう出て行っていいぞ、コヴァレフスキー」と全く恵み深く彼は言った、「十時の列車で刈り手と騎兵隊長も来る。きっとゾフィンカのための席もあるだろう。一 出る、古カラス、臭いぞ」と彼は突然また叫んだ。口ごもりながら、「有り難うございます」と「良い晩を」と代官は言って、外に出た。

マイヤー、黒人マイヤーはまた自分と自分の考えの許に一人っきりとなって、早速気分が滅入った。せめて眠れたらいいのだがと再び独り言をつぶやいた。沢山飲めば、どの阿呆も眠れるというのに、私は眠れない、勿論私はいつも運が悪い。

自分はひょっとしたらまだ飲み足りないのではという考えが生じた。彼は料亭で鼻歌を歌っているときに、本来とても酩酊していた、今やまた醒めてしまった。もう一度居酒屋へ行けよう。しかし面倒くさい。その上、持参する金すべてを払わなければならないだろう。勘定を思うとぞっとする。まあ、アマンダが今晚姿をきっと見せよう。すると走って行って、一本のシュナップスを買って来よう。それで彼女は少なくとも一仕事するわけだ。今日は女の匂いは嗅ぎたくない。今日は女の匂いは閉口だ。一 ヴァイオが自分の前であんなに長々と寝そべっていなかったら、自分はこんな阿呆なことは何もしなかっただろう。あんなことされたら、男はたまらんからな。

マイヤーは無器用に、汚れて、湿ったベッドから起き上がって、よろよろと千鳥足で部屋の中を歩いた。頭の中を色々なことが過った。例えば森林官は言っていた、さっさとトランクに詰めて、出て行くことだ、と。

トランクは衣装棚の上にあった。彼は二個のスーツケースを持っていた。普通の工芸厚紙の崩れかかったものと、前回の職の時以来使っている洒落た革のケースのものであった。彼は床の上にただ立っていた。マイヤーはうなじに頭を収めて、満足げに上のこのケースを盗み見た。彼は再三、この安い買い物を見て喜んだ。

トランクを見ると、人は旅のことを考える。旅のことを考えると、旅行費のことが思い浮かぶ。接続した事務所のドア越しに視線を向けずとも、全く自然にマイヤーは隣りの金庫を思い浮かべた。巨大な、緑色に塗られた丸太で、その金箔のアラベスク模様は歳月で汚い黄色に変わっていた。

通常騎兵隊長が金庫の鍵を持っていて、単に給料の都度とかその他の支出の際に、必要な金を取り出していた。マイヤーは金の件では完全に信頼されていたが、しかし騎兵隊長はとにかく偉い男で、不信感が強かった。まさに自分の不信も何ら根本的に役立たなかったと彼に分かったら、まことに結構なことであろう。

マイヤーは肩で事務所のドアを開けて、思案して金庫の前に立った。昨晚騎兵隊長は現在金高を数え上げた、二回も数えた。一 金庫には全く立派な大金がある。検査官マイヤーの三年の給料分以上である。マイヤーはポケットで金庫の鍵を没頭して握っていた。

一 彼は鍵を取り出さなかった。そして 一 金庫を開けなかった。

いや、そんな愚かなことはしない、とマイヤーは考えた。

普段彼がして来たこと、これはすべて立派なものであった。だから逃げて構わない。逃げたからといって、刑務所には入らない。逃げること、これは問題ない。しばらくしたら、いつでもまた新たな職があろう。何故逃げたか、本来上司は調書に書かない。しかし刑務所に入ることは、マイヤーはとて抵抗があった。

金を得ても、一人頭ただの一週間か二週間で消えることだろう、とマイヤーは一人で考えた。すると、すっからかんになって、新しい職にも就けない。捜査されるからな。

いや、むしろ盗まないことだ。

それでもなお長く、彼は金庫の前に立っていた。それほど金庫は魅了した。

すべての惨めさから逃げよう、と彼は考えた。皆が長く探しはしない。ベルリンでは偽造紙幣が安く手に入るそう。どこで手に入るか知らなければならないが。手紙を私が渡さなかったと少尉が知るまで、どれほどの時間かかろうか。まあ、今晚二人は初めて会えないわけだ。愛しいヴァイオよ、ベッドで身悶えしなければならぬだろうな。

彼は他人の不幸を喜び、にやりと笑った。

再びノックの音がして、すぐにマイヤーは金庫から離れ、壁に、できるだけさりげない風に寄りかかって、「お入り」と叫んだ。一 今回は全く作法通りであった。しかし作法は全く必要なかったろう。今回も誰も仰々しくなく、単に給仕で、八人の子持ちの御者の夫人、ハルティヒ夫人が入って来た。

「夕食です、検査官様」と夫人は言った。

マイヤーは、彼女に向こうの彼の部屋の汚れたベッドを見られたくなかった（後でアマンダに少しばかり良くして貰えばいい）、彼は今喧嘩したくなかった。「書き物机の上に置いてくれ」と彼は言った、「一体夕食は何だ」。

「女達は何を貴方に求めているのか分からないわね」とハルティヒ夫人は言って、鉢の蓋を取った、「今度は向こうのアルムガルトも狙っているわね。...焼きたての肉に、紫キャベツ、検査官の夕食用、...」。

「うえっ」とマイヤーは言った、「ニシンの方がいいのに。一 ああ、一 全部脂身、一 つまりだ、一杯飲んでしまっ」。

「見れば分かるよ」とハルティヒ夫人は証した、「男どもは酒には目がないから。女どもがそんなことをしようものなら。一 アマンダも一緒だったの」。

「何を言う、女は飲むのに必要ない」。彼は笑った。突然彼は全く元気になり、陽気になった。「ハルティヒ、どんなかい。食べるの好きか。私は今日食べない」。

ハルティヒ夫人の顔が輝いた、「私の老夫が笑い声を上げそう。さっと、二、三個のジャガイモを煮立てたら、夫と私に十分だわ」。

「駄目だ」とマイヤーは壁際から間延びして話した、「これは、ハルティヒ、おまえさん用だ。親父のためのものではない。奴を力づけるために餌をやると思うかい。そんな酔狂なこと。違う、貴女が食べるなら、ここで食べなさい。それも即刻」。

彼は彼女を凝視した。

「ここで」とハルティヒ夫人は尋ねて、また黒人マイヤーを凝視した。

両人の声が二人とも変わっていた、ほとんど小声であった。

「ここで」と黒人マイヤーは答えた。

「それじゃ」とハルティヒ夫人は更に小声で言った、「まず窓を閉めて、カーテンを少し引くことにしましょう。誰かに私がここで食べているのを見られたら、...」。

マイヤーは彼女に答えず、彼女が両窓を閉めて、丁寧にカーテンを引くのを目で追っていた。「鍵も閉めろ」と彼は小声で言った。

彼女は彼を見つめ、それからそうした。彼女は書き物机の上にある盆の前に腰掛けた。

「それでは頂きましょう」と彼女はわざと威勢良く言った。

彼はまた返事しなかった。彼は彼女が肉を皿に置き、それからジャガイモ、それから紫キャベツを置くのを注意深く見守っていた。さて、彼女はその上にソースをスプーンでかけた。...

「ハルティヒ、聞いてくれ」と彼は小声で言った。

「何」と彼女は同様に尋ね、見上げず、一見全く食事に取りかかっていた。

「言いたいのはな、...」と彼は間延びして言った、「そうだ、一 ブラウスのボタンは前の方か後の方か」。

「前よ」と彼女は全く小声で言い、見上げず、肉を切り始めた、「見たいの」。

「そうだ」と彼は言った。そして苛立って、「外せよ」。

「自分でしなさいよ」と彼女は言った、「そうしないと、食事が冷めてしまう。一 あら、あら、一 いや、素敵、...美味しい食事、...いや、...いや、...」。

46

レーダーとクニーブッシュと策謀中のヴァイオ

ヴァイオ・フォン・ブラックヴィッツは、彼女の母親と夕食で席に着いていた。

従者レーダーは真面目な挙措で、配膳台の側に立っていた。レーダーは、二十歳を少し過ぎたばかりであったが、真面目な従者タイプであった。彼は自分の主人一家がいつの日か、この「湿地の小屋」から向こうの老人達の宮殿へ引っ越すであろうし、そうなったらもはや、従者ではなく、従者見習いを従えた「執事」となるであろうという思いに全身貫かれていた。それ故また、一 非難の余地なく装われた外的作法にもかかわらず、一 老枢密顧問官とその妻とを、彼の主人一家にふさわしいものを邪魔立てしている輩と見なしていた。とりわけ向こうの老エリアスを憎んでいた。エリアスはすでにそう呼ばれているように、家系の銀製品を差配していた。従者レーダーの名前はフーベルトで、一 それで主人一家からはそうも呼ばれていた。

フーベルトは食卓で何か用を命じられないか、食卓に目を向けていた。彼は自分の若干皺の寄った顔の表情を変えなかったが、恵み深い御令嬢が、恵み深い夫人を騙す様を見て、はなはだ喜んでいた。フーベルトは料理番のアルムガルトと小間使いのロツテの傍ら、この小さな家政では、ほとんどすることがなくて、それですべてを体験し、見聞するという仕事を見つけていた。フーベルトはとても沢山知っていた、一 例えば彼は、恵み深い

御令嬢がどのように午後を過ごしたか、正確に知っていた。恵み深いご夫人が知らないことである。

「あなた、今日の午後、祖父の鷺鳥も見ていたの」とフーベルトはフォン・ブラックヴィッツ夫人の質問を耳にした。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は、とても恰幅の良い夫人で、ひょっとしたら肥満気味であったかもしれないが、しかしそうと気付かされるのは、夫人が背の高い、痩せた騎兵隊長の側に立っているときであった。夫人は、女性であることが楽しく、女性であることが幸せであり、その上田舎生活が好きで、田舎がこの愛に無尽蔵の新鮮なもので感謝しているように見える女性に特有の、すべての官能的魅力を備えていた。

ヴァイオは非難めいて口を尖らせた。「でも、ママ、今日の午後は雷雨だったのよ」。

フーベルトは理解した。ヴィオレット嬢は今晚、全く幼い少女の演技をしている、と。彼女は好んでこの振りをする。殊に、何か特別大人風のことを味わったときにはこうするのである。かくて両親は、誤った、一 つまり正しい見解に至らない。

「本当に有り難いんだけど、ヴィオレット」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は言った、「祖父の鷺鳥を見張ってくれたら。鷺鳥があそこのソラマメ畑へ行ったら、パパが立腹すると知っているでしょう。雷雨が始まったのはやっと六時よ」。

「私が鷺鳥だったら、私も祖父の古い、湿った公園に行きたいと思わないでしょう。酸っぱい草があるし」とヴァイオは説明した。相変わらず、口を歪めていた、「公園は臭いと思うわ」。

従者のフーベルトは、恵み深い御令嬢がよくこっそりと枢密顧問官の公園へ行くのを知っており、この返事の用心したカマトトぶりに大いに夢中になった。

「でも、ヴァイオ、臭うなんて。食事中よ」。彼女の視線は（静かに微笑して）従者レーダーに触れた。レーダーは非難の余地のない、すでに全く青臭くない皺の寄った顔をした。

「まあ、ママ、私は行きません、そこには、一 死体の臭いがすると思うの、...」。

「そんな、ヴァイオ」。恵み深い夫人は、フォークの柄で勢いよくテーブルを叩いた。「もう沢山。時に本当に思うわ。もう少しばかりもっと大人になって欲しい、と」。

「そう思う、ママ。ママは私ほどのとき、すでにもっと大人だったの」。

ヴァイオはこの質問の際、全く輝くような、全く無邪気な顔をした。一 それでも従者レーダーは考えた、この些細な単純さは、ひょっとして、母親の若い頃の不始末について若干耳にしているからだろうか、と。一人の百姓の若者を、娘の寝室の窓から叩き出したという老枢密顧問官の噂が周囲にはあった。ひょっとして、この噂はまさに本当かもしれない。いずれにせよ、フーベルトは、恵み深い夫人の次の質問はこの噂に全く良く似合っていると思った。

彼女は発した、「今日の午後、一体何を長く検査官マイヤーと話したの」。

「まあ」とヴァイオは拒絶の振りをして、また不満げに下唇を出した、「老いぼれ黒人マイヤー」。突然彼女は笑った、「あのね、ママ。ここらの村のすべての娘達や女達が彼を追いかけているのよ、一 あの人は醜いこと例えば、..何というか、あの老いぼれアブラハムのようなのに」（アブラハムは馬小屋に飼われている雄山羊で、古い騎兵信仰によれば、すべての病気を駆逐するとされていた）。

「デザートを、フーベルト」と極めて冷静に、しかしまことに危険に輝く目をして恵み深い夫人が催促した。

レーダーは部屋から、少し残念であったが、出て行った。ヴァイオは口を滑らせた。今や確実に小言を食らうことだろう。娘は少しばかり大胆なことを口にしてしまった。今や恵み深いご夫人も見逃すことはないだろう。

今や恵み深い夫人の言葉をフーベルトは聞きたかったし、とりわけ令嬢の返事を聞きたかった。しかしフーベルトはドアで聞き耳を立てなかった。真っ直ぐに台所へ向かった。男性の分別があれば、何かと知る手立てはいくらもある。このような聞き耳を立てて、模範的な従者という主人一家の信頼を損なう必要はない。

台所には、台所用テーブルに待機して、老森林官クニブッシュが座っていた。

「今晚は、レーダーさん」と彼はとても丁重に言った。というのは全く一人で自活している、寡黙な従者レーダーは、一つの権勢と見なされたからである。「食事はもう済んだのかい」。

「デザートだ、アルムガルト」とレーダーは言って、盆の食器を並べ始めた、「今晚は、クニブッシュさん。誰と面会したいのです。騎兵隊長殿は明日になってようやく戻って来ます」。

「恵み深いご夫人を願いたい」と森林官クニブッシュは用心して言った。つまり彼は長いこと熟考して、自分の知識を中年世代に伝えるのが良いという結論に達したのであった。恵み深いご令嬢は余りに若すぎて、老人の手には余る。

「貴方のことを伝えましょう、クニブッシュさん」とレーダーは言った。

「レーダーさん」とクニブッシュは用心して頼んだ、「出来ることなら、ヴァイオ嬢が居合わせない方がいいのだが」。

レーダーの皺の多い顔は更に皺が寄った。時間を稼ぐために、彼は料理女に声をかけた、「急いでくれ、アルムガルト。私が来る前に、チーズ皿の飾り付けは済ませておくように、もう百度も言ったろう」。

「この暑さですよ」とこの従者が嫌いな料理女は嘲った、「バターの玉がすべてくっついちゃうのよ」。

「バターは最後の時に、冷蔵庫から取り出せばいいのだ。今頃チーズを切るとは」。そして森林官に小声で言った、「どうして恵み深い御令嬢が居合わせてはいけないのです」。

森林官は明らかに当惑した。「そうだな、　－　つまりだ、　－　若い娘に何でも聞かせるわけにいかんだろう、...」。

レーダーはこの当惑者を偶像を見るように真剣に眺めた、「若い娘にふさわしくないものとは何です、クニブッシュさん」と彼は尋ねた。すべての好奇心の痕跡を消していた。

クニブッシュは強いて嘘をつくことになって、赤面した。「そうだな、レーダーさん。分かるだろう、とても若いときには、まあ、発情期とかがあって、...」。

レーダーは彼の当惑を楽しんだ、「今、発情期じゃありませんよ」と彼は軽侮して言った、「まあ、分かります。有り難う。ユニフォーム[軍服]、　－　ウ・ニ・フォームを合言葉としましょう」。

彼は、打ち砕かれて混乱した森林官を、その無表情の、冷ややかな[魚のような]目で見つめた。それから料理女に向かって言った、「早くして、アルムガルト。　－　恵み深い

ご夫人に叱られたら、誰のせいも、告げるぞ。 — 私に話しかけないでくれよ。そもそもあなたとは口をきかんから」。

彼は、盆を手に、台所から去った。真面目に、若々しくはなく、かなり秘密めかしていた。

「後で話しましょう、クニブツシュさん」と彼は頷き、消えた。取り次ぎをお願いしたが、どうなるのかさっぱり分からなかった。

「あの猿公、うぬぼれの強いこと」と料理女のアルムガルトは彼の背後に罵りを浴びせた。「あれとは関わらない方がいいよ、クニブツシュさん。あれはただあなたから聞き出して、 — 後ですべて騎兵隊長に告げ口するのだから」。

「いつもあんたにはあんな風なのか」と森林官は尋ねた。

「いつもよ」と彼女は怒って叫んだ、「ロツテとか私にはまともな言葉をかけない。騎兵隊長もこの猿公ほどには気取っていないよ。あの人が私どもと一緒にテーブルで食べると思う？」。彼女は森林官をじっと見つめた。森林官は当惑して何か不明のことを口ごもった。「いいえ、皿を手に持って、自分の部屋へ行くのよ。思うに、クニブツシュさん」と彼女は秘密めかして囁いた、「あの人はそもそも — 変わっているのよ。あの人は女どもに関心がない。あの人は、...」。

「何だと言うのかい」と森林官は期待一杯に尋ねた。

「いやだ、私は何も関わりたくない」とアルムガルトは精力的に説明した、「あの人も、ただ騎兵隊長の煙草だけ吸うと思う？」。

「そうだな、そうするだろう」と森林官は大いに期待して尋ねた。「従者は皆そうするもんだらう。エリアスもいつも老主人の葉巻を吸っている。匂いで分かる。枢密顧問官が時に私に一本葉巻を恵んでくださるからな」。

「何ですって。エリアスはそんなことをするの。あの老頑固者の鼻先に突き付けてやりましょう。ご主人の葉巻を失敬して、 — 私には、私が宮殿の入口で靴をきちんと拭かなかったと叱るくせに」。

「後生だ、アルムガルト。いや、そんなこと言ってくれるな。うろたえてしまうな」。老公は不安に駆られてしまった、「きっと全く別の葉巻だろう。フーベルトも騎兵隊長の煙草を吸うと、さっき聞いたから、...」。

「そんなこと言っていない。まさにその逆です。あの人は煙草を吸わないし、飲まないし、ドアで聞き耳を立てないし、自分はそんなことをする輩ではないととても自惚れていて、阿呆なシラミ野郎、...」。

「どうも有り難うよ」とがらがら声が出て、両人ははなはだびっくりして従者レーダーの顔を見つめた（古い蛙の顔とアルムガルトは憤激して思った）。「私は愚かなシラミ野郎というわけだ。人々が一人の男のことをどう思っているか知るの参考になる。 — アルムガルト、恵み深いご夫人が呼びだ。話しがあるそう。チーズ皿のことで私が告げ口をしたという話しではない。そんなこと話しにならない。しかし私が愚かなシラミ野郎に見えると、夫人に注進してもいいぞ。...クニブツシュさん、 — 私と一緒に行きましょう」。

従順に、しかし日常生活の煩雑さすべてに気が重くなって、森林官は彼の後を付いて行った。当惑して料理女アルムガルトの方を盗み見ると、彼女は真っ赤になって、涙を堪え

ていた。

従者レーダーの部屋は単に細長い小部屋で、別荘の地階にあり、石炭置き場と洗濯室の間にあった。これがまた、従者レーダーにとって、従者エリアスを恨む理由となっていた。というのはエリアスは、宮殿の上階に立派な、大きな、二つ窓の部屋を有していたからである。しかし従者フーベルトの部屋は、単に鉄製の折り畳みベッドと、鉄製の洗面台、庭園からの鉄製の古い折り畳み椅子、唐檜材の古いぐらぐらする戸棚があるだけであった。この部屋に人が住んでいる気配はなかった。衣服は見当たらないし、住人の些細な日用品も見当たらない。洗面台には石鹸やハンカチすら見えなかった。フーベルト・レーダーは浴室で体を洗ったからである。

「それでは」と従者レーダーは言った、しかしドアは細めに開けられていた、「それでは、一 まあ、この椅子に掛けてください。彼女がやって来ます。その時は立ち上がって、席を譲ってください」。

「誰が来るのだい」とクニーブッシュは混乱して尋ねた。

「余りお喋りしないことです、クニーブッシュさん」と真面目に不同意を示して従者は言った、「男はお喋りしません、一 とりわけ女どもとは」。

「私は何も言わなかった」と森林官は弁明した。

「彼女は喚いていたから、今はまず顔を洗っていることでしょう」と皺顔の偶像は言った、「しかし彼女が恵み深いご夫人の許へ行ったら、彼女がやって来ます、...」。

「誰が来るのか、誰が恵み深いご夫人の許へ行くのか」と森林官は、完全に混乱して尋ねた。

「ユニフォーム[軍服]はユニフォームです」と従者は彼に教えた、「勿論私のお仕着せのことではありません。あなたの緑色の服のことでもありません。あなたは単に私設森林官に過ぎませんから。あなたが国営の森林官であっても、これもまた別でしょう」。

クニーブッシュはうろたえて言った、「そう、そうだな、一 勿論」。彼はいつかレーダーの謎の言葉の若干が理解できようと、相変わらず期待していた。

「民間人はユニフォーム達[軍服達]に混じるべきではありません」と従者は真面目に告げた。彼は長いこと思案していて、額には多くの皺が見られた。それから彼はドアを少しばかり開けた。

彼は聞き耳を立てていた。さて彼は顔き、部屋を横切って森林官の許へ行き、小聲で、非難を一杯込めて、言った。「あなたは民間人です、クニーブッシュさん。それなのにユニフォーム達[軍服達]に混じろうとなさっている」。

「いや、そうではない」と森林官は驚いて叫んだ。

「まだ、それは目立っていません、クニーブッシュさん」と従者は言って、少し開けられたドアの許に戻って、また聞き耳を立てた。「枢密顧問官殿の寵愛は何でしょうか」。

「知らん、何故だい」と森林官は不思議に思った、「レーダーさん、貴方がそもそも何を欲しているのか、分からん」。

「本当に知らないのですか」。

「いや、思うに彼の森かな」。

従者は頷いた、「そうだな、死なないかぎり、殿は森林を手放さないだろう、一 それでは森林を誰に遺贈するか」。

彼は期待一杯に森林官を見つめた。

「それは恵み深い老夫人だろう」と森林官は熟慮して言った、「次はビルンバウムの息子。それにこちらには騎兵隊長殿がいるが、...」。

彼はこの件を考えた。

「それで、一体誰に森林を譲るのだ」と従者は保護者然と尋ねた。居残りの学童に何か全く簡単なことを尋ねる風であった。「それとも森林を、二、三の区画に分割するかな」。

「分割か、一 森林を」。クニーブッシュは全く軽視した、「いや、レーダーさん、何てことを考えるのだ。森林が殿の死後分割されたら、殿は墓から出てきて、境界石を投げ飛ばすだろう。森林はどうなるか、すでに記述されているだろう」。

「で、どう記述されているだろうか、クニーブッシュさん」と従者は更に執拗に聞いた、「例えば恵み深い老夫人にか」。

「絶対あり得ない。夫人は、蛇がいるから森へは行かないといつも言っている。いや、レーダーさん、そもそも問題にならない」。

「それともビルンバウムの方か」。

「それも違うな」と森林官は言った、「とても気取っていて、絶えず金を求めているから。いつも息子には罵っている。一 今はレーシングカーを買ったとか、...『借金から逃れる競争だ』と老公は罵っておられた」。

「それではレーシングカーのことも殿は承知なのだな」と従者レーダーは考え込んで言った、「そのことは貴方がきつと話したのだろう、クニーブッシュさん」。

老森林官は真っ赤になって抗議した。しかしフーベルトは全く意に介さなかった。彼はまとめて言った、「そんなわけで森林はこの上の恵み深いご夫人が継承される」。彼は親指で天井を指した。

「しかし殿は騎兵隊長が少しも好きでないだろう」と森林官は案じて反論した、「鷺鳥との関係もまずいし」。

「それでは森林は誰が継ぐのだ」と従者はこだわった。

「そうだな、私には分からないが、...」と森林官は混乱して言った、「更に殿にはヒンター[奥]ポメルンに姉妹の子供達がいるが、しかし、...」。

「一人孫がいるだろう」と従者は尋ねた。

「誰だい」。森林官の口が開いたままになった。「本当なのか。しかしヴィオレット嬢は十五歳になったばかりだ、...」。従者の固まった視線は変わらずに、森林官は声高に考えて言った、「勿論、彼女は殿が待場に連れて行かれる唯一の女性だ、それに間違いはない、...そして木を測定するとき、彼女をいつも連れて行く、折尺とノギスを持ってな。一 いや、レーダーさん。これはまだ誰も知らないし、恵み深い御令嬢もひよっとしたら自分ではまだ知らないだろう、...」。

「それで貴方はユニフォーム達[軍服]に加わろうとした、クニーブッシュさん」と従者レーダーは全く軽蔑して決めつけた。

しかし森林官が更に抗議しようとする前に、廊下で急ぐ足音がし、ヴァイオが入って来た。

「まあ、やっと来られた。ずっと出来ないでいたの。アルムガルトがママにとっても喚いて吠えて、貴方がいつも自分にひどいと言っていたわ。一 貴方は本当にひどい方なの」。

「いいえ」とフーベルトは真面目に答えた、「私はただ彼女に厳格なだけです。そもそも女どもにひどくはありません」。

「まあ、フーベルト、また真面目くさった顔をして。池から上がった鯉のよう。沢山お酢を飲むんでしょ。私もただの女どもの一人だし」。

「いいえ」とフーベルトは説明した、「いつか貴女はレディーとなります。そのときは私の御主人です。それで貴女にひどいことをすることはありません、恵み深い御令嬢」。

「有り難う、フーベルト。貴方は本当にご立派。いつか自負心と矜持とで弾けると思うわ」。

彼女は彼をととても満足して、その軽く突き出た輝くような目で見つめた。突然彼女は真面目になり、秘密めかして囁いた、「フーベルト、アルムガルトがママに、貴方は一人の妖怪だと言ったけど、本当なの」。

従者レーダーは好奇心旺盛な少女をその冷やかな[魚のような]目で動じずに見つめた。その灰色の、皺の多い頬に、色合いの変化は何も見られなかった。

「それはアルムガルトが貴女の目の前で話したことではないでしょう、恵み深い御令嬢」と彼は全く微動もせず決めつけた、「またドアで聞き耳を立てたのでしょうか」。

ヴァioletも顔色を変えなかった。森林官はこの奇妙なカップルが互いに親密なのを驚いて見ていた。レーダーは、私が思っていたよりも抜け目がない。奴にはもっと注意を払わなければなるまい、と彼は一人で考えた。

しかしヴァイオは単に笑っただけであった、「馬鹿なこと言わないで、フーベルト。ちょっとだけ聞き耳を立てないと、そもそも何も分からないのよ。ママは何も説明してくれないし、コウノトリを見かけて、本当にそうなのかと、パパに最近野原で尋ねたら、パパは全く赤面した。可哀想なパパ。とても当惑していたわ。 — それであなたは妖怪なの」。

「森林官クニブッシュもいますよ」とレーダーは騒がず彼女の関心を逸らした。

「あら、勿論、今晚は、クニブッシュ。一体どうしたの。フーベルトがとても秘密めかして。でもフーベルトはいつも秘密めかすのよ。一体何のことです」。

「いや、恵み深い御令嬢」と森林官はうろたえて言った、自分が述べなければならぬ瞬間に出会って、びっくりしたのである。すでに彼にとって一切が混乱していた。自分が何を本当に見て、何をただ推定しているのか分からなくなっていた。それに今これらのすべてを彼女に面と向かって言う勇氣はとてもなかった。ひょっとして黒人マイヤーは自慢していたのではなく、彼女は本当に彼を愛しているのかもしれない。すると自分は見事に勘違いをしていたことになるわう。

「いや、分からないのです、...ただ尋ねたいと思ひまして、...騎兵隊長殿が手に入れたと思うような[三枝角]雄山羊をまた見つけまして、今晚にも騎兵隊長殿が帰っておられるのであれば、と...雄山羊は今までクローバ畑にいましたが、今はハーゼ家のセラデラ[牧草]畑に行っています、...」。

ヴァイオは彼を注意深く見つめた。

しかしレーダーは彼を冷たく軽蔑して眺めた。彼は全く騒がず、森林官が完全に言い間違えてしまうのを待って、それから情け容赦なく言った。「ウ・ニ・フォルム[軍服]のせいなのです、恵み深い御令嬢。私がいなかったら、貴女にではなく、恵み深いご夫人にそのことを伝えていたことでしょう、...」。

「何てこと、クニーブッシュ」とヴィオレットは叱った、「恥を知りなさい。いつも告げ口をして、人の背中でひそひそ話しをして、...」。

そこで森林官は、早速少しばかり弁明するために、村中を通じての触れ回りから居酒屋での呼び止めまえ、委細を話さなければならなかった。それからつつかえながら、小声で、黒人マイヤーの酔っ払った戯言にまで途方もなく狼狽して報告した。要点を[手紙のことを]避けたいと思ったが、上手く行かなかった。ヴァイオとレーダーは仮借なく追求した。「いや、まだ隠しているだろう、クニーブッシュ。すべて話しなさい。私だったらきっと赤面はしない」。

しかし十五歳のヴァイオは赤面していた。彼女は壁際に立っていて、細い隙間を残して目を閉じていた。しかし唇は震えて、息がせわしなかった。

しかし彼女は諦めなかった。倦まず問い続けた。「言いなさい、クニーブッシュ。彼は、それから何と言ったの」。

そこで手紙の件となった。

「彼は全て読み上げたの。何を読み上げた。読み上げた言葉を全て言いなさい。...そう、それで馬鹿なあなたは、私がそれを彼宛に書いたと思ったわけね、こんな男に」。

そこでハーゼ家の切妻板の許でのひらめきが生じた。

「何ですって。貴方は　—　あの殿方に出会ったの。それであの人に何も言わなかったの。ウインクすらしなかったの。すべての羊頭の中で、クニーブッシュ、あなたが最高の羊頭よ」。

森林官は彼女の前に、全身震撼して、咎を感じて立っていた。今や彼も了解した。彼はすべてを完全に間違っ解していた。

「村長が居合わせたのだ」とレーダーが口を挿んだ。

「その通りだけど。でも手紙を彼に渡せたはずでしょう」。

「森林官は手紙を持っていなかった」(と再びレーダー)。

「そうだわね、全く混乱してしまった。でもマイヤーはまだ手紙を持っていて、　—　ひょっとして今も居酒屋にいて、他の人達に見せて。...すぐに出発して、フーベルト」。

「あのマイヤーはとうにまた部屋に戻っています」とフーベルトは動じずに言った、「全く酩酊して、六時過ぎに居酒屋から戻って来た私が貴女に自ら伝えました。しかし提案しますが、ウ・ニ・フォルム[軍服]に、...」。

「その通り、フーベルト。早速出掛けて、あの人に連絡して。きっとあの人に会えるでしょう。まだハーゼ家にいるはず。いや、何も話さなくていいわ、ただ伝えて。私がすぐに話したいから、と。でもどこにしよう。いつもの所と伝えて。...でもここからどうして出られよう。ママが今は禁止するに決まっている」。

「しっ。恵み深いご夫人だ」と全く平静にフーベルト・レーダーが警告した。

「ここで何の陰謀を企んでいるの」とフォン・ブラックヴィッツ夫人が言って、とても驚いて、従者部屋の敷居に立っていた。「ヴィオレット、あなたをずっと探していたのよ。やっとここにいた」。彼女は面々の顔を見た。「どうして皆そんなにうろたえているの」。もっと厳しい声で、「ここで何をしているのか、知りたいわ。すぐに言いなさい、ヴァイオ」。

「済みません、恵み深い奥方様、私が話します」と従者レーダーが口を挿んだ、「もは

やどうしようもありません、恵み深い御令嬢。恵み深いご夫人に話さなければなりません」。息を呑んだ静寂があり、絶望した心があった。

「恵み深い奥方様、率直に申しますと、雄山羊のことです」。

静寂、沈黙。

「どの雄山羊のことです。何という阿呆なことを。ヴァイオ、取り調べますよ、...」。

「いや、クローバ畑の雄山羊のことです。騎兵隊長殿も話されていたのです」とレーダーが言った、「済みません、恵み深い奥方様、私が耳にしたのです。一昨日の夕食の際でした、丁度鯉料理を給仕していました」。

レーダーの情熱の欠けた、容易に論すような声がすべてを灰色の霧の中に閉じ込めた。

「その雄山羊は、騎兵隊長が待場に向かったとき、突然消えたそうです。騎兵隊長殿はとても御執着でした。恵み深い奥方様も自ら耳になさったと思います、...」。

「ここに何故集まっているのか、まだ聞いていませんよ」。

「それでその雄山羊を森林官が今日見つけたのです、恵み深い奥方様。ハーゼ家の牧草地です。今晚射殺する必要があるのです。あちこち移動するものですから。それで私どもは考えたのです。騎兵隊長が留守ですから、恵み深い御令嬢が騎兵隊長に先駆けてびっくりさせようと、と。恵み深い奥方様、私どもが内緒でしようと思ったのは良くないことでした。...私がこう提案したのです、恵み深い奥方様が眠られるまで待とう、と。満月ですから、それで銃を撃てる明かりだと、クニーブッシュさんが言いまして、...」。

「フーベルト、もうその恐ろしいがらがら声は止めなさい」と恵み深いご夫人が言った。明らかに安堵していた。「面白みのない方ね。日中はずっと一口でも語ったら良かろうにと思うけど。でもあなたが語り出したら、すぐにいい加減口を閉じてくれとだけ願いたくなるわ。一 それに小間使い達にもっと親切にしてあげなさい、フーベルト。そうしたからと言って、あなたの王冠から宝石が減るわけでもないでしょう」。

「畏まりました」と従者レーダーは動じず言った。

「それにあなた、ヴァイオ」と恵み深いご夫人は説教を続けた、「あなたは本当に阿呆よ。落ち着いて私に話しておれば良かったのに、そうしても、パパにとって驚きが小さくなるものでないでしょうに。本来なら罰として外出は許さないところです。しかしその雄山羊が今晚だけ牧草地にいるというのであれば、...クニーブッシュ、この娘の側から一歩も離れてはいけません。一 おや、クニーブッシュ、またどうしたのです、何故泣いているのです」。

「いや、単に驚きまして、恵み深い奥方様、奥方様がドアのところに来られて、驚きまして」とこの老公は嘆いた、「それで止められないのです。いや、嬉しい驚きでして、喜びの涙です、...」。

「フーベルト、思うに」と恵み深いご夫人は素っ気なく言った、「あなたもちょっと準備して、一緒に出掛けなさい。さもないと、森で薪泥棒に出会ったら、お人好しのクニーブッシュはまた喜びの涙を流すでしょうから。それでヴァイオは自分一人で切り抜けるように、...」。

「あら、ママ」とヴァイオは言った、「薪泥棒や森の泥棒は恐くないわ」。

「愛するヴィオレット、あなたは万事に不安を抱くべきです」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は精力的に言った、「とりわけ内緒事には不安を抱くべきです。一 それでは、

今言った通り、フーベルトも行きなさい」。

「分かった、ママ」とヴァイオは従順に言った、「ちょっと待ってて。すぐ着替えて来るから」。

そう言って彼女は上に上がった。恵み深いご夫人は、男性二人だけと残ったが、「子供、ヴァイオとの内緒事」のせいで、然るべくがみがみ言った。夫人は完膚なきまでに述べたが、しかしその成果に必ずしも満足していなかった。夫人はまともな夫人として、何か符号が合わないという紛れもない感じを有していた。しかしヴァイオはまだ普通の子供であったし、結局はそうひどいことにはならないだろう。そして、ヴァイオの不作法はいつもかなり無邪気なものだと判明したものだと考えて納得した。ヴァイオの最悪の不作法は、これまで彼女の美しく長い髪をショートカットにして、台無しにしたということであった。このような劣等な悪事もただ一回生じたに過ぎない。

47

灰鷹の看護婦としてのペートラ

アレクサンダー広場の警察拘置所の女性房は完全に満杯であった。この拘置所が建てられ、独房が出来上がったとき、緑色の鉄のプレートのドアには、独房の空気容量も記されていた。そこに何々立方メートルと記されていた。一人の女性囚用に完全に足りるはずであった。それから二番目のベッドが置かれてから、すでに長い年月が経っていた。独房の二台のベッドも最古参の役人にとっては、正常な収容であった。

しかしそれからインフレが生じた。逮捕者の波が溢れに溢れた。二台のベッドの上に二台のベッドが置かれて、一挙に拘置所の収容能力は倍増した。

しかしこれも夙にもはや足りなくなっていた。今や、果てしない列となって、来る日も来る日も警察の緑色の「ルンペン収集車」に集められるように、無差別にそれらの房に詰め込まれた。夕方に二、三のマットが投げ込まれ、その後、二、三の毛布が追加された。そして各自、適宜やりくりせよ。

ペートラ・レーディヒは拘置所のこの過剰な独房の中にいるときほど、見棄てられ、孤独な思いがすることがなかった。中は少しも暗くならうとしなかった。

多分彼女は、拘置所にいるという事実が、崩壊と恥辱を意味するような、安定した生活圏出自の娘達の一人とは言えなかったであろう。彼女は日常の暮らしの続きにいて、貧乏で、友のいない者にとって、また更に何が起こり、どの隅から不幸の風が生ずるか分からない者にとって、この人生は見通しがたい一件であると承知していた。

彼女は、二回目の、はなはだ短い、ここ警察本部での聴取の後、かなり正確に、自分が非難されている件を承知していた。この咎は一部は過去のことであり、一部は間違いであると彼女は知っていた。しかしこのことからどういうことになるのか分からなかった。懲役になるのか、あるいは監視下証明を出されるのか、禁固になるのか、数週か、数ヵ月か、色々考えられた。このことすべては、他の世界の人間同様に、彼女にとっては無縁の、話しかけることの出来ない人間達の手握られていた。

彼女はすぐに医師の許に案内された。しかし人々は果てしない列をなしてドアの前に立っていて、結局こう言われた。「もはや、診察はしない。医師は帰宅した」。

かくてペートラは房に再び連れて行かれた。そしてそこではその間に夕食が出されていて、他の者達が彼女の分を食べていたことが分かった。彼女にとって大したことではなかった。彼女は、自分が先ほど交番でまず十分に食べたと思っていた。ただ片方の耳で、他の女達の諍い、交互に罪をなすりつける諍いを耳にした。下のベッドの太った女性が（最も古い房の住民で、すでに二日前から入っていた）言った言葉、灰鷹が彼女の食事を盗んだというのはきっと正しいのであろう。

しかしそれはどうでも良かった。女達が黙っていた方がもっと良かったであろう。今やまた灰鷹は荒れて、ペートラに対する悪罵と怒声とを始めた。丁度自分が灰鷹と一緒に部屋のに入ったことは、快適ではなかった。しかしこれも我慢しなければならない。この娘にしてもこのように叫び、荒れることも長くは出来ないであろう。彼女がこの房に来たとき、まだ濡れたハンカチのようにぐったりしていた。しかし今やまた落ち着かなくなった。絶えず新たに彼女はペートラに迫って来て、多分ぶん殴りたいところであったろう。ただ彼女にはもはや以前ほど力がなかった。アルコールやコカインのせいのものであって、ペートラは片手で彼女を体から離すことが出来た。灰鷹はそれに対抗せず、それでもますます野蛮に叫んだ。

これは煩わしかった。こうした絶えざる攻撃と叫び声の許では、ペートラは自分の好きな考えに耽ることが出来なかった。その考えはヴォルフガングの件であった。彼は今日のうちにも来るのだろうか。そもそも来るのだろうか。他の人々が彼女について思っていることを今や彼女は承知していた。きっと彼に交番では告げられていることだろう。一彼は今やどう思うだろうか。彼女が彼の身になってみれば、一層早く来ていたことであろう。しかし彼の場合は、どうするのか分からない。

ペートラは房の中で見回した。ベッドの老いた灰色髪的女性に面会時間のことを尋ねたかったが、しかし灰鷹がますますひどく喚いた。勿論他の女性達はそれに支障を感じていず、興味すら示していなかった。二人の褐黒色のジブシー女が、厚かましい、落ち着きの無い鳥の目をして、一緒にマットの片隅にうずくまって、すばやく指を様々に動かしながら、小声で囁いていた。二人は房の他の誰をも見ていなかった。別の下のベッドには、背の高い青白い娘が、すでに毛布の下に這い込んでいた。ただその両肩だけが見え、ぴくついていて泣いているのであろう。一小さな太った女は床几に座って、暗い顔で鼻をほじくっていた。

自分のベッドの端に座っていた灰色髪的女が今や見上げて、苛立って言った。「噛み噛みするのを止めなよ、阿呆な屑女。一 二、三発、口許を殴って、歯を吐き出させてやんな、務所の姉ちゃん」。

「務所の姉ちゃん」と呼びかけられたのはペートラだった。この老婆が彼女をそう呼んだのは、多分彼女が房の住民の中でただ一人、青い囚人服を着ていたからであろう。警察官達は収容の際、すぐに彼女に服を与えたのであった。

しかしペートラは灰鷹を殴りたくなかった。そんなことをしても無意味である。彼女はコカインやアルコールを求めて、我を忘れていた。すでに夜警人が数回房のドアをノックして、静まれと命じていた。すると灰鷹は素早くドアに突進し、物乞いをした。「お願いだから、シュナップスを一杯おくれ。たった一杯、小さいのを。若衆よ、あんたらは飲むだろう。好きで一杯ひっかけるのだろう。一杯おくれよ、若衆、...」。

しかし夜警人の足音が返事もなく響いた、せいぜい一人が小声で笑うくらいであった。すると灰鷹は憤激の発作に駆られて、拳で鉄製のドアを叩いて、警備員達に後から罵声を浴びせた。

しかしゆっくりと灰鷹は変わって行った。時が進むにつれ、房の窓の背後の天は、鈍く、小暗くなって、電気の明かりがドアの上で輝き、この娘は自分がどこにいるのか、何をしているのか、もはや、ますます分からなくなる風であった。多分彼女は自分が地獄にいると思っていたであろう。一匹の動物のように、彼女はあちこち駆け、壁から壁へと絶えず走り、一緒に囚人達には目もくれなかった。ひっきりなしに小声で思わず知らずつぶやいていた。それから突然彼女は立ち止まって、甲高い金切り声で、たまらない痛みに襲われているかのように叫んだ。

再び警備員達がノックし、再び彼らの呼びかけを聞いて、彼女は新たに、心の乱れた物乞いをし、それから荒れた罵声を発した。今回、彼女はドアの方に寄りかかった。ドアの鉄に頭をもたせかけて、情けなく髪をかきむしった灰鷹は、何かに聞き入っているかのようにうずくまった。彼女はつぶやき始めた。「走っている」と彼女はつぶやいた、「私の腹の中でがさがさ動いている。沢山の脚だ。出ようとしている。私の体全体がこいつらで一杯だ。こいつらが出ようとしている」。

震える指で彼女は服を引き裂いて、体を引き離そうとした。「蟻だ」と彼女は嘆いた、「赤い、透明な蟻だ。こいつらが私の中で走っている。 — 静かにしてよ」と彼女は頼んだ、「私には何もない。こいつらにコカインを与えられない」。

彼女は飛び上がった、「コカインを頂戴」と彼女は叫んだ、「コカインをやんなよ、聞いている。コカインを持っているくせに」。

弱々しい叫び声を上げて、灰色髪の女が仰向けに沈み込んだ。防御の試みをするこゝもなく、彼女は小声で呻いて、狂った女性の下になった。

マットの上のジブシーの二人の女は不明瞭な囁きを中断して、にやりと笑いながら、この出来事を見つめていた。ベッドの大柄な娘の両肩はびくつくのを止めた。ゆっくりと彼女は頭を向けて、不安一杯の目と大きな青白い鼻とで、ベッドの方を眺めて、いつでも、すっぽりと掛け布団の下に潜る用意をしていた。床几の上の太った不機嫌な女性は難じて叱った、「静かにしなよ。こんな物音を立てられたら、何も考えられない」。

ペートルは飛んで向かった。弱ってすきんだ生き物を後ろに引いて、その下に横たわっている女性から離すのは容易であった。しかし襲われた女性の髪から、しがみついている手を引き離すことは出来なかった。

「女どもよ、静かにする気はないのか」とドア越しに警備員達が罵った、「この屑ども、髪の毛のつかみ合いをしている。待ちな、鞭打ちをしてやる」。

ペートルは振り向いて、怒ってドアの方に叫びかけた、「中に入って来てください。この娘は発作を起こしているのです。助けてください」。

ドアの背後で一瞬、静寂があった。それから丁重な声をした。「お嬢さん、そうは出来ない。施錠の後には、女性房の中へは入れないのだ。さもないと、我々が何かしたとすぐ言われる」。

別な声をした。「それは単におまえらの策略じゃないか。子供だましじゃないか」。

ペートルは言った、「これじゃいけません。彼女は半分もう狂っています。ここには女

性警備員もいるでしょう。それとも医師が。医師をお願いします」。

「皆もう去った」と丁重な声をした、「この女は収容のとき、そう告げておれば良かったのだが。病室の方に入っていたらうに。五人でこの一人の面倒を見てくれないか」。

そんな雰囲気ではなかった。二人のジプシー女は黙って座っていて、太った女は床几に不機嫌にうずくまっていた、大柄の女は掛け布団の下に潜り込んでいた。老婆は灰鷹の手ひどい鉤爪の下で呻いていた。

しばらく灰鷹はこっそり嗚咽しながら、老婆の横、ベッドに寝ていたが、また叫び始めた。その際、無闇に野蛮に、彼女は老婆のもじゃもじゃ毛を引っ張っていた。老婆も今や叫び声を上げた。

「助けてくださいよ」とペートルは怒って叫んで、両足で鉄製のドアを叩いた。大声を発した。「騒ぎを起こして、拘置所全体が叫び出すようにします」。

すでにその寸前であった。多くの房から静寂を求める荒れた叫び声をした。一人の高い女性の声が、インターナショナルを歌い始めた。

ドアが開け放たれた。制服を着、武装して、しかし囚人達の静かな眠りを妨げないように物静かなフェルトの靴を履いて、二人の警備員がドアの下に立っていた。

「しかし中に入るわけに行かないのだ」と赤いブロンドの口髭で、大柄の青い目の男が言った。「どのようにして欲しいか、言ったろう。お嬢さん、貴女は分別がある。一急いで、出て、一つまみの塩を戸棚から取って来て欲しい」。

ペートルは駆けた。巡査が命じた、「マットの案山子の婆さんよ、毛布を取りな。出来ることをするんだ。連れの者もだ」。

二人のジプシー女は飛び起き、にやりと笑いながら、命じられたことをした。

「ベッドの上の可愛い娘さんよ」と警備員が房の入口から叫んだ、「起きな。コカインを与えよう」。

喜びの声を上げて、灰鷹は飛び上がり、よろめきながら警護員に向かって行った。「話しの分かる人達だ」。

老婆は呻きながら起き上がって、用心深く自分の髪に両手で触れていた。

「離れろ」と赤ブロンド髪の子は灰鷹に向かって叫んだ、「この体から三步離れろ」。そして吟味する視線の後に言った、「いや、本当に仮病ではないな。本物のコカイン中毒だ」。

命令で退かされ、約束で勇気を得て、従順になって、灰鷹は注意深く立っていた。腕をだらしなく垂らして、犬のように期待に満ちた目をして、彼女は男達を見つめていた。ペートル、それにジプシー女達も待っていた。ただ大柄の、青白い女性は男達の視線を恐れて、全く掛け布団の下に潜っていた。そして太った女が苛立ってつぶやいた、「馬鹿話しは止めなよ。何も考えられやしねえ」。

「床に長々と寝るのだ」と赤ブロンド髭の子は命じた、「そうするんだ。さもないとコカインはないぞ」。

病気の娘はためらった。それから、かすかな、がっかりした叫び声を上げて、房の床に寝そべった。

「両腕を体に置いて」と警護員は命じた。「そこの女、無駄話しをやめろ。そしてまず娘を毛布にくるめ。きつく、もっときつくだ。力の限りきつく縛るのだ。何だ、気にする

な。痛くはないのだ。暴れないよう、娘にコカインを見せろ。 — 塩のことだよ、馬鹿。それを見せろ、すっかり信ずるぞ。 — そうだ、子羊の娘さんよ。おまえ、すぐに貰えるぞ。ただお利口していることだ」。

その娘は呻いた、「お願い、どうか、苦しめないでよ。コカインを頂戴」と彼女は頼んだ。

「いや、あとちょっとだ。今度は別の毛布だ。 — いや、反対方向に巻くのだ。小荷物のように静かに包んでやれ。大丈夫、壊れはしない。そこの床几の太った女、鼻から指を抜け。そして一緒に手伝え。上の方のベッドから二枚のシーツを取って来い。 — いや、娘さんよ、すぐに終わるからな。沢山のコカインがあると見えるだろう。すぐに一つまみ与えてやるぞ」。

警護員の指示に従って、シーツは小荷物の周りに固く綱のように縛り付けられた。その娘は進んで甘んじていた。娘は視線を、救いのコカイン、塩を持っている手から逸らさなかった。「早く頂戴」と娘はつぶやいた。「とても厳しいわね。いい夢見て、...もう我慢できない、...」。

「そうだな」と警護員は吟味の視線の後、言った、「これなら大丈夫だろう。まず、どうでもいいことだ。すぐに気付くことだろう。しかしいずれにせよ、その塩を与えろ」。

「そうよ、コカイン、お願い、コカイン」と縛られた娘は乞うた。

躊躇い、嫌々ながら、ペートルは娘に手のひらの塩を鼻の下に持って行った。そして奇妙に緊張して、苦しんでいる娘の顔の変化を見守った。

「もっと近付けて」と娘は不機嫌な真剣な視線で、囁いた、「鼻の下に持って来て」。彼女はそれを深く吸い込んだ。「まあ、とても利く」。

彼女の鋭く、乱れた顔は、滑らかになって、瞼は弛緩して垂れて、ほとんど目を覆った。頬骨の下はただ黒い窪みがあったが、再び穏やかな肉が丸みを帯びていた。口の周りの鋭い皺は、消え、ひび割れた、ざらざらの唇が盛り上がり、穏やかに息が進んだ。...

「まあ、幸せ」。

ただの塩なのに、とペートルは震撼されて考えた、普通の料理用の塩なのに。 — しかしその娘はそれを信じて、また若返っている。そして突然の連想で、彼女はヴォルフガングのこと、ヴォルフガング・パーゲルを思わざるを得なかった。彼女は一晩中、自分の承知しているように、絶えず一分おきに待ち続けたのであった。 — 他の人々は彼のことをどのように見たのであろう。ただの塩なのに。

「さあ、 — 今やるぞ」と警護員は小声で言った。

跪くペートルの顔に間近な顔は、驚いて変貌した。口は黒く、深い洞窟となって、両目は広く引き裂かれていた、恐怖と怒りで。

「犬どもめ、豚どもめ」と彼女は叫んだ。「これはコカインじゃない、騙したね。糞 — 糞 — 糞」。

彼女の体全体が棒立ちになって、彼女の頭は高く上がった。暗赤色の、青白い赤みを彼女の顔は、身を放とうとして帯びていた。

「私を放してよ」と彼女は叫んだ、「懲らしめてやる」。

ペートルは後ろに飛んだ。これほどの憎悪、これほどの絶望がまだ完全に弛緩している顔から飛び出して来た。

「お嬢、心配するな」と警護員は言った、「大丈夫だ。注意しなさい、青白い娘さん。あんたは最も分別がある。静かに床に寝かせておくのだ。解き放ってはいけない、何と言われようともな。しかし娘が頭を石の床で砕かないよう、注意してくれ。そうしかねないからな。余りに叫ぶときは、濡れたハンカチを口の上に置くのだ。しかし窒息しないように見守ってくれ」。

「連れ出してくださいよ」とペートラは立腹して言った、「私はそうしたくはありません。私は拘置所の警護員ではありません。苦しんでいる人を見たくありません」。

「青い服のお嬢。阿呆なこと言わないで」と警護員は無造作に言った、「我らがこの娘を苦しめたかい。依存で苦しんでいる。コカインで苦しんでいる。我らが依存させたわけじゃない」。

「この娘は病院がふさわしいでしょう」とペートラは不機嫌に言った。

「病院でコカインが与えられるわけじゃないだろう？」と警護員は再び問うた、「コカインを断たなければならぬ、ここでも、どこでもな。それにこの娘はまだ人間か。よく見てみろ、お嬢」。

彼女は実際、ほとんど人間らしくなかった。震えて、喚く頭、今や憤激と憎悪で一杯で、泣くかと思うと、絶望して、子供のように乞い求め、乞い求められた相手なら何でも出来ようと思っていた。

「病院でこの娘のために睡眠薬が手に入るか見てみよう」と赤ブロンド髭の男は考え込んで言った、「しかし薬剤棚の鍵を持っている男がまだいるか分からない。時間が時間だからな、...だから当てにしてくれるな」。

「それでも時々塩を与えたらいいと思うぞ」と別の男が口を挿んだ、「十回目でもそうだと思うはずだ。人間はそういうものだ。それではお休み」。

ドアが閉まった。錠が諸鍵の動きの中、甲高く響いた。次に門が軋んだ。ペートラは病気の娘の横にうずくまった。この娘は今や頭を絶えず左右に振り、目を閉ざしたまま、ますます速く、更に速く振った。「コカインを」と彼女はつぶやいていた、「コカインを、コカインを、美味しいコカインを、...」。

「また塩をそうだと思うのだろう」とペートラは悲しく、自ら繰り返した。人間はそういうものだ。警護員の言う通り、人間はそういうものだ。でも私はそんな人間でありたくない。私は嫌だ。

彼女はドアの方を見た。偵察用の穴が邪悪な目のように輝いた。ヴォルフはもう来ないだろうと、きっぱりと彼女は自ら考えた。あの人は、警察の人が語ったことを信じたのであろう。もはやあの人を待たないことにしよう。

ノイローエの「宮殿」では、老いた郎党、フォン・テッショー夫妻の許、人々が丁度七時に夕食を摂る。七時半に夕食は終わり、それから小間使い達がただキッチンで洗い物や片付けをし、これが遅くとも八時には終わる。その後、老恵み深い奥方が言われる、「奉公人ももう仕事仕舞いになさい」。

勿論それから更に八時十五分に晩禱があり、これには宮殿の皆が新たに顔を洗って出席しなければならない。 — 勿論ただ老フォン・テッショー殿は例外で、この殿は、いつも奥方の新たな怒りを買うのであるが、まさにこの時間、常に一通の至急の、全く延期できない手紙を書き上げなければならないのであった。

「いや、今日は本当に出来ないのだ、ベリンデ。それにそもそも — おまえの顔を立って、必ず日曜日ごとに、老レーニヒが説教壇から語りかけることを拝聴している。まあ、見事なものだと言っておこう。しかし私には何もまともに理解できないのだ、ベリンデ。おまえも出来ないと思うぞ。我々がいつか天国に天使として漂うと思い描いてみてもな、おまえベリンデと私がな、 — 大きな絵入り聖書の絵にあるような白いシャツを着て、...」。

「また嘲笑なさって、ホルスト＝ハインツ」。

「とんでもない、一言も言わない。 — そしてそこで老エアスに会うわけだ。奴も辺りを漂っていて、また永遠に歌うわけだ、そして私に囁きかける、『枢密顧問官殿、運がようございます、殿の赤ワインのことを親愛なる神様に申したのでございます、そして殿が時に話される不埒な話しものですな、...』」。

「分かったわ、ホルスト＝ハインツ、とても良く分かったわ」。

「いや、これが身分の差がなくなっていて、単に敬語抜きなのだ。一種のパジャマを着て、鷺鳥の翼を付けてな。 — いや済まん、ベリンデ。つまり鷺鳥の翼なんだな。多分白鳥の翼かもしれん。しかし白鳥も鷺鳥もかなり似ている、...」。

「いいわ、出て行きなさい、ホルスト＝ハインツ。そしてあなたの大事な仕事の手紙を書きなさい。分かっているのだから。あなたはただ嘲笑しているのよ。まあ、宗教に対してではないけど、ただ私のことをね。でも私には応えません。我慢しましょう。その方がそれどころかましよ。だってあなたが宗教を嘲笑したら、永劫の罰を受けるでしょうからね。 — でもただ私のことを嘲笑するのであれば、それは単に不法なだけです。だから平気でそうなさい。すでに結婚して一緒になって四十二年です。私はもう不法な夫に慣れました」。

そう言って、恵み深い奥方は、すぐに祈祷室へ向かった。老主人は笑いながら、階段の踊り場に立って、考えた。「うるさい奴だ。またぶつかった。 — 徹底的に。しかし奥の言う通りだろう。 — いつかまた本当に敬虔な祈りに出掛けるか、明日か明後日に。少しばかり奥も元気になるかもしれん。すでに結婚して四十二年経っていても、一度くらい何か妻のためにしてもいいだろう。 — ただ感情が高ぶったとき、しゃっくりをせんでくれたら有り難いのだが。丁度ビリヤードで球を打ち損じたときのようだ。打ち損じた音はたまらん、しゃっくりは聞きとれない。しかしいつもそれを期待することになる。 — まあ、更に少しばかり精算することにしよう。婿殿は電気代の支払いが少なすぎると私は確信している、...」。

そう言って、枢密顧問官は上の仕事部屋に上がった。そして三分後、ブラジル葉巻の雲に包まれて、喧嘩腰の請求に没頭した。年取っているが、しかし妥協しないひげもじゃ男である。請求は、この請求で婿殿に釈明を求めようとするものであるが故に、喧嘩腰なのであった。

婿殿は、万事そうだが、電気代にしても、義父への支払いが少なすぎると義父は思った。

婿殿自身は多すぎると思っていた。ノイローエは広域電力供給発電所に接していなかった。自ら発電していた。発電機、つまり高度に現代的な原油ディーゼル・モーターは、蓄電池と共に、宮殿地下室にあった。宮殿にあるので、発電機を専ら使用することになる婿殿は持ち出せず、老公が自らそれを保有していた。単に「自分の小屋の三台の薄暗い蠟燭用」であった。電気代の契約は全く単純なものであった。両者とも使用分に応じて費用分を支払うことであった。

しかしどんなに単純な、極めて明瞭な契約であれ、二人の仲が悪いと機能しない。フォン・テッシュー老公は、自分の婿殿は農業主ではなく、義父の財布を当てに楽に暮らそうと思っている無一文の偉い男であると思っていた。フォン・プラックヴィッツ騎兵隊長は、自分の義父は、欲深なけちん坊であり、その上大部分が耐え難いほど、「平民的」であると思っていた。老公は、インフレの下、自分の現金財産が消失して行くのを見た。そして多年にわたって蓄財したものが無価値になるにつれ、新たな金を求めることが、より喫緊であるように見えた。騎兵隊長は月ごとに農園経営がますます困難になって行くと感じ、現金に換えた収穫物が両手の間から散って行くのを感じた。そして心配し、老公が永遠に新たな要求をし、反対をし、警告を発するのを、極めてケチな老公の仕打ちと観じた。

全体にフォン・テッシュー枢密顧問官は、自分の婿は余りに贅沢と思っていた。「何故奴は、私のように葉巻を吸わないのだ。葉巻なら一時間、ちびちび、スパスパ吸えるのに。いや、煙草でないと済まんのだろう。この棺の釘野郎、煙草では爪がただ褐色になるだけで、三分もすれば、吸い終わってしまうぞ。奴は戦後、将校のトランク一つ持ってこちらにやって来た。汚い下着しか中には入っていなかった。いや、ベリンデ、誰かが奴の煙草代を払うとすれば、それは我々だ。 — 勿論奴は全く支払わない、つけで買うのだ」。

「若い人々は皆、今日日煙草を吸います」とベリンデは述べ、この意見でまず立派に夫を怒らせた。妻達、そもそも夫婦達は、このような苛立たせる意見に関して特別な器用さを有している。

「奴に教えてやろう。もはや奴はそれほど若くはないのだ」と結局枢密顧問官は威嚇しながら、青赤色になって、叫んだ。「婿殿には今一度、金を稼ぐことがいかに難しいか覚えて貰おう」。

かくて老公は書き物机に座って、計算した。金を稼ぐのは難しいのだという意図を有していた。しかし彼は、照明器具を今日、ドル相場が414000マルクの時、購入すれば、幾らになるか、計算した。そしてこの購入費用を十年に分割した。

器具はこれ以上はきっと保たないであろうからである。 — たとえそれ以上保っても、この期間にきっと器具の減価償却を済ますことにしよう。

紙片に記されたのは結構な額であった。月々単にその十二分の一支払わされても、それでもまだ強力な数で、多くの零が付いていた。

奴は、婿殿は、明日早朝目にする事だろう、と枢密顧問官は、この楽しい知らせを読みながら、独りごちた。勿論彼は金を持っていない。まだ有するほんの少しの分もベルリンで使ったことだろう。しかし早速彼につきまとして、速やかに彼が脱殻するようにしよう。その脱殻金を彼からむしり取ろう。するとこの冬を彼がどう凌ぐか、見ものだ。

老公が婿にこのような憎しみを抱いていることは、本来不可解なことであった。以前、騎兵隊長がまだ将校であって、どこかの遠く離れた駐屯地に暮らしていたときとか、それ

から戦争があったとき、両者が偶に会うと、両者は本来まことに良く折り合っていた。現実の憎悪は、騎兵隊長がノイローエで請負人として暮らすようになってから、初めて生じた。老公の目の下で、ブラックヴィッツ家の家庭生活が始まってからである、…。

老公は少しも愚昧でも頑固でもなく、全く良く見ていた、騎兵隊長が嘆いて、案じていた通りであった。確かにこの義理の息子は退役の騎兵将校であり、農業主ではなく、それ故多くを無器用に、また間違っ て処理した。確かに彼はよく甘すぎたり、時にカッとなったりした。確かに彼はロンドンのとても高価な仕立屋、いつも自分のサイズを送りつける仕立屋での英国製スーツを着用していた。それにワイシャツは、上から下まですべてボタンで締められるものであった。「厭わしい女物風だ」 — 女性は決してそのようなワイシャツは着なかつたけれども)、一方枢密顧問官は単にローデックロスのスーツと獵師用シャツを着用していたのである。確かに — そのように更に十や二十もの異議が騎兵隊長に向けられた。しかしその一つずつを見、すべてを合わせても、このような憎悪の理由となるものではなかつた。

フォン・テッシュー枢密顧問官は自分の計算を仕上げた。婿への手紙は後から記すことにしよう。今や彼は「オーダー新聞」を手を取った。しかし読むとすぐに、ドルがもはや414000マルクではなく760000マルクに上がっているのに気付いた。これは本来腹の立つことに違いない。自分は計算を始める前に、新聞で確かめておくべきであつたらう。今やすべてをもう一度やり直さなければならない。

しかしこれには腹が立たなかつた。彼は新たな計算が楽しかつた、 — 婿殿はそれだけ沢山支払わなければならない。

私は奴を破産させてしまうかなと彼はチラと考えて、ペンを持つ手が一瞬止まった、こう考えて手が驚いたかのようであつた。しかしすぐに手は書き出した。枢密顧問官は単に両肩をすくめた。それは愚かな考えだ、勿論彼はフォン・ブラックヴィッツを破産させることに決して眼目を置いていない。婿殿は然るべきものを支払うべきなのだ。それ以上のことは要求していない。向こうで婿は好きなように暮らして構わない。絹のシャツとズボンを着用して、と枢密顧問官は憤然と考え、更に書き続けた。

古い宮殿を通じて、ハルモニウム[オルガン]の嘆くような、今やほとんど軽快なフルートのような音が響いた。フォン・テッシュー枢密顧問官は頷いて、両足で拍子を踏んだ、 — スピードを上げて。もっと速く、ベリンデ、もっと速く。さもないと、このテンポでは人々は眠り込んでしまうに違いない。

「彼は単にフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長であるだけではありません、 — 私どもの唯一の娘の夫でもあるのです」とベリンデは最近言った。その通り、それが理由だ。女の言うことを聞いていると、ただ一人の娘の夫であることは、世にも至極自然なことであるようではないか。

老枢密顧問官が村を通って行き、どこかの娘を見かけると、彼は甲高く村中の通りに声を響かせるのである。「おや、何と可愛い娘だ。まあ、こっちへ来なさい、小娘さん。良く眺めさせておくれ。とっても可愛いぞ、 — おやまあ、何と素敵な目だ」。

そして彼は両頬を撫で、顎の下を掴み、すべてを公然と村全体の前で行うのである。公然と村全体の前で、彼は娘と一緒に商店に行き、一枚のチョコレートを娘に買ったり、あるいは一緒に料理屋に入り、娘に甘い飲み物を与えるのである。それから今一度、皆の前

で、娘の腰に手を回し、それから娘を放し、森へ行くのである。満足してにんまりしている。

しかし彼がにんまりするのは娘のせいではない。この娘は、当惑はしているが、しかし追従されて本当に可愛く見えたものである。 — 彼にとって更に彼の老いた血を熱くすることのできるような娘はもはやこの緑なす地上では見られない。彼がにんまりするのは、人々すべての者の目にまた砂を撒いたからである。牧師レーニツヒはそれを耳にすることだろう。牧師はそのことを穏やかに告げ口することだろう。ペリンデは、哀れなこの雌鶏は、棒を呑み込んだようにあちこち走り回るだろう、 — 誰も、誰一人どうしたものか分からないだろう。

一人の女性を除いて、 — 老公自身には良く分かっていた。彼女もそれを感じている、それ以上に彼女は承知している。彼はほとんどもはや彼女とは会わなくなっている。決して彼女の許には行かない。この問題が極めて思いがけなく始まって、最初のひどい時代の後、 — 勿論彼はもはや強いて彼女と会うということをしなくなった。いや、枢密顧問官は良く分かっていた。老人の中では熱い火はもはや燃えない。静まる灰の中でさった過ぎる静かな火花 — に過ぎなかった。

しかしここに無一文氏、無能力氏の一人の騎兵隊長、しかし仰山贅沢志向氏がやって来るとなると、 — 彼には言っておきたい。我々は我々の娘をおまえさんのために育てたのではない、と。唯一の娘の夫、その通り、有り難うさんよ、 — しかし何故そうなるのだ。全く不思議な仕掛けだ。 — 我々は我々の娘を育てた、蝶よ花よと、それはおまえさんが喜ぶようにか。こればかりではない、別荘を通り過ぎるとき、エーフヘンを怒鳴りつける声さえ聞くことが珍しくない。いや、親愛なる婿殿よ、おまえさんに教えてやろうと思うぞ、我々の許では電気代は、フランクフルト発電所の丁度十一倍することになっても、我々にとっては一向に問題ない、とな。 — それでも払っていただかなくてはならん、いや、まさにおまえさんは我らの娘の夫だからな。

老公はその数字を決然と怒って記した。喧嘩になろうと彼は構わなかった。どんな喧嘩になろうと結構。自分はまた公園の垣根に穴を開けて、ペリンデの鷺鳥が婿のソラマメ畑に向かうようにしよう。ペリンデは相変わらず婿殿の剣幕を宥めている。しかし婿が彼女の鷺鳥に、脅していたように、何かしようものなら、妻はその剣幕を宥めやしない。

農業枢密顧問官のホルスト＝ハインツ・フォン・テッショー氏は怒っていた。彼はまさに、婿殿への手紙を書く正しい気分にあった。勿論、然るべき書体である。冷静に、手短かに、事務的に。(縁故の感情を商売に混ぜ込んではいけない)。

まことに遺憾に存するが、しかし金融市場のますます厳しくなる状況を鑑み、等々。リスト同封。敬具。貴方のH.H.フォン・テッショー。

点、終わり、インク吸い取り完了。この手紙はエリアスが明日早朝、真っ先に届けられよう。すると婿殿は早速ベルリンから戻って、見つけることになる。きっとベルリンから持参する二日酔いにあつらえ向きだ。

フォン・テッショー氏は、エリアスを呼び出す鈴を鳴らそうとすでに手を上げたとき、下の方からのホルモニウムの響きで、晩祷はまだ続いていると思い出した。ペリンデは今日また格別入念に行っている。きっと彼女は群れの中に一匹の疥癬病みの羊を有して、就寝前にこの羊に懺悔をさせなければならないのであろう。それではエリアスを呼び出すこ

とはできない。自分でこの手紙を持って行くことにしよう。

ちなみに彼は勿論、疥癬病みの羊は誰か承知していた。ベリンデが彼に語っていた。赤いほっぺの家畜番のアマンダとソーセージ唇の小さなマイヤーのことである。二人は婚約中。いや、多分婚約段階をすでに終了している。半ばもう結婚生活だ。いいではないか。

枢密顧問官は少しばかりにやにや笑った。そして田畑検査官のマイヤーに手紙を託すが、はるかに良いと思いついた。すると婿殿の怒りは最大となる。奴は、義父がマイヤーとのちょっとしたお喋りを大いに楽しみにしていると良く承知していよう。それで手紙を小さなマイヤーを通じて貰うとなれば、勿論奴はこう考えよう。自分の義父はマイヤーと手紙の内容について話した、と。自分の配下にそのようなことを尋ねるのは、勿論愉快ではない。それでまた怒りが募るわけだ。

老公は手紙を短い上着のポケットに入れて、杖とローデングロスの帽子を取って、ゆっくりと階段を下りた。晩祷はようやく終わったかに見えて、小間使い二人が彼の側を通り、階段を上がって行った。二人はとても楽しそうに見えた。少しも敬虔に啓発された気配ではなかった。あたかも晩祷で小さな幕間劇が生じた按配であった。フォン・テッショーは尋ねようという気になった。しかしまたそれを止めた。ベリンデが階段で話している彼の声を聞いたら、彼女が出て来て、どこへ行く気か尋ねるかもしれない。そして同行を申し出るかもしれない。 — いや、それは御免だ。

そこで彼は一人っきりで公園へ出た。公園はすでにかなり暗くなっていて、彼の計画には丁度都合良かった。彼は勿論、自分の妻の鷺鳥がいつもどこに垣根の穴を見つけるのか正確に知っていた。彼は妻の依頼でようやく一昨日その穴を閉じさせたのである。閉じることが出来るものは、また開けることが出来ると彼は考えて、小幅板を慎重に揺さぶった。結局、両手で開けられるようなかなり緩い穴を見つけられよう。

彼がそんな事をしているとき、突然自分は誰かに見られていると感じた。素早く彼は振り向いた。突然、茂みの横に、人間の影のようなものが立っていた。老公の弾のように大きな目はまだまことに良く見えた、薄明かりの中であっても、...「アマンダ」と彼は叫んだ。

しかし何も答えなかった。彼がより詳しく覗いてみると、そもそもそれは人間の影ではなく、単に背後の石楠花とジャスミンに過ぎなかった。まあ、いいか — たとえ本当にアマンダであったとしても、 — 彼女にとってどうでもいいことで、どうでもいいことに違いない。自分は勿論、ただ、小幅板がしっかりしているか検分したに過ぎない。しかし彼は、今晚緩めることを断念し、黒人マイヤーの小屋への道に向かった。

勿論彼は、官吏の家の中へ入りたくはなかった。 — 彼の妻とは逆に、老枢密顧問官は、風紀に反する事柄を見たいとは少しも思わなかった。彼は単に杖を取って、開いている窓をノックした。

「おい、マイヤーさん、 — 貴台の梨頭をカーテン越しに見せてくれ」と彼は叫んだ。

家畜番のアマンダ・ボックスは、すでに何度か体験していたように、今日の晩祷への参

加を避けたかったことだろう。一 以前はむしろ一般的な、退屈だという理由や、別な計画があるという理由であったが、今回は恵み深い奥方が、懺悔と祈りの思いで、何を目標しているか正確に分かっていたからである。しかし太った女中と黒いミンナがアマンダを見逃さなかった。

「来なさい、マンディング[アマンダのこと]。家禽の数の数え方を教えてあげます。それが済んだら、皿洗いの手伝いをしなさい」。

「何のことやら、駅は分かっています[大筋は分かっています]」とアマンダは当時流行の話し方で言った。その意味は丁度、自分の母親が「小夜啼鳥、おまえの本心は読める」と言っていたのと同じであった。

しかし二人は一時も離れなかった。確実に恵み深い奥方の笛に従っていた。

「いつも同じやつ」とアマンダ・ボックスは二、三羽の遅れて来る鶏を叱った。これらの鶏は、興奮して絶え間なく鳴きながら、野原から鶏小屋へ急いで入り込もうとしていた。「でも一度ぴしゃりと断っておくけど、狐がお休みというときの作法を見ときなさい。一 それにミンナ、あんたがそもそも出しゃばることないのよ。料理女ときたら、正味二ツェントナーの体重[百キロ]では、男どもを捕まえるのは無理ね。洗濯石鹸の天使のように永久に立ちん坊でも、仕方ない。でも六人の洩垂れ小僧を抱えたあんた、小僧どもの父親は少なくとも十人の違う父親のはずだけど、...」。

「これ、マントヘン。そんなひどいこと言わないで」と黒いミンナは抗議した、「恵み深い奥方は、本当に私どものことに好意的なんだから」。

「駅は分かっています」とアマンダ・ボックスはまた言って、議論が途切れた。というのは黒いミンナに関して、一 恵み深い奥方が選りに選って、ミンナを監視人に選んだのは本当に滑稽すぎることだったからである。しかし恵み深い老奥方のこのもじゃもじゃ毛の初老女中に対するまことに子供っぽい振る舞いは世間周知のことであった。またしてもある出来事が起きても、一 恵み深い奥方はいつも本当に、すでに産婆が駆けつけたとき、ようやく気付くのであった。誰の目にもこの痩せて骨張った女に関して、そのことは明らかだったのである。一 すると奥方は明らかに怒り、黒いミンナを罵り、未来永劫に、一 全く改善の見込みのない女として、自分の目から、そしてノイローエの貧民小屋から、ミンナを追放するのであった。

すると黒いミンナは叫び、大騒ぎをし、また泣きながら自分の少しばかりのガラクタを手押し車に乗せ、一 一切合切ではないが、ただかなりを乗せ、奥方に披露するのである。とりわけ自分のすべてのちびっ子どもを乗せる。それからミンナは吠えながら、賛美歌を歌いながら村中を行くのである。そして宮殿の前で今一度止まり、真鍮製の呼び鈴のボタンを押し、従者のエリアスに涙ながらに頼むのである。親愛なる善良な恵み深いご夫人に自分の祝福を伝え、心からの謝辞を添えて欲しい、と。そして自分は夫人の手に更に別れの接吻を許されるか、と。

このお芝居をすでに良く承知しているエリアスは、それからいつも「駄目だ」と言う。すると黒いミンナは更に激しく泣いて、荒涼たる遠い世界へ去る、父親のいない子供達を連れて、一 宮殿の車寄せの衝突避けの縁石の所まで去る。そこでミンナは座って、泣き、待機する。奥方がミンナに対して抱く怒りに応じて、一、二時間、更には五時間待機する、時には半日に及ぶことさえある。

待機は無駄ではなかろうと、彼女は承知している。体験から分からないとしても、ミンナは目撃する、――つまり宮殿のカーテンの許に目撃する。というのは老レディーが両手を震わして、カーテンを揺さぶっていて、自分の迷える愛しい子羊への注視を止められないでいるからである。

しかしこの件がまた全くひどい状況であって、フォン・テッシュヨー夫人が村長のハーゼからミンナの夫について、今回は確か三人の男どもに疑惑が持たれていて、ひょっとしたらそれどころか五人かもしれない、黒いミンナが「好意から」黙っている男どものことは別にしても（というのは黒いミンナは交友関係では正確に「好きな」男どもと大事ではない行きずりの男どもを厳密に区別していたからで）――というような場合には、奥方の優しい、世間に疎い心は厳格化して、すべてのソドムとゴモラを思い出し、いかに過去何度黒いミンナが改善を誓ったか思い出すのである。

そして夫人はカーテンを手から離して、自分の女友達、フォン・クックホフ老嬢に言うのである。老嬢はいつも夫人の許に暮らしていた。「いいえ、ユッタ。今回は私ももう許しません。もはや窓からミンナを眺めることはしません、...」。

フォン・クックホフ老嬢は、首にビロードのリボンを巻いていて、その老いた小さな猛禽の頭を精力的に頷かせて、比喩に富んだ、しかし明瞭な話し方で言うのである。「そうね、ベリンデ。――結局ラクダは一頭でも一つの泉を飲み尽くすのよ」。

その通り。そして確実に半時間過ぎると、穏やかにドアがノックされ、老エリアスが告げる。「お許してください、奥方様。しかし告げざるを得ません。今ミンナが身を晒しています」。

その通り、両レディーがそれぞれ窓辺に駆け寄ると、この哀れな故郷喪失者は、衝突避け縁石に腰掛けて、ブラウスのボタンを外して、生まれたばかりの罪の果実に乳をやっているのである。

すると恵み深い奥方は溜め息を付いて、言う。「ユッタ、この新たな迷惑には責任を負えませんね」。

そしてユッタは不明瞭に答える。「このような雀蜂が囓るのは、最悪の果実とは言えない」。しかしこの言葉をフォン・テッシュヨー夫人は自分の意図への了承と考えるのである。

「いえね、エリアス。私が自ら参ります」と彼女は急いで言う。というのはエリアスはすでに六十代もいい年なのであるが、エリアスがこのような情景を見ていいか、夫人には不確かであったからである。かくてフォン・テッシュヨー老夫人は自ら罪人のミンナの許へ下りて行く。ミンナは、恵み深い奥方が宮殿から出て来るのを見さえしたら、急いでブラウスを閉じる。この授乳が単にお芝居であると奥方も気付くかもしれないからである。つまり黒いミンナは少しも授乳せず、すべての自分の子供を単に哺乳瓶で育てていたからである。しかしこのことは恵み深い奥方が知る必要はない。

かくて両人はまた貧民小屋に入って行く。老夫人は滑稽な荷車の横を歩きながら、人々が自分のことを嘲笑したり笑ったりしかねないことに思いが至らない。夫人の心は軟化して、謙虚になり、夫人もかつてほとんど誘惑に屈しそうになったこと、つまり機敏なフォン・プリッツヴィッツ少尉が四十年以上前、ドアの背後で自分に接吻しようとしたことがあった、――当時すでにホルスト＝ハインツと婚約したも同然であったのにと昔のことを思い出しているのである。

そして夫人が黒いミンナと一緒に貧民小屋の戸口の敷居を越えて行くと、夫人はすべてを理解し、すべてを許す気になっており、この罪人のミンナの涙を完全に本物と見なすほどの馬鹿ではなかったにせよ、それでも夫人は心の中でこう思ったものである。ミンナはほんの少しばかり、正直になっている、ほんの少しばかり、ミンナも遺憾に思っている、

— 神様がどれほどの後悔を私どもに望んでおられるか、私には分からないことだ、と。

このようにフォン・テッショー老夫人は考え、そのように行動して来た。— 恵み深い夫人の善良な心がすべての罪人達にかくも可愛らしく、許す傾向にあるのでありさえすれば、アマンダ・ボックスでさえ、これは全く素敵なこと、好意的なことと見なしたであろう。しかし人間の心はすべて奇妙である、— 老夫人の心も他の心と変わらない。黒いミンナのように狡猾な女中に対して十回であれ許すようなことを、若い娘の場合一回も大目に見ようとしなさい。

アマンダ・ボックスに対しては絶対に許さない。というのはこの娘は言葉遣いが破廉恥で、厚かましいからである。すべての男どもを彼女は笑ってなぶるのである。スカートはとても短いもので、もはやスカートとは呼べないものである。決して自分の過ちについて泣かない。決して後悔せず、敬虔な歌を歌わない。代わりに大声で恐ろしい流行歌を歌うのである。「親愛なるハンス、膝で何するの」とか「一人の女が春に夢見ることは、…」といったものである。

いや、このアマンダは、今晚の晩禱で自分の身に迫っていることを良く承知していた。しかしアマンダに黒いミンナが監視として置かれたことに、アマンダは格別怒った。アマンダは一瞬、真面目に、兩人を鶏小屋に閉じ込めて、ハンス君の許に逃げようと思った、

— 素晴らしい洒落となったことだろう。

しかしアマンダの物言いはとても出しゃばりで厚かましかったけれども、結局彼女の行動は慎重で分別のあるものであった。— 家禽番娘はそうでなくては務まらない。家禽というものは世の中で最も厄介な家畜である。野獣で一杯の一サーカスよりも十倍難しいし、ただ分別ある者に対してのみ従うのである。いや、昨夜マイヤーの窓から、アマンダは大口を叩いて、恵み深い奥方に離職するぞと脅したものであった。— しかし結局のところ（人間の心はすべて奇妙である）自分の小さな、ソーセージ唇のハンス君を率直に愛していたし、このエデンの園自体、黒人マイヤーがいなければ、荒涼としたものとなるであろう。

かくて彼女は鶏小屋の扉を閉めず、— 単に二人の翼のない雌鶏を追い出して、トトトと舌を鳴らして、家禽の民を静まらせて、頭数を数え、一羽も欠けていないと知った。それから全く誤解の余地なく言った、「ねえ、雌鶏さん。大変助けて頂いたから、今度は皿洗いをしましょう」。

「おや、マントヘン」と太った料理女は呻いて、鯨骨のコルセットを鳴らした、「冗談と分かっているからね、…」。

「どうして分かるのよ」とアマンダ・ボックスはとても戦闘的に尋ねた。そして二人の黙った女性の間を戦闘的に行って、その短いスカートを戦闘的に揺すった。

というのは彼女はとても若かったからである。子供時代の辛酸の年月を経ても、彼女の青春の若々しい生命欲は何も奪われていず、若いことは楽しく、戦争は娯楽で、愛も娯楽であった。— 恵み深い奥方が、賛美歌と祈りでこの娯楽を追い出せると思うのであれ

ば、阿呆じゃなからうか。

アマンドのこのような考えは、煤で汚れた鉢を洗うときの気晴らしにはなったが、ノイローエの宮殿での晩禱に対しては適切なものでなかった。この時人々はすでにしばらくずっと座っていた。馴染みの一群で、まことに堂々たる一群であった。というのは恵み深い奥方は、自分の許でパンのための賃金を頂いている皆が子供や私生児と一緒にこの晩禱に参加することを重く見ていたばかりでなく、冬、数メートルの薪をただで得たり、夏、テッシュ一家の森ですぐりや茸を採取しようと思っている村中の一同が幾多の夜、参加して、その権利を目指すように仕向けていたからである。日曜日、老牧師のレーニツヒが教会で説教をしても、恵み深い奥方が毎夜、晩禱のために祈禱室に集めるほどの教区民を集め得ないことがしばしばであった。

「それで、アマンドは」とフォン・テッシュ夫人が尋ねた。アマンドは自分の罪深い物思いから飛び上がって、周りを見つめ、何のことか分からなかった。奥のベンチの鷺鳥ども、何ごとであれ笑ってしまう、十四、五歳の者達が勿論すぐに忍び笑いを始めた。しかし奥方は全く穏やかに今一度尋ねた、「あなたの賛美歌です、アマンド」。

そうか、「順番の賛美歌」をしている。そのときは各人が賛美歌集から自分の詩句を選び、それを皆一緒に歌うのである。これはしばしば無造作に晩禱の歌、臨終の歌、懺悔の歌、十字架の歌、イエスの歌、洗礼の歌が混じり合うものである。しかし皆にとって大抵楽しく、眠たい晩禱の退屈から解放されるのである。恵み深い奥方でさえ、そのハルモニウムの許で赤い頬となって、速やかに譜面をめくって、一つのメロディーから別のメロディーへと素早く移るのである。

「汝の道を主に委ねよ、…」とアマンドは、忍び笑いが高笑とならないうちに、素早く叫んだ。

恵み深い奥方は頷いて、「そう、そうすればいいのよ、アマンド」。

アマンドは、歌の出だしを述べて、奥方を安堵させながら、唇を噛んでいた。彼女は腰を下ろしたとき、少しばかり赤くなっていた。

しかし少なくとも休みとはならなかった。この歌をフォン・テッシュ夫人は空で知っていたからである。すぐにハルモニウムが開始され、すぐに皆が歌った。そこで黒いミンナがアマンドの次の番となり、この偽善者が勿論また選んだ。

「深き淵より、私は御身に叫ぶ、…」。

しかしアマンド・バックスはもはや夢に耽らなかつた。彼女は垂直に座って、目覚めていた。もう二度と笑いものにされたくなかつたからである。しばらくずっと何も生じなかつた。更に歌が続き、一最後に何の昂揚もなくなつた。誰にとっても退屈となり、疲れた奥方もハルモニウムでしばしば弾き方を誤り、拍子から外れたからである。それからハルモニウムは、奇妙な響きをし、あえぎだし始め、奥のベンチの鷺鳥どもがまた忍び笑いを始めて、フォン・テッシュ夫人は赤くなり、楽器を新たに厳格に扱い始めた。

夫人は疲れている、とアマンドは考えた。勿論そもそも夫人には余力がない。ひょっとしたら夫人はもう、事の長々しいお喋りをする気が失せたかもしれない。私のハンス君の許へすぐ行けよう。

しかしアマンド・バックスに思いもよらぬことであつたが、この老夫人は他人の罪で大いに熱くなつていたのであり、仲間の過失でまた大いに活気づいていたのである。一瞬、

勿論、あたかも恵み深い夫人はお仕舞いにしようと思っているかに見えた。しかし夫人は熟慮していた。夫人は小さな教区民の前に出て、咳払いをし、少しばかり急いで、少しばかり当惑して、言った。「いや、皆さん、ここで私どもの結びの祈りを語って、誰もが安心して家に帰り、眠りに就けるようにしましょう。今日の日を立派に終えたという自覚を抱いて。しかし本当にこの自覚を抱けるでしょうか」。

小さな老夫人は面々の顔を見た。夫人の当惑はすでにまた消えていた。夫人はまたすでに悪しき良心の芽生えを抑えつけていた。自分は禁じられたことをしかねないと良心が警告していたのであった。

「いや、本当にこの自覚を抱けるでしょうか。ノイローエの方を見、まだ居酒屋に人々が集まっているかもしれないアルトローエの方を見ても、満足できることでしょうか。しかし私どもの中を覗いて見ますと、どんな具合でしょうか。私ども人間は弱いものです。私どもは毎日罪を犯しています。それで、何度もまず公の場で告白することは、そして一同のキリスト教徒の仲間の前で犯した罪を述べることは、結構なことでしょうか。ただ一日の間の罪のことです。 — 私自身始めてみましょう、...」。

こう言って、フォン・テッシュー老夫人は跪き、すでに静かな祈りを上げて、声高な罪の告白の準備をした。しかし大人の子羊の群れの中に、ほとんど抑えがたい動揺が生じた。というのはこの子羊の誰一人として知らぬ者はなかったからである、つまり、牧師のレーニツヒ殿とフランクフルトの教区監督殿は、恵み深い奥方に公の場での罪の告白を厳しく禁じている、と。というのはそれは全くキリストとルターの精神に反するものであり、救世軍やバプテスト教会派を思わせ、とりわけカトリック教会の許しがたい告解を思わせたからである。

しかし一同の誰も立ち上がらず、抗議して出て行かず、 — フォン・クックホフ老嬢とか従者のエリアスがいの一番に出て行くべき人々であったが、 — それで、皆が緊張して、どういう次第になるか聞く羽目になった。というのは他人の罪を聞いてスリルを全く感じないような者はほとんどいないからである。誰もが、自分は恵み深い奥方に続いて述べたくはないと願い、誰もが自分の最近の罪、つまり秘かな罪や白日に晒された罪を概算して、そして自分の罪はそれほどひどくなかろうと思った。

しかし一人の娘は、自分はきっと、フォン・テッシュー夫人の後で呼び出される二、三人の中の一人であろうと分かっていた。そして牧師と教区監督の禁止を完全に踏み越えるこの件は単に自分のせいで行われていると知っていた。 — この一人の娘は強張って、凝固して座っていて、それを悟られないようにしていた。不機嫌に、苛立って、彼女は老夫人のどもり話を聞いていた。老夫人はとても興奮しているに違いなかった。というのはすべてしどろもどろであったからである。再三しゃっくりが夫人の喉に生じた。それで皆が大変緊張していなければ、笑っていたことであろう。しかし夫人は自分の罪を数え上げた。自分は新聞の劣等な小説を何度も読み返しました、 — ヒック、 — そして自分の親愛なる夫に容赦、 — ヒック、 — しませんでした、 — そして夫のことを「不作法」と呼びました、 — ヒック、ヒック、 — そして自分はまた奉公人達のバターにマーガリンを混ぜさせました、...ヒック。

アマンダ・バックスはこれを傾聴していて、苛立って、不快に拒絶して口を歪めた。人々は座って、この馬鹿げたどもり話を聞いていた。神の言葉に耳を傾けるときよりも十

倍緊張していた。しかしそれでもすべては単に嘘っぱちなのである。恵み深い奥方はとても敬虔であったが、正直に述べていなかった。マーガリンの話は人々皆が舌で分かっていた。まず語る必要のないことであった。小説の話は戯言である。夫人がいかにしばしば「自分の親愛なる夫」と喧嘩するかは、ここの家の誰もが知っていた。すべては目くらましで些事である。彼女はむしろ公然とこう告白すべきであったろう、自分がこの芝居をしているのは、小娘、アマンダ・バックスに天罰を下すためである、と。そうすれば正直な罪の告白となったろう。しかし全くそう考えなかった。

それでも、一 料理女は興奮して、頬を真っ赤にさせていて、太った胸からヤカンの蒸気のように深い息をした。そして鯨骨が彼女の周りで軋んだ。ミンナは愚かにぼんやりと口をぽかんと開けて、焼いた鶏を待っている按配であった。

アマンダ・バックスも頬を赤くした。しかし興奮して恥を感じたからではなく、反抗心と怒りからであった。今や恵み深い奥方は破廉恥に本当に、昨夜の出来事、自分が一人の娘を不意に襲ったこと、一 いや残念ながら当家の小娘であったこと、一 暗闇の中、一人の男の部屋へ上がり込む小娘の不意を襲ったと述べ始めた。(ヒック)。

一同全体の中で文字通りカクッと走った。アマンダは、一同の顔が驚きと期待の余り愚かに凝固するのを見た。その時がきた。しかしまだそうはならず、この恵み深い奥方は、絶えず何度かしゃっくりを出しながら、嘆いた。自分はこの怒りを制御できず、この娘を激しく叱って、解雇すると脅してしまった。こう考えるのが良かったのでしょうか、つまり我々皆が罪深いものであり、この迷える羊も辛抱強く主の牧人の小屋に導かれなければならないのである、と。後悔して彼女は告白した、自分は自分の義務を怠りました、なぜならこの若い娘は自分の庇護の下に委ねられていましたので、と。そして主は悪に対する戦いの中で、寛大に辛抱強く自分を鍛えて欲しいと願った。

アマンダは完全に軽蔑して、そしてはなはだ怒ってこのお話を聞いていた。そしてまずある決意を固めていたとしても、今や別の決意を固めていた。そしてフォン・テッショー夫人が最後のアーメンを述べて、起き上がって、まだ言葉と指先で、懺悔と祈禱のベンチに収まるべき次の者を指名する時間もないうちに、一 早速アマンダは頬を真っ赤にして、しかし怒りの余り全く黒々としている目をして、立ち上がり、言った。恵み深い奥方様の労は取らせません。自分はこの話し全体誰のことを指しているか承知しています。それで立ち上がったわけです。恵み深い奥方はさぞご満足でしょう。

この言葉の後、アマンダ・バックスは真の復讐の女神のように振り返り、黒いミンナをにらみ付けた。ミンナは両手でアマンダの背中を押して、彼女が教区民の前に立派に出られるよう圧迫していた。「あんたの汚い手を私の綺麗な服で拭わないでね。前に押さないでよ。あんたから押されるなんて。後悔や懺悔のこのお芝居は神様とは何の関係もないわ」。

この怒った叱咤でアマンダは自分の敵の黒いミンナをへこまして、今や彼女はまた一同向かい言った。(というのは今や頭にきていたので)、その通り、自分は昨夜窓から侵入しました。皆が事細かに知るようによいと言いますと、官吏の家、検査官マイヤーの窓でした。だからと言って、少しも自分は恥ずかしいと思いません。自分はこの一同の中で少なくとも十名を指し示すことが出来ます。全く別の窓から侵入し、全く別の男達の許へ行った人です」。

そう言って彼女は指を上げ、その指で黒いミンナを指し、ミンナは金切り声を上げて、

ベンチに沈み込んだ。そしてアマンダはまた指を上げた。しかし彼女がまだ指し示さないうちに、奥の薄暗い隅の、鶯鳥どもが座っていたベンチが崩れた。皆法外に急いで、安全に身を潜め、沈み込もうとしたのであった。

そこでアマンダ・バックスは笑い始めた（そして残念なことに、まことに残念なことになりかなりの人々も一緒に笑った）。しかしいつの間にか彼女の笑いは泣き声となっていた。憤然と彼女は叫んだ、「もっと上品に報いたらいいのに」。

そう言って止めどもなく泣きながら広間から薄暗い公園へ走った。

しかし広間ではベンチが崩れたばかりでなく、恵み深い老夫人も大いにうろたえていた。震えながら、情けなくしゃっくりして、彼女は安楽椅子に座っていた。それどころか今回は老友人のユッタ・フォン・クックホフも容赦なく彼女の前に立っていて、厳しく言った、「ほらね、ペリンデ、瀝青[ピッチ]に手を出す者は、汚れるのよ」。

しかし人々は祈祷室から引き上げた。今や勿論人々はとても静かで、ほとんど当惑しているように見えた。しかし残念ながら、人々は家に帰る頃までには、語り始めるであろうことは明白であった。そして噂話の主は誰になるか、これも明白であったろう。 — アマンダ・バックスはきっとその主ではなかったろう。彼女は勝利者として闘いから抜け出したのであるから。

勿論彼女は、今もまだとても興奮して、公園を泣きながら歩き回っていて、自分を少しも勝利者と思わず、自分とハンス君の件をかくも劣等に進めてしまつて、自分は愚かな愚図の驢馬だと罵っていた。一度彼女は立ち止まった。何かが垣根の許で作業しているのを見たからである。それは老枢密顧問官であった。彼女は勇を鼓して、彼に許しを請いたいところであった。しかし若くても人生の経験から、誰かに何かの許しを請うことに警戒心が生じた。

かくて彼女は更に公園を歩み続けた。そして次第に彼女は落ち着いて来た。彼女は池の冷たい水で顔を洗って、ハンス君の許に行った。しかし彼女が丁度着いたとき、枢密顧問官がその窓をノックして、田畑検査官マイヤーを呼び出した。そして中のハンス君の許で、一人の女性がびっくりして金切り声を上げるのを耳にした。

50

パーゲル夫人とミンナは荷造りをする

外では最後の黄昏の明かりが速やかに暗さへと移って行った。九時過ぎであった。すでに通りではランタンが燃えていた。夙に寡婦のパーゲル夫人は、ヴォルフガングの部屋の窓辺に立っていた。今やほとんど真っ黒な庭を覗き込んでいた。しかしその背後ではちらちら明かりが輝き、町の上に赤い反照が見られた。 — 今や息子はどこのランプの許に座って、奪った金を使っているのであろうかと彼女は考えていた。

彼女は部屋の中を振り向いて見た。部屋では明かりの下、小間使いのミンナがトランクに詰めていた。夫人は性急に言った、「ミンナ、閉めてしまいなさい。品物を取りに今にも現れるかもしれないから」。

小間使いのミンナは、入念に、木型を嵌められた靴を押し込みながら小荷物から目を上げないでいた。「奥方様、彼は来ませんよ」。

パーゲル夫人は苛立った、一 ミンナの返事は、あたかも熱望している訪問の話しに引導を渡すかのように聞こえた。夫人は手短かに言った、「ミンナ、私の言いたいことは良く分かっているでしょう。来ないときには、その品物の件で誰かを寄越すのよ」。

ミンナは更に詰めた。とても落ち着いていて、少しも急がなかった。「この衣裳トランクは使用なさらぬ方がいいでしょうに。恵み深い奥方様が春にエムスへ出掛ける際、適したトランクがなくなります」。

「愚かなこと言って」とただ恵み深い夫人は言って、窓から外を見た。一 確かに一 密な樹冠のせいで、一 通りは見えなかったが、しかし深い静寂の中、ここではどの足音も、どの車の動きも聞こえた。

「ビーチガウンも入れますか、奥方様」とミンナは尋ねた。

「何ですって」とパーゲル夫人は尋ねた、「そう、ビーチガウン、一 勿論よ。彼のものは皆入れなさい」。

ミンナは不機嫌な顔をした、「それでは屋根裏にも行かなければなりません」と彼女は言った、「本箱を取って来ましょう。管理人がまだいるか分からないけど。重い箱は一人では出来ないし」。

「本はまだいいわよ」と老夫人は言った。絶えざる苦情に苛立っていた、「本箱がいるか、彼が来たときに尋ねたらいいわ」。

「彼は来ませんよ、奥方様」と老小間使いは単調に、しかし独善的に言った。

今回パーゲル夫人は聞いていなかった。今回夫人は小間使いの頑固頭に立腹する必要はなかった。夫人は通りに耳を澄ましていて、半ば窓から身を乗り出して、聞き入り、傾聴していた。...ある足音、...

小間使いは、夫人に背を向けていたけれども、何かが起きていると感じた。彼女は荷造りを中止した。手に水着を持って、振り返り、耳を澄ましている夫人を見て、請うように言った、「恵み深い奥方様」。

「ヴォルフガングなの」と夫人は窓から叫んだ。最初は疑うように、それから確信して、「ヴォルフガングね。そう、待ってなさい。すぐに行くから。すぐ錠を開けます」。

彼女は振り返った。彼女の顔は赤くなって、白髪の下の目は若いときのように輝いていた。

「ミンナ、行きましょう。鍵を持って。息子が下に待っています、急いで」。

ミンナの懇願するような言葉が無視して、夫人は先に薄暗い廊下に出た。夫人は明かりを点し、手当たり次第にいずれかの鍵を造り付け鏡台の横の板から取って、階段を下に走った。ミンナが付いて来た。

玄関の所で夫人は試した。鍵が合わなかった。熱くなって夫人は叫んだ、「急いで、ミンナ。急ぐのよ。一 ひょっとしたら彼はまた考え直したのかもしれない。彼はいつも気弱だから」。

黙ってしまったミンナは取っ手を押した。施錠されていなかった玄関のドアは開いた。パーゲル夫人は狭い前庭を走って行った。夫人は道路に通ずる鉄の小扉を突き開けた。「ヴォルフガング、息子よ、どこにいるの」。

一人の変わり者の、孤独な夜の散歩者、彼はバーや店の代わりに緑の植物の新鮮な空気と香りを求めて来たのであるが、びっくりして縮み上がった。彼は眼前のひっそりしたガ

ス・ランタン灯火の中に老いた白髪の、とても興奮した一人のレディーと、その背後の初老の小間使い、手に水着を持った女性を見つけた。彼はあきれて尋ねた。「何ですか」。

老レディーは突然立ち止まり、向きを変え、ほとんど転倒しそうになった。水着を持った初老の小間使いは彼に苛立った視線を投げ、夫人の後に続いた。今や彼女は老レディーを腕に抱えて、両人は一緒に間近な家の中に消えた。

施錠していない、と孤独な散歩者は独り言を言って確定した。人をこんなにびっくりさせるとは、いかれた雌鶏どもだ。

彼は自分の気散じのためにもっと静かな通りを求めた。

二人の老女性はゆっくりと階段を一言も言わずに、上がって行った。ミンナは、恵み深い夫人の手が彼女の腕の中で痙攣したように震えるのを感じた。奥方様がいかにも辛い様で階段を上がって行くのに気付いた。廊下の扉は開いていて、踊り場は明るく照らされていた。二人は住まいに入った。ミンナはドアを閉めた。ミンナは恵み深い夫人がどこに行きたいのか、若様の部屋か、自身の部屋か、確信を抱けなかった。こうしたすべての興奮の後、夫人は横になるのが望ましかったであろう。しかしミンナは、強情で頑固なミンナであったが、生涯で一つのこと、つまり大抵の女性が悟ることのできないものを悟っていた、つまり話すのに敵した時があり、沈黙に敵した時があるということである。今は沈黙の時であった。

彼女は穏やかに恵み深い夫人と一緒に中廊下を行き、腕のかすかな引き具合で、夫人はまた若様の部屋へ行きたいのだと察した。二人が入ったとき、二人の前に衣裳トランクが、大きく開けられてあった。一つのケースが取り出されて、その上には若様の青白色の縞のビーチガウンがあった。

パーゲル夫人はこの光景に立ち止まっていた。彼女は咳払いをして、素っ気なく言った。「ビーチガウンを取り出さない、ミンナ」。

ミンナはそうして、ビーチガウンをソファに置いた。

「すべて取り出さない」とパーゲル夫人は邪険に言った、「もう一度荷造りを始めなさい、ミンナ。衣裳トランクを使うのは止めにします」。

黙ってミンナは取り出し始めた。恵み深い夫人は厳しく固い顔で見守っていた。彼女はミンナを監視した。ひょっとしたら躊躇う仕草、ある態度表明のわずかな微候を期待していたかもしれない。しかしミンナの木彫のような顔は無表情で、下着や衣服への彼女の動作は速すぎもせず、遅すぎもしないものであった。

突然パーゲル夫人は向きを変えた。

彼女はドアから更に自分の暗い部屋の中へ逃げたかった。しかしそれ以上進めなかった。涙がこぼれてきて、視界が遮られた。止めどもなく泣きながら彼女はドアの枠に寄りかかった。

「いや、ミンナ、ミンナ」と嗚咽しながら彼女は囁いた、「私は息子を、私が愛している最後のものをも失うのかしら」。

しかし生涯にわたって、台所や奉公人部屋で、ただ恵み深い夫人のことを思って働いて来た、老いた小間使い、再三呼び出され、再三追い返されて、全くこの女主人と同じ気持ちになっている女性、この時もまた忘れられていた女性、一　しかしこの老小間使いは、女主人の手を懇願するように握った。彼女はしっかりと囁いた。「奥方様、あの人はまた

来ますよ、きっと。ヴォルフィーはまた来ますよ」。

51

キリスト教徒宿坊のゾフィー

ゾフィー・コヴァレフスキー、ムッツバウアー伯爵夫人のかつての侍女は、キリスト教徒宿坊で夕方をまことに快適に過ごしていた。まず夕食になるまでの時間、彼女は自分の品をかき回していた。一自分が自分の女主人から持ち去ったものすべてをまず最終的所有者として点検することは、素敵な気分であった。少なくない品であった。一自分は豊かであるばかりでなく、高価の身繕いをしているとゾフィーは自分について言えた。ノイローエは、こうしたものすべてを目にしたら、嫉妬の余りはじけることだろう。

自ずと点検は着替えとなった。彼女は実際この宿坊での夕食にふさわしい服を着なければならなかった。ゾフィーの強みである自分の環境への本能的順応力を発揮して、彼女は青い衣裳を選んだ。それに合わせて、黄色の生糸織物のブラウスを着た。スカートはひょっとしたら本当に敬虔な人々にとって、ちょっと短すぎたかもしれない。しかし変えようはない。ゾフィーはもっと長いスカートを持っていなかった。しかし脚は組まないと固く決心していた。ブラウスの深すぎるネックラインを彼女は軽くて、色鮮やかな絹の小スカートで修正した。

ただほんのわずかな口紅と、頬に赤みをほんの少し補足して、ゾフィーは完了し、食堂へ下りて行った。壁に見られる諸格言、焼き絵の木製であったり、描かれた紙製であったりしたが、これに彼女は夢中になった。醜いが、しかし贅沢に轆轤された脚の付いているテーブルには灰色のちりめん紙のテーブルクロスが置かれていた。このクロスで染みがある箇所には、また紙ナプキンが置かれていた。これはつましく、実用的であったが、これは見るからに違和感があって、全く醜いと一ゾフィーは思った。

スープは薄くて、固形ブイヨンからのもので、その代わり、グリーンピースはたっぷり小麦が使われていた。豚のカツレツは小さく、脂身は匂いがした。ゾフィーは美食で甘やかされていたが、この肉を内心喜んで食べた。敬虔な人々の許で客人となることは楽しかった。このように人々は暮らしているわけだ。このように質素なものを互いに食卓に載せるのだ、単に現世的なものを軽蔑し、親愛なる神様に愛想を示すのだ、全く存在しない神様なのに。

しかしまたゾフィーは格別の関心を抱いて、給仕の娘達を吟味した。堕ちて改心した娘達なのだろうか、現在の仕事が気に入っているのだろうか、彼女は正体を知りたかった。かつて堕ちたことがあるのであれば、とても昔のことに違いない。それほどこの女性達は年を取っているとゾフィーは決めつけた。女性達は元来、皆とてもうんざりしているように見えた。これでは一調理台の上の格言とは逆に一豊かな緑の沃野とはいえないだろう。

ゾフィーが食事を終えたとき、八時半であった。今すでにベッドに就くことはできない。しばらく彼女は決断が付かないまま食堂の窓辺に立って、雨で湿ったヴィルヘルム通りを覗いていた。彼女はいつもただ西地区に外出していた。ひょっとしたら中心地の酒場に行けるかもしれない。しかし駄目だ。一彼女は、今日は定刻にベッドに就いて、そもそ

も休暇の間ずっと極めて堅く過ごす決心をしていた。 — 外出は今晚どんな状況であれ、考えられない。

幸い「書齋」という表記のドアを彼女は発見し、今晚どう過ごしたらいいか分かった。彼女の恋人のハンスに、彼の妹[自分]がやがて訪問しますと伝えなければならない。

とても閑散として、照明に乏しい書齋では単に一人の長く黒いフロックコートを着た白髪の紳士がいた — 牧師に違いなかった。彼女が入って来ると彼は混乱して新聞から目を上げるか、あるいは新聞読みのうたた寝から覚めるかして、何かをつぶやいた。確実に彼は当惑していた。多分彼は、自分がこんなに可愛い衣裳の娘と同じ部屋に二人っきりでいていいものか疑念を抱いていた。

ゾフィーが娘らしく微笑して、 — 少なくとも彼女はそう考えていた、 — 彼の側を通り過ぎ、書き物机の前の回転椅子に腰掛けたとき、この老説教家はまことに心優しく見えると彼女は思った。ノイローエのレーニツヒ牧師はもっと頑固な質である。彼女が彼の賛美歌の歌詞を覚えないうちか、更には「少年ども」と一緒に所を見つければならぬ、それ以上に、この牧師は厳しく殴りつけるのであった。

心優しく、高齢で、敬虔であっても、それとは関係なくこの白髪の紳士はそこから遠慮なく、すべてをしょっちゅう新聞から窺い、彼女の脚を盗み見していた。ゾフィーは苛立って、スカートをできるだけ下の方へ、 — 膝近くまで、伸ばした。彼女はこれは牧師にしては不埒であると思った。普通、殿方が彼女の脚を盗み見ることは、彼女にとっていつも楽しいことであった。しかしこれは牧師にはふさわしくない。牧師だったら、彼女の脚を見て楽しむことより別の楽しみを求めるべきである。その対価に彼は給料を得ているのではない。

彼女は老紳士の視線を三度目捕らえたとき、彼に厳しい視線を送った。早速彼は赤くなって、何か口ごもり、慌てて読書室から去った。

ゾフィーは溜め息を付いた。これはまた彼女の意図していたことではなかった。ただ一人っきりとなるとこの書齋はかなり陰鬱である。

いずれにせよ便箋には「キリスト教徒宿坊」の印字があった。これは喜ばしいことである。このような手紙は監獄では敬意を持って扱われるであろう。このような手紙はきつと期待通り望みの訪問許可をもたらすであろうと彼女は思った。すぐにこのような便箋と封筒の十二枚ばかりを用意周到に彼女はハンドバッグに入れた。これらは将来またきつと有益となろう。

勿論敬虔極まりない印字があっても、彼女の筆記の労が少なくなることはなかった。朝方と同様に夕方も難しい作業であった。 — 長いこと彼女はそれにかかっていた。

しかし結局仕上がった。彼女は必ずしも沢山筆記したわけではなく、ただ四つか五つの文であった。しかしそれらの文はハンス・リープシュナーに(それに監獄の管理部に)「妹」の来訪への備えをさせるに十分であった。ハンスはこの手紙にどれほどにんまりとすることだろう。彼が彼女を — そのようなことには彼は格別才気があって — 全く妹として扱うとなれば、この訪問は何と素敵なものとなることだろう。彼女は早速警察とか、 — 監獄の中で警備員として巡回している者の目の前で、彼の厚かましい兄妹らしい接吻を感じた。 —

そうこうしているうちに九時半となった。もはやすることはなくなった。勿論ベッドに

入って良かった。ゆっくりと彼女は脱衣した。今や彼女は、日中、永遠に疲れていたとしても、しっかりと目覚めた。眠りの欲求を少しも感じなかった。窓の下の外部では車が滑って行き、クラクションを鳴らした。彼女はうんざりして脱衣しながら、――男どもが今や滑稽に勿体ぶって、あるいはさりげなさを下手に装って、バーに入り、娘達に手短に頷いたり、高い椅子によじ登ったり、――彼らの最初のカクテルやウィスキーを注文する様子を文字通り見ていた。

いや、駄目、今日は絶対外出しない。

彼女のベッドの横のサイドテーブルに赤い小口の黒い小本が置かれたいたのは結構なことであった。金色の印字で「聖書」と記されていた。

堅信礼以来、ゾフィーは聖書をもはや手にしていなかった。当時この本との彼女の関わりは、単に牧師レーニツヒに推奨された格言の暗記と――更にもっと頻繁であったのは――誘惑的場面を探すことに限られていた。今晚彼女はとにかく時間があって、それで彼女は聖書を手にして、まともに付き合うことんして、最初から始めた。(自分に気に入ったら、この素晴らしい、無料の読書を、休用に自分のトランクに詰めることにしよう)。

ゾフィーは緊張していた。この有名な書には本来何が記されているのか。創世記はさほど面白くない。――それでも構わない。そうだったかもしれないし、そうでなかったかもしれない。それは重要なことではない。重要なのは、自分自身がいることだ、――自分がいることは本当、第二章のアダムとイヴの創造のお蔭だし、第三章の墮罪のお蔭だ。

つまり有名な墮罪というのは、教養ある男達が、バーの一人の娘をよくうんざりさせる(男どもが巧妙に振る舞ってしまう)あのことだわ。ゾフィーはまたすべてを見いだした。すべてがあった。認識の木と、林檎、それ故今日でも「腐った林檎を投げてコケにする」と言うし、それに蛇。しかしゾフィーは少しも聖書の描写に納得しなかった。聖書に書かれているものを正直に読めば、神様は女に、認識の木から食べることを禁じていないとすぐに分かる。そうよ、男には神様は禁じている。しかしそれはまだ女が創造される以前の事だ。女に少しも禁じられていないことで、女を罰することは、巧妙な仕掛けだ。男どもがしそうなことに似ている。

そんな風にもう始まっているのであれば、これから先どうなるのだろうとゾフィーは苛立って考えた。すべてはいかさまだ。そんなのに引かかると、阿呆に違いない。修道士どもは今日でもそんな戯言を述べている。そんな手合いがまだ私の許に来るかもしれない。

苛立って彼女は聖書をパタンと閉じた。休暇に持参するか。全く話しにならない。永遠に立腹しなくてはならない。だから人々はここにこの品を放置しているのだ、――誰も求めない。

彼女は明かりを消して、暗闇の中にいた。

彼女の怒りは消えた。しかし掛け布団の下は温か過ぎた。閉ざされた窓の中の空気は余りに息苦しかった。彼女は起きて、開けた。彼女は電車のベルの音を聞いた。クラウゼン通りへ曲がって来るとき、電車は常にベルを鳴らす。彼女は通行人の足音を聞いた、あるときは個々の足音で、とても甲高く、――あるときは大勢の足音で、混乱した色々な物音であった。車が行き来し、うなり、クラクションを鳴らして、更に急いだ。....

今度は彼女の体がかゆくなり始めた。彼女はあちこち引っ掻いた。あちこち身を投げた。

それから静かになって、横になろうとした。彼女は入眠の姿勢を取った。右側を下に寝て、右頬の下に両手を置いた。彼女は目を閉じた。入眠は間近であった。

しかしすぐに、喉が渴いていると思い付いた。彼女は起きて、一杯の水を飲まなければならなかった。水は気の抜けた味がした。彼女はまた横になって、睡眠を待った。しかし睡眠は訪れなかった。そもそも眠気は訪れそうになかった。今朝自分の部屋でどんなに疲れていたか、思い浮かべたが空しかった。しわくちやの服を着て、口はリキュール類で草臥れて、両足は痛かった。 — ハンス宛に数行やっと思いついたとき、どんなに睡魔と闘ったことか。背後では阿呆な料理女がいびきをかいていたのである。甲斐はなかった。睡眠はやって来ない。彼女は百まで数え始めた。

彼女と同じように、数千の者達が、追い立てられ、落ち着かず、ベッドに横になっていた。最後の金を支払った者達であった。朝の二日酔いの中、二度と外出しない、夜のたびに、眠り尽くすと誓っていた者達であった。夜のたびに、何の狩か名前すら知らないのに、何かを求めるよう課されているその永遠の狩で疲れてしまった者達であった。ゾフィー・コヴァレフスキーのように彼らは落ち着かずベッドの中で反転していた。彼らを目覚めさせ、また結局追い立てているのは、アルコールへの渇きでもなく、抱擁への欲求でもなかった。彼らは一人つきりにもなれず、休息することもできなかった。彼らの部屋の黒は死を思い出させた。彼らは十分に死について耳にし、目にして来た。四年間内外で絶えず死者が生じていた。死者はまだ十分に若くして亡くなった、 — 余りに早すぎる死であった。しかし今なお彼らは生きており、生きたいと思っていた。

他の者達と同様に、ゾフィー・コヴァレフスキーも起き上がって、あたかも緊急の約束であるかのように、何か重大なことを絶対遅らせてはならないかのように、急いで身繕いをした。彼女は急いで階段を下りて行って、通りに出た。

彼女はどこへ行くのか。彼女は通りの上手、下手を見た。どこへ行こうと本来どうでも良かった。内心、どこでも同じと分かっていた。しかし彼女は、自分が一度、中心部の酒場を見てみたいと欲していたのを思い出した。それで彼女はゆっくりと（突然人中にいたので、時間が沢山あった）中心部へ歩いて向かった。

52

ブラックヴィッツはシュトゥットマンを雇う

ティアガルテンを通過しての長時間の、落ち着いた散歩で、かつての応接課長フォン・シュトゥットマンの頭はまた解放された。それで騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツも、この友に、ノイローエのイメージを伝える機会を得ることになった。そこはノイマルクのはるか奥にあって、ほとんどもうポーランド国境にあって、全く森で囲まれているのである。ブラックヴィッツは、ノイローエを実際よりも薔薇色に描く意図を有しなかった。彼は友を騙したくなかった。しかし全く自明なこととして述べたことは、この酩酊し、墮落して、混乱した町の中では、騎士領ノイローエがより静かで、より純粹に浮かぶということであり、どの顔も馴染みがあり、どの人間も結局見通せる人物であり、 — 植物も動物も時代の酩酊に汚染されていないということであった。

フォン・ブラックヴィッツにとって、大理石の張り出しや、ネオンの看板、絵の広告の

中、きらびやかに飾られた、しかし上部の崩れて朽ちた正面の家々を前にこう言うことは簡単なことであった、「私の家は、有り難いことに、別様だ。綺麗ではないが、堅牢で、偽りのない、赤い煉瓦だ」と。

彼はティアガルテンの焼けた芝地や、雑草に覆われた花壇を目にしているとき、これらの手入れのためにはもはや金がなくて（紙幣は沢山刷られていても）、彼はこう言った。「我らの許も素っ気ない。しかしそれでも十分に豊かな収穫が育ってくるのだ、勝手にな」。

薔薇園では、薔薇の木の花がむしり取られ、枝が折り取られていた。市場で入手するのではなく、ここで失敬する花屋がいるように思われた。「我らの許でも盗まれる。しかし幸い、まだ荒廃していない」。

彼らはベンチに腰掛けた。乾燥した大気が雨の湿気をすぐにまた吸い上げていた。彼らの前に、茂みの小島を有するノイ・ゼー[湖]があった。彼らの上には静かな樹冠が見られた。動物園から定かならぬ動物の吼え声が響いて来た。

「私の義父は」とフォン・ブラックヴィッツ氏は夢想的に言った、「八千モルゲンの森を差し当たりまだ保有している。この老公は多くの面でとてもしわいのだが、猟の許可証は気前よく出している、一 幾つかの素晴らしい雄山羊を射止められるぞ」。

いや、ノイローエは、次第に濃くなって行く夕闇の中、静かな、世俗を離れた島となっていた。フォン・シュトゥットマン氏はこのような知らせに全く無頓着というわけでもなかった。午前中なら田舎への逃亡はどのような考えであれ、却下したであろう。しかし幾多の体験を伴う午後を経て、この時代、四年間前線で戦った者の神経すら傷めてしまうことが証明された。フォン・ベルゲン帝国男爵との幕間劇はさほどグロテスクな刑事事件とさえ言えるものでなかった。有り難いことに、完全にいかれた者達が、今ほどに頻繁に事を起こすことはなくて、彼らとの衝突を日常生活の計算の中に入れなくてはならないのであった。

しかしこの幕間劇は、悲しく苦しめるやり方で、ホテル業の冷静な鋼のメカニズムを明るみに出した。これまでこのメカニズムに対し、フォン・シュトゥットマンはその力、熱意、仕事を捧げて来たのであった。彼は極めて几帳面な責務遂行によって、好意ではなくても、敬意に値する仕事をしてきたと信じていた。墜落した者には、最近雇われたエレベーターボーイから最上位の総支配人に至るまで、破廉恥で厚かましい好奇心しか寄せられないということを体験しなければならなかった。情愛深い枢密顧問官シュレックが、精神病患者についての若干尋常ならざる見解を持って飛び込んで来なければ、彼は何の配慮もなく、迅速果断に半ば犯罪人として追放されていたであろう。

かくて人々は勿論彼を解雇前に戻した。総支配人フォーゲル氏は灰色髪の豊満な体であったが、柔軟に一方の側と他方の側との間を取り繕い、一 勿論立派な外貨で支払われる一 示談金が彼のためにまずは支払われることになった。懇切な推薦状が彼に対し保証された、一 「それどころか、思うに、尊敬する戦友殿よ、この些細な、それ自体まことに不快な幕間劇は貴方にとって完全に有利なものと同様変わった。枢密顧問官シュレック殿の言葉を正しく理解しているとすれば、顧問官殿は貴方の大いなる補償要求を一 最高の要求を期待しているのだ」。

「いや」とフォン・シュトゥットマンはティアガルテンのベンチで深甚の物思いから覚めて言った、「この倫理的ろくでなしの劣等者から、甘い汁を吸いたくない」。

「何だと」とフォン・ブラックヴィッツは飛び上がって尋ねた。彼は丁度猪狩について話したところであった。「いや、勿論そうだろう。完全によく分かる。それに君にその必要もなからう」。

「済まん」とフォン・シュトゥットマンは言った、「私はまだここで物思いに耽っている、ベルリンだ。ここでして来た仕事は元々意味のないことだ。掃除の類いだ。ヘトヘトになるまで働いて、翌日はまたすべて汚れている」。

「勿論そうだ」と騎兵隊長は同意した、「掃除婦の仕事だ。私の所では、...」。

「済まん。君の所では私でも、何かしないと済まんだらう。本当に何かしなければ、...」。

「君は私にとって大きな加勢となろう」とフォン・ブラックヴィッツは熟慮して言った、「今日の午前中君にあの政治的戦闘的厄介事について話したろう。私は時に一人っきりで、
— 相談相手がいない」。

「今では」と中尉は自分の考えを声高に述べた、「多くの人々が職を去っている。仕事、そもそも何かすること、これが突然意味のないものになった。仕事の対価に、確かな価値を週末や月末に手にすると、無味乾燥な事務仕事も人々にとって意味のあるものとなる。相場崩壊で、人々の目が開いた。何故我々は元来生きているのかと、突然自問するのだ。何故我々はこれをして、何らかのことをしているのだ。人々は何故何らかのことをして、単に幾つかの完全に価値のないぼろ紙幣を得ているのか、分からなくなっている」。

「これらの貨幣暴落は、人々の許での最も悪評高いペテンだ、...」とフォン・ブラックヴィッツは言った。

「私の目は」とフォン・シュトゥットマンは続けた、「今日の午後開いた。 — 本当に君の許に行くとなれば、ブラックヴィッツよ、私は然るべき仕事をしなければなるまい。仕事だ、分かってくれ」。

フォン・ブラックヴィッツは頭をひねった。

馬の調教、と彼は考えた。しかし私の二、三の駄馬は好み以上に動かされている。 — 事務所での筆記はどうか。しかしシュトゥットマンを賃金表作成に座らせるわけに行くまい。

彼は突然緑色に塗られた古風な金庫、中身とは比較にならない大きさの金庫を有する荘園事務所、古くなった法令集で一杯の唐檜の書架を眼前に思い浮かべた、 — 厭わしく誇りを被った荒廃した小屋だ、と彼は考えた。

フォン・シュトゥットマンは騎兵隊長よりもはるかに実用的であった。「私の知る限り」と彼は助け船を出した、「多くの騎士領には農学部の見習いがあるそうだ」。

「奴等はあるぞ」とブラックヴィッツは証した、「恐ろしい一行だ。彼らは宿泊料を払い、 — そもないと誰も受け入れんだろう、 — 自身の乗用馬を確保し、何にでも鼻を突っ込み、何も分からず、何も解せず、しかし途方もなく賢しらに農業についてしゃべるのだ」。

「それじゃ駄目だな」とフォン・シュトゥットマンは決めた、「他に何かがある」。

「幾つもあるぞ。例えば農園中庭管理人だ、餌を与え、給餌や乳搾り、掃除の監督をする。在庫帳簿を記入し、脱穀機を使う。それから田畑管理人がいる。これは外に出て、犁や肥料、収穫の手配をし、まさにすべての田畑の仕事をし、いつでも現場にいななければならない、...」。

「乗用馬もあるかい」とフォン・シュトゥットマンは尋ねた。

「自転車だ」とフォン・ブラックヴィッツは答えた、「少なくとも私の所では」。

「それでは田畑検査官もいるのかい」。

「明日叩き出そう、怠け者の呑み助だ」。

「しかし私のせいで、そうしないでくれ、ブラックヴィッツ。私は君の所ですぐには田畑検査官とはなれないのだから。君が『シュトゥットマン、このライ麦に肥料をやれ』と言ってもな。忌々しいが、一度では済まん。私には辛くなるが、しかしさっぱり要領を得ないのだ。普通の施肥の他には分からないし、それでは駄目だろうと案じている」。

二人の殿方は心底笑った。彼らはベンチから立ち上がった。フォン・シュトゥットマンの二日酔いは覚めていた。ブラックヴィッツは、友が自分の許に来るであろうと、確証を得た。彼らは更に歩きながら、この計画をもっと長く、詳細に打ち合わせた。フォン・シュトゥットマンを、見習いと、信頼できる友と監視人の三位一体としてノイローエへ来て貰うことで二人は一致した。

「明日早朝、一緒に行こう、シュトゥットマン。君のことだから、君の品は三十分で荷造り出来よう。 — それで私は更に一人の分別ある者を得なければならん。私が今日雇った郎党を監督し、少しばかり叱咤出来る奴だ。 — 収穫は申し分ないことになろう。いや、シュトゥットマンよ、私は嬉しい。初めての嬉しい時間だ、何年ぶりか分からない。いいかい、まずどこかで楽しく食事しよう。あんなひどい酔いの後、口直しとなろう。ルッターとヴェーグナー亭はどうだ。結構だね。 — そこで更に一人の男だ。最も良いのは、軍隊上がりで、かつての曹長かそんな者だ。郎党とやって行ける者だ、...」。

二人は地下酒場のルッターとヴェーグナー亭へ行った。フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長が必要とする軍隊上がりの男は隅の小卓に座っていた。彼は曹長ではなかったが、士官候補生ではあった。目下彼はかなり酔っ払っていた。

53

両友人はパーゲルに出会う

「おや、士官候補生のパーゲルではないか」。

「そう、榴弾のパーゲルが座っている」。

このようにフォン・シュトゥットマンとフォン・ブラックヴィッツは叫んだ。

早速二人の眼前にほとんど幽霊めいた明瞭さで、大戦中の多くの人物の中でまさにこのパーゲルを忘れがたいものになっている場面が思い浮かんだ。これはつまりもはや大戦中のことではなく、バルト三国を赤軍の襲撃から守るべき、ドイツ部隊がかの最後の絶望的試みをしている時のことであった。それは一九一九年の春、結局リガを解放することになったドイツ人やバルト人、ラトヴィア人のかの野蛮な攻撃の際であった。

フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長の様々な寄せ集め部隊に当時若きパーゲルも所属していた。大きな学校生徒とほとんど変わらぬように見える年齢であった。ひょっとしたら実際もう十七歳かもしれなかったが、多分によろやく十六歳で、士官学校のグロース[大]・リヒターフェルデから送り出されて、将校への道を進むべく決められていたけれども、もはや将校どもと関知したくない狂って砕けた世界に投げ出されていた。そこで自ずと明

らかになったことは、この根無し草、無意味変貌人間は、次第に東へと流浪し、結局同志と呼びかける必要はなくて、まだ戦友と呼びかけて良い男どもの許に漂着したという次第であった。

まだかつて火薬の臭いを嗅いだことのない青二才が、自分と同じ言葉話し、制服を着、命令を与えたり受けたりし、 — そしてこの命令を本当に実行する戦争体験済みの年配者の中において、それを喜んでいる様を見ることは、感動的であり、同時に滑稽であった。彼の熱意を冷ますものは何もなかった。最速に全てを学ぶ、つまり機関銃、曲射砲、一台の、唯一の装甲列車を学ぶという欲求を抑えるものは何もなかった。

とうとう攻撃となった、とうとう自らの機関銃や他人の機関銃が作動し始め、とうとう最初の榴弾が人々の頭上を叩いて吠え、はるか奥で炸裂することになった。とうとう学校生徒の熱心な子供芝居が本物となった。ブラックヴィッツとシュトゥットマンは若きパーゲルが青白くなるのを見た。突然彼は静かになった。彼の頭上を空ろに叩いて富んで行く榴弾のたびに、彼は両肩の間に頭をすくめて、深くお辞儀した。

両将校は一瞥で了解し合った、 — 一言も言わなかった。彼らは若者に何も言わなかった。顔が緑になり、額に冷や汗を浮かべて、両手を湿らせて不安に対して戦った彼が、現在と一九一四年八月のかのはるか昔の日々の過去までの間に一つの橋を架けている。この昔、彼ら自身初めてこのうなり声を聞いて、初めて両肩の間に頭をすくめたのであった。誰もが一度これを経験する。誰もが一度弱気との闘いを自分の中で戦わなければならない。この内面での闘いに負ける者も多い。しかし大抵は勝利者となる。そうなれば、もはや恐くはない。

若いパーゲルの場合、最初はつきりしなかった。今や人々が彼に語りかけ、吠えかかったとしても、彼は何も聞いていなかっただろう。彼はただ大気の中、うなり声を耳にした。彼はあちらとこちらを、夢の中でうなされている者のように見つめ、彼の前進を躊躇っていた。そして彼は振り向いた。

「その通り、パーゲル、確かに忌々しい赤軍が侵攻して来る。弾痕はますます間近になって来る。確かに、貴公子パーゲルよ、間もなく猛射だ」。

早速最初の榴弾の番である。シュトゥットマンとブラックヴィッツは機械的に身を伏せた。 — しかしパーゲルはどうしているか。若いパーゲルは突っ立っている、凝視している。えぐられた土の穴を見ている。何か呪文を称えているように、唇を動かしている。

「伏せろ、パーゲル」とフォン・ブラックヴィッツは叫んだ。

すると全てが巻き上がる砂塵、炎、煙となった、 — 爆発の物音が大気を引き裂いた。阿呆、とフォン・ブラックヴィッツは考えた。

気の毒に、とフォン・シュトゥットマンは考えた。

しかし — 信じられないことに — そこに、霧と靄の中、影が立っていた、相変わらずその人影は動かずにあった。よく澄んで来ると、その人影は跳躍し、何か大地から取って、憤然と叫んだ、「こん畜生」。 — それを落とし、帽子を握って、ブラックヴィッツの許に駆け寄って、踵を打ち合わせ、言った、「騎兵隊長殿、ご報告申し上げます、榴弾の破片です」。そして全く非軍隊的に言った、「熱すぎました」。

彼は — 永久に — 自身の中の弱気を克服していた、この若いパーゲルは。

しかし永久にだろうか。

この場面、この若干馬鹿げた、それでも英雄的な、青二才の行動を、両人はパーゲルが、見たところ少しばかり酩酊して、ルッターとヴェーグナー亭の隅のテーブルに座っているのを見たとき、はっきりと眼前に思い浮かべていた。

「榴弾のパーゲルではないか」。

榴弾のパーゲルは見上げた。酩酊者の用心した身振りで、彼はまずグラスと敏を幾らか押し退けてから、立ち上がり、何の驚きも見せず、言った、「将校殿」。

「まあ、楽に、パーゲル」と騎兵隊長は微笑して言った、「将校殿はお仕舞いだ。貴方は、我らの中でまだ制服を着用している唯一の者だな」。

「確かに、騎兵隊長殿」と頑固にパーゲルは言った、「しかしもはや軍務には就いていません」。

両人はチラと見て了解し合った。

「貴方と一緒にテーブルに座っていいかい、パーゲル」とフォン・シュトゥットマンは好意的に尋ねた、「この階下はかなり一杯だ。何か食べたいと思ってるな」。

「どうぞ、どうぞ」とパーゲルは言って、立っているのが夙にしんどくなったかのように、素早く座った。両人も腰掛けた。しばらく料理やワインの選択や注文で時間が過ぎた。

それから騎兵隊長は自分のグラスを上げた、「それでは、パーゲル、貴方の健康を祈念して。昔の時代を偲んで」。

「騎兵隊長殿、恐縮です、それに中尉殿。勿論、昔の時代を偲んで」。

「それで今貴方は何をしている」。

「今ですか」。パーゲルはゆっくりと一方の者から他方の者へ目を移した、あたかも自分の返事を正確に吟味しなければならないかのようにであった、「いや、自身正確には分からないのですが、...何らかのことを、...」。

彼は曖昧な手の仕草をした。

「あれからの四年間の間に、貴方は何かしたことだろう」とフォン・シュトゥットマンは好意的に言った、「何らかのことを始めて、従事して、果たした、 — そうだろう」。

「確かに、確かに」とパーゲルは丁寧に同意した。そして酩酊者の悪意の明察で尋ねた、「中尉殿、質問を許されますならば、 — 貴方はこの四年間に沢山果たされましたか」。

フォン・シュトゥットマンは不意を突かれ、怒ろうとし、それから笑った、「パーゲル、その通りだな。私は何も果たしていない。御覧の通り、私はほんの六時間前、またしても完全に難破したのだ。騎兵隊長が私を — 一種の見習いとして、彼の荘園へ連れて行くのでなければ、何をしたらいいのか、実際分からないところなのだ。 — つまりブラックヴィッツはノイマルクに立派な荘園を持っている」。

「六時間前難破ですか」とパーゲルは繰り返して、完全に荘園のことを聞き逃していた。「それは滑稽です」。

「どうして滑稽なのだ、パーゲル」。

「分かりません、...ひょっとしたら、貴方が今ここで酔潰けキャベツ付きの鴨を食されているからか、 — ひょっとしたらそれ故滑稽に思われるのかもしれませんが」。

「それに関して」は」とフォン・シュトゥットマンは、今度は彼の側が悪意を持って言った、「貴方もここに座っていて、シュタインワインを飲んでいる。 — ちなみに、こんなに大勢の中で味わうのは難しかろう、鴨の方が貴方にはましかもしれない」。

「勿論です」と率直にパーゲルは同意した、「私も夙にそのことを考えていました。ただ食事は恐ろしく退屈です。飲酒の方がはるかに簡単です。その上私はまだ計画していることがあります」。

「貴方が何を計画していようと、パーゲル」と軽くシュトゥットマンは言った、「食事の方が飲酒よりも貴方の計画にとって有益と思うぞ」。

「いえ、ほとんどそうとは言えません」とパーゲルは答えた。そしてこれを証明するかのよう、彼はグラスを飲み干した。しかしこの証明は相手の二人に何の印象も与えず、二人の顔は懐疑的であった。――それで彼は説明して付け加えた、「つまり私は沢山金を支払わなければならないのです」。

「飲酒したからといって、沢山支出することにはきつとなるまい、パーゲル」とフォン・ブラックヴィッツは口を挿んだ。この若者をむしろ励ましているシュトゥットマンの弱腰は彼にとって夙に苛立たしいものであった。「貴方はへべれけ寸前と気付いていないのか」。

フォン・シュトゥットマンは目で合図したが、驚いたことにパーゲルは全く平静であった。「かもしれません」と彼は言った、「しかし構わないのです。それだけ一層金を手放せます」。

「それじゃ、女の話しか」とフォン・ブラックヴィッツは苛立って叫んだ、「パーゲル、私は道徳家先生ではない。しかしこんなに酔っ払って、こんな状態では、いや、これは良くない」。

パーゲルは答えなかった。その代わり彼は自分のグラスをまた満たして、それをゆっくりと飲み干し、新たに満たした。ブラックヴィッツは憤然とした動作をした。しかしフォン・シュトゥットマンは少しも騎兵隊長と同じ意見ではなかった。ブラックヴィッツは素敵な奴で、上品な奴であったが、心理学者では全くなかった。そもそも彼は他人を観察できなかった。――彼はいつも、皆、自分と同じように感ずるに違いないと思っていた。そして自分の考えている通りに事が運ばないと、彼はすぐにカッとなった。

いや、まさにパーゲルが自分のグラスを満たし、さっと空にし、また満たしたとき、シュトゥットマンはとても辛く、しかしまさにそれ故少なからず活発に、三七号室とかのことが思い出された。シュトゥットマンは今でもまだ正確に、そのとき観察した、不安と迷いの破廉恥心によるある種の目の表情を思い出していた。パーゲルはとても無茶に飲んでしたが、そもそも酩酊しているのか、シュトゥットマンは少しも確証を抱けなかった。勿論確かなことは、二人の殿方の質問が彼には面白くなく、多分彼は一人っきりでいたかったのであろう、ということであった。しかしシュトゥットマンは、パーゲルのこの無造作の、いやそれどころか敵対的気分に影響を受ける気はなくて、彼はこう感じていた。かつての士官候補生が危機的状況にある、と。当時と同じように、人々は彼に目を向けていなければならなかった。そして午後の一つの敗北を味わっていたフォン・シュトゥットマンは、今夜はどんな策略にもはまらず、シャンパン瓶の形の手榴弾をタイミング良く投げようと誓っていた。――このような投げ方には色々な可能性、様式があろう。

パーゲルは今や平静に座っていて、一見思案げに、二人の他人の存在に格別注意を払わず、喫煙していた。シュトゥットマンはブラックヴィッツに小声で自分の意図を伝えた。フォン・ブラックヴィッツは単に苛立たしげな拒否の身振りをしたが、結局了解した。

煙草が終わると、パーゲルは再び瓶をグラスの上に傾げた。しかしその首から液体は流れ出ず、瓶は空であった。パーゲルは見上げて、両人の視線を避け、目で給仕人に合図して、更に一本のシュタインワインとダブルのキルシュを注文した。

苛々してフォン・ブラックヴィッツは、何か言おうとした。しかしシュトゥットマンは彼を宥めて、彼の膝に手を置いた、 — 騎兵隊長は、渋々、黙っていた。

給仕人が注文の飲み物を持って来ると、パーゲルは勘定を要求した。給仕人は客の状態を見て、強引につり上げたのか、あるいはパーゲルはここにもう数時間いたためか、とても高い勘定であった。パーゲルはズボンのポケットから一束の紙幣を取り出して、数枚を取り、給仕人に与え、お釣りを断った。給仕人の尋常でない感謝で、チップの高さが察せられた。

両人は再び視線で了解し合った。一方は苛立った視線であり、もう一方は落ち着くよう宥める視線であった。それでも二人は相変わらず何も言わず、更にパーゲルを観察していた。パーゲルは今やすべての小ポケットやポケットから紙幣の束を取り出して、それらを重ねていた。それから彼は紙ナプキンを取って、紙幣の束をそれで巻いて、再びポケットを探し、結び糸の端を取り出し、それで包みに紐を掛けた。そして小包を脇に押しやり、仕事が終わったかのように、背もたれに寄りかかり、一本の煙草に火を点けて、キルシュを飲み干し、ワインを一杯注いだ。

今や彼は見上げた。彼の視線は、その明るい目から奇妙に黒ずんで、凝然として、二人の殿方に軽く嘲笑的に向けられた。シュトゥットマンは自分が見つめられた瞬間に、パーゲルは単に芝居をしていると悟った。飲酒、並びに視界にない振り、お金の挑発的露呈と梱包、 — すべては両人に対してなされた芝居なのだ。

この若者は完全に絶望している、と彼は考えて、奇妙に感動していた。ひょっとしたらこの若者は我々に何かを語りたのかもしれない、あるいは助けを求めたいのかもしれない、 — ただまだ彼はそれを告げていない。 — ブラックヴィッツが邪魔さえしなければ、...

しかし白髪の、激しやすいブラックヴィッツはもはや自制できなかった。「パーゲル、見苦しいぞ」と彼は憤然と叫んだ、「金をそのように扱っちゃいかん。そんなに金を扱うものではない」。

パーゲルは相変わらず平静にしているものの、この爆発を歓迎しているかのようにシュトゥットマンには思われた。

「質問を許されますならば、騎兵隊長殿」とパーゲルは渋々の言い回しながら、丁重の度合いを増して、言った、「どのように金を扱うのでしょうか」。

「何だと」と騎兵隊長は叫んだ。彼の額の血管は浮き上がっていて、彼の目は怒りで真っ赤になっていた、「金をどう扱うのだと。きちんと扱うのだ。士官候補生のパーゲル殿よ、きちんと、良心的に、 — それにふさわしく、分かったか。ポケットにルーズに有るものではない、財布に入れるのだ、...」。

「多すぎるのです、騎兵隊長殿」とパーゲルは詫びて言った、「財布に入りません」。

「そもそもそんなに多くの金を持ち歩くものではない」と騎兵隊長は明瞭に怒って叫んだ（隣のテーブルからすでに人々が覗いていた）、「それは作法にかなっちゃいない。そんなことをしちやいかん」。

「駄目ですか」と忠実な、向学心の強い生徒のように尋ねた。

シュトゥットマンは唇を噛んで、大声で笑い出さないようにした。しかしフォン・ブラックヴィッツは余り諧謔心がなくて、士官候補生が自分を敢えて少しばかりからかっていることが分からなかった。

パーゲルは詫びて言った、「ワインを飲み終わったら、紙束をできるだけ早く処分しようと思っているのです」。

彼は飲んだ。そこで彼の悪漢めいた、全く若々しい微笑が彼の顔全体に広がった。シュトゥットマンは、彼がクーアラントでの昔の最初の日のように見えると思った。フォン・ベルゲン帝国男爵との類似性は見られなかった。パーゲルは金包みに手を伸ばし、躊躇っていたが、それから素早く決心して、その包みをテーブル越しに騎兵隊長に押しやった。「これを所望されますか、騎兵隊長殿」。

騎兵隊長のヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツは半分椅子から飛び上がって、彼の顔は赤黒くなった。これは一つの侮辱、熟慮して加えられた侮辱であった。この侮辱がかつての士官候補生から発せられたことで、それは十倍より劣等になった。一人の将校たる者、とりわけ将校達の中でも全く格別にフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、制服を脱いだ後でも、それでも自らの裡に旧来の概念や世界観を保有するものである。フォン・シュトゥットマンとフォン・ブラックヴィッツは良き友達であった。それでも — この友情は騎兵隊長と中尉の位階関係の下で生じたものであって、それは維持された。中尉が騎兵隊長に何か不愉快なことを言おうと思ったら、これは上司と部下の間での然るべき作法を用心して維持しながらなされた。しかしパーゲルは騎兵隊長の友人ですらなかった。彼は何かとても不愉快なこと、いや侮辱的なことを言ってしまった。まさしく作法の何の用意も、一切の保持もなしに述べた。従ってフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は激した。

何かとんでもないことになりそうであった。フォン・シュトゥットマンは騎兵隊長の肩にしっかりと手を置き、彼が椅子に戻るよう強いた。「彼は正体なく酔っている」と彼は小声で言った。そして鋭くパーゲルに言った、「即刻、謝罪し給え」。

パーゲルの顔の若者らしい微笑はゆっくりと消えた。何が起きたのか必ずしも合点していない風に、彼は物思いに耽って、怒る騎兵隊長を見ていて、それから自分の手の中の紙幣束を見つめた。彼の顔は陰気になった。彼は束を再び自分の側のテーブル上に置き、グラスに手を伸ばし、急いで飲んだ。

「済みません、…」と彼はそれから突然不機嫌そうに言った、「今日このような屑に誰が価値を置きましょう、…」。

「パーゲル殿」と騎兵隊長は叫んだ、相変わらずとても怒っていた、「私の流儀は旧来のままだ。他の者達がそれを古くさい、劣等なものとなしなすな。私はこのような屑をととても大事と思っている」。

フォン・シュトゥットマン中尉は完全に明瞭に提案した、「ブラックヴィッツ、彼を放っておけ。彼は過敏になっており、酩酊している。ひょっとしたら何か劣悪なことを計画しているのかもしれない」。

「彼に興味はない」と騎兵隊長は憤然と叫んだ、「機嫌良く一人っきりにさせておこう」。

パーゲルは素早く一度中尉に目を向けたが、しかし返事しなかった。

フォン・シュトゥットマンはテーブル越しに身を屈めて、好意的に言った、「貴方がそ

の金を私に差し出すのであれば、パーゲルよ、私はそれを頂こう」。

騎兵隊長は呆気にとられた身振りをしたが、しかしパーゲルは素早く金包みに手を伸ばし、自分の間近に引き寄せた。

「それを貴方から奪うのではないのだ」と中尉は少しばかり嘲笑して言った。

パーゲルは赤くなった。彼は恥じ入った、「この金をどうなさるおつもりです」と彼はむっつりと尋ねた。

「もっとましな時まで、　－　貴方のために保管しよう」。

「それは必要ありません、　－　私はもはや金に用はありません」。

「私が思っていた通りだ」と中尉は平静に証した。そして強いて、無造作に、彼は尋ねた。「何故貴方も六時間前に難破したのかね、パーゲル」。

今回パーゲルは完全に赤くなった。まさに苦悩に満ちた緩慢さで赤みが両頬から始まって、彼の顔中に広がった。赤みは軍服の、高く、皺になった襟の下から忍び出て、額の上の髪の毛の生え際まで上昇した。突然、この人間はとても若いこと、今、彼は何とひどくこの若々しい当惑の下で悩んでいるか明らかになった。

怒っている騎兵隊長でさえ、別の目でこの榴弾のパーゲルを見た。

しかしパーゲルは、この明らかな当惑に苛立って、反抗的に尋ねた、「私が難破したと誰が貴方に話したのですか、フォン・シュトゥットマン殿」。

そしてシュトゥットマン、「パーゲル、私はそのように貴方を理解したのだ」。

そしてパーゲル、「それは誤解です、　－　私は、...」。しかし渋々打ち切った。余りに明瞭に彼の赤面が裏切っていた。

「勿論、パーゲル、君は困っている」とフォン・シュトゥットマンは穏やかに言った、「我々兩人、つまり騎兵隊長と私はそう察している。君は日常的酪酊者ではない。理由があって飲んでいるのだ。何か上手く行かずに、つまり貴方が、　－　いや、分かっているのだろう、パーゲル」。

パーゲルは手の中のワイングラスを回した。彼の態度はより寛いだものとなったが、しかし返事しなかった。

「何故貴方は我々に助けを求めないのだ、パーゲル」と再び中尉は尋ねた、「私も今日の午後、思いがけず騎兵隊長に助けて貰った。私もまことに無様にこけたのだ、...」。

彼は今日の午後の自分の転落を思い出して微笑した。彼は転落のことを思い出せなかった。しかしブラックヴィッツはそれを露骨に描写していた、いかに彼が客人達の足許に転がって来たかを。自分の「転落」はパーゲルの転落とは本質的に別であることをシュトゥットマンは承知していた。　－　単に身体的転落であり、格別心的なものではない。しかしこの些細な誇張は支障とならなかった。

「ひょっとしたら我々は助言できるかもしれない」と彼は穏やかな、しかし執拗な説得を続けた、「我々が貴方に何らかの実際的手助けができるなら、なおましであろう、パーゲル」とはなほだしつこく言った。「我々が昔、テーテルミュンデへ侵攻したとき、貴方は機関銃を持って倒れた。貴方は瞬時に、私の助けを受け入れることに躊躇しなかった。クーアラントでできたことを何故ベルリンではできないのだ」。

「それは」とパーゲルは陰気に言った、「当時我々は一つの事柄のために戦っていたからです。今日では各人が自分一人のために戦っています、　－　皆に敵対して」。

「一度戦友だった者は、永久に戦友だ」とフォン・シュトゥットマンは言った、「覚えているだろう、パーゲル」。

「はい、勿論」とパーゲルは言った。彼は思案しているかのように顔を伏せた。両人は待機して彼を観察した。それからパーゲルはまた頭を上げた。「反論されましようが」と彼はゆっくりとした、絞り出すような発音で明瞭に言った、「しかし私の好みではありません。私はとても疲れています。明日早朝、貴方らにどこかで出会えますか」。

三言で両友人は理解し合った。「我々は明日早朝、すぐ八時過ぎにシュレーゲン駅から出発する、オスターデ方面に」とフォン・シュトゥットマンは言った。

「分かりました」とパーゲルは言った、「それでは私は駅へ行きましょう、一ひよっとしたら、...」。

彼は万事片付いたかのように、宙を見つめた。彼は何の質問もしなかった。何故出発するのか、どこへ出発するのか、何が起こるのか、彼は関心がないように見えた。

騎兵隊長は懐疑的に両肩を動かした。この中途半端な承諾に満足していなかった。しかしシュトゥットマンは譲歩しなかった。

「それは前向きではある、パーゲル」と彼はこだわった、「しかし我々の望みの全てとは言えない、一パーゲル、貴方は何か計画している、先ほど何か金の手放しのことを言っていた、...」。

「女の話だろう」と騎兵隊長はぶつくさ言った。

「すぐに十二時となる。今からと明日早朝の八時までの間に、貴方は何か計画している、パーゲル。その結果は貴方自身にも不確かなもので、それで貴方は確たる承諾を我々に与えようともしないし、我々の同道も望んでいない、...」。

「詰まらぬ女どもだ、...」と騎兵隊長はつぶやいた。

「私は」とシュトゥットマンは、パーゲルが返答しようとしているのに気付くと、更に早く言った、「騎兵隊長とは別な見解だ。何らかのいかがわしい女の話しが潜んでいるとは思わない。貴方はそんな男ではない」。

パーゲルは頭を垂れた、しかし騎兵隊長は深い息をした。

「まさに次の数時間を貴方と一緒に過ごすことを許してくれるならば、貴方に感謝しよう、両人とも感謝しよう」。

「格別なことではないのです」とパーゲルは言った、相手の入念な執拗さに押し切られていた、「ただ一つの試みをしたいのです」。

先の中尉は微笑した、「運命への一つの問いかけだな、パーゲル」と彼は言った、「先の士官候補生パーゲルに招請された神判だな。一いや、貴方はまだうらやましいほど若い」。

「私はうらやましく思われる者ではありません」とパーゲルは不平を言った。

「いや、勿論そうだ、貴方の言う通りだ」とシュトゥットマンは素早く言った、「若い者は、青春をただ一つの間違いと見なすものだ。一後になって始めて、青春は一つの幸運であると分かる。一それではどうだい、我々是一緒に行っていないかい」。

「私がしたいことを、邪魔なさらないうでしようね」。

「いや、勿論邪魔しない。我々は居合わせないものとして、行動し給え」。

「騎兵隊長殿もご了解ですか」。

騎兵隊長はただ小声で口ごもった。しかしすでにこの同意でパーゲルには十分であった。

「それでは、構いません、一緒にどうぞ」。若干彼は元気づいた、「ひょっとしたら貴方らにも面白いかもしれません。　－　まあ、お分かりになりましょう、行きましょう、...」。

彼らは出発した。

第七章
蒸し暑い満月の夜

54

アマンダとハルティヒ夫人はマイヤーのことで一致する

アマンダ・バックスは素早く呼吸しながら、茂みの中に立っていた。枢密顧問官はその潰れた高齢の声で、極めて高い調子で語っていた、「マイヤーさん、何て声を添えるのだ、女のような高い声だ」。

黒人マイヤーの頭が窓から出て来た、「それはただ、枢密顧問官殿」と彼は説明して言った、「眠りから飛び上がったからです。眠っているときはいつもそんな高い声になりません」。

「まあ、どうでもいいが」と老人は語った、「肝要なことは、貴方の妻が後にその高い声を信ずるかだ、 — マイヤーさん、ここに一通の手紙を持参している」。

「畏まりました、枢密顧問官殿、忘れず配達致します」。

「まあ、そんなに急ぐな、若造。ベッドにはすぐに戻れるぞ。 — 手紙は私の婿殿に渡すのだ」。

「畏まりました、枢密顧問官殿、明日午前すぐに、駅から戻られたら渡します」。

「いや、それは都合が悪い。そのときは、彼の妻が居合わせよう。これは仕事の件だ、分かるだろう、マイヤーさん」。

「畏まりました、枢密顧問官殿、それでは渡すのは、...」。

「ちょっと待て、若造。ベッドの軋みは放っておけ。ベッドは退屈の余り軋んでいるんだろう、 — それとも」。

「畏まりました、枢密顧問官殿、...」。

「それでだ。 — この開けられた窓辺でも貴方は風邪を引かんだろう、いつも慣れているように涼しい。 — マイヤーさん、貴方はいつも寝間着を着ずに眠るのか」。

「枢密顧問官殿、私は、...」。

「むしろ『畏まりました、枢密顧問官殿』と言えばいい。 — それが最も確実だろう。私は暗闇の中で見えんと思っているんだろう。私は暗闇の中でも老いた雄猫のように良く見えるのだ、分かるか」。

「とても暑いものですから、枢密顧問官殿、お許しください、...」。

「勿論許すぞ、若造。今晚がそなたにとって暑いことは許そう。そなたは田畑に乗り入れず、午後には更に一杯聞こし召して、 — それできっと暑かろう」。

「枢密顧問官殿、...」。

「それで枢密顧問官はどうしたらいいか、若造。分かるか、私は気が変わった。私は手紙をむしろ私のエリアスに任そう。思うに、そなたは明日考え事が多すぎて、手紙のことは忘れそうだ、...」。

懇願するように、「枢密顧問官殿、...」。

「それじゃ、良い晩を、マイヤーさん。寝間着をむしろ着ることだ。先ほどアマンダを見かけたと思うぞ、...」。

老公は足を引きずって去った。アマンダは茂みに立っていた。彼女の心臓ははなはだ動悸した。彼女のハンスは大して役立たず、どんな女の尻をも追いかけていると良く承知していた。いつも彼の側にいると、粘り強くなるよう励ませると考えていた。...いや、何にもならない。そんな幸せはない。

小さなマイヤーはまだ窓辺に立っていた。もう一度情けなく請うた。「お願いします、枢密顧問官殿、...」。あたかも枢密顧問官が助けてくれるようで、あたかも手紙が託されるならば、何か事態が変わるかのようであった。...

アマンダは自分の場所から彼が窓辺に横たわっているのが十分に良く見えた。私のマイヤーは何と愚かなんだろう。どうして自分はいつもこんな愚かな、弛んだ奴等に引っかかるのだろう。何の役にも立たない奴等に。自分には分からない。自分は悲しい。

その時、中の女がひそひそと囁き始めた。ハンス君は半ば回転し、粗放に言った、「黙っている」。

これはまたアマンダには嬉しいことだった。相手の女に彼がとてもぞんざいなのは、この女を大したものに思っていない証拠だった。自分にはこんな口はきかないだろう、自分ならいつもすぐに叱り飛ばすから。しかしこの相手の女は誰か、とても知りたくなった。宮殿からの女ではない。その女は皆、晩禱に出ている。

「早く着るんだ」とハンス君が言うのが聞こえた。「アマンダが来たら、大喧嘩になるぞ。そんなのは御免だ」。

アマンダは吹き出しそうになった。いつものように阿呆だ。喧嘩は彼の窓の前にまで来ているのに、彼には見えない。彼は気付かない。ハンス君は事の後、恐ろしくずる賢い。でもこの女はとっちめてやろう。ハンス君は私のものと村のどの女にも承知して貰おう。農園中庭の女どもも言うまでもない。

中の女は本当に急いでいるように見えた。アマンダは部屋の中で彼女がガミガミ言うのを聞いた。今や女の頭がハンス君の隣りに見えた。

「窓を閉めて、明かりを点してよ。私のものが見つからないわ」と彼女が叱った。

(誰だろう、囁き声だと、誰なのか、そもそも分からなくなる)。

「しっ」とマイヤーは大声で鋭く言った。それで茂みの中のアマンダでさえ、すくんだ。「うるせえな。明かりを点けたら、私が起きていると人々に思われるだろう」。

「誰がそう思うのよ。あなたのアマンダのこと？」。

(ハルティヒ夫人かしら。あんまりだ。八人の子持ちの御者の女房が若い娘の恋人を盗むなんて。だったら思い知らせてやる)。

「おまえには関係ねえだろう。急いでずらかるんだ」。

「でも私のものが、...」。

「明かりは点けねえぞ。どんな仕上がりか知った事じゃない」。

罵りながら二番目の頭が窓から消えた。アマンダは今や、ハルティヒ夫人だとほとんど確信した。しかしほとんど確信しても、確定ではない。急ぐことはない。ハンス君の方はいつでも始末できる。まずはこの女を掴まえることだ。この女を捕らえるのだ。一たとえ一晩中ここに立っている羽目になっても。この女は自分の目の前から出て行く、一ドアからか、窓からか。一だから辛抱しよう。

滑稽なことであったが、アマンダは祈祷室で徹底的に怒った後では、今や怒りのきっか

けが更に増大していたが、もはや本気で怒る気になれなかった。ハンス君には少しも怒りが湧かない。この男は子羊で、子羊のままである。自分がこの男に注意していないと、この男はただ愚かなことをする。それに元々この女にも本気で怒りが湧かない。アマンドは自分でも不思議に思った。しかしひょっとしたら、この女が誰か知って、この女と話しをするとき、初めて、憤然とするのかもしれない。自分がなお立腹するよう、彼女は期待した。この女に、自分は自分のものをおめおめと指をくわえて盗まれるのを見ているような女と思われたくない。

かくて彼女は立っていて、辛抱強く、そして苛々と、全く彼女の思い同様に揺れて、待っていた。そしてとうとう — 満足の思いがないわけではなく、 — 訪問の女が叱りながら窓から出て行くのを目にした。しかしこの満足の由来は、この窓からの脱出が、最終的に、ハンス君がこの女を大して評価していず、この女も彼に対する支配権を有していないと証されていることによるものであった。というのは彼が余りに無精で、この女のために戸口のドアを開けないとしても、一口言えば済んだ筈だからである。...

この女は懇ろな別れのために長く立ち止まることをしなかった。それに見回しもせず、さっさと農園中庭の家の角を目指していた。

いよいよだとアマンド・ボックスは考えて、後を追った。田畑検査官の部屋では窓がかなり物音を立てて閉ざされ、それでアマンドは今や若干立腹した。というのはこの温かい夜、窓を閉めることは、検査官マイヤー氏は更なる訪問を望んでいないということを意味していたからであり、 — アマンドはこれを自分に引き寄せて考えた。

「ハルティヒ、待ってよ」とそこで彼女は叫んだ。

「おや、マントヘン？」と御者の妻は尋ねて、相手の女を窺った、「びっくりするじゃない。まあ、お休みなさい。私は先へ行くの。急ぐのよ」。

「私も連れて行って」とアマンドは言って、彼女と一緒に急いで、中庭を渡って、御者の住まいへ向かった。「あなたと一緒に道よ」。

「同じなの」とハルティヒ夫人は尋ねて、歩みを緩めた、「あなたのような女は、朝から晩まで小走りで、恵み深い奥方に簡単に捕まりはしないわね」。

「私は他の多くの女達のように簡単に足を踏み入れはしない」とアマンドは意味深に言った、「まあ、行きましょう。あなたの夫がもう待っているよ」。

しかしハルティヒ夫人は立ち止まった。農園中庭の途中であった。右手に豚小屋があり、中では何度かもぞもぞ音がし、(小屋のドアは暑さのため開いていた)。左手に堆肥場があった。両女性は立っていたが、アマンドは中庭の外れに、御者の住まいの明かりを目にしていた。しかしハルティヒ夫人は反対の端の方を眺めていた。そこでは今や検査官の窓の奥で明かりが燃えていた、 — 彼が今更明かりを点けたことに夫人は実際立腹せざるを得なかった。

「そもそも私にマントヘンと呼びかけないでよ」とアマンド・ボックスは長目の沈黙の後、最後に喧嘩腰で言った。

「あなたの好みならば、ボックスお嬢さんと言ってもいいよ」とハルティヒ夫人は穏やかに認めた。

「そう、お嬢さん」と返事があった、「私はまだ妻ではない。 — 行きたいところへ、いつでも行けるのよ」。

「そうだね」と御者の妻は証した、「あんたのような家禽番にはどんな御領主方もご満足だね」。

「その話しをしたいの、それとも止めたいの」とアマンダは怒って叫び、地団駄踏んだ。御者の妻は黙った。

「あなたの夫とその件について話してもいいのよ」とアマンダは脅して言った、「あなたの夫は、変わった子ばかり生まれるので、とうとうとても不思議がっていたと聞いたわ」。

「変わった子ばかり」とハルティヒ夫人は笑った、しかし少しばかりぎこちなかった。「あんたは冗談が上手いわね、マントヘン、驚いてしまうわ」。

「マントヘンと言わないでよ」とアマンダは怒って命じた、「あんたにそう言われたくない」。

「ボックスお嬢さんと言ってもいいのよ」。

「そう言いなさいよ、— それにそもそも既婚の女が若い娘の恋人を奪うのは恥よ」。

「奪ったのじゃないよ、マントヘン」とハルティヒは請うて言った。

「奪ったでしょう。八人の子持ちの女が、それでも自分の分を奪った、考えてもみなさい」。

「まあ、マントヘン」と御者夫人は全く穏やかに言った、「結婚したら、どんなものか、あんたは知らないからね。全く別な風に思われているのよ」。

「ハルティヒ、言い訳ばかり」とアマンダは脅して叫んだ、「私は丸め込まれません」。

「まず、自分の大丈夫な人を確保したら」とハルティヒ夫人は素直に説明した、「もう済んだと思うのよね。でもまた奇妙な気分になってね、...」。

「奇妙な気分で。また馬鹿なことを言い出して」。

「いやね、マントヘン。ご託を並べているのじゃないよ。とても奇妙な気分になって、体中がむずむずしてきたら、あんたも分かるよ。何をしても落ち着かず、すべてがもう待てない風に、いつも素早く片付けなくちゃいけなくなって、— そして突然棒立ちになってしまうの、打ちのめされた十五分ね、手に豚用ジャガイモを持ってき、そして訳の分からないうちに、...」

「豚用ジャガイモと私は何の関係もありません」とアマンダ・ボックスは拒絶して言った。しかし彼女はもはや元来拒絶的ではなくなっていて、むしろ考え込んでいた。

「いや、勿論関係ないわね」とハルティヒ夫人は急いで言った。そして彼女は付け加えた、今や大胆に言うことが許されたからである、「あんたの場合は鶏用ジャガイモね」。

しかし家禽番の娘はこの意地悪に少しも気付かなかった、「奇妙な気分になったときには」と彼女は新たに芽生えた厳格さで言った、「その時用に夫がいるでしょう。若い娘用の家畜場に来ないでよ」。

「でも、マントヘン。前もっては分からなかったのよ」とハルティヒ夫人は全く熱く叫んだ。

「前もって何が分からなかったのよ」。

「夫がいても何の役にも立たないことがさ。若い娘のときに、今の私が知っていることを承知していたら、結婚なんてしていなかったわ。これは信じて頂戴」。

「本当にそうなの、ハルティヒ」とアマンダ・ボックスは深く考え込んで尋ねた、「では、あんたは夫が好きではないの」。

「まあ、いや勿論好きよ。 — まあ、そこそこ親切だし。それにまた問題もない。でもそうではないのよ。もう長いこと奇妙な気分にならないのよ」。

「それじゃ、ハンスが好きなの、 — むしろ検査官マイヤーの方が」。

「まあ、マントヘン、色々考えるわね。言ったでしょう、私はあなたから奪いはしないと」。

アマンドの声はとても邪悪に響いた、「それでは彼の方から始めたの。つまり、マイヤーから」。

ハルティヒ夫人はしばらく黙っていて、考え込んだ。しかし本当のことを言うことに決めた、「いや、マントヘン。何も作り話をしたくないわ。私がまずその気があって、 — そのようなことを一人の男が感じてね。それにまた彼は少しばかり酔っていて、...」。

「まあ、彼は酔ってもいたの。でも駅なら分かるけど[大筋は分かるが]、 — あなたは彼を好きでもないのでしょうか」。

「そうね、マントヘン、好きかどうか分からないけど、でもむずむずしているとき、 — 好奇心もあってさ、...」。

「好奇心を起ししちゃ駄目でしょう」とアマンドは強力な締め括りの説教に至った。しかしこれは勿論、考えていたよりも、本質的に、より穏やかなものになっていた。というのは結局、彼女はハルティヒ夫人を完全に了解したからである。...

しかしアマンドは打ち切った。

中庭を越して、前後三人並んだ姿が進んで来た。まず一人の男、それから一人の女、それから更に一人の男であった。...

全く静かに穏やかに暗闇の三人は、一言も言わず、中庭を渡って来た、 — そしてアマンド・ボックスとハルティヒ夫人は見つめた。

最前列の男が二人の女性の側に来ると、彼は思わず立ち止まって、鋭い命令口調で尋ねた、「そこに立っているのは誰だ」。

同時に両女性は、真ん中の女性が持っている電池の懐中電灯で照らし出された。(月はまだ高く昇っておらず、家畜小屋が月の明かりをまだ遮っていたからである)。

「私、アマンドよ」とアマンド・ボックスは平静に言った。一方御者の妻は思わず両手を眼前に持って行き、あたかも何か禁断のことで捕まったかのようにであった。

「急いで、寝ることだ」と前列の男がまた言って、音もなく穏やかに三人は両女性の側を通り過ぎた。 — 中庭を越えて、検査官の家の角を曲がって行った。 — そしてハルティヒ夫人は、検査官の家では、彼らの会話の間に、明かりがまた消えていることに気付いた。

「一体誰なの」と御者の妻は全く呆気にとられて尋ねた。

「恵み深いご令嬢だったと思う」とアマンドは思いに耽って言った。

「恵み深いご令嬢が、夜更けに、二人の男達と一緒にだなんて」とハルティヒ夫人は叫んだ、「全然信じられない」。

「後の男は従者だったかも」とアマンドは更に考えていた、「先の男は知らない。ここいらの男ではない、 — あの声は聞き覚えがない」。

「奇妙なこと、...」とハルティヒ夫人は言った。

「奇妙なこと、...」とボックス嬢は言った。

「私らがここに立っていることが、あの男にとって何の関係があるのかしら」とアマンドは甲高く尋ねた、「全くここいらの男じゃないのに、さっさと寝ろなんて」。

「そうよね」とハルティヒ夫人が返した、「それにご令嬢は平然と彼に命令させていた、...」。

「あの人らは一体どこへ向かった」とアマンドは尋ねて、中庭の端を凝視した。

「宮殿の中かしら」とハルティヒ夫人は提案した。

「そんな。何で裏から入るの。恵み深いご令嬢は宮殿に裏から入る必要はない」とアマンドは拒絶して言った。

「だったら残るのは、単に検査官の家だし、...」とハルティヒ夫人は吟味して言った。

「私も丁度そのことを考えていた」とアマンドは率直に認めた、「でもそこで、何をやる気かしら、変ね。三人が縦列で、とてもこっそりだし、――誰も覗いてはならないという風で、...」。

「そう、変だった」とハルティヒ夫人は認めた。そして提案した、「一緒に覗いてみようか」。

「あなたはいい加減夫の許に行きなさい」とアマンド・バックスは厳しく言った、「検査官の家を覗いていいのは、私よ」。

「でも知りたいのよ、マントヘン」。

「バックスお嬢さんと言いなさい。こんなに長く外にいて、あなたの夫に何と言うつもり。それに子供達が、...」

「そんなん、...」とハルティヒ夫人は平気だった。

「これ以上私のハンスに構わないで。二度目はただじゃ済まないわよ。もう一度捕まえたら、...」。

「もうしない、マントヘン、誓うわよ。でも明日には話して、...」。

「お休みなさい」とアマンド・バックスは手短かに言って、暗い検査官の家に向かった。

御者の妻はなお一瞬立っていた、彼女の方を羨ましげに眺めていた。こんな若い、未婚の娘達は何と幸せなんだろう、そして少しもその幸せを実感していないのだと考えた。それから彼女はこっそり溜め息を吐いて、自分の家へ、取っ組み合いの子供達と、きっと罵っている夫の許へ向かった。

55

枢密顧問官夫妻は眠りに就く

晩禱の震撼の後、フォン・テッシュー夫人は深い休息の必要を感じていた。夫人はもはや何も見たくなかったし、聞きたくもなかった。すぐに就寝したかった。

片方を友人の、ユッタ・フォン・クックホフ嬢に支えられ、もう片方を従者のエリアスに支えられて、夫人は上の大きな、三つの窓のある、マホガニー材の寝室へよろめきながら向かった。フォン・クックホフ嬢が、震えながら、嗚咽している夫人を脱衣させて、夫人は今や広いマホガニー材のベッドに横たわっていた。小さく、子供のように見え、干涸らびて小さな小鳥の頭で、薄い髪の毛の上に白いナイトキャップを被り、広い編み目のベッドジャケットを肩に掛けていた。

夫人は嘆いていた、「神様、仏様、　ー　ユッタ、何という世界でしょう。私が裁いたことを、神様、お許してください、　ー　でも何という恥知らずな娘でしょう。レーニヒ牧師は何というかしら。地方監督のコルターヤンにまで知られたら」。

「何でも何かの役に立つのよ、ペリンデ」とユッタは賢明に言った、「これ以上興奮しないことよ。　ー　まだ寒いのだ」。

然り、フォン・テッショー夫人は相変わらず凍えていた。

フォン・クックホフ嬢は呼び鈴を押して、従者エリアスを呼んだ。彼は、キッチンから二本のお湯の瓶を持って来るよう頼まれた。

従者は去ろうとした。

「いや、エリアス」。

「何でしょう、恵み深い奥方様」。

「小間使いに、私用に更に一杯のペパーミントのお茶を用意するように伝えて。そうね、　ー　本当に濃いのをね。沢山砂糖を入れて。それが、　ー　いい」。

「畏まりました、恵み深い奥方様」。

従者は去ろうとした。

「いや、エリアス」。

「何でしょう、恵み深い奥方様」。

「むしろグリュウワインを作って貰いましょう。ペパーミントのお茶は止して。ペパーミントのお茶ではいつもゲップが出てしまう。でも水抜きで、ただ赤ワインでね。赤ワインにはすでに沢山水分があるから。それに　ー　少しばかりナツメグを添えて。それに丁子も添え、沢山砂糖を入れるのよ。そうでしょう、エリアス、分かりましたか」。

「畏まりました、恵み深い奥方様」。

「それに、　ー　いや　ー　エリアス、　ー　ちょっと待って。ちょっとだけラム酒を入れて貰いましょう。　ー　本当に具合が悪いのだ。　ー　沢山は駄目。でも、勿論ラム酒の味がしないとイケないから、少なすぎないようにしてね。エリアス、分かりましたか」。

従者エリアスは、間もなく七十歳であるが、飲み込みの良い頭で、了解した。彼は更にちょっと待って、それから行こうとした時、病気の夫人の弱々しい呼び声をドアの許でもう一度聞いた。「いや、エリアス」。

「何でしょう、恵み深い奥方様」。

「いや、エリアス、お願い、もっと近くに来て、...。台所で調べて見て、　ー　私からの質問ということは分からないようにして、全く素知らぬ振りで、...」。

従者エリアスは黙って待っていた。恵み深い夫人はまさにまだ気分が悪く、ほとんど話せないであろう。すぐにグリュウワインを届けた方がきつといいだろう。しかしまだ注文できない。フォン・テッショー夫人はまだ何か気にかけていらっしやる。

「エリアス、　ー　尋ねてみて、　ー　目立たないようにね、　ー　分かるでしょう、　ー　もうあの女は寝たのか、と。そう、尋ねてみて、でも目立たないようにね、...」。

しばらくこの病人の具合が悪かった。フォン・クックホフ嬢は大いに気を利かせて、立派な格言を述べ、賢い説得をし、自分の両手で冷たい手を温め、痛む額を撫でた。するとお湯の瓶が届き、強くラム酒の匂いのするグリュウワインが届いた。すでにその匂いでフォン・テッショー夫人は元気になった。ベッドに座って、きつく唇をきゅっと結んで、彼

女は「あの女」は外出したという知らせを聞いた。

「分かったわ、エリアス。私はとても悲しい。本当にお休みなさい、エリアス。私は眠れないかもしれない」。

エリアスはこの別れの挨拶に、適切な悲しげな顔をして、同じようにお休みなさいを伝え、それから控えの間に腰を下ろした。彼は更に枢密顧問官を待って、彼の長靴脱ぎの手伝いをしなければならなかった。それで彼の仕事はお仕舞いである。

しかし待機は老エリアスにとって退屈ではなかった。彼には仕事があった。彼はポケットから、厚い、以前は褐色の、今はすでにほとんど黒ずんだ財布と、多くの数字や名前、単語の書かれた長いリストを取り出した。財布からは褐色の紙幣の小束を取り出して、リストが広げられ、比較され、下線が引かれ、記入された。

恵み深い老夫人にとって今日はひどい晩であった。しかし従者エリアスには幸せな晩であった。彼は今日、五枚の新しい、褐色の、赤いスタンプの押された平穩時代からの千マルクの高紙幣を購入することができたのであった。

インフレの地獄のような不可思議を体験した多くのドイツ人、つまり中年の者達のように、エリアスも一般的な貨幣下落を信ずることができなかった。五十年以上勤勉に貯蓄して来た人間にとって、何か信じられるものが残らなければならない。この渦巻きがすべてを呑み込むとは思われない。

単純に考えるとこうなる、つまり戦争前の時代からの「まっとうなお金」はやはり「正しいもの」に違いない、と。このことは、紙幣は帝国銀行の黄金と交換されるという紙幣上の銘が証している。そして黄金はいつの時代も正しい。戦時中とかそれどころか戦後発行のお金は、勿論正しくない。戦時中は実際、ペテンがすでに紙製のシャツやボール紙の革靴で始まっていた。

老エリアスはインフレの最初の徴候を感じたとき、千マルク紙幣を購入し始めた。いつも金を必要とする人々がいたし、彼はその紙幣を得た。老エリアスのように上手く考えることのできない人々がいつもいた。勿論、エリアスも耳にしていた、ベルリンの帝国銀行はもはやこれらの千マルク紙幣に対して黄金を提供しない、と。しかしこれは勿論、愚人達を計算に入れたはったりには過ぎないだろう。帝国銀行は自身の紙幣を安く引き受けたいのである、 — わずかな黄金を節約するためである。しかしエリアスは馬鹿ではないのだ、自分は帝国銀行に自分の紙幣を安くでは渡さない。自分は待つのだ、自分は待っておれる、 — ある日、自分はそれと引き換えに黄金を得るのだ。明確に表記されている通りに丸々得るのだ。

そのようにエリアスの場合、始まった、 — 最初は投資であった。しかしそれから、これも学問であると分かった、 — 老エリアスは晩年収集家の幸せを（それと知らずに）発見した。

実に沢山の様々な褐色の千マルク紙幣がある。確かに、一つのことはずぐに分かった。ただ赤いスタンプのある紙幣のみが何か有用である。緑のスタンプの紙幣はすべて、戦時中や戦後に発行されている、 — これらは集めてはならない。しかし今や赤いスタンプの紙幣と、それに二つの赤いスタンプのある紙幣がある。繊維の模様のない紙幣があり、それから左手に青い繊維の模様のある紙幣が現れ、それから右手に青い繊維の模様のある紙幣が現れている。八名の署名のある紙幣があり、更にまた九人の署名のものがあり、幾

つかはそれどころか、十名の男達の署名がある。それから文字A、B、C、Dのある紙幣があり、七桁の数字、それに八桁の数字の紙幣がある。いつも正確に同じ褐色の千マルク紙幣で、像や文字に変わりはない、 — しかし何と多量の様々な相違が存在することか。

老従者のエリアスは書き付けて、比較した。彼は夙にもはやただ褐色の千マルク紙幣のみを収集していなかった。彼は相違点、記号、特徴を収集していた。彼の大きな丸い滑らかな頭は、それで真っ赤になった。彼は自分がまだ有しない新しい品種を見つけると、顔が輝いた。これらの相違点は玄人によって玄人のために作られた秘密の記号であると固く確信していた。これらはきっと何か意味しているのだ。これを解釈しようとする者は、それで沢山の黄金を得るであろう。

老枢密顧問官は彼のことを笑い飛ばすかもしれない。老公は大層抜け目ないが、これらの秘密の事柄について何も知らない。老公は人々が銀行で語ることを信じ、新聞に書かれていることを信じている。老エリアスはそれほど信用しない、 — その代わり自分は今日では自分の主人よりも金持ちである。自分にはるかに十万マルクを越えるお金を有している。黄金のお金だ。黄金同様のお金だ。

今日彼はとても幸せである。三枚の全く新しい紙幣を新しい購入物の中に有している。その中には、一八七六年からの紙幣もある。彼はそんなに古い千マルク紙幣があるとは知らなかった。彼の最古のものは、これまで一八八四年製のものであった。いつか、ある日これらの紙幣を黄金に交換することになったら、よくよく思案することになる。これらはとても綺麗だ。荘重な形姿の紙幣だ。これらは、聞くところによると、産業、商業、交通を意味しているようだ。

「産業、商業、交通」と彼は囁いて、紙幣を感動し見つめた。

民衆の労働の一切だ、と彼は考えた。ただ農業がない、 — これは残念だ。

黄金をどうしよう。十万マルクの黄金だったら自分は携帯できない。黄金のことでいつも心配になることだろう、 — しかしこの紙幣は綺麗だ。

老従者は幸せであった。紙幣は一枚ずつ丁寧に畳まれて、財布に収められた。ベルリンの紙幣印刷機は人々をますます苦悩の増す酩酊へ追い立て、狩り立てて行く。 — 人々に幸せを、大いなる幸せを贈る。美しい紙幣を贈る。

グリューワインはその効果を発揮した。枕の間にフォン・テッシュー夫人はより元気になる座っていた。彼女の女友達に向かって言った、「何か朗読してくださる、ユッタ」。

「聖書から」とフォン・クックホフ嬢は進んで尋ねた。

しかしこれは今晚、良い提案ではなかった。罪の女の改心の晩祷は不首尾に終わった。それで聖書はその神と共に少しお呼びでなかった。

「駄目、駄目、ユッタ、 — いよいよゲーテを続けましょう」。

「いいわ、ベリンデ、鍵を頂戴」。

フォン・クックホフ嬢は鍵を得た。衣裳戸棚の上の方、帽子の側に、美しい、三十巻の、半革製のゲーテが隠されていた、 — 鍵が掛けられていて、 — フォン・テッシュー夫人による孫娘、ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツへの堅信礼の贈り物であった。ヴィオレットの堅信礼はすでに昔のことになっていたが、しかしいつゲーテが渡されるか、まだ未定であった。

フォン・クックホフ嬢は戸棚から第七巻を取った。

詩 ー 叙情詩 I.

それは珍しく膨張して見えた。テーブルの巻の横にフォン・クックホフ嬢は鋏と紙を置いた。

「糊も、ユッタ」とフォン・テッショー夫人は注意した。

女友達は更に糊の小さな壺も添えて、本を開け、印の付いた箇所、金細工職人の詩を読み始めた。

最初の詩句の後、フォン・テッショー夫人は賛同して、頭で頷いた。「今回は運がいい、ユッタ」。

「待ちなさい、ベリンデ」とクックホフ嬢は言った、「豚の屠殺をしないうちに、豚のベーコンを称えてはいけない、よ[取らぬ狸の皮算用]」。

そして彼女は二番目の詩句を読んだ。

「結構、結構」とフォン・テッショー夫人は頷いて、二番目の詩句も称賛に値すると思った。

ところが遂に次の行となった。

「小さなお足が踏み続け、
私は上のふくらはぎを思い、
ついでに靴下留めを思い浮かべる、
可愛い娘に私が贈ったもの。...」

「待って、ユッタ」とフォン・テッショー夫人は叫んだ、「まただ」と彼女は苦情を言った。「ユッタ、どう思う」と彼女は尋ねた。

「すぐに言ったでしょう」とフォン・クックホフ嬢は釈明した、「雀百まで踊り忘れずよ」。

「大臣でもある人がこんなことを言うなんて」とフォン・テッショー夫人は怒った、「今日の作家達でさえこんなにひどくはない。ユッタ、あなたの意見は」。しかし彼女は返事を待っていなかった。判決は下された。「糊付けしなさい、ユッタ。上手にしっかりとくっ付けなさい。ー あの子が読んだら困る」。

フォン・クックホフ嬢はすでに、不埒な詩を紙と糊で貼り付ける準備をしていた。「残りは少ない、ベリンデ」と彼女は言って、その巻を吟味して持ち上げた。

「恥ずかしいことよ」とフォン・テッショー夫人は怒った、「古典作家がそんなことを書くなんて。いや、ユッタ、むしろあの子のためにシラーとかを買った方が良かったかしら。シラーははるかにもっと高貴で、肉欲は少ないでしょうに」。

「古い格言を考えなさい、ベリンデ。角のない雄牛はいないのよ。シラーも青少年向きではない。『たくらみと恋』を考えなさい、ベリンデ。このルイーゼとか、あのエボリとか、...」。

「そうよね、ユッタ。男どもは皆そう。ホルスト＝ハインツにはどんなに苦勞をしたとか、あなたには分からないでしょう、...」。

「その通り」とクックホフ嬢は言った、「なくて七癖ね。ー では更に読みましょう」。

何と次は救出のヨハンナ・ゼーブスの詩が続いた。今度はまた高貴ではあったが、勿論

何故詩人ゲーテはヨハンナ・ゼーブスをいつも美しいズーシェンと呼ぶのか、全く分からなかった。

「むしろ美しいハンヘンと書けば良かったのに、そうでしょう、ホルスト＝ハイイツ」。

というのは丁度枢密顧問官が入室して来たからである。彼は機嫌良くにんまりして二人の女性が作品に取りかかっているのを見守った。

「ハンネでは平凡すぎると思ったのだろう」とこの件を正確に吟味しながら、彼は提案した。彼は、本を手にしたまま、ソックスとシャツの袖姿で、室内をあちこちした。

「でもどうしてズーシェンなの」。

「思うに、ベリンデ、ズーシェンはゼブーシェンの短縮形だな。それで、ゼブーシェンなわけだ、ベリンデ、　－　ユッタのご意見は？」。枢密顧問官は真面目であった、ただ目の隅で小皺がびくついていた。「ゼブーシェン、　－　ブーシェン、　－　ブーゼン[胸]、　－　やはり響きがいかがわしいだろう？」。

「ユッタ、貼り付けなさい、貼り付けなさい。あの子がこのようなことを考えてはいけません」とフォン・テッシュヨー夫人は興奮して叫んだ、「いや、何も残らないわね。　－　ホルスト＝ハイイツ、即刻ボックス嬢を叩き出さない」。

「即刻私は就寝する、その上、...」。

「すぐに出て行きます」とクックホフ嬢はぶつくさ言った、「でもまずこのゲーテを仕舞わせてください」。

「　－　その上、すでにボックス嬢は外出している。先ほど公園で見かけた」。

「私の意見は良くご存じでしょう、ホルスト＝ハイイツ」。

「私が、おまえの意見を承知している場合、何度も言う必要はない、ベリンデ」。そして脅すような咳払いをして言った、「フォン・クックホフ御令嬢、申し上げると、私はズボンで脱ごうとしているのだ」。

「ホルスト＝ハイイツ、急がせないで。彼女はまだ私にお休みなさいを言ってません」。

「私は出ます。お休みなさい、ベリンデ。晩禱のことはもう忘れなさい。ゆっくりお休み。　－　枕の位置は正しいかしら。お湯の瓶は、...」。

「フォン・クックホフ御令嬢、ズボン下の番です。すると私はシャツ姿になる。シャツ姿のプロイセンの枢密顧問官を御覧になったことはありますまい、...」。

「ホルスト＝ハイイツ」。

「すぐに出ます。ゆっくりお休み、ベリンデ。お休みなさい、それにラムネ粉は、...」。

「ズーシェン、　－　ブーシェン、　－　ゼブーシェン」と枢密顧問官は叫んだ。ただのシャツ姿になっていた。しかしこの最後の覆いをも脱ぐとは脅かさなかった、「毎晩、この二人の老雌鶏の同じ芝居だ。女どもときたら」。

「お休みなさいませ、枢密顧問官殿」とフォン・クックホフ嬢は品位を持って言った、「そして主は人間を主の似姿に創られた、　－　その昔、...」。

「ユッタ」とフォン・テッシュヨー夫人は弱々しく夫のホルスト＝ハイイツへのこの誹謗に抗議した。しかし女友達の背後でドアの錠がおりた。一瞬も早すぎはしなかった。

「晩禱はどんな具合だったのだ」と、自分の寝間着を着ながら、枢密顧問官は尋ねた。

「話しを逸らさないでください、ホルスト＝ハイイツ。明日ボックス嬢を解雇してください」。

ベッドは老主人の下で強力に溜め息を吐いた。「おまえの家禽番の娘だ、私の使いではない」と彼は言った。

「まだ長く明かりを点しているつもりか、私は寝たい」。

「私が興奮に弱いことはご存じでしょう、一 あの娘があんなに破廉恥でなければいいのに、...一度ぐらい私の頼みを聞いてください、ホルスト＝ハインツ」。

「晩禱で厚かましいことをしたのか」と枢密顧問官は尋ねた。

「あの娘は淫らです」とフォン・テッシュオー夫人は憤然として言った、「いつも検査官の窓から入って行きます」。

「思うに、今晚もそうだな」と枢密顧問官は言った、「おまえの敬虔さには影響を受けていないようだな、ベリンデ」。

「だから首にすべきです。改善の見込みがありません」。

「するとまた家禽のお芝居が始まる。どうなるか、分かつ、ベリンデ。雛の減少がかくも少ない娘は他にいない。かくも沢山の卵を得る娘も他にいない。餌は他の誰よりも少なく済ませるのだ」。

「検査官と一緒に掛け布団の下にいるからですよ」。

「その通り、その通り、ベリンデ」。

「彼女は書き付けている餌よりも、もっと沢山手に入れているのよ」。

「それはただ我々にとって都合がいいだけだろう、我らの婿殿の穀粒なのだから。いや、駄目だ、ベリンデ。彼女は有能だし、実入りの良い手をしている。私は解雇しない。彼女が夜何をしようと、我々には関係ない」。

「でも身綺麗な家でなくちゃいけないでしょう、ホルスト＝ハインツ」。

「彼女の方が官吏の彼の家へ行っている。彼の方がこの彼女の小屋に押しかけているわけではない」。

「ホルスト＝ハインツ」。

「それで、何か問題か、ベリンデ。その通りだろう」。

「私の言っていることは、お分かりでしょう、ホルスト＝ハインツ。彼女は恥知らずです」。

「それはそうだ」と枢密顧問官はあくびしながら認めた、「しかしいつもそんなものだ。極めて有能な者達には容喙できない。小さな奴、マイヤー、彼女の恋人の方なら、数時間奴の尻を踏み付けるがいい、奴はただ一層慇懃になるだけだ、...」。

フォン・テッシュオー夫人は夫が粗野な言葉を吐く場合、大抵聞き流していた、今回も尻の言葉は聞いていなかった。

「それじゃヨアヒムに男の方を追い出すように言ってください。それでしたらバックス嬢を我慢しましょう」。

「私が婿殿に彼の官吏を追い出すように言おうものなら」と老公は思案して語った、「きっと死ぬまで奴の面倒を見ることだろう。一 しかしベリンデ、朗報だ、アマンドの恋人は明日飛び去る、...そうしなかったら、私が奴を少しばかり褒めあげよう、一 すると奴はすぐトランクにまとめることだろう」。

「そうしてください、ホルスト＝ハインツ」。

黒人マイヤーは酩酊を手に入れる

人間は、自分の失敗を他人のせいにする性分から完全には脱却できないものである。不安から頭を砂の中に突っ込むという駝鳥の話は、本当とは言えないそうである。しかしその代わり、幾多の人間が、間近の危機に際して、目を閉ざして、危機は見られないと主張する現象はきっと本当のことであろう。

検査官マイヤーがハルティヒ夫人の退出後、明かりを点したのは、単に何か飲み物を探したいからであった。全く酩酊した頭蓋、老枢密顧問官の許での期待外れ（彼は老公の好意をいつも当てにしていた）、復讐に来るアマンダの接近、こうしたことすべてのせいで、他ならぬ彼の飲酒欲求が目覚めた。彼は「もはやもろもろのガラクタを考えたくない」と思った。

彼はアマンダの襲撃に備えて、窓を頑丈にした後、一瞬、静かに、乱れたベッドと散れた衣類のあるまことに荒廃して見える部屋の中に立っていた。同様に彼の頭蓋の中も荒廃して見えた。その上内部からの鋭い痛みが額に突き刺さった。切れ切れの思考が暗闇の中から放たれて、まだ明瞭に把握できないまま、消え去った。彼は本来この小屋では何も飲み物はないと分かっていた。コニャックも、火酒も、一本のビールも飲み物はない。一

しかし今の彼のような人間に対して、いつも何か飲み物があるはずである。ただ思い付く必要がある。

彼は緊張して考えて、額に皺を寄せた。しかし彼が思い付いたのは、今一度居酒屋に行って、一本のシュナップスを取り寄せようということであった。彼は不機嫌に頭を振った。そこでは精算の恐れがあって、姿を見せたくないと思っていたのであった。その上彼は何も着ていなかった、一すでに抜け目ない古狸の枢密顧問官がこのことに気付いていた。こんな姿で居酒屋に行ったら、他の人々も気付くことだろう。

彼は自分を見下ろして、悲しげに微笑し始めた。立派な屑だ、若造。火箸で掴まれる体。

「シャツの中に恥ずかしいものはない」一と彼はあるとき聞いてからずっと記憶している命題を声高に言った。この文はどんな破廉恥をも正当化するように思えたからである。

しかしそれ故、一今や彼は自分のシャツを探さなければならなかった。彼は両足で、床の衣服をあちこちつつき始めた。シャツが現れるかもしれないと期待した。しかしシャツは現れず、代わりに足裏に一つの破片を感じた。

「豚小屋並」と彼は大声で罵った。そして豚小屋並で豚が思い浮かび、豚ということでも事務所の家畜用薬棚が思い浮かんだ。家畜用薬棚では彼はまずホフマンの滴[主にエタノールとエーテル]を考えた。しかしこの滴は少なすぎて、効き目良く飲めない。その上多分これは薬棚にないかもしれない。

ホフマンの滴、一いつから豚どもにホフマンの滴を与えたのであろう。一片の砂糖に垂らすのではないか。この愚かな考えに彼は笑わざるを得なかった。余りにこれは愚かだ、この考えは。

彼は鋭く回転した。顔に不信と臆病とが浮かんでいた。誰か部屋の中で彼のことを笑ったのではないか。ここで誰かが彼のことを笑ったかのように、そのように響いた。そもそも

も自分は一人っきりなのか。御者の妻はもう去ったのだろうか。すでにアマンダが来ているのか、それともこれから来るのか。彼はゆっくりと、盗み見して、見回した。一 視界と認識をつなぐ道はゆっくりであった。長いこと彼は一つの対象を見つめていて、ようやく脳が、戸棚と伝えた。あるいは、カーテンと。一 ベッドだ、誰も中にはいない。一 その後、誰もその下にはいない。

苦勞してゆっくりと彼は結果に達した。実際誰も部屋の中になかった。事務所はどうなっているのだ。誰か中にいて、彼を見つめているのか。事務所に通ずるドアは開いたままで、隣の薄暗い部屋は、誰かが待ち伏せしているようである。...事務所への戸口のドアはそもそも施錠されているのか。カーテンは閉まっているのか。いやはや、こんなに手間がかかり、片付けなければならない。自分のシャツは相変わらず見つからない。自分はベッドで眠れないのか。

急ぎ足、よろめく足で、裸で、黒人マイヤーは事務所を歩き、戸口のドアを揺すった。ドアは閉まっていた。分かっていたことであった。カーテンも閉まっていた。誰がこんな無駄口を叩いているのだ。彼は明かりのスイッチを入れた。そしてカーテンを敵視して見つめた、一 勿論閉まっていた。一 すべては無駄な空騒ぎ、ただ彼を引っかけるためになされているにすぎない。カーテンは閉まっている。ずっと閉まったままだ、一 誰かが自分の所にやって来て、カーテンに触れてみるがいい。これは自分のカーテンだ、自分の。自分はこれを好きなように処分することができる。一 自分が今これを下に引き裂こうと、これは単に自分の勝手な所業だ。

極めて興奮して、彼は数歩、この不幸なカーテンに向かって行った、一 すると家畜用薬棚、褐色に塗られた唐檜の小戸棚が彼の視野に入って来た。

ハロー、今度はおまえだ。やっとだな。黒人マイヤーは満足してにやりと笑った。鍵が入り、小さな扉は従順に従い、最初の圧力で開いた。すると二つの一杯に詰まった引き出しの中に、全てが雑然とあった。すぐ手前に、大きな褐色の瓶があって、何かラベルが貼られていた。一 しかし誰がこのような薬局の悪筆を読もう。これは印刷されているが、同じ屑だ。

黒人マイヤーは瓶を取りだし、栓を抜いて、瓶の首の中を嗅いだ。

彼はすぐもう一度嗅いだ。高く鼻の中に彼はエーテルの蒸気を吸い、彼は立っていた。彼の体はかすかに震え始めた。この世ならぬ澄明さが彼の脳の中に侵入して来た。彼がかつて感じたことのない認識と洞察とで彼は満たされた。一 彼は吸い込み、また吸い込んだ、一 浄福であった。

彼の顔は次第に一層鋭くなり、鼻は鋭敏になった。深い皺が肌に生じた。体は震え始めた。しかし彼は囁いた、「いや、一切が明瞭だ、一切が。世界が、...澄明さが、...幸福が、...青く...」。

エーテルの瓶が彼の震える両手から落ちた。瓶は固く床に当たって砕けた。彼はそれを凝視した、まだ酩酊していた。それから素早くスイッチの所へ行き、事務所の明かりを消し、自分の部屋に入り、再び明かりを消し、手探りでベッドを探し、身を投げた。

彼は動かず横たわっていた、両目を閉ざして、全く明るい像、自分の脳の中で動く像の光景を追っていた。ぼんやりした灰色の霧がその上に広がった。脳の端から黒いものが近寄って来て、次第に暗くなって行った、一 突然一切が黒くなった。黒人マイヤーは眠

った。

57

少尉は踏み込む。しかしアマンドが注視している。

「誰が家の鍵を所有しているか、ご存じと思うが」と少尉は苛立って叱った。

三人は暗い官吏の家の前に立っていた。従者のレーダーが取っ手を押したが、戸口のドアは閉まっていた。

「勿論マイヤーさんは鍵を持っています」と従者は言った。

「更に一本の鍵があるに違いない」と少尉は固執した。「恵み深いご令嬢、誰が二本目の鍵を持っているか、ご存じないのですか」。

状況は全く明瞭であったが、少尉はヴィオレットを「恵み深いご令嬢」と呼びかけ続けていた。

「二本目の鍵はパパが持っていると思う」とヴァイオは言った。

「それで父親殿は鍵をどこに置いている？」。

「ベルリンよ」、苛立つ身振りに対して言った、「パパはベルリンにいるんだから、フリッツ」。

「この小屋への鍵をベルリンまで持ち運ぶはずないだろう。それに私は集会に行かなくちゃならない」。

「集会の後ではどう」。

「その間に奴が手紙を持って更に出掛けよう、一 奴はそもそも中にいるのか」。

「私には分かりません」と従者フーベルトは侮辱を感じて言った、「私はマイヤーさんとは一切関係ありません、少尉殿」。

少尉は我慢ならず、怒りと憤激とで死にそうであった。いつも割り込んで来るのは、こんな忌々しい女どもの話しである。自分はこの件では女どもに何の用もない。何と今このヴァイオは途方に暮れていることか。この薄ら馬鹿の従者と少しも変わらない。すべてを自分一人で片付けなければならない。今またこの女は何を聞くのか。

彼女は言った、「上の窓が一つ開いている、フリッツ」。

彼は上を見上げた。実際、上の切妻で、一つの窓が開いている。

「でかした、恵み深いご令嬢。この男衆にすぐ参上することにしよう。おい、貴殿、お若い、貴殿をこの栗の木に持ち上げよう、一 すると枝から簡単に窓の中へ入れよう」。

しかし従者レーダーは後ずさった、「恵み深いご令嬢がお許しくくださいますならば、一 私は今帰宅しよう存じます」。

少尉は呪った、「阿呆なことを言わんでくれ、一 恵み深いご令嬢の前で」。

「ご令嬢、私の尽力はお認めください」と従者レーダーは一步も譲らず言って、そもそも少尉のことは無視していた、「私の尽力は忘れないでください。しかし今私は実際就寝しなければなりません、...」。

「でも、フーベルト」とヴァイオは頼んだ、「私に好意を見せてよ。あなたが戸口のドアを開けさえしたら、すぐに帰れるのよ、ほんの一瞬よ」。

「やはり、良くない行動です。お許しくください、ご令嬢」と従者はおとなしく反論した、

「丁度堆肥の所に、二人の女性が立っていましたし。本当にむしろ寝たいのです、...」。

「阿呆な屑は放っておけ、ヴィオレット」と少尉は憤慨して叫んだ、「赤痢に罹った中隊一同のように、下痢腰なのだ。若えの、さっさと行け。これ以上ここの藪でうろちょろするな」。

「恵み深いご令嬢、幾重にも感謝申し上げます」と従者レーダーは不屈の丁重さで言った、「衷心より、お休みなさいませ」。

動じない、確かな足取りで（彼には少尉は目でなかった）、彼は家の角を回って消えた。

「とんだ田舎っぺ」と少尉は叱った、「まことに、ヴィオレット、いつか日曜日に、こやつが一週間、何と自惚れているか、見てみたいものだ。ー それで、木登りの加勢を頼む。この幹が濡れて、かくも滑りやすくなければ、一人で済ませるのが。しかしあの白痴でも出来ることは、そなたも出来ようし、...」。

ヴァイオが彼女の少尉の木登りの加勢をしている間に、従者のレーダーは、両手をジャケットのポケットに入れて、小声で思わず口笛吹きながら、荘園中庭を渡って行った。彼は至る所に目を光らせて、それで馬小屋の影の中、彼の側を通り過ぎようとしている人影に十分気付いた。

「今晚は、バックス嬢」と彼は丁重に挨拶した、「こんなに遅くお出かけ」。

「あなたもお出かけじゃない、レーダーさん」とこの娘は戦闘的に答えて、立ち止まった。

「そう、私もそうだ」と従者は言った、「しかし今は、ベッドに就く時間と思ってね。あなたの起床は朝何時」。

しかしアマンダ・バックスは彼の質問を聞き流した、「どこへ恵み深い御令嬢はあの殿方と行ったの、レーダーさん」と興味津々に彼女は尋ねた。

「順を追って返事しよう」と若者らしくないフーベルトは教師風に言った、「バックス嬢、私の質問は、朝何時に貴女は起床するのかです」。

アマンダが本物の女でなかったら、こう答えていたであろう、「五時よ」。そしてその後自分の質問に対する答えを要求していたことだろう。しかし彼女はこう言った、「あなたには興味のないことでしょう、レーダーさん、私が何時に起きるかなんて」。それで議論は宙に浮いた。

しかし結局、長目のやり取りの末に、レーダー氏は、アマンダの起床時は日の出時間に従う、鶏は日の出と共に目覚めるから、と分かった。そして今七月に太陽は四時に昇り、従ってアマンダは遅くとも五時に外に出なければならない、と耳にした。

彼はこれはかなり早いと思った。彼自身はようやく六時に、いやしばしばもっと遅く起床する。

「あなたはそうよね」とアマンダはかなり軽蔑して言った。というのは根本的に、部屋を掃除する男は、軽蔑に値するからである。そんなわけで、彼女に対し、むしろ今就寝しろと言っている。

「それで恵み深い御令嬢は殿方とこんなに遅くどこへ行ったの」とアマンダはまことに辛辣に、それに対し、答えた。「令嬢はやっと十五歳よ。令嬢こそとうに就寝すべきでしょう」。

「いや、恵み深い御令嬢が何時に就寝されるか、私は知らない」とレーダーは言った、

「多分決まった時間ではないのだろう」。

アマンドは諦めなかった、「一体あの殿方はどんな方なの、レーダーさん。少しも見たことのない方だ」。

しかし従者レーダーは、自分は責務を果たしたという見解であった。恵み深い御令嬢は彼女の少尉と一緒に今は家の中に違いない。もはや二人をスパイから守るために、何かなすことはない。

「いや、あの殿方を貴女は多分知らないだろう」と彼は証した、「色々な殿方が我々の許にはいらっしやる。一 それではお休みなさい」。

更にアマンドが新しい質問をしないうちに、彼は去ってしまった。彼女は、苛立って彼の後ろ姿を見つめた後、家に帰ろうと決心した。若いレーダーはとてもずる賢いが、しかし彼女の中に、彼は彼女に対し誑かそうとしたという感情を残した。レーダーさんは、普段は彼女と話しをしない全くの自惚れ屋であるから、彼が彼女に対しごまかそうとしたのは、無駄なことではなく、何か目的があったのであろう。何かが隠されている。

物思いに耽って、アマンドは先に進んだ。彼女は中庭を去り、暗い検査官の家の角を曲がって、思案しながら、自分の恋人の窓の前に立ち止まった。

先ほど窓は開いていた。それから彼は窓を閉めた。しかし先ほど、彼女が一瞬中庭から向こうを覗いたとき、窓に明かりが点っていた。今や明かりは消えていた。アマンドは、こうしたことすべては全く正常なことであり、自分のハンス君は眠っている、酩酊した男は眠らせるのが最善で、まさにこの睡眠放置がハルティヒ夫人との会話を考えれば、自分が出来る最良のことであると、自分に言い聞かせた。この件を今一度蒸し返すことは実際意味がない。一 この件は全く気にならない。ハルティヒ夫人は二度とハンス君と関係しない。これにはアマンドは固く確信していた。

従って彼を眠らせておけばいいし、自分も眠りに就けばいい、一 自分も眠りを必要としている、一 それも深い眠りを。しかし彼女の指がむずがゆかった。とても奇妙な気分で、ベッドに就きたいとは思っていたが、少しもベッドは誘っていない。普段彼女は自分の欲することは分かっていた。しかし今は、彼を眠らせたいと思っていたが、しかしまた指で窓ガラスを叩きたいとも思っていた。憤然とした寝ぼけた声を聞いて、万事異常がないことを知ったかっ、…。自分はそんな気分で、また別な気分かもしれない、…。

いや、自分はまさに叩いてやる、と丁度そう自分で決めた。

そのとき彼女はハンス君の部屋で、小さな、丸い、白い光線、懐中電灯のような明かりを見た。思わず彼女はすぐ脇に退いた、この明かりで、カーテンは閉まっていると分かったのであるが。先ほど彼女がハルティヒ夫人と堆肥の所に立っていたとき、彼女に向けられた光線と丁度同じものであった。まさに同じ。

彼女は思案しながら立っていた。彼女は思い巡らした。何をこの懐中電灯は、恵み深いご令嬢と見知らぬ殿方は、こんなに遅く、こんなにこっそりと探そうとしているのか、と。彼女は明かりがさまよい、消え、また照らし、またさまよふのを見た。…

しかし彼女は、長く何もしないで窓の前に立っていて、物思いに耽るような人物ではなかった。すぐに戸口のドアへ向かって行き、用心して取っ手を押した。彼女が肩でドアに寄りかかると、ドアは従って開いた。

こっそりとアマンドは暗い[玄関の]廊下に踏み込み、戸口のドアを再び背後で閉めた。

少尉は手紙を見つける

切妻の部屋と屋根裏部屋の階段を下りて、少尉は検査官の家の暗い廊下まで来た。彼の懐中電灯の明かりで、鍵は幸い家の戸口の内部に差し込まれたままと分かった。一 彼は開けて、ヴァイオが彼の許に音もなく入って来た。

確かに事務所のドアは閉ざされていた。しかしここではヴィオレットが事情に通じていた。二重の鍵が、事務所のドアのブリキの郵便受けの中に取まっていた。この小箱は容易に開けられた。一 マイヤーにとっては快適なしきたりで、それで彼は朝起きる必要はなく、中庭管理人は家畜小屋も鍵を事務所から持って行けるのである。

両人は事務所の中に入った。ここは麻痺性の臭いがあった。少尉は瓶の残りを照らして、言った。「クロロホルムかアルコールだ、一 かやつは自殺したのではあるまいな。破片に気をつけるのだ、ヴィオレット」。

いや、彼は自殺していなかった。すでに聴覚でそれと分かった。黒人マイヤーはいびきをかいていて、ゴロゴロ言わせ、すさまじかった。ヴィオレットは自分の手を恋人の腕に回して、この荒廃して、臭く、蒸し暑い部屋で居心地良く感じていた。

いやそれ以上であった。彼女はこの夜の遠出全体を、自分の手紙を巡るこの反乱を、「お伽噺のように面白く」、このフリッツを「途方もなく放胆」と思っていた。彼女は十五歳で、彼女の人生への食欲は旺盛で、ノイローエは途方もなく退屈であった。少尉は、この人の存在について彼女の両親は何も知らず、彼女自身単に[姓ではなく]名前のみを知っているに過ぎなかったが、森の歩行中に出会って、一目で好きになっていた。この忙しい、しばしば完全に安心していて、大抵は冷静で生意気な男は、この冷静さから時折、いつも突発的に、焼け尽くすような炎を生じさせていて、一 この少尉が彼女にとって、すべての男らしさの、物言わぬ英雄世界の権化に見えていた。

彼は、彼女がかつて知り得たすべての男達と完全に異なっていた。彼は将校であっても、彼女がオスターデヤフランクフルトの舞踏会で踊りの相手に要請する帝国国防軍の将校達とは少しも似ていなかった。将校達は彼女を極めて丁重に取り扱い、常に彼女は「恵み深い御令嬢」であって、真面目にそして率直に狩や馬、勿論更に収穫について一緒にお喋りするのであった。

少尉、つまりフリッツの許で、彼女は丁重さの痕跡を感じたことがなかった。彼は彼女と森を歩いて一緒に散歩し、あたかも普通の娘であるかのように、お喋りがなされた。彼は彼女の腕を取り、腕を支え、再び腕を放した、あたかも格別の好意ではなかったかのようであった。彼は自分のひしゃげた煙草のケースを無造作に「どうぞ」と言って差し出し、厳しく禁じられた喫煙は、当たり前のことであるかのようにであった。そして煙草に点火する際、彼女の頭を握って、彼女に接吻した、一 全く当然の仕草であるかのようにであった。... 「ただ勿体ぶらないことだ」と彼は笑っていた。「勿体ぶる娘、これは嫌いだ」。

彼女は彼に「嫌いだ」と思われたくなかった。

人々は若者に危険を警告し、それどころかひょっとしたら危険から守ってやることのできるかもしれない。一 しかし普通の日常のような危険、世の自明過ぎる事柄のような

危険、少しも危険には見えない危険に対してはどうしたらいいのか。ヴィオレットは少尉フリッツの許で、何か本当に禁じられていることをしていると、本当に危機にあるという感覚をまともに持つことはなかった。そのことが起き、しかし何か彼女にとって本能的防御のように、パニックの驚愕に襲われようとしたとき、彼は率直に怒って言った、「頼む、ヴィオレット。芝居をしないでくれ。私はこのような阿呆な鷺鳥風、勿体ぶりが、死ぬほど嫌いだ。他の娘なら違う具合だとでも思うのか。このために生まれて来ているのだ。だから、頼む」。

このために生まれて来たの？ — と彼女は尋ねたかったことだろう。しかしそう尋ねたら、ただの馬鹿と思われると分かっていた。まさに、彼が彼女を大事と思っていないが故に、彼の来訪がとても不定期で、短期であるために、まさに彼の約束がとても不確かであるために、「金曜日、ここに来て欲しい、だと。ヴィオレット、阿呆なこと言うな。私はそなたより他に考えるべきことが実際あるのだ」、まさに彼が彼女に対して丁重でないが故に、まさにそれ故、彼女は彼に対しほとんど抵抗なく陥落してしまった。

彼はとても変わっていて、秘密と冒険とに包まれていた。すべての彼の欠点は彼女にとって長所となった。他の者達はその欠点を有しなかったからである。彼の冷淡さ、彼の突然の、同様に速やかに消滅する、欲望、彼の単に表面的な、無愛想な作法、この世の何ものに対しても見られない、完全な敬意欠如、 — 彼女にとってこうした一切が、即物性[客観性]であり、途方もない恋愛であり、男らしさであった。

彼のなすこと、それは正しい。国民をどのような事態に対しても動員するという保証のない委託と共に、国内を巡るこの当てにならない若者、闘いの目標に眼目はなく、ただ闘いだけが眼目の、この冷淡な山師、ただ騒擾さえ引き起こせるのであれば、どんな党派のためであれ闘うであろうこの傭兵、 — というのは彼は騒擾を愛していて、平穩を憎んでいるからであり、平穩時にはすぐに空虚な空漠感に襲われ、自分をどうしたらいいか持て余しているのであるが、この放胆な、すべての露地に出現するハンス、彼こそは英雄なのである。

そして彼は一つの世界を炎上させることができよう、 — 彼は彼女にとって英雄であった。

彼が今、懐中電灯を手にとって、上腕に彼女の軽く震える指を感じながら、裸の男の寝ている乱れたベッドを照らし出し、無造作に彼女に向かって、「ヴィオレット、見ない方がいい」と言い、裸の男に掛け布団を掛けて、「豚め」とうなり、彼女に対し、ベッドの横の椅子に腰掛けるよう命じ、「彼が目覚まさないか、見張っている。一度、彼の品をざっと点検してみよう」と言うとき、この下劣な戦友扱い、この無鉄砲、敬意欠如、ほとんど紛れもない粗放さ、 — この一切を彼女は素晴らしいと思った。

彼女は椅子に座っていた。ほぼ完全に暗く、月の光は灰黄色のカーテンからほとんど射してこなかった。ベッドの男は喉を鳴らし、いびきをかき、呻いた。彼女は彼が見えなかったが、しかし今や彼は身体をあちこち揺すった。眠りの中で敵を感じているようであった。彼女の背後の男は品をあさっていた。彼は小声で呪った。手に懐中電灯を持ったまま、他人の部屋で何かを探すのは難しい。彼はがさごそ音を立て、椅子にぶつかり、突然光線が窓に跳ねて踊り、消えた。さてまたがさごそ始まった。

勿論、彼女は夕方、規則正しくベッドに就かなければならない。時に彼女も舞踏会の折、

十一時まで、遅くとも十二時まで、一緒にいることが許される。あるいは格別の許可を得て、森林官と従者の同伴を得て、狩の待場へ行ける。午後には来る日も来る日も、ママが彼女とフランス語と英語を話す。 — 「ヴァイオ、あなたが最新の情報に通ずるようになるためよ。あなたは後々上流社会で活躍しなくちゃならないのよ。 — あなたのママとは違って、ママはただの請負人の妻に過ぎないけど」。 — いや、何と色褪せて、何と嘘ッパチに、何と平板に家での世界が見えることか。ここのこの臭う検査官の部屋に座っていると、人生は血とパンと糞の味がする。少しも両親や、女教師達や、牧師達が主張する通りではない、穏やかな、好意的な、丁寧な案件ではない。暗いものだ、...。不思議に暗い。...

そして暗闇の中から白く輝く歯の一つの口が出現した、糸切り歯は尖っている。唇は細く、乾いていて、生意気だ、 — いや、口、接吻のための男どもの口、噛むための猛獣の牙。暗闇の中から、私に向かって来る。

両親、祖父母、[新旧の]ノイローエとアルトローエ、駐屯地のあるオスターデ、オーダー河畔のフランクフルトでの秋の市、ベルリンの喫茶店クランツラー、 — 狭い世界だ。永遠に静止している隷従の世界。人々は大理石の小卓に座り、ボーイがお辞儀をし、パパとママは可愛い娘が生クリーム入りのシュークリームを食べられるか議論し、隣のテーブルの生意気な若造が彼女をじっと見る。可愛い娘は目を逸らす、 — もはやとうに存在しない整然たる世界、廃墟の残骸。

というのは別の人生が侵入して来たからだ。この人生では一切すべてもはや通用しない。この人生は狩り立て、赤く光り、閃光を発する。 — いや、無限の炎よ、神秘的な冒険よ、素晴らしい暗闇よ。この暗闇の中では、人は羞恥なく裸でおれる。このことを今まで知らない哀れなママ。白いこめかみになるほど年取った — 哀れなパパ。私は生き、私はよろめき、私は踊る。 — 道また道、道に沿って渦巻き流れることは何と容易なことか。常に新たな道があり、常に別な冒険がある。愚かな、醜い黒人マイヤー、何にも役立たず、ただ十五分間、少しばかりスリルを味わい、それから長く、厳しく処分されるだけである。

「これが紙くずか」と少尉は尋ねて、湿って汚れたぼろを照らし出した。「奴はこれをシュナップスに浸けていた」。

「いや、私に返して」と彼女は叫んだ。突然、昂揚した自分の文面を恥じていた。

しかし彼は、「いや、結構、小娘さん。今一度これを旅に出してみろ、また私は追いかけるなければならない」。 — 彼はすでにポケットに仕舞っていた、 — 「言うておろが、ヴィオレット、二度と私宛に書くな。金輪際、一言も」。

「それほどあなたに憧れているのよ」と彼女は叫んで、両腕を彼の首に回した。

「そうだな、勿論、分かるよ、すべて分かる。 — いいか、日記は書いていないだろうな」。

「私が、どうして。日記を。いや、勿論書いてない」。

「また、法螺を吹いているな。いつかそなたの部屋を検査しなきゃならん」。

「そうね、お願い。お願い、フリッツ。私の部屋に来てよ。あなたが一度私の部屋に来るなんて、とても素敵」。

「結構、結構、いつかそうしよう。しかし今は急いで集会に行かねばならん。奴等ほも

う罵っているだろう」。

「今日、一 今日うちに、私の許に来られる？集会の後で、お願い、フリッツ、そうして」。

「今日か、絶対出来ない。集会の後は今一度ここに来て、奴と話し、更に誰かに手紙のことを漏らしていないか、聞き出さなければならない、...」。

彼は思案した。

「いや、フリッツ。彼をきちんと叱ってね。震え上がらせて、さもないとすべてを広めてしまう。むかつく下劣な人、...」。

「おまえ自身が私に使者として勧めたのだ」、しかし少尉は考え直し、止めた。女達に仕出かした失敗を咎めて、諍いを始めても、無駄だ。いつもこれはすぐに宙に浮く。別の、はるかに恐ろしい考えが少尉に浮かんだ。その奴は手紙のことをばらせるだけではない、奴はまだ他のことも知っている。ひょっとしたらクニブッシュが漏らしたかもしれない。

「いや私は後で彼とどうしても話さなければならない」と彼は今一度言った。

あたかも彼のことを察したかのように、彼女は言った、「彼をどうするの、フリッツ。彼があなた達を裏切ったら」。

少尉は全く静かに立っていた。この小さな鷲鳥頭の娘でさえ、このことを察知して、「この件」の絶えざる脅威である危険、皆が恐れている危険を感知している。今までほとんど口にされていない。極めて狭い範囲を除いて、何が問題なのか、何を計画しているのか、ほとんど誰一人知らない。ある仄めかしとか、一般的な言辞はなされている。不平、憎悪、絶望が十分に地方で見られる。ベルリンの紙幣印刷機は新しい紙幣の大波のたびに、新しい憤懣の大波を地方にもたらしている。一 すると二、三の言葉で十分である、押し殺した武器の物音、...ほとんど何も必要ない。

しかし裏切り者は明敏である必要はない、精通している必要は少しもない。郡長にこう語るだけで十分である。誰かが国内を巡回していて、人々に反乱をけしかけている。自分はそれどころかこう聞いた、村の武器を数え上げろ、と、...

少尉は電灯の明かりを眠っている男の顔に当てた。一 善良な顔ではない、信頼できる顔ではない。彼はこの若者を使いたくないと本能的に思ったとき、それは正しかったと思った。しかしこのヴィオレットがいた。彼女がこの男を提案したのだった。この男なら、二人の間の快適な、目立たない使者となるであろう、と。この男はいつも騎兵隊長の家に出入りしていて、いつも田畑や森で出会える、と。...最初の使いでこの始末だ。永遠にこうした女どもの芝居だ。一 いつもこうした長い髪の女どもが割り込んで来る。頭には所謂恋愛しかないのだ。

少尉はすぐに向き直って、意地悪く言った、「即刻ベッドに就きな、ヴィオレット」。

彼女は彼の言葉の調子に全く驚いた、「でも、フリッツ。私はここであなたを待っている。それにまだ森林官とも話さなければならないし、雄山羊のことで」。

「ここでか、巫山戯たことをするな。こやつが目を覚ましたら、どうするのだ。あるいは誰かが入って来たら、...」。

「でもフリッツ、あなたはどうするつもり。彼が目を覚まして、彼の手紙が消えたと気付いたら。私の手紙のことだけ。すると彼は私どもに腹を立てて、走って行き、すべてを祖父やママに話すわ、...」。

「いいか、頼むから、止めてくれ、ヴィオレット。頼む、私が一切を片付ける。集会后、奴を絞り上げてやる。ー 徹底的にな、保証する」。

「でもその前に逃げたら」。

「逃げはしない。奴は酔っ払っている」。

「でも仮にその前に逃げたら」。

「いい加減、黙るのだ、ヴィオレット」と少尉はほとんど叫んだ。彼自身驚いてしまった、囁き声になった、「だから、頼む、冷静になれ。ここで待ってはいけない。家の前で待つのは構わん。ー 一時間もしたら、またここに戻って来る」。

二人は一緒に進んだ。暗い室内を覚束なく歩き、暗い玄関廊下を渡った。そこでまた二人は外に出た。

夜で、満月で、平静で、空気はとても暖かかった。

「忌々しい月だ、我々は誰からも見られてしまう。向こうの茂みの中へ行くのだ。それでは一時間後にな、...」。

「フリッツ」。彼に呼びかけた、「フリッツ」。

「何だ、静かにできんのか」。

「フリッツ、一回の接吻もないの。ただの一回の接吻も」。

くそつたれ、うんざりだ。大きな声で、「後でだ、小娘さん。後ですべて埋め合わせる」。

砂利が軋んだ。少尉は去った。ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツは茂みの中に立っていた、そこはアマンダ・バックスも[先ほど]立っていた所であった。アマンダと同じように彼女は目を検査官の家の窓に向けていた。

少しばかり彼女はがっかりした、ー しかしまたこの歩哨を得意に思っていた。

59

森林官クニーブッシュは密猟者を捕らえる

森林官クニーブッシュはゆっくりと、背中に三連銃を負って、夜の森の中をぶらついていた。満月はすでにかなり高く昇っていた。しかしここ下の方では、幹の間にあって、その明かりでは視界はただ一層不確かになるだけであった。森林官は森のことを、都会人が自分の住まいのことを知っているように承知していた。日中であれ、夜間であれ、いつでも彼はすでにここを歩いていた。彼は道のすべての折れ具合、すべての柏檜の茂みを知っていた。この茂みは、ー 幽霊の男のように不気味にー 高い松の幹の間に浮かんでいた。まさに今のがさごその音はハリネズミのもので、鼠を追いかけっていると知っていた、ー しかしすべてが親密で馴染みのものであるとはいえ、今この時間森の中を歩むのは好きでなかった。

森は同じ森であったが、時を経るにつれ、時代が変わってしまった。時代と共に人間も変わった。その通り。以前も薪泥棒はいた。しかしそれらはいつも同じようないかがわしい人物であって、彼らの生業は薄暗く、彼らの評判は更に薄暗かった。人々が彼らを抑えてみると、彼らは正体通りの人間であった。彼らの正体通り、彼らは牢屋にぶち込まれた。人々は彼らに対して怒る必要はなかった。結局彼らは自らの窃盗で常に怒りを買ひ、損害の後始末をすることになった。

しかし村全体が、男どもが徒党を組み、家ごとに連帯し、薪盗みに出掛けることが、以前考えられたであろうか。森林官は走り、注意し、死ぬほど立腹して、結局一人を捕らえてみると、復讐を受ける不安を感じるか、このような一人前の男が盗みを働くという恥辱を感じることになる。

森林官クニブッシュの若かりし日々、ノイローエの森での最初の奉公時代に、こちらでも一人の悪評高い密猟者がいた。ミュラー＝トーマスで、後にマイエンブルクの監獄の独房で縊死した。こやつとは生死をかけた長い闘いが行われた。策略には策略が練られ、暴力には暴力で闘われた。しかしそれはやはり同等の手段での闘いであった。...今日ではやつらは一団となって、軍のピストルやカービン銃を持って、「狩」に出掛ける。やつらは野獣を見かけるや、追い上げて、孕んだ雌の獣とか子持ちの雌の獣とかに頓着しない。

一 やつらは雉を撃ち、いや、鶉にも弾を向ける。やつらがミュラー＝トーマスの如く、あるいは飢えを満たす焼き肉用に狩に来るのであれば許せよう、一 しかしやつらは単純に殺すのが楽しみで殺しており、正体は殺害者であり、一 破壊者である。

老公は今や高林から出て来た。彼は唐檜の保護区の間細い区画線を歩いていた。小木の林は十五年もので、そこは二、三年前から間伐される必要があった、一 しかし人手が足りなかった。かくて保護区は言いようもなく密生して、突き刺す小枝が鬱蒼と固まり、幹は倒れ、四方八方藪であった。...日中でさえ三メートル先が見通せない。今月光を浴びて、ここは黒い壁のようである。...この道をやって来る一人の敵を待ち受けるのであれば、ただこの茂みに隠ればいい。するとそもそもこの男を捕らえ損なうことはない。

自分をこの区画線に出迎えるであろう者を誰も期待できないと森林官は空しく自らに語った。全く予定外の忍び猟であった。自分が黙ってさえいたら、この忍び猟もしないで済んだのだ。誰も茂みで待ち受けていない。

しかしそれでも彼はよりこっそりと歩んだ。彼は穏やかに歩ける苔の細長い土地のどこが滑るか承知していた。小枝が一本、彼が歩むとき、カクツと言っても、彼は立ち止まって、耳を澄ました。彼の心臓は動悸した。彼はどうにパイプをポケットに入れていた。煙草は森の中では遠くまで臭うからである。彼は三連銃の発射用意をしていた。不確かな射撃でもないよりはましだからである。

彼はとても老いていた。とうの昔に引退していたかった。しかしそうはできない。今夜、唐檜保護区を進まなければならない。愚かな若い小娘が、自分の心や手紙に注意していなかったからである。これは全くとんでもない道だ。自分は銃で雄山羊を狙うことはできない。銃で狙えるとしても、銃は当たらない。たとえ雄山羊を仕留めても、これは大したことではない。一 恵み深い奥方も、騎兵隊長殿も、ヴィオレット令嬢がこう言えば、驚かないだろう。忍び猟は不首尾であった、と。それ見たことか、とせいぜい騎兵隊長は仰有ることだろう、「ヴァイオ、ベッドにいた方がましだったろうよ」と。そしてほんの少し娘を笑い飛ばすことだろう。

いや、そうではない。彼らはそんなことを考えていない。彼らは実際自分をこの雄山羊猟に送り出したのだ。あの三人が、かの忌まわしい奴、検査官マイヤーとの話しにけりを付けている間に、自分は駆けなくてはならない。あの三人がこの知識を得たのは誰のお蔭だ。ただ自分一人のお蔭なのだ。誰があの厚かましい、当てにならない少尉をハーゼ村長の許から連れ出したのだ。ただこの自分一人だ。それなのにこの若造は全く高慢ちきにこ

う言った、「クニーハーゼ、貴方はここでは無用だ。雄山羊撃ちに出掛けるのだ。ここらの茂みで聞き耳を立てていちゃならん。見つけたら痛めつけるぞ」と。

ヴィオレット嬢が居合わせて、この傲慢な演説の一語一語を聞いていた。ほんの少しでも感謝してくれたら、結構な娘だろうに、いやただこう言った、「そうなさい、クニーブッシュ。少し骨折ってください、明日パパに何か見せられるように」。

それで、「畏まりました、恵み深いご令嬢」と言うしかなかった。そして森に回れ右だ。それで、今夜田畑検査官マイヤーがどうなったか、一向に知ることができない。奴はきつと話しを漏らさないだろうし、従者レーダーも口が堅い。少尉は明日忽然と消えていることだろう。恵み深い御令嬢も話しはしない、何か話しを聞くのは好きな方だが。

この熟考の末のご注進から、多くの収穫が予想されたが、結局どんな結末になったか。森を通っての夜間の忍び猟と、小さなマイヤーからの永遠の憎悪だ。奴が憤然となったら、どんな毒蛙になるかしのれたもんじゃない。

森林官クニーブッシュは小声で溜め息を吐いて、立ち止まり、額の汗を拭った。一暑かった、とても暑い。しかし彼はここ森に滞留している大気の蒸し暑い、雨の湿気を含む暑さで、熱くなっているのではなかった。彼を興奮させていたのは、自分自身への怒りであった。彼は生涯で千回、いや一万回、固く決心していた。自分に関係しないことは何ごととも見聞しない、自分が何を経験しようと、もはや何も話さない、と。ただ後、自分のためだけの道を進む、まだ自分に恵まれる数年間、もはや賢明に、賢しらに、抜け目なく、予想しながら生きることはしない、一もはやそうしない、と決心していたのだ。

この不動の決心に点を打つかのように、教会でのアーメンのように、突然森の中で一つの銃声がこだました。

森林官は縮み上がった。彼は立ち止まり、聞き耳を立て、足を進めなかった。それは猟銃の射撃であった。その物音は鞭の音のように鋭かった。密猟者の猟銃射撃である、一というのは、他にこの時刻、森に出掛ける者は考えられないからである。

この二つは確かである。しかしどこからこの射撃が来たか、森林官はその方向を全く確実には確定できなかった。保護区の周りの高い森の壁が反響を四散させて、その音を手玉に取っていた。しかし森林官はほぼこう誓いたいところであった。この射撃は森林官が向かっている向こうの方から来ている、と。ハーゼ村長のセラデラ圃場区からだ。三枝角雄山羊が枝を出しているとか言われているところだ。別人が恵み深い御令嬢の雄山羊を撃ってしまった。

森林官は、射撃がなされたとき自分が立っていた地点に相変わらず立っていた。彼は急がなかった。心の裡での決意は断固たるものであった。自分は、自分の欲することを正確に行う一廉の男だ、一それ以外は何もしない。ゆっくりと彼は三連銃を肩に掛け、ゆっくりとポケットから短いパイプを取り出した。彼はパイプに詰め、そして一ちょっと躊躇った後、一マッチを燃やした。彼は力強く吸って、それからマッチ棒を親指と人差し指の先の間でもみ消して、煙草をもう一度用心して押し込みながら、パイプのニッケルの蓋を閉めて、行軍にかかった。目標を自覚し、断固決意して、彼は一步一步、射撃がなされた地点から遠ざかった。火中の栗を拾うな、点。アーメン。

しかしさて、彼の場合、好むと好まざると、まさにニュースに追いかけてしまう幾人かに当たり、他の人の場合、生涯遍歴しても、何のニュースにも遭遇しないものである。

他の人はようやくパンを得るとき、それはいつも干涸らびている。正確に見てみると、森林官は午後にも恵み深いご令嬢の手紙の情報に関して、それを得ようとは少しもしなかった。逆に、彼はマイヤーのお喋りを嫌悪して拒否し、この厭わしい自慢話しについて何も知ろうとしなかった、――それがすでに手紙についてすべて自分は承知している。

心地よくくゆらせながら密猟者から遠ざかる森林官、老クニブッシュ、彼は自身の抜け目なさにほくそ笑みながら、まことに悠然と森の比較的安全な部分をゆっくりと進む決意でいて、すでにこう完全に確信できるところまで来た、つまりすべての努力、すべての辛抱強い待ち伏せはやはり無駄であって、一頭も雄山羊は仕留められなかった、と。――

しかしこの老臆病者、クニブッシュは自分の雄山羊を撃ち落とすべく運命付けられていた、――それも猟銃なしに。

彼がかくも熱心に忍び去ろうとしたニュースは、こっそりと急いで、月光も照らし出せない高い樅の木の間の隘路を自転車で下って来た。森林官はくゆらせながら隘路を登っていた。

衝突は激しかった。しかし老森林官にとっては柔らかい砂が十分にあった、自分の老いた骨を痛めずに済んだのに対し、自転車乗りには強力な岩の塊が待っていた。自転車乗りはまず肩がそれに当たり、大声で呪いを発した。しかし彼はまだ自分の鎖骨がこの瞬間折れたことに少しも気付いていなかった。それから彼の頬がまことにざらざらした岩の外面で擦りむかれた。それで皮膚が剥がれ、赤みの肉が炎のように燃えた。しかしこのことを転落した自転車乗りがまだほとんど感じないうちに、すでに彼のこめかみは突き出た鋭角の岩の張り出し部の挨拶を受けていた。――こめかみは、睡眠同様に敏感である。粗野な妨害があると両者は容易に傷付く。自転車乗りは今一度、すでに全く意識朦朧としていて、「うう」と言って、もはや何も発しなかった。

正直な森林官クニブッシュは砂の中に座って、太い脚をさすっていた。衝突の打撃を最も受けたところであった。彼は、自転車の男が、自転車に乗って、去って行ったら、喜んで見送ったことだろう。彼は少しも異議を称えず、質問もしなかったであろう、もはや関与しないという彼の決意は断固たるものであった。

彼は暗闇の中で相手を窺った。樅の木の間の隘路は余りにも暗くて、そもそも何も見えなかったのであるが（ただ、森を自分の掌のように熟知している者のみが、この漆黒の隘路の中、敢えて自転車で下ってくるのが許されよう）、次第に森林官は何かが見えるという気がしてきた。しかし自分が見ていると思う者は、自分同様に砂に座っていて、体をさすっている暗い人影であった。

従って、森林官クニブッシュは静かに座り、窺っていた。相手も座って窺っている、相手も座って、ただ彼が立ち去るのを待っていると、今や彼は確信した。最初森林官は決心が付かなかった。しかしこの出来事を熟考して、相手が正しいと分かった。当局の者として彼は多分、まず立ち去って、かくてこの出来事の糾明を断念すると表明する必要がある。

ゆっくりと、こっそりと、用心深く、森林官は立ち上がった。常に黒い斑点をしっかりと目に収めていた。彼は小幅に進んだ。更に小幅に進んだ、――しかし三回目の小幅のとき、二度目の転倒をした。勿論自分が去ろうと思う丁度その男の上であった。黒い斑点は紛らわしかった。最新のニュースのすぐ隣りに森林官は腰を下ろした、いや部分的には

それどころかその上であった。

彼はすぐにまた飛び上がり、逃げ去りたかったことであろう。しかし彼は転倒した自転車の枠の中において、そのため衣服や、ペダル、チェーン、猟銃の革ひも、サドルバッグに若干の混乱が見られた。薄い鋼の棒やギザギザのペダルに急に落ちて受けた痛みについては言うまでもない。

かくて森林官は座っていた。まことに肉体的、精神的に全体震撼させられていた。まず今でも、去らなければならないと考えたとしても、次第にこう気付かざるを得なかった。つまり自分が腕を置いている肉体は、意識があって待機している人間に想定されるよりも若干反応が少ない、と。

彼は更にかなり待っていて、遂に断固たる決心とは別な決心に変わった。そしてクニーブッシュに、自分の懐中電灯のスイッチを入れるという余裕が生じた。しかしまずこのことがなされて、光線が意識を失った男の青白い、片側の皮が剥がれた顔に向けられると、物事は一層素早く進展した。そしてこれは悪評高いならず者のアルトローエ出身のボイマーであり、子羊のように無抵抗に自分の両手に落ちていると認識すると、この不法の乱暴者、密猟者を牢にぶち込むと決心するまでに手間はかからなかった。

森林官は綱と革ひもで、商店のどんな梱包女もこれ以上上手に確実に結べないほどに、ボイマーを梱包して、こう考えた。自分はこの「逮捕」で老枢密顧問官と若い騎兵隊長の許で大なる名声を得るであろう、と。つまりこのボイマーは、大悪漢で、首謀者、大泥棒、密猟者で、完全にすべての荘園所有者の肉体の棘であるからで、— この一切は彼のリュックの三枝角雄山羊と自転車のカービン銃が明白に証している通りである。しかしこの名声よりもはるかに重要なのは、やはり自分がこの全く安全なやり方で、自分の危険極まりない敵を、長期間、片付けたということであった。かつて森林官が彼の材木小車を取立て検査しようとしたとき、すでに何度か殴りかかって脅して来た相手なのである。三人力のこの危険な敵があっけなく彼的手中に落ちたこと、これはまことに天の摂理に違いない、それでどんな断固たる決意も当然変わり、軟化することになる。

かくて森林官は内心喜んで、結び目を固く結んで引いた。まさに自分の人生で、最大の幸運に遭遇したかのようにであった。

勿論ユッタ・フォン・クックホフ嬢ならこう言ったかもしれない、豚の屠殺をしないうちに、豚のベーコンを称えてはいけない、よ[取らぬ狸の皮算用]と。

60

賭博クラブ前の路上で

ヴォルフガング・パーゲルはヴィッテンベルク広場近くの暗い通りの上手、下手を見た。わずかな急ぎ足の歩行者しか残っていなかった。真夜中過ぎの直後であった。白く輝く広場が見える向こうの奥に、誰か男の人が家の壁に寄りかかっていた。つば広の帽子を被り、煙草を口に、暑い夏にもかかわらず、両手をポケットに入れて、— すべて然るべき風であった。

「彼だ」とヴォルフガングは言って、頷いた。突然彼は凍り付いた。— 彼は目的の間近に来ていた。緊張と期待とに彼は囚われた。

「誰なのだ」とフォン・シュトゥットマンは尋ねた、はなはだ無関心であった。夜、ベルリンの半ばを連れて行かれるのは、退屈なことだった。最後につば広の帽子の男を眺める羽目になるのは死ぬほど退屈であった。

「見張りだ」と二人の同行者の疲れには何も顧慮せず、ヴォルフガングは言った。

「ベルリンを良く知っていることは認める」とフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は叱った、「このような男を見張りと呼ぶのは確かに瞠目に値する。ー しかし何をするつもりかい加減説明してくれないか」。

「もうすぐです」とパーゲルは言って、更に窺った。

見張りは口笛を吹いて、ヴィッテンベルク広場の明かりの中に消えた。三人の紳士のすぐ近くで、ある家の戸口の鍵音がした。しかし誰も現れなかった。

「玄関を閉めたのです。相変わらず元の家だ、十七番」とパーゲルは説明した、「今から保安警察が来ます。その間一度広場の周りへ行きましょう」。

しかし騎兵隊長は抗った。彼は地団駄踏んで、激しく叫んだ、「パーゲル、このくだらん話しにこれ以上付き合うのは御免だ、何を計画しているのか、すぐに話してくれとな。人目を避けることなら、もう結構。正直に言うと、ベッドに寝たい。シュトゥットマン同意見だろう」。

「見張りとは何だ、パーゲル」とシュトゥットマンは穏やかに尋ねた。

「見張りとは」とパーゲルは快く説明した、「保安警察が来るか、そもそも安全か見張る者です。玄関をすぐに閉めた者、これはポン引きで、客人を上げるのです、...」。

「それじゃ何か禁じられたことだな」と騎兵隊長は更に熱くなって叫んだ、「結構、いとも尊敬するパーゲル殿、私はしない。私は警察とは関係したくない。この点ではまあ古風だが、...」。

彼は打ち切った、二人の保安警察が近付いて来たからである。二人は並んでぶらついていた、頑丈な大男と太った小男で、軍帽の顎紐を結んでいた。ゴムの棍棒が掛かっている鎖がかすかに軋んだ。彼らの鉄を打たれた靴底からの音が周囲の家の壁で反響した。

「今晚は」とパーゲルは小声で丁重に言った。

三人の間近を通り過ぎた大男のみが、少しばかり頭を向けた。しかし彼は答えなかった。ゆっくりとこの二人の秩序の番人が、通りを下の方へと通り過ぎた。更に彼らの靴鋏の物音が三人の静寂の中へ響いて来た。それからこの保安警察はアウクスブルク通りへと曲がり、パーゲルは小さな安堵の仕草をした。

「いや」と彼は言って、心臓が再びより平静に鼓動するのを感じた。というのは最後の瞬間に邪魔されるのではないかと恐れていたからである。「彼らは去って行きました。今ならすぐに上がれましょう」。

「我らは家に帰ろう、シュトゥットマン」と騎兵隊長は苛立って言った。

「上で何があるのか」とシュトゥットマンは尋ねて、頭で暗い家の方に頷いた。

「ナイトクラブです」とパーゲルは言って、ヴィッテンベルク広場の方を見た。見張りが新たに明かりの中に現れて、ポケットに両手を入れ、煙草を口の端にくわえて、通りをゆっくりと下って来た。

「くそつたれ」と騎兵隊長は大声を出した、「服を脱がされた女どもに、水割りシャンパン、裸踊りだ。そうだろう。貴方を見たとき、すぐに言ったろう。シュトゥットマン、

行こう」。

「それで、パーゲルよ」と騎兵隊長に注目せず、シュトゥットマンは尋ねた、「その通りか」。

「そんな」とパーゲルは答えた、「ルーレットです、ただのルーレットです」。

見張りは彼らから五歩離れたランタンの下に立ち止まっていて、思いに耽って、明かりを見つめながら、「ムッキーよ、私をシュヌッキーと呼んでくれ」と口ずさんでいた。パーゲルは見張りが傾聴していて、自分を、すべての賭博クラブで最も敬遠される馴染みとしてその正体を承知していて、自分の入場を断るのではないかと恐れていた。

この躊躇いに不機嫌になって、彼は手で金の小包を振った。

「ルーレットか」と騎兵隊長はびっくりして叫び、再び一步近寄って来た、「そもそも許されているのか」。

「ルーレットか」とフォン・シュトゥットマンも驚いて言った、「このぼったくりに対して貴方は運命の問いを立てるのか、パーゲル」。

「公平な賭けです」と小声でパーゲルは反論した、見張りに目を向けていた。

「自分は騙されたと認める者はまだいないだろう」とシュトゥットマンは反論した。

「私は昔一度ルーレットをしたことがある、青二才の少尉のときにな」と騎兵隊長を夢見るように言った、「一度眺めて見てもいいかな、シュトゥットマン。勿論一銭も賭けない」。

「判断できん」とシュトゥットマンは躊躇って言った、「ぼったくりに違いない。この陰気な雰囲気全体がな。一分かるだろう、ブラックヴィッツ、...」と彼は若干当惑して説明した、「勿論私も時に賭博をしたことがある。好きにはなれんし、...まず血を舐めた後の思いとか、今日の私のような気分では、...」。

「そうだな、勿論、...」と騎兵隊長は言ったが、しかし動かなかった。

「それでは上がりますか」とパーゲルは決心の付かない二人に尋ねた。

両人は問うように見つめ合った、行きたいし、行きたくないし、ぼったくりを恐れていたし、それ以上に自身を恐れていた。

「見物は自由です、殿方」と見張りは言って、帽子をぞんざいに顔の上に上げながら、近寄って来た。「割り込んで来て、済みません」。

彼は立っていて、青白い顔を彼らに対し上げていた。小さな黒っぽい鼠の目が一人一人を観察していた。

「見物はただです。賭博代は要りません、殿方、クロークもなし、アルコールもなし、女どももいません。...ただ堅い賭博です。...」

「それでは、私は上がります」とパーゲルは決然と言った、「今日は賭けなければならぬのです」。

彼は急いで、一もはや待っておれなかった、一玄関に行き、ノックして中に入れられた。

「待ってくれ、パーゲル」と騎兵隊長は彼に呼びかけた、「我々もすぐに行く、...」。

「本当にお友達と行かれたらよろしいですよ」と見張りは説得して言った、「あの方は明敏で、賭けの仕方が分かっているらしい。儲けずに賭場を後にしない晩はありません、...あの方は私ども皆に知られています、...」。

「パーゲルのことか」と騎兵隊長は驚いて叫んだ。

「勿論私どもは正確なお名前を存じ上げません。賭場では殿方は名乗られません。私どもは単にあの方を五分五分の豹を呼んでいます。いつもただ五分五分の勝負をされるからです。...しかしその技ときたら。あの方は賭博者です、骨の髄から。私どもの誰もがあの方を存じ上げています。あの方はどうぞお先にです、暗闇でも自分の道が分かっているらしいです。私が貴方らを照らして案内しましょう、...」。

「それでは奴は大いに賭けるのか」とフォン・シュトゥットマンは用心して問い合わせた。パーゲルの件がますます興味深くなって来たからである。

「大いにですとも」と見張りは紛れもない敬意を添えて言った、「あの方は一晩も空けません。いつも美味しいところを取って行かれます。時に私どもはあの方に頭にきます。しかし冷静なものです。あの方のように冷静になれるものではありません。十分ポケットに入れてから、あの方がお仕舞いにする様はただただ恐れ入ります。本来なら私はあの方を上げてはならないのです。それほど上ではあの方は嫌われています。ただ今日は問題ありません、貴方らがいらっしゃいますから、殿方、...」。

フォン・シュトゥットマンは心から笑い始めた。

訳が分からず騎兵隊長は尋ねた、「何故そんなに笑うのだ」。

「いや、済まん、ブラックヴィッツ」とシュトゥットマンは相変わらず笑い続けながら言った、「このような上手なお世辞はいつ聞いても心地よい。分からんのか。やつらは抜け目ない冷静なパーゲルを大目に見て上に上げたが、それは奴が我々阿呆を連れて来たからだとき。 — いや、今、楽しくなって来た。我々両人も抜け目なく冷静になれるものか見てみようじゃないか」。

相変わらず笑いながら彼は騎兵隊長の脇腹を掴んだ。

見張りも笑った、「これはとんだドジを踏みました。いや、悪く受け取らないでください、殿方。ご気分を害していない証拠に、ちょっとチップを頂けませんか。どうでしょう、お二人は見るからに、ポケットの大金を持っては、再び階段を下りて来られないようにお見受けしますので、...」。

彼は巧みに階段の踊り場でブラックヴィッツの財布を照らし出した。ブラックヴィッツはチップを探していた。

「彼は本当に、我々は一文無しになってまた出るだろうと我々を見積もっている」と騎兵隊長は苛立って言った、「不吉なカラスだ」。

「ちょっと不吉を囁かれるのは賭けでは結構なものです」と見張りは言った。そして穏やかに説き勧めた、「いや、更にもう一枚ですよ、男爵殿。まだ我らの相場をご存じないようですな。私はいつもアレクサンダー広場の警察拘置所に半分脚を入れているようなものですから」。

「私もか」と騎兵隊長は激昂しそうになった。再びこの試みの非合法性が思い出されて苛立っていた。

「貴方のことですか」と見張りは同情して言った、「貴方には何も起きません。賭ける者は、せいぜい金を失うだけです。しかし賭博に誘う者は、ムシヨに入らなければなりません。私は誘っていますので、男爵殿、...」。

薄暗人影が階段を下りて来た。

「しっ、エーミール。五分五分の豹と一緒にのご二人だ。上に案内してくれ。私は見張りに行く。今日は胃の辺りがとても妙な具合だ。何か起きそうだ」。

三人はすでにかなり上に上がっていた。見張りが空ろな囁き声で彼らに呼びかけた。

「おい、エーミール。聞いているか」。

「聞いている、何だい。騒ぐなよ」。

「お金は頂いたからな。二度も貰わんでくれよ」。

「いや、失せろ、一ちゃんと見張れ」。

「任せておけ、エーミール。マストが折れても[船が沈んでも]、静かに見張るよ」。

彼は薄暗い一帯に消えた。

61

パーゲルは賭けに失敗する

ヴォルフガング・パーゲルはすでに賭博室に座っていた。

不思議な具合に、五分五分の豹が大きな総額と賭博チップとを交換したという知らせが、控えの間から猛鳥のようなクルーピエ[仕切人]と二人の助手に伝達され、彼のためにテーブルの先頭近くの座席が用意された。そのときパーゲルは単に自分の金の四分の一を例の悲しげに見える巡査の許で交換したのであった。紙幣の残りを彼は急いで無造作にポケットに詰め戻して、片手で上着のポケットにある象牙の冷たいチップをいじりながら入室した。かすかに快適な乾いた音を立てて賭博チップはこすれていた。

この物音で早速賭博台のイメージが浮かんで来た。いくらかぞんざいに広げられた緑色のクロスが平らに刺繍された黄色の数字と共に電灯の下にあって、この明かりは周囲でどのような物音がしても賭博台に常に格別静かな白い印象を与えており、一そして今や円盤が微かに呻って回る間に、玉がカタカタ、コトコト転がるのである。

深い、解放されたかのような呼吸をして、ヴォルフガングは空気を吸った。

賭博室はすでに一杯であった。椅子に座っている者達の背後には、始まったばかりの時間であったが、すでにまた二列の賭博人達が密に立っていた。ヴォルフガングはこうした青白い緊張した顔には、単におぼろな印象しか受けなかった。

クルーピエの一人の助手が彼を案内し、一今まで味わったことのない好意で、一彼のために用意した空席へ連れて行った。

パーゲルがある女性の側を通り過ぎるとき、彼は突然ほとんど圧倒されるような強い彼女の香水を嗅いだ。奇妙に馴染みに思える匂いであった。彼は今、賭博のことを考えていたかった。しかし彼は苛立ったことに、自分がまことに集中していないと分かった。彼の脳はただ香水の名前を知りたがっていた。ウビガンとかミルフルール、パチュリ、アンブラ、ミスティクム、ユホテンといった多くの単語が彼の頭の中を過った。彼は腰掛けたとき初めて、自分はこの香水の名前を多分知らない、自分にそれが馴染みに思えたのは、それが敵の女、外貨妖婦の香水だからだと思い当たった。この女が彼に微笑を向けたのを今思い出していた。

さてパーゲルは座った。しかしまだ周囲や賭博台に何の視線も向けていなかった。ゆっくりと丁寧に彼はルッターとヴェーグナー亭で求めたラッキー・ストライクの小箱と、マ

チップ箱、銀製の煙草ホルダーを自分の手前に置いた。ホルダーは指輪でもって小さな指の上に支える一種の小フォークであって、指が黄色にならないようにするためのものである。それから彼は三十枚のチップを数え、五つの塊にして手前に置いた。彼はポケットに大量の更なるチップを持っていた。相変わらず見上げずに、彼はそれらと戯れていて、その乾いたカタカタ言う音を、全く抵抗なく彼の中に侵入してくる美しい音楽のように楽しんでいた。それから突然 — 決心が思いがけず彼の中で生じ、最初の稲光が雷雲の空を走り、

— 突然彼は握られるだけのチップを手一杯に握り、二十二の数字に賭けた。

クルーピエの素早い、暗い視線が、彼に注がれ、玉がカラカラ、無限に転がり、 — そして鋭い声が響いた、「二十一、 — 奇数、 — 赤、...」。

ひょっとして勘違いしたかとパーゲルは考えた。奇妙な解放感があった。ひょっとしたらペートラは今ようやく二十一歳かもしれない。

突然彼は機嫌良くなった。彼の放心は消えていた。残念な思いはなく、クルーピエのレーキが彼の賭けをかき寄せるのを見ていて、それが消えた、 — そして、自分はこのペートラの年齢を犠牲としたチップで、彼女から自由になったかのような、今や、彼女に何の遠慮もせず、好きに賭けていいかのような、おぼろな予感がした。弱く彼は、彼を注意深く見つめていたクルーピエに向かって微笑した。クルーピエはこの微笑に答えた、ほとんど気付かれぬ具合で、剛毛の髭の下の唇はほとんど動かなかった。

パーゲルは周りを見た。

テーブルの反対側、彼の丁度向かい側には、中年の紳士が座っていた。顔は鋭く彫られていて、横顔の鼻はナイフの刃のように思われ、その先端は鋭く尖っていた。動かぬ顔は恐ろしく青白かった。一方の目には片眼鏡があって、もう一方の目は多分麻痺した瞼がゆるく掛かっていた。この紳士はチップの山全体を手前に置いていた。紙幣の小包もあった。

クルーピエが叫び、この紳士は長く、薄く、手入れの行き届いた手のその指先を曲げて、素早くチップとお金を掴んだ。その手は賭けをすべての数全体に振り分けた。そしてパーゲルは素早く軽蔑して見守った。この自制した顔の青白い紳士は完全に頭がいかれている。彼は自らに反して賭けていて、同時に零と数字に賭け、偶数と奇数に賭けている。

「十一、 — 奇数、第一ダース[1から12]」とクルーピエは叫んだ。

またしても赤だ。

パーゲルは今度は黒となるであろうと確信した。素早く決心して彼はすべての三十枚のチップを黒に賭け、待った。

それは無限に長く続いた。誰かが最後に自分の賭けを撤回して、それからまた元に戻した。ヴォルフは深い、致命的不快感を感じた。すべては余りにゆっくりしている。自分の人生を一年前から満たして来たこの賭け全体が彼には突然白痴的なものに見えた。人々は周りに子供のように座っていて、息も吐かず、一つの玉が穴に落ちるのを待っている。

— 勿論玉は穴に落ちる。ある穴であれ、別の穴であれ、同じことだ。玉は走り、カタカタ転る、いや走るのを止めてしまえばいい、まず落ちて済んでしまえばいい。向かいの片眼鏡の男は意地悪く企んで輝いている、緑のクロスは何か引き寄せるものを持っている、自分は金をすってしまいたい。このような賭けを必死に求めたとは馬鹿げたことだ。

パーゲルは自分の金を失った。クルーピエのレーキの下、三十枚のチップが消えた。「十七」と叫ばれた。十七か、全く素晴らしい数字だ。「十七と四」[トランプ]はこの馬鹿な

賭けよりもまだはるかにました。「十七と四」のためには少しばかり分別が必要だ。ここでは単に座っていて、自分の判決を待つだけだ。この世で最も愚かなもの、 — 何か奴隷向きのものだ。

一気にパーゲルは立ち上がって、自分の背後に立っている者達の間を押し分けて行き、煙草に火を点けた。壁際に参加せずに立っていたフォン・シュトゥットマン中尉は素早く彼の顔に視線を向けて尋ねた、「それで、もう終わったのか」。

「そうです」とパーゲルは不機嫌に言った。

「どんな具合だった」。

「普通です」。彼は勢いよく吸った、そして尋ねた、「行きましようか」。

「いいよ。私はこんな営みは見たくも聞きたくもない。 — すぐにフォン・ブラックヴィッツ殿を連れだそう。ちっとだけ面白半分に覗きたいと言っていた、...」。

「面白半分にですか。 — ではここで待っています」。

シュトゥットマンは賭博人の間を押し分けて行った。パーゲルは壁際の席に腰掛けた。彼は弛緩し疲れていた。自分がずっと願っていた晩、好きなだけ賭けることが出来るような資金を持った晩は、こんな風に過ぎたわけだ。物事は決して波長が合わない。好きなだけ賭けられるような今日、その今日は少しも賭ける気がしない。グラスが欠けるかと思うと、ワインが欠ける、と彼の中で声がした。

それで自分は賭博とは最終的にけりがついた、自分は二度と賭博を欲しないだろう、と彼は感じた。かくて自分は明日早朝、安んじて騎兵隊長と一緒に田舎へ行ける、多分一種の奴隷代官として、 — 自分はここベルリンに何の未練もない、何のチャンスも残っていない。あれを試み、また別のことを試みることができよう。すべては同じように意味がない。人生がある者の手の下、散って行く様を見ていると物思いに誘われる。さながら自らが無意味と化して、空になって行くようだ、(丁度ますますせわしく流れ去る奔流のお金が無意味と化して、空になって行くようなものだ)。短い一日のうちに、母とペートルが、いや、ペートルも、失われた。その上、賭博も失われた、...。盛大に無内容となった、この件も。...まことに次の市電に乗って、橋から飛び降りても同じことかもしれない。 — 他のすべてのこと同様に、意味深く、また無意味だ。

あくびしながら、彼は新しい煙草に火を点けた。

外貨妖婦はただその時を待っていたように見えた。この女性は彼に近寄った。「私にも一本くださいな」。

無言でパーゲルは小箱を彼女に差し出した。

「イギリス製か。駄目。私にはこたえる。重すぎる。他の煙草はないの」。

パーゲルは頭を振って、弱く微笑した。

「他のを吸えばいいのに。それにはアヘンがあるのよ」。

「アヘンはコカインよりました」とパーゲルは挑発的に言って、彼女の鼻を観察した。彼女は今日はまださほど吸引していないように見えた。鼻は白くない。勿論おしろいは考えられ、当然鼻におしろいが塗られていた。...彼は平静な好奇心を抱いて、具体的に彼女を見つめた。

「コカインだなんて。 — 私がコカインを吸うと思ったのでしょうか」。

古くからの敵意めいたもので、彼女の声は鋭くなった。もっとも今は彼に取り入ろうと

全力で取りかかっていた。実際彼女は結構に見えた。彼女は大柄で、細身で、深いネックラインの服の胸は、小さく引き締まって見えた。ただこの女性は邪悪であることを忘れてはならない。吝で、貪欲で、喧嘩好きで、コカインを吸い、冷淡である。邪悪の権化。
ー ペーターは邪悪ではなかった、いや、ペートラも邪悪だったか。しかし自分はそうと気付かなかった。彼女はそうだと自分が気付くまで、彼女は長く邪悪さを隠し通して来た。いや、ペートラとも終わった。

「それでは貴女はコカインを吸わないのか。吸うと思っていた」と彼は無関心に外貨妖婦に向かって言って、シュトゥットマンを探して見回した。彼は去りたかった。この体格の良い雌牛は彼にとって死ぬほど退屈であった。

「ほんの時たまよ」と彼女は認めた、「ひどく疲れている時にね。ピラミドン飲むのと変わらない。そう思わない。ピラミドンでも身の破滅よ。一日二十個のピラミドン飲む女友達がいるけど。その女はね、...」。

「もういい」とパーゲルは言った、「その話しに興味はない。少し賭けに行ったらどうだい」。

しかし彼女はそう簡単に撤退しない。それに少しも侮辱を感じていなかった。彼女が侮辱を感じるのは、自分が少しも相手にされないときであった。

「貴方の賭けはもう終わったの」と彼女は尋ねた。「その通り」と彼は言った、「外貨はもう要らない。完全に破産だ」。

「小者の遊び人」と彼女は馬鹿笑いをした。

彼は彼女を見つめた。彼女は彼の言葉を信用していなかった。彼女は彼の財布の中身について何か耳にしていた。そうでなければ、軍服を着たちんけな若造にかくも時間と愛想を傾注することはないであろう。彼女はただ燕尾服の伊達紳士のみを相手にするのだから。

「私に好意を見せてよ」と彼女は突然叫んだ、「一度私のために賭けてみて」。

「一体何のいいことがあるのかね」と彼は苛立って尋ねた。あのシュトゥットマンはいつまでも戻って来ない。自分はこの阿呆女から離れられない。「貴女は私がいなくても賭博は詳しいだろう」。

「貴方は運が良さそうなのよ」。

「かもしれない。しかし賭博はもうしない」。

「まあ、お願い、ー 一度だけ私のために」。

「もう賭けないと言ったろう」。

「本当にもうしないの」。

「しない」。

彼女は笑った。

パーゲルは苛立って言った。「何だその阿呆笑いは。私は二度と賭けないのだ」。

「貴方がー 賭けないなんて。むしろ、...」。

彼女は打ち切って、自分の声に穏やかな説得の調子を加えた、「良い方、私のために一度賭けてよ。ー その後サービスしてやるからさあ、...」。

「ご親切におおきに」とパーゲルは粗野に言った。そして口から吐き出した、「いい加減一人にしてくれ。お引き取り頂きたい、私はもはや賭けない。もう顔を見たくない、ー 反吐が出そうだ」と彼は叫んだ。

彼女は彼を注意深く見つめた、「本当に可愛いわね、若輩さん。こんなに可愛いとは今まで思わなかった、 — いつも賭けのときは鈍い棒鱈のように座っていたのに」。

彼女は世辞を言った、「行こうよ、私のために賭けて。運がつきそう」。

パーゲルは煙草を投げ棄て、彼女の間近に屈み込んだ、「更にもう一言、言ってみろ、腐肉の淫売め、二、三発顔面にお見舞いしてやるからな、...」。

言い難い憤激で彼の全身が震えた。彼女の目は彼の目のすぐ間近にあった。その目は褐色で、 — 今やその目は陶然と湿ってぼんやりしていた。

「ぶってよ」と彼女は陶然と囁いた、「でも私のために賭けて、愛しい人、...」。

彼は一気に振り返って、素早く賭博台に向かった。彼はフォン・シュトゥットマンの肘を掴んだ。素早く呼吸しながら彼は尋ねた、「行きましょう、それとも行かないのですか」。

「騎兵隊長が言うことを聞かないのだ」と同様に興奮してシュトゥットマンが囁き返した、「見てみ給え」。

62

騎兵隊長はパーゲルの弟子となる

騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツは極めて不承不承、夜のベルリンを巡るかつての士官候補生の謎の旅に付き合っていた。すでにルッターとヴェーグナー亭での彼の同席と挑発的なお喋りに、はなはだ嫌悪しながら耐えていて、金を差し出されるという侮辱行為にほとんど許し難い思いを抱いていた。このまことに自堕落で緩い若輩者に対する友、シュトゥットマンの関心を全く不適當なものと思なし、この若輩者が大金を有することを、少なくともいかがわしいことだと思っていた。テールミュンデ前での戦いで、榴弾の破片を取って来るというあの些細な幕間劇は、フォン・シュトゥットマン氏にとって、少しばかり滑稽であっても、しかし確かに、 — その上、このような若造の場合には、 — かなり英雄的な行為に思われたのであったが、フォン・ブラックヴィッツ氏にとっては、滑稽性がどんな英雄性にも勝っていた。 — そしてこのような逸脱行為が出来る性格は、彼にとってただいかがわしく映ずるのであった。

善良な騎兵隊長ヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツは — 彼は単に他人の逸脱行為のみをいかがわしく思って、自分の逸脱行為は完全に好意的に考えていた。ここでの件は、何らかの厭わしい、裸の女がらみではなく、 — これは恐怖である、 — 単に些細な遊び、もっと良く言って、賭けのことであると耳にした瞬間から、この瞬間から、鎧を打たれた靴の両保安警察によるすべての警告が消え去っていた。薄暗い家は、何か招じ入れるように見え、生意気な見張りは、ユーモアに包まれているように見え、士官候補生のパーゲルは、一人の誘惑者、いかがわしい小倅から、本物の奴、世間での経験を積んだ若造となった。

さて騎兵隊長が家庭的小さな控えの間に、余りに沢山掛けられたコート掛けを見ながら立っていると、大きな口髭の紳士がその折り畳み小卓の背後で、「皆さん、チップはいかがです」と尋ね、それに対し騎兵隊長が素早く、詮索的視線で、「軍にいたのか、どこの軍だ」と尋ねて、この大きな口髭の男が踵を打ち合わせて、こう答えた、「畏まりました、ザクセン第十九輜重隊、 — ライプツィヒです」。すると騎兵隊長は極めて上機嫌にな

り、全く居心地良く感じた。

この遊びは禁じられているという思いがこの上機嫌を曇らせることはなかった。澁刺として彼は新式のチップの使用法、価値について教えて貰った。一 彼の昔の時代、単に現金か、せいぜい走り書きの数字のある名刺と引き換えにしか賭博はできなかった。そもそも彼がなお彼の士官候補生を思い出したとしても、極めて好意的に思い出したことだろう。しかしこの若造に対する思いは彼の脳裏に生じなかった。

その代わり彼は賭博と賭博の一行を余りに興味深いと思った。確かに遺憾ながら、この一行は平時の将校カジノの一行と比べたらとても一等クラスとは言えないと断言しなければならなかった。例えば賭博台に一人の太った赤ら顔の男が座っていて、彼は絶えず小声で思わずつぶやき、太くて宝石を嵌めた指で賭け金を仕分けていたが、一 騎兵隊長がこの多くの皺のある脂ぎったうなじを見てみると、疑いもなくこの男は、自分が決して家に入れようと思わないフランクフルト出身の家畜商の兄弟か従兄弟の類いである。ちなみにこの兄弟、つまりフランクフルトの男は、やはり何度か彼を騙していた。敵意を抱いて騎兵隊長はこの太っちょを眺めた。ここでは従って荘園から不当に巻き上げられた儲けが出回っているわけだ、一 こやつは上品に負けることすらできない。明らかに今にも失いかねないという不安が如実で、失うとその度新たに賭け金を出して再度挑戦している。

騎兵隊長にとっては多数の女達もお呼びでなかった。女達は賭博台を取り囲んでいたが、一 女達は彼の見解によれば少しも賭博に向いていないのであった。賭けは純粋に男達向きのものである。単に一人の男のみが沈着さと分別を十分に有していて、賭けで成功を取め得るのである。それに確かに女達はエレガントであったが、しかし彼の趣味にとっては若干余りに逸脱して着衣しているというか、むしろ脱衣している。対の若い胸をある種深く開けられた絹のケースに収めて、すべての視線の検分にさらすこの作法は、彼にとってとても忌まわしい街娼を思い出させた。確かに街娼のような女はここに登場していなかった。しかし街娼が思い出されるのは、けしからん。

快適な見ものもあった。例えば中年の、白い肌の殿方で、奇妙に鋭く尖った鼻で、片眼鏡を付けている、一 この紳士が賭ける所、この紳士が座っている所、この紳士が客人となっている所、そこにフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長も腰掛けることができた。

騎兵隊長がすぐ隣りに座っている士官候補生パーゲルにそもそも気付かなかったのは彼らしいことである。彼の普段鋭い目は、みすぼらしい身なりの人物にはほとんど注目しない。

さてルーレットに関しては、一 騎兵隊長は丁重に感謝しながら、彼のために見たところ進んで、勿論上層部の合図で空けられた椅子に腰掛けたが、一 さてルーレットに関しては、これに馴染むのは難しかった。驚くほど多くの数の可能性があった、一 その上まさに不似合いな素早さで賭けがなされていた。騎兵隊長は、どのように張り込み[賭け金]が配置されたのかほとんど理解できないうちに、すでに円盤は呻り、玉は走り、クルーピエは叫び、こちらではチップの雨が降り、向こうでは干上がって、終わり、更に進み、賭けられ、回転し、走り、呻り、叫び声が上がった、一 よく分からん。

騎兵隊長自身のルーレットの経験は、はるか少尉時代の昔のことであった。当時もまことにわずかではあったが存在し、賭けはせいぜい三回か四回なされるのみであった。それは格別厳格に禁じられていたからであり、他のすべてのギャンブルよりも厳格な禁止で、

特別危険なものに見なされていた。元来若い将校達は当時単にギャンブル、つまり「コーンへの神の恵み」[トランプ]と呼ばれるものを知っているだけであった。これは比較的安安全と見なされていた。しかしいずれにせよ、当時はまだ未婚の若い少尉の騎兵隊長にとって、それは危険なものとなってしまう、それで彼は乱痴気の夜の後、大慌てで父親の許、つまり將軍の称号で更に熱血漢であったろう父親の許に旅しなければならず、そこで彼は三十分、憤激の発作、廃嫡、勘当の経験をした後、結局兩人は――大いに涙を流した後、――ある闇の紳士の許で、一連の為替に署名をして、代わりに大金を得て、それで賭けの借金をかろうじて返済できたのであった。この時以来、騎兵隊長は二度と賭けをしなかった。

かくて彼は今や混乱して緑色のテーブルの前に座っていて、数字を見つめ、銘を見つめ、こっそりとポケットのチップを探っていて、――始めたかったのであるが、どう始めていいか分からないでいた。

しかしフォン・シュトゥットマンに、「おや、ブラックヴィッツ、本当に賭けるつもりか」と尋ねられると、苛立って答えた、「君はしないのか。何のためにチップに変えたのだ」と。

そして彼は赤に賭けた。

勿論赤となった。彼がまだ良く分からないうちに、小塊のチップが彼のチップに乾いた音立てて落ちて来た。羽を逆立てた秃鷹のように無愛想に見える奴が何か叫び、再び賭けの円盤が回った。騎兵隊長を何に賭けようか決心できないでいた、――するとまた決定が下された。

再び赤となった。今や彼はチップの一山全体を得ていた。

彼はそれらを引き寄せ、目を覚ましたかのように、周りを見回した。賭博台の最良の男は相変わらず片眼鏡の紳士であった。騎兵隊長はその長くて、薄い、少しばかり上向きに曲がった指を見つめていた。その指は信じられぬ速さで、チップの小さな山を、様々な数字の上と、その数字の枠地の枠交点上に分配していた。そして騎兵隊長は長く考えることなく、この紳士の真似をして、数字の上に置き、数字の枠地の枠交点の上に置いた。その際、一片の騎士道精神で（この紳士の邪魔をしないよう）かの紳士の置いた枠地を避けた。

再びクルーピエが何か叫び、再びチップが彼によって置かれ、そして他の小山がレーキの下、消え、テーブルの端の袋の中にかすかにカタカタ音立てて落ちた。

この時から騎兵隊長は魅入られたかのようにになった。玉の回転、クルーピエの叫び声、数字や銘や正方形、長方形の描かれた緑色のクロス、そこに絶えず新たに多彩なチップが整列する、――こうしたこと一切に彼は魅了された。彼は自分を忘れ、時と、自分の座している空間を忘れた。彼はもはやシュトゥットマンを思い出さず、いかがわしい士官候補生パーゲルを思い出さなかった。もはやノイローエは消えた。彼は素早くしなければならぬ、目は、手よりも更に速く、チップを投入すべき空いた枠地を見つけ出さなければならぬ。急いで勝ち分を取り寄せ、何をそのままにしておくべきか決定しなければならない。

一瞬、騎兵隊長は、驚いて気付いたのだが、全くチップがなくなってしまうと、不愉快な間が生じた。苛立って彼は自分の上着のポケットをあちこち探った。苛立ったのは、この時、賭けを流さなければならなかったからである。もはやチップがないということで、

損をしたのだという思いが生じたわけではなく、ただ中断が面白くなかったのである。有り難いことに彼は観察されていることが判明した。クルーピエの一人の助手がすでに彼のために更なるチップを用意していた。ここで自分は金を、それも携帯しているほぼすべての有り金を差し出しているという考えをそもそも毛頭抱かず、彼は財布から紙幣を出し、それで象牙のチップを購入した。

この思わぬ苛立たしい中断のすぐ直後、丁度騎兵隊長が賭けに没頭しているとき、突然フォン・シュトゥットマンが現れ、この賭けている男の肩越しに、パーゲルが今やれやれ終わって、帰ろうとしていると囁いたのである。

まことに苛ついて、騎兵隊長は、若いパーゲルと自分が一体何の関係があるかと問い返した。自分はここに申し分なく座っていて、早々に家に帰る気はない、と。

全く驚いてフォン・シュトゥットマンは再び問い返した。騎兵隊長は本当に賭ける気なのか、と。

フォン・ブラックヴィッツは — ほとんど確かなこととして、 — 数字十三、十四、十六、十七の枠交点上のかの一塊のチップは、今まさに勝ったばかりであるが、それは自分が置いたものであるという見解であったが、 — 一人の真珠の指輪を嵌めた女性の手がそれに伸びてきて、その一塊を持ち去った。フォン・ブラックヴィッツは、彼を落ちていて観察しながら見つめていたクルーピエの視線に出会った。はなはだ苛ついて、彼はシュトゥットマンに頼んだ、いい加減出て行って、自分をほっといてくれ、と。

シュトゥットマンは答えなかった。そして騎兵隊長は更に賭け続けた。しかし賭けに集中することができず、振り返らずとも、シュトゥットマンが自分の背に立っていて、自分の賭けを見守っていると感じていた。

彼は一気に振り向いて、鋭く言った、「中尉殿、貴方は私の子守娘ではあるまい」。

戦争時代からの古い序列を再び露わにするこの言葉は効き目があった。シュトゥットマンは全く軽い、お詫びのお辞儀をして、引き返した。

騎兵隊長が大きく息をして、緑色のクロスを振り返ってみると、その間に彼のチップの最後の分も消えたのが見えた。彼はクルーピエに苛立った視線を向けた。剛毛の口髭の中で、忍び笑いをしているかのように思われた。フォン・ブラックヴィッツは、二重に閉ざされて確保されていた財布の奥の部分を開けて、七十ドル引き出した。 — 外貨でなおも有する一切であった。クルーピエの助手が目にも留まらぬ早業で、彼の前にチップの山また山を積み上げた。騎兵隊長は、数えることも省いて、素早くそれらをポケットに仕舞った。一瞬彼は、多くの顔が彼を調べるように見つめているのに気付いて、自分は何をしているのかという漠とした感情を抱いた。

しかしそれは、意味内容というよりも、むしろ彼の中で響いた表面の言葉であった。多くのチップを得て安心し、満足感で充たされた。彼は、この阿呆な、永遠に心配症のシュトゥットマンと好意的に考えて、ほとんど微笑して椅子で姿勢を正し、再び賭け始めた。

しかしこの上機嫌は長く続かなかった。張り込むたびに賭け金がクルーピエのレーキの下、消えてゆくのをますます苛ついて見守った。勝ったチップが乾いた音立てて、自分の置いた枠地に落下するのを耳にすることはもはやほとんどなくなった。ますます頻繁に彼は、もう膨らんでいないポケットに手を入れなければならなかった。彼を苛立たせたのはそれでもまだ損失の思いではなく、賭けの途方もなく迅速な経過であった。...自分は立ち

上がり、このほとんどまだ味わってもいない享受を諦めなければならない時が間近に到来しているのを察知していた。張り込みの数が多いと勝ちの見込みも増すに違いないと彼は考えた、――ますます迅速に、彼はチップを全粋地に分配した。

「そんな賭け方をするものではありません」と真面目な声が彼の横で不同意を示して言った。

「何だと」と騎兵隊長は飛び上がって、若きパーゲルを怒って見つめた。パーゲルは彼の横の椅子に腰掛けていた。

ここでは若きパーゲルは、覚束なく当惑していることはなかった。「いや、そんな賭け方はするものではありません」と彼はもう一度言った、「貴方の賭け方は自分に逆らっています」。

「私の仕方だと」と騎兵隊長は言って、怒って、若造に対し、丁度先ほどのフォン・シュトゥットマンに対するように、存分に文句を言おうと思った。しかし驚いたことに、普段いつも機を窺っている怒りの代わりに、自分が阿呆な子供のように振る舞ったかのような気後れに襲われた。

「赤と黒とに同時に賭けましたら、勝ちは得られません」とパーゲルは非難して言った、「赤が勝つか、黒が勝つかです、――両方ではいけません」。

「私のはどこだ」と騎兵隊長は混乱して尋ね、賭博台の方を見た。しかしそこに丁度クルーピエのレーキが来て、チップは音を立てた。...

「取ってください」とパーゲルは厳しく囁いた、「貴方は運が良かった。あそこのが貴方のです、――そこ、――そこ、――恵み深いご夫人、済みません、それは私どもの張り込みです」。

誰か女性の声の何か興奮して言った。パーゲルはそれに注意していなかった。彼は更に指示した。子供のように騎兵隊長は彼の指示に従った。

「そうですね、――今回は賭けずにおきましょう、――まず賭けの流れを見極めましょう。チップはまだありますか。――それでは大した成果は得られません、待ってください。私が追加を買ってきます。...」

「パーゲル、引き上げるのだろう」とシュトゥットマンの要らざる教師風の声が聞こえた。

「ほんの一時です、フォン・シュトゥットマン殿」とパーゲルは言った。愛想良く微笑していた、「騎兵隊長殿に正しい賭け方を素早くお教えしたいと思います」。

「五十万マルク相当のチップ五十枚、それに百万マルク相当のチップ二十枚を、...」。
シュトゥットマンは絶望の身振りをした。

「本当にほんの一時です」とパーゲルは友好的に言った、「信用してください。そもそも私は賭けは嫌いです。私は賭博人ではありません。ただ騎兵隊長にですよ、...」。

しかしフォン・シュトゥットマンはもはや聞いていなかった。彼は苛立って振り向き、去った。

「注意してください、騎兵隊長殿」とパーゲルは言った、「今度は赤となります」。
彼らは緊張して待っていた。

すると――赤となった。

「今賭けとけば良かったな」と騎兵隊長は嘆いた。

「辛抱です」とパーゲルは慰めた、「兎の走り方をまず見極める必要があります。今回は何ら確かなことは言えません、 — いずれにせよ高い確率で黒となりましょう」。

しかし赤であった。

「御覧なさい」とパーゲルは勝ち誇って言った、「賭けなくて良かったでしょう。間もなく我々も始めます。お分かり頂けることでしょう、 — 十五分もしたら、...」。

クルーピエはこっそり微笑した。フォン・シュトゥットマンは隅にいて、自分がルッターとヴェーグナー亭で若きパーゲルに話しかけたその時[瞬間]を呪っていた。

第八章 夜中の混乱

63

アマンドはハンス君に逃亡するよう説得する

官吏の家のドア前の茂みにヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツは歩哨に立っていた。その事務所の中では、別の娘、アマンド・バックスが潜んでいた所から歩み出た。彼女は兩人、少尉と恵み深いご令嬢が互いにやりとりしたことのすべてを了解したとはとても言えなかった。しかし多くのことが推定された、一 国中を旅していて、人々を何かしら一揆[クーデター]のために集めている少尉について、すでに以前から耳にしていた。そしてその当時、ドイツの国中にある格言が出回っていた。陰気な脅迫的なもので、裏切り者は秘密裁判にかけられる、と。

恋人を一人の裏切り者として考えなければならないのは、楽しいことではない。それにアマンド・バックスはおよそ考えられる限り不屈の一人の庶民であろうが、しかし裏切り者になるとは考えられない女性である。彼女は障害をものともせず、自分の力強く屈することのない性情から、愛し、憎んだ。しかし彼女が裏切ることはない。それ故、彼女は彼について承知していることすべてにもかかわらず、自分のハンス君の味方である。彼はまさに単なる一人の男で、男どもは皆、何故か余り感心できない、一 娘は男どもを、ありのまま受け入れざるを得ない。

彼女は素早く彼の部屋へ入って、彼のベッドの側で跪き、眠っている男を力強く揺すった。しかしこの男を揺すって酩酊から起こすのは容易でなかった。アマンドは強力な手段に訴えなければならず、濡れ雑巾も役に立たないと分かると、すぐに決心をして、ただ片手で彼の髪の毛を引っ張り、もう一方の手を用心深く彼の口の上に置いた。彼が大声を出さないようにするためであった。

この治療は実際役立った、一 小さな田畑検査官マイヤーは激しい痛みで目覚めた。彼女があらん限りの力で彼の髪の毛を引っ張り、揺すったからである。人間の性情通りに、特に黒人マイヤー風に、彼はまずは本能的に防御した。黒人マイヤーは彼の口の上にある手を噛んだ。

彼女は自分の叫び声を抑えて、素早く彼の耳に囁いた。「起きな。起きな、ハンス君。私よ、アマンド」。

「分かっている」と彼は憤然とぶつくさ言った、「おまえら女にはうんざりしている。少しも休ませてくれない」。

彼は更に罵りたかった。腫れ上がった頭と髪の毛の痛みとでぐったりしていた。...しかし彼女は外で窺っている女性を恐れて、彼女の手を新たに彼の口の上に置いた。すぐにまた彼が噛みついた。

しかし今や彼女の忍耐も限界であった。彼女は彼の歯から手を引き抜き、殴った、めくら滅法、暗闇の中、当たるに任せて。彼女の思いが彼女を正しく導き、彼女は上手に打った、左右に密に打擲がなされ、一 ここは鼻に違いない、今度は口に、...

その際彼女は呻いた、小声で、息も吐かず、何か柔らかなもの、呻いているものへのこ

の暗闇の打擲で夢中になっていた、「しっかりするのよ。言うことを聞くのよ。さもないと奴等に殺されてしまう」。

(彼女自身がこの方策の思案中であった)。

息も吐かず、ほとんど完全に酔いが醒めて、臆病になり、反撃もせず、一 小マイヤーは今や請うた、「いや、マンデーケン、我がマントヘン、おまえの言うように何でもするよ。しかし今は止めてくれ、...いや、ちょっと注意して、...」。

喘ぎながら、胸を震わせて、彼女は止めた、「言う通りにしなさいよ、このド阿呆」と彼女は優しく怒って、呻いた、「少尉がこちらに来たのよ」。

「ここにか」と彼は愚鈍に聞いた。

「ここよ、この部屋。何か探していた、一 あなたの上着から一通の手紙を抜き取った」。

「手紙か、...」。彼はまだすべてを呑み込めてはいなかった。しかしゆっくりと、まだ完全に明らかではなかったが、思い出した、「ああ、あれか」と彼は軽蔑して言った、「あの紙くずなら構わない」。

「でもハンス君、しっかりしなさい、よく考えるのよ」と彼女は頼んだ、「あなたは何かまずいことをしたのよ、一 少尉はあなたに怒っていた、彼はまた来るそうよ、一 今夜にも」。

「来ればいいさ」と彼は、有り難くないという思いが忍び込んで来たが、法螺を吹いた、「猿公は始末できる、彼とかフォン・ブラックヴィッツ御令嬢とか、...」。

「でもハンス君、御令嬢もここに来たのよ。彼女も一緒に手紙を探していた、...」。

「ヴァイオもか、恵み深いご令嬢、一 我が雇い主の御令嬢も。私の部屋に。私が酔っ払って、裸でベッドに寝ている時に。オー、ヴァイ[嫌]、オー、ヴァイ[嫌]、オー、ヴァイオ」。

「そうよ、一 そして今あなたの窓の前で番をしている。あなたが逃げ出さないように」。

「私が逃げるだと」と彼は自慢げに言った。しかし思わず声を落とした。「奴等は私に逃げて欲しいのかもしれない。二人の考えそうなことだ。しかし、いや、私は残るぞ。私は明日早朝、騎兵隊長の許に行って、あのご立派な少尉と一緒に彼女のことをばらしてやる、...」。

「ハンス君、馬鹿なことは止して。少尉はまた来るつもりよ、今夜にも。きっと明日騎兵隊長の許に行かせないつもりよ、...」。

「奴が何をするというのか。私を縛り付けることはできまい」。

「縛り付けることはできないけど」。

「それで私が騎兵隊長に手紙のことを話してみろ」。

「そんな間抜けな手紙のことは忘れなさい。もう持ってもいないのだから。少尉のものよ」。「しかしクニープッシュが証人だ、...」。

「阿呆な、ハンス君、全部阿呆。森林官クニープッシュが恵み深いご令嬢の不利になるような証言をすると思うなんて」。

小マイヤーは一瞬黙った。彼は実際考え込み始めた。それからより小声な声で言った、「しかし奴は私に何の手出しもできない。彼自身やばいことを持っているのだから」。

「ハンス君、まさにそのせいよ。やばいことを持っているから。あなたは危ないのよ。あなたがばらすと恐れているのよ、...」。

「私が何をばらすのだ。あんな間抜けな手紙のことは口にしない、...」。

「手紙だけのことじゃないのよ、ハンス君」と彼女は絶望して叫んだ、別な件よ、一揆[クーデター]」。

「一体何の一揆[クーデター]だ」と彼は呆気にとられて尋ねた。

「いやね、ハンス君、しらばっくれて。私の前でそんな振りをしないで。あんたらがしようとしている一揆[クーデター]、それをあなたがばらすと恐れているのよ」。

「しかしそんな馬鹿な一揆[クーデター]のことは何も知らないぞ、マントヘン」とマイヤーは大声を出した、「誓ってもいい、マントヘン。仲間が何を計画しているか、さっぱり分からん」。

彼女は一瞬考え込んだ。ほぼ彼を信じそうになった。しかしそれからまた自分の思いを確信した、つまり彼がどう話そうと関係なくて、彼には危機が迫っており、それ故すぐに逃げなければならないのだ、と。

「ハンス君」と彼女はそれ故真剣に言った、「あなたが本当に知っているかどうか関係ないのよ。彼はあなたが何か知っていると考えているの。そして裏切るつもりだろうと。それに手紙のことであなたに怒っているし。あなたに何かするつもりよ。私の言うことを信じなさい」。

「私に対し何ができるかね」と彼は弱々しく言った。

「まあ、ハンス君、そんなこと言って。この頃新聞に載っていたでしょう。画像もあって、皆が白いフードを被っていて、顔が分からないようにして、裁判を行っていた。その下にはこう書かれていた。秘密裁判、裏切り者は秘密裁判にかけられる、と。ハンス君、そういうわけよ」。

「しかし私は裏切り者ではない」と彼は言った。しかし単に何か言うために言ったにすぎず、確たる確信があったわけではない。

彼女はもはやそれには言及しなかった。「ハンス君」と彼女は頼んだ、「どうして逃げようとししないの。あの人は今、村へ、集会に行っています。ご令嬢の方は私が窓前から連れ出します。今なら逃げられるわ、 — どうしてそうしないの。私もあなたには含むところがあって、諸手を挙げて残って欲しいわけじゃないのよ、今日はハルティヒ夫人と関係したのだからね」（彼女は自制できずに、そのことに触れてしまった、しかしすでに悔いていた）「それにね、明日は騎兵隊長が戻って来るのよ。あなたは隊長の留守に、ただまずいことをして、仕事時間に居酒屋で酔っ払っていてさ — どうしてさっさと出て行かないの、隊長はあなたを放り出すのに」。

「私は一文も金がない」と彼は不機嫌に言った、「どこに行けばいいのだ」。

「それで考えたの、どこかの村の、グリュノーー辺りの、居酒屋に行ったらどう。 — あそこには良い居酒屋があって、ダンスをしていた頃から私知っている。それで日曜日暇になったら、私が向こうのあなたの所に訪ねて行きます。私にはまだ少しばかり金があるから、持って行きましょう。それからゆっくり新しい仕事を探せばいい。新聞にはいつも職が載っているし、しかし余りに間近でない所で、...」。

「日曜日、グリュノーーか、置いてけぼりになるかもしれないのか」と彼は不平を言っ

た。「金を待ちぼうけするのか」。

「まあ、ハンス君、そんな泣き言は言わない。私にその気がなかったら、そんな提案はしないでしょう。分かった、行くわよね」。

「突然、急に私から離れようとしているな、 — 誰か見つけたのか」。

「やましいところがあって、わざと嫉妬しているのでしょうか、 — 少しも嫉妬していないくせに」。

彼はしばらく黙っていたが、それから尋ねた、「幾ら金を持っているのだ」。

「あら、沢山じゃないわ。インフレのせいで。でもこれから先貢ぐわよ。恵み深い奥方に実質払いをお願いします、 — ビルンバウムではお給料をライ麦で貰っているそうよ」。

「おまえがライ麦の給料か。老奥方はそんなことは考えていない。いつも阿呆なことを考えるなあ」。彼は軽蔑して笑った。再び少しばかり上位に立つ必要を感じていた。「いいかい、マントヘン。今からすぐ出て、お金を取ってくるのだ。金がなければ、居酒屋にもおれなだらう。それにヴァイオ嬢もすぐに連れ去れ。荷物をまとめなきゃいけない。暗闇じゃできんだらう。しかし何だ」と彼は突然叫んだ、「二個の重たいスーツケースを持って、グリーンノーまで引きずって行くのか。 — よくもそんなくだらんことを思い付くな」。

「いやね、ハンス君」と彼女は彼を慰めた、「あなたが無事に逃げられさえしたら、有り難いことよ。いつもそう考えてね。私もしばらく持つわよ。私はもう寝たいとは思わない。朝、頭から足先まで冷たい水を浴びたら、どんなにさっぱりするか分かる？」

「まあな」と彼は不機嫌に言った、「おまえはさっぱりすること、これが肝要なのだ。で、出て行くのか、行かないのか」。

「今、行くわよ。でもちょっとだけ時間がかかるわ。まずご令嬢を連れ去らなければならないし。そうでしょう、ハンス君。あなたも少し急がなきゃ。いつ少尉が戻って来るか分からないのよ」。

「何だ、奴か」と黒人マイヤーは軽蔑して言った、「奴の思い通りに行くものか。集会がどれほどかかると思っているのだ。少なくとも二、三時間かかるぞ。百姓どもが簡単に納得するものか」。

「では、急いで、ハンス君」と彼女は今一度彼に注意した、「私も超急いで戻るから。 — 接吻して、ハンス君」。

「やめろよ」と彼は苛立って言った、「おまえはただ抱き合うことだけ考えている。こちらは死ぬか生きるかなのだ。しかし女どもはそうだ。いつもただ所謂恋愛だけを考えている、 — くだらん」。

「あら、お馬鹿さん」と彼女は言って、彼の髪をむしった。しかし今回は優しくかった。「私は、あなたがここから去りさえしたら、嬉しいのよ。ようやくまたちゃんと働ける。誰かに惚れやしないか、しょっちゅう覗いたり、考えたりして、全く馬鹿げている。...結局あなたって何よ。何でもありやしない。 — 私が知らないとでも思っているの。でも知っているからといって、何も変わりやしない。人生は全く猿芝居、あなたは定めし最大の猿[エテ]公、...」。

そう言って、彼女は彼に一つ接吻を押し付けた。彼が好もうと、好むまいと構わない。

そして部屋から出て行った。ほとんど威勢良く、ほとんど満足していた。

64

少尉はマイヤー氏を訪ねる

アマダが恵み深いご令嬢を本当にその歩哨所から連れ去るか、田畑検査官は長く待つことはしなかった。彼はただ窓から月光を一瞥すると、誰もいないのを見て、明かりのスイッチを入れた。すべての想像力欠如の人間のように、彼は差し迫った危機をイメージできなかった。今までいつもその生涯で万事うまく切り抜けてきた。厚顔のまま、今回もまた上手く行くであろう。

元来、まずはともあれ年金生活という展望は少しも悪くなかった。一 それに未来に関して、突如様々な案さえ浮かんだ。少尉のお蔭で色々考えるわい。彼は今晚、ここからあばよとする前に、若干整理しなければならない、極めて迅速にだ。しかしこれがまたすんなり行かない。とにかくまだ頭が鈍くて、働かない。それにワイシャツ、襟、ネクタイといった町向きの服の身繕いはとても手間がかかる。マイヤーは自分に震えがあると確信した。「エーテルのせいだ」と彼は決めた、「酒を飲んでもこんな震えはこなかった、ええ糞」。

溜め息を吐きながら、彼は荷物をまとめた。荒れて散れた部屋から自分の七つの一切切を取り出して、汚れて乱れた状態のまま二個のスーツケースに押し込むのは一仕事であった。一度は入ったもので、ここノイローエで求めたものは何もない、従ってまた入るわけだ。圧力をかけ、抑えつけ、締め上げて、結局やり遂げ、一 深く息をしながら、スーツケースを閉め、革紐で結んだ。一 この代物を広げて、洗うことになる次の娘にとっては笑い事ではない。

(幾らお金をマントヘンは持って来るだろうか。有能な娘だ、少しばかり自慢たらしい。しかしそれ以外は全くよろしい。いや、沢山の金を持って来やしない。沢山の金は荷車で運ぶことになるから、一 しかしないよりはまし、足しになる)。

小さなマイヤーは自分がソックスのまま部屋に立っているのに気付いて、忌々しく呪った、一 靴はすでにスーツケースの中だ。ドジを踏んだ。身繕いの最後に長靴を履く習慣であったので、靴のことを考えていなかった。勿論町向きの服には先の尖った短靴、つまり赤っぽいタンゴ用靴を履く。しかしどのスーツケースに靴を入れたか。一瞬彼は軽く思案した。すると開けられた最初のスーツケースから長靴が見えた、一 いずれにせよグリュノーまでの道を二個のスーツケースを手で提げて行くのはかなりの遠さだ、それでタンゴ用靴はかなり窮屈だ。しかしグリュノーの娘の前で、町向き服と長靴姿の与える印象を考えると、短靴に決めざるを得ない。

勿論、短靴はようやく二番目のスーツケースで見つかった。彼はかなり窮屈な思いで履いた。歩いて行くうちに広がるだろうと彼は慰めた。

これが完成すると、黒人マイヤーは事務所へ行軍した。引き出しやファイルから彼は自分の書類を探し出した。失業年金保険にすぐともあれ半年前倒しして契約した。この小屋には十分印紙がある。この証書が後で無効になっても、何も構わない。

それから彼は慎重に警察への届け出を書いた。ハンス・マイヤー氏は「旅行に出掛ける」

と。莊園管理人のスタンプが下に押された。 — かくてこれも問題ない。

しかし一瞬思案して、念には念を入れよ、という言葉の正しさを思い出して、更にはすぐ二番目の届け出を書いた。その届け出ではマイヤーはシュミットという名前になった。済まん、 — フォン・シュミットだ、ハンス・フォン・シュミット、職業、管理者。同様に、「旅行に出掛ける」。「それで、あほ面よ、私を探せるなら探すがいい」。

マイヤーは極めて満足してにんまりした。自分のたいそうな賢しらに満足して、頭痛と髪のがれが消えた。 — 他の連中より抜け目がなくて、奴等に一杯食わせるのは、素晴らしい。乾杯。

マイヤーはタイプライターの蓋を開けて、ノイローエの莊園管理部の便箋に自分用の証明書をタイプし始めた。勿論彼はすべての役人達の精華であって、何にでも通曉し、何でも能力があり、何でも実行する、 — 更にその上正直で、信頼でき、勤勉である。こうしたことすべてを文書にするのは快適であった。この証書の行間から一人のマイヤー[莊園管理人]が浮かび上げて来た、マイヤーが昵懇になりたいマイヤー、目指したいマイヤー、立派な展望豊かな未来を有する、有能で非の打ち所のないマイヤー、管理職にふさわしい、要するにすべてのマイヤー達の中のマイヤーである。

この証明書は本来余りに立派で、 — 何故このような役人が手放されるのかまことに理解に苦しむことで、終生彼は雇用されなければならないであろう。しかし利口で、賢明で、機知あるマイヤーはこの事態にも対応した。「請負契約からの辞職により」と彼は記入した、 — ほら見ろ、新しい役人が元の役人に問い合わせることはない。請負契約が解消されたのであれば、自分がこれからどこへ行こうと分からない。更にまた莊園管理部のスタンプ、署名。ヨアヒム・フォン・プラックヴィッツ、元騎兵隊長及び騎士領請負人。

— もう一度、署名、確認のために莊園管理人のスタンプ、 — スタンプの類いはいつも結構。これは素晴らしく見える。 — これにはどんな聡い狐も引っかかる。

財布に書類を仕舞った。予備の切手もすぐ入れよう。印紙はいつも必要だ。 — ここにこれらが必要か。金庫には、先に言ったように、大して詰まっていない。法外に沢山ではない。しかし当座には足る。それにマントヘンが勤勉に貢いでくれたら、二、三週間は贅沢に暮らせよう。いや、私の胸はまことに厚く膨らんでいる、右手に書類、左手にお金、胸厚、胸厚でなくちゃな、でかパイは今の流行だ、 — いや、少しもそうじゃない。しかし私に関しては、胸はいつも立派だ。さて金庫を閉めて、明日早朝にはもっと良く見えよう、...」。

「開けときな、若い衆。開けたままに、若造。 — もっと良く見えよう。そうしたら騎兵隊長は明日早朝めざとく悟る」と少尉が戸口から叫んだ。

一瞬マイヤーの顔が歪んだ。しかし本当に一瞬のことであった。「私は自分のしたいようにするだけだ」と彼は厚かましく言って、金庫を閉めた。「ところで貴方は夜ここに用事はないだろう。...先ほどは私の部屋で手紙を盗んで、...」。

「お若いの」と少尉は脅して言って、二歩近寄った。しかしこの噂の厚かましさに若干あきれていた。「お若いの、これが見えないのか」。

「勿論見えている」とマイヤーは述べた。ピストルを見ていかに面白くないか、声を震わせて動ずることはほとんどなかった。「私でもそんな大砲は持ってこれるぞ、引き出しには一杯あるからな。しかし持ち出すまでもあるまいといつも思っている。 — 貴方の

来ることは分かっていた」と彼は若干自慢げに付け加えた。

「そうか、分かっていたか」と少尉は小声で言って、この小さな、醜い、意地悪な人間を注意深く見つめた。

「陰謀家になるつもりなのか、一揆[クーデター]をするつもりなのか」と小マイヤーは嘲って、またすっかり自信を取り戻し、増長した。「一人の娘がずっとこの隣室に立っていたのをご存じなからう。この事務所にな、貴方が私の部屋にいたとき。娘は貴方とヴァイオ嬢の話しをすべて立ち聞きしていたのだ、一 驚いたかい」。

しかし少尉は驚いたようには見えなかった。「そうか」と彼は落ち着いて言った、「それでは一人の娘がここに潜っていたわけだ。で、その娘は今どこにいる。また隣室か」。

「いや」とマイヤーは大胆に言った、「今回は違う。我々は全くの二人っきりだ。だから遠慮はいらない。貴方の許嫁の御令嬢は私の許嫁とまだ少しばかり散歩している。一 だから分かるだろう」と彼は、少尉の明らかな動揺を見て、警告して付け加えた、「私の許嫁が、私の身に何かあったら、明日告げることになる、と。一 それとも我々二人を射殺するかい」と彼は大胆に言って、自分の厚かましさを喜び、笑った。

少尉は椅子に身を投げ、褐色のゲートルの脚を組んで、思案して、煙草に火を点けた。「若造、馬鹿ではないな」と彼は言った、「問題はただ、ずる賢さが過ぎはしないかだ。一 貴方の計画を尋ねていいかな」。

「いいとも」とマイヤーは率直に言った。彼は少尉に、彼には何もしない方がより賢明であると納得させた後、この男とはただもめたくないと言っていると言った。「私はここからずらかる」と彼は述べた、「すでに仕事仕舞いにしたのだ、一 それで、先ほど金庫のところでそれを目撃したろう、...」。彼は少尉を見つめた。しかし少尉はピクリともしなかった。

「自分の金を取ったのは、私の当然の権利だ。まずは給料分を頂いたわけで、その上、このインフレの時に、何という惨めな給料を貰っていたか、分かるだろう。私が少しばかり失敬したからといって、騎兵隊長が私から盗んだ分を考えると、まだまだ足りない」。彼は少尉を挑戦的に、賛同しろと言いたげに見つめた。

しかし少尉はただこう言った、「それには興味はない。一 どこへ行くつもりだ」。

「ほんの少し高飛びだ」とマイヤーは言って、笑った。「ここら一帯は臭いがいただけない。シュレーゲンかメクレンブルク辺りと考えたのだ、...」。

「結構、結構」と少尉は言った、「全く理にかなっている。シュレーゲンは悪くない。しかし差し当たりどこへ行くのか」。

「差し当たりか」。

「そうだ」と少尉は若干苛々して言った、「貴方が明日早朝、皆が貴方を知っているこの郡中心都市から列車で出て行くわけではないと、良く分かった。それで差し当たりどこへ行くのか」。

「差し当たりか、いや、ただ近くの或る村だ」。

「そうか、或る村か。例えばどの村だ」。

「それが貴方に何か関係あるのか」とマイヤーは尋ねた。こう詮索されると、何か秘匿のことが感じられて、彼は全く神経質になった。

「それは少しばかり私と関係があるのだ、若造」と少尉は冷静に答えた。

「何故だい」。

「それはだ、例えば、フォン・ブラックヴィッツ嬢との私の関係を知っている奴がいるとする。シュレーゲンでは誰もそんなことに興味はない。しかしこの近辺では誰かが、この知識を金に換えようと思いつかないでもない」。

「誰もそんなことは思いつかないだろう」とマイヤーは怒った、「いや、私はそんな豚ではない。それは保証する、少尉殿。私は口が堅い。そのような件では信頼できる[名誉の]男だ、私は」。

「それは分かっている」と少尉は動じず言った、「それで、 — その村は何と言うのだ」。

「グリュノーだ」とマイヤーは躊躇いながら言い、少尉がすべて納得しているのに、名前を何故黙っている必要があるか分からないでいた。

「そうか、グリュノーか」と少尉は言った、「何故またグリュノーなのだ。オスターデ近郊のグリュノーのことだろう」。

「それは、私の許嫁が提案したからだ。日曜日私の所へダンスに来ることになったいる」。

「貴方も踊るつもりか。ちょっと長目に滞在するつもりなのか」。

「単に二、三日だ。月曜日には立ち去る、 — オスターデからな。それは信用している、少尉殿」。

「信用できるかな」と少尉は考え込んで言い、立ち上がり、マイヤーが先ほど言及した引き出しの所へ行った。彼はそれを引き出して、中身を覗いた。「二、三のいい銃を持っているな」と彼は保護者然と言った、「マイヤーさん、このようなものは一丁、私なら拝借するだろうに」。

しかしマイヤーは断った、「そんなものが何になる。いや、結構」。

「マイヤーさん、貴方は森を通って行くのだ。ならず者が今は沢山うろうろしている。私なら携帯するぞ、マイヤーさん。銃なしには出歩かない、念には念をだ」。

若い少尉は、 — 今やすっかり雄弁になって、友マイヤーの命を案じていた。

しかしマイヤーは断り続けた、「私には誰も悪させん」と彼は言った、「今まで誰か私に悪さしたことはない。そんな古い代物はただポケットを破るだけだ」。

「私は知らん。好きにしろ」と少尉は突然立腹して言った。ピストルをその戸棚の上に放置していた。

彼は小マイヤーに短く頷いて、「良い晩を」と言い、返事を聞かぬうちに、すでに事務所から出て行った。

「妙なやつ」とマイヤーは言って、戸口を見つめた。少尉は最後までことに奇妙であった。いや、こいつらの仲間は皆そうだ、と彼は自ら慰めてつぶやいた。まずは大きなことを言うが、その裏には何もない。

彼は振り向いて、ピストルを眺めた。

いや、このような代物とは関わらないようにしよう、と彼は決心した。ポケットの中で発砲しかねない。 — マントヘンはどこで引っかかっているのか。調べてみよう。ちょっとの距離、スーツケースを運んでくれると助かる、...

彼は戸口へ行った。

いや、まずはピストルを片付けよう、さもないと、明日早朝物騒に見える。

彼は武器を手にした。そしてまた躊躇っていた。

実際、奴の言う通りだ、と彼の頭の中でひらめいた。武器はいつでも役立つ。

彼は戸口に行って、明かりのスイッチを消し、官吏の家から出た。歩くたびに、尻ポケットでピストルの重さを感じた。

妙に、 — この代物は力の感じを与えてくれる、と彼は考えた。不満ではなかった。

65

マイヤーは発砲する

ただ数歩、田畑検査官マイヤーは歩いただけで、二人の娘がベンチに座っているのが見えた。二人の横には少尉が立っていて、話しかけていた。

足音を聞いて、少尉は顔を上げて、言った、「奴がやって来る」。

二人の娘の近くに彼が立っていて、二人と密談をしていて、その言葉を発したので、こうしたこと一切に小マイヤーは立腹した。近寄りながら苛立って彼は言った、「邪魔なら、また消えるぞ」。

誰も彼の言葉を聞いているようには見えず、誰も答えなかった。

「三人一緒に内緒の密談のようだな」とマイヤーは挑発的に言った。

またしても返事がない。しかし今やヴィオレットが立ち上がり、少尉に向かって、「行きましょうか」と言った。

「構わないぜ」と小マイヤーが苛ついて叫んだ、「彼には、ねえ、行こうとため口言ってもな。皆が承知だ、 — それにまた他の諸々もな」。

驚くほど穏やかに少尉は令嬢の腕を取り、無言で彼女と公園の中へ去った。

マイヤーは嘲笑して浴びせた、「お休み、我が偉いさんよ。安息を祈念申し上げる」。

少尉は振り向いて、アマンダに呼びかけた、「それでは彼に良く言って聞かせるのだ。説教はためになる」。

アマンダは考え込んで頷いた。

イラッとしてマイヤーは彼女に吠えた、「何であの猿[エテ]公に頷くのだ。そもそも奴と何の話しがあるのだ」。

彼女は全く平静に言った、「あなたは、他の男は皆猿だと思っているわね、自分だけは違うと」。

「そうかい。それではおまえの目では、私は猿だな」。

「そうは言ってません」。

「うるせえ。そう言ったばかりではないか」。

「いいえ」、そして長く考え込んだ後、「恵み深いご令嬢の言う通りだ」。

「ヴァイオの言う通りだと。またくだらぬことを言ったのだな。 — あれは月足らずの子供だ」。

「あなたのような人とは関係しない方がいいって」。

「そうか、そう言ったのか」とマイヤーは憤然とむくれた。虚栄心が傷付けられ、怒りの胆汁がほとぼしり出た。ほとんど震えながら彼は言った、「彼女の連れ、あの少尉、

— あの野郎が私よりましだと言うのか。ええ。本当におまえはそう思うのか。あの豚野

郎を。私の事務所で、私の鼻先に銃を突き付けやがって。しかし奴には文句言ってやった。もう一度来てみろ。阿呆な持参金狙いめ。今度は私も銃を持っているからな、 — 私はあの猿公のようにただ脅すだけではない、 — ぶっ放すのだ」。

彼はポケットからピストルを取り出し、それを空中で振り回した。

「狂ったのじゃない」とアマンダは憤然と呼びかけた、「すぐにそれを仕舞いなさい。私の顔にそんなんを向けて、どうぞどうぞ。私が怖がるとでも思っているの」。

彼は彼女の憤然とした軽蔑の悪罵にすくんだ。少し当惑して、勿論まだ全く反抗的に、大地に銃身を向けたピストルを手に、彼は彼女の前に立っていた。

彼女は命じた、「即刻、また家の中へ入って、金庫にお金を戻しなさい。泥棒なんて許せない。私は何でも我慢できます、何を見ても吐かない。でもお金を金庫からくすねるなんて、 — いや、結構。御免です、私に近寄らないで」。

マイヤーは赤くなった、 — 勿論彼女は盗みを見ていない。

「それで、奴が喋ったというのか、あのいかした兄ちゃんが、ええ」と彼は怒って叫んだ、「言うておくれ、それは奴にもおまえにもさらさら関係ないことだ。ただ私が騎兵隊長と話せば済むことだ。私が給料分を取ったからといって、おまえがご意見することはない、分かったか」。

「ハンス」と彼女はより穏やかに言った、「お金をまた金庫に戻しなさい。さもないと私どもの関係はお仕舞いよ。私は耐えられない」。

「我々の関係がどうのって、関係あるか。我々の関係がお仕舞いなら、嬉しいじゃないか。おまえは何様と思っているのだ。私が困るとでも思っているのか。ハルティヒ夫人と今晚一緒に寝たよ、そうハルティヒ夫人だ、ざまあみろ。八人の子持ちの婆さんだが、 — それでもおまえより十倍いいぞ。...痛っ、何する」。

彼女の全力の、全く遠慮のない、したたかな殴打であった。それが彼の顔面に来た、 — マイヤーはしっかりよろめいた。

「豚よ、あなたは」と彼女は息も吐かず言った、「情けない人」。

「私を殴ったな」と彼はまだ全くの小声で言った。痛み之余り、半ば意識がなかった、「私を殴ったな、 — 下っ端の家禽番が、検査官の私を殴ったな。今に見ろ、...」。

彼自身はほとんど何も見えなかった。彼は目が回っていて、月光の中に彼女の姿がぼやけ — 突然また浮かんで来て、...今やっと彼女の姿がはっきり見えた、...この女が私を殴ったのだ。

彼は素早くピストルを持ち上げ、震える指で引き金を引いた。

耐え難い高い射撃音が彼の耳に響いた、...

アマンダの顔が寄って来て、ますます大きくなり、全く彼の間近で、月光の中、白地に黒くなり、...

「あんた」と彼女は囁いた、「ハンス君、私を撃ったわね」。...

そして両者は全く静かになった。双方がただ相手の素早い一息ごとの呼吸を耳にした。長いこと二人はそうして立っていた、...

夙に射撃音は止んでいた。その物音は二人の耳から消え、その代わり、別の、もっと穏やかな物音がした。...二人は木々の梢の微かな風の音を聞いた。...そして奥の馬小屋で、ゆっくりとリングを伝って頭絡鎖の揺れる音がした。

「マンデーケン」と黒人マイヤーは言った、「マンデーケン、...私は、...」。

「お仕舞いよ」と厳しい声で彼女は言った、「完全にお仕舞い」。

彼女は今一度彼を見つめた。

私を撃った、一そしてそれからこの人はマンデーケンと言った、...あたかも新たにこう考えて、彼女の息が奪われたかのようにであった。私に当たっていたら、この人は何と言ったことだろう、と。

明るい色のスカートの縁の下、彼女の逞しい脚がますます急いで交差するのを彼は見ていた、一彼女は走り、駆け、急いで彼から去って行った、...彼女は宮殿への道を曲がった。今や彼は彼女の駆け足を目にしなくなり、ただ彼女の泣き声を耳にするだけになった。抑えた、惨めな哀泣であった、一そしてそれも消えた。...

マイヤーはその後ちょっと立ち止まって、彼女の後を見つめていた。それからまだ手に重く下がっていたピストルを持ち上げ、それを眺めた。彼は安全レバーを押した、一そう、これでピストルは安全だ、もはや事故を起こすことはない、...

うんざりして彼は肩をすくめ、ピストルをズボンのポケットに収め、急いで、スーツケースを取りに事務所に向かった。

66

少尉は急いでいる

少尉とヴァイオは公園のベンチに座っていた。二人は恋人同士のように座っていなかった。一いや、恋人同士のようにであったかもしれないが、しかし喧嘩した恋人同士のように、つまり互いに隔たって、つまり一言も言わず座っていた。

「あんな臆病者の言いなりになるなんて」と彼女は自分の主張の結論として言った、「あなたのことが分からない」。

「勿論、子羊のおまえには分からんだろう」と彼ははなはだ上から目線で答えた、「それでいいのだ。つまり奴も私のことが分からんだろう」。

「あんな奴から逃げて、一今頃自惚れているわ。あの人の臭いはたまらない」。

「奴の近くに行くもんじゃない」と彼は退屈して言った、「近くに行かなければ臭いもしない」。

「フリッツ、止めて、あの人の間近に私が行ったみたいじゃない」と彼女は怒って叫んだ、「フリッツ、言いがかりよ」。

しかしフリッツはもはや返事しなかった。それで二人の間に沈黙が始まった。

銃の発射音で喧嘩の静寂が破られた。少尉は自分の思案から飛び起きた。

「奴が撃ったのだ」と彼は叫んで、駆けた。

「誰が」と彼女は尋ね、返事を貰えず、その後を追った。

月光の中に横たわる公園の緑地の上を二人は駆けた。その高く、湿った草で靴下が濡れた。それから茂みを抜け、小道を横切り、花壇の中を進んだ。小道の端のブナの木で二人はつまづいた。ヴァイオは息も吐かず、喘いで、叫びたかったが、出来なかった。更に駆けなければならなかったからである。

さて、少尉は立ち止まって、彼女に静かにするよう合図した。彼の肩越しに、彼女は、

ライラックとガマズミの灌木の間から覗いた。丁度彼女に見えたのは、泣きながら宮殿へと消える家禽番の姿であった。検査官マイヤーは動かずに、官吏の家の前に立っていた。

「彼女には当たらなかったのだな、やれやれ」と少尉は囁いた。

「何故泣き声を上げているの」。

「恐かったのだ」。

「あの人は牢に入れなきゃ」とヴァイオは強調して言った。

「阿呆なことを言うな、ヴァイオ。そうしたら何でもばらしてしまうぞ。そうして欲しいか」。

「いや、それで」。

「それで今は奴が何をするか見守ることにしよう」。

小さな薄暗い人影が素早く官吏の家へ向かい、二人は茂みの中で力強く閉められるドアの音を耳にした。田畑検査官は消えた。

「今、中に消えたわ」とフォン・ブラックヴィッツ嬢は不満げに言った、「今からは彼に格別丁重にしなければならぬのかしら、パパに告げ口されないように」。

「待っている、ヴァイオ」と少尉はただそう言った。

二人は長く待つこともなかった。三、四分もしないうちに、戸口のドアがまた開いて、小さなマイヤーが出て来た。右手に一個のスーツケースを、左手に一個のスーツケースを持っていた。彼はドアをまた閉めることさえしなかった。その開口部が黒々と覗いていた。

— しかしマイヤーは少しばかり覚束なかったが、しかし精力的なテンポで、農園中庭へ向かい、— 世間へと行軍して行った。

「失せろ」と少尉は囁いた。

「やれやれ」と彼女はほっとした。

「奴に会うことはないだろう、...」と少尉は言って、自分が言った言葉に立腹したかのように突然黙った。

「そう願いたいわ」と彼女は答えた。

「ヴィオレット」としばらくしてから少尉は言った。

「何、フリッツ」。

「ここにちょっとだけ待っていてくれ、いいか。ただ事務所を覗いて来る」。

「何を覗くのよ」。

「いや、ただ、...様子を見にな」。

「何故。どうでもいいじゃない」。

「ちょっとだけだ、済まん。— じゃ、ここにいろ」。

少尉は急いで、向こうの官吏の家へ行った。彼は中に入り、暗い玄関で手探りした後、事務所の明かりを点した。彼は長く見回さなかった、— 一直線に武器のある引き出しに向かった。それは半ば開いていた。しかし少尉はそれで満足することなく、引き出しを完全に開けて、注意深くその中身を眺めた。

いや、九ミリのモーゼル銃がない。彼はまた引き出しを閉めた。慎重に彼は明かりを消して、暗い玄関から、外の月光の中、彼女の許へ出て来た。

「それで、中はどうだったの」とヴィオレットは少し意地悪く尋ねた、「素早く片付けていた？」

「中はどうだかって。 — いや、勿論、豚小屋だ、相変わらず豚小屋だ、そんな具合だ、子羊よ」。

少尉は妙に上機嫌であった。

彼女はすぐにこれを利用した、「ねえ、フリッツ」。

「何だ、ヴィオレット」。

「今日、何をするつもり」。

「何をしたいかって。おまえにキスをすることか。...いいよ、来い」。

彼は彼女の頭を掴んだ。二人はしばらく絡んでいて、最後に彼女は息が上がり、彼の胸元に休んだ。

「ほれ」と少尉は言った、「今度は至急オスターデまで行かなければならん」。

「オスターデまで、まあ、フリッツ。 — 日記を私がつけているか、調べるのじゃなかった」。

「子羊よ、今日は駄目だ。本当に至急行かなければならないのだ。六時にはもうオスターデにな」。

「フリッツ」。

「何だい」。

「駄目なの」。

「いや、 — 今日は完全に駄目だ。しかしまた来る、完全に確実にな。明後日か、ひよっとしたら明日にはもう」。

「まあ、あなたはいつもそう言う。今晚はまたすぐオスターデへだって、一言も言っていないかったのに」。

「本当に行かなければならんのだ。...いいか、ヴィオレット、私の自転車の所まで一緒に行こう。つべこべ言わずにな、子羊よ、...」。

「まあ、フリッツ、...あなたのやり方にはかなわない、...」。

67

クルーパス夫人は彼女の見方を説明する

長いこと、まことに長いことペートラは固まったように座っていた。

病気の敵の女性も長いこと、新たにせわしい発作に襲われるまでの間、静かにぐったりと横たわっていた。およそ能う限りの悪罵を彼女は面と向かってペートラに浴びせた。彼女に唾を吐きながら、邪悪極まる勝ち鬨の声を挙げて、自分がかつて彼女をタクシーから引きずり下ろしたときのことを思い出させていた。「気取った金持ちから離されて、おまえの傘も吹き飛ばされてさ、バーカ」。

機械的にペートラは自分の果たすべきことをしていた。少しばかり水を与え、額に一枚の湿布を置き、口の上にハンカチを置いた。ハンカチは再三、突き返された。相手の女がどんなに叱り、罵ろうと、嘲笑し、傷付けにかかろうと、彼女は関与しなかった。真夜中過ぎの町の一層静かになる物音にももはや構っていなかった。外の町、ここ、中の敵の女性、両方とも彼女には関係なかった。

この上なく見棄てられたという感情とその氷の息吹に彼女は吹き寄せられ、彼女の中の

すべてが凝固した。結局誰もが全く一人っきりだ、 — 他の人々が何をし、言い、企てようと、何も関係ない。個別の一人一人の人間を乗せて、地球はその永遠の時空の間、軌道を描く、いつもただ個々人だけを乗せて。

そのようにペートラは座っていて、考え、夢想していた、ペートラ、未婚のレーディヒ[独身]である。彼女は自分の心に、自分はそのヴォルフに再会しないであろう、仕方ないことだ、これはまさに普通のことであって、自分はこれで満足しなければならないと言いつけさせた。そのように自分は次の日々や週、何度か座って、考え、夢想し言いつけさせることだろう。憧れる恋がたとえ聞く耳を持たないとしても、自分がこのように座って夢想できるといふこと、これにはすでに何か慰めのようなもの、幸せの微かな残滓のようなものが見られる。

それ故ペートラは、或る片手が彼女の肩に置かれて、こう言う声で自分の夢想から覚まされたとき、ほとんど不快であった。「ねえ、務所の姉ちゃん、何か話してよ。私は眠れない。あんたの友達の女が私の髪をむしり取って、頭が痛くてね。いつも自分の仕事のことを考えているんだよ。あんたは何を考えているのだい」。

それは下のベッドの太った、初老の女性であった。先ほど灰鷹[チュウヒ]が襲ったのであった。彼女はペートラの横へ床几の一つ持って来て、その黒っぽい、鼠のような目で観察するように囁いた。ただ一人座って物思いに耽っているのに飽きて、病気の女の方を頭で指していた。「ヤブ蚊の群れのようにこの女は刺しまくる。この女があんたについて言っていたことは本当かい、務所の姉ちゃん」。

咄嗟にペートラは、この女性が自分に話しかけたこと、この長い夜、何か談話があることに満足した。この女性は突然、自分にとって全く不快でなくなった。この女性に十分痛みを与えた病気の女を別に憎むことなく見ていることだけでも不快ではない。

それ故ペートラは全く好意的に答えた、「本当のこともあります、本当でないこともあります」。

女は尋ねた、「しかし街に[男を]拾いにあんたが出たというのは、本当なんだろう」。

「二、三回、...」とペートラは躊躇って始めた。

しかし老婆はすぐに了解した、「そうかい、そうかい、娘さん」と彼女は優しく言った、「私もベルリン育ちだ。私の住まいはフルホト通り。私もこの時代を経験して来た。何という時代だろう、とんでもない時代だったね。世の中とは昵懇だ、ベルリンとも昵懇だ。腹が減ってたまらず、殿方に愛想笑いをしたのだろう、 — だろう」。

ペートラは頷いた。

「それをあの女は街で拾うと言うんだ。そんだけのことで、あんたを密告してさ。あれが密告したんだろう」。

再びペートラは頷いた。

「まあね、 — 妬いているんだよ。鼻を見れば分かる。あの薄い鼻ときたら、絶対容赦しない、他のには何も譲らない。何も気にしなくていいよ、性悪な女は直しようがない。あの鼻は持って生まれたもんだ。 — それであんたは他に何をしていた」。

「靴を売ったり、...」。

「そうかい、それもお馴染みだね。若い娘どもにとっては涙ながらに食べるパンてことになるな。老いぼれの男どもが、その気になって、靴屋を覗いて回るわけで、いつもただ

靴を試してみて、それから若い娘達に靴先で合図する、 — 勿論皆、あんたは承知だな、...」。

「はい、そのような人もいます」とペートラは言った、「そうした人々を相手にします。相手にしない人々もいます。顔で判断します。そんな人にはどの娘も相手しません。中にはもっとひどい人もいて、合図するばかりでなく、その上話しかけるのです、街の街娼でも使わないような言葉を、...それでお断りすると、 — ここの売り子はサービスが悪いと苦情を言うのです。 — 商店主の叱りつける様を見るのが、本当に嬉しいのでしょうか。...言い訳しても役に立たず、あんなに上品そうな殿方があんなひどい言葉を使うなんて信じられないほどです」。

「分かるよ、姉ちゃん」と老婆は宥めて言った。というのは幾多の経験した屈辱が再び思い出されて、ペートラはほとんど熱く話していたからである。「すべて良く承知している。フルホト通りでは別だと思いかい。変わらないね。靴屋はそうでないとしても、菓子屋とかアイスクリーム・パーラーがある。 — いつも泣きを見るのは弱者だ。 — しかし今は靴屋はお仕舞いだらう、今拘置所に入って、それとも出たら、またそこに戻るのかい」。

「靴屋のことはすでに昔のことです」とペートラは伝えた、「すでにほぼ丸一年になります。私は男友達と暮らしていました。丁度今日、いや昨日の正午、私どもは結婚する予定だったのです」。

「何だって」と老婆は不思議がった、「よりによってそのような晴れの日に、あの小さな毒蛙の女がたれ込んで、邪魔したんかい。姉ちゃん、一体どんなつまらぬことをして、ここのブタ箱に入ってしまったのか、話してみなさい。たとえば言えば、前科者の女が玉の輿に乗れると思っている矢先のことじゃないか。話したくなければ、別にいい。騙されたくはないし、それにあんたが嘘を付いたら、私にはすぐ分かる。...」

かくて、ペートラ・レーディヒは、夜の一時と二時の間に、丁度彼女のヴォルフがようやく自分の人生で偉大な「勝利」を獲得したと思っていたとき、彼女にとって文字通り完全に見知らぬ、初老の女性に、自分の希望の崩壊についてのかかなり惨めな話しを、つまり今また生涯で全く一人っきりになって、何故なのか、どうしてなのか、全く良く分かっていない話しをする次第となった。

老婆はそのすべてを全く辛抱強く聞いていた。時に頭で頷き、時に力強く振って、「すべてよくある話しだ」とか「そうかい」とか更にはこう言った、「それは神様に聞いて貰うといいだろうが、神様もここ五年間は忙しすぎて、余り聞く耳を持たれまい。...」

しかしペートラが話し終え、床の病気の女性を静かに見つめたとき、あるいはただ宙を見つめたり、すべての残骸を見つめて、その残骸の大きさを今自ら語ることでようやく本当に自覚することになったとき、本当に彼女はそもそも、何故なのか、どうしてなのか、何の故になのか、どのような次第になるのか分からなくなった。 — すると老婆は手を彼女の腕に置いて、言った。「姉ちゃん、 — あんたはペートラと言うのだね、そしてその人はいつもあんたを『ペーター』と呼んでいたんかい」。

「そうです」とペートラ・レーディヒはかなり途方に暮れて言った。

「それでは私もペーターと呼ぼう、甲斐はなくてもね。私はクルーパス夫人、フルホト通りでは、クルーパスおっ母さんと呼ばれているよ、あんたもそう呼んだらいい、...」。

「はい」とペートラは答えた。

「それであんたが私に話したこと、それを信じてやるよ、このことはね、警察長官が自ら仰有るよりも、重みのあることだよ。しかしあんたの話したような次第ならば（事実そうだろうし、顔を見れば分かるから）、だったらあんたは今日か明日にはきっとまた出られよう。ー あんたを引き留める理由はないからね。あんたには何も手出しできない。病気持ちじゃないし、街へ拾いに出てもいけない。戸籍係では名前も出ている、ー そのことを忘れずに警察に話さない。警察はいつも戸籍係に照合するのだから、...」。

「はい」とペートラは言った。

「それでだ、今日か明日には出られる。警察は福祉施設から二、三枚の服をあんたに調達することだろう、ー それで出られる、ー それから何をするつもりだい」。

ペートラはただ確信がなく、両肩をすくませた、しかし今や彼女は相手の女性を注意深く見つめていた。

「そうだ、それが問題だね、その他はすべてたわごと。姉ちゃん、思い返しても、嘆き悲しんでも、後悔しても、ー すべてたわごと。出たら、何をするのか、これが問題だ」。

「そうですね」とペートラは言った。

「見たところ、ガス自殺とか国防のお濠に飛び込む質ではないね。出たら子供が欲しいと思うだろうな、だろう」。

「欲しいです」とペートラは決然と言った。

「それで靴屋はどうする」とクルーパスおっ母さんは尋ねた、「また始めるつもりかね」。

「また務められそうにありません」とペートラは言った、「最後の時の職歴を書けませぬ。最後の職の時、そのまま休み続けたのです、今日も明日もと。そこにまだ私の書類はすべてあって、お話ししたように、すぐにヴォルフを関係して、...」。

「分かった、分かった」とクルーパス夫人は言った、「書類はもう一度取りに行きなさい。書類は大事だ。それで靴屋はもうしないのだな。たとえ何か話しがあっても、それじゃ足りない。するとまた別の仕事となる。で今その仕事をしたいかい」。

「いいえ、いいえ」とペートラは急いで言った。

「いいえか。勿論そうだな。ただ聞いてみただけだ。それでただ一つ残る、姉ちゃん、ー 分かるだろう、姉ちゃん、あんたにはペーターじゃなく、姉ちゃんと呼びたいね。ー ペーターは言いにくい。すると、恋人が残る、でその恋人とはどうだい、姉ちゃん」。

「あの人は来ません」。

「そうだな、その通りだ。多分二度と来ないだろう。その人は自分の賭博のことが面倒なことになると思うのだろう、警察であんたのことを根掘り葉掘り聞き出してもな。ひょっとしたらあんたにチクられたと思うかもしれない」。

「ヴォルフはそうは考えません」。

「そうは考えないか、そうかもしれん」とクルーパス夫人は素直に言った、「その人はあんたの言うようにご立派な紳士かもしれん。それには反論しない。それでも現れないな。男どもはそんなものだ。それではその人を探しに出掛けるかい」。

「いいえ」とペートラは言った、「探しはしません、...」。

「で、その人があんたを明日訪ねて来たら、どうするかい」。

老婆は娘に素早く、暗い視線を放った。老婆は、ペートラが立ち上がって、あちこち歩

くのを見た。今やそれどころか娘は立ち止まって、あたかも拘置所内での外の物音に聞き入っているかのようであった。それから娘は不機嫌に頭を振って、またあちこち歩いた。壁際に立ったまま、岩壁に頭を立てかけて、長いこと立っていた。

「こんな風になるよ」とクルーパス夫人は結局諭すように言った、「巡査がドアをノックして、『レーディヒ、来なさい、訪問者だ』と言う。それでその後に行く、今のスリッパのまま、青い囚人服を着てな。すると或る部屋に入る、中に木の柵があって、その人は一方の側に、立派な身なりでいなさる。あんたは別な側に、囚人服で、中央に巡査が座っていて、あんたを見張っている。それからあんたらは互いに話す。すると巡査が『時間だ』と言う。するとその人はまた室外に出て行き、あんたはまた房に戻る、...」。

ペートラは夙に向きを変えて、老婆を青ざめた顔で緊張して見つめていた。老婆が更には話さずにいると、ペートラは唇を何か尋ねたいかのように動かした。しかし彼女は何も言わず、何も尋ねなかった。

「そうだろう、姉ちゃん」とクルーパス夫人は突然厳しい、意地悪な声で言った、「それで、また房に戻らなければならないほどの、何の悪さをあんたはしたんだい。そしてその人はまた室外に出てよろしいなんて、何と御立派なことをなさったのだい」。

房は全く静かになった。最後にペートラはようやく言った、「あの人の責任ではありませんから、...」。

「違うね」と老婆は勝ち誇っていた、「あんたは毎日ひもじい思いをしてきた、来る日も来る日も待っていなければならなかった、あんたの服は質に入れられて来た、これに責任はないのかい。そんなことがなければ、あんたはここに来ちゃいないだよ。責任がないなんて。その人はカルタを混ぜて、指先の肌がつるつるになったろう、休まない夜勤でござったろう」。

ペートラは何か言おうと思った。「だまんなさい」と老婆は叫んだ、「物を言えなくするよ、頭悪いね。その人はあんたの体を楽しんでいたんだよ、 — もう楽しめなくなったら、姿を消して、こう考えるんだ。今度は別な女だ。最初の女は自分一人でなんとかやって行くだらう。気に入らないね。言っておくけど、私ははらわたが煮えくり返るよ。姉ちゃんよ、女の意地というものがあろうがね、訪問室にピンクのナプキンの上の桜草色のポットみたいに突っ立て、その人を目の色変えて迎えようとしている。 — ただ本当に訪問に来たからと言って。それが結婚生活かい、戦友と言えるかい。ただのお友達だね。ただのちんちんかかもだよ。言っておくけど、恥を知りなさい、姉ちゃん」。

ペートラは房に全く静かに白くなって立っていた。彼女の全身が震えていた。かくも勝手に目が開かされ、歯が抜かれたことはなかった。このような観点からヴォルフとの関係を見たことはなかった。 — 愛に覆われていたすべてのヴェールが千切れた。止めて、と彼女は叫びたかった。しかし彼女は叫ばなかった。

「あんたの言うように」とクルーパス夫人はもっと穏やかに続けた、「その人は全く善良な男かもしれない。私の教養を高めてくれたとあんたは言っている。 — 楽しんでそうしてくれているのであれば、結構なことだ。あんたの心臓のため、そして胃のために何かしてくれているのであれば、更に結構なことだろう。しかし本の場合ほどに利口そうには見えないね。善良な男とあんたは言う。しかしね、姉ちゃん、まだ男とは言えないよ、ひよっとしたら将来男になれるかもしれない。ベッドで男だからといって、まだまだ男と

は言えないのだ、老婆の言うことを信じなさい。若い娘どもはただベッドで判断するからな。あんたがこの男と関係を続けて、甘えさせて、いつも言いなりになっていたら、そして裏に母親が立派な金袋を持って控えていたら、 — これじゃ男になれないね。あんたは肥だめになってしまう、ひどい言葉で申し訳ないが」。

老婆は緊張と怒りとで深い息をし、再三鋭い視線をペートルアに放った。ペートルアは青白く、静かに壁際に立っていた。

今やクルーパス夫人はもっと落ち着いて言った、「その人とそもそも二度と会うなど言っているのじゃないよ。ただしばらく一人っきりにさせなさいということだ。あんたはその人がどうするか、一年か、あるいは半年でも構わない、(私は厳密じゃない)、待てるだろう。その人が賭けを続けるか、 — 駄目だね。母親の許に戻るか、 — もっと駄目だ。別な女に近づくか、 — その場合やはりあんたのことはちゃんと思っていなかったのだ。それとも何かまともな仕事を始めるか、...」。

「少なくとも私がどうしているか、告げる必要があります。少なくとも手紙を書いて」とペートルアは頼んだ。

「一体何のためだい。言ったり書いたりして何の役に立つかね。その人とは一年間、毎日一緒だったのだろう。あんたの正体が分かっていたら、何を書いても無駄だよ。その人は交番で尋ねることができよう。警察はあんたがここにいるとすでに語っていると思うよ。警察は隠しはしないだろう。それでその人が訪問に来たら、 — 構やしない、下りて行って、こう言いなさい。かくかくしかじか、ねえ、良い方、私はまず人の道を歩きます。あなたもまず人の道を歩いてください。他にだ、私には子供ができます、そう言うのだよ。間違っても、一緒に子供を作りましょうと言っちゃいけない。...だってあんたには子供ができて、育てるつもりなんだから。そしてこう言いなさい。子供にはちゃんとした男の人を父親に欲しいのです。少しばかり食い扶持の手配ができる人で、何か食べるものが得られて、ひもじい思いをさせず、付き合っていて、路上で倒れる心配のない人がいい、と...」。

「クルーパスおっ母さん」とペートルアは頼んだ。というのは老婆はまた激していたからである。

「そうだよ、姉ちゃん」と彼女は恨み言を言った、「その人に静かに言って聞かせるのだ。それでその人の金鍍金がはげることはない。男ならそのようなことを一度は聞いていなければならん。ためになる話じだ、...」。

「そうですね」とペートルアは言った、「それで私は半年何をするのです」。

「やあ、姉ちゃん」とクルーパス夫人は喜んで言った、「やっとな今晩初めて分別ある言葉を聞いたね。まあここ、私の横、ベッドに腰掛けなさい。 — あのいけずは、すやすや眠っている、 — ようやくまともに話せる。男どものことはもう話さないことにしよう。まともな女はそのそも男のことはそんなに口にしない。奴等は自惚れるだけだ。さほど重要な手合いではない。 — あんたがこの一年になすべきことか。それを言うことにしよう。 — 私の代理人になりなさい」。

「あら」とペートルアは言った、少しばかりがっかりしていた。

ペートルはクルーパス夫人の代理人になる

「まあ、あんたは『あら』と言うが」とクルーパス老婆は全く好意的に言って、脚を呻きながら組み合わせた。すると彼女は全く時代遅れの長い、襷の多スカートを穿いているばかりでなく（それどころかスカートの下には更にスリッパを穿いていて）、今、夏の最中というのに全くあり得ない太い毛編みの靴下も穿いていた。

「『あら』と言ったね、姉ちゃん。その通りだよ。だって可愛い若い娘が、私のような老いぼれ箒の代理になろうかとなるからね。私は女郎屋の女将か山姥案山子に見えるだろうよ」。

ペートルは当惑して、しかし微笑しながら頭を振った。

「しかしそれは見間違いだよ、姉ちゃん。何故、見間違いか。それはだ、あんたは靴屋で領収書を書いたことがあって計算が出来る。それに人を見る目がある、目が見ているものを見分けられるからだ。あんたがこの房に入って来たとき、すぐに私は言ったものだ。見てみろ、と私はつぶやいた、やっと人を見分ける目を持った女が来た、と。今日日の阿呆どもの目やに付きの目ではない。これはどこを見ても、何も見ない」。

「本当に私はそんな目を持っているのかしら」とペートルは好奇心を起こして尋ねた。というのは他の人より別の目を持っているという思いには、自分の鏡を見ていても至らなかったからである。ヴォルフガング・パーゲルもそうは言わなかった、彼はすでに何度か彼女の眼力を感じていたのであるが。

「私の言う通りなんだ」とクルーパス夫人は説明した。「目についてはフルホト通りで学んだ。五十人、六十人と見て来たのだ。そこで人々は皆、口で私を騙すのだが、しかし目では騙せないね。そんなことは出来ない。そして私はここ、この惨めな南京虫小屋に座って、今回どれぐらいかかるか思索してみると、自分では三ヶ月と思いたいのだが、どうやら半年になりそうなのだ。キリッヒも半年と言っている。キリッヒが間違えることはほとんどない。分かっているんだろうね、私の法律顧問だから、...」。

ペートルは若干問い質すように見つめた。しかし老婆は精力的に頭を頷かせて言った、「そのうちすべて分かるよ。時期が来れば、一切呑み込める、姉ちゃん。先ほどは『あら』と言っていたが、後で『お断りします』と言っているのだよ、構やしない。ただ、そう言わないのであれば、...」。

老婆は確信している風で、精力的に、また上機嫌に見えて、それでペートルは、このような処罰刑に黙って服役していることから感じられる一切の懸念をまず払拭した。

クルーパス夫人は続けた、「そこで私は服役して考えた、六ヶ月の牢、これも悪くはない。一度は休みも必要だ、 — しかし商売の方はどうなる。その上この時代だ。ランドルフの奴は信頼できる。しかし計算に弱い。今はすべて百万単位だし、それをただの石盤と白墨じゃ、 — これじゃ駄目だ、姉ちゃん、分かるだろう」。

ペートルも分かって、頭で頷き、クルーパス夫人に迎合して振った、もっともまだ少しも明らかではなかった。

「それで私は服役して、代理人達のことを考えたのだ。代理人とは立派な言葉だ。しかし奴等は腹ぺこのカラスのように盗むのだ。誰も牢屋の老婆のことは考えない。そのとき、姉ちゃん、あんたが入って来た。そしてあんたとあんたの目を見た。そしてあのいけずと

あんたのいざこぎ、あのいけずの言葉を聞いていた。 — あのいけずは私に襲いかかり、髪の毛を引っ張り、そして毛布に包まれた。 — すべては見事に片付いた、あんたは怒りもしないで、それでいて救世軍のようでもなくて、...」。

ペートラは全く静かに座っていて、顔をしかめなかった。しかし自分の行為が少しでも認められると、どんな人も嬉しいものである。虐待されて来た人間にとっては格別嬉しい。

「それで私は考えた。この娘は良い、この娘は探していた娘だ、と。しかし勿論囚人服を着ている間のことで、そのうち縁がなくなる。クルーパスおっ母さんよ、考えてみろ。おまえがまた外に出たときでも、この娘はシャツの繕いをしてくれよう。 — それであんたの話しを聞いたわけだ。私は思ったね、これはあり得ない、この娘は、寂しいおまえに直接天から送られたものに違いない、と、...」。

「クルーパスおっ母さん」とペートラは言った、二度目であった。

「そうだよ、勿論クルーパスおっ母さんだ、他に呼びようはない」と老婆は全く満足して言い、ペートラの膝をしたたかに殴った。「先ほどはしっかりきついことを言ったろう。まあ、忘れなさい、何でもない。私は若い頃さんざん辛い目に遭った。その後もいやというほどな。息子達は戦死して、私の老いた連れ合いは悲しみの余り首を吊った。しかしフルホト通りの私の所ではなかったがね、すでにダルドルフに移っていて、今ヴィッテナウと呼ぶ所だが。 — しかしくよくよするな、と私は考えている、艱難は楽しい、と...」。

彼女は前に身を乗り出して、眉毛の濃い目でペートラを見つめた、「しかしまた今ほどでも楽しいわけじゃない、姉ちゃん、分かるかい。陽気にはしているが、全体仕事がかなりあぶない、...」。

そしてペートラは、完全に了解して、頭で頷いた。仕事とはアレクサンダー広場の警察本部のことではないと、はっきり分かっていた。彼女は完全にクルーパスおっ母さんの考え方、つまり人生がかなりあぶなく見えても、それでも降参はしないという考え方を理解していた。彼女もかなり似たような考え方をしていた。そしてこのような共感を発見すると、人はいつも嬉しくなるものである。

「そうなんだ、 — しかしこの仕事を私は続けたい、私の生き甲斐だからな。生き甲斐がなくなって、仕事をしてもな、姉ちゃん、これはつまらん。生き腐れだ。あんたの生活と同じでな、いつも家具付きの部屋にうずくまっていて、ひよっとしたら、退屈の余り、少しばかり宿の女将のために洗濯などするかもしれん、これは生活ではない、姉ちゃん、これではどんな娘も阿呆になって、鬱になってしまう、...」。

そして再びペートラは頭で頷き、またしてもクルーパス夫人は完全に正しくて、おまるマダムの許での昔の生活に戻ることは全く不可能と思った。そして今やただ、一体どんな仕事をしてこのクルーパス夫人は生き生きと輝いているのだろうと知りたくなった。彼女は心の底から、それが風紀にかない、責任ある仕事であればいいと願った。

するとクルーパス夫人は早速話してくれた、「それで姉ちゃん、私が一体どんな仕事をしているか話そう。人々がそのことで鼻をつまみ、臭いと言ってもな、 — それでも立派な仕事なのだ。刑務所とは何の関係もない、風紀正しい仕事なんだから。 — 刑務所にはただ私の浅ましきのせいで入っているのだ、つまり私は貪欲な人間で、金銭欲が強すぎるのだ。それを手放さなかった、百回自分にこう言ったんだが、手放せ、アウグステ (つまり私はアウグステと言うんだが、しかし普段使わない)、手放せ、もう十分儲けたじゃ

ないか、届けるのだ、 — しかし手放さなかった。それで入ることになって、 — それでもう三度目なのだ、それでキリッヒが言っている。半年かかるだろう、て」。

今や老婆、金銭欲の強すぎるクルーパス夫人はとても打ちひしがれて座っていた。そしてペートラは、先ほどの六カ月の休暇という言い回しは単に誤魔化しに過ぎず、クルーパス夫人は少しも鉄面皮ではなく、この六カ月の服役に死ぬほどの不安を抱いていることが分かった。彼女は老婆に何か気休めを言いたかった。しかし相変わらず何の仕事か分からなかった。クルーパス夫人の順調であり、悪臭のする仕事、風紀にもかなっている仕事は果たして何なのか、さっぱり見当が付かなかった。

かくてペートラ・レーディヒはむしろ黙っていて、待っていた。するとしばらくして、クルーパス夫人が再び気を取り直して、ほとんど詫びるような微笑を浮かべて言った、「ここで私はまた服役して、陰気を振りまいているわけだ。しかし楽しいと自慢するとこんなことになる。それで、聞いてよ、姉ちゃん、屑物屋で知っているかい」。

ペートラは少しばかり頷いて、かび臭く、悪臭のする地下室を思い浮かべた。

「姉ちゃん、それが私の仕事だ。鼻を歪めることはない、立派な商売なんだ。生業となる。破廉恥な助平爺の相手をすることはない。古紙に古鉄、骨に襤褸、それに皮も私は扱う。...しかしゴミ置き場に小さな手車で集めるというものじゃない。いや、大きな中庭を持っているのだ。貨物自動車でな、六人の男達が働いている。その上、ランドルフがいて、その置き場の監督をしている。少しばかりとろいが、信頼できる。すでに話した通りだ。それで中庭に毎日、五、六十の手車がやって来る。きちんとした値で私は支払っている。皆も知っている、クルーパスお母さんの支払う値段に間違いはない、とな。それで今では毎日増え続けている、誰もが一台の手車でやって来るんだ、仕事がますます減っているからなあ、...」。

「でも、クルーパスお母さん、私には何も分かりません」とペートラはおずおずと言った。

「そんなん、分からんでもいいのじゃ、娘さん。ランドルフが何でも承知していて、すべて分かっている。ただ奴は計算ができん、とろい。あんたが計算して、記入しなさい、金も支払いなさい。その点、姉ちゃん、あんたを大いに信用している。大丈夫だよ。そして夕方には紡績工場や処理場に電話をかけるんだ、一切の品に対して、それぞれのガラクタに対していくら支払うか、な。その人々の名前や番号は後で教えてやるから。そしてそれに従ってあんたは支払う。実直にな。それから貨物自動車で処理場に運び、引き渡して、それであんたは金を貰うのだ。古紙を積み込むのは、一台の貨車に十分な量となったときだ。そのすべてはランドルフがあんたに告げる。それもまた儲けとなる。姉ちゃん、金を受け取ったら、気持ちいいぞ。今日日ではどの子も商いをしたが、ドルが上がり続けるからな、...」。

ペートラは老婆を見つめた。突然、老婆の熱意、輝く目を見てみると、すべてがもはや不可能事とは少しも思えなくなった。だってこれは仕事だし、 — 臭いのする襤褸って、構うことない。まさに何か未来のよう。

しかしそれからまた、クルーパス夫人は拘置所に入っていることだし、だからこの件には何か難点があるに違いないと思ひ至り、彼女の喜びは穏やかにまた消えた。

しかし老婆は更に話し、老婆の話しはまた喜びを新たに煽った。「他に私の仕事には」

と老婆は言った、「何かやばいことがあるんじゃないかと考えることはないよ。すべて信頼できるもので、堅いものだ。きちんとした帳簿だし、税務署とも世間同様、問題を起こしていない。広場には小さな家があって、一級品、瑕疵なし、花壇に園亭がある。全く申し分なし。下の階にランドルフが住んでいて、私は上の階、三部屋に浴室とキッチン ー 見事なものだ。そしてランドルフの嫁さんが私に食事を作ってくれる。それであんたの分も作って貰うわけだ。美味しいよ、 ー 嫁さんの料理は悪くない。 ー で、私は考えたのだが、あんたは私の住まいに住んで、私のベッドに眠る。そして浴室で体を洗う。...しかし浴槽には浸からないことだ、珫瑯が壊れるか、筋が入るかもしれん。珫瑯の扱いは私だけが心得ているから。まあ、浴槽には触らんと私の手に約束してくれたらいい。 ー いや、浴槽に入らなければならんほど汚れることはないよ。 ー 汚れ仕事はランドルフと男達がしてくれる。...」。

再びペートラは頷いた。今やそのようなことになって欲しいと思った。しかし更に一点、一箇所知りたいことがあった。

「そして明日早朝、キリッヒがこちらに面会に来る。私の法律顧問だ。得体の知れない奴なんだ、姉ちゃん。この人に私はこう言うつもりだ。キリッヒさん、弁護士キリッヒさん、 ー 明日か明後日、あるいは今日のうちにも、あなたの許に一人の女性が面会に来ます。ペートラ・レーディヒと言います。この人が私の代理人です。娘の服は御覧にならないでください、それは福祉事務所か生活保護課のもので。娘の顔を御覧ください。この娘が私を騙したら、キリッヒ、私はもはやこの世で誰も信じません、自分も信じないし、ましてやあなたを信じません、キリッヒさん、と、...」。

「クルーパスおっ母さん」とペートラは言って、自分の手を相手の手の上に置いた。そして本当に老婆の犯罪はそれほどひどくはないだろうと確信した。

「いや、それでどうした、姉ちゃん、どうもこうもない、そうだろう。それからキリッヒはあんたと一緒に車でランドルフの許に行き、あんたは私の名代で、金、権限、住まい、食事、命令、すべて私と変わらないのだと彼に言うのだ。それで衣服や下着、諸々の必要な品をあんたは自分で買うことになる。私が口座を持っている町の銀行で、そこで私と同じように署名することができよう。このことはすべてキリッヒがあんたのために準備してくれる、...」。

「でも、クルーパスおっ母さん、...」。

「何が、でもだい。食事は得られる。服も得られる、住まいも得られる。子供も私の所で得られよう（そのころまでには私も戻れたらと願っている）、ただ一つあんたは貰えない。給料を貰えない。金を貰えない。何故か。それはあんたがあの人にやってしまうからだ。それほど間抜けだと私は承知している。その点は私も女だから分かる。あの人が出来て来て、誠実な犬の目で見つめると、あんたは自分の持っているものを与えてしまう。しかしあんたが持っていないと、つまり私の金を持っていないと、 ー それは与えられない。 ー その点あんたのことは十分に分かっているのだ。だからあんたには給料はない。

ー ケチで言っているのじゃないよ。それでどうだい、姉ちゃん、同意するかい、それとも同意は致しませんか」。

「はい、クルーパスおっ母さん、勿論同意します。ただもう一点あります、その件は、...」。

「一体何の件だい。言いくるめなさんなよ、姉ちゃん。その男のことか。その男のこと

はもう話さない。まずは男になって貰ってからだ」。

「いや、あなたの件です、クルーパスおっ母さん、あなたの」。

「何だって、私のか。私は洗いざらい話した。姉ちゃん、まだ十分でないとしたら、...」。

「いや、あなたの件、何故服役しているのかということです」とペートルは叫んだ、「何故半年服役したいと思ったかということです、クルーパスおっ母さん」。

「私が服役したいと、この娘。言ってくれるね、姉ちゃん。私の嗜癖に勤付いているね、見上げたものだ。それはな、この件は、あんたには一切関係ない。これにあんたが関係することもない。これと仕事とは関係ないのだ。これはただ私の貪欲さから来ている。つまり、檻褌を仕分けるとき、私は大抵立ち見していて、リンネルの檻褌に木綿類が混じらないようにしている。リンネルは高く、木綿は安い。これは分かるだろう」。

「はい」とペートルは言った。

「そこでだ」と老婆は満足して言った、「聡い子は聡いのう。そこで私は立っていて、檻褌が空中を飛ぶのを見ている。そのとき私は貪欲なカラスの目で何か煌めくものを見つけた。私はそっと忍び寄った。すると立派な燕尾服用シャツがあった。それを投げ棄てた間抜けは、――しかし多分その間抜けの間抜けの小間使いがしたのだろうが、リンネルの檻褌で少しばかり金を得たかったのだろう（今日では多くの人がそんなことをしている、賃金があちこちで足りないからなあ）、――三個のダイヤモンド入りのボタンを前方胸当てに留めたままにしていたのだ。まがい物ではないとすぐに分かった、本物のブリリアント形のダイヤモンドで、小さなものではない。そこで私は何も見なかった振りをした。しかし私はその品をこっそりと引き抜いたのだ。それから家で喜んだ。妙なもので、――私はこのような物に目がなくて、その上ただで手に入ったから、子供のように喜んだのだ。そうしちゃいけないと分かっている。そのようなことで今まで二回ぶち込まれている。しかし止められないのだ。いつも、誰も見ていなかったと思って、届け出ないのだ。あんただってちょっと嬉しいだろう、...」。

彼女はペートルを見つめた。ペートルも老婆を見つめた。そしてペートルははなはだ安堵した。しかしクルーパスはともしおれていた。

「姉ちゃん、これが私の浅ましい所でな、手放せないのだ。これを我慢できんから、この点に関して、自分に死ぬほど腹が立つ。キリツヒも私に言っている、『一体どういことです、クルーパス夫人。貴女は金持ちの女性です。袋一杯ブリリアント形のダイヤモンド入りボタンを買えるでしょうに。そんなこと止めてください』。――その通りなんだが、しかし止められないのだ。これが始末できん、縁切りできん。あんたならこういう場合どうするね、姉ちゃん」。

「私なら届けましょう」。

「届けるか、立派なボタンを、そんな馬鹿な」。彼女はまた熱くなりそうであったが、気を取り直した、「まあ、この話しは止めにしよう。そのことは話さなくても十分に腹が立っている。更に話すことがあるかね。私の郎党の一人がそれを見ていたのに違いない。奴等は皆、貪欲でな。早速警察がやって来て、丁重にこう言うのだ、『クルーパス夫人、またちょっとした拾い物を隠していないかい』と彼は言って、この猿、にたっと笑って、『ひょっとしてまた鏡付きタンスに入れているんじゃないか、見せてごらん』。それでドジな私は本当にボタンを前回と同様に入れていて、その男の言う通りで、この男やはり猿

ではないのだ。私の方がいつも猿なわけ。ま、初犯で済む者は、盗まない」。

クルーバス夫人は座っていて、物思いに耽っていた。ペートラは老婆を見て、老婆はどんなに自分の本性が分かっている、どんなに六ヶ月の服役を恐れている、ボタンを失ったことを残念に思っていると察した。ペートラは、ほとんどこの子供っぽい、阿呆な老婆に対し、微笑を禁じ得なかった。しかしそれから、ヴォルフガング・パーゲルのことを思い、これはボタンとは違うとすぐに言いたかったが、――しかしそれでもこう考えた。ひょっとしたらただ、これはちょっと違うと思っ込んでいるに過ぎないかもしれない。私にとってのあのヴォルフが、クルーバスおっ母さんにとってはボタンなんだわ、と。

そこでまた彼女は、ヴォルフとのことはまず終わってしまったと思っ、そして屑置き場の小さな家のことを考えた。この家については、早速立派にイメージすることができて、(園亭にはベニバナインゲンが高く育っている)、そして今や確信した。もはやおまるマダムはいない、暑すぎる中庭に面した部屋も、一階のブリキ工場の打ち抜く騒音もない、無為の待機も、衣服がなくてベッドに休んでいることもなく、二、三個のシュリッペを乞うてへつらうこともない。――そうではなくて、代わりに、清潔さと秩序が、仕事、食事、休憩と計画的に分割された一日がある、…。この展望に彼女は圧倒されて、ほとんど泣き出した幸福に包まれた。彼女は一度嗚咽を呑み込み、もう一度呑み込み、それから正気になった。彼女は老婆に向かって行き、彼女に手を差し出して言った、「それでは、よろしく願っします、クルーバスおっ母さん。心から感謝申し上げます」。

69

外貨妖婦との喧嘩

長いこと、途方もなく長い時間、ほとんど一時間、騎兵隊長と彼の貴公子は一緒に賭けをした。囁きながら、彼らは互いに了解した。パーゲルは騎兵隊長の提案を聞き入れ、それに従ったり、あるいはやはり従わないでいたりした。賭けに対する自分の判断に全く従っていた。

玉が走り、カタカタ鳴り、円盤が呻った。クルーピエは叫び、急いで人々は回収して、新たに賭けることになった。時は素早く過ぎ、駆け、絶えず消費された、――玉が穴の縁で止まるように見えるかの一瞬、穴に落ちるか、更に走るか不決断の時、――この一瞬には時が呼吸を、胸の動悸を、停止するかに見えるもので、――この一瞬が常に猛烈な速さで過ぎて行った。

若いパーゲルは、自制して計算しながら賭けていて、フォン・ブラックヴィッツ氏にとっては悪くない教師であった。パーゲルが彼に、二、三の片言でチャンスを説明してくれたので、騎兵隊長は自分が先ほどいかに無意味で子供っぽい賭け方をしていたか悟った。今や賭場をより明瞭に眺められるようになって、早速、片眼鏡の青白い鋭い鼻の紳士は、極めて落ち着いているように見えるが、しかし阿呆な賭けをしていると判断出来た。――

そして今や騎兵隊長もすでに分別ある提案をするのであったが、しかし先に述べたように、先の士官候補生は度々それに従わないでいた。

少しばかり苛立った、後では本当に憤慨した気分が騎兵隊長の心の中で募って行った。若いパーゲルは交互に勝ち負けを続けながら、全体として見ると、若干の当たりにもかか

わらず、下降線をたどっていた。ひょっとしたらパーゲルは意識していなかったかもしれないが、この士官候補生は再三、軍服のポケットからチップの補給に追われていると騎兵隊長の方は気付いていた。この若造は、自分の、つまり年長者で、かつての上司である者の助言に従えばいいのに。すでに十度もこう言うべく舌先に運んでいた。私の言うように今度こそしてみろ、 — 貴方はまた負けたじゃないか。

騎兵隊長がこの言葉を（大変難しいことであったが）再三飲み込んできたのは、若いパーゲルは結局自分の金故、好きなように賭けていいのだという理由からではなかった。パーゲルは明らかに自分の金で賭けており、騎兵隊長は単に辛抱している観客にすぎなかった。ポケットにはただ三、四枚のチップしか有せず、残りの金はわずかしかなかった。フォン・ブラックヴィッツ氏はこの点について明確に承知していた。しかし若い貴公子に、上司として然るべき命令を躊躇っていたのは、このせいではなかった。そうではなく、漠とした不安からで、パーゲルは些細な出来事で賭けを中断して、家に帰りかねないと案じられたからである。これを彼は恐れていた。これは考え得る最悪のことで、 — ここにもはや座っていることが許されず、玉の回転をもはや見守られなくなり、クルーピエの声、ようやく、遂に、ひょっとしたら次の賭けのときにでも、大きな勝ちが告げられるかもしれないその声を聞けなくなりかねない。この不安一つのせいで、ほんの漠としたもの、ほとんど無意識のものであるが、激しやすい騎兵隊長はいつも新たに思いとどまっていたのである。勿論このような強い懸念があっても、絶えず憤懣が募って行くと、いつまで抑制できるか疑わしい。両者の間の諍いは不可避であった。しかしこの諍いは、思っていたよりも勿論全く別な具合に展開した。

人々が没頭する賭博は、その信奉者達の全身の傾注を要求する。ほんの一瞬でも隙を見せる目は、すぐに見通しを欠いてしまう。関連が切断されて、 — 何故かしこではチップが貯まっていて、こちらでは賭け手がしょんぼりした目をしているのか分からなくなる。賭博は仮借ない神である。 — ただ全霊で賭けに没頭する者にのみ、天のすべての至福と、地獄のすべての絶望が恵まれる。中途半端なもの、生ぬるい者は、ここでも — どこでもそうだが、 — 唾棄される。

パーゲルにとって、騎兵隊長の絶えざるお喋りを聞きながら、迷わず賭け続けることはすでに至難のことであった。しかし丁度、玉の走る後を追っていた彼の目の前に、白い、はなはだ香水のきつい女性の手が多く、尊大な指輪と共に現れて、その手には、二、三枚のチップが握られていて、媚びる声で、「ダーリン、ほら、言っていたでしょう。約束したように、私のために賭けてよ」とこう請うたのであった。

すると若いパーゲルは堪忍できなくなった。荒々しい身振りで彼は、優しく微笑している外貨妖婦を見つめて、怒鳴りつけた、「失せやがれ」。

彼は怒りにほとんど我を忘れて息が詰まっていた。

フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、次のような目でこの出来事を目撃していた。一人の若い、とても魅力的に見えるレディーが彼女の張り込みを、ひょっとしたら多少無器用であったかもしれないが、士官候補生の肩越しにしようと思っていた矢先、それに対しパーゲルが極めて不調法な、侮辱的なやり方で叫びつけてしまった、と。

騎兵隊長は女性に対する不調法を嫌っていた。彼は若いパーゲルの肩を掴んで、はなはだ厳しく言った、「パーゲル殿、貴方は将校だろう。すぐレディーに詫言なさい」。

上手の卓の端のクルーピエはこの衝突を案じて見ていた。

確かに彼はこの外貨妖婦の正体を知っていて、この女性には何らレディー的なものはないと承知していた。いずれにせよ、このような厳禁の賭けのクラブでは声高な諍いをしてはならない。ここの近隣住民は、西側地区で、以前の貴顕諸氏の賃貸マンションに住んでいる。このマンションの住民自身、かつての夫婦の寝室にいて、ただインフレ時代の困窮故に、自分達の立派な部屋をこのような明かりを嫌う目的のために提供せざるを得ないのである。守衛は下の守衛所にいて、確かに金を睡眠薬として貰っているが、しかし守衛はすでにもう服用していて、―― こうした者達が皆、声高な諍いが生じたら、何ごとかと思ひ、邪推を抱き、不安に陥るであろう。

それでクルーピエは自分の二人の助手に、警告と指示の視線を送った。そして二人の助手は、早速諍いの場に駆けつけ、その一人は白い鼻の外貨妖婦に向かって、低い声で、「ゴタゴタを起こすなよ、ヴァリー」と囁きながら、大きな声でこう言った。「どうぞ、恵み深いご夫人、椅子がよろしいですか」。もう一方の助手は、赤くなって怒って、荒々しく跳ねたパーゲルに近寄って、穏やかに、しかし有無を言わず、騎兵隊長の手をパーゲルの肩から離した。というのは、怒っている男は、抑制されるときほど、更に怒りが増すことはないを知っていたからである。その際この助手は、みすぼらしい軍服のこの若い男が更に騒ぎを起こすならば、この上品な一行の中で、強力な顎へのフックをお見舞いしても構わないものか、慎重に思案して考量していた。

クルーピエ本人が調停者として乗り出したいところであったろうが、ただまだ賭博台から離れられなかった。小声で彼は賭博者達に彼らの張り込みを元に戻して、向こうの賓客達の些細な見解の相違が収まるまで待つて欲しいと言った。そう言いながら、彼は絶えず、二人の諍い者達のどちらをドアの外に出したのか考えていた。というには両者のうち一人は外に出さなければならないということは明白であったからである。

クルーピエの前の卓は今やほとんど空であった。賭博仕切人はまさに自分の意図の遂行にかかろうとしていた。つまり若いパーゲルを（勿論名前は知らなかったが）丁重に、あるいは強引に、いずれにせよドアの外へ出すようにしていたとき、残念ながら緊迫した状況は、クルーピエの意図に全く反したやり方で解決した。

つまり外貨妖婦、あるいはもっと良く言ってヴァリー嬢は、―― 彼女はつい先ほど、遅く入場した賭博者から本当に二、三小包の雪[コカイン]を購入できて、獲得したもののすべてを無茶な速さで吸引していて、―― 依存者はともかくそんなものであるように、思いがけずこの度は、怒ったパーゲルをただ滑稽に思ってしまった。魅力的に滑稽、天上的に滑稽、惚れるほどに滑稽だ。彼女は、彼の落ち着きのない怒った身振りに笑い転げてしまい、周りの者達と一緒に笑うよう要求し、指で彼を指した。「まあ、この坊や、怒ったら一段と可愛い。ダーリン、接吻させてよ」。

そして憤怒で我を忘れたパーゲルが一行全体の前で、「淫売の腐肉、消えろ」と罵ってさえ、これもただ彼女の陽気さを高めるだけであった。ヒステリックに高笑いして、ほとんどむせびながら、彼女は叫んだ、「あんたは別よ、愛しい人、あんたは別。支払いは要らない」。

「言ったらう、顔をぶん殴ってやるぞ」とパーゲルは叫んで、殴った。

彼女は金切り声を上げた。

両者の語り方の調子、二人が罵り合うやり方を見て、クルーピエの助手は夙にこう確信していた。ここで顎にフックすることはヴェディングの古巣同様、的確に違いない。果たして彼は殴った。ー しかし残念ながらよろめきながら戻るヴァリーを殴った。彼女は更に物音を立てることなく沈んだ。

人目に付かず、うんざりして壁の待ち人として喫煙していたフォン・シュトゥットマンも、クルーピエも到着が遅すぎた。外貨妖婦は、突然、全く黄色く、やつれて見えたが、床に正体なく横たわっていた。助手はこうした一切の説明をしようとした。フォン・プラックヴィッツは陰気に傍らに立っていて、怒って唇を囁んだ。

シュトゥットマンはかなり命令的に尋ねた、「ではもう出るんだろう」。

パーゲルは素早い息で、白くなって立っていた。今や興奮していて、彼の非紳士的振る舞いを鋭く咎めている騎兵隊長の言葉を明らかに聞いていなかった。

クルーピエは賭博の晩が危機に瀕しているのを見た。多くの客人が、まさにより上品な、より裕福な客人が、彼らの保持する見解は、法を越えても構わないが、しかしすべての作法を遵守するというもので、まさにより切り上げようとしていた。クルーピエは短い言葉で部下に指示した。意識を失った娘は隣室に運ばれ、すぐにまた円盤が回転して呻り、玉が音を立てて飛んだ。魔術的に、穏やかに、誘うように、緑色のテーブルが覆われた明かりの下、輝いた。クルーピエは歌った、「まだこちらにはお二方の張り込みがテーブルにあります、...賭けてください、...お二方が張り込みをお忘れです、...」。

多くの者達が振り向いた。

「じゃ、我々は行こう」とフォン・シュトゥットマンはもう一度苛立って叫んだ。「本当に君達のことが分からない、...」。

騎兵隊長はこの友を鋭く、意地悪く見つめた。しかしパーゲルが無言でドアから出て行くと、従った。

玄関では悲しげな巡查[曹長]が、小卓に着席していた。騎兵隊長はポケットを漁って、残っていた二、三個の賭けのチップをつり上げ、テーブルに投げて、無造作に響く調子で、叫んだ。「ほれ、戦友、これが私の持つ一切だ」。

悲しげな巡查[曹長]はゆっくりと騎兵隊長に丸っこい目を上げて、彼を見つめ、頭を振って、三枚のチップに対し三枚の紙幣をテーブルの甲板に置いた。

フォン・シュトゥットマンは暗い階段室のドアを開けて、下の方に耳を澄ました。

交換[両替]のテーブルの男は言った、「ちょっとお待ちください。すぐに貴方らに明かりを持って来ます。丁度今三人の殿方が下りたところです」。

パーゲルは青ざめて、弛緩して、緑色のクロークの鏡の前に立っていて、ぼんやり自分を眺めていた。中で玉がカタカタ走る音を耳にしたように思ったとき、クルーピエが叫んだ。彼ははっきりと聞いた、「十七ー赤ー奇数、...」。

勿論、赤だ、自分の色だ、自分の色。すぐに彼は階段を下りて、騎兵隊長と一緒に田舎へ向かおうとした。中では彼らは自分の色で賭けているが、自分にとって賭博は終わったのであろう。

騎兵隊長は、すべて済んだことは、水に流して、忘れようと暗示するような、しかしまたまことに苛立って聞こえる調子で言った、「パーゲル、貴方はまだチップを交換していないだろう。残念だったな」。

パーゲルは自分のポケットを探って、指で手当たり次第すべてのチップを集めた。

何故、我々を連れ出しに案内人が来ないのか、と彼は考えた。勿論、奴等は我々が更に賭けることを望んでいる。

彼は、チップが幾つあるか、指でポケットの中、数えようとした。

七枚か、十三枚だと、もう一回賭けよう。今日の賭けは少しも面白くなかった、と彼は奇妙に物憂く考えた。

十三枚より多いのに違いない、彼は数が分からなかった。彼はチップを持つ手をポケットから出し、騎兵隊長の視線とぶつかった。この視線はドアを指しているように見え、何か言いたげであった。

やはり七枚とか十三枚ではない、と彼は暗然と考えた。家に帰らなければならない。

彼は、もはや自宅はないのだと思い付いた。彼はドアの方を見た。何気なく、フォン・シュトゥットマンは階段室に足を踏み入れ、沈んだ声で明かりの男を求めた。

パーゲルは自分の手の中のチップを見つめ、それを数えた。十七枚であった。十七、当たりの数だ。

この瞬間、言い難い幸福感が湧き上がって来た。でかした、 — 大きなチャンスだ、(人生よ、 — 素晴らしい、汲み尽くせない人生よ)。

彼は騎兵隊長に近寄り、小声で、階段室への開いたドアに視線を送りながら、言った。「まだ出ません。まだ賭けます」。

騎兵隊長は黙った。一回、全く素早く、彼は目を瞬かせた、 — 目に何かが飛び込んで来たかのようにであった。

ヴォルフガングは交換のテーブルに近寄って、ポケットから紙幣の小包を引き出した。二つ目の小包で、こう言った、「チップを — 紙幣すべて分」。

数え、数え上げられる間に、彼は黙って側に立っている騎兵隊長に向き直って、ほとんど勝ち誇って、叫んだ。「今晚一財産勝ち取るつもりです。予感がします」。

騎兵隊長は穏やかに頭を動かした、自分もやはりそう予感していて、元来自明のことであるかのようにであった。

「それで貴方はどうされます」とパーゲルは尋ねた。

「私にはもはや金がない」と騎兵隊長は答えた。奇妙に咎を感じているように聞こえた。そしてほとんど心配そうに、開いているドアの方を見た。

「お助けしますよ、 — 自分の方で賭けてください」とパーゲルは一つの紙幣小包を差し出した。

「いや、いい」と騎兵隊長は断って言った、「多すぎる、 — そんなに多くなくていい、...」。

(この瞬間には両者とも、ルッターとヴェーグナー亭での場面、若きパーゲルが騎兵隊長にやはり金を差し出して、極めて無礼千万と憤慨され突き返された場面を思い出さなかった)。

「貴方が本当に勝ちたいなら」とパーゲルは強調して説明した、「十分に資金を持たなければなりません。そう理解しています」。

再び騎兵隊長は頷いた。ゆっくりと金の小包へ手を差し出した。

フォン・シュトゥットマンが階段室から戻って来ると、控えの間は空であった。

「二人はどこだ」。

巡査[曹長]は賭場のドアを頭の動きで指した。

フォン・シュトゥットマンは怒って地団駄踏んだ。彼はドアの方へ向かった。しかし彼はまた決然と振り向いた。彼は怒って考えた。こんなことは考えられな。私は彼の子守娘ではない。いや、これが必要な奴だが、...

彼は玄関のドアへ向かった。

すぐ彼の側で、一つのドアが開いて、パーゲルと諍いを起こした娘が出て来た。

「階段と一緒に下りてくださる？」と彼女は抑揚なく、曖昧に尋ねた。眠って話しているかのようで、まだ正気ではないかのようであった。「具合が悪くて、外気が欲しくて、...」。

フォン・シュトゥットマンは永遠の子守娘で、彼女に腕を差し出した。「構いませんよ。一緒に参りましょう」。

巡査[曹長]はクロークから銀灰色のケープを取り出し、女性の裸の肩に掛けた。両者は無言で階段を下りて行き、娘はシュトゥットマンの腕に寄りかかっていた。

70

フォン・シュトゥットマンの迷いの外出

勿論見張りが、それは、この紳士達を上にも明かりで案内した同一人物であったが、下のドアの所で立っていた。ただ呼び声に応じていなかった。というのは、去ろうとしている賭博者達にはいずれも、長く思案する時間を与えなければならないからである。

しかし今、フォン・シュトゥットマンが腕に娘を抱えて玄関に現れると、そこは外部のガス・ランタンの明かりがかかっていたが、見張りはこの状況も完全に飲み込んだ。見張りは外貨妖婦、ヴァリー嬢を知っていて、金と愛はしばしば一緒に輪舞を踊ったり、あるいは鬼ごっこを[木を取り替えて]遊ぶということも、彼には珍しいことではなかった。

「車ですか」と彼は尋ねて、陽気にチップ用に開けた手を振って、フォン・シュトゥットマンがまだ答えないうちに、言った、「ここで待っていてください。一台ヴィッテンベルク広場から呼んで来ます」。

そう言って彼は消え、フォン・シュトゥットマンはここ薄暗い、未知の家の閉ざされていない玄関で、未知の娘を腕に抱えているという厄介な自分の状況について反省する時間を得た。まあ、上は賭博クラブで、警察関係、警備保障会社の男が一人でも現れてみろ。

これはまたすべてまことに面倒なことである。今日という日は、フォン・シュトゥットマンに面倒な状況への需要を腹一杯満たしてくれる。この時代は呪われた人生だ。次の十五分に何が起こるか分かったものではない。まだ許されていたものが、もう許されないのではないか。

シュトゥットマンは、今朝昔からの連隊仲間に出会って、率直に喜んでいた。その後ブラックヴィッツはお伽噺のように礼儀正しく振る舞ってくれて、彼の介添えがなければ、枢密顧問官シュレックのことなどシュトゥットマンの耳に届くことはなく、自分は手ひどい罵声、恥辱を浴びて、追放されていたことだろう。ブラックヴィッツと共に、この地獄の褥から静かな田舎に引っ越すという展望も素敵なのであった。 — それが今、この同じブラックヴィッツがあそこの上に座っていて、最も愚かなやり方で自分の金を浪費し

ていて、一 彼に対し「子守娘」と罵った。

子守娘はいらない、と言った、一 いや奴は一人必要だ、一 それも即刻。フォン・シュトゥットマンが、この両人はまた賭場に座っていると思い出し、若いパーゲルの途方もない金の小包を思い出し、賭場仕切人の禿鷹鼻と猛禽の眼差しをはっきりと眼前に思い浮かべると、自分は、一 子守娘であろうが、あるまいが、一 早速階段を上がって行き、この自殺的賭博を終わらせなければならないと考えた。

しかしこの娘、この呪わしい娘が自分の腕にいる。

この娘は全く正気であるようには見えない。一 それも元来きつい一発の後では不思議なことではない。娘は震えていて、彼の腕を引っ張り、歯をガチガチ言わせ、再三、何か「雪」と囁く。雪だと。一 卒倒するほどに蒸し暑く、悪臭がして、湿った暑気の中なのに。シュトゥットマンはすぐ上へ行き、友人を解放しなければならないのは、明白であった。無論同様にまた、この娘をまずどこか安全な所、一 親戚の許に連れて行くことも、必要であった。彼は娘の住所を知りたがったが、しかし彼女は彼の質問を聞いていず、ただ無愛想にこう答えるだけだった。ほっといてよ、行きたくない、私の住まいがあんたと何の関係があるのよ、と。

その間、外では一台の車が走って来て、止まった。シュトゥットマンはこれは自分のための車なのか判然としなかった。見張りは姿を見せず、娘は雪と囁き、フォン・シュトゥットマンは決心がつかず立っていた。

ようやく見張りが車の中から玄関の中へ滑り込んで来た。「済みませんね、お待たせして。辺りがやばく思われましてね。一 保安警察の賭博担当部局てやつですよ。あの兄ちゃん達は寝ずの番です、安月給でも腹ぺこでもタフなものです」。

彼は口笛を吹いた、「私の眠りは浅く、夢見が悪い、...」。

「いや、今だ、素早く、伯爵殿、ガタピシ箱に。お心付けをどうぞお忘れなく。これは、どうも。また、かかあには内緒の金だ。一 それで、どちらへ、恵み深いご夫人?」。

彼は待っていたが、返事はなかった。

フォン・シュトゥットマンは疑わしげに娘を見た。娘は車の隅、彼の隣りに座っていた。

「ヴァリー、家か」と見張りは突然吠えた、「今、どこがねぐらだ」。

彼女は何か、好きにさせて、と口ごもった。

見張りは運転手に言った、「それじゃ、発車だ。下のクーアフルステンダム[選帝侯築堤通り、繁華街]まで。きっとこの娘はそこで元気になるだろう、...」。

車は出発した。シュトゥットマンは、自分が下りなかったことに立腹した。

後に、思い出してみると、何時間も走っていたかのように思われた。通りを上がり、通りを下り、暗い通りであったり、明かりの輝く通りであったり、空の通りであったり、群衆で一杯の通りであったりした。時々娘は窓ガラスを軽く叩いて、外に出て、酒場に入ったり、路上の一人の男と話したりした。...

前よりゆっくりと娘は戻って来て、運転手に言った、「もっと先に」。車はまた出発した。娘は嗚咽し、その歯はガチガチ震え、それから思わず知らずぼんやりつぶやいた。

「何と言いました」とフォン・シュトゥットマンは尋ねた。

しかし彼女は答えなかった。彼女はそもそも彼に注目していず、彼女にとって彼は存在していなかった。夙に彼は下りたかった。また賭博クラブに戻りたかった。彼が座ってい

たのは、彼女のためではなかった。彼はフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長のように、女性界に対する無闇な崇拜者ではなかった。彼は自分の横の娘の正体を承知していた。いやそれに今では、この娘が何を追い求めているか察知していた。この「雪」に関しては、かつてホテルでも話題となっていたことを思い出していた。ホテルの喫茶店のトイレ業者が突然、その闇取引をしていた。勿論その男は逃げた。その限りでは、この混乱の時代、最も現代的なホテルでさえも、客人達の要望に迎合はしていない。 — しかしいずれにせよ、フォン・シュトゥットマンは事情を知っていた。

いや、彼が相変わらず座っていたのは、そして相変わらず出発し、この娘の求めが遂に上手く行ったか時々緊張して待っていたのは、 — 彼が一つの決心と闘っていたからであった。この娘が上手く行ったら、自分は然るべき決断をしよう。きっとそうしよう、と。

見張りが保安警察の賭博担当部局について言及したことで、フォン・シュトゥットマンは、このタクシー運転手に用心深く問い合わせて、こう考えるに至っていた、 — つまりこの賭博担当部局に電話してみるのが最良かもしれない、と。彼が以前この件に関して耳にしたこと、運転手が彼に請け合ったことは、常に、賭博者はほとんど何も畏れることはないということであった。賭博者の名前は確認される、最悪の場合、些細な反則告知を受ける、 — これがすべてである。厳しく咎められるのは、猛禽類、搾取者、賭博仕切人である、 — これは当たり前のことにすぎない。

再三、シュトゥットマンは自分に言った。この解決が最良だ、と。

もう一度上に上がって行っても、何の意味があろうと彼は再三、熟考した。ただブラックヴィッツと仲違いするだけだ、彼はますます本気で賭けるだろう。いや、次の喫茶店から警察に電話しよう。これがブラックヴィッツにとっては、最良の薬となろう。人目につくことを彼は極端に恐れている、 — 彼の行状が警察に記録されたら、賭博する気は生じなくなるであろう。彼は、今カジノにいるつもりである、 — しかしただの香具師、ペテン師だ、 — 彼の救いとなろう。

何も、一言も、この熟考に対し、反論されない。これは正しいのだ。賭博仕切人は処罰されよう、しかし軽率なブラックヴィッツは、正しい方向感覚をすべて失っているように見える若きパーゲル共々、警告されよう。しかしながらフォン・シュトゥットマンは再三、この決心を遂行する力を求めて闘うことになった。彼の中で正しいことをしているか疑問視するものがあつた。仲間を裏切るからである。一人の友を警察に引き渡してはならない、 — たとえ最良の意図を持っている場合でも。彼はそれを引き延ばした、まずは娘の面倒を見よう。

彼は期待して彼女を迎えた。しかし彼女はまた成果がなかった。彼女は長いこと運転手と囁いていた。

「そこは遠すぎる、お嬢さん」と運転手の声が聞こえた、「私は交代の時間だ」。

彼女は更に執拗に囁いた。彼は結局譲歩した。

「でも、また無駄だったら、お嬢さん、...」。

彼らは果てしなく進んだ。ほとんど暗い通りであった。ランタンは壊れており、節約のために、ただ六番目か八番目のランタンだけが点っていた。

彼の横の娘は、自動的に思わず繰り返していた、「神様 — 仏様 — 神様、...」。再三言っ、その言葉のたびに、彼女は頭を車の後部座席に打ち付けていた。

フォン・シュトゥットマンは喫茶店のボックスで受話器を取る姿を思い浮かべた、「警察本部、賭博担当部局をお願いします、...」。

しかしひょっとしたらボックスすらないかもしれない。ビュフェで電話しなければならないだろう。人々は、奴は賭博に負けて、腹いせをしているのだと考えることだろう、...これはとても不謹慎なことに見えるが、しかし実直なことなのだ。これは、十分に — 実直な — ことだ。実に、実直な。シュトゥットマンはこれを再三繰り返した。以前はもっと良かった。実直なことは実直に見えた。今日の午後も彼は実直に振る舞った。自分は男爵とかのあの若造を殴り殺してもよかったのだ。自分の実直さ故に自分は酔っ払って階段から転げ落ちた。 — 恐ろしい人生だ。

まずは救出されたブラックヴィッツと一緒に田舎へ行きたい、 — 休息し、平和に、長く辛抱して暮らしたい。

ようやく車が止まり、娘は下りて、躊躇いがちに一軒の家へ向かった。一度彼女はこけて、叱り付け、道に立ち止まった。フォン・シュトゥットマンは、おぼろげな揺らめく明かりの中、ただ暗い家々の正面を見ていた。酒場はなく、人はいない。何か店のようなのがある。薬屋のようだ。

娘は店のドアの横、一階の窓をノックし、待ち、再びノックした。

「ここはどこだ」とフォン・シュトゥットマンは運転手に尋ねた。

「ワルシャワ橋の近く」と男は不満げに言った、「運賃を払いますか、仰山の金ですよ」。シュトゥットマンは払うと言った。

一階の窓が開いた。白いパジャマの上の青白い、太った頭が現れた。彼は怒って、小声で呪いを発したように見えた。娘は懇願し、物乞いをし、一種の吠える訴えが車まで聞こえた。

「奴は出さないだろう」と運転手は言った、「こんな真夜中に、ベッドから起こされて。出せば、刑務所行きだ。あんな女は口が軽い、 — ほら、言った通りだろう」。

その男は荒れ狂っていた、「駄目、駄目、駄目」と叫び、窓をピシャッと閉めた。娘はまだ一瞬立ち止まっていた。その泣き声はやるせなく、同時に立腹していて、車まで聞こえた。フォン・シュトゥットマンは、子守娘で、覚悟していて、 — その娘がすでに倒れるのを見た。彼は車から降りて、娘を助けようとした、...

しかしすでに娘は彼の許に、何歩も、迅速に、小股で駆け戻って来た。

「どうしたのだ」と彼は叫んだ、...

しかし娘は早速彼の手から散歩用杖を奪い、彼がまだ取り返さないうちに、駆け、窓の所に戻った。 — すべては無言で、かすかに嗚咽していた。この微かな嗚咽は格別醜いものであった。そして彼女は一撃で窓ガラスを打ち破った。がちゃがちゃと甲高い音でガラスが舗石に落ちた。...

その上娘は叫んだ、「密売人、肥えた豚野郎」と彼女は大声を上げた、「雪を出しな」。

「旦那、出発しましょう」と運転手は提案した、「保安警察が聞くまいことか。御覧なさい。窓がもう明るくなった、...」。

実際、暗い家の正面のここかしこで窓が照らし出され、一人の弱い、高い声が叫んだ、「静かにしろ」。

しかしすでに静かになっていた。というのは向こうの砕かれた窓辺の兩人はただひそひ

そと話していたからである。今や青白い顔の男はもはや罵らず、ただ秘かに話していた。

「おや、おや」と運転手はゆっくりと言った、「こんな連中と一度関わりを持ったら、奴等の言いなりになる。もう保安警察が来て、店を閉められようが、どうでも良くなる。娘はコカインを手に入れさえすればいいのだ。行きましょうか、旦那」。

しかしまたしてもシュトゥットマンはそのような決心ができなかった。その娘がたとえ無責任な。卑怯な取引をしても、だからと言って、出発はできない、娘をここの路上に放置できない、今にも次の角から警察が現れかねない。それから彼は実際、自分の験担ぎを行うつもりであった。娘がコカインを手に入れたら、次の、まだ開いている喫茶店に行かなければならない。再び彼は、手に受話器を持っている自分を思い浮かべた。済みません、保安警察の賭博担当部局を、...

まさにそれ以外に手はない。ブラックヴィッツを救出しなければならない、自分の責務を果たさなければならない、...

さて娘が戻って来た。フォン・シュトゥットマンはまず彼女の手段が成功したか、聞く必要もなかった。彼女が、彼女のために残っている彼を突然見つめ、彼女が彼に話しかけるその様子から、すぐに分かった。娘はコカインを得て、すでにもう吸引している、と。

「何よ」と彼女は挑戦的に尋ね、彼の杖を彼に差し出した、「あなたは一体誰。一 あら、私を殴ったあの若い男のダチ公ね。レディーの顔をぶん殴る良いダチ公をお持ちだね」。

「いや違うよ」とフォン・シュトゥットマンは丁重に言った、「貴女を殴ったのはあの若い男じゃないし、それにあの男はそもそも私の友ではない。一 殴ったのは別人で、いつも賭博仕切人に仕えている二人のうちの片方だ」。

「ロッケンヴィリーのここと？与太飛ばすんじゃないよ。あたしの堅信札は昨日済んでいるんだよ。あれはあんたのダチ公だった、あんたらを連れて来た。一 だからあの若造にはお礼をしてやろう」。

「出発することにしよう」とフォン・シュトゥットマンは提案した。

彼は面倒になった。突然、彼は死ぬほど草臥れてきた。この女性とその破廉恥で、平民的な口調に疲れ、この巨大の都会での当てのない迷走に疲れ、すべての無秩序、汚辱、諍いに疲れた。

「勿論出発するよ」と彼女はすぐに言った、「私が西側までてくてく歩いて行くとお考えかい。ほら、運転手、ヴィッテンベルク広場まで」。

しかし今度は運転手が反抗した。名誉ある紳士として話す必要を認めず、すでに殿方シュトゥットマンは運賃を払うと述べていたので、彼の物言いに遠慮はなかった。彼は窓ガラスを破ってしまうようなコカイン年増をどう考えているか説明し、「一步も先へは進めない、金輪際」と告げた。「殿方が一緒になけりゃ、どうに放り出していたよ、...」と述べた。

この罵倒はこのレディーにはほとんど効き目がなかった。罵倒に彼女は慣れていて、諍いは多分に彼女の生きる糧であった。それで彼女は元気になり、たった今服用した毒の力で、彼女の空想力は飛躍し、かくて彼女はこのぶつくさ言うのろまな運転手をはるかに凌駕することになった。あんたの運転免許は取り上げられるよ、会社の上司に告げ口してやる、友達がいるんだよ、あんたの車のナンバーを覚えているから、一 明日の朝、あん

たのタイヤがパンクしていても、驚かないことだね。

果てしない、馬鹿げた会話、詰まらぬ無駄口、声の応酬が甲高くなった。フォン・シュトゥットマンは死ぬほど草臥れて聞いていた。一 彼は介入し、終止符を打とうとして、抗議した。しかし彼は生気がなく、二人に太刀打ちできず、余りに疲れていた。これはいつ終わるのか。すでに辺りの窓が明るくなった。すでにまた「静かに」という声が出た。...

「しかし頼むから、...」とフォン・シュトゥットマンは弱々しく言って、再び聞いて貰えなかった。

突然、騒音が止み、諍いが終わった。この無駄話は少しも無意味ではなかった。二人は和やかな了解に至っていた。確かにヴィッテンベルク広場まで戻るのではなかった、しかしそれでも「一歩」進むことになった、つまりアレクサンダー広場までである。

「つまり私のガレージはすぐそこだから」と運転手は説明して、この説明のお蔭で、フォン・シュトゥットマンは更に「アレクサンダー広場」について頭を巡らすことを怠ってしまった。というのはさもないと彼は絶対こう思い付いていたであろうからである。つまりアレクサンダー広場にはまさにかの警察本部があって、この娘が望みのコカインを手にした今、そこの賭博担当部局に自分はすぐ電話しなければならないのだ、と。

しかしフォン・シュトゥットマンはもはや何も考えていなかった。彼はまた車に乗れて、ようやくまた快適に車の隅のクッションに腰掛けることが出来て、喜んでいて、今少しうたた寝出来たら、素敵であろう。穏やかに揺れる車の中ほど快適に眠れる所はない。しかし彼は、アレクサンダー広場までの距離では、入眠の甲斐はないと案じた。着いてから更に疲れが増すであろう。それで彼はむしろ煙草を吸うことにし、点火した。

「静かにレディーに煙草をどうぞと言ったらどう」と娘は立腹して言った。

「どうぞ」とフォン・シュトゥットマンは言って、彼女に自分の小箱を差し出した。

「結構」と彼女は鋭く言った、「私があんたのちんけな煙草を吸うわけないでしょう。自分のにはあります。レディーには丁重にお願いします」。

彼女はポケットから一箱かき出し、「火」と命じて、吸い、それから若干飛躍したことを言った、「あんたのダチ公にお礼をするという意味が分かっているの？」。

「彼は私の友ではない」とフォン・シュトゥットマンは機械的に言った。

「あの若造、思い知らせてやる。余計なことしやがって。レディーの顔を殴るなんて」。そしてまただしぬけに言った、「なぜあいつ今晚あんな大金を持っていたんだろう。いつもはからっけつで、しみったれた奴なのに」。

「本当に知らないのだ」とフォン・シュトゥットマンは疲れて言った。

「それでさ」と彼女は喜んで強調して言った、「クラブの奴等があいつの金を巻き上げられなくても、私がお礼として、あいつが手放すようにするわけ。その点は請け合うわよ。私のせいで、あいつには一文も残らない」。

「親愛なるお嬢さん」とフォン・シュトゥットマンはかなり絶望して頼んだ、「静かに煙草を吸わせてください。申したでしょう、あの殿方は私の友ではありません」。

「そうだね、あんたとあんたのダチ公ども」と彼女は怒って言った、「レデーを殴って。でも私はあいつをばらすの、一 あんたのダチ公を」。

フォン・シュトゥットマンは黙っていた。

更に怒った声が出た、「聞いてんの。私はあんたのダチ公をばらすのよ」。

静寂。

軽蔑した声がした、「ばらすといのはどういう意味だか分かっているの？私にあんたのダチ公を密告するんだよ」。

開いたガラス窓から運転手の声が響いた、「旦那、一発かましてやんなさい。殴るのが一番、— それ以外手はありません。貴方のお友達は正解です、旦那、その方は分かっている。正しい。減らず口が黙ってしまうまで、ぶん殴ることです。車に乗って、途方もない距離走りながら、拳げ句密告とやらの下品な話しを聞かされるんですから、...」。

再び両者の間で闘いが始まった。交互に、運転席へのガラス窓が開けられ、また閉められ、狭いタクシー内で、金切り声、叫び声が反響した。

むしろ運転手は少し運転に注意して欲しいとシュトゥットマンは考えた。まあ、どうでもいい、何かにぶつかれば、少なくともこの騒ぎは収まる。

しかし彼らは何にもぶつからなかった。彼らは全く正常にアレクサンダー広場に着いた。娘は、相変わらず罵りながら、シュトゥットマンの脚に当たりながら、車から降りた。それから彼女は今一度、車の中に叫び返した、「これで紳士気取りなのね」。そして広場を横切って、大きな、ただわずかな窓だけに明かりが見える建物へ駆けて行った。

「あの女入って行くな」と彼女の後を見ていた運転手が言った、「歩哨が中に入れたら、更に中でたっぷりと喋ることだろう。あの女、自分が言った通りにするつもりだ。自身やばいことを沢山隠しているのに。コカインをやるのかと尋ねられたら、すぐにお仕舞いだ。ひょっとしたらすぐに逮捕だな、まあ、嬉しいことだが」。

「あれは何だ」とフォン・シュトゥットマンは考え込んで尋ね、大きな、ほとんど暗い建物を見つめた。その門道の下に、経った今、その娘は消えた。

「いや、旦那」と運転手はいぶかしがった、「旦那はここらの方ではありませんね。これは本部ですよ。あの女があなたのお友達を密告しようとしている警察本部です」。

「あの女何をするつもりだ」とフォン・シュトゥットマンは尋ねて、突然更に目が覚めた。

「いやはや、— あなたのお友達の密告です」。

「しかし何故だ」。

「眠っていらしたんですね、旦那、喧嘩のときに。その方があの女を殴ったからですよ。私でも分かりましたよ」。

「何だと」とシュトゥットマンは言った。突然とても興奮した。「何のせいだ。平手打ちをくらったからと言って、警察本部へは行かんだろう」。

「知りますか」と運転手は非難して尋ねた、「あなたのお友達が何を仕出かしたのか。しかし旦那も賭博クラブとかおかしいことをお尋ねでした。— それであの女も警察にたれ込もうと思いついたのでしょうか」。

「待った」とフォン・シュトゥットマンは覚醒して叫び、車から飛び出て、彼女の後を追おうとした。というのは、しばらく前まで、賭博クラブを告発しようと思ったと同様に、今や、この邪悪な娘による告発を阻止しなければならないと確信したからである。

「待った」とタクシー運転手は叫んだ。運転手は自分の運賃が、それも沢山の運賃が消え去ると思った。そこで、苛々して、辛抱できない、熱くなったシュトゥットマンにとっ

て、果てしのない商取引、止みそうにない計算が始まって、やっと本来幾ら支払うべきか分かることになった。税がしかじかで、鉛筆で計算して、三回様々に勘定され、その上に割り増しが付いて、...

結局、ようやくフォン・シュトゥットマンは広場を駆けて行った。そこでまた、歩哨と交渉しなければならなかった。歩哨はフォン・シュトゥットマンが本来何をしたいのか、分からなかった。レディーを探しているのか、それとも賭博担当部局を探しているのか、告発しようとしているのか、告発を妨げたいのか。

いや、あの冷静、沈着な、 — いや、あの深謀遠慮の退役中尉、先の応接課長のフォン・シュトゥットマンたる者が。この男が、誰かが自分の友と若いパーゲルを禁じられた賭博のことで警察に告発しようとしていると知って、完全に頭がパニックった。 — 彼自身、三十分前までは同じ考えを抱いていたというのに。

しかし彼は結局歩哨の許で、本部への入場許可を得た。どのように進めば、「夜間担当課」まで行けるか、指示された。というのはそこが彼の目的の所と思われたからで、今まで彼の思っていた賭博担当部局ではなかった。しかし勿論彼はその指示を正確には聞いていず、とてつもない、ほんのわずかな照明しかない建物の中を駆けることになった。彼は通路や階段を走り、彼の足音が周りに空ろに響いた。彼は色々ドアをノックした。何の返事もなかったり、別の所では、無慈悲に、ぶつくさと、寝ぼけて、更に別の所を指示された。彼は次々に走り、疲れて、果てしない夢の中を走っているような気がした。そしてとうとう目指すドアの前に立っていて、中からあの意地悪な娘の鋭い声が聞こえてきた。

そしてこの瞬間、自分がここに立っていることがいかに馬鹿げたことか、気が付いた。自分はその告発を無効にする発言を一言もできないのであり、いや、更に彼女の言う通りだと肯わなければならない。そこは賭博クラブであり、禁じられた賭博をしているのである。むしろただできるだけ速やかに、賭博クラブへ駆けつけ、警察が来る前に、二人に警告を発し、二人を連れ出さなければならない、と。

再び彼は踵を返し、再び本部の中をさまよって、ようやく出口を見つけ、咎を感じながら歩哨の側をこっそり抜け出した。彼は警察より先に着くために急がなければならないと分かった。そして幸い、ここはすぐ市電の近くにあり、市電で西側にどんな車よりも速く行けると思い付いた。そこで彼は市電の駅まで駆けて、そこの閉ざされた改札口の周りをさまよい、ようやくこの夜の時間にはもはや電車はないと思い付いた。それでは車に乗らなければならない。そしてようやく一台の車を見つけて、ほっと息を吐きながらクッションに沈み込んだ。

しかしすぐに高く飛び起きた。自分は静かに休んでおれない。座って耳を澄まさなければならぬ。 — 緊急出動隊の車のサイレンが鳴ったのではないか。

彼は座っていて、耳を澄ました。そして突然、今日一晩中の自分の行動の馬鹿さ加減が丁度意識に上がってきた。彼は固く座って、驚いて考えた。自分は一体まだフォン・シュトゥットマン中尉か、戦争中、決して冷静さを失わなかったあの男か。

そして自分が完全に逸脱していて、あたかももはや本人ではなく、全くの別人、憎むべき、ジタバタした、無意味な、頭のおかしい別人であるかのように思われた。そして彼は拳で自分の胸を打って、言った。「呪うべき時代、忌々しい時代だ。人間の本性が奪われてしまう。しかし私はすべてから抜けだそう、 — 田舎へ行くぞ、そしてまた人間とな

る、私がフォン・シュトゥットマンであるかぎり」。

それから彼はまた座って、耳を澄ました。緊急出動隊のサイレンが鳴らないか。そして考えた。私が先に到着しなければならない、 — 彼らを抑えさせてはならない。

71

パーゲルは偉大な賭けをする

ヴォルフガング・パーゲルは、自分の横に騎兵隊長を連れて、勝利を確信して賭場に入った。最初の賭けのときの十七枚のチップを軽く、閉じた手の中に握っていた。彼はそれらをこっそり揺すった。それらは威勢良く、陽気にカタカタ言った。

彼は賭博テーブルに向かいながら、昨年何度もそうであったように、口の中が妙に乾燥して、空ろな感情を抱いていたが、しかし今回は以前とは全く違う賭けが待っていると分かった。いつも、いつも自分は間違った賭けをしていた。当てにならない阿呆な体系を考え出していた。今日のようにしなければならない、靈感を待って、それから賭けるのだ。また靈感が得られるまで待つのだ。ひょっとしたら果てしなく待つかもしれない。しかし辛抱して待つ。それから速やかにまた賭けるのだ。

「その通りです、素晴らしいとても」と彼は、何らかのことを尋ねた騎兵隊長に答えた。そしてこう答えながら好意的に微笑した。騎兵隊長はびっくりして彼を見つめた。多分彼は何らかのたわごとで答えたのであろう。しかし構わない。すでにもう賭博台のすぐ間近に来ている。

この頃にはテーブルはいつもの時よりも密になっている。最後の時間に向かっているのである。ここでは、三時に、遅くとも三時半に閉められる。すべての者達、賭博者達の中で、疲れ、草臥れて、壁際に立って煙草を吸っていた者達、決断がつかず安楽椅子やソファに座っていた者達、 — こうした者達が今やテーブルの周りに押し寄せて来る。今一度、過ぎ去って行く時が、大きな儲けの展望を描く、 — これを掴め。数時間して町が目覚めたら、汝は金持ちか、貧乏人だ、 — 金持ちの方になりたいと思わないか。

先ほどの幕間劇はどうに忘れられていて、誰もパーゲルに注目しない。

彼はテーブルの間近に近寄れそうになかった。彼はテーブルをすっかり迂回して、テーブルの先端の所まで来た。肩を動かして、彼はクルーピエとその助手達の間割り込んだ。助手のロッケンヴィリーは、ヴェディング出身のずんぐりしたボクサーであるが、この強引さに憤然と抗議しようとした、 — クルーピエが小声でそれを抑えた。

ヴォルフガング・パーゲルは手の中で十七枚のチップを揺すって、それを賭けようと思った。クルーピエは髭の下、うっすらと嘲笑的微笑を浮かべて、馴染みの賭博者に、玉が動いているときは賭けてはならないと教えた。

一時、 — 長い、静止した時間、パーゲルは待たなければならなかった。それからようやく玉が静止し、ある数字が叫ばれ、儲けが、滑稽な、重要でない、大したことのない儲けが分配され、帳消しにされ、 — そこでヴォルフガングの手が緑色のクロスに沈んだ。

十七枚のチップが数字十七に置かれた。

クルーピエは彼を横目で見、弱く微笑した。クルーピエの掛け声が、賭博者達に張り

込みの締め切りを告げ、取っ手を握って、円盤が呻り回転し始め、玉が走った。

彼の賭けが始まった。 — ヴォルフガング・パーゲル、退役士官候補生、ペートラ・レーディヒという名の娘の先の恋人、目下無職の男の賭けが始まった。 — 彼が一年前から、いや生涯をかけて待っていたかの賭け、本来、そのお蔭で、彼は本来の自分となったのであり、そのせいで、母親と喧嘩したのであり、そのせいで、一人の娘と一緒にあって、待ち時間を潰したのであり、そんな次第だったので、娘に去られてしまうことになった因縁の賭けが始まった。我々は十七に賭けた、十七番に対する十七枚のチップである、...

用意、我々の賭けである。十七は三十六倍の儲けである。 — 果てしなく玉はカタカタ、カタカタと走る。...まだ我々には時間があって、十七番となったときに儲けるであろう、数百万、数十億マルクの計算ができよう、 — 玉はカタカタ走り、 — 玉が骨であれば、死者の骨は墓所でそのように鳴ると言うことができよう、しかし我々は生きており、生きて、賭けている、...

「十七」とクルーピエが叫んだ。

いや、彼はそう叫ばなかったか。裁きの時である。 — 雄山羊は毛を刈られる、しかし正義の者 — 彼らは王冠を得る。チップが雨あられ落ちて来る。雨であり、洪水、いや、ノアの洪水だ。ポケットがそれで一杯になる。

待ちなさい、私も賭けるつもりだ、 — 私のような賭博者に椅子一つないのか。

何に賭けよう。落ち着かなければならない。沈思して、...。私は赤に賭ける、赤が正しい。それを一度当てにしていた。長い時間が経った。ほら見ろ、椅子が用意された。

ここに、お主、我が息子よ、十ドルある[酒手だ]、 — 立派なアメリカのドルだ、 — 先ほどは私を殴ろうとしたんだろう。ハッ — ハッ — ハッ。

騒ぐな、他の人々の邪魔になるとぬかすのか。他の奴など糞食らえ。しみつたれた奴等の張り込み[賭け]と私と何の関係があらう。奴等は儲けるために、汚い紙幣を貯め込むために賭けている。私は賭けのために、人生のために、賭けている、...。私が王だ。

赤。

彼は座って、凝視していた。突然、陰気に邪推深くなった。これは果たして十分なチップか。彼はすでにチップをポケットに入れられなくなった。彼は十枚の山にしてそれらを目の前で積み、興奮して手が震えて、その小山をまた崩してしまった。奴等は皆、ここで自分を騙し、盗もうとしている。私は五分五分の豹にすぎず、ちんけな軍服姿の無価値同然氏だ。この犬、このクルーピエは、自分をいつも盗人扱いしていた。 — 今回復讐してやろう。

そして彼はまた賭け、また勝った。幸運がまた彼の許に戻って来た。彼にとってとても簡単だ。至福の陶醉。今まで感じたことのないものだ。おまえは雲のように夏空を飛び過ぎ、下には低級な人間どもとその重苦しい、引きつった顔の重苦しい地球がある。 — おまえは飛び過ぎて行く、至福の雲々、至福の神々 — 幸運だ。

何が倒れたのか、何が流れて行く、何が倒れるのか。

小川のように陽気にカタカタ鳴りながらチップは滑って行く。自分がもはや山にできないチップが、彼の両腕の下、大地に流れる。倒れるに任せよう。幸運が私に微笑んでいる。他人にも背をかがめてそれを追わせよ、...

奴等に拾わせよ、我々は十分に得ている、更にもっと得ることだろう。

クルーピエの何とも陰気な顔を見よ。彼の髭は逆立っている。いや今日は、お主から、我が息子よ、ぶんどるぞ。お主を穴の中の鼠のようにむしり取ってやる。一 間もなくお主のチップはなくなり、紙幣は尽きる。今日我々はすべてを持ち去るのだ。

騎兵隊長はどうなさる。すでにすったのですか。いや、賭けを続けましょう。私のようになさい、騎兵隊長、お教えしたでしょう。ここに紙幣があります、アメリカのドルで、二百五十ドル。いや、十ドルはロッケンヴィリーに渡しました、だから二百四十ドルです。その通り、明日早朝精算しましょう、しかし三十分もしたら、この金も、クルーピエを迂回して、また私の許に戻って来ます。

賭けの流れが変わったのか。玉は自分の望み通りにはもはや回転しないのか。

いや、まさに変わっている。賭けの途中に金を渡してはならないのだ。不運を呼ぶ。彼は陰気に座って、また五分五分のチャンスを試み、三倍のチャンスを試みる。彼は用心して、慎重に賭けた。しかし彼の両腕の中のチップは失われて行く、連隊は数が少なくなっていく。新たに再三クルーピエのレーキの下、敗軍の群れが没収され、賭博仕切人は再び微笑した。

そして賭博者達はもはやパーゲルに注目していない、彼らは彼にもはや注視していない。遠慮なく彼らはまた彼の肩越しに彼らの張り込みを続けていた。彼はもはやつきのある賭博者ではない。皆と同類の賭博者である。幸運は一度彼に微笑したが、しかし彼はまた忘れられた。彼は幸運のボールにすぎず、ベッドの伴侶ではない。

彼はこの時間の間ずっと何をしていたのか。ここにどれほど座っていたのか。

すでに彼はポケットを漁っていた。奔流は涸れた。運命が彼に教えた教義をすべて彼はすぐに忘れたのだろうか。十七を彼は賭けなければならない。十七番に対する十七枚のチップ、一 そう言われたのだ。

十七。

そしてチップの雨あられ。

そして酩酊が戻って来た、飛翔の至福、世間から離れて、太陽に近い。彼はそこに座っていた、頭を軽く前に傾げて、失われていた微笑が唇に浮かんでいる。彼は望むように賭けることができる。今や奔流がまた流れている。そして彼の望んでいたようになり、チップは枯渇しそうになる。早速紙幣が彼に降り注ぎ、段々増えて行く。紙幣はパリパリ言って、色褪せて彼を見つめている、一 笑うべきマルク紙幣、価値高いポンド紙幣、貴重なドル紙幣、太って満ち足りたオランダ・ギルダー紙幣、実のあるデンマーク・クローネ紙幣、一 五、六十人の客人達の財布からの強奪である。すべてが彼の許に流入して来る。

クルーピエは死ぬほど陰気に見える。あたかも病気にかかったかのようで、訳の分からぬ痛みを訴えている。ほとんど彼は自制できず、すでに二度ロッケンヴィリーは新しい金を求めて、控えの間へ走り、一日の売り上げを取り寄せ、一 クルーピエよ、まもなくお主は、お主の財布を使わなければならない。

クルーピエは何か店仕舞いをつぶやくが、しかし賭博人達が抗議し、脅かす、…。彼らはもうほとんど賭けていず、クルーピエとパーゲルの間の決闘を見つめている。彼らは若いパーゲルのために震える思いでいる、一 幸運が彼を見放さないだろうか。彼は彼ら

の中の一人で、生まれながらの賭博者であり、馴染みの意地悪な猛鳥、クルーピエに対し、彼らすべての損失分の復讐をしている。この若い人間は、クルーピエのように金を愛して、 — 賭博を愛している。彼は搾取者ではない。

そしてこの若きパーゲルは座っている、ますます微笑を浮かべて、ますます冷静に。夢中になって騎兵隊長は彼の肩口で囁く。パーゲルはただ否認して頭を動かした。

騎兵隊長は叫んだ、「パーゲル、もうお仕舞いにしろ。一財産稼いだぞ」。

いや、騎兵隊長はこの部屋でもはや遠慮せず叫んだ。しかしパーゲルはただ耳に入れず微笑した。

彼はここにおいて、はるかに遠くまで来ている。彼はこれが絶えず更に続くことを望んだ。時もなく永遠に、 — だからこそ我々は生きている。幸運の並が我々を運ぶ、我々は解放されて浮遊する。

存在することの言い知れぬ快樂、 — 引っ張って苦しい樹液上昇の日々の後、一時間して、すべての自分の花々が開花するとき、このように一本の樹木は感ずるに違いない。クルーピエが何ぼのものか。金が何だ。賭博自体なんだ。小さな玉よ、更に回転しろ、回転するのだ、 — そのように死者の骨はカタカタ言うと考えたことがあったか。

太鼓を叩け、トランペットを鳴らせ。赤だ。勿論、赤だ。今一度赤。そしてまた赤。しかし今度は黒にしよう。 — さもないと人生は味がしない。若干その間に黒がないと人生は味がしない。更に多くの紙幣、 — 紙幣をすべてどこに置いたものか。トランクを持参しなければならなかったところだな。 — しかし前もって誰が分かるか。

シュトゥットマンはまたしても何をやる気だ。何を彼は叫んでいる。警察か。何故警察だ。何のために彼は警察を必要としているのか。 — 何、皆、駆けて行く。待て、玉は止まっていないぞ。 — 私は今一度勝つのだ、私はまた、何度も勝つ。私は永遠の勝者だ、...

もう警官達が来ている。賭博者達が皆、黙って立っている、自らの幽霊のようだ。堅い帽子のおかしな男は何をやる気だ。私に何か言っている。すべての賭け金が押収される、すべての金が。勿論すべて賭博金だ。 — 賭博のための金。さもないと意味はない、 — それ以外何に使うのだ。

我々は片付けて、一緒に来いと言うのか。勿論一緒に行くよ。もはや賭博できないのであれば、一緒に行っている。何故騎兵隊長は青い服の男と争っているのだ。意味ない。賭博できないのであれば、すべてどうでもいい。

「行きましょう、騎兵隊長殿、落ち着いてください。ほら、シュトゥットマンも一緒です。彼は一度も賭けなかった。では出発」。

何とクルーピエは瀕死に青ざめて見えることか。いや、彼にとっては面白くない。彼は負けた、 — しかし私は、生涯でないほど私は勝った。法外に、素晴らしい。お休み。

ようやく私はゆっくり眠れる。私は自分の渴望していたものを得た。眠りから覚めなくても構わない、 — お休み。

アレクサンダー広場の警察本部の小さな会議室で、一個の惨めな薄暗い電球が点っていた。そしてその赤っぽい明かりが、賭博クラブで逮捕された者達のうんざりと寝そべったり、困惑して黙っていたり、眠っていたり、あるいは熱心に喋っている人影を照らしていた。ただ賭博仕切人とその二人の助手達は、隔離されて連行されていた。――さもないと彼らは皆、警察の移送車に乗せられた時と同様に、この部屋に押し込められていたことだろう。ドアは外から施錠された。監視人を省くためであった、――完了。汝らは順番が来るまで待機せよ。

時々、長い間隔を置いて、隣室のドアが開かれて、疲労困憊して見える黄色の皺の多い書記が次に立っている者へ指で合図した。――彼は消えて、再び出て来ない。それから、果てしない時間が経って、次の者が合図される。

警察本部は大賑わいであった。役人や警察官が不足していた。巡査長レオ・クーバルケの殺害がきっかけとなって、一連の一斉摘発が行われていた。この摘発の名目に欠けるものはなかった。ギャング達[ベルリン・マフィア、印章指輪団]は捜査された。故買商巢窟は偵察された。ナイトクラブは視察され、裸踊りの酒場は念入りに調べられ、連れ込み宿や曖昧宿が手入れされ、駅の待合室、浮浪者施設が点検された、...

絶えずこの広場からパトロール車の刺激的な神経質なサイレンの音が聞こえた。これらは出発したり、逮捕者の新たな群れを乗せて帰って来たりした。すべての部屋、すべてのホールが一杯になった。――疲れた秘書や、半分眠った書記がいて、灰色に見える速記タイピスト達は絶えず新たな紙をタイプライターに差し込んでいて、黄色の文書用紙を折り畳み、そしてかすれた声で聴取していて、その声はほとんど聞き取れなかった。

暴行、淫行、異常淫行、軽窃盗、掏摸、強盗、死者からの窃盗、物乞い、追い剥ぎ、武器密輸、いかさま賭博、違法賭博、贓物罪、偽造通貨使用、麻薬売買、軽度及び重度の売春斡旋、脅迫、悪徳[売春婦のひも]稼業、...

果てしないリスト、疲れて致命的な犯罪のメニュー、悪徳、違反、犯罪、...。役人達はほとんどタイプライターの背後、自分達の調書の上で頷いて眠っている、...突然彼らは大声を発して、それからまた声が完全に消える、...そして嘘や、言い訳、歪曲、糊塗、中傷が間断なく増大して洪水となる。

(そして帝国印刷所、五十や百もの補助印刷所で紙幣印刷機がうなり、新しい一日に備えている。新しい一杯の金が、途方もない洪水となって気前よく、飢餓のルンペンの民に振る舞われる。すべての名誉心が、すべての礼節が日ごとに失われて行く民に、...)

「我慢ならん」とフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は叫んで、飛び上がり、この部屋を駆けること十度目であった。彼はその際、半ダースもの他の、同様に逍遙学派の動作の者達を避けなければならなかったが、それでも彼の気分は少しも収まらなかった。鼻息荒く、彼は彼の中尉の前に立っていた、「おい、どれほどまだここに立っていなければならんのだ。あの者達がお声を掛けるまでか、ええ。私を逮捕するとは、けしからん、...」。「静かにしてくれ、静かに」とフォン・シュトゥットマンは頼んだ、「それに我々は逮捕されているとは少しも思っていない」。

「勿論、我々は逮捕されているぞ」と騎兵隊長は更に怒って叫んだ、「窓には格子があり、ドアは施錠されている、――これを逮捕と言わんのか。おかしいぞ。君の逮捕の定義を知りたいね、ええ」。

「静かに、ブラックヴィッツ」とフォン・シュトゥットマンは今一度頼んだ、「興奮しても無駄だ」。

「静かにか、勿論静かにだ」とブラックヴィッツは突然うんざりして言った、「君は話しが上手い。君は家族がいない、君には義父がいない。君が枢密農業顧問官ホルスト＝ハインツ・フォン・テッシュォーを義父に持っていたら、静かにしておれるか、見てみたいところだ」。

「いや、義父までは話しは行かない」と中尉は慰めた、「言った通り、身分証を出しさえすればいいのだ。きっと釈放される、何も罰せられない」。

「釈放させずにおくものか。ここに私の証明書類はある。 — この手の中にな。私は去らねばならん、列車が出るぞ、郎党を移送するのだ。 — 貴殿、聞いてくれ、何某氏か」と彼は丁度隣室から現れた書記に突進して行った、「私を即刻釈放して欲しい。まず私の金はすべて巻き上げられたのだ、...」。

「後で、後で」と書記は無関心に言った、「まず落ち着きなさい、それでは次の方」。彼は太った男に合図した。

「落ち着けと言われている」とフォン・ブラックヴィッツは興奮してシュトゥットマンに言った、「おかしな言い草だ。こんなやり方で落ち着いておられるものか」。

「いや、本当に、ブラックヴィッツ」とフォン・シュトゥットマンは真面目に言った、「気を確かに持つのだ。更に君が荒れたら、我々の順番は最後になるぞ。だから一つだけ頼んでおく。役人どもに嘯みつかないことだ、...」。

「何で嘯みついたらいけない。強固に言い立ててやるぞ。私を数時間拘留して」。

「三十分だよ」。

「奴等は罵声に慣れておる。皆、昔からの下士官に曹長どもだ、 — 顔を見れば分かる」。

「しかしここでは、ブラックヴィッツ、君は彼らの上司ではない。君が賭博で捕まったとしても、彼らの責任ではない」。

「まあ、彼らの責任ではないが。しかしパーゲルを見てみろ。この能天気な若造、この災難が何の関係もないような顔をして座っていて、仏陀のような気取った微笑をしている、 — パーゲル、何故にこっとしているのだ」。

「今日はまあ何と」とパーゲルは微笑して言った、「一切が破天荒なものか、丁度考えていたのです。一年前から私ははした金を求めてあくせくしていました。今日は、大量に山のように得て、 — ガチャッ、押収されて、消えました」。

「それで笑っているのか。それでは、滑稽なものに対するセンスがあるな、パーゲル、...」。

「それにもう一つあります」とうろたえずパーゲルは続けた、「今日の正午、結婚するつもりでした、...」。

「そうか、パーゲル」と騎兵隊長は勝ち誇って言い、突然はなはだ上機嫌になった、「私はすぐルッターとヴェーグナー亭で貴方の悩みは女の話と察していたぞ、...」。

「そうです」とパーゲルは言った、「今晚、私の許嫁は何らかのことで逮捕されて、アレックス[アレクサンダー広場の拘置所]に搬送されたと聞いたのです。...今や私もここにいるわけです、...」。

「何の咎で逮捕されたのだ」と騎兵隊長は好奇心を起こして尋ねた。というのは出来事

についての講釈よりも出来事そのものの方が彼の興味を引いたからである。

しかしフォン・シュトゥットマンは頭を振って、パーゲルは黙っていた。

騎兵隊長は気が付いた、「済まん、パーゲル、それは勿論私には何の関係もないことだ。しかし貴方はなぜそれでもここに満足そうに座って、にこやかに笑っているのか、率直に言って、分からん。その件は極めて悲しいことで、...」。

「そうです」とパーゲルは同意して言った、「悲しいことです。その件はとてもおかしな具合で、とてもおかしい。私が金を二十四時間早く得ていたら、彼女は逮捕されなかったでしょうし、我々は今、結婚していたことでしょう。本当におかしなことで、...」。

「私だったらもうそのことは考えないだろう、パーゲル」とフォン・シュトゥットマンは提案した、「それは、今、有り難いことに、終わって、済んだことだ。数時間したら我々は皆一緒に列車に乗って、田舎に向かってのことだろう、...」。

パーゲルは黙った、そして騎兵隊長も今回は黙った。

それからブラックヴィッツは咳払いした、「パーゲル、煙草を一つくれないか」と彼は穏やかに言った、「喉がとても渴いた。いや、むしろ吸わない方がいい。 — 私は貴方にかなり借りがあるな、...」。

パーゲルは笑いながら空気を掴んだ、「すべては消えてしまった、...」。

しかし騎兵隊長は反論した、「しかし、いいか、そんな風に言わんでくれ。私は金を借りた。どれほどの額か、貴方は覚えておろう」。

「構いませんよ」とパーゲルは言った、「金は得られない定めでした。それが今はつきりしたのです」。

「賭博の借りは嘘偽りの借りではない、パーゲル殿」と騎兵隊長は厳格に釈明した、「貴方の金はまた返そう、それは請け合っておく。勿論、今すぐというわけではない、まずは収穫をして脱穀をしてからとなる、...どうだ、一緒に行くか」。

「いや、ただ金を待つというのは、どうも、...」とパーゲルは不機嫌に言った、「私は今ようやく何かまともなことをしたいのです。今や私はとても阿呆で、すっからかんで、...これだ、と分かればいいのですが。いや、私にとってまともな仕事をご存じでしょう、騎兵隊長殿」。

「勿論、貴方のための仕事があるぞ」と騎兵隊長は全くのぼせて言った、「私がどれほど、二、三人の信頼できる人間を求めていたか、分からんだろう。餌を分配して、郎党に賃金を与え、現物供与を分かち、夜、時々田畑を巡回するのだ。 — 想像ができんほど、すべてがぐすねられている。二、三人の信頼できる人間が欲しいと思うぞ、しょっちゅうあちこち駆け回っては、またも騙されたと永遠に考えているんだからな、...」。

「それに森や田畑に」とフォン・シュトゥットマンが期待一杯に言い添えた、「木々は動物、 — いかかわしい世界はなくて、崩れ落ちた正面の積み木の家ではなく、コカインもなく、賭博クラブもない、...」。

「いや、勿論そんなものはない」と騎兵隊長は熱く言った、「パーゲルよ、貴方が私の許にいる限り、賭博はしないと私の手に誓って貰わなければならん。つまりそれは全く問題にならん、...」。彼は打ち切って、赤くなった。

「いや、勿論」と彼はそれから少しばかり怒鳴るように言った、「誓わなくてもいい。実際、強制はできんからな。それでは、了解か」。

「いづれにせよ、私は明日早朝駅へ行き、お話しします」とパーゲルは躊躇いながら言った、「八時、シュレージエン駅、一 その通りでしょう」。

ブラックヴィッツとシュトゥットマンは互いに見つめ合った。再び騎兵隊長は苛立った、ほとんど憤然とした身振りであった。しかしシュトゥットマンは好意的に尋ねた、「運命に対する問いかけに、貴方はまだ返事を貰っていないというのか、パーゲル」。そしてパーゲルが黙っていると、「賭博が貴方の問いかけだったのだろう、パーゲル」。

「でも、私は勝ったのです」とパーゲルは反抗的に言った。

「そして何もかも失ってアレックスにいるのだ」と騎兵隊長は嘲笑的に笑った、「パーゲル、男になれ」と彼は警告して言った、「この躊躇いは見苦しいぞ。しっかりしろ。額に汗して働くのだ。賭博は止めろ」。

「娘のことが心配なのか」とフォン・シュトゥットマン氏は穏やかに尋ねた。

「少しばかり」とパーゲルは認めた、「私までここアレックスに座っているのは、とても珍しく思われます」。

「それじゃ、止めることが出来ないことをすればいい」と騎兵隊長は怒って叫んだ、「膝を折ってまで、ノイローエへ来て欲しいと頼むつもりはない」。

「いづれにせよ、八時に駅で会おう」とフォン・シュトゥットマンは急いで頷いた。叫び声が大きくなって、ある罵声が飛んできた。審理中の部屋の開いていたドアから、一人のがっしりした男が出て来て、ドアや窓の所に駆け、握り締め、覗き、頭を振って叫んだ、「こそ泥の一味だ。警察から盗むとは厚かましい連中だ、...」。

彼はドアを叩いた、「開けてくれ、巡査、ハロー、ティーデ、誰も逃げないよう見張ってくれ」。

混乱、叫び声、笑い声。

外部から青い制服の者達が入って来て、ドアが開けられた。太った警部が猛然と駆け込んで来た、「皆整列、一人ずつ検査だ。お主、静かにしろ。テーブルやベンチの下も調べろ」。

一人か、二、三人の拘留者が、警察本部での待機時間を利用して、ドアや窓の青銅金具を外してしまえば有益だと考えたことが判明した。もはやレバーや窓の取っ手、錠の金具はなくなっていた。略奪された警察本部、一 にやにや笑い、哄笑が生じた。制服の者達さえ笑った。今や警部もにんまりし始めた、...

「このような厚かましきは一 前代未聞だ。勿論、そやつ、あるいはそやつらは、逃げているだろう。複数の者らに違いない。一人では隠せない量だ。一 奴等は私の尋問部屋にいたのに、私は何も気付かなかった。捕まえてやるとも、すぐ身上書類を調べたら分かる、...」。

「ちょっと、警部殿」とフォン・シュトゥットマンは叫んだ。

はなはだぶっきらぼうに、「何の用ですか。今時間はないと申したばかりですぞ」。相手を認めて、「いや、貴方でしたか、済みません。フォン・シュトゥットマン中尉殿。

一 明かりが暗いものですから、私どもの店に何の御用です。バルト三国部隊、鉄の師団の戦友。ま、それでは一緒に来てください。勿論すぐの順番となります。ただ、二、三枚の書式、罰金命令が必要となります。ま、嘆くには及びません。インフレで自ずとチャラになります、一 こちらはご友人ですか。初めまして。騎兵隊長殿ですか。初め

まして。士官候補生ですか。こちらは、キュネツケ警部、先のラーテノー輕騎兵部隊の正規曹長です。 — いや、このような出会いをするとは、 — 遺憾な時代です。それでは貴方が、途方もない大儲けをしていたという若者ですか。信じられませんな。丁度そのとき邪悪な警察がサイレンで乗りつけたというわけですか。いや、金は飛んで行きます。我々は得たものをお返しはしません。我々のものですか、ハッ、ハー。しかし嘆くことはありません。その種の金で幸福になることは決してありません。 — その金を手放せて、神に感謝です。 — いや、ドアの取っ手だと、そんなもの、 — ティーデ、何を仰有る。きっと明日同僚に冷やかされることでしょうか。笑わずにはおれん。立派な青銅品を、 — 奴等は古物商で大金をせしめるのでしょうか。 — それで、ともかく身上書。フォン・シュトゥットマン殿、 — 職業は」。

「応接課長、...」。

「貴方が。神様、仏様、神様。何という時代でしょうか。貴方が、応接課長、応接課長ですか、済みません、中尉殿、...」。

「いや、構わん、 — その上それはもう先の応接課長で、今は農業見習い、...」。

「農業見習い、こちらがまだましです。それどころか大変立派です。田舎は今日唯一の正解。生年月日は」。

73

守衛所のパーゲル

鋼の板金を打ち付けられたドアの前にテーブルが一つあって、通常の唐檜のテーブルであった。テーブルにはサンドイッチの小包がテルモス瓶[魔法瓶]と並んでいた。テーブルには警察の制服姿の老人が座っていて、鼻眼鏡越しに、とても薄暗い天井光の下、新聞を読んでいた。老人は通路をゆっくりとした足取りで向かって来る音を聞いて、新聞を下に置き、鼻眼鏡を通して来訪者を覗いた。

若者がゆっくりと近付いて来た。最初若者はドアとテーブルとをやり過ごそうとしているかに見えた。しかしそれから立ち止まった。「済みません」と彼は言った、「ここから警察拘留所に行けますか」。

「行けるよ」とこの役人は言って、新聞を丁寧に折りたたんで、それをテーブルに置いた。しかし若者は決心が付かず、躊躇っていたので、彼は付け加えた、「しかしこれは単に、業務用のドアだ」。

若者は相変わらず躊躇っていた。老人は尋ねた。「何か心配なことがあるのか。探っているのか」。

「何故探るのです」とパーゲルは問い返した。

「それはだ、...」と老人はゆっくりと言った、「今、四時になろうとしている。 — この時間になると時に、休まらない思いの者がやって来る。何か仕出かしたからで、それで探りを入れる。しかし夜間受付に行きなさい。私は単に見張りだ」。

「いえ」とパーゲルはゆっくりと言った、「私は何も仕出かしていません」。再び彼は黙した。それから老人の冷静な視線を受けながら、言った、「私はただ私の恋人と話したいのです。つまりここの中にいるのです」。そして彼は頭でドアを示した。

「今の時にか」と老人はほとんど怒って叫んだ、「夜の三時と四時の間に」。

「はい」とパーゲルは言った。

「だったら何か仕出かして、落ち着いておれんのだろう」。

パーゲルは黙った。

「それは駄目だ。今訪問はできない。それにそもそも、...」。

「全然駄目ですか」としばらくしてからパーゲルは尋ねた。

「絶対に」と相手は言った。彼は考え、若者を見つめた。最後に彼は言った、「自分でも良く分かっておろう。気が休まらないから、ただここに来てみたのだ、と」。

「全く偶然にここ本部に来たのです。わざわざ来たものではありません」。

「しかしこのドアまではわざわざ来たのだろう。今この夜中にここを見つけるのは簡単なことではない」。

「そうですね」とパーゲルは答えた。

「それみろ」と老人は言った、「貴方は丁度、探りを入れに来る者達と全く同じだ。彼らも皆言う、良心が咎めて来ているのではありません、と。 — 今日日良心が咎めるなんてことはない。しかし何故それでも夜の二時、三時に来るのか。この時間は特別な時間で、人間は一人つきりになると、突然日中とは別の考えを抱くのだ。そしてやって来る」。

「分かりません」とパーゲルは悲しげに言った。彼は実際何も分からなかった。彼はただ、少なくとも彼女に、それは本当のことかと尋ねずには旅立ちたくなかった。時々、あの役人は本当でないことを自分に語ったに違いない、あり得ない、自分はペーテラのこと分かっていると内心で言っていた。それでも時々また内心で、役人が間違ったことを言うはずはない、自分に間違ったことを言っても何の益もない、それは本当に違いないと思っていた。いや、賭博は終わった。酩酊は過ぎてしまった。勝利は敗北となった。 — 今何と彼は独りぼちなことか。ペーター、ペーター。今誰も自分の側にいない。自分に寄り添う生命のあるものがない。 — すべては失われたのであろうか。

「私は明日早朝旅立つつもりです」と彼は頼み込んで言った、「今晚できないでしょうか。誰も気付かなくていいのです」。

「何を考えているんだね」と老人は叫んだ、「中には夜警人もいる。いや、全く駄目だ」。彼は一瞬考え込んで、パーゲルを吟味するように見つめて、それからまた言った、「それにそもそも、...」。

「どういうことです。それにそもそもとは」とパーゲルは少し苛立って尋ねた。

「そもそも我々の許では本来訪問許可はない」とこの役人は説明した。

「それで例外的には」。

「例外的にもない」。

「そうですか」とパーゲルは言った。

「つまりここは警察の拘置所だ」と老人は事情を説明する必要を感じて言った。「未決囚の刑務所では予審判事が訪問許可を出せるのだが、しかしここではそれはない。ここには大抵ほんの二、三日いるだけだ」。

「二、三日ですか、...」とパーゲルは繰り返した。

「そうだ、ひょっとしたら来週モアビート刑務所に問い合わせられよう」。

「私は明日早朝ここで彼女に会えないというのは確かなことですか。例外はないのです」。

か」。

「絶対ない。しかし勿論、貴方の恋人は無実だと貴方が何か知っていて、明日警部に言ったら、彼女は出られよう。それは明らかだ」。

パーゲルは考え込んで黙った。

「しかし貴方はそのような情報を持っているようには見えないな、だろう。そんな情報を持っていたら、夜ここの私の所には来ない。貴方はただ恋人と話したいだけだろう、一 個人的に」。

「尋ねたいことがあるのです」とパーゲルは言った。

「それだったら彼女宛に一通の手紙を書けばいい」と老人は宥めて言った。「その手紙の中に、彼女の咎のことにに関して何も書かれていなければ、その手紙は彼女に渡されるだろう。すると彼女は返事を書いても良いことになる」。

「しかし私はまさにその咎のことで少し尋ねたいのです」。

「いや、兄ちゃん、それだったら我慢しなければならん。貴方がその件で尋ねたいのであれば、未決囚の刑務所でもそれは許されない。その件の判決が下されるまで、彼女とその件について話すことはできない」。

「それはどれほどかかるのでしょうか」とパーゲルは絶望して尋ねた。

「いや、それは事件の性質による。彼女は白状したのか」。

「そうなのです。白状しました。しかし私には信じられません。彼女は自分のしていないことを告白したのです」。

老人は苛立って新聞に手を伸ばした。「もう寝なさい」と彼は言った、「白状した女に、その白状を撤回するよう説得するつもりなら、訪問許可もかなり長く待たされるぞ。それに手紙を書くことも許されない。その手紙は彼女に届かないからな。聞いてあきれろ。貴方にこっそり訪問を許すとも思わない。いや、もう家へ帰りなさい。もう十分聞いた」。

パーゲルはまた躊躇って立っていた。それから頼んで言った。「しかしあり得ることでしょう。誰かが自分は少しもやっていないことを、白状することがあるでしょう」。

「そうか、読んだことがあるのか」と老人は毒づいて尋ねた、「それでは、兄ちゃん、言っておこう。何か違うことを白状する者は、いつももっと沢山ひどいことを仕出かしているからだ、とな。その通り、ある者が家宅侵入を白状するのはな、同じ時間に殺人を犯しているからだ。貴方の恋人が白状したのであれば、何故そうしたのか彼女は分かっている。だったら、彼女に説得することは、私なら遠慮するな。さもないと、もっとひどいことになっていよう」。

はなはだ怒って老人は、今やまた鼻眼鏡を通して、パーゲルを盗み見た。しかしパーゲルは雷に打たれたように立っていた。老人の言葉は、全く別のことを意味していたが、ペートルの白状に新たな明かりを投げかけた。その通り、その通り。何かもっとひどいことを避けるために、何か白状したのだ、病気と路上の[男]拾いを白状した、ヴォルフガングを避けるために。一緒にいるより拘置所がましなのだ。終わりだ、終わり。信じ合うことが失われた、信頼が最終的に失われた、一 彼から去った、この世から去った、耐え難いものから、耐えられるものへと移った。またしても得がたい勝利を失った、無一文、すべて、...

「感謝申し上げます」とパーゲルははなはだ丁寧に言った、「本当に良い助言を頂きま

した」。

ゆっくりと彼は通路を、守衛所から離れて、下って行った。老人の不審げな視線を背に受けていた。

彼の品をタンネン通りから受け取りに行く丁度の時になっていた。この時間にきっと母親は彼を待っていない。この時間には母親はぐっすりと眠っている。アレクサンダー広場できっとタクシーが見つかるだろう。有り難いことにシュトゥットマンが金を出してくれた。シュトゥットマンは賭博をせず、唯一の資本家で、シュトゥットマンは救助者で、シュトゥットマンはびしょ濡れの鶏どもの世話をし、焼け落ちた者達の救済基金である。

— ちなみに、真面目に言って、シュトゥットマンとの交際は結構なものであるに違いなし、ほとんど、ノイローエとシュトゥットマンを期待して良いように思われる。

第九章

新たな一日への新たな出発

74

ゾフィーは目覚める

あるホテルの一室、あるベッドに、一人の娘と一人の男が寝ていた。その男はすぐ壁際に眠っていた。広くないベッドの中、彼は微かにヒューヒュー鳴らして鼻から息を吐き出していた。娘は丁度目覚めたところで、組んだ腕の上に顎を置いて、腹ばいになって、すでに明るくなっている両方の長方形の窓を細目で見ていた。

娘は聞いていた。駅へ入って来る快速列車の物音、機関車の呻くような蒸気音、雀のさえずり声、多くの歩行者の足音、急いで、せわしく、急いで。すると部屋は、室内にあるものすべてが、素早く侵入してくる重量の乗り物で揺れる、一 これはバスに違いない、と娘は考えた、一 そして今や多くの聞き慣れた物音の中、聞き慣れない物音がして、すぐ間近で蒸気船の警笛が鳴る、二、三回と挑むようで、苛立っている、...

娘、ゾフィー・コヴァレフスキーは自分の決意に忠実であった。別れに彼女は旧市街の散歩に出掛け、今やヴァイデンダム橋のとあるホテルに泊まっていた、一 それ故警笛を鳴らしながら、シュプレー川を蒸気船が航行している、一 それともここは全くシュプレー川ではないのかしら。

こっそりと、男を起こさないように用心して、ゾフィー・コヴァレフスキーはベッドから滑り降り、そのまま窓際に走って、カーテンの端を持ち上げた。輝かしい青空が鉄橋のアーチの上に見えた。

ノイローエでは素晴らしい天気にも恵まれる、とゾフィーは考えた。すごいことになる。森の入口の一本の木の下に横たわって、肌をこんがり焼く。...恵み深い奥方はいず、...水着は在庫不足通知、...そして夕方、月が高く昇ったら、素っ裸になって、森の真ん中の冷たいザリガニの池に入る、...

彼女はカーテンの端を放した。そして素早く洗面と着衣を済ませた。ほんの少しすぎ、手早くうがいをして、一 こうしたすべては更に徹底的に宿坊で出来るし、列車が出るまでの時間は十分にある。ある喜ばしい緊張、間近の幸福の予感といったものに彼女は包まれた。...ノイローエ、消防ポンプ小屋の奥の荒れたライラックの茂み、そこで最初のキスの経験をした。いや、神様、宿坊で新しい下着を着ることにしよう。この今着ているものは反吐が出る、...

ゾフィー・コヴァレフスキーは用意が出来た。手に小さなバッグを持って、彼女は立っていて、躊躇ってベッドを窺っていた。彼女は二歩近付いて、小声で言った。とても用心して、「ねえ、坊や、...」。

無言。

今一度、「私は行くわよ、ダーリン、...」。

無言。ただ鼻から微かに音が鳴っている、...

ゾフィーが今この眠っている男の服を鋭く覗いたのは、突然の思い付きではなかった。服は雑然と椅子の上投げられていた。ちなみに彼女は目覚めて以来ずっと、このつまらな

い夜に関し、少なくともノイローエまでの旅賃ぐらい何とかならないか考えていた。今は少しばかり自分の金に配慮しなければならない。ノイローエでは新しい金は入らないのだから。素早く彼女は椅子に向かって、最初の一握りで財布を掴んだ（彼が財布をどこへ仕舞うか昨夜ずっと注意していたのだ）、そして開けた、...

財布には大して金はなかった、 — いや、昨夕、シャンパンに何百万マルクもの金を出した男にしては元来とてもわずかなものであった。ゾフィーは一瞬躊躇った。彼女は服を一瞥した。女目で、それは多分に丁寧に大事にされてきた服であるが、少しも新調の服ではない、と分かった。ひょっとしたらこの男は一晚の豪勢な外出のために有り金を掻き集めたのかもしれない。そのような男がいるものである。ゾフィーは知っていた。彼らは貯めに貯めて、自らにこのような晩の世界を夢に描くのである、今までに経験したことのないような幸福を、...

それから彼らは翌朝目覚める、素面になって、絶望して、すっからかんになって、...

躊躇いながら、ゾフィーは、財布を手にして立っていた。彼女の視線はわずかな紙幣と服と睡眠者の間を行き来した。...

こんな端金ではしょうもないと彼女は考えた。早速彼女は紙幣を財布に戻そうとした。

でもあのハンスなら私のことを笑いそう、と彼女は突然考えた。ハンスはそんな馬鹿ではない。すべてかっさらえと彼はいつも言っている。礼儀正しい者は馬鹿だ。いい気味だ、この人は次回もっと注意するようになるだろう。

彼女は金を奪った。今一度考えた。少なくとも乗車賃を残しておこうかしら。きっとオフィスに向かうことだろう。少なくとも定刻にオフィスに着けるように。

そしてまた別の声が出た。この人が定刻にオフィスに着こうと、私に何の関係があろう。私が家に帰れるよう私のことを案じてくれる人があったかしら。紳士の殿方達は路上に私を放置していた。玄関のドアを私に開けてくれることはなかった。まず本気になったら、私をタクシーから降ろしていた。ここで乗車賃はない。

彼女は自分の決心をまことに誇らしく思った。怒るように決意してわずかな金を自分の財布に詰めた。君、いい気味だね、とハンスなら言うことだろう。やはり私は正しい。奪わない者は、奪われる。噛みつかない者は、噛みつかれる。良い朝を[お早うさん]。

軽快に、満足して彼女は階段を下りて行った。

75

黒人マイヤーはすんでの所で死を免れる

すでに明るくなっていた、 — 森でもそうであった。小さな、先の田畑検査官マイヤーは憤然と区画線に沿って踏みしめながら歩いていた。スーツケースは余りに重く、靴はきつく、余りに金がわずかで、グリュノーまでの道は余りに遠すぎて、睡眠不足の上、頭は七匹の猿のように痛かった。 — 彼はこうしたわずかなことしか考えていなかった。

その中の最も考えたくなかったものが、突然大地から飛び出たかのように道に現れた。少尉であった。

しかし彼はすこぶる好意的であった。「お早う、マイヤー」と彼は言った、「貴方に『あばよ』と言おうと思ってな」。

マイヤーは疑り深く見つめた、「それじゃ、あばよ、少尉殿」。

「落ち着いて先に行くがいい、スーツケースを取って、更に急ぐのだ。ちょっと一緒に進もう」。

しかしマイヤーは立ち止まった。「私は一人っきりで行くのがいいです」と彼は言った。

「まあ、まあ」と少尉は笑いながら言った。彼の笑いは偽りに見えるとマイヤーは思った、それに彼の声はぎこちない、と。「貴方は私を不安に思うことはないだろう。それに貴方はポケットにピストルを持っている」。

「私がポケットに何を持っているか、貴方には何の関係もねえことです」とマイヤーは苛ついて叫んだ、しかし彼の声は震えていた。

「本来ならその通り」と少尉は同意した、「しかし今私には大事なんだ、つまり私はもう疑われないのだ」。

「何故疑われないのです」とマイヤーはどもった。

「貴方がこの森のどこかで死体で見つかったらな、マイヤーさん」と少尉は丁重に、しかし辛辣に真面目に言った。

「私が — 死体で — おかしなことを、…」と小マイヤーは色を失ってつかえ、相手の顔を窺った。「私は貴方に何もしていませんよ、少尉殿」。

嘆願しながら、不安一杯に彼は相手の目を覗き込んだ、しかし何も読み取れなかった。皆無で、目は冷たく光っていた。

「つまり貴方のピストルと私のピストルは同じ口径だ」と少尉は情け容赦なく説明した、「マイヤー、ピストルを携帯するとは、大間抜けだ、...それに先ほど銃身は撃ったばかりだし、...しかしマイヤーさん、貴方より私のは上手く当たるぞ。今都合良く私は貴方の右手にいる。右手のこめかみに二十センチの所から至近発射する。...射撃の専門家なら誰でも自殺と言う、親愛なるマイヤーさん。それに家では金庫が荒らされていて、...娘に発砲だ。 — いや、いや、マイヤーさん。思案するに及ばない、疑いを容れない、すべては自殺を物語っている」。

少尉は次々に語った。とても優位な振りをした。しかし見せかけほど多分冷静ではなかった。戦争中とか激して誰かに発砲するのは、少し違う。冷血に、犠牲者を合理的考察の末に、射殺するのとも、また少し違う。彼は今一度整然と、自分は何の「リスク」も冒さない、この件は何の危険もなく、裏切り者を消せると言い募った。

そしてその際秘かに、 — 射撃の専門家として、マイヤーが尻ポケットのピストルに急いで手を伸ばす — という危機を願っていた。少尉が先駆けて素早く射撃する方が、灰色の、すでにとても小さく細くなったきた顔に冷静に冷血に射撃するよりもはるかに楽であろう。

しかしマイヤーは少しも自身のポケットのピストルのことは考えていなかった。彼はどもって言った。「少尉殿、誓います、私は貴方とヴァイオ令嬢のことは一言も話さない、と。...それに一揆[クーデター]のことも言いません。..約束します、少尉殿、貴方に捕まえられること、貴方あるいは貴方の仲間の一人に捕まえられること、それにいつもびくびくしているのです。私は臆病者で、...ですから撃たないでください — 畏れ多いものすべてにかけて、誓います、...」。

彼の声は出なくなった、彼はしゃっくりを上げ、不安一杯に少尉を見つめた、....

「貴方に恐れ多いものは何もないだろう、マイヤー」と少尉は言った。彼は相変わらず決断できなかった。「貴方は全身豚だ、マイヤー」。

小マイヤー、黒人マイヤーは息も吐かず相手の唇を見つめていて、今や急いで囁いた、「私は心を入れ替えます、信じてください、少尉殿、心を入れ替えます、まだ若いのです。どうか『よろしい』と言ってください。言ってください。帰ります、またノイローエへ帰ります、騎兵隊長に金をくすねたと白状します。刑務所におち込むと言われたら、喜んで入ります。改心に努めます、どんなに難しくても、...どうか、どうか、少尉殿」。

少尉は陰気に頭を振った。いや彼はまずこやつに話しかけるべきではなかったろう。ただ即刻、一言も言わず、片付けるべきであったろう。しかし今となつては、...ますます厭わしいことになってきた。少尉は実際、心底無情ではなかった。彼は自分を騙していなかった。彼は自分だけがこの若造を巻き添えにしたと分かっていた。若造は死ななければならない、自分、少尉は小さなブラックヴィッツ嬢とのいい仲を手放せないのだから、...。ひどい話した。しかし仕方ない。今やマイヤーは知りすぎている。余りに危険だ、自分に致命的ピストルが向けられていると知ってから、更に一層危険なものになっている。

「スーツケース[二個]を持ちなさい、マイヤー、更にちょっと行こう」。

抗う痕跡を見せず、羊のように従順にマイヤーはスーツケースを持って、少尉を問うように見つめた。

「上の方へ、区画線に沿って」と少尉は命じた。

スーツケースを持ったマイヤーは先に行つた。彼は両肩をすくめていた、あたかも背後からの恐ろしい射撃を避けられるかのようにであった。スーツケースはもはや重くなく、靴はもはやきつくない。彼は急いで行く、背後に迫って来る死から逃が去れるかのように。

まず終わってしまえばいい、と少尉は考えた。目を先行者に注意深く向けていた。しかしこの区画線は実に人目に付きやすい。彼を見つけるのは私が姿を消してから、三、四日後が望ましい。...

こうした考えに彼は反吐を覚えた。何か非現実的で、何か荒廃した夢のようであった。しかしここで目の前に男が歩いている。生きた男で、これは夢ではない、いつでも本当のことになり得る。...

「今度は左手へ、小道を上がれ、マイヤー」。

羊のように従順だ、反吐が出る。いや、向こうの高台で実行しよう、実行しなければならぬ。裏切り者は永遠に裏切り者だ。裏切り者は変わらない。改善しない、...仕方ない、...

あのマイヤーは何をする、何を叫んでいる。狂ったのか。

今や彼は駆け始めた。彼はますます大声で叫んでいる。彼はスーツケースを少尉の足許へ投げ付けた。

少尉はピストルを高く上げた、一 遅すぎた。至近距離から発射しなければ、自殺の信憑性が失われる。...

「すぐに行きます、森林官殿、ほら」とマイヤーは叫んで、駆けた。

そこに森林官クニブッシュが立っていた。横にはブルーベリーの茂みと苔の中、括られた男が横たわっていた。

「有り難い、来てくれて。お二人、私は本当に奴を引き連れて行くのに難儀している。

数時間前から奴を連れてくるんだ、...」。

森林官クニーブッシュはお喋りを止めなかった。ようやくこの危険な男と二人っきりでいることから解放される。

「アルトローエ出身のボーイマーです。 — 知っているだろう、マイヤー、一味全体の中で最も悪だ。少尉殿、手柄を立てました、この男は犯罪者です」。

少尉は一本の木に寄りかかっていた。彼の顔は白くなっていた。しかし彼は平静に言った、「森林官、そうだな、手柄を立てた。しかし私の方へと」。

彼は憎悪に満ちて小マイヤーを見つめた。マイヤーは視線に — 反抗的に、勝ち誇って答えた、...。

「それでは、お早うだ、あんじょう頼むぞ」と少尉は突然言って、向きを変え、再び森の道を区画線へと下って行った。彼は投げ棄てられていたスーツケースの所に来ると、我慢できず、まず強く一方のスーツケースを踏み、それからもう一つのスーツケースを踏んだ。

「おやま」と森林官は訝しく言った、「奴は何をする。何故あんなおかしなことをするんだ。集会が面白くなかったのか。私は皆をきちんと集めたぞ。マイヤー、おまえには分かるか」。

「それはな」と小さなマイヤーは言った、「私には分かる。おまえさんに腹を立てているんだ」。

「私にだと」と森林官は驚いた、「どうしてだ」。

「おまえが雄山羊を撃たなかったからだ。分かるだろう、恵み深いご令嬢のための雄山羊をな」とマイヤーは言った。「ま、来な、クニーブッシュ、一緒に農園中庭へ行こう。私は狩猟馬車を用意するから、それでこやつと私のスーツケースを取りに来よう」。

「おまえのスーツケースか。おまえのか。旅するのか」。

「いや、その。 — あれは少尉のスーツケースだ。すべて話して聞かそう。むしろ一緒に並んで行こう。いや、こんなに後先に並んでは上手く話せない、...」。

76

パーゲルは自分の荷物を受け取る

タクシーがタンネン通りで止まった。運転手を説得して、一緒に上がって、品物を取りに行くよう説得するのに骨が折れた、...。

「兄ちゃんよ、今時分は誰も出歩かないと仰有るけどよ。しかしここベルリンでは泥棒がいつも出歩いているぞ。特に今の時間だ。誰がわしに新しいタイヤを買ってくれるかい。手に入らないぞ。おたくには無理だろう」。

「いや、分かったよ、更にシュレーゲン駅まで向かうだろう。一杯のビールとシュナップスにありつけると言うわな。わしはコーヒーの方がいいけどよ。 — 小さな声でと言うのか。金を巻き上げるときの政府のように秘かにしているだろう。奴等の声も聞こえはしねえ。それでもおたくの金は取られているんだ、首かけていい」。

「立派な家だな、 — ちょっと陰気だが、 — セントラル・ヒーティングじゃないのだろう。しかしガスだ。ガスがあるのか。家にガスがあると、練炭はいらないし、首つ

り用の紐もいらんわな。...分かった、静かにするよ。しかしわしの半分もおたくは静かにしちやいねえぞ。 — 例えばその錠だ、わしならもっとそっと扱っているだろうに、...ずらかるつもりか、兄ちゃん、家賃をちょっと滞納しているのか」。

「まあ、そんなに命令するな、わしも戦争に行ったんだ、生意気言ったら、大声だすぞ、そしたら壁の絵が落ちる。ほら、 — すぐにおとなしくなったな、...ほう、これがおたくの所謂一つの小屋か。いやすごいな、ちょっとしたものだ。こんな母親の許で見たことないぞ。...その上衣裳トランクも。...だったら二回運ぶことになるか、兄ちゃん、...」。

「おや、あそこの寝椅子に寝ているのは誰だ。おったまげた。老いたご夫人だ。すやすや眠っている。いやもう声は出さないことにしよう、起こしちやいけねえ。十分寝るに値する、一晩中荷造りしてよ、この老いたご夫人が。 — 泊まりの方じゃなくて、おたくの恵み深い母上様か。そうか、すぐにそう思ったぞ。しかしわしなら、『お達者で』とか『道中気をつけます』と言うな。一晩中おたくを待っていたんだろうからな。...うるせえ、か。そうか、若さは不徳の至りだのう。わしもおたくの年では変わりなかった。...それで、時にわしもつらくなる。母が死んで、マタイ教会墓地に葬られた今となってからのう。...誰もが同じ過ちをするものだ、その代わり皆が皆同じでないように、...」。

「まあ、取りかかろう。わしの背中に衣裳トランクを乗せなさい。わしが一人で済ませてやろう。すぐにまた来るよ、いやか。一緒に下りるか。ま、構わん。誰でもご随意に、誰でも、馬鹿丸出しで、とわしはのたまう」。

「いや、少なくともこれだけはだな。この老いたご夫人に数行書きなさい。何か思いやりのあるものをな。まやかしてもな。母親はいつも喜ぶものだ、子供は騙していると分かっているもな。私につらい思いをさせたくないのだ、と思うのだよ、...」。

「それじゃ、ずらかろう。...こっそりと兄ちゃん、ドアの所はそつとな。...今、母親を起こしたら、やんぬるかなだ。...逃げるとき捕まったら、恥ずかしい。用心して、注意、阿呆じゃないか、起こしてしまうぞ。やれやれ、上手く行った。...ただそつと玄関のドアは閉めるんだ。こっそりと、言ったろう、兄ちゃん。こっそりというのはびっくりさせることじゃないぞ。 — いやおたくの心臓もどきどきしたか。老いたご夫人を起こすんじゃないかと心配したぞ。いや、わしもおかしいのう。おたくのような男の顔は殴って構わんと、わしは思わんが、しかしご夫人は思うだろう、...」。

77

リーブシュナーは屋外作業を手に入れる

臭っていた、 — マイエンブルクの監獄のすべての通路、階段、すべての寝室、独房、仕事場、作業場で臭っていた。便所のバケツ、消毒液、摘み取らなければならない古い麻の屑、腐りかけた乾燥野菜の臭い、棒鱈、それに古いソックス、ココ椰子繊維、それにフロアーワックスで、 — 厚く、暑い、使い古された悪臭の大气であった。昨日はマイエンブルク監獄にも雷雨が降りかかった。しかし湿って、涼しい雨風はセメントと鋼とガラスからなる町の上の白い宮殿、この巨大な建築に侵入してくることが出来なかった。

「くそ、忌々しい、またしても臭うぞ」と五時四十五分にやって来た朝番の役人どもが言った。

「まあ、こちらの臭いのひどいこと」と棟の巡査長も言って、模範囚[手伝いの囚人]ハンス・リーブシュナーの肋骨を手ひどく叩いて起こした。「おい、起きろ、十分したらバケツ排便だ。いやはや、すでにここの臭いはたまらな。朝のコーヒーをすべて戻しそうだ」。

「何も臭いませんが、巡査部長殿」とリーブシュナーは誓って、すばやくズボンを穿いた。

「私は巡査長であった、巡査部長ではないともう十回おまえに言っとろう」と老公は不平を言った、「私によいしょしても、何もありませんぞ、リーブシュナー」。

「でもありつきたいのであります、巡査部長殿」とにんまりと、目玉をわざと大げさにむき出しておべっかを言った。

「何にありつきたいのだ、息子よ」とこの役人はドアに寄りかかって、肩で重たい鋼の板のドアを前後に揺すって、満更でもなく模範囚を見つめた、「抜け目ない奴だ」。

「屋外作業に行きたいのです。収穫分遣隊の」とリーブシュナーは言った、「それに選んで頂けますならば、巡査部長殿」。

「何故だ、おい、ここでは模範囚に甘んずるしかないのだぞ」。

「しかしこの臭いに耐えられないのであります」と囚人は情けない声で訴えた、「頭がくらくらします。そもそも食べられません。つまりこの臭いがいつもこたえるのです」。

「何も臭わないと言ったばかりではないか、息子よ、おまえの腹づもりを言ってやろう。逃げたいのだろう、－ ずらかって、－ 娘どもの所に行きたいのだろう、－ それは駄目だ、ここに残れ」。－ 全く事務的に言った、「その上、監獄の囚人は少なくとも刑期の半分を終えていなければ、屋外作業には行けん」。

囚人は黙って、頭を下げて、靴紐を結んだ。巡査長は更に鋼のドアを揺する続けて、垂れて、刈り取られた頭蓋を見つめていた。

「巡査長殿、...」と囚人リーブシュナーは言って、決然として見上げた。

「何だ」。

「私は密告を好みません。しかし仕方ないときは、します。もはや房で黙って見過ごせません。狂いそうです、...」。

「そう簡単に狂いはせん、息子よ」。

「しかし鋼の鋸を持っている者を知っています。その名前を言ったら、屋外作業に行けると誓ってくださいますか、...」。

「ここでは鋼の鋸を持つものなどおらん」。

「いるのです、－ それも貴方の棟に」。

「あり得ん、－ それに屋外分遣隊を決めるのは私ではない、作業検査官だ」。

「しかし貴方のお墨付きがあれば、行けます」。

長い沈黙。

「誰が鋸を持っているのだ」。

「私は屋外分遣隊に行けますか」。

「構わんだらう、－ 誰が持っている」。

「小声で、巡査長殿、小声でお願いします。耳許に囁きます。ただ私のことを口外しないでください、－ 奴等に殺されてしまいます、作業広間に出たときに」。

小声で囚人は巡査長の耳許に囁いた。巡査長は頷き、小声で尋ね、傾聴し、再び頷いた。

下の方で鐘が鳴って、棟から棟へ叫び声がした。「バケツ排便、バケツ排便」。

巡査長は起き上がった、「いや結構、リーブシュナー、その通りなら、貴方は分遣隊に行けよう。 — そんな汚い手を使っていたか、 — 締め上げてやる。だが急げ、おい、素早くバケツ排便だ。ちょっと急いでな、瞬時に臭いを片付けるのだ」。

78

ペートルアも起きる

マイエンブルク監獄では朝の鐘は六時に鳴る。ベルリンのアレクサンダー広場の警察拘留所では六時半で、それから囚人は目覚めて良く、夜が終わって、また何か起きる、
— ひょっとしたら自身の身にさえ起きるかもしれないと知ることになる。

ペートルアは素早い鐘の音で目覚めた。一瞬なお彼女は、目を開けたとき、眼前にヴォルフの顔の影が見えた。それは微笑していて、 — それから多くが黒くなり、一人の老夫人が（ヴォルフガングの母か）彼女に厳しく高飛車に多くの意地悪なことを言った。...その黒いものから一本の木が浮かんで来た。葉が落ちていて、刃向かって脅すような枝が一杯で、 — ヴォルフガングがよく口ずさんでいた一つの詩句が耳に響いて来た。木にはぶら下がらない、首つりなんかしない、[夢は自由な共和国、Heckerlied]...

さて両目が広く開いた。ジプシー女達はすでにまたその隅でお喋りしていた。多くの身振りを交えて、マットの上にしゃがんでいた。背の高い女はまだベッドに寝ていた。大きくすくめた肩はびくついていて。従って彼女はもうまた泣いていた。小さな太った女は掌大の扇の鏡の前に立っていて、口で人差し指を湿らして、それで眉の上をなぞっていた。クルーバス夫人はベッドに垂直に座っていて、そのみすぼらしいお下げを編んでいた。
— 毛布に包まれた女は動かず床に寝ていた。...

窓の前、諸々の屋根の上に、格子で区切られて、鈍い青色の空が穏やかに陽を受けていた。 — そう、新しい一日が、新しく始動する。甕にはもうほとんど水がない、 — どのように洗面するのだろうか。

老婆は頷いた、「いいかい、姉ちゃん、昨夜約束したこと、それに変わりはないか。それとも別な風に考えたかい」。

「変わりはありません」。

「私の感じではね、あんたは今日にも出られる。全く思いがけずにな。もうお互い会えないとなったら、キリッヒの所へ行くんだ、 — ワルシャワ橋の弁護士キリッヒだ、
— 覚えているかい」。

「弁護士のキリッヒですね、ワルシャワ橋、...」とペートルアは繰り返した。

「その通り、すぐ行きなさい、 — しかしあんたの様子ときたら。まだあの男のことを考えているのか」。

「いいえ」。

「おや、おや」。

「でもあの人の夢を見たように思います」。

「そうか、 — まあ、差し当たりその人のことは忘れられんだろう。自然と時と共に収まる、夢もな。しかし夜焼いたジャガイモを食べちゃいかんぞ。ランドルフの奥さんに

はいつも冷たい肉を出すように言いなさい。夜に焼いたジャガイモを、特にタマネギと一緒に食べると夢を見るんだ。姉ちゃん、それだけは食べちゃいかんぞ、一分かったかい」。

「はい」とペートラは言った、「でも私はそれほど敏感ではありません」。

「そんな男の人をどうやって消してしまうつもりかね。男どもは十分にいる。多すぎるほどいる。そんな者、縁を切ってしまえ。いつも冷たい肉と一杯のフォン・パツェンホーフ・ビールだ。すると一層良く眠れる。きっとあんたは上手くやるだろう。私は心配していないよ」。

「私も心配していません」。

「さあ、今はあんたの受け持ちの病人を見なさい。全く、あれが忘れられんようだな。羊はいつまでたっても羊だ。改善の見込みなし、一姉ちゃんよ」。

「はい」とペートラは尋ねて、今一度振り向いた。

「あんたはどうしようもないと思っているのだ、一その男が反対側の路上にいて、口笛を吹いて、指で合図したら、一あんたはもう駆けて行く、私の立派な階から、素敵な脂身のある食事から、浴室、ベッドからな、一立っていたそのままの姿で、駆けて行くのだろう」。

夫人は新たに邪推を抱いて、その老いた目からペートラを見つめた。

「まあ、クルーパスおっ母さん」とペートラは微笑して言った、「今はあの人のことは考えていません。いつもまず、そのことです」。

彼女は今一瞬、クルーパス夫人を見つめ、それから頷き、彼女の敵の女、灰鷹、病気の女をほどくことに取りかかった。

79

ヴァイオは野蛮なことを報告する

従者のフーベルト・レーダーはもう起きて、仕事に掛かっていた。その時ヴァイオが頬を紅潮させて別荘に帰って来た。

「お早う、フーベルト」と彼女は叫んだ、「また貴方はそんなに掃除にはまっている。ママがすでにそれは何度も禁じたでしょう」。

「女性陣には分かって頂けません」とレーダーは揺るがず、確言した。そして自分の仕事を真剣な、しかし肯う目で見つめた。

今日は騎兵隊長殿が帰って来るので、部屋は徹底的に掃除されなければならない。しかし従者レーダーのやり方は、まず部屋の一方の側を掃除し、雑巾がけし、ワックスをかけ、磨き上げ、埃を拭き取って、一然る後、反対側を始めるのである。かくてフォン・ブラックヴィッツ夫人は完全に絶望し、彼に再三説明するのであった。綺麗な側が、反対側を掃除するとき、いつもまた埃で一杯になるでしょう、と...

「その通りです、恵み深い奥方様」とそのとき従者レーダーは言う、「しかし私が別な仕事へと呼ばれたとき、騎兵隊長殿は少なくとも清潔な側を得られていて、そこに住めるわけです、...」。

そして彼は、ラバよりも頑固に、更に自分の流儀で掃除した。

今度もまた彼は言った、「女性方には分かって頂けません」。そして強調して言い添えた、「恵み深い奥方様はすでに二回くしゃみされました、御令嬢」。

「分かったわ、フーベルト」とヴァイオは熱く言った、「結構よ。私はすぐ自分の部屋へ行き、少しばかり洗面し、着替えます。そして寝ていたかのように、ベッドに素早く寝跡をつけましょう。 — いや、駄目だ、そんなのは必要ないわ。ベッドに寝ていたとする必要はない。昨夜起きたことすべてをママとパパに話すとなったら」。

「とにかく素早くなさってください」とレーダーは言って、床磨きブラシを見事な慎重さで動かした。「恵み深い奥方様はくしゃみをなさんと、いつもすぐに起床されます」。

「あら、フーベルト、あんた、そんな阿呆なこと言わないで」とヴァイオは非難一杯に叫んだ、「あんた、好奇心ではじけるわよ。 — あのね、小マイヤーは金庫から持ち逃げしたのよ。でも今はまた戻って来た。老クニーブッシュはボイマーを捕まえたの。でもまだこちらに連れて来ていない。森の中に縛られているのよ。御者のハルティヒが馬を繋いで、今、皆で出掛けているの。ハルティヒにクニーブッシュ、マイヤーよ、ボイマーを連れにね。 — 気を失っているの、 — そんな阿呆面なさらないでください」とヴァイオとは憤然と叫んだ、「床磨きブラシは止めなさい、 — これらに対するご意見は、フーベルト」。

「貴女は私に二回、『あんた』と仰有いました、恵み深いご令嬢」と従者レーダーは冷静に言った、「騎兵隊長殿はその言葉遣いが嫌いだとご存じでしょう、私にもじっくり合うとは申せません、...」。

「まあ、あんたって老いた羊頭ね」と彼女は叫んだ、「私が貴方に何というか、私の勝手でしょう。老いぼれの鱈には貴方と言えません。そうよ、貴方は老いぼれの鱈、老いぼれの棒鱈。私が話すことをもっと良く聞きなさい、貴方も同道したんですからね。ママに尋ねられたとき、ばらさないでよ、...」。

「済みません、恵み深い御令嬢。私は同道していません。そんな野蛮なことが起きたとき、私は居合わせていません。私も自分の評判が大事です。御領主一家の従者ですから、 — 金庫泥や密猟とは一切関知しません。ユニフォーム[軍服]達に関しても同じです。 — 私は関知しません」。

「でもね、フーベルト」と非難一杯にヴァイオは言った、「ママに、同道するよう言われたことは覚えているでしょう。私どもを裏切らないわよね」。

「残念です、恵み深い御令嬢。そうは行きません。 — ペルシア絨毯から離れて頂けますか。その総飾りを整えなければなりません。絨毯にそもそもこのような総飾りがあるのは何故でしょうか。いつも無様にもつれて見えて、ただ、もっと働けということなんです、...」。

「フーベルト」とヴァイオはととても懇願するように言って、突然全く小声になった、「貴方は野蛮な話しに関して、同道していないとママに告げるつもりじゃないでしょうね」。

「勿論、恵み深い御令嬢」とフーベルトは言って、総飾りを伸ばした、「私は農園中庭ですぐに鼻血を出してしまい、後を追おうと思って、貴女を見失いました。貴女は猟用低木林に沿った道を歩まれていたからで、私が野獣餌場近くの区画線を上がって行きましたら、...」。

「有り難いわ」とヴァイオは深く息をした、「貴方は本当に礼儀正しい方ね、フーベル

ト」。

「そもそもちょっとだけ愚考致しますならば」とフーベルトは揺るがず、続けた、「恵み深い奥方様に何を貴女は話されたらいいか。検査官マイヤーについては私なら余り話しません。ー それに密猟者ポイマーの件ですが。奴を森林官が捕まえたのであれば、恵み深いご令嬢は居合わせなければなりません。何と貴女は森林官と口裏を合わせたのです」。

「何も合わせていないの、フーベルト。あの人はすぐまた森へ戻ったのよ、ー 検査官と一緒に」。

「ほら、ご覧なさい。では貴女が雄山羊を撃ったのですか。それとも森林官ですか。森林官も撃っていないのですか。でも一発の銃声を聞いたように思います、今日の朝方」。

「まあ、フーベルト、フーベルト。それがまた素っ頓狂な話しで、まだ話してなかったけど。本当にあの小さなマイヤーが家禽番のアマンダ・バックス目がけて撃ったのよ」。

「恵み深い御令嬢」とフーベルトは厳しく言って、その無表情の魚の目を彼女に向けた、「それは聞かなかったことにします。そんなまことに野蛮なこと一切、私は関知しません、...」。

「でも娘には当たらなかったの。彼は酔っ払っていた」。

「もうお部屋へ行かれて、お着替えをなさってください」とフーベルト・レーダーは言っ、この上なく興奮していた。「いや、もうここから出て行ってください。私はこの掃除をしなければなりませんし、邪魔です、...」。

「フーベルト、命令しないで。私は居たいところに、居るのだから、...」。

「それで私は自分の申し立てをよくよく考えてみたのですが、一番良いのは、貴女が何も仰有らないことで、私が鼻血を出したとき、私と一緒に帰ったことにするのです。...しかしこれでは片付かないでしょう。ー 今日の午後にも大層な噂話が流れ出て、 tonightにはこの家に警察が来るでしょう。...私は自分のアリバイは作ってあります。二枚の血の着いたハンカチがありますし、一時半にアルムガルトの許にノックして、何時かと聞いたのです。私の目覚ましが止まったから、と。止まっていなかったのですが。...それで私は何も存じませんし、貴女とここで話してもいないわけです、ー 鼻血を出してから、貴女と会っていません、...。お早うございます、恵み深い奥方様、ゆっくりお休みになれましたか。いや、私はここで誠心誠意掃除しています、ただ真空掃除機が壊れまして、しかしこれはアルムガルトのせいで、恵み深い奥方様、しかし何とかやっています。...お許しください、私は恵み深いご令嬢を森まで同道致しておりません、...ただ、とても鼻血がひどくて、睡眠が足りないようになります。...睡眠不足の時、子供時分から経験しております、...」。

「フーベルト、もうお話しを止めて頂けますか。貴方が口を開くと、そのたび言いますが。ー それで、あなた、ヴァイオ、まだ狩猟服だけど。ー 狩猟の成果はあったの、それとも待ち伏せは無駄だったの」。

「まあ、ママ、何てことを体験したのでしょうか。すごかったわ。そう、雄山羊は仕留められました。でも私が撃ったのではなく、分かるかしら、ー でもママには絶対分からない人、ー あのポイマーが撃ったのよ。ー でもその人、知ってるでしょう、ママ、アルトローエ出身の密猟者よ、お祖父ちゃんがいつも罵っている人。...そしてクニーブツ

シュがその人を逮捕したの、勿論ボイマーをよ。でも雄山羊も手に入れたわ。...それで今皆、森へ向かっている、その人を連れにね。その人は今、意識がなくて。そして検査官マイヤーが、...」。

「今ここで掃除を続けていいですか」と従者レーダーが全く例になく強調して遮った。

それで恵み深い奥方は言った、「それじゃ、ヴァイオ、向こうの私の所へ行きましょう。洗いざらいすべて話しなさい。...あなたはそれに居合わせたわけね。話しを聞いたらもっと驚くわね。...でもパパも、ボイマーが片付いたと知ったら喜ぶでしょう。どうして意識を失ったの。クニーブッシュが彼を撃ったの。いつも父には言っているのよ、クニーブッシュの方がもっと良い、と。...」

二人は去った、一 従者レーダーは立っていて、真剣に頷いた。差し当たり万事上手く行っている。差し当たりまだ恵み深い奥方は話しておられて、...

しかし騎兵隊長が戻って来て、尋ねたら、どうなるか。

80

騎兵隊長とその郎党

騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツは急いでタクシーから飛び降りて、支払い、階段をシュレーゲン駅の入口ホールへ向かって上がって行った。まだ列車の発車までには優に三十分あった。しかし彼は更に自分の郎党の一団を斡旋者から引き継がなければならず、この男と精算をし、団体乗車券を発行して貰わなければならなかった。...

徹夜していたにもかかわらず、騎兵隊長はやる気があって、希望に満ちていると感じていた。一 自分が一人ではなく、もはや友人も連れずにノイローエに帰るわけではないということは、結構なことであった。それにここシュレーゲン駅ですでに何か東部の風が吹いている。アレクサンダー広場で考えるのは単にベルリンのことだけで、ただ巨大な都市を感ずるのみである。一 ここシュレーゲン駅では、畑や収穫のことを考える。...ノイローエの収穫を立派に取り入れることは大事だ。

稲妻に打たれたかのように騎兵隊長はドアのアーチの下に立ち止まっていた。彼は立って、見つめ、窺った。一 苛々して彼は頭を振って、荷物運搬人を自らから遠ざけた。...そして彼は後ずさった、見つかることを大変不安に思っていた。...

実際そうで、ただこれは彼の場合に考えられることであった。雇い主が被雇用者を恐れて隠れ、彼らを見て不安に襲われたのである。

向こうの階段の所に彼らは立っていた、一塊、一群れであって、一 騎兵隊長はこれが自分の郎党であろうということに一瞬も疑念を抱かなかった。斡旋者はこの瞬間姿が見えなかったのであるが。

「やんぬるかな」と騎兵隊長は深く傷付いた心で呻いた。「このような連中が私の所でライ麦を禾束堆にし、ジャガイモを掘るつもりだ、この群れがノイローエに暮らすのか、...」。

若造は、広いつばの帽子をいかれて耳許に傾けて、ちびた煙草を口の隅にくわえ、とてつもなく広い、鋭くプレスされたズボンと靴先まで垂らし、チャップリン風小杖をコケットに手にしている。...他の若衆は、長い髪の房で、襟がないか、汚れたシラー襟[上着の

上に出す襟]で、胸の上のシャツははだけていて、両腕には胸同様に青と赤の刺青をし、千切れたズボン、裸足、あるいはぶかぶかに履きつぶされた運動靴であった。...二人の街娼が、ほとんど白く、色褪せた髪で、絹のペラペラ服、エナメル革のハイヒールであった。...原始人のような男が、ニッケル縁の眼鏡で、その黒いフロックコートは悲しげにその萎びた腰部に掛かっていた、一個の胴乱が傾いた肩からの紐に掛かっていた。...更に一人の娘がいて、粉袋のように胸の上に何らかの緑色の縞模様のフランネルのブラウスを着ていた、

一 腕には叫ぶ子供を抱えていた。...

「オー我が神よ[堪らん]」と騎兵隊長は叫んだ。

一個のトランクもなく、マーガリン用箱もなく、厚紙の代用トランクすらなく、一 ただこのふくれた緑色の胴乱だけが、皆の共用トランクであった。

六十本の歯ブラシすらこの中には入っていない、ましてや六十人用シャツはない。

そしてこのすべての者が、極めて上機嫌で、笑いながら、お喋りしながら、流行歌を口ずさみながら、入り乱れて大声を上げていた。階段に掛け、二人がすでに抱き合っただけをしていた。...遠慮なく通り過ぎる旅行者に呼びかけ、嘲笑し、物乞いをしていた。...

「社長、煙草をお願い、煙草を一本ください」。そしてこの若造はびっくりしている相手の口から吸っている煙草を奪った。一 「有り難う、社長。私はそれほどひどくはないが、あつしらは皆同じ病気で、...」。

これらの一 一味にとっては、ノイローエへの旅行は、収穫物の取り入れは、一つの田舎のパーティー、恰好の冗談狼藉なのだ。

「一味徒党」と騎兵隊長は歯ざしりした。一 そして一個のスーツケースを持って到着したフォン・シュトゥットマンに興奮して言った、「これらの一味を見給え。このような連中が田舎で働くつもりだ、エナメル靴に一 プレスしたズボンで」。

「ひどいな」としばらく点検した後で、フォン・シュトゥットマンは言った、「あっさり受け入れないことだ。農作業者を頼んだのだろう」。

騎兵隊長は少しばかりうろたえて言った、「しかしこの郎党で我慢しなければならない。収穫物が外で腐ってしまう」。

「じゃ、別の者達を探そう。一日あれば調達できよう。明日出発しよう」。

「しかし、今、収穫時期に、まともな連中はいない。誰もが自分の郎党を確保している。田舎へ行こうという阿呆はいない、一 この映画館で餓死する方がましなのだ」。

「じゃ、この連中にするか、一 きっと何らかの使いものになるだろう」。

「いや、私の義父が何と言うか、私の義母が。私は末代までの笑いものとなろう、彼らは私を笑い飛ばそう。いや、私はこんな連中と行ったら、終わった男となる。こいつらは皆、売春婦にそのひもだ」。

「かなり救い難い風に奴等に見えるな。一 しかし労働者が必要というのであれば、

一 ではどうするつもりだ」。

騎兵隊長は直接の返事を避けた、「言っておくが、シュトゥットマン」と彼は苛立って言った、「私は要領が悪いのだ。私は農業主じゃない。私の義父の言う通りなのだ。私は読書し、熟考し、朝から晩まで駆け回っている。しかし私は多くのへまを仕出かしている、白状すると。それはただ、私がこつを呑み込めないからだ。...そして今本当に畑で育てて来て、大豊作というわけではないが、しかしほどほどに育てている。一 それは外の畑

にあって、取り入れなければならん。 — それがこの様だ。人がいない。お手上げだ」。

「しかし他の人々は郎党を押さえているのに、君にはなぜいないのだ。済まん、ブラックヴィッツ。しかし君は先ほど自分で言ったぞ、皆自分の郎党を確保している」と。

「私には金がないからだ。他の連中は郎党と春に契約している。私はずっと自分で凌いで来て、最後の瞬間にまで契約を延期しているのだ。賃金を節約するためにな。...シュトゥットマン、私の義父は金持ちの男で、大金持ちだ。しかし私は無一文。借金をしているのだ。義父は農園中庭を、すべての道具一式そのまま、私に賃貸しし、請け負わせている。私は道具に金を使っていない。これまではそれでもずっと切り抜けてきた。少しばかりジャガイモを、少しばかり家畜を売って、これは賃金をもたらし、また我々は生活をしてきた。そして今、今、金が必要だ。さもないと私は終わってしまう。完全に破産だ。しかし金はある、畑にあるのだ。 — ただ乗り入れて、脱穀し、供給すればいい。そして金を持参して、この郎党を手に入れたわけだ。首を吊らなければなるまい」。

「今何百万の失業者がいるのか分からんが」とシュトゥットマンは言った、「日ごとに増えている。しかし仕事に対して労働者がいないのか」。

フォン・ブラックヴィッツは聞いていなかった。「この連中は採用せん」と彼は決然と激して言った、「ひょっとしたら少しぐらいは働いてくれるかもしれん、最初の時期、帰る旅費もなく、空腹のときにはな。しかし私は里の一带全体とそれに親しい親戚の笑いものになりたくない。この郎党の家が妓楼になっちゃいかん。 — まあ、見てみる、あの階段の二人がいちゃついている様を、 — 厭わしい、 — 反吐が出る、 — 私は我がノイローエを台無しにはせん。アウトローエの連中だけでもうんざりなのに、...いや、私は連れて行かん」。

「その代わりどうするのだ。人手は必要なんだろう」。

「計画を話すとな、シュトゥットマン。私は監獄に電話する。我々の近くの一帯にマイエンブルク監獄がある。監獄の分遣隊を派遣して貰う。ここの連中より、 — むしろその連中だ。手にカービン銃を持った、二、三人の正規の巡査と一緒に。監獄の所長は私に対し断らんだろう。 — 場合によっては二人で所長の許へ行こう、 — 今は君の助けがあるんだから」。

突然騎兵隊長は微笑した。何でも相談出来るまっとうな友人が今から自分の近くにいるということが、突然また彼にとって明確になった。そのせいで実際この五分間、先の五ヵ月よりも沢山話したのであった。

シュトゥットマンは頷いた。そしてフォン・ブラックヴィッツは言った、「いいか、シュトゥットマン、またしても私の義父の言う通りだ。私は商売人じゃない。私は至急ベルリンへ列車で駆けつけ、二十四時間、死活問題の収穫に関する大仕事の一切を、生意気な男、軽薄な男に任せ、大量の金を支出し、その上賭けでしくじり、君と若いパーゲルに借金 mountain を築いて、戻ることになる。一人の郎党も連れず、すでに私の隣人達が四週間前に助言していたこと、つまり監獄の分遣隊を受け入れるということをするようになる。...」

フォン・ブラックヴィッツは微笑した。こっそりと、とても用心してフォン・シュトゥットマンも微笑した。

「まあ、結構、それで私はまたしても失敗したわけだ。しかしこの先どうする。我々皆が愚かな点がある、シュトゥットマンよ、(つまり私の義父もそうだ)、しかし肝要なこ

とは、愚かな点に気付くことだ。私は気付いたぞ。私はそれを改善する、更にやるぞ、シュトゥットマン、君は助けてくれよう」。

「勿論だ」とシュトゥットマンは同意した、「しかし列車の時刻ではないか。まだ君は斡旋者と話す必要があるだろう。それに若いパーゲルもまだ来ていない」。

しかしフォン・ブラックヴィッツは今や聞いていなかった。友人のせいか、夜の混乱した体験のせいか。ブラックヴィッツは饒舌であった。ブラックヴィッツは告白したかった。ブラックヴィッツは告解をしたかった。

「君は今までずっとホテルで働いていた、シュトゥットマンよ。簿記とか金銭出納、郎党の取り扱いに関し、若干習熟したに違いない。私はただ吠えてばかりだ。一我々はやり遂げなければならん。どういうことか。つまり、農園経営だ。私の義父がまた農園を所有したがっているのは承知している。(済まん、何度も義父に言及して。しかし義父は私の赤い布なのだ。私は義父に我慢ならん。義父は私に我慢ならん)。この老公は私の農園経営を見たくないのだ。そして私が十月初頭、請負を納めることができなければ、私はお払い箱となる。一そしたらどうなるか」。

彼はフォン・シュトゥットマンを憤然と見つめた。それから言った、「しかし請負は畑にある、シュトゥットマン、請負は手に入るのだ。そもそも君を今得たからには、我々はノイローエを模範的荘園にする。いや、シュトゥットマン、君に会えたのは、幸運だ。最初、白状せにゃならんが、君が黒い制服を着て、ガミガミ言う嫌みな女すべてにへいこらしているのを見たとき、本当に驚いたよ。...シュトゥットマン、落ちぶれたな、と思った、...」。

「パーゲルが来た」とシュトゥットマンは叫んだ。普段はとても控え目なブラックヴィッツのこの告白を聞いて、彼は熱くなったり、冷たくなったりした。

というのは、この善良な隊長はいつの日か、この告白をひどく後悔するだろうと、シュトゥットマンは考えたからである。彼は今日私にこんな風に告白したことで、私に対し気分を害するであろう。

しかしフォン・ブラックヴィッツは酩酊したようであった。それは実際ここシュレージエン駅の空気のせいに違いなかった。

「パーゲル、十分な荷物を持っているな」と彼はとても好意的に言った、「長いこと私の所に滞在して貰い、その荷の中のものすべてをいつか私の許で着て欲しいものだ。田舎では労働があって、遊び[賭け]はないぞ。いや、もう結構、まあ、その[賭け]意味ではないのだ。ちなみに私自身賭けたな。それで済まないが、窓口で二等の切符三枚、まずはフランクフルト[オーダー河畔]まで買って来てくれ。一それから最後の瞬間に突撃して乗り込もう、...」。

「しかしまず君はともかく斡旋者と話すつもりだろう。結局この郎党はここに集められているわけだし、...」。

「じゃ、パーゲル、切符を買って、すぐにまたこちらへ来てくれ。一私とその男と話すことがあるかい。その男は私を騙そうとしたんだ、それで今度は私が騙す」。

「しかし、ブラックヴィッツ、そんなことはいかんだろう。交渉に臆することはない。この郎党は正々堂々と拒否できる、一農業者ではない。こっそりと階段を駆け上がることはない、一学校生徒のように、...」。

「シュトゥットマン、私は学校生徒ではない、頼むから止めてくれ、...」。

「まるで学校生徒だ、と言ったのだ、ブラックヴィッツ」。

「要するに、シュトゥットマン、私は自分が正しいと思うようにしたいのだ」。

「しかし、ブラックヴィッツ、君はまさに私の助言を求めると言ったと思うぞ」。

「勿論そうだ、シュトゥットマン、勿論。顔をしかめるな。いつだって君の助言は聞く。ただ今回だけは。つまりな、本当のことを言うと、その男にはこう言ったのだ。郎党はどんな恰好をしていても構わん、ただ働くための両手さえあれば、と、...」。

「そうか」。

「しかしこんな一味を送ってくれるとは。こんな一味に対して数百の金マルクの手数料は払えない。 — だから、パーゲルと一緒に先に行ってくれ。私は後からきつと行く。今回だけは、私の好きなようにさせてくれ、...」。

「分かった、分かった、ブラックヴィッツ」としばらく熟考してからフォン・シュトゥットマンは言った、「じゃ、今回だけな。正しいことじゃないが、それに我らの共同作業にとっても良い出だしではない。しかし、...」。

「先に二人だ」と騎兵隊長は叫んだ、「二等の喫煙席。後八分ある。それでベルリンとはおさらばだ、 — やれやれ」。

はなはだ憂わしげにフォン・シュトゥットマンは若いパーゲルと並んで階段をプラットホームまで上がって行った。

それではこれを共同作業の開始とは考えず、ベルリンの終止符と考えることにしよう。

彼は自分では、フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長が突撃侵入して斡旋手数料をもみ消す様を目撃しないで済むことを喜んでいた。別の[戦時の]突撃の際、騎兵隊長を目にすることは相変わらず頼もしいことであつたらう。一人の男をかくも変えてしまうとは、おぞましい時代である。

「それでは貴方は決心してくれたのだな」と彼は若いパーゲルに向かって言った、「それは結構なことだ」。

81

ゾフィーは騎兵隊長を救う

一人残って、騎兵隊長は決心が付かず立っていた。唇をかんで、手の切符を見つめた。二人が去ると瞬時に、告白するたびに容易に生ずる昂揚した気分が消え去って、今や全く当面の状況、ただ単純に厭わしい状況に支配された。

苛立って額に皺を寄せ、目を邪悪に細めて、彼はホールを窺った。向こうの郎党も出発時間が近づいて、やはり落ち着かなくなってきた。階段に座っていた者達が立ち上がった。互いに熱心に議論する諸グループが形成された。ある階段の踊り場に、白く、髪を抜けた頭蓋の、背の高い、骨張った斡旋者が、宥めるように押し寄せる群れに語りかけ、ホールを目で窺い、入口を覗いていた。...

騎兵隊長ははるか、自分の支柱の裏に引き下がった。 — いや、このコラの輩[騷擾者]、この不吉の連中、失せやがれ。彼は気付かれずに抜け出す可能性を見いだせなかった。 — 何故この忌々しいプラットホームは他に登り階段がないのか。

この郎党は採用しない。どんな状況下でも採用しない。私は一帯全体の嘲笑を受ける。私は笑いものになりたくない。絹のペラペラ服とハイヒールがライ麦の禾束堆に使えるか。着替えのシャツ一枚なく、ズボンもない。一味が一度濡れたら、皆が、着物が乾くまで、長く小屋に素っ裸で座っていることだろう。恐ろしい光景だ。いや、むしろ囚人の方だ。

騎兵隊長は柱の周りから覗いた、しかし彼は飛び退いた。

幹旋者はその高い眺望点から離れていた。一方の側にだらしのないブラウスの、子供を抱いた娘が、他方の側にはフロックコートの胴乱の頑固爺がいて、興奮して話しながら、駅の入口に向かっていった。そして騎兵隊長はその柱の中に這い込みたい、石化したい、消失したい思いであった。この三人をみて、彼は戦慄した。

そしてまさにこの瞬間、あらゆる非常時の中の最大の非常時のこの瞬間、一 若干粗放な、しかし少しも不快ではない娘の声が彼の耳許で響いた、「あら、騎兵隊長殿」。

彼はぎょっと振り向き、固まった。

いや、まことに、彼の目の前に、どこから来たのか分からないが、つまり事実、天から落ちて来たかのように、彼の郎党代官のコヴァレフスキーの娘が立っていた。...それは彼が荘園の阿呆な鈍重な日雇い農婦達の中で、その新鮮な様子、その可愛らしい美しさの点で、いつも好んで鼻屑し、幾多の父親らしい親切な言葉をかけてきた娘であった。

「ゾフィーか」と彼は全く呆気にとられて言った、「ここで何をしている、ゾフィー」。

(十四歳のときから荘園で働いている日雇いの娘達には、「おまえ」呼ばわりの親しい調子で話しかけるものであった。そしてそれが続いていた、一 たとえ、ゾフィーのように、広い世間に出て行ったとしても)。

「休暇で両親の許に列車で帰るのです」と彼女は笑って、全く実の娘のように彼を見つめた。

「いや、ゾフィー」と彼は切に言った、「実際天からの使者のように現れたな。柱の別の側に禿げた男がいるだろう、そう、あの大きな、一 そんなに覗くな、ゾフィー、一 奴とは金輪際、私は会いたくないのだ。それに私は列車に乗らなければならない。後わずか三分だ。奴を何とかして引き留められないか、ただ私が入口のホールを抜けるまでの間だ、切符はもう持っている。一 有り難うよ、有り難う、ゾフィー、列車ですべて説明しよう。相変わらず達者な娘だ、一 さあ、行け」。

彼はまさに彼女の声の耳朶に残した、かなりの喧嘩口調であった、「道の真ん中で通せんぼはないでしょう。列車に乗り遅れたらどうしてくれますか。私のトランクを持ってくださるなら別ですけど、...」。

達者な娘だ、と彼は今一度考えた。しかしかなり変わった。少しばかり派手になった、...

彼は駆けに駆けた。全く騎兵隊長らしからぬ、全く雇い主からぬ駆け方であった。一 改札口だ、すぐ先はもう改札口だ、...

しかし奴は入場券を持っているかもしれない、一 彼女の目の下の馬鹿げた隈、それに顔は、太ってきた。すべて繊細なものが消えている。まことに浮腫んでいる、あれは酒のせいだ。...

「分かっています、有り難う。列車は左手ですな。一 ここで乗るのは初めてではありません、有り難う」。

有り難や、やれやれだな。しかし安心できるのは、列車が発車してからだ。...いや、小

さなゾフィーはすでに早くから村の若者どもと少しばかり羽目を外したと聞いたことがあるぞ。 — ベルリンは生き馬の目を抜く所だ。...私もいささか承知している。...

有り難や、パーゲルが合図している。

「いや、諸君、何とか切り抜けて来た。 — 濟まん、シュトゥットマン、濟まん、パーゲル。君達は窓際に立ってくれんか、誰も中を覗けないように。奴がやって来て、まだコンパートメントを点検するかもしれん。まずは汗を拭かんといかん、びっしょりだ。

— 早朝からこんなに駆けつけて、...」。

「それでは見つからずに抜け出て来たのか」とシュトゥットマンは尋ねた。

「大変だった。誰が助けてくれたと思うかい。私の代官の娘だ。 — 丁度やって来て、休暇で両親の許に帰るところだった。娘はここベルリンである伯爵夫人の侍女をしている。...彼女が列車に間に合うか、まあ注目して欲しいところだ。今にも発車だな。ここに招きたいところだ。どんな具合か知りたい。気転の利く娘で — 一言も言わないのに、すぐに理解してくれた」。

「どんな女性だ、年寄りか、 — 若いのか、太っているのか、 — 痩せているのか、ブロンド髪か、 — 黒っぽいか」。

「いや、ベルリンで良くはなっていないな。まあ、止めておこう。後でただ噂話となるだけであろう。ノイローエで再会したら、気まずいことだろう。結局彼女は私の代官の娘に過ぎない。パーゲル、いつも注意してくれ給え。私の郎党とは距離を取って、馴れ馴れしくしたり、深入りしないようにな。了解かな」。

「畏まりました、騎兵隊長殿」。

「有り難や、発車だ。それではゆっくり腰掛け給え。煙草に火を点けるか、 — この不浄の町から夏、抜け出すのは、素晴らしいことだ。だろう、シュレージエン、だろう、パーゲル」。

「素晴らしい」とシュトゥットマンは言った、 — そして用心して尋ねた、「一つだけ気になるのだが、ブラックヴィッツ、 — その男は君の名前を知らないのか」。

「どの男だ」。

「幹旋者だよ」。

「いや、勿論知っている、 — 何故だ」。

「だったら彼は多分手紙を書いて、請求をすと思うぞ、 — そうじゃないか」。

「そうか、糞。そもそもそんなこと考えなかったな。芝居全体が無駄なことか。しかし私は手紙を受け取らないぞ。私は受け取りを拒否する。その手紙を受け取るよう、誰も私に強制できん」。

騎兵隊長は憤激で歯ざしりした。

「気の毒だが、ブラックヴィッツ、そんなことをしても役に立たんだろう、...」。

「いや、シュトゥットマン、今や君が残念だ。そのことを下の駅の中にいるとき、私に告げていて欲しかったし、あるいはそもそも告げないかだ。今となっては遅すぎる。この旅行全体が台無しだ。素敵な天候というのに」。

憤然とコンパートメントから騎兵隊長は素敵な天候を見つめた。

シュトゥットマンがまだ何も答えないうちに（彼が返事にはなはだ乗り気であったか疑わしいが）、通路側のドアが開いた。車掌の代わりにとても上品な若い娘が現れた。微笑

しながら彼女は手を小さな帽子に置いた、「ご命令通りに致しました、騎兵隊長殿」。

騎兵隊長は飛び上がった。顔を輝かせた。

「ゾフィー、列車に間に合ったとはすごいな。私は自分を咎めているところだ。ー 諸君、こちらがゾフィー・コヴァレフスキーだ、先に話した。...こちら、フォン・シュトゥットマン氏、こちら、パーゲル氏。二人の殿方は、ー エヘン、ー 私の客人だ。

ー そうだ、ゾフィー、こちらに掛けなさい。そして少し語ってくれ。煙草を吸うかい、

ー 嫌か、勿論嫌だな。とても物分かりがいい。若い娘達はそもそも煙草を吸うべきではない。私はいつも私の娘にも言っている。フォン・クックホフ嬢はいつも正しい。女性は女性らしく、ー 男性は男性らしく、ー ゾフィー、あんたもその意見だろう」。

「勿論です、騎兵隊長殿。喫煙はそれに害があります」。両聞き手に視線を向けて言った、「お二人はただ週末にノイローエへ向かわれるのですか、それとももっと長く滞在されるのですか」。

第二部

田舎炎上

第十章

田畑の平穏

82

シュトゥットマンはハルティヒ夫人に窓拭きを教える

もはや同じ事務所ではなかった。

まだ、醜い黄灰色の松材からの同じ書架であった。まだ、同じ、以前からの黒い書き物机で、緑色の、インクの染みのフェルトが上にあった。相変わらず、余りに大きすぎる金庫で、黄色くなった黄金のアラベスク模様であった。――しかし、いや、もはや同じ事務所ではなかった。

窓ガラスはピカピカしていた。清潔な、明るいカーテンが掛けられていた。家具には油が塗られ、穏やかな輝きを放っていた。草臥れて、ささくれだった床は鉋が掛けられ、ワックスが塗られ、磨き上げられていた。金庫には荘園の車大工が染料壺を持って来て、その鋼の装甲は銀灰色に微光を発し、その装飾は暗灰色になっていた。――いや、もはや同じ事務所ではなかった。

かつてフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、危惧したものであった。自分は友人のフォン・シュトゥットマン中尉をこのようなだらしのない荘園事務所の中、賃金リストや穀物計算書の背後に配置したものだろうか、と。この点について騎兵隊長は、何も懸念しなくて良かったであろう。フォン・シュトゥットマン氏はだらしのない事務所の中に腰掛けず、このだらしのなさを彼は追放したのである、穏やかに、しかし容赦なく。

こうした最初の時期のある日、シュトゥットマンは事務所に一本の鍵を取りに行かなければならなかった、――しかしハルティヒ夫人が窓台に立っていて、窓ガラスを拭いていた。

フォン・シュトゥットマン氏は立ち止まって、この女性を見つめた、「ここの掃除番の方ですか」と彼は穏やかに尋ねた。

「お任せください」とハルティヒ夫人は戦闘的に言った。というのはまず夫人はこの殿方の穏やかさに騙されていて、他方また彼に対し立腹していたからである。小マイヤーがいなくなったからである。たとえ厳かにノイローエの先の検査官に対するすべての権限を彼女は断念したとしても、今や彼がいなくなったこと、このことをこの殿方に許すことができなかった。――人々が噂しているようにこの人が実際本当に、探偵であった[不正を見抜いた]としても。

この探偵と思われる男は、まずは何も答えず、不可解なことに、彼女が窓拭きに使っている水の臭いを嗅いだ。それから彼は窓拭きのセーム革を手を取った。これは勿論革ではなく、単なる雑巾であった。というのは別荘のアルムガルトは立派なセーム革を劣等な事務所用には渡さないからである。更に彼は陽光の中、拭いた開き窓の一枚を前後に動かした。――ハルティヒ夫人は全身がこのようなスパイに対する憤怒で震えた。このスパイ

は今やそれどころか自分の仕事にも鼻を突っ込んで嗅いでいる。

フォン・シュトゥットマン氏は自分の試験を終えた。彼は視線を夫人に上げた。彼女が怒っていると彼は少しも気付いていないように見えた。彼は尋ねた。「お名前は」。

「私は御者の妻です」とハルティヒ夫人は怒って叫び、窓を拭いた、窓は音立てた。

「そうですか、御者の妻」とシュトゥットマンは平静に言った、「それで、御者の名前は」。

そこでハルティヒ夫人は興奮して、とても早口で、はなはだ多くをぐたませに述べた。とりわけ、自分は自分の仕事のことは分かっている、自分に仕事を「教示」するためにベルリンから殿方がお出でになる必要はないこと、自分は四年間「宮殿」で、「恵み深い老奥方様」の許で働いてから、ハルティヒと結婚したこと、「恵み深い老奥方様」はいつも自分に満足されていたこと、この奥方様に満足頂ける女性は実際少ないのだと言った。...

「それではハルティヒ夫人と仰有るのか」とフォン・シュトゥットマンは辛抱して言った。というのは実際十分に長くホテル業界に勤めていたからである。「よろしいかな、ハルティヒ夫人。この窓拭きでは役に立ちません。日光の下で窓を拭くものではありません、一 ほん、窓は皆、筋ができています。...」

彼は開き窓を前後に動かした。しかしハルティヒ夫人は少しも見えていなかった。彼女はうんざりした。彼女も窓に筋ができると知っていた、これまで皆に自分の仕事は十分満足して貰えた。それで彼にもそのことを言った。

動じずにシュトゥットマンは答えた、「更にゆすぎの水には一滴酒精分を入れた方がいい。すると窓が明るくなる。それでもすべて、窓拭きセーム革をきちんと使わなければ、窓拭きは無駄です。御覧なさい、この布はけば立っている。窓ガラスにただ綿屑がくっついている」。

最初ハルティヒ夫人は憤激の余り物を言えなかった。

しかしそれからフォン・シュトゥットマン氏にまことに嘲笑的に尋ねた。どこで酒精分を手に入れたらいいですかね、ええ。私は汗かいても一滴も肋骨から出やしません。セーム革はアルムガルトが渡しませんし、...

「酒精分を手に入れなさい、セーム革もな」とシュトゥットマンは言った、「革がない間は、古新聞を使えばいい、一 ほん、このように、...」。彼は積まれていた中の古新聞を一枚取って拭いた。「ほん、綺麗になったろう」。

「それは郡報です」とハルティヒ夫人は嘲笑して叫んだ、「まとめて、束ねてあるのです。一号も欠けてはいけません」。

「そうか」とシュトゥットマンは当惑して言った。一 この最初の時期、彼はパーゲル同様、単に無知のせいでこのような失敗をよく犯した。彼は黒っぽく湿った紙の塊を広げた。「号数まだ読めるな。一 余りを注文することにしよう」。彼は号数をメモした。

しかしこの些細な失敗で彼の寛大さは尽きた。彼はより手短かに言った、「もう家に帰ってください。この半端な掃除では意味がない。今晚六時に来てください、一 そのとき事務所と部屋はどのように掃除して欲しいかお伝えしましょう」。そう言って、彼は手に鍵を持ち、出て行った。しかしハルティヒ夫人にはこのベルリンの猿の御託は、この人は近日中にまた消えるであろうから、全くどうでも良かった。彼女は自分の流儀で更に掃除を続けた。そして六時の掃除のとき、命じられたように出頭しようとは、夢にも思わな

った。

しかし彼女が好奇心を起こして、七時頃、官吏の家に駆けつけてみると、そこに腹立たしいことに黒いミンナが、この偽善者の屑女が、甲斐甲斐しく働いていて、彼女が穏やかに何ごともなかったかのように、中に入って、バケツと雑巾を取ろうとしたとき、この探偵がただ振り向いて、その野蛮に穏やかな口調で言った、「ハルティヒ夫人、貴女は解雇されました。ここで掃除なさらないでください」。

そして更に彼女が何も答えないうちに、彼は振り返って、車大工とその見習いが鉋をかけ、カサカサ、キシキシ、鉋仕事が始まった。一 女奴隷ハガルのように荒野に追いやられて[創世記、16]、ハルティヒ夫人は立っていた。恵み深い老奥方の許で流涕しても、恵み深い若奥方の許で嗚咽しても、騎兵隊長殿の許で懇願しても、甲斐はなく、すべてが突然変わっていた。新しい風が吹いていた。...「いや、フォン・シュトゥットマン殿があんたを必要としないのであれば、きっとあんたの仕事がまずかったのだろう、フリーダ、...口出しはできないよ、助けてやれないよ、...」。郡報が駄目になったと告げてさえ、フォン・シュトゥットマン氏は真夜中過ぎアマンダを一時間以上事務所に留めたと知らせてさえ、一 何の甲斐もなかった。以前はあんなに聞いて貰えたのに。「駄目です。家に帰りなさい、フリーダ。そんなに告げ口をするものではありません。一 告げ口は良くないことです。そんなこと止めなさい、ハルティヒ」。

かくて彼女は、ぶつぶつ言う、自分に対してとても不満な夫の許に帰らざるを得なかった。自分の予言さえも当たらなかつた、つまり土曜日、多くの郎党への支払いの後、事務所はまた豚小屋のように見えるであろうと言ったのである。事務所は支払いの後、微塵も汚れて見えなかつた。というのは、このベルリンの猿は、テーブルと二脚の椅子を戸口のドアの前、芝地に置いたからである。そのようにして彼は支払い、いつも新しいことにはすべて騙される人々が、これをそれぞれか素晴らしいと思ったのである。

「雨が降ったら、どうするんだろう、冬だったらさ」とハルティヒ夫人は叫んだ。

「静かにしろ、フリーダ」と人々は言った、「おまえはただ妬いてんだよ。奴はおまえより十倍抜け目ないぞ。すでにあの黒人マイヤーを追い出したのだ。おまえが叫び過ぎると、奴はおまえも追い出してしまふぞ」。

「家禽番の娘を彼は真夜中に事務所に呼び出したのだよ」と彼女は怒って叫んだ。

「また小マイヤーの時と同じように、あの娘を出し抜きたいのだろう」と人々は笑った、「いや、ハルティヒ、馬鹿だな。一 あの人は本当に立派な紳士で、丁度騎兵隊長のようなものだ。あの人はおまえのことも、アマンダのことも眼中にない。ま、静かにしろ」。

さて日曜日となった。最初の仕事の多かった週の後の日曜日午後、この新しく磨かれて、輝く事務所の中、フォン・シュトゥットマン氏と若きパーゲルが座っていて、煙草を吸っていた。フォン・シュトゥットマン氏は立派な穏やかな[ハバナ]葉巻を吸っていた。この外巻き葉はスマトラで、騎兵隊長の祭日用ケースからのものであった。両人は昼食に「向こう」へお呼ばれになっていたのである。一方若いパーゲルはもうまた自分の煙草から一

本吸っていた。

いや、両紳士は、ノイローエの荘園の民に大変尊敬されたことであつたが、別荘での昼食に招待されていた。すでにそれ以前二回向こうで[別荘で]夕食を摂っていた。これはまだ役人の場合、あり得ないもので、二人のベルリン人の異例の派遣に関し、噂話に新たな尾ひれを付けるものであつた。両紳士のうち中年の紳士は、若干卵形の頭と褐色の目を有し、小マイヤーが夜間に消えてしまうまで、実にそれどころか別荘に滞在したのである。それから勿論彼は早速、官吏の家に移った。 — 勿論騎兵隊長の意志に反することで、隊長は彼に、料理女アルムガルトの証言によれば、向こうに住むよう、文字通り頼んだとのことだつた。しかし、いやとこの紳士は言ったそうである、「済まん、ブラックヴィッツ、私の仕事がある所、そこに私はやはり住みたい。実際いつでも君とはお望みのときに、会えるよ」。(二人は互いに「君」と呼んでいるぞ)。そして今や若い殿方、パーゲルは検査官の部屋に住み、中年の紳士は切妻の部屋に住んでいらっしゃる。彼らがここで何の仕事をなさるか、これはまだ明らかではない。二人は農業については何もご存じではない。これは確かだ。

そんなわけでフォン・シュトゥットマンは葉巻を吸いながら、書き物机に座っていた。現物給与リストをめくっていた。彼はただ表面的にそうしていた。というのはとにかく温かいし、それに昼食が素晴らしかったからである。こちらでは人々は大いに室外を出歩くので、仰山食べるのである。それでシュトゥットマンは穀物計算書を精力的に閉ざして、パーゲルに言った。パーゲルは窓辺に座って、目を半ば閉じて、陽の煌めく枢密顧問官の公園を覗いていた。「さて、何をしよう。ちょっと寝床で眠るか。いや、疲れた」。

パーゲルも同様に疲れていたに違いない。彼は口を開くことさえしなかつたからである。しかし彼は天井を示した。天井からは、ぶんぶんうるさい蠅の中に、蠅取りが垂れ下がっていた。

シュトゥットマンは目で、その指し示す指を追った。彼は一瞬思案して、この騒がしい霊の喜ばしげな夏祭りを見つめていて、それから言った。「その通りだな。こやつらがいたら、一瞬たりとも眠れないな。しかし、どうするか」。

「私はまだ森を良く知りません」とパーゲルは言った、「一度見てみましようか。池もあるそうだし。冷たい、ザリガニの池。水着を持参しましょう」。

「それはいい」とフォン・シュトゥットマン氏は同意した。そして五分後、両人は水着の小包を持って、官吏の家から出て行った。

二人が出会った最初の人、は、老公、ホルスト＝ハインツ・フォン・テッシュョー枢密顧問官であつた。彼は緑色のローデングロスの服で足を踏みしめて歩いていた。手に櫛の杖を持つ策謀家の老人である。そして二人が、彼には単に手短かに紹介されていたばかりで、簡単に挨拶して通り過ぎようとしたとき、彼が二人に呼びかけた。「いや、ご両人、丁度出会つたのは、素晴らしい。私は思案し、考え込み、思い悩んだものだ。ご両人はもう旅立つたのだろうか。田舎と農業を満喫されたのだろうか。数日前から見かけていない、と」。

然るべく、両人はこの枢密顧問官らしい冗談に微笑した。フォン・シュトゥットマン氏はまことに冷静に微笑し、パーゲルは率直にこの田舎のひげもじゃ男、新たに塗られた胡桃割りのように赤い男を喜んだ。

「それでご両人はちょっと日曜午後の散歩というわけですか、気晴らしに。あそこは

村の美人どもがそぞろ歩きをしています、お若い方。 — フォン・トゥットマン殿には敢えて注意は致しませんが、...」。

「シュトゥットマンです」と先の中尉は訂正した。

「いや、勿論、済みません、お偉い方に。勿論承知しています。ただそう口が滑ってしまいました。ここらの郎党は皆貴方のことをそう呼んでいます。『トゥット・ドゥ・マン[警笛を鳴らせ]』と昨日も御者の一人が言っていました。貴方から多分その運行術に小言を言われた者です。『こちらではすでに多くがそう呼んでいます』[多くがすでに警笛を鳴らしました]と」。

「昨日ですな」とフォン・シュトゥットマンは言った。

「どうして昨日です。それとも昨日ではなかったのですか。勿論昨日でしたな。 — 私の小さな頭もまだ大丈夫です、フォン・シュトゥットマン殿」。

「枢密顧問官殿が数日前から、私どもがもう立ち去っていないか思い悩んでいらっしゃるからでしょう」とシュトゥットマンは言って、微笑して自分の意見から若干の毒を抜いた。

パーゲルは笑いはじめた。

老公は一瞬呆気にとられていた。それから彼も笑った。笑いながら彼はパーゲルの肩を叩いた。彼は力強く叩くことができたので、実際そうした。パーゲルはお返しに叩こうという気になった。しかし彼はこの陽気な老公をまだ良く知らなかったので、思いとどまった。

「素晴らしい」と枢密顧問官は叫んだ、「一本取られたな。フォン・シュトゥットマン殿は抜け目がない。警笛を持った[誰でも出来る]夜警人なんかじゃない」。不意に彼は真面目になった。この突然真面目になったことで、フォン・シュトゥットマンは確信した。このすべては単に一つの芝居であって、自分達二人に対し何らかのまだ不可解な理由から演じられているものである、と。もっと何度でも捕まえてみせるとシュトゥットマンは戦闘的に考えた。

「ご両人はちょっと時間がありますかな」と老公は尋ねた、「私は私の婿宛の手紙を、すでに数日前から書き上げているのだが。まだ手紙を渡せないでいる。いつもここ数日何かが起きてしまって。...手紙をついでに別荘に届けて貰えますかな」。

「いいですよ、...」とフォン・テッショー殿から主に見つめられていたパーゲルは言い始めた。

しかしシュトゥットマンが彼を遮った、「分かりました、枢密顧問官殿。別荘の従者に、手紙を取りに伺うよう伝えましょう」。

「それはいい、結構」とノイローエの領主は叫んだ。しかし彼の調子には今や気の良さは見られなかった。「今思い付いたのだが、私の老エアスがいつか足を運んでくれるだろう。彼を送ることにしよう、...」。

彼は両紳士に頷いて、更に足を踏みしめ、茂みを通って宮殿に向かった。

「びっくりしたよ、シュトゥットマン」とパーゲルは言った、少し息を失っていた、「あの人のご機嫌を損ねるなんて。何故あの陽気な老公に無愛想なんだ」。

「貴方にいつか請負[賃貸]契約を読んで貰いたいよ」とフォン・シュトゥットマン氏は言って、手で汗ばむ額を拭った、「この陽気な老公が自分の婿殿に署名させた契約をな」。

単に騎兵隊長のように商売上全く無邪気な子供のみが、そのような契約の下、自分の名前を署名できるのだ。卑劣なベルサイユ条約に近い。生殺与奪の権を握られている」。

「でも全く素朴な印象だ、陽気な老公」。

「彼を信用するな。彼に何も話しちゃいかん。彼から言われたことは何もするな。我々は騎兵隊長の役人だ、 — 老公は何も関係ない」。

「いや、シュトゥットマン、貴方はペシミストだ。 — 老公は全く陽気な胡桃割りとにらんでいる」。

「私は、我々に託されようとした手紙さえ、独自の仕掛けがあるとにらんでいる。まあ、分かるだろう。それじゃ行こう」。

彼らは行った。

一方老領主は宮殿の自分の仕事部屋に立っていて、電話のクランクを回していた。コーヒー碾きのクランクを回す按配であった。彼は森林官地の内線を呼んだ。ようやく彼は森林官が鳴くような声で名乗り出る声を耳にした。

「ちゃんと聞こえているか、クニーブッシュ。まだ寝ぼけているのか。まあ、待っている、きっと休めるようにしてやるぞ、クニーブッシュ。ただ私から退職金は出ないがな。

— そもそも聞いているのか、クニーブッシュ」。

「勿論です、枢密顧問官殿」。

「それじゃ、まだ聞こえることを神に感謝することだな。だったら今ちゃんと聞くんた。私はたった今、私の婿殿の両新入り、ベルリンの無宿者どもが農園をうろついているのを目にした。腋に水着を抱えてな。奴等はきっと我らの森の中、ザリガニ池で泳ぐつもりだ。貴方は早速出掛けて、こっそり覗くのだ。そしてご両人が池に入ったら、その後でいいから、ここは私のザリガニ池であって、ここで泳ぐのはけしからんと教えてやれ。衣服を押収しても構わんぞ、笑いものになることだろう、クニーブッシュ。責任は私が取る、貴方を弁護してやる」。

「しかし枢密顧問官殿、私にはできません。一方の殿方は中尉で、騎兵隊長殿と『君』呼ばわりする仲ですし、...」。

「それが何だ、クニーブッシュ、それが何だ。奴が私のザリガニ池で泳いでいることとそれが何の関係があるか。貴方に申ししているのだ。きちんと言われたようにしろ。自らの責任でだ、 — 私に言われて来たと言ってはいかんぞ。さもないと、痛い目に、 — いや、さもないと痛い目にも何も逢わないようにしてやるぞ、...」。

「勿論です、枢密顧問官殿、...」。

「それにもう一つ、クニーブッシュ。おい、何故そんなに急いでいる。貴方の上司が話しているときは、待つものだ、解雇されるまではな。しかし解雇を多分待っておれんのだろう。私の言っていることを聞いているのか、クニーブッシュ」。

「勿論です、枢密顧問官殿、...」。

「それで昨日、フランクフルト[オーダー河畔]の予審判事が電話してきた。 — ボイマーは四十度以上の熱で、相変わらず意識不明だそうだ。貴方の乱暴な処置のせいだと言ってな、...」。

「しかし出来なかったのです、枢密顧問官殿、...」。

「勿論出来たはずだ。貴方は駆けなければならなかったし、湿布をし、医師を呼び、看

護婦を、産婆のミューラーでも構わなかったが、呼ぶ必要があったのだ。哀れな奴で、単に善良な密猟者で、奴が貴方を狙ったのは、単に貴方がひどくて、奴にのろじかの肉を恵んでやらないからじゃないか。 — だろう。その程度のことを予審判事は奴に対し悪いこととは思っていない。だろう、単に哀れな同じ人間だろう」。

「いや、枢密顧問官殿、私は何をしたらいいのでしょうか」。

「貴方は何もせんでよろしい。しかし私は貴方の味方だ。すでに私は同志の予審判事に私の意見を言って聞かせた。しかし今度は貴方がこの件できちんと私のために尽くせ。クニーブッシュ、さっさとしろ。水泳は禁止、慣例上衣服は取り上げだ、...」。

枢密顧問官は電話機を置いて、にんまりした。彼は葉巻を取って来て、コニャックを一杯注いだ。これが済むとウィングチェアに腰掛けて居眠りした。

何故村長のハーゼは、クニーブッシュについて裁判であんなに無慈悲に書き送ったのかと彼は頭の中で思い巡らせた。これは合点が行かん。肝心なことは何か村長に教えてやろう。村長は私のように報告すべきだ。しかし何か臭うな。ここで臭うもの、これを探りだそう、丸一日かかってもな。

84

ほら二人が行く

「ほら二人が行く」と村の人々は言って、「二人のベルリンの探偵」を見送った。「我らが二人を農業主と思うだろうなんて、何と我らを馬鹿にした話しか。 — 「ファダー、若造の両手を見たか。奴はまだ一本の熊手の柄を握ったことがないぞ」。 — 「しかし昨日ライ麦畑で彼は懸命にフォークを使っていたぞ」、 — 「いや、単に振りだよ。奴等はすでに小さなマイヤーを片付けたぞ、マイヤーはすぐマイエンブルクに送られたそうぞ」。 — 「しかし何故いつまでもいるのだ」。 — 「次は誰か、おまえは知らないのか」。 — 「次は騎兵隊長だろう」。 — 「騎兵隊長か、たわけ。次は森林官クニーブッシュだ」。 — 「まさに騎兵隊長だな、 — 今やまた別の一擧が生ずるそうぞ。武器がどこかで隠されたら、それはここ我らの所だ」。 — 「しかし卵頭の奴は騎兵隊長を『君』と呼んでいるぞ」。 — 「それはまさに奴等の抜け目ない点で、老枢密顧問官殿の考えつかれたことで、奴等が我らを農業で誑かしているように、騎兵隊長を『君』と呼んで誑かしているんだ」。

「ほら二人が行く」とアマンダ・バックスも言って、両者を見送った。しかし二人は彼女を見ていなかった、「あの二人をどう思う、ミンナ」。

「まだ分からないわ、アマンダ」と黒いミンナは用心して言った、「でも掃除に関しては、あの太柄の人、何でも承知よ。ベッドメーカーキングときたら、すぐに転がりたくなるわね」。

「で、若い方は」。

「あんたは勿論若い方にだけ目が行くわね、アマンダ」と黒いミンナは敬虔に目を剥いて言った、「もう全然マイヤーのことを考えていないの。あんたは晩禱のとき、それどころか彼のために立ち上がって、アマンダ、そして指で私を指したのよ。あの人はあんたのマイヤーを奪ったのよ」。

「そうね、やれやれよ、奪って頂いて」とアマンドは言った。しかしとても悲しげに響いた。「今日の午後、何するの」。

黒いミンナは突然うんざりした、「何をするかって。私の腕白どもの所に帰らなきゃね。きっとまた悪さしている、今日私は半日家を開けて、事務所と部屋の掃除にかかりきりだったから、...」。

「腕白どもがいて、あんたは幸せね」とアマンド・ボックスは言った、「時に私も思う、あの人の子がいたら、それが一番いいかもしれないと」。

黒いミンナは怒った、「まあ、何てこと言うの、アマンド、未婚の娘なのに。そう言いながらももうまた別の若い男を覗いている。人は罪深いものと分かっています。でも自分の罪を後悔しなければいけないのよ、アマンド」。

「またペラペラとうるさいわね」とアマンドは苛立って、やはり森への道に沿って去った。黒いミンナは深く満足して見つめていた。

「ほら二人が行く」とユッタ・フォン・クックホフも女友達のベリンデ・フォン・テッシュォーに言った。「フォン・テッシュォー殿は罵っているけど。一でも、中年の男の方は本当に高貴に見えるわね。一体どんな貴族かしら、シュトゥットマン家で。一古いの新しいの、知っている、ベリンデ？」

フォン・テッシュォー夫人は熱心に窓から、去って行く人影を覗いていた。「二人とも腋に小包を持っている。一多分水着ね。今日の午前、二人は礼拝への時間はなかったけど、水泳には時間があるのね。それなのにあなたは高貴だなんて、ユッタ」。

「その通りね、ベリンデ。とても新しい貴族に違いない。私どもの先祖はきっと泳いだことがないのよ。フリーザックの城[宮殿]のクヴィツォー家で古い洗面器を見たことがあるわ、一そのようなものを今日日あなたはカナリア用の鳥籠に置いている」。

「ホルスト＝ハインツは言っていた、すぐに請負契約を解約できるって。今は農園に農業が分かる者が一人もいないのよ」。

「また小マイヤーを連れ戻したいのね。アマンドの目の周りの隈がますます黒くなってきているわ」。

「ほら彼女が行く、同じ道を」。

「誰」。

「アマンドよ、何かまた縁を作ろうというわけで、一巧みにあちらこちらと、一動き回って」。

「コヴァレフスキー嬢はどういうことなの」とフォン・クックホフ嬢は夢見るように尋ねた、「腐肉があるところには、蠅が集まるわ」。

「同じコンパートメントで来たそうよ」とベリンデ夫人は熱くなって答えた、「娘が後で御者の許、御者台に座ったとき、皆全く親しげに喋っていたそうよ。コヴァレフスキーの両親は前日まで何も帰省のことを知らなかったのだった。突然電報が来て、ユッタ、この電報が送られて来たとき、私の婿は町へ行っていたのよ」。

「コケットの女のような身なりだそうよ。レースだけのブラジャーで、...」。

「まあ、ブラジャー、...ユッタ、そんなはしたない言葉を遣ってはいけません。私が若い頃は、このような娘はドリル[太綾]の corsage を着ていました。鯨骨の棒と鋼の棒が交互にあるもので、一これは、ユッタ、甲冑のようなものでした。これは風紀にかな

っていて、　－　でもレース、これはかなっていません、...」。

「ほら二人が行く」と騎兵隊長も言った。彼は妻と娘と一緒にコーヒーを飲みながら、ベランダに座っていた、「二人は風采が良い。あの不具、マイヤーとは全く別だ」。

「泳ぎに行くのですね」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は言った。

「二人はきっと餌やりの時間には戻って来るだろう」と騎兵隊長は自分一人が抱えている心配を宥めた、「シュトゥットマンは時間を守り、信頼性そのものだ」。

「あら、ママ」とヴァイオが叫んで、遮った。

「何」とフォン・ブラックヴィッツ夫人はまことに冷ややかに言った、「何かしたいの、ヴィオレット」。

「ただ思ったの、...」。ヴァイオはかなり小さな声で言った、「私もまた泳ぎたいな、と」。

「ヴィオレット、あなたは私とパパに話すまでは、家から出られないと分かっているでしょう。農園中庭を夜、一緒に通って行った余所の殿方は誰か、と」。

「でもママ」とヴァイオはほとんど泣くように叫んだ、「もう百回も言ったわ。余所の殿方ではない、と。クニーブッシュよ。レーダーもそう言ったでしょう」。

「あなたの嘘です。レーダーも嘘ついています。本当のことを言うまで、家から出てはいけません。正直者のフーベルトもこれ以上私に嘘をつき続けると、突然解雇ということもあり得ます。私をこんな風に騙すなんて、二人とも恥知らずです」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人はとても興奮していた。彼女のかなり豊満な胸は急いで息していて、彼女の目は、鋭い、怒った視線を放っていた。

「でも、アマ、本当に森林官だったのよ。　－　真実、嘘偽りなく。誰か他の人だなんて嘘は言えません、ママ。一体誰だったというの」。

「恥知らずなことを」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は息もつがず叫んで、怒りで全身が震えた。しかし夫人は素早く気を取り直した、「ヴィオレット、自分の部屋へ行きなさい。そして昨日のフランス語のレッスンを十回写しなさい、一つの間違ひもないように」。

「ママ、私が百回書き写しても」とヴァイオはドアの下で言った。今や彼女も怒りで白くなっていた、「それは森林官だったのよ」。

ドアがパタンと閉まった。ヴァイオは去った。

騎兵隊長は黙ってこの諍いを聞いていた。ただ、目を閉じたり、顔をしかめたりして、自分にとってこの諍いがどんなに辛いものであるか、知らせようとした。他人同士の諍いは、彼にとっていつも辛かった。しかし幾多の経験から、自分の妻が本当に一度怒ったら、これは稀なことであるが、極めて慎重に対応しなければならないと分かっていた。「ヴァイオに対して少しばかり厳しくないか」と彼はそれ故ただ用心して尋ねた。「本当に森林官だったのじゃないか。ハルティヒ夫人はただのお喋り屋にすぎないし、...」。

「森林官じゃなかったのです。今では彼も自分だったと言っています。でも何故皆が、森ではなく、検査官の家へ向かったのか、彼は説明できなかった」。

「フーベルトは、皆で、ヴァイオのための弾薬筒を探しに行ったと言っているが、...」。

「馬鹿なことを、　－　御免、アヒム。でもこの二人に騙されてはいけない。レーダーもヴァイオも、弾薬筒はあなたの銃棚にあると知っているのよ、...」。

「おまえの眠りを妨げなくなかったと二人は言っている、...」。

「妨げるなんて。十二時過ぎまで明かりを点していました。　－　それにヴァイオは今

までそんな心配りをしたことはありません。ヴァイオは首筋がかゆくなったと夜の二時に私を起こして、さすって貰ったのです、...すべて馬鹿げた嘘です」。

「しかし実際、エーファ、誰だったと思うのだ。ハルティヒ夫人すら知らない他人だ。それも夜ヴァイオと一緒に検査官の家に行くとは」。

「ほら、アヒム、最悪のことよ。だから私は眠れないの。ここら一帯のどこかの若者なら、私どもの知っている、ヴァイオも知っている誰かなら、百姓の若者とかそんな者なら、

一 これはヴァイオにとって危険な者じゃないでしょう。無邪気な恋愛ごっこで、すぐに止めさせられます。...でも余所の人、私どもがさっぱり知らない男の人、全く未知の人、

一 これはとても不気味。...その人と娘は夜、検査官の家へ行って、その人と娘は夜、二人っきりだったのです。ただ、レーダーはベッドにいましたし、これは嘘ではありません。アルムガルトもこれは証言しています。アルムガルトがフーベルトのために嘘はつかないでしょうし、...」。

「本当に何かがあったと思うのか。だったらそやつを、...」。

「いや、あなたも彼を知らないのよ。誰だか知らない。彼について話されることを娘が不安一杯になっているなんて、皆がその人のために必死に嘘をついているなんて、誰なんでしょう。皆というのは、森林官、バックス嬢、レーダー、それにヴァイオ。私には分からない」。

「しかしエーファ、いたずらに心配していると思うぞ。ヴァイオはまだ全く子供だし」。

「私もそう考えたのよ、アヒム。一 でも今は目が開いたわ。あの娘はもはや子供ではない。子供の振りをしていて、まったく卑劣で、内情を良く知っている女そのものの、...」。

「でもエーファ、誇張だろう、...」。

「いいえ、残念ながら違う。でもまだそれほど賢くはない。あるとき素性がばれた。反吐が出そうよ、アヒム。自分の娘の偵察をしなければならぬなんて。...でもこの謎の男、娘に何かあったらと思うと、死ぬほど不安になる。私は自分を抑えきれなくて、こっそり娘の部屋に行ったの、すべて探し出して、ひょっとしたら手紙とかないか、何らかのメモとか、その人の写真とか。一 ヴァイオは乱雑だから、...」。

夫人は止めて、乾いた、燃えるような目で宙を見つめていた。騎兵隊長はその白い髪と褐色の顔で窓辺に立っていた。彼は自分の妻達の感情の爆発にうろたえたとき、どんな夫もすることをした。彼はこっそり指で窓ガラスを叩いた。

「私は考えたのよ、娘には何も気付かれなかったと。実際恥ずかしくなって、全部を以前同様にまた直したと思っていたの。...でも昨日全くこっそりと娘が自分の部屋に入って来て、丁度私は娘のアルバムを手にしていて、ほとんどうろたえてしまったけど、...」。

「それで」と騎兵隊長は尋ねた。今や緊張していた。

「それで全く厚かましく私にこう言ったの、『いいえ、ママ、日記は書いていません、...』」。

「しかし何のことか、...」と騎兵隊長は混乱して言った。

「まあ、アヒム。それはね、私が何を探しているか良く理解していることの証拠よ、私の探索をからかっているの。自分の抜け目なさや用心とが得意なのよ。一 これはね、アヒム、まだ三週間前、あなたにコウノトリについて尋ねた同じ娘なんです。あなたは自ら私に話したけど。知らないなんて、狡猾よ[カマトトよ]。この呪わしい時代によって墮落してしまっている」。

騎兵隊長は今や変貌して、緊張して立っていた。彼の褐色の顔は灰色に見え、すべての血が彼の心臓へと巡った。彼は怒って呼び鈴へ歩み寄った。「レーダーを呼び寄せよう」と彼はつぶやいた。「白状しないと、奴の骨をすべて叩き折ってやる。...」

彼女は立ちほだかった、「アヒム」と彼女は叫んだ、「落ち着いてください。吠えたり、殴ったりしないで、 — すべて台無しになります。私がきつと探り出します。あなたに話します。皆がその人に死ぬほど不安を抱いています。何か秘密が、私どもが何も知らない秘密があります。でも私が調べて、そのときにはあなたに行動して貰います、...」。

彼女は彼を椅子に座らせ、彼は座った。彼は嘆いて言った。「まだ子供だと思っていたのに、...」。

「何らかの点で」と彼女は詮索しながら、彼の考えを別な方へ向けた、「何らかの点で、 — 一切がああの小検査官マイヤーと関係しています。彼は何か知っているに違いない。確かに、彼を一言も言わずに、立ち退かせたのはシュトゥットマンさんのとても賢明なところでした。しかし今となつては、彼がどこにいるか把握する方がもっと良いように思われます。彼から何か聞き出すのが一番手っ取り早いでしょう。...マイヤーの居場所をご存じないですか」。

「いや、何も知らない、彼は自ら去るようにしたのだ、突然不安に襲われた、...」。騎兵隊長は活気づいた。一つの思い出が蘇った、「いや、おまえの言っていることとまた同じだ。...マイヤーも死ぬほどの不安を抱いていた。シュトゥットマンが立ち退かせたとおまえは言ったが。 — いや、彼は残りたくなかったのだ。シュトゥットマンによって解雇され、少しばかり路銀を得たい、と頼み込んだのだ。...シュトゥットマンがそれで与えた、...」。

「でもどうしてマイヤーは突然そんな不安を抱いたのです。真夜中に逐電したのでしょうか」。

「ボックス嬢と一緒に。ボックス嬢が彼を駅まで連れて行った。その件はそんな具合だった。待てよ、シュトゥットマンが私に話したのだ。最初の数日はすべて混乱していて、私はそれにほとんど注目していなかった。正直に言うと、マイヤーが去って、私は嬉しかった。奴には我慢できなかつたし、...」。

「それでその夜に、...」とフォン・ブラックヴィッツ夫人が助け船を出した。

「そうだ。その夜にパーゲルとシュトゥットマンはまだ事務所に起きていて、帳簿を点検していた。シュトゥットマンは厳密そのものだからなあ。隣でマイヤーは眠っていて、その晩方、私とシュトゥットマンに金庫を渡して、すべて異常なかつた。申し分なく合っていた。...マイヤーはとうに眠っていたに違いない。...突然この兩人、パーゲルとシュトゥットマンは彼の叫び声を聞いた。驚いて、情けない声で、死の不安に怯えて、『助けてくれ、助けてくれ。彼に殺される』と叫んだ。 — 兩人は飛び上がって、マイヤーの部屋に駆けた。 — マイヤーはベッドに座っていて、チーズのように白くなって、ただどもっていた、『助けてください、彼がまた私を射殺します、...』。 — 『誰だ』とシュトゥットマンは尋ねた、 — 『窓辺にいます。はっきりと彼の声を聞きました。彼がノックしました。私が出ると、射殺されます』。 — シュトゥットマンは窓を開けた。それは閉まっていたから、そして外を見た。何も見えない。 — しかしマイヤーは、彼がいる、自分を射殺しようとしていると主張し続けた、...」。

「でも誰なんです」と夫人は緊張で張り詰めて、尋ねた。

「いや」と騎兵隊長は言って、憂わしげに鼻を撫でた、「誰かって。ー いいか、マイヤーが自分を射殺するために、誰かが窓辺にいたと頑なに主張するから、結局シュトゥットマンはパーゲルを外に出して、調べさせた。その間に彼はマイヤーを少しばかり落ち着かせた。マイヤーは着衣し始めた。パーゲルが一人の娘と一緒にまた入って来た。茂みの仲で見つけた娘で、ボックス嬢だ、...」。

「あら、そう」と夫人はがっかりして言った。

「ボックス嬢はすぐに、自分が窓ガラスをノックしたと認めた。恋人とどうしても話すことがあるから、と。シュトゥットマンはありふれた恋愛沙汰と思って、兩人だけにさせ、パーゲルと一緒にまた事務所に戻って行った、...」。

「シュトゥットマンが真剣に尋ねていたら、ひょっとしたらすべて分かったかもしれません」。

「ひょっとしたらな。ー しばらくしてマイヤーがボックス嬢と事務所に来て、言った。自分は即刻、今、去らなければならない、と。シュトゥットマンはそうしなくなかった。シュトゥットマンは厳密そのものだからな。これは解雇になると思い、私にまず問い合わせる必要を感じたのだ。マイヤーは全く静かで、神妙だった（普段は少しもそうではないのだが）、自分はまさに去る必要がある、しかし給与の残りとして、路銀が欲しいと言った。...結局ボックス嬢も懇願して来た。マイヤーは去る必要があります。この人はもはや恋人ではないけれども、でも去る必要があります。さもないと不幸なことが起きるでしょう、と言った。...それでシュトゥットマンは更に尋ねる気がなくなった。彼は恋愛沙汰、嫉妬がらみと思ったのだ。で、結局、彼は、私がマイヤーを切りたがっていると知っていたので、同意して、兩人は一緒に向かった、...」。

「この場合シュトゥットマンは必ずしも賢明とは言えませんね。窓から射殺するような嫉妬はここいらではあり得ません。あなたの言葉を信ずるならば、マイヤーは『彼はまた私を射殺しようとしている』と叫んだのでしょ、...」。

「そうだ、そう、シュトゥットマンは私に語った、...」。

「また射殺する、ー その未知の男はすでに一度試みたのですね。そしてこれはヴァイオが未知の男と一緒に検査官の家へ向かったその夜の後に起きていますね、...」。

静まりかえった。両夫婦の一人も恐れていることを一言も声にしなかった。あたかも語るとそれが形となり、真実となってしまうかのようであった。

ゆっくりと騎兵隊長は頭を上げて、妻の涙を湛えた目を見つめた、「エーファ、我々はいつも不運だ、何も成功しない、...」。

「アヒム、勇気を失わないで、...差し当たりすべて単なる不安にすぎません。私に任せてください。きっと調べてみます。何も心配しなくていいわよ。約束します。最悪のことであっても、すべてあなたにお話しします。あなたに嘘は言いません、...」。

「分かった」と彼は言った、「静かに待つことにしよう」。そしてしばらく熟考した後で、「シュトゥットマンに知らせないか。シュトゥットマンは口が堅い」。

「ひょっとしたらそうしましょう」と彼女は言った、「考えてみます。この件については知っている人が少ない方が、よりいいでしょう。でもひょっとしたら力を借りるかも、...」。

彼は少し伸びをした、「いや、エーファ」と彼は言った、すでに彼は気楽になっていた（すでに単に悪い夢を見たかのような気がしていた）、「ここに本当の友を得て、どんなに私が幸せか分かんだろう」。

「分かりますよ」と彼女は真面目に言った、「確かに、私もそう思っていました、...」。しかし彼女は打ち切った。彼女は、自分も娘を一人の友と思っていたが、今や失ってしまったと言おうとした。 — しかし彼女はそう言わなかった、「ちょっと御免なさい」とその代わり彼女は言った、「ただヴィオレットの様子を見てください」。

「厳しくしないでくれ」と彼は頼んだ、「あの子は真っ青になっていた」。

85

中尉の驕り

さてご両人は進んで行った。森への道を進んだ。都会人の見たことのない真の田舎道で（都会人は都会人を見たことのないものをまことに愛好するもので） — その道は森に通じていて、森の奥深くにザリガニ池があった。深く、涼しく、澄んで、 — 実に素晴らしい。

「丁度、家族と一緒にベランダの騎兵隊長を御覧になりましたか」とパーゲルは尋ねた。「貴方は恵み深い御令嬢をどのように思いますか」。

「貴方はどうだ」とシュトゥットマンはそれに対し微笑して尋ねた。

「とても若い」とパーゲルは説明した、「よく分かりませんが、シュトゥットマン、私はものすごく変わったのに違いありません。こちらにフォン・ブラックヴィッツ令嬢がいて、それに我々と一緒に来たゾフィー嬢、それにアマンダ・バックス嬢、 — 一年前だったら食指が動いて、気を揉んだことでしょう。しかし今となっては、すでにもう年と思われれます、...」。

「貴方は数え上げるとき、黒いミンナ、事務所を掃除した女性を忘れてるぞ」とシュトゥットマンは真面目に言った。

「いや、シュトゥットマン」とパーゲルは半ば怒って、半ば笑って答えた、「いや、真面目な話し。私は自分の中に一つの尺度を持っています。この尺度を応用すると、すべての娘が、若すぎるか、愚かすぎるか、平凡すぎます、 — 分かりませんが、いつも何か『すぎる』ように思われます」。

「パーゲルよ」とシュトゥットマンは言って、立ち止まった。彼は腕を上げて、厳かにノイローエの農家屋敷の彼方を指さした。「パーゲル、向こうが西だ。向こうにベルリンがある。そしてそこにある。かくて貴方に言いたい。私はベルリンについて何も見たくないし聞きたくない、と。私はノイローエに暮らしている。ベルリンの思い出はいらぬ。ベルリンの話し、ベルリン娘の長所について何も聞きたくない」。そしてより真面目に言った、「パーゲル、いや、本当に何も語ってくれるな。実際すべてまだ早すぎる。後になってただ後悔するかもしれないぞ。私に対し何らかのことを確言してしまったとな。勿論貴方には一つの尺度があろう。それを持っていることを喜ぶがいい。それどころかその尺度と結婚するつもりだったのだからな。しかし今ははやそれを考えないことだ。ベルリンと、ベルリンの一切を忘れるように努めることだ。ノイローエに適応する。ただ農業主

になるのだ。これに成功して、それでな貴方の尺度が若干有効なら、そのときはそれについて話すことにしよう。それ以前はすべて、単に怠惰な、朦朧とした感情の幻惑にすぎない」。

彼はパーゲルのしかめっ面を見た。その鼻はいわば鋭くなっていて、口は一文字に結ばれていた。彼は、不機嫌、反抗的に見えた。彼は愚かでないし、この若いパーゲルは、シュトゥットマンの言うことをよく理解していた。しかし彼にとって納得が行かなかった。彼はシュトゥットマンの言い分は正しいと、認めてさえいた。しかしそれでも納得が行かなかった。彼は若くて、母親による世話から、恋人による世話へと移っていた。彼を圧迫するすべての苦悶、すべての些事が、共感を持って聞き入れられ、遺憾なものとしてきた。突然それが終わってしまった。

「それで、シュトゥットマン」と彼は最後に、若干不機嫌に言った、「貴方のお望み通り、何も話すことはありません、...」。

「それは素晴らしい」とシュトゥットマンは言った、「済まない、パーゲル」。彼はこの件を打ち切ることが賢明と思った。彼はこの若い顔から十分に読み取っていた。声を張り上げて、彼は言った、「それでだ、尊敬する同志農業主殿、これは何の穀物か教えて頂けるかな」。

「それはライ麦です」とパーゲルは言って、一本の穂を専門家風に指の間に滑らせた。「これは分かります。昨日皆とフォークで持ち上げました」。

そして彼は自分の火照って、水疱のできた手をこっそり素早く見た。

「私の見解と全く同じだ」とシュトゥットマンは言った、「しかしライ麦だとすると、これは『我らのライ麦』かという疑問が生ずる、つまり荘園のライ麦か」。

「圃場区地図によるとここは全体百姓の田畑ではありません」とパーゲルは躊躇いながら言った、「我らのものに違いないでしょう」。

「それはまた私の見解だ。しかし我らのものとすれば、何故まだ刈ってないのか。燕麦はもう刈っているのだろう。これは忘れられているのか」。

「あり得ません。農園中庭の間近です。我々は毎日ここを連獣で通り過ぎています。一度くらいはそれについての郎党の一言を耳にしたことでしょう」。

「郎党のことは口にするな。田舎でもホテルと変わることはあるまい。上司が忘れると奴等は髭の中でにやにや笑う。ホテルで何という経験をしたことか」。

「シュトゥットマン、シュトゥットマンさん、向こうがベルリンです。向こうにベルリンはあります、 — そこに置いておきましょう。連れて来ないことです。我々はノイローエに暮らしています、 — 私はベルリンの話しを聞きたくありません」。

「素晴らしい。それでは貴方は私の提案を受諾するのか。決まり。ベルリンについてはもはや話さない」。 — そして新たに熱く言った、「これは熟していないか」。

「これは熟しています」とパーゲルは叫んだ、自分の新しい知識を得意に思っていた、「御覧なさい、穀物は丁度爪の上で割れるものです、 — これは「すでに骨のように硬く、乾いています、...」。

「不可解だ、騎兵隊長に尋ねなければならん。貴方も覚えていてくれ、 — 今晚、彼が我々の注意深さを感嘆する様を見ることにしよう。彼は、今や頭に目があり、頭蓋に分別を有する役人を得ていることに気付くことになるろう。すべての役人どもの権化、第一級

の役人をな。我々について喜びの涙を流すことになるぞ」。

「シュトゥットマン、それはまさに驕りです」とパーゲルは言った、「全く逆上しています。貴方とも思えません」。

「パーゲルよ」とシュトゥットマンは叫んだ、「知らんのか。田畑の安らぎ、自然の息づかい、足下の草の生えた大地。 — これがどういふことか貴方は知らない、毎日三十キロ、足裏を傷めながら、ホテルの馬鹿げた通路に沿って突っ走るとは、...」。

「ベルリンだ、いかがわしい、忘れられたベルリンだ」。

「実際、予感はある、この安らぎもペテンにすぎない、と。向こうの可愛い小村の絵画のように緑の中に屈んでいる家々の中では、すべての大都会の賃貸兵舎同様に、戯言、嫉妬、密告が住まっている、とな。チリンチリン鳴る電車の代わりに、ここではポンプの柄が永遠にキイキイ音立てている。向こうの階上の文句言う老婆の代わりにこちらでは農園の犬が来る日も来る日も悲しげに鳴いている。向こうの灰鷹は鼠の死を意味している。

— しかし同志パーゲルよ、私の幸福を許してくれ。私の信仰の花弁を散らさないでくれ。田畑の安らぎ、諸々の小屋の団結、自然の憩いを、...」。

「泳ぎましょう、シュトゥットマン、泳ぐと涼しい、 — ザリガニ池はととても冷たいそうだ。 —

「そう、泳ぐことにしよう」とシュトゥットマンは熱狂して同意した。「この熱い体を涼しい流れに浸そう、思い乱れた額から疑念の沁みる汗を洗い流そう、 — いや、パーゲル、告白せざるを得ないが、私はすごく気分がいい、...」。

86

レーダー、老練な外交官

枢密農業顧問官ホルスト＝ハインツ・フォン・テッシュォーはかつて、老従僕エリアスに一本の杖を贈った。黄金の球状の握りが付いた黄褐色のマラッカ籐杖であった。一般的に老公は贈り物をしなかった。普通この問題はこう尋ねて片付けていた。私に何か贈り物をする人がいるか。しかしまさに時に別様となり、誰かに何かを贈った、(そして更にそのことを終生言及した)。

マラッカ籐杖は、球の微光を発する黄金から、その地の灰色の鉛が現れた末に、エリアスの所有へと移った。だからと言って、老公がエリアスにしばしば「真の黄金の杖」について言及する支障とはならなかった。「エリアス、杖をきちんと磨いているか。杖は四週間ごとにグリースを塗らなければならない。このような黄金の杖、これは子供達に遺贈できる遺品たり得る。 — いや、子供はいなかったな、(少なくとも、私の知る限りでは)、しかし私は確信しているぞ、私の孫娘のヴィオレットでさえ、おまえが遺言で遺品としたら、この黄金の杖のことを喜ぶであろう、と、...」。

エリアスがこの球の黄金の中味についてどう考えたかは、知られていない。彼はこのようなことについて語るには余りに威厳があった。しかし彼はこのマラッカ籐杖に愛着があって、日曜日ごとの散歩のときには常に手にしていた。今日もそうであった、一方の手に杖を、別の手にパナマ帽を持って、彼は大きな、黄色の頭蓋を、午後の日差しの中、村の家々を抜けて、騎兵隊長の別荘へ向かった。彼の飾りボタンの付いた厳かな褐色のフロツ

クコートの胸ポケットには、左手に千マルク紙幣の財布が、右手に婿宛の枢密顧問官の手紙が収まっていて、この手紙がようやく届けられる予定であった。

一人の顔に出会うと、老エリアスは立ち止まって、話しかけた。それが子供の場合、第一の戒律[主を敬う]か、第五の戒律[父母を敬う]を尋ねた。女性であると、痛風の痛みのこととか、乳児を育てるためのミルクはまだ十分にあるか尋ねた。男達の場合、彼は収穫の進み具合を尋ね、「ほう」とか「おや」とか「そうですか」と言い、いつも三、四語文の後に会話を止めて、軽くパナマ帽を振って、マラッカ籐杖を大地に押し、更に歩いて行った。どんなお偉方もこの老エリアスが村の住民達の中で行うほどに、気さくに、それでいて威厳をもって、臣下の間を歩いて行くことはできなかったであろう。この住民達は彼に関心はなく、彼も住民達に関心はなかったのであるが。しかし住民達は皆、彼を、ありのまま、心やすく受け入れた。最初のインタビューを煩わしく思う新入りがその中にいたとしても、一体この老猿公は、自分に何を求めているのか、全体彼は彼自身を何様と思っているのか不審に思ったとしても、一 二回目とか、遅くとも三回目のインタビューのとき、この何の気もない無関心の魅力に屈して、古い馴染み同様に、いそいそと答えたであろう。

老エリアスは森林官のクニーブッシュと丁度同じ歳であったが、全く別様で、森林官が永遠に不安がって、おべっかを言い、目を覗き、口許に話しかけ、耳許に吹聴し、常に、年齢と支出に不安を抱いていたとすれば、一 この老エリアスは落ち着いて、陽気に歩き回っていた。この世の物事は彼にとって何の意味もなく、彼は自分のずる賢い、邪悪な主人と自明に、子供が人形を相手とするように、折り合っていた。そのようにとにかくこの奇妙な地上では仕組みが出来上がっている。一方の者の心を圧迫する不安、それを別の者は少しも感じないのである。

従者エリアスは、別荘に到着すると、手紙をもって先に階段を上がって、昨日の土曜日、祭日用に従者レーダーによって磨かれた真鍮の呼び鈴を押しに行かず、別荘を回って、地階へのセメントの階段を下って、そのドアをまさに然るべく、甲高すぎもせず、弱すぎもしないノックをした。誰も「お入り」と叫ばなかったので、エリアスはドアを開けて、キッチンに立った。そこは全く日曜日らしい静けさと清潔さが見られた。ただ晩のためのお茶用ヤカンが穏やかに弱まって行く炎の上で音立てていた。老エリアスは振り返って見たが、台所には誰もいなかった。それで彼はヤカンを取って、流しでそれをほかし、空にして脇に置いた。若い恵み深い奥方はそのお茶を新しく沸かしたお湯で入れると知っていたからである。気の抜けたお湯ではない。

これを済ますと、エリアスは台所の奥のドアを通して、暗い通路を行った。通路は別荘の地下階を二つに分割していた。通路で彼の杖は明確に「コツ、コツ」と言って、その上老エリアスは咳をし、余計なことに更にドアをノックした。しかしひょっとしたらこうしたすべての通知は不要であったかもしれない。とういのは従者レーダーが全く静かに強張ってがらんとした彼の部屋の板椅子に座っていて、両手を膝に置き、その据えて冷ややかな[魚の]目で粗雑なドアを見つめていたからである。すでに何時間も前から座っていたかのようであった。

従者エリアスが入ると、従者レーダーは椅子から立ち上がった。のんびりすぎもせず、早すぎもせず、まさに然るべき様であって、こう言った、「今日は、エリアスさん、どう

ぞお掛けなさいますか、...」。

「今日は、レーダーさん」と老エリアスは答えた、「お邪魔しますが、...」。

「喜んでお迎えします」とレーダーは説明した、「年長者は敬うべきです」。

そして彼は相手の両手から帽子と杖を取った。帽子を一つの鉤に掛け、杖をある片隅に立てかけた。その後、彼はドアを背にして立ち、従者エリアスに向かい合ったが、彼とは部屋の幅、隔たっていた。

大きな、黄色のハンカチで、エリアスは自分の眉と額を拭いて、好意的に言った、「いや、あの、いや、ー今日は暑い、立派な収穫日和だ、...」。

「収穫については存じません」とレーダーは拒絶して言った、「私はここ地下室に座っています。収穫については関与していません」。

エリアスはハンカチを丁寧に畳んで、上着のポケットに仕舞い、代わりに手紙を取り出した、「騎兵隊長殿への手紙を持参した」。

「我らの義父殿の？」とレーダーは尋ねた、「騎兵隊長殿は上です。すぐに貴方のことをお伝えしましょう」。

「いや、あの、いや」と老エリアスは溜め息を吐いて、手紙を、あたかもアドレスを読むかのように見つめた。「親戚の者が互いに手紙を書いているわけです。口で直接言えないことを、レーダーさん、これは手紙でも書くべきではないでしょう、...」。

彼は今一度アドレスを不審に思って、手紙を慮外の面持ちで、レーダーのベッドに置いた。

「エリアスさん、お願いします」とレーダーは厳しく言った、「私のベッドから手紙を取ってください」。

老いた男は溜め息をつきながら、手紙に手を伸ばした。

より平静にレーダーは語った、「我らの義父殿の手紙がかつて良いことをもたらしたことはありません、ーその手紙をご自分で静かに渡されたらよろしい。エリアスさん、貴方のことをお伝えします」。

「老いた者に一息入れさせてください」と老従者は嘆いた、「多分急ぐものではないでしょう、日曜日の午後」。

「勿論、この間、騎兵隊長殿は散歩されます。私が最初の怒りを頂くことになります」とレーダーが恨み言を言った。

「向こうでは孫娘さんのことが心配されています」と老エリアスは言った、「我々の宮殿ではこの五日間ヴィオレット令嬢の姿を見ていません」。

「宮殿と仰有る、粘土小屋でしょう、エリアスさん」。

「ヴァイオちゃんは病気ですか」と老従者は追従した。

「医師が来たことはありませんよ」とレーダー氏は言った。

「娘はどうしたのです。若い娘が、ー良い天候なのに家にいるなんて」。

「貴方の『宮殿』も家でしょう、ーどちらの家にいるか、構わないでしょう」。

「それじゃ本当に外出していないのですね、ーここの庭園にすら出ないのですか」と老従者は言って、立ち上がった。

「それが庭園と呼べるものですか、エリアスさん。ーそれでは手紙は恵み深い御令嬢に関係するものですか」。

「そうは言えないのですが、一可能性はあります」。

「手紙をお渡しください、エリアスさん、私が届けましょう」。

「騎兵隊長殿に渡しますか」。

「私がきつと責任をもってします、一早速上へ行きます」。

「それでは枢密顧問官殿には、貴方がお渡ししたと伝えます」。

「分かりました、エリアスさん」。

コツ、コツ、コツ、一 マラッカ籐杖は老エリアスと共に外の日向に出た。そしてコツ、コツ、コツと従者レーダーは階段を上がって二階[地上階]へ行った。

彼が部屋のドアをノックしようとしたとき、その二階で一人の足音が階段を下りてくるのを耳にした。そして彼が見上げると、それは段を下りる恵み深い奥方の足音であった。そこで従者レーダーはそれを虫の知らせと解し、ノックせず、手紙を幾分背に隠して、言った、「恵み深い奥方様」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は目の下の頬骨の上に両の赤い斑点ができていて、あたかも泣いていたかのようにであった。しかし彼女は全く威勢良く言った、「フーベルト親方、何の用です」。

「向こうから騎兵隊長殿へ一通の手紙が来ています」とレーダーは答えて、手紙の角を見せた。

「それで」と恵み深い夫人は尋ねた、「何故部屋に入って、手紙を渡さないの、フーベルト」。

「そう致します」とフーベルトは囁いた。しかし手紙をはっきりと見せなかった、「私はエリアスさんより勇気があります。エリアスさんは渡す度胸がなかったのです。私の部屋にまで来まして、かつてなかったことです、...」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は熟慮する余り、額の眉間に小さな垂直の皺を作った。従者フーベルトは手紙を少しばかり見せた、ほんの角だけを見せた。一 部屋から騎兵隊長の怒鳴り声がした、「私のドアの前で何のひそひそ話しだ、忌まわしい。私がそれを死ぬほど嫌っていると承知しておろう。一 いや、済まん、エーファか」。

「分かりました、アヒム。ここでちょっとフーベルトと話しがあつて」。

騎兵隊長は引込んだ。恵み深い奥方はフーベルトと一緒に廊下の窓の一つに近寄って、言った、「それじゃ手紙を渡しなさい、フーベルト」。

「宮殿ではヴィオレット令嬢のことで様々に憶測されています」とフーベルトは遠回しに語った、「エリアスさんまで何故御令嬢は五日間宮殿に見えないのか、知りたがっています」。

「それで、フーベルト、貴方は何と言ったの」。

「私がですか、奥方様、何も語りません」。

「そうですか、それはご立派、フーベルト」とフォン・ブラックヴィッツ夫人はとても辛辣に証した、「ヴィオレットのことで私がどんなに心配しているか、貴方はご存じです」。

一 それで、その未知の方は誰だったか私に教える気はないの、フーベルト、心からお願いしますよ」。

彼女は本当に頼んだ。しかし棒鱈に何も頼むべきではないだろう。

「私は未知の方は存じません、恵み深い奥方」。

「そうね、勿論そうね。その人は貴方にとって既知の方ですからね。ー フーベルト、何というずる賢さでしょう」とフォン・ブラックヴィッツ夫人はとても怒った、「でも貴方がこれ以上、フーベルト、秘密めかして、不誠実なことを続けたら、ー 私どもは友達と言えなくなりますよ」。

「そんな、恵み深い奥方様」とフーベルトは不機嫌に言った。

「『そんな、恵み深い奥方様』て、何という意味です」。

「済みません、ここに手紙があります」。

「いいえ、私はどういう意味か知りたいの、フーベルト」。

「いわば単に言い回しのことでして、...」。

「言い回して、何です、フーベルト、言いなさい」。

「私どもは友達と言えたという点です、恵み深い奥方様」とフーベルトは全く冷やかに[魚のように]言った。「私は単に従者に過ぎませんし、恵み深いご夫人はフォン・ブラックヴィッツ奥方様です、ー 友達云々は問題になりません、...」。

恵み深い夫人はこの厚かましさに接して、燃えるように赤くなった。彼女は混乱して、従者が相変わらずまだ差し出していた手紙を掴んだ。彼女はそれを引き裂いて、読んだ。しかし読みながら、その最中額を上げて、鋭く言った、「レーダーさん、貴方は従者職には愚かすぎるか、賢すぎます、ー このいずれの場合でも、私どもは早速お別れすることになるかと案じます、...」。

「恵み深い奥方様」とレーダーは言った、今度はさすがに少しばかり興奮していた、「私は自分の履歴証明に高貴な貴顕の方々の推薦状を頂いております。従僕学校では最優秀の卒業証書を得ています、...」。

「分かっています、フーベルト、分かっています、貴方は真珠です」。

「仮に騎兵隊長殿が私を罷免なさろうとする場合、私が辞職できますよう、時間の猶予をお願いします。罷免されますと、私の職歴の妨げとなりますので、...」。

「結構よ、結構」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は言って、短い手紙をざっと読み、訳も分からず、数字の並んだ紙片を見つめた、「フーベルト、貴方の願い通りに致しましょう。ー これは」と彼女は説明して言った、「単に意味のないビジネスの手紙です。ヴィオレット嬢に関するものではありません。エリアスは多分自分の心積もりで、詮索心があったのでしょうか」。

しかしフーベルトは、恵み深い夫人がその手紙を手には保有しないのを見た。夫人はその手紙を何度も折って、それを自分の服の脇ポケットに入れた。

「貴方がフォン・シュトゥットマンさんを見かけたら、フーベルト、七時頃、いや、六時四十五分にこちらへお出でくださるよう、伝えてください、...」。

そう言って恵み深い夫人はフーベルトに今一度手短かに頷いて、それから騎兵隊長の部屋へ入って行った。

フーベルトは更にちょっと廊下に立っていて、中の両人が話す声を聞いた。それから彼は階段を一つずつ、いつも足全体を穏やかに置き、離しながら、階段を上がって行き、それで廊下は音がしなかった。

上では床を素早く歩いて、ただ一度だけこっそりドアをノックして、素早く入った。

部屋ではヴィオレットが小卓の許に座っていた。くしゃくしゃに湿ったハンカチと顔の

赤い斑点とから、彼女も泣いていたことは明らかであった。

「それで」と彼女はそれでも興味を示して言った、「ママも貴方に根掘り葉掘りだったの、フーベルト」。

「恵み深い御令嬢は軽率に聞き耳を立ててはいけません」とフーベルトは非難した、「ずっと貴女の足が最上階の階段踊り場で丸見えでした恵み深い奥方様も気付かれたかもしれません、...」。

「まあ、フーベルト、可哀想なママ。たった今ママはここで泣いたの。時々とても辛くなる。恥ずかしく思わなければならない気がして、...」。

「恥じる必要はありません、恵み深い御令嬢」とフーベルトは厳しく言った、「貴女は老御領主一家の望まれるように暮らすか、その場合恥じる必要はありませんし、あるいは我々若い者が正しいと思うように暮らすかです。この場合まずもって恥じる必要はありません」。

ヴァイオは彼を吟味するようにつめた、「時々私は、貴方をとても劣等な人間と思ってしまう、フーベルト。貴方の計画は全く劣等だと」と彼女は言った、しかしかなり用心して、ほとんど不安げであった。

「私の人間性は、貴女には関係ありません、恵み深い御令嬢」と彼は素早く言った、一切はどうに考え抜かれていたようであった、「それに私の計画はまさに私の計画です。貴女のご意向、それが貴女には大切でしょう」。

「それでママは何を望んでいたの」。

「ただいつもの、未知の男性についての質問です。祖父母も、ご令嬢、貴女のことを憶測しています」。

「ここから出して欲しいわね。ここの中はもう耐えられない。喚いて死んでしまいそう。本当に木の中には何もなかったの、フーベルト」。

「一通の手紙も、紙片もありません」。

「いつ覗いたの、フーベルト」。

「丁度コーヒーを飲む前です」。

「もう一度覗いて、フーベルト、すぐ行って、知らせてよ」。

「無意味です、ご令嬢。彼は日中村へは来ません」。

「では夜には十分注意してね、フーベルト。全然来なくて、考えられない。固く約束してくれたのよ。早速、翌々日の、いや、翌日の夜にもこちらに来るつもりだって、...」。

「こちらにはきっと来ていません。私に会っていたでしょうし、こちらに来ていたら、私は耳にしていたことでしょうから」。

「フーベルト、ただもう我慢できない、一日中も、夜も彼の姿が見えるの、するとあたかもここに本当にいるかのように彼のことを感ずるの。でも掴んでみると、何もなくて、百もの階段を落ちて行く、...全く妙な具合で、毒を飲んだよう、もうじっとしておれない、...すると彼の両手が見えるの、フーベルト。彼の両手はとてもきれい、フーベルト、しっかり握ってくれて、すると戦慄が走る、いや、一体私はどうしたのかしら」。

彼女は大きく目を見開いて従者フーベルト・レーダーを凝視した。しかしそもそも彼女が彼を見ていたか、定かでなかった。

従者レーダーは棒のようにドアの下に立っていた。たじろがず、柔らかな、全く率直な

娘を見ていたのであるが、彼の灰色の色合いは赤みを帯びず、彼の目は灰色で、輝きのないままであった。

「何も考える必要はありませんよ」と彼はいつもの教示する調子で言った、「そんなものなのです」。

ヴァイオは自分の内密な者、唯一の内密な者を、あたかも救いをもたらす予言者のように見つめた。

レーダーは意味深に頷いた、「肉体的現象です」と彼は説明した、「それは肉体的欲求です。それについて一冊の本をお渡しします。ある医師、衛生顧問の手になるものです。その中に、どうしてそうなるのか、どこに巣くっていて、どのように治すのか、すべて正確に証されています。それは欠落症状、あるいは禁断症状と呼ばれるものです」。

「本当にそうなの、フーベルト。本に載っているの。その本を持って来なさい、フーベルト」。

「その通りなのです。これは一殿方には関係ないことです」。フーベルトは目を細めて、彼の言葉の効果を観察した、「単に肉体の仕業です、一肉体が飢えているのです、御令嬢」。

ヴァイオは十五歳であった。彼女は単にこの年頃の娘のように、軽率で、享乐的であったのかもしれない。恋愛について彼女はまだ幻想を抱いていて、ヴェールが一つ千切れたぐらいでは、すべての優しい妄想が消えてしまったわけではない。ただゆっくりと彼女はレーダーの教示の射程全体を把握して行き、刺されたかのように縮み上がり、喘いだ。

しかしそれから彼女は棒立ちになって、従者に発した、「無礼よ、無礼よ」と彼女は叫んだ、「貴方は豚よ、レーダー。すべてを汚す。消えて、私に構わないで、私の部屋から出て行って、即刻、...」。

「落ち着いて、御令嬢、静かになさってください。恵み深い奥方が来られます。嘘をつくことです。騎兵隊長殿が知ることになったら、少尉は終わりです、...」。

そして彼は部屋から滑り出て、隣りにある恵み深い奥方の寝室に消え、ドアの背後に立った、...彼は素早い足音を聞き、ヴィオレットの部屋のドアが開いた、...

更に彼は聞き続けた、恵み深い奥方の声が聞こえた、ヴィオレットは声高に嗚咽した。

これは彼女のできる最も狡猾なことだ、と彼は満足して考えた。呻く、一これは多分、少しばかり早すぎて、強すぎるものだ。まあ、一週間少尉からの知らせがないとなれば、仕方ない、...

彼は階段で騎兵隊長の足音を耳にした。彼は恵み深い奥方の浴衣とガウンの間に低く縮こまっていた、...。騎兵隊長は愚かで、激していて、軽蔑ものであったが、しかし騎兵隊長のみが、相手として不安を抱かなければならないほとんど唯一の男性であった。隊長は窓ガラスを破って一人の人間を投げ出すことができた。隊長は火山であり、自然の災害である。彼に対して知略は役立たない、...

「おまえのやり方はきつすぎる」と騎兵隊長の怒った声が聞こえた、「この子はただ神経質になっているのだ。外の新鮮な空気が必要だ。来なさい、ヴァイオ、少しばかり散歩しよう、...」。

レーダーは頷いた。騎兵隊長の浴室と寝室を抜けて、彼は階段に出て、こっそりと自分のがらんとした地下室へ下りた。彼は戸棚の錠を開けた。二番目の鍵で彼はスーツケース

を開け、その中からぼろぼろに読み尽くされた本を取り出した。「若い男が結婚生活前に知っておくべきこと」。

彼はそれを一枚の新聞紙に包んだ。それを夕方ヴィオレットの枕の下に置くことにしよう。ひょっとしたら今日、明日は無理かもしれない。しかし明後日辺りには。ヴァイオは読むであろう、憤慨しても、と彼は確信していた。

87

ゾフィーの冒険

ゾフィー・コヴァレフスキー、ムッツバウアー伯爵夫人の先の侍女は、この日曜日の朝、両親に言った、「ちょっとビルンバウムのエミーの許まで乗り物で出掛けるわ。食事のとき、私を待たないで。ひょっとしたらまた夕方になって帰ってくるかも」。

優しい老父は頭で頷き、ただこう頼んだ、「フィーケン、国道を行くんだ、森の道はいけない。今頃一带には男どもがうろついている」。

とてつもなく太って、まだ口をもぐもぐし、まだ消化中の母親が言った、「あのエミーは大層な縁組みをしたんだよ。すでに雌牛が一頭と山羊が二頭いる。三頭の豚を自分達用に屠殺してね。ひもじい思いをしないで済んでいる。いつも何か食べ物があるんだよ。鶏や鶯鳥も飼っている。そのような縁にあんたも恵まれたらいいのに、...」。

ゾフィーはとうに外に出ていた。彼女に自転車を貸した女友達は、然るべく青い服を褒め、彼女はサドルに飛び乗って、ベルを鳴らしながら、ゆっくりと村を通り、皆に見て貰い、そして苔むした静かな森の道へ入った。その道をピロードの上のように音もなく自転車は進んだ。運材で傷んだ轍の横の道は固くて、とても狭かった。しばしばヒースやゲニスタがペダルに触れて、朝露を彼女の靴先に投げかけた。古い松の美しい柱状の幹が彼女の横に並んでいて、赤く朝日を受けて輝いていた。 — そして時々、狭い小道は、とても窮屈に二本の幹の間を走っていて、一方の側にぶつからないようにするために、しっかりとハンドルを握っていなければならなかった。ブルーベリーが密に育っていて、その実がすでに青かった。森の草はまだ緑で、柏檜は黙して、小暗く立っていて、かなり明るい下生えの間にあった。小さな森の小鳥の永遠の羽ばたきとさえずりが見られた。

ここでゾフィーは子供時代を過ごした。すべての物音が彼女には馴染みがあった。森の遠方の定かならぬざわめき、かなり間近に来るが、すぐ近くに来ることはないそのざわめきを、すでに彼女は子供時分聞いていた。彼女の髪の上の陽は、当時の子供の髪の上の陽と同じであった。通り過ぎながら、開けてまた閉じる区画線、森の心臓部へ導くと思われる区画線を素早く眺めていた。

全く劣等そのものである人間はいない、ゾフィーもそうである。 — アルコール浸けのバーの夜の騒がしい陽気さとは何の共通点もない、陽気さに彼女は包まれた。あたかも肉体が新しい血を受け取ったかのように、新しい、陽気な、快活な想念が、新しい呼吸のたびに彼女の中を流れた。荒れた流行歌の代わりに、彼女は到来した五月の歌を口ずさんだ、...。雲が — 天蓋の中、 — 移って行く、...楽しからずや。

突然ゾフィーは笑わざるを得なかった。彼女の母親が彼女を昔、野いちご狩りに森へ連れて行ったときのことを思い出した。当時彼女は八歳か九歳であった。苦勞して摘むこと

は直に彼女にとって退屈になった。遊びながら、思わず口ずさみながら、彼女は熱心な母親の側から離れ、十回呼びかけられ、十一回目の呼び声はもはや聞こえなくなっていた。小声で歌いながら、幸せに笑って、彼女は次第に森の中へ迷い込み、目的もなく、単に動作を楽しんで、彼女は更に、小さな谷の中を進んで行った。その谷へは平らな丘から木々が静かな巡礼のように垂れ下がっていた。長いこと彼女はせわしい小川の「さらさら」流れる物音に聞き入っていた。それ以上に長く、温かくなって森の空き地を花から花へと舞い飛ぶ蝶を見つめていた、 — その黄色の蝶を掴まえる気にはならなかった。

とうとう彼女は或るブナの森に達した。幹は銀灰色に高くそびえていた。上の緑はとても楽しげであった。木々は互いに隔たって立っていて、どこでも陽光が黄金の温かい影の中へ差し込んでいた。小声で歌いながら、ほとんど何をしているか自覚せずに、ゾフィーは服を脱いで行った。彼女の素足は深く、柔らかで茶緑色の苔の中へ沈んで行った。あちらに小さな服があり、向こうの木切り株の上に小さなズボンの継ぎが見え、今や苔の中にシャツが沈んだ。 — 一層明るく歓声を上げて、この子供は裸で陽光と影の中、踊っていた。笑っていた、...

それは生きている喜び、この地上に暮らし、明かりの中歩き回る歓喜であった、 — 生の喜びであった。痩せた胸の中の小さな心臓は動悸し、震えた。歓喜、 — 太陽、 — 太古の韻、永遠の感情がその子供を襲った、ますますの新緑の中へ、ますますの別の世界へ、ますます深みを増す秘密の中へ踊って行った。太陽と — 歓喜 — 声高に、小鳥のように歌い、途切れては、昔の轍の中の甲虫を観察し、また息するように、何も考えず、歌い始めた。...

それは生きている生の喜び、幸福であった。 — 大人が今やそれを承知していようとまいと、大人が永遠に郷愁を感じるあの感情である。大人が後に再三求める幸福で、どこにあるか、誰も答えたがらず、二度と見いだせないもの、子供時代と共に消えた幸福である。 — 後に、ある弱い反映の中にのみ、つまり恋人との幸せな抱擁の中とか、ある作品への喜びの中に見いだされるものである。かつて所有し、咎なくしてか咎あって、失ったもの、 — 消え去ったもの、喪失したものである。

小声で歌うように自転車は道を進み、チェーンは軋んだ。ある根の上を行くとき、後輪の泥よけがカタカタ音を立て、サドルのバネが呻いた。太陽と — 歓喜 — ゾフィーは今や歌おうとした。しかし上手く行かなかった。温かい太陽が子供の自分にとって突然冷たくなって、懐かしい森が不気味になって来たことを彼女は思い出さざるを得なかった。彼女は泣かざるを得なかった。彼女は道に迷っていた。すべてが敵に見えた。刺すような枝、道の尖った石、ある家畜の群れから襲来する蛇の群れ。ようやく彼女は森の労働者、老ホーフェルトによって発見されたのであった。

「フィーケン、恥ずかしくないのか、そんな裸で走り回って」と彼は叱った、「人間だろうもん。子豚じゃあるまいし、...」。

彼が彼女を母親の許に連れ戻した。母親の悪罵ときたら。衣服を求めて、何時間も探し、衣服は見つからず、叱られ、打たれた。村への帰還。腰の周りの母親のカチーフ。他の子供達の嘲笑と、老人達の賢い意見、「コヴァレフスキーよ、注意しろよ。この娘は今一度困らせるぞ」。

もっと急いでゾフィーはペダルを踏んだ。彼女は森の静寂の中に呼び笛を響かせた。彼

女は頭を振った、間近の家畜の群れから蛇の群れが取り巻いているのではなかったが。彼女は頭から思い出を振るい落とそうとした。誰も、自分がどうなるか、何になるか言えない。しかし時に知識の一端を得て、一片の道が、いやほんの少しの距離、背後に明瞭になる。...すると我々は自分に腹が立ち、これは面白くないと思い、悩ましい考えを頭から振り落とす。我々はあるがままの自分なのである。我々が別様にならなかつたとしても、それは我々の責任ではない。その点につき、思い煩う必要はない。

更に一層速く自転車は進んだ。林道から林道へ、区画線から区画線へと滑って行った。ゾフィーはビルンバウムのエミーの許に向かっていた。彼女は監獄のハンス・リープシュナー、確定判決を受け、すでに前科のある紳士詐欺師の許に向かっていた。人生は日曜日ではない。人生は極めて策謀に満ちた、陰険な案件である。他人を騙さない者、これは他人に騙される。ゾフィーは夢に耽っている時間はなかった。彼女は、ハンスの妹として訪問許可を得るには、一 証明書類もなしにそうするにはどうしたものかと考えなければならなかった。

今やゾフィーの唇はしっかり結ばれ、彼女の口は厳しい、乾いた輝きを帯びた。彼女は森を見る時間をもはや有しなかった。彼女は考え込んだ。確かに彼女はキリスト教徒宿坊の便箋に、自分は宿坊管理課の料理人、ゾフィー・リープシュナーであると証明していた。しかしこの劣等な、ひょっとしたら正書法すら覚束ない「身分証」が役人の目をすり抜けないことは、彼女にも明らかであった。父親の語ったことから判断すれば、逐電した小検査官マイヤーなら、まさに彼女に荘園管理人の印を押して、何らかの証明を発行してくれるあつらえ向きの人であったことであろう。しかしこの点、不運であった。この男と彼女は顔を合わせることができなかった。コンパートメントで自分と一緒に来た別の兩人の方は、この方々は娘にささやかな好意を見せないであろう。これはすぐに分かることだった。兩人は彼女に対して余りに丁重であって、丁度バーでの上品な紳士達にそっくりであった。彼らは丁重に拒絶的で、レディーにウィスキー代を払おうとしないのである。

ゾフィーの思念はあちこち揺れた。しかしだからといって、沈むことはなかった。これまで彼女は人生で相変わらず運が良く、正確な目は然るべき時に発揮すると、いかなる結果をもたらすか、良く承知していた。可愛い娘はいつも運がいいのである。

ゾフィーも運が良かった。監獄は盛大な訪問日であった。百人を越える親戚縁者が鉄の門の前に立っていた。ゾフィーはその間に割り込み、大急ぎで中に入れられ、巡査があちこち駆け、書類が調べられ、質問がなされ、穏やかに、穏やかに、小幅に歩み寄って、ゾフィーは未検査の群れから、検査済みの群れに紛れ込んだ。

すでに彼女は一緒に訪問室へ入って、格子の一方の側に親戚縁者が立ち、他方の側に囚人が立っていた。互いに会話がなされ、耳を聳するほどであった。そこに立って、すべての言葉を監視しなければならない哀れな両巡査はその任務を果たすにはかばかしくなかった。今ならどんなに素晴らしくゾフィーはハンスと、心にかかるすべてをお喋りできたことだろう。しかし勿論ハンス・リープシュナーは訪問室にはいない。文句も言えない。彼は勿論、訪問予定の囚人リストには載っていないからである。

しかしここでもまた、リープシュナーは紳士詐欺師であって、つまり暴力沙汰や正義面の人間ではなく、すべての香油を塗られた狡猾漢であり、つまり従順で、愛想の良い囚人、すべての家内秩序の模範であることはいかに結構なものであるか、明らかになるのである。

それ故すでにハンスは模範囚となっており、模範囚として通路に関与し、通路から彼は訪問者の来訪を見ることができたのである。カラスの目は鋭い。ゾフィーは昔のままのゾフィーであるな。いや、ハンスが自分の棟の巡査の好意を得ていなかったら、どうなっていたら。しかし鋼の鋸が丁度見つかった。すでに三本の鉄格子が切り取られていた。そのようなものを時宜良く見つけるのはすべての棟の巡査にとって表彰ものである。この巡査は称賛され、それ故、自分の模範囚に好意的であった。一 殊に彼は作業分遣隊の約束をまだ果たせないでいたのである。その件以来、まだ分遣隊の派遣がなかったからである。

かくてゾフィーは突然、髭面の中年の巡査の手招きを受けた。「まあ、お嬢さん、こちらへどうぞ」。全く汚らしいロープで一杯の或る狭い房に彼女は押し込まれ、その上門をされた。そして彼女が自分の潜入がばれたか、そして「このように」処罰されているのかと千々に思い乱れていて、丁度ノックしようと思っていたとき、門がまた音立てて、汚らしい服を着た彼女のハンスが入って来た。とても灰色にくすんでいて、目の下に隈があり、鼻は尖っていた。一 しかし悪漠らしい微笑で、全く昔ながらのハンスであった。

巡査は脅すように指を挙げた、「子供らよ、妙なことをするなよ」。しかし彼はゾフィーをとっても好意的ににんまりと見つめていて、あたかも彼女と妙なことをすることに自ら異存がないかのようにであった。

それからまた門が音立てた。すでに彼女はハンスの両腕の中にいた。嵐のよう、台風のようにであった。彼らの聴覚、視覚が消えた。耳許で呻り、眼前ではかすんだ。一 間近の、愛しい、恋しい顔。馴染みの臭い。唇での味覚。溜め息と、小声の叫び声。はじける笑い声。それがすでに窒息して、二、三の言葉。一 いや、ただこう言うだけ、「あら、...いや、...幸せ、...」。二、三の言葉を交わす時間はほとんどなかった。

「とても会いたかったわ」。

「収穫分遣隊で外に出られる、それからずらかる」。

「まあ、一 うちの所へ来ればいいのに」。

「どこへだ」。

「ノイローエよ、今両親の許なの。父が言ってた、収穫分遣隊が必要だって」。

「次の分遣隊のとき、きっと出られよう。少しばかり里で圧力かけられるかい」。

「ひょっとしたらね、まあ、どうなるか、ハンス、...」。

「良かったぞ、半年も、...」。

ゆっくりと、満足して、幸せに、ゾフィーは小都市マイエンブルクのでこぼこの舗石の上を歩いていた。彼女は自転車をまずは落ち着いて小さな居酒屋に置かせて貰った。そしてマイエンブルクの最上等のホテルへ行き、『プロイセンの王子亭』で昼食を摂った。ここでは大農業主達が食べる。子供時分彼女はよくその前に立って、金箔の飾りの付いた黒い紋章に驚いたものである。今や彼女は大人となって、その店に入り、外のテラスに腰掛けた。ホテルはほとんど空で、日曜日、農業主達は家で食事する。日曜日には農業組合も、家畜取引もなく、口実として、家族を締め出す食事とはならない。

ゆっくりと、享受を求めて、ゾフィーは食べた。彼女は得られるものすべてを食べた。その上ハーフボトルのライン・ワインを飲んだ。今やまた立派に滋養を摂る気分になっていた。ひょっとしたらハンスはノイローエに来るかもしれない。上手く行くに違いない。

コーヒーに添えて、大きな椀のコニャックを注文し、ゆっくりと煙草を次々に吸った。テラスの下を流れて行く小川から樞受けの樞の乾いた木製の物音が遠方で聞こえた。その小さな樞は見えなかったが、正午の暑さの中、はっきりと人の声が聞こえた。

「エルナ、もっと少し速めろ。まだ泳ぎもしたいし、…」と今や聞こえて来た。

突然ゾフィーは、自分も泳ぎたい、泳いで日光浴をしたい、肌を焼きたいと思った。彼女は今日自分の体にただ良いことをしたくなかった。しかしここではない。ここではきっと男どもが蝟集して来る。これは泳ぎではない。隣のテーブルの猿公は、すでに三十分前から、頭から大きく目を見開いて見ている。この人は少しもお呼びでないのが、分からないのか。

ゾフィーは水着を携帯していないことを思い出した。家にすらトランクの中に一つもない。 — しかしマイエンブルクでは日曜日でも水着を一枚問題なく替える。彼女は勘定し、立ち上がり、出て行きながら、ぎよろ目の殿方の頭からカンカン帽子をうっかりしてチーズ皿へ落下させてしまった。「御免なさいね」と彼女は優しく、次第に赤くなって行く殿方に語りかけ、去った。

勿論小さな手芸店はまだあった。五年前にあって、十年前にもあって、多分マイエンブルクの創建以来あって、そこにオッティ・クーヤーン嬢の手芸店は永遠に存在するであろう。小ベルク通り、菓子屋ケラー（クヌチュ喫茶店）の斜め向かい側である。ゾフィーはまず店のドアを試して押すことをしなかった。このような点、小都市民は几帳面である。日曜日の午後、店のドアは閉まっている。

しかし裏に回ると、少しも面倒なことはない。小さな、猫背のクーヤーン嬢は十年前と同じ白髪で、同じ思い悩む鳩の視線で、とても喜び、水着を持って来て、それを日曜日の午後でも売る用意があった。

それはモダンな水着ではなかった。動くたびに別の大事な体の部分を輝かしく見せるような、ただカットから成り立っているような水着ではなかった。ゾフィーは軽く遺憾に思いながらそれを確認した。それは体に着せ、体を覆うもので、服を脱がせる服ではなかった。しかしひょっとしたらこれは丁度良いかもしれない。ゾフィーはノイローエの育ち盛りのがさつ者どもに見世物を提供するつもりはなかった。彼女はこれらの若い衆の慣習、暇な午後、あらゆる沐浴機会を待ち受けて、村の娘達への視線を楽しむ慣習を知っていた。そこでゾフィーは白い縁飾りの付いた、慎ましい黒い、最小限のカットの水着を選んだ。水泳帽も彼女は買った。

オッティ・クーヤーンがこの両方の品に対して、長く躊躇った後、要求した値段は、(いや、この品にどれほどの値を付けたらいいのかしら、三マルクもしなかったのだから)、いわば町の郵便の切手代相当であった。ゾフィーは今や、手芸店クーヤーンは永遠には存在しないであろうという見解となった。この値段ではクーヤーン嬢はインフレを乗り越えられず、直に売り尽くし、飢えてしまうであろう。

自転車は小声で歌い、穏やかにチェーンは軋り、午後の静寂が眠っているように森に見られ、小鳥は静かで、靴先からは接触するヒースで埃が取れた。ゾフィーの心は静まり、森のように静まり、幸福のようなものに包まれた。長いこと感じられなかった落ち着きであった。太陽は動かず、昼は更に進まなかった、 — 幸福が停滞していた。

森の奥深くザリガニ池はあって、一連の淀んだ池の連続で、蘆で覆われ、泥沼のようで、

ただ比較的大きな、湖のような池でのみ泳ぐことができた。一瞬ゾフィーは静かに陽を浴びていた。しかし耐え難くなって、彼女は水の中に入り、その冷たさを感じ、爽やかさを体感せざるを得なかった。

ゆっくりと彼女は中に入って行った。穏やかに繊細な砂状の地底は砕け、涼しく新鮮で、この世では見られないほどの涼しさで、水が彼女の肢体に上昇して来た。その冷たさが腹部に達したとき、一度彼女は身震いした。しかしこの戦慄も楽しかった。それはすぐに過ぎて、彼女は一層深く入り、前のめりに浮かび、縮こまった。 — そして長く蹴って泳ぎながら、進み、涼しさの中に滑り込んで行き、その涼しさと一体になった。

さて彼女は、静かに仰向けになって、浮かび、ただこっそりと両手を動かし、均衡を保っていた。ある要素[四大]の中に溶け込み、その一部となって、彼女は目を閉ざし、小さな表面の顔に、別な要素、炎、天上的挨拶を感じた。太陽の穏やかな温かさに彼女は貫かれた。この温かさ、人間の人為的火のように干涸らびさせるものを何も有しない温かさが彼女の顔にあった。一陣の風がそれを剥がし、吹き飛ばすように見えた。しかし温かさはまた戻って来た、彼女の中へ侵入して来た。何か滋養のあるもの、神々しい飲み物のようであった。いや、この穏やかな温かさは何か生命、育つ生命、永遠の生命を有する、 — これは幸福を施す。

しかしゾフィー・コヴァレフスキーが今感じている幸福は子供の喜び、彼女が今朝思い出した生命の幸福とは何も共通点がなかった。至福に笑いながら、無知に歌いながら、子供は森の中を踊って行き、存在の、生まれたことの歓喜を子供は掴んでいた。それは、小鳥が感ずるような、ますます高く跳ねたいような牧場の子牛が感ずるような歓喜であった。ゾフィーが今感じている幸福は、多くの経験を前提としていた。それは少しも子供の幸福ではなかった。憧憬と苦悩と有毒化の歳月の後、彼女の体は初めてまた自分自身と一致していた。彼女は体をもはや感じなかった。体は彼女に何も要求しなかった。体は彼女の魂をもはや苦しめなかった。体が静かに浮かんで水の中に休らっているように、体はやはり静かに願望と憧憬と欲望の永遠の湖の中で休らっていた。

至福の無意識の子供の幸福は二度と得られない。門は閉まって、無垢と共に終わってしまった、 — しかし人生には多くの幸せの可能性がある。彼女は思っていた、それは房の中に、彼の許に、彼の腕の中にあった、彼女の上の遠くて近い彼の顔であった、と。...しかし今やそれはこの水の中にあった、温かい波また波、幸せの波また波の中に、...

夢見ながら彼女は水から上がった。夢見ながら彼女は砂の上に寝そべった、片腕を支えにして、顎を手の中に置き、彼女は草むらの茂みを間近に見た。草は互いに絡み合って、小さな窪みができていた、 — しかし彼女は何も見なかった。現実の幸せは名前がなく、言葉がなく、像がない。それは某所への穏やかなたゆたいたであり、私は存在するという歌へのメロディーではなく、 — 私は私であるという言葉への半ば愁いのある嘆きのようなものである。というのは、我々は老いなければならず、醜くなり、死ななければならぬとぼんやり分かっているからである。

ゾフィーは足音を聞いたとき、ほとんど見上げなかった。彼女はただ物憂く水着を裸の胸の上へ引き上げて、小声で、全く上の空で、「今日は」と言った。別の時であれば、ここで荘園の両新人の紳士達と出会うことになった偶然を歓迎していたことだろう。しかし今は兩人とも彼女にとってどうでも良かった。二、三の半端な言葉で、彼女は情報を与え

た。いや、ここが唯一泳げる所で、他はすべて蘆が生えています。いや、殿方が邪魔ということはありません。いえ、水は危険ではなく、水草ありません、…。すでに彼女はまた沈黙の中に沈んでいて、両人がいることをほとんど気にしていなかった。彼女はまた草むらの窪みに見入り、それはすぐに不思議に消えて、彼女はもはや何も見ていなかった。太陽は素晴らしく温かい。彼女はまた胸から水着をずらして、両人の声は水面から胡乱に響いた、―― 何と幸せなことか。

ゾフィー・コヴァレフスキーはどんな策謀をもってしても、今のときほど聡く行動することはできなかったであろう。彼女は全く何も考えずに、両紳士シュトゥットマン氏とパーゲル氏を左手に配置していたのである。否定できないことであるが、この両紳士は列車の中でもゾフィーについて少しも好意的印象を抱かなかった。容易に感激しやすい騎兵隊長はこの重宝な娘をベタ褒めしたかもしれないが、パーゲルもシュトゥットマンもうんざりするほど、偉いレディーの振りをする卑小な伊達娘の気取った喋り方を承知していた。二人はいつも白粉の匂いのする干涸らびて同時に自惚れた顔つきに反吐を感じていた。二人はとても丁重であったし、とても控え目であった。二人は配下の郎党に対して保たなければならない距離について騎兵隊長とは若干別様に考えていた。二人はゾフィーを見たとき、この娘は結局単に代官の娘にすぎないという考えが頭を過ったのではない。こんな見方を欲しなかった。二人はこの娘に何の異存もなかった。しかしノイローエへ移植されるベルリンの売春営業に対しては大いに異存があった。

それ故、ゾフィーが、経験豊かな女にとって多くの魅力やチャンスとなるであろうこの水泳の機会を少しも利用せずに、それどころか格別の状況下で結ばれた知遇も誇らずに、そこから何らかの縁を引き出すことも考えていないように見えたので、シュトゥットマンは全く満足して、「この娘は元来とても素直に見える」と水に入りながら、パーゲルに言った。

「そうです、変です」とパーゲルは熟慮して答えた、「先には全く別様に、むしろタウンエンツィーン通り風に[闇市があった]思われたものです」。

「パーゲル、見たかい」としばらくしてシュトゥットマンは尋ねた、「完全に上品な水着だ」。

「はい」とパーゲルは同意した、「秋波もありません。女性が分からなくなりました」。

最近蒙った難破へのこのささやかな暗示と共に、パーゲルは流れの中に身を投じた。そして今や二人は五分から十分、あるいはそれどころか十五分泳いだり、潜ったりし、静かに流れに任せたり、会話しながら側に立っていたりして過ごした。両人が互いに、過去の数年、数ヵ月よりも、強固に、新鮮に、自覚的に感じ合った瞬間であった。

さて岸辺からある騒音が聞こえて来た。女性の澄んで叱る声と男性の抑えた口ごもりであった。

「あれはゾフィーの声だ」とシュトゥットマンが聞き耳を立てて言った。

「まあ、放つときましょう」とパーゲルは苛立って叫んだ、「ここの水の中が快適です。多分田舎の恋人とのもめ事でしょう。恋愛は大したことではない」。

彼は軽蔑してにやりと笑った。

「違うぞ」と子守娘のシュトゥットマンは言った。何か上手く行かないようなとき、いつも助け船を出さなければならない男である。「たった今好印象を受けたばかりの女性

だ、...」。

彼は素早く岸边へ泳いで行った。しぶしぶパーゲルは従った。

しかしすでにゾフィーは叫んでいた、「お二人、こちらへ。 — この人貴方らの服を取り上げようとしているのです」。

「静かにしろ、フィーケン」と森林官は囁いて、略奪品を持って逃げようとした、「おまえさんには何もしない。殿方の服だけ欲しいのだ」。

「フォン・シュトゥットマンさん、パーゲルさん、急いで」と更に大声でゾフィーは叫んだ。

「一体どうしたのだ」とフォン・シュトゥットマンは大いに驚いて尋ねた。パーゲルも知的な表情には不似合いなほど当惑して見えた。

ハンターリンネル[防水加工]の緑色の制服を着て、草地にちょっと知り合ったばかりの森林官クニーブッシュが立っていた。肩に散弾銃を担ぎ、立派なよぼよぼ爺で、腋に両紳士の品の束を抱えていた。彼に向かい合って、ゾフィー・コヴァレフスキーがいて、争って怒り、それが魅力的に見え、アルテミス女神風であった。片手で彼女は胸の前の水着を押さえ、もう片手で森林官の小包からズボンの脚部を握っていた。 — そしてフォン・シュトゥットマンはそれが自分のズボンであると分かった。

「どういうことですか」と彼はもう一度尋ねた、極めて驚いていた。

森林官はトマトのように赤くなった。ますます赤くなって行った。ひょっとしたら本当に何か言おうとしたのかもしれない。しかしただ髭の奥底でもごもご言うだけであった。しかし更に衣服を固く押さええていて、ゾフィー・コヴァレフスキーの方は更にズボンの脚部を引っ張った。

そこで彼女が話した。彼女が話したことには、今や少しも気取ったレディーらしいものはなかった。「私がそこに寝て、何も考えていないときに、何かさがさ言っさ、針鼠か狐かと思ったわけ。それで何も考えずに、そしてちらと見たら、おったまげたのよ。クニーブッシュが蘆に隠れて、殿方の衣服に手を伸ばして、それを腋に入れているの。そこで私は起き上がって、言った。『クニーブッシュ、何をしているの。それは二人の殿方の服でしょう』。でもこの人一言も言わず、指を口に当てて、静かに木々の中に消えようとしたの、...そこで私は掴んだ、やっとの思いでこのズボンの端を掴めた。 — いい加減、ズボンを放しなさいよ。あんたのズボンじゃないでしょう」と彼女は怒って森林官を叱りつけた。

「貴女は我々の救い主になる定めにあるように見えますな、ゾフィー嬢」とシュトゥットマンは微笑して言った、「今度もまた我々を窮地から救ってくださった。感謝申し上げます。 — しかし今はズボンから手を放していいと思いますよ。クニーブッシュさんはそれを持って我々の目の前から逃げ出さないでしょう」。もっと鋭い声で、「クニーブッシュさん、これはどういうことか、お尋ねしてよろしいかな。お忘れならば、私の名前はシュトゥットマン、フォン・シュトゥットマンです。こちらの方はパーゲルと言います。

— 我々はフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長の許で仕事しています」。

「それは一切私とは関係ない」とクニーブッシュはつぶやいて、パーゲルがさっさと彼の腋から取り出した衣服の方を見た、「ここでは水泳は禁止です。ここで誰かが泳いだら、服は没収されます」。

「いつからよ」とゾフィー・コヴァレフスキーは怒って叫んだ、「それはつい最近のことね」。

「黙れ、フィーケン」と森林官は粗野に言った、「それは枢密顧問官殿のご命令で、もう長いことそうになっている」。

「黙らっしゃいというのであれば、喋らずにおくものか」と喧嘩好きなゾフィーは叫んだ、「その上あんたは嘘ついているよ、あんたは私にはわざわざこう言った。私の方はお構いなしだ、と。あんたはただ殿方の服だけを狙っているのよ」。

「それは違う」と森林官は急いで論駁した、「そんな意味ではない」。

「でもそう言ったじゃない。『殿方の服だけ欲しいのだ』と」。

「言っていない」。

「言ったわ」。

「言っていない」。

「言ったわ」。

「腰掛けることにしよう」とフォン・シュトゥットマンが提案した。「いや、貴方もどうぞ、クニーブッシュさん。パーゲル、私の上着から煙草を渡してくれ。 — クニーブッシュさん、お掛けなさい。 — そうです — 煙草はいかがです、ゾフィー嬢。まあ、勿論、貴女が吸われることは承知しています。コンパートメントの騎兵隊長殿のように我々は厳格ではない、我々は若い世代です。 — それで、特別に我らの品を押収するよう依頼があったのですか、クニーブッシュさん」。

「依頼はありません、いつもここで泳いでいる人々の品を押収しています」と森林官は反抗的に言った。

「例えばゾフィー嬢の品は押収していませんな。 — ま、それは置いておきましょう。それではこれまでここで何回ほど衣服を押収しましたか、森林官クニーブッシュ殿」。

「そのことを貴方に言う必要はない。私は枢密顧問官殿に採用されており、騎兵隊長の許ではない」と森林官は反抗的に言った。彼は衣服を盗み見し、森の縁を窺った、 — そしてそもそも、こんがり焼かれて地獄にいるかのように感じていた。下からの灼熱はフォン・シュトゥットマンが焚いており、上からの灼熱は枢密顧問官から吹き寄せられていた。

「私が尋ねているのは単に」とフォン・シュトゥットマン氏は言った、「こんな押収をしていたら、貴方は大変不快な目に遭っていたに違いなからうからだ」。

反抗的に森林官は黙っていた。

「それとも貴方は警察の下請け役人なのか」。

森林官は黙っていた。

「ひょっとしたら貴方は前科があるのか。だったら、何の法的根拠もなしに、衣服を押収しても、貴方にとっては痛くもかゆくもなおのだろう」。

ゾフィーは笑いはじけた。パーゲルは威嚇的に咳払いした。しかし森林官は目の中まで赤くなって、小さな、悲しげな目になった。しかし彼は黙っていた。

「我々の名前は承知しておられよう。禁止の水泳の件で我々を告発できよう。我々が然るべき罰金代を支払わないかもしれないという疑念はあり得ない。では何故押収となるのか」。

三人が黙って一人の男を見つめた。森林官はそわそわして、何か言おうとした。それから間近の森の縁を窺った。彼は中腰になったが、しかし彼と救出の茂みの間には、若いパーゲルの脚があった。 — 森林官はまた腰を下ろした。

「森林官クニブッシュ殿」とフォン・シュトゥットマン氏は言った、相変わらず同じ親しげな、辛抱強い調子で、反抗的の子供に何か諭す按配であった。「我々に率直に話して頂けませんか。ここで詳しいことが分からなかったら、皆でフォン・テッショー枢密顧問官殿の許へ参りましょう。私が顧問官に、貴方をここで捕らえたときの状況を説明します。さすればここで何が問題なのか分かりましょう」。

フォン・シュトゥットマンは黙った。森林官は頭を垂れた。彼の顔は見えなくなった。

「貴方がここで真実を話されたら、この件は全く我々の内緒にすると、名誉にかけて約束致します。ゾフィー嬢も口外しないと思います、でしょう」。ゾフィーは頷いた。「では、喜んでお力添えを致しますよ、この状況から体裁良く、脱出できるように、...」。

森林官は頭を上げた、彼は立ち上がった。彼の目には涙があって、彼が語ると、今や涙がこぼれ、髭の中へ下って来た。次の涙が続き、この老男性の目から澄んでキラキラと流れた。彼は嗚咽することなく語り続けた。老残の涙、自ずと流れ出る、老人の涙であった。

「いや、皆さん」と森林官クニブッシュは言った、「私は救いようがありません。分かりました、貴方は私に全く好意的です。私も感謝して、そのこと、誓って、口外しないことを受諾します。しかしそれでも私はどうしようもありません。まさに歳を取り過ぎて、

— 歳を取り過ぎると、何もかも上手く行きません。何ももはや有せず、 — 昔嬉しかったことすべてが、消えてしまいます。...私はこの前、最悪の密猟者、あのボイマーを捕らえたのです。それで今本当のことを言うと、私は何もしなかった。単に自転車に乗っていた彼が岩に当たって、すぐ意識を失っただけなのです。私が彼との戦いと語ったことのすべては、単に私の手柄にするために過ぎません。...私は抜け目なく振る舞おうとした。しかし老人はそんな気を起こしちゃいけないのです。ただ年取ったばかりに、...」。

皆、全く静かに座っていた。若い者達、ゾフィーとヴォルフガングに関しては、二人ともぼんやりと宙を見ていた。二人は泣いている老人が恥ずかしかった。老人は恥も外聞もなく自分の内面をさらけ出していた。しかしフォン・シュトゥットマンは彼の褐色の目を森林官クニブッシュに向けていて、時折頭で頷いていた。

「いや、皆さん」と森林官クニブッシュは続けた、「それで裁判の人々はそのことで私に縛り首の紐を編んでいます。ボイマーが高熱を出しているからで、私を弁護して下さるのは、枢密顧問官殿のみです。それで私が顧問官殿の言いつけ通りにしなければ、弁護して下さらず、私のパンは取り上げられます。すると私と私の病気の妻はどうなりますか」。

森林官は、自分の話しを全く忘れたかのように、立っていたが、しかしフォン・シュトゥットマン氏の視線に気付いて、正気となり、続けた、「いや、それで今日食事の後、顧問官殿から電話があり、二人の殿方が水泳に出掛けた、どんな事情があっても、衣服を没収しろ、さもないと助けてやらんと仰有るのです。しかしフィーケンが居合わせて、何もできなくなりました。 — しかし顧問官殿が何故二人の殿方に怒っておられるのか、その話しの調子からは分からなかったのです」。

彼はまた黙って、途方にくれて、宙を見ていた。

しかしフォン・シュトゥットマン氏は尋ねた、「それではクニーブッシュさん、こちらでは別の池はありませんか。ここに我々が来たことになってはまずかろう」。

森林官は考え込んだ、彼は元気になった、希望の微光が少し輝いた。「それに関しては難しい」と彼は熟慮して言った、「こちらでは他は皆、森と砂ですし」。

「ビルンバウムなら」とゾフィーは言った。

「そう、ビルンバウムの池へお二方は行っていたらよろしい。しかしその場合七時前には帰宅できません。とても遠方ですから。それほど長く森にいて頂けますか」。

「いや、構わん、そうしよう」とシュトゥットマンは好意的に言った、「下僕達は我々がいなくても餌やりをすることだろう」。

「それではお二方にとっても感謝申し上げます」と森林官は言って、彼の涙は乾いていた、「老人に対してご親切なことです。でも余り助けとはならないでしょう。とにかく大成果を挙げる必要があるのです。しかし老人にとっては苛酷なことです。若い方には、老人の気持ちは分かりますまい」。

彼は更に一瞬、物思いに耽っていて、正気になって、今一度言った、「いや、お二方のご親切で、失敗とはならず済みました」。

彼は帽子をあげて、行った。

シュトゥットマンは彼を一瞬、見送っていたが、それから叫んだ、「クニーブッシュさん、待ってください、少しばかり同行しましょう」。

彼は、彼の後を追った、素足で、水着のまま、自分のまことに柔らかな足に何の配慮もしていなかった。しかし真の子守娘は、他の人々の心の痛みを見ると、慰めを必要とする人を見ると、自分の足の痛みなどは考えない。

それでゾフィーと若いパーゲルは二人っきりになって残された。二人はまことに快適にお喋りした。まずは森林官クニーブッシュについて、それから収穫について話した。ゾフィーはこの日の午後、寛いでいて、満足して、幸せであったので、若いパーゲルにレディーらしい感銘を与えようとか、それどころか秋波を送ろうなどとは少しも考えなかった。しかしヴォルフガングは、自分がいかに間違っ、この親切な物分かりのいい娘を列車の中で判断していたか、再三不思議に思わざるを得なかった。彼は今や、自分のベルリン育ちの目が、この間違っった評価のせいであろうとする思いに傾いていた。

さてその収穫に関して、父親のコヴァレフスキーは、ノイローエでは少なくとも三週間遅れていて、力強い郎党の正規の一団がやって来なければ出来ないだろうという意見とのことだった。村の人は何故騎兵隊長がマイエンブルクからの分遣隊を依頼しないのか分からない。これは、ただきちんと食事や煙草を用意さえすれば、最も勤勉な、最も従順な人々なのである。しかし騎兵隊長は順番を待たなければならないだろう。一帯のすべての荘園はすでに分遣隊を受け入れていて、監獄は半分空になっている。父はそう申しました、でも自分は何も分からない、自分はようやくこの一帯に来たばかりだし。でも収穫のこと、本当に残念だわ。

パーゲルはこのすべてを理にかなった話し方と思い、ベルリンの侍女にとっては本来何も関係ないことなのに、ノイローエの収穫について思いを巡らせているのは、この娘の甲斐甲斐しい点であると思った。彼は今晚シュトゥットマンとこの件につき協議しようと計画した。しかしシュトゥットマンが相変わらず戻って来ないので、二人はまず再度、水の

中に入ることに決めた。

するとパーゲルは、ゾフィーが大層上手に泳ぎ、自分は彼女に付いて行く努力をしなければならぬと分かった。しかし彼は、彼女に何か新しいこと、新しい水泳スタイル、当時ベルリンで流行り始めていて、「クロール」と呼ばれているスタイルを教えることができた。若い男にとって、自分が若い娘よりもほんの少しでも上手く出来るものがあると、いつも結構なものである。かくて彼は、この娘が、親切的な、とても感じの良い少女であると思った。

そしてゾフィーも、この無関心なスポーツ教師に対して、こんな態度には普段は侮辱を感じていただろうが、とても満足していて、ようやく物思いに耽ったシュトゥットマンが足を引きずりながら、森から現れたとき、すでに両人は最良の友となっていた。

「さて」と彼は両人に視線を向け、草むらに腰を下ろし、煙草に火を点けた。「さて、パーゲル、奇妙な世界だ。穀物ではなく、大地が不安で汗かいている。大地の不安が皆に感染している。パーゲル、一世代が不安まみれだ。今日の午後、私が想定したように、パーゲル、田畑の安らぎは幻想に過ぎない。誰かが休まずに、我々に早急にそのことを理解させようとしている、...」。

「老いた偏屈者よ」とゾフィーは軽蔑して言った、「また色々お喋りしたのでしょう。貴方らは少しばかり聞くかもしれないけど、一 私どもはもう長いことあの人の戯言には耳を貸しません」。

「いや、ゾフィー嬢」とフォン・シュトゥットマンは応じた、「老公は残念ながら喋らなかつた。もっと語ってくれたらと思ったのだが。ここでは奇妙なことが起きているように見えるからな。それで、時が経てばいずれ明らかになろうと考えている。しかしパーゲルよ、一つだけ頼みたい。貴方がこの老公に会ったら、いつも少し親切にしてやってくれ。何か助けてやれることがあったら、そうしてくれ。彼は単に老いた、軟弱な臆病者にすぎない。その点ゾフィー嬢の言う通りだ。しかし船がSOSを発したら、救助するだけで、積み荷のことなどはうるさく尋ねないものだ」。

「まあ」とゾフィーは嘲った、「森林官クニエブッシュさんが、その上このような二人の救助者を得るなんて思いもしなかつたわ。一 というのはパーゲルがシュトゥットマンの言葉に完全に同意して頷いたからである、一 「あの人はきっとそれに値しないわ。こっそりの告げ口屋だし、密告者よ」。

「そうだな」とシュトゥットマンは言った、「で、そもそも値するような人がここにいるかな。私はきっと違うし、パーゲルも多分違う。それにゾフィー嬢、貴女は有能で礼儀正しい娘さんだが、多分貴女も格別の報酬に値しない」。

ここでゾフィーは赤くなって、釣り竿の針先[当てこすり]を、針先はなかつたが、感じた。

「それではそのことはお仕舞いにしよう。ゾフィー嬢、お願いの儀があるが、薪泥棒の件で、一度合図を貰えないでしょうか。つまり彼は薪泥棒のことで大いに案じています。奴等は一団となつて来て、彼は個人として太刀打ちできない、と」。

「私と薪泥棒と何の関係があります」とゾフィーは激して叫んだ、「私はスパイではありません」。

「私は考えたのです、ゾフィー嬢」とシュトゥットマンは何も耳にしなかつたように言

った。「貴女は一団が向かって来たら、村で我々よりいち早く気付きましょう。我々は農園中庭に住んでいます」。

「私はスパイではありません」と今一度熱くゾフィーは叫んだ、「私は哀れな人々を告げ口しません」。

「泥棒は泥棒です」とシュトゥットマンは頑固に言った、「スパイの響きは良くない。しかし泥棒を告発するのは、裏切りでもなく、スパイでもありません。思うに」と彼は説得して続けた、「貴女は農園とその繁栄に関心がありましょう。貴女はそれに関与しています。貴女の父親は郎党間のそのような仲介職です。父親は時に、誰の働きが悪いか告げなくてはなりません。だからといって、告げ口屋ではありません。貴女は列車の中で騎兵隊長の横に結局快適に座っておられて、今ここでは私どもと仲良く座っている訳です。

一 誰の側か、考える必要があります、...」。

ゾフィーは手で頭を支えて、あるときはフォン・シュトゥットマン氏の方を、あるときはパーゲル氏の方を思案して見つめていた。しかし彼女がシュトゥットマンから策謀的に発せられた言葉を聞いていたかは、少しも確かではない。彼女は何か思い巡らしているように見えた。結局彼女は言った、「分かりました。見ることにしましょう。でも、本当に何か知ることになるか、自信ありません。私は郎党の一員とはもはや見なされていませんので」。

「結構、結構」とシュトゥットマンは言って、立ち上がった、「貴女が我々のことを思い出してくれさえすれば、それでもう何らかの達成になります。残りはきっと補えます。

一 それでは異存がなければ、三人皆でもう一泳ぎしましょう。私の足がかなり痛んで、帰る前に少しばかり冷やしたいのです。一 そうすれば時間も頃合いとなって、問題なく家に帰れましょう。更にビルンバウムの池について語って貰いましょう、ゾフィー嬢。老領主は森林官の言うことを鵜呑みにはしないで、我々の腹を少しばかり探るように思われます。一 それどころかご本人が現れないか、...」。

そしてシュトゥットマンは森の縁に邪推の視線を向けた。

88

枢密顧問官は肖像紙片を見つける

老枢密顧問官本人がザリガニ池に現れるかもしれないというフォン・シュトゥットマン氏の恐れはその通りにはならなかった。彼はまだフォン・テッシュー氏を誤って想定していた。少しばかり揺さぶること、これを彼は好んだ、しかし声高に文句を言うこと、これはむしろ自分の郎党に任せた。この日の午後喧嘩が予期されたザリガニ池へは十頭の馬が用意されても彼は行かなかったであろう。その代わり彼は悠然と愛想良く、ノイローエの村を散策し、誰かいると立ち止まり、挨拶、応酬を繰り返し、そもそも、臣下達の許に交わる侯爵然としていた。三時間前に荘園領へ行った老エリアスもこれほど上手ではなかった。

枢密顧問官がまことに日曜日らしく満足して村中をお喋りしている間、彼は絶えず、一体どんな風に村長ハーゼに対して探りを入れたものかと考えていた。というのは彼は単刀直入に聞き出すのを好まなかったからである。彼は、村長がクニーブッシュに何を含まと

ころがあるのか、聞き出す必要があった。何故森林官について不都合な報告をしたのか。すべて承知していなければ、何も知らないのと同じだ、と彼は生涯言い続けていた。そしてクックホフ嬢からしばしば耳にしていた、どんな汚物であっても、人間にとって立派なキュウリを育てられるほどの価値がある、と。

しかし少しも口実を見つけられそうになかった。それで枢密顧問官がすっかり不機嫌になっていたとき、すぐ村の広場の手前、丁度道が墓地へと折れる所で、レーゲ婆を見た。レーゲ婆は最古参の女であった。以前、彼女はまだ働けるとき、農園中庭で働いていた、一方彼女の今はどうに亡くなった夫は、教区で墓掘り人として、あるいは森で木樵としてパン代を稼いでいた。こうしたことすべて遠い昔のことであって、このレーゲ婆はすでに、彼女の最後の孫がアメリカへ渡ってから、およそ十年、墓地の壁下の古いあばら屋に住んでいた。少しばかり変わっていたが、しかし皆に恐れられていた。というのは彼女は家畜に魔法をかけられるという評判であったからである。疣と丹毒が彼女の呪文で消えるという事は確かであった。

老枢密顧問官は老いた婆達を大して心にかけていなかった。それはきっと狩人の迷信であろう。それで彼はレーゲ婆を見ても、更に進んで行った。しかし老婆はその鼠のように黒々として、鼠のようにすばしこい目で彼を窺っていて、村の広場を越えて彼に突進して行き、彼の道に立ち塞がり、しゃがれ声で呻りながら、自分の小屋の屋根の苦情を述べ始めた。最近の雨のすべてが屋根から、篩いを抜けるように落ちて来た、と。

「それは私には関係ない、レーゲ」と枢密顧問官は彼女の聾の耳に叫んだ、「村長の許に行きなさい、それは教区民の件であって、荘園の件ではない」。

しかしレーゲ婆はそう簡単に引き下がらなかった。というのは彼女はフォン・テッシュォー殿は彼女の領主であり、彼女の安寧に責任があると、丁度三十年前、四十年前と同じように固く確信していたからである。 — そして道から押し退けられもしなかった。彼女は村の広場全体をそのしゃがれたうなり声の叫びで充填したので、枢密顧問官はその件がまことに面倒になった。そして劣等な口実は、口実が何もないよりはままだましと彼は考えたので、 — それに哀れな以前の荘園労働者の雨漏りの屋根のことで村長ハーゼと結局話すことに問題はないということになって、 — 彼は折れて、彼女と一緒に皮剥人の樞へ行った。レーゲ婆の住んでいる所はそう呼ばれていた。

「孫の誰一人手紙を寄越さないのか」と彼は尋ねて、すでに一切を、前方、裏、切妻の上であれ、承知している屋根の話しを逸らそうとした。レーゲ婆は好意的に呻いて、孫達は書いて来る、肖像紙片も時に送ってくる、と。

何と書いて来るかい、向こうではどんな具合とか、か。

いや、何と書いてあるか、正確には言えねえ。古猫の雄が眼鏡を壊してしもうて、もう一年になる。しかし今年、スグリの実取が上手く行けば、ひょっとしたら新しい眼鏡を変えるかもしれねえ。

何故手紙を読んで貰わないのだ。

いや、それはしない。だって、孫達の暮らし向きが悪いというようなことが書かれていたら、すぐに村中に知れ渡って、孫達のことは話題にされたくねえ。新しい眼鏡を変えるまで、読むのは待っておれば良いがね。

孫達は一度も何か祖母ちゃんのために心ばかりの金とかちょっとした食品を送ってこな

いのか。

いや、美しい彩りの肖像紙片は送って来てくれる。インディアンの国では食品とまでは行かんだろう。

そう言いながら二人は古いあばら屋に達した。この小屋は実際、皮剥人の樅の下の、メルヘンにあるような真の魔女の家風に不気味であった。枢密顧問官は、前方から、裏から、切妻側から、古くなって弱り、ボロボロの、苔むした麦わら屋根を目に収めた。絶えず、老婆の嘆きのうなり声を聞いていた。しかし枢密顧問官は突然徹底的な男となって、もはやレーゲ婆の許から急いで立ち去ろうとはしなかった。というのは立派な狐は一フーデルの麦わらの中に鶯鳥の臭いを嗅ぎつけたからである。かくて彼はドアを押し開け、古いあばら屋に入って行った。何かを嗅ぎつけていた。皮剥人の樅の下の家は、内部からも、丁度外部から予期される通りであった。つまり、子豚が繁栄する場合、豚小屋の中は見えず、完全に田舎風に下卑て見える他ない。

しかし今や枢密顧問官にとって、汚物も臭いも、極度に悲惨なぼろきれ、がらくたも支障とならなかつた。 — 彼の老いた、策謀的な目をもって、彼は鋭く見回し、すでに彼は望みのもの、つまり壁の古い写真を覗いていた。レーゲ婆は写真の裏に何か差し込んでいた。

「いや、これはエルンスト坊やだ」と老婆が吠えた、「向こうへ渡ったときの最後の姿、丁度十三年の初頭で、丁度大戦が勃発する前、...」。

「それでこれは、おまえさんにエルンストが送った肖像紙片の一つかい、レーゲン、もっと持っているかい」。

いや、彼女はそれをもっと持っていた。手紙には更に何枚か入っていて、台所の戸棚に、それらの肖像紙片の縁を差し込んでいた。

「レーゲン、聞きなさい」と枢密顧問官は言った、「新しい屋根が手に入るよ。約束する。山羊が一頭欲しかったら、それも手に入る。それに十分食べられる。眼鏡もな、竈も、...」。

老婆は両手を枢密顧問官に上げた。あたかもこれらすべての贈り物すべてを胸から押し退けたいかのようで、そして自分の良き老領主を称え始めた。...

しかし枢密顧問官は急いでいた、「ここに座っていなさい。レーゲン。遅くとも三十分したら、村長を連れて来るから、ひよっとしたら牧師も一緒にな。この場から動いちゃだめだぞ。これらの肖像紙片を一つもなくしちゃいけないぞ、...」。

老レーゲンは神聖に厳かに誓った。

そしてすべて正確に整然と行われた。枢密顧問官と共に牧師と村長が来た。探索が続けられた。レーゲ婆は、倦むことなく彼女の品を裏返し、振るい落とす三人の殿方にどんなに驚いても十分でなかった。彼女の対の冬の靴下さえも彼らは折り返し、あさった。村長はベッドのわらを櫃から引き出した。 — 皆この虹色の肖像紙片を求めていた。

レーゲ婆ときたら、彼女はこの件について何も分からなかった。彼らがたとえ十回耳許に怒鳴っても、つまりこれは「正しい」お金で、黄金の金、外貨であり、別の金は屑の金、消滅する金、ゴミであると怒鳴っても、 — あたかも三人の偉いさん、生産階級、聖職者、官庁が、自分のあばら屋で復活祭の卵を探す小さな子供になったかのように思われたのである。

しかし枢密顧問官はともかくまたお大尽となって、時折、それを発散し、こう述べた。勿論まずは自分のようなよぼよぼがこちらに来て、昔の使用人の心配をしてやらなければならない。法的には何の義務もないけどな。しかし村長殿は職責上、土地の困窮民の面倒を、牧師殿は神様の代わりに教区民の面倒を見るべきであろうに、一度も警笛も吹かず、入れ知恵もせず、老婆ときたら、こんなに豊かであるのに、雨で溺れ死に、飢餓死しかねない按配だったのだぞ、と。

村長と牧師はこの再三繰り返される棘のある意見に最良のことを言った、一 つまり何も言わなかった。そして老婆の財産が二百八十五ドルと確定され、議事録として書き留められると、すぐに牧師は姿を消した、この件は最良の方々に委ねられています、と。村長は紙片を自ら引き受けて、これらの肖像紙片と引き換えに、老婆に他日屋根葺き職人を送ると約束した、「それに食料品を入れた籠に、それに一頭の山羊。勿論だ、レーゲン、それに新しい眼鏡、了解、レーゲン、...」。

そして両紳士は今やゆっくりとまた墓地の側の皮剥人の縦から村へ向かっていた。彼らの背後ではレーゲ婆の感謝の吠え声が次第に弱まって行った。

「それで、ハーゼ、金をどうする」と枢密顧問官は尋ねた。

「そうですね、枢密顧問官殿、ちょっと手間です」と村長は言った、「まずは一晩寝て考えます」。

「私はこう書かれていたように思うぞ」と枢密顧問官が突いて来た、「外貨は届けなければならない。銀行にな。しかしそう守る必要はあるまい」。

「そうですね、枢密顧問官殿、銀行に届けたら、代わりに襤褸屑の金を貰います。レーゲ婆が翌週コーヒーの小包を手に入れようとしても、私はこう言わざるを得ません、『また空になった、レーゲン』と」。

「それは老婆には気の毒だ、ハーゼ」。

「そうです、枢密顧問官殿、私も残念です」。

「しかしそういう決まりだと、他に仕様はないだろう」。

「必ずしもそうする必要はないでしょう、一 枢密顧問官殿の読み間違いも考えられます」。

「勿論そうかもしれん。そんな風に新聞には書いてある」。

「その通りです、一 読んでしまうと、全く混乱します」。

両人は思案しながら更に歩いて行った。背の高い痩せた村長は皺だらけの筋張った顔で、ずんぐりの太った枢密顧問官はぎらぎらの赤ら顔であった、一 しかしこれも皺があった。

「それに」と村長はまた始めた、「忙しい収穫の時期です。誰がフランクフルトの銀行まで行って、金を両替できましょう。私は屋根葺き職人に若干与えて、屋根の麦わら代を支払い、山羊代を支払わなければなりません。一 それをドルでやってはいけません。一度悪い噂が立つと、それからやって行けなくなります」。

「その間、金を届けるまでの時間、他人がその金を立て替えなければなるまい」と枢密顧問官は言った。

「そうですね、...」と村長は考え込んで答えた、「それをずっと考えていました。ただ収穫の時期、誰がそれほどの金を手許に持っているか」。

「私は、まだ若干金庫にあると思う。ハーゼ、調べてみよう。貴方に今晚知らせよう」。

「私は昨日、打穀したのです」と村長は言って、彼の側から突いてきた、「私は明日にはそれを手放すこととなります。それもただ、お金を明後日、貴方の森林官に渡さなければならぬからです、...」。

枢密顧問官は黙って静まりかえっていた。

「森林官がひょっとして二、三日猶予をくれるでしょうか。ひょっとしたら雨の日が来て、もう一度打穀できるかもしれません」。

「分からないな」と枢密顧問官は言った、「済まない、ハーゼ。私は両耳ともおかしいのかもしれない。何のことか分からないのだ。それは多分平和時での一万マルクのクニープッシュの抵当権のことなのか」。

村長は唇をかんだ。それから彼は不機嫌に言った、「私も合点が行かないのです、枢密顧問官殿。しかし貴方のクニープッシュは食えない奴で、私を手玉に取って、彼の抵当権を今解約できないのです。年に四十ツェントナーのライ麦を彼に利子として支払わなければならぬのです。その代として明日ライ麦が手放されます、...」。

「そうかい、そうかい」と老領主はにんまりした。またしても或る者がしてやられている、(というのは彼は人生で、一杯食わすこと、騙すこと、したたかにペテンにかけることほどに、この上なく尊重しているものはなかったからである)、「そうかい、そうかい、元気なことだ、...それでやっと分かった、何故フランクフルトの裁判官殿がクニープッシュにかくもひどく述べているかが、...」。

「私はただ」と村長は熱くなって叫んだ、「正しいことを書いてだけです、...」。

「勿論だ、村長、他にあらうか」と老枢密顧問官はとても満足して言った、「いつも正義と秩序と法に従っている。しかしそのことについて我々両人は今晚更に語ることにしよう。私は貴方の許を訪ねて、一 貴方のドルを立て替えられるよう、金を渡そう。貴方のライ麦の金では万事に足りないからな。村長、貴方に喜んで強力するぞ。そして私がフランクフルトへ行く機会があったら、そのとき私のドルを届ける。それから貴方がそこへ行くことになったら、そのとき貴方は貴方のドルを届ける。一 ベルリンのお偉方も待つことに慣れているはずだ。森林官クニープッシュも待つことに慣れておろう。そのように働きかけよう。その点、貴方の味方だ。老クニープッシュは抜け目ない男だな。彼が百姓を手玉にとるなんて、想像できなかったぞ。いやそのことを今晚話してくれ、村長、...」。

「ドルは今、百十万マルクです、一 そのように立て替えますか」と村長は考え込んで訪ねた。

「そうだな、勿論」と枢密顧問官は言った、「他にはないだろう」。

「ドルが明日もっと高くなったらどうします。すると私は一山の金を抱えながら、老婆のためにもはや何も買えません」。

「いや、しばらくはまだ若干買えるだろう。そもそも少しばかり予備を買うのだ。パアになったら、パアだ。他人がやって来て、肖像紙片を見つけていたら、老婆は何も手に入らなかっただろう。それにそもそも手紙を読んだら。孫は老婆に毎月十ドル、誕生日とクリスマスにはその上二十ドルを送っている。一 だからいつもまた何か届くわけだ。老レーゲは、生涯手にしたよりも、沢山有しているぞ」。

「誰も噂しないよう、用心しなければなりません」と村長は言った、「さもないと悪評

が立ちます」。

「ハーゼ、誰が話すかね。牧師レーニヒは口が堅い、自分のこれまでを恥じているからな。我々二人は話さない。レーゲ婆は何も分からず、天国に年の市があると思っている。彼女が話しても、誰も何のことか分からない。しかし分かる者がいたら、それがまずやって来て、こう言うだろう。枢密顧問官ホルスト＝ハインツ・フォン・テッショーは汚いことをしている、と。だからドルは届けることにしよう、－ そう決めるだろう、ハーゼ？」。

「フランクフルトへ行き次第、確かに、枢密顧問官殿」と村長は釈明した。

かくて二人は別れた。村長は必ずしも全面的に納得していなかった。というのは彼はこのドルの仕事をむしろ一人で片付けたかったからである。しかしまた、最も貪欲な豚どもは最も声高に餌を求めるとも承知していた。

しかし枢密顧問官は完全に満足していた。彼は知りたかったことを知ったばかりでなく、小さな商売にもなった。一人の男は幾ら金持ちになろうとも、自分ではそれで決して十分とは思えない。しかし森林官クニーブッシュは、不平家の主人がザリガニ池の不首尾に終わった捜査のことを無関心に受け入れたのではなはだ驚いた。しかしそれ以上に、フォン・テッショー殿が今や抵当権の新しい規則について承知しているし、その上二週間支払いを延ばすことを村長ハーゼに対し許すよう依頼の言葉を述べるので驚いた。それで彼は容易に「はい」と言ったが、しかしどのようにしてクニーブッシュがハーゼに対し、このような前代未聞の譲歩を引き出せたのか枢密顧問官が問い詰めたとき、一層頑固に黙っていた。

森林官は自説に固執し、天地神明に誓い、彼の青白い目はますます青く正直になって、こう請け合った。村長ハーゼは本当に礼儀正しい男でありまして、純粋な品性さと廉直さから、正しいことをなしたのであります、と。－ 「本来なら、六十ツェントナーのライ麦でなければならなかったのですが、枢密顧問官殿、しかし私も村長ほど厳密ではありませんので、...」。

「クニーブッシュ」と老領主は怒って叫んだ、「貫板の柵を猫背の男が通り抜けられるものか。金のことになったら、礼儀もあったものではない。－ おまえら二人の昔からの札付き者どもが、...」。

いいえ、森林官は自説に固執した。彼の額には汗が浮かんだ。そして彼の調子はとても忠実で、誠実なものとなったので、彼は逆風でも十マイルほど嘘やペテンの臭いを発していた。それで付言しておかなければならないが、自分の主人に常にへいこらして、いつも主人の願い通りに行動して来た森林官クニーブッシュは、明らかに主人に嘘をついているクニーブッシュほどにフォン・テッショーの目に偉く見えたことがなかったのである。

「まあ、見てろ」と老領主は、再び一人っきりとなったとき、言った、「クニーブッシュはすり抜けた。しかし待ってろ。一方の者が話さないこと、これを他方の者が喋る。－ 今晚村長からすべてを聞き出せなかったら、皿を食うまでだ」。

しかし枢密顧問官はこの点間違っていた。村長は森林官同様に口が堅かった。それで老領主はとても驚き、本当に頭を振ることになった。そのようなことは元来考えられなかったからである。

勿論それ故まだ皿まで食わなかった。－ 彼はその希望を簡単には諦めなかった。

小さな代官の家、その切妻の部屋にゾフィー・コヴァレフスキーは住んでいるのであるが、その家の戸口の前で、シュトゥットマンとパーゲルの領殿方は、同行の女性ゾフィーと別れた。一 このいかがわしいベルリンの紳士達が日雇いの農作業の娘に対するようにただ声をかけて、さっさと行くようなことをしなかったのが、村の人々は驚いて見守っていた。この紳士達は本当のレディーに対するように、正しく手を差し出したのである。卵形の頭の中年の紳士は、トゥットマンは、帽子を取った。若い方の紳士は帽子を被っておらず、ただ頭上に髪の毛があるだけであったので、そうしなかった。

かくて煌びやかに多彩に見栄えのしない蛹から脱皮した蝶のゾフィーに対する賛嘆は途方もなく上昇した。トランクと衣裳に始まったことが、(それに帰郷は騎兵隊長殿と一緒にであった)、この丁重な別れで完成した。母親達は若造どもにこう命ずる必要さえなかった、「ゾフィーに対しては礼儀正しく振る舞うのだよ。今や本当のレディーなんだから」。

一 若造どもも承知していて、彼らは別荘の恵み深いご令嬢同様に、ゾフィー・コヴァレフスキーを追いかけることを止めた。ひょっとしたら探偵かもしれないベルリンの殿方達とは彼らは誰も関与しなくなかった。

しかし二人の紳士は心地よくお喋りしながら歩いて行った。そして自分達が危険の敵の女性となろう者を、村の共同体の中で孤立化させたことに気付いていなかった。二人はまず家畜小屋を覗いて、それから事務所に向かった。事務所の書き物机の上に夕食が置かれていて、事務所の床には従者レーダーが陰気に控え目に立っていた。しかし彼は今や口を開いて、こう告げた。恵み深い奥方が、フォン・シュトゥットマン氏と六時四十五分に面会を希望しておられる、と。

フォン・シュトゥットマン氏は時計を見て、七時十五分であると確認した。彼は従者レーダーを問うように見つめた。しかし彼は顔を歪めず、何の反応もしなかった。

「それじゃ、私は今すぐ行く、パーゲル」とフォン・シュトゥットマンは言った、「夕食は私を待たないでくれ。もう始めていいぞ」。

そう言って彼は急いだ。従者レーダーは彼の後をもっとゆっくりと従った。ヴォルフガング・パーゲルは事務所に一人っきりになった。しかし彼はまだ夕食にかからず、清潔で小綺麗な事務所をあちこち歩き、満足して煙草を吸い、時折、広く開いた事務所の窓から、夏らしい陽気な緑色の小鳥のざわめく公園を覗いた。

若い人間の流儀で、彼は自分の状態を深く考えなかった。彼は行き来しながら、光と影の間を交互に歩き、煙草を吸った。何も心を圧迫せず、何も願わなかった。一 自分の状態について深く考え、自分を端的にまとめていたら、彼はこう言ったことだろう。自分は 一 ほぼ 一 幸せである、と。

ひょっとしたら、もっと正確に吟味して、重篤な病を克服したばかりで、まだ完全には生活者として復帰していない治癒者達の感ずるような、微かな空漠の感情を感じていたかもしれない。自分は重大な危険を脱した、まだ人生で再度の任務を有していない、完全には人生に属していない。彼の治癒を望む神秘的な或る力が、彼の行為を導いている、それ

以上に彼の思考を導いている。フォン・シュトゥットマン氏とははなはだ違って、彼は事象の裏で働いているものに関心はなかった。今彼に関心があるのは事象の表側であった。本能的に彼は、心を煩わすことに異議を称えていた。彼は請負契約を調べず、請負のハードルに心労して計算することをしなかった。彼はフォン・テッショー老公を、陽気なもじゃもじゃ髭の老人であると思い、策謀とか、薄暗い意図について何も知ろうと思わなかった。彼の心は、人生の単純な、掴め得る課題で完全に満たされていた。田畑に乗り物で出掛け、ライ麦をフォークで持ち上げ、夜は外面的肉体的疲労で深く、夢も見ずに眠ることである。彼は治癒して行く者のように不安がなく、表面的であった。一そして治癒して行く者のように、はっきりと自覚することなく、相変わらず、自分がようやく脱したばかりのかの深淵からの恐ろしい息吹を感じていた。

(随分後になってようやく彼は自分の母親に、そしてひょっとしたらペートルにも手紙を書くかもしれない。今はただ休息することだ)。

彼は満足して、何も考えず、あちこち歩き、煙草が終わったら、少しばかり引っかけよう。明日早朝また畑行きが始まる、一素晴らしいことだ。この近辺のすべての荘園がそうしているように、勿論今日も出掛けて良かったのであるが、しかし宮殿の老奥方が、(まだお目にかかっていないが)、日曜日の労働には反対だそうだ。今晚シュトゥットマンは更に何か計画を述べよう。何のことか自分は分からないが、きっと結構なことだろう。ここ的一切が結構だ。直に若い奥方の許から中尉が戻って来て欲しいものだ。ヴォルフガングは一人っきりになるのは好きではない。自分は人々と一緒にいるとき、最も快適に感ずる。

物思いに耽って彼は唐檜の書架の前に立ち止まっていた。そこには長い列をなして、法律、命令の黒い年鑑が並んでいた。上段には郡報、下段には帝国法令誌。順番に、巻ごとに、年ごとに、それらは並んでいて、原初から世界の終末まで規定し、脅し、規則付け、罰している。個々人はいつも新たにこの秩序の世界を駆けて、頭蓋から血を流すのである。

パーゲルは棚から最古の巻の一つを持ち上げた。その褐色の、斑点の紙から、ある指令が語っていた。つまり下僕や住み込み作男に対し、週に二シヨック[60個の二倍]以上のザリガニを食事に出すことを禁ずる、と。彼は笑った。今日では池から水泳者を追いだしてザリガニを人間から守っている。以前は人間をザリガニから守っている。

彼はその巻を元に戻した。そして何か目の高さの所に、「公の郡報」の別の巻の切り口を見た。或る小口から一枚の紙片の端が出ていた。彼はそれを二本の指で掴み、一枚のタイプライター用紙を手にするようになった。ただその四分の一がタイプされていた。額に皺を寄せて、彼は読み始めた。

「最愛の人、超、愛する人、唯一の方」。

彼は自分がその紙片を抜き取った巻に目を向けた。それは一九〇〇年からの郡報であった。パーゲルは安心して頷いた。微笑しながら彼はその手紙を更に読んだ。彼は百年以前の恋文に付着している若干の古色を感じた。その声が消え失せ、その恋愛が消滅してしまった恋人達、冷たく墓場に横たわっている恋人達の手紙である。彼は「ヴィオレット」の名前の所まで読んだ。

これはよくある名前ではない。これまで単に本の中で聞いたことがない。最近になってようやくちょくちょく耳にしている。大抵は「ヴァイオ」という形になっている。い

ずれにせよ、家庭によっては代々名前が引き継がれる。...彼は文字の上を注意深く指でなぞった。彼は指先を見た。軽くすみれ色[ヴィオレット]の微光が見られた、一 その文字は新しいものに違いない。

素早く彼はタイプライターの蓋を開けて、渋々「最愛の人、超、愛する人、唯一の方」の言葉をタイプした。一 (彼もかつてこのような言葉、あるいは類似の言葉を耳にしたことがある。思い出したくなかったが)、一 この手紙はこのタイプライターで書かれたことに疑いの余地がなかった。つい最近書かれたものである。大文字のEに欠損部分がある。...

彼は最初、この手紙を引き裂きたい衝動を感じた。それからまた巻に戻そうとした、一 私は何も承知していない。このような事柄については何も聞きたくもないし、見たくもない。

しかし、落ち着け、閑古錐、落ち着くのだ。このヴァイオはヒヨコだ、十六歳、ひょっとしたらようやく十五歳だ。彼女の手紙が公の事務所に出回っているのは、どうでもいいことではあるまい。私の責務としては、...

パーゲルはとにかくまずまたタイプライターに蓋をして、手紙を丁寧に折りたたんで、それを内ポケットに入れた。これはシュトゥットマンに対する不信からではなかった。しかしこの手紙について話すのは、すべてを良く考えた後にすると決めた。ひょっとしたらそもそもこの手紙のことを話さないかもしれない。いずれにせよ、すべてを把握しなければならない。これは快適なことではない。自分は何も考えずに事務所の中をあちこちしていたかった。しかし人生はこんなものである。人生は我々の都合など構っていない。すでに我々は人生の課題に浸かっている。

かくてパーゲルは事務所の中を大いに考えながらあちこち歩き、煙草を吸った。(少なくともシュトゥットマンはすぐには帰って来ないで欲しい)。

最初の疑問は、この手紙はそもそも手紙なのか。違う、これは手紙のタイプ写しだ。二番目の疑問は、発信者がこのタイプ写しを仕上げたのだろうか。発信人の女性が。あり得そうにない。とにかくこれは、気楽にタイプライターで打つような手紙ではない、一 タイプライターではこのようなものは全く忌まわしく見える。一方手書きならまだ考えられる。第二に、ヴィオレット嬢が選りに選って荘園事務所で書くことは全くあり得ない。第三に、彼女だったらタイプ写しを事務所に保存しないであろう。そもそもこのような恋文のタイプ写しは何のためだ。結論、それでこのタイプ写しは、ヴァイオ嬢の手紙からの手書き写しのタイプ写しである可能性が高い。

ゲッ。

後からの追想。手書き写しそのものはどこか。第三の疑問、受取人が手書き写しとタイプ写しをしたであろうか。ここでもこのような手書き写しの目的が分からない。受取人は原物を持っていようから。いや、全く明瞭だ、第三者が、不遜な者が、この手書き写しをしたに違いない。そうと分かれば、誰がしたか、推測するのは難しくない。その者はこの事務所に定期的に入出入りしていたに違いない。さもなければここでタイプできなかっただろう。さもないとここに何も保存しなかったであろう。いや、とパーゲルは自らに言った。疑いもなく、単にあの醜く小さなマイヤー、人々がこちらで黒人マイヤーと呼んでいる者がその者であろう。

すぐにヴォルフガングは小さなマイヤーの夜の旅立ちを思い出した。マイヤーは「彼が私を射殺する」とびっくりして叫び、眠りから目覚めた。シュトゥットマンと自分は家禽番の赤くほっぺの膨らんだ天使との嫉妬沙汰と考えた。そして騎兵隊長はこれを了承した。従って騎兵隊長も何も知らない。裏に何か別なことが潜んでいる。何か秘密のもの、何か危険なことが。 — 勿論、マイヤーは臆病者で、ただ射殺を思い込んでいた。横領された恋文のことで人はそう簡単に相手を殺さない。

このタイプ写しを黙って戻すか、それとも破棄すべきか。それともこの写しについて、例えばシュトゥットマンと話す必要があるか、 — 更に明らかにすべき疑問が残っている。それともそれどころか、この小さな、炎に燃え上がっているヴァイオ嬢と話すか。旅立ったマイヤー氏はこの写しとは別の写しを携帯していることが考えられる。しかし結局このような写しは何の証明になろう。誰でもこのような代物はタイプライターで勝手に記せる。誰かを指している名前は告げられていない。

いずれにせよ、このような写しは、小さな、未経験の令嬢を転覆させることができよう。しかしこのヴァイオレットはひよっとしたらすでに、この横領され、書き写された手紙のことを知っているのかもしれない。手紙の受取人がそのことを承知しているに違いない。 — さもなければ、どうしてあの晩、マイヤーは窓辺の物音でかくも驚いたのであろうか。いや、パーゲルは更に考えた。マイヤーが当時叫んだこと、それを正確に思い出ささえすればいいのだが、彼が私を射殺しようとしている、あるいはまた私を射殺しようとしている、だったか。また射殺する、これは、マイヤー氏がすでに何か脅迫の試みをしていたということであろう、(このような手紙は純粋に文学的関心から写すことはしない)、そしてその後、彼は何か激しく、例えば武器を手にした相手に対応されたということであろう、...

パーゲルはあれこれと詮索した。しかしマイヤーが眠りから飛び起きて、何と叫んだか、もはや覚えていなかった。

フォン・シュトゥットマン氏が入って来た。彼はフォン・ブラックヴィッツ夫人との談話から戻って来た。パーゲルはシュトゥットマンの顔に視線を向けた。フォン・シュトゥットマン氏もかなり想いに沈んでいるように見えた。彼は当時マイヤーが何と叫んだか聞きたいところであったろう。しかしむしろ尋ねないことにした。このように尋ねると、問い返される結果となり、ひよっとしたら手紙の写しのことを話さざるを得なくなるであろう。 — これは彼の望むところではなかった。受取人は、それが誰であれ、警告を受け、多分恵み深い令嬢も警告を受けている。従って、パーゲルは、まずは何も話さないことに決めた。彼は、心配しながら、秘密の恋愛に巻き込まれる気はなかった。この手紙がまずは、自分の収めた所、つまりポケットの中に収まっている限り、何も支障はない。

シュトゥットマンは考えに没頭していて、パーゲルが自分の依頼にもかかわらず、まだ食事していないことに気付いてさえいなかった。パーゲルが彼に相対して座り、一杯の紅茶を注ぎ、パンを取ると、シュトゥットマンは見上げ、ぼんやりと言った、「もう一度食

べるのか、パーゲル」。

「まだ食べなかったのです、親方」とパーゲルは答えた。

「そうか、勿論そのようだな。済まない。丁度何か考えごとをしていた」。

そして嘔みながらシュトゥットマンは更に自分の考えごとに沈んで行った。

しばらくしてからパーゲルは慎重に尋ねた、「何を考えているのです」。

思いがけず激しくシュトゥットマン氏は答えた、「田畑の平穩は我々が想定していた以上にひどい、パーゲル」。より穏やかに言った、「ここらの人々は心配事を抱えている」。そして中断して言った、「しかし貴方にはこのようなゴタゴタを話さない方が、貴方には気楽だろうと思う」。

「勿論です」とパーゲルは言い、両人はバターを付けたパンと肉にかかって、新たに物思いに沈んでいた。

フォン・シュトゥットマン氏に関しては、今彼はポケットに一通の手紙を持っていた。恵み深い奥方がかな無邪気なビジネスの手紙と見なした手紙である。しかしそれはフォン・シュトゥットマン氏にとってまことに陰険に、下賤に見えた。むしろ彼はポケットに手榴弾を入れたかったことだろう。しかし彼はこれとは別のことをむしろ考えていた。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は相変わらずまことに立派に見える夫人で、とりわけ美しい目をしている。彼女がフォン・シュトゥットマン氏に途切れ途切れに話したとき、この美しい目に涙が浮かんでいた、... この目は涙によって一層美しくなった、... 癩癩持ちの夫の前とか、道を踏み外す娘の前ではいつもしっかりしていなければならない夫人、農園や家族の前では決して何か本心を悟られてはならない夫人は、選抜された親密な男性に対して少しばかり内心を見せざるを得ない。この際のある様が、エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人をただ一層魅力的にした。物憂い甘美さ、寄る辺なさ、これは成熟した女性の場合ただ一層誘惑的に作用して、フォン・シュトゥットマン氏は夢中になった、...

私はこの可哀想な人を助けなければならない、とフォン・シュトゥットマン氏は精力的に考えた。この娘っ子はこんな沙汰を起こすなんて、何とのぼせているのだ。娘はまだ十五歳になったばかりだろう。

このとき同様に鋭く考え込んでいたパーゲルは、そのチーズから目を上げて、意味深に尋ねた、「一体ヴィオレット嬢は何歳だと査定されますか」。

「何だと」とフォン・シュトゥットマン氏は叫んで、激しくナイフとフォークを皿に当てた、「パーゲル、何を思い付いたのだ。それが貴方と関係があるか」。

「おやおや」とパーゲルは呆気にとられて、言った、「ただ聞いただけです、分かりました、いいですよ」。

「丁度別のことを考えていたのだ、パーゲル、...」とシュトゥットマンは釈明した、少しばかり当惑していた。

「貴方も丁度そのことを考えていたかのような按配でしたよ」とパーゲルはにやりと笑った。

「阿呆な。そんな若い娘は青いトマトを食べるようなものだ、一 私は貴方のように二十二歳ではない、パーゲル」。

「二十三歳です、...」。

「まあ、結構。それで思うに、パーゲル、今丁度八時過ぎだ。ちょっと出掛けて、こち

らの二軒の居酒屋のうち一軒に入って、シュナップスを飲もうか」。

「いいですね、一 それでヴィオレット嬢は何歳と見積もられます」。

「十六歳、十七歳。つまらんこと言うな、パーゲル。勿論シュナップスが目当てではないのだ」。

「見積もりが高すぎます。彼女はとてもふっくらしていて、それで騙されます。せいぜい十五歳で、...」。

「いずれにせよ、その話しは止めろ、パーゲル殿」とシュトゥットマンは戦闘的に目を輝かせて、叫んだ。

「分かりました、勿論」とパーゲルは呆気にとられて、言った、「いやはや、シュトゥットマン、貴方は相変わらず謎のスフィンクスだ。シュナップスが目当てでないのであれば、何に関心があるのです」。

より落ち着いて、シュトゥットマンは、居酒屋の亭主達と馴染みになり、常連となって、できるだけ沢山村の噂話を聞き出すという自分の計画を述べた。

「ノイローエは余りに広すぎる。夜な夜な畑泥棒のために巡回しても、人にも遭遇しないことがあり得る。我々の騎兵隊長は成果を見たがっている。そこで居酒屋の亭主から手がかりが得られれば、値千金だ、...」。

「正解です」とパーゲルは同意した、「ピストルを持って行きますか」。

「今日は多分意味ないだろう。今日はまず顔つなぎというところだ。しかし貴方がそのようなものを忍ばせても、構わんぞ。一 貴方はまだ十分に戦争気分だな。私はピストルを持ち歩いたのはおよそ五年間だ、...」。

両人がようやく出発したとき、八時半であった。陽はとうに沈んでいた。しかしまだほとんど明るかった。木々の影で黄昏になり始めた感じであった。荘園から村への道は人で一杯であった。子供達は駆け回って、ドアの前の小さなベンチには老いた人々が座っていて、若者は群れを作って、集まっていた。遠方で歌声がした。一人の少女が一頭の嫌がる山羊を綱で小屋に引っ張っていた。

二人の紳士が通り過ぎると、人々は黙り、子供達はもはや駆けなくなり、歌が止んだ。皆が二人を見送った。

「こちらへ、シュトゥットマン」とパーゲルは提案した、「外の、村の周りを迂回しましょう。いずれ道は分かりましょう。こんなに見つめられては不快です。役人の殿方は飲みに行くところと、皆に知られる必要はありませんから」。

「そうだな」とシュトゥットマンは言った。二人は狭い小道の方へ曲がって行った。小道は二軒の労働者の家の窓のない切妻壁の間を通っていた。後に彼らは一種の畦を見つけた。その左手には静かな果樹園があり、右手には花咲くジャガイモ畑が広がっていた。彼らは傷んだ道に来た。その右側は丁度田畑の中へ通じており、左側は村の最後の家々へ向かっていた。大気は一層どんよりしてきて、薄暗くなったと感じられた。小鳥達は静かになっていた。村から笑い声が聞こえて来て、消えた。

パーゲルとシュトゥットマンが黙って、ゆっくりと、並んで、二人とも道の轍の跡を歩いているとき、人々の一行と出会った。六人か七人、男達と女達であった。その人々は落ち着いて一列に進んでいた。背に背負い籠を持ち、車の跡の間の草の筋の上、二人の側を過ぎて行った。

「今晚は」とパーゲルは声高に言った。

返事として何らかの音が漏れて響いた。そして黙したこの幽霊の行列はすでに去って行った。

二人は更に二、三步、より躊躇いながら進んだ。それから二人は申し合わせたように立ち止まった。二人は振り返って、静かな遊行者達を見送った。いや、その通り、彼らは村へ向かっていなかった。彼らは田畑の間への道を折れて行った。

「おやおや」とパーゲルは言った。

「あれはおかしいな」とシュトゥットマンは答えた。

「奴等は今時分どこへ行くのか」。

「背負い籠を持って」。

「盗みだ」。

「それに森の奥、薪集めに行くことも考えられる」。

「夜の今時分、一 薪集めだ」。

「そうだなあ、...」。

「ではシュナップスと就任挨拶を諦めて、ただ追いかけましょう」。

「そうだな、ちょっとまだ待とう。奴等が向こうの円頂を越えるまで」。

「私は誰一人知りません」と憂わしげにパーゲルは言った。

「すでに薄暗い、顔はほとんど見分けがたいな」。

「我々がすぐ初回で六人を掴まえたら、手柄でしょう」。

「七名だ」とシュトゥットマンは言った、「三人の男達に、四人の女達。一 それじゃ行こう」。

しかし最初踏み出した後、フォン・シュトゥットマンはもうまた立ち止まった。「パーゲル、我々は無策だ。我々が奴等を掴まえても、我々は彼らの見分けができない。どのように名前を確認できよう。いい加減勝手な名前を告げられよう」。

パーゲルは苛立って迫った、「貴方が大元帥の策を練っている間に、シュトゥットマン、奴等は消えてしまいますよ」。

「たとえ我々が奴等を掴まえて、マイヤーとかシュルツェ、シュミットという名前であると知っても、我々はまず恥をかくだけだ。事情に通ずることは勝利の半ばに達する、パーゲル」。

「それではどうします」。

「貴方はまず村へ行って、誰か古くからの者、すべての郎党を知っている者を連れて来てくれ」。

「コヴァレフスキーとかですか、代官の」。

「その通りだ、パーゲル。奴は少しばかり無気力だ。奴が労働者達に対してもっと厳しく向き合うようになれば、彼はもっと威勢良くなる。彼が奴等の名前を告げざるを得ないと、奴等の立派な怒りが彼に向けられることになる、...」。

しかしパーゲルは、インフレの町の大都会隊商宿の以前の応接課長の御託にもはや耳を傾けていなかった。パーゲルは軽やかに速く村へ駆けていた。駆けることは気持ちよかった。彼がもはや、バルト三国以来、駆けなくなり、スポーツをしなくなってから、永劫の時が経っていた。常に彼はそれ以来できるだけゆっくり動いていた。賭博開始まで待機す

る一日は長いものであった。

今や、彼は自分の体が元気に丈夫に働くことに喜びを感じていた。穏やかな、少しばかり湿った、少しばかり涼しい夜風が、一杯に彼の肺の中に入って来た。彼は自分が厚い胸を持っていることを喜んだ。彼は素早く息を吸わず、走っているにもかかわらず、ゆっくりと一杯に吸った。呼吸は一つの快樂であった。おまるマダムの許の中庭に面した部屋では時々、肺とか心臓に激痛を覚えていた。本格的に病気になったことのない若者の流儀で、彼はそんなとき重い病を想像していた。 — それが今や、幸いそれは何ごとでもないのだ。彼はヌルミ[1897-1973、長距離選手]のように走った。私は上手にできる、と彼は満足して考えた。私の体はまだ順調だ。

彼は村に着くと、人目に着かないように、歩いて行った。それでも彼がコヴァレフスキーの家に消えたことは大いに注目されていた。「見ろよ」と人々は言った、「一時間半前、彼はゾフィーに『さよなら』と言って、今また彼女に会いに来ている。たった今一緒に行った老いた卵形頭の方は無論追いついたのだ。ま、ベルリン野郎はそんな者だ。 — それに奴は頑丈だ。ゾフィーも半分ベルリン娘になったしな、 — 生クリームに慣れた者は、生クリームを欲しがるものだ」。

しかし残念ながらこの若者はすぐにまたコヴァレフスキー家から出て来た。それにただ老代官と一緒にだった。多分ゾフィーとは会っていない。ゾフィーは上の自分の切妻の部屋で歌い続けていた。急いで両人は村から出て、田畑の畦道や道を越えて行った。コヴァレフスキーはいつも若い殿方の半歩後を躡の良い猟犬のようにずっと付いていた。若い男が、日曜日の夕べの部屋へ飛び込んで来て、ただ「ちょっと一緒に来てくれ、コヴァレフスキー」と言っただけで、この老代官は質問もせず、一緒に出掛けたのである。哀れな人間は質問もせず、言われたことを行う。

シュトゥットマンは、道が田畑へ折れるところで待っていた。

「今晚は、コヴァレフスキー。来てくれて有り難い。パーゲルは委細を告げたか。まだか、結構。 — この道はどこへ通じている」。

「我らの外部圃場区です、旦那。それから恵み深い御領主の森へ通じています」。

「百姓達の田畑はないのか」。

「いいえ、ただ我らの土地です。外部圃場区は五と七です。反対側に外部圃場区は四と六があります」。

「結構、 — 貴方がここで十五分前に、六、七人の者と出会っていたら、黙っていて、空に見える背負い籠を背にしていたら、 — 貴方は何と思うかな、コヴァレフスキー」。

コヴァレフスキーは指さした、「向こうへ行ったのですか」。

「その通り、向こうだ。この外部圃場区へ」。

コヴァレフスキーは指さした、「こちらから来たのですか」。

「そうだ、コヴァレフスキー、大体あの辺りから来た。こちらの村からではない」。

「だったらアルトローエの者です、旦那」。

「アルトローエの者が我らの畑に何の用があるのだ。今夜になるというのに」。

「そうですね、旦那。ジャガイモはまだです。しかし砂糖大根は、ひよっとしたらその葉が少し欲しいでしょう。更に奥に小麦があります。金曜日、土曜日に我らが刈ったものです。 — ひよっとしたらその穂を少しばかり切り取るつもりかもしれません」。

「それは盗みだな、コヴァレフスキー、だろう」。

「砂糖大根の葉は山羊の餌にするのでしょうか。彼らはほとんど皆山羊を一頭飼っています。小麦の方は、よく乾いていたら、コーヒー碾きで粉にできます。すべて戦争で学んだのです」。

「そうか、分かった。それでは後を追いかけてよう。一緒に行こう、コヴァレフスキー、しかし行きたくないのか」。

「四の五の言うことはありません、旦那、...」。

「貴方は何も更に関与しなくていいのだ、コヴァレフスキー。ただ奴等の一人が私に嘘の名前を言ったとき、私の胸を突いてくれたらいい」。

「分かりました、旦那」。

「しかし奴等は貴方に怒るだろうな、コヴァレフスキー」。

「たとえアルトローエの者でも、私は殿方達の命じられたようにしなければならないと承知しています。その程度はきっと分かっています」。

「しかし奴等が盗んでいることを、貴方は認めたくないのだろう、コヴァレフスキー」。

「たとえ単に山羊のためであろうと、山羊に餌がないのはひどい話です。子供達のスープのために一粒の小麦もなければ、これは更にひどい話です」。

「しかしコヴァレフスキーよ」とシュトゥットマンは突然立ち止まった。それから素早く更に、ますます暗くなって行く夕闇の中を進んだ。「しかし人々がただ入用なものを取って来るとすれば、規律というものが成り立つだろうか。そんなことでは荘園がお仕舞いになるだろう」。

コヴァレフスキーは頑固に黙っていた。しかしシュトゥットマンは譲歩しなかった。「コヴァレフスキー、返事は」。

「済みません、旦那。働いて、それでも子供達に何も食べさせられなかったら、これも規律があるとは言えません」。

「しかし何故何も買わないのだ。働いたら、彼らは買う金があるだろうに」。

「しかし単に紙屑ですよ、旦那。皆が自分の品物をしっかり押さえていて、紙屑を貰おうとはしません」。

「そうか」とシュトゥットマンは言って、また立ち止まった。しかし先ほどのように突然ではなかった。更に歩きながら彼は言った、「それでも、コヴァレフスキーよ、誰もが入用なものを取って来たら、荘園は立ち行かなくなることは、貴方も認めるだろう。貴方は適宜報酬を得たいだろう。収穫がなくなれば、報酬はどうなるだろうか。騎兵隊長殿は苦勞することだろう」。

「老御領主はいつも成果を挙げておられます。沢山金を稼いでいます」。

「しかしひょっとしたら騎兵隊長殿にはもっと面倒なことになるかもしれない、一隊長は老御領主に請負料を払わなければならないのだし」。

「アルトローエの者達はそんなこと知りません」。

「彼らには何も関係ないと言うのか」。

「はい、彼らには何も関係ありません」。

「それでは、奴等がくすねるのは正しいと思うのか、コヴァレフスキー」。

「山羊に餌がないとなれば、...」と辛辣な老親父はまた始めた。

「そんな詰まらぬことを。それを正しいと思うのか、コヴァレフスキー」。

「私はそんなことをするつもりはありません、旦那。私は勿論荘園から小麦やジャガイモ、雌牛のための余った牧草を得ていますから、...」。

「それを正しいと思うのか、コヴァレフスキー」。

フォン・シュトゥットマン氏はほとんど叫び声を上げていた。パーゲルは笑い始めた、「何で笑うんだ、パーゲル。阿呆なことするな。自分の雇い主に対する盗みの権利が、自らはくすねたことのない老親父から告げられている。 — 自らくすねたことがあるのか、コヴァレフスキー」。

滑稽であった。フォン・シュトゥットマンは老親父に、かつて田畑検査官のマイヤーがしたようにほぼ同様に叱りつけていた。しかしこう叱られたからと言って、代官は更に畏縮することはなかった。彼は全く上機嫌であった。

「貴方のくすねるの定義は何でしょう、あるいは我らのくすねるの定義は何でしょう」。

「違いがあるものか」とフォン・シュトゥットマン氏は恨んで言った。しかし彼には分かっていた。

今度はパーゲルが尋ねた、「私も質問してよろしいでしょうか、フォン・シュトゥットマン殿」。

「構わんぞ」とシュトゥットマンは言った、「このどん底は貴方には面白いように見えるな、パーゲル殿」。

「まことに暗くなって来ました」とパーゲルは楽しそうに言った、「それで我々二人は田畑が分かりません。このことはコヴァレフスキー氏も承知しています。それでコヴァレフスキー、どこに砂糖大根の圃場区はあるのです」。

「更に五分歩いた先で、そこから右手に、ライ麦畑を越えて行きます。星の明かりでも見えます」。

「小麦の圃場区は」。

「更に、三、四分、道の沿って行きます。するとそこに着きます」。

「そう、コヴァレフスキー」とパーゲルは全く悪漢的に言った、「それで、貴方は、奴等は餌を仕入れる権利があると主張するのであれば、何故貴方は我々を暗闇の中、少しばかり迷い込ませないのだ。 — 我々はどこを探すべきか、皆目分からないのだぞ」。

「パーゲル」とシュトゥットマンは叫んだ。

「それは出来ません、旦那、それでは規律がありません。貴方が何か仰有ったら、貴方の鼻面を引き回すことは出来ません」。

「だろう」とパーゲルは大いに満足して言った、「それで、この件は明瞭だ。貴方は規律に賛成だ、コヴァレフスキー。フォン・シュトゥットマン氏がすること、これは規律にかなっている。しかしアルトローエの者達がしていることは、規律にかなっていない。貴方は奴等のしていることが分かっている、コヴァレフスキー。貴方はそれを規律にかなっていないと思い、正しくないと思っている、...」。

「ま、旦那、そうかもしれません。しかし山羊に餌がないときには、...」。

「止めてくれ」とシュトゥットマンは叫んだ、「貴方の成功も長くは保たなかった、パーゲル」。

しばらく彼らは黙って夜の中を進んだ。ほとんど黒い天蓋の中、星々が輝いていた。彼

らが周りに目にしたものの、それは黒色から灰色への様々な位相に過ぎなかった。

しばらくしてパーゲルはまた話し始めた。彼は何か思い付いた。彼が思い付いたこと、それはまさに適したものであった。というのは、少しばかり学校教師風で、銜学的なシュトゥットマンは、ただぼんやりと考え感じている優しい代官に怒っていると感じ、そこでフォン・シュトゥットマン氏を少しばかり、親切なゾフィーの父親と和解させたい衝動に駆られたからである。

「ところで」とそれ故パーゲルは言った、「コヴァレフスキー殿はかなり我々の収穫のことを案じています。シュトゥットマン、我々は三週間遅れているとの意見です」。

「その通りです」と代官は言った。

「余り嬉しくないな」とシュトゥットマンはぶつぶつ言った。

「できるだけ速やかに郎党が必要と、コヴァレフスキーは述べています。それで騎兵隊長殿はベルリンで難破してしまったので、(シュトゥットマン、ベルリンには難破の男がもう一人います)、コヴァレフスキーの意見では、是非とも監獄の分遣隊が必要になるとのことです」。

「私の意見なのですか、旦那」とコヴァレフスキーは驚いて尋ねた。

「そうです、貴方の娘さんが私に今日話しました。監獄は多くの分遣隊要請故に、すでにほとんど空で、我々はそれに頼らざるを得ない。さもないと人手は得られない、とコヴァレフスキーは言っているのです」。

「私の意見なのですか、旦那」と老親父はますます驚いて尋ねた。

「そうだ」とフォン・シュトゥットマン氏は言った、「すでに私はそのことについて騎兵隊長と話した。しかし彼は、費用が大いにかかる、と言っている。それに囚人は農作業について何も知らない、と。貴方はそれに賛成なのか、コヴァレフスキー」。

「私がですか、いいえ、旦那、皆ただの犯罪者です」。

「その通り、盗んだ奴等だ。しかしパーゲル殿はたった今、貴方がそう話したと語っている、...」。

「彼の娘です、ゾフィー嬢です、シュトゥットマン、...」。

「では、貴方の娘か。貴方の娘は多分貴方から聞いたのであろう、...」。

「私からですか、旦那」。

「いや、また馬鹿の振りをしてくれるな。貴方からなのだ、コヴァレフスキー。二度と貴方の話しを遮るつもりはない」。彼は数歩歩いて、そして立ち止まり、はなはだ苛立って尋ねた、「どれほどもっと歩かんといのか」。

「そうですね、旦那。ここの右手にライ麦の切り株があります。これを越えて行くと、砂糖大根の圃場区に着きます」。

「それでは、あの郎党がそこに本当にいると思うか」とフォン・シュトゥットマンは突然気がなさそうになった。

「我らの砂糖大根は今年は大して良くありません。少しばかり間引きが遅すぎました。彼らがいるとしたら、小麦畑とずっと思っています」。

「小麦畑はここから真っ直ぐか」。

「更に三、四分です」。

「分かるだろう、パーゲル。 — 三人皆が遠回りする必要はないだろう。貴方が素早

くライ麦切り株を越えて駆け、砂糖大根を視察してくれ。それからできるだけ早く、我々を追いかけてくれ」。

「承知しました、フォン・シュトゥットマンさん」。

更に小声でシュトゥットマンが言った、「貴方は多分郎党には会わんだろうから、銃は私に渡してくれ、 — そうだ、有り難う。 — ではまた、獵運を祈る、パーゲル」。

「獵運を祈ります、フォン・シュトゥットマンさん」。

彼は両手をポケットに入れて、ゆっくりと切り株の上をぶらぶら行った。道よりもむしろ星空に視線を向けていた。他の二人の足音はすでに聞こえなくなっていた。靴を通じて彼は、切り株に触れたときの露の湿った冷気を感じた。初めて彼は、フォン・シュトゥットマン氏から離れて、喜んだ。学校教師、子守女という思いが彼の頭を過り、すぐにまたこの思いを後悔した。彼はとんでもなく礼儀正しい奴だ、フォン・シュトゥットマン氏は。この彼の銜学風な点は、彼の完全に信頼できる点から生ずる影に過ぎない。これは今日ほとんど死に絶えた特性だ。

彼一人ではその特性のため切り抜けられないだろう、とパーゲルは考えた。彼一人ではきっとその特性故苦しむだろう。この点丁度私は反対だ。私は余りにルーズだ。私は物事をなるがままにするのを最も好む。私が上手く行かないときは、そのせいだ。ここは海千山千のボーイ長やすれっからしのエレベーターボーイのいるホテル業界ではない。 — 善良なシュトゥットマンは有無を言わず学び直す必要があるだろう。私はその代わり、 — いや、今はまさにまた、...

彼は周りを見た。灰色に白っぽく微光を発して、眼前にライ麦の切り株が広がっていた。彼の足の下の地面は少し沈むように見えた。しかし向こうの空の方に見える、暗い星の見えないものは、ひょっとしたら砂糖大根圃場区かもしれない。

今はまさにまた、と彼は更に考えた。そのことを明らかにしなければならない、旦那、私の意見なのですか、と。いや、コヴァレフスキーは馬鹿の振りをしていたのではない。彼は本当に何もそのことを知らなかったのだ。しかしゾフィーは何故私を騙そうとしたのか。私を騙してまで彼女は一体監獄分遣隊に何の関心があるのか。 — いや、これはすべて戯言だ、と彼は精力的に考えた。きっと全く単純な関連なのであろう。私には私のポケットの中の阿呆な恋文だけでもう十分だ。もはや色々考えまい。ただ単純に仕事をしよう。何も関知しない。今は砂糖大根が問題で、...

彼は視線を落とした。一気に変貌した。明るいライ麦の切り株の端が間近に迫って来て、後わずか五十歩、六十歩の所で砂糖大根圃場区となっていて、その圃場区が黒々と星空の天に丘のように上がっていた。しかしその畑は暗かったけれども、より暗い点々が畑の上で動いていて、時々ナイフが石に当たって、銀色に光り、明るく彼の許まで響いて来た。より暗い点々、 — パーゲルはそれを数えようとした。六か七、あるいは十六か。二十六だ、 — いや、三十を越えるかもしれない。イナゴの群れ、さまよえる厄災、夜間に莊園田畑に襲来している、...

山羊が空腹ならば、 — と彼の中で声がした。いや、これは空腹の山羊ではない、牧歌ではない。これは一団となった盗みだ、 — 捕獲されなければならない。

パーゲルは尻ポケットに手を伸ばした。しかしすでに手を出すとき、ポケットは空であると思い出した。自分は武器なしだ。次第にゆっくりと歩きながら、パーゲルは引き返し

て、他の二人を呼ぶべきか、考えた。しかし暗い葉の土地での盗人達を見分けることができる自分は、とうにより明るいライ麦切り株と鋭い対比をなして、気付かれたに違いない。自分がまず救助を求めると、彼らは逃げてしまう。彼らが自分の歩みを落ち着いて見ているのは、彼らが自分を仲間の一人と思っている証拠だ。

それとも彼らは、一人が相手なら何の遠慮もいらないと考えていよう、とパーゲルは思案した。するとやはり失敗に終わる。

しかしこうしたことすべてを考慮しながらも、彼は一度も立ち止まらなかった。一歩一歩彼は「盗人の一団」に近寄った。ひよとしたら少しばかりゆっくりであったかもしれない。しかし恐怖で歩みが更にゆっくりとなることはなかった。すでに全く間近な所まで来た。彼の足は押し潰されて乾いた音を立てるライ麦の切り株を離れ、湿ってだらりと、砂糖大根の葉が彼の靴にかかった。すぐに彼は彼らに叫ばなければならない、...

ただ二、三人を掴まえさえすれば、六人か七人でも、と彼は慰めて考えた。 — しかし新しい考えが浮かんだ。彼は上着をさっと開け、チョッキのポケットから銀色の煙草箱を握り、それを手で高く上げた、 — 「両手を挙げろ、 — さもなくば撃つぞ」と彼は吠えた。

箱が星空の明かりできらきら微光を発した。

彼らの目に留まろうものなら、と彼は熱にうなされたように考えた。すぐに目にしようものなら。すべては一瞬にかかっている。間近の者達が手を挙げると、次々に彼らは手を挙げる。

「両手を挙げろ」と彼は今一度、出来る限り大声で、叫んだ。「両手を挙げない者には、すぐに一発ぶち込むぞ」。

一人の女性が優しく小さな声で悲鳴を上げた。一人の男が全く低い声で言った、「何て、戯言だ」。 — しかし彼らは両腕を高く挙げた。夜の畑の上に散らばっていて、影の一団が立って、両手は星空に届いた。

私は出来る限り大声で吠えなければならない、とパーゲルは熱にうなされたように興奮して、考えた。すると小麦畑の二人が耳にする。私は助けが必要だ。二人にはすぐに早く来て欲しい。

そこで彼は実在しないある男に向かって吠えた。もう一度手を下ろしたら、ぶち抜いてしまうぞ、と。そう言って彼は銀色の箱を固く手で握り、その鋭い角が彼の肉に痛く食い込んだ。一人の男の周りの人々、この大勢が、人形のように凝固した。彼らの不動の姿勢は運命への恭順を意味する必要はない。その姿勢は威嚇ともなり得る。時々彼は自分の状況の完全な救いのなさを思い知らされた。彼はここで三十人を前に、手に滑稽な箱を持っている。ただ一人文句を言おうものなら、すぐに彼らが皆私を襲撃するだろう。たたき殺されることを彼は恐れていなかった。しかし彼らは私をぶん殴るだろう、女達は私の髪の毛を引っ張る。私は滑稽なことになる。私は二度と村に姿を現せられない、...

どれほどの時が経ったろうか。ゆっくり過ぎる数秒か、数分か。どれほど長く彼はすでにここに立っていたことか。自分は、力のない者達の間で、力を誇示しているが、彼らがただ彼らの力を考えさえすれば、自分を辱めることができるのである。時の経過が分からなかった。時はそれほどゆっくり進んだ。彼はもはや叫ばず、耳を傾けた。二人はまだ来ないのか。

誰かが咳をした。一人が動いた。低音の男が、パーゲルのすぐ間近にいて、言った、「旦那、後どれほどこうして立っていなきゃいけないのです。腕が痛い。どういう結末になるのです」。

「静かにしろ」とパーゲルは叫んだ、「おとなしく立っているのだ、さもないと一発食らうぞ」。

彼は相変わらずその話しをしなければならなかった。一度も威嚇の発砲ができないので、言葉でその恐れについて納得させなければならない。

しかしやっと救いが来た。ライ麦の切り株を越えて、シュトゥットマンが駆けて来る。かなり遅れて、コヴァレフスキーが続いて来る。

息も吐かず、急いで来たのは自分であるかのように、パーゲルは叫んだ、「発砲してください。お願いします、シュトゥットマン、一度空に発砲してください。一味に発砲できることが分かるように。私はここに十分前から煙草の箱を手にして立っていて、...」。

「分かった、パーゲル」とシュトゥットマンは言った、一　そして一発、奇妙に小さく乾いた音を響かせながら、天蓋の下、人々の頭上をピューと飛んだ。

二、三人が笑った。低音の男が言った、「注意しろよ、奴等はんしゃく玉を放つぞ」。更に多くが笑った。

「二列に並べ」とシュトゥットマンが叫んだ、「背に背負い籠を持って。農園中庭へ行って、そこで名前が確認される。その後各自家に帰って良い。一　パーゲル、先頭を頼む、私は殿だ。コヴァレフスキーは外れるのが一番良いだろう。後から付いて来て貰おう。一　皆言うことを聞いてくれ。二、三枚の砂糖大根の葉のことで発砲したくない」。

「発砲していかんですか」とパーゲルは尋ねた。

役割が交換されていた。パーゲルの中ではまだ冒険の興奮、案じていた敗北のせいで、震えが収まらず、想定された威嚇者達の中に、劣等な者達、ほとんど犯罪者を見ていた。彼らに対してはどんな措置も合法に見えた。シュトゥットマンは三十名が罪もなく、羊のように煙草箱でおとなしくなっているのを見ていて、そのことから彼らの行為の罪のなさを結論づけていた。万事は些事にすぎない、と。

二人のうちどちらも、シュトゥットマンもパーゲルも間違っていた。確かにアルトローエの者達は犯罪者ではなかった。しかし同様に確かに、彼らは自分達は飢えたくない、自分達の食い物を得られる所から取って来ようと固く決心していた。何も買えないからである。最初の奇襲を彼らはほぼ諧謔的に受け入れたが、二度目の奇襲を受けたら、彼らは怒り、立腹することだろう。

彼らは空腹を感じていた、一　そして無限に沢山生長する巨大な荘園を見つけた。収穫のごく小部分、田畑のほんの片隅だけで、彼らの空腹は収まり、絶えずさいなむ不安が静まる。「騎兵隊長は、一頭の山羊がむしり食っても、気付きはしない」と彼らは言った、

一　「一袋のジャガイモとて、彼にはどうということもない。今年の春、数千ツェントナーの凍ったジャガイモを澱粉工場に運んでいたぞ」。一　「去年はライ麦を濡れたまま搬入して、打穀できなかつた。全部腐ってしまって、後で堆肥に投げ捨てていた」。

彼らは賃金と引き換えに必需品を購入できる間は、購入して、盗まなかつた。二、三人の腐った輩は、常に少しばかりくすねていた。しかしこれはまさに腐った輩で、そのような輩と見なされていた。しかし今や人々はもはや何も購入できない。一　それから数千

の指令を下す戦争に彼らは見舞われた。誰も守らないし、保てない指令であり、カードによる配給品の分配であり、これでは飢えるだけである。多くの男達が戦場に出掛けていた。戦場では、必要とするものを、自ら「手配する」ことは恥と見なされない。次第に倫理が緩んで来て、もはや法を犯す恥辱は存在しなくなった。その際捕まることだけが恥辱となる。「ただ捕まるなよ」。 — この次第に大衆的になって行く言い回しは、すべての倫理の凋落を印付けている。すべてが混乱していた。誰ももはや正しいことが分からなくなった。相変わらず戦争が続いていた。講和にもかかわらず、フランス人は相変わらず敵であった。今ではフランス人がルール地方に侵攻して来て、そこでは恐ろしいことが起きると言われていた。

人々は自分達の考え方の他に考え方があったろうか。 — 自分達の行動の他に行動の仕方があったろうか。彼らは別荘の側を通り過ぎ、皿の物音を耳にすると、こう言った、「いや、この人は飢えていない。我々は彼より働きが少ないか。いや、我々の方がもっと働いている。何故我々は飢えて、彼は飢えていないのか」。

この考えから憎悪が生まれた。十年前このような皿の物音を聞いていたら、彼らはこう話したことだろう、「いや、この人は子牛の焼き肉を食べている。我らの豚肉は全く麦わらのようだ」。 — これは妬みであり、 — 妬みは、憤激を与える感情ではないし、人間を闘争的にする感情でもない。 — しかし強力な憎しみは、強力な闘争者となる。

今回彼らは捕まえられた。一回掴まえられること、これを気前よく彼らは受け入れる。五分後にはもう彼らはお喋りし、笑っていた。まずは何か別なことで、夜の冒険であった。何の大したことが起きよう。二、三枚の粗糖大根の葉に過ぎない。

彼らは我らのヴォルフガングに語りかけ、彼にこう言った、「それでこれから先どうなります、旦那」と彼らは尋ねた。「二、三枚の砂糖大根の葉です。あっしらの名前を書き留めて、裁判所に、畑泥棒と届ける。以前は三マルクの罰金でした。今日日、数百万マルクでしょう。その先は。罰金を支払ってしまうと、もはや何もなくなります。一ペニヒもありません。 — あっしらのちっぽけな紙幣にはお釣りもくれません。そんな些細なことです。それを銃で脅すなんて」。

「静かにしろ」とパーゲルは苛立って命じた、「次回は空への発砲とはならない」。

「いや、二、三枚の砂糖大根の葉のことで、一人の人間を不幸にしたいのかい。そんなお人なのか。それが分かっただけでも十分。誰でも撃てるんだからな」。

「黙っている」と人々は叫んだ、「そんな話しではない」。

「静かにしろ」とパーゲルは鋭く叫んだ。道端で人影を見たように思った。騎兵隊長とその夫人であったろうか。あり得ない。隊長だったら、二、三のねぎらいの言葉を言っただろう。

ほどほどに整然と彼らは大きな騎士領中庭に着いた。人々は雌牛小屋で背負い籠を空にしなければならなかったのも、罵声が大きくなった。罰金命令と引き換えにそれらの葉を家に持ち帰って良いと多分思っていたからである。

「山羊には何を与えたらいいだろう」。

「動物には分からんだろう。動物は餌を欲しがる」。

「すぐまた取りに行かなければなるまい」。

「黙っている」。

諧謔は消えた。苛立って、攻撃的に、辛辣に、反抗的に名前が告げられた。しかし皆が告げた。コヴァレフスキーは胸を突く必要がなかった。

「次回はもう掴まえられないぞ」と一人が宣言した。

「ゲオルク・シュヴァルツ[1896-1945、反ナチ]二世と書いてください、検査官殿」ともう一人の者が言った、「二世を忘れちゃいけません。私の従兄弟が、こんなくだらぬ事に関与したと思いたくない」。

「次」とシュトゥットマンは疲れて言った、「パーゲル、もう少し彼らを急かしてくれ。次」。

最後に、「良い晩を、コヴァレフスキー。 — いや、助かったな。貴方がこれで不快な目に遭うことはないだろうな」。

「いいえ、私は、違います。良い晩を」。

今や両人は二人つきりとなった。シュトゥットマンとパーゲルである。書き物机には雑然と書類があった。事務所の綺麗に蠟引きされた床は汚れ、砂だらけになった。歩きたびに軋んだ。

シュトゥットマンは書き物机から立ち上がって、少しばかりパーゲルを見つめて、言った、「元来、八時半に朗らかに出発したのだったな、だろう」。

「そうです、行きは良かった。代官と貴方は諍ったけれども」。

「そうだな、彼は納得しようとしなかった。これらの郎党も納得しようとしない。これは全くベルリンのホテルと同様だ。我々がすることはすべて、単に嫌がらせのひどいことだ」。

「郎党に過大な期待はいけません、シュトゥットマン。結局仕様が無いのです」。

「そうだな、ない、しかし、...」。

「しかし何ですか」。

シュトゥットマンは答えなかった。彼は窓辺に寄って、外の方を覗いていた。しばらくそうしていた。それからシュトゥットマンはまた事務所へ戻って来て、小声で、自らにつぶやくように言った、「いや、彼は来ない、...」。

「誰が来ないのです。まだ誰かを待っているのですか」。

「いや、...」と拒絶するようにシュトゥットマンは言った。それから思い直した。「結局貴方が主にこの仕事の手柄を立てた、パーゲル。思うに、騎兵隊長はこちらに来て、我々に、貴方に感謝を述べていいのだが」。

「騎兵隊長がですか」。

「貴方は彼を見なかったのか」。

「私には、...道端で、...本当に彼でしたか」。

「そう、彼だった。彼は逃げようとした。私は彼に語りかけたのだ。しかし明らかに彼には辛いのだ。善良なブラックヴィッツは郎党に顔を見られたくないのだ、...」。

「どうしてですか」とパーゲルははなはだ驚いて尋ねた、「彼はまさに、田畑泥棒に決着をつけることを我々に望んでいるのでしょうか」。

「勿論だ、しかし我々がそれをすべきなのだ、パーゲル。我々だ、彼ではない。彼はそれに関知しなかったことにしたいのだ」。

パーゲルは憂わしげに歯の間から口笛を吹いた。

「思うに、パーゲル、我々の上司は、まことに鋭い役人を望んでいるが、それはそれだけ自分がより優しい者に見えるようにするためだ。思うに、我々はフォン・ブラックヴィッツ殿からの応援は余り期待できないだろう、...」。彼は今一度窓から凝視した。「少なくとも彼はこちらに来ると思っていた。しかしまさに来ない。我々は我々二人が頼りだ、それでいいか」。

「願ってもない」とパーゲルは言った。

「互いに腹を立てない、いつもすぐに腹藏なく話す、互いに秘密を持たない、いつもすべて話す、どんな些事も。我々はいわば包囲された要塞にいるようなものだ。案ずるに、ノイローエは騎兵隊長にとって持ち堪えることが難しい、— パーゲル、異存はないか」。

パーゲルはポケットから手を引いた。これは私の秘密ではない、と彼は考えた。私はまずは幼い令嬢と話さなければならない。

「はい、異存はありません」と彼は声高に言った。

91

新聞、新聞

人々は、ノイローエであろうと、アルトローエであろうと、ベルリンであろうと、帝国の他のどこかであろうと、新聞を取っている。彼らはこれらの新聞を読む。以前の時代よりも多くの人々が新聞を取っている。彼らはドルのレートを見るのである。まだラジオはなかった。新聞から彼らはレートを知った。そして人々がこれらの百万の数字を求めて、新聞をめくるとき、望もうと望むまいと、大きな見出しで様々な出来事が目に飛び込んで来る。多くの者がそのいずれも読もうとしない。七年前から、ますます大きくなる見出しに慣れてきていて、人々はもはや何も世間のことについて聞こうとしなくなっている。世間は何も良いことをもたらさない。出来るものならば、彼らは自分達だけのために生きていたいと思っている。しかし人々はどうしようもない。人々は世間から離れられない。人々は時代の申し子であり、時代は人々に滴り落ちて来る。

この時代多くのことが起きた。この暑い収穫の日々、人々はクーノの政権がすでにまた揺らいだと読んだ。政権は高利貸しに便宜を図り、日用品の欠乏を招いた。ルール地方には相変わらずフランス人の黒い連隊が居座っていて、そこでは誰も働かず、煙突からは煙が出ない。これは消極的抵抗と呼ばれ、資産に対して平価[マルク]切り下げで支払うことにする新しい税や、新しい租税の導入で、この抵抗への予算としようとした。七月二十六日から八月八日までの間、ドルの相場は、760,000マルクから4860,000マルクへ上昇した。帝国銀行のレートは十八%から三十%へ上がった。

しかしこうしたやり方にかかわらず、またフランスのやり方を違法と宣言したイギリスやイタリアの異議にもかかわらず、フランスは平和時に戦争を継続した。ドイツ人には嫌がらせをしなければならぬと宣言された。さもないとドイツは支払わない、と。この嫌がらせはすでに今次の状況の謂であった。百人を越える死者、十もの死刑判決、半ダースもの終身刑、人質、銀行強盗、十一万人を越える人々の家屋敷からの追放。ドイツは破滅して構わん、しかし払え。

こういう事柄を人々は新聞で読んだ。人々はそれらを見なかったが、しかしそれらを感じ

じた。これらの事柄が人々に浸透し、人々の一部となり、睡眠と覚醒、夢と酩酊、食事と生計を定めた。

絶望的な民族の絶望的状况であり、絶望的に個々人の絶望者が振る舞った。

混乱して、乱れた時代、…。

第十一章
悪魔の軽騎兵達がやって来る

92

騎兵隊長は一通の手紙のせいで叫ぶ

「恥知らずなことだ」と騎兵隊長は叫んだ。

「あなたは怒るだろうと思っていました」と穏やかにフォン・ブラックヴィッツ夫人は言った。

「我慢ならんぞ」と騎兵隊長は更に強く叫んだ。

「ただあなたのためを思ってです」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は宥めた、「どこに手紙はある。私の手紙を寄越せ。私宛の手紙だ」と騎兵隊長は吠えた。

「その件はとうに片付きました」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は推測した。

「私宛の三週間前の手紙だ、 — 私は見ていない。ここでは誰が主人だ」と騎兵隊長は雷を落とした。

「あなたです」と夫人は言った。

「その通り、 — それをあいづに示したい」と彼は発したが、しかし一層弱くなっていた。もはやより大声で叫べなかったからである。彼はドアへ駆け寄った。「あいづは自惚れていやがる」。

「あなたはあなたの手紙を忘れていますよ」と夫人は思い出させた。

「どの手紙だ」。騎兵隊長は雷に打たれた如く立っていた。その一通の手紙の他に他の手紙は念頭になかった。

「そこのそれ、 — ベルリンからの」。

「あ、そうか」。騎兵隊長はそれをポケットに突っ込んだ。彼の妻が陰気に脅すように見つめているのを見て、言った。「こやつに電話なんかするなよ」。

「勿論です、ただそんなに興奮しないで。郎党が今にも来るに違いありません」。

「この郎党のことは、...」。

本当に教養ある男として、騎兵隊長は、この郎党をどう考えているか、夫人の部屋の外でようやく述べた。恵み深い夫人は微笑した。すぐその後、夫人は夫が、瘦せて長い肢体を力強く動かして、無帽のまま、荘園への道を突進して行くのを目にした。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は電話に近寄って、クラックを回し、尋ねた。「パーゲルさん、貴方ですか。すぐにフォン・シュトゥットマンさんと代わって頂けますか。有り難う。フォン・シュトゥットマンさんですか。私の夫が突進して来ます。電気の件の手紙を夫に見せなかったことで、猛烈に怒っています。少しばかり気の済むまで吠えさせてください。すでに最悪のことを私の許で発散しました。 — はい、勿論です。有り難うございます。 — いや、もう長いこと慣れていますから。それでは、よろしく、まずは感謝申し上げます」。

夫人は受話器を置いて、尋ねた。「ヴァイオ、何の用」。

「三十分散歩に行っていていい」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は自分の時計を見た。「十分後に私と一緒に宮殿へ行き

ましよう。郎党への料理が上手く行っているか見なきゃいけないから」。

「ママ、いつもただ宮殿なのね。また森へ行きたいの。森へ行っちゃ駄目。水泳はどう。四週間泳いでないの」。

「分かるでしょう、ヴィオレット、...」。極めて素っ気ない調子で、一 自分の心に反するものであった。

「私を苦しめてばかり、ママ。いつも私を虐めて。もう耐えられない。今私をこんなに鎖に繋いでおきたいのなら、早くから私に自由を与えてくれない方が良かった。囚人のようだよ。もう耐えられない。自分の部屋で気が狂いそう。時々、壁が全部私に落ちて来る夢を見るの。カーテンの紐を見ると、首を吊れそうか考える。それから窓から外に飛び出たい。窓ガラスをぶち壊して、自分の血が流れるか見てみたい。自分が生きていると感じるように、...。あなた方は皆、私には幽霊のよう。それに私まで幽霊のようで、うちらは皆正常に生きていないように思われる。一 でももう嫌、私は何かするわ。何をするかどうでもいい。そんなこと構やしない、...」。

「まあ、ヴァイオ、ヴァイオ」と母親は言った、「あなたが本当のことを言ってくれさえしたらいいのに。私どもは難しいことにはならないと思っているの？ でも嘘を言い続ける限り、他に仕様がありません、...」。

「ママ、ママだけよ。パパも言っていた。ママが大ごとにしてるって。パパは私が本当のことを話したと信じているのよ。余所の男の人はいなくて、森林官クニーブッシュだったと。皆私の言うことを信じているのに、一 ただママだけが信じない。ママはうちらを皆支配したいのよ、パパもそう言っている、...」。

「それでお仕舞いにしなさい」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は疲れて言った、「後で一緒に小一時間森へ行けるか考えましょう」。

「ママとは森へ行きたくない。監視人はいらぬ、...。教養ある会話なんてしたくない、...。ママに閉じ込められはしない。私はね、私は、ママが嫌い。もう見たくない、..もう私は、もう私は、...」。

それでまた始まった。叫び声がやって来た。それから再三窒息しては、叫び続ける嗚咽となって、それが結局大勢となって、彼女は身をよじり、身を投げ、一 痙攣して震える大声とめそめそ泣きの嘆きの束へと変わった。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は彼女を見つめた。夫人は固い心を持っていた。夫人は他の者達が泣くと、それだけでも泣かなかった。哀れな道に迷い、途方に暮れた子供への果てしない同情に包まれた。しかし夫人はこうも考えていた。嘘をついているわ。秘密を守る必要がなければ、こうものぼせはしないだろうに。

夫人は呼び鈴のボタンを押した。従者の足音を聞くと、夫人はドアを開けて、言った。「今は入らないで、フーベルト。アルムガルトかロッテを私の許へ呼んでください。一 令嬢の具合が悪い、と。...そう、それから私用に薬戸棚からホフマンの滴を持って来て」。

恵み深い奥方が穏やかにまたドアを閉める間に、夫人は悲しげに微笑した。夫人は従者と話していたとき、更にめそめそ泣きの涕泣に耳を傾けていた。夫人が従者に指示を与えると、その泣き声はより小さくなった。厭わしいホフマンの滴が注文されたとき、その泣き声はほとんど消えていた。

我が子よ、あなたの具合は悪いわね、とフォン・ブラックヴィッツ夫人は考えた。でも自分がどう処遇されるかに関心がないほどひどくはない。仕様がな。一方が折れるまで、私どもは辛抱しなければならない。あなたが折れたらいいけど。

93

パーゲルの解雇

騎兵隊長は事務所に突進して来た。

「やあ」とフォン・シュトゥットマンは言った、「急ぎの用と見える。郎党が来るのか」。

「この郎党のことは月の裏側に消えろだ[知ったことか]」と騎兵隊長は叫んだ。突進して来たので、新たに怒りの気分が噴出して来た、「私の手紙はどこだ。私は私の手紙を所望する」。

「そう叫ぶ必要はない」と冷静にシュトゥットマンは言った、「私の耳は相変わらず立派に機能している。何の手紙のことだ」。

「よう言ってくれるな」とより大声で騎兵隊長は叫んだ、「私の手紙が横取りされた。私は自分の意見すら言えないのか。私の手紙を出してくれ」。

「パーゲルさん、済まないが、窓を閉めてくれ。ノイローエ中に聞かれる必要はない、何を我々がここで、...」。

「パーゲル、窓は開けておけ。貴方は私の従業員だ。分かっておるか。どうしてもその手紙を見たい、一、三、四、五週間前ので、...」。

「そうか、あの手紙のことか、ブラックヴィッツ、...」。

「更にまだ横取りされた手紙があるのか、シュトゥットマン。私の妻と隠し事があるな」。ここで若い、軽率なパーゲルが笑いはじめた。

騎兵隊長は凝固して立っていた。最初彼は何のことか分からなかった。若いパーゲルが笑ったのであった。事務所では蚊の飛ぶ音さえ聞こえたであろう、それほど静かになった。

騎兵隊長は二歩大股でパーゲルに詰め寄った。「笑ったな、パーゲル殿、私が怒っているのに、笑ったな」。

「済みません、騎兵隊長殿、一、とても滑稽に聞こえましたので、...騎兵隊長殿を笑ったのではありません、一、ただとても滑稽に聞こえました、...シュトゥットマンさんが、恵み深い奥方と隠し事がと、...」。

「そうか、一、そうか」。冷たい視線が注がれ、上から下まで眺められた、「パーゲル殿、貴方は解雇だ。ハルティヒに三時の列車に駅まで送って貰え」。更に大きな声で、「抗弁ならん、いいかな。事務所を去るのだ。私はここで仕事の話がある」。

少しばかり青白くなって、それでも立派な挙措で若いパーゲルは事務所から出た。

フォン・シュトゥットマンは今や金庫に寄りかかり、苛立って、額に皺を寄せて、窓から外を眺めた。騎兵隊長は脇から彼を見つめていた、「全く生意気な若造だ」と彼は試すように歯ぎしりした、しかしシュトゥットマンは応じなかった。

「いい加減、私の手紙を出してくれ」と騎兵隊長は言った。

「その手紙はすでにフォン・テッシュォー殿に戻した」とフォン・シュトゥットマンは冷静に報告した、「枢密顧問官殿に、彼の要求は不当であると納得して貰った。顧問官は手

紙の返還を求めてきた。その件はなかったことにしたい、と、...」。

「そんなことだろうと思った」と騎兵隊長は辛辣に笑った、「シュトゥットマン、君はこの古狐に騙されたのだ。醜態を狐は見せた。その醜態の証拠を返したのか、惜しい」。

「顧問官殿との交渉は簡単ではなかった」とシュトゥットマンは言った、「いつものように顧問官はあの不吉な請負契約書を形式法律的に引き合いに出すのだ。彼が最終的に決意したのは、自分の評判、親戚関係を考慮してのことだ、...」。

「親戚関係だと、君は騙されたと思うぞ、シュトゥットマン」。

「いや、どうやら彼は娘や孫娘のことを大事にしているようだ。 — 万事が以前同様であるのに、どうして私が騙されよう」。

「私にはどうでもいいことだ」と騎兵隊長は反抗的に釈明した、「私はその手紙を読む必要があったろう」。

「私は全権委任されていると思っていたのだ。君ははっきり頼んだからな、君にとって不快なことは遠ざけてくれ、と」。

「いつ私がそんなことを頼んだかい」。

「田畑泥棒を取り押さえたときに、...」。

「シュトゥットマン、私がそんな些細な泥棒事に関知したくないからといって、私宛の手紙を見せなくてもよいことにはならんぞ」。

「分かった」とフォン・シュトゥットマンは言った、「二度としない」。彼は金庫に寄りかかって、冷静で、少しばかり控え目であったが、少しも無愛想ではなかった、「丁度キッチン[洗濯室]の料理関係を精査していたのだ。辻褄が合っているように見える。バックス嬢は実際有能だ」。

「あの囚人どもの立派な臭いを体験することになるだろうな。囚人らに頼みたくはなかったのだが、皆が一様に私に説得する。むしろベルリンの郎党の方が十倍好ましいのじゃないか。刈り手兵舎を頑丈な耐爆施設に改造する必要はなかったろうに。一切合切何という額だ。 — それにまたベルリンの奴等が厚かましく言ってきて。まあ、読んでみる」。

そして彼はポケットから手紙を取り出して、それをシュトゥットマンに渡した。シュトゥットマンは動じずにそれを読んで、ブラックヴィッツに渡して、言った。「ま、そんなことになるだろうと思っていた」。

「思っていたのだと」と騎兵隊長はほとんど叫んだ、「それを当たり前のことだと思えるのか。七百金マルクをそやつは、役立たずの者達のために要求している。火ばさみでも触りたくない連中だ。それを当たり前と言うのかい、シュトゥットマン、正気か、...」。

「内訳が記載されていて。一人につき十金マルクの斡旋手数料、それで六百マルク、一マルクの遅滞料、六十人分、他の費用が四十マルク、...」。

「しかし君は連中を見たろう、シュトゥットマン。連中は労働者ではなかった。乳飲み子と一緒に胴乱のために七百金マルク、 — いや、こやつには至急一通の手紙を書いてくれ、シュトゥットマン」。

「勿論だ、で私に何と書いて欲しいのだ」。

「しかし、シュトゥットマン、君自身が最も良く分かっているだろう」。

「この要求を突き返すのか」。

「勿論」。

「すべてかい」。

「一切合切、一ペニヒもこやつには払わん」。

「分かった」とシュトゥットマンは言った。

「了解しているのだろう」と騎兵隊長は邪推して尋ねた。

「私が了解していると言うのか。いや、全然。ブラックヴィッツ、君は裁判にきつと負ける」。

「裁判に負ける、…。しかしシュトゥットマン、あれは郎党ではない、農業者ではない、…」。

「ちょっと待った、ブラックヴィッツ、…」。

「いや、ちよつとも、シュトゥットマン、…」。

「頼む、…」。

フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、シュトゥットマンが、これはある和解に持ち込まなければならぬと最後に納得させたとき、この自分の友にまことに立腹していた。

「これはすべて、お金がかかるな、…」と彼は溜め息を吐いた。

「残念ながら今日は更に君にもっと金を頼まなければならぬぞ、…」とフォン・シュトゥットマン氏は言った。彼は帳簿に屈み込んでいて、急いで数字を記した。多くの零の並ぶ無限の数字であった。

「何の金だ。私は言うに足るものは何も持っていない。勘定には猶予があろう」と騎兵隊長は言った。すでにまた苛立っていた。

「君は若いパーゲルを解雇したから」とフォン・シュトゥットマン氏は言って、自分の数字と取り組んでいるように見えた、「君の賭博の借金を清算しなければならないだろう。計算し終わった。昨日のドル相場では、九百七十二億マルクになる。もうこう言っていい、千億マルク、と」。

「千億マルクだと」と騎兵隊長は息を呑んで、叫んだ、「千億マルク、一君は先ほど言ったな、ブラックヴィッツ、君にまた金を頼まなければならぬ、と、…」。彼はまた打ち切った。完全にうろたえていた。一それから全く別の調子で言った、「シュトゥットマン、おい、昔からの朋友よ。先からずっと、君は何か私に対して立腹していると感じているぞ」。

「私が君に腹を立てるのか。まさに君は、私に立腹しているように見えたぞ」。

騎兵隊長は聞き流した、「君はわざと私を厄介な目に遭わせているようだ」。

「私が一君を一厄介な目に」。

「なあ、シュトゥットマン、冷静に考えてくれ。どこから私はその金を手に入れられよう。まさに借り手兵舎の改築のために途方もない支出をしたばかりなのに、今度はこのベルリンの奴が七百金マルクを要求している。これも君の意見によれば出さなければならない。それにまたパーゲル、…。いや、親愛なるシュトゥットマン、私は金で出来ていない。私は君に誓って言えるが、私は紙幣印刷機を持たないし、造幣局も近くに持っていない。一文も絞り出せない。一それなのに君はこんな法外な要求をする。君のことが分からない、…」。

「ブラックヴィッツ」とシュトゥットマンは熱くなって言った、「ブラックヴィッツ、すぐにこの書き物機の安楽椅子に腰掛け給え。そうだ一良く座ったか。それでは、

ちょっと待ってくれ。すぐに見せたいものがある。パーゲルの部屋にあるか、見て来る、...」。

「何なのだ」と騎兵隊長は全く混乱して尋ねた。

しかしシュトゥットマンはすでにパーゲルの部屋に消えていた。騎兵隊長は、彼がそこで探し回る物音を耳にした。何なのだと彼は考えた。もう立ち上がるぞ、真面目な仕事の話なのに、彼は何か下らぬ事を始めた、...

「いや、座っていてくれ」と駆け寄りながら、シュトゥットマンは叫んだ。「今、見せてやる。ー これは何だ」。

少しばかり愚鈍に騎兵隊長は言った、「ひげ剃り用鏡だ。多分パーゲルのものだ。しかし一体全体、...」。

「待て、ブラックヴィッツ、鏡に誰が見える」。

「ま、私だ」、騎兵隊長は本当に見つめた。すべての男どもがするように彼は指を顎に持って行き、無精髭の微かな擦過音を耳にした。それからネクタイに触れた。ー 「しかし、...」。

「この、『私』は誰だ。君は誰だ」。

「まあ、そうだな、シュトゥットマン、...」。

「君は相変わらず分かっていないから、ブラックヴィッツ、私が君に言おう。君を鏡から見つめている男は、私が生涯の中で出会った最も商売に不慣れな、最も子供っぽい、最も金と世間に疎い男だ」。

「しかし言わせて貰えば」と騎兵隊長は尊厳を侮辱されて言った、「君の功績を確かに低く評価するつもりはない。しかしいずれにせよ、私はノイローエを実際、君が来るまでは立派に導いて来ていたのだ、...」。

「この人を見給え」と熱くなってシュトゥットマンは言った、「この件から一切侮辱的なものを消すために（というのは実際私が君の本当の友でなければ、ブラックヴィッツよ、この時間にも私は荷物をまとめて、ここから出て行くであろうからで）、それでこの例の殿方を鏡殿と呼ぶことにしよう。この鏡殿はまず、ベルリンに行って、郎党を雇った。この殿方は賭博地獄にはまった。彼の友の助言に逆らって、彼は賭博した。すっからかんになったとき、或る若者から二千マルクを借りて、これもすってしまった。この若者は鏡殿の従業員となった。この若者は礼儀正しくて、金のことで請求はしない。多分その金はとても入用なのであろう。というのは彼の煙草は日ごとに劣等なものになっていくからだ、ブラックヴィッツ。そこで鏡殿はこの若者を追い出して、自分が今や支払わなければならないと苦情を言っている」。

「しかしシュトゥットマン、彼は私のことを笑ったのだ、シュトゥットマン、少なくともこの忌々しい鏡は除けてくれ」。

「鏡殿」とシュトゥットマンは容赦なく続けて、鏡を持って、騎兵隊長の避けて行く頭を追った、「この鏡殿はベルリンで郎党を雇った。彼は幹旋者にはっきりと言った、どのような外見か全く構わない、何を学んだか全く構わない、と。しかし鏡殿は郎党を見ると、恐怖を覚えた。無理もない。しかし、さて幹旋者と和解を試みる代わりに、この鏡殿は交渉から逃れ、敵から逃れ、公の戦闘を恐れている、...」。

「シュトゥットマン」。

「...そして自分は今や支払わなければならないと世間を非難し、自分を非難しない」。

「シュトゥットマン、君に対して非難はしない。ただ私はその金をどこから持って来るのかと聞いているだけだ」。

「しかしそれは些事だ」とシュトゥットマンは鏡を下に置きながら言った、「まず重要なこと、不快なことが、迫っているのだ」。

「シュトゥットマン。いや、まず止めてくれ。午前中一杯私は腹立つことばかりだったのだ。その上郎党がすぐに来るに違いないし、...」。

「郎党のことは」とフォン・シュトゥットマンも精力的に言った、「知ったことじゃない。ブラックヴィッツ、今は良く聞け。君は言い訳しても、どう仕様もない。盲目の鶏のように世の中を駆け回るな」。シュトゥットマンは窓辺に寄って、叫んだ。「いや、恵み深い奥方、ちょっと中へいらっしゃいますか」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人はまず疑わしげにヴァイオを見て、それからフォン・シュトゥットマン氏を見つめた、「大事なことなのですか」。

「私の妻は全く余計だ」と騎兵隊長は抗議した。「妻はそもそも仕事のことは分からない」。

「ご夫人は君よりももっと分かっている」とシュトゥットマンは小声で返した、「いや、パーゲル、ちょっとばかり恵み深いご令嬢の相手をしてくれ。じゃ、どうぞ、ご夫人」。

少しばかり抗いながら、少しばかり疑わしげにフォン・ブラックヴィッツ夫人は事務所へ上がった。入口で今一度彼女は二人の連れを振り返った。

「恵み深い御令嬢をどちらへ案内しましょう」とパーゲルは尋ねた。

「そうね、ここの窓の前を少しばかり行き来してください」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は事務所へ入った。

94

パーゲルはヴァイオに接吻する

「貴女はひょっとして宮殿の大量料理を御覧になりたいと思われませんか」とパーゲルは尋ねた、「今、天手古舞いでしょう」。

「後でママと行く予定なの。誰が料理しているの」。

「バックス嬢とコヴァレフスキー嬢です」。

「アマンダについては分かるわ。でもゾフィーは囚人のために料理するなんて、情けないと思わないかしら」。

「今日日では誰もが少しばかり金を稼ぎます」。

「貴方は見たところそうではないわね。仕事時間にこの辺りを煙草吸いながら歩き回るなんて」とヴィオレットは喧嘩腰で言った。

「私の煙草が嫌ですか」とパーゲルは尋ねて、煙草を口から外した。

「私は全然構わない。煙草は好きよ。事務所の人々が私どものことを気にしなくなったら、後でちょっと公園をぶらつきましょ。そのとき一本ください」。

「すぐに行きましょ。それとも貴女のママが私を危険視して、貴女と一緒に公園へ行っちゃいけないと思われるでしょうか」。

「貴方は危険じゃない」とヴァイオは笑った、「危険じゃないけど、でも私は今軟禁状態なの」。

「それでは本来ママとだけ外出が許されているのですか」。

「何でも詮索するわね」と彼女は嘲笑的に叫んだ、「三週間前から辺り全体、私の軟禁状態について噂しているでしょう。貴方もご存じでしょう」。

しかしヴィオレットの苛立ちはパーゲルに何の印象も与えなかった。彼は満足して微笑し、尋ねた。「何故軟禁状態なのかお尋ねしてよろしいですか。とてもひどいことをしたのですか」。

「不躰な質問ですね」とヴァイオは上から目線で言った、「上品な男性は不躰に尋ねません」。

「私は、恵み深いご令嬢、とても上品な男性にはなれないでしょう」とパーゲルは悲しげに白状して、こっそり微笑しながらポケットの上を撫でた。「でも事務所の方々が今や本格的に話しているというご意見であれば、私どもは公園へずらかって、一本煙草を吸えます」。

「待つて」とヴァイオは言った。彼女は耳を澄ました。フォン・シュトゥットマン氏の声が平静に、しかし力強く聞こえた。そこへ騎兵隊長が素早く語って、何らかのことに苦情を述べながら、抗議した。そして今度はフォン・ブラックヴィッツ夫人がとてもきっぱりと、とても明確に、多くのことを話した。「ママは乗りかかった船よ、では出発」。

二人はライラックの茂みと金鎖[マメ科]の周りを曲がり、それからゆっくりと芝地の間の広い道を、本来の公園へと下りて行った。

「もうあの方々からは見えない。では煙草を一本下さいな。 — うわ、素敵なブランド品を吸われていますね、 — 幾らするの」。

「何百万マルクでしょう。同じものは続きません。毎日変わります。 — ちなみに私はそれを友人から、フォン・ツェッケ氏とかいう人から得ています。彼はハイダル＝パシヤに住んでいます。ハイダル＝パシヤはどこにあるかご存じですか」。

「何で私知っているわけ。私は餓鬼の教師になるのではありません」。

「勿論、そうですね、済みません、…。ハイダル＝パシヤはボスポラス海峡のアジア側にあります、…」。

「戯言は止めて、パーゲルさん、そんなのは関心ない。でも何故そんなにいつもにやにやしているの。貴方に会うといつもにやにや笑っているわ」。

「戦争での負傷のせいなのです、恵み深いご令嬢。中枢部の交感神経の負傷です、いや、これもまた関心ないですね。戦争神経症の者が震えるように、私はにやりと笑うのです」。

「私を小馬鹿にしているの」と彼女は怒って叫んだ、「貴方の腕で案内されたくありません、…」。

「しかし恵み深いご令嬢、本当なのです。戦時負傷です。私は泣かざるを得ないとき、笑って涙を流しているように見えます。 — そのため私は必ず、不愉快極まる状況に陥ります」。

「どこまで本気なのか分かりませんね」と彼女は不承不承述べた、「貴方のような男にはただむかつくわ」。

「その代わり私は危険ではありません。それがまた長所です。恵み深いご令嬢」。

「そうね、本当にそうね」とヴァイオは軽蔑して言った、「貴方がどんな振りをするか、本当に見てみたい、例えば、...」。

「例えば何です。仰有ってください、恵み深いご令嬢。それとも不安ですか」。

「貴方に不安を感じないでしょう。おかしなこと言わないで。つまりね、例えば貴方が一人の娘に接吻をしようとするとき、どんな振りをするかです」。

「そうですね、私にも分かりません」とパーゲルは情けなく白状した。「本当のことを言うと、恵み深いご令嬢、もう何千回もそれは考えたことがあります。でも私はとても内気で、それで、...」。

「何ですって」とヴァイオは尋ねて、彼を勝ち誇って見つめた、「貴方はまだ一人の娘にも接吻したことがないの」。

「百回ほど考えて来ましたが、誓って、恵み深いご令嬢、しかし勇気が、決定的瞬間のときに、...」。

「貴方は何歳」。

「もうすぐ二十四、...」。

「それでまだ一人の娘に接吻したことがないの」。

「申したでしょう、恵み深いご令嬢、内気なもので、...」。

「臆病ね」と彼女は深く蔑んで叫んだ。

しばらく両者は黙って、池に導く、高いシナノキの並木道を下りて行った。

それからまたパーゲルは慎重に始めた、「恵み深いご令嬢、質問してよろしいですか」。

無愛想に、「では言いなさい、 — 勇気を出して」。

「でも怒らないでしょうね」。

「質問は」。

「きっと怒りませんよね」。

はなはだ苛立って、「怒りません。質問をどうぞ」。

「それでは — 何歳ですか、貴女は、恵み深いご令嬢」。

「阿呆ね、 — 十六歳」。

「ほら、ご覧なさい、もう怒っている、 — それでようやく質問を始めます」。

憤然と地団駄を踏みながら、「じゃ始めなさい、 — くえない人」。

「やはりきっと怒らないでしょうね」。

「質問なさい、...!!!」。

「恵み深いご令嬢、 — 貴女はもう、 — 一人の男に接吻したことがありますか」。

「私がですか」と彼女は考え込んだ、「勿論、百回」。

「信じられません」。

「千回よ」。

「わっ、びっくり」。

「そうよ、 — 勿論パパに」、そして彼女は甲高い笑い声にはじけた。

「そうですか」とパーゲルは、彼女が落ち着くと最後に言った、「貴女も勇気がないのです」。

ヴァイオは怒った、「私に勇気がないと言うの」。

「そうです、私同様に臆病です」。

「でも私は一人の男に接吻したわ。パパだけじゃなく。若い男の人、勇気のある男の人」、
一 彼女の声は今やほとんど歌っていた、一 「貴方のような、ちんけな人じゃないのよ」。

「信じられません、...」。

「本当よ、...本当よ、...その人はそれどころか口髭もあって、小さなブロンドの剛毛で、刺すの。一 貴方には口髭もない」。

「そうですか」とパーゲルは悄然として言った、「それで貴女は本当にやっと十六歳なのですか、恵み深いご令嬢」。

「それどころか私は十五歳になったばかりよ」と彼女は勝ち誇って説明した。

「貴女はでも勇気がありますね」と彼は称賛して言った、「私にはとてもそんな勇気はありません、でも勿論」と彼は自らを慰めた、「貴女は一人の男に接吻したことはないでしょう。貴女はただ一人の男に接吻して貰っただけでしょう。これはやはり少し違います。男の人の頭を握って、接吻する、これはやはり出来ないでしょう」。

「私に出来ないなんて言うの」と彼女は目を燃やして叫んだ、「私のことを何と考えているの」。

彼は彼女の視線の前で目を下に向けた、「お許してください、恵み深いご令嬢、前言は取り消します。いや、いや、貴女は出来ましょう、信じます、...。お許してください、無理なさらしないで、...とても心配になります、...」。

しかし彼の嘆願は役に立たなかった。彼女の燃えるような目、彼女の半ば開いた口が彼の間近に来た。彼はたじたじとなって後ずさりしたが、今や彼女の口が彼の口に置かれた、...

しかし同じ瞬間ヴァイオは一つの変化を感じた。彼女の唇が彼に力を注入したかのようになり、彼女は彼の両腕の間に鉄のようにしっかりと抱かれた感触を得て、彼の唇が接吻に応じた。...今や彼女は彼から身を離したかったし、今や不安を覚えていた、...しかしこれらの唇の接吻は次第に熱くなり、更に彼女は抗い難くなり、そしてすでに屈服した感情に襲われた。まだ誇り高く上げられていた頭は従順になり、もたれかかった、...彼女の背中はおとなしくなり、彼女は彼の両腕に抱かれた、...

「まあ」と彼女は溜め息を吐いて、久しく枯れていた海[恍惚]の中へ沈んで行った。「まあ、あなた、...」。

しかし彼の腕はもはや彼女を支えず、彼は彼女を無情に大地に突き落とした。彼の顔がまた彼女の顔から遠ざかり、今や彼は真剣に見えた、もはや微笑はなかった、...

「恵み深いご令嬢、これが接吻です」とパーゲルは冷静に言った、「貴女のように弱い方は、男どもと戯れてはなりません」。

「貴方ははしたない」と頬を紅潮させて彼女は叫んだ。怒りと恥辱の間にあった、「このようなことは上品な男性はしません」。

「はしたないことでした」と彼は認めた、「しかし私は貴女のことを少し知る必要がありました。本当のことを貴女は仰有らなかつたでしょうから。今は分かっています。一

ここに」と彼はポケットに手を伸ばした、「手紙があります。或る手紙の写しで、事務所で見つけました。一冊の帳簿の中に隠されていて、貴女の手紙でしょう」。

「あら、古い、間抜けな手紙」と彼女は軽蔑して言った、「だからこんな芝居をしたの

ですね。その写しをするなんて、あのマイヤーは何と自惚れているのでしょうか。こんなにはしたなく私を騙さないで、さっさとそれを破いてしまえば良かったのに、...」。

パーゲルは、手紙を微塵に千切りながら、彼女を試すように見つめていた。「これでいい」と彼は言って、その小山を振って、それからポケットに収めた。「これは即刻燃やしてしまおう。 — しかし少なくともまだ一つの写しがこの世にあるはずです。それをこのマイヤー殿が貴女の父親に送ったら、 — どうなります」。

「そんなもの誰でもタイプして仕上げる事が出来ましょう」と彼女は叫んだ。

「確かに」と彼は認めた、「しかし貴女はすでに軟禁状態です。だからすでに一つの嫌疑が生じているように見えます。嫌疑がなければ、この写しはほとんど証拠にならないでしょう。しかし嫌疑がある場合となれば」。

「原物は私が持っています。私が何も認めなければ、誰も証拠を挙げられません」。

「しかし貴女を計略にかける者がいるでしょう」。

「私は引っかかりません」。

「貴女はすぐに私の計略にはまりました」。

「誰も貴方ほど陰険ではありません」。

「幼い御令嬢」とパーゲルは好意的に警告した、「これからは、丁度私が貴女に対して丁重に振る舞っていますように、貴女も私に対して丁重に振る舞うこと、これを申し合わせましょう。私が引き裂いたこの手紙のことは忘れることにしましょう。私が行ったこと、これは上等なことには見えません。しかし貴女の母上の許へ行って、告げ口をするよりはまだましでしょう。そうではありませんか。 — ひょっとしたらその必要があるかもしれませんが、私の好みではない、...」。

「そんなに勿体ぶらないでください」と彼女は嘲った、「貴方も恋文は書いたり、貰ったりしたことがあるでしょう」。しかし彼女の嘲笑には以前の力強さがもはやなかった。

「それはあります」と彼は平静に言った、「でも私はならず者ではありません。十五歳の上品な少女を誘惑したことはありません。 — こちらに来て」と彼は言って、彼女の腕を掴んだ、「貴女の母上の許へ行きましょう。きつともう心配しています」。

「パーゲルさん」と彼女は懇願して言い、更に歩もうとしなかった、「彼はならず者ではありません」。

「勿論、彼はならず者です。貴女も良く分かっているでしょう」。

「いいえ」と彼女は叫んで、涙と闘っていた、「何故皆が今こんなに私に対してひどいのでしょうか。以前は違ったのに」。

「誰が貴女に対してひどいのです」。

「それは、ママ、永遠に私を苦しめて。それにフーベルト、...」。

「フーベルトとは誰です。彼はフーベルトという名前ですか」。

「いいえ、私どもの従者です。フーベルト・レーダー、...」。

「その人はこの件を知っているのですか」。

「そうです」と彼女は泣きながら言った、「私の腕を離してください、パーゲルさん。腕が折れてしまう」。

「済みません、 — それではこの従者は貴女を苦しめているのですか」。

「そうです、...とてもはしたなく、...」。

「他に誰がこの件を知っていますか」。

「正確なことは誰も知りません」。

「検査官マイヤーも知りませんか」。

「いや、彼は知っています。でも旅立った」。

「では彼も知っているのですね、 — 他には」。

「森林官、 — でも彼も正確には何も知りません」。

「他に」。

「誰もいません、 — 確かです、パーゲルさん。そんな風に見つめないでください。貴方にすべてお話ししました。すべて正確に」。

「それでその従者が貴女を苦しめているのですか。どんな風にしてです」。

「彼ははしたなく、 — はしたないことを言うの。私の枕の下にはしたない本を差し込むの」。

「どんな本です」。

「よく知らないけど、 — 結婚生活についてとか、絵があって、...」。

「こちらに来なさい」とパーゲルは言って、再び彼女の腕を掴んだ、「勇気を出しなさい。これからご両親の許へ行って、すべてお話ししましょう。貴女は全くならず者どもの手中にあります。奴等が貴女を苦しめていて、貴女はにっちもさっちも行かなくなっています。 — きっとご両親は分かってくさるでしょう。今ご両親は貴女に怒っておられますが、ただ貴女が嘘をついていると感じているからです。...こちらに来て、恵み深いご令嬢、勇気を出しなさい、 — 私だって二人の間では臆病者ですから」。そして彼女を励まして微笑した。

「お願いします、親愛なるパーゲルさん。そんなことをなさらないでください」。彼女の顔は涙が溢れて来た。彼女は彼の両手を握った。あたかもひどい知らせを持って彼女の許から彼が走り去るかのようで、彼を撫でた、「貴方が私の両親に告げたら、私は誓って、溺死します。...何のために両親に話すのです。すべてが終わってしまいます」。

「すべてが終わるのですか」。

「そうです」と彼女は泣いた、「三週間前からもはや彼が現れないのです」。

彼は考え込んだ、熟慮した。

(不可避のことであったが、この瞬間、一人の、 — いや、消え去った、 — ペートルアの像が彼の眼前に浮かんだ。すでに何秒も前から、すでに彼が自分の唇の下にこの唇を感じ、愛の誘惑ではなく、快樂の誘惑に屈するこの肉体の弱さを感じていたからで、 — すぐにこの像が浮かんで来た。遠方であったが、しかし明瞭に、優しく、落ち着いて、ある顔が、当時のまま彼に挨拶した。彼は望んでいなかったが、しかし望むともなく、彼は絶えず比較せざるを得なかった。ペートルアだったらここでどう振る舞うだろう。彼女はこう言ったろうか。彼女はこうは振る舞わなかつたらう。...)

そして優しい遠方の顔が、千回も見つめられ、彼の許を去り、そして彼が去った娘の顔が、大事にされて育った、より高貴な娘の顔の上で勝利した。

その顔は勝利した、 — そして去ったこの女性のこの勝利から、警告のように、少なくともこの少女に優しくするよう、重荷をすべて背負わせないように告げられた。...(「あなたは私に厳しすぎましたから、またこの女性を同じ目に遭わせないでください」と聞こ

えた)。

彼は考え込み、熟慮した。彼女は彼の顔を窺っていた。

「彼の仕事は」と彼は尋ねた。

「少尉です」。

「帝国国防軍のですか」。

「はい」。

「貴女の両親は彼のことを知っていますか」。

「知らないと思います。詳しくは知りません」。

また彼は思案した。将校ではある、従って、彼が望むと望むまいと、一種の名誉ある枠組みにある男である、これはちょっとした安心材料だ。この若者が一度自らを忘れて、それからびっくりして身を引いたということであれば、多分そうひどい話しではない。何らかの無思慮、ひょっとしたら酩酊のせいかもしれない、— 反復の恐れはない。これは確認が必要であろう。自分は問わなければならない。彼は彼女を試すように見つめた。しかし若い娘に、一度事があったのか、結果は如何と聞けるものだろうか。

一度事があったのであれば、それは無思慮のせいであろう、と彼は考えた。何度か繰り返されたのであれば、それははしたないことだ。

その場合両親に告げる必要があるだろう。

彼は再び彼女を見つめた。いや自分はそのことを尋ねたくない。ひょっとしたら後に後悔することになるかもしれない。しかしやはり尋ねたくない。(再び遠くの像が現れた)。

「確かに終わった話しですか」と彼は今一度尋ねた。

「全く確かです」と彼女は請け合った。

「誓えますか」と彼は尋ねた。そのような誓いは無意味であると知っていたけれども。

「誓います」。

彼は居心地の悪い思いを抱いた。何らかのことが符号しない。何らかの点で彼女は彼に嘘をついているに違いない。

「私が黙っているべきなのであれば、貴女は一つだけ私に約束しなければなりません、誓ってです」。

「はい、喜んで、...」。

「この殿方、— 少尉がまた貴女に向かって来ることがあったら、すぐその知らせをください。約束しますか。手を下さい」。

「誓います」と彼女は言って、彼に手を差し出した。

「では了解。行きましょう。では何か口実を設けて、今晚できるだけ遅く、従者のレーダーを私の許まで送り出してください」。

「すごい」と彼女は夢中になって叫んだ、「彼をどうするの」。

「その若者に悲鳴を上げて貰いましょう」と彼は激怒して言った、「二度と貴女を苦しめないように」。

「パパの許に彼が駆け込んだら」。

「その危険性はあります。しかしパパの許へは行かないでしょう。恐怖心を植え付けて、その気が失せるようにします。脅す者はいつも臆病なものです」。

「事務所の方々がまだ話しているか、聞いてみましょう。あら、私はきつとひどい顔に

なっているわ。すぐ貴方のハンカチを下さいな。私のはなくしたに違いない。 — いや、一つも入れて来なかった。貴方に二度と嘘をつきません。些細な事ですら嘘は言いません。まあ、貴方は何て人でしょう。こんな人とは思わなかった。惚れた人が私にいなかったら、即刻私は貴方に惚れたことでしょう」。

「この件は決まりました、恵み深いご令嬢」とパーゲルは素っ気なく言った、「どうぞ忘れないでください。貴女は誓ったのですから」。

「勿論です、それで貴方は、...」。

パーゲルは両肩をすくめた。「親愛なる、恵み深いご令嬢」と彼は言った、「強引に泥の中へ進もうという人は誰も救えません。本当に冗談じゃない気がします。 — それで、窓の下に姿を見せることにしましょう。向こうの議論は実際果てしなく見えます」。

95

シュトゥットマンは請負契約を説明する

「恵み深い奥方」とフォン・シュトゥットマンは言って、フォン・ブラックヴィッツ夫人に、騎兵隊長が自分の妻のために喜んで空けた書き物机用椅子を差し出した。「お呼びして済みません。しかしここで話し合いをしまして、貴女の同席が必要なのです。つまり金のことについて話しています、...」。

「本当ですか」とエーファ夫人は言って、ひげ剃り鏡を取り、吟味するように自らの姿を見つめた、「それは勿論私にとっては全く目新しいテーマです。アヒムはそれについてほぼ毎日話していますが、...」。

「エーファ、そんな」と騎兵隊長は叫んだ。

「それで何故私の友のブラックヴィッツは、毎日金のことを話しているのか。一文もないからです。ほんの些細な勘定でも彼は興奮するのです。十月一日の請負支払いが悪夢の如く彼にのしかかっているのです。それが出来るか、いつも考えているからです、...」。

「その通り、シュトゥットマン、まさに心配している。私は用意周到な商人なのだ、...」。

「一度君の経済状況を確認してみよう。君は貯えがない。当座の支出は、当座の収入から支払われる、つまり家畜の売却、早生ジャガイモの売却、収穫からで、...貯えがない、...」。

シュトゥットマンは憂わしげに鼻をこすった。恵み深い奥方は鏡を見ていた。騎兵隊長は暖炉に寄りかかって、退屈していたが、しかし切に、シュトゥットマンが、「この永遠の子守娘」が、少なくとも上手に差配して、賭博の借金から始めないことを切に願っていた。

「それで十月一日がやって来る」とフォン・シュトゥットマンは言った。相変わらず物思いに耽っていた、「この十月一日に年間請負が現金で枢密顧問官フォン・テッショー殿のテーブルに置かれなければならない。年間請負の額は周知のように、三千ツェントナーのライ麦である。私が教えられている限り、一ツェントナー当たり値段七から八金マルク相当なのであれば、これはおよそ二万から二万五千金マルクとなろう。百万とか十億マルクでは言い得ない。ライ麦の値段は十月一日紙幣マルクで幾らになるか分からないし、そのことだけでも言い得ない、...」。

フォン・シュトゥットマンは自分の犠牲者達を憂わしげに見つめていた。しかし彼らは

まだ何も気付かなかった。

それで騎兵隊長は言った、「君がこうしたことすべてと取り組んでいることは、感謝申し上げます、シュトゥットマン。しかしそうした事柄は、一 済まんが、一 周知のことだ。請負は若干高いが、しかし全く上等の収穫が外に控えているし、今や郎党が来るわけで、...」。

「許してくれ、ブラックヴィッツ」とシュトゥットマンは遮った、「君は問題がまだ分かっていない。君は十月一日にフォン・テッショー氏に三千ツェントナーのライ麦の値を渡すことになっている。金マルクは虚構の概念だから、紙幣マルクで、十月一日のライ麦の値段というわけで、...」。

「すべて承知している、親愛なるシュトゥットマン、私は知っている、...」。

「しかし君は」と仮借なくシュトゥットマンは続けた、「一日に三千ツェントナーのライ麦を商人に引き渡せないよな。君の作業日誌から判断すると、それにはおよそ二週間必要とする。それで、君は九月二十日に三百ツェントナーのライ麦を引き渡すとしよう。商人は君に、まあ仮定して、三千億マルク支払うとする。君は十月一日の支払い用に、君の金庫に三千億マルク入れる。九月二十日から三十日までの期間、マルクが下がり続ける、最近経験した具合にな。九月三十日の三百ツェントナー分として、君は商人から、六千億マルク貰うと仮定しよう。すると君の金庫の三千億マルクはわずか百五十ツェントナーのライ麦分の価値でしかないことになる。君は今一度百五十ツェントナー分追加しなければならぬだろう、...。分かるかい」。

「済まんが」と騎兵隊長は混乱して言った、「どういうことだ。三百ツェントナーが突然わずか百五十ツェントナーとなって、...」。

「フォン・シュトゥットマンさんの仰有る通りです」と元気にフォン・ブラックヴィッツ夫人は叫んだ、「でも恐ろしいことです。誰もやって行けません」。

「それは二週間のインフレ競争のせいだ」とフォン・シュトゥットマン氏は言った、「それで我々は息が出来なくなるであろう」。

「しかしインフレがいつもそう進行するものではないだろう」と騎兵隊長は怒って叫んだ。

「そうだ、勿論そうだ。しかし分からないことだ。多くのことが関連し合っている。ルール地方でのフランス人の姿勢、ルール闘争をどんな状況下でも貫こうとする現政権の頑固さ、つまり金が次々に入用というわけで、それに今なおフランスのルールでの冒険に反対しているイギリスとイタリアの姿勢、これらが関連している。つまり我々が関与し得ない千もの事柄にかかっている。一 しかしいずれにせよ、我々は十月一日に払わなければならない」。

「それはできるでしょう、フォン・シュトゥットマンさん」。

「できます、恵み深い奥方」

「ほら見ろ」と騎兵隊長は半ば笑いながら、半ば苛立って叫んだ、「我らの親愛なるシュトゥットマンよ、まずは我らを不安がらせて、今や救いの手を差し出している」。

「つまりだ」とシュトゥットマンは全く動じずに言った、「マルクの底なしの落下を信じている者達、所謂思惑売りをする者達がいるのだ。彼らはすでに今日でも君の穀粒を買い上げる用意がある。ブラックヴィッツよ、十月一日支払いで、十月から十一月まで引き

渡しだ、...私は二、三の申し出を得ている、...」。

「その仲間は私の穀粒で異教徒の金を儲けるのであろう」と騎兵隊長は苦々しく叫んだ。

「でもパパに請負料を期日厳守で正確に払えるのよ、アヒム。それが大事なのでしょう」。

「シュトゥットマン、その紙屑を渡してくれ」とブラックヴィッツは鬱々と言った、「まあ、目を通しておこう。そう急ぐことではあるまい。いずれにせよ、君にはとても感謝している、...」。

「二番目の疑問はこれだ」とフォン・シュトゥットマンは始めた、「そもそも請負料を支払う意味があるかだ、...」。

彼は黙った、そして兩人を見つめた。びっくり仰天しているな、と彼は考えた。子供のようだ、...

「でもどうして」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は混乱して尋ねた、「パパは金が必要でしょうもの」。

「また何を考え出したのだ、シュトゥットマン」と騎兵隊長はとても苛立って抗弁した、「その他には何の厄介事もないかのようだ。いたずらに厄介事を考え出してくれる」。

「契約に書かれているのでしょうか」とまたフォン・ブラックヴィッツ夫人が叫んだ、「期日厳守で完全に支払われなければ、即刻請負は解約される、と」。

「私は自分の責務を果たすぞ」と騎兵隊長は鉄の意志を表明した。

「君ができるものならばな」とフォン・シュトゥットマン氏は述べた。そしてより熱くなって言った、「よく聞くん、ブラックヴィッツ。遮ってくれるな。貴女も聞いてください。少しばかり辛いことです。貴女の父上殿について話さなければなりません、...それでは請負人雇用者と請負人について話そう。君にも若干辛辣なことになる、親愛なるブラックヴィッツ、請負人の君にとってもな、...」。

この請負契約を調べるのは面白くないこともない。これを深く調べると、ベルサイユ条約を思い出す。この条約にはこう銘が記されている。『被征服者は地獄に墮ちろ』と。この請負契約にはこう記されている、『請負人に災いあれ』と」。

「私の父が、...」。

「請負人雇用者です、恵み深い奥方、ただ請負人雇用者です。私はすべてのこの些細な卑怯な規定、破局に至り得る規定について話したくありません。電気の件で私の目が開きました。親愛なるブラックヴィッツよ、私がいなかったら、君はすでにこの些細な件で墜落していたことであろう。これで墜落する定めだったのだ。しかし私がい、敵は退いた。敵は君が、請負支払いで倒れるのを待っている。そして君は倒れることになろう、...」。

「私の義父が、...」。

「私の父が、...」。

「請負人雇用者は」とフォン・シュトゥットマンは強い声で語った、「請負価格を一モルゲンにつき一・五ツェントナーのライ麦と定めています。第一の疑問は、これは受容できる請負かということです[大体一ツェントナー、百ポンド]」。

「ひょっとしたら少しばかり高いかもしれん、...」と騎兵隊長はまず始めた。

「こちらの近辺の国家直営領では一モルゲンにつき六十ポンドのライ麦を支払います。君はそのはるか二倍以上を支払う。そして注意すべきは、直営領請負人は最後の四半期支払日にただ分割払いをすればいいのであって、次の支払日には多分何も支払わないのであ

る。彼らはそうしたからといって、請負を解約されない。しかし君は、期限厳守で、完全に支払わなければ、分かっているだろう、君の奥方もそのことをまさに述べていた、...」。

「ビルンバウムの私の弟は、...」。

「その通りです、恵み深い奥方、貴女のビルンバウムの弟君は至る所で呻きながら語っているように、この請負人雇用者に同じ請負料を支払っています。しかし一方の子供にとって適法なことが、別の子供にとっては、高すぎるのです。つまり至る所でこう言われています。貴女の弟君は現実には単に九十ポンド支払っていて、しかし父上にこう約束されているのです。ただ百五十ポンドと世間には話すように、と。何故彼がこうしているかという、...」。

「親愛なるシュトゥットマン、それはペテンのようなものだ、君に確かめたいが、...」。

「私の弟は、...私の父は、...」。

「この請負額をまことに高いと言うことが出来るとすれば、いずれにせよ、ノイローエは立派な莊園であって、通常ないような高い額でさえ正当なものに見なされるのであると言えよう。そこで私はこの事務所で調べたが」とフォン・シュトゥットマン氏は言って、真剣な、不同意の視線を書架に泳がせた、「手本となる例を見いだせなかった。いや、済まない、ブラックヴィッツ。しかし一例あれば規範となろう。君の前任者の時代からの帳簿はもはやなくて、以前のノイローエの収穫について説明を得られるようなものは何もない。しかし結局別の方法が残っている。代官は脱穀量リストを作っていて、税務局には記録があり、証人達は仕入れの帳簿を作っている。 — そこで若干苦勞して、結局こういう結論に達した、つまりノイローエは以前の時代も単に一モルゲンにつき五から六ツェントナーのライ麦平均収穫しかなかった、と、...」。

「余りに低すぎるのではないか、シュトゥットマン」と騎兵隊長は勝ち誇って叫んだ、「君は農業主でもないのに、...」。

「私は — 請負人雇用者にかまかけてみたのだ。彼は何故私が尋ねるのか分かっていなかった。彼は少しばかり私を騙そうとした。彼も君同様、私は農業主ではないと思っていたのだ。...しかし私は計算のできる男だ。騙されたのは相手の方、フォン・テッシュォー殿だ。請負人雇用者は意志に反して、私にこう証したのだ。五から六ツェントナーの平均収穫、それ以上は想定できない。外部圃場区はまさに砂が多い、と請負人雇用主は言っていた」。

「それでは私が支払っているのは、...」騎兵隊長は狼狽して語った。

「その通り」と妥協せずシュトゥットマンは言った、「君は君の粗収穫の二十五%から三十%を払っている。これは多分耐えられないものだ。 — 貴女が思い出されるのであれば、恵み深い奥方」とフォン・シュトゥットマン氏は好意的に説明した、「当時、中世において、百姓達は土地領主に対して『十分の一税』を、つまりその粗収穫の十分の一を支払っていました。これは耐えられないことで、結局百姓達は怒って、領主達を殴り殺しました。貴女の夫君は、十分の一税ではなく、いや、四分の一税を支払っています。 — しかしやはり殺害は推奨しません」。

フォン・シュトゥットマン氏は微笑した。彼は幸せであった。子守娘は教育できるし、教師は啓発してよしい。 — 彼はそのことを喜ぶ余り、聞き手の絶望をすっかり失念していた。玩具が失われた子供は、失わずに済む方法を教えられても、さほど嬉しくない

のである。

「でも私どもはどうしたらいいのでしょうか」と恵み深い夫人は単調に囁いた、「何を始めたらいいのでしょうか」。

「義父はきっとこの件について何も知らないのであろう」と騎兵隊長は言った、「一度伝えておく必要があろう、シュトゥットマン。君は器用で、冷静だし、...」。

「ビルンバウムの息子へは沈黙の指令を出している」。

騎兵隊長は黙った。

新たにフォン・シュトゥットマン氏は始めた、「これまで金儲けの上手な請負人雇用者はずっと信用されてきた。余りに上手く、若干貪欲だと。そうだろう。しかし残念ながら、更に悪いことに、...」。

「止めてくれ、フォン・シュトゥットマン殿。もう本当に十分だ」。

「いや、聞き給え、...」。

「すべて知る必要がある。さもないと間違った対応となる。ライ麦請負は三千ツェントナーに達する、一モルゲンにつき、一・五ツェントナーだ、一これは二千モルゲンの荘園の広さに相当する。実際請負契約でも荘園はそれほどの広さと見なされている、...」。

「これもまた合わないのか」。

「ノイローエは二千モルゲンの広さだと私はいつも聞かされてきました、すでに随分前から」と恵み深い奥方は言った。

「実際それは正しい、ノイローエは二千モルゲンの広さだ」とフォン・シュトゥットマンは肯った。

「だろう」とほっと息をして騎兵隊長は叫んだ。

「ノイローエは二千モルゲンの広さだ、一しかし君が耕す平地はいかほどだ、ブラックヴィッツ。二千モルゲンの中から道や不毛の地が分岐している、畦や、圃場区への水路、石の山がある。二、三の以前の耕作地があって、唐檜が植林されている、一そこからクリスマスの木を取って来るんだらう、ブラックヴィッツ。森林の所有者に断る必要もなく、...」。

「ま、些細なことだ、低木林の角地だ、...」。

「しかし更に分岐している、巨大な農園広場、郎党の家々、ここには官吏の家があって、庭付きの君の別荘、更に分岐して、一宮殿と公園だ。親愛なるブラックヴィッツ、君の義父に彼の住んでいる家の分のライ麦を請け負っている」。

「私が請け負うのであれば、私は悪魔にさらわれろだ」と騎兵隊長は叫んだ。

「静かに、静かに、一それが君にとって、すべての厄介事から逃れる快適な方法ではあろう。君はそうすればいいだろう。沃野の地図を計算すると、実際に利用されている土地の広さは千五百モルゲンをわずかに越えるところだろう。それで君は現実には二ツェントナー[一・五×二千÷千五百]ライ麦請負を支払っているわけだ」。

「この契約では争うぞ。奴を訴える」と騎兵隊長は叫んで、そのまま間近の裁判所までドアから出発しかねないように見えた。

「まあ、アヒム」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は嘆いた。

「座り給え」とフォン・シュトゥットマン氏は叫んだ、「今すべて分かったらう。これから我々は罪人のことで陪審席に座ることにしよう。つまり君のことだ。静かに、ブラッ

クヴィッツ。どうして君はこんなひどい契約に署名ができたのだ。ちなみに貴女も一緒に署名されたのでしょうか、恵み深い奥方。 — さあ、話して、ブラックヴィッツ。話して貰おう。

「こんなに下劣に騙されるとは思いもしない、 — 親戚の間で」と騎兵隊長は不機嫌に叫んだ、「私は私の義父がせこくて、カノコソウを求める雄猫のように金を窺っていると承知していた。しかし彼が自身の娘の首を切るとは、いや、シュトゥットマン、今でも信じられない、...」。

「フォン・テッシュー殿は愚かな人ではない」とフォン・シュトゥットマン氏は述べた。「彼はこのような契約を作ったとき、これは実現できないと承知していたのだ。彼はしかしある意図があったに違いない。 — ブラックヴィッツ、それについて何か思い当たることはないか。恵み深い奥方、貴女の見解もお願いします、...」。

「私の父の考えは分かりません、...」とエーファ夫人は言った。しかしシュトゥットマンの吟味するような視線で赤くなった。

「私は何もかも投げ出してやる」と騎兵隊長は叫んだ、「裁判所へ行くぞ、...」。

「第十七条項によれば、契約の一つの規定に対してどんな異論が出されても、契約関係は解消されるとある。君が訴えを起こしたら、すでに君は請負人ではなくなるのだ、 — 契約はどのようにして生じたのか。これは新しいものだ。君はこちらでもっと長く農業経営をしているのだが、...」。

「いや、皆古くさい話だ。これとは全く関係ない。私がバルト三国から戻って来たとき、我々は何も持たなかった。私は年金を得られないことになった。国賊のようなものだったからな。我々はまずこちらに『外様』として潜り込んだ。私は何もすることがなかった。義父殿と田畑を駆け回って、手伝いをした、 — 懸命にあくせく働いた。当時は楽しかったものだ。それである日彼が言った。『私は老いた。現状のままこの荒蕪を引き受けてくれ。いつかすべてエーファが継承するだろう』と。それでまさに一人で農業経営を始めたのだ、...」。

「何の契約もなしにか」。

「そうだ、契約なしだ」。

「請負料はどうしたのだ」。

「何も決まりはなかった。彼が金を必要とするとき、私は彼に渡した、手持ちがあるときはな。何もないときは、待っていていた」。

「その後は」。

「そうだな、 — ある日彼が言った、『それでは一つ契約を作ろう』。それで我々はこの破廉恥な契約を作ったのだ。私はそれにはまっている」。

「単純に『契約を作る』と言われたのか。 — 何かあったに違いないだろう」。

「何も起きていない」と素早く騎兵隊長は叫んだ。「私はその時、何も考えなかった」。

「何か腑に落ちないな」とシュトゥットマンは固執した、「それで恵み深い奥方は」。彼女はすでにまた赤くなっていた。「ねえ、アヒム」と彼女は躊躇いながら言った、「話しましょうよ、その方がいいでしょう、...」。

「いや、昔の話だ」と騎兵隊長は恨んで言った、「シュトゥットマン、根掘り葉掘り聞くな。更に知ったところで、何の役に立とう、 — それで契約が変わるわけではない」。

「恵み深い奥方」とシュトゥットマンは頼んだ。

「契約のことが生ずる前、しばらく」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は小声で言った、「アヒムと私は喧嘩しました。妬けるなとまたこの人は思い始めているわと、...」。

「頼む、エーファ、おかしなことを言うな」。

「でも、アヒム、そうだったでしょう。貴方は貴方の友のことをご存じです。私も彼のことは分かっています。この人はすぐにかっとなります。すぐ喧嘩して、世も終わりかという按配です。離婚の不義密通のと騒いで、一 まあ、聞いていて嫌なものです。でもほとんど二十年間慣れました。そして、本当は特に何も考えていないと分かっています、...」。

「親愛なるエーファ」と頑なに威儀を正して、騎兵隊長は語った、「そんな風に私のことを話すつもりなら、この事務所から出て行く」。しかし彼はドアの許で立ち止まっていた、「それに私の言う通りだったのだ。トルフゼスとのいちゃつきは、...」。

「...昔のことだろう」とシュトゥットマンは急いで遮った、「また座ってくれ、ブラックヴィッツ。ここでは君の金のことを話し合っているんだ、...」。

「これらの話しはもう何も聞きたくない」と脅して、騎兵隊長は叫び、それでも座った。

「更に、恵み深い奥方」とフォン・シュトゥットマンは頼んだ、「それではちょっとした夫婦間の話し合いがあったのですか」。

「はい、それで残念ながら私の父も耳にしたのです。アヒムは私を苦しめて、虐待している、と、...」。

「笑止なことを」と騎兵隊長は不平を言った、「私は一番平静な、争いを好まない人間だ、...」。

「何週間も私の耳に囁きました、アヒムとは離婚するように、...」。

「何だって」と騎兵隊長は叫んで、一気に飛び上がった、「それは初耳だ。私から別れるという話なのか」。

「座り給え、ブラックヴィッツ」とシュトゥットマンは警告した、「君の言うように、全く古い話だ。君の妻は離婚していない、...」。

「そうです、パパは、私にその気がないと分かりました。父は思われている以上にはるかに私を大事にしています」。彼女は再びとても赤くなった、「それで、結局このような契約になったのです」。

「それで、契約が分かりました」とフォン・シュトゥットマン氏は言って、実際とても満足していた、「君も分かったろう、ブラックヴィッツ。そしてどう振る舞わなければならないか、分かったろう。一 娘の夫の神経を傷めてやろう、我慢ならなくさせ、農業経営の破産に導いてやろう、無能力をさらけ出させて、借財の山を築かせよう、...」。

「その全体が言うところの義父だ」と騎兵隊長は怒って叫んだ、「今まで好きになれなかったが、しかしいつもこう考えていたものだ。結局は彼なりに全く良い奴なのだ、と」。

「親愛なるブラックヴィッツ」と若干辛辣にシュトゥットマンは言った、「大方人々は、ただ自分達にとって最も都合が良い場合、それで相手を良い人と見なすものだ。一 しかしこれから君が自重せずに、君の義父に君の承知していることを気付かせようものなら、君はもう終わりだ」。

「それは論外だ」と騎兵隊長は怒って叫んだ、「私は自分の意見を告げてやる。彼のこ

とを思い浮かべるだけで、もう目が赤くなる」。

「だから、彼を遠くに見かけたら、ただ引き返すことだ、ブラックヴィッツ。君の妻を愛し給え、自重するのだ。喚かない、喧嘩を始めない、挑発に乗らないと約束してくれ。逃げて、こう言うのだ、フォン・シュトゥットマン殿、これを — 仕上げてくれ。このことは君が頭に来るよりも、君の義父にとってははるかに嫌なことだ、 — 彼はまさに頭に来ることを望んでいる」。

「私は激怒しない」と騎兵隊長は侮辱を感じて言った、「七面鳥は激怒するが、 — 私は七面鳥ではない」。

「では約束してくれるな、 — 結構、素晴らしい。これからは君の収穫を放り出さないだろう、...」。

「収穫を彼に渡さなければならないとなると、...」。

「私に任せろ。私に仕事のことはすべて任せろ。きっと方策が見つかる。これから初めて君は得ることになるぞ、沢山の金を。君の仕事の結果だ、 — それから、冬になったらどうするか、そのうち検討しよう、...」。

「フォン・シュトゥットマンさんの言う通りです」と熱く、フォン・ブラックヴィッツ夫人は言った、「請負を放棄したら、間違いということになりましょう。彼にすべてを任せて、...」。

「ま、私はほんに間抜けだな」と騎兵隊長はぼやいた、「こちらは一人前の男だ、シュトゥットマンは。三週間で、三年間の私よりも良く分かっている。私は、...」。

「郎党が来るわ」とヴァイオが事務所の中へ駆け込んで来た。

よりゆっくりと彼女の後、パーゲルが来た。

「そうか」と騎兵隊長は言った、厭わしい事務所を離れることが出来て、喜んでいた。「やっと来たか。またしても厄介事になろうと考えていた。親愛なるパーゲルよ、まあちょっと、奴等がすぐ食事にありつけるよう、また作業道具がきちんと配布されるよう、等々のことを配慮してくれ。今日の午後は田畑に行かんでもよろしい、...」。

パーゲルは自分の上司を明るい目で好意的に見つめた、「分かりました、騎兵隊長殿」。彼は踵を合わせて、事務所を去った。

「しかしブラックヴィッツ、どうしたのだ」とシュトゥットマンは叫んだ、「パーゲルを君は解雇したのだろうか、三時には駅から出発と」。

「パーゲルを解雇したか。いや、馬鹿なことを言うな、シュトゥットマン。分かるだろう、あの若者は私のことをちゃんと理解している。若い犬が生意気なときは、きちんと雷が落ちるのだ、 — それでお仕舞い。私は根に持つことはない」。

「そうだな、君は持たない」とシュトゥットマンは言った、「それでは、ま、郎党を見ることにしよう。五十人の囚人の群れはどんなものか、興味があるな」。

いや、彼らがやって来た。

マイエンブルク・オスターデ方面への国道がノイローエへ向かう所で、彼らは出現した。

四列になって、それぞれの四つの列の側に、一人の巡査がいた、 — そして彼らは大声で歌っていた。この世で最も素晴らしい場所、両親の眠る墓の歌を高らかに気持ちを込めて歌っていた。

「まあ、その上歌まで歌っている」と宮殿の窓辺でベリンデ・フォン・テッショー夫人は女友達のユッタに呻いた、「私の上品なキッチン[洗濯室]で、殺人者どものために食事を作った上に、更に彼らのわめき声まで聞かなければならないなんて。エリアス、枢密顧問官殿に伝えなさい、一度私の許までお越しあれ、と。歌っている殺人者どもなんて、 — 前代未聞だわ」。

「やって来る、やって来る」と村の子供達が叫んだ。そして田畑の仕事に出ていない者達は、立っているものを、避けたり、倒したりしながら、道端に立って、凝視した、そしてすべての肉体の開口部と共に[目や口を開けて]凝視した。

監獄の当局はケチケチしていなかった。ひどい時代にもかかわらず、彼らは囚人達に新しい服を着せていた。使い古しの、継ぎ当てが次々に見える制服ではなく、背の高い者にとって脹ら脛の半ばまでしか届かないズボンでもなく、背の低い者にとって溺死しかねない上着でもなかった。 — 彼らの服は、明るく、清潔で、丈夫で、サイズが合っていた。誇り高く彼らは今や彼らの歌を歌っていた、「我らは粹で、悪漢の軽騎兵」。

村の通りの人々はますます口をぼかんと開けていた。いつも聞かされていた、丸刈りの頭はどこにあるのだ。身に付けさせられるという鎖や手錠はどこにあるのだ。陰気な気の滅入る沈黙はどこだ。邪悪な赤く血走った視線はどこだ。カインの印もないし、動物の頭でもない、赤毛もない。 — 「母さん、そんなに長く口を開けていたから、いい加減また閉めなよ」と一人の者が叫び、皆が笑った。

いや、ノイローエは余りに期待していた。ノイローエは、いずれにせよ、若干全く別様に期待していた。行軍して来た者達は、あらゆる年齢の一群の男達で、背の高いのや、低い、太ったのや、痩せたの、可愛い者達や、どうでも良い者達、醜い者達であって、 — 今や彼らは皆、上機嫌であった。鉄とガラス、セメントからなる荒涼たる死んだ壁の強制から逃れて、世の中と再会できて幸せであった。それは自由な世界の全体であって、房の窓からの単に小さな、自分達にはまだ禁じられている切り口部分ではなかった。新鮮な空気に触れて、新鮮な気分になっていて、太陽に温められて、もはや永遠に単調な灰色世界、来る日も来る日も同じなのではなかった。 — 新しい仕事があり、別のメニューで、肉に煙草、それに眺めがあり、すでに若い娘達を眺め、一人の女性は、小麦粉桶に入れていた剥き出しの腕の上に今急いで袖を下ろしているのがあった。

彼らは歌った。

「我らは悪魔の軽騎兵、
どんな戦にも臆したことがない、
ひどい悪行を犯してきたが、
熱い恋もまた知った」。

そして巡査達も微笑していた。巡査達も施設を離れることができ喜んでいて。便器を持っての眠りたくなる公務、永遠の勾引に、絶えざる諍い、不平不満、苦情、そして反抗や突発事故、反乱への終わることのない憂慮から解放されていた。郎党は十分に食べ物や煙草を得られるであろう、彼らは穏やかであろう、馬鹿騒ぎをしないだろう、 — もっ

とも完全に大丈夫とは決して言えないのであるが。

巡査達はほとんど好意的に自分達の若者を眺めていた。彼らが自分達の生涯の労働時間のすべてを注いできた郎党であった。この役人達は、絶望や憎悪や無関心のすべての感情階梯を経験していて、自分達の囚人を愛する境地にほぼ至っていた。囚人達は清潔に見え、身を包む新しい服を着用して、小粋に見え、とても陽気になっていて、満足して歌っていた。 — 「巡査殿、兎を見ましたか」。 — 「巡査殿、ずっと歩くと腹が減ります、 — 今日の日、私は三杯頂きます」、 — 「巡査殿、今日の日は何でしょう、 — 鷲鳥の焼き肉ですか」。

まことに子供のような。いや、巡査達は内情を知っていた。勿論囚人の中に殺人者はいなかった。分遣隊にはそもそも長期刑のものはいない。四年というのは長い方であった。大方は短期刑の者達で、皆すでに刑期の半分を終えていた、いやほとんど刑期を終えていた。彼らの中に重大な刑の若者はいなかった。ペテン師の大物もいなかった、 — しかしそれでも、歌や陽気さにもかかわらず、彼らはやはり囚人であって、つまり自由を奪われた人々であり、彼らの多くが、この自由を再び得るためには、何でも、いや、ほぼ何でもするであろう人々であった。役人達は好意的にこの囚人達を眺めていたが、しかしひよとしたら、この囚人達に対して所望の自由を保留するために、自らの生命を賭さなければならぬかもしれないということを忘れていなかった。

「愛しい人が言う、別れちゃ嫌よ、
離れては生きて行けません。
すぎる白い腕も甲斐がない、
我らは悪魔の軽騎兵」と彼らは歌った。

「やって来る、やって来る」と宮殿のキッチンでアマンダ・バックスが叫び、木の杓子をベーコン入りの豆スープに投げ、それがはねた。「ゾフィー来て、覗いて見ましょう。石炭貯蔵庫から刈り手兵舎が見えるわ」。

「何で騒いでいるのか分からない」とゾフィーは冷静に答えた、「あんな囚人達。 — 一歩も近寄らない。この連中には食事受け取りの際、更に腹立つに違いないのだから。皆犯罪者なのよ」。

しかし彼女はアマンダの背後から近寄って、彼女と一緒に石炭貯蔵庫の小さな汚い天窗から覗いた。 — そしてより荒く息をしながら向こうを見た。彼女は一行を見た、その歌を聞き、隈なく見つめたが、しかし群れの中に彼の姿を見いだせず、自問した。あの人がいなかったらどうしよう、あの人が一緒にいなかったら。

「ゾフィー、どうして呻いているの」とアマンダはびっくりして尋ねた。

「私が、どうして呻くのよ。呻いてなんかいない、何故呻くわけ」。

「私が聞きたいわ」とかなり辛辣にアマンダは言って、窓からまた見た。というのは両人はまだ女友達とは言えなかったからである。両者のうちどちらが料理人で、どちらがその助手に当たるか、その疑問が解決していなかったのである。

囚人達の列の後を、この郎党の荷を積んだ、騎士領の二台の荷車がやって来た。毛布や、鉢、食器セット、薬、水差し、バケツ、シャベル、鍬、...。荷車と行列の間に、ただ一人巡査長のマロフケがいて、行軍した。小さな男であったが、上品な質で、ノイローエにおける、マイエンブルク監獄の、労働分遣隊第五の司令長官で、五十人の囚人達と四人の巡

査の絶対的領主であった。彼はとても痩せて、短い脚であったが、立派にアイロンをかけた灰色のズボンの中に収まっていた。彼の小さな靴は、唯一のほぼ光り輝くものであった。

一人の囚人がノイローエに進軍する前に通りの溝で、「ぴかぴかに」磨かなければならなかった。マロフケ氏は強力な太鼓腹で、それが青い制服の中で揺れていた。その腹はサーベルを掛けた革製のベルトで締められていた。顔に関しては、マロフケ氏は五十歳という歳にもかかわらず、若い娘のような優しい肌で、白く、薔薇色であった。しかしほんの些細な興奮でそれは緋色に染まった。雄猫のように逆立った口髭は赤みがかった黄色で、目は薄青、声は甲高く、きびきびしていた。しかし極めてきびきびと鋭い感じであったが、巡查長マロフケ氏はまことに人当たりが良かった、一人ももっともこれは彼の権威が虚仮にされない限りの話しであった。虚仮にされると、彼はすぐに豹のように邪悪になり、策謀的になり、復讐心が強くなった。

「全体止まれ」と彼は甲高く言った。

囚人達が止まった。

「回れ右」。

彼らは回転をした、ちなみにさほど軍隊式ではなかった。というのは一九二三年にはすべて軍隊式のものでは大方の人間に嫌われていたからである。彼らは今や彼らの刈り手兵舎に背を向けて、官吏の家と農園中庭を見つめた。

若いパーゲルはこの小さな支配者に歩み寄った、「巡查長のマロフケ殿でしょうか。貴方の所長から連絡がありました。私の名前はパーゲルです。私は一種の見習いのようなものです。貴方を上司に紹介して良ければ、どうぞ、向こうに立っています、...」。

最後の木々の下、官吏の家の隣にある公園の端に、騎兵隊長がその家族とフォン・シュトゥットマン氏と共に立っていた。

空中を行くかのように、歩くたびに、低級な大地から離れるかのように、得意気に膨らんで、マロフケ巡查長は騎兵隊長に向かって行った。彼は踵を合わせて、帽子に片手を置き、伝えた。「謹んで申し上げます、騎兵隊長殿。二名の巡查長並びに二名の巡查補佐、及び五十名の囚人と共に、労働分遣隊第五、マロフケ巡查長到着致しました」。

「有り難う、巡查長」と騎兵隊長は恵みを垂れて言った。彼は面白そうにこの小さな奴を見つめていた。「軍にいたんか」。

「畏まりました、騎兵隊長殿。第三十二輜重隊です」。

「そうか、輜重隊か、勿論。見れば分かるな」。巡查長の目に火花が瞬時に点った。「戦場に行ったか」。

「畏まりました、騎兵隊長殿。いえ、私は、...」。

「百日咳か。ま、よろしい。では、巡查長、郎党を兵舎に率いてくれ。食事は出来ておろう。パーゲル殿、貴方が万事手配してくれ。巡查長、皆の猛烈な働きを頼むぞ。この途方もない支出金を無駄にしたいからな。有り難う、巡查長」。

炎のように赤くなって巡查長は自分の郎党の許へ戻った。

避けがたいことであった。フォン・シュトゥットマン氏と恵み深い奥方は視線を交わした。絶望してフォン・ブラックヴィッツ夫人は両肩をすくめ、フォン・シュトゥットマン氏は宥めて囁いた。「私がまた取りなします、恵み深い奥方」。

「貴方でもすべてを取りなすことはできないでしょう」と恵み深い奥方は小声で答えて、

涙を目に浮かべていた。

「何という顔をしているのだ」と騎兵隊長は振り返って驚き、尋ねた。「おかしな奴だ、
巡査長は。大層自惚れている。勿論、戦争忌避者だ。この兄さんは鍛えてやろう。公務と
いうものはいかなるものか分からせてやろう。さあ、エーファ、ヴァイオ、行こう。食事
だ、シュトゥットマン、まだ何か腹に入るか見てみよう、　－　勿論君は今日朝から私の
面倒を良く見てくれて、すっかり私の食欲をなくしてくれた、...さあ、食事だ」。

97

枢密顧問官は厄介事を持ち込む

「何故彼は貴方に殿を付け、私にはただ巡査長と呼び捨てなのだろうか。　－　分かる
かい」と小さな巡査長は熱くなって若いパーゲルに尋ねた。「我々は軍の兵営にいるので
はない。彼は私の上司ではない」。

彼らは巡査長の小室に座っていた。外の兵舎では、囚人達が騒いでいて、笑ったり、罵
ったり、歌ったり、最愛の者達の写真や、レビューのスター達の長いこと秘匿していた写
真を壁に鋏留めしたり、口笛を吹いたり、ベッドを作ったり、すでに金属の食器をカタカ
タ言わせたりしていた。

「腹減った」と一人の声が叫んだ。

「煙草はいかがです」とパーゲルは尋ねて、木のテーブル越しに箱を差し出した。しか
しマロフケ氏は煙草を断った。

「テーブルには可愛いクロスが必要でしょう」とパーゲルは点検しながら言った、「そ
もそも、二、三の結構な品、鏡とか絵、品のいい灰皿が必要でしょう。若い娘達に文句言
いましょう。　－　ま、それは片付けられましょう。貴方は若い娘達のあしらいにはきつ
と手慣れたものでしょう、巡査長殿」。

しかしかの難点は深すぎた、「所長殿が私に巡査長と言うとき、それは問題ない。しか
し彼は、　－　彼にはその権利はない。だったら私も彼に騎兵隊長と呼び捨てできよう。
一体どんな顔をするか見てみたいものだ」。

「腹減った」と二人の声が叫んだ。スプーンが飯盒に拍子を付けて当てられた。

「私の上司はおかしいです」とパーゲルは考え込んで言った、「一時間前には彼は私を
首にしたのです。その通りです、巡査長殿。公務中に笑ったせいで、即刻首です。何も貴
方に嘘を付いていません、誓って。　－　多分また私を気の毒に思ったのでしょう。私は
取るに足らぬ一文無しですから、今また私を使っているのです。しかし彼はまだ私に怒っ
ているので、私に殿を付けて言っているのです。　－　彼は上機嫌のときは、いつもただ
パーゲルとか若い犬と呼びます」。

パーゲルは居心地良くテーブルの上にだらしなく寝そべって、話しながら巧みに煙草の
輪を吹き付けて、話し相手を少しも見ていなかった。

相手は不審げに側から観察していた、「それでは何故私に百日咳のことを言うのだ。私
は両鼠径ヘルニアを煩っていたのに。誰もが故国帰還負傷を受けるわけではない」。

「そんな」とパーゲルは軽蔑して言った、「負傷のことは騎兵隊長は何も気にしない。
負傷のことも彼は百日咳と言う。彼の口癖だな、ま、そのことは忘れなさい」。

「腹減った」と外でより大きな声で彼らは叫んだ。

「それでは騎兵隊長は何に驚くのだ」と巡查長は好奇心を起こして尋ねた、「誰かが負傷のことを百日咳と言うのはまだ聞いたことがない。一本の脚を切断する場合とかか」。

「それも百日咳だな、ま、そのことは終わり。熱く語らない方がました。 — 巡查長殿、貴方に大きなお願いがありますが、...」。

「腹減った」。

「貴方が郎党と一緒に食事を取りに行ったら、キッチンに二人の娘がいる。その一方に私は特別目を着けているのだが、貴方が朋友意識を持ってくださるのであれば、私の邪魔をしないで頂けるかな。もう一人の娘も全く可愛い、...」。

「若造よ」と巡查長マロフケは、とても追従された気分で、言った、「分かった、心配せんでいい、...」。

「忝い、巡查長殿」とパーゲルは混乱して発した。

「しかし、おい、貴方のような若い者が。今日日の若い者どもは何を考えているのか分からん。貴方の若さで、私のような五十代の者に頼むなんて出来たろうか。ま、約束した、了解。ま、恥ずかしく思わんでいい。巡查どもにも目を光らせておこう。つまり二名の未婚の者がいるのでな。貴方の女はどちらか、後で私に目配せしてくれ。多分私は大抵自ら食事を取りに行くことになるろう、...」。

「腹減った!!! 腹減った!!!」。

「そう、時間だな。それで貴方の上司はどうしたのか、手短かに話してくれ。時々貴方にお主と呼んで構わんだらう。ただ親しく思ってなのだ。勿論他人が居合わせたら、遣わないが」。

「有り難う、騎兵隊長殿、名誉なことです。私の上司に関しては、 — しかし何があっても漏らさないと約束して頂かなくてはなりません、...」。

「誰にも漏らさないよ、私は役人だし、 — 検事さえ私からは何も聞き出せない」。

「それは結構、 — 全くの内緒ですが、上司は生き埋めになったのです。地下掩蔽部から死んだ者と思われて引き出されたのです。それ以来、...」。

「それであんな風なのか。そうか、蘇生した死体か」。

「それ以来ただ『生き埋め』だけが頭にあります。その他の一切、百日咳です」。

「そうか、お主の上司は頭がおかしいのか。分かった、心配しなくていい。誰にもお主のことは漏らさん、...」。

「今日は、殿方」とフォン・シュトゥットマン氏が言った、「すべて異常ありませんか。巡查長殿、満足して頂けましたか。家が隙間なく出来ていますか、誰も若造は逃げ出さないと思います。 — 済みません、私の名前は、フォン・シュトゥットマンと申しまして、ここでいわば番頭のような仕事をしています。何か御用がありましたら、何なりとお申し付けください。食事が合わないときは、いつでも私宛ご連絡ください。 — 騎兵隊長にはこのような事柄は余り相談なさらない方がよろしいかと、...」。

巡查長は深く了解した視線を若いパーゲルに放った。「分かりました、それでは、テーブルクロス一枚と灰皿一つを所望出来ますれば幸いです」。

「すべて用意致しましょう」とフォン・シュトゥットマン氏は友好的に言った、「快適に過ごして頂きとう存じます。 — パーゲル、食事へどうぞ。すでに食卓に揃えてある」。

私は巡査長殿と食事を摂ろう」。

パーゲルは深い痛みの視線を巡査長に投げかけて、言った。巡査長は彼を宥めて頷いた。「分かりました、フォン・シュトゥットマンさん」、そして消えた。

「ジーマンス同僚」と巡査長は甲高い声で玄関に叫んだ、「四名の者を食事搬入に向かわせてくれ。高齢の、既婚の者を選抜してな、キッチンには可愛い若い娘達がいるそうだから」。

ざわめき、どよめき、わめき声が兵舎で起きた。

「可愛い若い娘達のことを誰が貴方に話したのです」とフォン・シュトゥットマン氏は不思議に思って尋ねた、「若いパーゲルですか」。

「囚人施設の役人はそのようなことはすべてすぐ耳に入れなければなりません」と巡査長は得意気ににんまり笑った。「若造達相手では用心が必要です、一 奴等は向かって行きます」。

「誰からその知識を得たかまだ伺っていません、巡査長殿」とフォン・シュトゥットマンは素っ気なく言った、「やはりパーゲルでしょう」。

「まあ、そうです」と施すように巡査長は言った、「あの若者は恋している[ハイデルベルクで心を奪われた、1925年、歌]のように見えます。内緒、秘密ですが、彼は自分の娘に注視して欲しいと頼んだのです。何も起きないように、とお分かりでしょう、...」。

「そうですか、パーゲルか」とフォン・シュトゥットマン氏はとても驚いて言った、「両人のうちのどちらですか。アマンダですか、ゾフィーですか。勿論、ゾフィーでしょうな」。

「それは私に言わなかったのです。食事を取りに行った際、私に知らせるつもりでした、しかし貴方がいらっしゃいました」。

「それは残念でしたな」とフォン・シュトゥットマンは答えた、「後で知らせることでしょう、...」。

物思いに耽ってシュトゥットマンは分遣隊指揮官の後を行った。物思いに耽って、少しばかり興奮したやり取りを耳にしていた。何故、四人の既婚の中年の者達が食事搬入のために準備して立ってはず、ただ三人なのか、つまり四人目の者は若い男ではないかと言うのである。この若い男は、愛想のない滑らかな可愛い顔をしていて、ずるそうな目つきと頑丈すぎる顎を有していた。

「私はリーブシュナーを望んでいない」とマロフケ氏は叫んだ、「私が中年の者と言ったのは、リーブシュナーのことではない。奴は潜り込んで来たのだ。一 お主はそもそも私の分遣隊の者ではない、『マット編み』の房に属しているのだ。ブランドの奴は足に豆ができて、食事を搬入できないと言うのか。一 私も豆ができて、それも腹にできたが、しかし運べるぞ」。賛同の吠えるような笑い声が上がった、「リーブシュナーよ、もう一度お主が食事搬入をしようとする姿を見つけたら、その日にブタ箱へ行軍して戻るのだぞ、分かったか。そこのお主、ヴェント、飯盒を掴んで、出発行進だ」。

物思いに耽ってフォン・シュトゥットマン氏は聞いていた。しかし彼は少しも内容を理解していなかった。片方の耳から入って来て、片方の耳から抜けた。先の中尉は、若いパーゲルについて考えていた。若いパーゲルは彼の関心を引いた。フォン・シュトゥットマンはいつも何かについて、それも常に自分以外のことを、沈思し、熟慮しなければならない人間の一人であった。彼は、なされなければならないことをなした。すべては全く自明

のことで、自分のことは完全に興味のない人間であった。しかし例えば、パーゲルは実に興味深い。中尉は彼を注意深く観察していた。この若者は自分の仕事をきちんと勤勉にこなしている。彼は常に均等に上機嫌で、悪意に取ることはなく、素早く異郷の田舎での仕事に適応した。一緒に取りかかった。彼は賭博者であったが、――しかし賭博への未練を少しも見せなかった。彼はアルコール依存症ではなかった、――彼は余りに多く煙草を吸ったが、これは時代の病であって、フォン・シュトゥットマン氏もこれを免れ得なかった。常に点火され、吸われ、投げ棄てられ、再びまた点火された。

若いパーゲルは異常なし、彼は欠点、難点がない。彼は自分の仕事を果たしている。

しかしやはりどこかおかしい。彼の中には人生がない。彼は内発的に動いていない。彼は夢中にならず、立腹しない。いやはや、この若者は二十三歳なのだ。――永遠にこの半端な秘かな微笑と共に歩き回り、自らと一切とを軽視して生きて行くことはできないはずである。あたかも全世界は一つのまやかしであり、それも選りに選って彼がそう発見したかのような按配ではないか。彼を思い出してみると、彼はヴェール越しに覗かれているようで、鮮明ではなく、消えて行く。――あたかも彼は生きていないかのようで、露命をつないでいて、自分の感情世界が麻痺しているようである。

こうしたことすべてをフォン・シュトゥットマン氏は夙に長く観察していた。彼はその際、この鈍磨は一つの過程現象であると考えて納得していた。パーゲルは回復期の者である、と。彼は一つの恋愛沙汰を体験した。その経験は彼が思っているよりも深く作用した。彼はまだそれに苦しんでいるのである。この件についての言及を一切撥ね付けるのは、ひょっとしたら間違いであったかもしれない。しかしフォン・シュトゥットマン氏は、傷は放置しておくべきという意見であった。

それが今、パーゲルは新たな恋愛をしているという知らせを受けた。彼が他人とそれについて話し、不安を抱いて一人の娘のことを思っているということだ。しかしそうなるらと一切は全く別様になる。するとデンマークの国[ハムレットの国?]は何か腐っている。そうなるらと彼は負傷者でも、麻痺者でも、回復期の者でもなくなる。単純に彼は見え透いた頭で、速歩で働かせなければならない怠け者の若者に過ぎない。

シュトゥットマンは、パーゲルをはるかにもっと鋭く観察し、もっと朋友意識を持って扱う決心をした。――実際二人の間には相変わらず目に見えない壁がある。二十三歳の若者、――この世で何らかの人間に対してより密接な関係を持とうとせず、このような密接な関係を欲することすらしないのは、――これはまじ不気味である。二十三歳で世捨て人となつてはいけない。フォン・シュトゥットマン氏が知っている限り、パーゲルは相変わらずまだ母親宛に手紙を書いていない。――これはやはり正しくない。これにまず自分は介入しよう。突然フォン・シュトゥットマン氏の中であらゆる子守娘の本能が目覚めた、――彼は自分の課題を感じた、自分はこれについて熟慮し、詮索し、これを解決することにしよう。

善良なシュトゥットマンは、――一度他人についてではなく、自分について深く考えてみたら、自分がこのように熱心にこの新しい課題に突入するのは、自分の古い課題が挫折して終わったからであると、明瞭に悟っていたことであろう。今日午前の話し合いの後、彼はそうと自覚しないまま、騎兵隊長のことを断念していた。騎兵隊長は救いようがない。彼のかつとなる頭は改善の余地がない。――一つの性急さから救出されても、隊長は全

力で次の性急さに突進する。隊長は、決して自分の課題を学習しない子供のようなものである。教師は自分の任務を放棄するしかない。中尉は今や騎兵隊長のことを考えるとき、もはや、再び一歩ずつ前進と考へない。そうではなく、こう考へる。隊長はまた何を始めるのか、と。彼は騎兵隊長を見棄てるつもりはなかつた。妻もいるし、娘もいる（これらも望ましい課題だ）、しかし彼は騎兵隊長にもう興味はなかつた。推し当てようと思つていた謎であつたが、この謎から明らかになつたのは、これは謎なんかではなく、単に不合理の寄せ集めであり、二度と我々の興味を引かない。

物思ひに耽つて、フォン・シュトゥットマン氏はその好意的褐色の視線を交互にアマンダ・ボックスとゾフィー・コヴァレフスキーに向けた。アマンダは、頑丈な骨のベルギーの馬のように粗野で、これは問題外に見える。（もっとも他人の恋愛趣味は判断できないことである）、ゾフィーは、こちらは全く可愛い、しかし仔細に見ると、シュトゥットマンは、彼女の顔に時に娘らしい面影の中から何か邪悪なもの、鋭いものが浮かぶのを見つけた。そのとき彼女の目は留め針のようで、彼女の声はほとんどしゃがれたものになる。

彼女が今やマロフケ巡査長にこう言つた時がそうであつた。「私どもは信用ならないということでしょうか」。

マロフケ氏は、ひよとしたらひょうきんな変わり者で、とりわけもろすぎるかもしれない。それでも老練な囚人施設の役人である。シュトゥットマンは更に厄介なことになるかもしれないと思つた。

マロフケはジーマンス同僚と一緒にの四人の食事搬入者達をキッチンのドアの前に立たせていた。彼は娘達から味見に一スプーン食べさせて貰ひ、それどころかこう称えていた、「中に骨髓が入っているな。私の若者どもが笑ふことだろう」。

それから彼は娘達に、どのように一同の食事を準備すべきか指示して、その後こう言つたのである。食事搬入の者達が部屋に入る前に、地下室廊下へ退出して欲しい、と。これに対してゾフィー嬢がとても怒つて尋ねたのである。「私どもは信用ならないということでしょうか」。

「いや、何」と小さなマロフケは全く穏やかに言つた、「これはすべての女性に言うことです、一 単に可愛い女性に対してだけではありません」。

ゾフィー・コヴァレフスキーは頭を怒つてうなじに返し、叫んだ、「このような囚人達とははしたないことをしません。そのようなことを私どもに考へる必要はありません」。

「しかし私の若者どもは喜んで貴女らと、はしたないことをするだろう、お嬢さん」と巡査長は説明した。

「ゾフィー、行こう」とアマンダも警告した、「あんな人達に会いたくないわ」。

しかしゾフィーは奇妙に頑なであつた。一 いや、彼女は分別を忘れていて、ただ速やかに彼と一緒に來ているのかどうか知りたくて、彼女はすべて策謀的に始めたことを危機に晒していた。何のために彼女はこの古い、汚いキッチンでの仕事を求めたのか、自分の手入れの行き届いた両手をジャガイモ剥きや、冷たい水洗いで赤く醜いものとしたのか、自分の素敵な自由時間を断念したのか。一 これで彼にここで一度も会えないなんて。それでその点、他のすべての女性よりも劣等なものになつてしまつた。刈り手兵舎や村の通りの前に彼女が立っていたら、少なくとも彼の行軍して行く姿を目撃していたことであらう。

彼女はすべてを賭け、無分別にフォン・シュトゥットマン氏に対する自分の良好な関係まで試して、彼に向かって言った、「そうでしょう、フォン・シュトゥットマンさん、殿方が私を自分のキッチンから追い出す必要はないでしょう。殿方が私に命令する必要は何もないでしょう」。

フォン・シュトゥットマン氏は相変わらず鋭く熟慮し、正確に観察した。しかしこの謎に対する鍵を見いだすことはできなかった。「分別を持ちなさい、ゾフィー嬢」と彼は好意的に言った、「この殿方のお仕事を難しいものにしないことです」。

フォン・シュトゥットマン氏は、ゾフィーが巡査長に投げかける邪悪な鋭い視線にびっくりした。憎しみで一杯の視線であった。しかし一体全体何故ゾフィーはこの小さな太鼓腹の殿方を憎まなければならないのか。ただこの一つの視線で終わった。今や、すべてが無駄と分かって、ゾフィーは救出すべきことを救出した。

「勿論、そう告げられたら、私は喜んでキッチンから出て行きます」と彼女は撤回した、「ただアマンダと私はここで何も責任は負いません、一 恵み深い奥方はすべて数えさせています、クロスや皿、...」。

そう言って、地下通路へのドアが閉まり、二人の娘は去った。巡査長は郎党を呼び寄せた。彼らは慎重に用意の出来た食事を運搬用鍋に入れた。その際マロフケ氏は中尉に囁いた、「私は最初、この痩せた可愛い娘と思ったのです、一 パーゲル氏の女は、わかりますか。でも別な方に違いない。この可愛い娘は私の若造どもを狙っています。毒のように鋭く。この娘を注視することにしましょう。ちょっと抱き込みにかかっています」。

「そんな」とフォン・シュトゥットマン氏は必ずしも納得が行かず、抗議した、「ゾフィー嬢はとても上品と思っていたが、...」。

彼女のことは少しも知らないと彼は突然考えた。列車の中では、先に、それどころか明白に劣等な印象を抱いたものだった、...。

「貴方は分からないでしょう」と巡査長は、二人一緒に食事搬入者達の背後を兵舎へと戻りながら、言った、「女どもがいかにおかしなものか。中には我らの若造に全くのぼせている者がいます。...お分かりになれないでしょう。しかしそれはまさに彼らが囚人だからです。以前マイエンブルクでは冬、雪が積もったとき、通りを掃きました。すると何人かの女どもが細工して、手紙をこっそり渡すのです、想像できないでしょう。...いやはや、シュトゥットマン殿、この点女どもは完全な謎です。あのほっそりした可愛い女は、...」。

「そうですか」とフォン・シュトゥットマン氏は時折言った。彼もこれは謎と思った。しかしこの謎はきっと解けるであろう。まずは彼はともかく共同室へ入って、この連中が味わう様を見守った。その通り、彼らは美味しく食べた。彼らは素早く一杯掬っているとき、もうまた鍋の方を、更に二敗目が、出来れば三杯目が中にあるか、盗み見していた。

しかし圧巻は、頂点は、塩ゆでじゃがいもであった。スープの中で一緒に煮たものではなく、こうするとただ固くなるものだが、わざわざ別に煮たもので、巨大な鍋の中に入った。「務所」に入って以来、若者達はそれを味わっていなかった。少しばかり冷めると、熱いジャガイモを片手から片手へと転がして、そのように、スープなしに、食べていた。

「すごい、ボス殿」と彼らはシュトゥットマンに叫んだ。「皮付きジャガイモとニシンを今度作って貰えますか」。

「作ってみよう」とフォン・シュトゥットマン氏は約束した。

「私は生クリーム付きのマティエス[ニシン]がいい」とある声がした。

「アイスクリームの上に乗せたらどうです、ボス殿」。

「俺は」と三番目の者が叫んだ、「皮付きジャガイモに一人の花嫁を添えて貰いたい。皮を剥いて貰って、...できますか、ボス殿」。

吠えるような笑い声となった。

彼らはこんなもので、より劣等な者ではないが、より上等の者でもない。親しげで、厚かましく、すぐに満足して、貪欲である。一 彼らは子供の要素が多い、とフォン・シュトゥットマン氏は考えた。しかしただ子供の無垢がない。

今や彼らはフォン・シュトゥットマン氏に駆け寄って来た。彼らの空腹は満たされた。今度は彼らの煙草を乞うた。煙草、これは手に入らない限り、この世で最良なものである。これが手に入る場合、自明のものである。彼らは一週間働いてようやく煙草への一つの権利があると知っていた。次の日曜日には一人頭二箱の煙草が手に入る。しかしこの点でも彼らは子供のものであった。ようやく明日、ようやく日曜日にもたらされる喜びは、喜びではない、一 今すぐ欲しい。

果たして、シュトゥットマン氏は、説得させられた。彼は、若いパーゲルに五十箱の煙草を持たせると約束した。彼は官吏の家へ行った。囚人達は、気前がいい男だと思った。更に捻出させることにしようと、彼らは誓った。奴を更にもっと搾り取るぞと言った。これは、楽しい旅に連れて行かなければならない奴だ。彼らは互いにお喋りし、地獄の喧噪となった。そこで巡査達が割り込んで来た。規律は守らなければならないからである。休暇ではないのだ、働かなければならんぞ。

フォン・シュトゥットマン氏が事務所のドアを開けたとき、彼はフォン・テッショー氏と若いパーゲルとが打ち解けて座っているのを目にした。両殿方、ノイローエの最も年長と最も年若な農業主が素晴らしく了解し合っている風に見えた。彼らは兩人とも満足した顔をしていた。

「貴方の若造に丁度」とフォン・テッショー氏が轟くように言った、「駆け出しの干し草熊手人として食べておったものを話していたのだ。忌々しい平日に、ほうれん草付き豚のカツ、そんなもんじゃない。あり得ない。週に三度、焼いた小麦団子だ。最後は天井に投げ付けた。天井に張り付いてな、それほど粥状だ。私とその荘園から去ったとき、まだそれは張り付いていた」。

「それで実際には何を召し上がっていたのですか」とフォン・シュトゥットマン氏は丁重に尋ねた。面白くなくて腹立たしかったので、一層丁重であった。というのは騎兵隊長との先ほどの話し合いの時から、まだすべての関連する文書が公然と書き物机の上にあったからである。何もいかがわしいものはない。しかし老公はずる賢い。彼は一つのヒントからすべての戦略を察知する。

「カラスのようにくすねたな」とフォン・テッショー氏は言った、「食料貯蔵庫、燻製部屋、林檎室、一 どの穴蔵にも合鍵を持っていたのだ」。

「だから結局、ほうれん草付き豚のカツが、雇用者にとっても一層有益でしょう」とフォン・シュトゥットマン氏は素っ気なく言った、「パーゲル、頼み事があるが、刈り手兵舎に五十箱煙草を届けてくれ、...」。

「彼らは幸先いいな」と轟くように枢密顧問官は叫んだ、「まだ一圃場区も働いていな

い、ならず者の一味は。それなのに五十箱の煙草か。貴方の許で私も働きたいな。ま、口出しはしないが」。

パーゲルは去った。枢密顧問官に愛想良く片手で合図をした。フォン・シュトゥットマン氏はフォン・テッショー氏を挑戦的に見つめた。というのはこの老公はシュトゥットマンの席に座っていたからである。つまり書き物机の所で、丁度散らばった手紙の前に座っていた。ー 彼はノイローエの所有者を挑発的に見つめた。しかし所有者は動かなかった。そこでシュトゥットマンは手紙をテーブルから取り上げ、然るべきファイルに収め始めた。

「そんな屑、私には気にならない」と老領主は保護者然と言った、「私は返事する必要のない手紙には、何も構わない。ー しかし貴方は手紙を書くのが好きなのだろう」。

フォン・シュトゥットマン氏は何か口ごもった。それは返事であったろうが、しかし返事する必要はない。

「私は常々言っている。農業主はそもそも書く能力は必要ない、と。少しばかり読めること、これは構わん。新聞で家畜や穀物の値段を読めるからな。しかし書くこと、ー これは何のためか。手形を引き受けるためか。教養はすべて、赤の連中の発明だ。農業労働者が書くことができ、何の益があろう、お尋ねしたい。満足しなくなること、それがその結果だ」。

「以前は皆、満足していましたか」とフォン・シュトゥットマン氏は尋ねた。彼は手紙を片付けて、今や煙草を吸いながら、暖炉に寄りかかっていた。本来彼は是非とも農園中庭へ出て、農作業を見なければならなかった。しかし老公の望みが分かるまで、辛抱して待つ決心をしていた。自分が彼の言うことを聞かないと、騎兵隊長が聞かざるを得なくなると、そうなるに確かにまずい結果になろうからである。

「いや、それはな」と老領主は言った、「以前も我々は満足していなかった。人間は不平を言うように生まれている、そう言っておこう、親愛なるフォン・シュトゥットマン殿。人間は生まれたと思ったら、すぐに若い子山羊のように不平を言う。そして死ぬときも老いた山羊のように喉をごろごろ鳴らす。そしてその間ずっと頑なに文句を言い続けるのだ。いや、勿論以前も満足していなかった。しかし一つの違いがあるな、尊敬する貴方。以前は誰もが今自分の所有するものよりもただもっと所有したがっていた。今日では誰もが、どこでも、他人の所有しているものを所有したがるのだ」。

「真実が含まれています」とフォン・シュトゥットマン氏は証して、素早く、今他人が所有しているものの何を彼は所有したいのだろうと考えた。何かひらめきさえた。

「真実が含まれまいことか」と老公は凱歌を上げた。彼は今や全く満足していた。若いパーゲルは彼に愛想が良かった。フォン・シュトゥットマン氏も彼に愛想が良かった。兩人とも付き合いやすい人達だ。ー 自分の婿のようではない。

「聞いてください、フォン・シュトゥットマン殿」と彼はそれ故、心地よく言った、「不平不満について話している。それで、私の恵み深い妻のことだが、これも不平を言う。だからここに座っているのだ」。

フォン・シュトゥットマン氏は問うように彼を見つめた。

「そうなのだ、親愛なるフォン・シュトゥットマン殿。貴方は運が良くて、独身だ。しかし私は年寄りだ。今回は貴方の悪魔の騎兵達だ」。

「誰です」。

「ま、向こうの囚人達だ。彼らは自らをそう称している。優に一時間前に到着してから、妻が落ち着かない。『ホルスト＝ハインツ、私は耐えられない。私どもの愛するノイローエに、囚人だなんて。私が窓から覗いたら、囚人達が見えます。皆殺人者や盗賊です。それが歌まで歌っているのよ、一 殺人者は歌ってはなりません、...』」。

「私が耳にした限り、全く問題にならない歌を歌っています」。

「私もそう言ったのだ、尊敬するフォン・シュトゥットマン殿。丁度私の言葉と同じだ。それどころか彼らは『両親の墓の芝のベンチ』を歌っていると妻に言ったのだ。しかし駄目で、殺人者が歌うのを受け入れないのだ。殺人者は生涯、懺悔しなければならない、と妻は考えている」。

「彼らの中には殺人者はいません」とフォン・シュトゥットマン氏は言った、微かに苛立っていた。というのは、このお喋りは何かもっと真剣なことを目指していると気付いたからである。「盗人やペテン師で、皆比較的短期刑の者達でして、立派な服役態度にあります、...」。

「フォン・シュトゥットマン殿、その通り、丁度私も妻にそう言ったのだ。しかし妻が何か別なことを考えているときに、妻に言ってもな。『何故彼らは監獄にいるのです、殺人者でもないのに』と妻は言う、『盗人は刑務所でしょう』と。私は妻に刑法のすべてを教え込むことはできない」。

「どうしたらいいのです」とフォン・シュトゥットマン氏は尋ねた、「恵み深い奥方は何をお望みです」。

「それから更に我らのキッチン[洗濯室]の件がある」と枢密顧問官は続けた、「まあ、私は食事準備のためにそこを用立てた。しかし突然その気がなくなった。貴方は分からんだろう、貴方は独身だから。今妻は自分の立派な鍋のことを嘆いている。いつもはそれで我らの下着を煮沸するのだが。それに貴方の同胞への食事のことを嘆いている。一 いやこれは失礼、そんな意味ではない。勿論貴方の同胞ではない。しかしもはや妻はバックス嬢に我慢できなくなっている。家禽への仕事が疎かになっていると言ってな。今朝は卵が昨日よりも少なかったと言うのだ、...」。

「雌鶏どもは今朝のうちは囚人どもが来るとはまだ思っていなかったでしょう」とフォン・シュトゥットマン氏は微笑して言った。

「その通りだな、ハッハッハ」と髭の老人は笑って、書き物机を甲高く叩いた。「私の妻にそう話すことにしよう。怒るまいことか。素晴らしい。雌鶏どもはまだ思っていなかったか。私の妻は普段貴方には甘い、フォン・シュトゥットマン殿、ま、それがどうなることか。実に見上げたものだ」。

フォン・シュトゥットマン氏は自分の失敗に怒り、無念に思った。老公は素朴さを装って、実にしたたかだ。彼は相手が見せたどんな隙も利用する、無茶苦茶利用する。一 さて、更に用心してかからなければならない。辛抱することだ、相手は堪忍袋の切れるのを待っている。

「私どもは貴方のご夫人が郎党のことでご不快な思いをされないよう努めます」と彼は丁重に言った、「出来る限りのことを致します。キッチン[洗濯室]は引き上げましょう。料理は他のどこかで致します。餌用キッチンか、別荘で、私が調べます。バックス嬢は料

理仕事を解きます。コヴァレフスキー嬢にハルティヒ夫人を加えることにしましょう」。

「ゾフィー嬢のことか」と老公はびっくりして発した、「まだ貴方はご存じないのか。いや、貴方は自身のお仕事に良く精通されていると申さざるを得ない。こちらへ無駄口をききに参る途中、ゾフィーが地下室通路に立って、喚いていた。貴方の巡査長に侮辱された、もう仕事はしない、と、…。勿論彼女を説得したのだが、しかし娘というものはどういふものかご存じだろう、…」。

「いずれにせよ、枢密顧問官殿、貴方が説得されたことには感謝申し上げます」とフォン・シュトゥットマン氏は少しばかりもっと鋭く言った、「ゾフィー・コヴァレフスキーに対しては代えを見つけましょう。 — 刈り手兵舎での歌は禁止することに致します。

— それですべて苦情は片付きますでしょうか」。

「それは結構」と老公は顔を輝かせて叫んだ、「貴方は話しの分かる方だ。私の婿殿ではこうはいかん。火に油だ。しかしな、 — しかし、…」。枢密顧問官は悲しげに頭を振った、「残念ながらまだ少しもすべてではないのだ、親愛なるフォン・シュトゥットマン殿。私の妻が窓辺に座っていると、 — すると妻はこの囚人服を目にするわけだ、…。妻はそれが我慢ならないのだ、尊敬する方よ、服に絶えず苛立つのだ、老いた妻でな、その点は思いやらなければならない、…」。

「残念ながら私は郎党に別の服を着せられません」とフォン・シュトゥットマン氏は言った、「出来るのであれば、勿論そう致しましょう。しかし宮殿には四方前面があります、 — 貴方のご夫人が他の三方の前面を御覧になる窓辺を選んで頂くわけには行かないものでしょうか」。

「尊敬するフォン・シュトゥットマン殿」と枢密顧問官は答えた、「私の妻は、まあ、正味五十年その窓辺に座っているのだ。それで、晩年になお移るよう期待できるものだろうか、単に貴方が囚人達をノイローエへ輸入してきたからといって」。

「我々にどうして欲しいとお望みです」とフォン・シュトゥットマン氏は尋ねた。

「何、フォン・シュトゥットマン殿」と枢密顧問官は顔を輝かせて、言った。「これらの郎党をただ然るべき所に送り返すのだ、監獄に。今日のうちなら最良だ」。

「収穫はどうなります」とフォン・シュトゥットマン氏は驚いて叫んだ。

枢密顧問官は微笑して、両肩をすくめた。

「本気でそう望んでいらっしゃるのですか」と信じられずにシュトゥットマンは尋ねた。

「親愛なる御仁よ」と枢密顧問官は粗野に言った、「私が真昼に三十分要して、冗談で貴方と駄弁とお思いか。郎党はノイローエから失せるべし、今日のうちに」。

枢密顧問官は寝椅子から立ち上がって、フォン・シュトゥットマン氏を邪悪に目を光らせて見つめた。

しかし今や戦闘必至となると、先の中尉は冷静になった。「枢密顧問官殿」と彼は言った、「貴方の異議は遅すぎます。貴方は二週間前から私どもの計画、監獄分遣隊召致のことをご存じです。貴方はこれに対し何の異議も称えられなかった。逆に、貴方は我々にキッチンと家禽番の娘を用立ててくださったのです。このようにして貴方は了解を示されました、…」。

「弁が立つな」と枢密顧問官は嘲笑した、「チョッキのポケットに小さな弁護士がいるようだが。しかし抜け目ない者が相手でも、私は更に抜け目ない。請負契約第二十一条によ

れば、請負人が請負人雇用者の住居権を侵害する場合、いずれにせよ、それを止めなければならぬ。貴方の犯罪者達は住居権の一種の侵害に当たる。この侵害が生じているが故に、即刻私は貴方に除去を要求したのだ。この除去のために参上した。郎党を片付けろ」。

「お断りします」とフォン・シュトゥットマン氏は言った、「私どもは証明致しましょう、ポーランド人の刈り手達とその妻子らで満杯の兵舎の方が厳しい規律下にある受刑者達よりもはるかに煩わしい、と。更に我らは証明致します、...」。

「裁判になると言うのか」と枢密顧問官は軽蔑して言った。「裁判に訴えようものなら、賢しらな御仁よ、裁判に訴えろとすれば、いずれにせよ、請負契約は解約になるのだ。契約第十七条だ。裁判にするがいい — 私は喜んで収穫を引き受けよう、...」。

シュトゥットマンは額の汗を拭った。親愛なるブラックヴィッツよ、と彼は考えた。君がここにいたら。しかし君は幸い何も知らん。君は知ることはないだろう。彼は書き物机の方を覗いた。こやつは全体を狙っている。こやつはきっと穀物人達の申し出の手紙を読んだのであろう。パーゲルは余りに不注意だ、人が良すぎる。こやつは貪欲だ、 — ただ婿を片付けたいばかりでなく、今やその上収穫まで望んでいる、...。抜け道を私は見つけなければならない、...。

「な、フォン・シュトゥットマン殿」と老領主は満足げに言った、「農業はホテル業と若干違うだろう、そうだろう。何で貴方はここで消耗したいのじゃ。私の婿は貴方の苦勞に感謝することはないだろう。郎党を送り返せ。分別があるのなら、貴方も旅立つことだ。ここは弾けた風船だ。空気はもう入れられん」。

フォン・シュトゥットマン氏は事務所の窓辺に立っていた、「ちょっと待ってください」と彼は言って、兵舎の方を見やった。この時ドアからパーゲルが出て来た。一人、二人、三人囚人が続き、今度は一人の巡査が出て来た。彼らは去って、道を下って消えた。多分道具小屋の方へ向かったのであった、...。

これを老夫人も今、上で御覧になった、と彼は考えた。すると何も出来ない。逃げ道はない。 — 勿論、こやつはとりわけ私を外したいのだ。ブラックヴィッツ相手なら勝負は簡単だ、ブラックヴィッツは今日のうちにもがらくたをこやつの足許に投げ付けて、こやつに立派な収穫を譲ることだろう、...駄目だ、駄目だ。

一つの考えが思い浮かんで、すぐにその考えを棄てた。しかし更に鋭く彼は兵舎の方を見た。兵舎は尖った赤い切妻と共に官吏の家と宮殿に対峙している。切妻にはドアと一枚の天窗が収まっていて、縦の両側の光景はライラックとガマズミの茂みで隠れている。シュトゥットマンは見つめ、目を細めて見た。いや、その考えはやはり悪くない。その考えとは、...。

彼は一気に振り返って見た。

「請負人雇用者からは四つの中止がなされたわけでしょう」と彼は言った、「第一はボックス嬢」。

「その通り」と枢密顧問官は満足して証した。

「ボックス嬢は解放される。それで片付きますか」。

「それでいい」と老公はにやりと笑った。

「キッチン[洗濯室]の利用は断念する」。

「よろしい」と老公は笑った。

「もはや歌ってはならない」。

「結構、結構。それで四番目の奥歯を貴方の抜け目なさで充填してはならんぞ、シュトゥットマン君」。

「私は歯医者ではありません。四番目の異議は、郎党は宮殿から見えてはならない」。

「その通り」とフォン・テッショー殿はにやりと笑った。

「他には何も無い」と老公は笑った。

「取り除きましょう」とフォン・シュトゥットマン氏は言って、勝利の声を響かせずにはおれなかった。

「何だと」と老公は呆気にとられて叫んだ、「やらないつもりではないだろうな」。

「私が何をやらないとでも」。

「兵舎を遠ざけるのか、駄目だぞ。郎党を移すのか、これも駄目だ。安全な宿舎が大事だからな。その他に、...」。老公は考え込んだ。

「お許しください、枢密顧問官殿」とフォン・シュトゥットマン氏は、友好的に恵み深く、ただ勝利者のみに特有の友好的に恵み深い様で、語った、「私は早速必要な指示を与えなければなりません、遅くとも夕方には障害が取り除かれますように」。

「知りたいものだ」と老領主は言って、何の抗議もせずに、シュトゥットマンから事務者の外に出された。「しかし夕方にはすべてきちんとしていないといかんぞ」と彼は以前の威嚇に戻って叫んだ。

「夕方にはすべてがきちんとなります」とフォン・シュトゥットマンは満足して説明し、事務所の鍵を、いつもはブリキの郵便受けに入れるのだが、これ見よがしにポケットに押し込んだ。「恵み深いご夫人にどうぞよろしくお伝えください、...」。彼は勝利者のように、農園中庭に向かって消えて行った。枢密顧問官は呆気にとられて見送った。

フォン・シュトゥットマン氏が枢密顧問官と交渉し、話し、論争している間、それから彼が莊園中庭へ走って行き、郎党を太鼓叩いて集合させ、彼の指示を与えている間、このすべての間、それから刈り手兵舎で、またシュトゥットマンが若い、次第にますます飲み込んで行くパーゲルに教示し、その際、これから先年配のローデングロスのひげもじゃの殿方連中に一切親密にはならんと警告しているこのすべての間、 — それにまたフォン・シュトゥットマンが分遣隊の巡查補佐や巡查達、それに巡查長と話し、彼らにただ侮辱を感じさせないように説得している時、 — つまりシュトゥットマンが話し、追従し、叱り、警告し、汗をかき、微笑して、自分の友人フォン・ブラックヴィッツを義父の敵意から救出しようとしていた午後の半分の時間、 — 昼食からコーヒータイムまでの時間、騎兵隊長ヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツは憤然と自分の寝椅子に横たわっていて、自分の友人フォン・シュトゥットマンに対して不満に思いふくれっ面をしていた。

騎兵隊長はシュトゥットマン、この後見者に対し怒っていた、シュトゥットマン、この子守女に対し罵っていた、シュトゥットマン、この知ったか振りに対し、嘲笑し笑っていた。シュトゥットマン、この不吉な男に対し軽蔑して薄笑いをしていた。

更にまたフォン・テッシュー老枢密顧問官に関しては、彼は宮殿の部屋のカーテン越しに、シュトゥットマンの開始する仕事をただ一瞥して、すぐに頭を頷かせて、それを認め、語った。「才気のある者はやはり才気がある。このような男を婿に欲しかった、あんな脚の長い射石砲ではない男を、...」。

騎兵隊長は自分が骨の髄まで笑いものになったと思った。妻と友人のうちどちらが自分を最も笑いものになしえるか、その点の競争のようなものであった。妻の方は小さな結婚生活の間奏曲を、誇張して、この件ではちなみに完全に自分の方が正しいのであるが、自分のことを友人の前で笑いものにした。一方友人の方は自分の妻の前で、仕事に関して完全な間抜けと明らかにした。友は仕事の指揮を自分から取り上げて、その上更に自分の言葉まで奪って、義父に対し自分の意見すら述べるなど言った。騎兵隊長は、この契約の危険性についてのお喋りは、すべてでたらめ話しと確信していた。彼は個々の点を掘り下げることを丁寧に避けて、こう確信した。自分はこれまでノイローエでいつも立派に成功して来たのであり、自分は暮らしを支えて来たのである、 — 自分は実際、自分は暮らしのに無能だと証明して貰うために、ベルリンから賢い殿方達を連れて来たのではない、と。

騎兵隊長は一人の友人を欲していた、つまり、話し相手の仲間であり、後見人ではなかった。後見人は御免だ、と彼は内心で叫んだ。その声が漏れないよう、彼は更に少なからず集中して考えた。善良なシュトゥットマンは、騎兵隊長が怒って義父に嘔みつくことのないよう、案じていやがった。この義父、半ズボンの七十歳のこの老人のしやがること、こんなものは騎兵隊長にとって全くどうでもいいことだ、 — 隊長は自分の友人に猛然と怒っていた。この友人は自分を致命的に傷付けた。

刈り手兵舎では万事順調に見えた。汗かきながら、フォン・シュトゥットマン氏は宮殿のキッチン[洗濯室]へ走った。急いで招集された村の三人の女どもが、前掛けの紐をひらひらさせながら、鶏のように小声でクックツと音立てながら、一体また何がはじまるのかと期待一杯にお喋りしていた。彼が道具を家畜小屋の餌キッチンへの移送を指令した後、テッシュー家の、囚人食事で穢された洗濯鍋に対するまさに変容した清潔さを命じた後、フォン・シュトゥットマンは、全速力で村のコヴァレフスキーの住まいへ駆けて行き、娘ゾフィーから、一体どうしたのだと尋ねようとした。彼は娘と上手く話しをつけて、ひょっとしたらついでに枢密顧問官の立派な説得は元来いかなるものであったか分かるかもしれないと思った。しかしゾフィーは別な村の端、一人の女友達の許へ出掛けたそうであった。フォン・シュトゥットマン氏は汗をかいたはずみで、更に少しばかり汗をかくことを厭わなかった。フォン・シュトゥットマン氏は別な村の端まで走った。

フォン・テッシュー氏、老枢密顧問官は、公園から彼の駆ける様を見た。駆けるがいい、と彼は好意的に自らに言った。お主が私のペリンデのすべての大天使どもや、天の軍勢と共に追いかけて行っても、 — お主は私の婿殿を救えない。

そう言って、枢密顧問官は公園の奥深く入って行った。彼には馴染みの或る箇所である。後で汝らは来るが、しかしやはり来るのだ。狐よ、汝が鶯鳥を盗んだ。二回も穴を掘る者は、目的に達する。

「恵み深い奥方様が騎兵隊長殿をコーヒーにお呼びです」。

「有り難う、フーベルト。ほっといてくれ。コーヒーはいらない。病気だ」。

「アヒム、あなた病気なの」。

「ほっといてくれ」。

「フーベルトが言ったの、あなたは病気だって」。

「自分が言ったことは、承知している。私は病気ではない。私は永遠に後見されていくくない」。

「ご免なさい、アヒム。 — あなたの言う通り、あなたは本当に病気よ」。

「後生だから、ほっといてくれ。私は病気ではない。私はゆっくりしたいのだ、...」。

彼はすでにゆっくりしていた。フォン・ブラックヴィッツ夫人が去ってから時が経った。

さて彼は夫人が隣で、コーヒーを飲みながら、小声でヴァイオと話す声を耳にした。二人は、静かに、大きな声で話して欲しいものだ、さもないと、二人はある人本人について話しているという思いにつきまといられる。勿論二人は彼について話しているのだ。そんな囁き声では困る。自分は病気ではない。自分はそう夫人に言ったろう。いやはや、二人は、休みを欲している男が立ち上がって、一緒にコーヒーの席に着くよう仕向けている。ただ、自分達の意志を貫くために。

自分は決してコーヒーを飲まない。

しかしそんなに囁くべきではなからう、さもないとコーヒーを飲まざるを得ない。

「もっと声出して話せ」と騎兵隊長は怒って閉ざされたドアを通して吠えた、「囁くと全く苛々する。そんなひそひそ話しでは休めないぞ」。

「あの人達は何をしているのかしら」とフォン・テッショー夫人はフォン・クックホフ嬢に言った、「壁を作るつもりのようなね」。

両老レディーはそれぞれ自分の窓の席に座っていて、今日ノイローエで最も興味深い地点、刈り手兵舎を眺めていた（普段はこの時刻二人は眠っていた）。

「結果を待てる人は男よ」とユッタ・フォン・クックホフは答えた。しかし彼女にとって待機は難しかった、「ベリンデ、あなたの言う通り、壁に見えるわ」。

「一体何故壁を作るのかしら」と再び老レディーは興奮して尋ねた、「ホルスト＝ハインツが九十七年に刈り手兵舎を建設してから、この状態よ。この兵舎に見慣れている。それが突然変わるなんて。何の前触れもなく。ユッタ、お願い。呼び鈴でエリアスを呼んで」。

呼び鈴が鳴らされ、エリアスが来るまで、また眺められた。

「あの若者、所謂パーゲルさんが分遣隊を率いている。彼の顔にはどうも馴染めない、ユッタ。何故彼はいつも灰色地の上着を着て歩き回っているの。服で一杯の二個のトランクを持っていると言われているのに。 — エリアス、あの若い人は他のスーツを持っていないの」。

「いや、恵み深い奥方様、一個の衣裳トランクと一個のクーペ・トランクの中に有しておられます。絹のシャツもあって、騎兵隊長殿と同じようにすべてボタン留めのものです。絹製で、リノン[リンネル風]ではありません。しかし彼は着ません」。

「何故着ないのかしら」。

エリアスは両肩を動かした。

「ユッタ、あなた分かる。絹のシャツを持っていて、それを着ない若い人のこと」。

「ひよっとしたら自分のではないのかも、ベリンデ」。

「でも、トランクの中に持っているのよ、 — 何か臭うわね。 — ユッタ、約束よ、私が今言ったことを覚えていて。注意しましょう、彼が初めて絹のシャツを着るときは、

何かあるのよ。確かなことよ」。

三人の老人達は見つめ合った。目を輝かせて、好奇心一杯で、貪欲であった。生きていくうちにすでに腐肉を嗅ぎつける老いた猛鳥である。彼らは了解し合った。エリアスも十分に長いこと従者をしていて、同じように理解し、嗅ぎつけていた。

「あの若者は今朝早く、恵み深い御令嬢と一緒に公園へ行きました」と彼は言った。

「私の孫娘、ヴィオレット嬢とですか、間違いでしょう、エリアス。ヴィオレットは軟禁状態で、私どもの所にさえ来られないのに、...」。

「存じております、恵み深い奥方様」。

「それで」

「お二人はたっぷり二十二分間公園におられました、木々の背後、木々の下、前方の芝地ではありません」。

「エリアス、私の孫娘がですか、...」。

「お二人は煙草を吸われました。彼がご令嬢に火をやって、マッチではありません、自分の煙草からです。ありのまま申しています、奥方様。見たのです、一 その後は何も見ておりません、木々となりましたから。その後のことは何も申せません」。

三人は黙っていた。彼らは見つめ合い、再び、別々に見続けた、あたかも何か見つけれられた按配であった。

ようやく恵み深い老夫人が発した、「そのとき私の娘はどこにいたのです」。

「若奥様は事務所に行きました、一 フォン・シュトゥットマン氏の許です」。

二人の婆さんは座って固まっていた、今度は見つめ合うこともしなかった。それからエリアスは、釣り針にかかったと確信して、穏やかに言った、「騎兵隊長殿も事務所におられました、...」。

二人の女友達は、深い眠りから起きたかのように、ゆっくりと動き出した。フォン・クックホフ嬢は威勢良く咳払いをし、全く男性的咳で、エリアスに疑惑の視線を投げかけた、...。恵み深い奥方はむしろ窓から外を覗いていた。

「向こうの彼らは何をしているのです、エリアス」と彼女は尋ねた。

エリアスは覗く必要はなかった。事情を承知していた。たとえ事情を知らなくても、察知していた。「向こうではドアを壁にしているのです」と彼は言った、「犯罪人達を目にするには、奥方様の障りになりますので、...」。

「ドアを壁にしている、...」。

フォン・テッシュー夫人は座って固まっていた、これは侮辱なのか、優しい配慮なのか、見極めようとした。両方ともそれらしく見え、全くそれを判断する観点次第であった。

「郎党は兵舎からどのようにして出るのです」とようやく彼女は尋ねた。

「彼らは大きな共用部屋の二番目の窓を一つのドアにします」とエリアスは説明した、「丁度、茂みの背後です、いや、別な側、農園中庭の方へです、...。恵み深い奥方様にはもはや何も見えないでしょう、...」。

「私の婿殿は思いやりが何もないわね、私の眺望を石で塞ぐなんて」とテッシュー夫人は辛辣に始めた。

「騎兵隊長殿は何もご存じありません」とエリアスは急いで言った、「騎兵隊長殿は、一郎党が着いてから、すぐに家へ入られました。フォン・シュトゥットマン殿の指示

です、...」。

「フォン・シュトゥットマン殿はどうして刈り手兵舎への昔からの私の眺めを覆い隠すことにしたのでしょうか」とフォン・テッシュー夫人は熱くなって叫んだ。

「フォン・シュトゥットマン殿にはとても好ましい印象を抱いています」とフォン・クックホフ嬢は警告して言った。

「枢密顧問官殿が今日の昼、長く、フォン・シュトゥットマン殿と交渉されました」とエリアスが伝えた、「顧問官殿は一度とても大声を　－　発せられました」。

「そのことを考えたのは、ホルスト＝ハインツのとても思いやりのある所です」とフォン・テッシュー夫人は言った、「私は何も知らなかったけど、　－　私をびびりさせようと思っていたのね」。

彼女は物思いに耽って、刈り手兵舎の方を見やっただ。二段の煉瓦がすでに積まれていた。灰色地の若い男は二人の荘園石工と熱心に交渉していた。一人の巡査が好奇心を起こした顔で立ち会っていて、　－　四人皆が笑い出した。更に笑いながら彼らは皆宮殿の方、窓の方を眺めた。

恵み深い奥方は急いで顔を陽射しの中から退けた。　－　しかしこうしなくてもその窓台の上の彼女は、半ばカーテンに隠れていて、見えなかったことであろう。なお笑いながら両石工は荘園中庭の方へ走って行った。　－　若いパーゲルは巡査に彼の煙草箱を差し出した。兩人とも笑っていた。

ホルスト＝ハインツはこうすべきじゃなかったわ、と恵み深い奥方は苛立って考えた。一夏中荒涼とした壁を見つめるなんて。きっと私はこれらの犯罪人達皆についての話しを、彼らが何をしたのか、何故ぶち込まれたのか、聞くことになるでしょう、　－　でも彼らの外貌さえ分からない。私は是非、...

彼女は従者エリアスを向こうへ送って、改築は無用と知らせたい気になった。しかしその勇気がなかった。枢密顧問官、彼女の夫は、大抵は秘密裏の自分の計画が阻止されない限りにおいてのみ、機嫌が良かった。阻止されると神経を傷めるほどに吠えかねない。そうなるや青赤くなって駆けて行く。衛生顧問官ホートツプはいつも言っている。彼が卒中に襲われたら危ない、と、...

「顧問官殿を、私の許に呼んで、エリアス」と恵み深い奥方は穏やかに言った。

「顧問官殿は出掛けられました」とエリアスは伝えた、「戻られたら伝えましょうか」。

「いや、いや、今でなくちゃいけなかったけど」(ドア一枚はすぐに壁となる)、「[でも一度、エリアス、私の娘の許へお願いします。ヴィオレット嬢を一時間ほど私の許へ来させるよう伝えなさい、...]」。

エリアスは頷いた。

「私の娘が何か監禁状態のことを口にするようだったら、エリアス、慎重に、ごく控え目に、こう仄めかしなさい。ヴィオレット嬢は今日の昼、公園へ散歩されましたが、と、...」。

エリアスはお辞儀した。

「あの若者のことは、私の娘の前で何も言及しないようになさい」と恵み深い奥方は言った、「私の孫娘本人とそのことは話します」。

エリアスは、顔で、万事承知致しました、すべて上手く取り計らう所存でありますと示した。彼は更にご希望があるか、尋ねた。しかし更に願いはなかった。

エリアスは歩いた。厳かに、巨額の財産の所有者の常の如く、落ち着き払っていた。

「ヴィオレットが今日来ないなら、私が別荘へ行きます」と恵み深い奥方は精力的に反抗した、「たとえホルスト＝ハインツが叱っても。私の孫娘の評判を落としたくない」。

「私も一緒に行っている、ベリンデ？」とフォン・クックホフ嬢は緊張して尋ねた。

「まあ、見てみたいのよ。いずれにせよ、婿殿が家にいないときを待たなければならぬいわね。すぐに、ミンナがいなくて尋ねてみて。ひょっとしたらミンナは何か知っているかもしれない」。

若いパーゲルは一つ閃いたのであった。刈り手兵舎の五十人が笑った、五人の役人が笑い、石工達が笑った。―― 直に村全体が笑うことだろう。

最初気分はまことにピリピリしていた。このドアの壁閉鎖への命令は、フォン・シュトゥットマン氏による良い解決には違いないが、分遣隊への良い歓迎ではなかった。

「我々を見たくないのであれば、自分らの仕事のために我々を呼ぶ必要はないだろう」と囚人達は不平を言った。「我々が余りにひどくて、偉いさんの食料ジャガイモを掘れない方が、我々を見て気分を害することもないわけだ」と彼らは罵った。「どのようにして自分の金を稼いだか誰が知ろう。祈りでは積み木箱すら築けまい」と彼らは言った。

役人達は頭を振って、口を歪めた。彼らは思っていた、自分達は二、三の例外を除いて、―― とてもきちんとした分遣隊を有している、と。しばしば全く別の作業部隊がマイエンブルクから派遣された。郎党が上品に振る舞い、立派に働くとき、郎党に、彼らはただの囚人にすぎないと常々思い出させる必要はない。そうすれば囚人達は単に不穏になって、役人達の仕事は困難なものとなる。

しかしこのとき若いパーゲルがあることを思い付いた。そこで皆が高笑いをし、皆がにやりと笑った。「すると偉いさんは我々のために祈ることになるろう。偉いさんは毎日祈りを思い出そう」と彼らは言った。「この若者はまともだ、―― 偉いさんにはこのように対処する必要がある。成金は笑いものにする、―― これが一番だ」。

満足の余り彼らはまた歌い出したところであつたらう、何かを、例えば、「目覚めよ、この世の嫌われ者達よ」とかそんな、人々の耳にけたたましいものを放ちたかったことだろう。しかし彼らはこの若者に迷惑をかけたくなかった。満足した顔つきで彼らは板を切り、柵や道具柵に釘を打ち込み、下着を合わせ、数えた。今日はただ半分仕事日で、今日はまず整理をした。これは巡查長マロフケが必須のことと見なしているもので、すべて整理整頓し、すべて畳み、綺麗にした。―― 丁度家のマイエンブルク監獄と同じであった。すべての食器鉢に番号、すべての洗面器に番号、ベッドに番号、すべての床几に番号で、食卓のすべての席に番号が記された。

役人達の間で、難しい囁き声での、熱い協議が、つまり誰が誰の隣のテーブルに座るのが、誰をまとめて一室にするのが、最良かという協議がなされた。間違っって割り振ると、脱出の試みとか、反乱への兆しが生じかねない。

しかしこうしたすべての間、再三一人が抜け出して、ゆっくりと仕上がって行くドアの穴を見、問い合わせた。中の同行者はにやりと笑って尋ねた、「もうどれほど出来たのか。もう分かるか。それと分かるか」。

「奴等はようやく第六の段だ。いや、はっきり分かるのは、横桁になってからだ」。

フォン・シュトゥットマンもそれは分からなかった。彼は村から出て来た。結局ゾフィ

ーを見つけてはいた。しかしゾフィーは今回少しも彼の気に入らなかった。ゾフィーは強情で、意地悪く、嘘つきであった。

一体この娘はどうしたのだ。娘は全く変わっていた。枢密顧問官が背後にいるのか。確かに顧問官は何らかの仕方で苛立たせたのであろう。顧問官はそうする。一日中、顧問官はどうすれば我々が面倒なことになるのか、それのみを考えている。収穫がそうだ、…。顧問官にとってはチャンスだ。我々が打穀し、販売するものが少しでもあると、それはすべて顧問官には面白くない。すぐブラックヴィッツの許に行つて、隊長がまた愚かなことをしないようにしなければならない。いや、それにアマンダにも尋ねることにしよう。コヴァレフスキー嬢の話の裏には何があるのか、と。今日はそもそも何らかのまともな仕事ができそうにない。永遠に何らかな無駄口の後を追いかけて、鍋から火を遠ざけ、ただ吹きこぼれないようにするだけだ。こんなことなど思つてもみなかった。ー 本当にホテルよりもひどい仕事だ。

「これはまた何を考えているのだ、パーゲル」と彼は若干苛立って言い、石工達の作業を見守つた。「家畜小屋の裏にはまだ十分赤煉瓦がある、ー 何故この醜い白いセメント石が間にあるのだ」。

二人の男どもは顔を見合わせて、その石工髭の下でにやにや笑つた。しかしこの種の人々の流儀で、聞こえない振りをして、落ち着いて、壁造りの仕事を続けた。ピシャリと太いセメント粥が跳ねた。一人の巡査補佐が点検に頭を開口部から突き出し、フォン・シュトゥットマン氏を見つけて、素早く頭を引っ込めた。

「何だ」とフォン・シュトゥットマン氏はまことに苛立って尋ねた。

若いパーゲルは自分の上司にして友人を微笑して見つめた。しかし本来目だけで微笑していて、それで目は全く明るく輝いた。パーゲルは煙草を茂みに投げて、両肩を上げ、溜め息を吐いて言った、「十字架です、フォン・シュトゥットマンさん、...」。

「十字架とは何だ」とフォン・シュトゥットマン氏はとても苛立って尋ねた。というのは必要な仕事へのあら探しのような批判を彼は嫌っていたからである。

「ここです」とパーゲルは言って、指でドアの開口部を示した。

二人の石工がぷつと吹き出した。

フォン・シュトゥットマン氏は壁を見つめ、ドアの開口部、煉瓦を見つめ、白くなり赤くなつた、...

突然彼は明かりが点り、叫んだ、「これは十字架になると貴方は言っているのか、パーゲル」。

「もっと気に入って頂けると思っていました」とパーゲルはにやりと笑つて言った。「ただ滑らかな赤い壁は退屈な眺めです。そう考えました。しかし十字架が描かれれば、ー 十字架はいわば内省に誘います」。

石工達はまさに反革命的な熱意で壁を造っていた。彼らは十字架が禁止されないよう、できるだけ十字架を守ろうとしていたと言わざるを得ないだろう。

しかしフォン・シュトゥットマン氏も熟慮の一瞬の後、笑つた。「パーゲル、貴方は反抗児だな」と彼は言った、「まあ、余りにひどい印象を与えたら、白い石はいつでも赤く塗ればいい。すぐに仕上げるよう頼むぞ」と彼は石工達に言った、「一気に高く仕上げるのだ、分かつたか。何になるか、今はまだ多分宮殿から分からんだらうからな」。

「今はまだ分かりません」と石工達は言った、「横桁に取りかかったら、この若い殿方には少し離れて頂きましょう。向こうの方々が、人を送って来たら、私どもは言われたことをしているだけだと言うことにしましょう」。

「そんなことをしてみろ」とフォン・シュトゥットマン氏は命令するように説明した。彼はこの人々と一緒に領主一家に対し陰謀を企むつもりはなかった。

「パーゲル、聞き給え」と彼は先の士官候補生に向かって言った。「私はこれから別荘へ行って、ブラックヴィッツにここでのことを教える」。宮殿と刈り手兵舎との間をまとめる手の仕草をした。「貴方はその間、どんな状況下でも陣地を — 十字架を — エッヘン、 — 含めて、守るのだ」。

「十字架陣地を守ります、中尉殿」とパーゲルは言った。彼は踵を打ち合わせて、手を、頭には自分の髪の毛しか有しなかったので、額に置いた。彼はフォン・シュトゥットマン氏を見送った。氏は彼の言葉通りに別荘へは行かず、官吏の家へ入った。つまり中尉は、別荘では場合によれば、レディー達に会うであろうと思いついたのであった。それで汗かいたまま参上することはできなかった。少なくとも新しい襟を結ぶ必要がある。シュトゥットマンのような人の場合、新鮮な襟から新鮮な下着まではほんの一步である。それで中尉は上から下まで涼しく水を浴びることになった、 — この間に厄災が進行した。

フォン・シュトゥットマン氏が体を洗っている間に、災難は羽ばたきながら、別荘への道を横切って、村の最後の家々の背後にやって来た。

老エリアスは正しく見ていた。彼の雇い主は公園へ出掛けていた。我々はまだ何も新しいことを思いつかないときには、少なくとも、古い計画のうちやり遂げられていない計画を更に思いつくものである。枢密顧問官フォン・テッシュー氏もそのようなことを思いついた。躊躇わず、彼は自分の球状の、軽く赤らんだアザラシの目で、慎重に当たりを見回して、すでに一度夜近寄ったことのある公園の垣根の側の箇所へ向かった。以前と同様に道具としては自分の手しかなかった。記憶というものは不思議なものである。我々は記憶していたいことをやはり記憶している。それは夜のことであって、それ以来何日も過ぎていたけれども、枢密顧問官はどこに緩い小幅板があるか忘れていなかった。一回引き、一回突っ張り、一回押す、 — 垣根板から出て来る釘は目立った音を立てない、 — そして枢密顧問官はその小幅板を手にしていた。

少しばかり速い息をして、彼は周りを見た。再び彼の記憶は立派に働いた。彼は鋭く、当時アマンダ・バックス嬢が立っているように思われた茂みの方を見た。今、日中の明かりの下、彼はその藪はセイヨウマユミの藪と分かった。 — 茂みには誰も、男も、女も、立っていなかった。枢密顧問官は歩いて、その茂みの中に取り除いた小幅板を置いた。彼は茂みの周りを回った。茂みはすべて期待通りのことをして、 — 小幅板は見えなくなっていた。

満足して、枢密顧問官は頷き、アッティラを探しに行った。単に垣根に穴を開けるのは、顧問官の流儀ではなかった。そうすると鷺鳥はある日、多分丁度都合の悪い瞬間にこの穴を見つけるかもしれないという風に、ただ鷺鳥に任せるやり方となる。 — 今がこの時だ、いわばこの瞬間に鷺鳥は、騎兵隊長の胆汁の杯をこぼれるようにするその滴となるに違いないのである、 — 従って、今この時、枢密顧問官はアッティラを求めていた。

彼は鷺鳥を見つけた、 — その数一・五ダース、 — 白鳥の池の側の草原で、鷺鳥

は不機嫌にその公園の酸っぱい草を食んでいた。鷺鳥は訝しげな、興奮した悲鳴で、顧問官を迎えた。鷺鳥らは首をねじって、頭を脇に置いて、下から空色の毒を帯びて彼の方を盗み見て、意地悪くシュッと音を立てた。しかし枢密顧問官は、鷺鳥の方は顧問官のことを知らなかったとしても、鷺鳥のことを知っていた。この意地悪くシュッと音を立てる雌のレディー達は、儂い現象であった。この地上での神の代理人、この場合枢密顧問官のフォン・テッシュォー夫人であるが、この夫人が毎年鷺鳥を、三、四羽の育種用を除いて、家禽番の屠殺ナイフに任せるのであった。鷺鳥はこの地で休息の場はなかった。鷺鳥は単に顧問官の公園草地での儂い客人に過ぎなかった。大きく育つと、その若い肉は、燻製胸肉や塩漬けもも肉となった。

生き延びているのは、何世代も続いているのは、単にアッティラのみで、種雄の鷺鳥で、二十一ポンドの体重があった。気位高く、優越感を抱いて、この雄鷺鳥は自らを創造の中心と見なし、子供達に嘯みつき、怒って郵便配達人の自転車に向かって行き、転倒させ、最近ではますます露わにスカートから見える女性達の脚を憎んでいて、この脚についばみ、血に飢えていた。そのハーレムの厳格な支配者、完全なら国王にして権威のこの雄鷺鳥は、矛盾に少しも我慢出来ず、どんな追従も受け付けず、誰にも従わず、ただその鷺鳥の心に、

一 枢密顧問官ホルスト＝ハインツ・フォン・テッシュォー殿に対する優しい一席のみを設けていた。

二個の同じ思いの魂は互いに認め合って、愛し合っていた。

無分別な雌の群れから離れて散策しながら、多分鷺鳥どもの諸問題への何らかの考察に耽って、この雄鷺鳥は、良き友の到来に注目していなかった。さて、これに気付いて、この雄鷺鳥は一瞬その青白い勿忘草色の青い目で、大騒ぎしている群れの方を見やった。この雄鷺鳥は大騒ぎの原因が分かった。大きく羽を広げて、枢密顧問官にパタパタ音を立てて、向かって行った。

「アッティラ」と顧問官は叫んだ、「アッティラ」。

鷺鳥は興奮してががあが泣いた。雄鷺鳥はスピードを緩めずに、急いで向かって行った、…。その強烈な羽ばたきにぶつかって狼狽した雌どもは脇に飛び、よろめいた。一

枢密顧問官の脇にすり寄って、首を彼の腹に置き、頭を穏やかに太鼓腹をノックしながら、この雄鷺鳥は小声で優しくががあがと鳴いた。そのすべての音色に友に対する友の無条件の愛を伝えていた。

頭を斜めにして、ゆっくりと波状に首をくねらせて、鷺鳥の群れが周りに立っていた。

「アッティラ」と枢密顧問官は言って、その頭を、つまり鷺鳥どもが撫でられない箇所、くちばしの付け根のすぐ上を撫でた。軽い、眠り込むようなががあがの鳴き声を立てて、穏やかにこの雄鷺鳥は、静かに波打つ腹に押し付けた。それから撫でる指を煩わしく思っ、雄鷺鳥は突然器用に動かして、頭をチョッキとシャツの間に押し込み、静かに、完全に浄福な思いのまま、今一度至福の地上の幸せを味わっていた。

しばらく枢密顧問官はこの友人にこのような安らかな満喫を許さなければならなかった。彼は公園の草地に立っていて、夏の陽射しや夏の陰影で斑点を付けられ、葉巻をゆっくりとくゆらせ続けていた。かなり汗ばんだローデンスクロスの服の、髭の、赤い頬の老人であって、この現世の被造物であったが、この同じ被造物に喜んで自分の腹の許での安らぎを認めていた。

「アッティラ」と彼は時々、心地よく言った、「アテル」。

そしてチョッキの下から安らいだシュツという声が返事として響いた。雄鷺鳥のこの愛を裏切るとは彼には恥知らずなことに思えたであろう。親戚の者達への愛について、彼は、一 別様に考えていたのである。

しかし結局彼は穏やかにこの友を友から離れた。今一度彼はくちばしのにこ毛を撫でた。それから挑戦的に「アッティラ」と発し、この雄鷺鳥を突き放した。この雄鷺鳥は早速、小声で、自足してががああ鳴きながら、彼の後に従った。本の中に記されているように、そして子供のための絵本に見られるように、すべての鷺鳥が、鷺鳥の行進を始めた。最初は老いた卵用鷺鳥で、その次が大きく育った春雛の鷺鳥の子、最後は情けないのろまの鷺鳥どもであった。

そのように夏の公園の中、鷺鳥どもは散策して行った。事情を知らない見物人には陽気な光景であったろう。勿論家禽番ボックス嬢のような事情通には、不吉な予感に満ちたもので、頭を振ったことだろう。残念ながらボックス嬢は、この瞬間、村道ですでに遅刻しているフォン・シュトゥットマン氏をせき止めて、まさに抗議の言葉を述べていた。私の希望は、キッチンの仕事を解かれることではなかったのです。私は家禽番をしながらでも、その仕事はできます。それで給料を貰いたかった。金が入用なのです。でも枢密顧問官殿が仰有って、...

つまりボックス嬢は、何も見ていなかった。それに公園はこの時刻普段は誰もいない。田舎ではただ暗くなってから、公園には人が訪れる。かくて行列は誰にも見られず、気付かれないまま、垣根の隙間まで来た。枢密顧問官は脇に退いて、アッティラが垣根の穴の前に立った、...

「立派なソラマメ、汁気の多いソラマメがあるぞ、アッティラ。いずれにしろわしにはただのものだ」と枢密顧問官は説得して語った。アッティラは首を脇に置いて、自分の友を試すように見つめた。雄鷺鳥は、間近の優しい友を、不確実な遠方の餌よりも大事にしたいように見えた。素早く枢密顧問官は屈み込んで、腕で説明して穴を通った。「ほら、見ろ、アッティラ、ここは抜けるぞ」。

雄鷺鳥は掴みかかり、優しく、しかししっかりと赤らんだ黄灰色の頬髭の一房を噛んだ。

「まあ、行け、アッティラ」と邪険に枢密顧問官は言って、起き上がろうとした。上手く行かなかった。アッティラは固く掴んでいた。二十一ポンドの雄鷺鳥はしっかりと掴んでおれる。殊にそのくちばしを用いて、殊に髭を噛んでいるときには。枢密顧問官は無器用に深くうずくまっていて、正確に言うと、彼の頭は背中の端よりも低かった。この姿勢は年若な男達でも長く続くと不快なものである。それは、かなり気性の激しい老人で、卒中気味の者にとっていかばかり不快なものか。こっそり優しく雄鷺鳥は、多分鼻を通じて、ががああ鳴いた。というのは鳴きながらも頬髭の房を離さなかったからである。

「アッティラ」と枢密顧問官は懇願した。

雌鷺鳥どもは、彼の傾いだ体と尻を調べ始めた。

「我慢ならん」と枢密顧問官は呻いた。彼は目の前が黒くなった。一気に彼は立ち上がった。よろめき、目眩を覚えながら、彼は立っていた。頬は火のように燃えた。微かに非難してアッティラはががああ鳴いた。頬髭の房がまだそのくちばしに残っていた。

「忌々しい奴だ」と枢密顧問官は文句を言い、一気にその雄鷺鳥を垣根の穴から押しや

った。雄鷺鳥は甲高く抗議して鳴いた。しかしすでに雌どもも従っていた。垣根越しにただ友のみを見ていて、愛する余り雄鷺鳥は目にしていなかったものを、雌鷺鳥どもは目ざとく見つけていた。長いこと目にしていない広大な田畑である。鷺鳥どもは興奮して、ますます甲高く鳴きながら、その翼を広げて、労働者の家々の背後に広がるジャガイモ畑へ向かっていた、白い、興奮した騒がしい雲のような一行である、...

アッティラは雌鷺鳥どもがはるか先にいるのを見た。雄鷺鳥は道と餌を承知していた。友のことは失念した、一雌鷺鳥が雄鷺鳥より先に飛んでいいか。アッティラは翼を広げて、一ぱたぱたと飛び、ががああと鳴きながら、一行の許に急ぎ、追い越し、その先頭に立った。労働者の家々を後にして、田畑へ、広大な実っている田畑へと急ぎ行軍して行った。というのは急いでいたからである。鷺鳥どもは禁じられた道を歩んでいると承知していた。気付かれるとすぐに、厭わしい人間どもが棒や鞭を持って現れ、公園の酸っぱい草の中へ追い戻すと知っていた。だからといってより小声になることはなく、より急いでいた、...

一瞬更に枢密顧問官は白い鳥どもを見送っていた。それらは一層小さくなった。彼は頬を撫でた。頬髭が無駄なことにならなければいいのだがと彼は考えた。しかしいずれにせよ、自分は次の時間誰にも会わないようにするのが最良であろう。鷺鳥どもに何かが生じても、ベリンデが一人で立派に務めてくれよう。

彼は素早く公園の中を通過して、別な側に出て、田畑の畦を通過して、森の縁に向かった。風が彼に向かって吹いて来た。それ故彼は銃声を耳にしなかった。深く息をしながら、彼は自分の木々の影の中に立っていた。

若いパーゲルは今や石工達と共にすでに十字架の横桁にさしかかっていた。今やこれが何になるのか、かなり遠方からであっても、見間違えられないものとなっていた。それ故もはや笑われず、それ故もはやひそひそと額は寄せられず、それ故もはや宮殿の窓の方を盗み見ることはなくなった。

「あの方々はやはり座っていて、そっと覗いている」と石工ティーデは言った、「我らが盗み見したら、全くまずい」。それ故盗み見はされず、純粋に事務的に仕事がなされた。

しかしやはりまずかった。恵み深い奥方は自分に加えられた侮辱のせいで全身がぶるぶる震えていた。小間使いや娘達が宮殿の中を駆け回り、従者エリアスと枢密顧問官が交代に探された、...

「男の方々は、必要なときにはいらっしやらない」とユッタ・フォン・クックホフはしわがれた声で言った。

「あの人達は今日、最も神聖なものを嘲笑しています」と老夫人は呻いた、「でも、覚えていて、ユッタ、あの若者も監獄で終わることでしょう」。

「ヒイラギは苗木でも棘があります」とクックホフ嬢は証して、彼女の女友達に一杯のポートワインを注いだ。

散弾銃の銃声が二回遠方から響いて来た。しかし皆が騒いでいて、誰もそれに注意していなかった。

フォン・シュトゥットマン氏はその銃声をもっと間近で、全くの間近で耳にした。彼はようやくアマンダから別れて、彼女に今一度枢密顧問官と話しをすると約束した。さて彼はゆっくりと歩き、再び汗をかかないようにして、夏の午後の暑さの中、別荘に向かった。

至近距離で銃声を聞いたとき、彼は縮み上がった。ここ家々の間近で銃を放つとは何という阿呆かと彼は突然怒って考えた。

最初彼は、があがあ鳴きながら大騒ぎして道を逃げて行く鷺鳥どもと銃声とを結び付けて考えなかった。それから一羽の遅れた鷺鳥が悲しげに訴えて、多分撃たれた羽を垂らしている様を見た。それから緑の畑に三、四、五の白い斑点を見つけた。これらの斑点の一つはまだ足と頭を痙攣させていて、一 それから停止した。

しかしこれらは飼っている鷺鳥で、野生のものではないとシュトゥットマンは不思議に思った。彼はまだ少しもノイローエの事情すべてには通じていなかった。

この時、彼は別荘の地上階の窓辺に、手に散弾銃を持った騎兵隊長を見つけた。騎兵隊長は顔が雪のように白く、興奮して全身が震えていた。彼は友人を、友とは分からない風に見つめていた。それから余りに甲高い声で叫んだ、「私の義父によろしく挨拶を頼む、一 私から鷺鳥の焼き肉をどうぞだ」。

騎兵隊長はそう叫んだ。今一度、唇を震わせながら、シュトゥットマンを凝視した。そしてシュトゥットマンがまだ答えないうちに、窓をぴしゃりと閉めた。

「不幸、厄災、災難だ」とまだ全部を理解しないまま、シュトゥットマンは感じた。

彼は入口への二、三段を駆け上がって、呼び鈴を押すのを忘れていたが、それは問題ではなく、ドアは開いていた。小さな玄関の間には、フォン・ブラックヴィッツ夫人とヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツと老従者エリアスが立っていた、...

不幸が一人の男を襲う定めるときは、押し止めようもなくやって来る。子守娘のシュトゥットマンも、忍耐強いエーファ夫人もそれを押し止められない。恵み深い奥方がコーヒーのテーブルに座っていたままであれば、開いた窓から、敵側の、臆した鷺鳥どものがあがあ鳴く接近の声を耳にしていたことであろう。夫人は、短気に怒るひどい銃声を押し留めることができただろう。...しかしその時、従者エリアスが、恵み深いご令嬢は宮殿の恵み深いご夫人の許へお越し願えましょうかという知らせを持って来た、一 騎兵隊長を刺激してはならない、内密にエリアスと話す必要があるだろう、...玄関の間に出たところ、一 二分もしないうちに、厄災に満ちた銃声をした。

泣きながら恵み深い夫人はフォン・シュトゥットマン氏へ向かった。大きな苦悶のせいで、すべての縛りが消えて、夫人は彼の両手を握り、絶望して夫人は言った、「いや、シュトゥットマン、シュトゥットマン、すべてが壊れてしまった、一 夫が撃ってしまっ

た」。

「鷺鳥のことですか」とフォン・シュトゥットマン氏は尋ねて、周りの真剣な、狼狽した顔を見つめた。

「ママの飼育している鷺鳥で、パパの寵愛している雄鷺鳥のアッティラなのです。たった今亡くなって、...」。

「でも単に鷺鳥でしょう。この件は清算できましょう。...補償すれば、...」。

「私の両親は夫を決して許さないことでしょう」と夫人は泣いた。そして怒って言った、「この点がやはり夫のいたらない点です。ソラマメなんかのことではないのです。私の両親を傷付けようと思っていて、...」。

フォン・シュトゥットマン中尉は問い質すように見回した。しかし老従者と若い娘の真剣な顔は、一羽の鷺鳥の胸よりもここではもっと砕かれていると語っていた。

地下階の階段から穏やかにゴム底の靴で従者フーベルト・レーダーが上がって来た。彼は階段の側に立って、注意深い姿勢を保っていた。彼の灰色の、皺の多い顔は、無表情に見えたが、しかし用命を待っている風であった。彼は泣いている夫人にも、窓の外の殺害された犠牲の鳥どもにも、視線を向けていなかった。しかし彼はそこに出て来ていた。用命のときを待機していた。

「どうしたらいいのかしら。どうしたらいいのかしら」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は泣いた、「私が何をしても、両親には不都合だし、夫にも不都合だわ」。

自分の部屋からバネ仕掛けの悪魔のように騎兵隊長が出て来た。彼の顔はもはや白くなく、赤い斑点があった。言葉にならぬ憤怒から調子に乗った怒りの嘲罵への移行が明白であった。

「何という様だ」と彼は自分の妻に吠えた、「二、三羽の詰まらぬ鷺鳥のことで、従者達の前で喚くな。私は、...」。

「切にお願いするが」と怒ってシュトゥットマンは叫んだ、「君のご夫人に吠えないでくれ」。教師として教育的文言を追加した、「自分の妻に吠えるものではない」。

「まことに結構」と騎兵隊長は激して言って、抗議しながら周りを見回した。「百度も依頼し、懇願し、抗議して来ただろう。垣根を密にして、鷺鳥をしっかり管理し、私のソラメ畑へ入れないように、と。三百回警告して来なかったか、鷺鳥どもを一度でも見かけたら、事が起きる、と。それで今事が起きたら、妻は泣いている、あたかも世界が終わる按配だ。それに私の友が私に吠える。実にまことに結構」。

そして騎兵隊長は激して玄関の間の安楽椅子に、ボタンと音立てて座った。彼は長い震える指で、ズボンの折り目に触れ動かしていた。

「いや、アヒム」と彼の妻は嘆いた、「請負を撃ち碎いてしまった。パパはこのことを許さないでしょう」。

すぐにまた騎兵隊長は安楽椅子から飛び出た。彼に閃いた、「鷺鳥どもが偶然ソラメ畑へ出て行ったと思うかい。今日の出来事すべてから判断してだ。いや、鷺鳥どもは畑へ連れ出されたのだ。私を苛立たせ、刺激しようと思ったのだ。よろしい、一　そこで撃ったのだ」。

「でも、アヒム。それは証明できませんよ」。

「私が正しい場合、証明する必要はない、...」。

「負ければ、いつも賊軍だぞ、...」とシュトゥットマンは賢明に始めた、...

「私が賊軍になるか、見てみることにしよう」と騎兵隊長は叫んだ。この賢い文言で新たに激していた、「私は嘲笑を受けんぞ。エリアス、早速ソラメ畑へ行き、死んだ鷺鳥を引き受け、それらを私の義母へ届けてくれ。私からよろしくと伝えて、...」。

「騎兵隊長殿」と老従者は言った、「私はこちらに恵み深いご夫人の依頼で参っています。謹んで申し上げます、騎兵隊長殿、私は宮殿の使用人でありまして、...」。

「エリアス、私の申ししているようにするのだ」と騎兵隊長は強い声で語った、「死んだ鷺鳥を引き受けて、私の義母によしなにな、...」。

「私はしたくありません、騎兵隊長殿、私自身そうしたくても、その能力がないのです。五羽とか六羽の鷺鳥は年な私には多すぎます。アテル一羽だけで四分の一ツェントナーの重さです」。

「フーベルトの加勢を貴方に付けよう。フーベルト、それでは貴方が死んだ鷺鳥を引き受けて、...」。

「良い一日を、恵み深い奥方様、良い一日を、騎兵隊長殿」。従者エリアスは去った。

「ろくでなし、ー それで私の義母に私から懇ろによろしくと伝えるのだ。しかし言うことを聞かぬ者は、痛い目に遭う」。

「騎兵隊長殿からの懇ろなご挨拶を伝えます。しかし言うことを聞かぬ者は、痛い目に遭う」、従者レーダーは繰り返した。冷やかに[魚の]目は無表情に自分の主人に据えられていた。

「その通りだ」と騎兵隊長はより穏やかに言った、「荷車を使っても構わんぞ。農園中庭の男に加勢して貰え、...」。

「畏まりました、騎兵隊長殿」とフーベルトはドアの所へ向かった。

「フーベルト」。

従者は立ち止まった。彼は視線を自分の女主人に向けた。「何でしょう、恵み深い奥方様」。

「行ってはなりません、フーベルト。私自身が行きましょう。フォン・シュトゥットマンさん、一緒に行ってください。...恐ろしいやり取りとなりましょう。しかし救えるものを救い出すことにしましょう」。

「勿論です、恵み深いご夫人」とフォン・シュトゥットマン氏は言った。

「それで私は」と騎兵隊長は叫んだ、「私は、それではそもそも用無しか。全くの余計者か。ー フーベルト、即刻鷺鳥どもと出発し、さもないと解雇だ」。

「畏まりました、騎兵隊長殿」と従者フーベルトは従順に言った。しかし自分の女主人を見つめていた。

「今すぐ行け、フーベルト。さもないと叩き出すぞ」と新たな憤怒の発作に駆られて騎兵隊長は叫んだ。

「騎兵隊長殿の言う通りになさい、フーベルト」と恵み深い奥方は言った、「参りましょう、フォン・シュトゥットマンさん。エリアスより出来る限り早く両親の許に行く必要があります」。

果たして彼女は急いで行った。フォン・シュトゥットマン氏は玄関の間の二人の人影に視線を投げかけ、詮方なく、両肩をすくめて、エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人の後に従った。

「パパ」とヴァイオは尋ねた。彼女は、母親が二週間経過して初めて自分のことを失念する時を緊張して待っていた。「少し外に出て、泳ぎに行っていていいかしら」。

「そうだな、ヴァイオ」と騎兵隊長は言った、「あの二人は大騒ぎしている、二、三羽の鷺鳥のことで。どんな結末になるか教えよう。皆して昼の半分と夜の半分、話し続ける。その結果はすべて、以前の通りだ」。

「そうよね、パパ」とヴァイオは言った、「それで私は泳ぎに行っていていい」。

「おまえは、軟禁状態だろう、ヴァイオ」と首尾一貫した父親は説明した、「おまえの母親が禁じたことを許すことはできない。しかし私と一緒に構わない。少しばかり森へ行こう」。

「そうよね、パパ」と娘は言って、自分が尋ねたことに、際限もなく立腹していた。と

いうのは父親はきっと彼女のことを忘れるであろうからであった。

99

鷺鳥殺害の後

宮殿での交渉を困難なものにしたのは、殺害された鷺鳥どもではあった。鷺鳥どもが田畑窃盗の咎で戒厳令により射殺されたという事実ではなくて、一 この知らせは老エリアスが勿論いつになく、全く体裁も構わずに急行して宮殿の恵み深い奥方の許に届けられていて、従って周知のことであった。いや、その事実ではなく、殺害された鳥自体の死体、その身罷った魂、その幽霊が、常に新たに涙溢れるこの交渉の間さまよっていたのである。

彼らは四人、上の恵み深い夫人の部屋に座っていた。その部屋は高いシナノキの樹冠によって快適な夏らしい緑に包まれていた。石工のハンマーの明るい音が反響して、そのドアは壁に閉ざされ、十字架は、フォン・シュトゥットマン氏が行きがけに素早く指示を囁いて、赤く上塗りされていた。老枢密顧問官は相変わらず松林の中を歩き回っていて、幸い何も知らず、それで恵み深い老夫人を宥め、和解的気分へと導く時間があった、...

そしてフォン・テッショー夫人も今やその大きな安楽椅子により落ち着いて座っていて、ただなおときたま、そのハンカチを老いた、容易に労せず泣き溢れる目に当てていた。ユッタ・フォン・クックホフ嬢は時折、辛辣な格言、辛辣でない格言を述べた。しかし辛辣な格言を好んでいた。フォン・シュトゥットマン氏はとても神妙な、愛想の良い、少しばかり陰鬱な顔をしていて、時折、賢明な言葉を、鎮痛剤のように穏やかに放った。

そしてエーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人は、彼女の母親の前、その脚許に、一種の床几の上にくまっていた。すでにその座る席の選択によって、いかに自分は完全に母親に従属しているか暗示していた。彼女は、自分はすべての夫婦生活の教理問答の主な内容を諳んじていること、つまり、自分の夫達の罪悪、悪徳、愚行の償いをすべき者は、大抵妻達なのであるということを示した。一瞬たりとも、彼女は、自分がフォン・シュトゥットマン氏に別荘から出掛ける際に述べた文言、つまり、自分はまだ救えるものを救うつもりであるという文言を忘れていなかった。そして睫毛を震わすことなく、彼女は自分の母親に、主婦にとっては大したことではない事柄を、つまり鷺鳥殺害、煉瓦の十字架、囚人達、あるいは騎兵隊長について陳述させたばかりでなかった。その上また、女性ならば母親からさえも容喙されたくない事柄についても陳述させた。つまりヴィオレットの教育について、絹の下着を彼女が使用することについて、海ザリガニへの彼女の贅沢な嗜好について（「でも、ママ、単に日本の銀杏蟹に過ぎません」）、彼女の口紅について、彼女の肥満傾向について、彼女の余りに深いブラウスのネックラインについて陳述させた。...

「確かにそうです、ママ、もっと注意することにしましょう。仰有る通りです」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は従順に言った。

彼女は度胸のある女性だ、とフォン・シュトゥットマン氏は率直に認めた。彼女は震えず、彼女は躊躇わない。確かに勝者の負担は容易でないと感じている。しかしその点は何も気付かせない。しかし誰のためか、とこの注意深い同席者のフォン・シュトゥットマン氏は自問した。誰のために彼女はこの辛い忍従に耐えているのか。そのことを決して理解しないであろう一人の夫のためだ。すべてが無事にまた収まっても、今日勝ち誇ってこう

言うであろう夫のためだ、「だからすぐに言っただろう、何でもないことを騒ぎ立てるなど。分かっていたんだ、しかしおまえはいつも芝居がかっていて、私の言うことを聞かない」。

いかに速やかに、平和時と戦争時に築かれた長い戦友意識が、これらの時代とこれらの状況下では消えてしまうか、恐ろしいほどだ。フォン・ブラックヴィッツ氏は確かに格別輝かしい、とても有能な将校とは言えなかった。フォン・シュトゥットマン氏もそんな騎兵隊長とは思っていなかった。しかし信頼出来る戦友であったし、勇敢な男、快適な社交人であった。しかしその片鱗が残っていようか。彼は信頼できない、— 彼は自分の役人を田畑窃盗対策に送っていながら、盗人達が捕らえられると茂みの中に隠れる。彼はもはや戦友ではない、— 単にわずか上司に過ぎず、その上、不当に小言を言う上司だ。彼はもはや勇敢ではなく、むしろ妻を一人不快な交渉に出掛けさせる。彼はもはや快適な社交人ではない、— 彼はただ自分のこと、自分が受けた侮辱のこと、自分の有する心配事、わずかなものになっている金のことのみを話す。

フォン・シュトゥットマン氏が自らの許でこれらの考察を行っていたとき、そしてフォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長のこうした悪しきすべての特性は、すでに早くから根付いて存在していたものであって、不幸な時代故に余計に茎となって生長したものだとして認識していたとき、— この間フォン・シュトゥットマン氏は別な像を眼前に有していた。そこには騎兵隊長の夫人が座っていて、夫を臆病とすれば、夫人は勇敢であった。ただ自分のことを考えている夫に対して、夫人は戦友であった。上座に老夫人が座っていて、つき回る尖ったくちばしの萎びた無味乾燥なこの小さな鳥に対して、下座に若い、花と咲く夫人が座っていた。いや、彼女ははまだ若い、彼女は花咲いている。この田舎は彼女の幸を願っている、彼女は黄金色の小麦のように成熟している、魅力が夫人に広がっている、— 夫人は熟している。老夫人が深いブラウスのネックラインについて話したとき、やはり中尉は、素早く穏やかに息づく粗絹糸に一瞥を向けて、その視線を、見つけられた高校二年生のように伏せたのであった。

いや、フォン・シュトゥットマン氏は単にこの夫人の長所のみを見ていた。— 以前の騎兵隊長の友好的姿が歪んで、欠点の多いものに見えるにつれ、それだけ一層欠点がないように夫人は見えた。理論的に彼は、夫人は一人の女性であり、一人の人間である、それ故、すべての人間的なもの同様に欠点があると認めていた。— いや夫人にも影の面があるに違いない。しかし彼が自分の頭を隅々まで点検し得たとしても、彼は夫人に非難すべき点を見いだせなかったであろう。彼にとって夫人は欠点のない存在、天からの使者となった。— しかし誰に対する使者か、一人の阿呆、一人の胡乱な頭に対する使者だ。

彼女は何とこのすべてに黙って耐えているばかりでなく、いや、その上微笑までして、その上更に返事をして、母親の悔い改めへの説教を一つの対話に変えようとし、老いた一山の罪の者を快活な会話へ導こうとしている。いや彼女がこれをなしているのは、自分の夫のためではない、と突然フォン・シュトゥットマン氏は考えた。彼女がこうしているのは単に自分の子供のためだ。夫についての彼女の考えは私と変わらない。たった今夫の実像は玄関の間で見たばかりだ。そもそも夫とはもはややっ行って行けない。これはわずかに娘、ヴィオレットのためのものだ、...勿論彼女は自分が育った莊園を得たいと思っている。...

友に対する判決から裏切りまではほんの一步にすぎない。しかしフォン・シュトゥット

マン氏に対して斟酌してやらなければならないが、彼はこれらのことを明瞭に考えていなかった。この教師は自分の心の深淵にびっくりしたことであろう。フォン・シュトゥットマン氏は考えず、ただ見ていた。彼はこの花と咲く夫人を見ていた。彼より少しばかり低く夫人は座っていて、髪はうなじの上に高く結ばれ、うなじはピンと張り、そして屈した。美しく白い肩で、それらはブラウスの粗絹糸の下に消えていた。彼女は一方の足を動かした。絹の靴下の中の足首は美しかった。彼女は手を上げた。腕輪が微かにかちやかちや音を立てた。腕はむっちりしていて、非難の余地なく白い、――それはエーファ、昔からの永遠に若いエーファ[イヴ]であった。

彼女は彼の沈思し、分析し、計算する能力を麻痺させた。フォン・シュトゥットマン氏は三十五歳を越えていて、このようなことを今一度、このようなみずみずしさで、このような威力を持って体験するであろうとはもはや思っていなかった。いや彼はまだ、このことを体験しているとすら思っていなかった。彼は非難を受けずに座っていて、彼の目は何も察知させず、彼の言葉は慎重で、節度あるものであった。しかしそのことは彼の中で生じていた。

ただこれらの呪わしい鷺鳥の亡骸がなければ良かったであろう。いつも新たにこの撲殺された鳥どもの幽霊が次第に落ちて行く談話の中に紛れ込んで来て、老夫人の涙が新たに流れ出るようになった。再三従者エリアスや小間使い、家禽番ボックス嬢がノックして、別荘の従者が死んだ鷺鳥を持って来ます、――どこに置きましょうと尋ねた。再三フーベルト・レーダーは、何度拒絶されようと、突撃して来た。いつも別な箇所から、従者部屋出身のこの不可解な策謀家は、死骸を引き渡すべく、倦まず試み続け、――新たにこの発火物を運んで来た。

エーファ夫人の嘆願する視線を受けて、フォン・シュトゥットマン氏は決心した。彼は魅惑された部屋を去って、敷居を越え、夫人の視界から消え、再び彼は冷静な、思慮深いビジネスマンとなった。何年ものホテル勤めで奉公人達のすべての策略に通じていた。

彼は宮殿の地階が一種の防戦状態にあるのを見てとった。従者レーダーがすでに、従業員個々人のすべての許で、殺害された鳥どもの引き渡しに失敗した後、彼はこっそりそれを片付けようとし、窓台や地下室のドアの前に置こうとしているように見えた。ただ中の住人達が見張っていて、そのような試みはすべて挫かれていた。しかしラバのように頑迷に、完全に不可解なフーベルト・レーダーが、犠牲の鳥どもの台車を押す一人の日雇いを連れて、新たに宮殿を周回していた。灰色の目で、冷ややかに、冷静に彼は開いた窓を窺っていて、鶏舎とする可能性を考えていた。...

この狼藉にフォン・シュトゥットマン氏は終止符を打った。彼は宮殿の召使いを仕事場に戻し、少年レーダーを買収した。しかしレーダー氏は不可解、冷静、拒絶的であった。彼はフォン・シュトゥットマン氏をまともに受け取っていないように見えた。自分は騎兵隊長から、鷺鳥をここの宮殿に引き渡すよう厳命されています、――さもないと失職します。それに恵み深い奥方様もこの使命を了とされました。

フォン・シュトゥットマン氏が自分は丁度この恵み深いご夫人から、すぐこれらの鷺鳥どもと消えるよう命令を受けて来たのだと請け合っても無駄であった。フーベルト・レーダーは、このことを騎兵隊長の命令の帳消しと受け取る気配を見せなかった。では鷺鳥をどこに持って行ったらいいのですか。別荘ですか。騎兵隊長殿に即刻叱られましょう。

フォン・シュトゥットマン氏は本来ならこの従者レーダーをととても忠実な従者と見なさなければならなかったであろうが、しかし単に厭わしい強情者と思った。フォン・シュトゥットマン氏は再び上の大きな緑金色の部屋へ行きかけた。そこでの交渉を知る必要があった。 — それなのに、もうすでにここに五分間も立っていて、この阿呆驢馬を相手にしている。

とうとう彼は官吏の家までの行軍を命じた。日雇いが荷車をキーキー言わせながら従った。宮殿の地階からすべての顔がこの行列を凝視していた。従者レーダーは抗議しながら従い、 — フォン・シュトゥットマン氏は、自分が少しばかり滑稽な様であると感じた。

事務所でシュトゥットマンは電話を握った、「騎兵隊長殿と今話しをすることにする」と彼はより穏やかに言った、「貴方が自分の職のことを心配する必要がないようにしましょう」。

彼はクラंकを回した。心底冷静に従者レーダーは立っていた。別荘では誰も電話に出なかった。フォン・シュトゥットマン氏は電話のクラंकを一層熱く回した。憤怒の視線に従者レーダーに投げかけないわけに行かなかった。しかしその視線は彼の許で散った。従者レーダーは糺を塗られて蠅取りの周りの蠅の戯れを眺めていた。ようやく誰か、つまり料理女アルムガルトが電話に出て、騎兵隊長は恵み深いご令嬢と田畑へ出掛けたと伝えた。従者レーダーはこの結果を予期していたように見えた。

「それでは、鷺鳥を別荘へ運んでくれ、レーダーさん」とフォン・シュトゥットマン氏は穏やかに言った、「どこか地下室に置いたらいいだろう。この件は私が騎兵隊長と話しを付ける、 — 貴方は心配しなくていい」。

「私は鷺鳥を宮殿へ引き渡すよう言われています、さもないと首です」とフーベルト・レーダーは妥協せず、釈明した。

「それでは鷺鳥はここ事務所に置いていても構わん」とフォン・シュトゥットマン氏は苛立って叫んだ、「もう沢山だ。たとえもう一度私がこれらを殺さなければならなくなってもな」。

「済みません」と従者レーダーは丁重に反論した、「でも私は鷺鳥を宮殿に引き渡すよう言われています」。

「こん畜生」とフォン・シュトゥットマン氏はこのような頑迷さに苛立って叫んだ。

「こん畜生」と事務所のドアの前で、より強力な、より罵声に慣れた声が吠えた、「私の鷺鳥を一体どうしてくれたのだ。何故おまえの荷車に私の鷺鳥がいるのだ。誰が私の鷺鳥を殺したのだ」。

フォン・シュトゥットマンはその場に従者を立たせたまま、三回跳ねて事務所から出た。外にはフォン・テッショー老枢密顧問官が、憤怒で緋色になって立っていた。彼は撃たれた獅子のように吠えて、杖を振って、荘園石工のティーデを脅していた。石工は力なく響く文言で避けていた。

「お願いします、顧問官殿」とかの苦勞して習得した平静さを保ってフォン・シュトゥットマン氏は言った。この平静さはどんなホテルのヒステリー女性客を相手にしても崩れないものであった。「その男は鷺鳥とは何の関係もありません。私は、...」。

「貴方が私の鷺鳥を、私のアッティラを殺したのか。いいかな、教えて進ぜよう。即刻私の農園中庭から去ることだ。私の杖を放してくれ、貴殿」。

その杖はシュトゥットマンの顔の間近にあって、危険であった。しかしフォン・シュト

ウットマン氏は引き下がらず、素早くその杖を握って、鉄の意志で握り締めていた。

「お願いします、顧問官殿」と彼は頼んだ。一方相手はすでに青くなって、その杖を引っ張っていた、「こんな郎党の前で、...」。

「郎党も糞もあるか」と老公は喉をごろごろ言わせた。「貴方も郎党に構わず、私の鷺鳥を撲殺したんだろう。しかし申しておくが、貴方を一時間以上長くこの農園中庭に見たくない。ベルリンからやって来て、比類なく賢いという顔をして、左派の弁護士のように喋りよる、...」。

いや、この老枢密顧問官ときたら。彼はシュトゥットマンに対し、何度も味わった屈辱の敗北の仕返しができるかと大いに喜んでいて。半ば演技の怒りの炎の中、彼に対し悪態の限りを尽くせる。彼は余りに抜け目がなくて、フォン・シュトゥットマン氏が鷺鳥を殺したとは露思っていなかった。しかし全く放恣に罵ることができるようにとそう信じているかのような振りをした。

しかしフォン・シュトゥットマン氏は、なかなかこの鷺鳥虐殺の全体像を呑み込めず、確かに老公の強力な怒りがある程度もつともな事と思っていたが、しかし同時に、必ずしもこの怒りのすべては真正なものではないとも感じていた。突然彼は杖を放して、極めて明確に、老公が実際知らないことを述べた。「貴方は間違っています、枢密顧問官殿。貴方の婿殿が鷺鳥を撃ったのです。単に威嚇だったそうですが、しかし残念ながら、...」。

「嘘言え」と老公は更に怒って叫んだ、「真っ赤な嘘だ」。

「いずれにせよ、威嚇の発砲だったそうです、...」とフォン・シュトゥットマン氏は青白くなりながら言った。

「私の婿がか。嘘だ。私はたった今私の婿と三十分ほど森で会ったばかりだ。私の婿は鷺鳥のことを一言も言わなかった。私の婿が嘘をついていると貴方が主張したいのであれば、私の婿は臆病者となる。いや、貴方が嘘を言っている。貴方が臆病者だ」。

フォン・シュトゥットマン氏は、顔が雪のように白くなって、実際ここで即刻踵を返して、トランクにまとめ、より平穏な地区に、一 例えばベルリンに、旅立ちたい気持ちに大きく駆られた。あるいは老領主の足先にむごく体重をかけて、老公が即座に転倒するようにしたかった。ただ石工のティーデが立っていて、口をぽかんと開けて、鼻穴を丸くして、聞き耳そのものとなっていた。事務所には従者がいて、姿は見えなかったが、しかしすべてを聞いているに違いなかった。そしてすぐ間近に、次の茂みの背後に近接して、宮殿があり、ここも疑いもなく聞き耳を十分に立てていた。荒れ狂う老人はますます高飛車になっていたが、しかしフォン・シュトゥットマン氏はこの老公が荒れているのは単に、真実を知っている彼のことを侮辱するためであると紛れもなく感じていた。

実際、フォン・シュトゥットマン氏は、自分の能力をもっと豊穡な耕作地に振り向けたいと切望していた、一 それどころかそのような申し出の一通の手紙を二日前からポケットに有していた。しかも騎兵隊長は自分の義父に、この最新の英雄的行動について何も知らせなかったという知らせを耳にして、残りたい自分の思いが強くなることはなかった。(老領主がこの点、真実を語っているという点に関し、一瞬も疑念を抱かなかった。老公は本当に森で婿に会ったのであろう。そして騎兵隊長は一言もそのことを言わなかったのであろう)。

従ってフォン・シュトゥットマン氏がトランクまとめに官吏の家の自分の部屋に戻ら

ず、その代わりすぐに死んだ鷺鳥と荒れ狂う老人の所から、宮殿へ向かったのは、友への忠誠心からではなく、またその上の美しい寄る辺ない夫人への思い出からでもなかった。義務心からでもなかった。単にどこのまともな男にも生まれついている反抗心からであった。彼は、この老公が彼を永劫永久に追い払おうとしていることに気付いた。それ故彼は留まった。自分は自分の都合の良い時に去る。この老公が欲する時ではない。まさに今は違う。(そうどの男も言う)。

「貴殿は」と枢密顧問官は叫んだ、「何をするつもりだ。私の公園で何をしたいのだ。私の公園に入っはいかん、...」。

フォン・シュトゥットマン氏は無言で更に進んだ。今や、フォン・テッシュー氏は不利であった。自分の破門の呪詛を犯罪者に届けたいなら、この犯罪者を追いかけなければならない。駆けていると、息づかい自体が荒い男は、悪態が難しくなる。息を個別に吐きながら、その間に枢密顧問官は叫んだ、「私の公園に ー 入っはいかん、 ー 私の家に入るのは許さん、 ー エリアス、彼を入れるな、 ー 家宅侵入罪だぞ、 ー 階段を上上げるな」。

パタンと上の彼の妻の部屋へのドアが閉まった。

彼のエリアスに合図して、老領主はほとんど全く普通に尋ねた、「彼は何をしたいのだ」。

「若奥様がいらっしゃいます」。

「家宅侵入罪だぞ」と枢密顧問官は今一度吠えた。それは退却を守るための砲撃であった。「もう長くいるのか」と彼はすかさず囁き返した。

「二時間以上になります」。

「それで、フォン・テッシュー夫人の方は」。

「それが、恵み深い旦那様、お二人とも泣いていらっしゃいます、...」。

「忌々しい」と老公は囁いた。

「パパ」と上から、下の彼に穏やかに声がした、「上の私どもの所に上がって来ない」。

「それどころではない」と彼は叫んだ、「アッティラの埋葬だ。鷺鳥の殺害者どもが。忌々しい」。

カタコトツカタツ。彼女の靴が素早く階段を下りて来た。あたかも彼女は相変わらず十七歳で、まだこの家に暮らしていて、かの遠い、幸せな時代にいるかのようであった、...。

「パパ」と彼女は言って、彼の腋を掴んだ、「パパの助けが必要なのだ」。

「殺害者どもは助けられん」、そして激して、「奴を家から追い出せ。奴が上にいる限り、一歩も動かん」。

「だから、パパ、来てよ」。

すでに彼は一歩階段に置いていた。

「良くご存じでしょう、フォン・シュトゥットマンさんは最も上品で、最も頼りになる方だ。私の前で本心を隠さなくてもいいのに」。

最後の言葉は若干別の響き、余所余所しい、悲しげな調子であった。

老領主は言った、「年は取りたくないな、エーファヘン」。そして憤然と肩越しに叫んだ、「エリアス、フォン・ブラックヴィッツ殿が、私の所謂婿が来たら、私は彼とは会わんと伝えろ。どうぞ別の請負を探してくだされとな、 ー それも今日のうちに」。小声で自分の娘に言った、「エーファヘン、自分の好きなように私はなるとおまえは思っ

るんだらう。しかしそれはただ、婿殿がノイローエは離れたときのみだ、分かったか」。

「静かにすべて相談することにしましょう、パパ」とエーファ夫人は言った。

「そうだな、私を説得したいんだらう、エーフヘン」と老公はぶつぶつ不平を言って、彼女の腕を取った。

100

騎兵隊長とヴァイオは一つの発見をする

つまり、フォン・テッショー枢密顧問官は次の点に関し、実際本当のことを話していた。彼は自分の婿と森で出会っていて、両人は三十分も一緒には話さなかったけれども、それでも全く友好的にお互い「今日は」と言っていた。それから続いた会話の五分の二は、獐鹿についてで、五分の三は、祖父が長いこと会っていなかった娘ヴィオレットについてであった。それで鶯鳥虐殺について報告する時間は残っていなかった。－ テッショーの主張の中のこの点も正しかった。

しかしフォン・シュトゥットマン氏がまさにこの沈黙のせいで、彼の以前の友人ブラックヴィッツを更に低級に評価して、それどころか自分の内心で臆病者と誹ったとすれば、それはほとんど正しいことではなかった。騎兵隊長は臆病ではなかった。しかし気まぐれであった。－ 彼は実際そうであったのである。子供靴を卒業したばかりの小娘のように気まぐれであった。最初の子供を孕んだ若い妻のように気まぐれであった。子供を持ったことがなく、子供を作るつもりもないブリマドンナのように気まぐれであった。つまり騎兵隊長殿は一人の女性のように気まぐれであったのである。しかし臆病ではなかった。

自分の義父に即刻、鶯鳥のことすべてを話し、すべての想定される結果を何も顧慮することなく、義父との激烈な闘いに陥ること、このことは、彼が闘う気分にあったならば、何ら彼にとって問題とならなかつたであろう。しかし午前中と午後のかんりの部分、自分の闘争気分を満喫した後では、彼は今や和やかな気分であった。

騎兵隊長は日中消耗していた。散弾銃による二回の射撃で、彼の憤怒気分は発散されていた。騎兵隊長は汗をかいたローデングロス服の老人を見つめた。この老人の額は汗の玉が浮いていた。

お主は、明らかになるであろう事件を知らされたら、もっと暑くなることだろうと騎兵隊長は考えた。そこで自分の義父に、ヴァイオの軟禁状態を緩和して、娘が祖父母の許へ伺う許可を出せないものか、エーファと相談することにしましょうと丁重に約束した。

「かなり痩せて、青白く見えるぞ、ヴァイオヘン」と祖父は言った、「お出で、嬢ちゃん。老いたジージに接吻しておくれ。－ いや、そんなに突進するな、まずはちょっと汗を拭かんとな」。

老人はズボンからとてつもないハンカチを引き出した。聖フベルトゥスの権標をプリントしてあるカラフルなものである。

立腹して騎兵隊長はそれを見、それからそっぽを向いた。彼にとって何か腹立つものと思われるのは、プリントした木綿のハンカチのこの卑しい老人が、自分の娘との接吻が許されたりすることであり、あるいは情けない契約で自分をつねったり、つまんだりできることであった。騎兵隊長は唐檜の中を覗いた、それらの球果の間を陽を受けて小鳥が時折

羽ばたいた。しばらくしてから彼は素っ気なく尋ねた、「それではお別れしてよろしいでしょうか」。

「いいとも、尊敬する貴台」と老公は陽気に甲高く言った。老公は彼の婿殿の感情を明瞭に察知していて、婿の「上等志向」からすでに幾多のことを純然と吸い取り、楽しんでいた。「じゃ、もう一度、ヴァイオヘン、じいちゃんの胸へお出で」。彼はベルリンのソーセージ売りの酔っ払った声の調子で叫んだ、「まだ温けえぞ、それに太いんだぞ、...」。

「じゃ、行こう、ヴァイオ」と騎兵隊長は鋭く命じた。（この老公とは、腹を立てずには、五分と一緒におれない）。

「行きなさい、ヴァイオヘン」と老公は甲高く言った、「私はまたしても、おまえの父親にとって、上等とは言えんのだよな。私の荘園は、父親にとって、上等に見えており、おかしなことだ」。

この直射の後、老公は急いで去った。満足してぶつぶつぶやいていた。

騎兵隊長はしばらく娘の横を黙って歩いていた。一 従って彼は再び不機嫌になっていた。しかし立腹するつもりはなかった。立腹はもう沢山だ。強引に彼は義父に対するすべての考えを頭から追放した。そして切に買いたいと願っていたホルヒ社の高級車のことを考えた。彼はこの車をこの秋、最初の打穀の後、是非とも購入する予定であったが、一 しかし勿論計算に強いシュトゥットマンが今朝すべての見込みを砕いたのであった。何故か、一 単にこの反吐の出る老いぼれが、ペテンの契約で彼を騙っていたからである。

「おまえのお祖父さんにはいつも腹が立つ、ヴィオレット」と彼は嘆いた。

「でもお祖父ちゃんはそのつもりではないのよ、パパ」とヴァイオは彼を慰めた。そして自分の考えていることを口に出した、「ねえ、パパ、尋ねたいことがあるの、...」。

「奴のつもりなんて。奴は言っていること以上のことを意味しているのだ」。騎兵隊長は苛立って杖で道端の雑草を叩いた。「で、何を尋ねたいのだ」。

「イレーネが手紙を寄越してね、パパ」とヴィオレットは大胆に嘘を言った、「グステル・ガルヴィッツ[嬢]は結婚するつもりなんだって」。

「そうかい」と騎兵隊長は無関心に尋ねた。ガルヴィッツ家はポメルン地方に居を構えていて、ブラックヴィッツ家とは親戚でも義兄弟でもなかったからである。「誰とだい」。

「あら、知らないけど、誰とだか、一 パパは知らないわね、少尉とか。でも私が尋ねたいのは、パパ、...」。

「帝国国防軍のか」。

「知らないけど、そうだと思うわ。でも、パパ、...」。

「だったら若干財産があるんだろう、それともガルヴィッツ家はその娘に持参金を持たせるか、...。夫が少尉として貰う端金では二人はきつと暮らしていけないだろう」。

「でもパパ」とヴァイオは絶望的に叫んだ。父親が絶えず違う話しの道筋に進んで行くからであった、「そんなことじゃないの。全く別のことを尋ねたいの。グステルはね、私とは年が違わないのよ」。

「そうか 一 それで」と騎兵隊長は分らず尋ねた。

「でもパパ」とヴァイオは叫んだ。（彼女は、母親とはこの会話をしてはならないと良く分かっていた。母親はすぐに臭うぞと気付いたことであろう。しかし善良なパパはこれ

に気付かない)。「グステルは十五歳になったばかりよ。十五歳で結婚していいの」。

「駄目だ」と騎兵隊長はきっぱりと説明した、「全く不可能だ。それは未成年誘惑、...」。彼は唇を噛んだ。「いや」と彼は言った、「それは許されない。しかも刑法に定められている」。

「刑法に何と定められているの、パパ」とヴァイオはびっくりして叫んだ。

「おまえのような小娘はまだそのような事柄は知らなくていい」。騎兵隊長は少しばかり快活さを装ってブレーキをかけた。丁度都合良く、エーファ夫人がヴィオレットとの父親とのこのような会話を不満に思っていたこと、それどころか、夫人は、ヴィオレットは両親が思っているほどもはや全く無邪気とは言えないと疑っていたことを思い出した。それ故彼はとにかく陰気な表情をして付け加えた。「十五歳の娘と付き合う輩は、屑だ、刑務所に入る、 — そう刑法に書かれている」。

「でも男の人は、相手がやっと十五歳だと知る必要はないでしょう」とヴィオレットは興奮して叫んだ。

騎兵隊長は立ち止まって、娘を見つめた。「少女と付き合っ、何歳かすら知らない者は、それだけでも屑だ。そのような奴は弁護できない。ヴィオレット、さあ行こう」。

二人は更に進んだ。騎兵隊長はすでにまた義父のこと、そしてホルヒ社の車のことを考えていた。 — これはどうにかしないといけない、知人は皆車を一台持っている。自分のみが、...

「でもパパ」とヴィオレットは用心して新たに始めた、「その人はグステルと結婚したいのよ。やっと十五歳であっても、結婚できるのよね、...」。

「上手く行くときは、上手く行くだろう、 — その男があんじょうすればいい」と騎兵隊長は苛立って叫んだ。「内務大臣に請願すればいいのだろうが、私の知ったことか。いずれにせよ、私だったら、娘には許さん」。

「私は望んでいないのよ、パパ」とヴァイオは笑った、「私が望むと思う、パパ。私はパパと森を歩いて、嬉しい。他の男達は皆厭わしい。パパだけは別よ」。

彼女は彼の腕を取って、彼に身を擦り寄せた。彼は騎兵隊長のヨアヒム・フォン・プラックヴィッツに違いなかったろうから、娘に簡単に騙された。

「ヴァイオヘン、おまえは男のことは頭がないな。すでに十回もママにそう言っているぞ」と彼は満足して叫び、彼女の腕を力強く抱いた。

「まあ、パパ、痛いわ。 — でもね、パパ、グステルの件はとても興味があるの。イレネが書いているから、本当に違いない。そのことすべてを教えて、パパ、法律のこととか、二人がしなければならぬことすべてを、...」。

「まだ何かあるのか、ヴァイオヘン。女どもは皆同じだ。結婚の話しになると、山羊のように好奇心を起こす」。

「パパ、山羊だなんて。私は山羊じゃないわよ。 — でも内務大臣が『いい』と言ったら、父親も『いい』と言わなければならないの」。

「何を言っている」と騎兵隊長は尋ねた。彼はこの忌々しいポメルン地方の結婚の関連が相変わらず呑み込めないままであった。「父親がまず内務大臣に結婚の許しを請うわけだ」。

「父親なの。グステルではないの」。

「娘はやっと十五歳だろう。いいか、まだ成人ではない」。

「それではその彼が内務大臣に請願したらどうなるの、つまりその少尉が」。

「親父のガルヴィッツの許可なしにはグステルは結婚できない。奴が許したことがそもそも不思議だ」。

「できないの、パパ」。

「そうだな、いずれにせよ二十一歳になるまではな」。

「どうしてそれより早くは駄目なの。だって十七とか十八で結婚している人は沢山いるでしょう、パパ」。

「何を言うのだ、ヴァイオ。混乱してくるぞ。 — この連中はまさにまさに父親の許可を得ているのだ」。

「許可がないと、...」。

「許可がないと」と騎兵隊長は叫んだ、「そもそも育ちの良い娘は結婚しない、分かったか、ヴァイオ」。

「勿論よ、パパ」とヴァイオは純白無邪気に言った、「パパは何でも知っているから、聞いているだけよ。それにパパほど上手には誰も説明してくれないし、ママでさえできない」。

「本当になあ、ヴァイオ」と騎兵隊長は言った。すでに半ば融和的であった。「雌牛に子牛のことを聞くようにこまごま尋ねよる」。

「すべてはグステルのせいで知りたくなかったの。つまりね、イレーネの手紙では、父親のガルヴィッツは少しも了解してくれないけど、少尉の意志が固く、グステルもそうなんだって。 — 二人はどんな事情にしろ結婚したいのだから上手に行くことになるだろうて、パパ」。

「そうだな、ヴァイオ」と父親は語った、「彼女が、劣等な、従順でない娘であるならばだな、彼女は彼と駆け落ちして、二人はイギリスへ行く。そこには鍛冶屋がいる。この鍛冶屋は二人を結婚させられる。それで結ばれるのだ。しかしこれは駆け落ち婚だ。 —

このような娘は二度と両親の家に入れない。それに少尉は制服を脱がなければならず、二度と将校になれない、...」。

「でも二人は正式な結婚ということになるの、パパ」とヴァイオは甘美に尋ねた。

「その通り、正式な結婚だ」と騎兵隊長は真っ赤になって、叫んだ、「しかし両親の祝福は得られない」（騎兵隊長は教会に行ったことがなかった）「両親の祝福があれば子供達には一軒の家が建ち上がるが、しかし父親の呪詛の場合、それは碎かれる、あるいは聖書にもあるようにな」（堅信礼の時以来、騎兵隊長は聖書を二度と開けたことがなかった）

「それで、ヴァイオ、おまえを阿呆な考えに導いた、この二人の馬鹿娘どもに、二度と手紙を書いてはならん。家に帰ったら、すぐその手紙をパパに渡しなさい」。

「そうよね、パパ」とヴァイオは従順に言った、「でも手紙はもう破ってしまった」。

「抜け目ない娘だ」と鈍い父親は不平を言った。

そこで両人は黙って森の中を進んで行った。再びまた不機嫌になった騎兵隊長は、まず自分のホルヒ社の車のことを考えようとして空しかった。再三その間に妨害的思考に襲われた。彼がやっと集中して、内装のことを考え出し、クッションとか革とかどの色がいいかと真剣に問うて行くと、 — ようやく再び落ち着くことができ、快適に美しい夏の

森の中を散策できた。幸いとうとう黙した、時にはまことに女らしい娘の横にいたのであった。

同様にヴィオレットも快適に父親の横を歩いていた。というのはようやく彼女は自分が長いこと知りたかったことを知ったからである。つまり自分の少尉と結婚する可能性が見えたのである。父親が更にその他言ったこと、両親の呪詛とか、制服剥奪、これらはこの新たな素晴らしい知識の前ではいとも容易なものであった。本当にこのことを考えてみると、自分は父親を手玉に取ることはいつでもできよう、結婚後にそうできないことがあるかと思うのみであった。それに自分のフリッツはとても器用だから、本来何にでもなれるだろうし、少尉である必要もない。自分は一人っ子だから、承知しているように、いつかこのすべてを継承することだろう、それで彼もすぐここで農園経営ができよう。それで絶えず自転車で国中を駆け回る代わりに、パパの加勢をすればいい。

そのように娘は頭と心の中で思いを巡らせていた。しかしその思いに気付いていなかった。その代わり未来全体が彼女には五月の枝で飾られた鏡のように見え、その鏡の中に自分の輝く顔を見ていた。今日はすでに二回屑という言葉が耳に残ったけれども、彼女は全く気にせず、少しも憂慮しなかった。ここではユッタ・フォン・クックホフ嬢の格言の宝庫から、愛は箒の柄も緑色にする[あばたもえくぼ]と言えたかもしれない。彼は彼女に対する愛故に屑となったのだから、彼女の愛の力で即刻彼の屑力を許そう。いや彼女はそれどころか、彼が彼女のためには刑法も刑務所をも恐れなかったその胆力を称賛する始末だった。

しかしこうしたことすべては単にぼやけて、明瞭な形にならず彼女の心に浮かんでいた。彼女がより一層明確に目覚めて夢想していたものは、水路陸路での遠い国イギリスへの秘かな逃避行であった。突然彼女はママの許で英語を更に勉強したことを喜んだ。というのは今や向こうの人々と話しが通じるであろうからである。そしてはや戦争がないことを喜んだ。というのはさもないとイギリスでの彼との駆け落ち婚ができなくなるであろうからであった。

そこですぐに結婚司祭の鍛冶屋が思い浮かんだ。まさに鍛冶屋が司祭だそうだ。彼女は小さな鍛冶工場を考えた、ここノイローエの荘園鍛冶工場とそっくりで、ドアの前では馬が小さな屋根の下、繋がれていて、馬は蹄鉄されているそうだ。ドアの右手には大きな車輪が立てかけられていて、タイヤを嵌めることになっている。そしてまさにドア越しに鍛冶屋の火が公然と見え、火は轆から吹き付けられて赤く輝く。 — そこへ鍛冶屋がドアから出て来る、大きな黒々とした人で、革の前掛けをしていて、その金敷の上でヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツとフリッツ少尉の結婚がなされる。

いやこのグレットナ・グリーン[スコットランドにある駆け落ち婚のメッカ]の不幸な鍛冶屋ときたら、 — 鍛冶屋がまさに司祭でなければならないなんて。それが煙突掃除人とか仕立屋であったら、二世代にわたる人々の頭にかくも多くの不吉を、あるいはすべての絶望したうら若い恋人達の最後の希望を、築き上げることはできなかったであろう。

しかし鍛冶屋は、 — 役所事務的書類世界の中で、その書類を入手できなかったすべての者達にとって、先の世の、鉄と血、肉とハンマーの歌の勇者のように、神々しい権利に基づいて結婚を司る。書類の権利に基づいてではない。

この鍛冶屋は、この手数料太りの結婚司祭は、多くの頭を虜にした。 — 更になおヴ

アイオの頭を虜にしないはずがあるか。彼女は鍛冶工場を見た。彼女は鍛冶屋を見た。この人は結婚を司祭でき、司祭する。だから今やもはや何も内密なこともなく、何も絶望的な待機も、軟禁状態もなくなり、恥知らずの従者レーダーも破廉恥なパーゲルさんもない。ただ残っているのはフリッツのみで、朝も昼も夕方も、日中も夜も、毎日、日曜日も彼のみである、...

そしてこれらの夢はとても美しく、ヴァイオをはなはだ巻き込んだ。そして彼女は温かい、庇護された網の中に取り囲まれて、彼女はもはや道も父のことも考えず、全く自己没却して、小声で思わず口ずさみながら散策した。娘の場合は少尉で、父親の場合はホルヒ社の車、兩人ともそれぞれの年齢にふさわしい夢を見ていた。

それで一人の男が茂みから出て来たとき、兩人とも同じように驚いた。かなり千切れた灰色地の制服の男で、頭に鉄兜を被り、腋に銃を持って、ベルトにはピストルホルダーばかりでなく、半ダースの手榴弾も有していた。

この男がとても決然と「止まれ」と命じた。

枢密顧問官との苛立たしい邂逅の後、騎兵隊長は人を避けたい思いで、いつのまにか森の奥深く侵入していた。とうに父親と娘は途中まで進んでいた区画線を離れていて、一種の忍び猟道を通して、人里離れた森の一角へ踏み込んでいた。単に「黒い奥」と呼ばれる所であった。ここ、テッシュ一家の森の猟区の最も外れた境界地は陰気に荒れ果てて見えた。木樵達も、伐採し、間伐するためにはほんのまれにしか来なかった。他はほとんど平らな土地も、ここでは波打って瘤状で、これらの小さな谷の間には、その窪地から湧き水が湧き出ている、それはまさに十分に力強く、乾燥した夏も持ち堪えて、一つの沼地を形成していて、そこに猪がそのほとんど無敵の避難所を作っていた。唐檜や樅は高く聳えて、暗く、広大にブラックベリーが鬱蒼とした藪を形成していた。一 野獣にすらここでは何か得るのは難しく、黒い奥は余りに密であった。

そしてこの人里離れた深い森のその最中に、一人の重装備の男が立っていて、全く何の法的根拠もなしに、ここの所有者の婿に「止まれ」と語った。それにその響きも丁重ではなかった。

ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツは最初驚いて小さな叫び声を発した。しかし今や彼女は静かに立っていたが、しかし深く息をしていた、一 何か彼女に、この兵士は彼女の少尉と関係あるに違いないと語るものがあつた。長い別れの後、ひよっとしたらそれどころか会えるかもしれないぞ、と...

しかし騎兵隊長は、最初驚いてただ「何だ」と発したのであるが、森でのこの「止まれ」に対し、本来は彼がこのような命令を最初にするべき者であつたろうが、少しも、想定されるほどには怒らなかつた。というのはこの無礼な命令を発した男は、制服を着ていて、騎兵隊長は制服を着ていなかったからである。そして騎兵隊長はある文言の信奉者であつた。つまり制服を着た者は、すべての民間人に命令してよろしいという文言である。この文言を母乳の時から吸い込んでいて、自分の将校生活を通じて真実と思つて来た。一 それで彼は実際すぐに立ち止まり、歩哨を見つめ、どういうことになるか待つた。(黙つて待つこともその心得である。勿論まことの民間人は好奇心で尋ねていたことであろう。古参の男は黙つて待つ)。

そして、その通り、この男は、兩人が何の抵抗の表情も見せず、逃げないと分かると、

彼は口に小さな笛を置いて、吹いた。甲高過ぎもせず、弱過ぎもしない音であった。

それから彼はまた笛を下ろして、全く友好的に言った、「少尉殿がすぐに参ります」。

騎兵隊長はこの久しく経験していなかった軍事的経過に平常心をなくして囚われていた。それで自分の娘の少しばかり奇妙な様に気付かなかった。娘は赤くなったり、青くなったり、彼の腕を取ったり、また放したり、息を呑んだり、またほとんど笑ったりしていた、...

しかし騎兵隊長はこのようにことに皆目注意していなかった。彼はただ退役した将校が喜ぶように、すべての民間人的怒りの後、軍人的演習に参入できて、喜んでいた。彼は歩哨を好意的に見つめた。歩哨はまた、赤くなり青くなるヴァイオを好意的に見つめていた。

そこに茂みの中、物音がした。一 笛が吹かれたのは無駄なことではなかった。すべて符号していた。一 少尉殿が出現した、パサパサの頭と鋭く冷たい目の痩せた男で、顎になびく、赤らんだ髭を有していた。ヴァイオは彼を、次第に大きくなる、次第に輝いて行く目をして眺めていた。というのは今やまさに正真正銘のあの少尉が遂に現れたからである。彼女の少尉であった。

しかし少尉はヴィオレットを見なかった。彼は騎兵隊長も見なかった。彼は歩哨に近寄った。

歩哨は伝えた、「二人の民間人です、少尉殿」。

少尉は頷いた。そしてあたかも今ようやく兩人に気付いたかのように、彼はその鋭い明瞭な視線を二人に向けた。

フリッツが鉄兜も被っていないのは残念だわ。一度鉄兜姿の彼を見てみたいとヴィオレットの頭の中で去来した。

しかし少尉は単にその戦闘帽の下から兩人を思案して見つめていた。彼はヴァイオを知らない風に見えた。彼はまた騎兵隊長についても何も知らないように見えた。彼は冷静に尋ねた。「貴方は誰です」。

騎兵隊長は生気が戻って、自己紹介をし、軍人的に短く、自分はこの所有者の婿で、この所有者の森を散策しているのであり、疑いもなく帝国国防軍であろうこの軍事演習を喜ばしく思っていると伝えた。...

「忝い」と少尉は短く言った、そして付言した、「どうぞ同じ道を、同道して来られた道を、遅滞なく引き返して頂きたい。是非ともここで遭遇したことについては沈黙をお願い申し上げます。国家案件につき、機密厳守です」。彼は黙して、騎兵隊長を真剣に見つめた。彼は付け加えた、「このことは若いレディーにも了解させて頂きたい」。

ヴァイオは自分のフリッツを一杯に非難して、嘆願するよう見つめていた。彼のことをばらしかねなかった。彼女は自分の母親の恐喝未遂には上手く対処してこれたというのに。いや、これはフリッツの素敵な面ではない。彼が父親の前で彼女のことを知らないとするのは、これは正しい。この知らないふりは、素早い目の合図でさえ察知されてはならないけれども。でも彼が、彼女は喋りちらすかのように振る舞うのは、自分はとても彼に忠実なのに、いや、これは彼の素敵な面ではない。

騎兵隊長にとっても、このような事務的厳格さは快適に思われなかった。この若い少尉の奴が、自分を全くの民間人扱いするのは間違っている。奴は、昔からの将校を、この戦友を、たとえ市民の上着を着ている場合でも、察知する必要がある。この若造は、何か、

熟練の将校の目に砂を入れても構わんと思っているのか。ここ森の最も奥深い箇所、軍を見つけて、最初驚いていたときには、騎兵隊長はこれを大目に見たことだろう、...この若造は、国家案件と言ったが、しかし騎兵隊長は、寄せ集めの、まことにみすぼらしい制服姿、すべての記章の欠如から、これは帝国国防軍ではなく、せいぜい黒い帝国国防軍と呼ばれている、今日の政府、現今の国家案件とはほとんど関知しない、あの軍のことであろうと察していた。

しかしかくも非戦友的に扱われ、愚か者と見なされて憤激しながらも、騎兵隊長は、ここの一帯で、自分の背後で、進行している事態にようやく出会えたという好奇心も芽生えていた。彼はすでにベルリンで、フォン・シュトゥットマン氏に対し、この心地よくない不穏事について、この予感に満ちた無知について語っていた。 — ここで彼はその源泉に触れた。ここでようやく準備中のものに出会えた。それでこれに基づき自分の対策を立てることが出来よう。

それ故少尉が新たに厳しく、「それではどうぞ」と繰り返して、明白に下への森の小道を指したとき、騎兵隊長は素早く言った、「申したように、私はノイローエの所有者だ、 — というか請負人だ。若干耳にしている、一種の準備についてな。私は、 — エッヘン、 — 影響力がないわけではない。 — ちょっと話して貰えないだろうか。

彼は興奮してこの若い男を見つめた。この男は彼をまじまじと観察していた。騎兵隊長が若干息も吐かず言い終えると、少尉は簡潔に尋ねた、「何のためです」。

「それはな」と騎兵隊長は熱くなって答えた、「私は教えて貰いたいのだ。はっきりと知りたい、お分かりだろう。自分の決心をしなければならないし、...私の農園ではいずれにせよ五十人が働いている、大部分は古参兵だ、...事情によっては大事な加勢ができよう、...」。

「結構です」と少尉は鋭く、どもりながらの言葉を遮った、「どのような事情にしろ、このような事柄は若いレディーの前ではしないものです。 — 歩哨、御領主一家には即刻去って頂くようにしろ。 — 良い一日を」。

そう言って、少尉は再び茂みに入って行き、遠くで小枝が揺れた。...

フリッツ、とヴァイオはほとんど叫んで、彼の胸に飛び込みたかった。いや、彼女は彼の冷たさが十分に分かっていた。彼女は彼がもはや来なくなって、何の知らせもないこれらの日々すでに毎日恐れていた。つまり、彼は、彼女の阿呆な恋文のことでの煩わしさに立腹していよう。彼は、彼女が自分の仕事を危険にさらすことを恐れていよう。自分は彼にとって愚かなお喋りの小娘にすぎない、彼は自分を諦めたのだわ、と。ひょっとしたら彼も心が痛んだのかもしれない。しかし彼は何も気付かせない。彼は鋼の強さだ。自分はいつも、彼は英雄だと知っていた。でも自分は彼に示そう、自分は彼にふさわしい女である、と。誰にもそのことは自分から漏らさないことにしよう、そしていつの日か、...

「では、どうぞ」と歩哨はほとんど脅すように命じた。

「じゃ、行こう、ヴィオレット」と騎兵隊長は、自分の硬直から仰天して目覚めて、促し、娘の腕を取った。「おや、全く青白く見えるぞ。さっきまでは真っ赤だったのに。まともに驚いたのであろう」。

「あの人は少しばかり横柄じゃない、パパ」。

「いや、ヴァイオ。彼は将校で現職だ。奴等が皆に情報を与えようとしたら、困ること

もあろう。彼は上司に知らせると私は確信している。上司らが私について調べ、それから彼らの一人が私を訪ねてくる。軍の場合はまさにそうだ。すべてしっかり符号しなければならん。...」。

「でもあの人は本当にパパにむごかった」。

「まあ、若い少尉はな。奴は容易に的を外す。自分にまだ自信がないから、横柄になるのだ」。

「あの人は本当に少尉かしら。とても　一　みすぼらしく見えた」。

「歩哨がそう言っていた。まあ、正規の部隊じゃない」。

「あの人をどう思った」。

「まあ、ヴァイオ、分かるよ。おまえは今、彼に腹を立てているんだらう。彼が少しばかり横柄で、少しもレディーに丁重でなかったと。しかし私は思うに、彼は全く切れ者の印象を与えたな、だらう。きっと有能な若い将校だ、...」。

「本当、パパ。とても綺麗な手入れされた両手なのを見た？」

「いや、ヴァイオ、それは本当に気付かなかった。しかし私の許だったら、あんな無精髭で走り回るのは許さんのだが。言ったように、正規の部隊じゃない」。

「でも、パパ、...」。

ヴァイオはこの懇ろな鬼ごっこを、家に帰り着くまで父親と続けたかったことだらう。彼女の重い心は軽くなったことだらう。しかし森林官クニブッシュがその間に出現した。二本の柏槇の間から彼は出て来て、父と娘に挨拶した。

「おや、クニブッシュか」と騎兵隊長はびっくりして尋ねた。「この奥で何をしているのだ。この猟区までは貴方は来ないだらうと思っていたぞ」。

「至る所、見回らなければならないのです、騎兵隊長殿」と森林官は意味深に言った、「何も起きないと思っていると、いつも何か起きます」。

「何だと」と騎兵隊長は尋ねて、びっくりして立ち止まった、「貴方もこの奥に行ったのか」。

「黒い奥へですか。仰せの通り、騎兵隊長殿」と森林官は伝えた。自分の知ったことをまた明かしたかった。

「そうか」と騎兵隊長は無造作に言った、「それで何か変わったことを見たか」。

「仰せの通り、騎兵隊長殿」と森林官は言い、すぐに述べるであろうニュースは何の価値もないことを知っていた、「騎兵隊長殿と御令嬢を目にしました」。

「黒い奥でか」。

「そこまで騎兵隊長殿がいらっしゃったことはありません」。

「そうか」とフォン・ブラックヴィッツ氏は言って、はなはだ不満であった。他人があつた不快な場面を目撃していたからである。「我々が止められたのも見ていたんだらうな」。

「仰せの通り、騎兵隊長殿、目にしました」。

「我々の話しも聞いていたのか」。

「いいえ、騎兵隊長殿、聞くには遠すぎました」。少しばかり緊迫した間の後、「私は歩哨と他の郎党との間にいました」。

「そうか、他にまだ郎党がいたのか」と騎兵隊長はできるだけ無造作に尋ねた、「何人ほどだ」。

「三十人です、騎兵隊長殿」。

「そうか、もっと多いただろうと思っていた。 — 全員を見たわけではあるまい」。

「私は最初からいました。自動車の音を聞きました。私の森で何が起きるのか、知る必要があります、騎兵隊長殿。最初からすぐ潜っていたのです。三十人です、少尉フリッツを含めて」。

「少尉はフリッツと言うのか」と騎兵隊長は驚いて叫んだ。

「いや、その」と森林官は言って、恵み深いご令嬢の視線の下、赤黒くなった。「少なくともその郎党は彼に向かって言うておりました」と彼は狼狽してどもった、「そうだと考えたわけです」。

「その郎党は彼のことをフリッツと呼んだのか、クニーブッシュ」と騎兵隊長は信じられず尋ねた。

「いや、いや」と森林官は急いで口にした、「郎党は少尉殿と言っていました。更にもう一人いまして、ひょっとしたらこの方も少尉だったので、この方がフリッツと言っていました、...」。

「そういうことか」と騎兵隊長は安堵して言った、「部隊の者どもが将校をフリッツと呼んでいたら、前代未聞のことだろうからな。そのようなことは不正規の部隊でもあり得ない」。

「あり得ません」と森林官は訂正した、「多分別な少尉だったので、全く太っていました」。

「それで」と騎兵隊長は言った、「車も奴等は持っていたのか」。

「そうです、騎兵隊長殿」と森林官は危険なテーマから離れることができ、喜んでいた — 秘密を漏らすことさえした。「トラックで、一杯積んでいました」。

「何を積んでいたのか、見たのか」。

「仰せの通り、騎兵隊長殿」。森林官は周りを見回した。間伐された高林ばかり見えて、誰も聞き耳を立てて潜んでいそうにないと分かると、彼は言った。しかしとても声を潜めて、「武器です、騎兵隊長殿。銃に、弾薬箱、手榴弾、二丁の軽い機関銃、三丁の重い、... 彼らはすべて隠して埋めました、...」。

騎兵隊長は知りたいことすべてを知った。彼は一層厳格に背筋を伸ばし、立ち止まった。

「いいか、森林官クニーブッシュ」と彼は厳かに言った、「貴方は自分の知ったことを話すと生命にかかわるということを承知していないといかんぞ。この点は国家機密に属し、秘密厳守でなければならん。秘密警察が聞きつけてみろ。何も見なかったことにした方がましだ。貴方は余りに好奇心が強い、森林官クニーブッシュ。軍であると貴方が知っていたら、この件は問題ないと分かろう。 — その場合茂みに隠れる必要はないわけだ、分かったか」。

「仰せの通り、騎兵隊長殿」と森林官は弱々しく言った。

「最も良いのはすべて忘れることだ、森林官。そのことを思い出したら、心の中でこう言うのだ。ただ夢を見たにすぎない、と。すべて本当ではないのだ、分かったか」。

「仰せの通り、騎兵隊長殿」。

「更の一つ、クニーブッシュ。 — このような国家的政治的なことをそもそもレディーの前で言うてはならん、 — たとえ自分の娘であってもな。将来のためにこのことを

覚えておくように」。

「仰せの通り、騎兵隊長殿」。

騎兵隊長は復讐をしていた。古い文言を繰り返して、彼は自分が受けた蹴りを、別の相手に入れていた。かくて彼は満足して自分の娘の側を進んだ。

「それで貴方の囚人、ボイマーは何をしている」と彼は鷹揚に尋ねた。

「いや、騎兵隊長殿、あの屑」。

深い溜め息が森林官の胸から漏れた。今ようやくボイマーは意識を取り戻したように見えます、人々は彼を王子様のように扱っています。それで人々は彼をフランクフルト[オーダー河畔]の病院へ移送しまして、後数日しますと森林官は病床の彼と対決させられることになっています、...

「どういう結末になるか、もう分かっています、騎兵隊長殿。そのとき私は彼の犯罪を何も語ることが許されないのです。私が彼を半ば殴り殺したと彼は嘘をつくことでしょう。彼が転倒した森の岩場を示せるのですけれども。でも偉いさんは聞こうとしません。地方警察長官は、傷害あるいは職権乱用の咎で私に対する刑事訴訟がすでに始まっていると言っております。すでに七十歳というのに、結局刑務所に行くことになります。それに引き換え密猟者のボイマーの方は、...」。

「そうか、そうか、クニーブッシュ」と騎兵隊長は言って、他人も心配事を抱えていることにとっても満足していた。「まさに今日の世界はそんなものだ。まだ分かっているいな。我々はすべての戦争を通じて勝ったのだ。それが負けたことになっておる。貴方は生涯ずっと正直であった。それが今や刑務所行きだ。これはすべて問題なしだ。一 例えば私を考えてみる。私の義父は、...」。

そして騎兵隊長は残りの帰り道、老森林官に対し慰めを語りかけた。

101

レーダーはヴァイオの許で一つの成果を得る

フォン・ブラックヴィッツ氏が娘と一緒に森から家に帰ったとき、すでに暗くなっていた。それでも恵み深い夫人は相変わらず宮殿から戻っていなかった。ヴァイオは自分の部屋へ上がって行った。下の方で騎兵隊長は不機嫌に行ったり来たりしていた。彼は上機嫌で森から帰宅した。現今の忌まわしい政権の転覆をすべて目指していると思われる内密の軍事演習を彼は目撃したのであった。万難を排して彼は口を閉ざしているつもりであったが、しかしエーファに自分の新しい知識を仄めかす程度は許されよう。

それなのにエーファはいない。その代わり仕事部屋の窓辺には放たれた散弾銃があって、愚かなあの苛立ちの幕間劇を思い出させた。五時間前、六時間前から、彼の妻はこの出来事のせいで宮殿に座っている。この出来事は一点の疑いもなく彼にとって正当なものだ。それに有能な友人シュトゥットマンも勿論同席していよう。滑稽なこと、子供っぽいこと、我慢ならないことだ。騎兵隊長は呼び鈴を押して、従者レーダーを呼び、妻は夕食の件で何か言っていないか尋ねた。非難一杯の苛々した調子で、腹が減っているのだと請け合った。従者レーダーは恵み深い奥方様からは何も言付かっていませんと伝えた。従者はちょっと間を置いて尋ねた、騎兵隊長殿と恵み深い御令嬢のために夕食を用意しましょうか、

と。

騎兵隊長は殉教者となる覚悟を決めて、いや、待とうと言った。一 従者がドアから出たとき、主人の唇から、呑み込もうと思っていた質問が出た、鷲鳥を宮殿に引き渡したのか、と。

レーダーは振り返って、自分の主人を無表情に見つめて、言った。いえ、シュトゥットマン殿が許されなかったのです、と。一 そう言って従者は去った。

暗闇は一層迅速に落ち、部屋はとても灰色に暗くなった。一 このような灰色に、フォン・ブラックヴィッツ氏にとって、自分の人生が思われた。彼は森へ行った、面白いことを体験した。それで楽しくなった。しかし家に帰った途端、すべて灰色のものがまたしても彼に襲いかかり、救いがなくなった。あたかも自分を毎日一層深く吸い込んで行く情け容赦ない厳しい沼のようである。

騎兵隊長は両手で頬杖をついた。もはや急激に怒る気力さえ萎えていた。彼は何の厄事もない、妻や友すらいらない別世界へ憧れた。ノイローエから消えてしまいたい。すべての力弱い人間同様に、彼は空想の運命を描き、嘆いた。何故私にこうしたことすべてが襲いかかるのだ。私は誰にも悪さしていない。私はちょっと短気だ。しかし意地悪をしてるのではない。いつもまたすぐに善良になる。私は実際大して欲深くない。全く謙虚なものだ。他の者達は大きな車を持っていて、毎週ベルリンへ行き、恋愛沙汰を引き起こしている。私はお上品で、いつも困惑している、...

彼は呻いて、自分に強い同情を抱いた。それに激しく空腹を感じた。しかし誰も彼のことを気遣わない。私の具合など、皆がどうでもいいと思っている。自分が脱臼しても、誰も覗かない。自分の妻でさえ覗かない。仮にだ、自分が深い絶望の中、ピストル自殺してもだ、一 自分よりもっとひ弱な人間なら、このような状況下ではきっとそうしかねないのだ。妻は帰宅して、ここにくたばっている私を見つけることだろう。妻は立派な顔をしてみせるだろう。それから手遅れと分かると、残念に思うことだろう。手遅れになってから、妻は自分のありがたさが分かることだろう。

自分の孤独な死のイメージ、それに絶望して悲しむ自分の未亡人への思いで、騎兵隊長は感動して立ち上がり、明かりを点け、自分用にリキュールの棚でウォッカを注いだ。それから葉巻に火を点けて、明かりをまた消した。安楽椅子にうずくまり、長い脚を先に伸ばして、彼は今一度自分の死を思い描こうとした。しかし悲しいことに、二回目のとき、それらの絵図はもはや最初るときほど強烈に作用しないと思知らされた。

従者レーダーは、不可解な考量に基づいて行動する人間で、狡猾な外交官、全く確実な目的を眼前に描いていて、千もの策謀、策略を用いてこの目的を求める従者レーダーは、

一 こっそりとまた恵み深いご令嬢の部屋へ上がって行った。フォン・シュトゥットマン氏に対する矢を自分の主人の心臓に放った後であった。ヴィオレット嬢はテーブルの許に座っていて、熱心に書いていた。

「で、パパはどうしたいって」と彼女は尋ねた。

「騎兵隊長殿は、夕食はどうなるのかご存じありません」。

「夕食はどうなるの」。

「騎兵隊長殿は待たれるご意向です」。

「ママがまだ宮殿にいるのであれば、私が自分で手紙を渡せるかもしれない、...」。

「御令嬢のお望み通りでしょう」と従者レーダーは冷やかに言った。

ヴァイオは手紙を丁寧に閉じて、彼の手に渡し、レーダーを試すように見つめた。今日の午前、彼女は彼を、若いパーゲルと約束したたかな殴打連続へ引き渡す予定であった。しかし人は簡単に共謀者、共犯者と別れられるものではない。再三この共犯者は必要だと分かった。ヴァイオは少尉が今日武器を埋蔵した後、更に村に向かうであろうと確信していた。彼は二週間村に現れなかった。これほど長く不在のことはなかった。他の者達とは違って、彼は鉄兜を被っていなかった。まだ道を歩く予定という証拠である。きっと安全性を考えて、木の中に彼女からの知らせを見ることだろう。しかしもっと安全なのは、手紙を自ら渡すことだろう。しかし、自分、彼女は出られないから、レーダーが最良の使者だ、...レーダーは今のところ少しも破廉恥ではない、...

いや、哀れな、小さな、迷子のヴァイオよ。彼女は二度と手紙を書かないと自分のフリッツに誓ったことを忘れていた。パーゲルに、この件は終わったと誓ったことを忘れていた。二度とこのますます不気味になって行くレーダーとは関わらないと自分が誓ったことを忘れていた。彼女は、このような埋蔵された武器についての手紙を書くと、自分の父親と自分の友フリッツを危険にさらすということを忘れていた。

彼女の心がこうしたことすべてを忘れさせていた。彼女の心が常識や分別を圧倒していて、彼女は、自分は彼を愛している、自分は彼の前で弁解しなければならないとのみ考えていた。自分は万難を排して彼と再会したい、彼は自分を冷たく放置してはならない、自分はもはや待てない、彼が必要なのだとのみ考えていた。

ヴィオレットは手紙を取り、それを従者に渡した。「じゃそれを頼むわね、フーベルト」。

レーダーは彼女の顔から視線を逸らさなかった。彼の鉛色の、隅の方はほとんど董色の臉を深く目の上に垂らして、彼は若い娘を観察した。そこで彼は手紙を取って、言った、「少尉殿に会えるか約束できません」。

「いや、きっと会えるわよ、フーベルト」。

「夜の間ずっと走り回ることはできません、恵み深いご令嬢。ひょっとしたら彼は来ないかもしれません。何時に木に差し込んだらいいでしょう」。

「少尉に十二時か、一時までに会えなかったらね」。

「それほど長くは走り回れません、御令嬢。私は眠る必要があります。十時に木に差し込みましょう」。

「駄目、フーベルト。余りに早すぎる。今もう九時よ。まだ夕食を食べていないし、十時前には家からも出られないでしょう」。

「お医者様は、御令嬢、真夜中前に眠ることが最良だと言っています」。

「まあ、フーベルト、馬鹿なこと言わないで。またただ私を怒らせようとして」。

「御令嬢を怒らせるつもりはありません。...睡眠はそのようなものなのです。一そのようなことに対して何のご褒美があるのか知りたいものです。御領主方がそのことを知れば、私は解雇され、勤務歴証明書も推薦状も当てにできなくなります」。

「まあ、フーベルト、誰に分かると言うの。で、私はご褒美に何を出したらいいの。お金はないわ」。

「必ずしもお金でなくていいのです、御令嬢」。

フーベルトはますます小声で話していた。思わず知らずヴィオレットも自分の声を彼の

声に合わせていた。個々の消えて行く、小声の文の間、夜へと滑り落ちる夏の夕べ、村からのある呼び声、バケツの物音、庭の茂みのぶんぶん言う蚊の求愛の踊りが聞こえた。

「何が欲しいの、フーベルト。私はさっぱり分からない、...」。

彼女は彼の顔を覗くことを避けた。彼女は部屋を見回した。彼に贈ることができるようなものがそれらの中にないか探している風であった。...しかし彼は彼女をますます執拗に見つめ、彼の死んだ目は生気を得て、頬骨に赤い斑点が浮かんだ、...

「恵み深いご令嬢のために私が自分の評判、身分を賭けると致しますれば、ご令嬢に請いたく存じますのは、...」。

彼女は瞬時に彼を一瞥し、すぐまた脇を向いた。何かすでにかつて彼に対して感じた不安が彼女に募った。彼女は反抗的になり、それに反対しようとし、笑おうとして、彼に敢えて問うた、「私から接吻して貰いたいのじゃないでしょう、フーベルト」。

彼は彼女をまじまじと見つめた。彼女の笑いはまた去っていた。その笑いは醜く、偽りに響いた。笑い事じゃないと彼女は考えた。

「いえ、接吻ではありません」と彼はほとんど軽蔑して言った、「抱き締め接吻は好みません、...」。

「では何、フーベルト、言ってよ、...」。

彼女は辛抱できず、消耗した、 — しかし彼は自分が欲するものを得ていた。彼女にとっては、この辛い、不確かな待機よりも、奇天烈な明白な願望の方が望ましかったであろう。

「私が恵み深いご令嬢から望むものは、不当なものではありません」と彼は、昔からの、しゃちこぼった、教訓風な調子で言った、「不躰なものでもありません。...私はただ私の左手をしばらく、恵み深いご令嬢の心臓の上に置きたいのです、...」。

彼女は黙した。今や彼女は彼を見つめ、前傾し、目を大きく開けていた。彼女は唇を動かし、何か言おうとしたが、しかしただ呑み込んで、更に黙っていた。

彼は、彼女に接近しようとする動作をしなかった。彼はドアの下、きちんとした従者の姿勢で立っていた。彼は灰色の紋章ボタンの付いたお仕着せの上着を着ていて、彼の油で光るこめかみはそれぞれの髪が整っていた。

「恵み深い令嬢様はお聞き頂いたので」と彼はまた生気のない調子で言った、「私も淫らなことは思っていないと申し上げます。胸に触れることは眼目にありません、...」。

彼女は硬直したままであった。彼は彼女を見やった。二人はほぼ部屋の広さ全体離れていた。

従者フーベルト・レーダーは全く軽いお辞儀のようなものをした。(彼女は動かず、彼女は全く固まっていた)。彼はゆっくりと部屋を通過して、彼女に向かってきた。 — 動かずに、彼女は彼が近寄って来るのを見た。そのように恐怖で固まった犠牲者は殺害者の致命的打撃を予期していた。 — 彼は彼女を見つめた。...

それから彼は手紙を彼女の前のテーブルの上に返し、振り返り、ドアへ向かった。

彼女は待った、無限に長く待った。彼はすでにとり手を握った。そこで彼女は動き、咳をした、 — するとフーベルト・レーダーはまた振り返り、彼女を見つめた。...彼女は何か言おうとした。しかし彼女は幻惑されていた。彼女は単に、そわそわしたとりとめのない動作で手紙を指し、 — そしてもはや手紙のことも受取人のことも考えていなかった。

た。...

その男は手を上げ、ドアの横の明かりのスイッチをひねり、部屋は暗くなった。

彼女は声を上げたかった。とても暗くなった。彼女はテーブルの背後に立っていた。彼女は彼の姿が見えなかった。ただ左手にある、窓の両右角が、暗闇の中から浮かび上がってきた。彼女は彼の物音を何も耳にせず、絶えずこっそりと彼は迫って来た。もう彼が来ればいい。

黙して、黙して、物音はせず、息遣いもない。...

声を上げたい、でも息すらできない。

そのとき彼女は彼の手を自分の胸に感じた。これよりこっそりとは蝶でも花に舞い落ちられない。しかし全身を揺さぶる戦慄を覚えて、彼女は後ずさった。...その手は後ずさる体を追って、その手は冷やかに胸の上に置かれた、...彼女はもはや後ずさりできなかった、戦慄も消えた、...冷やかにそれは夏服の軽い生地を浸透して来た、冷やかに肌を浸透し、心臓にまで迫って来た。...

不安は消え去って、彼女はもはや手を感じず、ただますます深く浸透して来る冷やかさを感じた。...

そして冷やかさは落ち着きである。...

彼女は物音を耳にしなかった。彼女は何か考えたかったし、自分に何か言いたかった。これは単にフーベルトにすぎないし、反吐の出る滑稽な人。...何でもないことだ。飛び去って行く、結婚生活の絵図のように彼女の頭の中で散って行く。一瞬明るいランプの下でのように、それらの頁が、文字の角張った形で見え、一消えた。...

そのとき彼女は一つのメロディーを聞いた。全く明瞭に上の彼女にまで響いて来た。「踊れ、愛しい娘、高く踊れ、...」。一瞬にして、彼女は父親からのものと分かった。待つのが退屈になったのである。父はグラモフォンを回していた。一「踊れ、踊れ、踊れ。靴下に穴がなければいいのだが、...」。

しかし今やメロディーは次第に弱くなって行くようであった。ますます深く浸透して来る冷やかさの中で、彼女は自分の力を失って行くかのように思った。一彼女の感覚は外界に鈍くなり、わずかにその手のみ感じた。...そして今やもう一方の手を感じた。...

指がこっそり探るように彼女のうなじに触れた。髪の毛を押し退けた。...手は首の周り全体を滑り、軽い圧力で親指が喉頭に当てられた。同時に心臓部の圧力も強まった。

彼女は頭を迅速に動かし、自分の首を手から離そうとした。一しかし無駄で、一層強固に親指が当てられた。...

しかしこれは単に従者フーベルトだ、一私を窒息させるつもりではないだろう。

彼女は息が苦しくなった。両耳ががらがんした。頭に軽い目眩を覚えた。

フーベルト、と彼女は叫ぼうとした。...

そのとき彼女は解放された。一息を求めて、彼女は暗闇の中を凝視した。すでに明るくなっていた。明かりのスイッチの許に従者レーダーは立っていた。難点なく、灰色に、前髪の一毛も乱れていなかった。...

「踊れ、踊れ、踊れ、...」とまた下から響いて来た。

「幾重にも感謝申し上げます、恵み深い御令嬢」と彼は一ターラー恵んで貰ったかのよう、動じず言った、「手紙は最善を尽くします」。

彼はすでにまた手紙を手にしていた。暗闇の中、テーブルから取ったのに違いなかった。家の前の道で、彼女の母親の声が響き、またフォン・シュトゥットマン氏の声がした。

「早速夕食となりましょう、御令嬢」と従者レーダーは言って、部屋から滑り出た。

彼女は見回した。自分の部屋で変わりなかった。やはり昔からの、変わらない、阿呆な従者のレーダーであった。やはり彼女も変わりなかった。少しばかりゆっくりと、自分の肢体が完全にはまだ目覚めていないかのように、彼女は鏡の前に進み、自分の首を見つめた。自分が想像していた赤く腫れたみみずばれは見られなかった。肌のかすかな赤みもなかった。彼はそもそも掴んだとしても、単に全く穏やかに彼女を掴んでいた。ひょっとしたらその大方を彼女は単に想像していただけかもしれない。彼はまさに気の触れた、反吐の出る人だ。しばらく時間が経って、彼女からの申し入れと彼が考えなくなったとき、自分、彼女はパパとママに話して、別の従者が家に来るよう図ろう、...

突然、彼女はすでに顔を洗っていたが、自分はすべてを失ったかのような、命を賭けてそれを失ったかのような際限のない絶望感に襲われた。

彼女は自分の少尉フリッツが、突然情熱的に、それが今や全く冷たく、ほとんど醜く、自分のことを見ていると感じた。...彼女はアルムガルトが母親に、フーベルトは妖怪だと囁くのを聞いていた。そしてフーベルトはひょっとしたら太った料理女のアルムガルトの胸にもそのように手を置き、首にも置いたかもしれないと一瞬閃いた。 — アルムガルトは、だからこの従者を憎んでいるのだ、と。

ほとんど無関心な好奇心を抱いて、ヴィオレットは鏡の中の自分を眺めた。彼女は自分の腕と首の白い肉体を見つめ、胸のネックラインに触れて下げた。肉体は汚れて染みが付いて見えるに違いない。彼女は自分が穢されたように感じた。(アルムガルトを掴んだ同じ手だ、...)。しかし肉体は白く、輝いている、...

「夕食よ、ヴァイオ」と母親の声が下から呼んだ。

彼女は犬が自分の毛皮から水を払い除けるように、この悩ましい考えを払い除けた。大方男どもはこんなものだ、と彼女は考えた。皆少しばかり反吐が出る。もうこのことは考えないことにしよう。

彼女は階段を下りて行った。思わず口ずさんでいた、「踊れ、愛しい娘、脚を高く踊れ」。

102

騎兵隊長は抵抗する

エーファ夫人はフォン・シュトゥットマン氏と一緒にすでに向こうの宮殿で、老テッシー夫妻の許、夕食を食べたことが分かった。深く侮辱を感じて、騎兵隊長は娘と一緒に食卓に着いた。その間、彼が英雄的に待っていた両人は、小声で互いに話しながら、隣室に座っていた。ドアは開いていて、聞こえよがしに騎兵隊長はぶつぶつ文句を言って、時間厳守や配慮について途切れ途切れに語り、時々娘に向かって吠えた。娘は食欲がないと言っていた。

従者レーダーは腋にナプキンを挟んで、ドアの所に立っていて、騎兵隊長の同意を得ている唯一の者であった。騎兵隊長はどの盛り皿を欲しているのか従者は間違うことなく察して、即座にビールグラスに注いでいた。

「親愛なるシュトゥットマン」と騎兵隊長は、ようやく明瞭に煙草の臭いを嗅ぎつけて、甲高く叫んだ、「ただ一つのお願いだ、少なくとも私の食事中は煙草を遠慮してくれ」。

「御免、アヒム。私が吸っているの」と向こうから彼の妻が叫んだ。

「なお悪いぞ」と騎兵隊長はごねた。

一気に彼はとうとう立ち上がって、他の二人の許へ行った。

「美味しかった？」と彼の妻は尋ねた。

「良く訊いてくれた、一時間おまえを無駄に待っていたと言うのに」。彼は自分のリキユール棚の側に立って、極めて苛々とまた一杯ウォッカを注いだ。「いいか、エーファ」と彼は戦闘的に言った、「シュトゥットマンは明日いつもの四時起きだ。彼をこちらにお連れするより、さっさと就寝させた方が良かったと思うぞ。それとも何か、あの滑稽な鷺鳥の話しをもう一度おさらいしたいのか」。

「ヴィオレット」とエーファ夫人は叫んだ、「お休みを言いなさい。寝ていいわよ、もうすぐ十時だから。ー フーベルト、ドアをすべて閉じてください、後は自由にしてい、...」。

そして三人きりになると、夫に向かって言った、「それじゃ、今からあの滑稽な話しをもう一度おさらいしましょう。ところであなたはお友達のフォン・シュトゥットマンさんに感謝しなきゃだめですよ。この方がいらしゃらなければ、おさらいの必要もなくて、ただ私どもの荷をまとめて、旅立つだけのことだったのよ。いずれにせよ、ノイローエはお仕舞いだったことでしょう」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人の声はかつて夫と話したことがないほど鋭く響くものであった。泣き虫の母親と狡猾な父親との六時間の闘いで彼女の忍耐は尽きていた。

「おおきに」と騎兵隊長は叫んだ、「私はノイローエに残れるから感謝しろというのか。ノイローエがなんぼのものか。私はこの世のどこでも職が見つけれられるのだ。ここの職より上等のものを」。そして突然飛躍した、「この世がどうなるか、分かったものじゃない。軍はまた将校を必要としているぞ」。

「落ち着いて話そうじゃないか」とフォン・シュトゥットマン氏は頼んだ。迫り来る嵐を案じて見つめていた、「君の言う通りだろう、ブラックヴィッツ。君に一番ぴったりなのは、将校職だ。しかし十万人の軍となると、...」。

「おや」と騎兵隊長は怒って叫んだ、「君は自分を、私よりも有能な農業主と思っているんだろう」。

「あなたがノイローエのことを軽んじているのであれば」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は怒って叫んだ、「一度まず数週間旅に出るといふ私どもの提案があなたには丁度都合がいいかもしれません、...」。

「頼む、ブラックヴィッツ、...」とフォン・シュトゥットマンは懇願した、「恵み深い奥方、...」。

「私は旅に出ろだと」と騎兵隊長は叫んだ、「嫌だ、私は残るぞ」。

そして急いで安楽椅子に座った。あたかも二人は席さえ奪うかもしれないという風であった。彼は陰気に目を光らせて、二人を見つめた。

「残念ながら」とフォン・シュトゥットマン氏は小声で言った、「君の義理のご両親が二人とも君に対して一時的な強い不興を覚えているのは事実だ。君の義母は百もの願いを

抱いていて、君の義父はたった一つの願い、請負契約解除の願いを抱いている」。

「では解除すればいい。こん畜生のべらぼうめだ」と騎兵隊長は叫んだ、「三千ツェントナーのライ麦請負をする私のようなお人好しは二度と見つかるまい。お人好しの阿呆は」。

「今日から家族で騎兵隊長の年金で暮らすのは不可能だから、...」。

「何故不可能だ。何千人もがそうしている」。

「請負はいわば生活の基盤となるので、...」。

「君は今朝まさにその逆を主張していたぞ」。

「...つまり請負人雇用者が好意的な場合、...」。

「...おまえの父親殿は生涯そんな好意を見せたことがない、なあエーファ、...」。

「...それで君の奥方は来週以降一人で経営することに同意したのだ。その間君は少しばかり旅に出る。つまり君の義理のご両親がいわばまた落ち着きを取り戻して、ご両親が交渉に応じられるようになるまでのことだ」。

「それで、妻は同意したのか」と騎兵隊長は辛辣に嘲った、「私に尋ねもしないで。まあその必要もないのだな。私は簡単に説得される。結構、まことに結構。それで私はどちらに旅するのか、訊いてもいいかな」。

「私に考えがあって、...」とフォン・シュトゥットマン氏は初めて、ポケットを探した。

「駄目です、フォン・シュトゥットマンさん」と恵み深い奥方は合図した、「夫は旅立つ気がありませんから、提案する必要はありません。一親愛なるアヒム」と彼女は精神的に言って、その美しい、少しばかり浮き出た目で苛々して見つめた、「フォン・シュトゥットマンさんと私はただあなたのために六時間も両親と話したのだということを納得して頂けないのであれば、どんなことを言っても無駄です。私のパパと永遠にもめ事を起こしているのは誰です。誰が鷲鳥を撃ったのです。ただあなたでしょう。結局あなたの将来のことなのです。ヴィオレットと私は、二人はいつまでもノイローエに残れます。私どもは誰も邪魔しないし、両親ともめ事を起こしません」。

「分かったよ」と騎兵隊長は叫んだ、「私がおまえらの邪魔だというのであれば、すぐに旅立とう。どちらへだ、シュトゥットマン、言っておくれ」。

彼は致命的に傷付いていた。

「そうだな、...」とシュトゥットマンは躊躇いながら言って、鼻を撫で、憂わしげに傷付いた友を眺めた、「一つ考えがあったのだ、...つまり、私の考えで、...」。

騎兵隊長は彼を陰気に見つめた。しかし一言も言わなかった。

中尉はポケットに手を入れ、一通の手紙を取りだした。「つまりあのおかしな奴、枢密顧問官シュレックが、こやつは君に大層冗談を言った奴だが、ブラックヴィッツ、...」。

騎兵隊長は冗談を思い出したようには見えなかった。

「彼が私に二、三通の手紙を寄越した。男爵による損害賠償の件で、覚えているだろう、ブラックヴィッツ、...」。

騎兵隊長は思い出した素振りを見せなかった。

「私は勿論すべて断った。君はその件についての私の見解は知っていよう、...」。

騎兵隊長はそれを知っているか否か、一彼は黙ったまま陰気であった。

より陽気にシュトゥットマンは続けた。彼は手紙を振った。一「そこでこのたび、

枢密顧問官シュレックから、一昨日届いたこの最近の手紙がある。...彼は本当に滑稽な変わり者に見える。突発性の共感と反感を抱く者だな。君はこの顧問官が彼の患者、フォン・ベルゲン男爵をととても憎んでいるように見えると私に話してくれた。それが、私に対しては、好意を抱いたように見える。とても滑稽なことだ。彼は私と会ったことがないし、ただ私については、酔っ払ってホテルの階段から転げ落ちたということしか知らないのにと考えて見るとな、...で、この手紙で、彼は私に新しい提案をしている、自発的にな、これはあのフォン・ベルゲン男爵とは何の関係もないことだ、...」。

フォン・シュトゥットマン氏はまたしても憂わしげになった。思案して彼はその手紙を見つめ、それから尋常になく黙しがちの友を見つめ、それから素早く静かなエーファ夫人を見つめた。エーファ夫人は彼を勇気付けるように見て頷いた。それはほとんど頷きではなく、むしろ単に瞼を閉じたのであったが、「了解」を意味するものであった。再びシュトゥットマンは自分の友を見やり、この合図に何か気付いたのか確かめた。しかしフォン・ブラックヴィッツは静かに黙って窓辺に立っていた。

「それだと、...」とフォン・シュトゥットマン氏は言って、再び話し始めた。「勿論ただの私の考えで、一つの提案だ、...シュレック枢密顧問官殿は、自分の療養所で、商人的支配人を採用したいと考えたのだ。かなり大規模な施設で、二百人以上の患者に、およそ七十人の職員、巨大な公園、それに若干の農園がある。...そこで、分かるだろう、ブラックヴィッツ、色々やる仕事がある。...そして申したように、枢密顧問官シュレック氏は私のことを思い付いたのだ、...」。

シュトゥットマンは自分の友を好意的に見つめた。しかしこの友は再び彼に方を見なかった。彼はむしろ自分用にウォッカを注ぎ、それを飲み干した。それから二回目のウォッカを注いで、しかしまだ飲まないでいた。エーファ夫人は椅子であちこち身を揺すり、咳をしたが、何も述べず、ウォッカに異議を称えなかった。

「勿論、枢密顧問官シュレックは私を無闇に採用する気はない。それほど彼の共感は大きくない」とフォン・シュトゥットマン氏は続けた、「彼は私を招待している。まずは最初数週間客人として来るようにしている。そして私がこの期間、彼の許で余計者と感じないよう、ほとんどオーストラリア人風な兎への苦情を述べて誘っている。兎が公園や田畑を荒らすというのだ。私がまあ、フェレット[イタチ科]使いと一緒に網や散弾銃で兎らを退治してくれたらと言っている。 — 彼はすこぶる実用的人間に見える、この老公は、...」。

再びフォン・シュトゥットマンは自分の友を好意的に見つめた。騎兵隊長はこの視線に陰気に答えて、返事の代わりに、二回目のウォッカを飲み干し、三回目を注いだ。フォン・ブラックヴィッツ夫人は軽く椅子の肘掛けを叩いたが、やはり黙っていた。苦勞して話すのは更に中尉の役目で、次第に負担になってきた。

「いや、君は猟が好きだし、素晴らしい狙撃兵だ、ブラックヴィッツ」とフォン・シュトゥットマン氏は始めた、「それで我々は考えた、 — 私は考えた。少しばかり寛ぐのが君にはいい。考えて見給え、休息に、療養所での立派な食事だ、 — それに一日中外にいる。千匹もの兎がいるそうだ、...」。フォン・シュトゥットマン氏は元気づけるように手紙を振った、「それで、私は、事の次第に従って、ここで仕事を見つけ、君の義父殿のことで、あっさり去ることができない、...つまり彼は確固とした商人的手を望んでお

り、...それで私は考えたのだ、君が私の代わりに旅してくれたらどうだろう、と。申したように、休養だ、苛立つことはない、 — 君が私を温かく支配人職に推薦してくれるであろうことは、有り難く確信しているところだ、...」。フォン・シュトゥットマン氏は笑おうとした。しかし必ずしも上手く行かなかった。「だから、意見を言ってくれ、ブラックヴィッツ」と彼は、若干陽気さを装って頼んだ、「まあそんなに陰気に青ざめて立っていてくれるな。君の義父殿もまた折れることだろう、...」。

「巧妙に仕組んだな」と騎兵隊長は陰気に言った、「立派な企みだ、...」。

「何だとブラックヴィッツ」とシュトゥットマンはびっくりして叫んだ、「一体どうしたんだ」。

「そうなるだろうと感じていました、...」とエーファ夫人は口ごもり、安楽椅子の背に寄りかかって、両手を丁寧に両耳に置いた。

そして騎兵隊長は長い沈黙の後、二重に麻痺してしたたかに始めた。

「その企みは無駄だ」と彼は叫んで、威嚇して、一本の細い、震える長い指を上げた。彼は顔が雪のように白く、全身がわなわなと震えていた。「私を狂人に仕立て上げたいのだろう。精神病院に私を閉じ込めるつもりだ。何という策謀、何と巧みなことか」。

「ブラックヴィッツ」とシュトゥットマンは絶望して叫んだ、「後生だ、何を考えているのだ。ここに手書きである、枢密顧問官シュレックの手紙を読んでみろ、...」。

騎兵隊長は手紙と腕と友を押し退けた。

「巧みに考えられている。しかし私も馬鹿じゃない。見抜けないと思うのか。その手紙はやらせだ、 — 私の義父との陰謀だ。私を蹴落とそうとして、私を離婚させるつもりなのだ。 — 代わりの男はいる、だろう、エーファ。狂っているぞ。しかし今すべてお見通しだ。今朝の契約についてのお喋り。 — そもそも本当の契約だったのか。あの契約はこの手紙同様仕組まれたのではないか。ただ私を苛立たせるために。それから鷲鳥、

— 多分おまえら自身がこちらへ誘い出したのだろう。散弾銃、何故散弾銃が装填されてあったのだ。棚に銃を置いていたときには、抜いてあったのだぞ。すべて準備されていたのだ。それで私がおまえらの罠にかかると、実際私は発砲した。私の意志に反してな、... 誓って言うが、私の意志に反してなのだ。 — そこで私は狂人と宣告される、追放される、 — 気違い病院に。禁治産宣告され、 — ゴムの房に入れられ、...」。

彼は苦悶に圧倒されたように見えた。しかし新たに憤怒に襲われた、「しかし私は断る、一步もノイローエから出ないぞ。私は残る。おまえらは好きなようにするがいい。 — しかしひょっとしたらもう精神病院の看護人どもがもう来ているかもしれないな。拘束服を持って、...」。彼はある名前を思い出した。青天の霹靂のように彼の脳内に浮かんだ。「テュルケ氏はどこだ。看護人のテュルケはどこだ」。

彼はドアに飛んだ。彼の前には小さな廊下が静かに黙してあった。

「潜んでいるのだな」と彼は口ごもった、「テュルケ殿、出て来い、いるのは分かっているのだ、...」と彼は暗い家の中に叫んだ。

「もう沢山だわ」とエーファ夫人は怒って叫んだ、「召使い全員を酩酊に付き合わせる必要はないでしょう。ただあなたは酔っ払っているのです。夫は興奮しているとき、シュナップスに弱くて。ただ躁狂になってしまうのです」と夫人はシュトゥットマンに囁いた。

「狂っているぞ」と騎兵隊長は今や嘆いた。彼は窓辺に立って、頭をガラスに当てた、

「自分の妻と友人に裏切られた。禁治産宣告で、拘禁だ」。

「もういらしてください」と夫人はフォン・シュトゥットマン氏に囁いた。彼は自分の友人に冷静に語りかけ、すべてを説明しようという考えにとりつかれていた。「今夫は寝るのがいいのです。明日の朝、悄然としています。以前もこんなことがありました。フォン・トルフゼスさんとの件もそうで、私の父がとても立腹したものです、...」。

「私は行かんぞ」と騎兵隊長は新たな怒りの発作に駆られて叫んで、窓ガラスを叩いた。

窓ガラスが割れた。「痛い」と騎兵隊長は叫び、自分の妻に血の出る手を差し出した。「切ってしまった。血が出る、...」。

夫人は彼の変貌した情けない顔を見て、ほとんど笑い出すところであった。「そうね、お出で、アヒム。包帯をしましょう。すぐに寝なさい。睡眠が必要よ」。

「血が出る、...」と彼は囁いて、情けなく彼女の腕にすがった。戦争で三度負傷したこの男は、手の、わずか二センチもない切り傷の血で青くなっていた。

フォン・シュトゥットマン氏はこの光景を見て、本当に去る潮時と思った。庇護を必要としているのは女性ではない。

不屈の決然さの最後の発作と共に騎兵隊長は彼を見送った。「私は 一 断固旅しない」。

騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツがそれでも旅したのは、少しも不思議なことではなく、元来自明のことであった。一 翌日の正午、それどころかとても上機嫌で、それも枢密顧問官シュレックの許に、三台の散弾銃のケースを持ち、右手に絆創膏を貼って向かった。彼が夕方叫び声を上げて抵抗したこと、つまり狂った考え、気違い病院に関し、騎兵隊長は朝、夫人の最初の好意的言葉を聞いて、ほとんど感激して同意した。見られたのは単に二日酔いばかりでなく、自分が不愉快に去らせた友の目を避けたいという願いばかりではなかった。有り体に言って、変化への喜びがあった。一つの旅、金の心配の代わりに狩猟。それにわけても、大層洗練された療養所、貴族の娯楽地であり、一 汗臭い義父の代わりに帝国男爵であった。...

「規則的に十分な金が送られるよう頼むぞ」と彼は案じて妻に言った、「恥をかきたくないからな、...」。

エーファ夫人は約束した。

「ベルリンで今一度馴染みの仕立屋に寄ることにしよう」と騎兵隊長は思案して言った、「まっさらの狩猟服をもう持っていないし、...了解してくれるだろう、エーファ」。

エーファ夫人は了解した。

「ここでちゃんとやっていけるように、気をつけなければならんぞ。私はただおまえらの希望で旅するのだ、忘れるなよ。上手く行かないからといって嘆くなよ。旅なんかどうでもいいのだ。ここでも兎の野郎は撃てるのだからな」。

「フォン・シュトゥットマンに別れの挨拶はしないの、アヒム」。

「いや勿論する、おまえが望むなら。まずは荷物をまとめるつもりだ。散弾銃にもグリースを塗らなきゃならん。いずれにせよ、彼と会えなかったら、私からよろしくと伝えてくれ。これから彼はいつもおまえの父上殿に助言を求めることだろう。冬大麦と夏大麦の区別も彼は知らないのだから。とんでもないことになるな」。騎兵隊長は喜んで微笑した。

「ま、手に負えなくなったら、私を呼べばいい。勿論すぐに帰って来る。私は悪く取らない人間だ、私はそんな人間だ」。

ドアの側で聞き耳を立てて、ヴィオレットは父親の部屋でのやり取りの最初の部分だけを聞いていた。それから諍いは多分もうしばらく続いて、母親は専念することだろうと確信すると、暗いキッチンを抜けて、家から忍び出た。一瞬、彼女は躊躇って裏口に立っていた。今一度このようなことをしていいか考えた。夜に彼女が就寝せず、家から出たと母親が知ったら、どんなに反抗的に嘘を吐いても、厳格な女子寄宿学校に、脅されている通り閉じ込められてしまうことだろう。その上彼女はフーベルト・レーダーに手紙を持たせて送り出していた。一 従者が少尉を見つけ、手紙を渡したら、フリッツは今夜のうちにも、彼女の窓の下に来ることだろう。そしてその壁には生垣がある。彼女が出掛けたら、ひょっとしたら彼に会えないかもしれない。...

躊躇って彼女は立っていた。万事、ここに残り待つよう薦めていた。しかし温かい、満天の星の八月の夜だ、...大気は何か生き物のように彼女の肌に浸透して来る。一 大気は彼と結び付いているもので、彼もこの和やかな夜、外にいることだろう。ひょっとしたら間近にいるのかもしれない。...彼女は自分の両耳の中、血が歌うのを感じた。体が、その気になると、歌う、甘美な蠱惑的誘いの歌であった。...しかし彼女はむしろ歩いて行きたくかった。一 この夜彼を待って空しいことになるかもしれないと考えるととても悲しくなった。...

家の全く下の方の小さな明かり、ほとんど大地の中にある明かりに彼女は注目した。決断が出来なかったので、彼女はまずこの明かりの許へ行った。決断を引き延ばす退屈のぎにはすべて嬉しくなった。彼女は全くこっそりで行った。さて、光点の側に達すると、彼女は跪き、覗いた。その地下室で見えたものは、従者レーダーの点された部屋であった。しかしどんなに前屈みになって見ても、その部屋は空で、明かりは誰のためのものでもなかった。仕方ないことだろう、と彼女は自分に語った。従者は彼女の手紙を渡しに出掛けたのだ。自分は安んじて上の自分の部屋へ行けばいい。少尉が今夜ノイローエにいれば、やはり彼女の窓の下に来ることだろう。きちんとしたレーダーも急いで出たので、明かりを消し忘れたのだ。

ヴィオレットは、その部屋の他の端のドアが開いたとき、すでにまた起き上がろうと思っていた。滑稽なこと、少しばかり不気味なことに思える。つまり彼女はここ、周囲の夜全体と共に暗闇の中において、気付かれず、無言の小さな、明るい舞台を覗いているわけである。そう滑稽で、同時に、自分に提供されている光景も少しばかり不気味に思える。つまり今丁寧にドアを閉めているのは、従者フーベルト・レーダーである。しかしもはや灰色のお仕着せの作法通りの若い男ではなく、カラフルな縁飾りの付いた過度に長くて白いナイトガウン姿で若干笑うべきものである。この白い天使服の上に胡乱な目つきの灰色の冷やかな[魚の]頭が見える。一 そしてヴィオレットは今晚から、この頭をもはや愚かで馬鹿なものと思えずにはできない。彼女はかすかな戦慄に襲われた。...

従者レーダーはドアを丁寧に閉めた後、隅の戸棚へ行った。手に彼は歯ブラシの入ったコップを持っていた。彼は戸棚を開いて、歯ブラシ入りのコップを入れた。...人間はこん

なものだ。フーベルト・レーダーは今晚ひょっとしたら、ある殺人のリハーサルと呼べるかもしれない尋常でないことを体験したかもしれないというのに、いつもの晩のようにナイトガウンを着て、歯を磨いている。...彼は必ずしも殺人者ではなく、大方は単に卑小な、全くありふれた市民にすぎない。このことが彼をとっても危険なものにしている。虎はその斑点で分かる。しかし一人の殺人者が他の皆同様に歯を磨いている。彼は見分けられない。

さてヴィオレットは何かもっと奇妙なことを目にする事だろう。...

しかしヴィオレットはこのとき詳しく観察せず、それに従者レーダーのことも更に考えず、彼女は計算していた、...

せいぜい五分、私はドアの所で聞き耳を立てていた、と彼女は計算した。それからすぐに外に出た。それからせいぜい三分、キッチンの出口に立っていた。フーベルトはまだ夕食の片付け仕事があった。 — 私がお休みと言う間、彼は片付けていた。それから食器を運ぶ。 — いや彼は家から全く出ていない。着替えて、体を洗い、歯磨きして、 — それで私の手紙は、手紙はどうなったの。

私の手紙は、と彼女は叫んで、窓ガラスを叩いて、手紙を取り戻したかった。彼女がそうしなかったのは、単に家に気付かれてしまうという恐ればかりでなく、またこの風変わりな嘘つき男との退屈な馬鹿げた交渉に対する嫌悪ばかりでもなかった。

いや、手紙のことは放っておこうと彼女は突然全く平静に考えた。手紙はいらない。フリッツに会えばいい。従者は手紙を横領するつもりだ、手紙を両親に届けるためではなく、また報酬を要求するためだ。...

彼女は自分がその暗闇の中に立って、彼を待っている姿を見た。彼女は自分の心臓に手を感じた。冷たい、非人間的手を感じ、再び口の中に何か悪寒の味のものを感じた。そのことを私がフリッツに言ったら、フリッツは従者を殴り殺すことだろう。フリッツは小さなマイヤーをはるかにもっと些細なことで殴り殺そうとした。...しかし自分はそのことをフリッツには語らないだろうと感じた。これは、どのようなことになるだろうと、フリッツに対してずっと秘密にしていなければならない。本来なら、今や従者レーダーと一緒にある秘密事が出来たことに恐怖を覚えなければならないところであろう。しかし彼女は恐怖を覚えなかった。陰気な誘惑がこの邪悪な従者の手に潜んでいた。彼女はそれを理解しなかったが、しかし予感した、...

こうしたことすべてが彼女の頭に去来する間、 — この考察や不安は一秒も経たないものであったが、 — 従者フーベルト・レーダーはベッドの足部の隅に跪いていた。彼は長くて白いナイトガウン姿でうずくまり、両手を合わせて、子供のように夜の祈りを述べた。しかしその灰色の、邪悪な頭は何も子供らしいものを有していなかった。ヴィオレットは彼を三メートルも離れていない深い地下室の床に、その小さな、ただ彼女のためのみ照明されている舞台上、敬虔な子供のように、跪き、祈りを上げているのを見ると、そして、彼が多分今彼女とあのことができたことを愛する神に感謝しているのかと思いつくと、 — ヴィオレットは戦慄の笑いの衝動に駆られ、もはや抑えることができず、飛び上がり、まっすぐに夜の中に駆けて行った。自分の姿が見られると困る人々のことを何も考えず、そのまま駆けて行った。会わなければならないフリッツのことも考えていなかった、...

彼女は庭を通過して駆けた。更に遠くへ、田畑の間の畦を上げて行った。彼女の胸は喘

いだ。あたかもすべてのことから、自分と一切から去らなければならないかのようであった。しかしとうとう体が悪寒を抑えた。それで彼女は立ち止まった所で身を投げて、とても暗い星座の夜空を見つめた。その捉えがたく深い底に星々が一層明るく煌めいていた。とうとう彼女は眠り込んだ。...

しかし彼女が眠ったのはほんの短時間であったろう。星々は、彼女が目を閉じてから、それほど動いていなかった。あたかも何かとても、軽快な、快活なものを夢見たかのようであった。もはや何も覚えていなかった。危険の近づく予感で彼女は目覚めた。しかし危険は何も見えなかった。ただ静寂、田舎の夜が彼女の周りであった。今や村も眠りに就いていて、村から物音一つ聞こえなかった。

「いや、危険なものはない」と彼女は自分の動悸する心を落ち着かせて言った。しかし突然、自分は一人っきりで田畑にいて、呼んでも余りに遠く、村の人間一人を目覚めさせることもできないと思い付いた。...彼女はこれまで百度も夜、田畑や森にいて、単なる不安の思いすら抱いたことがなかったが、突然臆病な、ガチガチ歯の震えるような不安に襲われた。彼が白いシャツを着て、畦をやって来るかもしれない、そして手をまた彼女の心臓に置こうとするかもしれない、と。私は防御できないと彼女は考えた。

そしてまた駆け始めた。彼女は、彼が追って来るかもしれない別荘から遠ざかった。彼女は公園の暗い木立へ向かって駆けた。彼女は柵をよじ登って、服のパネルが釘の先で鋭く裂けた。よろめきながら越えて草の中に落ちた。しかし彼女はまた足で跳ねて、公園の中へ駆け、白鳥の池に向かい、空洞の木の許に来た。...彼女はこの空洞の中を掴んだ。しかし中に手紙はなかった。それでは彼がもう手紙を取りだして、彼女の許へ向かっているのだわ。...

そこで彼女はまた駆けた。しかしすでに駆け出しながら、彼は手紙を全く得ていない、手紙はまだレーダーが持っている、と思いつき、レーダー若造に対する憤激にとらわれた。...しかし憤激は消えた。というのは更に駆けながら、何故相変わらず駆けているのか考えざるを得なかったからである。もはや駆ける意味はない。勿論そもそも彼は村にはいない。勿論このような武器埋蔵の後、自分の所属部隊へ戻って、万事上手く進行していると伝えることになる。村の中で恋のアバンチュールをしている場合ではない。しかし彼女はもはや駆ける必要はないと分かっていたが、あたかも何かに追われているかのように走り続けた。彼女が駆けるのを止めたのは、木々を通して、明るい黄色の長方形の光りの輝きを目にしたときであった。...

彼女は歩みを慎重な忍び歩きに変えて、猫のように明るい窓に近寄った。窓は広く開いたままであったが、カーテンが引かれていた。ヴィオレットは道を渡って、窓の下の細い草地に立って、カーテンを用心しながら押し退けた。彼女はこの夜とても混乱していて、自分が何か許されないこと、いや単に尋常でないことをしているという思いに一瞬たりとも至らなかった。彼女は真剣な点検の視線を部屋に投げかけた後、頭をカーテンの中へすっと押し込み、観察しながら立ち止まっていた。体は外部の夜の中であって、頭は明るい室内にあった。

テーブルには若いヴォルフガング・パーゲルが着席して、一通の手紙を書いていた。かなり散漫な一日であった。今日は楽しくなく、悲しかった。このような具合では農作業も面白くない。午前中は騎兵隊長との喧嘩があって、首ということになった。それから囚人

達とのごたごたがあり、ドアに白い十字架の壁を造って塞ぐことになった。この十字架はまた赤く上塗りされなければならなかった。気違いじみた従者レーダーは鷲鳥の死骸を一杯荷車に乗せていた。宮殿での神秘的協議に出ているシュトゥットマン、―― こうしたこと一切は刺激過多で散漫、およそ考えられる限り田園風でない。

それからようやく苛立ちながら一人っきりの夕食を嚙下した後、―― シュトゥットマンは従者エリアスが失礼すると伝えて来た、―― 夕方立ったままでいて、眠りたくもなく、更に何かする気もなかった。居酒屋に行こうかという考えさえ浮かんだ。少しばかり飲んで、英気を養い、ひよっとしたスカート[三人トランプ]をしてもいいかもしれない。...最後に村を散歩して、ゾフィー・コヴァレフスキーを探してみようという考えに至った。概して彼女は全く良い娘だ、それに多分ベルリンの風に馴染んでいて、気取った遠慮はないだろう。恵み深いご令嬢、ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツ、午前中接吻をしたが、これはより危険なことになるだろう。

そのとき彼は自分が家から出られない、居酒屋にもゾフィーの許にも行けないと思い付いた。彼はある委託を受けていた、ぶん殴ることになる訪問を待っているのであった。上述の愚かな従者、冷ややかな[魚の]頭のフーベルト・レーダーである。

そこでしばらくヴォルフガング・パーゲルは、黄昏の間、両部屋の中を行ったり来たりした。事務所の中であったり、自分の部屋であったりした。しかし、十五分間あちこち動き、どのように下劣な奴を脅し、恐喝し、殴ろうかと考えても、不快な気分が決定的に改善されることはなかった。そのようなことは、何も考えずに、無造作に片付けるのが一番いい。しかしそれならどうする。

かなり顕著な事の次第であったが、彼が何らかの娘達と関与し、ヴィオレットとかアマンダとかゾフィーとかと関与しても、結局いつもペーターへの思い出に帰着するのであった。さて、ペーターは最終的に消え、忘れられ、その灰を偲ぶ安らぎとなっていた。善良な好意的娘であるが、述べたようにその灰を偲ぶ安らぎとなっている。いずれにせよ、ようやく自分の母親に手紙を書き、自分の新しい生活状況につき若干のことを知らせ、ペトラ・レーディヒとの件の清算を告げて、母親をもっと大きな安心に導くことができよう。いずれにせよその方が、ここで無為に情けない殴り合いを待っているよりも、かなりましであろう。奴はきっと臆病者だろう。

すぐに決心して、パーゲルは部屋の明かりを点して、カーテンを引き、筆記用具を事務所から持って来た。更に上着を脱いだ。スポーツシャツとベルト付きズボンの姿で、快適に寛いで、テーブルに着き、書き始めた。

最初はまだレーダー訪問の考えが支障となった。しかしすぐにこの気弱な少年のことを忘れ、ペンを走らせた。彼はノイローエでの自分の生活について、少しばかり生意気に、少しばかり不作法に書いた。丁度二十三歳で、何が楽しいかと認めたくない年頃の流儀である。五つの文章で彼は自分の「パンの雇用者」の肖像を描き、それからもじゃもじゃ髭の愚直なその義父を描いた。この義父はすべてのボタン穴から策謀と奸計の臭いを発する者である。過去のことについては何も書かなかった。持ち去った絵のことも、いずれにせよかなりの額の所在についても、空中楼阁として消え去った結婚についても何も書かなかった。羞恥とか頑固さのせいで、この余り快適とは言えない事柄について、ヴォルフガングは書けなかったのではない。まだ本当に若い時には、過去は本当に過ぎ去っており、つ

まり完全に片付いたと思ってしまうからである。毎日「新しい生活」を始めることができると思うもので、すべての周りの人々にも同じこの信仰を前提とするのである。一 殊に母親に対してはそうである。人生が生涯後に引きずるであろうあの鎖についてはまだ何も自覚していない。毎日が、体験のすべてが、この鎖に新しい部分を繋ぐのである。若者はまだこの鎖の音を聞かない、まだ次の文の意気消沈させる希望のない意味を理解していない。汝はこのことをなしたが故に、こうでなければならないのだ、と。

いや、二十三歳、これは諸行無常であり、逝きて帰らずである。一 ヴォルフガングのペンは紙の上を滑った。今やペンはシュトゥットマン、子守女にして主任の忠告師の肖像を描いた。パーゲルの気まぐれは昂じて、父親の精神が彼の中で躍動した。...彼は手紙の端にシュトゥットマンの風刺画を添えた。彼はシュトゥットマンを悲しげに巢の前に座っている兎として描いた。この兎は賢く、同時に愚かに世間を見ている、一 しかしとりわけ悲しげに見える。

パーゲルは満足して口笛を吹きながら、自分の作品を眺めた。これは本当に似ている。それから視線を上げて、恵み深いご令嬢、ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツの目と会った。

「おっとっと」とパーゲルはこの尋常でない垣根の客人に格別驚かず言った。それから、「レーダー少年は来ないの」。

彼女は頭を振った。それからカーテンの中から一方の肩を滑らせ、その下の胸を窓台の上に置いた。前傾姿勢のために広く開いたネックラインで、華奢な肌が見えた。首の濃い褐色の[髪の]側、誘惑的に牛乳色の白さがあつた。

「彼は来ない」とヴィオレットは一瞬躊躇った後、言った。彼女はゆっくりと、話すのは不愉快であるかのように、寝言のように発した、「レーダーはパパのためにまだ用があつて。こちらへ送れなかつた」。

パーゲルは娘に視線を放った、「それで、貴女、最も恵み深い方は」と彼は軽快さを装って尋ねた、「まだこんなに遅く御用ですか。もう軟禁状態は解かれましたか」。

再び彼女はずっと返事せず、待っていて、彼をまじまじと見つめていた。「祖父母の許へ行ったの」と彼女は結局説明した、「貴方にお知らせしたくて、...」。

「有り難う」とパーゲルは言った、「少しばかり遅すぎたけど」。

とても静かで、温かく静かであった。窓の上の胸、呼吸する口、秘密を呼吸しながら、成就を約束していた。とても長く経つた、...。すべてが生長し、熟し、栄える、...留まれ [Verweile doch! 『ファウスト』]。

「いや、...」とパーゲルはしばらくして言った、呆然として夢うつつであった。

それからまたすべてが静かになった、静かな、暗い、発芽の夜。

「こちらにいらして、...」と彼女は突然囁いた。とても小声の囁き声で、彼は一撃を受けたかのように、縮み上がった。

「そう」と彼は小声で尋ねたが、すでに椅子から立ち上がっていた。

「お願い、...」と彼女はまた囁いた。彼は彼女により近付いた。

彼は気付かなかつたが、彼の顔は別の表情を、切に決然とした表情、甘くはない果実をすでに味わっているかのような表情をしていた。彼女の表情はしかし、祈る従者の部屋を覗いていたときと同様に見えた。半ば眠っていて、戦慄と絶望、快樂と欲求を感じている

風であった。

「もっと間近に」と彼女は彼が彼女の一步前に立ち止まると、囁いた。「もっと間近に」。それは時の誘惑であった。空腹の肉の誘惑であった。しかしまた彼女の欲求の誘惑でもあった。この欲求が、知らずに彼を掴まえ、彼を間近に引き寄せる網のようであった。...

「それで」と彼は小声で尋ねた。彼の顔は彼女の顔のすぐ側にあった。

「ねえ、...」と彼女はどもった、「もう一度私に接吻してくださらない」。

彼女は彼に自分の頭を持ち上げた。決然として、それでいて子供らしい動作で、彼女は彼に唇を差し出した。突然彼女の両目に涙が浮かんだ、...。いや、彼女に他人の抱擁の快楽を求めさせているのは、単に墮落のみではなかった。彼女の中で絶えず迫って来る者に対する不安もあったのである。あの従者が手を彼女の心臓に置いて、彼女を入手したのであった。

「ほら」と彼女は困惑して言った。二人の唇は出会った。二人は無限の時間そのようにしていた。窓台の上、支えている彼の手の上に、彼女の胸があった。彼は絹の布地を通じて、その重さ、成熟を感じた。どの果実よりも美しい。 — 外の公園で鳴いているのはコオロギであろうか。細い、甘美なメロディー、彼の血から歌われているかのようで、更に続き、段落もなく、大地そのものが歌っているかのようで、これは恋人達を愛する善良な豊穡な母なる大地である。...ある無限な時間、彼の口は彼女の唇に留まっていた。

それから彼は、彼女が落ち着かなくなるのを感じた。彼女も何か言いたい風であった。彼はこの唇を離したくなく、魔術を中断させたくなかった。...敏捷な動きで彼女の左の肩が衣服から抜け出た。左手が更に彼の肩に置かれ、右手で胸を出した。...

「ほら」と彼女は嘆いて言った、「この上にあなたの手を置いて、 — 冷たいのよ、...」。

彼がまだ自分の意志を確かめないうちに、彼の手はすでに胸を掴まえていた。

「まあ」と彼女は溜め息を吐いて、彼女の唇を更にしっかりと彼の唇に押し付けた。

彼は何を考えたか。そもそも何か考えたか。炎が上昇し、上昇し続けた。彼は画像のようなものを見た。素早く画像が飛び過ぎて行った。彼の脳内の舞台での以前の幽霊劇であった。おまるマダム夫人の許の部屋、彼は目覚めて、ペーターの視線に出会った。...炎は上昇し、上昇し続けた。...「一緒に行っていにかしら」 — そのように、あるいはそれに似た風に彼女は尋ねた。それから彼女は一緒に出た。ベルリンの階段ホールでの石膏状の大理石の飾りの中、彼らは互いに自己紹介した。ペートラ・レーディヒです、 — 忘れがたい時。

コオロギが相変わらず磨きをかけていた。しかしそれはコオロギではない、コオロギは公園にはいない、コオロギは屋内にいる、 — それは歌っているバツタ、イナゴであり、緑色の、かなりグロテスクに見える生き物である。...

汝の手にまだ胸がある。汝はまたそれを感じている。それは胸であり、それは単に肉の誘惑にすぎず、愛の誘惑ではない。ゆっくりとこっそりと、口を離せ。小さな娘をびっくりさせてはならない。娘はただふしだらなのである。しかし娘はそのふしだらさで何も得ていない。知識すら得ていない。娘は自分について無自覚だ。夢遊病者のようなものだ。娘を突然目覚めさせてはならない。ペーターは別だった。 — いや、ペーターは全く別だった。ペーターはすべてを知っていた、 — しかし子供のように無邪気であった。奴等が交番で彼女について語ったことは、合致していない。ペーターは墮落していなかった。

彼女は知っていた、しかしいつも無邪気であった。...

「どうなさったの」とヴァイオは尋ねて、分からないという風に彼を見つめた。「何を考えているの」。

「いや」と彼は当惑して言った、「丁度思い出したのだ、...」。

「思い出したの」と彼女は尋ねた。

「そう」と彼は言った、「思い出した。私は別な女性のものだ」。彼は彼女の顔の突然の変化を見た。驚いているのであった。彼は素早く言った、「貴女が別の男性のものであるようにね」。

「そうなの」と彼女は従順に尋ねた。彼女は御しやすい。若い馬だ。口はまだ柔らかい。彼女はどんな手綱さばきにも従う。「その別な女性、　－　もう終わったの」。

「終わったと思っていた」と彼は素早く言った、「しかしひょっとしたら終わっていないかもしれないと丁度思い付いた」。

「丁度なの」。

彼女は窓辺に立っていた。カーテンの間に、接吻の最中、彼女のその様子を忘れていたが、髪は乱れて、胸は相変わらず剥き出しで、下唇は泣くように震えていた。　－　快樂の場に、快樂から棄てられて、...彼女は可哀想に見えた。

「貴女の場合も実際終わっていないよ」と彼は急いで慰めた、「ただちょっと待ちさえすればいい。分かっているだろう。彼がこの間、引き下がっているのは、ただ立派なことだ」。

「そう思う？」と彼女はより活発に尋ねた、「彼はまた来ると仰有るの？単に愚かな十五歳の勘違いかしら」。

「勿論そうだ」と彼は言った、「待ちなさい。すぐに準備して、貴女を家へ送ろう。あれこれ喋りながら行こう」。

彼は振り返って、鏡の所へ行き、髪を梳った。「櫛が要るかい」と彼は叫んだ、「ほら」。

彼は上着を着て、手を洗い、その間に彼女も支度した。「出発」と彼は言って、窓から飛び出た。「明かりはそのままにしておこう。私はすぐにまた戻るから」。

二人は心地よく並んで出掛けた。夜は温和で凜いでいた。夜は散策、ぶらぶら歩きへ誘っていた。歩きながら二人の手が二回触れ、彼は彼女の手を握り、二人は二人の良き友人のように、手を取り合って歩んで行った。

「分かるかな、ヴァイオ」とパーゲルは言った、「私はたった今発見した、そのことを貴女に告げよう。　－　このようなことを若い娘達と話すことは元来不謹慎であろう。しかし他に貴女に話してくれる人があろうか。貴女の両親はきっと話さないだろうし」。

「あの人ら」とヴァイオは軽蔑して言った、「両親はまだコウノトリを私は信じていると思っているのよ」。

「ほら見ろ」とパーゲルは満足して言った、「とんでもない時代遅れだ。　－　何を考えているんだろう。流行歌を聞いて、若い娘が何も思わないと思っているのかな。だから良く聞きなさい。　－　しかし可愛い子に何と言ったものか。このような事柄について離すのは極めておかしい。恥ずかしくなって、恥ずかしがることに腹が立ってしまう、...」。

「貴方の発見の話しです、...」とヴァイオは促した。

「そのことだ、つまり私は言ったろう、私は別の女性のものだと。信じて貰えないだろ

うが、その数分前にはそんな自覚はなかったのだ、...」。

「まあ何てこと」とヴァイオは叫んで、立ち止まった、「ぬけぬけと、ご馳走様、...」。

「いや、下らぬことを言うな、ヴァイオ、腹を立てることはない。貴女に対する侮辱ではない。貴女は若くて、可愛い、　　ま、そんな諸々だ。それで、この件はだ、私は自分が別の女性のものであると自覚していなかった。以前はな、彼女と知り合う以前、あちこち女に手を出して、あれこれだったのだ。...それでいつもこんな具合なのだと考えていた。変わることなく、仲違いしては、別の女と仲良くなる、と。一人の女に飽きると、次の女が来る、と。娘達は実際変わらないからな」と彼は言って、少しばかり恥じ入っていて、身勝手な男性的立場を詫びていた、...『次の通りの角にはもう別の男が立っている』の歌を考えて見さえすればいい、...」。

「そうよね、男はどれもこれも変わりばえないって」とヴィオレットは賛同した。

「そうだろう」とパーゲルは勝ち誇って言った、「まさに下らぬ話しだ。私も騙されていた。それは本当じゃないのだ。私がペーターと付き合い始めたとき、つまり私は恋人をいつもペーターと呼んでいて、本当はペトラと言うのだが、...」。

「妙な名前」とヴァイオは貶して言った。

「ま、ヴィオレットもそれほど魅力的とは言えないぞ」とパーゲルは怒った。しかしすぐに話しを戻した、「それで、趣味の好き好きの件だ。私にはペーターが素晴らしく気に入っている。それでペーターとは一年間同棲していて、...」。

「本当に一緒に暮らしたの」。

「勿論だ、他にどうする。同棲は今日問題ないだろう。私はこれも以前と同じ具合であろうと考えていた。この女性は、より穏やかで、より親切な女性であって、それ故少しばかり長続きした。それがお仕舞いになったが、ここに来る直前にな、それで思った。ま、こんなものだ。覆水盆に戻らず。きっと別の女性が見つかるだろう。それが」とパーゲルは思慮して言った、「今そのことを考えてみると、そう考えることはとても下劣なことだ。

　　しかしいかんせん、皆がそんな風に話し、皆がそんな風になっている。それでやはりそんなものかと考える。...」。

「やはりそうなのよ」とヴァイオは反抗的に説明した。

「いや、下らん」とパーゲルは高慢に叫んだ、「まさに私の発見の通りなのだ。毎週ずっと私はノイローエを走り回っている。ま、有り難いことに、結構毛だらけではあるが、しかし心底やる気がまだ出ない。以前は朝目覚めただけでも、格別な理由はなくても、ただ生きているだけで嬉しかったものだ。今日ではこう考える、また朝か、またシャツを着て、これがすぐにくたびれることだろう、と...」。

「私と全く同じね」とヴァイオは言った、「私も何も嬉しくない」。

「同じ病気ですな、我がレディー」とパーゲルは叫んだ、「その症状をもっと詳しく述べよう。やる気がでない、楽しくない、肉体的にも疲れている、...」。

「私が教えましょう」とヴィオレットが勿体ぶって説明した。「私は読んだことがあります。貴方は単に禁断症状なのです。　　特に同棲していらっしやったのですから」。

「おや、ま、驚いた」とヴォルフガング・パーゲルは当惑して叫んだ、「年齢の割りにとても洒落ている、恵み深い御令嬢」。

彼は一瞬考え込んだ。憂慮が彼の中で生じた。こんなに若い娘に、まさにこの若い娘に、

自分の発見を話して大丈夫だろうか。しかし彼はまた納得した。この娘が、本当に、この発言から推測される通りの女性であれば、この発言はしなかったであろう。本当に墮落した人間は、自分の墮落を隠そうとするだろうから。

「いや」と彼はそれ故またしばらくしてから言った、「村には十分に娘がいる。私がまさに発見したのは、どの隅にも他ならぬその女性が立っていて見つかるわけではないということだ。いやそれはやはり他の女性だ。求めているのは同じ女性なのだ。幸せにできるのはこの同じ女性だ。そして貴女も同じ男性を求めている、...」。

彼女はしばらく熟慮していた。それから言った、「私は知りません、分かりません。私はとても落ち着かず、いつも狩り立てられていて、そしてまさに貴方の窓の中を覗いたら、それは誰であれ全くどうでも良く、どの男の人でも私に落ち着きを与えてくれそうな気がしたの、...」。

「今ようやく」とパーゲルは言った、「そのことが分かったのだ。私は一人の娘を見ると、まあその娘が気に入っても、すぐに私はペーターと比べなければならない。そうすると分かる、その娘は何の意味もないと」。

「そう分かるの？」とヴァイオは尋ねて、ほとんど彼の言葉を聞いていなかった。「そのようなことは誰にも聞けないから。両親には聞けない、他の人にも。私は一日中そのことを考えて、夜はその夢を見るの。時々、狂うのではないかと思うわ。パパとママがいないとき、パパの部屋に忍び込んで、百科辞典を調べるの。それを読んだり、レーダーの本を読むと、すべては単に肉体のここのように聞こえるの。時々、それが合っているように思えることがあるわ。すると悲しくなって、そのたびにいつも自分に言うの。そうじゃないだろうって、...」。

「勿論単に肉体ではない」とパーゲルは言った、「それは勝手な思いだ。単に肉体だけなら、どの男女の組み合わせでもいいだろう。他のカップルを見さえすれば、そうじゃないと分かるだろう」。

「その通りね」と彼女は言った、「でも　—　ひよっとしたらもっと何人かが合わないかしら。ひよっとしたらかなり多くの人互いに合うかもしれない。ただ皆ではない。皆は勿論合わない」。

「今私が考えているのは、ただ一人の女性だ」とパーゲルは言った、「私はこれを発見して、とんでもなく嬉しい」。

「パーゲルさん、...」と彼女は小声で言った。

「何だい」。

「パーゲルさん、　—　先ほどはね、　—　とても貴方の部屋に行きたくてたまらなかつたの」。

彼は黙った。

彼女は反抗的に言った、「そのことを言うのはきつととてもはしたないことでしょう。でもそうなのです。どんな人にも私は嘘を言わざるを得ない、フリッツに対しても。貴方に対しては一度本当のことを言おうと思ったの」。

「きつとひどい二日酔いを迎えることになるかもしれんぞ」と彼は用心して言った、「私もな」。

「教えて」と彼女は再び始めた、「先ほど貴方の窓辺にいたとき、　—　私がやつと十

五歳で、十五歳の娘と付き合うのは、屑だから、だから貴方はあんな振る舞いだったの」。

「違うよ」と彼は呆気にとられて、言った、「そんなことは考えてもみなかった」。

「ほらね」と彼女は勝ち誇って叫んだ、「だったら私の少尉も屑とは言えないわよね」。

彼女は立ち止まっていた。彼らは村を通る途中よく立ち止まっていた。一十一時を過ぎていた。この時刻には収穫時、皆が眠っている。彼女は彼の手を放した。彼女は何か言いたげであると彼は感じた。

「それで」と彼は尋ねた。

「私はね」と彼女はつかえながら、絶望的な、ほとんど懇願するような頑固さで頼んだ、「貴方と是非お付き合いしたいの、...」。

「駄目、駄目」と彼は全くの小声で断った。

すると彼女は両腕を彼の首に回して、彼を抱き寄せ、一息で笑い泣いた。彼女は彼に接吻を浴びせ、彼を誘惑しようとした。...

この誘惑の下、彼の心は全く冷たくなった。彼は彼女を押し退けず、それどころか軽く両腕で彼女を支え、彼女が倒れないようにした。彼は彼女が半ば子供であることを再び忘れなかった。...彼の口は冷たいままで、彼の血も冷たく、炎はもはや上昇しなかった。...

しかし暗闇から別な、少しも守られていない別な娘、少しも身分の高くない、遺産継承人ではない、一まことにそうではない女性の像が生じた。何か別様のものがある、と彼は突然震撼され、ますます強く震撼され、揺り動かされ、捉えられて考えた。汚れの中へ歩いて行って、多くの劣悪なことを経験しながら、それでも汚れず、劣悪になることがないことがあるに違いない。彼女、彼女が私を愛してくれた。彼女は純粹であった。一

しかし私はそのことを自覚していなかった。奴等が彼に病気[梅毒]や街頭売春について語ったことはどうでもいいように思われる。それは真実ではない。

そして彼がこうしたことすべてを咄嗟に考えている間、ヴァイオの接吻が、彼女の細やかな情愛がますます強く押し寄せて来た。いや、彼女がいい加減嫌になって止めてくれたらいいのだが、と彼はうんざりして考えた。しかしあたかも彼女は自分の情愛をますます戯けた狂ったものになっている風で、彼女は小声で呻き、彼の手を握って、その手をまた自分の胸に押した。...粗放に振る舞ってはなるまいと案じて彼は考えた。

その時、暗闇の中から足音がした。すでに間近に来た。...瞬時に彼女は彼から離れ、間近の垣根に向かって行き、そこに彼女は村道から顔を背けて、立ち止まった。一パーゲルも半ば横を向いた、...

するとフォン・シュトゥットマン氏が、永遠の子守娘、今回はそれと知らずに子守娘役で、彼らの側を通り過ぎた。彼は暗闇の中、彼らを覗いているように見えた。いや、彼はそれどころか帽子を動かして、丁重に言った、「今晚は」。

パーゲルは何かつぶやいた。垣根からある音がした、一笑い声か、それとも泣き声か。

それから足音が響いた。

「フォン・シュトゥットマン殿だった、ヴィオレット嬢」とパーゲルは言った。

「そうね、すぐ家に帰らなくちゃ。両親はこれから就寝です。ママが私の部屋を覗いたら大変」。彼女は急いで彼の側を駆けた。彼女は憤然と発した、「成果なし、月見て悲しい」。

「祖父母の許へ行ったのだろう」とパーゲルは少しばかり嘲笑的に尋ねた。

「また、下らないことを」と憤然と彼女は叫んだ、「私が求めていたものをまだ分かっていらっしゃらないのであれば、残念だわ」。

パーゲルはもはや答えなかった。彼女も黙っていた。二人は別荘に着いた。「有り難い、両親はまだ下だ」と彼女は叫んだ。しかし丁度彼女がそう言うと、騎兵隊長の部屋の明かりが消えた。そして階段室の斜めに上がって行く、カラフルな小さな窓が明るくなった。「さあ、生垣の上から行こう。ひょっとしたら出来るかも」とヴィオレットは叫んだ。

彼らは家の周りを回った。

「屈んでくださいな。貴方の背に乗って行きます」と彼女は叫んで笑った、「それが貴方が役に立つ唯一のことです」。

「いつでも喜んで奉仕致します」と丁重にパーゲルは説明した。彼女はすでに上に立っていて、一本の生垣の半丸太材に手を伸ばしていた。

おまえは確かに妖精ではない、とパーゲルは考えて、彼女が彼に気前よく自分の全身の重みを感じさせていることに気付いた。さて彼女はすでにもっと高くなり、彼は茂みに寄って、藤の蔓がカサコソ音を立てて、今や明るい人影は、暗い窓の窪みへ消えた。

パーゲルは更に四つの他の窓が明るくなるのを目にした。彼は開いた窓から、騎兵隊長の情けない声を耳にした、罵り、嘆いていた。

「かなり酔っ払っているな」と彼はびっくりして自らに言った。

彼は帰路に就いた。母親宛に更にペートルラについて書こうと彼は思った。ペートルラがどうなったか母親に調べて貰おう。一週間して知らせがなければベルリンへ行こう。きっと彼女を見つけよう。ヴァイオは、難しい。...ま、放つところ。

104

新聞から

夏は次第に秋となった。黄色の穀物圃場区は空になった。表面鋤が明るい切り株を褐色にした。田舎の人々は言った、「いや、また終わったな」。彼らは手に唾を吐き、二番刈りの牧草を刈り、中にはもうジャガイモを始める者もいた。

いや、若干のことがなされて、若干の量の仕事になされた。しかし彼らが新聞を広げると、一 疲れ果てた仕事仕舞いに広げることは稀で、むしろ日曜日であったが、一 そして、外界では何になされたか読んでみると、一体世間ではどんな仕事になされていたのか。

人々が新聞で読んだのは、クーノの政府は倒された、シュトレゼマンの政府が樹立され、これはフランス人達がより好意的に見るであろうということであった。一 しかしフランス人達はより好意的にはならなかった。

人々は読んだ、今や帝国紙幣局でもストがなされる、と。それでしばらくもはや金はない、屑紙幣すらない。

人々は読んだ、ある戦いが始まった、最初はまだ帝国国防相とザクセンの州首相の間の文書の戦いであった。更にバイエルン州政府と帝国政府との戦いも読んだ。

人々は読んだ。イギリスはフランス人のルール地方占拠に対する抵抗を放棄した、と。

人々はアーヘンやケルン、ヴィースバーデン、トリアでの分離主義者[フランス寄り]のデモについて読んだ。人々は読んだ。帝国はラインとルール地方の支援のために一週間で三千五百兆マルク支出した、と。それから人々は、ルール地方とライン河畔での受動的抵抗の放棄について読んだ。フランス人達による不当な占拠に対する戦いは放棄された。

人々は読んだ、輸出が止まって、ドイツの経済は破滅したと。人々はまた、分離主義者と警察との間の戦いについて読んだ。 — 警察はフランス人達によって牢に入れられた。

この時期、このわずかな収穫の週に、ドルは4,000,000マルクから160,000,000マルクに上がった。

「何のために働くのだ」と人々は尋ねた、「何のために生きているのだ」と人々は尋ねた。「世界は破滅する、すべて崩壊する」と人々は言った、「もっと陽気にして、消えてしまう前に、我らの屈辱を忘れよう」。

そのように人々は言い、考え、行動した。

第十二章 探せ

105

騎兵隊長のいないノイローエ

エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人が、この週、事務所に来て、フォン・シュトゥットマン氏と農業経営について相談すると、シュトゥットマンは忘れずに素早い真剣な眼差しで尋ねた、「御主人の具合は。ブラックヴィッツは何と手紙に書いています」。

大抵、エーファ夫人は単に否定的に、その美しい豊満な肩を動かした、それはますます刺激的になり軽やかになるブラウスに隠されていた（シュトゥットマンにはそう思われた）。しかし時にはこうも言った、「また葉書です。元気にしています。今度五百匹目の兎を撃ったそうです」。

「素晴らしい」とそれからフォン・シュトゥットマン氏は言う習慣であった。それから二人は更に騎兵隊長のことは話さず、収穫について、作業について話した。両人は彼らの結果に満足していたし、互いに対しても満足していた。合理的と思われることは、長談義せず決められ、実行された。合理的でないとその後判明した場合、長く遺憾に思われることなく、変更され、改善され、別様の試みがなされた。

勿論いつも、大小の、失敗が生じた。フォン・シュトゥットマン氏にとって、せわしい仕事時間に、かくも大規模な、自分にとっては全く新規の農業を引き受け、経営することは容易でなかった。しばしば彼は一分間で極めて難しい決定を下さなければならなかった。躊躇ってはならなかった。外部圃場区第五への橋が壊れてしまって、二十頭の連獣と八十人の郎党が無為に立ち尽くし、憂わしく、溝に落ちた一台分の収穫を覗いていて、すでに影の中で休んで文句を言い、語り合っていた、「仕事にならねえな」。

フォン・シュトゥットマン氏は手を打った。一分後に、使者達が農園中庭に派遣され、五分後に、鍬や鋤、シャベルが田畑に届いた。十五分後には溝の中にすでに一つの築堤が出来て、二十分後には森から丸太を積んだ馬車が通った。 — 三十分もしないうちに、収穫の荷車が再び外部圃場区第五から農園中庭へ向かった。...

「大した奴だ」と人々は言った。

「あの人から直に子供を授かりたい」とハルティヒ夫人は、今や事務所掃除の代わりに野良仕事をしなければならなかったけれども、賛嘆して言った。

「あんたはそう思うだろうよ、フリーダ」と他の人々は賛同して笑った。

「あれはおまえの黒人マイヤーとは育ちが違う」。

いや、フォン・シュトゥットマン氏は立派に働き、良く加勢した。老いて、弱気になって、卑屈な代官コヴァレフスキーが打ち解ける様、昔の経験に由来する幾つかの立派な助言が彼の頭から生ずる様は、真の奇蹟であった。郎党の間では彼はいつも少しばかり柔和で、気の抜けた風であった。しかし一方また若いパーゲルが汗かきながら、しかしいとも元気に自転車で駆けつけ、極めて戯けた女達に野卑な冗談を言いつつ、しかし厳密に、「正午までにはここまで済ませ、 — 仕事仕舞いにはあちらまで済ませるのだ」と言う様は見事な光景であった。

女達が悲鳴を上げて、そんなことは出来ません、貴公子君には片手間仕事でも、うちらはか弱い女ですもの、兄さんのようにはタフでありませんと言うと、こう彼は嘲笑した。どんな男でも手玉に取れると思っているんだろう。あんたらの言うことを聞いていると、世話の焼ける餓鬼は生んだことはありませんと聞こえるぞ、その通りか見せて貰おう。

女達の弾ける笑い声の下、この貴公子君はまた去った。しかし夕方には女達は彼が指示していた通りに済ませていた。ひょっとしたらそれどころか少しばかり進捗していた。すると彼は褒めて確認することを忘れず、あるいは更に、粗放な冗談を言って、もっと上手に終えた。彼は彼女達のすべてに気に入られていた。彼のことでどの女も別の女に嫉妬することがなかったから格別であった。

「あの人は世慣れているね」と彼女達は言った、「上品な女をものにする事だろう、
— あんたのような箒じゃないだろう」。

「あんた何様のつもり、 — あんたのような屑はいつも掃き出しているよ」。

彼女達は彼の過去を知ると、 — 勿論彼女達は鋭い好奇心からすべてを聞き出していた、 — 最初士官候補生と呼び、それから士官貴公子と呼び、それから貴公子と呼び、それから貴公子君となった。彼はよくヴィオレット嬢と田畑へ来たが、あたかも両者は荘園所有者の息子と娘のような具合に思われていた。 — 二人は恋人同士ではないと女達はすぐに察した。

いや、ヴァイオは恋人に去られて、ヴォルフガング・パーゲルの常連の同伴者となっていた。彼女の母親は彼女に対して余り時間がなかった。母親も実際よく田畑に出掛けた。エーファ夫人は青春をずっとノイローエで過ごしていて、以前彼女はよく田畑に自分の父親、老枢密顧問官と一緒に出ていた。彼女は老父が思わず口にするのを耳に留めていた。老父が注意することに注目していた。彼女は如何にそのことが自分の裡に残っているか知って驚いた。信じられないほどであった。騎兵隊長と一緒に田畑に来て、見回ったときには、見回りは許されなかった。というのは騎兵隊長がすぐにこう言ったからである。「これはおまえには分からない。私の農業経営を案ずるな」と。隊長はすぐに苛立つのであった。

フォン・シュトゥットマン氏は決して苛立たなかった。注意深く彼は彼女の報告に耳を傾けた。更に彼は彼女を勇気付けた。彼は彼女の提案に「素晴らしい」と言った。そして彼が時に、彼女の提案通りにしないとき、彼は自分の賛同しない理由を詳細に立派に述べ、それで彼女は彼の言う通りにしたが、しかしまたすぐに少しばかりあくびする必要もあった。フォン・シュトゥットマン氏は確かに信頼出来る有能な男であったが、少しばかり丁寧であった。彼が彼女にある日、自分の愛を打ち明け、根拠付け、動機付けて、展開する場合、自分の振る舞いを友人に対して詫び、釈明し、未来に対する自分の要求を精密に定める場合、彼がどのような振る舞いをするか、思い描けないことであった。これは思い描けない。フォン・シュトゥットマン氏はどんなに有能であっても、いちゃつく場合、世の中で最も無能であった。しかしエーファ夫人は認めざるを得なかった。彼の流儀は、家畜小屋に対する餌混合の冷静な計算ぶりにも関わらず、視線を内省的に彼女の足許から口許まで上げて行き、それから「エヘン」と言い、新たに展開するもので、それなりの魅力がある、と。

ゆっくりと、しかし確実に、とエーファ夫人は考えた。彼女は急がなかった。至急や大

慌てに関しては、まずは夙に十分に経験していた。ちなみに多分確たる計画や意図は少しもなかったであろう。フォン・シュトゥットマン氏による静かな、注意深い敬愛は、彼女にとって単純に気持ち良かった。近年の不穏、不和、性急さの洪水の後、彼女は満足して、フォン・シュトゥットマンからの信頼と秩序の静かな奔流に揺すられ運ばれていた。

しかしかくも多面的に忙しい母親は娘に対して十分な時間が割けないことは察せられることである。最初エーファ夫人は田畑へ出掛けるときや、事務所へ向かうとき、ヴィオレットを同行させようと試みた。しかしこれは直に止んだ。より密接に、より長く一緒にいると母と娘の関係には深刻な濁りがあると判明した。エーファ夫人は、ヴァイオは母親の言うことすべてを苛立って拒絶することに気付いて悲しんだ。母親が、今日は良い天気だと言うと、ヴィオレットは鬱陶しい天気と見ていた。ヴィオレットに一度泳ぎに行ったらと提案すると、ヴィオレットは泳ぎは嫌いと言った。どう仕様もなかった。一つの抵抗が見られた。真剣な敵意といったような戦いの構えであった。

ひょっとしたら娘に本当に不当なことをしたのかもしれないとフォン・ブラックヴィッツ夫人は考えた。ひょっとしたら何もなかったのかもしれない、 — 何らかの無邪気な若い娘の恋愛沙汰か、 — 実際もはやどこかの余所の男について耳にしない。それで少女の名誉心を致命的に傷付けたのであろう。だったら何も、強制せず、彼女の自由に任せるのが、最良だろう。 — いつの日か娘はまた自分の許に戻って来るだろう。

従ってヴァイオはまた自分の自由を取り戻した。軟禁状態はもはや話題にならなくなった。しかし彼女は自ら何を始めたらいいのか。この人生は何と空虚になったことだろう。自分は永遠にこれから先、待っておれない。一年、二年、三年待つことを — ひょっとしたら待っても無駄かもしれないと、考えると、彼女はぞっとした。だったらむしろ、...と彼女は考えた。しかしむしろ何がいいのか、分からなかった。死、手当たり次第死ぬ、 — 分からない。ただ何か起きてよ。しかし何も起きない。全く何も起きない。

彼女が自由を取り戻した最初の日々、彼女は自分がフリッツと一緒に行ったすべての馴染みの場所に赴いた。半日彼女は森の中をあちこち歩いた。彼と最初に出会った所にも行った。二人が草むらに横たわったことのある箇所はまだあった。彼女はそれを思い出した。...あたかも草はまたまさに伸びたかのようで、苔のクッションはまた滑らかになったかのようであった。 — しかし彼はもはや現れなかった。時々彼は一つの夢でしかなかったかのように思われた。

彼女は黒い奥にも出掛け、長いこと探した後、武器が上手に埋蔵された箇所を見つけた。長いこと彼女はそこを行き来して、いつか彼はやって来て、この秘密が無事か調べに来るに違いないと思った。 — でも彼は来なかった。

時々彼女は森への途次、森林官クニブッシュに出会った。彼は彼女に彼の心を打ち明けた。今や偉いさん達は森林官を密猟者ボイマーに対置させています。この屑は森林官の自慢話を聞きつけたに違いないのです。自転車から転げ落ちた後、一瞬気を失った彼は、厚かましくこう主張しています。森林官が自分を自転車から投げ飛ばし、何回も岩場に頭をぶつけさせ、自分を殺害、撲殺しようとして、と。偉いさん達は老いた老人の私に嘸みついて、こう言いました。高齢故に緊急の逮捕を保留している、と。密猟された雄獐鹿については話題にならず、まずはボイマーに対する殺害未遂について審理されると聞いています。この間、この密猟者は侯爵のように病院で暮らしていて、立派な食事と、丁重

な看病、特別室を得ています。勿論窓の前には格子があります。一 彼の生涯でかくも都合良く行ったことはないでしょう、この屑野郎、卑劣漢にとって。

退屈してヴィオレットはこの嘆き節を聞いていた。森林官自身が、密猟者ポイマーとの英雄的戦いに関する噂の責任所在について承知している筈なのである。そして初めてまた森林官から、小検査官マイヤーとフランクフルトで出会ったという報告も耳にした。しかしこの小マイヤーはもはや小者ではなく、偉い男に出世しているように見えます。彼は金を持っています、沢山持っています。

森林官はマイヤー氏の衣服について詳細に述べた。とても上品で、指には高価な指輪を嵌めていて、跳ね蓋付きの金時計を持っていました。しかし小マイヤー殿は高慢になっていません。森林官を食事に招待してくれました。品のいいワイン酒場です。ラインワインを注文して、その後シャンパン、締めの色は赤いブルゴーニュ酒でした。小マイヤーはこれを「トルコの血」と呼んでいました。森林官はこの美味贅沢を思い出して唇を舐めていた。

「相変わらず密売人ね」とヴァイオは軽蔑して言った。「黒人マイヤーにはそれがぴったり合っています。それで貴方は酩酊のお礼に、ノイローエでの出来事をすべて語ったのでしょうか」。

森林官は赤くなって興奮してこの嫌疑に抗議した。騎兵隊長殿がもはや不在ということさえ話さなかったのです。何も話していません。ちなみに自分らが話したことは全く別の事柄でした。...

「では何について話したの」とヴァイオは喧嘩腰で尋ねた。しかし森林官は正確には言えなかった。「酔っていたのでしょう、クニーブッシュ」とヴァイオは確言した、「何を話したか、そもそももう覚えていないのでしょう、一 それじゃ、良い猟運を」。

「猟運多謝」と森林官はどもった、そしてヴィオレットは一人で先に進んだ。

森林官はその惨めなお喋りで彼女には退屈であった。森は退屈であった。祖母は敬虔な格言で退屈であった。枢密顧問官は、永遠に神秘的に出発し、村長ハーゼの許に潜んだり、あるいは黙して考え込んだりして、退屈であった。従者レーダーを彼女は避けた。彼女は彼が手紙をどうしたか尋ねることさえしなかった。(しかし今や彼女は、夜も昼も、ママが驚いて抗議しても、自分の部屋に施錠した)。いや、すべてが彼女にとって退屈で、反吐が出た。...全く驚いてヴィオレットは自問した。一体、フリッツと出会う前、以前は一日中、何をしていたのであろうか、と。彼女は考えたが、分からなかった。すべては気が抜けていて、空虚であった。一 すべてが退屈であった。

唯一、ヴォルフガング・パーゲルが残っていた。本来彼女は母親よりももっと彼を憎まなければならなかったであろう。しかし彼の許では、彼が彼女についてどう考えるか、彼が彼女のことを笑うとき、彼が何と言うか、彼女には全くどうでも良かった。彼女は彼に対して何の羞恥心もないかのような、彼は一種の兄であるかのような按配であった。

両人は互いに信じられないような、ため口であって、宮殿の祖母は自分の孫が若いパーゲルと話すのを耳にしたら即刻卒倒したことだろう。祖母は孫娘のためには好色漢ヴォルフガング・フォン・ゲーテを添削したのであった。

「こんな懇ろな接触はいけません、恵み深いご令嬢」とパーゲルは言うことが出来た、「分かりますよ、今日はまた、内側が外側へと裏返された一日なのでしょう。目の周りに

黒い隈があります。しかし私は単に弱い、よろめく男にすぎないことを考えてください、...」。

この調子にヴィオレットは必ずしも合わせられなかった。彼女は彼の腕にぶら下がり、彼をしっかりと抱いて、言った、「いい感じ。時には静かに少しばかり私に優しくしてよ。すべてを貴方のペートルのために節約必要ないでしょう」。

「節約することは、です」とパーゲルはシュトゥットマン的の術学で訂正した、「ひょっとしたら一度折を見て、ドイツ語を勉強したらいいかもしれません」。

いや彼女の血が沸騰するほど彼は彼女を怒らせ、刺激し、苦しめることが出来た。彼は彼女を自分の体から離し、二度と接吻に至らないよう、彼は用心をした。時々彼女は憤怒の涙を浮かべ、半ば頬を赤くして、彼の許から走り去った。彼女は、彼のことを臆病者、屑、意気地なしと呼び、二度と彼とは口をきかないと誓った。...

翌朝彼女は事務所のドアの前に立っていて、もう彼を待っていた。

「また、お恵みに与れますかな」と彼はにやりと笑った、「ヴィオレット、貴女に誓うが、私はもっと臆病で、もっと屑、もっと意気地なしの気分だ」。

「私のフリッツがまた来たら」と彼女は目を光らせて叫んだ、「貴方の私への仕打ちを話します。すると彼が貴方に決闘を申し込んで、さんざん撃ち殺すことでしょう、楽しみだわ」。

パーゲルはただ笑った。

「私はそうしないと思っているのでしょ。きっとそうして見せるから」と彼女は叫んで、すでにまた憤然としていた。

「貴女ならそうする」と彼は笑った、「貴女は元来、全くの冷たい腐肉で、貴女は望みのものを手に入れさえしたら、全世界はくたばろうが構わないと夙に承知している」。

「貴方がくたばればいいのよ」と彼女は叫んだ。

「それはそうだ。しかし今じゃない。今はまず馬小屋に行かなければならない。ゼンタが昨夜子馬を生んだのだ、一 行くかい」。

勿論彼女は一緒に行った。感動と情愛とでほとんど正気を失って、彼女は大きな頭の、小さな、長い脚の子馬の前に立っていた。「まあ可愛い、食べてしまいそう、素敵すぎる」。

心の奥底で満足して、ヴォルフガングは側のヴィオレットを見つめた。この娘は同じように満足して、私が心臓を撃たれて汚れの中に横たわっているのを見守り、あるいはむしろ腹部を撃たれて、少しばかり嘆き声を上げるのを見守ることだろう。いや、ペーターの方がむしろ十万倍ましだ。おまえは何も役立たない。外面は綺麗だが、内面は腐っている。こんな腐った林檎のために残っている心はない。

しかしヴォルフガング・パーゲルは普段彼女に対し、自分はいかに超然とこの小さな食欲なヴィオレットを見守っているか、いとも平静に確実に感じていたが、ある一点に関し、彼は彼女にほとんど無茶な憤激に駆られた。彼女が彼に対し、身体的に、身だしなみを構わないときであった。彼女が彼に迫って来て、半ば皮肉な情愛と情熱をぶつけるとき、それはまあ我慢できることで、快適ではなくても、耐えられることであった。(もっともポティファルの妻[ヨゼフを誘惑し、断られると誘惑されたと讒言した]を前にしたヨゼフの役はいつも何か滑稽であった)。彼女はともかく目覚めてしまって、自制する術、何か断念する術を習得していなかった。

しかし彼女が田畑へ行く途中で、無造作に考えて、彼にこう言うとき、「ちょっと先に行って、パーゲル、シーシーする必要があるの」とか、水泳のとき、何も遠慮せず、彼が彼女の祖母であるかのように、一 彼の前で脱ぐとき、彼は荒々しい怒りに駆られた。彼は最も殴りたかったことだろう。彼は際限もなく罵って、興奮の余り震えた。

「忌々しいことだ、売春婦じゃないのだから」と彼は叫んだ。

「構わないでしょう」と彼女は言って、彼を嘲笑的に、面白そうに眺めた、「あなたに用を足して貰うわけにいかないでしょう」。

あるいはまた「また勿体ぶって。あなたの奥さんじゃないのよ。何故こんなことで怒るの」。

「墮落して、腐敗して、随まで腐っている」と彼は叫んだ、「貴女の中には汚れのない斑点は一つもない」。

「斑点は大抵汚れているわ」と彼女は冷静に説明した。

ひょっとしたら彼を途方もなく激昂させたのは、男性の自分への侮辱ですらなかったのかもしれない。もっともこのような事柄にはどの男性も、殊に二十三歳の男なら怒ったに違いないけれども。ひょっとしたら突然襲われたパニックのような不安がもっと強かったのかもしれない。どこへこの娘は滑り落ちて行くのか。もうすっかり駄目なのか。自覚して汚れの中に行こうとしているのか。この十五歳の娘には万事すでに反吐が出るものなのか。

礼儀正しい人間は皆、少しばかり周りの人間に対し責任感を抱いている。ただ悪人のみが同胞を警告なしに泥沼に落ちさせる。パーゲルは自分の毎日の同行者、ヴィオレットに責任を感じていた。怒りが消えると、彼は彼女と話し、警告しようとした。しかし彼女により接近することは出来なかった。彼女は全く不可解な振りをした。彼女は馬鹿げた一般的な言い回しの有刺鉄条網の中に居座った。「人間は皆そうよ、一 はしたなくしないと、さもないとただ劣等に扱われてしまうだけです」。あるいは、「丁度パパが旅立ってから、シュトゥットマンさんがママをつがいに呼ぶのは、礼儀正しいことかしら。一 私の方がもっと礼儀正しくしろなんて。馬鹿じゃない」。一 あるいは、「貴方が駄目になる以前に、ペートル嬢に対してなされたことすべてを、私に話さないでください。そのときだって、とても礼儀正しかったわけではないでしょう。特に私に礼儀正しさを求めなくてもいいでしょう、一 たとえ私はただの田舎娘にすぎなくても」。一 あるいは悪魔のように抜け目ないこともあった。突然話しを変えて、「ベルリンでは娘達が全く裸で踊る酒場があるというのは本当ですか。貴方はそこにいらしたんでしょう。だからさ、貴方が私の体の一部を見たからといって、貴方は失神するとお話しになってもですね。おかしいですよ」。

どう仕様もなかった。彼女は単にその気がなかった。百度となくヴォルフガング・パーゲルは、フォン・シュトゥットマン氏、あるいは恵み深い奥方と娘ヴィオレット嬢について相談しようと思い立った。しかし彼が現実にもうしななかったのは、道楽者の秘密厳守といった何らかの馬鹿げた思いから黙っていたのではなく、むしろ自らにこう言っていたからである。彼女は若い私にさえ耳を貸さないのに、年寄り達に何が出来ようか、と。処罰や説教では単にもっとひどくなるだけであろう。一 彼女が逃げだそうとか、ここで何が生じたら、ひょっとしたら話す必要があるかもしれない。しかし万事旧来通りに行く

のであれば、きっと彼女には何も生じないであろう。ここいらのどこかの若造と彼女が付き合う気のないことは確かだ。一 そうするには自分を余りに有力な遺産継承人と見なしているし、将来の所有者として威光を少しも失いたくないと思っている。あの道楽児、フリッツ少尉殿がまた現れたら、私はすぐに知ることになろう。そのときはこの少年をまず叱りつけ、ぶちのめして私の見解を知らしめよう、永久に、二度とこの幸せな田園に出現しないように、と...

パーゲルは大きく伸びをした。彼は村のどんな大きな若衆との喧嘩も恐れなかった。三ヵ月の田舎生活で彼は太って来て、どんな少尉とも太刀打ち出来て、どんな冒険にも十分に知謀はあると感じていた。

「それで今、貴方は誰を抱きたいの」とヴァイオは嘲笑的に尋ねた。

「貴女の少尉フリッツだ」とパーゲルは不意に言った。彼は自転車に飛び乗った。「バイバイ、御令嬢。今朝は散歩はなし。軽騎兵どもの所へ行かなくてはならない。しかし一時には出来るかも」。

そう言って彼は去った。

「こちらに入って来たら、どう。ヴァイオレット」とエーファ夫人は叫んだ。夫人は事務所の窓から二人の別離を観察していて、ヴァイオのがっかりした顔を見て、気の毒に思っていた。「十五分したら町へ車で行くの。支払う賃金を受け取りにね。一緒に行こう。

一 キプファリング店で生クリーム付きのトルテを食べましょう」。

「まあ」とヴァイオは決心できずに発し、下唇を突き出した。「どうしようかな、ママ。

一 いえ、結構。生クリームはただ太るだけだし、...」。

「時に本当に心配になります」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は言った。

「そうですか」とフォン・シュトゥットマンは丁重に尋ねた。彼は賃金リストを眺めて座っていた。一 数字に、添加すべきすべての零を記入することを夙に止めていたが、どの欄もこの富には十分でなかった。

「娘は優柔不断で、弛んでいます。生気が見られない、...」。

「若い娘にとってはかなり難しい年頃でしょう」とフォン・シュトゥットマン氏は提案した。

「ひょっとしたら単にそれだけのこともかもしれません」とエーファ夫人は率直に言った、「他に何かあるのかしら」。彼女は熟慮し、それから慎重に言った、「娘はただいつも若いパーゲルと一緒にです。二人の間の口調は私には馴れ馴れしく見えます。憂慮されませんか」。

「私が 一 憂慮ですか」。

シュトゥットマンは少しばかりぼんやりして賃金リストから目を上げた。総賃金の記入に疾病保険の欄も補助として必要であれば、この保険額用には疾病欄を使う必要があろう。しかし疾病欄は窮屈すぎる。その為に賃金租税の欄を使うことになろう。一 そこでこの賃金台帳は余りに狭すぎると明らかになる。地球のすべての経度を備えたアトラス[巨人神、判、それに地図の意味]が賃金リストとして必要となろう。...忌々しい。何も合わない。厳しい、不機嫌な顔できちんとしたフォン・シュトゥットマン氏はきちんとしていない賃金リストを見つめていた。

「フォン・シュトゥットマンさん」と恵み深い奥方はあの鳩のような穏やかな声で声を

かけた。これにはどの男性も電気ショックを受けたかのように縮み上がるものである。「若いパーゲルさんのことで憂慮を抱かないか尋ねたのですよ」。

シュトゥットマンは、全く然るべく、縮み上がった。

「いや、失礼、恵み深い奥方、幾重にもお詫び申し上げます。ここで情けない賃金リストに没頭していました。ますますひどくなります。もはや合いません。分かったのは、これで悩んでも意味がないということです。提案しますが、これからはきりの良い額、例えばすべての既婚者には一億マルク紙幣を支払うことです。確かに若干払いすぎになりますが、しかし他に方法はありません」。

彼はエーファ夫人を物思いに耽って案じて見つめた。

「了解です」と彼女は穏やかに言った、「それで、金銭問題が片付きましたら、母親としての私の心配を聞いて頂けますか。若いパーゲルに関する私の憂慮のことです」。

フォン・シュトゥットマン氏はとても赤くなった。「恵み深い奥方、とても迂闊なことでした。私はちょっと拘泥してしまうと、抜け出すことができません。ご説明しますと、...」。

「いえ、結構です、親愛なるシュトゥットマン」とエーファ夫人は絶望的に叫んだ、「御説明は望んでいません、お返事です。一時々」と彼女は憂わしげに言った、「貴方はアヒムとあきれるほどそっくりです、二人はとても対照的ですがけれども。アヒムの場合、性急さ故に、貴方の場合は慎重さ故に、返事を貰えません。結果は私には同じことで、パーゲルさんに関して、心配する必要があるのか、同じように分からないままです」。

「必要ありませんよ」とフォン・シュトゥットマン氏は急いで、咎を自覚して説明した、「パーゲルは全く信頼の出来る名誉ある男性であることは全く別に致しましても、彼は何の危険もありません、一間違いない」。

「分からないわ」とエーファ夫人は疑わしげに言った、「彼は若いでしょう。今確かに生気に満ちあふれています。彼は最近の週、とても輝いて見えます。私も気付いています。私の娘も気付くことでしょう」。

「でしょう」とフォン・シュトゥットマン氏は満足して尋ねた、「彼は力強く蘇ったのです。私は自分の成功を誇りに思っています。彼はベルリンから来たとき、廃人で、病気で、やる気がなく、腐っていて、一ほとんど墮落していました。それが今どうです。囚人達でさえ、彼を目にすると輝きます」。

「私のヴィオレットもそうです」と恵み深い夫人は素っ気なく言った、「この若者が危険でないことの証明には必ずしもなっていないですよ、...」。

「しかし恵み深い奥方」とフォン・シュトゥットマン氏は非難一杯に叫んだ、「彼は恋しているのです。単に恋する者のみが満足して、朗らかで、すべてに自足しています。見れば分かります、一私のような干涸らびた計算人間でも分かります」（彼は再び赤くなった、軽い彼女の嘲笑的視線の下、ほんの少しばかりであったが）、「彼はこちらに来たとき、その件は終わったと考えていたのです。何か以前あったのでしょうか。彼は暗く、生気がなかった。しかし私は何も尋ねなかった。そうするつもりはありません。恋愛についてのお喋りは有害と思いますので、その理由は、...」。

恵み深い奥方は警告の咳払いをした。

「しかししばらく前からその件が再び元通りになったのです。彼は手紙を貰い、書いて

います。彼は小鳥のように元気になって、意欲的に働いています。 — 彼は全世界を抱擁したいことでしょう」。

「私のヴァイオは御免です」とエーファ・フォン・ブラックヴィッツは決然と叫んだ。

106

ミンナはペートラを見つける

その通り、フォン・シュトゥットマン氏は正しく見ていた。ヴォルフガング・パーゲルは再三手紙を書き、貰った。そしてフォン・シュトゥットマン氏は次の点でも正しかった。ヴォルフガングの新しい生命欲、彼の再び目覚めた行動力は、これらの手紙と関連している、と。もっともまだ一行もペートラから手紙が来たわけでもなく、ペートラ宛に書いたわけでもなかった。それでも快活になった。それでも行動欲が出て来た。それでも全世界を抱擁しそうになった。それでも子供ヴァイオレットに対し辛抱強くなった。

老ミンナは若君の最初の手紙を郵便配達人から受け取ったとき、筆跡を認めて、送り手を読んだとき、肢体が震えて、まずは静かに床の椅子に腰掛けなければならなかった。

すると彼女は全く落ち着いて、思慮を巡らせた。

私は老夫人をびっくりさせてはならない、と彼女は考えた。夫人もはや何も食べないし、もはや何も飲まない、もはや何もしない、夫人はいつもただ座っていて、考え込んでいる。そして夫人は私が気付いていないと思って、ポケットから紙片を引き出す。それは彼が自分の品物をこっそり取りに来たとき、当時夫人宛に彼が残したもので、その紙片に、自分はこれからまともに働こうと思う、まともになるまでは何も手紙は書かないと記してあるのだ。その彼が今、書いてきた。

彼女はその手紙を吟味して、不審げに見つめた。

しかしひょっとしたらまた何か愚かなことが書かれていて、夫人を興奮させ、もっと不幸にするかもしれない。ミンナはますます懐疑的になった。ひょっとしたらまたただ金を無心するつもりで、どこかにぶち込まれているかもしれない。...彼女は手紙を裏返した、しかし裏面には単に郵便切手のみがあった。彼女は再び裏返した。宛書きは全くきちんとしている。ヴォルフィーはすでもっと悪筆で書くものだった。それにインクである、単なる鉛筆ではない。そんなに急いで仕上げたものではない、時間をかけている。ひょっとしたら何か良いことが書かれているかもしれない。...

ミンナは、手紙をこっそり開けて、余りにひどい内容であると、自分が返事を書く、しばらく決心していた。ヴォルフィーは自分の子供同然だし、そうして良いだろう。 —

しかしそれが喜びをもたらすものであれば、やはり夫人がまず喜ぶべきであろう。いや、きっとひどいことじゃないだろう。

そう言って彼女は椅子から立ち上がった。落ち着きと決意とが彼女に戻って来た。彼女は手紙を新聞の下に置いて、手紙が何も見えないようにした。そして恵み深い夫人が不機嫌に悲しげにコーヒーのテーブルに腰掛けると、ミンナはいつもの慣習にすっかり反して、ドアの下のお喋りの定位置を去って、「市場ホール」について何かぼそぼそ言いながら、自分の女主人の呼びかけを無視して消えた。彼女は本当にマクデブルク広場の市場ホールに駆けて行き、そこで九千万マルクの鱒を求めた。 — 恵み深い夫人は今日ようやくま

た美味しく頂くことだろう。

夫人は本当にそうであろう。ミンナはそのことを、居間のドアを開けたとき、すぐに察した。すでに恵み深い夫人は待ち構えていて、その目はこの八週間には見られなかったほど輝いていた。

「老いぼれの鷺鳥だよ」と夫人は忠実な友に挨拶して、「誰とも一言も話せないように、本当に出て行く必要があったの。その通り、若君は手紙を寄越して、田舎に今いるのよ。大きな荘園で、見習のような身分だって。でもかなり責任を負っていて、そのことは何も分からないけど、— あなたは自分で読みなさい。手紙はコーヒーのテーブルにあるから。元気に暮らしていて、あなたによろしくって。彼が金のことを一言も書いてない手紙は、どれほど久しぶりのことか分からないけど、本当に最初の手紙よ。インフレだから、悪し様に言えないけど、彼がああ絵の金をまだ持っていて、もはや何の価値もないことでしょう。実に陽気な書きぶりで、こんなに陽気に書いて来たことはない。沢山面白い人達がいるに違いない。でも皆と上手くやっているみたい。まあ、自分で読んで御覧、ミンナ。私がすべて話す必要ないでしょう。でも、とても楽しいけど、ずっと農業に携わる気はないのよ。一種の療養所のようなものと彼は書いている。それでいいかもしれない。彼が本当にタクシー運転手になるつもりでも、もはや私は反対しない。— でも私は彼に返事はしない。それは勿論問題にならない。貴女が私に言ったこと、私が甘やかし過ぎたという言葉は私は忘れていないから。— でも彼が泣きわめくと、いつもボンポンを上げていたのは、貴女だったのよ。昔から賢女過ぎるあなたがね。まずはあなたが返事する、そう私は考えたの。— それで、彼がすぐまたふくれて、機嫌をそこねるか、見ることにしましょう。その場合まだ遅くなっていないわね。それにミンナ、調べて欲しいとも書いてある。— 私は面白くないけど、そうよ、少しも面白くないけど、でももう反対はしない。それであなたは今日の午後、自由時間にして、尋ねてみて。そして今晚彼に手紙を書きなさい。手紙が今日のうちにも郵便ポストに入るなら、彼には明日着くでしょう。ひよっとしたらそこは田舎の扱いで、一日遅れるかも。ちなみに、私も一筆挨拶を添えてもいいかもしれない、...」。

「奥方様」とミンナは言って、朝食のテーブルを危ないという眼差しで見つめて、少しも手紙を見ていなかった。というのは彼女は更に詳細に語り続ける夫人を玄関の間から廊下を経て、食堂へと次第に連れて来ていたからである。「奥方様、— 早速お席に座って、卵と、少なくとも二個のシュリッペ[パン]を召し上がりませんか、私は手紙を読みませんし、今晚返事も書きませんよ。...全く無分別なことです、最初は悲しみの余り何も召し上がりず、今度は喜びの余り何も召し上がらない。それでいて、ヴォルフガングには落ち着いて、分別ある人間であれと要求なさっています、...」。

「うるさいわね、聞いていると頭に来るわ、ミンナ」と恵み深い夫人は命じた、「さあ、手紙を読んで、私は早速食べるから、...」。

しかし、パーゲル夫人は実際美味しく朝食を食べ、昼には九千万マルクの鱒にも敬意を表して味わったけれども、この日中にはヴォルフガング・パーゲルへの返事はまだ書かれなかった。

頼まれた調査は簡単に糸口が掴めず、ゲオルゲ教会通りからフルホト通りへの痕跡を辿ることは容易ではなかった。

ミンナはベルリンの住民登録所を通じた迷路で、幾多の道を経て、更に幾多の時間、辛抱強く情報を待ち、問い合わせつつ問い合わせられ、あちらこちら指示され、ようやくまことに訝しく思いながら、大きな厚板の垣根の前に立った。その垣根には、子供達によく見られる白墨落書き、「これを読む者はバーカ」の隣りに、大きな白い文字が塗られていた。「エーミル・クルーパス・未亡人 屑物置き場」。

ここかしらとミンナは疑わしげに自問して、少しばかり絶望した。またきつと間違った所を指示されたのだろう。彼女は苛立って、門から大きな中庭を覗いた。中庭は、錆びた古い鉄の山、汚れた酒瓶の行列、古い破れたマットレスの山で、実際居心地良くは見えなかった。

「ご注意」と一人の若造が叫んで、犬のペアを連れて、彼女のすぐ間近をガサゴソ中庭へと向かって行った。躊躇しながら彼の後をミンナは行った。しかしレーディヒ嬢の小屋への彼女の質問に対し、全く率直に返事がなされた。「襤褸切れの許です、奥の方、一黒いバラック」。

ミンナは早速喜んで進んだ、可哀想にと考えていた。彼女も困っていて、少しばかりの生活費を稼いでいるのであろう。

ミンナは見つけた。古いバラックは恐ろしく汚れて見えた。更にすさまじく臭った。彼女は自分の可愛く、清潔なキッチンを快適に思い出していた。ペートルが本当にこの中にいるのであれば、三倍気の毒に思われる。

「レーディヒお嬢さん」とミンナは灰色の暗闇に叫んだ。そこでは人影がうずくまっていて、埃が舞っていた。彼女は咳をせざるを得なかった。

「はい？」とある声がした。

それから咳をしているミンナに向かって来た。青緑色の外套を着ていて、おかしい具合に変わって見えたが、しかし上には馴染みの親愛なる、明るい、簡素な顔があった。

「まあ、ペートル、ほんとにあんた」とミンナは言って、彼女を、見開くことが出来る限り目を開けて、凝視した。

「ミンナ」とペートルはびっくりし、喜んで叫んだ、「あんたは本当に私を見つけに来たの」。

(両人は突然互いに「あんた」とため口で叫んでいるのに気付かなかった。以前そうしたことはなかったのである。しかしまさにそんなものである。長いこと会わずにいて、再会したとき、互いに好き合っていることに初めて気付く人々がいるのである)。

「ペートル」とミンナは叫んで、勿論すぐにだしぬけに願いを述べた、「何て姿、まさか」。

「そうなのよ」とペートルは微笑した。

「予定日は」とミンナはほとんど叫んだ。

「思うに、十二月の初旬かしら」とペートルは答えた。再び微笑していた。

「でもそのこと即刻私はヴォルフィーに手紙で知らせなきゃ」。

「ヴォルフにはどんなことがあっても知らせてはいけません」。

「ペートル」とミンナは懇願して言った、「彼のことを怒っているのではないでしょう」。
ペートルはただ微笑していた。

「根に持つてはいないわよね。あんたはそんな人じゃないと思っているから」。

二人はしばらく黙って見つめ合っていた。埃っぽい襤褸切れのバラックである。女達がかさこソ襤褸切れを仕分けていた。二人は互いに顔を吟味していた。あたかもお互いどのように変わったか確かめる必要があるかのようであった。

「空気が悪いから出よう、ペートラ」とミンナは頼んだ、「ここでは話せないし」。

「彼は外にいるのですか」とペートラはゆっくりと大きな目で尋ねた。彼女はクルーパスおっ母さんの以前の言葉、彼が通りの向こうに立っていたら、彼女は駆けて行くであろうという言葉思い出した。彼女は絶対駆けてたくない。

ミンナはペートラを吟味して見つめていた。突然、自分達がどんな義理の娘を有しているのか、それは全くどうでも良い問題ではないと分かった。老夫人はもはや多くの苦悶には耐えられない。

「ここに立って、この汚れた地、空気に根付いていなくてもいいでしょう」と彼女は叫んで、足で踏みならした。「彼が外にいても、彼はきっとあんたに嘸みつかないわよ」。

ペートラは驚いて青ざめた。それは暗い小屋の中でも分かった。しかし彼女は決意して言った、「彼が外にいるのであれば、私は出ません。私はそう約束したのです」。

「まあ、出ないの」とミンナは罵った、「それはますます結構だわね。あんたの子供の父親の許へ行かないのかい。このような子を誰にあげるのかい」。

「まあ、静かにして、ミンナ」とペートラは叱った。今度は彼女が足で踏みならした。「何故彼があんたを寄越しているの。彼は少し変わったと思ったのに。でも変わっていないのね。何か不都合なとき、彼は他の人にやらせるものだった」。

「そんなに興奮しなくていいよ、ペートラ」とミンナは叫んだ、「『彼』には面白くないだろうから」。

「私は少しも興奮していません」とペートラは叫んで、ますます怒りを募らせた、「でも、彼が相変わらず何も学ばず、そもそも変わっていないのであれば、腹が立たないかしら。またあんた達の許へ転がり込んだのでしょうか。全くクルーパス夫人が予言した通りだわ」。

「クルーパス夫人て？」とミンナは嫉妬して尋ねた、「外の垣根に書き留められていた未亡人かい。その人に私どものヴォルフィーとの話しを語ったのかい。あんたがそんなことをするとは思ってもいなかった、ペートラ」。

「相談できる人が一人は必要でしょう」とペートラは決然と言った、「あなた方を待っておれなかったのだから。 — 彼は何をしているのですか」。そして彼女は頭で外を示した。

「それでは本当に彼と会うのは不安で、少しも彼に会いたくないと言うの」とミンナはひどく意地悪に尋ねた、「あんたの子供の父親がいるというのに」。

しかし突然、あたかも一つの考えで、すべての疑念、すべての不安、心配がペートラの顔から消えたかのようであった。以前の明るい面差しが再び出現した。おまるマダムでの最も辛い困窮の時でもミンナはこの面差しを意地悪なもの、泣き虫のものと思ったことがなかった。声にも昔からの響きがあった。その通り、彼女の言葉から再び原初の鉱石、昔からの信頼と愛と忍耐の鐘の音が聞こえて来た。

ペートラは静かにミンナの震える手を自分の手の間に掴んで、尋ねた、「彼のことは良く知っているのでしょうか、懐かしいミンナ。それどころか、彼の成長を見守って来て、彼

が来るのを見て、彼が笑い、私ども哀れな女のことを揶揄って言うときには、彼に対しては怒れないことをご存じでしょう。...そんなときは心が軽くなって、いつでも幸せな気分になって、ひょっとしたら彼から蒙ったかもしれない仕打ちのことはもはや考えなくなる、と。...」

「そうだね」とミンナは言った。

「でもね、ミンナ。これから彼は父親になって、他の人達のことを考えなくてはならないの。彼がいたら、皆の顔が輝くだけではいけなくて、一緒に心配事を抱えながら、働かなくてはならないし、時には嫌な顔にも辛抱しなくちゃいけないの、すぐに半日間逃げ出さずにね。クルーパス夫人の言う通り。百度となくこれらの週の間、考えて来たの。彼は父親となるからには、一人前の男になる必要がある、と。今は単に甘やかされた子供に過ぎないから、...」。

「あんたの言う通りよ、ペートラ、よく分かっているね」とミンナは同意した。

「ここにまだあんたと一緒に残っていて、全身を交互に熱くしたり冷たくしたりしていても、私が彼のことを怒っているとか、何か根に持っているとか、彼を罰したいということじゃないのよ。彼がここに入って来たら、ミンナ、そして私に手を差し出して、彼の昔ながらの流儀で微笑みかけたら、私は彼に飛びつくことしかできないわ。とても幸せでしょう。でもミンナ」とペートラはとても真剣に言った、「それは許されないのよ。今ようやく分かったの。いつもいつも彼に対して甘いことをしてはいけない、と。最初の時は素敵でしょう。でも次の時間にこう考えることでしょ。私の子供はこんな甘ったれた人を、私が本当には尊敬できない男を父親に持っていていいだろうか、と。駄目よ、ミンナ、千回駄目。たとえ私が昼も夜もこの檻褻切れバラックに座る羽目になっても、たとえここから離れなくてはいけなくなっても、彼と私自身の弱さから離れなくてはいけなくなっても、駄目なの。 — 私はクルーパス夫人と自分にこう誓ったの。彼にはまず何ものかになって欲しい、と。それはほんのわずかなことであれ、そうなの。それでそもそも半年は彼に会うつもりはないの、...」。

彼女は一瞬、休み、考え込んで、悲しげに言った、「でも彼はまたあなた達、昔からの女性陣の許に潜り込んだのでしょ、この若者は」。

「違うよ、ペーターヘン」と老ミンナはとても満足して言った、「何でそんなことを想像しているの。彼は少しもそうじゃないのよ」。

「また嘘ついて、ミンナ」とペートラは言って、自分の腕を相手の腕から離れた、「あんたが自ら言ったばかりでしょ」。

「そんなこと私は言っていません。違うの。ま、一緒に出よう、ここの臭いと埃はたまらない」。

「私は出ません。彼の許へは行きません」とペートラは叫んで、強く防いだ。

「彼は外にはいません。ただそう思い込んでいるだけよ」。

「あんた自身が言ったでしょ、ミンナ、 — ここにいきましょう」。

「私が言ったのはね、あんたに子供ができたと彼に手紙を書きましょうとそう言ったのよ。 — 彼が外にいたら、彼宛に手紙を書く必要ないでしょう。すべてはただ、ペートラ、あんたの思い込みよ、不安だからだよ。自分の心が不安だし、子供のことが不安だから。でも不安を抱えているなら、すべて結構なことだ。それで今、私の許に誰かが、恵み

深い夫人であれ、他の人であれ、来て、あんたについて御託を並べても、 — 私は言い返せるよ。あんたの話しっぷりを聞いて、嬉しかった。彼に対して書く必要のあることが、私にも良く分かったからね、長すぎもせず、短すぎもせずに。でもまあ、一時間暇を取って、私と一緒に行こう。ここいらにも喫茶店のようなものがあるから、そして私にすべて話してよ、私もあんたにすべて話すから。彼からの手紙も恵み深い夫人の許からあんたのためにくすねて来たのだよ。ご夫人は何も言わなかった、ちゃんと見ていたけどね。でも返して貰うよ。急いで書き写せばいいから。 — じゃ、どこへ行こうか。暇を取れるの」。

「あら、ミンナ」とペートラは高慢に言った、「暇は取れますよ。自分で暇にすればいいのだから。ここで目にするものすべて」、そして彼女はミンナと一緒に小屋の敷居に足を踏み出した、「すべてが襪切れも、古紙も、古鉄も、瓶も、 — 私の指揮下にあるのです。ここで働いている人々も勿論そうです。ランドルフさん」と彼女は好意的にアザラシ髭の老いた男に向かって言った、「ちょっとお友達と一緒に上の私の部屋へ行きます。何か用があったら、私を呼んでください」。

「用があるものですかい、お嬢さん」と老男性は怒りっぽく尋ねた、「ここに今日の午後ヴィルヘルム皇帝の王冠が運ばれてくるとでも思わっしゃるかな。静かに休まれい。私が貴女の立場なら、午後半時も襪切れの許にはおりませんわ」。

「有り難う、ランドルフさん」とペートラは満足して言った、「この三ヶ月で最初の私への訪問です」。

そう言って、両人はクルーパスおっ母さんの小さな住まいへ上がって行った。彼女達は腰を下ろし、お喋りし語り合った。しばらくしてからペートラは本当に横になった。しかし二人は更にお喋りし、語り合った。しかしミンナは、帰って、恵み深い夫人の夕食を作る時間になったとき、彼女は大胆になって、劫初からやった記憶のないことをした。彼女は電話の許に行き、告げた。自分は戻らない、食料貯蔵室への鍵はキッチン戸棚の右の引き出し、スプーンの奥にあります。そしてその右の引き出しへの鍵は彼女の青色のエプロンのポケットにあります。エプロンは食器用布巾の所に掛かっています、と。パーゲル夫人がこの明瞭な指示をまだ全く呑み込めないでいるときに、ミンナはすでに切っていた。「さもないと電話口で私から聞き出すからね。夫人は待てばいいのよ。それでクルーパスおっ母さんの話しを続けてよ。 — シャツのボタンをくすねて、それでいて善良な人だなんて。そんな話しは教理問答書でも聖書でも聞いたことがない。どれほどの刑期で、あんた言った」。

「四ヶ月よ、 — それで裁判所の人々もそれが分かっていたかのように都合がいいの。十二月初旬には私は産褥でしょう。十一月末に夫人は出て来るの。夫人もすぐに服役して、その弁護士のカリッヒさんも言っていた、彼女も喜ぶだろうって。でも、あんな年寄りの女性が裁判官の前に立っているのを見たとき、悲しかったわ。私も傍聴したの。裁判官がこっぴどく叱りつけてね。夫人はずっと泣いていた、全く子供のよう、老いた夫人が、...」。

ミンナが家に戻ったとき、実に夜の十時半になっていた。彼女は恵み深い夫人の部屋の明かりを確かに目にしていたが、しかし彼女は考えた、果報は寝て待て、と、そしてこっそり自分の部屋に忍び込んだ。しかしパーゲル夫人の耳にはそれでも十分に届いていた。

夫人が全く元気よくドア越しに叫んだからである。「あなたなの、ミンナ。やれやれ、晩年に夜遊びかと考えましたよ」。

「そのようですね、奥方様」とミンナは正直に言った、それから偽善者ぶって言った、「奥方様、他に御用がありますか」。

「猫被って」と恵み深い夫人は怒って叫んだ、「私のやきもきを知らん振りして。何を聞き出したの」。

「格別なことはありません」とミンナは退屈そうに言った、「ただ、奥方様は祖母さんになられます」。

そう言うミンナは、この老いた、骨張った女性には信じられないような素早さでキッチンに向かい、キッチンから自分の小部屋に入り、そしてそのドアを音高く施錠して、明瞭なものとした。つまり今晚の面会時間は終了、と。

「ま、あきれた」と恵み深い老夫人は言って、元気に鼻を撫でて、たった今まだ彼女の黒家政婦が立っていた絨毯の箇所を夢想的に眺めていた、「言ってくれるわね、祖母さんだ。たった今まで何の身寄りもない孤児の女が、いきなり祖母さん。いいえ、そんなずるいやり方をしても、私はその薬は飲みませんよ、昔から復讐心の強い女よね、あんたは」。

そう言ってパーゲル夫人は拳を空の廊下で振って、自分の部屋に戻った。しかしその知らせは悪いものではなかったに違いない。というのは彼女はしっかりと速やかに眠り込んで、彼女はもはやミンナがもう一度家から忍び出た物音に気付かなかったからである。彼女は手に手紙を持っていて、それを更に郵便局にまで持って行ったのである。――すでに真夜中を過ぎていたのに。

そしてこの手紙が、ノイローエでのかの手紙のやり取りの端緒となった。この手紙がヴォルフガングを、シュトゥットマンの言葉によれば、全世界を抱擁するように思える若い男に変えたのであった。それもペートラ・レーディヒからは一行も届かないうちに。

107

巡査長マロフケは幽霊を見る

ヴォルフガング・パーゲルが一人っきりで囚人達の許に自転車で向かって、ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツが異議を称えずそれに従っていたとき、もっとも彼女にとって、この若者と午前中、過ごすことが好ましかったのであるが、ここノイローエでは皆が従うことになっている一段と高い一つの意志が支配していた。つまり巡査長マロフケの意志である。この太鼓腹の、滑稽な、虚栄心の強い小さな男は彼の囚人達の顔を気難しいものにしたばかりではなかった。彼が、決して止むことのない何らかの願いを持って荘園事務所に現れると、フォン・ブラックヴィッツ夫人は、「あら、まあ」と呻き、フォン・シュトゥットマン氏はその額に苛立って皺を寄せた。同僚達、つまり巡査や巡査補佐は、この同僚を罵っていたが、――しかし小声であった。キッチンの娘達はこの「自惚れ屋の道化師」のことを罵っていたが――これはとても声高であった。

いつもマロフケは苦情を言った。永遠に彼にとって何かが適切でなかった。あるときは食事の羊肉が囚人達にとって脂身が多すぎた。別なときは、豚肉が少なすぎた。三週間、

豌豆が出されていないし、しかし週に二度もキャベツ煮が出された。囚人達は時間通りに仕事から戻らなかった。そして食事は時間通りに出来ていなかった。こちらの窓は壁で塞がれなくてはならない、さもないと囚人達が女達の住んでいる一部屋を覗けるからであった。刈り手兵舎の隣の便所は村の郎党も、例えば女性も使っているが、これは許されない。女性達が、働く分遣隊の近くに現れることも同様に許されない。囚人達が興奮するからであった。

これは止むことなく、間断なく続いた。そうすることでこの厚かましい寄生者は、自分の生活を忌々しいほど楽なものにしていた。分遣隊の監視を彼は大抵自分の部下、四人の巡査達に任せていた。彼はほとんど一日中自分の兵舎に座っていて、勿体ぶった自惚れた顔つきで、リストを埋めたり、あるいは監獄管理局に郵便を書いたり、あるいは休みなく兵舎の各部屋を巡回して、ベッドを一つ一つバラバラにして、点検した。一人の囚人がパイプ掃除具をスプーンの柄から作ったとき、彼は集中して考え込み、こう声に出した。これはまた何を意味しているのか。きっとパイプ磨きだろう。しかしパイプ磨きを作れる者は、合鍵も作れよう。そこで彼はすべての錠や格子棒、格子棒の固定された壁の箇所を視察した。それから彼はトイレをうろつき、蓋を開けて、トイレの紙とかあるいはひょっとして千切れた手紙の紙片が底にないか調べた。

しかし大方の時間、彼は刈り手兵舎の前にベンチに座っていて、陽を浴びながら、親指を太った腹の上で回し、目を半ば閉じて、考え込んでいた。彼がかくも快適に寝ぼけて座っているのを目にする人々は、彼のことを軽蔑して笑っていた。というのは田舎では収穫時に怠けて座っているのは恥ずべきことであったからである。誰もが必要とされ、手が足りないのであった。

しかし巡査長マロフケは何も白昼夢に耽って、陽射しの中、座っていたのではないと認めなければならないであろう。彼は本当に考え込んでいた。彼は間断なく、自分の五十人の囚人達について思い巡らせていた。彼は彼らの前科、犯罪行為、年齢、世間への彼らの関係、残りの刑期について思い出していた。一人一人、彼はその性格を吟味し、監獄での出来事、派手に、一人の男でも出来ることを示す些細な事件を思い返した。この郎党が食事し、休み、お喋りし、眠るとき、彼は彼らを間断なく観察した。彼は誰と誰が話すか注目し、友情関係、敵対関係に注目した。そして彼の熟慮と観察の結果として、絶えず移動がなされた、敵同士が集められ、友人同士は離された。互いにそりが合わない者どもが、ベッドでは側に並んで眠らなければならなかった。マロフケはテーブル仲間を絶えず変えた。彼は、誰が誰の隣りに行っていいか、誰が一人っきりで働かなければならないか、誰を役人達は絶えず注意しなければならないか、決めた。

囚人達はマロフケをペストのように嫌っていた。彼から始終叱られている役人達は、彼のいないところで彼のことを呪った。ほんの些細な抗弁のことでもマロフケは真っ赤になって、彼の太った腹は揺れ、彼の垂れたハムスターの頬は震えて、彼は叫んだ。「巡査、貴方の責任だ。貴方は職務を果たすと誓ったのだろう」。

シュトゥットマンはうんざりして言った。「このような苦情屋はいるものだ。最も良いのは放っておくことだ。神様にだって文句を言う輩だから」。

パーゲルはフォン・シュトゥットマン氏を見つめて、抗弁した。「違います。この件では間違っておられます。全く抜け目ない奴です。しかも有能です」。

「そうかな、パーゲル」とシュトゥットマンは苛立って言ったことがあった、「この男がその同僚達のようにきちんと仕事をしているところを見たことがあるかい。いつも日向に座っていて、新しい苦情のネタを考えている。それしかできん。残念ながら私には奴に命令を下す権限はない。彼は監獄管理局の下にいる。しかし貴方に請け合うが、私が彼の上司であれば、この太った御曹司を少しばかりせかせか働かせることだろう」。

「とても有能ですよ」とパーゲルは迷わず言ったことがあった、「それに抜け目ない。それに勤勉です。いずれ貴方もお分かりになりましょう」。

その通り。ヴォルフガング・パーゲルは、この耐え難い道化師の長所を信じている唯一の者であった。それ故多分、両者は馬が合ったのであろう。いや、苦情屋のマロフケは若いパーゲルを溺愛していた。

この朝もパーゲルは、田畑に出掛ける前に、刈り手兵舎の許で自転車から降りて、巡查長に短い訪問をした。マロフケ氏はこのような丁重さにとても敏感であった。

彼は自分のテーブルの許に座っていて、顔を赤黒くして、手紙を見つめていた。多分郵便配達人がたった今彼に届けたものであった。パーゲルはこの小男を一瞥して、雲に嵐の気配を感じたが、何気なくこう尋ねた。「西で何かニュースですか」。

この小男は突然足許から跳び上がり、椅子が音立てて倒れた。手紙を叩き付けながら、彼は叫んだ。「その通り、ニュースだ。しかし良い知らせではない。断られた、士官候補生よ、交代への私の申し出が断られた」。

「それでは貴方は我々の許から去るご意向ですか」とパーゲルは驚いて叫んだ、「そんなことは全く思っていなかった」。

「私が去ると、そんな阿呆な。私はこの難しい仕事から交代させて貰うつもりはない。私が責任忌避者になるか。いや、士官候補生よ、絶対あり得ない。 — 一同は私について好きなように言うがいい。いや」と彼はより落ち着いて言った、「貴方には話して良かろう。貴方は口が堅い。私は五人の郎党を交代させるよう申し出たのだ。もはや安心できないと思われるのでな。それなのに事務局の気取り屋達は断って来た。 — 私の申し出には根拠がない、と。奴等はまず事務局に撲殺された役人を見たがっていやがる。 — すると根拠ができる訳だ、すると喜ぶのだ、 — 馬鹿だ」。

「しかし万事、平静、平穏ですよ」とパーゲルは宥めて言った、「目立ったことは何もありません。それとも昨夜何か起きたのですか」。

「貴方でもまずは何か起きる必要があるのだな」と巡查長はぶつぶつ不平を言った、「監獄分遣隊で何かが起きたら、若いお方よ、その場合手遅れなのだ。しかし貴方がそう考えても私は悪く取らない。貴方には経験がないのだし、貴方は囚人達のことを何も分かっていないのだから。...私の同僚達ですら予感しない。 — 彼らは今朝になってもまた言っていた。私の頭はおかしい、と。 — 白昼に何も見えない夜行性のフクロウであるよりも、まだ私の頭がおかしい方がいい」

「しかし一体全体どうしたのです」とパーゲルはこのような憤怒に驚いて、尋ねた。「何を見つけたのです、巡查長殿」。

「何も見つけていない」と巡查長は鈍く言った、「一枚の紙片も、一個の合鍵も、金も、武器も — 逃亡や反乱を暗示するものを何も見つけていない。しかし臭うのだ。数日から嗅いでいる。何かがあると気付いている。危なっかしい、何かが進んでいる、...」。

「でも何故です、何に気付いているのです」。

「私は監獄に二十五年以上いる」とマロフケ氏は告白して、その口調に不満は見られなかった、いや逆だ、 — 「私は私の郎党を承知している。私はこれまでの全勤務の中で、三人の男に脱走された。二人の場合、私に科はなかった。三人目の男のとき、私は務めてようやく半年であった。まだ何も知らない。しかし今では私は若干承知していて、貴方に誓える。五人が何か計画している。奴等を私の分遣隊から排除しない限り、私の分遣隊は綺麗なものにならない」。

「五人は誰です」とパーゲルは尋ねた。彼は、巡査長は何か思い付いているという印象を得た。

「私は次の五人を交代させるよう申し出たのだ」とマロフケは厳かに言った、「リープシュナー、コーゼガルテン、マツケ、ヴェント、ホルドリアン、...」。

「しかしまさに最も人当たりの良い、最も知的な、最も手際の良い連中です」とパーゲルは驚いて叫んだ、「老ヴェントは別です、 — 奴は少し愚かです」。

「奴は単に彼らの安全弁として入れられている。皆が危険になったとき、奴が逮捕される。ヴェントはいわば彼らの解約金だ。しかし他の四人は、...」。彼は溜め息を吐いた。「私は出来る限りのことをして、彼らを離れた。移動させて、誰一人として、他の者どもと一つ部屋に眠らせなかった。一緒に集合させなかった。一人の者を引き立て、別の者をひどく扱った。こうすれば普通奴等は怒る。 — しかし駄目だ、私が背を向けるや、奴等はまた集まって、一緒にひそひそ話しをする、...」。

「ひょっとしたらただ気が合っているだけかもしれません」とパーゲルは提案した、「友情を結んだのでは」。

「監獄では友情はない」と巡査長は説明した、「監獄ではいつも一人の者は他の者の敵だ。二人が寄るとき、彼らは策謀している、 — ある目的のために。いや、臭うのだ、士官候補生よ、私が貴方にそう申すとき、巡査長マロフケの私がそう申すとき、間違いはない」。

しばらく二人は黙っていた、「私はこれから郎党の許へ自転車でいきます」とパーゲルは最後に言って、去ろうとした、「目を向けていましょう。ひょっとしたら何か気付くかもしれません」。

「いや、何を見つけようと言うのかね」と巡査長は打ち捨てるように言った、「海千山千の相手だぞ。 — 老練な刑事警察官でも手を焼く輩だ。貴方が何かを見つける前に、貴方の頭蓋に穴が開いていよう。いや」と彼は熟慮して言った、「私も考えて見たのだ。私の申し出が蹴られた今となつては、とことんやるしかない。私は今日の昼、反乱を起こす彼らの食べ物に塩を撒く、文字通り、本当に。奴等の食べ物を駄目にして、食べなくしてやる。それでも食べるように強制し、苛立たせ、脅すのだ、彼らが反乱するまで。そうやって大義名分を作り、それから例の五人をつまみ出し、反乱者として送り返すのだ。すると更に刑が二、三年追加されることになる」。

彼は嘲笑的にケッケツと笑った。

「それはまずい」とパーゲルは驚いて叫んだ、「失敗しましょう。狭い小屋で五十人[囚人]対五人[警察]です」。

「士官候補生よ」と巡査長は言って、もはや若いパーゲルにはもはや滑稽には思われな

かった、「貴方を誰かが背後から襲うことを確実に知っていたら、貴方はどうするか。貴方は振り返って、そやつに飛びかかろう。私もそうだ。私は撲殺されるなら、背後からではなく、むしろ正面からそうされたい」。

「今日の昼は銃を持って向こうへ行きましょう」とパーゲルは熱く言った。

「それは残しておく方がいい」と巡査長は反対した、「このような件で、私は素人兎は使わない。一分もしないうちに、別のペテン師が貴方の銃を押さえてしまって、即刻、さらば、我が祖国よ、となる。一 駄目だ、このまま出発し給え。私は席順を考えることにして、直接私が最もうるさい不平家を私のゴム棒の下に座らせることにしよう、...」。

108

五人の幽霊が駆ける

一人の男の固い確信から一つの瘴気が発せられ、それが相手にも影響を及ぼした。大層物思いに耽って、ヴォルフガング・パーゲルはすでに馴染みの道を外部圃場区第九へ自転車で向かった。そこはジャガイモ収穫中であった。時々ジャガイモを積んだ荷車に出会った。彼は自転車から飛び降り、ジャガイモの出来具合を下僕に尋ねた。しかし彼はまた自転車で飛び乗る前に、ついでに尋ねた、「外では異常ないか」。しかし元来このように尋ねる必要があろうか。勿論外では異常はなく、馬丁は単に返事代わりに不明瞭なことをつぶやいただけであった。

パーゲルは更に進んだ。幽霊話しに感染されてはなるまい。

九月末の晴れた秋の日であった。少しばかり、新鮮で、東の風、しかし陽射しがあって、防風林の下、まだ快適に温かかった。パーゲルは今や完全に防風林下にあって、森の中を通っていた。外部圃場区第九は、荘園のすべての圃場区の中で最も離れていて、一方の縦の側と一方の横の側が森に接していた。もう一方の横の側はすでにビルンバウムの田畑との境になっていた。チェーンが微かに軋りながら、その他は全く音もなく、自転車は森の道を進んだ。勿論外では万事異常なかった。しかしパーゲルは認めざるを得なかった、外部圃場区第九は荘園中庭から六キロ離れた森の中にあって、他のどの土地からも距離があって、囚人達がよからぬことを企てるには恰好の所にある、と。

思わず知らず彼はペダルを更に力強く踏んでいて、すぐにまたブレーキをかけ、自身のことを微笑した。彼は感染されたくなかった。一週間前から囚人達はすでに外で働いていて、何も起きていなかった。それでほんの五分間でも早く着くようにとスピードを上げることは無意味なことだ。六日仕事をして何も起きなかったのであれば、この五分間に限って何かが起きるとは思えない。

パーゲルは、そもそも何が生じ得るか考えて見ることにした。外の田畑では、十二、三名からなる四チームで囚人達は働いている。それぞれのグループから十歩離れて、一人の巡査がいて、装填されたカービン銃を手に行っている。巡査の前、常にその監視下で、囚人は跪いて作業している。この役人達に断らずには、誰一人立ち上がることも許されない。一人が三歩も行かないうちに、弾が体に当たるであろう。早速警告なしに発射されることを囚人達は承知している。確かに、二、三名の者が犠牲になって、他の者達を自由の身にさせる可能性は理論的にあり得よう。巡査の弾が当たらなかつたら、次の装填まで、そして

銃を構えるまで、他の者達は逃げられよう。しかし実際にはこのような犠牲の勇氣は囚人達には見られない。ここでは誰もがきっと自分のことだけを考えていて、皆を犠牲にしても、自分だけは犠牲にしないつもりであろう。

いや、ここ外部ではきっと何も生じないだろう。むしろまだ兵舎ではあり得る。マロフケは今日の昼、危険な賭けをすることになる。パーゲルは誓った、少なくとも外の窓辺で銃を持って立つことにしよう。ひょっとしたらマロフケのこの賭けは無駄なこと、妄想、幽霊に終わるかもしれない、...

ゆっくりとパーゲルは更に漕いで行った。漕ぎながら彼は沈思した。彼を多くの若者や大方の老いた者達と区別しているものは、この沈思、絶えざる執拗な沈思で、理解への一つの試みであった。彼は他の人々の敷かれた道を進まず、自らの道を欲した。ノイローエの皆は、巡査長マロフケを怠惰な自惚れ屋の馬鹿な猿と見なしていた。ヴォルフガング・パーゲルはこの影響を受けなかった。彼は全く別の見解であった。つまりマロフケが、自分の郎党は何かがおかしいと言うとき、単に「つまらぬ話し」と片付けることは馬鹿げている、マロフケが自分の見解のために上げている理由付けが、どんなに弱いものであったも。

いずれにせよ巡査長は一点において正しい。つまり自分、パーゲルは、囚人達については何も知らないが、しかし彼、マロフケは、はなはだ囚人達のことを理解しているのだ。パーゲルがこの郎党と話すとき、彼らはとても親切で、ちょっとした冗談を言い、誠実に「獄」や外部世界での彼らの苦しみについて語る。自分には彼らは無邪気な、少しばかり好意的すぎる印象を与えている。しかしこの印象は間違っているに違いない。これは若干考えて見ればすぐに分かることだ。彼らは無邪気で好意的であるとは考えられない。

「目をくらまされてはいけないぞ、パーゲル」とマロフケは十回彼に言ったが、無駄なことではなかったのだ、「忘れちゃいけないぞ、彼らは何か無法なことをしたので、囚人になったのだということを。一度無法を犯した者は、無法が抜けない。刑務所には、困窮や嫉妬のせいで仕出かして、中にぶち込まれている者もいる。一 監獄にいる者は、常に何か卑劣なことを犯した者だ」。

そうだ、彼らは無邪気な振りをしている。巡査長の言う通りだ。この無邪気さを信用してはならない。この点まさにマロフケは他の役人達と違っている。彼は眠ってはいない、彼の邪推はいつも目覚めている。彼は一分たりとも忘れていない、この結局とどのつまり、全く不十分な治安の刈り手兵舎の中に、五十人もの重犯罪人がいて、この五十人が、仮に抜け出したら、計り知れない不幸を周りの人間達には意味するのだということを。

「しかし彼らは一ヵ月したら、三ヵ月したら、あるいは半年したら出られるのでしょうか」とパーゲルはかつて反論したことがあった。

「勿論だ、一 その場合、彼らは警察の放免を得て、市民服を着て、当座の少しばかりの金を持って出て来る。しかし彼らが脱獄したら最初の犯罪行為がすぐに、市民服を手に入れることになる。窃盗、不法侵入、襲撃、...。彼らはどこにも届け出て住めない。彼らは犯罪者ども、あるいは売春婦達の下に、潜り込まなければならない。ただでは済まない相手だ。一 それで彼らは金を稼がなければならない。窃盗にペテン、紳士詐欺、不法侵入、襲撃、...。どんな違いがあるかお分かりだろう、放免か脱獄かでは」。

男マロフケは正しい。他の者達は正しくない。彼らはマロフケは家に残っているから仕

事をさぼっていると主張している点でも正しくない。(騎兵隊長はすぐに言ったものだ、マロフケは戦争[責任]忌避者だ、と)。しかしパーゲルは囚人一味の背後に立っていて、どんな鈍い無関心な仕事があり得るものかよく分かった。まさに忌々しいほどなのだ。マロフケは鈍くない、彼は頭をすり減らしている。すでに、二、三回呻いていた、「いや、士官候補生よ、五十人の軽騎兵どもとまた無事帰れたらと思うぞ。最初は分遣隊を楽しみにしていた。新鮮な空気、食事、妻に面倒をかけないし。ー それから今すでに毎日数えている。まだ六週間も、まだ五週間と六日もあると、延々と続く。もしかしたらお主らのジャガイモを十一月一日までに取り出せないかもしれない」。

「更に蕪もありますよ」とパーゲルは意地悪く言ったものだった。

しかしこの男に意地悪く言うのは正しいことではなかったであろう。それは臆病兎に由来する言葉ではない。それは今日の昼の彼の計画が証している。このためにはすでになんかの量の決意と度胸が必要だ。ひょっとしたら本当に少しばかり彼の頭は変なのかもしれない。二十五年も監獄勤務をしたら若干妙な男になるかもしれない。しかしパーゲルは必ずしもそう確言できなくなった。彼は思った。この巡查長マロフケは鋭く観察し、明瞭に考えている、と。彼は、今日は田畑で目をしっかり開けて、この観察が正しいか間違っているか確かめることにしようと計画した。

その後の出来事が、五分間の間のことであったが、自分の観察の何が役立ち、囚人達の許で、素人の加勢が何になるか彼に教えることになった。

彼は田畑の側の通りの一本の木に自転車を立てかけた。これはついでに言うと、巡查長が彼に厳しく禁じていたことであった。というのは、見張りもなしに置かれた自転車は一人の男の逃亡手段となり得るからであった。ー しかし今回、若いパーゲルのこの軽率さは更に重大なことにはならなかった。彼はジャガイモ土手に沿って田畑を横切り、分遣隊へ向かって行った。郎党は長い縦列をなして並んで働いていて、跪いて進みながら、ジャガイモの掘り返しと集荷にかかっていた。四人の男が立ってあちこちし、彼らは籠一杯のものを袋に注ぎ、空にして掘り手達に戻っていた。四人の役人[警察官]が非常線の背後に立っていた。毎日十時間、ある事態に備えなければならないが、それはまだ起きたことがなく、それで若干無造作な姿勢になっている警察官である。巡查の二人はそのカービン銃を腋に抱えていて、別の二人はそれを肩に掛けていた。ー これはマロフケによっても禁じられていたことであった。それでこれはパーゲルの目を引いた。郎党は丁度丘の頂きから窪地へと下って集めているところで、窪地はちょっと古い唐檜の保護林と接していた。窪地は雑草が生えていて、その上ここの雑草は、水が集まっていて、まだ半ば青々としていて、掘り出すことが難しかった。

そこで郎党はすぐパーゲルに呼びかけた、「ここは出来が悪い、検査官殿。ー 全くはかどらない、ー ここのジャガイモはまだ青い。ー これじゃ煙草を貰えない」。

パーゲルは勤勉さの奨励のために、一定のツェントナーの成果に対して煙草のおまけを約束していた。

「まあ、どれほどできるか、見てみることにしよう」とパーゲルは慰めて叫び、すぐ近くの役人[警察官]の許へ向かった。彼は挨拶して、すぐにまた、今日常に舌先に出て来る質問をした、「万事異常ありませんか」。

「勿論」と若い巡查補佐は退屈して答えた、「異常があらうことか」。

「ただ尋ねただけです、一 掘るのはここは難しいですか」。

「マロフケがまた虫の知らせを貴方に吹き込んだのだろう。彼は頭がおかしい。いつも不平を言って、臭気を発している。この分遣隊に勝るものはない。食事は異常なし、小屋は異常なし、煙草も異常なしだ、一 しかし彼は落ち着いておれない、誇張だよ」。

「何が誇張です」。

「巡查殿」と一人の囚人が会話に割り込み、叫んだ、「ちょっと出ていいですか」。

巡查は彼に退屈な視線を向け、それから列の方を見た、「よろしい、コーゼガルテン」。

囚人は満足して親しげな視線をパーゲルに向け、列の背後に出て、にやりと笑いながら、ズボンのボタンを外した。それからうずくまって、目を更にパーゲルに向けた。パーゲルはこの光景をずっと覗かないように半回転した。

「何故誇張かって」と巡查補佐は尋ねた、「マロフケが所長に取り入ろうとしたいるからだ。彼は誓っていた、どの男も二十五ポンド重くなってマイエンブルクに戻って来るようにします、と。『莊園を食らって貧しくしてやる』と昨日もまた言っていた、『いつも食事に注文を付けてやる。どんなに上手に料理しても十分じゃないのだ』と」。

パーゲルには、この中傷に返事する時間はもはやなかった。巡查補佐の顔が突然、恐怖に変わった。一 「待て」と彼は吠えて、肩からカービン銃を取った、...

パーゲルは振り向いて、丁度用を済ませた囚人のコーゼガルテンが唐檜の中に跳んで行くのが見えた。

「邪魔だ」と巡查が彼に吠えて、パーゲルの胸をカービン銃の銃身で強く打った。

「撃たないでください、巡查殿」と二、三人の声が吠えた、「連れ戻して来ます、...」。一瞬この巡查はただ躊躇っていた、一 更に二、三人の人影が唐檜の中に消えた。

「止まれ」と巡查は叫んで、発砲した。

弾音は素っ気なく、少しも音高なく、囚人達の騒動に比べれば、滑稽なほど弱く響いた。今や上方にも撃たれた。

「四列に並べ」と声が吠えた。

パーゲルは五人目の男が唐檜に向かって走るのを見た。彼は彼を追った。

「阿呆な、立ち止まってください。撃てないじゃないか」と役人[巡查]が吠えた。

パーゲルは躊躇い、身を投げ、彼の上を弾が飛んで行った。唐檜の中でパシャンと物音がした。

五分後に郎党は出発行進のために並べられ、数えられ、欠けている者達の名前が調べられた。五人欠けていた。彼らの名前はこうであった、「リープシュナー、コーゼガルテン、マツケ、ヴェント、ホルドリアン」。

偉大な賢人のマロフケだとパーゲルは考え、はなはだ自身の愚行を恥じた。(何度もマロフケは、監視中の役人[巡查]達に話しかけないように禁じていた。逃亡者を追いかけるとは何と間抜けで愚かなことだったか。すでに二人の囚人がこのように追いかけると逃亡を助けることになると手本を示したばかりだったのに)。

囚人達は興奮してぶんぶん言い、お喋りしていた。一 あるいは全く陰気になって無言であった。監視人達は興奮し、荒っぽくなり、憤然としていた。

「パーゲルさん、貴方は列車の速さですっ飛んで莊園へ行き、マロフケにこの災難を伝えてください。いや、烈火の如くなって、いや、雷が我々に落ちることでしょう。彼の言

う通りだった。 — 我々は彼に比べれば白痴同然だ。まあ、作業分遣隊もお仕舞いだ。

— 今日の午後、マイエンブルクに帰ることになる。マロフケにこう伝えてください、我々はまず優に二時間かけて戻る、と。外を迂回させます、見通しのいい田畑を通して。森を通してこの若造どもとは行けない。それは危険だ、それでは発ってください」。

パーゲルは自転車に飛び乗って、森の中へびゅうと飛んだ。区画線に沿って急ぎながら、彼は考えた。「いやはや、マロフケは何と言うだろう。今連中には、自転車の私を襲うことは、いとも簡単なことであろう。いや、マロフケ、注意が足りなかった、...」。

109

パーゲルは救助を呼ぶ

次の三、四時間、ノイローエでは女王蜂が飛び立つ前の蜂の巣のようにぶんぶん騒がしかった。ただここではすでに脱出して、 — 女王の話はないのであった。

「そんなことだと思っていた」と巡查長マロフケはただ叫んで、事務所に飛び込んで来て、監獄管理局に電話をした。汗を滴らせている息切れしたパーゲルを従えていた。

「もう少しもっと郎党に気を配っておれば良かったのだ」とフォン・シュトゥットマンは苛立って言った。

しかしこの小さな、虚栄心の強い、自惚れ屋のマロフケは一時も自己正当化、自己弁解をしなかった。「今日のうちに奴等を捕まえなければならない。森を抜け出す前に、さもないと捕まえられない」と彼はすでにパーゲルに言っていて、早速司令部に電話した。自分の想定通りになったとすら誇る時間を取らなかった。

パーゲルはシュトゥットマンに囁いた、この役人マロフケが電話している間に — 驚いて彼は、この小マロフケをシュトゥットマンに対して正当に評価することが最も大事であるように思えると述べた。彼はそのことを囁いた。小マロフケは別なことを考えていた。彼は二つの考えしかなかった。分遣隊の残りを速やかに、更なる脱落者を出さずにマイエンブルクへ連れ戻すことと、脱走者をできるだけ至急また逮捕することであった。

マロフケが電話で恐ろしい叱責を受けていることがはっきりと聞き取れた。しかし彼はびくともせず、一言も自分の却下された請願のことを述べなかった、「これからどうすればいいのか」、それが彼の唯一の関心であった。

「大した人です」とパーゲルはフォン・シュトゥットマンに言った。

しかしシュトゥットマンはただ口ごもっただけであった、「大した人だったら、そもそも脱走者を出さないだろう」。

巡查長マロフケは電話を置いた。

「フォン・シュトゥットマン殿」と彼は軍人的に、とても冷静に述べた、「ノイローエ作業分遣隊は今日のうちにも解散です。郎党の移送のための巡查が早速マイエンブルクから参ります。それで依頼申し上げますが、 — そうですね、三時に、二連獣[荷車二台]を用具移送の為に用意して頂きたい。私自身はこれから分遣隊を迎えに行き、兵舎に連れて来ます」。

「貴方本人がか、 — いや、本当か」とフォン・シュトゥットマン氏は辛辣に叫んだ、「我らのジャガイモはどうなるのだ」。彼は劣悪な結果を予見した。彼は苦い思いがした。

しかしマロフケはこの痛みを全く無視した。

「依頼申し上げますが、フォン・シュトゥットマン殿、森林官かひよっとしたらこの森の所有者と連絡を取って頂けませんか。次の三十分のうちに森の地図を見て、奴等がいるかもしれない所を正確に確定する必要があります。奴等はいつ脱出したのです、正確には、パーゲル殿」。

「十時半頃です」。

「それでは、場所は承知の上で、策が練られていて、一 それで今の所、奴等の思い通りで、潜んでいるのであろう。地方警官隊が参ります。五十人、百人、ひよっとしたら軍も、一 更に夕方前に巻狩が行われよう、...」。

「結構」とフォン・シュトゥットマン氏は言った。

「私自身はできるだけ早くまたここに戻って来ます。パーゲル、貴方はこれから宮殿へ行って、そこからフランクフルトの警察司令部に電話をし、その指示を受けて頂きたい。多分、後で近辺すべての地方警官隊派出所に電話をかけなければならないだろう。...ポーランドへの国境は嚴重にされ、ベルリンへの道が封鎖される必要がある。一 この電話は受話専用となり、ここからの発信はできなくなります。電話局にそう伝えて頂きたい、...」。

「大変だな」とフォン・シュトゥットマンは叫んだ。今やこの小男のエネルギーに感染されていた。「本当にそんなに危険なのか」。

「四名は比較的危険ではありません」と巡查長は言った、「売春婦のひもに、紳士詐欺師、ペテン師。しかし一人混じっていて、マツケ、これは単に市民の物や金を奪う場合でも、殺人を厭いません、...。それでは皆さん、仕事にかかりましょう、...」。

そして彼は事務所からロケットのように飛び出た。

「パーゲル、出発だ」とシュトゥットマンも叫んだ、「老公を呼んで来てくれ」。

パーゲルは公園を通過して走った。脇からヴィオレット嬢が来て、何か言った。彼は単に叫んだ、「囚人が脱走した」、そして更に駆けた。彼はドアを開けてくれる老エリアスを脇に除けて、廊下に入り、悠長さは消えていて、控えの間の電話に寄った。「もしもし、交換ですか、一 オーダー河畔フランクフルトの警察司令部へ、至急です、至急、いや即刻です、このまま待ちます、...」。

控えの間のドアの所に驚き、びっくりした顔が現れた。二人の小間使いが互いに視線を交わしていた。一 何故この連中は滑稽に見つめ合っているのかと、咄嗟にパーゲルは考え、このときヴィオレットが控えの間に現れ、パーゲルに走り寄って来た。「どうしたの、パーゲルさん、囚人達のこと」。

物音高く枢密顧問官の部屋のドアが開いた。「この私の家で吠えているのは誰だ。この家で吠えるのはわしだけだぞ」。

「枢密顧問官殿、すぐ事務所へいらしてください。五人、囚人が逃げました、...」。

一人の娘が上階でヒステリックに笑った。

「それでお主らの事務所へ行けと言うのか」、枢密顧問官の顔が輝いた、「奴等が、お主らの事務所で私の顔を眺めに来ると言うのか。すぐに言ったろうが、まともな人間を連れて来いと。それでは毎晩私は私の妻のベッドの下を拳銃で照らし出すわけだな、...」。

「こちらはノイローエ荘園管理部です」とパーゲルは電話で伝えた、「ノイ・ローエで

す。マイエンブルク監獄司令部の委託で話しています、...」。

「はい、了解」と電話回線の最後に無造作な声がした、「こちらにすでにマイエンブルクから連絡が入っている。どちらさんですか。検査官か。いや結構抜けたことをしてくれるね。もうちょっと注意できなかったかね。まあ、聞きなさい。これから電話を切ってもらおう。それから私が貴方の交換に連絡する。そしてまた電話が鳴ったら、貴方の交換が次々に近辺の警官隊派出所すべてに繋ぐことになる。その派出所にただこう言って貰いたい。五人の囚人が脱走した、即刻皆ノイローエに集合、一 大至急にだ、と。このことをできるだけ速やかにやって頂きたい。ここの電話は皆塞がっている、国境は二十キロと離れていないし、...」。

それでも枢密顧問官は孫娘と莊園事務所へ出かけていた。若いパーゲルは受話器の許に立っていて、電話した。家の中を小間使い達は呆然と走っていて、時々一人の娘が息をより荒くしながら、パーゲルの許に立ち止まって、彼を見つめ、彼の唇からのいつも同じ内容の伝言を読んでいた。女どもはびっくりしたとき、何と阿呆な顔をするものかとパーゲルは考えた。彼も相当興奮していた。少しばかり動揺して、少しばかり不幸であった。一 上階では恵み深い夫人は泣いているのだろうか。一 彼女はきっと自分の些少の人生を不安に思っているのだ。

彼は再三、同じ馴染みの警報を伝えながら、人々はそれに何と様々に反応するものか、聞き知る機会を得た。

「おやまあ」。

「いや、まじか」。

「丁度、脚がリユーマチなんだ」。

「ノイローエに何故囚人がいるんだ」。

「報償が出るのか」。

「そんなこと言っても、今日は金曜日だろう」。

「妻が鶏を焼いたという日に限って」。

「誰でも、警察司令部の委託で電話していると話せる時代だ、貴方はそもそも誰だ」。

「検査官よ、長靴で来いと言うのか。それとも長ズボンでいいのか」。

「五[成績]はひどい」。

それに恐ろしい言葉もあった、「次の十分のうちに殺されるかもしれない者が、まだ存命で、能天気には生きているわけだ」。

これらの言葉から何か残酷なものが湧き出て来た、罪と共犯、...。そしてヴォルフガングは更に電話をかけながら、自分がこの件で犯した失敗を考えていた。それは大したことではなく、些細なことで、分別ある人間なら、素人の彼に非難はしなかったであろう。経験豊かな者が多くいても、阻止できなかったのであるから。些細な間違いを彼は犯したのであった。...しかしヴォルフガング・パーゲルは、三ヵ月前までは、自分のすべての罪を大目に見る用意があって、いや、そもそも許す必要を考えもしなかったであろうが、今やそのヴォルフガング・パーゲルがこれらの件を別様に考えていた。いや、考えたのではなく、別様に感じたのであった。これは外での仕事のせい、最近の体験、男になれというミンナの手紙の言葉のせいであったろうか。一 他人がもっとひどいことを仕出かしたということはどうでも良かった。彼は自分に難すべき点があることを欲しなかった、少しの

難点ですら欲しなかったのである。

警官隊派出所は終わることがなく、始終電話がなった。いつも繰り返しの伝言であり、いつも繰り返し、怒りや驚き、覚悟の叫び声が上がった。その際彼ら五人、囚人服の五人の男を思い浮かべていた。彼らはノイローエとビルンバウムの間の森の中に野獣のように身を潜めている。彼らは金もなく、武器もなく、法外な知性もない。しかし彼らは他の人間とは違うものを一つ持っている。つまり彼らは躊躇することなく、自分達の欲することをするのである。

ヴォルフガング・パーゲルは、さほど昔のことではないが、自分はこう思って得意になっていた時代があったことを思い出していた。私には束縛がない。私は自分の欲することを行える。私は自由だ、と。...

その通り、ヴォルフガング・パーゲルよ、今汝は理解している。昔汝は、自由で、躊躇しないこと動物のようであった、と。人間世界は自分の欲することをやる世界ではない、自分のなさなければならぬことをやる世界なのである。

そしてヴォルフガングは更に、再三更に伝えながら、三十回、五十回、六十回と伝えながら、健康な生命力が病んだ生命力に攻撃する構えを見た。突然彼は悪魔の軽騎兵についての洒落がつまらなく思えた。その囚人の歌はとて厚かましい。彼は五十人、百人の警官が自転車で来るのを思い浮かべた。多くの道を通って彼らは一つの目的地ノイローエを目指す。彼はフランクフルトの警察司令部の役人達を思い浮かべた。警察の派出所の何十人もが今や電話を鳴らし、モールス信号がツートンツートン鳴っている。国境警備の税関では役人達が帽子を被り、格別丁寧にベルトを締めて、ピストルを点検する。死神が徘徊している。

死神が徘徊している。五人は、すべて無法を覚悟で、一何に関しても一致団結していないように見えるこの時代、一切が砕かれ、朽ち、崩壊しているこの時代に生命はそれでもなお常に死神に対して一致団結していた。生命こそは、すべての通りを封鎖して、至る所に目を光らせていた。大都市への進入路では今や警察官が立っていて、一人一人通行人を検査していた。一枚のハンカチ、一着のズボンでも見破られよう。曖昧宿、犯罪者の巣窟が以前よりも鋭く監視された。小都市では警察官が家々の奥の露地、庭へ通ずる所や広場に接する所を調べた。国道の遍歴者、荷車の御者、貨物自動車の運転手に警報が知らされた。ポーランド国境からベルリンへかけての周辺全体に緊張が走った。すでに印刷所では高速印刷機が稼働し、指名手配書が刷られ、布告、人相書きが今日の午後うちに柱や壁に貼られた。役人達はリープシュナー、コーゼガルテン、マツケ、ヴェント、ホルドリアン刑事文書に目を通し、過去の犯罪履歴の報告から想定し得る新たな行為へのヒントを求めた。彼らは記録を点検し、古い手がかりから新たな手がかりを探ろうとした。どこに向かうか、誰を友としているか、誰から収監中、手紙を貰ったか。

ひょっとしたら生命はもはや以前の威力、新鮮さを有しないかもしれない。この過去数年の間に、余りに多くが破壊され、生命自体が病んでしまった。ひょっとしたら今生じていることの多くが単に以前からの慣習にすぎないかもしれない。機械は呻り、呻き、喘ぐ。しかし機械はなお作動しており、今一度腕を引いて構え、掴む。捕らえるだろうか。

どれほど長くヴォルフガング・パーゲルは電話の側に立っていたであろうか。一時間か、二時間か。彼は覚えていなかった。彼が宮殿から官吏の家へ移ったとき、彼はすでに自分の電話連絡の最初の効果を目撃した。官吏の家の壁に自転車が重なって立てかけられていて、郡警察達がグループになって、ドアの前、路上に立っていた。彼らは煙草を吸い、話し、何人か笑っていた。絶えず新たに到着して、やあとと言ったり、静観的に沈黙して挨拶していた。洒落も飛んでいた。

事務所の中で、パーゲルは人々がもっと真剣な様子であるのを見た。テーブルには地図が置かれていて、恵み深い夫人、枢密顧問官、フォン・シュトゥットマン氏が緊張してそれを眺めていた。郡警察署長が指で示していた。マロフケは窓辺に立っていて、彼は青白く、やつれて見えた。明らかに彼は悄然としていた。

「ポーランドの国境、ポーランドは問題にならない」と郡警察署長は言った。この五人のうち誰も、これまで調べた限り、ポーランド語を話せない。その上ポーランドはこの種の犯罪者どもが狙う所ではない。奴等はできるだけ速くベルリンへ抜け出たいとだけ考えていると私は確信している。勿論協道を通っての夜行軍だ。奴等は — 一人を除いて、
— 売春婦のひも、ペテン師、紳士詐欺師で、 — このような連中はただベルリンを目指す、...」。

「しかし、...」と巡査長マロフケは始めた。

「言葉を挿まないで頂きたい」と郡警察署長は鋭く言った、「疑いもなく連中は夜まで森の中に潜んでいることだろう。私のチームの一部を当てて、奴等をそこで捕まえるよう、試してみることにする。 — もっともこれはかなり見込みが薄いと思われる。森が広すぎるから。我々の主要な警備を夜の協道や、孤立した村々に向けなければならない。奴等はそうした所に入り込もうとするであろう。そうした所で市民の物や食事を盗むだろう... ひょっとしたら今夜にも捕らえられるかもしれない。今夜はまだ奴等はこの近くにいるだろうから、...」。

「そのことは私の妻にだけは聞かせないでくれ、署長」と枢密顧問官は叫んだ。

「こことベルリンの間でどこの地点がこの兄さん達から完全に安全かというのと、それはここノイローエです」と郡警察署長は微笑して説明した。「それは疑いありません。ここは、我々の主要な宿营地です。 — いや、小さな辺鄙な村々、そこが危ない。しかし我々が警護に当たります。人気の少ない農園中庭、 — そこに注意を促します。たとえこの五人の手がかりが得られなくても、それでも大体、どこにいるか分かっています。夜の行軍は平均六十キロと私は想定していますが、最初の夜はそれより少ない。食べ物を得る必要があれば、更に少なくなろう。私は、奴等は最初の夜、西側に行軍する代わりに、北へ出て、この不穏な地区を離れると予想しています。勿論そこにはまたマイエンブルクがあって、...」。ある考えが彼に思い浮かんだ。彼は尋ねた、「この五人の中で、マイエンブルクに関係している者がいるかな、親戚、許嫁、友人とか」。

「いや」と巡査長は言った。

「何だ、『いや』とは」と郡警察署長は鋭く非難した、「貴方は知らないというのか、

それとも連中には関係者はいないのか」。

「連中には関係者はいません」と巡查長は立腹して言った。

「貴方の知る限りではだな、勿論」と郡警察署長は嘲った、「それほど知っているわけではないのだろう。一 まあ、よろしい。巡查長殿、貴方はもはや必要ない。分遣隊と一緒に行軍出発するとき、私になお連絡すればよろしい」。

「畏まりました」と巡查長は言って、帽子に手を置き、事務所から去った。

皆が彼を見送った。しかし誰も彼に別れの言葉を述べなかった。一 フォン・シュトゥットマン氏も述べなかった。ヴォルフガングは顔を一人ずつ見ていった。枢密顧問官はぶつぶつ言った、「いや、まことに、無常迅速、美しき形姿は消え去る、...」。

郡警察署長は好意的に微笑した。

恵み深い夫人は言った、「私は最初からあの人には不快な印象を受けていました、...」。

フォン・シュトゥットマン氏は言った、「我らのパーゲル殿は別な見解だ、...」。

「ちょっと失礼します」とパーゲルは言って、素早く事務所から出た。

巡查長マロフケは集合した郡警察の間を抜けて行った。その滑稽な太鼓腹と共に、細い小さな脚を見事にアイロンのかかったズボンに収めて、逆立つ雄猫口髭を有して、赤みがかかった董色のハムスター風頬をして。巡查長は左右を見ず、宙を凝視していて、一 歩むたびに彼の両頬は震えていた。それほどしっかりと彼は足を踏んでいた。しかしマロフケ氏は、何も見ていなかったとはいえ、彼の耳を閉ざすことはできなかった。耳は一人の郡警察が驚いて尋ねるのを聞いていた。「あれは何という奴だ」。

「見たか、奴がずらかせた本人だ」。

「そうか、奴のせいで、我らはこれから夜、森を見張るのか」。

マロフケは表情を一つも変えず、真っ直ぐに刈り手兵舎に向かった。彼はベンチに腰を下ろした。そのベンチに座っている姿は、しばしばノイローエの住民の怒りを誘ったものだったが、彼は再び宙を凝視した。

兵舎の中は、荷物まとめと出発で喧しかった。巡查達は苛立ち、過敏になって、叱っていた。囚人達は怒りっぽく、憤然と答えていた。一 マロフケは立ち上がらなかった。彼は何も欠けてはならない、毛布一枚、煙草と交換されてはならない、シーツに火縄で焦げ付かせてはならない、田畑にシャベル一つ忘れてはならないと承知していた。万事申し分なく異常なかった。ただ五人欠けていた。彼ら自身今日のうちに捕縛されても（マロフケはそう思わなかった）、彼の汚名は消せないであろう。彼の許で五名が脱走して、彼のせいで一分遣隊が解消された。誰も二度と彼に対してこれをすすげない。

いや、そうだ、監獄管理局への彼の申し出があった。彼は慧眼を発揮していた。彼はまさにこの五人の交代を請願していたのである。一 しかしこのことがあっても彼を綺麗にすすげないであろう。まさに、彼の申し出を拒絶した事務局の書記どもは、この請願書の重みを消すために全力を尽くすであろう。これは完全に根拠の欠けたものであって、このような請願に基づいて送り返すよう指示することはできない。この郎党は至極正当に苦情を申し立てるであろう。仮にマロフケ氏が本当にこの郎党に不信を抱いていたのであれば、彼は彼らにつきまとして離れなければ良かったであろう。彼は日夜彼らの側に立っている必要があったろう。経験の浅い巡查補佐に任せてはならなかったであろう。一 いや、百もの罫が彼には仕掛けられるであろう。同僚達は彼を好いていない。彼らはすべて

の責任を彼に押し付けるであろう。 — その上、こちらの荘園管理部からの報告と郡警察署長の報告が加わる。

この巡査長マロフケは、今や職歴は長かった。彼は、上司はこの件で彼を年金生活に追いやりはしないだろうと分かっていた。しかし上司は昇進させないだろう。彼は昇進をこの秋に計算していた。聖ミカエルの日[九月二十九日]に巡査主幹のクレープスが退職する。彼はこのポストを当てにしていた。是非とも得たかったのである。それは罪のない虚栄心ではなかった。彼がこの昇進を欲しがったのは、単に出世したいというよくある野心だけではなかった。更に別の事情もあった。彼は家に一人の少女、娘を有していて、眼鏡を掛けたオールドミスタイプで、彼はこの娘をとて愛していた。この娘は生涯女教師として過ごしたいと思っていた。 — 巡査主幹の給料ならひよとして娘をゼミに送り出すことができたかもしれない。それが今、料理を学び、女中になるしかない。この人生は滑稽で、うんざりしたものだ。一人の若造が、公務中の巡査に話しかけたばかりに、五人が逃げた。 — それ故に自分は娘に彼女の生涯の夢を叶えさせられない。

巡査長は見上げた。ベンチの彼の横に若いパーゲルが腰を下ろした。彼は巡査長に微笑して、煙草の箱を差し出し、言い添えた、「馬鹿どもが」。

マロフケは煙草を押し返そうと思った。しかしこの若造が事務所から彼の後を追って来て、衆人環視の中、不興を買った男のベンチに腰掛け、一緒に煙草を吸おうとしているのは、それでも心地良かった。彼は自分の中で、この男は悪気はないのだと言い、感謝して煙草を一本取った。こいつは自分の愚かさの結果について知らないわけだ。皆が愚かなことをする。

「巡査長、私が」とパーゲルは言った、「貴方の司令部への報告を書くようにします。貴方の満足されるものになるようにします」。

「それは忝い」とマロフケは言った、「しかし大して私を救うことにはならんだろうから、貴方が自分の地位を危うくしてまで、かばうことはない。 — しかしこれから貴方に語ることは注意していなさい。貴方にだけは言うておこう。他の者達は私に耳を貸そうとしない。 — 郡警察署長の言ったことは、呑み込めたかな」。

「ほんの一時いただけだけど、しかし彼の言ったことは私にはためになった、巡査長」とパーゲルは答えた。

「結構。しかし私にはためにならん。何故か。それは、あの郎党のことを知らずに、考え出した事柄だからだ。一味が単にヴェントとかホルドリアンの手合いなら、あれでいい。この手合いは大方とろいから、半ダースもの重大な家宅侵入や、場合によつたら強盗もする。途中ただ食事や服を入手するためにな。仮に彼らが本当にベルリンに行くとしても、ただそこに至るために、六年、八年の監獄での服役を得ることになるろう。しかし彼らはそこまでできない、家宅侵入ではすべて手がかりが残るので、...」。

「それで奴等は何をするのです」。

「まさにマツケにリープシュナーにコーゼガルテンがいるからな。こちらは明敏な若衆だ。何をするか少しばかり考える。こいつらはいつも自分に言っている。『やるからには甲斐がなければならん』と。少なくとも一年くらう百姓家への家宅侵入はしない。そんなことして着たくもない下僕の古いコール天の上着を見つけても仕様がな」。

「しかし市民服を入手しなきゃならんでしょう」とパーゲルは言った、「囚人服では高

飛びできない」。

「その通り、パーゲル」とマロフケは言って、指を馴染みの、自惚れて卓越して見える素振りや鼻に持っていった。「奴等は抜け目がなくて、自らそう称しているが故に、そして慎重で、市民服を盗もうと思わないが故に、その結果、...」。

パーゲルはこの小男を見つめていて、相変わらずその結果どうなるのか分からないでいた。

「奴等に市民服を手配する者がいるわけだ」とマロフケは穏やかに説明した、「奴等にはここノイローエで協力者がいる。一人か数人。いいかな、コーゼガルテンとかリープシュナーといったしたたかな若衆は、準備なしには脱走しない。これは打ち合わせてあるのだ。どのようにして打ち合わせたか私が気付かなかったから、(というのは奴等はここで示し合わせたからだ、手紙か合図でな。マイエンブルクでは打ち合わせられなかったはずだ)、私が間抜けだったから、だから皆が私のことを嘲っても、結局私には応分のことなのだ、...」。

「しかし巡査長殿、どうしてここ我々衆人環視の中でできたのです。誰がここノイローエで彼らにそれを仕掛けたというのです」。

巡査長は独特の仕草で肩を動かした、「いや、士官候補生よ、自由をまた得たいと思う人間はいかにずるいものか、分からんだろう。貴方は日がな一日、百もの様々なことを考えるだろうが、そのように一人の囚人が朝から晩まで、そして夜の大半、ただ一つのこと、どうしたら出られるか考えるわけだ。それで我々が見張っているだろうと貴方は言ってもな。我々には少しも見えない。その囚人が外の仕事に出掛けて、煙草を一本巻く。そのとき煙草が丁度切れている。すると彼は貴方の目の前で、煙草用の紙袋を屑箱に投げる。貴方は郎党と一緒に出る。しかし三分後に予定の者が現れて、その紙袋を拾い上げて、そしてその上に書きなぐられたものを読む。...ひょっとしたらその上には書きなぐられてすらないかもしれない。単にそれだけのことで、折りたたまれている。この折りたたみ方に意味があれこれあって、...」。

「しかし巡査長殿、それはあり得ないことのように思われます、...」。

「あり得ないことでは全然ない。奴等の場合は違う」とマロフケは言って、流暢になった、「考えて見給え、監獄を、パーゲル、鉄にガラス、セメント、錠、門、更にもう一度錠に門だ、それに鎖もある。そして壁に、門に、三重の監視と歩哨が外にあって、中にも歩哨がある。それでもいいか、世界中に、本当に完全に隙のない監獄は一つもないのだ。かくも巨大な装置で、個々人になっていて、鉄と石の中にいるのだ。それでも我々はいつても経験している。誰も見たことがない手紙が外に出されている。金とか一枚の鋼のヤスリが中に入っている。誰も経路が分からない。 — そして監獄でこのようなことが、その嚴重な装置にもかかわらず可能なのであれば、我らの防御のない、ここ外部の作業分遣隊でそのようなことが不可能であろうか、 — 我らの目が見ていようと」。

「しかし巡査長」とパーゲルは言った、「奴等は手紙を書けることはあるかもしれませんが。しかしその場合、ここには奴等とぐるになって、手紙を読もうとする者がいなければなりませんよ」。

「ここには誰もいないと言うのか、パーゲル」とマロフケは叫んだ、「貴方に分かりますか。私に分かるか。我らの囚人の一人と戦場でかつて一緒だった者がここにただ一人住

んでいさえすればいいのだ。奴等は単に互いに会うだけでいい。私の囚人が目で、助けてくれ、戦友と言う。 — もう陰謀にかかっているのだ。この一人がかつて未決勾留で入っていたことがあって、私の軽騎兵がその隣の房に同じく未決勾留で閉じ込められていた。その二人が当時夜な夜な、窓越しに心を打ち明けていたとする。 — すでに被害が生じていたわけだ。 — しかしすべてこうである必要はない。これは偶然であろう。 — 偶然も必要ないのだ。つまり女どもは偶然ではなく、女どもはいつでもどこでも生じてくる、...」。

「一体どんな女です」とパーゲルは呆気にとられて言った。

「どんな女だと、パーゲル。女は皆そうだ。いやつまり、勿論すべての女がそうではないのだが。しかしいつでもこのような囚人を鋭く狙っている種類の女がいる。何人かの男どもが、まことにエグい野獣の肉を狙うようになる。この女どもは、収監されている囚人は他の男よりもきつと洗練されていると妄想している。私の言うことは分かるだろう。そしてこのような女どもは万難を排して囚人を自分のベッドに招こうとする。囚人隠匿とかそんなことをこの女どもは考えているのではない。そんなことは聞いたことがありませんと言う、...」。

「しかし巡査長殿」とパーゲルは反論した、「そのような女はひょっとしたらベルリンにはいるかもしれませんが、ここ我らの田舎にはいないでしょう」。

「どうしてそうだと分かるのだ、お若いの」とマロフケは果てしもなく卓越した調子で言った、「ここはどのような品性で、どのような女どもがいると言うのだ。いや、士官候補生よ、貴方はいい奴だ。貴方はここで私に礼儀正しい唯一の者だ。しかし貴方はまだ私に言わせればとろすぎる。貴方はいつも考えている。物事はそんなに悪くはない。食べ物も喉を通るころには、調理のときほど熱くはない、と。しかし、お若いの、お若いの、貴方は今朝悟ったろう。時には喉元過ぎる前に、熱すぎる、と」。

パーゲルは不愉快な顔になった。つまり雷鳴のときの猫のような表情をした。パーゲルにとって今、雷鳴がなった。そしてまことに不愉快であった。

「私は貴方に今朝、私の考えのすべてを語った」とマロフケは溜め息を吐きながら言った、「私は貴方が大いに助けてくれるだろうとは思っていなかった。しかしこの若者は、少しばかり目を開いてくれるだろうと思っていた。その目を、まあ、必ずしも開けてはいなかった、士官候補生よ、だから戦場ではそんなことでは鉄十字勲章を貰ってはいまい。...まあ、終わったことだ。若者がどんな気持ちか私には分かる。しかしこれからは私の気にいるよう心がけてくれ。 — これからの日々、本当に少しばかり目を開くのだぞ。郡警察全体が、大きな目を開けても、彼らが私の五人を捕まえるとは思われん。...それでここに貴方が残っている。貴方が数日後、司令部にこう手紙で書けたら、素敵なことだろう。ここに五人がいました。マロフケ氏がどのようにして捕まえたらいいか、教示されていました、と。...どう思うかね」。

「やります、巡査長」とパーゲルは進んで言った。「それでは貴方の見解に従って、どうすればいいのですか」。

「おい、おい」とマロフケは言って、自分のベンチから高く跳ねた、「耳に綿を詰めているんか。脳みそはないんか。すべて言って聞かせたぞ。目をしっかり開けておくのだ。それ以上何も要らない。他には何の要望もない。探偵の真似をしなくていい。隅に這って

いなくていい。抜け目なくなくても構わない。 — 単に両目を開けているのだ」。

「分かりました」とパーゲルは言って、やはり立ち上がった、「然るべく試みましょう、...」。

「分かってくれたか」とマロフケは急いで言った、「郎党には村に協力者がいると私は睨んでいる。一人か数人。多分娘だな。しかし必ずしもそうとは言えない。この周りに警察が一杯いる限り、奴等は潜んでいる、森か、村か、それは分かん。両目をしっかり開けておくのだ。そして少しばかりもっと静かになったら、三日後か四日後に、この兄さん達は出発する、ちゃんと列車で、きちんと市民服を着て、...」。

「注意致します」とパーゲルは約束した。

「そうしてくれ」とマロフケは頼んだ、「注意するのは、思ったより難しい。更に一つ貴方が知っておかねばならないことがある。それは連中が身に着けている品のことだ、...」。

「はい?」とパーゲルは尋ねた。

「つまりそれらは国有財産なのだ。どの囚人も承知している、これらの品の一片でも持ち去ったら、横領罪になるとな。一枚スカーフがなくなっても、半年刑務所となるのだ。それ故このようなしたたかな者達が脱走したら、できるだけ速やかに彼らの品を監獄に返そうとする。大抵彼らは郵送する。その時には私が貴方に知らせよう。しかしここでほんの一枚でも出現したら、猟犬のように注意しなければならんぞ。ここに何か私の残しものがあると思っはいけない。私は何も残さない。しかし赤い縁の灰色の囚人ソックスがわずか一枚あっても、それは怪しいのだ。そもそも我らのシャツはどんなものか承知かな。スカーフはどんなか。来なさい、貴方に教えよう、...」。

しかし巡査長マロフケ殿は、友人パーゲルに囚人の下着の秘密を教示することはもはやかなわなかった。村の通りを下って、「りんりん」と十台の自転車が進んで来た。刑務所勤務の九人の巡査が、皆革ベルトを締めて、それに乗っていた。ゴムの棒が揺れて、顔には汗が浮かんでいた。その先頭には、太った皺だらけの男が乗っていて、厚い皺だらけの黒い服で、その腹がほとんどハンドルの上にあった。彼は、白い、厳格な、肥えた顔で、黒いもじゃもじゃの眉毛に、雪のように白い髭であった。

巡査長はこの恐ろしい、白黒の巨人を目にすると、両目をひたと彼に据えた。彼は自分の周りのすべてを、若いパーゲルのことも含めて、忘れ、深く狼狽してつぶやいた。「作業監督官殿ご本人だ」。

パーゲルはこの太った男が息を弾ませながら、自転車から下りるのを見た。一人の勤勉な巡査が監督官の自転車を支え、監督官はマロフケを見ずに、額の汗を拭った。

「監督官殿」とマロフケは嘆願するように言って、手を相変わらず帽子の記章に置いていた。「申し上げます、作業分遣隊第五、ノイローエ、巡査長以下、四名の巡査、 — 四十五名の囚人、...」。

「こちらの荘園事務所はどこかな、青年」とこの巨象は、離れて、余所余所しく尋ねた、「道を教えて頂けますかな。 — 貴方に関しては、マロフケ、...」と監督官はマロフケに目を向けず、興味深く兵舎の切妻壁を眺めていた。そこは煉瓦の十字架が幾分より鮮明な赤色で浮き上がっていた、「貴方に関しては、マロフケ、もはや名乗り出る必要はないと知っても良からう」。彼は相変わらず壁を眺めていて、熟考していた。それから無造作な調子で、離れて、余所余所しく、とても白く、とても皺だらけで、とても肥えていたが、

「これから貴方は、マロフケ、囚人達の靴が規定通りにグリースが塗られ、きちんと結ばれているか、つまり蝶結びか、他の結びになっていないか確認されたい」。

待機している巡査達の一人が嘲笑的笑い声を上げた。

巡査長マロフケ、この小さな、虚栄心の強いデブは、真っ青になって、しかし直立不動で言った、「畏まりました、監督官殿」、そして兵舎の角へと消えた。

この監督官の前を、事務所へと案内しながら、パーゲルは苦い思いで、この小男のことを考えていた。この小男は大変な苦心と心労とを重ねて来たのであったが、皆から踏み付けられていた。パーゲルは、自分自身には誰も非難しなかった、十分な失敗を犯したのであったけれども、それでもまさに事務所では皆が微笑して迎えてくれと、と考えていた。自分は本当に目を開けていて、何らかの機会があり次第、マロフケ氏の名誉挽回に努めようと誓った。しかし、どんなに実際有能であっても、こんなに滑稽に見えてしまう男に対し、若干報いることは相当難しいことだと分かった。有能さだけではとても足りない。有能に見えることがはるかに大事なのだ。

「それではここが事務所だな」と作業監督官は穏やかに言った、「有り難う、若いお方、貴方はどなたです」。

「マロフケ氏の友人です」とパーゲルは粗野に答えた。

しかしこの太った男は動じなかった、「職業の方を訊きたいのです」と彼は相変わらず好意的に言った。

「見習です」と憤然とパーゲルは答えた。

「そうか、そうか」とこの太っちょは喜んで顔を輝かせた。「じゃ、貴方は勿論マロフケにお似合いだ、見習ね。奴もまだ大いに見習いをしなければならない」。

彼は手を取っ手に置いて、今一度パーゲルに頷いて、消えた。

ヴォルフガングパーゲルはまたしても一つの教訓を得た。つまり人は自分の怒りを、このような怒りを喜び相手にぶつけてはならないという教訓を得た。

三十分後に作業分遣隊第五はノイローエから出発し、再び十五分後に警察も森の中を通じての追い出し猟を開始した。事務所の窓から四人皆が、枢密顧問官、中尉、若きパーゲル、フォン・ブラックヴィッツ夫人が、その行軍を見つめた。その行軍はこの軽騎兵どもの到着とは類似性がなかった。歌一つ歌われず、顔には微笑はなく、頭を垂れて、表情はひきつり、靴を通りの埃の中、引きずりながら、彼らは去って行った。この通過中の空ろな引きずりは何か絶望的なものがある、ある意地悪なリズム、「我らはこの世の仇敵」といったものが、一　ヴォルフガングにとって、響いてきた。

きっと郎党は彼らの逃亡した苦役仲間のことを考えていたのであろう。今や森に巣くっているこの自由な五人を思い出すとき、燃えるような羨望に彼らは捉えられていた。一方の自分達は発射用意のあるカービン銃の同行の下、再び石造りの個別房へ戻らなければならないのである。一　自分達は罰せられる、かの五人が脱走したから。彼らは広大な田畑の眺望が奪われ、それに笑う少女の顔の眺望、ジャガイモの畝に沿って跳ねる兎の眺望

が　一　房の壁の荒涼たる黄灰色と取り替えられた。他の五人が自由に走り回っているから。

しかし列の先頭を巡查長マロフケが進んだ。彼は右手に一台の自転車を押し、左手に一台の自転車を押していた。　一　彼は自分の郎党の監視すら許されなかった。列の背後を重たげに、白黒の、もじゃもじゃ眉毛の、巨象の足取りの監督官が歩いていた。全く一人っきりで、白い、肥えた顔を無表情に上げていた。彼の口許では白く、強力な歯が光っていた。道の縁の一個の石の上にヴァイオは立っていて、通り過ぎて行く列を観察していた。パーゲルは彼女がそこに立っていることに立腹していた。

それは枢密顧問官が孫娘を一目見て、自分の娘にこう言ったからであった。「ちなみに、これからの夜、間抜けなレーダーしかいない別荘では寝ない方がいいと思うぞ。我らの賢明な郡警察署長には敬意を惜しまないとしても、念には念を入れよだ」。

「ひょっとして殿方のどちらかの都合はいかがでしょう」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は言って、交互にパーゲルとシュトゥットマンを見つめた。

マロフケは明白にどんな探偵ごっこにも難色を示していたが、パーゲルはこれからの夜、むしろ自由な立場で、少しばかり辺りを徘徊し、少しばかり尋問したかった、　一　要するに、自分に言われたように目を見開いていたかったのである。彼はそれ故、誰をも見ず、窓から外を見ていた、　一　しかし囚人達は最終的に立ち去っていて、刈り手兵舎は赤い空箱のように見えた。

「貴女の下で眠っても、構いませんよ」とフォン・シュトゥットマンは言って、　一　そして恐ろしく赤くなった。

老枢密顧問官は一度文句を述べたまま、やはり窓から外を見ていた。パーゲルは、目を兵舎にじっと据えたまま、両肩を動かした。器用な者達の無器用さは、いつも見るに堪えないものである。フォン・シュトゥットマン氏のような作法の完成された男がへまをする、目にしている者皆が恥ずかしく思う。

「それでは安心です。有り難うございます、フォン・シュトゥットマンさん」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は声量のある落ち着いた声で言った。

「この刈り手兵舎をまた元通りにするのは、お主に結構な金がかかることだろう」と老枢密顧問官は、目を相変わらず窓から向けていて、説明した。「この格子仕掛け、門をまた撤去して、ドアを取り壊す必要がある。それも可能な限り迅速に」。

「差し当たりこのままにしておくことはできませんか」とシュトゥットマンは慎重に尋ねた、「すべて撤去してから、来年また壁を作ることになったら、手間でしょう」。

「来年か。いや、ノイローエには二度とこのような分遣隊は来ない」と枢密顧問官は決然と告げた。「エーファ、おまえの母親の心配する様子を見ていたら、私はもう沢山だ。それでこれから上に行き、妻を見てみよう。多数の緑色の警察制服を見てご機嫌なものか。反乱のようなものだ。しかしお主らのジャガイモはどうなるのだ、と私は自問し続けている」。

最後にこの砲撃の音を響かせて、枢密顧問官は事務所を去った。フォン・シュトゥットマン氏が赤くなったことに対し、娘の、須臾の、ただ彼にのみ気付ける当惑に対し、若いパーゲルのわざと無関心な窓外部凝視に対し、嫉妬した父親は十分に復讐したのであった。

「そうだ、ジャガイモはどうなるのです」とエーファ夫人は尋ねて、フォン・シュトゥ

ットマン氏を懐疑的に見つめた。

「さほど大きな厄介事にはならないと思います」と急いでシュトゥットマンは説明した。テーマが見つかり、喜んでいて、「失業と飢餓がますます増大しています。我々が郡の都市で、ジャガイモ掘りの仕事がある、現金は払わず、ジャガイモを一ツェントナー掘り出すごとに、十から十五ポンド原物で払うと宣伝すれば、十分人数を確保できましょう。まさに毎朝、二台、三台、四台の連獣荷車を町へ送って、郎党を連れて来ます。夕方送り返す必要があります。ーしかし上手く行くでしょう」。

「面倒だし、高くつくわ」と恵み深い夫人は溜め息を吐いた。「囚人達がいたら、...」。

「ジャガイモを凍らせてしまうよりは、はるかに安上がりです。パーゲル、貴方もこれからは男爵然としておれない。一日中畑に立っていて、数量記録証を出さなければならぬ、一ツェントナーごとに一枚の記録証だ、...」。

「合点多謝」とパーゲルはおとなしく言って、そうなるを目を見開くことに注力できなくなるだろうと苛立って考えていた。

「私は明日旅立つ必要があります」とフォン・シュトゥットマン氏は続けた、「ついでにこの件も薦めましょう。郡報への広告、ー労働局との相談」。

「旅立たれるのですか」と恵み深い奥方は尋ねた、「丁度今、囚人どもが、...」。彼女はとても苛立った。

「ほんの急いで、フランクフルトへの日帰りです」とフォン・シュトゥットマン氏は慰めた、「つまり今日は二十九日です」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は何のことか分からなかった。「明後日は請負の満期日です、恵み深い奥方」とフォン・シュトゥットマン氏は強調して言った、「若干予備の交渉をしてきました。しかし金を持って来る潮時です。ドルは今160,000,000マルクです。途方もない額を運ばなくてはなりません。いずれにせよ途方もない量の紙幣です、...」。

「請負ですか。今、囚人どもがこの田舎にうろついている時に」とエーファ夫人は辛抱できず叫んだ、「私の父が警告したのですか」。

「枢密顧問官殿は何も仰有らない、しかし、...」。

「貴方が丁度今旅立たれたら、私の父はそれを適切ではないときっと思うことでしょう。私どもの許で、一種の警備を引き受けて頂いたのですから、...」。彼女は微笑した。

「夕方までには戻ります。私の見解では請負は一分たがわず支払われるべきものです。私の名誉もかかっています、...」。

「でも、フォン・シュトゥットマンさん、私の父は、請負を一週間後に貰っても、何も損をしないと思います。その時のドル相場で払えば、父と話してみましよう、...」。

「老御領主が話しを聞かれるとは思いません。たった今お聞きになったばかりでしょう、刈り手兵舎の即刻の修理をお望みでした」。

「今は、刻々と事情が変わります」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は文字通り頼んだ、「フォン・シュトゥットマンさん、丁度今このときに一人つきりにさせないでください。...とても心が落ち着きませんし、...」。

「奥方」とフォン・シュトゥットマン氏はほとんど当惑して言った。一瞬彼は窓から外を眺めているパーゲルを見たが、すぐにまた彼のことを忘れた。「『残ります』と言いたいのですが、しかし請負の支払い延期を枢密顧問官殿に依頼したくない気持ちも分かって

頂けましょう。実に私の名誉に関わることです。私はブラックヴィッツから経営を引き継ぎました。私は彼に対し責任があります。支払いは可能です。すべて正確に考えました。私は笑いものになりたくありません。人生では正確で、厳密でなければなりません、...」。

「笑いものとか、正確にとか」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は苛立って叫んだ、「申し上げますが、私の父にとって、いつ支払われるかどうでもいいのです」、もっと小声になった言った、「今、私の夫がいません。父は、私の夫を怒らせることだけが眼目なのです。よろしいですか、別荘のことを考えますと、一晩中ヴァイオと二人っきりで、それに阿呆な小間使い達と、更にもっと阿呆なレーダーと一緒に、隣の村の家まで五百メートル離れている場合、...いや、それは駄目です」と彼女は突然叫んだ。全く別なシュトゥットマンの面を知って、つまり術学と信頼性の裏面を若干真剣に経験して、苛立ち、カリカリし、驚いていた。「私は落ち着かないのです。これからの日々、全く一人っきりでいたくないのです、...」。

「しかし実際何も心配することはありませんよ、恵み深い奥方」とシュトゥットマンはかの執拗な穏やかさで説明した。この穏やかさには、興奮した人間は狂いそうになるものである。「郡警察署長も、郎党はここら一帯から去って行くという意見です。一 結局請負は請負なわけで、まさに親戚間でもそうです。正しく果たさなければなりません。結局私にその責任があります。ブラックヴィッツは正当に私を非難することでしょう、...」。

「騎兵隊長殿だ」とパーゲルが小声で窓辺で言った、「丁度農園中庭に乗り付けられた」。

「誰だと」とシュトゥットマンが呆気にとられて尋ねた。

「私の夫ですか」とフォン・ブラックヴィッツ夫人が叫んだ、「五百番目の兎を撃っていると思っていたのに」。

「本当か」とフォン・シュトゥットマンは語って、すでに騎兵隊長が車から下りるのを見た。

「すでに今朝から気持ちが落ち着かずに、...」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は言った。

「思っていた通りだ」と騎兵隊長は言って、事務所に入り、顔を輝かせながら、三人のびっくりしている者達と握手した。「再び大参事会が開かれて、かの完全に解決不能の問題、結局我が友シュトゥットマンが解決してくれる問題を話し合っているのか。結構。全く私の考えていた通りだ。すべて旧来のまま、シュトゥットマン、頼むから、顔を歪めないでくれ。ちなみに君のまだ知らない友、シュレックから言付かっている、君は以前同様、彼の欲しい男だとな。私はただ兎を撃つことにしか役立たない。一 しかし諸君、多くの雨蛙ども[警察]は、ここノイローエで何をしているのか。一 部隊全体が森へ進軍して行くのを見たぞ。義父殿が密猟者の逮捕を要請しているのではあるまいな。ところで今朝、我らの善良なクニーブッシュにフランクフルトの駅で出会った。完全に打ちのめされていた、ポイマーの件で、今日が期日だそうだ。...この老いた爺さんをおまえ達の誰一人本気で心配していない。私の尊い義父殿も含めて。つれない仕打ちだ。それで、これから私はまた経営に骨折ろう。それで警察は何だ。囚人どもが逃げたのか。分遣隊は解散か」。

騎兵隊長は心から笑った。彼は椅子に身を投げ、他の相手のびっくりして当惑した顔を眺めるにつれ、更に笑い続けた。

「しかし、諸君、諸君、一 だからと言って、私を去らせる必要はないぞ。こんな愚

行は私一人でも片付けられる。結構。それで義母殿は勿論またブルブル震えているんだろう。それで若いパーゲル殿は狩り出しに参加すらしていないのか。いや、パーゲル、私が貴方の上司なら、即刻外に出なきゃならん。これは名誉に関わる。少なくとも荘園の一人がそこに居合わせないといけない。さもないとすぐに、臆病と言われるぞ、...」。

「分かりました、騎兵隊長殿」とパーゲルは言った、「早速参ります」、そして行った。

「それでよろしい」と騎兵隊長は顔を輝かせ、叫んだ、「奴は外がいい。いい若者がここで永遠に無為に立って見回してなくていい。結局ここではパンと賃金のためにいるわけだ。 — それで、諸君、気にかかっていることすべてを話してくれ。私がどんなに休憩して、元気になり、回復しているか想像もできんだろう。毎日唐檜の針葉樹林浴に十時間の睡眠だ。 — これは元気になる、 — それで、シュトゥットマン、最悪のことを話してくれ、請負支払いはどうなっている」。

「私は明日フランクフルトに金を取りに行く」とシュトゥットマンは恵む深い夫人を見ずに言った。

おかしなことに突然、フォン・シュトゥットマン氏にとって、自分が旅して良いことになったとき、これはまた面白くないと思われたのであった。

112

枢密顧問官シュレックの手紙

夕方頃騎士領ノイローエの牛乳荷車が再び農園中庭に戻って来て、牛乳の御者が郵便袋を事務所に持って来たとき、フォン・シュトゥットマン氏はこの袋に枢密顧問官シュレックの一通の手紙も見つけた。これは騎兵隊長ヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツ氏の突然の帰還に若干の照明を当てるものであった。

「いとも尊敬するフォン・シュトゥットマン殿」とシュトゥットマンはこの神経症、情緒疾患の患者専門のつけんどんで若干粗野な治療者の手紙を読んだ、「この手紙と同時に、貴方の友ブラックヴィッツはまた貴方の許へ戻られるであろう。貴方の友は私の友とはならなかった。いずれにせよ、フォン・ブラックヴィッツ氏の訪問は、私にとって — 金を払う患者としてなら歓迎であります。もっとも誤解を避けるために言えば、今日のうちにも言及しておきたいことは、騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツ氏のようにかくも容易に鬱状態、興奮状態に陥りやすい不安定な精神病質者は、強力な権勢欲と脆弱な知性の混在で、本来治療可能とは言えないということです。殊にこの患者の年齢では無理です。それ故大抵、このような人間には無害な仕事への欲求教示が大事となります。例えば、切手収集や、黒い薔薇の栽培、外来語のドイツ語化考案といったことです。 — この場合何ら損害は生じず、それどころか全く我慢し得る存在となります。

すでにフォン・ブラックヴィッツ氏が五百匹目の兎を目前にしている、私は千匹目の兎への記録挑戦へ強く慫慂しているとき、 — あろうことか、 — 今度は彼自らが私の患者を治さなければならない、私のやり方は間違っているという考えに彼は取り憑かれてしまったのです。全く素人の無知な冒険心の発揮に駆られたのです。八年前から私の許に滞在しているロシアの侯爵夫人、彼女はこの八年間、妊娠していると思い、八年間公園の池を回っていたのですが、というのは十回この池の周りを回ったら、分娩に至ると思って

暮らしていたからですが、 — このとりわけ金払いが良くて、完全におとなしい二・五ツェントナーの体重の女性患者を彼は現実に十回池の周りを引きずって行き、その結果夫人は分娩とはならなかったものの、心臓と情緒の虚脱に陥ってしまいました。ある美貌の統合失調女性患者に彼は巻き毛を所望し、そのためこの娘は刈り取って丸禿げになりました。 — この娘の縁者の訪問日が迫っているのです。彼にプロポーズをした残念ながら異常な素因の殿方に対し、その間違った素因を拳骨で殴って治そうとしました。貴方にも馴染みの帝国男爵フォン・ベルゲン男爵に対して、彼は無邪気に対応して、新たな逃亡を許してしまいました。 — 要するにフォン・ブラックヴィッツ氏は、月におよそ三千金マルクの価値のある私の患者をふいにしたのです。それで私はこう宣言しました、ここで幕引きお仕舞いと。私は彼に、ノイローエに十月一日までに彼が戻ることに絶対に必要であると納得させました（勿論私は彼の心配事を了解しています）。そしてこれを彼も認めたのです。

いとも尊敬するシュトゥットマン殿、貴方が、彼の帰還で厄介事が生ずるのであれば、率直にそれは嬉しい。というのも、そうなれば貴方は一層速やかに私の許へお出でになろうと考えるからであります。...謹んで貴方の云々、...」。

「そういうわけか」とフォン・シュトゥットマン氏は溜め息を吐きながら、言って、ゆっくりとマッチを一本擦って、手紙を暖炉のブリキの上で燃やした。かくて彼はまた、十月一日を乗り切るよう我々の加勢に戻って来たのだ。きっと上手く行くだらう。少なくとも今彼はもはやカリカリしていない。せめて劣等愚鈍なことを仕出かさなければいいのだが。強力な権勢欲と脆弱な知性か、 — 難儀だが、きっと私にはできよう。

フォン・シュトゥットマン氏は失敗する定めにあった。フォン・ブラックヴィッツ氏はこの日に幾つかの取り返しのつかない愚行をすでに犯していた。

113

フランクフルトの裁判期日

騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツがこの日の朝、後数分ということで大急ぎでベルリンとオーダー河畔フランクフルト間の列車のコンパートメントに入ったとき、はなはだ無愛想な声で迎えられた、「済みません、すべて満席です」。

この呼びかけは真っ赤な嘘で、というのはすでに進行中の列車のコンパートメント八席のうち単に二席のみ塞がっていたからであるが、騎兵隊長が赤くなったのはこの嘘のせいではなかった。彼はかくも不躰な呼びかけの主の顔を見知っていて、凝視しながら、手を動かして、微笑して言ったのであった。「いや、少尉殿、私は、私自身の森でのように、いつでも簡単には退散しませんぞ」。

少尉も顕著に赤くなった。そして彼も当時の出来事を当てこすって返事した、「貴方の義父殿の森からでしたね、騎兵隊長殿」。

そう言って両人は今や微笑し合った。両人の目に黒い奥での情景がまざまざと蘇った。歩哨の呼び笛とそれから少尉の鋭い退却指示であった。両人とも自らがまことに利口で、相手にはるかに勝っていると考えていた。少尉は、父親に対して娘との関係を秘匿していたからであり、騎兵隊長は、少尉が極めて無愛想に拒絶しても、武器をこっそり埋蔵した

ことを知っていたからである。

両人の次の言葉は注目すべきものであった。少尉は無邪気に好意的に言った、「御令嬢は元気ですか」。

「有り難う」と騎兵隊長は答えた。彼は鼠には脂身[猫には鯉節]と考えて、続けた、「黒い奥では万事異常ないかな」。

「有り難う」と少尉は素っ気なく言った。

会話は終わった。

両利口者のどちらも、自分が知りたいと思っていたことを知ったと思った。少尉は娘は口を滑らせていないと、騎兵隊長は武器はまだ森にあると、知ったと思った。そこで思わず知らず、両人はコンパートメントの第三の男に目をやった。この男は黙って、新聞を読みながら、自分の隅に座っていた。この第三の男が新聞を下にして、視線を上げた。

この男は、ちなみに少尉も全く同じで、市民服ではあったが、彼の顔全体と、その身に着けた仕草で、絶えざる制服着用による引き締まった肉体の主であることが察せられた。彼はかなりだぶだぶの上着を着ていたが、すぐに将校であると分かった。一 広くて黒い帯にかかっている片眼鏡とボタン穴のホーエンツォレルン[プロイセン王家]の勲章がなくてもそうと分かったであろう。この紳士は、両人に重たげな、緩慢な、無数の経験で慎重になった視線を向けた。はなはだ白くて、薄い肌の顔は、肉の中間層がないまま骨の上にあるように思われた。かなりまばらになっても、それでもまだ淡いブロンドの髪が長い房となって用心深く頭の上に収まっていて、その間から白い皮膚が羊皮紙のように微光を発していた。このかろうじて変装された髑髏の中で最も目立つのは口であった。唇のない口で、細い線のように、自動機械の投入口に似ていた。一 あらゆる辛酸を嘗めてきたように見える口であった。

この男はとうに見たことがあるように思われると騎兵隊長の頭の中で閃いた。彼は頭の中で速やかに、最近の週、眼前にしたジャーナル誌の写真の頁をめくってみた。

この変装した将校が、細い指の、軽く震える子供のような手で、片眼鏡を目に当てた。瞬時に騎兵隊長は見つめられていると感じ、この視線が若い少尉に向かったとき、早速自己紹介しようと思った。

「フォン・ブラックヴィッツ＝ノイローエの騎士領請負人殿です、退役騎兵隊長」と少尉が急いで告げた。この視線がいかなる弾みを付けたか感じられた。

「初めまして」と相手は言った。しかし彼の方では名前を名乗らなかった。しかし騎兵隊長にとって少しも不快ではなかった。というのは本来、この高貴な将校を存じ上げていなければならない立場であると分かったからである。片眼鏡は目から落ちて、このミイラは言った、「お掛けなさい、収穫は上出来でしたか」。

騎兵隊長は少尉同様、この座している男の向かい側に座った。この冷たい、生気ない視線を常に自分の中で感じなければならないかのようであり、相手を見つめていて、それに相手が反応しないとき、この視線は初めて全く不快になるかのようと思われた。

「いえ、収穫は全くひどいというものではありません」と騎兵隊長は農業主達の間で普通に見られる慎重さで答えた。収穫を称えることは天の摂理への挑戦に聞こえるからである。そして彼は付言した、「私は最近の週、ノイローエに不在でした」。

「フォン・ブラックヴィッツ殿はフォン・テッショー殿の婿です」と少尉は説明した。

「分かるな」とこの幽霊は謎めいた言い方をした。この「分かるな」が何に関連しているのか分からなかった。ノイローエへの不在のことか、それとも縁戚関係のことか、それとも収獲に関することか。

少尉は、この男の名前は、一 騎兵隊長は丁度そのことを思い付いたが、一 まだ名乗られなかったが、更に助け船を出した、「フォン・ブラックヴィッツ殿はその義父の請負人です」。

「有能な男だ」と片眼鏡のこの男は言った、「最近私の許に、二、三回来たことがある。ご存じかな」。

騎兵隊長は何もそのことを知らなかった。彼のローデングロス地の義父がこの羊皮紙のような将校と何の関係があるのか分からなかった。

「さっぱり分かりません」と彼は混乱して言った、「申しましたように、旅に出ています」。

「有能だ」と相手は更にながら声で言った、「商品をまず手にしてから、初めていつも支払おうとする人間の一人だ、一 親戚として感情を害されたかな」。

「いえ」と騎兵隊長は反対した、「私も絶えずもめていまして、...」。

「同乗しようと思う者は」と全く不可解な、会話の中では一言の手がかりのない辛辣さで告げた、「まずチケット代を支払わなければならない。その旅がどこへ向かうか知りもしないうちでもな。一 分かるかな」。

騎兵隊長は分からなかった、しかし瞑想して頭で頷いた。...

その名前を彼が思い出さなかったこの余所の男は、少尉を見つめた。少尉は視線に応えた。しかし肯定の素振りを見せなかった。...

「思うに」とこの将校はそれでも言った、「貴方は一台車を所有されていよう、...」。

「私は一台も持ちません」と騎兵隊長は釈明した、「しかし一台欲しいところです、...」。

「今日か、それとも明日か」。

「いずれにしましても近日中に、...」。

「今日か、明日だ、それ以外は意味ない」と将校は頑固に言って、すでにまた新聞に手を伸ばしていた。

「分かりませんが」と躊躇いながら騎兵隊長は述べた、一 この片眼鏡の男は自動車会社の代理人だろうか。一 「いずれにせよ大層な額で、...分かりませんが、金をどうして、...」。

「金か」と相手は軽蔑して叫び、新聞をはなはだくしゃくしゃ音させた、「いつから自動車に金を払うようになったかね、為替だ」。そして彼は新聞の背後に消えた。

今回この若い少尉はもう助け船を出さなかった。彼は拒絶した表情で、隅に座っていて、煙草の煙に見入っていて、騎兵隊長はコンパートメントの別の隅に引っ込み、自分の新聞に注視し、彼も今や新聞をくしゃくしゃ力強く音させ始めた。しかしまともに彼は読めなかった。彼は再三、この将校の謎めいた話を熟考せざるを得なかった。有能な、有能すぎる義父についてのこの神託的格言、前もって支払わなければならない乗車券のこと、支払わなくてよい車のことについて考えた。...まことに威勢の良い怒りに早速騎兵隊長は、何週間も療養所で静養したにもかかわらず、襲われた。この若い男がいかにか自分を森で処遇したか思い出してみると、この出来事がまだ少しも片付いていないと思った。そしてこ

の羊皮紙の男が自分をいかに今日処遇したか合わせて考えてみると、またしても、何か手を打たなければならない、と思った。...

向こうの方で両人が互いにひそひそ話し始めた。騎兵隊長はひそひそ話しを失礼と思った。殊に、勿論自分のことについてひそひそ話しているから失礼と思った。結局自分は愚かな少年ではない、一廉の将校であり、成功している農業主なのだ。レディーの前でそのような事柄は論評しないのであれば、なおさら、中年の紳士の前でひそひそ話すべきではあるまい。騎兵隊長は十分に気合いが入って来た。彼は新聞に力強い一撃を加えた。もっともそれは『ドイツ日報』で、低級紙ではなかったのであるが。両人は見上げて、諍いが始まりかねなかった。 — そのとき列車のスピードが次第に弱まった。すでにフランクフルトに着いて、騎兵隊長は降りて、乗り換えなければならなかった。 — より速やかに自分の怒りを発散すべきであろう。

「騎兵隊長殿、降りられますか」と少尉は丁重に尋ねて、隊長のトランクへ手を差し出した。

「私は乗り換えだ」と騎兵隊長は怒って叫んだ、「お手伝いは結構」。

それでも少尉は網棚からトランクを、身をくねらせて席に下ろした。

「貴方にお伝えするよう言われています」とその際彼は小声で、騎兵隊長を見ずに、言った、「我々は明後日、十月一日、オスターデで一種の同志結団式を行います、朝六時です。制服姿で、若干の武器を持参してください」。

こう言って、彼、騎兵隊長を見つめた。騎兵隊長は圧倒された。彼はとても圧倒されていて、「畏まりました」と述べた。

「赤帽[ポーター]」と少尉はコンパートメントの窓から叫んで、騎兵隊長の荷物を持っていた。話しが面白くなったとき、騎兵隊長は列車から降りなければならない。

彼は隅の紳士を見つめた。隅の紳士は脚を長く前に突き出して、片眼鏡は帯にぶらぶら揺れていて、目は閉ざされ、彼は眠っているように見えた。決断が付かず、それでも大いに敬意を表して、騎兵隊長は眠っている脚の上を越えた。彼はつぶやいた、「良い朝を」。

「一台の車でだ、了解かな」とミイラはつぶやいて、すぐにまた眠っていた。

騎兵隊長は半ば呆然として駅ホームに立っていた。赤帽[ポーター]は荷物をどちらへ運べばいいか三度尋ねていた。ようやく騎兵隊長はノイローエと言い、それからオスターデと言った。

「いや、オスターデへ向かわれますか」と赤帽は言った、「じゃあ貴方は間違っておられます。ラントベルク線で向かわれませんか」。

「違う、違う」と騎兵隊長は苛々して叫んだ、「私は車一台欲しいのだ。ここで車を買えるか」。

「ここですか」と赤帽は尋ねて、初めて騎兵隊長を見て、それから駅ホームを見つめた。「ここですか」。

「そう、ここフランクフルトでだ」。

「勿論ここで車を買えます、旦那」と赤帽は宥めて言った、「ここでは何でも手に入ります。大抵そうします。ベルリンの方々は列車でこちらに来て、フランクフルトで車を買われます、...」。

騎兵隊長はこの男を話すがままにさせ、それどころか彼の後に従った。すべてが彼にと

って明瞭になった。彼が目にした将校は、彼に百度となく話されてきた人物で、しかし彼がまだ顔を見たことのない人物であった。政府に対する大規模な一揆[クーデター]を企てているリュッケルト少佐であった。明後日早朝六時、オスターデで始まるのだ。騎兵隊長もそれに、一台の車で参加せよということだ。

義父は余りに有能な男なのだ。義父は自ら乗車券を買う前に、まず一揆[クーデター]を欲し、その一揆の成功を見たいと思っている。騎兵隊長の自分はそれほど商売上手ではない。自分は早速その車を購入しよう。為替で。自分は商売上手ではない、しかしそれが正しいのだ。

ぼんやりと騎兵隊長は赤帽に連れられて、待合室ホールへ行った。物思いに耽って彼は腰を下ろし、その男に金を渡して、コーヒーを注文した。今彼が考えていたのは、もはやリュッケルト少佐や無愛想な少尉との一揆のことではなかった。この件は終わり、片付いていた。自分は明後日六時にオスターデに行くであろう。これはきっと上手く行くであろう。これについてはそもそも考えることはない。自分は超慎重な、策謀家の枢密顧問官ホルスト＝ハインツ・フォン・テッシューではない。自分は騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツだ。一人の戦友が自分に、一緒に立とうと言えば、自分は一緒に立つ、つべこべ言わない。自分は余り耳にして来なかった。しかし十分に聞いてきた。帝国国防軍と黒い帝国国防軍が合同です、老若の将校が一緒だ、一 層の金を印刷し、ルール闘争を放棄して、フランス人達と「連合」しようと思っている政府への反抗だ、一 こうしたことすべてについて熟慮する必要はない。これらはまともなことだ。

騎兵隊長が没頭して自分のコーヒーをかき混ぜながら熟慮していたことは、自分の車のことだった。勿論すでに「自分の」車である。もっともまだどのような外観であるかすら分からなかったのであるが。しかしすでに今まで余りに長いこと一台の車を渴望してきた。ただいつもその金が足りないのであった。一 今も元来金はない。それどころかノイローエに車で向かうのは、十月一日の難儀な請負支払日の期日に即刻間に合うようにするためだ。騎兵隊長は子供のようであった。子供は靴や靴下を脱がずに水の中でピチャピチャ跳ねることを十回繰り返したら、隣の少年が十一回目のときただこう言うだけでよい。「今日は温かい」。するとその子供は、どんなに禁止されていても、素足でパチャパチャ跳ねるのである。少佐は言っていた、騎兵隊長は車を一台入手する必要がある、と。金は相変わらず乏しい。以前よりも乏しいのである。そしてその車は早速、危険な冒険のために使われるであろう。一 しかしこうしたことすべてを騎兵隊長は何も考えなかった。彼はもはや、一揆のことも、倒されるべき政府のことも念頭になかった。彼はただ、自分はやっと車を一台買えるとのみ考えた。この一揆は結構な代物だ。お蔭で自分の車が手に入る。

騎兵隊長は頭の中で自分の友や知人のすべての車を思い浮かべた。彼はメルツェーデスとホルヒの間で揺れた。もっと安い車は問題にならない。車を一台所有するとなると、どこかの田舎医者のような車を持つわけに行かない。車は車らしく見えなければならない。とにかく掛けで買うとなると、ちょっとした額の多少は問題でない。いや、車もそう難しいことではない。難しいのは、ただ速やかに運転手が見つかるかだ。上品に運転ができて、ハンドル席でも見かけの良い運転手だ。さもないと後部座席に座っていても楽しみが半減する。すぐ済ませなければならない、二、三時間後には自分の車でノイローエに向かうつもりだからな。...するとガレージの問題が生ずる。一 ノイローエで、別荘のすぐ近く

で、最も抜け目なくガレージを建てられる所はどこか。

騎兵隊長は完全に自分の考えに没頭していた。彼は数ヵ月前、禁じられたクラブの賭博台に座っていて、ただ張り込みに遅れまいとひたすら熱中して、賭博の規則を覚えるに至らなかったかの騎兵隊長に驚くほど似ていた。騎兵隊長はまたしてもこの賭けを知らなかった。しかし彼は大いに、次々に、力量以上に賭けた。 — 波形板のガレージを買えるかもしれないな、しかしこんなものとても見栄えがしない、...

「いや、騎兵隊長殿」と待合室の隣の席で嘆願するような声がした、すでに三度目であった。

「何だと」と騎兵隊長は、自分の計画や夢から飛び出て来て、森林官クニーブッシュをびっくりして見つめた。森林官は盛装制服で、小さなビールグラスの後ろに座っていた。「クニーブッシュ、貴方はここフランクフルトで何をしているのだ」。

「裁判期日なのです、騎兵隊長殿」と森林官は非難一杯に言った、「ボイマーとの私の件です」。

「そうか」と騎兵隊長は認めて頷いた、「ようやくあのならず者が処罰されるのだな。そうなるよ、思っているのか」。

「騎兵隊長殿」と森林官は文字通り嘆願した、「私は被告人です。偉いさん達は私を懲らしめようとしています。彼に傷害を加えたというのです」。

「この戯言はまだ片付いていないのか」と騎兵隊長は呆気にとられて言った、「フォン・シュトゥットマン氏もその件については一言も手紙で触れていないぞ。私のテーブルに来て、腰掛け、その件について話してみろ。事態はのんびきならんようだが、ひょっとしたらまだ私の力が間に合って、解決できるかもしれんぞ」。

「幾重にも、幾重にも感謝申し上げます、騎兵隊長殿」と森林官はほっと息をした、「いつも私の妻に言ってきました、騎兵隊長殿さえいらしたら、私は助かるだろうに、と」。

そして森林官は彼の領主の古武士精神を効果的に目覚めさせた後、気の抜けた自分のビールの残りを騎兵隊長の席に用心して運び、ゆっくりと大いに嘆きながら、自分の心情を吐露した。そして騎兵隊長は耳を傾けた。先ほど車に向けた同じ熱中を今やクニーブッシュの刑事事件に向けた。彼は自分がいなければ、万事、どんなに信頼できる人々の許でも、いかに遅滞するものか、辛辣なコメントを忘れなかった。まさに自分がすべてを自ら片付けなければならないではないか。彼は法の歪曲者達を、密猟者どもを、つまらぬ赤と黄色の共和国を、ドルを、そしてアカの連中を罵った。 — しかし彼はまた忘れずに、森林官クニーブッシュにしっかりと、彼の雇用者は本来、枢密顧問官フォン・テッシュョーであって、この件は騎兵隊長の自分には元来何の関係もないのだと銘記させた。

「いいか、クニーブッシュ」と彼は最後に言った、「丁度十時半が期日なのか。 — 私は元来まだ沢山やることがあって — つまり自動車を買いたいのだ、それで運転手を更に雇おうと思っただけでな、...」。

「車ですか」と森林官は叫んだ、「恵み深い奥方様が喜ばれましょう」。

騎兵隊長はこれにはさほど確信はなかった。この点には深入りしなかった。「それではこれから貴方と一緒に簡易裁判所に行って、その偉いさん達に徹底的に私の意見を述べることにしよう。その件は十分すれば片付く。私に任せろ、クニーブッシュ。これらはすべてただ正しい明かりの中で判断しなければならない。そもそも金輪際、大地主階級への迫

害を止めなければならん。明後日になれば万事変わる事だろう。貴方も驚くぞ、クニーブッシュ、...」。

クニーブッシュは耳をそばだてて聞いた。

しかし騎兵隊長は手短かに打ち切った、「その後すぐに私はポンコツ車を買う。運転手付きで、上品な運転手が購入の際の条件だ。それから貴方を一緒にノイローエへ連れて帰る。旅費が浮くだろう、クニーブッシュ」。

クニーブッシュは大層に感謝した。彼はこの計画に有頂天になった。それでも若干抱いていた疑念、裁判の件はひょっとしたら騎兵隊長の介入によっても上手く行かないかもしれないという疑念を、彼は賢明に黙っていた。騎兵隊長は急いだ、彼は大股で急いで、フランクフルトの町を進んで行き、あたかも一步ごとに渴望の自動車に近寄って行くような按配であった。森林官クニーブッシュは半歩後をはあはあ言いながら駆けた。

かくて彼らが簡易裁判所に着いたとき、まだ十五分早すぎた。それでも騎兵隊長は召喚状に記載された会議室の前に進んで行き、ノックし、聞き耳を立て、慎重にドアを開けた。埃っぽく、荒れて、がらんとした部屋があった。一人の廷吏を掴まえて、廷吏に召喚状を見せ、廷吏は一人一人を見比べた。

「貴方が当事者ですか」と廷吏は騎兵隊長に尋ねた。

隊長は激しく抗議した。彼はこの件を喜んで引き受けていたが、これはまた彼には面白くないことであった。

「それでは、貴方の方ですか。まあ、とにかく少しお待ちください。もう少しかかると思います。 — この件は呼び出しがかかります」。

嘆息しながら騎兵隊長は森林官と一緒にかのベンチの一つに腰掛けた。そのベンチは誰一人として落ち着いて座っておれないものである。その造型のせいであろうか、それが設置されている場所のせいであろうか、落ち着けない。通路は荒涼としてがらんとしている。薄汚れてはいないが、薄汚れた感じがする。時々人がやって来て、彼らの足どりが、どんなに用心深く歩いても、石の壁、石の床、石の天井に反響する。近視のように彼らは頭をその灰色の白昼の明かりの中、ドアの番号に屈める。彼らは決心してノックし、入る前に長く聞き耳を立てる。

騎兵隊長は憤然として、向かい側の壁の表示を凝視していた。表示には上下にこう書かれていた。「喫煙禁止、唾棄禁止」。表示の下には痰壺が置かれていた。騎兵隊長は今や外のフランクフルトを駆け回り、素晴らしい車を購入し、試運転をしたかったことであろう。この荒涼とした通路に、ただ人の良きのせいで座っていたくない、この件は本来自分には何の関係もないのだ。

彼は嘆息して時計を見た。「何と時間がかかるのだ」と彼は苛立って叫んだ。しかしやっと十時二十五分だ。

森林官は同行者の苛立ちを感じた。同行者を引き留めておくことが彼には大切であった。その上彼は騎兵隊長が暗示していたことについて熟慮していた。それで彼は用心深く言った、「武器はまだ黒い奥にあります」。

「しっ」と騎兵隊長はとても大声で言った。それで廊下の全く端にいる一人の紳士が縮み上がって、問うように振り向いた。騎兵隊長はこの紳士が部屋に消えるまで待ってから、小声で尋ねた、「どうしてそうと分かるのだ、クニーブッシュ」。

「私は昨日の午後、もう一度点検したのです」といつも好奇心の旺盛な森林官は囁いた、「自分の森で何があるか、知りたいものです、騎兵隊長殿」。

「そうか」と騎兵隊長は優越感を抱いて言った、「武器は今日まだあっても、明後日にはなくなるぞ」。

森林官は熟慮した。「明後日」という言葉を彼はすでに騎兵隊長から二回聞いた。彼は用心深く尋ねた、「騎兵隊長殿はそのために車を買われるのですか」。

騎兵隊長は急行列車で一人の重要な男と一緒にいた、ある一揆の統率者で、自分は最新のニュースを知っている。森林官が彼自身と同様に知りたがっていることに、はなはだ侮辱を感じた。「この話しについて何を承知しているのだ、クニーブッシュ殿」と彼ははなはだ突き放して尋ねた。

「いえ、本来何も存じません、騎兵隊長殿」と森林官は詫びて言った。彼は自分が若干間違ったことに気付いた。風向きが分からない限り、自分も関与して知っている知識をすべて披露しない方が良いだろう。「ただ、村の郎党は大体話しています。近いうちに何か起きるだろう、と。すでに前から言われています。しかし誰も日時について知らないのです。これはただ騎兵隊長殿のみがご存じでしょう」。

「私は何も述べていない」と騎兵隊長は確言した。しかし追従された気になった。「村の郎党はどうしてそのような考えに至ったのか」。

「いや、...」と森林官は言った、「それについて話して良いのか分かりませんが」。

「私にはいいだろう」と騎兵隊長は言った。

「あの少尉が来まして、...。騎兵隊長は少尉をご存じでしょう、騎兵隊長殿にとっても不躰であった少尉です、...。彼は二、三回村に来たことがあり、郎党と話しております」。

「そうか」と騎兵隊長は言って、少尉が郎党と、それに多分森林官とも話しているながら、彼とは話さなかったことにとっても立腹した。しかし彼はそのことをおくびにも出さなかった。「それで、貴方に申すとな、クニーブッシュ、私はまさにこの少尉とベルリンから一緒に乗って来たのだ、...」。

「ベルリンからですか」と森林官は叫んだ。

「やはり明敏でないの、クニーブッシュ」と騎兵隊長は蔑んで言った、「こうした不躰さは約束事であると気付いてすらいない。どこで立ち聞きされるか分からんわけだからな、...」。

「そうです」と森林官は圧倒されて叫んだ。

「そうなのだ、親愛なるクニーブッシュよ」と騎兵隊長は締め括って説明した、「貴方は明日には知ることになるから、貴方には漏らしておこう。明後日朝六時にオスターデで同志結団式がある、一我々はそのようなことを同志結団式と呼んでいるのだ」。

「いつも言っている通りです」と森林官はつぶやいた、「厄介事が終わりません、...」。

「しかし誰にも一言も話さない今即刻誓ってくれ」。

「勿論です、騎兵隊長殿、神聖に誓います。誰が話しましょうか」。

両人は握手した。すぐに騎兵隊長はお喋りはまずかったと気付いた、しかもクニーブッシュ相手に。しかし結局この男がすでに知らなかったようなことは何も話さなかった。あるいはほとんど知らないような話しではない。森林官は共謀者の一人なのだから。

しかし気まずい沈黙が両者の間に生じた。

丁度この時、一人の若者が通路をやって来た。小さな杖を持った鳥打ち帽の小粋な洒落者で、即刻三年間の兵役を願いたくなるような若者であった。彼は杖を帽子の前ひさしに当てて、言った、「偉いすません、ここの教会からどうしたら出られますか」。

「何だと」と騎兵隊長はほとんど叫んだ。

「どうしたら教会から出られるのです、一ここ教会でしょう」。

「いや、何で教会から出たいのかね」と騎兵隊長は叫び、ほとんど素面の時のない若造のこのような願いに立腹していた、「それにそもそも喫煙は禁止だ」。

「貴方はラッキーでした、社長」と若者は見下して言い、通路を更にぶらぶら歩いて行った。彼はあるドアの中に消えた。煙草は全く遠慮せず口にしていた。

「今日日は阿呆ばかりだ」と騎兵隊長は立腹して叫んだ。「教会から出たいと、煙草を吸って、奴等のすることと言ったら」。

騎兵隊長はますます興奮して来て、憤然とした視線を壁の禁止表示に放った。ただ自分のみを威嚇して、このような若造に効き目がないのであれば、何にも役立たない。

「貴方、まあ聞いてくれ」と丁度また通路にさまよい出た廷吏呼びかけた、「貴方の許では一体何時に始まるのだ」。

「まだ少しばかりかかると申したでしょう」と廷吏は侮辱を感じて言った。

「しかし十時半に開始予定だぞ。もう間もなく十一時だ」。

「その件は呼び出されると申したでしょう」。

「ここでは何時間も待たせるものじゃないだろう」と騎兵隊長はますます怒りを募らせた、「私の時間は貴重なのだ、...」。

「いや、分からないのです」と廷吏は決心が付かず、制帽を動かした。「まだ私は何もはっきりしたことを伺っていません。ひょっとしたら、...今一度召喚状を見せてください」。

「私は召喚されてはおらん」と騎兵隊長は侮辱を感じて叫んだ、「ただ同行しているまでだ」。

「おやそうですか」と廷吏は言って、今や彼の方が苛立っていた、「貴方は全く召喚されていない。しかし貴方はここで私を叱りつけていらっしゃる。待てないのであれば、家にお帰りください。その方がずっと良いでしょう」。

頭を振りながら、彼はまたあたふたと通路を歩いて行った。

両人は彼を見送った。

「分かるだろう」と騎兵隊長は突然言って、森林官の腕をととても好意的に掴んだ。「そもそもあの男の言う通りだ。私がここに更に長く座って待っていても何になろう。まだしばらくかかるかもしれないと彼が言ったのだし」。

「でも騎兵隊長殿」とこの老いた男は叫び、今や彼の方から自分の領主を懇願して掴んだ。「今、私を見棄てないでください。騎兵隊長殿と出会ってとても幸せと思いましたが、騎兵隊長殿は私を助けてくださるのでしょう」。

「勿論そうしたい、クニーブッシュ」と良心の呵責を覚えて、出来る限り心を込めて騎兵隊長は言った、「仕方ないのだ。すぐ喜んで同行して来たろう」。

「いや、騎兵隊長殿、もう少しばかり待ってください」と森林官は請うた、「ひょっとしたらすぐに始まるかもしれませんが、多分上手く行って、...」。

「しかしクニーブッシュ」と騎兵隊長は非難を込めて叫んだ、「貴方は何が問題か分か

っておろう。私はここフランクフルトに遊びで来ているのではない。車をタイミングよく買わなければならない、ご承知のように、...」。

「でも騎兵隊長殿、...」。

「いや、これから貴方は覚悟しろ、クニーブッシュ」と騎兵隊長は精力的に釈明した。自分の腕を森林官の手から離した。森林官は相変わらず懇願するように腕を掴んでいたのであった。「いいか、古参の下士官よ、一、二、三人の思い上がった裁判官どもを恐れているようだが。申しておく、クニーブッシュ、たとえ今この瞬間、この件が呼び出されても、私は出て行く、とな。危機の目をとにかく直視することが貴方にはためになる。貴方は余りに軟弱になっているぞ、しっかりしろ」。

そう言ってフォン・ブラックヴィッツ殿は手短かに、しかし無下にではなく、森林官クニーブッシュに頷いて、そして廊下を下って行った。階段ホールへと彼は折れて、そして消えた。

しかしクニーブッシュは死刑囚ベンチに沈んで、両手に頭を隠し、絶望的になって考えた。偉い領主達は皆このようなものだ。何でも約束してくれるか、すべて法螺だ。私は、ここで私にとって何が起きているか、ひょっとしたら牢獄にぶち込まれるかもしれないとさえ、彼に正確に話した。しかし、駄目だ。彼はそれが待てない。彼は自分の車を買わなければならないと言う。今日の午後でも明日の早朝でも買えるのに、それができないかのようだ。このような連中のために毎日骨折って、弾を浴びている。決してこのことを忘れないぞ。

「いや、彼は去ったな、のっぽのガミガミ屋は」と一人の厚かましい声が森林官クニーブッシュに尋ねた。森林官が全く呆然として見上げると、小さな奴が彼の前に立っていた。気色の悪い風貌で、フクロウのような眼鏡の奥の丸い目と肉厚の唇であった。しかしニッカーボッカー[半ズボン]に短い毛皮のジャケット、スコットランド靴下と編み上げ短靴の立派な身なりであった。

「マイヤー、ここ裁判所に何の用があるのだ」と森林官は驚いて尋ねた。そして小さなかつての田畑検査官を検分しながら、羨望して言った、「いや、マイヤー、一体どうしたことだ。おまえに会うたびに、おまえは洒落た身なりになっている。我々のごときは、靴底を代える金をどう工面したものか、もはやお手上げというのに」。

「そうだな」とマイヤーはにやりと笑った、「ちょっとの頭だよ、頭」。

彼は平手で自分の洋梨風頭蓋を叩いて、それがパシャと鳴った。「今日日、金は通りに落ちている。クニーブッシュ、入用かい。数百万マルク、数十億マルク、喜んで助けてやるぞ」。

「いや、金か、...」と森林官は嘆いた、「助けては貰いたいのだが。今日が私の期日なのだ。ボイマーとの私の件は話したろう、...」。

「まあ、私はすべて承知している」と小さな黒人マイヤーは言って、自分の指輪の煌めく手を森林官の肩に置いた。「だからこちらに来たんだよ。公示が張り出されるのを見たのだ。すでに昨日ホールでな。クニーブッシュに対する刑事事件、ノイローエの私設森林官、十八号室、...。私は思った、自分は何も予定はない、昔の仲間の味方ができるぞ、と。...お主が一体どんなに有能な役人であるか、陳述できるかもしれない、と...」。

「おまえは見上げた奴だ、マイヤー」と森林官は感動して言った、「おまえが私のため

に裁判所に来るなんて、思っても見なかった」。

「一体どうなっているのだ、クニーブッシュ」と小マイヤーは自己満足して言った、「しかし、勿論、お主は騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツ殿のような偉い人を証人として連れて来ているから、今まで無視していた」。

「しかし隊長は私を置き去りにしたのだ、マイヤー」と森林官は嘆いた、「隊長は時間がなく、一瞬も待てないのだ。私の件がすぐに始まらないからと言ってな。今この時間車を買いたくて仕方ないのだ」。

「ほら見ろ、金は通りに落ちているだろう、クニーブッシュ」と小マイヤーは言って、目を細めた、「今時騎兵隊長でさえ金を持っている、車を買う金を、...」。

「彼が金を持っているかどうか、知らない、信じてもない」と森林官は再び言った、「あるいはあの連中がベルリンで彼にその金を渡したんだろう、それはあり得ることで、...」。

「ベルリンの何の連中だ」。

「いや、あの連中、 — おまえもまだ覚えているだろう。当時の少尉と一緒に、おまえが松林を燃やしてしまったときののだ」。

「いや、その件か」。マイヤーは軽蔑してにやりと笑った。「すべて戯言だ、クニーブッシュ、誰もそれに対してはマルク紙幣を出さない」。

「それはない、マイヤー、きっと明日以降分かることだろう。しかし私は何も言わんぞ。私は誓ったしな、...何も言わん」。

「言わんでいい、クニーブッシュ、一言も」とマイヤーは叫んだ、「それでもな、私はひどくドイツ愛国者であって、明日よりは今日のうちにもアカの奴等に反撃行軍するとお主なら知っているだろうに。その点はお主の感心できない点だ、...」。

「私は神聖に誓ったのだ」と森林官は言い張った、「怒らないでくれ、マイヤー」。

「分かった、クニーブッシュ、何で私が立腹しよう」とマイヤーは笑った、「それどころか今からお主を昼飯に招待しよう。分かっているだろう、以前と同様だ、ラインワインに、シャンパン、トルコの血だ、...行こう、老いた少年」。

そして彼は森林官と腕を組んで、彼を連れて行こうとした。

「でもマイヤー」と森林官は全く驚いて叫んだ、「私の件が終わっていないのだ、...」。

「行こう、行こう」とマイヤーは主張した、「お主の件か。お主の件は静かに一杯聞きし召したらいい、まさにお主の件でな」。彼は森林官を勝ち誇って見つめた、「いや、老いて、とろいな。びっくりしていやがる。私がお主のように友達付き合いが悪かったら、私は黙っていて、この黒ガラスは放置しておこうと考えることだろう。しかし私は違う、行こう、クニーブッシュ、一杯飲むぞ」。

「でもマイヤー、...」。

「お主の件は中止、クニーブッシュ、行方不明。お主の件は空中分解したのだ、クニーブッシュ。お主の件はお仕舞い」。

「何だと、マイヤー」、森林官はほとんど嗚咽した。

「今朝九時にボイマーは逃亡した、クニーブッシュ、...」。

「マイヤー、マイヤー君、君は世界で最も良い奴だ。おまえは私の唯一の友だ」。大粒の涙が森林官の両頬を伝って、髭の中に落ちた。彼ははなはだ嗚咽して、マイヤーは彼の

背中を力強く叩いた。「本当に本当なのか、マイヤー」。

「私は自分の両目で見たのだ、クニブッシュ。ボイマー、これはずる賢い犬だ。いつも瀕死の病人の振りをして、看護人達は彼を救命車で期日に運ぼうとした。彼らが担架で病院から連れ出したとき、――ベルトで彼を締めしておくことさえしていないで、哀れなこの男はそれほど病気の振りをしていて、――それで脱兎の如くだ、看護人達は担架を持って追いかけた、彼は病院の庭へ逃げた。叫び声、騒ぎ声、――私もずっと一緒に騒いだ、ずっと間違った方向へ騒いだ。こう考えたからだ、私の友クニブッシュには、彼が捕まらない方がいい、と、...」。

「マイヤー」。

「勿論注文通りだったのだ。ボイマーは病院で見舞客があつて、云々なのだ。一台の車がすでに反対側で待っていた、――それで雲雀よ、飛んで行け、さらば」。

「マイヤー、おおきに、おまえのことは忘れない。おまえの望むことは何でも私に言えばいい」。

「何もお主には望まない。何も私には話さなくていい。ただ昼飯を私と一緒に食べてくれ」。

「何でも話すよ。――他の奴等は私を放置した。ただおまえだけが助けてくれた。何を知りたいかい」。

「何も知りたくはない。一揆のことで私に助言を求めたいときとか心配があつたら、その時言えばいい。しかしそれ以外は――構わん」。

マイヤーは話しを止めた。自惚れて、このチビ[チーズ三個の高さ]は、廷吏に言った、「いいか、一体何のお芝居をしているのだ。この老体をここに一時間以上お待たせしているが、問題の証人はずらかったと承知しているのだろう」。

「そうだが、貴殿」と廷吏は言った、「我々の許では迅速には行かないのだ。正式にはまだ期日は有効で、正式には一人の証人の逃亡は何もまだ報告されていない、...」。

「しかし承知しているのだろう」。

「とうに分かっている。裁判官達ももうまた出て行った」。

「それでは、お兄さんよ、聞いてくれ」と小マイヤーは言った、(そして森林官はこの小さな男が裁判所の役人とやり取りする様を全く魅了されて見ていた)、「では私の友も出て行って、少しばかり祝杯で喉を潤してもいいだろう、...」。

「構わないよ」と廷吏は言った、「私も仕事がなければ、一緒にお供したいところだ」。

「それでは仕事に励めば良い」とマイヤーは侯爵のように言って、彼の毛皮ジャケットのポケットからくしゃくしゃになった紙幣の球を取り出した。彼はそのボールから一枚を抜いて、それを廷吏の手に押し付けて、気取って言った、「弁当代[さようなら]、――じゃ行こう、クニブッシュ」。そしてクニブッシュと出掛けた。

クニブッシュは感激して、彼の友に従った。彼がこの世で本当に信頼できる唯一の人間であった。

「車をあなたは送り返さないつもり」とエーファ夫人は、夫婦で事務所から別荘へ上がって行くとき尋ねた。

車は農園中庭に止まっていて、運転手が煙草を吸いながらその横に立っていた。

騎兵隊長は一瞬躊躇った。自分の妻を見て、購入のことを告解するのは簡単ではなかった。果てしないお喋りとなることであろう。

「ここに車を　一　まずは二、三日止めておく」と一緒に出発しながら微笑して妻に言い添えた、「明後日に一切合切決まる、　一　我々にとってもな」。

「フィンガー」と騎兵隊長は運転手に向かって言った、「別荘まで車を進めてくれ。この車を次の数日、どこに止めておくか、まだ良く決めていない。　一　きっと見つかるだろう。貴方はまずは我々の許に住むのだ。従者が詳しく伝えよう」。

「分かりました、騎兵隊長殿」と運転手フィンガーは答えて、恵み深い夫人に対してドアを開けた。

フォン・ブラックヴィッツ夫人はこの輝かしい塗装の、柔らかな革の化け物を拒絶と不安と憤怒の混じった気持ちで眺めていた。「どうしてなのかわからない」と彼女は口ごもって、乗り込んだ。彼女は角に体を寄せず、いや、彼女は垂直に座っていた。クッションは寄りかかるよう、沈み込むように誘っていたけれども。

車は呻り、揺り籠のように穏やかに郎党の家々の間を進んだ。全員が、囚人達の退却故に、警察の捜査故に、外に出ていて、誰もが、車と、微笑している騎兵隊長と、眉間に一つの皺を寄せている垂直な姿勢の恵み深い夫人を見た。エーファ夫人は背中に、宮殿のすべての窓も見守っているという耐え難い感情を感じた。

こんな悪魔の代物に乗り込むのじゃなかったと彼女は憤慨して考えた。アヒムはまた馬鹿なことをした、両親は、私が彼に了解を与えていると考えることだろう。

別離の週の時間、シュトゥットマンとの交流が影響していた。フォン・ブラックヴィッツ夫人も変わっていた。以前は夫の性急な言動のたびにこう考えたものである。どうして言い繕ったらいいかしら、と。この頃はこう考える。私が了解を与えているなんて、誰にも思われたくない、と。

「車は気に入ったかい、エーファ」と騎兵隊長は微笑して尋ねた。

「アヒム、説明してくださらない」と彼女は熱くなって言った、「これはどういうことか、この車は、...」。

騎兵隊長は運転手の背中を一本の指で叩いた、「ここを真っ直ぐ、　一　そう前方右手の明るい家だ、...」。それから、「後にしよう。　一　気付いているだろうが、これはホルヒ社の車だ、穏やかな走りだろう。百キロでわずか二十リットルの燃費だ、いや三十かな、...。忘れてしまった。しかしまあ、構わない、...」。

車は別荘の近くでクラクションを鳴らして進んだ。

「ここを車寄せにしよう」と騎兵隊長は物思いに耽って言った。

「何ですって」とエーファ夫人は跳び上がった、「二、三日のことでしょう。車はほんの二、三日間借りたと思っていました」。

家からヴィオレットが駆けて来た。

「まあ、パパ、パパ、帰って来たの」。彼女は父親にすがった。彼は素早く車から出ることさえできなかった。「この車は買ったの。格好いい車。何と言うの。スピードはどれ

ほど出るの。パパも運転習ったの。私も座らせてよ、ママ、...」。

「ほら見ろ」と騎兵隊長は非難一杯に彼の妻に語った、「これが喜びというものだ。一 ヴィオレット、頼むから、フィンガー殿をフーベルトの許へ案内しろ。差し当たり、切妻の小さな客間を使って貰おう。一 車はひとまずここに止めておこう、一 頼む、エーファ」。

「それでは、アヒム」とエーファ夫人は言って、本当に興奮していた、「この一切はどういうことか説明してください、...」。彼女は椅子に腰を下ろして、彼を不機嫌に見つめた。

騎兵隊長は良心が咎めるにつれ、それだけ一層愛想良くなった。彼は、自分の周りでは興奮した言葉を、単なる早口の言葉さえも、辛抱できない質であったが、今や自分の妻の不機嫌を目の当たりにして、穏やかさそのものとなっていた。しかしまさにそれ故、エーファ夫人にとってこの事件はより由々しく見えた。

「一体どういうことかって」と彼は微笑して尋ねた、「ちなみに我々はまだようこそ今日はとも言ってなかったな。事務所ではおまえを永遠にあの学校教師が見つめていた」。

「フォン・シュトゥットマンさんのこと。そうね、あの人は私をよく御覧になっている。不作法な人ではないわ。それに叫ばないし、...」。エーファ夫人の目が危険に輝いた。

騎兵隊長は、今この時は再会した夫婦の懇ろな挨拶を主張しない方が無難と考えた。「私も今では全然叫ばないぞ」と彼は微笑して言った、「叫ばなくなってもう数週間になる。そもそも申し分なく休養した、...」。

「どうしてこんなに突然帰って来たの」。

「いや、エーファ」と騎兵隊長は言った、「ここでおまえの邪魔になるとは思っていなかったし。突然ともかく十月一日は重要な日であると思い付いたのだ。ひょっとしたら「ここで私を必要としているかもしれないと思ってな」。

これはとても愛想良く、とても謙虚に聞こえた。しかしまさにそれ故に夫人には気に入らなかった。

「何にも知らせずに、...」とエーファ夫人は言った、「突然この十月一日を思い付いたの」。

「いや、何と言うか」と彼は言って、少しばかり苛立った、「私は書くのは苦手だったろう。それにちょっと苛つくことがあってな。...おまえも知っているだろうが、シュトゥットマンを騙したあのフォン・ベルゲン男爵、これが私をもペテンにかけてな。一 大した額ではない、数マルクだ。しかしそれで逃げた。それで衛生顧問官殿ははなはだそれに激して、...」

「それで十月一日を思い出したのね、納得」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は素っ気なく言った。

騎兵隊長は憤然とした仕草をした。

彼女は速やかに立ち上がって、彼の上着の折り返しの所を掴んで、彼を穏やかに揺さぶった。「アヒム、アヒム」と彼女は悲しげに叫んだ、「何か自分をごまかそうと思えばいなければいいのだけど。もう何年も経験して来たことよ。いつも私は考えたわ。今度こそあの人は学習した、今度こそ変わると。一 永遠に、永遠に同じことだわ」。

「私が自分をごまかしているかね」と彼はうんざりして尋ねた、「エーファ、頼む。私

の上着を離してくれ。アイロンをかけたばかりだ」。

「御免、...何をごまかしているかって。いい、アヒム、あなたは単に向こうから送り返されたのよ、何か阿呆なこと、思慮の足りないことを仕出かしたせいで。私にそれを白状することが辛いから、それにこちらへ列車で帰る途中、十月一日は請負の満期と思い付いたから、— だから私と自分とに煙幕を張っているのよ、...」。

「そう思うのかい」と彼は侮辱されて言った、「じゃ、構わん。私は向こうから送り返されて、ここに戻って来た。それとも私はここで邪魔か」。

「でも、アヒム、そうじゃないのだったら、一言言えばいいでしょう。あなたは自分の助けのことをどう考えているの。金を稼ぎ出すつもりなの。何か計画があるの。私の父の条件は、まずはあなたの長目の不在であると承知しているでしょう。それなのに何の通知もなく戻って来て、— 両親への説得の準備すらできていないのよ」。

「私の義父の感情は勿論考えていなかった。単純におまえが喜ぶであろうと思っていたのだ、...」。

「でもアヒム」と彼女は絶望して叫んだ、「子供のようなことを言わないで。何を喜ぶのよ。私どもは新婚ほやほやじゃないのだから、あなたを見さえすれば、顔を輝かせるなんて」。

「そうだな、実際、顔を輝かせていない」。

「ここでは請負の戦をしているのよ。請負が、私どもに若干の収入を確保してくれる唯一のものなの、長年慣れているように。請負を失ったら何をしたらいいの。私は何も学んでいないし、何もできない、— それにあなたは、...」。

「私も勿論何もできない」と騎兵隊長は辛辣に言った、「エーファ、一体どうしたのだ。完全に変わってしまった。私は若干戻るのが早すぎたかもしれない。ひょっとしたら無分別だったかもしれない。しかしだ、それで私にこう言いたくなるのか、私は何も学ばなかった、何もできない、と」。

「あなたは玄関前の車を忘れていますよ、アヒム」と彼女は叫んだ、「その日まで私どもは金がないと分かっているでしょう。でも玄関前には新品ピカピカの車があります。きっと一万金マルク要したものでしょう、...」。

「一万七千、エーファ、一万七千だ」。

「いいでしょう、一万七千。私は一万金マルクであろうが、一万七千金マルクであろうが、全くどうでもいいと言いたい気分なのです。私どもはそのどちらも支払えません。それで車はどうしたのです、アヒム」。

「車に関しては、すべて問題ない、エーファ」と騎兵隊長は釈明した。

最悪の危機の切迫が彼にまた落ち着きを与えていた。再び一騒動起こしたくなかった。再び不快な事柄を耳にしたくなかった。自分には自分の望み通りにする権利がある。自分の妻を二十年間自分の意志に従わせて来た夫は、妻が何故もはや自分の望むようにしないのか分かってほしいであろう。二十年間沈黙し、微笑し、許容し、辛抱して来た妻は、妻が辛抱しなくなり、二十一年目に話し、訴え、告訴し、正当化を望むようになると、夫の目には反逆児に映ずる。これは謀反人であり、謀反人に対してはどのような戦略も許される。二十年間辛抱した結果、残されている権利は、二十一年目も辛抱することであろう、...

かくて騎兵隊長にとって簡単なことになった。彼の敏捷な精神、彼の果てしない楽観主義は、物事を至上の薔薇色の光明に照らし出した。彼は、自分の妻を先の不当さに押し込むには、この自動車購入について嘘の説明をすることすら必要なかった。この自動車購入の経緯がいかなるものであるか言いさえすれば良かった。女性はこのような事柄については何も知らないからである。

「車に関しては、すべて問題ない、エーファ」と彼はそれ故言った、「私は本来これについて話すのを許されていない。しかし言っとくが、私はこの車をいわば上からの指示に従って購入したのだ」。

「上からの指示って、何のことです」。

「まあ、頼まれてな、誰か他の人のためだ。要するに軍当局のためだ」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は夫を詮索して見つめた。彼女の騙されることのない現実感覚、女性のこの買収されない武器は、ここには何かうさん臭いものがあると告げていた。

「軍当局のためですか」と彼女は物思いに耽って尋ねた、「では何故、軍当局自らが車を買わないのです」。

「我が親愛なる娘よ」と騎兵隊長は優越感を抱いて、説明した、「軍は、今日千もの事柄で束縛を受けている。その金を認めようとしないベルリンのお喋りの店によって。ヴェルサイユ条約によって。監視委員会によって。百ものスパイによって、な。残念ながら、許可されないと思われることは、内密にしなければならないのだ」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は夫を鋭く見つめた、「それでは車は軍当局によって支払われたのですか」と彼女は尋ねた。

騎兵隊長は「そうだ」と答えたかったであろう。しかし十月二日の五千金マルクの支払いが条件とされていることを承知していた。それでも彼は若干果敢なことを言った。「そうではない」と彼は言った、「しかし金は後で貰うことになるう」。

「そうなんですか」と彼女は言った、「軍は内密で行わなければならないのであれば、多分文書での取り決めもないのでしょうか」。

騎兵隊長は万事に、つまり自分の嘘にも、すぐ飽き飽きすることが彼の悪い点であった。万事が退屈で、面倒くさい。「私は公務の命令を得ている」と彼は苛立って言った、「私は、有り難や、偉い将校で、上司に言われたことは無分別に行ってしまうのだ」。

「でもあなたは将校ではありませんよ、アヒム」と彼女は絶望して叫んだ、「あなたは私人です。私人として車を購入しているのであれば、すべての私有財産をそれに当てることになります」。

「いいかい、エーファ」と騎兵隊長は語った。この追求に最終的に終止符を打つ決意であった。「本来これについて話すことは許されていない。しかしおまえにはすべてを話そう。十月一日、明後日、現在の政府は倒される。―― 帝国国防軍と他の軍事的同志によってな。万事準備されている。私は、十月一日朝六時、オスターデに来よう公務の命令を受けている。―― 一台の自動車でだ、この自動車でだ」。

「結構なことでしょう」と彼女は言った、「別な政府になるのなら。ますます深みにはまって行くこの難儀はなくなりましょう。結構でしょうとも」。一瞬彼女はそのように座っていたが、こう言った、「でも、...」。

「いや、止めろ、エーファ」と彼は決然と言った、『でも』はいい、何のことか分かったろう。この件は終わり」。

「それでフォン・シュトゥットマンさんはどうなの」と彼女は突然訊いた、「彼も将校ですよ。あの人は何も知らないの」。

「私には分からん」と騎兵隊長はぎこちなく言った、「上司達はどのような原則に基づいて要請したのか、私は知らん」。

「あの人はきっと何も知らないわ」と彼女は思案した。「それで私の父は。この郡で最も裕福な一人よ。父も要請されていないのかしら」。

「おまえの父上殿について話しがあつた」と騎兵隊長は辛辣に報じた、「残念ながら不興を買っている。また全く抜け目ないことを言ったのであろう。成功するのを見届けないと、一緒に行動しないのだ」。

「父は慎重なのよ」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は思慮、熟慮した。そして突然一つの考えが閃いた、「その一揆が失敗したら、その場合どうなるの。誰がこの車を支払うの」。

「失敗はしない」。

「でも失敗する可能性はあるでしょう」と彼女は言い張った、「カップ一揆も失敗したし。ねえ、一万七千マルクなのよ」。

「失敗はしない」。

「可能性はあるでしょう。破産してしまうわね」。

「そのときは車を返すことにしよう」。

「接収された場合は、あるいは破壊されたら、一万七千マルクよ」。

「私が一台車を買ったら」と騎兵隊長は侮辱を感じて言った、「絶えず一万七千マルクと言っている。しかしおまえの親愛なる父上が我々に途方もない額を、ただ我々を破産させる額を要求しても、おまえはこう言っている。『私どもは絶対支払わなければなりません』と」。

「でもアヒム、請負は払わなければならないでしょう。車はなくても良いのよ」。

「公務で命令されたのだ」と彼はラバのように頑固であった。

「私はこのすべて合点が行かない」と彼女は詮索した。「あなたはまず丁度療養所から戻って来た。ただ兎狩りだけを考えていた。それなのに突然、全く突然一揆と自動車購入について話している、...」。

彼女は彼を熟慮して見つめていた。再三彼女の本能が警告していた。何かがおかしい、と。

彼はこの視線を受けて赤くなった。素早く彼は背を屈めて、煙草箱から一本取りだした。それに火を点けながら、彼は言った、「済まん、それについておまえは何も知らんだらう。この件は長く準備されていて、すでに私が旅立つ前から、私は承知していた」。

「でもアヒム」と彼女は頼んだ、「そんなこと今頃言っても。だったら私に是非とも話しておくべきだったのよ」。

「黙っているようにとの責務があつたのだ」。

「そうは思わないわ」と彼女は叫んだ、「この話し全体突然生じている。あなたが枢密顧問官シュレックと上手く行っていたら、あなたはまだあそこにおいて、兎を撃っていて、

一揆や自動車購入、その他一切問題とならなかった筈よ」。

「私の話しが信じられないとか」と騎兵隊長は脅していった、「つまり私は嘘つきだとか、二度と聞きたくないぞ。 — ちなみに私が言っていることは、おまえに証明できることなんだ。森林官に尋ねてみな。ノイローエの男達は皆、ただ突撃命令を待っているのではないですか、と。ヴィオレットに訊いてみな。かなりの量の武器が私の父上の森に隠されているというのは本当なの、と」。

「ヴィオレットもそのことについて知っているのですか」と彼女は叫んだ、致命的に傷付けられていた。「これであなた達は信頼があると言っているのですか。家族とはこんなものなのですか。私はここであくせく働いて、父親に遜って、計算し、心配し、すべてに耐え、あなた達の愚かさを言い繕ってきて、 — そのあなた達が私には内緒の事をしている。あなた達は私の背後で陰謀をし、借金をし、すべてを危険にさらし、生存を危うくしている。なのに私には何も知らされない」。

「エーファ、お願いだ」と彼は叫んだ、自分の言葉の効果にびっくりしていた。彼は彼女に手を差し出した。

彼女は彼をキラキラした目で見つめた、「いえ、友のあなた」と彼女は怒って、叫んだ、「これではあんまりです。クニブッシュ、白髪のお喋り屋、ヴィオレット、未成年の未熟な娘、二人はあなたとぐるで、 — でも私に対してはあなたは沈黙の責務を言い出す。私は何も知るのを許されない。この二人に対してあなたが恵んでいる信頼に私は値しない、...」。

「お願いだ、エーファ」、彼は懇願して叫んだ、「聞いてくれ、...」。

「結構です」と彼女は怒った、「何も言わないでください。あなたの告白は結構です。後でどうぞ。結婚生活の間、ずっとこうでした。ほとんど疲れしました。もう我慢なりません。分かるでしょう」と彼女は怒って叫び、地団駄踏んだ、「もう我慢できない。百度も聞いてきました。許しへの願い、気を引き締めるという誓い、愛らしい言葉を、 — いや、結構です」。

彼女はドアへ向かった。

「エーファ」と彼は言って、すぐに彼女の後を追った、「おまえが興奮するのが分からない」。彼は自分と戦った。それから重い決心をして言った。「仕方ない、 — 私はこの車を即座にフランクフルトに送り返すよ」。

「車のことなんて」と彼女は軽蔑して叫んだ、「車が私に何の関係があります」。

「しかしおまえがたった今自ら言ったろう。冷静に考えてくれ、エーファ」。

「何について話しているのかさえ分かっていないのですね。車について話してはいけません。信頼について話しているのです。二十年来何か全く自明なことのようによろしくなさっている信頼、そして私には寄せてくださらぬ信頼について、...」。

「そうか、エーファ」と彼は言った、「では、おまえが私に対し望んでいることをはっきりと言ってくれ。もう釈明したろう、私はこの車をすぐフランクフルトに送り返す用意がある、とな。本来は公務の指示なのだが、...これをどう正当化したらいいのか分からん、...」。

彼はまた混乱した、また彼は気弱になった。

彼女は彼を冷静な意地悪な目で見つめた。突然この一分のうちに、あるがままの夫を、

その側にほとんど四半世紀暮らしてきた夫を見た。気弱で、何の支点もなく、自制できず、馬鹿げていて、どんな影響をも受けやすく、お喋り屋の夫。...この人は必ずしもこんなではなかった、と彼女の中で声がした。いや、この人は別な風になってしまった。でも昔と今では時代が違うのだ。この人は運が良かった。人生は微笑んでくれた。何の困難もなかった。ただ良い面だけを見せることがとても簡単だったのだ。戦争でさえまだそうだった。彼には上司がいて、上司がどうすべきか彼に教えていた。公務規律であった。一 彼を支えてくれていたものは、制服とそれに付随する諸々であった。一 彼は制服を脱ぐと、崩れ落ちた。彼は何も自分の裡に有しない、何も、何の核も、何も抵抗となるものを、信仰も、目標も有していないと分かった。一 導の星がないと彼は混迷の時代、すぐに迷ってしまう、...

しかしこうしたこと一切が閃光のように彼女の頭に去来しているとき、馴染みの顔、彼女が他のどの人間にも増して頻繁に見つめてきたこの顔を眺めていると、ある声が湧いて来た。微かな、厳かな、告訴するような声であった、「汝の作品だ、汝の子供だ、汝の罪だ」。

自らをすべて夫に捧げ、夫からすべてを奪い、すべてを許し、すべてを耐えてきたすべての女性が、一 いつかこの時を体験する。自分達の作品が自分達に反抗する。被造物が創造主に抗するのである。穏やかな許容、善意が罪となる。

彼女は彼が更に話すのを聞いていた。しかし彼女はほとんどその言葉に注意していなかった。彼女はその唇が開き、閉じるのを見た。彼女は彼の顔の線、皺があちこち動くのを見た。その顔はかつて、彼女が初めて覗き込んだとき、滑らかなものであった。彼女の側で、彼女と共に、彼女を通じて、その顔は現に今ある顔となった。

彼の声が一層甲高く彼女の耳に響いた。彼女は再び、彼の言うことを理解した。

「おまえはいつも信頼と言う」と彼は非難一杯に釈明した、「しかし私は十分信頼を示してきたろう。何週間も前からおまえをここに一人っきりにした。おまえに荘園全体を任せただ。結局私は請負人であるから、...」。

突然彼女は微笑した、「いや、そう、あなたは請負人よ、アヒム」と彼女は小声で嘲った、「あなたは御主人。そしてあなたは哀れな弱い妻を全く一人っきりにさせていた。...差し当たりこの件についてはお仕舞いにしましょう。車はまだここに置いていても構いません。すべて熟慮しましょう。これらの事柄をもっと徹底的にフォン・シュトゥットマンさんと話してみることにしましょう。ひょっとしたら父上の意向も打診してみようかしら、...」。

またしても間違い、再三間違ってしまう。夫人がより穏やかになると、彼はより頑固になる。

「私は全然」と彼はすでに苛立って言った、「シュトゥットマンがこれらの事柄を知ることが望まない。彼が要請を受けていないのであれば、きっとそれには理由があろう。それにおまえの父上に関しては、...」。

「分かったわ」と彼女は譲歩した、「父は放っておきましょう。でもフォン・シュトゥットマンさんには知って頂かないと。あの人は、私どもの金銭関係について見通しを持っている唯一の方です。ひょっとしたら車を支払う金があるかどうか教えてくれましょう、...」。

「分かってないな、エーファ」と彼は怒って言った、「私はシュトゥットマンを私の方針の鑑定人とするには反対だ。彼は私の子守娘ではない」。

「あの人に尋ねることは必要です」と彼女は固執した、「一揆が失敗したら、...」。

「いいか」と騎兵隊長は怒って叫んだ、「この件についてのシュトゥットマンの言葉をおまえに禁ずる。それは禁止だ」。

「何の権利があって、私に禁止を宣言するのです。あなたが正しいと思っているからといって、何故私がそうしなければならないのです。だってあなたのすることはすべて、すべて間違いでしょう。私はフォン・シュトゥットマンさんときっと話すことにします、...」。

「おまえはおまえの友シュトゥットマンのことになると頑固だな、...」と彼は邪推して言った。

「あの人はおまえのお友達ではないですか」。

「彼は知ったか振りの、お天狗だ。永遠の子守娘」と彼は怒って叫んだ、「おまえが彼とこの件について話したら、即刻彼を叩き出すぞ」。彼は全く強張っていた。彼は叫んだ、「ここでは誰が主人か、見てみようじゃないか」。

長いこと、長いこと彼女は彼を静かな青白い表情で見つめていた。再び、彼はこの視線の下で自信がなくなった。「冷静になってくれ、エーファ」と彼は頼んだ、「私の言う通りだと分かるだろう」。

彼女からは一言もなかった。それから突然彼女は素早く振り向いて、行きながら言った。「分かったわ、あなた。シュトゥットマンには何も言いません。そもそももう何も話しません」。

彼が返事をする前に、彼は一人残された。

彼は不満げに周りを見た。この長い諍いの後、彼の中に空しさの思い、何か満たされなかったものが残っていた。彼は自分の意志を貫いた。しかし今回これは嬉しくなかった。彼は忘れたかった。つまらぬことだ、果てしない言葉のお喋り、空騒ぎ、何故なのか。自分が自動車を一台買ったからといって。自分が二万金マルク以上の請負料を支払うことができるのであれば、車を一台買っても良からう。車を一台所有している百姓達だっている。ビルンバウムの一人の百姓は、車一台と耕運機一台を所有している。一人の百姓は納屋に二十五台のミシンを所有している、単に自分の金を投資するためだ。有形資産なのだ。

自分が車を購入したのは遊びのためですらない。リュッケルト少佐が自分に命じなければ、思いもしなかったであろう。自分は立派な事のためにそうしたのだ。しかし妻は分かってくれない。分かろうともしない。妻は化粧台の引き出しに、少なくとも長さ一メートル、深さ四十センチだが、靴下を一杯ため込んでいる。しかしいつでも新しい靴下を購入している。そのためにはいつだって金があるのだ。自分は今何週もほとんど一ペニヒも使っていない。 — ただ弾を若干、兎のために使用した。それに日々のワイン、食事のときに飲んできた。 — しかし自分が初めて支出すると、妻は叫び声を上げる。

小声で、メロディー的に玄関前で車が呼んだ。彼の車、彼の輝かしい塗装されたホルヒ[社製]。気散じを喜んで騎兵隊長は窓から頭を出した。彼の娘ヴィオレットがハンドル席に座っていて、クラクションの押しボタンで遊んでいた。「ヴァイオ、止してくれ」と彼は叫んだ、「馬がびっくりするぞ」。

「この車格好いいわ、パパ。話しが分かるじゃない。これはこの郡全体で最も素敵な車

よ」。

「結構な値がするのだ」と騎兵隊長は、頭を上階へひねりながら、囁いた。

ヴァイオは笑いながら目を閉じた、「心配いらないわ、パパ。ママは農園中庭へ出掛けの。きっとまた事務所よ」。

「事務所か、そうか」と騎兵隊長は立腹した。

「幾らしたの、パパ」とヴァイオは再び尋ねた。

「恐ろしい、一十七」。

「千七百マルクなの、一 このすごい車にしては大した額には思えない」。

「そんな、ヴァイオ、一万七千だ」。

「でもパパ、それで郡で一番素敵な車を得ているのよ」。

「だろう、私もそう思う。何か買うときには、やはり何かいかにするものを買うべきだな」。

「ママは多分全面的に賛成ではないのでしょうか」。

「まだ全面的にはではないな。しかし一度これに乗ってドライブしてみたら、ママも別な顔になると思うぞ」。

「ねえ、パパ、...」。

「何だ」。

「いつこれに乗せて貰えるの。今日のうちにも」。

いや、この二人の子供はすぐに陽気になっていた。子守娘達は不在で、事務所であった。

「私の考えではね、パパ。素早く森をこの車で行ったら、どうかしら。警察が囚人達を追いかけられているでしょう。ひょっとしたらその人らを捕まえられるかも。とてもこの車は静かで、素早いから。それからすぐにビルンバウムへ行って、今日はと言えるかも。エーゴン叔父さんと従兄弟達は羨望で狂うわよ」。

「それは分かん」と騎兵隊長は憂慮して言った、「ママもひょっとして同乗するかな」。

「いや、ママは、ママはむしろ事務所の方がいいのよ」。

「そうか、それで運転手は今何をしている」。

「台所で食事よ。でもすぐ終わるでしょう。呼びましょうか」。

「分かった。一 いいか、ヴァイオ。今日駅で誰に会ったか当てられるかな」。

「誰なの、パパ。何故わざわざ当てるの。郡の人全部が可能性あるんだから。エーゴン叔父さん」。

「何を言う。そんな者は当ててみろとは言わない。一 いや、我らの少尉だ」。

「誰」。ヴィオレットは深紅になった。彼女は頭を垂れた。混乱して彼女はクラクションのボタンを押して、車が音高く喚いた。

「止めてくれ、騒音は、ヴァイオ。一 覚えているだろう、少尉だ、ヴィオレット。当時とても無愛想であった、...」。囁き声で、「武器を隠した、...」。

「あら、あの人」とヴィオレットは囁いた、相変わらず頭を垂れていて、彼女はハンドルをいじっていた。「誰か知人のことかと思っていた、...」。

「違う、以前の武骨者だ。まだ覚えているだろう。『若いレディーの前ではこのような事柄は話しません』と」。騎兵隊長は笑った。しかしすぐにまた真剣になった。「ヴァイオ、まともに評価すると、彼はかなり大物の器であるように見える。彼はまだ若い、とても有能だ」。

全くの小声で、「そうなの、パパ」。

「私が車を買ったのは、元々は彼のせいなのだ」。全く小声で、とても秘密めかして、「ヴィオレット、奴等は大芝居を計画している、 — そしておまえのパパも加わるのだ、...」。

騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツがこの秘密をぶちまけるのは、十二時間のうち、これで三回目であった。それ故相変わらずこれは楽しいことであった。

「アカに対してなの、パパ」。

「政府が倒されるのだ、我が子よ」（そしてとても厳かに）「明後日、十月一日、私はそのためにこの車でオスターデへ行くのだ」。

「少尉もなの」。

「どの少尉だ。ああ、あの少尉か。勿論彼も一緒だ」。

「戦になるの、パパ」。

「多分な、大いにあり得る。 — いや、ヴィオレット、心配するな。将校の娘だろう。私は世界大戦を凌いできた。このような些細な路上戦は何ほどのものでもない」。

「そうね、パパ、...」。

「だから、頭を上げろ、ヴィオレット。虎穴に入らずんば、虎兇を得ずだ。 — そろそろ運転手は食事が終わるだろう。呼んで来なさい。全く暗くならないうちに、戻って来ることにしよう」。

彼は自分の娘が車から下り、ゆっくりと、頭を垂らして、憂わしげに家の中へ入るのを見た。娘は自分を本当に愛していると彼は誇らしく思った。戦になるだろうと聞いて、何と彼女が縮み上がったことか。しかし彼女は見事に気丈にしている。

騎兵隊長がこのことを考えたのは娘の愛を喜んだからではなく、単に、このような愛を自分の妻に対して、考えの中であれ、指摘するためであった。妻は夫が赴くことになる危険を一瞬も考えていなかったぞ、単に自動車購入、経済上の困難、請負支払い、信頼の問題のみを考えていた。

そして騎兵隊長が、まだ父の価値を尊重している娘のこのような愛を誇りに思って、出発の準備をしているとき、ヴァイオは萎えたように小さな玄関の間に立っていた。ただ一つの考えを心に抱いていた。明後日だ。再会していなかったのにあの人は戦死するかもしれない。明後日。

115

エーファ夫人とシュトゥットマンはより親密になる

エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人は夫との諍いの後、まず全く呆然として自分の部屋に上がって来た。泣かざるを得ないかのような気分であった。洗面台の上の鏡を彼女は覗いた。もはや全く若いとは言えないが、しかしまだ立派に見える女性、少しばかり浮き出たバセドー病の目は、今や凝固した表情であった。すべての生命が消え失せたかのようであった。寒さで震え、胸の中の心は石のように死んでいた。...

それから彼女は鏡の前に立って、自分を眺めているということを忘れた。...

どこに価値[大切なもの]があるのかと再び彼女の中で問いが生じた。何かあった筈だわ。

それがためにあの人を愛することになったものが。私は何を見ていたのだろうか。かくも長い間。

果てしない数の映像が、二人が結婚した当時の思い出が、通り過ぎて行った。若い少尉。中尉。庭園からの呼び声。ヴィオレットが生まれたときの彼の魅力的で馬鹿げた振る舞い。将校宴会からの最初の酔っ払った帰宅。小さな駐屯地での夏の祝典。 — 客人の蝟集している公園で、全く突然愛の欲求に圧倒されて、二人の夫婦は職と評判をふいにしかねないほど惚れていた。 — 夫はすでに三十歳のとき、白髪が生じ始めていた、 — これは彼女一人が知っている秘密であった。アルムガルト・フォン・ブルクハルトとの夫の情事。ポルヒアルトの特選食品の籠を彼女に持参して来たこと。そして彼女は突然、彼女がこれまでかくも泣いて来たことが、終わってしまったと気付いた。

千もの思い出が、素早く展開しながら、嬉しいこと悲しいこと、すべて色褪せた不吉な灰色の中に浮かんだ。愛が消えると、突然その人間の目が開く。...この人間は以前の恋人を、他の人々が見るように見る。皆と同じような一人の人間、一ダースの人間の中の一人、格別の長所もない。...そしてこの人間はそれからこの平均的人間を主婦の無慈悲な目で見ると途方に暮れた質問、何故なの、どこに価値があるの、が生ずる。何故私はかくも多く忍耐し、修復し、許容して来たのか。 — 何が夫の中に隠されていて、私がかくも犠牲を捧げるに至っているのか。

答えはない、 — 愛のみが生命と息吹を与えていた人影は、愛がなくなれば生気がなくなる。一人の奇矯な形姿であり、言い抜け、妙な癖、不作法の塊、 — 耐え難いマリオネットで、その操り糸はすべて見えている。

エーファ夫人は階段で靴の物音を耳にした。目覚めながら彼女はすくんだ。彼女は二人の男達の会話の声を聞いた。多分フーベルトが、運転手と一緒に切妻の部屋から下へ向かう所だ。運転手と高価な車。一瞬エーファは、自分の父親の娘、つまり策謀的な抜け目ない者になろうかと思いついた。...

夫を農園経営に取りかからせようという考えが浮かんだ。夫は主人然としたいのだから、夫は、私と — それにシュトゥットマンがいなければどうということになるか分かるだろう。車のためのお金、請負料。...シュトゥットマンに言おう、明日は出掛けなくていい、金は用意しなくてもいい、ジャガイモ収穫のための郎党手配も何も準備しなくていい、と。

— 一週間したら夫は自分がにっちもさっちも行かないと分かるだろう。私は、正しく振る舞うために、いつも夫の許しを請うてばかりいることにほとんど疲れた。夫が今取り憑かれているこの一揆は、これは実にただの冒険だ。父上は参加しない、シュトゥットマンも参加しない、私の弟も参加しない、 — 最後の時になって説得されてしまったのだ。その結果は分かるだろう。...

しかしこれは良くない。彼女は鏡の中の自分の顔を間近に見た。口許に、自分の好まない自己正当化の表情が窺われた。今や彼女の目が輝いた。しかしこの輝きも彼女は好まなかった。これは他人の不幸を喜ぶ炎の色だ。

駄目と彼女は決心した。これは駄目。私はこれを望まない。今そう思えるように本当に一切が終わったのであれば、私の仕掛けがなくても瓦解するだろう。私はこれからも出来

ることはすべてすることにしよう。もはや沢山はしない。もはや夢中にはしない。愛はない。単に義務をなす。でも私は昔からずっとできるだけ礼儀正しく振る舞って来た。これらの年月ずっと、私は何か深刻に非難されるべきことをしていない。彼女は今一度自分を吟味して見つめた。彼女の顔には緊張した表情があった。目の周りの肌は薄く見え、千もの小皺が寄って、干涸らびていた。彼女は決心して、クリーム瓶に手を入れ、顔に塗った。彼女は肌を軽く指先でマッサージしながら、考えた。まだ私はすべて終わりというわけではない。私は女盛りだ。食事をぞんざいにせず、もっと注意すれば、容易に十五ポンドか二十ポンド痩せられよう。ー するとまさに然るべき体型になる、...

五分後にエーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人は、事務所のシュトゥットマン氏の許に座っていた。勿論フォン・シュトゥットマンは、丁度荘園領主夫人のご機嫌はどんなものであるか知るよしもなかった。十五分のうちに、自分はもはや夫を愛していないと悟ったエーファ夫人は、どのような状況下でも礼儀正しく振る舞おうと決心していたが、しかし自分には希望も陽気さもある人生を容認していた。ー エーファ夫人は、フォン・シュトゥットマン氏が明後日請負支払いの金をどのように工面するつもりであるか、それについての長い、細かい講釈を聞かなければならなかった。

昔からの学校教師だ、と彼女は自分の中で考えた。しかし好感を抱かないわけではなかった。エーファ夫人はもはや若い娘ではなかった。彼女は男達を知っていた。(というのは一人の男を「正しく」知っていると、すべての男が分かるからである)。彼女は、呆気にとられるほど男達には直感がないと知っていた。男達の許では一人の女性は優しさを求めても死に絶えかねない。男達は長いこと丁寧に説明する、自分は新しいスーツが必要だと、何故新しいスーツが必要なのか、どの色がこの新しいスーツに必要であるか、と...すると突然男達は全く急に、少しばかり侮辱を感じてこう言い出す。「そもそも聞いているのかい。一体どうしたのだ。気分が悪いのか。変な顔をしているぞ」。

エーファ夫人は脚を組んでいた。スカートは当時まことに短いものであったが、彼女はシュトゥットマンの講釈の間、自分の脚を眺める機会があった。彼女は、自分の脚はまだ立派に見えると思った。いや、自分が痩せるとしたら、ヒップと背後辺りが痩せるのが望ましい。ー でもいつもまず痩せるところは、かくも望ましい箇所は外れてしまう。

このような考えは磁力があるように見えた。突然二人は誰ももはや話していないと気付いた。

「どういうことでしたの、フォン・シュトゥットマンさん」とエーファ夫人は尋ねて、笑った。「済みません、私は考えごとをしまして」。

彼女は自分の脚をできるだけスカートの下に隠した。

フォン・シュトゥットマン氏は許す用意が完全にあった。彼の考えも逸脱していたからである。彼は素早くまた講釈にかかった。かくて分かったのは、オーダー河畔のフランクフルトの町には、酔狂な人間がいて、明日すべての請負料を最良の紙幣で用立てる準備のある者がいる。条件は、ノイローエの荘園管理部が、十二月それと引き換えに、彼に千ツェントナーのライ麦を供する責務を負うことである、ということであった。

「でもその男の方は酔狂ですね」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は呆気にとられて叫んだ、「明日三千ツェントナーその金と引き換えに得られるでしょうに」。

自分も最初そう思いました、とフォン・シュトゥットマン氏は認めた。しかしこの件は

こうなのです。つまりこの男は、ちなみに裕福な魚商ですが、その三千ツェントナーの穀物を明日、あるいは一週間後にまたただの紙幣の金に替えることになるだけであろう、と。誰もが今日では紙幣の紙を避けます。金を価値が続くような商品に投資しようとし、それでこの男は穀物を思い付いたのでしょう。

「でも十二月には別の値になるとどうして分かるのです」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は叫んだ。

「勿論分かりません。期待し、信用し、それに投機しているのです。ベルリンではしばらく前に会議が開かれて、新しい通貨を造る話しが噂されています。結局永遠にマルクの下落のままでは立ち行かなくなります。ライ麦金とか黄金の金の論争があります。この男は多分十二月には新しい通貨になると思っているのでしょう」。

「それで私どもにとって何か変わりますか」。

「私の予想では何も変わりません。我々は単に千ツェントナー[50トン]のライ麦を供給すればすむことになりましょう」。

「ではそうしましょう」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は言った、「これ以上有利にはそもそもこの悪夢から脱出できないでしょう」。

「まず更にブラックヴィッツにも聞きましょうか」とシュトゥットマンは提案した。

「そうですね、貴方がそう思われるのでしたら。 — ただ、どうしてです。貴方には全権があるのですよ」。

女達は悪魔である。この瞬間には確かに脚のことは話題になかった。仕事、請負、通貨について話されていた。しかし、エーファ夫人が、夫に尋ねる必要性を疑問視したとき、新たに何か薄暗いもの、抑制されていたものが素っ気ない会話に入ってきた。あたかも、あけすけに言って、一人の瀕死の者について話している風に少しばかり響いた。

小声でフォン・シュトゥットマン氏は言った、「そうですね。ただ、貴方らお二人が、 — 十二月供給の責務を引き受けてください」。

「そうします、 — いつ」と彼女は分かっていた。いかなかった。

「十二月です。どんなことがあっても十二月には貴方らは供給しなければならないのです。千ツェントナーの穀物を。どのようなことがあっても、優にまだ二ヵ月あります」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は一本煙草を缶の蓋の上でトントン叩いた。眉間の間に小さな皺が寄っていた。そこで彼女は脚を快適な具合に組んだ。しかし彼女はそのことを考えていなかった。フォン・シュトゥットマン氏もその時それを見ていなかった。

「お分かり頂けますか、恵み深いご夫人」としばらく間を置いて、シュトゥットマンが説明した、「これはフォン・ブラックヴィッツ夫妻の個人的な責務となります。ノイローエ荘園管理部の責務ではありません。貴方らは千ツェントナーの穀物を供しなければなりません、 — どこにおられようと、存命であれば」。

またしても間があった、長い間であった。

それからフォン・ブラックヴィッツ夫人は動いた、彼女は活発に言った、「そう決定してください、フォン・シュトゥットマンさん。この危険があれ、そう決定してください」。彼女は目を閉じた。彼女は美しい、豊満な、白い夫人であった。彼女は覚悟した。彼女は猫のようであった。居心地の良い猫、鼠を追いかけている猫であった。彼女は微笑して言った。「私どもが十二月までに請負を失っても、私の父は私を見棄てないでしょう。その

ときは私が請負を引き受け、その千ツェントナーを供給しましょう、...」。

シュトゥットマンはぎこちなく座っていた。前代未聞の知らせが彼の耳に迫って来た。

「こうした女どもときたら。」

フォン・ブラックヴィッツ夫人は微笑した。彼女は例えばフォン・シュトゥットマン氏に対してではなく、暖炉と法律書架の間の何か想像上のものに対して微笑していた。彼女は言っていて、彼に手を差し出した。「貴方もそのときは私を見棄てないと思っています、フォン・シュトゥットマンさん」。

シュトゥットマンは手を呆然と見つめていた。それは豊かな、しかしとても白い女性の手で、少しばかり指輪が多すぎた。彼は全く、頭を一発殴られた気分であった。彼女は何と言ったのだ、あり得ない。そんなことを言うなんて。彼は驢馬の如くで、...

「驢馬ね」と彼女は深い、豊かな、温かい声で言った。一瞬その手が彼の唇に触れた。彼はその新鮮な柔らかさを感じ、香りを感じた。香水ばかりでなく、いや、何か生氣のあるもの、花盛りのも、いつも満たされたがっているものを感じた。彼は見上げ、全く赤くなつた。いや、彼は熟考しなければならぬ。難しい状況である。いずれにせよブラックヴィッツは長年の友である、...

彼は彼女の視線に出会った。それは優越的な嘲りと優しさの混在の中、彼に注がれていた、...

「親愛なる、恵み深い奥方、...」と彼は混乱して言った。

「ええ、そうですよ」と彼女は微笑した、「貴方にずっと伺おうと思っていたことがあります。貴方の名前[ファーストネーム]は本来何ですか」。

「私の名前ですか。いや、それは問題で、...私は元来それを使いません。つまエツェルと申します、...」。

「エツェル、エツェル。まさか」。

「その通りです」と彼は急いで説明した、「アツティラ、あるいはエツェルで、フン族の王です。モンゴル族を率いて、ヨーロッパに略奪、強殺に侵入したのです。およそ紀元四五〇年頃です。カタラウヌムの野での戦いです。『野蛮さが品位と真剣さ同様に備わっていた』と言われていました。しかし申しましたように、私はこれを使用しません。家系の伝統です」。

「いや、エツェルは全く考えられない。父は彼の雄鷲鳥をアツティラと名付けていました」と彼女は言った、「それで貴方の友人達は何と呼んでいたのです。ブラックヴィッツはいつもただシュトゥットマンと言っています」。

「他の友も皆同じです」と彼は溜め息を吐いた、「私は多分家族的付き合いに向いていないのでしよう」。彼は若干赤くなつた、「時々私は更に子守娘と呼ばれました。連隊ではお母ちゃんと呼ばれました」。

「シュトゥットマン、子守娘、お母ちゃん、...」。彼女は苛立って頭を振った、「貴方は本当に考えられない方ですね、フォン・シュトゥットマンさん、いや、私は他に当たらなければなりませんね、...」。

「いや、親愛なる、恵み深い奥方」とフォン・シュトゥットマン氏は夢中になって叫んだ、「本当にそう思っているのですか。私は退屈な奴で、銜学者で、四角四面の男、一それなのに、...」。

「お静かに」と彼女は警告し、頭を振った、「お待ちください。フォン・シュトゥットマンさん、お忘れにならないでください。私は差し当たりただ貴方のお名前を伺っただけです。...他は何もありません」。彼は言い止めた。彼女は手で頭を支え、微かに腕輪が鳴った。彼女は嘆息した。彼女は絶妙なあくびに取りかかった。彼女は完全に猫になって、身繕いをし、手足を伸ばし、何でもするが、ただすぐに呑み込もうと思っている雀だけは見ないのである。「それにまだあの車のことがあって、...」。

「どの車です」。彼はすぐにまた混乱した。彼女の飛躍は今日、冷静に考える男にとって、突然過ぎる。

彼女は指で窓の外を示した。しかし外には車はなかった。

それでも彼は理解した、「いや、あの車ですか。それがどうしました」。

彼女は今度は、冷たい、わざとらしい調子で言った、「彼が買ったのです」。

「本当ですか」。彼は熟慮した、「幾らですか」。

「一万七千」。

シュトゥットマンは絶望の身振りをした、「全く考えられない」と彼はそれから囁いた。

「月賦でも？」

「それでも」。

「お聞きください、フォン・シュトゥットマンさん」と彼女はより活発に、しかし相変わらず冷静な、少しばかり意地悪な調子で、言った、「貴方は明日どんなことがあっても、フランクフルトへ行き、請負料を調達してください。しかしそれ以上なさらないでください」。

「分かりました」。

「何と貴方に言われようとも、貴方は出発し、ただ調達するのです。了解ですか」。

「確かに」。

「貴方はフォン・ブラックヴィッツ殿に明日夕方その金を請負支払いのために渡してください。 — お分かりですか。フォン・ブラックヴィッツ殿が自らその金を私の父に渡すようになるのです。お分かりですか、...」。

「分かります」。

「ちょっと待ってください。ブラックヴィッツは明後日小さな旅を計画しています。でもそれは私どもに関係ありません。彼はその金を明日夕方に渡せましょう。お分かりですか」。

「すっかりは呑み込めませんが、しかし、...」。

「結構です、結構。貴方は言われたことだけを守って頂ければ、...フォン・ブラックヴィッツ殿が丁度の際に請負支払いの金を得ること、これで十分です。ひょっとして小さな領収証が必要でしょうかしら」。

「そうお望みでしたら」とフォン・シュトゥットマン氏は躊躇いがちに言った、「普通ブラックヴィッツと私の間では必要ないことで、...」。

「勿論普通は必要ありません。しかし今回は」と彼女は鋭く言った。彼女は立ち上がった。彼女は彼に手を差し出した。彼女は再びすっかりフォン・ノイローエの女主人となった。「それではさようなら。フォン・シュトゥットマンさん。多分貴方がフランクフルトから帰られた後、お目にかかれましょう。良い仕事を祈ります」。

「恐縮し、感謝致します」とシュトゥットマンは言った。彼は彼女を少しばかりがっかりして見送った。明確さが必要であろう、確実なことが相談されるべきであろう。しかし駄目だ。エツェルと手の接吻なんて。親密なことはなされようがない。

頭を振りながらシュトゥットマンは広告の原案にかかった。「求人、ジャガイモ掘りに関して、...」。

外では九月の風が吹いていた。風はすでに、枯れた葉を散らし、吹き飛ばし始めていた。

秋だ、冬が間近だとエーファ夫人の中で何かが語った。しかし彼女はより厳しく姿勢を正した。風が彼女の体に衣服を押し付け、彼女はその新鮮な涼しさを肌を感じた。彼女は風に向かって行った。いや、すべてのものにとって秋ではない。単に死ぬべく熟しているものにとってのみ秋だ。彼女はまだ若々しく感じた。彼女はその風に向かって行った。彼女は一つの実験を、一種の裁判を仕掛けた。彼女は運命に素人細工のちょっかいを出した。フォン・ブラックヴィッツ殿は請負料を支払うだろうか。然りか否か。それに掛かっている。

116

パーゲルは森で黒人マイヤーに出会う

ゆっくりと上機嫌でパーゲルは森に向かった。森の中に、警察官を追って、囚人達を捕まえに入って行った。フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長でも彼の気分を少しもはや害することはなかった。このような男は何という子供か。馬鹿げた、無思慮な子供だ。新品ピカピカの車に乗って、旅から戻って来たかと思うと、まずしたことは、若者の自分に主人面を見せることだった。若者の自分はこれを特に問題にしない。自分は森へ行きたいところだ。このような雇用主と一緒に同じ事務所に座っていることは趣味に合わない。それどころか森の方がもっと気持ち良い。

このような上司は何と巫山戯た変わり者か。いつでも指を上げて、車を指し示して、こう尋ねることができる一人の男に向かって上司風を吹かせる。「それで、一私の二千金マルクはどうなります、と」。

まさにそう言いたいわけではない。シュトゥットマンが、いつの日か、その金が入用になったら、その金を得られるよう配慮してくれるだろう。昔のことになったが、その当時は騎兵隊長にこう言ったものだった。「いやその端金は忘れましょう。その金は少しも欲しくありません」と。

その時騎兵隊長は赤くなって、とても興奮して、「信用で借りた金」とか仰せられたものだった。それから田舎で過ごすことになって、若干のことが変化して、手紙のやり取りがあった。今では金についてとても別様に考えている。月々わずかな、騎兵隊長によって恵み深く了承された（本来まだ少しも仕事を果たしていないが）、つまり情けない小遣い銭から、切手代、靴底代、下着や白い襟や煙草の代金を支払わなければならないからだ。今となつては時にわずかな分割払いでもして貰えたら、とても有り難く思える。しかし今そのことを仄めかしたら、騎兵隊長はまた赤くなって、興奮してこう叫ぶだろう。しかし、パーゲルよ、分かるだろう、私の経済事情はいかなるものか、知っているだろう、と。

それでも新品ピカピカの車が玄関前に止まっている。それでも私は愚かな若者のように

森へ送られる。まことに気障な変わり者だ。

パーゲルはこう考えながらますます深く森の中をぶらついて行った。警察官達はどの林班へ向かったのかさっぱり分からなかった。事務所でこのことが相談されたとき、彼は居合わせなかった。ただジャガイモ畑へ向かいさえすれば、きっと見つかるだろう。

そこで差し当たり彼は更に進んで、沈思した。全く情緒的になって満足していた。彼が騎兵隊長のことを怒っていたと思うのは実際間違いであろう。全くそんなことはない。人間はあるがままのものでしかない。馬鹿げた人間はペートルアに対する立派な引き立て背景となる。他の者どもが一層阿呆になるにつれ、この娘は一層くっきりと彼らから際立つ。深く結び付いた優しさの思いと共に、ヴォルフガングは彼のペーターのことを考えた。その思いはますます強まった。彼は自分がミンナから父親になるであろうと知らされて以来、それは憧れや欲求というよりも喜びであった。それは奇妙な感情であった。彼女が自分の許に来て良いと許可を出してくれるまで、忌々しい時間、優に三ヵ月、正確には九十四日であった。その間、彼は二人がすでに一緒に体験したこと、あれこれ生じたことを追想していた。結構なことであるが、また滑稽なことでもある。彼はペートルアと一緒に暮らしていたとき、本来余り彼女のことを考えなかった。すべては賭けが中心であった。それが今ノイローエに暮らしていると、主にそもそもおまるマダムに暮らしている按配である。体験と居場所とが一緒になっているという感情を抱く時が生活の中にいつか生ずるものであろうか。今汝は汝の全生涯の中で二度とないほど幸せであると感じる時があろうか。体験の瞬間である。後になってようやく、当時私は幸せであったと知るという話しではない。かつては幸せであったというのか。いや、そんな話しではない。

滑稽で危険なことである。パーゲルは物思いに耽って思わず知らず口笛を吹いた。一瞬彼は考えた。口笛を吹くことは森の中で囚人達の捕獲に良いことであろうか、と。口笛を聞いて逃げ出すだろうか、それとも彼に攻撃して来て、彼の金、服、ピストルを奪おうとするだろうか。震える垂れた両頬のマロフケの顔が一瞬浮かんだ。しかしそれから彼は反抗的に考えた。奴等は来ればいい。彼は自分のズボンのポケットのピストルの床尾を握り、より音高く口笛を吹いた。

その通り。ただいつも最愛の女性のことだけ考え、彼女を他のすべての者達と比較して、
一 それも彼女を臆して考えるのは、滑稽で危険なことである。パーゲルは再び自問した、自分が今ペーターについて抱いているイメージはそもそもまだ合致しているだろうか、と。これほど金色ではないだろう。彼女にも欠点があるに違いない。彼が探せば、多分何か見つかる。例えば、何か彼女に合わず、何か彼女が苛立つとき、黙ってしまう彼女の傾向がそうだ。彼がどうしたと尋ねると、何でもないと言う。彼女は何でもないと言う、しかし何か思っていると彼には分かる。何か間違ったことをしたのだろうか。いや、彼女にとって確かに何でもないと言う。十五分彼女を説得しても、ほとんど腹立たしくなるほど、彼女の永遠に「何でもない」が続く。それでも何かあるのだ。一 いや、結構、我々には一つの欠点があろう。ちなみに自分は彼女のそれを改めさせよう。ペーターのような娘はそもそも欠点があってはならない。これは彼自身に関しては別で、自分は欠点が多く、改善を始めても甲斐はない。...

パーゲルは物思いに耽って更に歩き続けた。つとに彼はジャガイモ畑を抜け出て、森の更に遠くの余所の区域に進んでいた。囚人達は何も見えなかった。警察官達も何も見えな

かった。彼らの一つの物音すら彼は耳にしなかった。それでも彼は共に進んだ。彼はこの馬鹿げた追跡よりも、楽しい散歩をする決心をした。というのは、この追跡が大きな軍警察署長の発案であれば、あの署長の余りに間近に行くことは、危険を犯した上に、馬鹿げたことに違いないからである。森を次々に越え、何時間も上下し、生い茂った藪や、何千もの小さな邪魔な唐檜の、背丈大、背丈一・五倍の保護林を過ぎ、数百のモルゲンの林を越え、樅の木の峡谷を越え、とても暗く、明るい日中でもほとんど眼前の自分の手が見えないほどである。 — そしてこの原野の中で、五人の男どもを見つける義務がある。これは自分の全才知を、見つからないようにとの一点に集中している、気転の利く、どんなことをも覚悟している男どもなのだ。阿呆な、全く阿呆なこと。 — この森の中で、初めて、このような任務の遂行がいかにか不可能なものであるか分かる。奴等と一緒に茨や柏槇の間を這いずり回るより、一人で更に楽しく進むことにしよう。

そこで彼は一人で先に楽しく進んだ。そして彼が間近な角を曲がると、彼は「おっと」と言い、もはや一人つきりではなかった。というのは毛皮襟コートの小さな男が彼に向かって来たからで、つまり向かって来たというのは、必ずしも正確な言葉ではなかったのである。この小男の歩行は一種のトリルであり、スタッカートであった。そして真っ直ぐに陰気にパーゲルに向かって、 — そして、跳ねよ、我が娘、 — いわば脚で少しばかりヨーデルを歌った。

「忌々しい根だ」と大声で叫び、更に陰気に真っ直ぐに進んだ。しかし根はなかった。パーゲルの一步前でこの小男は立ち止まった。突然一気のこと、ほとんど倒れそうであった。

丁度ヴォルフガングはしっかり支えた、「おっとと、マイヤーさん」と彼は好意的に言った、「ドイツ人はコニャック[おっとと]とは言わない、ブランディー[忌々しい根だ]と言う」。

黒人マイヤーは公務上の後継者を小さな、赤くなった目で見ている。突然その目は気付いた印が浮かんだ。大きく厚かましくにやりと笑い、彼は鳴いた、「いや、貴方か。誰かと思った。...いや、私は一杯機嫌で、貴方は私の車を見かけなかったですか」。

「何だと」とパーゲルは尋ねた。ある疑惑が彼の中で生じた。「今貴方も車を持っているのですか、マイヤーさん。今日我らの森の中、車で何の用です」。

「貴方も今は、『我らの森』と言っていますな」とマイヤーは笑った、「ここでは今多分それが流行です。森林官は私の森と言う。騎兵隊長は私の森どもと言う。恵み深い夫人は時に少しばかり彼女の森を散歩される。ヴァイオ嬢は自分の獵立間の待場へ行かれる。老枢密顧問官に耳を傾けると、いつも老公は単に二、三の松林について話される」。

マイヤーは笑った。丁重さからパーゲルも笑った。しかしこの農業の権威が今日この森に居合わせることは不審であった。「どこに貴方の車を止めたのです、マイヤーさん」と彼は尋ねた。

「間抜けな私に分かりましょうか」とマイヤーは叫んで、手で頭を叩いた。「あの上の方にはなかったのですか」。パーゲルは頭を振った。「それではこちらを上に乗って行きましょう」。

マイヤーはヴォルフガングが付いて来るのを自明なことと見ているように思われた。それで、マイヤーは脱走した囚人達の仲間かもしれないというパーゲルの疑念は少しばかり

消えた。

マイヤーは今や全く心地良げに、それにかなり垂直にパーゲルの側をぶらぶら行った。同時に彼は、一人の聞き手を見つけて喜んでるように見え、更に喋り続けた。

「つまり私は一杯機嫌なのだ。私は友達と祝い事をして、本当は奴は友達じゃないのだが、しかし奴は友達とっていて、その子に肉団子をやったわけ。それから私は抜け出して、何というところかだったか、分からない、しかしこの近くなのだ。しかしすぐ分かるだろう。私はこの辺には明るい」。

「そうだな」。

「これからこの区画線を左手に上がって行こう。貴方の名前をもはや覚えていない。人生では余りに多くの人と知り合いになる。丁度この前の何週かだったな、まずは仕事を見つけなければならず。私の名前の記憶は良い方で、大佐もいつもそう言っている、...」。

「どんな大佐です。貴方は今軍にいるのですか」。

目覚めて、邪推深い、少しも醜悪していない視線にパーゲルは出会った。こいつは見かけほど酔っていないかとパーゲルは考えた。注意。

しかしそれはほんの一瞬であった。マイヤーはすでにまた笑って、当意即妙に言った。「貴方は軍にいたのですか。それで上司に『騎兵隊長』と言うのか。あいつ上等の車を買って、今日フランクフルトで試乗しているのを見かけた。この世は気前よく破滅するに違いない。小さなヴァイオは何をしています」。

「ここには貴方の車はやはりないように見える」。

「顔をしかめなくても、いいよ。笑ってしまうな。貴方も落ちたのか、少尉が相変わらず一番か。まあ、子供だ。愛は素敵に違いない。それで」、全く別の調子で、脅すように言った、「今や少尉殿も落ちるぞ。少しひどい目に遭う。奴は胸を洗っていた方がいい。撃たれるぞ」。

「かなり嫉妬しているようだな、マイヤーさん」とパーゲルは好意的に尋ねた。「貴方が当時、夜、あんなに叫んだのは、多分少尉のせいだろう。ちなみに貴方の恋文写しを郡報の間に見つけた」。

「あの間抜けな恋文か。あんなのに関わり合っても仕様がな。そんな些事は今はもう関係ない。今は別な件だ。それについては田舎の若者は知るまい。私がどんなに金を儲けているか、貴方には分かるまい」。

「マイヤーさん、それは分かるよ」。

「だろう。指輪を見なさい。すべて本物の美しい宝石だ。知り合いがいて、半値で得ている。そもそもただ外貨で払うのだ、...」。

再び彼は突然中断した。再び深い、邪推の目を脇から向けた。しかしパーゲルはその秘密暴露の言葉を聞き逃した。パーゲルは別の探りを入れていた。

「ここは少し危険ではないか、マイヤーさん」とパーゲルは尋ねた。「この森を全く一人っきりでこんなに一杯装身具とお金を持って散歩するのは。貴方に何か起きるかもしれないのに」。

「そんなこと」とマイヤーは軽蔑して笑った。「何が起こると言うのです。私にはまだ何か起きたことはない。いいか、これまでどんな目に遭ってきたか、貴方には分からないだろう。一 それでも私には何も起きなかった。ここで」と彼は言って、森の地面で地

団駄踏んだ。「ここ、この森で一度、私の背後から一人の男がやって来て、十五分間私の脳に回転式拳銃を突き付けたのだ。ー私を射殺しようと思っていた。しかし彼が射殺したかって話しだ」。

「とんでもない体験だな」とパーゲルは少し気持ち悪く笑った、「信じられないな...多分それは本気ではなかったのだろう、...」。

「奴がか。奴は本気だったのだ。拳銃は装填されていた。彼がただずっと私を歩かせ続けていたのは、少し見つかりにくい或る箇所に着くのを待っていたのだ。つまり私の死体がすぐには見つからない箇所だ、...」。

何か陰気なもの、残酷なものがこの言葉から発せられた。パーゲルは小マイヤーを脇から見つめた。相手の話は本当である必要はない。しかしこの小さな男はそれが本当であると信じている。...脅かすように彼は唇を動かした。...

「とんだ目に遭った。私が不安を覚えたのであれば、奴にはその百倍不安を覚えさせてやる。私が助かったとすれば、奴は助からないのだ」。

「それでは、マイヤーさん」とパーゲルは冷静に言った、「少尉殿がどこかで死んで見つかったら、すぐに警察は私から知ることになろうと請け合っておくよ、...」。

マイヤーは振り返って、パーゲルを陰気に見つめた。しかし突然彼の顔ほ変わって、彼の厚いソーセージの唇は歪み、彼のフクロウの目は嘲って微笑した。「私がそんな間抜けで、奴を撃つと思っているのか。ひょっとして撃ち損なって、この犬が私を殴り殺すとでも。結構な復讐になりましょう。いや、いいか、マイヤーと申す者が申すこと、これは間違いないのだ。この犬には不安を覚えて頂きます。これが私の立派な復讐だ。彼を狩り立ててやる。彼の名誉を奪い、皆が彼に唾するようになる。ーするとな、すると彼には逃げ道はないのだ。自ら自分に銃を向けるしかない。この犬は、こんな具合になる。ー間違いない」。

彼は勝ち誇って、パーゲルの前に立っていた。ほとんど震えていて、酩酊はもはや見られなかった。せいぜい、アルコールで彼の復讐心が一層焚きつけられていた。普通なら静かに胸の中に収めていることを、口外していた。パーゲルは彼を見つめた。此奴に対する反吐を気付かせないように、彼は注意した。このお喋りすべての中には知る必要が十分にあるものが潜んでいると確かな思いを抱いた。このマイヤーから聞き出すには頭を使う必要がある。

しかしそれからヴォルフガングの若さが、病的なもの、悪徳、犯罪に対する若さの反撥が勃発してしまった。彼は軽蔑して言った。「素敵な豚野郎だな、貴方は」。そして向きを変えて進んだ。

「どういうことだ」とマイヤーは挑戦的に叫んだ、「それが貴方に関係あるか。私は自分でこうなったのだ。貴方は詩文でそうなったのだ。人からいつも屑として靴の下で扱われていたら、私の場合のようにな、そのとき、貴方がどのように見えるか知りたいものだ。貴方は上品な母親がかりの若者だ。それは分かる。高等教育に、それに属する一切と、...」。

彼は少しばかり落ち着いた。

パーゲルは言った。「高等教育は劣等な豚根性を追い出すと思っているのかい。しかし屑の中でまことに居心地良く感じている者も中にはいる」。

マイヤーは彼を一瞬邪険に見つめた。それから笑った。「それで諍って、何になろう。

私はいつも考えている。人生は短い、死は長い。それで少しばかり楽に暮らすようにしなければならない、と。楽に暮らすには、金が必要だから、哀れな奴は上品なやり方では金にありつけないから、...」。

「それで上品でないやり方なわけだ。マイヤーさん、ただ私は、何故少尉の後を付け狙っているのか、分からない。彼がお陀仏になれば、金を得られないのだろう」。

パーゲルは無邪気に言ったのであるが、一　すぐにまた邪推深い、素早い視線が見られた。しかしマイヤーは今回答えた。新しい区画線に折れて、つぶやいた。「糞忌々しい。あのつまらぬ車はどこに隠れているんだ。全く頭がいかれているに違いない。...いつもぐるぐる回っていないか」。パーゲルを彼は再び、邪険に見つめて、つぶやいた。「私を一人で歩かせてくれ。貴方は何の助けにもならない」。

「貴方に何か起きないか、心配しているのだ」とパーゲルは丁重に言った。「立派な指輪に、沢山のお金、...」。

「私の身には何も起きない、と言っただろう。ここ森で誰が指輪を盗むのだ」。

「囚人達だ」とパーゲルは平静に言って、その男を鋭く見つめた。

しかしマイヤーは微動もせず、このマイヤーには何の反応もない。「囚人達だと。囚人達とは一体何だ」。

「我らの、作業分遣隊だ」とパーゲルは言って、自分が抱いた嫌疑は不当であったと確信した。(しかしそれではこここの森で小さなマイヤーは何をしているのだ)「つまり我らの作業分遣隊の中から今朝五人脱走したのだ」。

「糞忌々しい」とマイヤーは叫んで、その恐怖は本物であった。「その奴等がこここの森に潜んでいるのか。いいか、よく冗談を言ってくれるな。一　貴方はここらを歩いているではないか」。

「冗談ではないぞ」とパーゲルは言って、ピストルを半ばポケットから取り出した。「その上、私は警察を探していた。五十人ほどがつまり森の中で探している」。

「今十三時だ」とマイヤーは言って、圧倒されて立ち止まった。「五人の監獄囚人に、五十人の雨蛙。一　そして私は自分のガタガタ車で来ている。それは人目に着こう。... 旦那、いいか、三分のうちに車を見つけなければならない。何と言うところだっか、今思い出した。黒い奥だ、一　ご存じかな」。

パーゲルはこの小マイヤーはずっとこの名前を知っていて、その名前をただ触れたいだけのことのように思われた。今度はマイヤーも彼を邪推深く見つめた。しかしどうしてだ。それは他のすべてと同じような森の呼称である。

「そこには私はまだ行ったことがない」と彼は言った、「しかし私は地図で読んだことがある。そこは全くビルンバウムの方角に面している。それなのに我々はずっとノイローエの方角を探しているぞ」。

「阿呆だ、私は」とマイヤーは拳で頭を叩いた。「それでは出発。いいか、貴方のお名前は何かですか」。

「パーゲル」。

「貴方も目を開けなされ。こここの砂にはミミズすら車の跡を見つけられましょう。この方向か。それじゃこの方向に向かえば本当に正しいかな」。

「そう、そう」とパーゲルは彼を宥めた。「しかしどうして貴方は突然またそんなに興

奮したのだ。貴方には何も起きないのだろう」。

「いいか、私の立場での貴方を見てみたいものだ。全部がパーになったら。忌々しいまただ。私は永遠についてない。あの酔っ払いが、...」。

「何がパーになるのだ」。

「貴方には関係なかろう」。

「知りたいものだ」。

「それでは賢いマティルデの言う新聞の失恋相談でも訊きな」。

「我々が本当に黒い奥へ向かうかまだ決まっていないぞ」。

マイヤーは立ち止まって、若いパーゲルを憎悪に満ちて見つめた。彼はきっと今彼に対して何かしたかったのであろう。しかし彼は思慮した。彼は呻った。「何を知りたいのです」。

「何故そんなに突然急ぐのだ」。

マイヤーは思慮して、無愛想に言った、「フランクフルトで仕事があるのだ」。

「それは五分前にも言っていた。その時は少しも急いでいなかった」。

「新しい車を奪われたいかい。それが貴方の騎兵隊長の極上品なホルヒでなくても、単にオペルの雨蛙にすぎなくてもだな」。

「警察と私から聞いて、貴方も恐怖を覚えたのか」。

「違う」。

「そうだろう」。

「ではな、運転免許を持っていない。そもそも警察とは関わりたくない」。

「貴方の仕事のせいかな」。

「そうだ、それだとして構わん。一 少し闇取引をしている」。

パーゲルはこの小さな醜い男を吟味して見つめた。すべて符号しているかもしれない。しかしもっと一層、符号してははず、此奴は嘘を付いている蓋然性が高かった。

「そして貴方は今日ここ我らの森で何をしている」と彼は尋ねた。

しかしマイヤーははるかにずるすぎた。この質問をとうに予見していた。彼は内心、少尉のことで酩酊し、復讐する無駄話をしたことを呪っていた。しかしパーゲルが「黒い森」の言葉に反応を見せなかったと見て以来、パーゲルは何も知らないと知って以来、彼は自分の勝利を確信していた。

「私がここのお主らの森で何をしているかって」と彼は尋ねた、「貴方には知らせたくはないが、しかし貴方は口が堅いだろう。お主らの森林官をお主らの許に連れて来たのだ。お主らのクニブッシュを私の車でな。彼は完全に泥酔して眠っている」。

「森林官はフランクフルトで裁判期日ではなかったのか」。

「その通り。良く分かっている」。マイヤーはまた完全に元気になった。「それでは出発しよう。正確に黒い奥の方へだ。お主らの森林官はボイマーとの件で、裁判期日だった。そして偉い男のお主らの騎兵隊長が彼に付き添っていた。しかしこの偉い男はずらかった、車を買いな、...」。

「それで裁判期日は」。

「それは壊れた。関与者欠席のせいだ。ボイマーが今朝逃げた。今日は見たところ皆がずらかっている。私もずらかる、早速な。一 万歳。ここに我らの車の跡がある。一

誰がそう言ったかって。まあ、一緒に二、三歩行こう。貴方のクニーブッシュをお見せしよう。私が貴方を騙していないことの証拠に、...」。

「何故貴方はここ森の奥へ来ているのだ、クニーブッシュを家に送りたいのであれば。そして何故車を見失ったのか」。

「貴方は酔っ払ったことがないのか。いいか、まだ酩酊を存じ上げておりませんではなからう。これほど酔っ払って我々は村へ乗り入れたことはない。 — これほど何も分からなかったことはない。それほどあちこち進んだ。それで、我々が森へ来ると、人間的生理を感じた。私は出ざるを得ず、クニーブッシュは眠り、私はよろめいて出て、溝へ行き、茂みの背後に行った。 — それから私は眠ったに違いない。それで目覚めて見ると、最初どうしたことか分からなかった。 — ただ歩き出したら貴方に出会った。 — おっとっと、ここに私の車があるではないか」。

勿論、実際ブラックヴィッツの車のように豪華なものではなかった。まことにオペルの雨蛙で、ぼろ車であった。...しかしその瞬間、格別殊にパーゲルは関心を抱かなかった。これは実に、小さな低い車であった。森の地面と車の基部の高さの違いはさほど大したことではない。それでも森林官の眠っている状況は、まことに不愉快なものであった。頭は森の中に、足は車の中にあつた。

例えば黒い奥の名前をどうしてマイヤーは述べたのか、本来マイヤー氏に若干の邪推の質問をパーゲルは試みたいところであつたろう。しかしマイヤーはきっと、どんな質問にも、本当の答えや嘘の答えの返事を用意していたことであろう。この人間は全体、嘘と真実のほぐしがたい混淆物であつたから。きっと彼の語ることは大体符号していよう。そしてたとえ必ずしも符号していなくても、例えば、神秘的な少尉のことがこの話しでは完全に抜けているからで、これはパーゲルの感じでは絶対関連がある筈であつたが、此奴から真実を引き出すには、余りに時間を要したであろう。今は是非ともまず森林官を家に送って行き、ベッドに寝せなければならぬ。現在の状況はほぼこの七十歳の男には良くない。頭は青みがかつた赤色になっている。

「彼を車に入れろ、入れろ」とそれ故パーゲルは命じた。というのはマイヤーはこの老男性を車から引きずりだそうとしていたからである。

「何故です。私はずらかるのです。急いでいます。奴は外です」。

「中だ、と私は言っている。クニーブッシュを酩酊させたのは多分貴方だろう。だから彼を家まで送って貰おう」。

「そんな。私は急いでいます。 — 私はノイローエで自分の姿を見せたくない」。

「姿を見せなくてもいい。森林官地までは森を通って行けるだろう。誰も貴方を見ない」。

「途中で捕まったらどうします。警察官とか囚人達に。いや、私は逃げる」。

「マイヤーさん」とパーゲルは警告した、「馬鹿なことをするな。むしろ私は貴方の車のタイヤを撃って駄目にするぞ、貴方をずらかすよりはな」。

マイヤーは憤然とピストルを持った手を見た。

「それじゃ彼を掴んでください」と彼は不機嫌に言った、「そやつをまた放り投げて入れてください。中の隅に押し上げて、どんな姿勢でも構わん。奴はすぐにまた倒れるだろう。ドアを閉める、それが肝心。知らんぞ」と突然マイヤーは憤然と罵った、「ノイローエではいつも私がついていない。ノイローエでは何を始めても、いつもこん畜生となる」。

しかしいつか仕返しをしてやる。きっと貴方の仲間は私のことで思い知ることになるだろう」。

「きっと思い知るだろうよ、マイヤーさん。きっと十分に思い知ることだろう」とパーゲルは満足して言い、マイヤーの横に腰掛けた。この小男が送りの運転を強要されて憤然となったことを彼は喜んでいた。「私だったら、そんなにクラクションを鳴らさない。結局囚人の若衆が、一台の車で最も快適にベルリンまで行けると更に思い付くことになるだろうからな。それでもう少し左手を守って進むのだ、...おや一体何だ」。

大きな青と白の車がカーブですぐ彼らの側を音立てて行った。

「騎兵隊長のホルヒだ」とマイヤーは囁いて、自分の雨蛙をすぐ木々の幹に寄せた。

大きな車は今一度大きく呻り、側を猛然と過ぎた。

「騎兵隊長と可愛いヴァイオだ」と小マイヤーはにやりと笑って、更に進んだ。「な、彼らは我々が分からなかった。私はすぐ顔を手で覆った。試乗だな、そう見える。大いに楽しんでくれ。 — この威光も多分もはや長くは続くまい」。

「どうしてだい、マイヤーさん」とパーゲルは嘲って尋ねた、「騎兵隊長は、貴方がもはや彼の役人ではないから、破産すると思っているのかい」。

しかしマイヤーは答えなかった。彼はまだそれほど練達の運転手ではなく、でこぼこの砂の多い森の道は彼の全集中を要求していた。

ようやく彼らは森林官地に着いて、彼らは森林官を降ろして、彼をベッドに置いた。安楽椅子の夫人は、思わず叱った。酔っ払った夫を彼らが連れて帰って来て、彼を間違ったベッドに置き、服を脱がしていない、と...

「それでは、マイヤーさん」とパーゲルは言った。小マイヤーはすでにまた車に座っていた。パーゲルは彼を注意深く見つめて、それから彼に手を差し出した。「それでは良いドライブを」。

マイヤーはパーゲルを見つめた。マイヤーは手を見つめた。

「いいか、貴方には分かるまい」と彼は言った。「(貴方の名前は記憶に留めない)。貴方には分かるまい。私は貴方に手を差し出さない。それでいいのだ。貴方は私がとんでもない豚野郎と思うだろう。...しかし私はそれでもそんな豚野郎ではないのだ。だから今、手を差し出さない。ではな」。

マイヤーは車のドアを音高くバタンと閉めた。パーゲルは彼を呆気に取られて見つめた。マイヤーは車の窓から今一度頷いた。この時、全く別のマイヤーの顔が頷くように見えた。悲しい、惨めな顔が。それから車は出発した。

パーゲルはしばらく彼を見送った。哀れな豚と彼は自らの許で考えた。哀れな豚。

そしてパーゲルは両方を考えていた。「哀れな」と「豚」とを。それから農園中庭へ向かった。何か言ったものか、何を言うべきか、誰に何を言うべきか、全く確信がなかった。

彼は — この些細なことを余りに長く考えることになった。

第十三章 失われ、見棄てられ

117

シュトゥットマンは旅し、エーファ夫人はとても孤独

九月三十日、彼誰時となって、陰鬱で、不機嫌、風がノイローエの上を吹き荒れて、空漠なものとした。風のみがノイローエを空虚なものとしたのではない。この日には多くが、つまり愛や憎しみ、裏切り、嫉妬、利己心が吹き飛ばされた。多くが、飛び去り、一人々は秋の葉のように四散した。

それでもまだ十月一日、運命の日ですらなかった。

最も早く目覚めたのは、フォン・シュトゥットマン氏で、目覚ましが鳴って、まだ暗く、風が家の周りに吹き付けていた。フォン・シュトゥットマン氏は、自分の計画を自明なこととして行う男であった。遺憾に思うことなく、彼は温かいベッドから、灰色の霜の感じられる朝へと目覚めた。彼は今日、請負の額を用意する計画であった。自分はその額が請負の支払いよりもはなはだ別の目的に使用されるであろうと元来かなり正確に承知していたけれども、それを用意することであろう。

丁寧に彼は髭を剃った。彼は町へ行くたびに、いつも二回剃った。今回彼は思い付いた。ノイローエ用にも、エーファ夫人のために後で髭剃りをするようになる、と。

しかし彼はこの考えを早速棄てた。彼は高校三年生でもないし、ドン・ファンでもない。自分は雷鳥の雄のように交尾を求めて鳴きはしない。

少し後にシュトゥットマンは事務所に現れた。書き物机に一枚の紙片があった。「旅立つ前に、私を起こしてください。伝えるべきことがあります。パーゲル」。

シュトゥットマンは驚いて肩を高くすくめた。パーゲルは何の大事なことを伝えたいのだ。彼は用心して事務所のドアからパーゲルの部屋へと開けた。ランプの明かりが差し込んだ。その横にパーゲルは眠っていて、静かであった。幅広の髪の毛の房が額にかかっている、閉ざされた瞼に触れていた。一つ一つの髪の毛が極細の黄金の針金のように明かりの中、微光を放っていた。顔も微笑しているかのように、明るかった。とてもびっくりして、シュトゥットマンは、二、三の言葉を発した、一 詩句にあったか、一 多分学校時代から記憶している意味のものであった。「幸せに生まれながら、甲斐がなく、皆と同様に死ぬ」。

シュトゥットマンは、その重要な知らせは、重要ではあるまいと決めた。今はようやく四時だし、後一時間半眠ることがただこの若者にとって良いことであろうと決めつけた。ちなみに、彼は是非とも早朝列車で、フランクフルトへ行く必要がある。エーファ夫人の希望であったからである。この重要な知らせを聞いても、何ら変更できない、むしろ支障となるだけであろう。

事務所には今や黒いミンナが出現した。まことに寝ぼけていて、いつもより更にぞんざいな衣服であった。彼女が用意したコーヒー同様にぞんざいに見えた。シュトゥットマンは、清潔なサービスにホテル勤務以来とても敏感になっていて、舌先に鋭い言葉を浮かべたが、それをまた呑み込んだ。この連関を承知していると、自分の非難はすぐに別荘のキ

キッチンに伝わり、キッチンから恵み深い奥方に伝わると分かっている。ー フォン・シュトゥットマン氏は、エーファ夫人の怒りが今このとき更に増大することを望まなかった。

さて外では馬車の車輪が砂利で軋んだ。御者のハルティヒが乗り入れてきた。シュトゥットマンはコーヒーと干涸らびたパンを断念した。彼は一本の葉巻に火を点けて、急いで外套を着て、家から出た。

外では御者ハルティヒが高い御者席から郡警察と話していた。警察は実りのない夜警の後、寒くて、苛立っていた。シュトゥットマンは挨拶して、何かニュースを尋ねた。

何のニュースもなかった。夜警も、昨日午後の森の狩り立て同様に成果がなかった。囚人達の痕跡は何もない。すべて無駄であった。つまりすべて別様に開始する必要があったであろう。この郡警察は、凍えて、苛ついて、自分の計画を述べた、...

「お聞きください、巡査長殿。私はこれから駅へ行かなければなりません」とフォン・シュトゥットマン氏は遮った。「しかし中の事務所にはまだ私のコーヒーがあります。大したものではありませんが、温かい。それを飲みませんか。しかしこっそりとお願ひします。若い男が隣で眠っています、...」。

郡警察は感謝して、事務所へ向かった。喫煙のシュトゥットマンと黙しがちで、絶えず不機嫌なハルティヒの馬車は駅まで転がって行った。四時十五分であった。

「ようやく四時十五分だ」とエーファ夫人は全くびっくりして言い、信じられぬ思いで、自分の夜間サイドボードの小さな旅行用目覚ましを見つめた。

誰かが彼女を呼んだように思われた。ー ヴァイオかしら、アヒムかしら。彼女はベッドの中で飛び起き、全く機械的に、サイドテーブルの明かりのつまみを押した。そこで彼女は夜具の中に身を起こして、座っていて、聞き耳を立てた。

微かに、微かに、目覚ましはチクタク言い、その隣りの腕時計は聴覚にはもっと早いチクタクの音に聞こえた。しかしやはりようやく四時十五分である。風が家の周りで呻っている。他は何もない。何の叫び声もない。皆が眠っている。全く静かで、平和である。エーファ夫人は信じられぬほど新鮮に、眠り尽くした思いであった。何らかの定かならぬ喜びが彼女の中にあった。ー しかし一体全体通常のコーヒーの時間までの四時間、何をしたものでしょう。

びっくりして、ほとんど少しばかり不満げに彼女は自分の部屋を観察した。それは彼女の何の気散じ、気休めにもならなかった。一瞬彼女は起き上がって、ヴァイオを覗こうか、ひょっとして彼女が夢の中で呼んだのかと考えた。しかしベッドの中はとても居心地良く温かく、それにそもそも、ヴァイオは今や大きな娘だ。夫人が夜に、全く自明なことのよう、五、六回、ベッドから出て、つま先だって、自分の小さな娘の許に忍んで行くという年齢ではもはやない。美しく、過ぎ去った過去の時、自明の看護、甲斐甲斐しくなされた自然の配慮、それが人生であるが故に、人生に固有のものである配慮。...こうしたすべて不必要な人為的な心配の種は今日では何もない。この世の最も余計な代物だ。

夫人の背中中はピンと張って、彼女の顔もピンと張って来た。突然再び、肢体が休んで楽しく眠っていたときには、消えていた事が浮かび上がって来た。自分は壊れた家の中に座っているのだ、自分は解体して行く家族の一員であり、自分のベッドが休らっているこの床は抜けて行くのであり、自分の夫への寝室へのドアは施錠されている。昨夜の不愉快な場面の後、施錠されたのだと思い付いた。彼女の額には皺があって、豊かな、美しい両肩

は、前方に垂れて、彼女は突然老婆になった。彼女は思い巡らせた。どうして何年も、何年も、夫と一緒に暮らせたのかしら、これらのことに耐えられたのかしら。

夫と一緒にこれから先、ほんの一週間であれ暮らすことは、不可能に思えた。ほぼこれに二十年間耐えてきたのである。考えられない。夫に対し、辛抱し、大目に見て、女性の術策で、夫の内助をする才覚を失ったかのようである。夫に対する愛と共に、夫の仕上げをする能力もすべて消えてしまったかのようである。

いやはや、すでに何度か以前、夫は酔っ払って家に帰って来たことがあった。主婦はそれに耐える術を学んだ。アルコールの臭いと煙草の煙、大言壮語と突然の優しさは、いつも何か耐え難いものであり続けたけれども。しかし夫がまさに今日の午後、それを利用したこと、夫が待ちきれずに、ただの無茶振りを発揮して、それも自分の弟宅へと車を向かわせたこと、夫が妻に内緒で出掛け、思慮の足りない子供のヴィオレットに、勿論この娘は何でも新しもの好きで、このような新奇なことにはそれどころか夢中になるのであるが、ほとんど阿呆でずる賢い流儀で自分の横に座らせ、妻に対し反抗させたこと、それからとうとう本当に樽の底が抜けた話しであるが、この十五歳の娘に、二、三杯のリキュールを許したこと — 夫は一杯と言い、娘は二杯と言っているが、きっと四、五杯だったのであろう、 — いや、今やこうしたことは、長年の主婦の忍耐習練さえも越えたものである。

彼女は食堂で待っていたのであった。夕食のテーブルは準備されていて、従者は待機し、キッチンの料理娘達は待機していた。遅くなった。遅くなり過ぎた。彼女は自分がいつか小市民のように、心に怒りを抱いて、座ったままでいて、夫の帰りを待つことになるとは考えたことがなかった。そのようなことは滑稽なこと、軽蔑すべきことの頂点に思われた。夫婦にはそれぞれの生活があるわけで、それぞれを鎖に繋いでではない。

そこで彼女はそんな風に座っていた。夫に対する決算を数え上げた。あれ、これ、別なこと。夫のあなたのためにこれをした、あなたのためにあれを我慢した、別なことをあなたのせいで失った、 — それなのにあなたは。この「それなのにあなたは」が増大して行った。「それなのにあなたは」が彼女の全生涯を曇らせる途方もない雲となって、脅威的雷雨となり、一杯の厄災となった。

両人が戻って来た。一杯機嫌の、愚かな、屈託のない陽気さであった。二人は小洒落たことを言い、過剰な挨拶を述べた。あのな、ウーイ、エーゴン叔父さんは、コルク抜きを見つけ出せずに、瓶の首を叩き落としたのだ。あのな、ウーイ。稲妻が走り、遠方からごろごろ雷が鳴る。 — 昔のあなたはどうだった。痩せて、敏捷な形姿。確かに大して才知はなかった、でも恐怖心も難点もない一人の騎士ではあった、...

「それに一台のオペルの雨蛙に森で出会ったわ、ママ。私どもの正直な若いパーゲル様が中に座っていて、誓っていいけど、若いレディーと一緒にだった。彼女は顔を手で覆っていたけど、...」。

十分だわ、本当に十分、十分過ぎる。言葉に、諍い、若い娘の涙、父親の愛想の良い良心の呵責は、凶暴な良心の呵責へと変わる。

「おまえは私の車を許さんからな」。

そしてヴァイオが呻く、「ママは私どもの喜びをすべて奪うわ。何も許してくれない。今度はパパまで虐げようとする」。

父親と娘が母親に対して共謀している。ドアの背後では従者達が聞き耳を立てている。エーファ、これは汝の家政の結果だ。汝は以前、両親の家から逃れた。汝は心に誓っていた、本当に作法を弁えた男性なら当たり次第結婚する、と。 — 汝は汝の父親の無礼講を嫌っていた。いや、我々は皆、狂ってしまったのだろうか。我々は皆、病気なのか。このインフレは空中に漂っている一つの毒なのであろうか。誰にも感染するものか。これは汝の娘か、汝の箱入りの、うら若いヴィオレットか。赤いまだらな顔をして、無造作に動き、交互に、喚いたり、告発して叫んでいるこの娘は、汝の娘か。これは汝の夫か。高貴な、率直な人間で、丁寧に手入れのされた、ひどく清潔さにこだわる男、これが今、両手で叩きながら、振り回し、叫んでいる、「おまえには負けない」。

いや、汝自身なおこうした者ではないか。こうしたことすべてを一緒に見つめ、聞き、立腹して返事をし、怒って叱り、同時に別の男を考えている汝、まだ最初の夫が沈まないうちに、すでに代わりを手配している汝は。

恥を知れ、悪魔、我々すべての者の上の悪魔よ、恥を知れ。皆同じ — そして彼女は歩き、急いで階段を上がって、彼女は自分の部屋にどんなに急いで入っても十分でなかった。彼女は二人を階下に残した。彼女は一人っきりになりたかった。窓は開いたままで、快適に涼しく、新鮮であった。セントラルヒーティングの痕跡が大気中であって、彼女のシャボンと香水の香りが加わっていた。彼女に自分は自宅にいると思わせるに十分であった。...バスに入ることを今最も好んだであろう。しかし今は自分の体を見たくなかった。この体の中で多くの人生を経験してきた。体は余りに多く体験し、余りに多く享受していて、今晚はもう見たくなかった。それで彼女はただ素早く衣服を着替え、暗闇の中で、医師が彼女の歯根化膿のひどい痛み止めにかつて処方していたヴェロナールの一卷きをサイドテーブルの一番奥の一角に見つけだした。...彼女は一錠取り出した。きっとこれは最小の一錠だけで彼女には効き目があって、仰向けになったら、眠りに就くことになる。...

そして彼女はほとんど眠ろうとしていた。ほとんど丁度夕べの場面映像が消え、つんざく諍いの声が耳からほとんど消えて、 — そのときまことに、信じられないことに、夫の寝室へのドアが開いた。「エーファ、もう寝たのかい。まだ話したかったのだ」。

この人生は永遠の反吐のようなものかもしれない。夫がそこに立っている姿を見たら、人は笑い始めるに違いない。白髪である。しかし何も学習していない。まことに、彼は自分の最上のパジャマを着用していた。彼は彼女のために身綺麗にしていた。この永遠の学童、決して何か学ぶことをしないであろう者どものクラスで、永遠に落第を繰り返す男。

「エーファ、 — エーファ、 — エーファ」。すべての音調で、思いやりに満ちて、懇願している。 — そして少しばかりもっと声高に言って、目覚めるかもしれないようにするが、しかし彼女はまさに起きない。彼女は彼を全く良く見ることができた。彼のシルエットが明かりで浮かんでいたが、しかし彼女の顔は影の中であって、彼は彼女を見ることはできなかった。実際そうであって、彼は彼女を決して見ていなかった、長い結婚生活を通じて、 — 彼は一体どんな妻を想像していたのであろうか。

今一度言った、「エーファ」。

訴えるように。悲しい非難に満ちていた。見給え、彼は彼女がすっかり眠っているとは思っていない。しかし彼女が本当に起きる気がないことも多分分かっている。彼は何か口

ごもる。彼は当惑すると、いつも自分相手に口ごもる。彼はそうして自分の当惑をごまかせると思っている。

かくて彼の部屋へのドアがバタンと閉まった。

すると早速彼女はベッドから飛び起きて、裸足で歩き、ヴェロナールの効果であちこち揺れて、ドアまで来た。音高く、遠慮せず、彼女は自分の側の鍵を回した。そして彼女はドアの側に立っていた。聞き耳を立てて、素早く息をしながら、勝ち誇っていた。御主人、これで十分明確でしょう。終わった、最終的に終わったとようやく分かりましたか。

向こうから何の物音もなかった。静寂、深い静寂。 — 彼の短気の叫び声すらない。静寂、ただ静寂。

ゆっくりと彼女は自分のベッドへ戻った。彼女は早速眠り込んだ。

そして今や四時二十五分である。彼女はかくも喜んで目覚めた。それから誰かが彼女を呼んだかのように思われた。彼女は思い出してみた。父も娘も彼女を呼ばないだろう。一体全体何故彼女は嬉しいのか。

彼女は前屈みになって座っていた。しかし肢体は弛緩し、屈した。彼女は再び深くベッドの中に横になった。自分を守ってくれる何か生きたものを相手にするように、彼女は巻き付き、抱き寄せた。彼女はまだ眠るつもりだし、まだ眠れることだろう。朝食までの四時間、このような幽霊どもの踊りの中で、どう過ごしたのか、分からなかったであろう。

いやはや、彼女はこの朝食のとき、どんな顔をしているだろう。何を話すだろう。何を始めるだろう。彼女は事務所に行くかもしれない。しかしフォン・シュトゥットマン氏は旅立っていて、若いパーゲルは若すぎる。...分かることだろうが、結局人生のどの一日もいずれ過ぎて行くものである。...

お休み。

118

エーファ夫人は従者に情報を求める

日の出前の早すぎる目覚めの後、エーファ夫人は今一度しっかりと眠った。それで彼女がこの日、二度目、目覚ましを覗いたとき、全く信じられなかった。九時半であった。効能書によれば睡眠薬は十分に眠らなければならない。エーファ夫人は十二時間ベッドに横になっていた。これはヴェロナール錠剤には十分であったろう。

しかし彼女が今やベッドから降りて、洗面と着衣にかかっているとき、肢体は重く、鈍い圧迫感が頭にあった。彼女の目には、たった今泣いたか、すぐに泣かざるを得ないかのような感情が窺われた。彼女は素早く、ますます苛立って着衣しながら、自らにあの「詰まらぬヴェロナール」のことを叱っていた。二度と使用しない、と。しかしまた自分の夫、ヴァイオ、小間使い達、フーベルトも叱っていた。起こさずに、こんな日中にまで眠らせていた、と。

しかしこうした一切にも関わらず、雨でもないのに濡れて木々から滴る今日一日は無用無益で、自分にも他人にも何も良いことはないであろうという悲痛な感情、一つの子感に襲われていた。...

朝食のテーブルには、ただ一人前の食器しかなかった。 — アヒムとヴィオレットの

姿は何も見えない。彼女は呼び鈴のボタンを押し、二、三回押してから、フーベルトの代わりにアルムガルトがコーヒーと卵を持って入って来て、一 アルムガルトは微笑を浮かべていた。しかしエーファ夫人には気に入らない微笑であった。

「騎兵隊長殿とヴィオレット嬢は、すでに朝食を済ませたの」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は、アルムガルトが若干はなはだ丁重にコーヒーを注ぐ間に、尋ねた。

「七時にはもう、恵み深い奥方様」とアルムガルトは思いがけず熱心に報告した、「騎兵隊長殿とヴィオレットお嬢様はすでに七時半前に自動車でご去られました」。

自動車という言葉で完全に発音するその流儀で、この新規の購入品に彼女は完全に同意していて、このホルヒは別荘のキッチンで栄光と自負を得ていると証していた。多分キッチンでは今ようやく本当に「ご立派な領主一家」となられたという見解なのであろう。

「何故起こしてくれなかったの」とエーファ夫人は若干鋭く尋ねた。

「騎兵隊長殿が明確に禁じられたのです」とアルムガルトは少しばかり侮辱を感じて答えた。「騎兵隊長殿とヴィオレットお嬢様は恵み深い奥方様を煩わせないよう、それはお気遣いでした。お二人はつま先立って階段を降りて来られ、ここの朝食の部屋でもずっとひそひそ声でした、...」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は、ひたすら顧慮して、ママを起こさないようにしている両主人公達のことがまことに良く想像できた。ママはドライブを邪魔しかねないし、ひよっとしたら同乗を言いかねなかったのだから。二人の臆病者ども。

「それから勿論大きな騒動がありまして、...」とアルムガルトは穏やかに言ったが、はなはだ偽善的な表情であった。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は、これを聞き逃すことにした。彼女は昨日あらゆる種類の騒動を味わっていて、もはや騒音を聞きたくなくなったり、騒動について何も聞きたくなかった。

「いつ戻って来ると、私の夫は何か言いましたか」と彼女は尋ねた。

「騎兵隊長殿は、多分食事時間までに戻ることはないだろうと仰有っていました」とアルムガルトは答えて、恵み深い奥方を待機して見つめた。この小間使いもすでにアヒムとの諍いについて承知していることは明らかであった。多分村中が、両親も含めて、このことをすでに承知していよう。誰もが自分を半ば未亡人、半ば棄てられた女として間もなく見るであろうことを覚悟しなくてはならないだろう。...

「結構よ、アルムガルト」とエーファ夫人は言った。意志に反して、こうしたすべての些細な馬鹿げたことで、若干陽気になっていた。「それでは日曜日のヒレ肉は冷たいまま切り分けましょう。インゲン豆を添えて。私ども数人にはそれで足りましょう、...」。彼女は指を折り数えた、「私に、ロツテ、あなた、それで三人、フーベルトで四人、一十分足るわね」。

小さな間があった。小間使いのアルムガルトは女主人を無言で見つめた。フォン・ブラックヴィッツ夫人はその視線に応えた。その視線には一筋の居心地の悪いものがあった。エーファは微笑しようとして、それからカップを下ろし、カップを一気に置いた。一 そんな風に見つめられたくなかった。

「何なの、何故そんなに見つめているの、アルムガルト」と彼女は精力的に尋ねた。

「まあ、恵み深い奥方様」とアルムガルトは叫んで、赤くなった、「そのフーベルトを

奥方様は勘定に入れる必要はありません。ー フーベルトを騎兵隊長殿は今朝解雇なされたのです。そのせいで騒動だったのです。キッチンにまで聞こえました。聞く気はなかったのですが、でも、...」。

「フーベルトはどこです」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は尋ねて、話しを止めさせた、「彼はもう去ったのですか」。

「いえ、奥方様、彼は下にいて、自分の荷をまとめています」。

「私の許に彼を呼んでください。私が話したいと彼に伝えて」。

「奥方様、でもフーベルトは騎兵隊長殿を脅迫して、それで、...」。

「アルムガルト、あなたの話しはいいの。フーベルトを呼びなさい」。

「畏まりました、奥方様」。

はなはだ侮辱を感じて、アルムガルトは引き返した。エーファ夫人は待機してあちこち動いていた。勿論朝食はすでに終わっていて、彼女は起きたときから、今日という一日は無用無益とすぐに自覚したのであった。

エーファ夫人はあちこち歩き、また繰り返した。すべてが瓦解し、解体する。力なく傍観するだけで、何もそれに抵抗できないという昨夜からの感情がまた目覚めた。それは実際この滑稽なフーベルトのことではないだろう。夫人は彼が好きになったことはなかったし、すでにこの風変わりな偏屈者とは縁を切りたいと十度となく願っていた。その上彼女は彼に対し、身体的嫌悪感を抱いていた。「妖怪」という小間使い達のお喋りがなくても、彼女は健康な女性としてこの若造は清潔ではないと常々感じていた。

では結構、彼は解雇された。多分無数のある件、卵の煮方が固すぎるとか、落ちたまま放置されているお茶用スプーンのせいで、ー アヒムの今の気分なら、少しのきっかけで憤激の種となり得よう。でもすべてがかくも突然に生じ、何の前触れもなく、生活にもはや何ら新しいことが生ぜず、ただ古いものが去って行く、絶えず去って行くことになろうとは、...

あたかも一個の氷塊の上に座っているようで、この塊から一個一個とこぼれ、まもなく何も残らなくなるであろう。...以前は両親がいた、両親とは仲良くはなかったが、しかし我慢できるものであった、ー 両親はもはやいない。夫がいて、一人の娘がいた、ー もはやいない。田舎での付き合いがあった、ー 自分達が先回出掛けたのはいつだったろうか。居心地の良い故郷を有していた、ー それから今、一人っきりで、朝食のテーブルに座っている。従者は解雇された。そして夜に個別の寝室の間のドアが丁寧に施錠された。ー 今朝の故郷の様子はこのようなものだ。

一種の絶望的無気力の感情が、厄災に満ちた、麻痺性の悲しみがこの一切から生じて来た。ー かくも生活して甲斐のない時代がかつてあったろうか。すべての指の中がむずがゆい。この沼から抜け出すために、何らかのことをする必要があろう。しかし何を試みても、神秘的な具合にただ一層深みへと導かれて行く。すべての行為が行為者に敵対するものとなる。

小間使いのアルムガルトが再びドアに現れた。半ば当惑して、半ば反抗的に、彼女は伝えた。「フーベルトは、自分はもはやお仕えしていませんと言っています。参上する必要はないと申しています」。

「試してみましょう」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は怒った調子で叫び、すでに五

歩で通路に出ていた。

「奥方様、あら、奥方様」と小間使いは彼女の後から、宥めて叫んだ。

「まだ何か」と夫人は苛立って尋ねた、「噂話は結構よ、アルムガルト」。

「でも知って頂かないと」とアルムガルトは言って、すぐ間近まで歩み寄って、小声で話せるようにした。「フーベルトは騎兵隊長殿をととても脅されたのです。武器保管所が話題でした。騎兵隊長殿は真っ青になられて、...」。

「それをあなたは地階のキッチンから見ていたの、アルムガルト」とエーファ夫人は嘲って尋ねた。

「食堂へのドアは開いていたのです、奥方様」とアルムガルトははなはだ侮辱を感じていた、「巻きハムを取りに丁度上がってきたのです。そしてドアが丁度開いて。奥方様、好奇心のせいではありません、ただ良かれと思って、...」。

「結構よ、結構、アルムガルト」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は言って、再び進もうとした。

「でも奥方様、ご存じないことでしょうか、...」と彼女は再び請け合った、「それからこのフーベルトは更に一通の手紙について話したのです。恵み深い御令嬢による手紙について、これが武器保管所と関係してしまして、...」。

「戯言ね」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は全く遠慮なく言って、下の地階へ降りて行った。もうアルムガルトに注意していなかった。すべて戯言で、鍵穴覗きであり、ドア越しの立ち聞きである。フーベルトは勿論、昨日の午後、ドアで聞き耳を立てていて、夫と夫との車の購入と一揆の話しを耳にしたのだ。一 彼は解雇されたものだから、復讐をしようとしたのであろう。彼の頭をきちんとしたものにしてやろう。でもヴァイオが武器保管所について手紙を書いているとなると、これはとんでもないナンセンスだ、鍵穴覗きによる然るべき結論であろう。...

従者レーダーは、ベッドの上に置かれているスーツケースに屈んで取り組んでいた。そのスーツケースに彼は瑣末にこだわって、丁寧に畳まれたズボンを収めていた。彼はいわばすべてミリ単位で考えるのである。そのスーツケースの置かれているベッドはすでに剥ぎ取られていた。折りたたんで、シーツは椅子の上に掛けられていた。それでもスーツケースの下には、ベッドを大事にして、大きな梱包用紙が一枚敷かれていた。最後の瞬間にまで、几帳面な正確さである。一 全くフーベルト・レーダーらしい。

この姿を見、更に、魚のように冷ややかな灰色の動じない表情を見て、恵み深い夫人はすっかり叱る気がなくなった。若干諧謔的に彼女は言った、「では、去って行かれるの、フーベルト親方」。

今やフーベルトはチョッキを手にしていた。彼は吟味するようにそれを明かりに当て、それから布地を内側に、裏地を外側にして、折りたたんだ。全く然るべき風であった。しかし彼はそもそも答えず、これは実際然るべき風ではなかった。

「それで、フーベルト」とエーファ夫人は微笑して尋ねた、「返事はないの。私にも立腹しているのですか」。

フーベルトはチョッキをスーツケースに収めて、上着に取りかかった。紳士用上着ははなはだ折りたたむのが難しい。彼は更に低く屈み込み、一言も言わなかった。

「フーベルト」と恵み深い夫人はより鋭く言った、「馬鹿なことをしないで。騎兵隊長

殿に立腹しても、私にまで無愛想にする必要はないでしょう」。

「恵み深い奥方様」とフーベルトは厳かに釈明して、彼の灰色の陰気な目を上げた、「騎兵隊長殿は私を奴隷のように扱ったのです、...」。

「それは、やはり私の夫に必ずしも好ましくない言葉を述べたからでしょう。夫を、それどころか脅迫までしたと言われてますよ」。

「その通りです、奥方様。合っています。アルムガルトが聞き耳を立てています。でも合っています。私は遺憾に思っています。奥方様のご好意を示されるのであれば、帰って来られた騎兵隊長殿に、私が遺憾に存じているとお伝えください。ただ私は激して申ししまいました」(彼は一片の木材のように激しているように見えた)。

「結構です、フーベルト。伝えましょう。それで一体どうしたことが話して頂けますか」。

「それに恵み深い御令嬢の手紙も利用しません」とフーベルトは迷わず続けた、「約束致します。たとえ手紙を燃やさなくても、利用はしません」。

「フーベルト」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は言った、「それでお願いしますが、私は主家の者であるばかりでなく、これに対しては貴方は勿論いつも何か不平がありましようが、更にまた一人の母親であって、時に色々心配事があることを忘れないでください。貴方が所持しているヴィオレット嬢の一通の手紙とは何です。すべて率直に話してください。馬鹿げた考えは止めて、フーベルト、...」。

「済みません、奥方様、馬鹿げた考えではありません」とフーベルトは全く動じずに説明した。

「それでは、それでいいでしょう。貴方の流儀で話してください。私には分かりましよう。フーベルト、貴方がご存じのことを話してください」。

フーベルトはその冷たい死んだ目で、恵み深い夫人を注意深く見つめた。ひょっとしたらこの幽霊は、夫人が眼前に懇願しているのを見て、少しばかり幸せに思ったかもしれない。しかしそのことは察知されなかった。

長いこと黙って見つめていた後、彼は頭を振って言った、「駄目です」。

彼は再び自分の上着に向かった。

「フーベルト」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は再び懇願した、「でも、どうして駄目なの。これから私どもの許を去るのでしょう。私にすべて話しても、貴方に害は及ばないでしょう。ひょっとしたらかなり有益なことになるかもしれない、...」。

フーベルト・レーダーはただ自分の上着と取り組んでいた。何も聞いていないかのように見えた。しかし長い時間の後、彼はそれでも決心して、再び「駄目です」と言った。

「でも何故駄目なのです」と彼女は囁いた、「私には分からない。一体何なの。フーベルト、聞いてくれたら、貴方に素晴らしい推薦状を書きましょう。私の親戚に貴方のための職を問い合わせで見ましよう、...」。

「再びこの職には就きません」とこの幽霊は釈明した。

「それでは、フーベルト。貴方は仰有った、自分はその手紙を燃やすつもりはない、と。つまり、ひょっとしたら利用するかもしれないということですよ。ひょっとして引き換えに金が欲しいのでしょうか。ヴァイオは多分愚かなことをしてしまいました。それではこうしましよう、フーベルト。私が貴方からその手紙を買い上げます。お望み通りの額を支払いましよう、...百金マルク、...五百金マルク、...千金マルク、...ねえ、フーベルト、一人の若

い娘の愚かな手紙に千金マルク出しますよ」。

彼女は今や熱に浮かされたように話していた。熱に浮かされたような緊張感で彼を見つめていた。彼女は自分が話していることをほとんど考えていなかった。一体それはどんな手紙なのか、もはや見通せなかった。...神秘的な、脅迫するような緊張感に彼女は襲われていた。ここのこの恐るべき奴の空漠たる小屋の中で、 — どうしてこの男をこれほど長く家の中に留めておけたのであろうか。災いだ、災いだ。

フーベルト・レーダーは齒から唇を引き戻した。これは一種の微笑の印のはずであった。彼はフォン・ブラックヴィッツ夫人を見つめた。 — この邪悪な威嚇する視線を見て、勝ち誇る視線であり、夫人の興奮は消え、鈍い絶望感に移った。

彼はゆっくりと頭を振って、三度目の「駄目です」を言った。それから彼は眼前のベッドの上の上着を見つめた。この服は一体何の用があるのか必ずしも分かっていない風であった。

「では、フーベルト」と恵み深い夫人は突然怒って言った、「その手紙は貴方のものではありません。丁度ここノイローエには警察がいます。 — 一人を連れて来て、貴方の品を調べさせます」。

しかしまた最初と同じであった。この醜い男は何も聞いていないように見え、単に自分の上着に取りかかっていた。決心がつかず、彼女は彼を眺めた。懇願も金も脅迫も甲斐がなかった。更にどうしたらいいか。追従してみよう、と彼女は自問した。この人間は病的に虚栄心が強いに違いない。しかしこれはとても彼女の気に入らず、彼の前で品位を落とすと考えるだけで不快になった。...しかし再び自分の娘のことを考え、謎めいた手紙のこと、それをある者が、ひょっとしたらこの男が自分の娘に威力を加えるかもしれないと思った、...

「貴方はこのような卑怯なことはするべきでないでしょう、フーベルト」と彼女は試みた、(彼女はの上更に「レーダーさん」と言おうと思ったが、それを唇に乗せることができなかった)。彼女は続けた、「貴方のように、自らを恃むところのある人間は、...」。

彼女は待機して彼を見つめた。ゆっくりと彼は視線を衣装から外して、彼女の視線に応えた。再び齒から唇を強く引き戻した。 — 彼は彼女を見通した。彼女は屈辱的に思われた。

「済みません、奥方様、思いますに、私はもはや大して自らを恃んでおりません。それ故金も要りません」。彼は彼女を睨むように見つめた。彼は自分のわかりにくい言葉の効果に満足しているように見えた。彼は熟慮し、それから釈明した。「十月二日に私は恵み深い奥方様にその手紙を送ります、郵便で。奥方様はそれに何も支払う必要がありません」。

「明後日ですか」と彼女は尋ねた。

彼は何も良いことを約束してくれなかったと分かった。薄暗い脅威が彼の言葉から響いてきた。彼女がかわすことのできない何ものかであった。彼女は答えようとした。しかし彼は一つの動作を示した。そして従者がそう望んでいるので、恵み深い夫人はすぐに沈黙した。

「奥方様は問い合わせる必要はありません。私は自分が望むことを言うだけです。恵み深い御令嬢は私にとってもひどい仕打ちをなさった。御令嬢を裏切ったことはなかったのです。しかしお父上に訴えて、私を追い出すようにしました。...私は卑怯なことをするべき

ではないと仰有いました。私が奥方様に何かお話しするように、ただそう仰有ったと理解しています。恵み深いヴィオレット御令嬢を」(彼はそれを深淵の皮肉と共に言った)「恵み深いヴィオレット御令嬢を、明後日の朝まで奥方様の目から離されなかったら、何も起きないでしょう、...」。

「娘は車で出掛けました、...」と母親は囁いた。

娘の後ではこの母親が、一 兩人とも何らかの仕方で、この男の呪縛にかかってしまった。彼は何ものか。一人の道化、馬鹿げた、過度に有能とは言えない従者。恵み深い夫人はただ嘲笑してこの従者を我慢して来た。しかし今や彼のことを嘲笑しようと思わなかった。彼を完全に真剣に受け取っていた。もはや妙な癖とか、没趣味ではない、一 危険、脅威、火災の臭いが、何か陰鬱なもの、彼一人がまず知っているものがあつた。

「娘は車で出掛けてしまった、...」と彼女はすでに囁いていた。

彼は彼女を見つめ、それから短く確かに頭で頷いた。彼は言った、「今晚戻って来ます。それからは目を離さないことです、奥方様、明後日朝まで、...」。

彼は再び荷物まとめに向かった。この動作が最終的なものであると、彼女はすぐに悟つた。

「では、お達者で、フーベルト」と彼女は突然言った。「貴方の書類やお金は事務所で受け取るのですか」。

彼はもはや答えなかった。彼は上着の面倒なたたみ方に没頭していた。灰色の、魚のように冷やかな目で、無表情であつた。彼から受け取つたこのイメージ、このイメージを彼女は将来何度も眼前に思い浮かべることになるろう、一 フーベルト・レーダーの最後のイメージである。夫人には忘れられない。...

恵み深い奥方が従者レーダーの小部屋から出て来ると、彼女はそのドアをほとんど小間使いアルムガルトの頭に当ててしまった。アルムガルトは金切り声を上げて、逃げようとした。しかしエーファ夫人は怒っていた。夫人は小間使いの腕を固く握って、手短かに怒って、その解雇を告げた。事務所へ行って、書類とお金を貰い、すぐに荷物をまとめなさい。牛乳馬車で連れて行って貰いなさい。

そう言って、エーファ夫人は料理番アルムガルトを立ったままにさせ、彼女の泣きわめきに少しも耳を貸さなかった。従者レーダーの前で屈辱を受けたという思いは十分にひどいもので、その上従者に聞かれていたのであり、それどころかこのように立ち聞きの女性までいたのであり、我慢できない、立ち去りなさい、一 目の前から。憤怒の満足感に満たされていた。「夫」は従者を叩き出した、自分は料理番をそうする、一 すべてが瓦解する、一 翌日からの家政はどうなるか。十七歳のロッテはどんな料理が得意か。その上七部屋の掃除を受け持つのである。フォン・ブラックヴィッツ御領主は驚くことだろう。

フォン・ブラックヴィッツ夫人はキッチンに行つて、ロッテに状況を打ち明けた。七部屋と、冷たい牛肉のヒレ肉、緑のインゲン豆と、ソースはまだあつた、アスパラガス・ス

ープのこと、 — それにまことに、まだ昨夜の食器洗いがある。「あなた達、言いつけ通りに毎晩食器洗いをしていないの。どうしてなのよ」。

するとロッテはすぐ泣き始めた。嗚咽しながら、自分にはアスパラガス・スープはどうしたらいいか分からない、自分には無理でしょう。自分は叱られたくないし、むしろすぐにお暇を頂きたい、と...

エーファ夫人は、フーベルト・レーダーから聞き知ったことについて、自分の娘への対応について、夫に対して言うべきことについて、これらのことについて沈思していたかった。彼女を煩わし、悩ます千もの事情がある。 — しかし、否、エーファ夫人は十七歳のロッテを慰めなければならなかった。ロッテに、どのようにして乾燥したアスパラガスの鉢から、粉アスパラガスの小さな貯蔵瓶の助けを借りて、「本物の」アスパラガス・スープを作ったらいいか、その秘伝を教えてやらなければならなかった。結局夫人は、この途方に暮れた女性に対し、宮殿の母親に頼んで、一人の小間使いを応援に来て貰うようにすると約束した。...そしてずっと、この反吐の出る人物、アルムガルトが、キッチンドアに聞き耳を立てて、女主人の困惑を喜んでいる思いが生じていた。...片付いていない部屋が七つというのはまさに悪夢である。...

エーファ夫人はゆっくりと農園中庭への道を歩いて行った。中庭を越えて、官吏の家へ向かった。若いパーゲルに解雇の事を通知しなければならない。しかし事務所のドアは閉ざされていて、いつもの札が揺れていた。「事務所、休業。急ぎの問い合わせは別荘まで」。別荘には途方に暮れたロッテ一人っきりで、若いパーゲルは勿論田畑に出ている。解雇された者達が書類を取り寄せようと思っても、別荘へと指示しているこの表示を見ることになる。完全な混乱である。

彼女は両肩をすくめた。反抗しても意味がない。この通りである。彼女は宮殿へ向かった。彼女は、宮殿では少なくとも万事変わらず進行しているであろうと自分に言った。しかし宮殿前にはトランクの積まれた台車が止まっていて、丁度古式のランダウ馬車、名付けて爆弾号がやって来た。父親の太ったハノーヴァー産の馬に先導されていた。

「一体どうしたの」と彼女は驚いて尋ねた。

「お早うございます、若奥様。御領主夫妻は旅立たれます」と老エリアスは報じて、小さな帽子を外した。

彼女は家の中へ駆け、階段を駆け上がって、母親の部屋へ入った。フォン・テッショー夫人はすでに外套と帽子を着用し、安楽椅子に座っていた。夫人の背後にはクックホフ嬢が腋に一束の杖や傘を挟んで持っていた。フォン・テッショー夫人は小間使い達に指示していた。娘達は勤勉に赤らんだ、熱心な、まことに充実した表情で、家具の上にリンネルの覆いを掛けていた。

「あなた、来たのね」と老夫人は言った、「勿論こんな風に出かかるつもりではなかったのよ。勿論あなた達に一度断って行くつもりだったのよ」。

「でも、ママ、こんなに急にどちらへ旅するのです」とエーファ夫人はびっくりして叫んだ、「昨日はパパもそのことを一言も言わなかった」。

「あのね、昨夜、 — 我慢できなかったの」。彼女は頭に触れて、悲嘆の溜め息を吐いた、「あなたの夫がその上愛するノイローエにあの囚人達を連れて来る必要があったわけだし、...」。

「でも、もう去って行きました、ママ」。

「脱走よ、昨夜は目を閉ざすことができなかった。ずっと忍び込む気配を感じて。階段がみしみに言って、一度クスクス笑いが階段で聞こえた。 — いや、今あなた、マルタ、阿呆なあなたのクスクス笑いと丁度同じだったわ」とフォン・テッショー夫人は突然一人の小間使いに対して叱りつけた。娘は真っ赤になって、頭を低くクッションに沈めた。

「それは想像上のことでしょう、ママ。通りでは一人の郡警察が夜警をしていました。それに郡警察署長は仰有っていましたが、...」。

「あのね、私はただ自分の耳しか信じないの。私は出発します。 — あなたの父上も今回は本気で心配してくれています。まずはベルリンへ行きます。 — ホテル・カイザーホーフよ、エーファ。何か用があったらね。 — 私どもはベッドで殺されたくはありません、嫌です」。

そしてユッタ叔母さんも強調して説明した。傘の束を突き上げながら、墓地[キルヒホーフ]よりもカイザーホーフがまだ、と。

エーファ夫人は、この旅行に異議を称えても無駄だと悟った。ただ彼女の父親も進んで同意したことが不思議であった。父親は普段、母が苦情を述べても、愛しいノイローエから離れることはなかったからである。しかしこの旅立ちは一点良いことがある。面倒なく母親から一人の小間使いを得られるであろう。急いで彼女はレーダーとアルムガルトの解雇について報告した。フォン・テッショー夫人は頭を振りながら聞いていた。

「あなたはいつも召使い達と面倒事を引き起こすわね。郎党を余りに甘やかすからです。私の晩禱にもあなたは召使いをもはや参加させていませんよ」。

しかし結局、幾つかの辛辣な意見の後、フォン・テッショー夫人は譲歩した。マルタを応援に行かせましょう、と。しかしマルタが抵抗した。いえ、私は望みません。自分は宮殿へと採用されました。別荘ではありません。フォン・テッショー夫人がマルタを説得し、フォン・ブラックヴィッツ夫人はマルタに賠償を約束し、クックホフ嬢が警告した。 —

しかしマルタは主張を変えず、彼女はその気がなかった。恵み深い夫人に含むところはありません、 — でも望みません。トルートヘン来なさい、 — でもトルートヘンも望まなかった。トルートヘンはそれどころか詫びの口実を述べた。別荘は自分には余りに恐ろしい。村から離れているし、今は囚人達が脱走しています、と。...

「それじゃ仕方ないわね、エーファ」とフォン・テッショー夫人は囁いた、「ヴィオレットのことが心配なら、私どものベルリンへ来させなさい」。

一瞬フォン・ブラックヴィッツ夫人は、これが本当に良いであろうと考えた。しかし言った、「ヴィオレットは父親と車で出掛けました」。

「そう、あなた達の新しい車で。ホルスト＝ハインツはすぐベルリンへ電話したの。あのような車は二万マルクするそうよ。どうしてそんな金があるの。請負に呻いているというのに、...」。

「それで、小間使いはどうしましょう、ママ」。

「そうね、自分でも聞いていたでしょう。 — このようか状況下では強制できません。別荘でこの娘達に万一のことがあれば、私は永劫後悔することになりましょうし」。

「そうね、勿論後悔するようなことはいけません。ミンナかハルティヒ夫人に頼むことにしましょう」。

「力にはなりたいけどね、エーフヘン。でも召使達にはもっと威厳を見せなくてははいけませんよ。時々あなたは一週間キッチンに現れないと言われてますよ」。

ちょっとした当てこすり、改善の誓い、別れ。...

彼女達が馬車の所まで降りて行くと、控えの間ではフォン・テッショー枢密顧問官殿が余所行きのスーツを着ていた。その服は普段のローデングロスのものより、もじゃもじゃ髭の東エルベ田舎貴族にすさまじい印象を与えていた。

「ちょっと、エーファ。ベリンデ、乗車していてくれ。エーファと二言三言話しておくことがある」。彼は娘の腕を取り、一緒に二、三步脇の公園へ行った。「おまえに特に一言言っておきたい、エーファ。おまえの夫には言いたくない。奴も聞き入れはしないだろう。この旅に驚いているだろう、...」。

「ママは、脱走した囚人達のせいと言っています、...」。

「阿呆な。私が二、三人の間抜けな囚人どものせいで逃げると思っているのか。嫌なベルリンへ。ほほ一、枢密農業顧問官ホルスト＝ハインツ・フォン・テッショーがそんな風に見られるのか。一 違う。おまえは一揆について耳にしたか」。

彼は自分の娘を検分するように見つめた。彼女は答えなかった。

「それでだ、おまえも私にそれを応える必要はない、一 それは指は五本と明白に数えられることだ。我が婿殿の突然の帰還、新しい車、...だからおまえの夫は共に闘うつもりだ。少なくとも車の購入金は前もって払って貰っていると願うがな。親分衆のために借金するほどの、馬鹿ではなかろうと思っているが、...」。

エーファ夫人は黙っていた。

「そうか、馬鹿か」とフォン・テッショー氏は喜んで鳴いた、「まあ、誰もがどうしようもない間抜けだ。私の知ったことじゃない。ただおまえが分からん。一 結構、よろしい、水に流そう。一 だからおまえのために言うておく、一揆は失敗する。偉いさん達は好きなように言うがいい。帝国国防軍は一緒に行動しない。私はここ数日ずっと歩き回って、至る所聞いて回った。一 死産だ。この村からも二十人を越える阿呆どもが参加する。村長ハーゼ、狡猾な奴だ、最前線だ。それで二番目の狡猾な奴が我が婿殿、...」。

「パパ、郎党に警告を発すべきでしょう」。

「何を言う。年寄りの言うことを信じろ。誰でも自分の愚行を一人でやらせて貰えないと、腹を立てる。ひょっとしたらちょっとした戦闘になるかもしれない。一 ま、結構。奴等は相変わらず戦闘を止められないのだ。[フランスの]クレマンソー[1841-1929]」とかポワンカレ[1860-1934]といったお歴々が、我々がここで殺し合うのを見ると、互いに腹を抱えて笑うということが、奴等には分からないのだ。だから、エーフヘン、おまえの夫を上手く説得して、ここから離れろ。ここにいたら、何らかの立場表明をしなければならない。厄介事に巻き込まれてしまうぞ。むしろ車で離れろ」。

「夫と一緒に闘うつもりです」と彼女は小声で言った。

「夫をどうして説得するか言ってみせなくちゃいけないのか。今晚フランクフルトへ行きたいと言うのだ。盲腸になっても構わんから、一 とにかく離れろ」。

「夫は好きにさせて、パパ」。

老公は見上げた。「たまげたな」と彼は驚いて叫んだ、「そんな事態か。エーフヘン、おまえはおっそろしく時間をかけたな。いつも、賢い娘を持っていると思ってきたが、...」。

「でも、パパ、...」。

「ま、結構。夫は闘いに行かせろ。車もやられても構わん、...」。彼は言い止めた。自分の気前の良さに驚いていた、「いや、やはり、そこまでは必要ない。エーフヘン、車は明日出発できないように細工する必要があるだろう。フォン・シュトゥットマン殿に聞いてみる、彼は抜け目ない奴だ」。

「その通りでしょう、パパ。パパは出発する、 — 明日の請負料の支払いはどちらへ持って行ったらいいかしら」。

「そうか、請負か。払えるのか。私が戻って来るときでいい」。

「駄目です、パパ。それはできません。フォン・シュトゥットマンさんがその金を今日午後持って来ます。 — その後インフレが続いたら困ります」。

「驚いたな」と老公は叫んで、自分の娘を呆気にとられて見つめた、「おまえらが明日金の用意ができるとは思わなかった。 — どうしようか」。

「パパ、誰宛に支払ったらいいか、教えて。その金は十月一日以降持っていたくないから」。

「明日は一揆だ。明日マルクは落ちるに落ちる。エーフヘン、その金を自動車代にしろ」。

「それでは請負の代わりに車を押さえますか、パパ。でも文書でそう書いてね」。

「しかし、ひょっとして明日もうその車がどんなになっているかだな。金の件では親戚関係はなしだ。それでは、そのために幾らか支払うことにしよう。若い男、パーゲルとかいう男をな、カイザーホーフの私の所まで寄越せ。運賃は私が払おう、三等車だ、勿論。それに食事代も持つか」。

「そうは行きません、パパ。理由があって、アヒムが自分でその金をパパに渡すようにしたいのです」。

「そんなことか」と老公は憤然と叫んだ、「ただ、おまえと話さず、黙って旅立っていたら良かったな。その金をどう手放したかものか、おまえらは分かったろうに。だからアヒムが私の後を追いかければいい」。

「パパ、アヒムはそうしないでしょう。だって明日夫は何か計画しているから」。

「しかし追って来て貰わんといかんだろう。借金払いが優先だ」。

「私どももそうしたいと思っています、 — でもここの地で」。

「そうか、おまえは私に残って欲しいのか。いや、おまえの父親は抜かりはないぞ。エリアス、ちょっと来てくれ。 — いいか、エリアス、今晚か、明日早朝、私の婿から一山の紙幣、今日お金と呼ばれているものを、受け取るのだ。分かるか」。

「畏まりました、枢密顧問官殿」。

「それを私の古い褐色革の旅行バッグに詰めろ。それを持って早速駅まで乗り、すぐの列車でホテル・カイザーホーフの私の所まで向かってくれ。分かるな、エリアス」。

「ヴィルヘルム広場ですな、枢密顧問官殿」。

「その通り、エリアス。誰とも口をきいてはいかん。フリードリヒ通り駅でタクシーに乗るのだ。しかし旅行バッグを一瞬も手放すな」。

「勿論です、枢密顧問官殿」。

「エリアス、人混みに紛れて、バッグを切り取る者もいる。ただ取っ手だけ持って、カイザーホーフに到着することになるぞ、...」。

「バッグを離しません」。

「そうだ、エリアス。中に一個石を入れて、重さを感じられるようにするのだ、...」。

「畏まりました、枢密顧問官殿」。

「それで結構、万事オーケーかな、エーフヘン」。

「ただまだ請負領収が必要です、パパ」。

「十三時と告げている。まことに猜疑心の強い娘だ。金が合っているか確かめずに領収を渡せないだろう」。

「でも私どもも領収がなければエリアスにその金を渡せませんよ」。

「聞いたか、エリアス。娘はおまえを信用しとらん。娘が乳母車で泣いたとき、おまえが何度もおしゃぶりを娘の口に入れてやったものだ。ーそれが今、娘はおまえを信用しとらん。では、エリアス、今至急領収書をおまえに振り出す。それで正確に貰う金を記入するのだ。何十億、何百万とー正確にな、エリアス」。

「確かに、枢密顧問官殿」。

「それから時刻だ、分単位の時刻だ。つまりドル相場が変わる十二時頃には注意するのだ。待て、お主の古時計は正しく動いているか」。

更に厳密に時計が比較された。エリアスは領収書を得た。ランダウ馬車からフォン・テッシュォー夫人がすでに五分前に叫んでいた。「ホルスト＝ハインツ、列車に間に合わないわ。ーエーフア、どうしてそんなに父親を引き留めるの」。

枢密顧問官は娘と握手して、一瞬躊躇ったが、それから彼女の頬に接吻をした。

フォン・ブラックヴィッツ夫人夫人はゆっくりと農園中庭、別荘へと戻って行った。空になる、空になる、あたかも災いの地であるかのように、皆がノイローエから逃げて行く。

120

オスターデの「黄金の帽子亭」で

フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は、商売については何も知らない者達、皆に、突然出現する商売感覚を有していた。確かにビルンバウムの義弟エーゴンがホルヒ社の車を称賛したものの、しかしとても高価だと見なしてから、騎兵隊長の頭に次の考えが浮かんだ。自分の妻に偽って自分が誇ったことを本当のことにしてしまおう、つまり、その車をオスターデの一揆の親分衆に払って貰うという考えに至った。

優越感の表情で彼は義弟に対し、車は真に抜け目ない者達にとって、その費用分の費用が時にかからないことがあると請け合った。つまりほぼ皆無で、つまり正味全く皆無であると言い、ーそして暗示や目配せ、親密な打ち明け話して、彼の義弟の頭にも、新しい車と間近の一揆の間に或る関連が生ずるように計った。一揆については皆がとうに耳にしていた。騎兵隊長はいずれにせよ最も遅く耳にした。しかし彼の父親の実の息子として、若きテッシュォーは、このような車を吐き出すような企画は、全く劣等とは言えないであろうと述べた。

それから意気揚々と騎兵隊長は、側にそれに劣らず意気揚々としたヴァイオを連れて、家に戻って来ると、帝国国防軍は彼の車代を支払う責務があるとすでに固く確信していた。どうしてあの小さな少佐が、彼に一台の車で参加するように命ずるに至ったのか。祖国は

自分の血なら、いつでも彼に対し要求できよう。しかし自分の財産はもっと儉約的に扱う必要がある。そしてエーファと義弟の不吉な予言が若干耳に残っていたので、騎兵隊長は、すぐ翌日、まだ一揆前に、一度車でオスターデへ出掛け、帝国国防軍の戦友を厳しく追及して、ささやかな初回金の支払いをもぎ取る決意を固めた。十月二日にはきっちりと車への支払いを要求できるようにしよう。どこからこの金を受け取ったらいいか、騎兵隊長にはさっぱり分からなかった。しかしそのことで思い悩むのは余計なことであろう。明日オスターデでそのことは分かるであろう。

彼は横の方を向いて、満足して思わず口ずさんでいる娘に、オスターデへドライブに行く気があるか尋ねた。

ヴィオレットは勿論夢中になった。彼女は自分の父親の首にすがって、とても温かい接吻をして、騎兵隊長はほとんど少しばかり憂慮した。しかしこれは多分単にアルコールのせい、魅力的な車でのドライブや、今やっと終わった長い、単調な軟禁状態の週のせいであろう。

それでも騎兵隊長は一瞬、正しく勘付いていた。この接吻は父親相手のものではなく、恋人相手のものだった、と。新しい車で[娘にとって]大事なこと、ドライブで大事なこと、
— オスターデは少尉を意味するのだ。オスターデへ出掛けて、少尉に会わないなんて、あり得ない。

ただ母親を考えると、ヴィオレットは若干心配であった。それで彼女は十分用心深く尋ねた。「ママはどうするの」。

父親は正当に、すぐ容易に苛立った。「おまえの母親はこうした軍事的行動には反対だ。ママには打ち明けられないのが最も良いことだろう。この件はきちんと済ませて、成果を事後報告してびっくりさせるのが最も素敵だろう」。

「でもひょっとしてママも同乗したいのじゃないかしら」。ヴァイオはとても案じていた。ママは少尉と再会した際にきつと面倒なことになるだろう。「それともママは私が一緒に行くのを許さないかしら」。

「ヴィオレット、おまえは私が許しているのだ」。

それはとても一家の家長らしく響いた。しかし心の中で、騎兵隊長は娘に対する自分の決定権に余り全面的に自信はなかった。彼は娘のことは余り分らない。ヴィオレットがたった今接吻した流儀は直接不安を抱かせるものであった。しかし多分エーファも同様に余り分かるまい。何でもないこと、更に何でもないことで、課された軟禁状態は真に不面目なことであつたらう。有り難いことにヴィオレットは根に持っていない。いや、エーファは最近、
— その償いに、
— もっと娘に親切に接しておれば良かったと思うぞ。いや、ヴィオレットはオスターデへの遠出に立派に値することをしてきたのだ。

「今晚更にママと話してみよう。しかし言ったように、同乗するのは好まないだろう。時間ぴったり下に来なさい。七時にコーヒーを飲んで、七時半に出発だ。
— 階段ではこっそりとな。
— おまえの母親は長く眠るのが好きだ」。

またもや一刺し、配慮しているように聞こえるけれども。自分が母親の立場を娘に対して貶めるのは、騎兵隊長にとって必ずしも心地良いものではなかった。しかし残念ながらエーファは別様には望んでいない。夫人が彼を一人の道化のように扱って、療養所に送り、荘園の管理から排除するとしても、彼には自分の娘に、自分は一廉の男であり、母親にも

小さな弱点があることを示す権利があろう。自分はまことに慎重に行動しているのだ。

それからその晩の諍いがあった。エーファ夫人は車への同乗を誘われなかった。その知らせすらなされなかった。このことは忘れられた。父親と娘の間の約束は忘れられなかった。こっそりとするのは、忘れられなかった。ヴァイオは時間通りに起きていて、猫のように軽い足取りで階段を忍んで降りて来た。

食堂で彼女は朝食のテーブルを用意している従者レーダーと会った。彼女は彼とようやく話すに至ることほど自然なものがあったろうか。彼女は彼を長いこと避けていた。彼は彼女にとってとても不気味になっていた。彼と一言も話す必要がなくなって、彼女は喜んでいた。彼女はもはや忘れずに、自分の部屋のドアを、昼も夜も施錠した。少尉との恋愛話しは展望なくなっていた。彼女ですら、彼は彼女を諦めたと認めざるを得なかった。彼女のせいではなく、小マイヤーが差し押さえたあの手紙の件で、彼はとても怒ったのであった。

しかし今やすべて別様になった。彼女は父親とオスターデへ車で行くのである。今日の午前にも自分のフリッツに再会するであろう。彼は大きな出来事を前にしている。彼の仕事は勝利するであろう。明日にも彼は、人目を避けなければならないという秘密の陰謀者ではもはやなくなろう。明日、彼は偉大な男となるであろう。父親も言っていた、一人の英雄だ。この人が公に自分の恋愛を、彼女への愛を告白できるようになる。そうなったら内緒事はもはや無用であろう。彼に対して隠さなければならないものは何もなくなる。一 そうなったら、従者レーダー、彼女のことを若干知っているレーダーも要らない。

彼女は自分の手紙を返すよう要求した。

彼は手紙のことは知らないと言った。

彼女は、すぐカッとなって、そんな卑劣なことをしては困ると言った。

彼は、自分はまさに卑劣な従者であって、上品な少尉ではない、と答えた。

彼女は釈明した、自分はこれからオスターデの彼の許へ行きます、彼をこちらへ送ります、ひどい目に遭いますよ、と。

従者レーダーは、彼女をただその悲しげな、死んだ目で見つめた。彼女はぞっとした。自分が間違ったことを仕出かしたと気付いたが、遅すぎた。請い始めたが、遅すぎた。彼女は彼に申し出をし、彼に金を約束した、いや、それどころか、宮殿での老エアスの職を約束した。祖父母の許でそれを得られるようにしましょう、と。

彼はただ微笑した。

彼女は長いこと思案した。彼女は青ざめた。自分はどうしてもその手紙を取り戻さなければならぬ。彼女には分かっていた、自分のフリッツは、二度目のこのような軽率さを許さないだろう、と。小声で、詰まりながら、彼女は約束した。今一度彼に、かつて彼がしたこと、...分かるでしょう、...自分の部屋で、...許しましょう。彼女は、すぐにその手紙を渡さなければなりませんよ、と誓った。...

彼女は自分の母親よりも踏み込んだ。彼女は彼が揺れるのを目にした。あの薄暗い時の思いで、彼の人生の至高の享受がその痩せた頬に昇って来て、頬骨の上に円状の赤い斑点を浮かばせた。彼は呑み込んだ。

それから彼は考え込んだ。それまで彼は長く熟考していた。何週も何週も。彼はこの手紙が或る役目を果たすことになる明確な案を有していた。ヴァイオレットでは十分でない。

ヴィオレットは大したことはない。単に一人の女で、少しばかりアルムガルトよりも声望があるだけだ。 — 否、少尉が関連するのだ、少尉を巡る心痛が関連する、この若造への彼女の愛と、自分、従者に対する彼女の反吐が関連するのだ。

彼は尋ねた、「恵み深い御令嬢は今日オスターデへ行かれますか」。

彼女は早速、勝利を確信した、「聞いたでしょう、フーベルト。すぐ出発よ。その手紙をすぐ取って来て、 — パパが下りて来る前に」。

「恵み深い御令嬢が今日オスターデへ行かれず、貴女が私に約束なさったことを今晚許されますならば、今晚その手紙をお渡ししましょう」。

彼女はほとんど彼に面と向かって笑いたかったことであろう。彼のせいで少尉のいるオスターデへのドライブを諦めるなんて。白痴じゃないかしら。それから怒りに駆られた、「すぐにその手紙を返さないと、私はすべてパパに話します。すると貴方は首で、二度と、生涯、職に就けませんよ」。

「恵み深い御令嬢のご随意に」と彼は全く動ぜずに言った。

それから騎兵隊長が加わった。彼は従者に格別変わった点を見いだせなかった。従者は全くいつものように、一片の材木のように生気がなかった。しかしヴィオレットは激した。三分しないうちに、彼女は沸騰した。ひょっとしたらレーダーは、それどころかこれを望んだのかもしれない。動じない顔をして彼は恵み深いご令嬢に、彼女がバターを望んだとき、ラードを渡した。塩の代わりに砂糖を渡した。涙を出しながら、ヴィオレットは叫んだ。もう我慢できない、父親はこの惨めな奴を即刻叩き出して欲しい、と。何週間も前から毎日、この人は私を苦しめ、擲擲っている、一通の手紙を横領している、と。...

動じずに、魚のように冷ややかに従者レーダーは騎兵隊長に目玉焼きの盆を差し出した。騎兵隊長は、とても不機嫌な夜を過ごしてすでにうんざりして降りて来ていて、早速怒った。フォークで彼は卵のフライパンの縁を突きながら、自分の娘に、一体どんな手紙か大声で聞いた。一体全体どんな手紙を書いているのか、従者殿宛なのか」。

彼は向き直って、従者を威嚇して見つめた。従者はサービスを続けた。

ヴィオレットは急いで、脈絡のない説明をした。自分は森林官のお喋りから武器保管所が危ないと思った。少尉に従者レーダーを通じて、二、三警告の行を送ろうと思ったの。するとこの人はその手紙を横領して、返そうとしないの、...

騎兵隊長は燃え上がった。彼は従者を叱りつけた。「貴方は私の娘の軍事上の手紙を横領したのか。貴方は武器保管所を手中にしている」。

フーベルトは目玉焼きの盆を手から配膳台に置いた。彼は騎兵隊長を冷たく見つめた。相手の悠然さほど怒りを更に焚きつけるものはない。彼は言った、「済みません、騎兵隊長殿、非合法の武器保管所です、...」。

騎兵隊長は従者の濃い灰色の上着の折り返しを掴んで、それを揺さぶった。フーベルトは無抵抗に揺さぶられていた。騎兵隊長は叫んだが、しかしそれに対して従者は叫ばなかった。(小間使いのアルムガルトが後に、従者は騎兵隊長を脅したと主張したが、これは嘘である。アルムガルトには高慢ちきなレーダーが我慢ならなかったのである)。

騎兵隊長は叫んだ、「裏切り者は壁に並べだ」。一瞬後に彼は言った、「貴方がその手紙を渡すなら、これは許して、なかったことにしよう」。

ヴィオレットは叫んだ、「パパ、首にしてよ」。

騎兵隊長は従者を放して、陰気に言った、「何か弁明することがあるか。さもないと即刻解雇だ」。

ヴィオレットは震えた。彼女には分かっていた。フーベルトはただ口を開きさえすればいい、父親に若干話すだけでいい、自分の負けだ、と。しかし彼女は、フーベルトは何も話さないだろう、彼には父親に彼女の秘密を打ち明ける興味は全くなかろうという思いから、大胆に賭けていた。

そして彼女の思い通りになった。

フーベルトはただ言った、「それでは即刻解雇されます」。

彼は今一度食堂を見回した。彼は諍いの間ずっと腋に挟んでいたナプキンを配膳台に置いた。彼は目玉焼きを見つけた。冷静に彼は尋ねた、「卵を今一度温めさせましょうか」。

返事はなかった。

彼はドアの所へ行き、軽くお辞儀した。彼は落ち着いて言った、「更に快適なドライブをお祈りします、騎兵隊長殿」。

彼は去った。ヴィオレットに一瞥もしなかった。

騎兵隊長は更に物思いに耽って食べ続けた。怒りのせいで食欲が落ちることはなかった。食欲は増進した。物思いに耽って、彼は娘を見つめた。それから二杯コニャックを飲み、車に乗った。彼はただ言った、「ではオスターデへ、フィンガー」。 — そして黙り続けた。

騎兵隊長の性情から不可避のことであったが、行動の周期の後では、自分の行動についての沈思の周期が到来した。騎兵隊長は自分の従者を投げ飛ばしてしまった。今や彼はこのことについて、つまり何故本来自分は投げ飛ばすに至ったのか沈思し始めた。この件を明瞭にすることは容易でなかった。後になってみると、自分が怒っているときには自明と見えていたことがかなり不分明になった。此奴は単に破廉恥になっただけか。勿論彼は破廉恥になっていた。騎兵隊長はこのことをしっかり思い出した。しかし何故破廉恥になったのか、何を彼は本来語ったのか。

ヴィオレットは黙って父親の側に座っていた。彼女は慎重になって、今彼の沈思をかかす生娘らしい戯れ言を言って、彼の沈思を妨げることのないようにした。普段はこの戯れ言を彼には用意していて、いつも彼を上機嫌へと誘い出すのであったが、そうしなかった。一人の子供は両親の欠点を、両親がその子供らの欠点を見抜くよりも上手に見抜くものである。一人の子供は情け容赦なく、鋭く見ている。愛があるからとか、好きだからといって、その目が新世界への最初の発見の旅で買収されることはない。今このとき考えを逸らす言葉はいずれも邪推を招くだけであろう。彼女は、彼が語り、問い始めるまで、待たなければならない。このパパは、或る質問から容易に別の質問へ移り、移りながらその元来の目的をすっかり目から逸らしてしまうそうした人々の一人なのだから。

その上、ヴィオレットは更に何か別なことをしていた。彼女は、父親が両コニャックを飲むのを見たとき、考えが閃いた。彼女は前日の午後、叔父宅でかなりの量のリキュールを飲んでいて、彼女は何杯かすら覚えていなかった。父親もそのことに気付いていなかった。このリキュールは彼女に効き目があった。彼女は、母親に反抗するという度胸を得られた。飲まなければ決してその度胸は得られなかったであろう。彼女は闘争心と上機嫌とを酒で得た。 — 父親が朝食のテーブルから、コート着用のために去って行くと、彼女

は素早くドアの方を用心して見回して、父親のグラスにコニャックを一杯注いだ。そのグラスの縁まで注いで、それから一気に飲み干した。そして更に迷うことなく、父親のように一杯目の後、二杯目のグラスとした。

さて彼女は快適に車の隅に体を収めて座っていた。彼女は温かく庇護されていて、ゆっくりと窓では風景が移り過ぎた。果てしない田畑の広がり、荒涼として、あるいはわずかな、遠くに点在する耕作の連獣が見られた。ジャガイモ圃場区が丘に沿って、天に接して、濡れてみすぼらしくなって、ほとんど枯れている雑草と共にあった。ジャガイモを掘る者達の長い列が、跪いて進みながら、三齒の鋤を手にしていて、一瞬頭を上げ、通り過ぎて行く車を見送った。最後にほとんど果てしない森となって、そこでは木々が良く道まで密接に迫っていて、一本の枝が音立てて車の窓ガラスに触れた。中では驚いてのけぞり、自らの驚きを笑い、その枝が窓ガラスに残した多くの小さな水滴によって、その窓ガラスが露を帯びる様を目撃した。しかしそれは走行の時の風ですぐに乾いた。

田舎道、この雨で柔らかくなり、ジャガイモ運送で傷んだ脇道は、ノイローエからオスターデへと通ずるものであったが、悪路であり、強力な車もそのスピードを活かせなかった。ほとんど時速三十キロを越えないスピードで、運転手のフィンガーは注意深く、田舎の道路普請の穴ぼこや水溜まりの上を運転して行った。しかしこの緩慢なスピードにも関わらず、エンジンの低いうなり声や、車の柔軟なスプリング、スムーズな滑りの走行は、ヴィオレットの心に快適な、安静の力の感情を生じさせた。あたかもエンジンがその無私の力強さの一部を彼女の上や彼女の中に届けるかのように思われた。休んでいる体の中でゆっくりと広がって行くように思えるアルコールを通じて、最初は温かいものとして、次には多くの映像の姿となって、この感情が強められた。映像は現れたかと思うとまたすぐに消え、それでも何か陽気さを彼女の中に残した。

その若い体はこの毒を貪欲に飲み込んでいた。味覚と喉が、アルコールの臭いに対して閉口していた。素早く呑み込んだために、彼女の全身が揺れていた。しかし舌には合わなくても、それだけ一層彼女の体の中に別の反応を引き起こし、脳であれ、更にもっと神秘的な中枢神経であれ、心地良かった。この中枢神経ではしばしば我々の意志に反して、何を憎むべきか、何を愛すべきか決定するものである。今やヴァイオは黙ったまま父親の側で、オスターデまで、「彼」の許まで、行きたかったことであろう。もはや議論となっても、恐れてはいなかったのであるが。今まで進んで来たように、彼女は完全に幸福であった。彼女は自らの裡に安んじていた。

結局勿論次の展開がある。ヴィオレットが自分の少尉との再会について格別快適な物思いに耽っていたとき、丁度その瞬間に騎兵隊長が頭を上げて、かなり不機嫌に尋ねた、「どうしてそもそもこの少尉と知り合ったのだ」。

「でも、パパ」とヴィオレットは非難一杯に叫んだ、「あの人は皆が知っていますよ」。

「皆がか。私は面識がないぞ」と騎兵隊長はまことに苛立って反駁した。

「でも、パパ。パパはあの人を昨日褒めたじゃない」。

「そうだったな」。騎兵隊長は若干当惑した、「しかし私は彼とは面識はない。一面識と呼ぶ意味でな。私には紹介すらされていない。私は彼の名前すら知らない、...」。

「私も知らない、パパ」。

「何だと、そんな阿呆な。騙すな、ヴィオレット」。

「でも、私が言っているのよ、パパ、誓ってもいい。村中で彼は単に少尉フリッツと呼ばれているの、パパ。森林官もそう言っていたでしょう」。

「私にそのことをおまえは言わなかったぞ。私を信頼していないな、ヴィオレット」。

「でも、パパ。パパには何でも話しています」。

「一揆と少尉について話していないぞ」。

「パパは旅していたから」。

「では、それ以前に彼は現れていないのか」。

「そんな、パパ。この何週かよ」。

「それでは彼は、おまえとフーベルトと一緒に夜、農園中庭と通ったという時の男ではないのだな」。

「それは森林官クニーブッシュよ、パパ。もう百度となく話してきたことよ」。

「それではママによる冤罪というわけか」。

「そうよ、パパ」。

「私はママにいつもそう言ってきたのだ」。

騎兵隊長は再び沈黙に沈んだ。しかしこの沈黙は先の時の沈黙ほどはや陰鬱なものではなかった。フォン・ブラックヴィッツ殿は、この案件はすでに納得の行く解明が得られたという気になった。彼にとってとりわけ快適に思われたのは、またしても自分の妻に対して自分が正しかったという思いであった。彼は妻に劣っていると感じており、今や格別にそうだと感じていたので、自分は彼女に勝っていると再三証明しなければならなかった。それでもまだ納得が行かない唯一の思いは、ヴィオレットが少尉宛に警告の手紙を自分に隠れて送ろうとしたことであった。これは娘が、自分に対して信頼していないか、あるいはやはりこの少尉と秘密の関係にあるということを証している。

突然彼は、ヴィオレットはやはり自分を騙したのだという熱くたぎる思いに襲われた。娘が武器保管所で少尉と会ったとき、両人は互いに面識がないかのような振りをしていた。いや、この少尉はヴィオレットに対し直接不法になった。それなのにヴァイオは彼宛にこの手紙を書いている。では二人は自分を騙そうと思ったのだ。それとも両人は本当にその後知り合ったかもしれない。――しかし何故ヴァイオは森林官に関する彼女の警告を口頭で伝えなかったのか。

これは騎兵隊長にとってまことに難問であった。狂おしく複雑な話しであった。自分は集中して沈思しなければならない。この件を解明するためには十分抜け目なくなければならぬ。

「それで、ヴァイオ」と彼は不機嫌に額に皺を寄せて尋ねた。

「何、パパ」。彼女は用意万端そのものであった。

「我々が少尉と武器保管所で出会ったとき、おまえはもう彼と知り合っていたのか」。

「勿論違うわ、パパ。だったらあの人私にあんな風にしないでしょう」。しかしヴィオレットは危険を感じた。父親がこの思考回路を進むことは賛成できなかった。それで彼女は反撃に出た。「ねえ、パパ」と彼女は精力的に言った、「パパもママと同じように考えていると思うの。私には男の影があるって」。

「何だと」と騎兵隊長は素早く答えた。「ママと同じように」という魔法の言葉が早速、彼の防衛力を奪った。それで彼は考え、それから邪推して尋ねた、「男の影とはどういう

意味だ、ヴィオレット」。

「そうね、抱き締めキスとかそんなもの、パパ」とヴィオレットはかの生娘らしい反抗心で言った。この反抗心が丁度適切に思えた。

「抱き締めキスとは嫌な言葉だ」と騎兵隊長は怒って叫んだ。「誰からそのような言葉を聞いたのだ」。

「小間使い達からよ、パパ。皆がそう言っている」。

「我が家の小間使いもか、アルムガルトもロッセもか」。

「そうよ、パパ。皆がそう言っている。でもまさにアルムガルトからとかロッセから聞いたとは誓えません」。

「奴等を叩き出してやる」と騎兵隊長は自らつぶやいた。これは存在の不都合の事柄をこの世から片付ける際のまさに彼の流儀であった。

ヴィオレットは聞いていなかった。彼女はこの聴取の回路に満足していた。それで彼女は笑って、語った。「最近私は聞いたわ、パパ。或る娘が村の別の娘にこう言っていたの、『居酒屋に来たのは、ダンスが目的なの、それとも抱き締めキスが目的なの』と。ー私は笑わざるを得なかった、パパ」。

「それは笑い事ではない、ヴァイオ」と騎兵隊長は怒って叫んだ、「そのようなことはただ厭わしい。そのような事は二度と聞きたくないし、おまえがそのようなことを二度と聞かないように願っている。ー抱き締めキスとは全く下劣な言葉だ」。

「キスと同じことではないの、パパ」とヴィオレットははなはだ驚いて尋ねた。

「ヴィオレット」と騎兵隊長はほとんど吠えた。

彼の怒りの叫び声は窓ガラス越しに運転手まで達したに違いない。彼は振り向いて、問うような顔をした。フォン・ブラックヴィッツ氏は、怒りの仕草で、更に運転を続けるように、この件は彼とは何の関係もないと示した。運転手は分からず、ブレーキを踏み、止めて、窓ガラスを開けて尋ねた。「何でしょうか。飲み込めなかったのです、騎兵隊長殿」。

「いいか、更に運転を続けて欲しいのだ」と苛立って騎兵隊長は叫んだ、「ずっと走り続ける」。

「畏まりました、騎兵隊長殿」と運転手は丁重に答えた、「二十分すると多分オスターデでしょう」。

「では出発」と騎兵隊長は今一度言った。

窓ガラスが再び閉まって、車は進んだ。

そこで初めて騎兵隊長は閉ざされた窓ガラスに向かって苛立って叱った、「ぼけなす」。それからより穏やかに娘に向かって言った。「多くの事柄に上品な言い回しと下品な言い回しがある。私は食らうと言っちゃいけない、あなたは食べるだ。だから上品な人間はキスに対して、例の別な、淫らな言葉を遣ってはならない、...」。

ヴィオレットは一瞬熟慮した。それから彼女は言った。父親に対して満足して目を輝かせていた。「分かったわ、パパ。こうでしょう、パパが上機嫌のときは、参ったしくじったと言うけれど、不機嫌なときは、私が決して言ってはならない言葉で言う、そうでしょう、パパ」。

騎兵隊長はオスターデまで一言ももはや言わなかった。ヴィオレットはもはや話しかけられなかった。彼女はとても満足していた。

さて、彼らはオーダー川に沿って進んで、若干活気づき、騎兵隊長は運転手に、旧マルクト広場の「黄金の帽子」亭で止めるように指示した。「黄金の帽子」亭で将校達は交際する。そこで午前中座り込み、新聞を読み、一杯のシェリー酒やポートワインを飲み、工兵は砲兵隊の戦友に挨拶し、聖女バルバラ[砲兵隊]の使徒達は、工兵兵舎での最新の出来事を知るのであった。ー カジノを除いて、中立的な場であった。勿論大地主階級も「黄金の帽子」亭を訪れた。

騎兵隊長は新しい車を中庭へ進めさせず、このホテルの前で待っているように指示した。「すぐまた先に進むから」と彼は運転手のフィンガーに語った。

しかしすぐまた先へ進む意図は少しもなかった。彼は新しい車の輝きをすべての到来者にすぐ披露したかったのである。

客室には誰もいなかった。少なくとも騎兵隊長にとって問題となる人物はいなかった。単に二、三人の市民達だけであった。騎兵隊長自身、市民服であったが、自分を市民の一人に数えていなかった。

十一時を少し過ぎていた。この時間に、ひょっとしたら時によりやく十一時半に、将校達はやって来る習慣であった。騎兵隊長はすべての挿絵入りの雑誌を集め、すべてのジョーク誌を集めた。自分の娘との会話は問題にならなかった。彼女にはかなり立腹させられていた。彼は自分には一杯のポートワインを注文し、ヴィオレットのためには一杯のブイヨン注文した。ー そしてその雑誌を読みふけた。

この娘が今朝もまた自分の気分を台無しにしたことは実に残念なことであった。ノイローエでは生涯楽しくなれないであろう。騎兵隊長はこの三分間真剣に、ノイローエを諦めて、再び軍に戻るという考えを吟味した。自分はただこの一揆を待ちさえすればいい。するとあらゆる可能性が開けてくる。しかしようやく明後日その決定を下せば良いのだと安心することになって、彼はクラデラダーチュ[てんやわんや]誌に没頭し、政府に対する最新の攻撃を読んだ。

ヴィオレットは座っていて、窓からマルクト広場を覗いていた。明日大きな一揆が予期されていた、七千万人の民族の憲法と政府を完全に変えるかもしれない町にしては、このマルクト広場は驚くほど平穏に見えた。ジャガイモとかキャベツを載せた二、三の百姓の馬車が乗り入れて来て、二、三人の女性が市場用バッグを持って行き来していた。ー 何も目立つこともないし、何も変わったこともない、とりわけ制服姿の人がいない。

「パパ、今日はそもそも制服姿の人を見かけないわ」とヴィオレットは叫んだ。

「その人らは今日、散歩より別な事があるのだ」と騎兵隊長は鋭く答えた、「私は読んでいるところだ」。

しかし彼は数瞬後に、新聞を下ろして、同様に外の広場を眺めた。時計を一瞥して彼は給仕に叫んだ、「将校の殿方達はどこにいるのだ」。

「もういらしている頃なのですが」と時計を見た後で給仕は答えた。

この明確な情報に完全に満足して、騎兵隊長は二杯目のポートワインを注文した。ヴィオレットも一杯頼んだ。しかし騎兵隊長は脅して言った、「おまえはブイヨンであろう」。

微かに微笑して給仕は去った。

ヴィオレットははなはだ面目を失ったと感じた。二度と「黄金の帽子」亭には来ない。パパは実にはしたくない。目を光らせて彼女は広場を見つめた。車には運転手フィンガーが

座っていた。彼女は尋ねた。「これから先どこへ行くつもりなの、パパ」。

騎兵隊長は縮み上がった、「私がか、どこへも行かんぞ、ヴァイオ」。

「運転手に言ったでしょう、すぐにまた先に進む、と、パパ」。

「要らぬお節介だ」と騎兵隊長は気分を害して言った、「ちなみに午前中から若い娘がアルコールを飲むものではない」。

彼は黙した、ヴィオレットも黙っていた。しばらく両人はマルクト広場を見つめていた。しかし何も起きなかった。結局騎兵隊長は三杯目のポートワインを注文するしかなかった。彼は給仕にととても苛立って尋ねた。一体将校の殿方達はどこにいるのだ、と。

給仕は、自分にも分かりませんと格別遺憾の意を述べた。

慰めようもなく、ますます苛々して両人は窓から見つめた。市民の者達はとうに雑誌類を取り戻していたが、ただ「クラデラダーチュ」誌はまだ騎兵隊長の手の中にあつた。時々彼はそれに視線を向けた。しかし洒落は面白くなかった。今の状況は実際洒落にならない。一体全体自分はここ退屈なオスターデで一日中、何をしたらいいのだ、将校連が姿を見せないのであれば。家での昼食はもう片付けられていよう。その上、彼は今すぐ家に戻る気は毛頭なかった。夕方早々に、彼はフーベルト解雇について彼の妻の言葉を聞くことになるであろう。一番良いのはこのの両兵舎のうちの一つに出掛けて、尋ねることであろう。しかし残念ながら自分は丁度ヴィオレットに言ったばかりだ、更に進む気はない、と。

彼の娘の或る動作が彼の目を引いた。彼女はととても没頭して、夢中になって、客室のドアの方を凝視していた。それで騎兵隊長はすっかり作法を忘れて、椅子の上で向き直って、同じように見つめた。

ドアに現れたのは、灰色のニッカーボッカーに黄緑色のウィンドブレーカーを着た若い男であった。彼はこの酒場を点検して見ている、それから給仕のいるビュフェへ向かった。この男は上下不揃いの市民服を着ていてかなり変貌して見えた。騎兵隊長は彼を見知るまで、かなり時間を要した。それから彼は高く跳び上がり、この若い男の許に急いで行き、この気分転換を喜び、彼に熱く挨拶をした。「お早う、少尉殿。御覧の通り、今日早速参上したのだ、...」。

この若い男は鋭く給仕に呼びかけた、「お兄さん、煙草二十本」。

彼は騎兵隊長を冷ややかに見つめた。それから決心してとても控え目に「お早うございます」と言った。

「お忘れですか」と騎兵隊長は叫んだ、この対応にととても驚いていた、「フォン・プラックヴィッツ騎兵隊長です。昨日も急行列車で会いましたな、少佐殿の」、彼は名前のみを囁いた、「リュッケルト、それに貴方、...私は、...」、更に声を大きくした、「早速私は車を買いました。かなり上等の車です。ホルヒです。ドアの前で御覧になったと思いません、...」。

「そう、そう」と少尉はぼんやりと囁いた。給仕が出て来た。少尉は自分の煙草を受け取って、紙幣を渡し、お釣りに感謝し、尋ねた、「殿方達はまだなのか」。

給仕は二文章言った。「とうにお見えのはずなのですが。私にも分かりません」。

「そうか」と少尉はただ言った、しかし騎兵隊長にも、このことは相手にも良くない知らせであると感じられた。

給仕は去った。両紳士は一瞬黙って見つめ合った。

少尉は決心した。「済みません。私はとても忙しくて、...」。

彼はそれを全くとりとめもなく言って、出て行くこともせず、立ち止まったまま、何か騎兵隊長から期待しているかのように隊長を見つめた。

騎兵隊長は車購入の知らせがほとんど印象を与えていないのを見て、とても傷付いた。それでも彼は少尉を去らせなかった。少尉が今となつては、自分が話し、何か語ることができ、何かを聞き出せる唯一の人間であった。彼は言った、「ちょっとだけ、私の席に腰掛けて頂けませんか、少尉殿。何かお話ししたいことがあります、...」。

少尉は明らかに深く考え込んでいた。彼は手を動かした。拒絶的に彼は言った、「私は本当に忙しいのです」。

騎兵隊長が手で招待の仕草をしたとき、彼は一緒にテーブルに向かった。その間ずっとヴィオレットは彼から目を離さなかった。

「私の娘をご存じでしょう、あの、...」。騎兵隊長は当惑して笑った、「いや、貴方のお名前を忘れてしまった、少尉殿」。

少尉はヴィオレットの視線を受けて、若干一層目覚めて来た。彼女は彼をととても懇願するように、愛情込めて見つめていて、すぐに彼の中で強烈な拒絶反応が生じた。この娘は相変わらず、私との関係は終わったということを知っていない。まずは素っ気なくしなければならぬ。

「マイヤーです」と彼は自己紹介した、「マイヤー、マイヤーはとても快適な、とても便利な名前です、そうでしょう」。

彼は彼女の視線を見た。この視線は文字通り恵みと許しを乞うていた。

更にもっと鋭く彼は言った、「いや、恵み深い御令嬢を存じ上げているとは思いません。それとも会いましたかな」。

「会いましたよ、　　ー　　ノイローエで、...」、ヴィオレットが囁いた。この残酷な視線と言葉に縮み上がっていた。

「ノイローエで、あ、そうか。会いましたかな。済みません、恵み深い御令嬢。少なくとも私の方はもはや覚えておりません」。

全く訳が分からずにこの謎めいた場面を凝視していた騎兵隊長に向かって次の言葉が発せられた。騎兵隊長はそれでも自分の娘が内奥で震撼させられ、興奮し、絶望しているのを感じ取っていた。「いや、私には何も注文なさらなくてください。すぐに辞去しなければならぬのです。何かお話しすることがあるのでしょうか、騎兵隊長殿」。

「どう言ったものか、...」と騎兵隊長は躊躇った。

青ざめた、とても静まった顔でヴィオレットはテーブルに着いて座っていた。

少尉は脚を組んだ。恥知らずの、退屈した表情を浮かべていた。すでに何が生ずるか承知している風であった。今や彼は一本の煙草に点火して、優越感を抱いて言った、「話せないのであれば、あの、お名前は、済みません、失念しましたが」（ヴィオレットに復讐的視線を送った）「話せないのであれば、辞去させていただきます。私は、申しましたように、とても忙しいのです」。

そして挑戦的に座り続けた。彼は騎兵隊長と娘に面と向かってあくびをしかねなかったと言っても過言ではなからう。

騎兵隊長は自重した。自分の家を離れていると彼は自制することができた。彼は言った、

「要するに、私の娘が貴方に一通の手紙を」 — ちょっと詰まったが、 — 「貴方の件で書いてしまい、それで間違った相手に渡ったのです」。

すべては正確に予期されていたようになった。少尉は煙草を灰皿に押し付けた。彼は娘の懇願する視線を感じた。火の消える煙草から彼は騎兵隊長へ目を上げた。彼は彼を見つめて、言った。「勿論貴方のご要望に応じます、騎兵隊長殿。何も否認致しません。ただ」と彼は一層素早く言った、「貴方が明日の行動の終了時まで待って頂けたら、感謝申し上げます。私の友人達がその後、すぐに貴方の許へ名乗り出るであります」。

騎兵隊長は高齢の男であった。空ろなこめかみ、白髪、やつれた顔、彼はほとんど不分明な声で言った。「お間違い — ある — まいな」。

「パパ、フリッツ」と娘は宥めて叫んだ。

「全くお間違いありません」と少尉はその優越的に、破廉恥に響く声で諭した。

「フリッツ、いや、フリッツ、それにパパ、...」と少女は口ごもった。目には涙を一杯溜めていた。

騎兵隊長は麻痺したように座っていた。指で彼はポートワインのグラスの脚部を持っていて、それを回した。彼はワインの色を確かめているように見えた。しかし舌でワインを味わわなかった。苦みを彼は感じた。灰、...人生全体の苦みと灰とを、...

「フリッツ、いや、フリッツ、...」とヴィオレットの訴える声が彼の耳に届いた。

素早い動作で、彼はポートワインの残りをこの若者の厚かましい優越感の顔に放り出した。深く喜んでヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツはこの顔が生気を失うのを見た。固い顎は震えていた、...

「本当に今、間違いないかな、少尉殿、...」と彼は復讐して尋ねた。

ヴィオレットは叫び声を上げた。しかしただ小声であった。少尉は若さを露呈して、酒場に不安げな視線を投げてから、顔のワインを拭った。市民達は新聞の背後に座っていた。しかしビュフェの給仕は驚いて縮み上がり、呆然と急いで亜鉛板を磨き始めた。

「余計なことです」と少尉は憎しみに満ちて囁き、立ち上がった。「それに御令嬢には耐え難い思いでいました」。

騎兵隊長は呻いた。彼は飛び上がって、この残忍な憎むべき顔を殴りつけたかった。しかし彼の脚が震え、目眩がして、彼はテーブルにしがみついた。両耳に寄せて碎ける波のように血が轟然となった。 — ただ遠くに彼の娘の話す声を耳にした。

娘には矜持はないのか、と彼は不思議に思った。まだ彼と話したいと思うとは。

彼はもはや彼女の語る言葉が分からなかった。

「いや、フリッツ」とヴィオレットは訴えて、叫んだ、「何故そんなことをしたの。すべてお仕舞いじゃない。パパは何も知らなかったのよ、...」。

彼はその澄んだ、意地悪な目で、彼女を見つめた。一言も言わず、軽蔑と反吐を一杯覚えていた。

彼女はテーブルを回って行き、酒場にいることをほとんど構っていなかった。彼女は彼の手を握って、嘆願した、「フリッツ、優しくして、...パパは私の望み通り何でもします、説得します、...あなたなしでは生きて行けない、...ほんの一週間だけでも、ほんの一ヵ月だけでも、私の許に来てくれたら、結婚できるのよ、...」。

彼は自分の手を引っ込める仕草をした。

彼女は不安で見開かれた、流涕する目で見つめていた。彼女は気を取り直そうとし、無理に微笑して、言った、「パパには、すべて誤解だと言い聞かせます。パパは、だって何も知らないのだから。フリッツ、ワインのことは、あなたに詫びることでしょう、...これはパパの駄目なところですよ。誓って言います、パパは詫びることでしょう、...」。

「何故父親は何も知らないと言えるのだい」と彼は尋ねた、「手紙のことを話していたぞ」。

これは彼が彼女に言った最初の言葉であった。冷たい、疑り深い問いであった。彼女のどもった嘆願への唯一の返事であった。...

しかし彼女は彼がただまた彼女と話したことで、それだけで幸せであった。彼女は一層強く彼の手を、この骨張って残酷な手を握って、素早く言った。「パパは全く別な手紙のことを話していたの。もう一度あなた宛に書いたの。武器保管所のことで、だって森林官が埋蔵する様子を覗いていたのよ。でもその手紙を横取りされて、そんなにびっくりして見ないで、フリッツ、フリッツ、フリッツ。武器保管所はまだあるわ、...何も間違ったことをしていないのだから、フリッツ、お願い、...」。

彼女は一層声高に話した。今や彼の手が彼女の口に置かれていた。市民達は新聞の背後から顔を出して、憤慨して、当惑して、面白がって、この情景を眺めていた。騎兵隊長はテーブルの許で眠っているように動いて、彼は囁いた。「娘を放してくれ、...」。

彼は、自分は叫んだと思った。給仕はビュフェから一歩、二人の方へ踏み出して、また立ち止まった。介入すべきか否か、決断できないでいた、...

しかし少尉はすべてを理解していた。今日酒場では将校達は不在であり、帝国国防軍との連携は破棄されている、...彼は、一揆全体が、この数ヶ月にわたって準備された行動が危機にあることを悟った。 — そして自分にその咎がある。いや、この娘に咎がある。

彼女の口に彼の手を置いて、彼は彼女の耳に囁いた。 — そして彼の憎悪は、ますます強く、この柔らかな献身的な、無意志の顔の許で燃え盛った。彼は囁いた、「おまえはな、おまえはただ不幸を招き寄せる。反吐が出るぞ。 — 好きになれん。たとえ黄金の衣装をまとうていてもな。反吐が出るんだよ。おまえの溜め息を考えると怖気がする。おまえに一度触れたことを思い出すと、身を粉々に砕きたくなる。いいか、私の言うことを良く聞け」と彼はより大きな声で囁いた。というのは彼女は目を閉じていて、死んだように彼の腕の中にいたからである。「おまえの呪われた汚らしい愛で、私のすべてが壊れてしまったのだ。いいか、聞け」。再び更に大きな声となって、彼は彼女を揺さぶった、「よく聞くん。武器保管所がまだ無事であれば、その場合、明日戦死すると分かるだろう。しかし武器保管所がなくなっていたら、私は今日午後にもピストル自殺する、 — おまえのせいだ、いいか、おまえの偉大なる愛のせいだ」。彼は彼女を見つめた、勝ち誇って、憎しみに満ちていた。彼女は死んだように彼の腕に抱かれていて、一瞬彼は錯覚した。しかしそれでももう一言言わずにおれなかった。今や給仕が宥めて彼の肩を揺すっていても、全く構わなかった。彼は彼女の耳に囁いた、「今晚私の許に来てくれ、 — 分かるか、 — 愛しい娘よ。あそこだ。私は優しく見えることだろう。 — 私が、 — 砕かれた頭で横たわっている様を生涯忘れないことだろう」。

彼女が叫び声を上げて、皆が駆け寄ることになった。少尉は目が覚めたように見回した。

「それでは娘を頼む — 私はもはや用はない」と彼は給仕に叫びかけて、娘を突然手

放し、娘は床に沈んだ。

「まあ、聞いてください、少なくともこの娘を起こしてください」と給仕は憤然と叫んだ。

しかし少尉はすでに酒場から出ていた。

121

追い詰められた少尉

少尉は自分の小さな旅館に入った。どうして入ったか分からなかった。彼は部屋に立って、水漆喰の壁を見つめていた。彼は下の客室のお喋りに聞き入っていた。静かにならなかった。

「静かにしろ」と少尉は憤然と顔を歪めて叫んだ、しかしお喋りは続いた。しばらく彼は更に耳を澄ました。しばらくヴァイオの卑下した嘆願の声が聞こえるように思われた。奴隷女のめそめそ泣きだ、一 忌々しい。

しばらくしてから彼は正気となった。彼は気の抜けた水を一杯飲んで、周りを見て、木製の洋服掛けに掛かった対の灰色地の制服に気付いた。

「あそこまで」どのように向かうか、上下合わない市民服姿か、制服姿か、決断できなかった。彼はどちらが良いか、長いこと熟考した。しかし分からなかった。

「人生は難しい」と彼は言って、椅子に腰掛け、再びそのことについて熟考した。しかし今や彼の考えはもはや衣服問題に留まろうとしなかった。更に進展した。自分は今晚九時に郎党と一緒に黒い奥から武器を取り寄せるよう命じられていると思い出した。それ以前にそちらへ確認に行くよう何も強制されていなかった。武器がなくなっておれば、昼の十二時であれ、夜の九時であれ、同様になくなっていて、無念である。一 それ以前には自分は知らなかったのである。娘と一緒にこの騎兵隊長はきっと口が堅いであろう。身内の恥を公開する者はいない。今や彼は嘲笑してにやりと笑った。この娘の恥はいかにひどいものか、と。

「私は何と下劣なことか、何と下劣なことか」と少尉は呻いた。しかし本気には思っていないかった。

結局この人生では致し方ない丁度その程度に彼は下劣なのだ。彼は両手に頭を抱えて、座っていた。村々のドン・ファン、神秘的な少尉フリッツは、行動においても恋愛同様素早かった。彼の人生は、肉と毛髪、火薬の臭いと長い接吻の血のような味覚、手に握る滑らかな冷ややかな武器銃床と衣服に包まれた娘達の滑らかな冷ややかな肢体、火災へと撃ち込まれた村々からの天への火災、それに体の中の永遠に燃え尽くす炎であった。彼は例えば、都合が良いとなれば、ハーゼ家の農園を冷淡に焼き払うことができたろうし、また燃える家畜小屋に飛び込んで、馬を連れ出すこともできたろう、一 それが彼であり、彼に他ならなかった。

彼は彼に他ならなかったので、武器保管所に関して、確証を得るために夕方まで待てなかった。いや、彼は早速出掛けるであろう。駄目になっていたら、彼ももう駄目である。丁度あの忌々しい小娘に語った通りだ。彼は、多くの者にとって自分はいかがわしい名誉の男であると承知していた。少佐が彼を使っていたのは単に、彼がある種の委託をこなす

からに過ぎない。しかし彼は彼独自の名誉を有していた。彼は、フォン・ブラックヴィッツ令嬢とかの黙秘に依存することを好まなかった。

彼は一気に起きた。彼の優柔不断は消えていた。彼は戸棚からスーツケースを引き出した。そのスーツケースの汚れた下着の中から彼のピストルを取りだした。彼はピストルを手立っていた。ピストルはロックされていたが、しかし以前のまま装填されていた。彼は良く覚えていた。彼はあのスカンク、マイヤーを自分の前で小突いていたのであった。彼は決断ができず、臆病であった。 — それから此奴は彼の脚許にスーツケースを投げ棄てた。

いや、自分はこの娘とは何とも運がない。この娘の周りにはただ揺れ動く人影のみである。臆病なマイヤー、お喋りのクニーブッシュ、従者というあの野郎、間抜けな父親。この父親は、他の人々の顔にワインを注ぐことが何ほどかのものと思っていて、それから自らの英雄的行動でノックダウンして、しびれてテーブルにしがみついている。しかし最も揺れているのは彼女本人だ。恋愛について何らかのロマンチックな妄想を抱いていて、「あなたなしには生きて行けない」。 — 自分がこの娘に与えたものは、ノイローエとこの世の、どの男でも与えられるものであろうのに。

ノックの音がした。咄嗟に少尉殿はニッカーボッカーの大きなポケットにそのピストルを忍び込ませてから、「お入り」と叫んだ。しかしそれは単に家の従僕のフリードリヒで、フリッツ殿にはすぐ参上されたいとリヒター殿からの使いがあったと知らせた。

「結構、結構、そうしよう、フリードリヒ」と大変気楽に少尉は言ったが、内心呪詛していた。

彼は平静な顔つきで、大いに厳密に鏡の前で自分の髪を分けていた。そしてこのフリードリヒは、勿論単なる小さな協力者として、この陰謀に加わっていたが、彼を注意深く観察していた。少尉は自分の背後の男の顔を鏡の中で見ていた。それは粘土で捏ねたような粗野な顔で、不格好な鼻が付いていた。しかしこれはとても粗野な顔であったが、今や明らかに心配そうな落ち着かない表情が見られた。少尉は決意して尋ねた、「それでフリードリヒ、何が起きたのだ」と彼は尋ねて、微笑した。

フリードリヒは鏡の中の少尉を見つめた。彼は素早く言った、「兵舎では町への外出禁止です」。

少尉は悠然と微笑した、「そんなことはどうに分かっている。万事異常なしだ、フリードリヒ。このような事の前に郎党を町に外出させるか。一杯飲みかねないぞ」。

フリードリヒはゆっくりと頷いて、その不格好な頭で了解した。「納得です。しかし少尉殿、人々の噂では、...」。

「人々の噂話に耳を貸すのか。色々な事が聞こえてくるだろう、フリードリヒ」。

「でも、...」。

「いや、話さんでいい。皆、戯言だ。我らのようなものは服従して、自分の仕事をする」。

「でも」とフリードリヒは言った、「砲兵隊兵舎の前に秘密警察の車が止まっていたそうです、少尉殿」。

家の従僕、この取るに足りない輩、烏合の衆の一人は少尉から視線を外さなかった。少尉は安心してはならず、また驚きを見せてもならなかった。ただ一瞬彼は両目を閉じた。一回の瞬き以上のものでなかった。そして再びまた鏡の中の自他を見つめた。彼は憂わし

げに櫛で洗面器の縁を叩き、尋ねた。「それで、一 その先は。まだ止まっているのか」。

「いいえ、少尉殿、また去って行きました」。

「いいか、フリードリヒ」と少尉は説明して、すぐに落ち着いた、「いいか、フリードリヒ。止まっていたが、また去ったのだ。そんなものだ。至る所、まさにお兄さん達は鼻を突っ込んで来るのだ、それ故にまさに秘密警察だ。勿論奴さん達は何か物音を聞きつけたのだ。何百人もが我々の件を承知しているから、少しばかり漏れるのは致し方ない。奴さん達は聞きたがる。しかしまた去ったのだろう。本当に何か嗅ぎつけたのなら、去っては行くまい」。

今や少尉は向き直った。彼はその男を、もはや鏡越しではなく、直接見つめた。間近の視線のお蔭か、彼の言葉のお蔭か、彼は家の従僕が納得しているのを見た。

従僕は言った、「少尉殿の仰有る通りです。人々の噂に耳を傾けるべきではありません。ただ服従あるのみです」。

少尉は内面でにやりと笑った。屑の仕事だ。やっと一人の男が納得した。およそ三千人の中の一人だ。しかし他の連中が奴等の耳に何を吹き込んでいるか知れたものじゃない。このような蜂起には、難聴の啞達からなる連隊を作らなければならないだろう。

しかし家の従僕は語り続けた、「少尉殿、不安だというわけではありません。ただやっとまた仕事にありついて嬉しいのです。しかし上司に、私が一揆に参加したら、叩き出すと言われたのです」。

少尉は或る仕草をした。フリードリヒはより素早く言った、「参加します、少尉殿。命じられたように、上司の獵銃二丁も持って来ます。明日首尾良く行けば、叩き出されても構いません。ただ、少尉殿、分かってください。ただ全く見込みのないことになった場合、... 失職というのは冗談じゃありませんので、...」。

「そうだな、そうだ、フリードリヒ」と少尉は笑って、家の従僕の肩を叩いた、「準備万端、抜かりはない。それは保証する、一 私の命に代えて」。

彼はそう言った。彼はそう言いたかった。今となってはすべてどうでも良いことだ。この猿公に同情すべきか。皆が保証を求めたがる、臆病どもめが。

「有り難うございます、少尉殿」とフリードリヒは顔を輝かせて言った。

「いいか、戦友」と少尉は恵み深く笑った、「いつも弱音を吐かないことだ。お主が上司のために参加したと上司が知ったら何と明後日お主の上司が喜ぶことか考えることだな」。別の調子で言った、「そうだ、フリードリヒ。私の自転車は問題ないか。すぐまた地方へ行かなければならないのだ、...」。

「分かっております、少尉殿。しかしまずはリヒター殿へいらっしゃるでしょう、...」。

「その通り」と少尉は言って、出掛けた。

彼はぶらつきながら、煙草を吸いながら行った。トイレで彼は更にピストルのロックを外して、弾が銃身にあるのを確かめた。かくてズボンのポケットで用意のできたピストルを手で握り締めて、まずはリヒター氏の許へ向かった。勿論彼は裁判官[リヒター]ではなく、彼の通称フリッツのようなもので、一種の上役であった、...。滑稽なことであった。彼は[敵国連携のEntente]秘密警察の車のことを耳にしてから、彼の気分は100%改善されていた。すべての死刑判決者が彼のように奇妙に上機嫌になるのであれば、死刑判決についての与太話はただ笑止である。状況によっては数分後、リヒター氏の許で爆弾がもう破

裂しかねない。彼もお陀仏だ。

しかしそれから万事全く平穏に進んだ。リヒターの許では多くの人影があちこち座っていた。市民服であったり、階級章のない、支給された制服姿であったり、退職した将校達であったりした。少尉は彼らを皆知っていた。彼はただ手短かに挨拶して、すぐリヒターの許に向かった。リヒターはただ一人の未知の者、「まっとうな」市民と囁いていた。

リヒター氏も本来市民のように見えた。長身で、黒髪、若造達は仲間内では彼のことを「神の鉛筆」と呼んでいた。彼は永遠にすべてを書き留める。何か策士的で、きっと此奴は火薬を嗅いだことがないであろう。少尉は彼に我慢ならなかった。しかし多分リヒターも少尉に我慢ならなかったであろう。

それで彼は少尉にまことに無愛想に、離れて待つように合図した。彼は太った市民服の男と更に囁いていた。少尉は向き直って、退屈して部屋を眺めた。

そこは或る居酒屋の奥の部屋であった。何か荒涼として色褪せていた。何か荒涼たるもの、色褪せたもの、腐りかけたものをここで待機している男達も有していた。彼がここでお立って待たなければならないのは、下劣なことである。彼はポケットのピストルに手で触れていた。リヒターの最初の言葉から、ここにいる者達が彼のことについて何か知っているか分かるだろう。それから彼の耳にその太った市民服の男の、二、三の言葉が聞こえた。彼は正確には分からなかった。しかし一つの言葉は「マイヤー」と言ったように思われた。別な言葉は、「スパイ」と思われた。この世には多くのマイヤーがいる。しかし同じ瞬間少尉は固く確信した、ただあの一人のマイヤーのことであろう、と。この豚が世に現れたのか、自分に厄介事を引き起こすために。自分が彼を森が火事になったとき、黒焦げにさせておけば良かった。彼の善行の報いだ。

もっと長く待つのは本来無意味だ。すべて万事明白で、決着が着いている。素早く結論を出せ。何でがみがみ言われなければならないのだ。

少尉はこの瞬間トイレはどこか考えた。一　しかし戦友達はただ面倒なことになるだろう。自分は更に向かって、どこか森の中、下生えのある所を探さなければなるまい。一　いや、一番良いのは、自分が娘に約束した所だろう。娘は忘れないことだろう、それが贈り物だ。

「少尉殿、こちらへ」。

彼は深く息をした。ひょっとしたら最後の猶予の時間にすぎないかも知れない。しかしもうしばらく、息をしておれる。未来を信ずる、老人の役回りだ。注意深く彼はリヒターの話しに耳を傾けた。今朝から国防軍との連絡はすべて絶たれている、と。誰も兵舎の中に入れない。誰も兵舎から出て来ない。路上には将校の姿が見られない。電話しても単に当たり障りのないお喋りでしかない。...

いや、今やはっきりした。すべて準備したことが、何と不確実になったことか、と。一握りの郎党、公にはとうに解散した義勇軍の残兵、それに数千人の民兵軍、一　帝国国防軍が後押ししてくれれば、強力となるが、軍が反対すると、滑稽な愚連隊だ。帝国国防軍は確かなものと計算されていた。勿論何か公的に話し合われたものではない。この仲間が闘うことになる面倒事にはご理解を頂いている。軍隊の残骸から、革命の廃墟から新しい軍を立ち上げなければならないのだ。かつての敵の疑り深い監視の下なのだ、しかもこの敵は相変わらず敵のままだ。アウトサイダーはどんな危険をも犯したが。しかし退役

将校達は現役と話していた。一方は話し、他方は耳を傾けて来た。「諾」とは言われなかった、 — しかしいつも「否」とも、「馬よ、進め右」とも、「進め左」とも言われなかった。 — しかしいつでも次の思いは感じられていた。我らが我らの事をなすならば、こちらは反対しない、と。

それが突然、青天から、蜂起の前日に、この理解しがたい沈黙、一つの冷淡、全く甲斐なく、顕著な引き籠もり、ほとんど一つの拒絶が生じている。リヒター氏は更に話し続けた。とりわけこの謎が解明されなければならない、この闇を解明するのだと迫った。 —

だって、帝国国防軍が敵となったら、郎党と軍とを敵対させるわけに行かんのだから、と。

黒髪の長身、リヒター氏、神の鉛筆は執拗に語った。 — 少尉殿はどうして欲しいかお分かり頂けたであろう、と。

少尉は真剣な注意深い顔で傾聴していた。然るべき箇所で彼は頷き、「そうです」とも言った。しかし彼は少しも聞いていなかった。彼はまたあの娘に取り憑かれた。再び野蛮な、刺すような憎悪に襲われた。このような偉大な重要な案件が、このような小さな惚れた娘によって危機に陥ることがあろうか。すべてが無駄となるのか。数百人の男達が数ヶ月かけて準備したことが、名誉と人生と財産を賭けてきたことが、このような女一人が口を滑らせたからと言って。あり得ない、あってはならない。 — いや、自分は娘に全く別なことを言わなければならなかったのか、娘の髪の毛を引っ張って、愛にとろけた顔をぶん殴らなければならなかったのか。

(しかし少尉にも、また裏切りについて話している彼の上司にも、一人の十五歳の小娘の話で倒壊するような案件は、詰まらぬものに違いないという考えは生じなかった。そのような事案は、一つの理念による生命付与の光輝のない単なる冒険にすぎないであろうに。彼ら自身、この劣等な時代の玉虫色の墮落した魔法に取り込まれていて、単にその日凌ぎを考えていて、その後の永遠のことを考えていなかったのである。 — ベルリンの紙幣印刷機がその日暮らしの仕事をしていたように)。

リヒター殿は黙した。彼は語り終わった。このいかがわしい少尉殿は自分の言うことは分かって頂けたらと述べた。しかし注意深い姿勢にも関わらず、少尉殿は自分の考えを追って上の空であった。彼はただ神の鉛筆を問うように見つめた。

それで更に話し続ける決心をした、 — 潔癖な人間にとって反吐の出ることである。

「私は聞いたのだ」と彼は囁いて、太った市民服の男を用心して見つめた。この男は相変わらず何かを待って側に立っていた、「貴方は、幾つか — ええ — 秘密を探り当てる能力があると聞いたのだ。 — 一種下世話に通じている[手が早い]と聞いている、...」。

彼の声には反吐が明確で、少尉の頬に赤みが差した。彼は何も言わず、ただ注意深く彼の上司を見つめた。

「いや、十分だろう」とリヒター氏は苛立って言って、今や自ら赤くなった、「ぐたぐた話さなくていいだろう。この件のため、貴方の顔を使って欲しいのだ、我らの立場が裏から分かるようにな」。

「今すぐですか」と少尉は尋ねた。

本当は、彼は今すぐただ自転車に乗ってホテルへ行き、あの尊大なホルヒ車がまだ残っ

ているか見て、それからすぐ黒い奥へ向かいたかった。黒い奥が今やほとんど予期されている通りならば、すぐに彼女の許に戻り、彼女の前で、約束したことをしたかった。いや、彼女には触れない。しかしこの映像を、 — 他どの映像にもましてひどいものを、 — 彼女は生涯抱き続けることだろう。彼女はとても優しい。彼女にはそれは耐えられないことだろう、 — 全生涯持ち続けることだろう。毎日毎日この映像と共に、夜には眠りから飛び起きるのだ、 — 叫びながら、 — その映像と共に。

「今すぐですか」とそれ故少尉は躊躇いながら尋ねた。

するとこの黒髪の痩せた男はほとんど立腹した、「それ以外考えられるか。我らに時間の猶予があると思うのかね。いかなる次第になるのか、承知しておかねばならない」。

「若いレディーが」と少尉は言って、意地悪く相手に赤面の意趣返しをした、「今丁度私の相手をしてくれるか分かりませんが、彼女はただの小間使いで、今掃除しなければなりませんし。料理女も私に気がありまして、...」。

もっと言うぞ、と少尉は考えた。私を使う気なら、貴殿らも乙に構えていないで、私の糞を賞味しろ。

しかしリヒター氏は全く冷静で、丁重となった、「私は確信している、少尉殿」と彼は言った、「貴方ならこの件を処理できる、と。貴方の知らせをここで待っている、 — 一時間以内で」。

少尉はお辞儀した。リヒター氏が彼を去らせようとしたとき、待機している太った男の身振りに気付いた。「そうだ、 — まだ、二、三の質問が、少尉殿、別な件で、この殿方が関わっておられる」。

この太った男が近寄って、手短に挨拶した。彼は多分会話の間ずっと少尉を観察していたのであろう。今や彼はほとんど彼を見つめていなかった。しかし少尉は、このでっぶりした武骨者の目からの冷たい氷のような視線に困惑した。この者は、紳士というよりは男に見えた。

回りくどくなく、苛烈に、一点の丁重さもなく、この太った男は尋ねた、「ノイローエは貴方の担当ですか」。

「その通りですが」。

「黒い奥の武器保管所もそうですか」。

少尉はリヒター氏に苛立って問いかける視線を投げかけた。リヒター氏はせっかちな身振りで答えるよう命じた。

「その通りです」。

「その保管所を確認したのはいつが最後です」。

「三日前です、 — 火曜日」。

「万事異常なかったですか」。

「ありません」。

「秘密の印を付けていましたか」。

「地面の状態から、誰も掘った形跡がないと分かりました」。

「貴方の郎党は信頼できますか」。

「完全にできます」。

「武器を埋蔵する際、誰かに見られたと思っていませんか」。

「そうは、一 思いません。気付かれたと思ったら、すぐに保管所を移していたこと
でしょう」。

「埋蔵の間、誰かが歩哨の近くに来ましたか」。

少尉はどう答えたらいいか思案しようとした。しかし質問が次々に発せられ、視線が冷淡に観察して彼に注がれていたので、結果を吟味することなく、急いで、無思慮に答えてしまった。「いました」。

「誰です」。

「フォン・ブラックヴィッツ氏と彼の娘です」。

「兩人と面識があったのですか」。

「ただ外見のみです」。

「兩人に何と言ったのです」。

「遠ざけました」。

「兩人はすぐに去ったのですか」。

「そうです」。

「兩人は、自分達の領地での出来事について、説明を求めなかったのですか」。

「フォン・ブラックヴィッツ氏は老将校です」。

「娘の方は」。

少尉は黙った。冷淡の視線が彼に注がれ続けていた。これは警察だ、と少尉は考えた。犯罪者に対してのみこのように尋問する。それでは我らの部隊にも密偵がいるのか。そのようなことを聞いた覚えがある。...

「それで娘の方は」とこの太った男は執拗に尋ねた。

「一言も話さなかったのです」。

「娘とは親しい間柄ではなかったのですか」。

「見たことがあるだけです」。

この視線、この忌々しい、射抜くような眼差し。此奴が本当に知っている事の手がかりがあれば、いいのだが、一 しかし全く暗闇での手探りだ。たった一回の返事で、嘘が確定されてしまう、一 すると結果は。破滅だ。

「兩人のどちらも貴方の埋蔵を後から探っていないと確信していますか」。

「完全に確信しています」。

「どうして」。

「地面を見れば分かったでしょうから」。

初めてまたリヒター氏が言葉を発した、「騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツ氏と彼の娘は保証できると思います。一 ちなみに兩人は今町に来ています。一 私は二人を『黄金の帽子』亭で見ました」。

「二人に問い合わせても良いでしょう」とこの太った男は熟慮して言い、その冷淡な視線を少尉から外さなかった。

「その通り、二人に問い合わせてください。私も早速同行しましょう、来てください、行きましょう」と少尉はほとんど叫んでいた、「何があったのです。私は裏切り者ですか。私がばらしたとでも。同行してください、警察の方。その通り、私はまさに『黄金の帽子』亭から戻ったところで、騎兵隊長とその娘と同じ席に座っていました。私は、...」。

彼は言い止めた。彼は自分の拷問者を憎悪して見つめた。

「それで、何をなさったのです」とこの太っちょは、この爆発に全く動ぜず、尋ねた。

「しかし、お二人、おやめなさい」と神の鉛筆が宥めて叫んだ、「少尉殿、状況を誤解しないで頂きたい。誰も貴方を侮辱しようと思っていません。或る武器保管所が密告されたと信ずる理由があるのです。こちらで秘密[Entente]警察の車が目撃されました。どこの保管所かまだ分かっていない。武器保管所に関し責任者皆に、問い合わせているのです。このことが向こうの我らの戦友達の奇妙な行動の原因である可能性があるのです、...」。

少尉は深く息をした。「それではお尋ねください」と彼は相手に言った。しかしこの相手は深い呼吸さえも見ていたように思われた。

全く動ぜずに、この太っちょは言った、「貴方は『黄金の帽子』亭について話された。『私は、...』と言って、中断された」。

「しかし本当に必要なことですか」とリヒター氏はうんざりして叫んだ。

「私は騎兵隊長殿とポートワインを飲みました。ひょっとしたらそう言いたかったのかもしれませんが。もはや判然としない。 — 何故向こうへ行かないのです」と彼は今一度叫んだ。しかし今回は絶望的に叫んだのではなく、嘲笑的で、死との劇を演じていて、この劇はすでに決定的になったと彼は良く承知していた。「喜んで同行します。何も私は構いません。フォン・ブラックヴィッツ殿に私の目の前でお尋ねください」。

「彼の娘にも、...」と太っちょは言った。

「彼の娘にも、...」と少尉は繰り返した。しかしとても小さな声であった。

一つの静寂が生じた。抑圧的な、長い静寂であった。

こいつらは何を望んでいるのだ、と少尉は絶望して考えた。私を逮捕したいのか。逮捕はできないだろう。私は裏切り者ではない。私にはまだ名誉がある。

太っちょはリヒター氏の耳許に、遠慮せず、囁いた。リヒター氏の顔に、再び、今や強化されて、嫌悪的反吐の表情が浮かんだ。彼は何かを否定し、拒否しているように見えた。

突然少尉は、前線の大佐に肩章をちぎり取られた以前の戦友を思い出した。私には肩章すらないと彼は呆然と考えた。私の場合ちぎり取られない。

彼は部屋を見通した。ドアまで十歩であった。他の殿方達の誰も邪魔をしなかった。彼は躊躇いながらドアへ一歩踏み込んだ。

「後ちょっとだけ」と太っちょは横柄に命じた。彼は視線を向けなくても、皆をこの冷淡な目で見ていた。

「武器保管所に関しては私の名誉にかけて申しています」と少尉は、ほとんど震えながら、叫んだ。両殿方が彼に顔を向けた、「そして私の命にかけて」と彼は更に言った。しかしもっと弱々しかった。

彼らは彼を見つめた。あたかもこの太っちょは頭で微かな否定の動きをしているよに見えた。しかしリヒター氏はより活発に言った、「分かった、分かった。 — 少尉殿、誰も貴方を疑っていない」。

太っちょは黙っていた。彼は顔をしかめなかった。しかしこのしかめない顔は、私はお主を疑っていると語っていた。少尉は考えた、お主の流儀での、お主の裁きは受けたくない、と、...。

彼は尋ねた、「もう出てよろしいですか」。

リヒター氏は太っちょを見つめた。太っちょは言った、「あと二、三質問があります、少尉殿、...」。

此奴は羞恥心がないのかと少尉はうんざりして考えた。私は通りに出たがっているのだ。しかし彼は立ったままで、「訊きたい」と言う、そんなのはどうでもいいかのように。

そして再び始まった、「貴方はノイローエ出身の田畑検査官マイヤーをご存じですか」。

「少しばかり。彼を仲間にとの案がありました、私が断りました」。

「何故です」。

「彼が気に入らなかった。信頼できないと思われました」。

「何故です」。

「良くは分からないが、 — その印象です。女関係が多すぎると私は思いました」。

「そう、女関係、...女関係のせいで、彼を信頼できないと思ったのですか」。

凝固した冷淡な視線が一杯に少尉に注がれていた。

「その通りです」。

「このマイヤーは武器の埋蔵を目撃していた可能性がありますか」。

「ありません」と少尉は素早く叫んだ、「とうに彼はノイローエを去っていましたから」。

「そうですか、 — いなかったのですか。何故いなくなったのです」。

「本当に知りません。必要とあらば、フォン・ブラックヴィッツに問い合わせられましょう」。

「ノイローエ出身の誰かがなおこのマイヤーと連絡していると思いますか」。

「本当にさっぱり分かりません」と少尉は答えた。「ひょっとしたら彼相手の娘達の一人かもしれません」。

「貴方はこれらの娘達をご存じではないですか」。

「勘弁してください」と少尉はようやく言った。

「貴方が一人か二人の名前を知っている可能性はなかったのですかね」。

「ありません」。

「それでは、このマイヤーが武器保管所について知り得た可能性を、貴方は想定できないのですか」。

「彼が知っているとは思えません」と少尉は呆気にとられて叫んだ、「彼は何週も前にノイローエから去っていました」。

「では誰が知っているのです」。

再び沈黙、静寂。

少尉は憤然と両肩を震わせた。リヒター氏は取りなして言った、「つまりこのマイヤー氏が今朝監視委員会[秘密警察]の車に座っていたと言われているのだ。しかし彼であったと確定されてはいない」。

初めて太っちょは怒りを露わにした。苛立って彼はお喋りの神の鉛筆を見つめた。

しかしリヒター氏は締め括って言った、「もう質問はこれで十分ということにしよう。余り定かになったとは思えない。少尉殿、貴方の任務は分かっている。では一時間後にこちらで待っている。我々がここで探り出せないことも、貴方ならひょっとして知り得るかもしれない」。

リヒター氏が別れの身振りをした。少尉は軽くお辞儀をしてドアに向かった。

ドアに向かうぞと彼は考え、珍しく安堵していた。それでもこの太っちょが、この恐ろしい人間が、更に一言言い、彼を引き留めかねないと震えていた。

しかし彼の背後で一言も発せられなかった。彼の背中での冷え冷えとした嫌な感じは、遠ざかるとあの視線の氷の冷たさが弱まるかのように、消えて行った。彼は左右の戦友に挨拶した。強力に意志を集中して、彼は今一度ドアの許に立ち止まって、一本の煙草に火を着けた。それから彼は取っ手に手を置き、ドアを開け、そして閉め、居酒屋を通って行った、 — そして今ようやく外の戸外の通りへ出た。

あたかも長い苦悩の牢屋から自由な世界に解放されたかのようにであった。

122

平常心の喪失

少尉が再び通りに出たとき、彼は二度とリヒター氏のかの部屋へは戻らない、予期された報告をもしやしない、もはや戦友達に戦友と呼びかけないと承知していた。名誉を失った、すべてを失ったと彼の中で声がした。その通り、彼を他の将校達と一緒に結び付けていた名誉、これを彼は喪失した。彼は臆病者のように嘘を付いて、他の者達の判決から逃れようとした。しかしそれは自分が死を恐れたからではない、 — 死を彼はすでに受け入れている。そうではなく、彼は自らの流儀で死にたいからなのだ、 — 彼女の記憶に残るように。

少尉は両手をポケットに突っ込んだ。唇に煙草をくわえて、灰色のこぬか雨の降る昼間、将校達の別荘のある町外れの一角へ向かった。厳密に考えれば、主人が何と話したか小間使いのフリーダに問い質すというこの屈辱を更に引き受けることは、全くのナンセンスであった。彼はリヒター氏にこの問い質した結果を知らせる気はないのである。奴等が一揆とどう向き合うか、知ったことじゃない。自分はただ自分の件を済ますだけである。

少尉が見たところ屈託なく、所在なげに、その着古した市民服で通りをぶらついて、一度など店にも入り、五十本の、普段よりもはるかに上等の品種の煙草を購入しているとき、彼は丁度鼻根の上、眉間の間に垂直の深い皺を付けていた、 — 一つの煩悶皺であった。生涯を通じて、熟慮するよりもむしろ何か行動をしてきた若者にとって、自分の身に何が生じたか、自分は何を望み、何を望まないか明確にすることは必ずしも容易でなかった。

それでも、自分にとって一揆がどうだろうとどうでもよくなったと考えると深く驚いた。この一揆のために彼は毎月毎月、ほとんど金もないまま、普通若い男が愛好するものすべてを欠きながら、働いてきた。しかしこの仲間から去ることがいかにもどうでも良いことに思われて、彼は驚いた。この仲間達は、どんな個々の娘たちの愛よりも彼には大事であったのだが、もはや彼はこの仲間の一員ではない。

彼は今日の午前、多くのことに耐えなければならなかった。普段なら我慢できなかったであろうし、彼は荒れ狂ったであろう事柄であった。騎兵隊長のポートワイン液投げ、滑稽なフリードリヒの疑り深い問い質し、リヒター氏のほとんど剥き出しの嫌悪感、最後に太った刑事による屈辱的な聴取。しかしこうしたこと一切もまたすでに彼の許から滑り落ちた。普段は侮辱を受けると何年も忘れずに、復讐心の強い彼が、これらの間近な出来事がそもそもまだ思い出されようものなら、自制をしなければならなかった。

いやはや、奇妙なことだ、つまり、自分はもはや少しもまっとうではないようだ。あた

かもこの世とは何の関係もないかのようだ。すべてが消えて行く臨終者の按配だ。...いや、ここでまた思い出される。人間は死ぬとき、両手が落ち着きなく、布団の上を探り始めるのだ。或る者達は、臨終者は自分の墓を掘っていると言う。別の者達は、臨終者はこの世ですがることの出来るものを探しているのだと言う。私もそうなのか。私からすべてが滑り落ちたのか。私はこの世で、自分がすがることの出来るものを何もはや見いだせないのか。しかし私は臨終者ではない。私は少しも病気ではない。ー 私の細胞は、自分達は死ななければならないとすでに知っているのか。死というものは、単に病気による破滅であるばかりでなく、一つの思考による肉体の破壊でもあり得るのだ。本当に私は裏切り者なのか。

彼は立ち止まっていた。彼は、あたかも邪悪な夢から目覚めたかのように周りを見回した。彼は、広い、荒涼たる広場にいた。何百人もの兵士達の靴によって踏み固められていて、黄色の粘土質の楽しくない平面で、そこからはほとんど雑草一つ芽生えていなかった。その広場の別の端に、ケバケバしい黄色の、剥き出しの兵舎の建物があって、黄色の高い壁に囲まれていて、その上にはガラスの破片が詰められていた。色褪せた灰色塗料の大きな鉄の門は閉ざされていた。兜を着けた歩哨が、カービン銃を肩に掛けて、行き来していて、少しばかり温まろうとしていた。

少尉はこの図柄を眺めた。再び劣等な夢のように楽しくなかった。ある陰鬱な決意が彼の中に生じた。何か邪悪なもの、薄暗いものであった。彼は広場を横切った。彼は考えた、私が確かめてやろう。

彼は歩哨の道の中程に立って、彼を挑戦的に見つめた。「やあ、戦友」と彼は言った。

彼はこの男を見知っていた。この男も彼を見知っていた。少尉は彼と彼の仲間には時々ビールを振る舞っていた。彼らはときたま、一緒に食事をした。いや、或る田舎のダンス場がかつて殴り合いがあったとき、彼らは共に並んで、片付けて行った。それで彼は全く旧知の馴染みであった。しかし今このとき、この男は少尉のことを知らない振りをした。彼は小声で言った、「さっさと立ち去ってください」。

しかし少尉は立ち止まっていた。彼は更に陰鬱になった。彼は歩哨に新たに語りかけた。彼は嘲笑的に尋ねた、「それで、戦友、乙にすまして、私のことはもはや知らないと言うのか」。

この男は顔をしかめなかった。彼は何も聞かなかったように見えた。彼は一言も言わず通り過ぎた。しかし彼は六歩進むと、向きを変えなければならず、彼はまた少尉に向かって来た。今回少尉は言った、「いいか、聞いてくれ。煙草がないのだ。煙草を一本くれなにか。すぐに立ち去るから」。

この男は素早く左手を見た。歩行者のための小さなドアが開いたままであった。一本の砂利道と衛所の窓が見えた。それから彼は右手の少尉を見つめた。少尉の顔には嘲笑と絶望と不安の解き放ちがたい表情が浮かんでいた。歩哨はこの顔に合点が行かなかったが、しかし警告的なもの、威嚇的なものを感じた。さもなければひょっとしたら大胆に応じて、少尉に煙草を一本与えていたかもしれない。それで彼は無言で通り過ぎて、哨舎の所で向きを変えた。ある予感がして、彼はカービン銃を肩から取って、また少尉に向かって来た。

少尉は全く、野蛮な、何でもやってやるという絶望の呪縛の中にいた。今やとうに明確になっていた、つまり、帝国国防軍は彼らに関して関知する気がない、それに厳格な命令

が下されていて、もはやこのアウトサイダー達と付き合うなどされている、と。しかし彼はどのようなことをしても、この男が自分に関与するように仕向けたかった。自分は彼と喧嘩することにしよう、兵舎に連行されよう、逮捕者となっても構わない。すると歩哨任務の将校に尋ねることができよう。「貴殿らは何故我らに反対しているのか」と。一 それから何か武器保管所について聞けたら...それでよろしい、落着だ、落 一 着。

今彼がとらわれている考えは完全に狂っていた。あたかも歩哨勤務の将校が、自由な戦友にも語ることを許されない情報を、逮捕者にも知らせてくれると期待するようなものであった。

しかし少尉はもはや分別がなく、先ほど自分の細胞は病んでいると思ったのは、やはり正しく考えていたのであった。彼は今回歩哨を相手にせず、側を通り過ぎさせた。しかし歩哨が彼に背中を回している間に、彼は一本の煙草に火を着けた。煙を吹かしながら、彼は戻って来る男に目を向けた。彼は呆気にとられた、若干間抜けな顔の表情を喜んだ。たった今一本の煙草を乞うた少尉が煙草を吸うのを見たのである。少尉は彼に二本目の煙草を差し出して、言った、「ここに、戦友、私からの一本の煙草がある。私にくれなかったからな」。

この男は立ち止まった。彼は決然と言った、「もう、立ち去ってください。さもないと衛兵を呼びます」。

「行くよ」と少尉は説明した、「お主がこの煙草を受け取ったらな」。

この男は彼を黙って見つめた。彼は煙草に手を出さず、カービン銃を少し持ち上げた。結局彼は諭して言った、「馬鹿なことを言わないで。もう立ち去ってください」。

少尉は相手を説得したかった。「戦友」と彼は言った、「煙草を貰ってくれ。機嫌良く貰ってくれ。ただ、まだお主が戦友だと知りたいのだ、ほら」。彼はそれを差し出した。それから脅して付け加えた、「貰ってくれなかったら、ぶん殴るぞ」。

この男は真面目に、観察しながら、じっと待ちながら、彼を見つめた。彼は煙草を受け取る様子を見せず、少尉が何をするか待っていた。

少尉の中に突然、彼をほとんど猛烈に憤慨させる考えが浮かんだ。「いや」と彼は叫んだ、「お主は私が酔っ払っていると思っているのだろう。どんなに酔っ払っているかお見せしよう、...」。

彼は煙草を棄てて、同じ瞬間、拳をこの兵士の顔に直接ぶつけた。

しかし何たることか、一 少尉は、普段は達者なボクサーなのであるが、今日はいない。拳はカービン銃床の板にゴツンと当たった。燃える痛みが手と腕に走り、それからその床尾が彼の胸をしたたかに打った。仰向けによるめいて、少尉は倒れた。一 もう呼吸はできないかのように思われた。

しかし彼はそう横たわっていながら、ばたついて、絶えず歩哨の注意深い視線を受けながら、野獣の如く、目から放されない一種の暴れる狼扱いされながら、一 それでも歩哨は自分を取り押さえず、兵舎に連行せず、自分に発砲しないことに気付いて、一 更に悲しげに、一秒の百分の一の瞬間、自身のポケットのピストルを思い出して、これでこの打撃の屈辱を晴らしたいと思ったが、...

このとき、身を切るほどに、痛切に思い知った。つまり自分達は戦友達に武器保管所の密告について欺いたばかりでなく、単に今全く無闇に戦友達に新たな厄介事を起こしたば

かりでなく、自分は本当にただの臆病者に過ぎないのだ、と。自分がこうしたこと一切をしているのは、単に黒い奥への到着を遅らせて、真実の発見を先延ばししているに過ぎない、自らに数時間の生命を盗み取るために過ぎないのだ、と。鍍金は剥がれた。美しい色合いは落ちた。自分の生命の船の板は、腐って朽ちていた。「これが汝だ」とその声が語っている。

そして彼が苦勞して大地から起き上がって、そして彼が痛む肢体と共に、歩哨に注意せず、歩哨のことを思い出しもせず、立ち去りながら、 — この新たな認識はかくも完全に、まさに生起したことすべてを彼の中で消し去って、 — 彼は再三森でのかの夏の朝のことを考えざるを得なかった。彼が手にピストルを握って、小マイヤーを自分の前で小突いていたときで、自分はこの哀れな臆病者を軽蔑していたのであった。彼の命乞いに反吐を覚えたのであった、 — そして痛々しく自分の許で、私もあのように臆病になるのだろうかという不安に苛まれた。そもそも私は引き金を引く勇気があるだろうか。 — 私はどのように死ぬであろう。

この考えは、数分間、彼の中でますます強くなった。そしてこの考えが一切を支配した。

私はどのように死ぬであろう。一人の男としてか、それとも臆病者としてか。ひょっとして私の手は震えるであろうか。私はかつての小さなラーコーのように盲滅法に自分を撃つことだろうか。いや、何と彼は叫んだことか。

彼は慄然とした。より固く、彼はポケットの涼しく滑らかな銃床を握り締めた。それが彼に平常心を与えてくれるかのようであった。この平常心は彼が生涯失わなかったものであるが、今や死に近付くと、彼は完全にそれを失っていた。私は素早くしなければならぬと彼は絶望して考えた。素早く黒い奥へ向かって、確証を得なければならぬ。自分が勇敢に死に向かっているかすら分からないのであれば、どうして生きて行けよう。

しかし彼がこうしたことすべてを考え、彼の中のすべての熱意が彼に決断を迫っているように見えるとき、彼はゆっくりと進んだ。しかし相変わらず、自分の自転車には近付かず、黒い奥から去り、死から去り、嫌なスパイの任務遂行のために向かった。これはとうに彼にとって甲斐のないものとなっていたのであるが。彼はこのことを思案しなかった。この首尾一貫性の欠如に彼はもはや頓着しなかった。しかし自分が何度か食したことのあつた小さな居酒屋を見て、こんなに汚れた服で小間使いのフリーダに会いに行けないと思いつくと、彼は中に入った。彼は亭主に一杯のビールを注文し、尋ねた。この汚れた服の代わりになるようなジャケットを持っていないか、と。

亭主は彼を一瞬黙って見つめた。勿論空は少尉の考えていることは大体分かっていた。それから彼は姿を消し、新品のウィンドブレーカーを持って戻って来た。

「これなら貴方にぴったりと思います」と彼は言った、「一体どうしたのです」。

「倒れてしまった」と少尉は口ごもった。

彼は自分のウィンドブレーカーを脱いで、外側の袖に大きな黒くにじんだ血痕を見つけた。ぼんやりして彼は胸の上のシャツを広げて、そこにも床尾の痕跡を見つけた。彼がまたシャツのボタンを締めたとき、彼は亭主の視線に気付いた。

「何かもう始まったのじゃないでしょう」と亭主は小声で尋ねた。

「そうじゃない」と少尉は答えて、ウィンドブレーカーを着た。「私にぴったりだ」。

「そうですね。貴方は私の息子と同じ体型だとすぐに分かりました。息子のために明

日用にウィンドブレーカーを買ったのです。私の息子も参加します、少尉殿」。

「結構」と少尉は言って、一口ビールを飲んだ。

「そうなんですよ、少尉殿」と亭主は頼んだ、「ウィンドブレーカーは今晚返してください。息子が明日参加するときは、やはりきちんとしてやりたいのです。一息子がそのようなことをするのは初めてのことです」。

「問題ないよ」と少尉はただ言った、「借り賃は」。

「要りません」と亭主は急いで答えた、「一つ質問があります、ご気分を害しないでください、...」。

「何です」。

「兵舎に行かれましたか」。

「いや、兵舎には行っていません」。

「そうですか、一 だったら何もご存じないですね。兵舎は剣呑な空気だそうですね、...」。

彼は少尉の返事を待って見つめていた。ひょっとしたら今、彼は少尉の体の青黒い斑点のことを考えているのかもしれない。しかし少尉は何も言わなかった。亭主は懇願して言った、「少尉殿、明日は本気で何か起きるとは、貴方も思っていないのでしょうか」。

「本気で何か起きるとは」。

「いや、単に一 本気で、戦いとか撃ち合いとかそんなことです、一 それでしたら私は息子を参加させません、...」。

「いや、そんな」と少尉心から笑った、「何を妄想されているのです。一 戦いとか撃ち合い、一 そんなものはもはやありません。一揆なんてものは、せいぜい娯楽です。英雄的死は一九一八年以来聞かれません、...」。彼は突然、うんざりしたように、打ち切った。

亭主は本気で説明した。「貴方が本気で話されているかは分かりません。しかし私は全く本気で尋ねているのです。つまりただ一人息子のことです。息子に何か起きたら、この居酒屋を誰が継ぐことになりましょうか。生涯働いて、無駄ということになりたくありません。私が二十年前に買ったときの居酒屋を御覧頂きたいものです、一 犬小屋でした。それが、今では。いや、何か本気のことが起きようものなら、一 私には息子がその代償ではたまりません。しかし、そうでないのであれば、私は喜んで参加させます。

一 商売にも都合がよろしい。軍には多くの常連さんがいらっしゃるから」。

少尉は今一度、万事異常なく、全く危険はないと請け合った。彼は今一度、夕方には間に合うようウィンドブレーカーを返すと約束した。一 そして更に向かった。彼は自分が亭主に嘘をついたと分かっていた。しかし構うことない。今となっては、多少の嘘の多寡は問題ではない。このような人々がどのような理由から参加するのか、仔細に観察すれば、反吐が出そうである。しかしリヒター氏にしてみても、少尉がどのような理由から参加するのか仔細に観察すれば、ひょっとしたらやはり反吐を覚えるかもしれない。脳の奇妙な病、自分の平常心の衰弱は、すでにこれほどまでに進行していて、少尉はそのように考えるのであった。

居酒屋での短い休憩、ビール二杯は彼に良く効いた。彼は今やより急ぎ足となった。目的の小さな別荘通りに間もなく達する。別荘の生垣や木々の葉はすでにより見通しよくな

っていた。少尉は素早く進み、帽子を額に深く押した。自分はここ、多くの将校の住む所では見られたくない、正体を知られたくない。

彼が向かっている別荘には大佐が住んでいた。帝国国防軍の現役大佐であった。自分の社会的身分によれば、少尉は、「客人用」と銘のある呼び鈴のボタンを押したいところであったろう。しかし少尉はこのボタンを押さず、更に十歩進んだ。「業者用」という表札のある小さな鉄製の庭木戸まで行った。彼はその木戸を押し開けて、タイル張りの通路を進んだ、一 客人の道は白黒の小石であった、一 別荘を回った裏口で、絨毯用物干しやゴミ容器が置かれている所であった。彼は主人客人達のように五段上がって鏡のある二階へは行かず、五段下がって、窓の前に格子のある地階へ行った。彼はキッチンの廊下を進んだ、...

少尉は常に、目的は手段を浄化するという命題を信じていた。彼は恥じることなく、以前は全く正常な小間使いのフリーダをだらしのない家の女スパイにした。というのはそのことです。すでに何度か駐屯地の内情、知ってまことに有益な情報を得たからである。今回この道を普段よりもはるかに不機嫌に進んだのは、彼の情緒全体が必ずしも薔薇色ではなかったからばかりでなく、とりわけ、この手段はこれまで日中には使用しなかったからであった。我らの行動は日中では別の顔となり、夜の場合とは異なる。上の二階の大佐には二人の娘がいて、少尉はこの娘達と踊ったことさえあったのである。これらの娘達に自分の台所訪問を見られたら、はなはだ具合が悪い。少尉は自分の行動を恥じなかったが、自分の行動を目撃されることは恥ずかしがった。

少尉は運が良かった。彼が廊下に入ると、小間使いのフリーダの他、誰にも出会わなかった。彼女は自分の部屋から出て来た、手に手箒とちり取りを持っていた。

「今日は、フリーデル」と少尉は挨拶した。

フリーデルは、およそ二十歳、豊満な胸で、かの若干がっしりした田舎風美人で、二十五歳になったらこの美しさの痕跡は消えてしまう女性で、少しばかり縮み上がった。「まあ、どうしたの、フリッツ」と彼女は尋ねた、「昼間から来たの。でも私は時間ないわ」。

そう言いながらちり取りと手箒を廊下の隅に置いた。

「どうした、フリーデル」と少尉は若干元氣なく尋ねた、「私が来ても、少しも嬉しそうでない」。

彼女は、いつものように、彼に近寄って、彼を腕に抱き寄せ、接吻しようとしなかった。普段彼女は少尉を見ると、顔を輝かせていた。この小娘が何と自惚れたものか、誰が知ろう。献身的に惚れ込み、謙虚に好意を寄せていた。それなのに、今日は。

今やフリーデルはまことに小生意気に言った、「あなたが今日来ることは、もう朝からずっと分かっていたのよ」。

「何だと」と少尉は不思議がって見せた、「予知能力があるのか。私のことを夢見ていたんだろう、フリーダ。私も気分です、...フリーダが気になると思ってな、...」。

絶望的であった。少尉は少しも気分が乗らなかった。彼は小間使いを見つめた。まことに意図的に見つめた。その通り、一人の小間使いで、心地良い胸と、強力な腰、少しばかりがさつな踝の美しい脚を有している。...しかしどうしようもなく、彼は調子が出ない。どこにでもいる女性で、全くどうでも良いのだ、一 しかし今はフリーデルもそんなに愚かではなく、彼女も察している。

嘲笑的に彼女は言った、「フリッツ、どうしたの。あなたも噂を聞いたのでしょうか、あんたらの一揆はおじゃんになったと。それであなたのフリーデルの許で少しばかり聞きたいと思ったのでしょうか」。

「おじゃんになったと、どうして」と彼は尋ねて、彼女が語り出すことを期待した。

「知らない振りをして」と彼女は怒って叫んだ、「良く分かっているのでしょうか。怖いんでしょう。だから私の所へ来た。臆病者よ、あんたは。大佐が恵み深い奥方様に話されることを聞いてから、私は自分に言ったの。フリーデル、賭けてみよう。あの人が今日来たら、おまえのために来るんじゃない、フリーデル。単に聞くために来るんだ。だったらおまえはスパイでしかない。ほらね、まだ二時間もしないのに、もう来た。そして気になったらかと私を言い負かそうとする」。

彼女は彼に怒って、軽蔑して見つめた。少しばかり息を弾ませて、彼女の強力な胸は激しく揺れ、少尉はそれを見ていた。

それではもう話せないと少尉は呆然と考え、息する胸を眺めていた。大佐が奥方に語ったことを知る必要がある、…。

全くだしぬけに、彼は一言も言わず、この小間使いの側を通り過ぎ、彼は彼女の部屋、寝室へ入った。一 ベッドはまだ用意されていず、台座が広げられたままで、ここに彼女は横になり、寝ていたわけである。…

「私がどんな気分かお見せしよう」と彼は素早く言って、娘の両腕をただ掴んだ。彼は彼女の抵抗を構わず、彼は娘達の防御に注意を払ったことがなかった。これは皆、単に生娘の貞淑振り、気取りにすぎない。彼女は拳を彼の胸に押し当て、痛む胸に当てた。しかし彼は彼女の顔に自分の顔を重ね、自分の口を彼女の口に置いた。口は固く拒否して閉ざされていた。しかし彼は接吻し、接吻を続けた。…

今まだ接吻をしている、と彼はぼんやりと考えた。すぐに彼女は屈服するだろう。彼女の唇は開くだろう。一 それから私は死ぬ定めだ。自分の接吻で、自分の死の定めを知ることになる。私の接吻で彼女は喋るだろう、すべてを語るだろう。そしてそれから黒い奥へ行く定めだ、そしてヴィオレットに語ったことをする定めだ、一 「忌々しいヴィオレット」。

思わず、少尉はこの憎い女性の名前を声に出してしまった。すでに彼は一人の娘に接吻していることを忘れてしまっていた。彼は彼女をただ緩やかに腕の中に抱いていた。

荒々しい力で彼は突き飛ばされるのを感じた。彼は戸棚に騒々しく倒れた。

「出て行きなさいよ」と娘は怒って叫んだ、「嘘つき。私をあんたのためにスパイにさせていながら、他の女の人を考えているんだから」。彼女は激しく息をした。

少尉は呆然として、当惑した微笑を浮かべて、衣装箆の側に立っていた。彼はもはや釈明し、弁明しようとしなかった。

「ま、フリーデル」と彼は最後に言った。絶えず同じ当惑して表情であった。「滑稽な世の中で。おまえの言う通りだ。学校でこんな風に習ったものだな。「ネーモー・アンテ・モルテム・ベアートゥス[誰も死ぬまで幸福でない、ヘロドトス]」とかそれに類したもので、もう正確に覚えていない。つまり誰も死ぬまでは幸せであったと称えられない、誰も自分の正体は死ぬまでは分からないという意味だ。全くおまえの言う通りだ。私は嘘つきだ。一 バイバイ、フリーデル。悪気はないのだ」。

彼は彼女に手を差し出した。彼女は躊躇いながらそれを握った。彼女の怒りは消えていた。彼の当惑が彼女に移っていた。「まあ、フリッツ」と彼女は言って、彼の不分明な格言に何と言ったものか全く分からないでいた。

「あなた、とても変よ。私を大事に思っていないから、ただ頭にきたのよ」。

彼は拒絶の仕草をした。

「ま、いいわ。もう何も言わない。あんたが聞きたいなら、語ってあげる、大佐殿は今朝ね、...」。

彼は彼女の手を放した、「いや、結構、フリーデル。もう必要ない。すべてが」と彼はもうまた考え込んでいた、「本当に変でならない。もう何も関係ないのだ。バイバイ、フリーデル。すぐに結婚することだな。それがおまえにとって一番良い、...」。

そう言って彼は出た。彼は、今一度別れ際彼女を見つめることさえ忘れていた。小間使いフリーダもすでに彼にとって完全に埋没していた。彼女の呼びかけを聞いていなかった。深く考え込んで彼は地下廊下を歩み、小さな階段を上がり、前庭のタイル張りの道を通って通りに出た。彼は帽子を手を持っていた。他人が彼を見て、その正体を知ろうと、彼にとって全くどうでも良かった。このとき彼はこの地上での他人の存在を明確には意識していなかった。彼は自身に没頭していた。

勿論それから、次の通りの角で、彼は今一度自分の思考の静かな世界から、この軽薄な危険な星へ呼び戻された。というのは一つの手が彼の肩に置かれて、或る声が彼に語りかけたからである。「ちょっと済みません、少尉殿」。

少尉は見上げて、太った刑事の氷の目を見た。

123

騎兵隊長は行方不明になり、エーファ夫人は待機する

「黄金の帽子」亭の給仕がいなければ、倒れたヴィオレットはなお長く、食堂の床に横たわっていたことだろう。フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長は何の役にも立たなかった。まず彼は少尉を追いかけて、彼と決闘しようとした。それで客人達に、いかにこの少尉が自分の娘を侮辱的に扱ったか、その証人となるよう呼びかけた。...彼はヴィオレットの横に跪き、ハンカチで彼女の口を拭った。彼は嘆いて、叫んだ、「ヴィオレット、しっかりしろ、一将校の娘だろう」。

そして飛び起きて、自分用にポートワインを頼んだ、一「しかしこのグラスは駄目だ。このグラスは汚されている、砕かれなければならない」。彼は砕いた。「私の妻はどこだ、私の妻は、本当に必要なとき、いつもいない。皆さん、貴方らが証人だ、私の妻はここにいない」。

給仕は運転手を呼び寄せた。彼らは三人でヴィオレットを持ち上げ、店から運び出し、車に乗せ、家に帰らせようとした。しかしヴィオレットは持ち上げられると、叫び始めた。

一 彼女は絶えず叫び続け、言葉にならず、ただ分からぬ嘆きの声で、動物のようであった。男達はほとんど彼女を落とすところであった。ヴィオレットは或るソファーに置かれた。白い、溝つきのボタンのある恐ろしい蠟引き布のソファーの一つで、これからは皆が滑り落ちるのであった。そこに彼女はあられもない恰好で横たわっていたが、一人の旅

行者が、膝の上の彼女のスカートを整えようとした。彼女は何も見ず、何も聞かず、目は閉ざされていた。彼女はもはや若い娘ではなかった。彼女はもはや何ものでもなく、彼女は肉の或る塊で、叫ぶ、恐ろしく叫ぶ塊であった、...

騎兵隊長は取り乱して、テーブルに座っていた。両手にほとんど白髪の手を支えていた。彼は両耳を閉ざしていた。彼は口ごもった、「娘を連れ去れ。叫ばせるな。聞きたくない。病院へ連れて行け。私の妻を呼べ」。

最後の希望のみが唯一実現可能であった。運転手のフィンガーは豪華のホルヒ車、つまりこの大きな子供のための、すでにまた忘却された最新の玩具で、恵み深い奥方を迎えに出発した。

ホテル関係者が現れて、三階の一部屋が準備され、医師に電話された。最後にヴィオレットが上に運ばれた。「私は叫び声に耐えられん」と彼は言った。今やすべてのポートワインの瓶が彼のテーブルの上に置かれる事態になっていた。彼は生活不能者の救済となるものを、つまりアルコールを、憂いからの逃避となり、忘却をもたらすものを見いだしていた。 — そして翌日百倍難儀な目覚めを得ることになる。

一人の小間使いと一緒に女将がヴィオレットを脱がせた。彼女は叫んで、彼女はベッドに寝ているとき、叫び続けた。

「あら、ドーラ」と女将は言った、「私は鍋の所に行かなくちゃならない。すぐに殿方らが昼食に来るから。あなたはここに座っていなさい。そしてドクトルがお見えになったら、私を呼びなさい」。

下の殿方らは、娘がかくも叫んでいるのは、見つめていたわけではないが、心痛のせいであろうと一致した。郡全体が明日になれば、フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長の令嬢、百万マルクの遺産継承人に何が起きたか知ることになろう、とんでもない若造だ。

騎兵隊長はお喋りを気にかけていなかった。彼の仕事は飲むことで、彼は飲んだ。

上ではヴィオレットが叫んだ。

小間使いのドーラは、二、三回彼女に言った、「お嬢様、そんなに叫ばないでください。誰も何もしませんよ。 — 何故そんなに叫ぶのです、何か悲しいのですか」。

甲斐がない。この塊は更に叫び続けた。肩をすくめて、「じゃ、止めて」。親切にしてやったのに、無視されたという思いで、小間使いはベッドの側に腰掛けたが、その前に編み物道具を取って来ていた。ドーラは座ってセーターを編んだ。下の食堂ではフォン・ブラックヴィッツが座っていて、飲んでいて、ヴィオレットは人生の中枢神経を傷付けられて、致命傷を負い、ただ叫んでいた。不幸な目に遭わないという保証は誰にもない。 —

ヴィオレット嬢は半ば子供であるが、実生活の何の予感もなく、賭けに負けて、この人生の狼の大きな口に迎えられた。ただわずかな暗闇、薄明かりが見られた。この深淵から、一つの永遠に繰り返される叫び声が響いてきた。不安でたまらない。

医師が待たれた。騎兵隊長は余りに飲んだ。給仕や女将が、何か食べるように、単なるスープ一皿であれ食べるよう勧めたが、無駄であった。フォン・ブラックヴィッツ氏はポートワインに留まっていた。彼が今日の午前遭遇したことの、ぼんやりした思い出のみが、アルコールの蒸気の中で残っていた。しかしこの最後の色褪せた思い出、つまり自分は災難に遭ったという想いは、どこかでポートワインと結び付いていて、それで彼はポートワインに固執していた。次第に一本目から二本目となり、二本目が三本目となって、彼の顔

は深紅に燃え始め、彼の髪は真っ白に輝いた。今や彼は頭をよりピンと上げ、真っ直ぐに宙を見た。時に彼は突然笑い出したり、あるいは素早く人差し指で多くの数字をテーブルクロスに書いて、計算しているように見えた。

給仕は彼を注意深く見守っていた。「黄金の帽子」亭は由緒ある店で、その評判が簡単に下落することはない。しかし結局、酒場で倒れた一人の客人がおれば、下落に十分である。娘の後、父親までそうなるのはならない。エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人は急いで車に乗り込んだ。秘密[Entente]警察との一切の諍い、厄介事を若いパーゲルに任せた。パーゲルは、莊園ノイローエの領主一家と役人達の中で、唯一残っている代理人となった。 — しかしこのエーファ夫人は、夫も娘も自分を切に待っているわけではないと知らなかった。ただ給仕長のみが、更に一騒動起きないように、夫人を切望していた。エーファ夫人は運転手に言った、「スピードを上げてください」。 — 運転手は答えた、「畏まりました、恵み深いご夫人、 — しかしこの道では」。

彼女は隅に寄りかかった。彼女は不安、物思い、心配事に襲われた。厄災に我が家は見舞われている。すべてが瓦解する。十回となく、彼女はまた窓ガラスを押し開けて、フィンガー氏に新たに尋ねたくなった。しかしそれでも彼女は隅の方にいた。詮方ない、この方は何も知らない。運転手は、ヴィオレットが意識を失って、客室に倒れてから、ようやく呼ばれたのであった。娘を車に運ぼうと人々が思ったとき、娘は叫び始めたという。

「娘は何か吐いたのですか」とエーファ夫人は尋ねた。

「嘔吐ですか、いえ」とフィンガー氏は答えた。

「何故娘は叫んだのです、フィンガー」とエーファ夫人は尋ねた。

しかしフィンガーはこれには返事できなかった。彼女の夫からは一言も、何の連絡もない。 — 「まあ、アヒム、アヒム」と再度エーファ夫人は嘆息し、それでも自分の夫についてどれほど嘆息する理由があるか、まだ少しも予知していなかった。

というのは今や騎兵隊長は食堂で立腹していたからである。何度か彼は椅子から立ち上がって、テーブルを支えにして、疑り深くマルクト広場を覗き見た。「どうしたのです、何か不都合なことが起きましたか」と給仕は案じて尋ねた、「何か食べ物をお持ちしましょうか。ローストチキンが今日お勧めです」。

騎兵隊長は給仕を立腹して見つめた。野蛮に煌めく、赤らんだ視線であった。彼は給仕に返事をせずに行かせ、自分はまた座って、新たに一杯のポートワインを飲み、そして小声で立腹して無意識に口ごもっていた。しかし一瞬するとまた騎兵隊長は窓から外を覗いた。或る想いに彼の脳はとらわれていた。自分は車を持っていた。自分はそれをここホテルの前に止めさせていた。車はどこにあるのだ。盗まれたのか。

騎兵隊長は酒場を用心深く一瞥した。奴等は座って食べている。しかし奴等を信用できない。自分は多くの視線にぶつかる。 — 何故皆が自分を見つめているのだ。奴等は、自分が盗まれたということをすでに知っているのか。自分がそれに気付くのを待っているのか。

騎兵隊長はその視線のまま自らの席に戻った。微かにポートワインの瓶が風の中の茎のように揺れた。グラスが遠ざかったかと思うと、突然全く間近に来て、とても大きくなった。騎兵隊長はこの瞬間を利用して、ポートワインの瓶の首をグラスに傾けた。しかしわずかな残りしか滴り出なかった。

彼は給仕を求めて見回した。しかしこの瞬間、給仕は食堂を去った。騎兵隊長はこれを利用し、立ち上がった。物思いに耽って、彼は、ヴィオレットのジャケットや帽子の横、帽子や外套の掛かっている衣装スタンドの前に立ち止まった。

ヴィオレットはどうしたのだと彼は思い付いた。

しかし酩酊の新たな波がこの考えを押し流した。彼はまた外套を着るつもりであったことを忘れていた。彼は食堂から出て、用心して二、三階段を下りて行った。更にドアが一つあって、一　するとフォン・ブラックヴィッツ氏は通りに出ていた。

細かい雨が降っていた。剥き出しの頭で、灰色と灰色の模様のスーツを着て、騎兵隊長は外に立って、路上をあちこち見た。どちらへ行こうか。すると通りの端に一人のお巡りの制帽が光っているように見えた。用心して、しかし真っ直ぐに、少しばかり臆して覚束なくお巡りに向かって行った。

通りの端に達すると、この光るお巡りの制帽は、輝く真鍮の水盤で、理髪店の上に掛かっていると分かった。騎兵隊長は思案げに顎を撫でた。無精髭がざわついた。彼は今朝髭を剃らなかった。それで今この店に入った。

この理髪店は若干、騎兵隊長の予想とは違って見えた。中に二、三のテーブルと椅子があった。しかし鏡はなかった。しかし騎兵隊長には都合が良くて、少しばかり腰掛けたかった。彼は頭を手で支えて、すぐにまた酩酊の物憂い湖に沈み込んだ。

しばらくして誰かが彼の肩に手を置いたのが分かった。彼は見上げて、回らぬ舌で、青白い若者の顔に向かって言った、「髭を剃ってくれ」。

彼の背後で笑い声が弾けた。騎兵隊長は怒りたくなかった。私のことを笑ったのか。向き直ろうとした。

この若者は全く好意的に言った。「二、三杯引っかけていますね、伯爵殿。髭を剃って貰いたいのですか。それは後でできましょう。ここはただのパブで、...」。

「すっかり剃ってしまいますよ。喜んでさっぱりと身ぐるみ理容して差し上げます」と生意気な声が騎兵隊長の背後で叫んだ。

「静かにしな」と青白い男がなじった、「奴の言うことは聞かないでください。奴は酔っ払っているのです。何か飲み物を持って来ましょうか」。

「ポートワイン」と騎兵隊長は口ごもった。

「その通り、勿論、ポートワイン、決まり。ただこちらにはポートワインはありません。しかしシュナップス[火酒]は一級品です。私も一杯貰ってよろしいですか。私の友人も。それでは有り難い。ここで内密に話しましょう。そして一杯引っかけましょう。御亭主、アウグスト、シュナップス、大を三杯、そしてボトルをすぐにテーブルに置いてくれ。この旦那の招待だ、一　でしょう。招待なさったのでしょうか、伯爵殿」。

騎兵隊長は半ば眠って二人の間に座っていた。時に彼は飛び上がった。行為衝動に駆られた。自分の車を探さなければならない、と。

両人が彼を宥めた。すぐに一緒に探しに行きましょう。まずは一杯飲んでください。

一　「このシュナップスは最高でしょう、伯爵殿」。

フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長はまた自らの裡に沈んだ。

「黄金の帽子」亭の給仕が、客人の消失に気付いたとき、すぐに心配はしなかった。トイレに出掛けたのであろうと彼は考えて、昼食の客人達の相手をするために急いだ。すぐ

また後で調べることにしよう。しばしばこのような酩酊者はトイレで眠り込むものだ。何も問題はない。少なくともその方が安全に守られることになるだろう。

給仕は熱心に働いた。彼は駆け、盆を持ってよろめき、ビールを運び、勘定した。一

今日は将校達は姿を見せなかったが、店は繁盛した。すでに六十人以上の食事の客人があった、一 ほとんどは個々の殿方で、多分田舎から、明日の次第はいかなるものか、聞きにやって来た者達であった。ひょっとしたら早めに賛同する必要があるのかもしれない。

給仕が働いている間に、医師が来た。医師は三階を指示され、そこにベッドの中の若い娘を見つけた。娘は短い間隔で、動物のような痛みの声を上げて、同時に目を閉ざしたままあちこち頭を転がしていた。

医師はこの病人のベッドの側に一人で立っていた。彼はしばらく待機した。しかしすべて現状のまま変わらなかった。病人は叫び、誰も来なかった。何かするために、医師は脈を計った。それから二言三言病人に、痛みがあるのか、どうしたのかと語りかけた。病人は聞いていなかった。試しに彼も病人に、静かにしなさいと大声で叫んだ。しかし彼女は反応せず、聞いていなかった。彼は彼女の頭を固く押さえた。頭は彼の両手の間で静かになった。しかし彼が頭を放すと、頭は再び回転し、叫び始めた。

それで医師は両肩をすくめて、待機して窓辺に立って、灰色の天気を眺めた。眺めは楽しいものではなく、叫び声は楽しくなかった。一 その上医師は、難儀な午前の後、空腹であった。女将にそろそろ来て欲しいと思った。

ようやく女将がやって来た。キッチンから抜け出すことが難しく、今も彼女は忙しいのであった。

「ドクトル、ようやくお見えになって、有り難いことです。この小娘はどうしたのです」。

これはまさに医師が知りたいことだった。

「いえ、それで父親も今、不明です。フォン・ブラックヴィッツ＝ノイローエ騎兵隊長です。老吝嗇家テッシュォーの婿で、三本のポートワインを飲み、完全に酔っ払って雨の中、帽子も外套も着用せず、出て行きました。この父親を探しに行かせています。何と色々起こることでしょう。すべてがぶつかる日があります。この小娘はいかがです。母親が自動車でこちらに向かっています。一 一、二時間したら着くことでしょう」。

「この若い令嬢はどうしたのです」。

女将も良くは知らなかった。給仕が呼ばれた。「私の店全体てんやわんやで、丁度今日に限って起きるなんて。沢山の食事客が見えているのに」。

しかし給仕も、若い男との何らかのやり取りがあったとしか言いようがなかった。

「それでは恋愛沙汰ですな」と医師は言った、「多分ひどい神経ショックです。まずは令嬢を眠らせることにしましょう。一 そして母親が着いたら、もう一度診ましよう、...」。

「そうです、ドクトル殿。ただ眠らせてください。この叫び声はもう聞きたくありません。ずっと誰かをベッドの側に着かせておくこともできません。私どもも仕事がありますし、ここは病院でもない、...」。

ドクトルはこれを聞いていた。類似のことを日に百度も聞かされるのである。人間は丁度今に限って病気を看病する時間はない、病気は望ましくない客だと、医師に語った飽き

ないものだと、いつも新たに聞かされてそのたびにドクトルは訝しく思っていた。しかし人間はこのことをいつも医師達に語るのである。

医師は注射器に軽い睡眠薬を引き入れた。彼は針を前腕に刺した、 — そしてこの病人はびくとして、一瞬間叫び声を中断した。

憂わしげに医師は立っていた。注射器の芯を押すのはすでに止めていた。このびくとした様、この中断は重症の神経ショックとは合わない。軽い一刺しを感知する余裕はないはずだが、しかしそれを感知した。従って彼女は意識がある、単に意識喪失を装っているのだ。

ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツの病床に立っていたのは、もはや若い医師ではなかった。中年の男で、患者が偽装してももはや怒ることはなかった。彼は多くの人間を自分の手で診てきた。 — いや、人間というものは。彼はもはや教訓的、教師的、倫理的意図を持っていなかった。この若い娘がかくも叫び、かくも病氣と無意識との中へ逃避するのは、この立派な家系のうら若い娘がそうするのは、何か邪悪なことに対してパニックの不安に陥っているからである。ひょっとしたら単に話しのやり取りを、ひょっとしたら何かより悪しきことを恐れているのかもしれない。いかに人間というものは、人生の薄暗い贈り物を不安に思う余り、涅槃寂靜[ニルヴァーナ]を求めるものであるか、この医師は承知していた。つまり深い、夢のない、一切を忘却させる眠りは、前もっては耐え難いことに耐える力を与えるものであると承知していた。

静かに医師は注射器の針を抜いた。彼は娘に、二、三時間の休みを贈るつもりであった。むしろ長く深い眠りを与えたいと思った。ゆっくり休め。ひどい時間をやり過ごせ。

彼は別のもっと強い液を注射器に引き入れた。腕の中にすべての溶液を入れ終わらないうちに、叫び声は途切れた。ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツは頭を脇に置いて、体を伸ばし、頭の下に一本の腕を入れて、彼女は眠り込んだ。

「これでいい」と医師は女将に言った、「これから十時間、十二時間としっかり眠ることでしょう。それでは、母親が着いたら、私に電話をください」。彼は去った。

一時半の直後であった。

その後一時間半してフィンガー氏はエーファ夫人と到着した。今三時になっていた。食事時間は終わり、女将は時間の余裕があり、給仕も少しばかり暇になった。

色々なことをエーファ夫人は聞くことになった。未知の若い男について、ポートワインのグラスからのぶっかけについて、ある話しのやり取りについて。「フリッツ、いや、フリッツ」と — 今深く眠っているお嬢さんは叫んでいました。御主人殿は少し酩酊されて、食事されずに飲まれて、今は出て行かれたまま、まだ戻って来ません。いや、どちらへ出掛けられるかは仰有らずに。医師の話しでは神経ショックだそうです。医師にはすぐ電話しましょう。...いや、御主人は帽子と外套を掛けたまま、この時間まで少なくとも二時間は姿が見えません。ひょっとしてお知り合いの方の許に行かれたのでしょうか。

断片的にフォン・ブラックヴィッツ夫人はこうしたことを聞いた。しかしこれらから平仄の合った詩句を造り上げられなかった。彼女は活動的人間であった。自分の家族がひどい状態にある、夫は酩酊して雨の中さまよっているし、娘は未知の危機の中にある。しかし深く眠っている。 — 彼女は何かし、変更し、改善したかった。しかし自分は活動を奪われて、ベッドの側に座って、医師を待たなければならない。この医師も勿論何も言え

ない。

彼女は窓辺に立って、楽しくない、雨に濡れたホテルの中庭を眺めた。タールフェルトの屋根が鈍く光っていた。店の従僕が荷車の車輪に油を差していた。はなはだ緩慢に、手を入れるたびに休憩して、彼は車軸から車輪を外し、それを壁に立てかけた。彼は油の入ったブリキ缶を取って来て、それを車軸の横に置き、車軸を見つめた。彼は平らな鉋屑を取って、この鉋屑でブリキから油を少し取り、その物体を見つめた、 — そしてゆっくりと車軸に油を差し始めた。...

こんな風に我々は人生を無駄に過ごしているとエーファ夫人は辛辣に考えた。ではやはり恋愛沙汰だった、 — フリッツ、いや、フリッツ、 — 私の言う通りだった。でも私の言う通りであったとして、私に何の益があらう、 — とりわけ娘に何の益があらう。

エーファ夫人は向き直って、眠っている娘を眺めた。激しい焦燥に駆られた。休んでいる娘の肩を掴んで、揺さぶり、目覚めさせ、問い詰め、助言し、相談し、何かしたかった。しかしこの鈍い睡眠、深くて、すこしばかりガラガラした息の許、どんなに揺すっても無駄であろう。ヴィオレットは夫人の活動力、焦燥から逃れている、丁度夫人にまだ情報を与えられ得る唯一の男性が、アヒムのように逃れているようなものと夫人は感じた。

何故シュトゥットマンはここにいないのかと彼女は怒って考えた。本当に頼りが必要なきに、居合わせないのであれば、何の頼りがいがある。私はアヒムを探しに町中を走り回れない。居酒屋を一軒一軒覗くわけに行かない。知人に電話することさえできない。少しも酔っていないかもしれないし、ただ彼の恥になるだけかもしれないのだから。

しかしようやく一つの考え、一つの思い付きが浮かんだ。素早く彼女は階段を駆け下りて、運転手フィンガーにゆっくりと町の通りを運転し、騎兵隊長の姿を探すように頼んだ。ひょっとしたら彼女の誤解かもしれなかったが、フィンク氏が彼女のことを少しばかり疑わしげに見つめていたように思われた。彼女にとって、フィンク氏が正規の運転手なのか、それともむしろ自動車販売会社の委託を受けて、未支払いの車を注意することになっており、突然精算書を突き出すかもしれない人なのか、まだ全面的に明らかではなかったのである。いずれにせよ彼女にとって騎兵隊長の家は奇妙に、少しばかり無秩序に思えたに違いない、 — 彼が彼らの許に来たわずか二日の間に実に多くのことが生じていた。

彼女は雨の中、ホテルの階段に立ち止まっていた。フィンガー氏はハンドルの背後に威厳を持って座った。車は音を響かせ、ゆっくりと出発した。 — エーファ夫人はホテルに戻った。そして彼女は階段を上がった。上ではこの間に何か起きたに違いないという思いが生じて、彼女の動悸が一層速くなった。いや、何か起きようと、ヴィオレットが目覚めてくれたらいい。彼女と話せるようになるかも、ようやく娘と話せよう、....

しかしヴィオレットは固く眠っていた。

今や娘と話せたかもしれないが、しかしそうならなかった。ヴァイオは眠っていた。彼女の母親はベッドの側に座っていて、子供を見つめていた。 — 娘は母に話せるに違いない。エーファ夫人は突然、自分がいかに間違っていたか悟った。自分がいかに情けないスパイ行為に至っていたか、もはや分からないほどであった。まさに自分が娘に対しスパイ活動をしていたが故に、娘は彼女に対し余所余所しい敵になっていた。二度と決してこのような間違いを犯すまい。彼女は、自分の娘が今や母親も立ち入ることを許されない自身の領域を有することを学んでいた。彼女は母親であるばかりでなく、女[妻]でもあるが

故に、まさに許されないのである。

ノックがあった。

さて医師がやって来た。あり得ないニッケル眼鏡の奥に目立って青ざめた目を有する中年の痩せた紳士で、まことに無器用な仕草で、きっと独身者である。彼が丁寧に脈を計り、そして満足して頭で頷くのを目にする、早速夫人は苛立って来た。一 あたかもこの脈拍を力強く造り上げた親愛なる神様のごとき態度である。勿論この男は何も知らないのだ。彼は何かショックについて、長目の時間眠らせて、休憩を入れ、目覚めの後もすべての質問を控えて、娘の傷付いた情緒を思いやる、その必要性について語った。...

この退屈な道化に自分の娘の傷付いた情緒が分かるうか。ただ娘の分別のない、意識のない姿を見ただけなのに。アヒムとすらこの人は話していない。今話して分かったことだが、夫についてもこの人は何の情報も有していない。

どれほど長くヴィオレットは眠るのでしょうか。真夜中過ぎ、恐らく翌朝まででしょうか。まことに、これが、この阿呆が仕上げた唯一のことで、娘が最も母親の愛を必要としているまさにこの時間に、私からヴァイオを取り上げてしまった。

娘を少なくともこの恐ろしいホテルの部屋から今日のうちにも家に連れて行けませんか。いつです。そうですね、御主人が戻られたら。大丈夫でしょうか。車で帰る途中、娘は目覚めないでしょうか。

「結構です。それでは、私どもはフォン・ブラックヴィッツ殿が戻って来たら、出発しましょう。感謝申し上げます、ドクトル殿。報酬をすぐお渡ししてよろしいですか。それとも請求書を私どもに送られますか」。

「恵み深い奥方様」と医師は言って、要求もないのに腰を下ろした、「すべては目覚めたときの瞬間にかかっています、...」。彼は夫人を好意的に、しかしはなはだ据えた目で見つめた。

いや、勿論です。これはフォン・ブラックヴィッツ夫人も理解していた。だからこそ自分は、ヴィオレットをこの楽しくないホテルの部屋から慣れて親しい環境の下に連れて帰りたいのです。

「ひょっとしたらまさにそれが間違いかもしれません」と医師は言った、「ひょっとしたら、目覚めたとき、娘さんは何ら慣れたものを見てはならないのかもしれませんが。自分の古い部屋、馴染みの顔を見てはならない、一 ひょっとしたら貴女すらそうかもしれません、恵み深い奥方」。

「でもどうしてそう思われるのです、ドクトル殿」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は苛立って叫んだ、「何が起きたかは分かります。何らかの些細な恋愛沙汰です。私の娘はそれを悲劇的に考えています。私は説教家ではありません。私は少しも非難するつもりはありません、...」。

「まさにそのことです」と医師は微笑した、「貴女は些細な恋愛沙汰と仰有る、一 そして御令嬢はそのことでほとんど分別を失いました。恵み深い奥方、それは二つの世界です。互いに理解し合えない、二つの全く異なる世界です、...」。

「ヴィオレットはそれを乗り越えましょう、...」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は始めた。

しかし医師は無愛想に遮った、「私は今日の正午からそのことに思いを巡らさざるを得

なかったのです、恵み深い奥方。ひょっとしたら私の間違いかもしれません。今日の昼、注射する前に若い御令嬢から話しを聞く必要があると思っていました。令嬢は意識がないわけではなかったのです。いや、奥方、そうではなく、令嬢は意識喪失をただ装っていました。...何か恐ろしいことを体験したのです。しかし令嬢はこれから体験する予定の何か恐ろしいことに、もっと不安を感じているのです。 — 済みません、奥方様」と医師は言った、「勿論、私の間違いということもあり得ます。私は自分で次のように診断しました。多分そうだろう、若干の蓋然性がそのように語っている。令嬢は意識喪失者を演じている。令嬢はそうすることによって災難が自分の側から去って行くと考えている、と。

— ひょっとしたらこの災難には期限があるのかもしれませんが。我々は何も知らないのですが、...」。

「でもこれからまだ一体どんな災難があるというのです」とフォン・ブラックヴィッツ夫人はまことに苛立って叫んだ。「その男は娘を袖にしたのです。すでに長くそう考えていました。ここで娘は彼にたまたま再会した。彼は私の夫と或るやり取りをしました。その若造はならず者と判明したのです。そうでなければ私の夫はワインをその若造の顔にぶちまけないでしょう。こうしたこと一切で娘は言いようもなく興奮したのです。神経崩壊に至ってしまった。 — 仕方がない、あるいはむしろ十分にひどいことです、 — しかし一体またどんな災難が生ずるといいます」。

「それがまさに我々の知らないことです、奥方様。そして多分我々の知ってはならないことでしょう。 — いいですか」と医師は説得して言った。というのは彼がどんなに言葉を尽くしても、エーファ夫人は信ぜず、拒絶的であったからである。「貴女の想定通りでしたら、若い御令嬢はこの若者とのやり取りの後、本来もっとほっとなったに違いないことでしょう。父親が、そして同時に両親が、今ようやく彼女の秘密を知るようになって、むしろ心が軽くなったに違いないのです。 — 何故うら若い娘がなお偽装するのでしょうか。何故全く異様な手段に訴えるのでしょうか」。

「でも貴方は、ヴィオレットが偽装していたとただ仮定されています、ドクトル殿。娘とは話したのではないのでしょうか」。

「いや、残念ながらしていません。すべては一つの仮定です、仰有る通りです、恵み深い奥方様」。

「分かりました、それでどのようにしろと助言なさいますか」。

「御令嬢を当地の病院に預けることです、良く守られることでしょう。多分令嬢は安心と感ずることでしょう。令嬢が目覚めて、貴女をお求めになったら、十分に令嬢の許に貴女はお出でになられます。令嬢が家を希望されたら、 — すぐそのようにしましょう」。

エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人はこの医師を熟慮して見つめた。彼女は医師の提案について考えていなかった。そうするには彼は余りに馬鹿げているように彼女には思えた。自分はヴィオレットのことを知っている。二、三の言葉を交わせば、一切が娘と母親の間でまた問題なくなるであろう。勿論自分はヴィオレットの秘密を尊重する、全く女と女との間のように、 — 彼女はこのことをすでに、災難やもっと大きな災難についてのお喋り以前に、決心していた。いや、エーファ夫人がこのとき熟慮したのは、何故この医師はこのような提案をしたかということであった。この提案の裏には何か別なことが潜んでいるに違いない。

軽く彼女は尋ねた、「私どものヴィオレットを当地の病院でも治療なさいますか」。

邪心なく医師は言った、「奥方様、貴女がお望みなら、勿論私は然るべく面倒を見ます」。

エーファ夫人にとってこの件は明瞭であった。この小さな保険医は金を嗅ぎつけたのだ。長く、高価な治療を正当化するために災難を警告している。彼女は立ち上がった。

「では感謝申し上げます、ドクトル殿。貴方の提案をフォン・ブラックヴィッツ殿と相談することにしましょう。そうすることに決まりましたら、貴方にお知らせします、...」。

彼女は立っていた。素っ気ない拒絶であった。 — 誰も自分の性分を変えられない。彼女は普段はまことに理性的な物分かりの良い女性であった。しかしこの瞬間、彼女は単に金持ちの男の娘に過ぎなかった。彼女は、生計のために金を求めて何かする必要のある者達すべての動機に信頼を置いていなかった。この人はただ金を稼ごうとしている。この馬鹿げた命題が、賢明で配慮された助言を利己的で低級な商売にできてしまっていた。

そしてようやくこの老いた男も夫人のことを理解した。小さな赤みが彼の薄い頬に浮かんだ。彼はやむなくお辞儀をして、今一度ベッドに近寄った。自分もはや何もできない。自分は少しばかりの眠りを与えることができた。しかし眠りの後に生ずること、これを自分は彼女に対してもっと軽減することが許されない。こうしたことがこの世の中だ。助けてやれる者は、両手を縛られて、呪われた者達、不幸な者達、危機に瀕している者達が道を進む様を見守ることになる。自分はただ警告できるだけである。しかし自分の声は、哄笑と死の叫びの間に、次第に消えて行く。自分は注目されずに、道端に立っている、...

「目覚めのときには十分ご用心ください、...」と彼は今一度言って、去った。

落ち着かずフォン・ブラックヴィッツ夫人は部屋の中を、前後左右に動いた。アヒムはどこにいるのか。運転手のフィンガーからは何の知らせもない。やがて四時だ。ほとんど一時間自分はすでにこの惨めなホテルの部屋に座っている。何かするために彼女は下の電話の所へ行った。彼女は思い通りに話せなかった。というのは電話は壁の所、人目のある所に掛けられていたからである。しかし若いパーゲルの落ち着いた、少しばかりゆっくりとした声を聞くと、確かに効き目があった。...

勿論、すべて大体順調です。[秘密警察の]殿方達の車はとうに出発しました。その通りです。色々話しがありました。 — 自分は調書の署名を断りました、全権委任されているわけではありませんから。でしょう。それで出発せざるを得なかったのでしょうか。 —

ちなみにもう一つあります。奥方様も面白く思われることでしょうか。アマンダ・バックス、ご存じでしょう、家禽番です。彼女が小マイヤーに殿方達皆の前で数回平手打ちをしました。「裏切り者」と叫んでですね。いや、何も起きなかったです。殿方達の誰一人、マイヤーのために手を動かさなかった。 — その通りです、素晴らしい、全く素晴らしい。彼女は一種スマートな人物で、平民の代表ですが、しかし見上げたものです。...ところで恵み深い御令嬢はいかがです。

良くない。それはそれは。 — 畏まりました、そのようにしましょう、暖房も入れさせましょう。浴槽の暖炉もですね、お任せください。忘れません。 — いや、今回小間使い達には何の問題もありません。女達は皆丁度ずぶ濡れになってジャガイモ掘りから戻って来ました。 — こちらは今強い雨です。 — 最も適した女性を三名から四名選んで、自ら出向いて一緒に別荘を掃除することにします、...。

スマートな若者だ。ほとんど微笑してフォン・ブラックヴィッツ夫人は受話器をまた置

いた。彼女は上に行く前に、更に一杯コーヒーを注文した。いや、部屋までお願いします。そして今や戻った。しかし丁度先ほどと同様に、階段で不安の思いに襲われ、彼女の動悸は一層速くなった。ヴィオレットはどうなったのか。彼女は駆けた。スカートが彼女の膝に当たり、彼女は駆けた。

しかしその後、部屋では変わりがなく、深く眠っている娘は動かない。

不安が消え、物憂い絶望が代わりに生じて来た。死んだ女の許に戻るかのようだと彼女は突然考えた。彼女は再び苦悩の多い待機を始めた。

エーファ夫人は、死んだ女の許に戻る方がどれほど良いことか、まだ知らなかった。

124

或る少尉の最期

「一体どういうことです」と少尉は怒って叫んだ、「後を付けていたのですか。私を逮捕するつもりじゃないのでしょうか」。

「阿呆なことを言ってくれるな」と太っちょは落ち着いて言った、「どうして私が貴方を逮捕できるのだ。我々は合法的な者ではない」。

「すでに私は一介の男にすぎず、少尉ではないのですか」と少尉は嘲笑的に尋ねた、「では私に何の用です」。

「例えば、ここで聞き出したことを知りたいものだ」。

「リヒター氏にその報告は致しましょう」と少尉は嘲笑的に言った、「すべて命令通りに」。

「ひょっとしたら貴方は」と太っちょは応じた、「そのことを忘れるかもしれないと思ったのだ。それで貴方を迎えに来た」。

「どうして忘れましょう。私は自分の仕事で何か忘れたことはありません」。

「丁度それを思い出したのだ」と太っちょは詫びて言った、「つまりどこの武器保管所がばれたか、情報が今入ったのだ」。

彼は立ち止まった、しかし少尉も立ち止まっていたからにすぎなかった。彼はその冷たい、容赦ない視線を少尉に向けて、とても小さな声で言った、「ダチ公よ、分かるだろう。すでにリヒター氏の許で貴方は知っていたのだろう。貴方の保管所なのだ」。

「知らなかったのです」と少尉はほとんど叫んだ。

「落ち着いて、落ち着いて、ダチ公」と太っちょは言って、彼の肩に手を置いた。しかし落ち着かせるためではなく、少尉に、相手は雄牛のような力を有すると気付かせるためであった。「問題はただ、誰が漏らしたか、私に貴方が語ってくれる気があるかどうかだ。いや、知らない振りをしてくれるな」と彼は偉そうに言った、「貴方は或る男か、或る女を知っている。我々はその情報を知りたいのだ、今後のためにな、分かるだろう」。

「私は何も知りません」と少尉は頑固に否認した。

「そんなこと言うな。ノイローエ出身の先の検査官マイヤーが秘密警察[監視委員会]の車の中にいたのだ。奴が密偵達に武器保管所を教えた。 — このことを我々も今承知している。いいか、面倒なことをするな。貴方が私に語っても、私がそれで何か得をするわけではない。貴方の昔の仲間達のためだ、仲間達は二度と騙されてはならんからな」。

この者が「昔の仲間達」と語るのを聞いて、少尉はぞっとした。しかし彼は難敵に立ち向かった。彼は反抗的に説明した、「私は申しましたように、武器保管所を命にかけて保証します。それが本当に駄目なのであれば、申しましたようにします」。

「親愛なる友よ」と相手は微笑して、再び手を彼の肩に置いた。しかしただそっと置いた、――しかし少尉は震えた、「親愛なる友よ、自分は終わったとか、そんな風に考えるな。貴方はヘマを犯した。貴方は嘘をついた、――いや、ダチ公、貴方は駄目だ、...」。

彼は少尉をその凍てついた眼差しで見つめた。少尉は白く薄い唇を動かした、しかし一言も出なかった。

「いや」と太っちょは繰り返して、手を戻した、「もはや貴方が問題ではない、他の者達が問題なのだ、この者達を我々は知りたい、...」。

「貴方はすべてご存じでしょう」と少尉はようやく言った、「小マイヤーが車に座っていたと貴方は話された、――裏切り者は分かっているでしょう」。

「貴方とこの裏切り者の間を結ぶ部分がある。これを我々は突き止めなければならない」。

「私は裏切り者ではありません」と少尉は叫んだ。

「私がそう呼んだかな」と太っちょは平然と尋ねた、「貴方が裏切り者であれば、私がリヒターの許の部屋から貴方を放免していたと思うか。貴方が裏切り者であれば、私がここで一緒に歩いていると思うか。いや、貴方は単に軽薄な奴にすぎない。――それにある種の名誉心もまだ貴方の体に残っていよう、...もっともいわば独特の名誉心に違いない、――武器保管所を保証すると貴方は名誉にかけて誓っているながら、すでにご存じのように、それはやられているのだから」。

「知らなかったのです」と少尉は絶望して叫んだ。

「貴方は臆病で、愚かだ。貴方はそんなに自分のことを考えなくていい。貴方が生きていくかどうか、全くの些事だ。腹を割って、私に知っていることすべてを話してくれ」。

彼は立ち止まった。彼は少尉にその冷たい視線を向けた。

少尉は思案しているように見えた。しかしそれからただこう言った、「ちょっと待っていてください。まずここに入ります」。

彼は二人が丁度その前に立ち止まっていた小さな居酒屋に入った。しかし太っちょは待っていない、彼も後を追いつ、少尉が言うのを耳にしていた。「ご亭主、貴方のウィンドブレーカーをまた持って来ました。もう用がありません。私の襤褸を返してください」。

「少尉殿、そんなに急がなくても良かったでしょうに。少尉殿が汚れた服ではまずいでしょう。私の妻が少しばかりブラシをかけますので、せめて終わるまで待ってください、...」。

「襤褸を返してくれ」と少尉は固執した。そしてウィンドブレーカーを取り替えながら、小声で囁いた、「明日はこれを息子に着させない、駄目だ」。

亭主の目はびっくりして点になった。

「さようなら、有り難う、ご亭主」と少尉は言って、再び居酒屋から出た。

「相変わらずのお芝居だ」と太っちょは同意せず、言った、「ウィンドブレーカーが問題ではなかったのであろう。貴方は人生でウィンドブレーカーよりも汚れてしまっている。しかし自分の目では高貴に振る舞いたい。そう皆がしたがっている。自分は金目当てで人殺しをしましたと白状する殺人者を見たことがない。皆が元来高貴な弁解を述べたがるも

ので、...」。

「うるさい」と少尉が叫んだ、「私の後を付けたいなら、黙っていてくれ。それとも、...」。

「それとも、何だ」と相手は脅して言い、手で少尉の上腕を握って、それを圧縮した。その圧力は次第に強くなって、すべての筋肉が潰れるように思え、血管は弾けそうになった。少尉は叫び声を上げないようにするために、歯を食いしばらなければならなかった。「貴方はズボンのポケットにピストルを持っているだろう。それを取り出して、撃ってみろ、私がうるさいなら」。

いや、少尉は試すことすらしなかった。この恐ろしい握力は彼がいつも有して来た闘争心をも砕いていた。

この太っちょは腕を放して、平然と言った、「ちなみに私は貴方の後を付けない。貴方を連れて行く」。

「どこへ連れて行くのです」。

「『黄金の帽子』亭だ。貴方の提案を受け入れよう。一度フォン・ブラックヴィッツ氏とその娘に武器保管所に関し、尋ねてみたい。特に彼の娘に」。

「いやだ」と少尉は叫んで、立ち止まった。

「何故いやなのだ」と太っちょは尋ねた、「少尉殿、貴方自身が提案したのだ」。

「被告人のように立ってたくない、 — 殊にこの人達の前では」。

「ただ外見だけ知っている人達なんだろう」と太っちょは笑った、「まことに興奮している、お若いの。私と一緒にフォン・ブラックヴィッツ令嬢の許に行きたくないか」。

「フォン・ブラックヴィッツ令嬢は私に、...」と少尉は叫んだ。

「その通り」と刑事は笑った、「少尉、私の思った通りだ。貴方は令嬢にちょっと個人的憎悪を抱いている、 — 何故だ」。

「令嬢は全く私にとってどうでも構わない」。

「冷静な今でさえ、貴方は彼女について話せない、貴方の顔がびくついている。 — じゃ、このまま、少尉、『黄金の帽子』亭だ、それとも静かに白状するか」。

「『黄金の帽子』亭」と少尉は決意して言った。

二人はとうに出発したに違いない、二、三時間経た今の時間、どうして二人が相変わらずそこにいよう。あの派手な芝居の後だ。彼女は逃げたろう。体面を保たなければならぬ。 — しかし二人が逃げていなくても、少尉はこの太った刑事によって、父親と娘の眼前に連行されたくはなかったであろう。

自分はきっと逃げる機会を見いだせよう。自分は最終目的までも奪われたくない、つまり自由意志による彼女への復讐だ。自分は裁かれたくない、 — 自分は彼女を裁きたい。

人間は、死んで行く前に、何かにしがみつく。殊に若い人間の場合そうである。彼はこの大地から去る前に、自分は存在のこの偉大な石盤から痕跡もなく消されたいと思いたくない。少尉には子供がなかった。遺贈するものは何もなく、誰宛にも別れの手紙を書かない。自分はこの大地に生まれなかったかのように消されよう。生きているうちに、存命の者達の中であって、すでに自分からは名誉と目標、自負心と男らしい力が脱落してしまった。しかし、 —

留まれ、汝は美しい。相変わらず汝は美しい。そこにあの白い、悦楽に溶ける顔が浮かぶ。その顔をおまえは愛することができなかつたし、今やそれを憎んでいる。額の奥には

脳がある。その脳に、おまえはその脳が考える限り、おまえを書き込むことになるのだ。その胸の中では一つの心が脈打っている。その脈拍はおまえのことを考えると不安で一杯になる。 — 更に三十年間、おまえがこの星から消えた後でも脈打つのだ。まだこの世の光の中でさまよう女の裡での、亡き男のささやかな永遠だ。存命の女の裡での、在りし昔の男の痕跡だ。

初めて両人は黙って並んで歩いた。少尉は両手をポケットに入れて、復讐的微笑を浮かべていた。刑事は注意深い表情で痕跡を嗅いで行く犬の冷たい視線であった。

しかしまずはこの太っちょは不運であった。少尉に対して邪推のほとんど立腹した視線を投げかけながら、給仕は知らせた。フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長殿は外出されていて、恵み深いご令嬢はご病気である、と。いや、駄目です、令嬢と会うことはできません。医師がすでに見えていて、恵み深いご令嬢は意識のない状態です。...

給仕は向きを変え、この客人達の注文さえも尋ねなかった。確かに給仕は二人の滞在を大事に思わず、再び自分の仕事に取りかかった。

若干嘲笑的に少尉は尋ねた、「これからどうします」。

少し苛立って、相手は答えた、「少しばかり嘲りの過ぎる質問に思える。この訪問が無駄に終わって嬉しいと正体をさらけ出している。ここでただフォン・ブラックヴィッツ氏を待つことにしよう。ボーイ、淡色ビール一杯」。

少尉は、騎兵隊長を待たないことに決めていた。彼は一つの計画を用意していた。

「聞いてください」と彼は言った、「ポケットにまだ少しばかり金があります。自分の金です。これを一人の娘に贈りたい。素早く行きましょう。三十分もかかりません」。

「大佐の許の小間使いか。先ほど渡せたであろうに。ちなみにこの娘は何と話していたのだ。ボーイさん、淡色ビール」。

「何もなかった」と少尉は進んで答えた、「娘は私に怒っていた。何かを聞き出すために来ているに過ぎないからと。我々は臆病者で、我々の一揆はおじゃんだろう、と。そのようなことを話していました。しかし今は別の娘のことを言っているのです、ノイシュタットの」。

「臆病者でおじゃんか、色々想定されるな」と太っちょは言った、「それは娘自身の考えではあるまい。多分そのせいで娘は貴方にも激怒していたのであろう。そのような女は、どこかの阿呆が自分の彼氏の悪口を言うと、いつもその彼氏に激怒するものだ。給仕はビールを持って来る気はないのか。ボーイさん、淡色ビール」。

「ビールは諦めなさい」と少尉は頼んだ、「私をこれからその娘の許へ行かせてください。三十分もかかりません。 — その後でもフォン・ブラックヴィッツ氏には会えましょう」。

ボーイは、グラスのビールを置いた、「二千万マルク」と彼は無愛想に言った。

「二千万マルクか」と太っちょは激昂した、「一体どんな淡色ビールなのだ。どこでも一千三百万マルクだろう」。

「今日の昼からです。ドルは今242,000,000マルクです」。

「そうか」と太っちょは不満げに呻って、払った、「そうと知っていたら、ビールは頼まなかったであろう。242,000,000か。娘に金を渡す意味があるものか、分かって。貰っても幸せになれない。すべてただの芝居だろう」。

「私はそこに取って来たい手紙も預けてあるのです」。

「手紙か。一体どんな手紙だ。ただここを離れたいのだろう」。

「そうですか、じゃ残りましょう。それでは私の金でワインを一本飲むことにします、
ー ボーイさん、...」。

「待った」と太っちょは言った、「それはどこだ」。

「何です」。

「その娘はどこに住んでいる」。

「ノイシュタットです。要塞プロムナード。二十分もかかりません」。

「先ほどは往復三十分もかからないと言っていたぞ。一体どんな手紙だ、恋文か」。

「私が恋文を一人の娘に預けるとは思いますか、ええ」。

「それじゃ行こう」と太っちょは言って、飲み干し、立ち上がった。「しかし先に言っておく、私に対しおかしなことをしようものなら、先ほどの兵舎でのように、...」。

「御覧になっていたのですか」。

「ただ胸を殴るだけじゃ済まんぞ。ー 腹を痛めつけて、二度と真っ直ぐに歩けないようにしてやるからな」。

氷の視線に何か熱く燃えた。少尉は脅すように見つめられた。しかし今回は効き目はなかった。彼は単に微笑した。

「私は決しておかしなことをしません」と彼は宥めて言った、「ちなみに私はもう真っ直ぐに歩く必要はほとんどないように見えます。でしょう。脅しても私のような者には無意味です。ね」。

太っちょは肩をすくめた。しかし彼は黙っていた。そして黙って両人は並んで、町の雨の降る、人気のない通りを歩いて行った。

少尉は、どのようにしてこの拷問者から逃れたものか思案し始めた。自分は娘なんか知らない。ノイシュタットの手紙なんか何も知らない。しかし彼は考えていた。ここ外部でなら、逃げ出すのは、どうにかしてこの密偵を振り切るのは、比較的容易であろう。それからやるべきことをやるのだ。新たに屈辱を感じずに、うるさい監視のないところで。(そのためのー 本当の勇気を十分に私は有しているだろうか)。

しかしこの番犬を欺くことは、そう簡単ではなかった。この男は一見全く無造作に彼の隣をぶらついていただけでも、ズボンのポケットにずっとあるこの手は何を意味するか、少尉は良く分かっていた。何故この相手はかくも彼の間近を歩いているのか、歩くたびに肩と肩が触れ合うのか、承知していた。彼がほんの些細な不意打ちの動きをただけで、相手の、この握り潰し、意気喪失させる握力を持つ拳は彼に届くのである。それとも、一、二回弾が跳ねるだろう、ここ町の路上で、するとまた何か「秘密裁判の殺害」が新聞に載るであろう。

そうじゃない、そうじゃない、と少尉は熱に浮かされたように興奮して考えた。彼は途中のすべての居酒屋の地理関係を思い浮かべようとした。トイレから中庭へ逃げる可能性といったものがないものか。しかしどれほど脳を働かせようとしても、彼はこの課題に集中できなかった。脳は働きを拒んだ、...

再三彼の許にヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツのイメージがその間に浮かんで来た。彼女は意識を失って臥せっていると給仕は言っていた。一つの憤怒の喜びに彼は襲

われた。 —

今おまえはもう意識を失って臥せっている、 — 私のほんの些細な脅しを聞いただけで。しかし私が私の脅しの通りにしたら、おまえの人生はどのような味がするか、初めて分かることだろう。...いや、居酒屋のことを考えなきゃ、つまり今間もなく「火の玉」亭を通り過ぎるところだ、...

いや、少尉よ、少尉。 — 彼はこの娘に取り憑かれたようになっていた。今、わずか自分の死の直前、この無常迅速野郎はなお生命の充実を得ていた。この男、百もの恋愛沙汰を経ていて、誰をも愛したことのない男が、憎しみを発見した。 — それのために生きる甲斐のある感情であった。彼は彼女が彼を見つけたとき、どのような情景となるか思い描いた。彼の耳に彼女の悲鳴を聞く思いがした。彼女はそれを見なければならぬ、それ以外に考えられない、彼は余りに強烈に願った。臨終者達の願いは叶えられるのだと彼は考えた、 — そして身をすくめた。

「どうしたのだ」と太っちょは全く用心して尋ねた。

臨終者達の願いは叶えられるものだ、と少尉は再度考え、強力な喜びに満たされた。そして大きな声で言った、「あそこに、フォン・ブラックヴィッツ殿がいる」。そして意地悪く言った、「彼と話したいのでしょうか、さあどうぞ」。

ノイシュタットへの途次、両人は古い、夙に取り壊されて、余りに窮屈になった要塞公園に導かれていた。町の長老達は、防塁と濠から市民達のためのプロムナード[遊歩道]を築いていた。二人が歩いている所は、要塞の濠であった。左右に防塁が急斜面を形成していて、木々や茂みで覆われていた。両人はある曲がり角を回って、一片の道を見通していた。人気のない離れた箇所である。

その道端に一つのベンチがあって、雨が滴っていた。そのベンチに騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツがうずくまっていた。その通り、彼はうずくまっていた。しかし彼は目覚めていず、彼の頭は深く胸の上にあって、彼は完全なる酩酊者の正体ない、ゴロゴロいびきの眠りを眠っていた。時々、息が余りに苦しくゴロゴロ言うと、頭は跳ね、ほとんど垂直に起き上がって、それからゆっくりと徐々にまた一方の肩に沈んで行き、それから胸へと戻った。...

それはフォン・ブラックヴィッツ氏が供している惨めな光景、恥ずかしくなる光景であった。 — 両見物人は一瞬黙って、静かに立っていた。実際騎兵隊長は自分の自動車追跡でこの孤独な片隅の公園に無料で到着したのではなかった。 — 彼はここまで引っ張られてきて、身ぐるみ略奪されたのであった。

「禿鷹のような奴等だ」と太っちょは憤然と叫んだ、「ならず者は我らよりも素早く獲物を嗅ぎつける」。

そして彼は防塁に高く、素早い疑いの視線を投げかけた。

しかし一枝も茂みでは揺れず、逃げ足で小石が斜面から落ちて来ることもなかった。禿鷹はとうに獲物を奪って去っていた。むしり取られ、下着を除いて脱がされて、滑稽な涙を誘う姿となって、騎兵隊長ヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツ＝ノイローエは霧雨の中、酩酊した眠りを眠っていた。余りに弱く、余りに弱く、強い者の力を煽る抵抗心、嫌悪感の末に、砕けてしまって、アルコールの汚れた麻痺の中、涅槃寂静に逃避してしまった、 — どうして目覚めることができよう。

「この殿方と話したいのでしょうか」と少尉は今一度嘲った。

そして内心喜んでいた。臨終者の願いは実現する、と。おまえ[ヴァイオ]の父親がすでにこんな具合では、おまえの番となったとき、どんなに面目ないことになるのか。

「忌々しい畜生道だ」と太っちょは怒って、少尉から目を離さなかった。

彼は丁度一匹の狼と一匹の山羊と一個のキャベツを渡す予定のかの渡し守の状況にあった、 — その小さな小舟にはこの三者のうちの一つの席しかないのである。彼は少尉に注意を向けたものか、それとも騎兵隊長を助けたものか、 — 両方を一緒に行うことは無理であったろう。

「フォン・ブラックヴィッツ殿は放っておきましょう」と少尉は意地悪く勧めた。「我々が彼を見つけたことは誰も知りません。私は黙っていなければなりません」。

太っちょは答えなかった。彼は憂わしげに立っていた、「少尉よ」とそれから彼は熱く言った、「覚悟を決めろ。武器保管所を漏らしたのは誰か、言ってくれ。 — それから貴方を放免しよう」。

少尉は躊躇って言った、「それは私一人の件です。誰か他人がこの件に介入することを望みません。しかし神聖に誓って申しますが、すべては単に女の阿呆な無駄口で、くだらぬものです、邪悪な意図は何もない、...」。

太っちょは物思いに耽って立っていた、「それらの名前を知りたい」と彼はそれから言った、「単にフォン・ブラックヴィッツ令嬢ばかりではない、...」。

「それはフォン・ブラックヴィッツ令嬢ではなかったのです」と急いで少尉は叫んだ。

彼は鳩尾にすさまじい一撃を食らった。太っちょは突然勃発した雷雨のように彼を襲った。彼の殴打の霰を受けながら、彼はそもそも防御できなかった。考える間もなく、彼は地面に倒れていた。相手は彼のポケットに手を入れ、ピストルを取り出した。「ロックを外して、ポケットに入れている、 — 卑怯者めが。お若いの、これからは武器なしで、せざるを得ないことをすることだな。 — しかしまた、お主を捕まえてやる、何かお主が、...」。

少尉は大地に横たわっていた。答えることすらできなかった。体全体が痛んだ、しかし憤然とした絶望感のはるかにもっとひどいものだった。この太っちょは、この容赦ない、野蛮な巨人は、 — この彼はすでにベンチに向かっていて、すでに両腕に騎兵隊長を抱えていた。

起きなければ、去らなければ、...と少尉は考えた。

通り過ぎながら、太っちょは彼の脇腹をすさまじく踏み付けていた。去りながら、彼のことを笑い、忍び笑いをしているように思われた。...

私が彼の後を追えないように、私を潰そうとしたのだ、と少尉は考えて、 — 一人っきりになっていた。

彼は横たわっていて、力が戻って来るのを、少しばかりの呼吸を、一つの決意の恵みを待っていた。

これが私の最後のチャンスだ、と彼は考えた。去らなければならない、[森の]黒い奥へ、黒い奥へ。 — しかし私には武器がない、 — 仲間達は誰も私に武器をくれないだろう。皆が事情を知っている、...いや、私は行かなければならない、...

よろめきながら彼は起き上がった。この一日で二回目の敗北であった。しかし二回目が

もっとひどかった。

「私は忍び歩いてはならない、素早く行かなければならない、走らなければならぬ」と彼は自分に囁き、立ち止まって、一本の木にしっかりすがった。彼の顔全体が血の出る剥き出しの肉のように燃えた。こんな姿で町の中へ行けない。ひどい姿に見えるに違いない。奴は、あの野蛮な豚は、ひどいことをしてくれた。これが彼の本意だったのだ。

彼はほとんど自分が哀れで、泣いていた。泣くことは臆病なことであるが故に、ほとんど泣いていた。彼は呻いた、我が神よ、我が神、私は死にたいと思っているのに。何故皆安らかに私を死なせてくれないのだ。...誰一人私を助けてくれないのか、我が神よ。

しばらくして、自分がまた歩いていることに気付いた。すでに公園から出ていた。彼は町中の通りにいた。

しかしはるかにもっと速く行かなければならないと、そういう考えが浮かんだ。奴はきっと私を捕まえることだろう、遅くとも私の旅館で。汝、猿[エテ]公よ、目をむけ、ぶちめされた者はそんな風に見えるものだろう。

そして酩酊者のように声高く、挑戦的に、喚いた、「猿[エテ]公、目をむけ」。

「今日は、少尉殿」と丁重な、とても丁重な声が彼に対して述べられた、「少尉殿、私のことをもしかしてもうお忘れですか」。

苦痛と麻痺の霧を通じて、少尉はその顔を見きわめようとした。一切の屈辱的名誉剥奪の中で、この丁重な、冷静な、情熱のない声は快適に彼の心に触れた。永劫この方、誰からももはやこんな風に話しかけられたことはなかったように思われた。

「レーダーです」と相手が彼を助けた、「私の名前はフーベルト・レーダーです。ノイローエで従者をしていました。一 枢密顧問官の許ではありません。若い方々の許、騎兵隊長の許です、...」。

「いや、あの貴方か」と少尉はほとんど喜んで発した。「以前、栗の木に登るとき、手伝いを断った者だな、その通り、まだ覚えている、...」。

「今は少尉殿のお役に立ちたいと思ひまして。申しましたように、私はもはやノイローエの従者ではありません。少尉殿は助けが必要な風にお見受けします、...」。

「そうだな」と少尉は口ごもった、「私は倒れてしまった」。彼は思案した、「襲撃されたのだ」。

「少尉殿のお役に立つようなことが私にありますれば」。

「消えてくれ、いいか、私を煩わすな」と少尉は突然叫んだ、「私はノイローエ出身の郎党とは何も関与したくない。一 皆、私に災難をもたらしてくれる」。

そして彼はより速く歩いて、彼の同行者から離れようとした。

「しかし少尉殿」と彼の隣りで落ち着いた情熱のない声があった、「ノイローエからの者ではありません。申しましたように、私はもはやそこで働いていません。要するに、首になったのです、...」。

少尉は突然立ち止まった、「誰が貴方を首にしたのだ」と彼は尋ねた。

「騎兵隊長殿です、少尉殿」と相手は言った、「騎兵隊長殿が私を解雇されました。そして騎兵隊長殿が私を首にしたのです。一 それ以外、誰も法的に権限はありませんから」。

彼はこのことを一種馬鹿げたしたり顔で言った。少尉は、眼前の顔を識別しようとした。

思い出が蘇った。ヴィオレットがこの従者について語っていた、自惚れた愚鈍な頭と言っていた。

「何故首になったのだ」と少尉は再び尋ねた。

「恵み深い御令嬢のご希望でした」と従者は手短かに報じた、「私は最初から恵み深い御令嬢のお気に召さなかったのです。まさにそうした嫌悪感というものがあります。本で読んだことがあります。学問的には異常・嫌・悪と呼ばれています」。

再び少尉の頭に命題が現れた、つまり臨終者の願いは叶えられる。彼はこの都合良く現れた助けを利用したくなかった。しかし自分の胸の中の何かが警告を発した。この助けは余りに都合が良すぎる、と。或る邪推が芽生えた。

「聞いてくれ」と彼は従者に言った、「すぐに『黄金の帽子』亭に行くがいい。騎兵隊長は事故に出会った。貴方はそこで愛しい救世主のように迎えられるであろう、一 再び貴方は採用されよう。給料は倍になるぞ」。

初めて少尉はこの魚のような目の物憂い灰色の視線をまじまじと見た。

「いえ」と従者は、頭を振って、説明した、「少尉殿、お許してください。従者教育でこう学んだのです。一度去った所に二度と戻ってはならない、と。これは甲斐がないと実践的に実証されています」。

少尉は全く疲れた、「それじゃ消えてくれ、いいか」と彼は疲れて言った、「私は従者を使うことはない。従者に支払えない。だから私を放っておいてくれ」。

彼は更に進んだ。彼は再び太った刑事のことを考えた。自分はここで思わぬ時間を費やした。ほとんど時間がない、一 自分の旅館までまだ遠い。

「まだ何の用があるのだ」と彼は苛立って、黙した同行者に叫んだ。

「少尉殿のお役に立ちたいのです」とめげない答えがあった、「少尉殿は助けを必要とされています」。

「ない」と少尉は叫んだ。

「少尉殿がお許しくださいませ」と頑固な声が囁いた、「私はこちらのすぐ近くに小さな部屋を借りています。少尉殿はそこでゆっくりとお体を洗えます。その間少尉殿の服をきれいにしましょう、...」。

「服などどうでも良い」と少尉は苛立って叫んだ。「そうなんです、少尉殿。それにひょっとしたらダブルのコニャックの濃いモカ・コーヒーも御用意できます」。そして軽く親しげな調子で言った、「少尉殿は今日はまだ活力が必要かと存じます」。

「何を考えているのだ、阿呆」と少尉は怒って叫んだ、「私の活力について何を考えている」。

「それは暴露された武器保管所に関してです」と丁重な、冷たい声が説明した。「少尉殿は恵み深い御令嬢が話されたことを、そのまま受け入れることはなさらないだろうと愚考致します」。

少尉は雷に打たれたように立っていた。この駆け寄って来た呆けの頭に、彼の極秘の思考が収まっている。彼は理解できなかった。

しかし彼は急いで言った、「それでは一緒に行こう。貴方の部屋を見せてくれ。しかし何も汚い策略はないだろうな」。

「少尉殿にご説明致しましょう。すべてはすぐに了解可能です。どうぞ、こちらへ、少

尉殿。少尉殿の腕を取って良ければ、もっと迅速に行きましょう、...」。

三十分後にすでに少尉は、レーダーの家具付き部屋の深いソファの隅に若干気分良く座っていた。彼は多くのコニャック入りのモカ・コーヒーを飲んだ後で、丁度従者は彼に二杯目を準備しているところであった。

物思いに耽って少尉は、この奇妙な人間の静かな挙措を見守っていて、最後に言った、「聞いてくれ、レーダーさん」。

「ちょっとお待ちください、少尉殿。ここでは物事が余り迅速でないことをご容赦ください。すべてがここは原始的でして」。

彼はこの小屋を軽蔑の視線で観察した。

「どうしてもオスターデへ来たのです」と少尉は尋ねた、「私に会いたいからじゃなかろう」。

少尉は笑った。この嫌疑は彼自身にすらあり得ないことに思われた。

しかし従者は真面目に答えた、「その通りなのです、少尉殿。少尉殿に会いたかったのです。オスターデはそんなに大きな所ではありませんし」。

彼はモカ・コーヒーを少尉の前に置いた。自分の言葉の効果に何も注目していなかった。それから彼はコニャックのボトルを手の届く所に押した。

「これからは若干コニャックを控え目にと助言致します。少尉殿はすでにまたお元気になられたことでしょう。それに少尉殿は明敏な頭脳を保ちたいご意向でしょう」。

彼はその魚のように冷たい、無表情の視線を若い男に向けた。この若者は微かに戦慄した。

この男が愚鈍な頭脳でないのであれば、とてつもないならず者だ、と彼は突然考えた。

そして大きな声で言った、「何故貴方は私に会いたいと思われたのです。私の役に立ちたいからと今度は言わないでくれ」。

「どのようにして保管所が暴露されたのか、少尉殿には関心がおありであろうと思いましたが」。

「それでどのように暴露されたのだ」。

「少尉殿がもはや恵み深い御令嬢の許に来られず、木の洞穴から手紙もお受け取りにならなかったのです、御令嬢はマイヤー氏宛に武器保管所のことを手紙に書かれたのです。御令嬢はマイヤー氏が少尉殿に対し大変怒っているとご承知でしたので」。

「それは嘘だ」。

「少尉殿のご判断です」。答えは揺るぎなく響いた、「少尉殿はどれほどのコニャックをご希望ですか。モカは丁度手頃の熱さです」。

「たっぷり注いでくれ。カップの目一杯にな。私はふらつかない」。少尉は灰色の物憂い顔を鋭く見た、「それが本当だとしても、御令嬢は貴方に話さなかったであろう」。

「しかし御令嬢のために私はマイヤー氏の住所を調べなければならなかったのです」。

少尉はゆっくりと一口飲んだ。それから一本の煙草に火を点けた。「ただそのことを私に話すために、貴方はこちらに来たのか。貴方の関心は何だ」。

冷たい、生氣のない目が再び少尉に向けられた。

「私は復讐心の強い人間ですから、少尉殿。すでに私が述べましたように、すべては簡単に了解可能です」。

「騎兵隊長が貴方を首にするよう、令嬢が望んだからか」。

「それもあります」と従者は言った、「それに他の理由もあります。 — いわば秘密厳守の事柄です、少尉殿」。

「昔からの友よ、耳を貸せ」と少尉は熱くなって叫んだ、「ここで紳士の振りをするな。貴方の知っていることを、 — あるいは体験したことをぶちまけろ。貴方は全く抜け目ない犬野郎だと疑っているところだ、...」。

少尉は、相手の灰色の顔が少しばかり赤くなるのを見て驚いた。そこには不快に甘美な、追従された表情が見られた。

「私は研鑽しようと努めました」とこの男は言った、「本を読みました。いえ、小説ではありません。学問的なもので、しばしば数百頁に及ぶものを、...」。

再び少尉は考えた、此奴は白痴でなければ、とてつもないならず者だ。 — しかし勿論白痴の類いだ。そんな抜け目のないならず者はいるはずがない。

そして大きな声で言った、「それじゃ、秘密厳守の隠し事を語って貰おう。私がきっと赤面するであろうと案じなくていい」。

「つまり」と従者は再び全く生気なく報じた、「御令嬢が私を一人の人間として扱わなかったからです。令嬢は私のいるところで、着たり脱いだりされました。私が一片の材木であるかのように。そして御領主夫妻が外出されると、ご両親のことですが、すると御令嬢は私をいつも浴室へと命じまして、私はお体を拭くのです」。

「勿論ヴィオレット嬢に惚れていたんだな」。

「その通りです、少尉殿。私はまだ御令嬢に惚れています」。

「そして令嬢はそれを承知していた、貴方をいたぶろうと思っていたのか」。

「その通りです、少尉殿。それがその意図でありましょう」。

静寂、沈黙。

少尉は側面から従者を見つめた。彼は考えた。それではこの木偶の坊は、愚鈍な頭は、感情を有しているわけだ。丁度まともな人間のように、悩み苦しんでいる。...

「それでは何故自分で復讐しないのだ」。

「私はいわばおとなしい質でして、少尉殿。暴力行為は致しません」。

「それでは臆病なのか」。

「その通りです、少尉殿。私はおとなしいのです」。

少尉は熟考した。それから威勢良く言った、「聞いてくれ、レーダーさん。『黄金の帽子』亭まで行くのだ。そこに太った殿方を見かけることだろう。すぐに分かる人物だ。刑事で、堅くて黒い帽子を被っている。 — その殿方に検査官マイヤー宛のヴィオレットの手紙のことを話すのだ。すると若い令嬢はもはや人生で大して楽しい時間を過ごせないだろう」。

「済みません、少尉殿」と従者は頑固に言った、「私は警察は好きではありません、私は少尉殿が好きです」。

しばらく部屋の中は静かであった。少尉は物思いに耽って、スプーンでカップをかき混ぜた。従者は注意深く、それでいて無関心な姿勢で立っていた。それから少尉はテーブルの先、コニャックの瓶を掴んで、カップをコニャックで一杯にし、一口飲んだ。

そこで彼は従者を見つめ、小声で言った。「しかし私はこの件をひょっとしたら貴方が

考えているよりも別な風に片付けるかもしれない、レーダー」。

「それで結構でしょう、少尉殿」。

「貴方が、私は令嬢に対し凶行を行うと考えているのであれば、...」。

「少尉殿はどれが最も効果的か、すでにすべてお考えのことでしょう」。

「最も効果的か、そうだな、...」と少尉は答えた。

それから二人は長く、静かであった。少尉は軽くコニャックを飲んだ。従者はドアの下に立っていた。

「レーダー」とようやく少尉は叫んだ。

「何でしょう、少尉殿」。

「何時に今日は暗くなるか」。

レーダーは窓辺に寄って、物憂い霧雨の夕方を見やった。「このような曇天では、一六時直後です」と彼は決めた。

「それでは私のために貸し自動車を手配してくれ。ここの戸口に六時十五分だ。ノイローエの森の境界まで私を運んで貰う。前もって料金を取り決めてくれ」。

「畏まりました、少尉殿」。

「貴方が家から出て、路上に行ったら、どこかに先に話した、あの太った刑事が見回っていないか、確かめるのだ。太った、髭のない男で、青ざめた、浮腫んだ顔、氷のような珍しい視線だ。ビロード襟の黒いコートに、黒くて堅い帽子、...」、性急に言った、「すぐにその男と分かろう、いいか」。

「承知しました、少尉殿。見かけましたら、それと分かりましょう。もう出掛けてもよろしいですか」。

「そうだな、...」と少尉は思案して答えた。そして突然元気になって、しかし当惑して言った。「いいか、レーダー、もう一つ頼みがある、...」。

「何でしょう」。

「更に必要なものだ」と少尉は躊躇いながら言った、「更に銃が欲しい、自分のをなくしてしまった」。

「畏まりました、少尉殿」。

「入手できるか」。

「畏まりました、少尉殿」。

「今日こちらでピストルを手に入れるのは簡単ではあるまい。それに勿論若干の弾薬だ、レーダー」。

「畏まりました、少尉殿」。

「大丈夫か」。

「お任せください、少尉殿」。

「費用に関しては、...」。

「少尉殿のお役に立ちとう存じます」。

「まだ私には若干金がある。勿論自動車と武器の費用に十分かどうか、...」。

「私が始末します、少尉殿。それでは一時間後に戻ります」。

レーダーは音を立てずに、出掛けた。少尉は家具付きの部屋に一人っきりになった。小さなシュヴァルツヴァルト製の時計が壁でカチカチ鳴っていた。台所では、女将が炊事、

皿の物音を立てていた。少尉は下着姿で、ソファに横になっていて、彼の衣服はまだ暖炉に干されていた。

彼はテーブルを見た。 — そこには空のカップがコニャック瓶の前にあって、その瓶はまだ四分の三が満たされていた。少尉の手はゆっくりとテーブルの上、瓶まで差し出されて、 — そしてまた引き戻された。少尉殿は明敏な頭を必要とされます、という従者の耐え難い、常に何か教訓的な声が響いて来た。

では何故明敏な頭が必要なのだと少尉は考えた。言ってみろ、羊頭め。

しかしそれでももはや注ぎはしなかった。すでに今、酩酊は彼の中で、波のように高く寄せ、また沈み、新たにより高く上昇した、…。彼は時計を一瞥した。五時二十五分。まだ優に四十五分、自分一人の時間がある、いわばまだ存命中だ。 — それからますます急に自分の最後へ急行だ。彼は分針を睨んだ。それは無限にゆっくりと動いている、いや少しも動いていない。時針と分針の間の小さな間隔が微分されるのは気付かない。 — それでいて突然六時十五分になっているのだ。自分にとって自分の人生の最後の自由な時間が消されていることだろう。

彼はヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツのことを考えようとした。彼は自分の怒りをまた焚きつけようとした。しかし酩酊の新たな波の上に、レーダーの魚のような革のような頭が、灰色の死んだ目と共に浮かんで揺れた。…かやつは喋るとき決して口を開かない。その歯さえ見たことがない、と彼は突然反吐を一杯覚えて、考えた。きっと奴の口の中には、汚い黒い残りかすがあるのだろう。だから喋るときも開かないのだ、 — すべて、黴が生えて、腐っている。

少尉は今一度時計の方を見た。しかしもはやソファの背もたれから頭を高く上げなかった。彼は眠った。彼は最後の自由な生命の時を眠って過ごした。眠る、眠る。…

車は夜の中を走った、 — その白いヘッドライトの明かりの中で、雨で濡れた木々の幹が映し出され、すぐにまた暗く、黒くなって、疲れた苦悩の目がまだ確かに捉えないうちに、通り過ぎた。車の隅では少尉が座っていた。彼は半ば横になり、半ばほとんど眠っていて、相変わらずしっかりと目覚めていなかった。…

彼の頭蓋の中で、穿つような痛みが居座っていて、明瞭な思考を妨げていた。少尉は、仕切りのガラス板があって、その前方の運転手の横に、従者レーダーが座っているのは、本当か、しかと分からなかった。この反吐の出る奴が、同乗するのは、彼の本意ではなかった気がした。しかし、いやこの従者が車代を支払ったと再び思い付いた。それでは彼の車だ、好きなように乗るがいい。肝要なことは、彼がすぐにまた引き返すことである。

少尉は、その頭痛にもかかわらず、この解決策を見いだして、ほとんど喜んでいた。かくてもはや何も思い煩うことはない。すべては順調で異常なし。太っちょももはや自分を捕らえなかった。これからは万事自ずと進行する。自分はその地まで向かうだろう。 —

するとそれから簡単なズドンだけである。本当にただの一回のズドンである。この世で最も簡単なことである。そのことに関し、何も考える必要はない。少尉の自分はずでに何度か目にしてきた、…。

彼は落ち着かず、自分の座席、ポケットを探し回った。従者が自分にピストルを渡したか、否か、思い出そうとした。しかし出発したとき、彼は眠りこけていて、もはや分からなかった。少尉は座席にただコニャックの瓶だけを見つけて、怒りたくなった。見ろ、ど

んなに寝とぼけていても、自分だけはこれだけは忘れなかった。少尉は瓶からきちんと一口飲んだ。彼はコニャックで口をすすいだ。

コニャックは眠りを洗い流した。燃えるように、少尉の脳は明瞭になった。私も単に臆病者にすぎない。

そして炎は一気に沈んだ。酩酊は囁いた。しかしおまえはやはり決行するだろう、一肝要なことは、決行することだ。その際、おまえが臆病であったことは、誰も知らない。いや、あの太っちょの刑事は分かる、と燃えるような明瞭さが言った。

奴は私に何の関係があらう、と酩酊が囁いた。

いや、皆、私に構わないでくれ、と少尉は立腹した。

この時、車の中が明るくなった。薄明かりの、すばやくまた白くなる明かりに、車の中は包まれた。

これはまた、何としたことだ、と少尉は苦心して考えた。私は少しもゆっくりできないのか。

しかしその明かりはますます強くなった。この時、従者レーダーが果たして向き直り、半ば立ち上がった。一車は燃えたのじゃないだろうな。レーダーが何か運転手に言った。クラクションが鳴り、一クラクションが応じた。そして一台の大きな速い車が追いついて、過ぎて行った。車の中はまた薄暗くなった。

レーダーは前席からガラス板を押し開けた。「騎兵隊長の車でした」と彼は叫んだ。彼の声には勝利のような響きがあった。

「結構、結構」と少尉はほとんど不分明に答えた、「貴方に絶えず言ってきたらう、レーダー。臨終者の願いは叶えられる、と」。

悪路の田舎道で車は跳ね、ひどい衝撃であった。従者は叫んだ、「それではまた恵み深い御令嬢は回復されています」。

「うるさい」と少尉は叫んだ。従者はガラス板を閉めた。

少尉はまた眠り込んだに違いない。彼は、もはや車が進まず、止まったときに、目覚めた。苦労して彼は姿勢を起こした。彼は半ば座席からずり落ちていた。彼はドアの取っ手を掴み、よろよろと車から出た。

彼らは森の真ん中で止まっていた。不思議に静かであった。風のそよぎもなく、もはや雨の滴もなかった。前方、車から十歩か十二歩のところ二人の男達が立っていて、森の地面を観察しているように見えた。

「おおい、一何をしているのだ」と少尉は叫んで、叫んでいる間に、彼の声はもう弱まっていた。

従者が回れ右をして、ゆっくりと少尉に向かって来て、彼の前方二歩とところで立ち止まった。

「何でしょうか、着きました」と彼は小声で言った、「少尉殿はただ車の痕跡を付いて行けばよろしいです、...」。

「どの車の痕跡だ」と少尉は苛立って尋ねた。

「例の車ですよ、少尉殿。秘密警察[監視委員会]の車の」。

「この暗さの中、どうして見分けるのだ」と少尉は苛々して言った。

「私は懐中電灯を持っています」と従者は忍耐強く答えた。彼は一瞬待っていたが、少

尉は何も言わなかった。

「少尉殿はこれからすぐに行かれますか」と最後にレーダーは尋ねた。

「その通り、今すぐだ」と少尉は機械的に言った、「品を渡してくれ」。

「こちらに懐中電灯があります、少尉殿。そしてこちらに、 — 少尉殿、お許しください、ただの回転式拳銃しか手に入らなかったのです。 — しかし全く新しいものです」。

「その品を渡すのだ。それで上手くやろう」。彼は回転式拳銃を、よく見ずに、ポケットに収めた、「それじゃ、私は行く」。

「畏まりました、少尉殿」。

しかし少尉は行かなかった。

「いいか」と突然彼は厳しく命じた、「貴方はこれから即刻車で戻ってくれ。ここでは貴方に用はない。分かるか。貴方は豚野郎だ、貴方が私に話したことはすべて嘘だ。しかし — どうでも良い。自分は大いに抜け目ないと思っているんだらう。それもどうでも良い。 — すべてどうでも良い。抜け目なくても、愚かでも、豚でも、お上品でも、 — 我々皆がいずれ死ぬ」。

「若干述べさせて頂ければ、少尉殿、...」。

「まだ何かあるのか。貴方はさっさと失せれば良いのだ」。

「まだ誰かが、 — その場にいることが、大いに考えられます。ほとんど九時前で。人々は好奇心が旺盛です。私はできるだけ、こっそりとしています、少尉殿、...」。

「分かった、分かった」と少尉は言って、突然笑った、「私も貴方のご希望通りにこっそりとすることにしよう、抜け目ないレーダー殿。しかし、ほんの一回だけ、少しばかり騒音を許してくれるかな」。

彼は相手を憎悪に満ちた目で見つめた。

「いいか、消えてくれ。貴方の面をもはや見たくない。さもないとやむを得ん、まずは貴方にぶっ放す」。

しかしそれから両人がすでに車に座っているとき、少尉は今一度待ての仕草をすることになった。彼は何かを忘れていた。何かとてつもなく大事なものを、それなくしては人間が全く死ぬことができないものを忘れていた。彼はそれを求めて車の中を、後部座席を、床に滑り落ちた毛布の下を探した。それから彼は車のドアを閉めた、「去ってくれ。地獄へでも構わんぞ」。

車は出発した。木々の間をエンジン音が高く響いた。少尉は道端に立っていた。間に合わせて綺麗にされた、半ば濡れたウィンドブレーカーを着て、手に探し出したコニャックの瓶を持っていた。この世で彼が最後に会うことになる二人が、彼の許から去った。 —

さてよろしい、次はなにか。しかしコニャックが彼の許に残っていた、 — 忠実に死の時まで。

少尉は耳を傾け続けた。自分が聞いているこの物音は相変わらずエンジン音であり、自分はまだ全くの一人つきりではないと想像しようとした。しかしとても静かで、しんとしていて、彼が耳にしているものは、それは、自分の胸の中で鼓動している自らの心臓であった。いや、かくも不安一杯で、かくも臆病だ。

少尉は肩をすくめた。自分は自分の動悸に責任はない。彼は口を尖らせて、口笛を吹こうと思った。しかし音は出なかった。唇は震えた。...私の唇は震えて、私の口は空ろで、

乾いている。

彼は天の方を見た。しかし天には何も見えなかった。真っ黒、星のない、慰めのない真っ黒である。彼は、実際に黒い奥へ下りて行く他、更にはすることはなかった。何の口実も見つけられない。何故このことを相変わらず先延ばしにすることになるのか。...

電灯の明かりが光って、少尉は車の痕跡を見つけた。 — ゆっくりと静かに彼はこの痕跡の後を行った。これは単に一台の車の痕跡ではない、違う、二台の車がこちらに来ていと彼は気付いた。

少尉はしばらく考え込んだ後、満足して頭で頷いた。すべて、然るべく異常なしだ。秘密警察[監視委員会]の車と武器を運び去った貨物自動車である。つまり、これはまた正規の貨物自動車ではなかったということだ。これはタイヤで分かつ。多分大きめの配送車だ。再び少尉は満足して頭で頷いた。その通り。自分の頭脳は立派に働いている。自分はよぼよぼの老人として墓場に行くのではない。働き盛りの年齢でだ、 — 死亡広告にあるように。しかし自分の場合、死亡広告はないだろう。

いや、ここに二台の車は止まったのか。ここからは車では奥まで更に深く進むことはできなかつた。しかし歩行者の私は躊躇うことない。歩行者達にとっては、この道は十分明確に踏み固められている。少尉はあちこち歩き、小さな懐中電灯ですべてを調べた。その通り、またしても順調この上ない。殿方達はここで止まっていた後、ノイローエの方向へ更に車で向かったのだ。すべては整然と片付けられている。「了解可能」とあの犬レーダーなら言ったことだろう。いや、あの犬、あの豚は、 — 有り難いことに消えてしまった。太っちょも去っている。森では女の匂いは少しもしない。 — 従ってようやく自分の案件を自分一人で片付けられる。取り繕った顔をする必要はない。姿勢を正しくする必要はない。 — むずがゆいときは、搔けばいい。瓶から一口飲みたかったら、そうすることだ。その後で、げっぷをする。全く遠慮なしだ。その通り。小さな子供は、生まれたばかりのときには、かなりみっともない動きをする。また死に近いときもそうだ。無からやって来て、無へ向かいながら、人はまことに通常のように振る舞う。 — すべては了解可能、少年レーダーは言う。

幽霊めいた、無言の陽気さに少尉は包まれた。コニャックの最後の一口はかなり強力で、少尉は森の奥への小さな歩道を、進むというよりは倒れ落ちて行った。しかし下ではこの陽気さはすぐに消えた。渦巻く酩酊はネバネバした粥となった。

ここであの連中が働いた狼藉を彼は真面目に眺めた。連中、この兄さん達は、実に遠慮がない。地面に深い穴が幾つもあって、土塊や、箱の蓋、 — まことに今や電灯の明かりは、放置されているシャベルまで照らしている。私はすべてを上手に綺麗に隠した、と少尉は考えた。この豚どもはすべてを雑然としてくれている。私の仕事では何も見えなかつたのに、 — 今はこの様だ。

深く悲しんで少尉は土塊の上に腰掛けた。穴の上で脚をぶらぶらさせた。本来臨終者にとってこれほど似つかわしい座り方はない。 — しかし今、彼はこのことを考えなかつた。彼は瓶を自分の横の柔らかな地面に置いて、ズボンのポケットに手を入れ、回転式拳銃を取り出した。片方の手で銃を照らし、別の手では銃を明かりに当てて、銃を指で触った。その通り。彼はすぐに考えた。これは詰まらぬ品だ、工場粗悪品、量産品だ、 — 犬どもを追い払う飛び道具で、銀行強盗少年がこれで自殺するにふさわしいものだ。 —

しかし自分、武器を愛する一人前の男のためのものではない。いや、自分の立派な、精密加工のピストル、飛行機エンジンのように精妙な品、 — それを太っちょは自分の腹を殴って、この立派な品を盗んでしまった。

慰めもなく少尉は宙を見つめていた、 — この輪胴にはただ六個の薬包しかなく、あのならず者のレーダーからは弾薬を他に貰っていないと、今気付いた。 — 自分は彼にわざわざ頼んでいたのに。

彼は思わず囁いた、「この拳銃を試射する必要があるだろう。新しいものであるが、まだ全く撃ったことのあるものではない。まずは試射と思うべきであつたらう。撃って高すぎるか、低すぎるか、皆目分からない、...」。

こめかみに置かれた発砲では、拳銃が撃って低すぎるか全くどうでもいいとある声が彼に説得するかもしれない。しかし彼は試射にこだわった。私は試射を楽しみにしてきたのだ。人間には少しばかりの喜びを恵んでやる必要があるだろう。

苦悶に彼は圧倒された。ほとんど泣きたいところであつたらう。「六回打ち損なうこともあり得る」と彼は囁いた、「すでにそのようなことは起きている。 — すると私はどうするか」。

そこに彼は青白く、下唇を垂れて、座っていた。彼の目は至る所をさまよった。彼の顔は崩れていた。殴られたからというよりは、絶望的不安の表情によるものだった。彼は自分相手に芝居をしている、自分はただ最終的なことをずっと引き延ばそうとしていると承知していた。しかし彼はそれを認めたくなかった。彼はもはやこの最終的なことも考えていなかった。いや、まだ多くの準備すべきこと、考えるべきことがある。彼は丁度、自分はすでに長いことあのヴィオレットのことを考えていなかった、と思い出した。この女性に対する憎悪、反吐に包まれていたのだ。 — このことを今一度感じようとした。

しかし彼の胸の中では、この惨めな落ち着きのなさの席しか残されていないように見えた。軟弱な、忌々しい気分である。 — いや、かくも弱いのか、私はあの呪わしい黒人マイヤーなんかではない。いや、誓って、私は改善したくない、私は自分を変えられない。私はありのままの自分で丁度良いのだ。噛みつくための歯を持った、豺狼どもの中の狼でいいのだ。

少尉は瓶からたっぷりと一口飲んだ。瓶は飲むとき、そして置くとき、どくどく音を立てた。 — しかし、忌々しい、まだまだ、彼が耳にしたのは、その物音だけではない。少尉は高く飛び上がった。片方の手に拳銃を持ち、別な手に懐中電灯を持って、森の中へ、彼は荒々しく叫んだ、「誰だ。動くな、 — さもないと撃つぞ」。

彼は耳を澄ました。何も聞こえなかった、 — しかし今や忍び足だ。向こうか、どこだ。向こうの茂みか。「動くな、撃つぞ」。いや、私は聞いていた、森の中のエンジン音が突然消えて、あの豚、あのレーダーが止めさせたのだ。奴が私の側に忍び寄って来ている。私が彼の金のピストルで、自殺するか、見る気なのだ。向こうだ、 — 向こう。今耳にしたぞ。「動くな」。それ、発射だ。

ほら見ろ。このピストル君の撃ち具合は悪くない。ボンと行く。震えたか。おぬしをくすぐったかな。いや、逃げ足が速い。待て。追いかけるぞ。動くな。ズドン、バシッ。 — これは何だ。私の背の方でも駆けて行く。まだ誰がいるのか。おぬしは誰だ。姿を現さないのか。臆病者、ズドン、バン。

勿論、これは太っちょだ。仲間のお歴々は奴等の無言の判決を私が実行するか、知りたいのだ。一 絶体絶命、まずは太っちょを始末しよう、ズドン。とても良い音がする。弾は幹に吸い寄せられる。

諸君、私はここに立っている、良く見られよ。ヴィオレット嬢もいるかな。御覧あれ、御令嬢。貴女の長寿を祈念して一口。私をしょっちゅう、とこしえに、思い出されんことを。

この瓶はさらばだ。砕けてしまえ。惜しい、旨いコニャックだった。

紳士、並びに淑女の方々。この輪廻には六発しかないことを残念に思っていた。一 ぞ笑覧あれ、五発目を私は天にぶっ放す。我がレディーへの荣誉砲だ。つんざくこの音がその耳朶に私の記念として永遠に残らんことを。そして六発目。私には一発で足りる。御覧あれ、鼻根に据えられた、一 御覧あれ、一 令嬢が本当に訪ねて来てくれたら、令嬢のために素晴らしい眺めとなろう。

我が神よ、我が神、誰も来ないのか、何も起きないのか。惨めな死に方は御免だ。誰かが来て、すべては錯覚だと告げないのか。一 これから三まで数える。それでも何も起きなければ、発砲だ。一 一、一 二、一 三。

何もない、本当に何もないのか。全体この様は何の意味もない。私の体験したことはすべて屑だ。死も屑だ。臆病な犬のような屑だ。その後で屑がやって来るだろう、私には分かっている。余りに不安を抱きすぎた、この屑のために不安を抱く甲斐はない。今や全く平静だ。歩哨が私を、今日の昼、撃ってくれていたら、有り難い幸せであったろう。本当に私を始末してくれたことだろう。しかし私でも始末が付けられる。一人で生まれて、一人で死んで行く。一 発砲だ、一 それで、いや、...

いや、それでだ、いや。

黒い奥では、森の窪地で、地面に懐中電灯が置かれていた。その小さなサーチライトの明かりが、二、三の草や、一個の苔むした岩、若干の土壌を照らしていた。...全く、静かで、全く静かであった。...その小さな、白い、孤独な輝きが、丁度甲高い音がしたばかりの静かな夜の中にあった、...

このとき茂みからある物音がして、誰かが咳払いをした、ゴホン。...

それから静寂、静寂、長いこと、...

こっそりと用心深く或る足音が近寄って来て、躊躇い、立ち止まった、また咳。

静寂、何もない、ただ静寂。

足音がまた近寄った。一つの足が、黒い革靴の中の足が、懐中電灯の中の白いサーチライトの中に現れた。

一瞬後に、この電灯が持ち上げられた。その明かりはさまよい、停止した。...躊躇いながら、この足取りは、大地にくっついたかのようなようであったが、今一度先に進んだ。この静かな訪問者は、更に静かに下に横たわっているものを覗き見た。

長い静寂、長い静寂。

それからこの男は咳払いをした。ランタンのサーチライトが再び、その右手、その左手を探した。

その上に倒れて死んだわけではないだろう。

しかしそれから拳銃は見つけられた。それを見つけた男は、輪廻を調べた。彼は葉莖を

突き具でかき出した。拳銃は新たに装填された。今一度ランタンの明かりは死者に向けられた。それから彼は素早く、土手を上がって、区画線に沿って、ノイローエへの道を進んで行った。

黒い奥は全く暗かった

125

ブラックヴィッツ一家の帰宅

若いパーゲルが用意したほどに、この別荘を丁寧に準備した家政婦や主婦はいなかったであろう。部屋は片付けられて、温かかった。浴室の暖炉は温められていた。キッチンでは帰宅者のために夕食が待っていた。その上この若い男は、夏の暑さで干涸らびて、秋雨で傷んだ庭園から、二、三本の花束をまとめていた。グラジオラスやダリヤ、アスターである。

エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人は召使い達の抜けた砂漠の家を後にしていたのであったが、そこはまた一つの我が家となっていた。自分も逃げようと固く決心していた慰めのない小間使いロツテでさえも、かつてなかったほど威勢が良く、上機嫌であった。というのはこの「若い男」が掃除騒ぎを一つの娯楽に変えたからである。彼は片付ける女達と一緒に移動し、手に携帯蓄音機を持って、掃き出すたびに、ベッドメイキングのたびに、音楽を鳴らせたからである。例えば、「君の瞳は我が命」とか「朝酒が大好きで、それでお祖母ちゃんの身上潰した」。 — 言いようもないことであった。この一晩ほど、半年のうちで、この別荘で、かくも沢山、かくも心底、笑われたことはなかった。

しかし笑いの後には涙が来た。雨が陽光を追い出した。 — 毎日が日曜日とは行かない。颯爽としたホルヒ車が走るとき、そこに何という不幸が運送されているか、誰も気付かなかった。しかしまことに狼狽して見えるフィンガー氏がすでにドアを開けていて、若いパーゲルが近寄ることになった。それから車の中が覗かれたとき、...

勿論恵み深い御令嬢は相変わらず眠っていた。何か不安を誘うものが、この凝固した青白い眠りには見られたけれども、しかしそれだけでは、人々の顔はかくも深刻なもの、当惑したものにはならなかったであろう。しかし騎兵隊長、この呪われた騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツときたら。彼はまだ正気に戻っていなかった。しかし走行の間にもどし始めた。 — ほとんど衣服をまとわず、呻いていて、汚れたまま車から持ち上げられた。

恵み深い奥方は恐ろしい時間をやり過ぎさなければならなかった。彼女は生氣なく、年取って見えた。彼女の美しく、豊かな口は固く閉ざされていて、悲しげに辛辣に見えた。

「そうです」と彼女は厳しく頷いた、「不幸を運んで来ました」。

彼女は周りの人々の顔を一瞥した。屋外灯の乏しい明かりの下、幽霊のような顔であった。若いパーゲルに運転手フィンガー、ロツテで、びっくりして、不安一杯で、村からの二、三の女性が見られた。 — いや、もはや隠し事、内緒事ではない。不幸が別荘を直撃した。しかしエーファ夫人はこれにも耐えた、 — 耐えられるのか。いや、彼女は強くなった、現実の不幸の中では気取りは消える、...

「フィンガーさん、パーゲルさん、お願いします。私の夫を運び上げてください。まずは浴室の寝椅子が一番良いでしょう。バスの準備ができるまで。できているのですか。有り

難いわ。娘さん達は、私と一緒にヴィオレット嬢の面倒を見てください。心配しないで、ロッセ、娘は死んでいません。ただ眠らされています。医師が薬を処方したのです。では――始めましょう」。

照明は突然家の中でより陰鬱になったのであろうか。ここでたった今まで歌声が響いて、笑われたというのは本当か。花瓶の花々は何だろう。不幸が家にやって来た、――皆がつま先立って歩き、皆がひそひそ声である。――しっ、どうしたの。何でも無い。単に騎兵隊長だ、また呻いている。別荘の屋外灯は照らし続け、車のヘッドライトはその明かりを夜の中に無駄に放っている。

両男性、パーゲルとフィンガーは、騎兵隊長を脱がし、浴槽に入れた。

「いえ、私は夫には時間がありません。貴方らにお願いします。ヴィオレットの方がもっと大事です、...」。

そして夫人は娘のベッドの側に腰を下ろした。夫人は部屋を離れなかった。――夫人は警告のことを思い出したのか。娘はまだ安全ではないのか、――ここ自分の家で。ノイローエの周りには森があって、世間は遠い。どうしてもっと大きな厄災が侵入できよう。辱められ、混乱した一人の娘よりも、今や最終的にすべての支えを失った一人の夫よりも、もっと大きな厄災があろうか。もっと大きな厄災が。

「ロッセ」と夫人は言った、「すぐ下へ下りて行きなさい。すべてのドアを閉じなさい。地階も一階も。本当にすべての窓が閉まっているか確かめなさい。私に尋ねないうちに、誰にもドアを開けてはなりません」。

小間使いは行った。不安に満ちて、混乱していた。夫人はベッドの側に座っていた。十二時半に、一時に、娘は目覚めるであろう。この瞬間にすべてがかかっている、このことを夫人は医師から聞いていた。この時に備えることにしよう。この部屋から一步も出ないことだ。ヴィオレットの部屋だ、――ここに娘は子供のときから、若い少女のときから住んでいた。当時の娘ときたら、いやまだつい先ほどまでの時だった。ここが娘に、自分が遭遇したことを克服する力を与えるに違いない。

二人の男達は黙って騎兵隊長の許で仕事をした。若いパーゲルは隊長の体を丁寧に洗い、運転手はその体を支えた。というのは柔らかな、眠っている肢体は、浴槽で再三支えを失ったからである。それでも正気が体の中に戻って来るような気配があった。臉が動き、びくつき、口がつぶやいた。

「何でしょう、騎兵隊長殿」。

「何か飲み物を、...」。

その通り、何か思い出のようなものが、麻痺した脳の中で始動した。この男が陥った厄災についての最初の、また目覚める予感であった。そしてすでに彼は、まだ再び考えることができないうちに、もう新たな麻痺、新たな逃避を望んでいた。...

パーゲルは運転手を見つめた。フィンガー氏は否定的に頭を動かした、「すでに胆汁をもどしている。胃はもはや何も受け付けられないだろう」。

パーゲルは頷いた。

正体のない、濡れて、滑らかな体を浴槽から持ち上がるのは簡単ではなかった。騎兵隊長は抗い、激しくつぶやいた。「ポートワイン」と彼はつぶやいた。「ボーイ、もう一本」。

「何ごと」とヴィオレットの部屋のドアからエーファ夫人が叫んだ。

「騎兵隊長殿をこれからベッドに運びます」とパーゲルは報告した、「飲み物を欲しています、奥方様」。

「夫は何も要りません」と彼女は決めた、「一口のアルコールも駄目です。私のサイドテーブルの中に、パーゲルさん、ヴェロナールがある筈です。調べてください。夫に一錠やってください、...」。

ようやく騎兵隊長はベッドに寝た。疲れて、落ち着きのないうつらうつらであった。ヴェロナールを彼は得たが、しかしすぐにまた吐き出した。

フィンガー氏は躊躇いがちに言った、「私は車を雨から濡れないところに移さなければなりませんでしょう。新品の車なのに、残念です」。

「貴方の会社はきっとお金を貰えます」とパーゲルは言った。

「そもそも車が台無しです」と運転手は苛立って言った、「何と汚れたことでしょう」。

「それに一日中まともに食事していないのです、ずっと外で、濡れて、寒い中、...」。

「奥方様と話してみましよう」とパーゲルは進んで言った、「その間、騎兵隊長の許にいてください」。

彼はフォン・ブラックヴィッツ夫人と話した。それから運転手、女性陣、それにロッテも家から出した。厄災に見舞われた別荘から、皆急いで去った。

ヴォルフガング・パーゲル自身は騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツの許での歩哨役に戻った。この男はとても病んでいた。それは容易に見て取れた。しかしアルコールの害を受けて病んでいたのは、単にその体ばかりではなかった。更に一層彼の魂の方が病んでいた。この男の自負心が致命的に傷付けられていた。彼は自分を襲う陰鬱な想念の下、身悶えしていた。

自分のすべての欠点が彼の目に入った。 — そして彼は目を閉じようとした。

しかしこれは役に立たず、彼はベッドから身を起こして、ベッドの端の安楽椅子にいる若い男を見つめていた。いかに自分は情けなく、卑小で、空虚であるか、今までそうであったか、これからもそうであろうか、そのことを、パーゲルも知っているか、皆も知っているか、彼は知ろうとした。

しかし彼は一切混乱していた。それは一つの狩りで、明かりはとても悲しげに光り、それはイメージ、イメージの影であった。...何故夜はかくも静かなのか。何故自分は一人で呼吸しているのか、一人で苦しんでいるのか。

「私の妻はどこだ、ヴァイオはどこだ。誰も私のことを心配しないのか。私は全く一人っきりで、見棄てられて死ぬのか、神よ」。

「深夜です、騎兵隊長殿。恵み深い奥方様と恵み深い御令嬢は眠っています。貴方も少しばかり休もうとなさってください」。

病人はベッドに身を倒して寝た。彼は思いに耽っているように見え、情報を得て落ち着いていた。それからまた起き上がって、尋ねた。声に策謀的調子があった。

「貴方は若いパーゲルではないかな」。

「その通りです、騎兵隊長殿」。

「そして貴方は私に雇われている」。

「その通りです、騎兵隊長殿」。

「それで貴方は私が命ずることをしなければならない」。

「その通りです、騎兵隊長殿」。

「それでは、...」と彼はそれでも一息ついて、しかしそれからまことによく支配者然と言った。

「それではすぐにコニャックの瓶を一本持って来なさい」。

その通り、パーゲルよ、ヴォルフガングよ、ここでは愛想は役に立たない、譲歩も回避も役に立たない。一 騎兵隊長はおまえを緊張して、ほとんど憎悪に満ちて見つめている。彼はコニャックが欲しいのだ。おまえが厳しくしても、彼は手に入れよう。

「貴方は病気です、騎兵隊長殿。まずは眠る必要があります。明日早朝にコニャックは得られましょう」。

「私は今、欲しいのだ。私は命じている」。

「できません、騎兵隊長殿。恵み深い奥方が禁じられました」。

「私の妻が私に禁ずる資格はない。今コニャックを取って来るのだ、さもないと」。

両人は互いに見つめ合った。

いや、世界が剥き出しになり、話し方の虚飾が落ちると、言い回しの優しさはもはや消えてしまう。家庭生活の中で一 化粧が拭き取られた。利己主義の空ろな髑髏が、黒い眼窩と共に汝ににやりと笑う。パーゲルは幽霊の如く、突然自分がおまるマダムの部屋でペーターの横に寝ている姿を思い浮かべた。カーテンがむっとする空気の中、灰黄色にかかっている。これが今一つの象徴のように見えた。いや、もっと厳しい試練の予備段階のようである。当時だったら彼は自分のスーツケースを取って、臆病に逃げ出していたことだろう。ここではもはやそれはない。美味しい味の、優しい嘘は去ってしまった。愛の優しい像は吹き飛ばされた。一 人間が人間に対峙していて、豺狼どもの中の狼で、汝が自らに対して矜持があるならば、自ら決心しなければならない。

「駄目です、騎兵隊長殿、残念ですが、しかし、...」。

「それでは私が自分一人で取って来る、貴方は解雇だ」。

一気に騎兵隊長はベッドから飛び出た。ヴォルフはこの病人が、たった今二人がかりでようやく浴槽からその肢体を持ち上げてやった本人が、このような敏捷性、このような力を発揮するとは思っていなかった。

「騎兵隊長殿」とヴォルフは懇願した。

「貴方は貴方の雇用主に手出ししようとは思わないだろう、ええ」と騎兵隊長は顔を歪めて叫び、パジャマ姿でドアへ駆けた。

決断の時であった。「手出し致します」とパーゲルは答えて、騎兵隊長を抱き締めた。

「放してくれ」と騎兵隊長は叫んだ。憤激、かつて体験したことない不名誉、アルコール依存が彼に力を与えていた。

「アヒム、アヒム、何ごとなの」とドアから声がした。戦いの騒音、叫び声で、奥方が、娘の病室からこちらへ呼びかけていた。夫人は娘の許から離れる気はなかった。

「おまえのやることだ」と騎兵隊長は猛然と大声を出して、それだけ一層強力にパーゲルの両腕から抜け出ようとした。「おまえが私に対しこの若い男をけしかけたのだ。私がコニャックを飲めないとはどういうことだ。私はここでは主人ではないのか、おまえが主人か、私は、...」。

自分の妻に突進したいかのように、彼はパーゲルの両腕の中でもがいた。

「パーゲルさん、夫をベッドへ連れて行ってください」とエーファ夫人は怒って命じた、「遠慮は要りません。しっかり押さえてください、アヒム」と彼女は警告した、「アヒム、向こうでヴィオレットが病気で寝ています。しっかりなさい。男でしょう。娘は病気がひどいのよ、...」。

「もう行くよ」と騎兵隊長は、突然ほとんど意気地なく言った、「私が病気のとき、おまえは少しも騒がない。私はただ一杯コニャックを飲みたいだけだ。ただの一杯、小さなコニャックを、...」。

「夫に更にヴェロナールを与えてください。二錠与えてください。 — やっと休まることでしょう、パーゲルさん」とエーファ夫人は絶望的に叫んだ、「ヴィオレットの許に戻らなきゃ」。

そして不安に駆られて、彼女は急いで娘の部屋に戻った。通路を歩くとき、彼女は激しく動悸した、 — 今度は何を目にすることだろう。

しかし — 心臓は一層落ち着くことになった、 — 自分が去ったときと変わらないものを目にした。娘はベッドに安らかに眠っていた。はなはだ白く、顔にわずかに青ぶくれがあって、物思いに耽っている表情であった。

エーファ夫人は脈を計った。ゆっくりと脈打っていて、力強く感じられた。心配いらぬ、 — ヴィオレットは目覚めることだろう。娘と話しても良いし、話さなくても良い、その時の状況次第だ。娘はまた元気になるだろう。ノイローエから離れて、静かな片隅で暮らすことになろう。父親は金銭に関して、相談に乗ってくれるだろう。一つの敗北があったからといって、絶望することはない。ヴィオレットもその必要はない。本来人生は、厳密に見てみれば、ただ敗北ばかりから成り立っている。人間はそれでも更に生きて行くし、人生を喜ぶ。人間はすべての被造物の中で、最もタフで、最も抵抗力のあるものだ。...

エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人、 — 旧姓フォン・テッシューは、見上げた。十二時五分であった。決定的で、厄災に満ちた時間が始まっていた。

夫人は寒けがした。いや、この部屋では重苦しい暑さが見られた。夫人は窓を開けた。微かにこの暗い夜の中、風が吹いていた、微かに木々から滴が落ちた。夫人は外を眺めた。しかし夫人は何も見分けられなかった。ただ影の中に影があった。そしてこの影の世界から、人間世界を脅かす危機がやって来る筈であった。

彼女は再び寒けがした。何をしようか。彼女はびっくりして考えた。私は寒い、それなのに、私は窓を開けている。全く混乱しているわ。一切が一人の人間にとって手に余る。...

そして彼女は開き窓の間にホルダーを嵌めて、風でパタンと閉まらないようにした。

この瞬間、甲高く家の下の方で、電気の呼び鈴が鳴った。

126

ヴィオレット行方不明

フォン・ブラックヴィッツ夫人もパーゲルも、どちらも病人の部屋のドアに踏み出て、廊下の方を眺めた。若い男は夫人の顔の青ざめた不安を理解していなかった、...。

「呼び鈴が鳴ったわ」と彼女は囁いた、...。

「運転手かもしれません」と宥めて、彼は答えた、「村のどこかへ夕食に出掛けたので

す、そして今、...」。

「違う、違う」と彼女は不安一杯に叫んだ。

再び呼び鈴が甲高く鳴った。

「開けないでください」と彼女は頼んだ、「お願いします、パーゲルさん、災難がやって来ます、...」。

「あるいはロツテかもしれない」と彼は再び試みた、「ロツテもまた外出しました。娘を外に締め出すことはできません。騎兵隊長殿は丁度落ち着いておられます。今開けるのをお許してください、...」。

「そうなさらないで、パーゲルさん」と夫人は子供のように頼んだ。あたかも、間違っただけから目覚めてくる災難を外に締め出すことができるかのような按配であった。

しかし彼はすでに階段を駆け下りていた。速やかに彼は駆けた。彼の頭は明瞭に考え、彼の体はどんな危険にも備えがあった。馬鹿げたことであったが、喜びのような思いに彼は包まれていた、自分はこの世で無用な人間ではない、と。上の向こうの夫人に、夫人の心配は無用のものであると証するという全く些細な仕事であれ、自分には一つの仕事がある、と。初めて彼は内心で、自分の全本性と共に、心身と共に、理解した。つまり、人生は或る仕事を果たす者にのみ、喜びをもたらす、と。その仕事は小さなものであれ、大きなものであれ、間違いなく喜びをもたらす。人生の実現はただ自分の自我の中から生じ得るのであって、周囲からではない、賭けの儲けからではない、...

呼び鈴は三度目、甲高く鳴った。

恵み深い奥方は上の方で何か不分明なことを叫んだ。

駆けながら、彼は廊下のクロークに太い槓の棒があるのを見た。騎兵隊長が普段、森を歩くとき使うものだった。彼はそれを握り、一度空中に旋回させて、廊下の明かりに当たりそうになったが、その棒を拳で構えていて、ドアを開けた。そのとき丁度四回目の呼び鈴となった。

ドアの前には、赤らんだ、若干苛立った顔の、フォン・シュトゥットマン氏が手に明らかに重そうなスーツケースを持っていた。

「貴方ですか、フォン・シュトゥットマンさん」とパーゲルは呆気にとられて叫び、自分の滑稽な武器を恥じて、下げた。

「その通り、私だ」とフォン・シュトゥットマン氏は言って、確かに彼なりにこの上なく苛立っていた。「ノイローエは今日何があったのか、分からん」と彼はかなり侮辱を感じて言った。「懂れて、固唾を吞んで待たれていると思っていた。いずれにせよ、かなりの額の金を持参している。一 駅には車はなく、官吏の家は暗く、施錠されている。宮殿は暗い、しかし大祝典でも挙行しているような大騒ぎだ。しかし誰も開けない。...そしてここでは十分間雨の中に立っていて、呼び鈴を押したところだ、...」。

フォン・シュトゥットマン氏の声は次第に非難の調子が強まって来た。自分が他の者達の頼りなさを以て歩まざるを得なかった苦難の道が、数え上げるうちに、まことに明確になったからである。...

「お聞きください、フォン・シュトゥットマンさん」とパーゲルは急いで囁き、このきょとんとした男を玄関の中に引き入れ、その背後のドアを入念に閉めた。「ここ、あるいはむしろオスターデで、今日或る不幸が生じたように思われます。ヴィオレット令嬢は重

篤な病で戻って来られました。騎兵隊長は 一 ひどく酩酊されています。詳しいことは私も存じません。最悪なことは、奥方様まで全く混乱されているということです。夫人はこれから先の災難を案じておられるように見えます。何のことかさっぱり分かりません、…。私は全く一人っきりで連中に対応しました、つまり、そうです、秘密警察もここに来まして、森で或る武器保管所を掘り出したのです。ご存じでしたか」。

「私がか」と怒ってフォン・シュトゥットマン氏は叫び、スーツケースを重々しく下に置いた、「私の仕事は、…」。

「分かりました、恵み深い奥方様」とパーゲルは上に叫んだ、「すべて全く問題ありません。フォン・シュトゥットマンさんがこちらに見えています。貴女の許にお通ししてよろしいですか」。

「フォン・シュトゥットマンさんですか」とエーファ夫人は叫んだ、「勿論、すぐに早速。有り難いわ、フォン・シュトゥットマンさん、こちらに戻られて。とても助けを必要としています、…ここを離れられないのです、…」。

パーゲルは静かに騎兵隊長の許の自分の部屋へ行った。この上司は眠っているように見えた。今回彼はヴェロナールを 一 二錠 一 自分で受け取っていた。しかし信用はできなかった。彼は目を閉じて、静かに息をしながら横になっていた。しかし目の覚めている男でも、目を閉じたまま、静かに息をすることがある。パーゲルは何か合っていない気がした。騎兵隊長はこの合間にベッドから出たような気がした。その証拠はなかった。しかしそのように思われた。騎兵隊長の顔は怒りでひきつり、意地悪な表情をしているようにも見えた。そして用心して見張る決心をした。巡査長マロフケが彼に教示を与えたのは、無駄なことではなかったろう、…。

その間にパーゲルはヴィオレットの部屋からの声を傾聴していた。一言も理解できなかったけれども、二人の声は十分に区別できた。ここでも向こうでも廊下へのドアは半ば開いていたからである。疑いようもなく、フォン・シュトゥットマン氏の声は少しばかり傷付いているように聞こえた。それは不思議なことではなかった。彼は走り回って、取引をして来て、有能なことをしてみせて、幸運を掴み、沢山の金を持って来たのである。切望され期待された、必要な金を。 一 それなのに駅には車はなく、彼を迎える人は誰もいず、金はそれほどに、重要ではなく、彼の果たした仕事は、それほどに、重要でないものになってしまっていた。でも私どもは病気になってしまったの。私どもは別の件に関わっているの、例えば一つの不幸で、すでに起きた不幸とこれから生ずる不幸であって、こちらがもっと重要な件なのです。

哀れなフォン・シュトゥットマンさん、パーゲルははっきりと暗い官吏の家の前に立っている彼の姿を思い浮かべた。一瞬も手から離さない重たいスーツケースを手を持って。この善良な子守娘は、すべての子守娘の体験する永遠の幻滅を味わっていた。この娘は憧れの玩具を手に入れた。しかしその子供はそれを全く見ずに、子供はとうに何か別のもので遊んでいるのである。

この静かな夜の時間に、少しばかり眠くなって、というのは朝の四時半から起きているからであるが、何故この親切な、有能な、頼りになるフォン・シュトゥットマン氏がひとり身なのか、中年のまことに孤立した独身者なのか、若いパーゲルは理解した。人間は自分の救援者を愛さない、 一 人間は危機から脱すると、その救援者の卓越さを悪く受け

取るのである。

向こうの部屋での二人の声は行き交った。パーゲルは自分の腕時計を見た。ほぼ十二時半であった。本来ベッドに入りたいところである、と彼は眠くなって考えた。眠気が来ている、そして騎兵隊長はこの十五分間動かず、やはり寝ている。しかし私は向こうの女性達を見捨てるわけに行かない。シュトゥットマンも長くは滞在しないだろう。奥方様の声はますます苛立っているように聞こえる、…。しかし少なくとも一杯のコーヒーを飲めるといいのだが、素敵な、濃い、黒々とした、どろりとしたコーヒーを。

そして今や別荘のキッチンへ下りて行く自分を想像した、…。投げ込み電熱器があったな、今日の午後見かけたぞ。すぐに沸く。立派な一人前のコーヒーを碾く、半ロットだ、直接カップに入れて、その上にたぎる熱湯、三分間入れる、冷たい水をかけて、それからこいつを飲む、熱いまま、澱もすべて。いや、水中の魚のように元気になることだろう。

しかし彼は行くことができなかった。この素晴らしい、元気の出るコーヒー、彼が賭博に行く前に、時々ペーターが淹れてくれたコーヒー、これを彼は飲むことができなかった。彼はここでこの阿呆な騎兵隊長の許に座っていなければならなかったからである。隊長はきっと眠っていない。何故隊長は両手を掛け布団の下に置いているのか。ヴォルフガングはぼうっとしていて、騎兵隊長は先ほどベッドから出て、ナイフを取って来たことも考えられると思うほどであった。しかし隊長は本当にベッドから出たのだろうか。

ヴォルフガングのますます寝惚けて行く頭は、この質問に深入りすることを決然と拒んだ。その代わりに、コーヒーカップの像がまた浮かんだ。彼はカップを文字通り眼前に見た。それは蒸気を立て、その褐色で鈍い銀色の表面は、繊細に碾かれて、たぎるお湯で膨れたたたコーヒーだ、…いや、このようなものは、何と疲れに効くことだろう。そして深い安堵感と共に、突然ヴォルフガング・パーゲルは思い付いた。コーヒーを淹れるために下まで行く必要はない、ロッテがまた帰って来るはずだ、と。運転手も戻ることだろう、しかしとりわけロッテだ、ロッテが自分にコーヒーを淹れてくれよう。この娘はどこにいるのだ、もうすぐ十二時半だ、…ロッテがコーヒーを淹れてくれるに違いない、もうすぐ、…。

咄嗟にパーゲルは自分のうつらうつらから飛び上がった。ひょっとしたら布団のかきこそ音かもしれない。騎兵隊長は目下静かに横になっている、— しかし、ベッドから裸足が出たような感じではなかったか。

いや、隊長は全く静かに横になっている。向こうも声も静かになった、…いや、その通り、シュトゥットマンは何と話したのだったかな。宮殿は暗かった、しかし大騒ぎで、しかし誰も開けなかった、か。…自分は先ほどはそのことを気に留めなかった。しかしずっと気になっていた。これが今突然彼をうつらうつらから目覚めさせた逆鉤であった。ロッテはまだだ、宮殿は暗く、しかし大騒ぎ。…

何か更に起きることはないだろう、老エリアスは信頼できるし、鼠どもは確かに、猫が家を留守にすると騒ぐ。それでもシュトゥットマンにこの点に関し、注進することにしよう。胸騒ぎがするからな。巡查長マロフケとの体験で、パーゲルは若干注意深くなっていた。彼はもはや土地や人々の間をそれほど行き来しなくなっていた。しかし責任感があった。何に対する責任感か。自分がなしていることへの責任感である。自分自身への。いや、フォン・シュトゥットマン氏に注進することを忘れないようにしよう。

三分後には次のような次第となった。十二時四十分であった。フォン・シュトゥットマ

ン氏がドアの所に来て、少し手短に言った、「パーゲル、私をこの家から出してくれないか。そして官吏の家の鍵を渡してくれないか。貴方はまだ多分ここに残るだろう」。

パーゲルは自分の患者を一瞥して、それからささやき声で尋ねた、「騎兵隊長殿は眠っていると本当に思われますか。ぐっすり眠っている、と」。

フォン・シュトゥットマン氏は短い、はなはだ恵み深くない視線を騎兵隊長に向けて、苛立って説明した、「勿論眠っている、何故だ」。

囁き声で、パーゲルは言った、「単にその振りをされていて、眠ってはいないように、私には思われるのです」。

フォン・シュトゥットマン氏がパーゲルを見つめる眼差しは不審げであった。「パーゲル、いいか、貴方は何か奥方と打ち合わせているのか。理解に苦しむ」。

「打ち合わせるとは、一 どうしてです」。

「つまりだ、フォン・ブラックヴィッツ夫人は私に少なくとも十回尋ねたのだ。令嬢は本当に眠っていると、私が思うかと。夫人の印象では、令嬢はとうに目覚めていて、ただその振りをしているのだ、と、...丁度今の貴方と同じで、...」。

両者は一瞬固く見つめ合った。

「それじゃ、下へ行きましょう、シュトゥットマン」とパーゲルは突然、極めて愛想良く爽やかに微笑した、「貴方は疲れすぎているのです。貴方の大変なご苦勞に対し、感謝は少なかったと拝察致します」。

相手の顔は動かなかった、しかしそれ故、パーゲルは自分の腕をフォン・シュトゥットマンの腕の下に持って行った。

「行きましょう、シュトゥットマン、貴方をこれから外に出します。本当にベッドで休まれる必要があります」。

彼は相手と一緒にゆっくりと階段を下りて行った。

「請け合いますが、奥方様と私とが同じ質問を貴方にしたのは全くの偶然です。誓って言います、シュトゥットマン、...今この家には奇妙な空気があります、...娘は少しばかり病気です、娘達は時に病気になります。父親の方は飲み過ぎです。父親達も時にこういうことはあります。一 従って何も異常なことではありません。しかしすべての薄暗い運命の神々がこの家を襲ったかのような空気がここにはあります、...」。

「パーゲル、貴方は分かっているのか」とシュトゥットマンは突然元気よく叫んだ。彼は、若いパーゲルに向かい合って、玄関の間に立っていた。彼は今や苛立っていなかった、ただわずかに途方に暮れていた、「私は大げさに接待された。しかし私が果たしたこと、これは実際難儀なことだったが、これには夫人の気は向いていなかった。私は一体どうしたのだと尋ねた。私は状況を知った。私には何ら不安なものは見えない。私は、二、三の慰めの言葉をかけたが、冷たく拒絶された。私には分からないことだ、と言う、...貴方には分かるのか、貴方は何か知っているのか」。

「私は何も分かりません、承知していません」とパーゲルは微笑して言った、「奥方様が安心されるご様子なので、私は騎兵隊長のベッドの横に座って、眠り込まないように努めています。それだけです」。

フォン・シュトゥットマン氏は彼を真剣に見つめた。しかし若いパーゲルの目は微笑していて、悪気はなかった、「それじゃ、お休み、パーゲル」とシュトゥットマン氏は言っ

た、「ひょっとしたらすべては明日の朝、明らかになろう、...」。

「お休み、シュトゥットマン」とパーゲルは機械的に答えた。彼はまだ何かを言いたいと分かっていた。彼は、スーツケースを重たげに運んでいる夜の中への進行者を思案げに見送っていた。突然彼は思い浮かんだ。「フォン・シュトゥットマンさん、ちょっと待ってください」と彼は叫んだ。

「何だ」とフォン・シュトゥットマン氏は尋ねて、今一度向き直った。

両紳士は互いに歩み寄って、玄関からおよそ十歩前のところで両者は出会った。

「まだ何かあるのか」と若干苛立って、フォン・シュトゥットマン氏が尋ねた。

「そうです、丁度今思い付いたのです、...」とパーゲルは考えに耽って答えた、「お尋ねします、フォン・シュトゥットマンさん、とても疲れていますか、すぐに寝なくてはなりませんか」。

「気になることが貴方にあるのであれば、...」とシュトゥットマンは、早束手伝う意志があって、言った。

「貴方が着いたとき、先ほど話されていたことを反芻していたのです。覚えていらっしゃるでしょう。宮殿は暗く、しかし大騒ぎであった、そう仰有ったでしょう」。

パーゲルは小さな間を取って、それから付け加えた、「枢密顧問官殿は旅立たれたとご存じでしょう」。

「その通りだ」とフォン・シュトゥットマン氏はびっくりして大声を出した、「そのことを全く考えていなかった」。

「格別のことではないかもしれませんが」とパーゲルは宥めて言った、「召使い達の何らかの小さな祭典でしょう。老エリアスが、余りにひどいことにならぬよう目を光らすでしょう。...しかしともかく納得したいのです、シュトゥットマン、勿論、貴方が余りにお疲れでなければの話ですが、...」。

「いや、何も疲れはない」とシュトゥットマンはほとんど夢中になって説明した、一つの課題があることを喜んでいた、「勿論まずは金を金庫に保管しなければならない、...」。

「私でしたら、下で呼び鈴を鳴らしません」とパーゲルは思案して提案した、「呼びもしないでしょう。私はこの点、考えて見たのです、シュトゥットマン」とパーゲルは言って、それと知らずに、本当にそのことについて考えていたことに気付いて、驚いた、「貴方の窓の前に、タールフェルトの屋根があります。このタールフェルトの屋根から、難なく宮殿のベランダに行けます。ベランダを行けば、ほとんど宮殿を一周でき、二階の中、そしてすべての窓の中を覗けます、そして自分は見られません、一 いや、私ならそうしましょう」とパーゲルは一種強調して結んだ。

シュトゥットマンは彼をいぶかって見つめていた、「しかし一体何のためだ」と彼は叫んだ、「貴方は何を確信しているのか。私が何を見るであろうと思っているのか、...」。

「いいですか、シュトゥットマン」とパーゲルは突然とても真面目に答えた、「何も言えません。何も分かりません。何も理解していません。しかし私ならそうすることでしょう」。

「しかし、...」とフォン・シュトゥットマンは抗議した、「そのような夜間のスパイ行為は、...」。

「私どもがルッターとヴェーグナー亭で出会ったときの夜をまだ覚えていらっしゃいますか」とパーゲルは威勢良く尋ねた、「当時私は、これは特別な夜だ、そう言って良ければ、運命の夜だという感じがいたしました。結局何故そのようなことを想定しちゃいかわりませんか、――すべてが決定されるような夜です。今日その思いがまたしています。劣等な夜、邪悪な夜です、...」。

彼は夜の中を覗き込んだ。漆黒の中に、いわばその顔を、その邪悪な待ち伏せる顔をいわば発見できるかのようであった。しかしこれは馬鹿げた話しである。彼はただ軽く吹きすさぶ、滴る暗さのみを感じた。

「それでは、フォン・シュトゥットマンさん」とパーゲルは突然結んだ、「よろしくお願ひします。私はまた騎兵隊長の許に戻ります。お休みなさい」。

「お休み、パーゲル」とフォン・シュトゥットマン氏は答えて、再び家に戻るパーゲルをびっくりして見つめていた。というのは、このような神秘的思い付きはフォン・シュトゥットマン氏には縁遠かったからである。彼は玄関のドアが閉まり、施錠されるのを耳にしていた。それから別荘の屋外灯が消された。彼は暗闇の中に立っていた。軽く嘆息して、彼は重たいスーツケースを持ち上げ、官吏の家へ向かった。彼はパーゲルの助言に従う前に、今一度熱心に宮殿の周りで聞き耳を立てて、覗くことに決めた。他人の所有物にパーゲルの言うように夜間侵入することはまことにいかがわしく思われた。

若いパーゲルは別荘の玄関の間に立っていて、静かな屋内に聞き耳を立てた。

病人のベッドの側でうつらうつらしている時から感じていて奇妙な気分が彼から抜けなかった。時計を一瞥しても、シュトゥットマンとはほとんど五分間も一緒にいなかったと分かった。すぐに十二時四十五分である。何も起きなかったのであろう。彼は絶えず玄関に注目していた。彼は全く玄関の間近に立っていた。誰かが忍び込んだはずはない。家は静かであった。

しかし何かが起きた気がした。

ゆっくりと、音もなく、――時々夢の中で動くときのように、ゆっくりと、音もなく、――彼は階段を上がって行った。ヴィオレットの部屋のドアの所で、エーファ夫人の白い、不安げな顔が現れた。彼は手短かに頷いた、彼は小声で言った、「すべて異常ありません」。

彼は騎兵隊長の部屋へ行った。

彼は一瞥して気付いた。ベッドは空である、ベッドは空である。

彼は全く静かに立っていた。彼は目で部屋の中を探した。誰も中にはいない。窓は閉ざされている。マロフケならどうするだろうと彼は考えて、相変わらず静かに立っていた。しかしこの問いに対する答えは単に消極的なものであった。マロフケは何ら慌てたことをしないであろう。

浴室のドアが彼の視野に入った。彼はそれを押し開けて、明かりを点けた。浴室も空である。パーゲルは再び戻った。彼は通路に出た。

ヴィオレットの部屋のドアは今度は広く開かれていた。エーファ夫人がそこで落ち着きなく行き来していた。夫人は彼にすぐ気付いて、彼に向かって来た。夫人全体が熱に浮かされたように落ち着きがなかった。

「どうしたのです、パーゲルさん。何か起きたのですね、そう見えますよ」。

「ただ」コーヒーを飲みたいと思ひまして、奥方様」とパーゲルは嘘を付いた、「私はくたびれ果てました」。

「それで私の夫は」。

「すべて異常ありません、奥方様」。

「私はとても心配です」と夫人はうわごとのように言った、「親愛なるパーゲルさん、医師の話しでは、娘は、今が目覚めるときです。娘は目覚めています。私はそう感じています。でも、私が娘に何を言っても、娘は動きません。娘は眠っている振りを続けています。パーゲルさん、私はどうしたらいいのでしょうか。とても心配です。こんなに心配したことはありません、...」。

彼女はうわごとのように興奮して話した。夫人の白い顔がびくついた。夫人は彼の手を握って、それと気付かずに、握り締めていた。夫人は彼に頼んだ、「ヴィオレットを今一度眺めてください、パーゲルさん。一言娘に言葉をかけてください。ひょっとしたらヴァイオは貴方の言葉なら聞くかもしれません、...」。

若いパーゲルは熱くなったり寒くなったりした。騎兵隊長を探さなければならないのである。その間に騎兵隊長は何をしでかすかしのれない。しかし彼はベッドに導かれて行った。確信なく、彼は眠っている、静かな顔を見つめて、確信なく、彼は言った、「私には眠っているように見えます、...」。

「それは間違いです、きっと間違っています。何か娘に言ってください、 — ヴィオレット、ヴァイオ。パーゲルさんがいらして、お早うと言っているのよ。...ほら、臉が動いたでしょう」。

パーゲルにもほとんどそのように思われた。突然、この偽装睡眠者に、少尉が来たと呼びかけてみようかという思いが生じた。

それは単に思いだけで、すぐに彼はそれを打ち消した。というのは、娘はそんな振りをするだろうか、母親の前でそんな振りをするだろうかと思ったからである。結局娘は安静にさせておくといい、娘が安静にしたいのであれば。自分は騎兵隊長を探さなければならない。...

「いえ、彼女はきっと眠っています、奥方様」と彼は安心させるように繰り返した、「私も眠らせておくことでしょう。私はこれから私どものコーヒーを沸かしましょう、...」。

彼はエーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人夫人に今一度勇気づけの微笑を向けた。更に彼は若干みっともない芝居をして、見送っている夫人の前で、騎兵隊長の空の寝室に入って、頭で頷いて、「すべて異常なし」と再び出て来た。それから彼はゆっくりと急がず、 — 彼女の視線を受けながら、 — 階段を一階まで下りた。

彼の本能は彼をすぐに正しく導いた。通路に面している六つのドアのうち、彼は領主の部屋のドアを選んだ。というのは、今夕、掃除のとき、この部屋には、騎兵隊長の状態次第で問題となるように思われる二つの品があったからである。銃用の柵とリキュールの柵である。

ドアが開く物音で、騎兵隊長は、現行犯の盗人のような身振りをした。彼はテーブルの許に寄りかかっていた。片手で彼は大きな革製のウィングチェアの肘掛けを掴んでいて、もう一方の手で、何度も希望していてシュナップスの瓶を持っていた。

パーゲルは背後のドアを静かに閉めた。拳銃ではなく、単にシュナップスの瓶であった

ので、彼は冗談がよろしかろうと判断した。陽気に彼は叫んだ、「やあ、騎兵隊長殿、私にも少しくください。疲れ果ててしまって、ちょっと気付くに欲しいのです」。

しかしこの陽気な調子は、外れであった。自分達の行動の見苦しさを十分に自覚している多くの酔っ払い同様に、騎兵隊長は今や格別に品位を重んじていた。彼は若い男の調子に、厚かましい馴れ馴れしさを感じた。彼は怒って叫んだ。「貴方はここに何の用があるのだ。何で私の後をこっそり付けて来るのだ。それは御免蒙る。即刻消え失せろ」。彼はこのことを大声で叫んだが、とても不明瞭であった。アルコールとヴェロナールでほとんど麻痺した舌は言うことを聞かず、言葉は正確に発音されなかった。彼はマフラー越しのようにくぐもった声で話した。そのために彼の怒りが募った。目を赤くし、落ち着かずびくつく顔で、憎悪を剥き出しにして、彼は彼の拷問者を見つめた。この若造は、彼が大都会の沼地から拾い上げてやった奴だ、それが今や自分に司令しようとしている。

パーゲルは自分の敵の危険性を認識していなかった。これは何でもやりかねないほぼ狂人に等しい相手なのだと気付いていなかった。警戒することなく、彼は騎兵隊長に向かって行き、親しげに説得して言った、「お出で下さい、騎兵隊長殿。またベッドに入らなければなりません。奥方様は貴方が何か飲まれることをお望みでないと、ご存じでしょう。どうか、私にその瓶を渡してください」。

すべては、騎兵隊長が全く聞きたくない、死ぬほど侮辱的に彼には思われる言葉であった。

騎兵隊長は先の士官候補生にその瓶を差し出した。半ば躊躇っていた。...しかしパーゲルがそれを掴もうとした瞬間、その瓶は持ち上げられ、全世界が碎かれるかと思われる音立てて、彼の頭蓋に振り下ろされた。

「思い知ったか、若造」と騎兵隊長は勝ち誇って叫んだ、「服従の仕方を教えてやろう」。

パーゲルは、両手を頭に上げて、後ずさりした。麻痺したような、ほとんど意識のなくなる痛みにも関わらず、彼は初めてこの瞬間、この家を襲った厄災の大ききのすべてを理解した。彼は恵み深い奥方がすでに何時間も前から承知していること、これは酪酊した上司のことではなく、狂った上司のことだ、と理解した。それに若い娘に関しても、...

「しっかり姿勢を保て、士官候補生」と騎兵隊長は命令して叫んだ、「上官の前でそんなにだらしく立つな」。

ほとんど頭をうなじに戻すことができなかったけれども、猛烈な痛みにもかかわらず、パーゲルは、直立不動の軍人的姿勢を保つように努めた。何としてでも。上のご夫人の妨げになってはならない。ほんの二、三分のことだ。シュナップスとヴェロナールがこの男に効き目を発揮することだろう。静かになってくれるだろう。パーゲルはこれを諍いにしてはならない。まだすべての肢体が震えている、 — それに騒音が、...

「気を付け」と騎兵隊長は叫んだ。

今一度、彼の中で、生命の意志が明滅した。今一度彼は司令し、自らであることが許された。言葉が彼の口に戻った。容赦ない権力の言葉で、この権力には瞬き一つせず服従しなければならない。アルコールより強く、お仕舞いに、権力が彼を陶醉させた。

「気を付け、士官候補生パーゲル。二歩、 — 前進。回れ右。気を付け。気を付けと私は言っておる。何故よろめいている、おぬし」。

「何ごとです」と夫人の声がドアからした。「アヒム、静かにできないの。あなたは苦

しめてばかり、...」。

騎兵隊長は瞬時に向き直った、「私が苦しめるか」と彼は叫んだ、「皆が私を苦しめておる。 — 一人にさせてくれ、くたばって、飲み潰れるのだ、 — 私は役立たずだろうが」。

突然、全く出し抜けに、穏やかな調子で言った、「休めとしてよろしい、士官候補生パーゲル。貴方を殴ったが、余りひどくなければいいが。その気ではなかったのだ」。

再び更に混乱して言った、「私には、自分が何でこうするのか、何故なのか、分からない。私の中にあって、ずっと私の中にたまっていた。私は抑えてきていたのだが、今や抑えきれない。誰も抑制できない、出て来ようとするのだ。しかし飲み物があると、収まって、眠り込む、...」。

彼は思わず、ますます小声で口ごもっていた。片足で彼は床に落ちて空になった瓶を蹴った。彼は頭を振った。今また彼はリキュールの棚へ向かった。

「パーゲルさん、捕まえてください」とエーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人は抑揚のない声で言った、「彼の片方の腋を掴まえてください、階段を上連れて行きましょう。上で、すぐ貴方の頭を見てみましょう。私は戻らなくては。 — いや、彼をそのままにして、そのままシュナップスを持たせましょう。もうこうなっては、どうでもいいことです。すべては終わってしまった。 — いや、パーゲル、ヴィオレットがいなくなったら、何のために私は生きて行けましょう。私もこの二人と同様に、ベッドに横になり、眠り、何も気かけなくなりたい。 — いや、パーゲルさん、一体何の意味があるのでしょうか。何のために結婚して、一人の夫を好きになって、一人の子供を生んだのでしょうか。

— こうなってはすべてぶち壊しです。屑に屑、夫に子供、屑に屑、 — どういうことでしょうか、パーゲルさん」。

しかしパーゲルは答えなかった。

この小さな嘆きの行列は、今や二階への階段を上を探りながら、よろめいて進んだ。騎兵隊長はほとんど意識をもう失っていたが、しかしウォッカの瓶をしっかりと持っていた。夫人はうわごとを言って興奮しており、再三立ち止まって、騎兵隊長の移送を完全に忘れて、ただパーゲルに語りかけ、彼から返事を得ようとしていた。...

半ば麻痺したパーゲルは、この語りかけを聞いていた。しかしまた何か別のものを耳にしていた。彼の苦しめられた脳の中では、ゆっくりと何か恐ろしいこと、何かぞっとすることを耳にしている思いがした。...

いや、この家はもはや全く静かとはいえない。恵み深い奥方の語りの断片の中に、二階から、彼がこの夜まだ耳にしたことのない物音を聞いた。ぞっとする恐ろしい物音で、乾いた木製の、魂のない物音である。

バタン — バタン

そして、再び。

バタン — バタン — バタン

そして恵み深い奥方の話しの最中、パーゲルは指を上げて、(彼は騎兵隊長をただ階段の踊り場に滑り落ちさせた)、夫人をまじまじと見つめて、囁いた、「ほら」。

早速エーファ夫人は黙した。そして夫人は頭を上げて、パーゲルを見つめた。そして上の方に耳を澄ました。全く静かであった。...

バタン　ー　バタン、...

そして恵み深い奥方の顎は震え始めた。彼女の白い顔は全く黄色に変わった。突然の病気で荒廃したかのようにであった。彼女の目はゆっくりと涙で満たされた。...

そして再び生じた。バタン、...

この瞬間、呪縛が解けた。同時に二人は階段を駆け上がった。短い通路を走って、ヴィオレットの部屋に入った。...

その部屋は、天井灯の明かりの中、静かであった。ベッドは白く微光を発していた。しかしベッドは空であった。固定されない窓が、夜風の中、揺れていた。ゆっくりと、魂もなく、木製の音で、バタン、バタン、...

そしてとうとう、パーゲルがこの間ずっと恐れていたこと、慄きながら、それでいて予期していたことが起きた。...夫人が叫んだ、女性の恐ろしい、終わろうとしない叫び声であった。百もの、千もの小さな叫び声に砕けながら、地獄の哄笑のように、二度と終わろうとしないものであった。苦悩に砕かれた被造物。

再三、新たにパーゲルは内心で言った、エーファ夫人をソファーに寝かして、彼女の両手をさすりながら、彼女の耳に再び、親しい人間の声を聞かせるために、説得しつつ、

ー　再三、新たに彼は内心でこう言った。これは意識した叫び声ではない、この女性は自分の感じている不合理の痛みによって、ほとんど麻痺しているのだ、と。しかしそれからまたこうも思われた。この一つの声には、自分達の子供を失わなければならないすべての母親達の叫び声が聞こえるかのようだ、と。　ー　すべての母親がすべての子供を、　ー　遅かれ、早かれ。というのは我々はここに[現世に]留まるものではないからである。

その間に彼は窓際へ行って、窓を閉め、耐え難い、木製のバタン、バタンの物音を止めさせた。彼はその際、素早く壁際の生垣を一瞥した。踏みしだかれた蔓が見えるように思われた。　ー　そして彼は窓を閉めた。推理、武器保管所　ー　少尉　ー　ヴィオレットは、彼にとって造作もないことであった。三十分前彼は偽装して眠っているヴィオレットに少尉が来たと呼びかけようという誘惑に駆られていた。彼はそうしなかった。しかし今や少尉が本当に来たのだと、そう彼は思った。自分にはすべて分かる、と彼は思った。しかしこのことを苦悩している夫人に言っているものだろうか。...

そして彼は夫人を説得した、再三こう言った。娘さんは熱に浮かされて森の中へ駆けて行ったのです、奥方様にはほんの一時、自分と一緒に下の電話まで行って頂きたい、自分がフォン・シュトゥットマンさんに知らせることにします、と。すると人々がヴィオレット嬢を探しに行き、見つけることでしょう、...

しかしエーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人夫人は、善良な、説得の言葉に耳を貸さなかった。夫人は横になって、呻いて、泣いていた。彼は夫人の側から離れることができなかった。彼はこの家で一人っきりである。騎兵隊長は、娘がいなくなったというのに、階段の踊り場で寝て過ごしている。...

とうとう家の下の方で電話が鋭く高く鳴った。人間の声ではできないことが、この呼び鈴ではできた。フォン・ブラックヴィッツ夫人は麻痺から飛び上がって、叫んだ。「電話へ急いでください、ヴァイオが見つかったのです」。...

夫人は彼と一緒に走った。夫人は彼の背後に立っていた。夫人は二つ目の受話器を取った。二人はとても間近に立っていて、目は燃え、二人は、生きているのでもなく死んでい

るのでもない幽霊のようであった。...二人は聞き耳を立てた。...

しかしそれは単にフォン・シュトゥットマン氏の声で、彼は興奮して報告した。宮殿では小間使い達が、脱走した囚人達と乱痴気騒ぎを起こしている、と。「皆がたらふく飲んで、騒いでいる、パーゲル。得がたいチャンスだ、...」。

一気に奥方はまた受話器を置いた。パーゲルは、夫人が、ゆっくりと、正気ではないかのように階段をまた上がって行くのを見ていた。一そして小声で、早口で、フォン・シュトゥットマン氏に告げた。ヴィオレット嬢が家から消えた、と。すぐにオートバイの警察と捜査犬が必要でしょう、こちら別荘に二、三人の信頼できる女性達も必要でしょう、...ドアは開けておきます、...

そして彼は電話を置き、ドアを広く開けた。彼はドアをただ広く開け放った、不幸の夜の中に、一これ以上の不幸がこの家を襲うことはもはやない。彼は階段を急いで上がって、眠っている騎兵隊長を放置して、そのまま上がり、エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人を見つけた。逃げた娘のベッドの前で跪いていた。夫人は両手を掛け布団の下に入れていた。ひょっとしたら、その子供の残した最後のもの、ぬくもり、ベッドに保存されていた少しばかりの体温を感じていたのかもしれない。...

ヴォルフガング・パーゲルは静かな夫人の側に静かに座っていた。彼は自分の手で頭を支えた。そしてここで、自分がかつて目撃した最大の痛みを直面して、彼は別な女性、遠くの愛しい女性のことを思い出していた。...ひょっとしたら、人間が人間に対して愛するとき、無関心するとき、憎むとき、行うことは何かと考えていたのかもしれない。...彼は多分決心したのではないだろう。考案した決心ではこれほど広大なものには至らないだろう。

一しかし彼は、すでに自分の中にいつも穏やかに有していたものを生長させていた。彼はそれを全面開放した。とても単純なことである。出来る限り、善良に、礼儀正しく振る舞うということである。(我々は皆、単に肉からなる者だから、...)。

それから彼は下の人々の声や足音を耳にした。そして今やすぐにすべては不分明になった。人々の許にいるといつもそうである。彼は起き上がり、騎兵隊長をベッドに運ばせた。彼は医師に電話し、恵み深い奥方も眠りに就かされた。彼はそもそもとても忙しくなった。

しかしそれで本質的な事柄はただ曖昧になるばかりであった。できるだけ善良で、礼儀正しく振る舞うこと。これが大事である。この価値は、一生涯、妥当する。

127

夜の捜査

夜であった。一風は朝の三時頃、より一層強くなった。風は森の中を吹きすさび、樹冠の朽ちて枯れた木を折った。それは音立てて地面に落ちた。秋であり、冬に向かっていった。時々、急ぎ足で移る雲がにわか雨をもたらした。しかし犬は、唯一の捜査犬であったが、良く足跡を追いかけた。

途中、何と多くの人間が、何とも多く、見られたことか。ノイローエの全員が起き上がり、どの家でも眠っている人はいず、至る所、明かりが輝いていた。

大事件、途方もない事件である。脱走した囚人達、彼らは宮殿に隠れていた。彼らはそもそも逃げたわけではない。小間使い達の寝室に隠れていたのである、愛と十分な食事の

生活であった。それから領主夫妻が旅立つと、彼らは大祝典を挙行了た。高慢に血が頭の上になって、乱痴気騒ぎである。―― 彼らはそれどころか、この馬鹿騒ぎの際、威厳のある老エリアスを、絨毯にくるんで、口の前に布を当てて、見物させていた。これらの小間使い達は、―― 何の羞恥心も礼儀もなく、囚人達と友情を結んでいた。小間使い達の部屋から刈り手兵舎を覗くことができたのであり、合図が交わされていた。最初は単に悪ふざけに過ぎなかったが、それから十分了解し合っていた。老マロフケは正しく嗅ぎつけていたのである。

いや、若干腐敗していた、向こうもこちらも、宮殿同様に別荘でも。宮殿では人々は大いに祈りを捧げていた。しかし祈りだけでは勿論役に立たない。―― 恵み深い老夫人はこの劣悪な知らせをどう乗り切るであろうか。彼女の家は本当に恥ずかしく思われることだろう。

警察の仕事は楽であった。彼らがフォン・シュトゥットマン氏と一緒に「手を上げろ」と言いながら、大食堂に侵入したとき、そもそも仕事は必要なかった。犯罪者達は笑っていた。彼らはそれを上等な洒落と見なしていた。彼らは美味しい時を過ごしていたし、豊潤な房事について語れたし、監獄での英雄となるであろう。―― それに彼らの身に何が起きよう。上の小間使い達の寝室に、彼らの監獄の衣服は丁寧に畳まれていた、一片も欠けていなかった。横領は問題とならない。家宅侵入も問題とならない、―― 半年か三ヶ月で、この件は彼らにとって片付けられることだろう。これに有り難く値することである。

勿論小間使い達は泣いていた。太った女中は、彼女の最愛の人、犯罪者のマツケに手錠がかけられたとき、すごく泣きわめいた。彼女はスカートを頭の上に被せて、その下で子犬のように泣きわめいた。それほど彼女は恥ずかしがっていた。

ヴォルフガング・パーゲルは、警察に急いで貰うために、覗いていたが、というのは、今やこれらの囚人達より恵み深いご令嬢ことが大事に思えたからであるが、―― それでヴォルフガング・パーゲルはアマンダ・ボックスがある広間の窓辺に立っているのを目にした。この大柄の、がっしりした、粗野な娘は、今顔に奇妙に緊張した面影を有していた。彼女の両目は憤然と輝きながら、広間での酩酊し、泣きわめき、笑い、罵る営みを眺めていた。(警察の数は封鎖に十分でなかったので、余りに多くの野次馬が押しかけていた)。

一種幻滅の思いでパーゲルはこの娘が立っている様を見ていた。彼は彼女が昨日の午後、裏切り者のマイヤーを秘密警察の前で平手打ちをしたとき、やはり見事なものと思ったのであった。

「貴女もなのか」と彼は悲しげに尋ねた。

アマンダ・ボックスは自分の顔を全面向けて、彼を見つめた。「頭おかしいのじゃないの」と彼女は軽蔑して言った、「劣等な輩はうんざりです。いえ、結構、こりごりです。上品な男がいないなら、むしろ誰もいらさない」。パーゲルは頷いた。ボックス嬢は説明して言った、「鶏のせいで私は下の方に住んでいるのです。いつも私は朝が早いし、老奥方様を起こしちゃいけないから。他は皆、上の方に住んでいます。―― でも勿論知っていましたが。―― 皆鶯鳥どもだから、ぺちゃくちゃ喋らない鶯鳥はいないのよ」。

彼女は再び群れを見つめて、思案げに尋ねた。「警察の人は気付いているのかしら。分からない。五人だったでしょう。捕まえたのはただ四人よ。五人はずらかったのかしら。それとも全くここの宮殿にはいなかったのかしら。―― それが分からないの」。

パーゲルはこ娘を、目を輝かせて見つめた、「リープシュナー、コーゼガルテン、マツケ、ヴェント、それにホルドリアン」と彼はピストルから撃ちだしたように述べた、「誰が欠けているのだ、アマンダ」。

「リープシュナーよ」と彼女は言った、「落ち着きのない、黒い視線の男、裏工作の人、ご存じでしょう、パーゲルさん」。

パーゲルは手短かに頷いた、警察の人々の許へ行って、尋ねた。しかしそこでも五人目の欠如はすでに気付かれていた。 — 気付かれないことがあり得ようか。たとえ警察がそれを思い出さなくても、フォン・シュトゥットマン氏の立派な記憶力がパーゲルのと同様、間違いなく述べていたことだろう、「ホルドリアン、ヴェント、マツケ、コーゼガルテン、リープシュナー、...」。

いや、ヴォルフガング・パーゲルは盛んにせき立てたが、しばらくの間、恵み深い令嬢の捜査は、この欠けた五人目の男のせいで後回しになっていた。しかしそれから、三時頃、速やかに新しい人員が到着した。野次馬達は広間から遠ざけられ、迅速な聴取が行われた。一人の突然、夜の中から登場した刑事、あるいは以前の刑事のお蔭で、はなはだ進捗した。警察の人々はこの先の刑事を承知しているように見えた。奇妙に凍てつく視線の太った、全く汚れて、ずぶ濡れの男であった。

二分間後には、このリープシュナーは広間での乱痴気騒ぎには加わっていなかったと明らかになった。

更に三分後、 — 彼は宮殿に来たこともないと明らかになった。いや、あの太った、泣きわめく女中が、 — 今度は実際スカートから声を出した。この泣き虫の、溜め息の肉の山が、叫んだ、「上では四人で眠ったのです。 — 五人の男を相手にしましょうか。まあ、ひどい、この男達は皆、私どものことを何と考えているのでしょうか」。

そしてまたスカートの下にべそかきながら消えた。

更に二分後に、 — 人々は知った。リープシュナーは、逃亡の後、すでに森で他の四人とははぐれてしまった、と...

「彼の職業は。紳士詐欺か。これには時間を割かない」と太った刑事は語った、「この若造はとうにベルリンにいる、 — そのような洒落た紳士にとって、ノイローエは居場所ではない。奴は自分の望み通りに行動したろう。アレクサンダー広場[警察本部]の我らの同僚が奴の担当だ。 — 間もなく手がかりが見つかる。 — この連中を連れて行け。フォン・シュトゥットマン殿、向こうの別荘までご足労願いたい。医師に同道するよう依頼してください。その方が良いでしょう。令嬢はシャツ姿か、パジャマ姿で抜け出している。この天候では同じことだ」。

「フォン・ブラックヴィッツ夫人は、...」とシュトゥットマンは反論した。

「奥方様は眠っている、小さな注射を打たれた。御領主も眠っている、 — こちらも十分服用されている。医師は時間があります。ちょっと。御令嬢の何か衣服を持参してきてください。犬が何度も嗅げるもので、何か、令嬢が直接体に身に着けていたものです。 — 更にもう一つ。こちらには一人森林官がいるはずで、老クラホシュティールとかクニブッシュとかそんな名前。奴をベッドから叩き出してください。 — 森を知っているでしょうから、...」。

「私が森林官を連れて来ましょう」とパーゲルは言った。

「待って。お若い方、パーゲルさんでしょう。貴方と丁度お話しをしたかった」。

大広間は空になっていた。二、三個の「乱痴気騒ぎ」のためにつり下がっていた電球がまだ輝いていた。空気は凍てついていた、一杯汚れているようであった。ある窓の前には半ば千切れたカーテンが掛かっている、夜盲の窓ガラスを見せていた。

太っちょはパーゲルの側に立っていて、彼の腕を軽く取って、彼を歩き来させていた。

一 「忌々しい寒さだ。随まで私は凍えている。小さな令嬢は寒さが応えることだろう。かれこれ令嬢が外に出てほぼ二時間になる。それでは、貴方がこの若いレディーについて承知していることをすべて話して頂きたい。貴方はこの荘園の役人でしょう。若い男なら若いレディーに関心がありましょう、それでは話してください」。

そして氷の目がパーゲルを貫き通すように見つめた。

しかしパーゲルは幾多のことを経験、目撃していて、彼はもはや若い、無邪気な男ではなく、すべての権威を笠に着た要求に屈することはなかった。彼は一人の警察官が不機嫌にこう叫ぶのを良く聞いていた。「またこの太った浮浪者が現れた」。彼は、この太った男は、確かにすべての市民に対して指示を出す、しかし一人の警察に対しても指示を出さないと観察していた。そして警察の人々は、この太っちょがそもそも存在しないかのような振りをして、決してこの男と話さないことも観察していた、...

それで彼はゆっくりと、この貫き通す目の視線を受けながら、言った、「まず私は、貴方がどこの官庁の委託で、ここで話されているのかお尋ねしたい」。

「バッジを見たいのですかな」と相手は叫んだ、「一つはお見せできようが、ただそれはもはや通用しないものだ。私は叩き出された役人だ。新聞ではこのように呼ばれている、『国粋的志操により懲戒処分された』」。

より速やかにヴォルフガングは言った、「貴方はここで、フォン・ブラックヴィッツ令嬢の捜査を強く迫った唯一の男性です。令嬢に何の関心があるのです」。

「何もない」とこの男は冷たく語った。彼はパーゲルのすぐ間近に屈み込んで来て、彼の上着を掴んで、素早く言った、「貴方は運がいい、お若い方。貴方は快適な顔をしている。私のようなブルドッグ面ではない。人々は常に貴方に信頼を置くことだろう。一 それを乱用しないことです。それで、私も貴方には信頼を置いています。貴方に少しばらすことにしよう。私は押収された武器保管所と関連するすべてのことに大きな関心があるのです」。

ヴォルフガングは宙を見つめた。彼は再び目を向けて、言った。「ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツは十五歳です。私は信じられない、令嬢が、...」。

刑事は彼を冷たく見つめた、「パーゲルさん」と彼は言った、「裏切りが起きたところでは、いつも女が関与しています。扇動者としてあるいは道具として。しばしば無知な道具としてです。いつもです 一 話してください」。

そこでパーゲルは知っていることを話した。

太っちょは彼の側を歩いた。彼は息を弾ませた、咳をした、そして軽蔑して壁を見つめた。彼は憤然とカーテンの紐を千切った。彼は唾を吐いた。彼は叫んだ、「愚かだ、惨めに愚かだ。反吐」。彼はより小声になった。最後に言った、「有り難う、パーゲルさん。これで少しばかりより明瞭になった」。

「令嬢が見つかるでしょうか」とパーゲルは叫んだ、「少尉が、...」。

「盲人か」と太っちょは言った、「盲人達の世界に盲人として生まれている。貴方は少尉のことを考えておられる。まあ、パーゲルさん」と彼は囁いた、「貴方はこの少尉殿に一時間したらお早うと言えることでしょう。 — 案ずるに、貴方にとって楽しくないことでしょう」。

広間は全く静かであった。明かりがわずかに微光を発していた。太った、白い顔がパーゲルを大きく見つめた。或るヴェール越しにそれは頷いているように、彼に頷きかけているように見えた。それは、すべての卑俗さ、すべての剥き出しの野蛮さ、人間の心のすべての罪を知っている人類のこの邪悪な顔であり、そして「然り」と言いながら更に生き続ける顔であった。彼はその顔を覗き見た、もう一度覗き見た。私もその途次だ、と彼は言った。そう彼は言ったのだろうか。

突然彼はまたガラスの前に風を聞いた。一頭の犬が悲しげに吠えた。もう一頭が答えた。太っちょは彼の肩を掴んだ、「行こう、お若い方。我々は時間がない」。

彼らは森の中へ入った。...

風が吹いた。目に見えない樹冠でざわめいた。木が上から音立てて折れて、叫ぶような声がして、短い雨が飛び散った。 — 黙って男達は進んだ。時々、小声で喘ぎながら、犬が手綱を頑固に引っ張った。犬に話しかけながら、穏やかに褒めながら、その主人も犬に付いて行った。すぐその後、パーゲルと刑事が従い、それから医師が、フォン・シュトゥットマン氏と一緒に、それから二人の警察が従った。...森林官はいなかった。森林官には連絡が付かなかった。森林官は留守ということであった。 — 「奴をとっちめてやる」と刑事は、パーゲルの耳には楽しくない調子で言った。

しかしそれからこの男は、この若者の側を全く静かに進んだ。一度彼は懐中電灯の明かりを照らしだして、立ち止まり、無造作に言った。「ここには踏み込まないでくれ」、そして他の者達を通り過ぎさせた。「ご覧なさい」と彼はパーゲルに言って、地面の何らかのものを指した。パーゲルには見分けられないものであった。「彼はすべてのことを考えてある。ここですでに令嬢は靴を履いた。外套とかそのようなものを令嬢に渡したことだろう」。

「誰がそのすべてを考えたのです」とパーゲルは疲れて尋ねた。彼はただそう尋ねた。彼には関心がなかった。彼は耐え難く疲れていて、彼の頭はますます痛みが増した。彼は自分が一体どうなったか、後で医師に尋ねようと思った。

「貴方には相変わらず分からないのか」と刑事は尋ねた。「貴方自身が私に語ってくれたのだぞ」。

「私には、少尉でないのであれば、本当に分かりません」とパーゲルはうんざりして言った。「貴方が仰有らなければ、私は今夜になっても分からないことでしょう」。

「血が繊細になりすぎたら」と太っちょは謎めいた説明をした、「すると力が失われる。するとまた下々を求める。 — しかしもっとこれから速く行こう。私の同僚達は十分先に進んでいよう。発見の榮譽を手にする事になろう、...」。

「何を見つけることになるか、もうご存じなのですか」とパーゲルは尋ねた。相変わらず、同じように疲れて、うんざりしていた。

「これから発見するであろうものは、承知している。しかしその次に発見するであろうもの、これは、いや、分からない。想像すらできない」。

さて彼らは再び黙って先に進んだ。ますます速く進んだ。先頭も更に速やかに進んだように見えた。彼らは二分遅れて着いた。他の者達はすでに皆、彼の周りにいた。

或るつぶやき声になっていた。上では風が吹いた。しかし黒い奥、ここは静かであった。一同の輪は、ここかしこで崩れた。一 医師の懐中電灯の白い照明が耐え難いほどにどぎつく、かつて一つの顔であったものに置かれていた。

「自分で墓を掘ったのだろうか、全くいかれている」。

「しかし令嬢はどこだ」。

つぶやき声。静寂。

いや、多分疑いがないだろう。これは少尉だ。パーゲルが何度か話しに聞いていた者、彼が一度会いたかった者だ。ここに彼は横たわっている。とても静かな、とてもいかがわしい形姿だ。一 率直に言って、かなり汚れた襤褸の山だ。これを相手に愛と憎しみが存在していたというのは信じられない。一種説明しがたい冷淡さの感情、ほとんど嫌悪感を抱いて、彼はこの何ものかを見下ろしていた。全く動じていなかった。一 汝はかくも偉大な事柄の価値があったのか、と彼は質問したかった。

医師は起き上がった。「疑いもなく自殺です」と彼は確言した。

「ノイローエの殿方で、この男を知っている方がいますか」と一人の警察が尋ねた。

一同を越えて、パーゲルとフォン・シュトゥットマンは見つめ合った。「いや、見たことはない」とシュトゥットマンは答えた。

「いえ」とパーゲルは言って、太っちょの刑事を見回した。しかし予期されていたように、どこにも見えなかった。

「ここはあの場所だろう」。

「そうです」とパーゲルは言った、「私は今日の午後、昨日の午後、調書のためにここに来なければならなかったのです。ここは秘密警察が武器保管所を押収した場所です」。

「それでは不明の死者だ」と奥で一人の声が結論づけて語った。

「しかし疑いもなく自殺です」と医師は急いで叫んだ、何かを正すかのようであった。

長い静寂が生じた。小さな懐中電灯の明かりの中の男達の顔はほとんど不機嫌であった。彼らは決断できず、辺りに立っていた。...

「その銃はどこだ」と最後に犬を連れている男が尋ねた。

小さな動きが生じた。

「いや、ここには見つからない。すでにすべて探したのだ。遠くに落ちているはずはないだろう」。

再び長い、うんざりした静寂となった。これは幽霊の集会のようだとパーゲルは考えた。耐え難く苦しんでいて、犬に近付いて、その健気な頭を撫でようと試みた。誰ももはや令嬢のことを考えていないのか。

早速一人が言った、「それで令嬢はどこにいるのだ」。

再び静寂となった。しかしより活気があり、より思案げであった。

それから一人の警察が言った、「ひょっとしたら、一 全く簡単なことかもしれない。彼がまずピストル自殺をした。令嬢はその銃を取って、自分もそうしようとした。しかしそれができずに、銃を持って逃げたのかもしれない、...」。

再び沈思。

その後、別の者が言った、「そうだったかもしれない。おまえの言う通り」。

「それじゃとにかく素早く更に探そう」。

「一晩中続くかもしれないな。　－　ノイローエは面白くない」。

「行こう、ぐずぐずしておれん」。

背後から一本の手がパーゲルの肩に置かれて、或る声がパーゲルの耳に囁いた。「頭を向けなくてくれ。私はいなかったのだ。医師に、この死者は死んでからどれほど経つか尋ねてくれ」。

「ちょっと待ってください」とパーゲルは出発の仕草の最中に呼びかけた。彼の声の調子は強く、誰もがすぐに立ち止まった。「ドクトル殿、この男は死んでからどれほどになるか教えてください」。

医師は、ごつい、ずんぐりした田舎医者で、顎の周りに珍しいまばらな黒い髭を有する男であったが、躊躇いながら死者を見つめ、それからヴォルフガング・パーゲルの顔を見つめた。彼の表情は少しばかり明るくなって、ゆっくりと言った。「私はこの点では、警察の同僚医師殿のような経験を持ちません。何故そのような質問をなさるのか尋ねてよろしいですか」。

「フォン・ブラックヴィッツ令嬢はまだ十二時半にはベッドに眠っていましたので」。

医師は時計を見た、「もうすぐ三時半です」と彼は素早く言った、「十二時半にはこの男は死んで数時間経っていたでしょう」。

「それではフォン・ブラックヴィッツ令嬢を部屋から連れ出したのは、別の男に違いない」とパーゲルは結んだ。

この間ずっと彼の肩に重荷のように置かれていた手、重たい手は除かれた。背中での微かな物音で、この太っちょは遠ざかったと分かった。

「それじゃ、アルベルト、おまえの説明は無駄だ」と警察の一人が大きな声で苛立たしく言った。

「どうして、何故駄目だ」と相手は弁明した、「令嬢は一人でこちらへ走って来て、この死人を見つけたのかもしれない。拳銃を取り上げて、更に駆けて行き、...」。

「阿呆な」と犬を連れた男が厳しく言った、「我々がずっと目にしているのは二つの痕跡だ、男と女の。　－　おまえはめくらか。　－　これはひどい件だ、我らの権限を越える、...我らは殺人課に知らせなければならぬ、...」。

「ここのこれは自殺です」と医師は異議を述べた。

「我々はただ令嬢を探す必要があります」とパーゲルは警告した、「できるだけ早く」。

「お若い方」と犬を連れた男が言った、「貴方は何かご存じであろう、　－　あるいは何か疑念を抱いておられよう、たった今医師にお尋ねになったとき。貴方の思っていることを教えて頂きたい。闇雲に走り回りたくないものだ、...」。

皆の顔がパーゲルを見つめた。彼は下の死者を眺めた。彼は令嬢が彼に接吻したとき、公園でのヴィオレットとのかの会話を思い出した。後に彼女は彼に迫った。彼は今肩に固い手を、耳許に一人の声を感じたところであったろう。　－　しかし我々が決断を下さなければならないとき、我々は一人っきりであり、我々はそうしなければならない。

私は何も知らないのだと彼の中で絶望的な声がした。彼はその言葉に耳を傾けた。それから彼は粗い声を再び耳にした、邪悪な悲しげな響きで、彼女がこう言っていた。血が騒

ぐのです、...血が騒ぐのです、...

彼は死者の許から見上げて、男達の顔を覗いた。彼は言った、「何も知りません、...しかし何か推し当てているのかもしれませんが、...。今朝フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長殿は従者を解雇しました。激しい諍いの後です。この家の小間使いが私に今晚話しました、令嬢が書かれた一通の手紙に関してであったそうです、...。令嬢はとても若くて、この従者は、私が承知しているすべての面に照らして見て、とても劣等な人間です。それで考えて見ますと、...」。

彼は問うように人々の顔を覗いた。

「それじゃ、何か恐喝だな、 — これはちょっと別口の事件だ」と警察が叫んだ、「ただ武器保管所、裏切り、秘密裁判といった呪わしい話しではない」。

彼の同僚は大きな咳をした。ほとんど脅すようであった。

「犬を放て。犬にシャツの臭いを嗅がせろ。皆立ち止まれ。ミンカと一緒にこの盆地の周囲を進め。ここらはすべて踏み碎かれている」。

五分もしないうちに、犬は、綱を引っ張りながら、小道を駆け上がった。男達は急いで従った。盆地を出て、上は区画線に沿って明確であった。次第にノイローエから遠ざかっていた、...

突然太っちょがまたパーゲルの横に来た。「貴方の話しは上出来だった」と彼は認めて言った、「それではようやく見当が付いたかな」。

「まことに本当ですか」とパーゲルはびっくりして叫び、立ち止まった、「そうじゃないでしょう」。

「先へ行こう、お若い方」と太っちょは警告した、「急ぐのだ、手遅れだと確信しているけれどもな。 — 勿論本当だ、 — 他に誰がしよう」。

「信じられません、あの灰色の、魚の目のような奴が、...」。

「私は昨日オスターデの通りで見かけたに違いない」と太っちょは言った、「そんな予感がする顔だ。...しかし今日では、過去や未来の犯罪を匂わせる顔がごまんと見られる。

— 私が見つけ出したら、百年目だ」。

「令嬢が見つかりさえすればいいのだが」。

「待て、ひょっとしたらここで貴方の願いが叶うかもしれないぞ、...」。

一つの滞留地があった。区画線から外れて、犬は或る密な樅の茂みへ引っ張って行った。男達は苦勞して、枝と戦いながら、明かりを照らしつつ、進んで行った。誰も一言も話さなかった。とても静かで、犬の甲高い性急な喘ぎ声が、蒸気機関の連動のように聞こえた。

「痕跡は真新しい」と太っちょはパーゲルの耳許に囁いて、より素早く枝を分けて行った。

しかし彼らが踏み込んだ小さな間伐地は、一部屋の大きさほどのものであったが、空であった。小さなうなり声を上げて犬は、その間伐地にあったものに突進した。 — 犬の引き手がそれに手を伸ばした。「女性の靴だ」と彼は叫んだ。

「もう一つある」と太った刑事が叫んだ、「ここで奴は、...」。

彼は打ち切った、「出発だ、諸君」と彼は叫んだ、「奴はすぐ近くにいる。素早くは勧めないはずだ。靴下の娘を連れている。犬を褒めてやれ、さあ、進むぞ」。

そして彼らは駆けた。

荒々しい狼が縦横に進んだ。樅と柏槇を抜けて、犬はより大きな声で吠え、再三男達は暗闇の中、幹にぶつかった。叫び声が大きくなった。「女の声がする」、一 「静かにしろ」、一 「女の叫び声ではなかったか」。

森はより明るくなった。更に素早く彼らは前進した。そして突然、彼らの四、五十メートル先で、枝の間から明るくなって、白い、輝くような明かりが見えた。...

一瞬彼らは息を吞んで立ち止まった。訳が分からなかった、...

「車だ。奴は車を持っている」と突然誰かが叫んだ。

彼らは突進した。木の幹の間をエンジン音が音高く響いた。それから轟然と呻り、ヘッドライトが揺れ、弱まって行った。彼らは闇の中を走った。...

区画線に彼らは立っていた。遠方でまだその明かりが見え、その明かりは更に進んで行った。一人の警察が、手にピストルを持って立っていたが、それをまた下ろした。タイヤに当てることはできない。

ノイローエへ急ぎ戻ることが素早く決められた。電話をかけよう、ブラックヴィッツの車で逃げた車の跡を追うことにしよう、...

皆が出発した。フォン・シュトゥットマンは苛立たしげに叫んだ、「パーゲル、来ないのか」。

パーゲルは言った、「ちょっと待ってください。一 すぐ後から行きます」。

太っちょが彼の腕を掴まえていた、「聞きなさい、お若い方」と彼は囁いた、「私はおぬしらとは行かない。私はオスターデへ戻ることにする。連中は能天気だ。敵の痕跡が掴めたからな。それに秘密裁判処刑とは思えないからだ。この秘密裁判の処刑人追跡を一連中は好まないのだが、職責上しなければならない。一 しかし、お若い方、貴方はこの荘園で唯一まともな顔立ちをしている。一 自他共に徒な希望を抱かないことだ。とりわけ母親はな。母親にゆっくりと教えてやれ、...」。

「何です、何を教えるのです」。

「樅の茂みに侵入したとき、私はこう考えたものだ。奴はやったな、と。しかしただ靴だけが見つかったので、...」。

「我々が邪魔したのでしょうか」。

「ひょっとしたらな。しかし奴は自分の時間を分単位で計算していたのだ。パーゲル、言うておくが、彼奴のような人間を、貴方は貴方の最悪な夢の中ですら見ることはないであろう。奴がまだやる可能性はある。しかしそうはしないだろう。はるかにもっとひどいことが、...」。

パーゲルは立ち止まっていた。彼は何も尋ねなかった。

「そのような奴等がいる」と太っちょは言った、「大抵、健全な時代には、他の者達が奴等をのさばらせない。しかし病気の腐った時代になると、どぎつくこのような作物がはびこる。パーゲル、これは人間であるとか、人間と同じように感じ、考えると思わないことだ。一 これは怪物だ。殺害する狼だ、むさぼり食うためではなく、殺すために殺すのだ」。

「しかし貴方は仰有ったでしょう、そうはしないだろう、と」。

「いいか、隷属するとはどういうことか知っているか。そもそも隷属することを想像できるか。このような怪物の息遣いとか視線に従属するのだ。この者の願望や意志の他には

何も行えないのだ。これが貴方の令嬢だ。奴はずらかったから、自分のできる最も劣等なことを行うことだろう。奴は令嬢を再三殺したも同然にすることだろう。それからまた少しばかり生き返らせる。奴が人生と呼ぶもの、つまり命の火花が死の不安を感じ取るだけのものなのだ、...」。

彼らは黙した。風が吹いて行った。全く暗くなった、...

「パーゲル」と太っちょは突然言った、「私はこれから去る。我々はもはや会うことはないだろう。しかし、人がよく言うように、嬉しかったぞ、パーゲル」と彼は今一度しっかりと言った。「この母親は娘に二度と会えないように神に祈るしかない。もはや娘とはいえないだろう、...」。

彼は無言で立ち去った。ヴォルフガング・パーゲルは一人、暗い、風の吹く森の中に立っていた。

第十四章 生活は更に続く

128 君主としてのパーゲル

十月となった。ノイローエではますます雨模様となり、ますます風が強く、常により寒くなっていた。ヴォルフガング・パーゲルはジャガイモ掘りに必要な人員確保にますます困難を感じるようになった。九月にはまだ三台の干し草馬車を労働者確保のために郡中心都市に迎えに行かせ、一杯乗せて圃場区にガタガタ向かったのであるが、十月には結局ただわずか一台となって、それには二、三人の女性が、袋や毛のショールにくるまって、嫌々座っていたのである。

彼女達は圃場区の濡れた雑草の中、罵りながら、嘆きながら苦勞していた。この圃場区はますます大きく育つように見えた。パーゲルは二回その報酬を上げなければならなかった。報酬を現物で、ジャガイモで支払わなかったら、一 誰ももはや来なかったであろう。これは腹を満たし、愛しいパンの代わりにすらなるもので、生活必需品であった。しかしドルはこの十月の日々、242,000,000マルクから、73,000,000,000マルクに上がった。ドイツ全土を通じて飢えが忍び込み、流行風邪がそれに続いた。前代未聞の絶望に人々は襲われた。一 一ポンドごとのジャガイモが、人々と死神との間の垣根となった。

今やヴォルフガング・パーゲルは騎士領ノイローエの荘園と森との単独支配者であった。彼の仕事は沢山になった。彼はもはやジャガイモ畑に立って、掘り出された籠に対して一枚の金属の引換券を渡す暇はなくなった。来年用のライ麦の種が蒔かれ、耕地を耕す必要があった。森では薪伐採が始まった。老クニーブッシュを毎日元気づけなければ、この老人は寝たがっていて、ゆっくりと次第に衰弱死したことだろう。しかしヴォルフガングが自転車に乗って、ジャガイモ圃場区に到着するたびに、老コヴァレフスキーがますます空ろな、ますます胡乱な目つきで彼を迎えて、嘆いた、「我らの手に負えません、我らの手に負えません、若君。このやり方では一月になっても、雪と寒さの中、掘っていることでしょう」。

するとヴォルフガングは笑いながら言った、「きっとやれるよ、コヴァレフスキー。やり遂げなければならないから。つまり町ではジャガイモは猛烈に必要とされているのだから」。

そして自分の中で考えた。荘園はジャガイモ代の金を猛烈に必要としているのだから。

「でももっと人員が必要でしょう」とコヴァレフスキーは嘆いた。

「どこから連れて来たらいいか」とパーゲルは少しばかり苛立って尋ねた、「また監獄分遣隊に来て貰うか」。

「いや、御免です」と老コヴァレフスキーはびっくりして叫び声を上げた。余りにびっくりしているとパーゲルは思った。

彼は掘っている人々を憂わしげに見て、不機嫌に言った、「これは皆、単に都会人にすぎない。彼らでは上手く行かない。余りに不慣れな仕事だ。アルトローエの人々を得られたら良からうに」。

「こいつらは駄目です」とコヴァレフスキーは立腹して言った、「彼らは我らの穴蔵から保存のジャガイモを夜間盗みます」。

「勿論彼らはそうしよう」とパーゲルは嘆息した、「私は毎日穴蔵に穴を見つけて、それを閉じさせている。ー いつも夜間には外出して、一人捕まえてみようかと計画を立ててるのだ、コヴァレフスキー」とヴォルフは告白した、「しかし夕食を食べながらいつも眠り込んでしまう」。

「若君の仕事は多すぎます」とコヴァレフスキーは同意した、「荘園全体と森全部、それに筆記仕事一切、これを一人でこなした者はいません。救援が必要でしょう」。

「いや、救援か」と拒絶して、パーゲルは答えた、「こちらはどんな具合になるか、誰も分からんだろう」。

両人は一瞬黙った。それからコヴァレフスキーが頑固に言った、「しかしアルトローエ人のジャガイモ泥棒には腹が立つ。ー これは警察の仕事でしょう。警察に若君は電話されたらいい」。

「警察か」とパーゲルは答えた、「いや、むしろ結構。警察には我々はもはや好かれていない、コヴァレフスキー。これまでの半年間に迷惑をかけてしまった」。

そこで両人は黙した。鍬が入れられるたびに、暗い中から、黄色く褐色のジャガイモの恵みが陽光に光った。パーゲルは去っても良かったであろう。作業の進捗がいかほどか納得できた。しかし彼はまだ老コヴァレフスキーに言うべきことがあった。若いパーゲルはもはや気が弱くはなく、何か相手に不快なことでも、それを言うことに臆しなかった。

言う必要があるときには、彼はそれを言った。

「聞いてくれ、コヴァレフスキー」と彼は言った、「私は今朝村でゾフィーを見たぞ。ではまだ彼女は家にいるのだな」。

この老公ははなはだ当惑した。彼はどもった、「母親の面倒を見なければならないのです。妻が病気です」。

「先回、貴方は言ったぞ、娘は十月一日勤めに行きますと。今回は母親の介護の必要を言っている。貴方は私に本当のことを話していないぞ、コヴァレフスキー。それは良くない。娘がここ我らの荘園住宅に住んでいるのであれば、娘も働く必要があろう」。

コヴァレフスキーはとても青ざめた、「私は娘に意見できないのです、若君」と彼は詫びた、「私が何か言っても、娘は聞きません」。

「コヴァレフスキー、老公よ」とパーゲルは叫んだ、「そんなだらしないうことを言うな。我々が猫の手も借りたいのは、自分でも分かっている。代官の娘が怠けていては、労務者の娘どもに示しがつかんことはよく分かつた」。

「よく言って聞かせることにしましょう、若君」とコヴァレフスキーは苦しげに言った。

「そうだ、そうしてくれ。そして娘に言うのだ、さもないと私が貴方の家に一家族押し込むぞ、と。それでおぬしらは居間と寝室、キッチンだけになろう。では、さようなら、コヴァレフスキー、胃がぐうと言っている」。

若いパーゲルは自転車に乗って、昼食のために家に帰った。ゾフィー・コヴァレフスキーの件をようやくきちんとしたものにできて満足していた。かくかくしかじか、と。彼は彼女のことを少しばかり迂闊に忘れていた。最近少しばかり用件が多すぎた。しかしいつも、この娘を村でまた見かけるたびに、このような怠惰な例を甘受していることはできな

いと思っていた。この時代郎党を仕事に縛り付けることは難儀であった。人々は金では仕事の報酬とは思わないと思っていた。しかし人々はこの屑紙幣を得るばかりでなく、主に現物支給を得ているのである。村の誰かが野の百合のように暮らす必要はない。一野の百合の面倒は我らの主なる神がみる。逆に、全く逆に、我が尊敬するゾフィーよ、今は天にまします神を信頼する時代ではない。今はくたばるまで働く時代なのである。

ヴォルフガング・パーゲルは、自分は心底ゾフィーに対し怒っていると否認できなかった。以前彼は彼女に好感を抱いていた。漠然とザリガニ池での或る情景を思い出していた、

一彼女は戦闘的クニーブッシュに対し殿方の衣服の擁護を勇敢にしていた。しかし自分の好感は間違いであったか、この娘が変わってしまったか、そのどちらかであった。

彼女には、村をぶらつくという呪わしい投げやりの態度が見られた。彼女は働いている人々の側に立って、悠然と見守っていた。いや、彼女はあるとき厚かましく、彼が自転車で側を走って行くと、呼びかけたのであった、「いつもご苦勞、パーゲルさん」。

限度を超えると我慢ならない。彼女が明日ジャガイモ掘りをしないのであれば、コヴァレフスキーには明後日黒いミンナを叫び声の喧嘩好きな、騒がしいこぶどもと一緒に屋階にぶち込むぞ。

彼は農園中庭に着いた。彼は今一度素早く家畜小屋を通って行った。馬車引き長が、彼に声をかけた。ライ麦のすじ播きのためには濡れすぎている、犁先が傷むと。そのようなことはパーゲルにとって苦手であった。というのは彼は何も耕作、家畜飼育のことが分からなかったからである。しかし彼は命令を下し、決定しなければならない。しかし一般的に中年の人々は好んで彼に手伝った。彼がベテランの検査官として登場していたら、彼に対し楽しく悪戯を仕掛けていたであろう。しかし彼は自分の知らないことを知っている振りではなかったので、彼らは進んで助けてくれた。この年を経た人々がいかほど経験と観察に秀でているか、分からないほどである。パーゲルはこの人々の言葉に好んで耳を傾けた。しかし厚い教科書には眠ってしまった。

それで今回もただこう尋ねただけであった。「それでは何をやるのだ」。馬車引き長は言った、より簡単な外部圃場区でなら馬で耕せましょう。「分かった」とパーゲルは言った、「それでは馬で耕すことにしよう」。

そして昼食に向かった。

昼食を彼は事務所で摂った。一事務所は彼にとってそもそも、居間、食堂、作業室、喫煙所、そして書斎であり、ついでにそこで相変わらず眠った。しかしフォン・シュトゥットマン氏はもはやノイローエにはいなかったが、彼は食事を一人では摂らなかった。食卓の連れの女性が一人いた、この清潔に白くテーブルクロスをかけられた書斎机の向かい側の相手、アマンダ・ボックスであった。

いや、すでにアマンダ・ボックスは待機していた。彼女は満足げに言った、「貴方が時間通りなのは、有り難いわ、パーゲルさん。急いで乾いた服に着替えをなさったらいい。私はすぐ食事を用意します」。

「結構」とパーゲルは言って、寝室へ行き、体を洗い、着替えた。

村の馴染みの無駄口が、パーゲル・ボックスのこの食事仲間をベッド仲間まで捏造した、殊にボックス嬢の周知の前歴に照らしてそうしたということは、はなはだ考えられることである。いやそれどころか、確実にそうしたろう。しかし実際は、すべて全く自ずと、

極めて自然に生じたことであった。かの十月一日、囚人達の逮捕の後、宮殿から小間使い達が、解雇通知も、給与も、証明書類も持たずに、身も世もなく逃げたとき、それは逃亡囚人置の刑事手続きを鶏のように恐れてであって、村人達の厳しい嘲笑は言うまでもないことであったが、一 そのとき宮殿に唯一罪のない女性として残ったのは、晩禱で公に叱責されたアマンダ・バックス嬢だけであった。勿論老従者エリアスと一緒にあった。しかしエリアスはそれから十月二日、出て行った。多分、領主夫妻の許に報告のためであったろう。というのは、渡すべき請負料はなかったからである。そして戻って来なかった。

十月初旬、ヴォルフガング・パーゲルは千もの事柄で、頭が一杯過ぎて、古い木組み建築の納屋、宮殿に関し格別に手回し良く配慮することができなかった。しかしある日、このアマンダと道で出会って、彼女が彼に面と向かって、彼の頭に質問を浴びせたのである。彼は一体どう考え、どう想像しているのか、と。自分はこの大きな古い箱の中に唯一の女性として、必ずしも怖がって住んでいるのじゃないけれども、でもやはり快適ではないのよ。老領主夫妻が戻られる前に、上では何か手入れをしなければならないのは確実でしょう。醜聞騒ぎで散らかっているのよ。広間では二枚のガラスが割れています。今、雨が侵入してきていて、数日前から平土間にはぬかるみがあります。

パーゲルは、ヘトヘトで、少しばかり打ちのめされていて、三日間で十時間も眠っていませんでしたが、赤い頬の、粗野なアマンダを思案して見つめて、豊かな無精髭の顎をこすって尋ねた。「それでは、越して来る気はないのか、アマンダ」。

「誰が私の家禽の面倒を見るのよ」と彼女はそれにまことに立腹して尋ねた、「今は丁度冬に向かっていて、家鴨や鶯鳥は太って行くのよ。どんなに餌をやっても足りない。私が越すなんて、さっぱり分からない」。

「別荘では揉み手で利発な小間使いを求めている」とパーゲルは提案した、「聞いたろう、ロッテも今では去っているのだ。別荘には来たくないのか」。

「駄目」とアマンダ・バックスは極めて明瞭に答えた、「別荘は希望しません。私の家禽の阿呆さには慣れているけど、周りの人間の阿呆さには慣れません。これには怒り心頭。その後何もできなくなるわ」。

「結構、結構」とパーゲルは急いで言った、「私は今晚知らせることにしよう」。そして彼は去った。

彼は、恵み深い奥方とこの自分の任務ではない件について話し合う計画であった。しかし奥方はまた車で出掛けてしまった。いつ夫人が戻って来るか、確かでなかった。騎兵隊長はすべての再照合から退いていた。隊長は相変わらず動揺していて、ベッドに臥せていた。医師から遣わされた看護人が彼の側に座っていて、しばしば興奮するこの男の世話を不承不承していた。そして他にこの大きな、人口の多いノイローエに、彼が助言を求めることのできる人は誰もいなかった。

それでしばらく熟考した後、若いパーゲルは電話で、ベルリンのホテル・カイザーホーフに繋いで貰い、枢密顧問官フォン・テッシュナー氏を呼び出すよう頼んだ。

「残念ながら、領主ご夫妻は旅立たれています」。

「旅立ったと」。それは一つの衝撃であった。「いつです」。

「十月三日です」。

それでは老エリアスの到着後すぐだ。彼の知らせの後。

「アドレスを教えてくださいませんか」。

「残念ですが、一 アドレスを教えることは、明白に私どもには禁じられております」。

「こちらは、ノイローエの荘園管理部です。一 枢密顧問官ご本人の荘園管理部です」とパーゲルは極めて自制して言った、「私はある重要な決定のために是非とも彼のアドレスを必要としています。この拒絶のせいで発生した損害に関してはいかなるものであれ、貴方らに責任を負って頂きますよ」。

「ちょっとお待ちください。問い合わせさせていただきます。そのまま繋いでいてください」。

しばらくのやり取りの後、結局ヴォルフガングはアドレスを得た。彼はそれを必要としていなかった。しかし娘が絶望しており、孫娘が行方不明になったとき、この人達がどこへ行ったか関心があった。

アドレスは以下であった、「ニース、フランス、コート・ダジュール[紺碧海岸]、ホテル・インペリアル」。

「厚く感謝申し上げます」とヴォルフガングは言って、受話器を置いた。

しばらく彼は静かに座っていた。注意深い顔をしていた。彼の目は事務所の中の何も見ていなかった。何か別のものを見ていた。彼は鋭い鳥の顔つきの急ぐ眼差しの小さな干涸らびた夫人を思い浮かべた。夫人は召使い達を仕事から仕事へ追い立てていて、聾の胡桃のように空ろであった。しかし夫人は他人の生活で、どの人の生活であれ全く構わずにすべて人の生活で、自らを満たしていた。夫人は宗教を一つの仕事としていた。夫人はそれを利用して、他人の中へ忍び込んだ。夫人は蛆のようであった。夫人は周りの人間の朽ちた生命の残滓で生きていた。

彼は辛辣なひげもじゃ男を思い浮かべた。陽気さを偽って、ひどい汗かきで、ローデックロスの服を着ている。向こうの下の方、フランスのコート・ダジュール[紺碧海岸]では、今ローデックロスには着ていないだろう。しかしだからと言って何も変わらない。彼は座って計算する、策謀的契約を作成し、逆鉤の付いた事務的手紙を書く。一 彼の見るものすべてが、商売、金、儲けに変わる。勿論、彼は森を愛していると言われている。一 実際そうだ。しかし彼が森を愛するのは、やはりまた彼の流儀であって、彼は何か生命あるもの、生長するもの、永遠のものを愛しているのではない、一 彼は儲け心で愛している。彼はかくかくしかじかの量[フェストメートル]の伐採可能な木材を愛しているのである。唐檜の茂みは彼にとって緑黄金色の秘密ではない。それは彼にとって間伐したらかくかくしかじかの百もの豆の支柱が切り出せるという意味である。

彼は死んでいる、夫人も死んでいる。一 しかし人々は、二人は少なくとも娘を愛している、孫娘を愛していると思っていなかっただろうか。この愛の正体が今分かる、一

恥ずかしい話しに巻き込まれることを恐れて、二人は逃げた、助けもせず、善良でもなく、恵みもなく、ヨーロッパの別の片隅に。ちなみにこれはかのフランスだ。フランスは、ルール地方を相変わらず占領して放さず、ドイツ政府と交渉することを敵対的に拒み続けている国だ。

これが二人の老いた、言うところの隠居している二人の正体だ。しかしこの夫人は自らの空虚さを続けて行くことだろう、夫は金を手放さない、金の使い方を知らないけれども、...

若いパーゲルは、相変わらず電話の許に座っていながら、このようなことを考えていた

が、同時に何か珍しいことを行った。彼は札入れから一枚の紙幣を取り出した。彼はマッチを擦って、それで紙幣を燃やした。これをなしたのは実際若いパーゲルであった。彼はまだ若造なのであった。それは象徴的な行動であった。いや、天よ、私を金に執着させてくれるな、金から離れられなくなるほどに。

ちなみにそれは、自分に課した一つの欠乏であった。土曜日の晩のことで、報酬支払いで荘園金庫は全く空になっていて、それは彼の最後の紙幣であった。彼はそれで煙草を買うつもりであった。それで今や月曜日まで吸えない。その通り、彼はまだまことに若いのである。最近、まことに様々な体験をしたけれども。しかしまた強い。彼は口笛を吹いた。自分はまだわずかに三、四本の煙草を残していると思い出した。

このように口笛を吹きながら、一塊の女性陣を寄せ集め、車大工を呼んだ。もう土曜日の晩には宮殿の応急処置が済み、窓は新しいガラスが入り、ドアは施錠された。「テッシュヨー関係は終わり。アマンダ、貴女は手荷物をまとめて、フォン・シュトゥットマン氏の部屋に移りなさい。つまり躊躇しないなら」。

「世間の人々のお喋りを気にするということ、パーゲルさん。私は失うものはないの。勝手に話せばいいと私は言っています」。

「その通りだ。ついでに私の食事と洗濯のことも気にかけてくれるなら、一 最近若干ひどいことになっている」。

「黒いミンナがいるでしょう、...」。

「黒いミンナは別荘のキッチンを手伝わなければならない。それに彼女は、すべての女性の中で、騎兵隊長を恐れない唯一の女性なのだ。看護人も時に息抜きが必要だろう。その時、彼女が代わる」。

「それはいい」とアマンダは深く満足して言った、「ミンナはそれに最適。ミンナが男達に対して不安を抱くなんて思うの、パーゲルさん。ミンナは男達に対して不用心すぎるのよ、不用心の結果の泣き声は、救貧院を通り過ぎるとき、毎日聞こえるわよ、パーゲルさん」。

「全くひどい喋り方をするな、アマンダ」とパーゲルは半ば笑いながら言った、「重症の騎兵隊長殿と黒いミンナだ、一 いや、我々両人が長くうまく行くか分からんな」。

「貴方は勝手に話せばいいし、私も勝手に話すわ」とアマンダはとても満足して答えた、「全く簡単なことよ。二人とも上手く行くわよ、パーゲルさん」。

その夫人、太って脂肪の塊の夫人は、夫人の生涯の仕事は、すべて食事だけであったが、すでに食卓に着いていて、代官コヴァレフスキーが疲れて、雨に濡れて帰って来たとき、スープ鉢からスプーンで掬っていた。コヴァレフスキーはスープ鉢を一瞥した。彼は額に皺を寄せた。しかし自制した。彼は一個のパンを端切れに切って、それにラードを塗り、食べ始めた。しかしスープに手を着けなかった。

咀嚼している夫人は、その小さな両目から意地悪な視線を彼に向けた。彼女も何か言おうとしたが、しかし食欲が強すぎた。彼女の場合、話せない理由は貪欲な食い気であった。

かくて両老夫妻は黙って食卓に着いていた。兩人とも食べていた。夫はパンを、妻は鶏スープを食していた。

貪欲極まる夫人の空腹が収まったとき、ようやく夫人は口を開けた。夫人は叱った。「あんたは馬鹿よ。こんな立派な鶏スープというのに。あんたが一口も食べなかったからといって、何も変わらないのに」。夫人はスープをかき混ぜて、実際更に腿肉をすくい上げた。この腿肉を見て、夫への怒りをほとんど忘れた。彼女は称えた、「これはまた肥えた雌鶏だわ。ハーゼ家の餌は上等よ。五ポンド以上あったでしょう。何という脂身、立派で、純粹で、黄色い脂身、これはスープにうってつけよ」。彼女は舌なめずりした。

「ゾフィーは上にいるのか」とこの老父は元氣なく尋ねた。

咀嚼しながら言った、「他にどこに行くのさ。二人はまだ眠っているよ」。夫人はゆっくり食べ続けた、本来もはや入らなかったのであるが。過度に満腹になっても、すぐにもう次の食事時間への期待を夢中に述べた、「今夜はのろじかの腿が手に入る予定よ。のろじかの腿は大好き。上手に処置されていたらね。そして凍てつく頃になったら、あの人は太った豚も持って来るそうよ」。

「私は豚はいらない、その豚は欲しくない」と老コヴァレフスキーは絶望し、煩悶して叫んだ。「我々はずっと正直に暮らして来た。－それがどうだ。泥棒達とその一味だ。まともに誰の顔も見られない」。

「そんなに興奮することないよ」と夫人は無造作に言った、「あの人はあんたのことが気に入らないのは承知でしょう。泥棒達だと。泥棒は、捕まったら、そう言われるのよ。あの人は必ず賢いから、捕まらない。あの人はあんたより十倍ずる賢いよ、百倍よ」。

「いよいよ家から出て行って貰おう、...」とコヴァレフスキーはつぶやいた。

「あんたの言いそうなことだよ」と永続食欲のこの夫人は憤然と叫んだ、「ようやくうちの面倒を見てくれる人が一人現れたというのに。家から出て行けなんて。言っておくけど、あんたがあの人と喧嘩を始めたら、私はね、...」。彼女はスプーンを振った、彼をどう脅そうとしていたのか忘れていた。彼女の小さな、脂に埋没しつつある目は、夫から逸れて、部屋の中をさまよった、...「私は何でも食べ尽くしてしまうよ、あんたは餓死だよ」と彼女は自分で思い付く最悪の脅しを叫び立てた。

夫は一瞬彼女を悲しげに見つめた。この母親にして、この娘だ、と彼は考えた。利己的で、貪欲、貪欲だ。彼は向き直って、居間から階段へ行った。

「上のあの人のところへ行くの。喧嘩しなさんなよ」と彼女は夫に呼びかけた。

コヴァレフスキーはすでに階段を上がっていた。一瞬息を弾ませて、彼は娘の部屋のドアの前で立ち止まった。ほとんどまた勇気を失っていた。それからノックした。

「誰かしら」としばらくしてゾフィーの声が苛立って尋ねた。

「私だ、－父」と彼は小声で答えた。

中でひそひそ話しが交わされた。しかし錠の鍵が回された。ゾフィーがドアのところから立っていた。彼女は怒って父親の顔を見つめ、叱った。「何の用なの。ハンスは眠りが必要と分かっているでしょう。下であんな物音を立てられたら、眠れやしない。その上また上がって来て。どうしたのよ」。

「義父殿、お入りください」と親しげな、偽りの声の中で叫んだ。「とても嬉しい。ゾフィー、うるさく喋るな、畏れ多い訪問だ。義父殿であらせられる。お掛けなせえ、御老

体。椅子を差し上げろ、ゾフィー。お掛けなさるように。申し訳ありません、義父殿、まだ二人ともベッドにいまして。畏れ多いご訪問を知っていましたら、燕尾服を着用してお待ちしたでしょうに、...」。

彼は不安一杯の老人をにやりと笑って見つめた、「これは、つまり、正確に申せば、私の燕尾服ではないのですが。しかし私にぴったりです。騎兵隊長殿の燕尾服で、フォン・ブラックヴィッツ殿は、とても親切で、私を助けてくださっています、私のクロークは若干空いています」。

代官コヴァレフスキーは生涯これほど入念に嘲笑され叱責されたことはなかった。しかし仮にひょっとしてこれが辛く思えたにしても、彼は何も顔に出さなかった。彼は椅子の背後に立っていて、ハンス・リープシュナーのベッドの方は見ず、床を見ていて、小声で言った。「あのな、ゾフィー、...」。

「何よ、父さん。話しなさいよ。またちょっとしたいちゃもん付けがあったのでしょうか。何かがなくなったと言って。村長ハーゼが二、三羽の雌鶏のことでうるさく言って、それで父さんは眠れなかったと言うの。村長は雌鶏なんかで済まないのだよ」。

「ベルトだな」とリープシュナーはにやりと笑った、「立派なベルトだ。底革として申し分ない。引き合いが多い、一 上等の値段だ、一 何か入用ですか、義父殿。喜んで分配しています、売り上げの十パーセント。一 私は親戚には気前良くします、そのことか、ゾフィーちゃん」。

再び老人は無言で自分への叱責と嘲笑をやり過ごしていた。さて、静まったので、彼は今一度始めた、「ゾフィー、パーゲルさんがまた尋ねたのだ。何故おまえは働かないのか、と、...」。

「生意気な、...」。

「質問させていなさい。沢山尋ねる人には、沢山返事すればいい。私のところに来たら、あの人にちゃんと答えます」。

「しかし彼はこう言っている、おまえが明日ジャガイモ掘りに来なければ、夕方には黒いミンナをこちらの屋階に入れる、と」。

「生意気な、...」。

「そうね、ハンス、あんたの出番よ。あの生意気な口に一発お見舞いして、六週間開けられなくしたらいい。あの猿、何て自惚れているの」。

「その通りだ、ゾフィー。しかし私の出番ではない。いや、結構。私の役回りではない、それはお門違い。しかしボイマーには向いているぞ。奴なら気持ち良くその若造を片付けられよう。もうその若造は、呼吸困難になって、いつが虫の息やら分からなくなる、...」。

黙って老人は聞いていた。今や頭を上げて、小声で言った、「パーゲルさんに何か起きたら、私はおぬしらを告げに行くぞ、...」。

「パーゲルが父さんと何の関係があるのよ」とゾフィーは始めた、「父さんはいかれているわよ、...」。

しかしコヴァレフスキーは言った、「私は黙ってきた。おまえが一人娘だし、おぬしらは約束して来たからな、もう間もなく出発すると。ほとんど心臓が潰れそうだ、おまえがここでこんな、...」。

「最後までお喋りなさい、御老体」とベッドの男が叫んだ、「親戚同士だ、遠慮するこ

とはない。囚人と一緒に、でしょう」。

「そうだ、囚人と一緒にだ」と老人は怒って繰り返した、「しかし監獄の囚人が皆、貴方のようにそれほど下種だとは思っていない。その上盗みだ。いつもただ盗んで。...人間がそんなことをするか、ただ他人を困らせるのが嬉しくて。それで得るものは何もない。フランクフルトやオスターデで、盗難品の代わりに得た金は、何の価値もない、...」。

「御老体、辛抱してください。また別な時代が来ましょう。私は旅行代と営業資金を得たら、二人ですぐ発ちます。貴方の小屋が私の気に入っていると思いますか。貴方の嘆きのご尊顔から離れがたいのだと思いますか」。

彼は歯の間から口笛を吹いた。「お気を確かにとします」。

「その通り」と老人は熱くなって叫んだ、「発ってください。ベルリンへ発ってください」。

「義父殿、我々は金がないと、貴方がまず話されたばかりでしょう。それとも御令嬢の持参金を現金でくださいますか。いや、親父さん、金を持たずに、ベルリンへそしてまたすぐに務所戻り。御免です。今まで長く待ったのです、更に二、三日か、数週間でしよう、その暁には、...」。

「でも、彼が本当にあのミンナをここにぶち込んだら、どうなるの」とゾフィーは怒って叫んだ、「父さんがきつとへマしたんでしょう、ただうちらを追い出そうと思って」。

リープシュナーは口笛を吹いた。彼はゾフィーと視線を交わした。ゾフィーは黙った。

コヴァレフスキーはその視線を見ていた。「天よ、御照覧あれ」と彼は震えながら叫んだ、「私の弱さを天が許してくださるうからには、パーゲルさんに何か起きたら、私は自分で警察をここに連れて来るぞ」。

一瞬、三人皆が黙った。老人の叫び声には力が込められていて、他の兩人とも、老人はそうするであろうと確信した。

「父さんはいつも、自分がいっばしの父さんであるかのような振りをする」とゾフィーは最後に軽蔑して言った。

「話しても仕方ない、ゾフィーちゃん」とリープシュナーは観念して言った、「御老体はいたくその若造にご執心だ。そのようなことはある。いいか、ゾフィー。貴方もお聞きください、親父さん。まずはおまえが今すぐその若い男の小屋へ出掛けるのだ。今の昼休みの時、彼は一人であろう。ゾフィーちゃん、そこで少しばかり彼に秋波を送るのだ。俺は妬かない。すると彼は折れよう、...。その仕掛けはできるだろう、ゾフィー」。

「あんな間抜け」と彼女は軽蔑して言った、「私とその気になったら、すぐ男は跪くのだから。でもボックスが側にいるのよ。ボックスが付いているの」。

「家禽番の太った娘か。あんなもの押し退けられないようなら、俺との仕事はできんぞ、ゾフィー」。

「発ってください、すべて露見しないうちに、どうぞ発ってください」とコヴァレフスキーは頼んだ。

「貴方に納得して頂くには、牧師様は日曜日三度説教しなければなりません。ええ。金と私は申しております。それがないと縁が切れません。つまり、義父殿、落ちてきてください。その問題は何とかします。ここに残ります。この家はまだ気に入っています。そして貴方のお気に入りの若君には何も起きません。ご了解ですか」。

「発ってください」と老人は頑固に繰り返した。

「お帰りだ、ゾフィー。まずは親父さんに発って頂こう。私が余りにもものぐさでなければ、階段から滑り落ちて頂くところです。良い朝を、義父殿、とても楽しい時間でした。貴方の友、パーゲルさんにどうぞよろしく」。

「いや、ゾフィー」と老人は鬱然とつぶやいた、「おまえは昔、よい子だったのに、...」。

130

結婚生活のないささやかな結婚生活

アマンドの言う通りであった。実際両人は上手く行った。いや、上手く行ったばかりでなく、全く申し分なかった。

驚いたことにパーゲルはこう発見した。アマンド・ボックスについて一週間もしたら神経に障るであろうと思っていたこの娘のイメージが良い面に逆転し、彼女の人柄で、多くの厄介事を乗り越えられた、と。彼女が清潔で、勤勉で、素早く、器用だということは、多かれ少なかれ周知のことだった。しかしこの若い娘は、やり手婆の口ぶりながら、とても口が堅いこと、彼女は聞く耳があること、学習意欲があること、他人の見解を尊重すること、このことには極めて驚かされていた。この悲惨な境遇に突き落とされていた私生児の子供は、その人生の一年間のうちに他人がその生涯で経験するよりも多くの邪険な言葉や打撃を受けていて、そしてまた全存在とすべての人間達、殊に男達に対して激しい厭世観を抱いていたけれども、この悲惨さと地下貯蔵庫からの作物は、すべて善意の言葉、すべての微かな指示への感受性を有していた。それで彼は再三感動した。

「いやはや」と彼は三日目呆気に取られて叫んだ。書斎机が白くテーブルクロスを掛けられていて、上品な陶磁器と食器セットを見たからである。彼女が宮殿から取って来たものに違いなかった。しかし彼がこの「いやはや」を半ば感動して言ったのは、いかに彼にとって欠けた陶器の食器や黒ずんだナイフ・フォークが厭わしいものであるか、彼女が自ら察していたからであった。

「何よ」と彼女は挑戦的に言った、「一体どうしたというの。慣れているように皆するものよ。いつも私は言っているでしょう。私には包装はどうでもいい、中身が勝負だ、と。

一でも貴方は別な見解であれば、構わないのよ」。

この若い両人は孤島に住んでいるように、何の交流もなく、別の親しい友もなく、親しい言葉遣いもなく暮らしていた。二人は全く互いを頼りとしていた。彼の力をすべて消耗させる日々の営みの多忙、争奪以外に、パーゲルが少しばかり自分の生活を送りたいとき、彼はそれを「家」で、つまり事務所で過ごさなければならなかった。そしてアマンドは、この、裏切り者マイヤーの大いに貶された愛人、厭わしい枢密顧問官の最後の従業員は、一人の人間の許で、善意で個人的言葉のやり取りをしたいとき、パーゲルの許で見つけなければならなかった。

かくて一方は他方の救助者となった。このほっぺの赤いアマンド・ボックスがいなければ、パーゲルはかの困難な日々、ひよっとしたらぐったりなって、自らの責務で破綻していたかもしれない。全く枢密顧問官フォン・テッシューといった人や、フォン・シュトゥットマン殿、あるいはそれどころか騎兵隊長のように。しかしこの士官候補生がその旗を

高く掲げ得たのは、その陰にアマンダ・バックスの少なからぬ貢献があったのである。

そしてアマンダ・バックスはいつもヴォルフガング・パーゲルを目にする機会があったお蔭で、マイヤー体験を無事乗り越えられたと言えるであろう。まさに別の男達がいるのである、清潔な男達、どの女の尻をも追いかけるのではない、どの女の胸をも露骨に覗くのではない男達が。マイヤーが屑であったから、世のすべてに立腹するのは、理不尽であろう。彼女は自分の選択がまずかったのであるから、自分一人に立腹すればいいのである。というのは最初の段階では、ほとんどどの人間も、誰を好きになるつもりか、少しばかり決定権を有するからである。一 後では勿論、それは大抵遅すぎる。後で、彼女はハンスを正しく愛し尽くしたのであった。

かくてこの二人のそれぞれが、相手の良い面を得ていたので、自ずと互いに気が合うことになった。ヴォルフガングがさっぱりと体を洗って、再び乾いた服を着て、事務所に入ると、食事は準備されていたが、まだスープは満たされていなかった。

「どうしたのだ」と彼は微笑して尋ねた、「まだ始めないのか」。

「パーゲルさん、郵便もあります」と彼女は言って、二通の手紙を彼に渡した。

彼はそれを急いで受け取った。アマンダは更に言わず、寝室へ行って、洗濯物を移し、洗濯物台を片付けた。

これは人々が互いに思いやりと呼ぶものであった。パーゲルは更にこのことを考えなかったが、しかしそれを感じていた。彼は快適に温かい暖炉に対し、寄りかかり、フォン・シュトゥットマン氏の手紙をまず読まずにポケットに入れて、それから急いで母親の手紙を開封した。しかし読み始める前に、更に一本の煙草に火を点けた。静かに全く快適に読めるであろうと分かっていた。「スープが冷めるわ」と呼びかけられて邪魔されることはないであろう。

アマンダは郵便配達人から受け取り、テーブルに郵便物の山を築いた。荘園管理部、森林管理部、別荘の領主御一家、荘園管理人（これはパーゲル氏によって代表されていた）

一 それに最後に、時々、パーゲル氏個人のものが若干。しかしこの最後のものを彼女はテーブルに置かなかった。彼女はそれをいわば隠し持っている、彼がまた清潔に乾いた服になって、少しばかりさっぱりした気分になるまで待っていて、それから言った。「パーゲルさん、郵便もあります」と。そして消えた。

これも、両者の間で取り決めたやり方ではなかった。これはアマンダが全く独自に考案したのであった。このような粗野な女性が繊細に振る舞い得るのは一つの奇蹟であった。これはパーゲルがアマンダに内情を告白していたからではなかった。彼は彼女に自分の家のこと、それどころか自分の最愛の女性について話したことはなかった。それは彼の流儀ではない。しかしこの娘が一言も言わないのに、若いパーゲルの事情を察知していたのは、これまた一つの奇蹟であった。彼女は何も確証を得ていなかった。若いレディーとの頻繁な分厚い手紙のやり取りはなかった。そもそも若いレディーからの手紙はなく、単にパーゲル夫人という人からのものであった。これは筆跡や送り主から判断して単に母親にすぎないと思われた。しかしアマンダはどんな誓いをもなしえたらう、つまりパーゲルさんは、彼女の言葉で言えば、「固く約束した人の手の中に」あるのだと。そしてこの手は固い約束のものではあるが、この件は何かが必ずしもきちんとしていないと誓えたらう、(まさにすべての手紙に「彼女」からののが欠けていたからである)。

この娘は洗濯物台を片付けて、今一度見回した。すべてが問題なしである。彼がその気なら、彼はここで昼寝を少しできよう。彼がその決心をしてくれればいいが、それが必要であろう。彼女は別室に耳を澄ました。しかしそこはまだ静まりかえっていた。この静寂に必ずしも彼女は満足していなかった。パーゲルさんは喜ぶと、口笛を吹き始める。しかしまだ静かである。...

アマンドは椅子に腰掛けた。若いパーゲルに彼女はやるせない気持ちとか羨望の気持ち、惚れた気持ちを抱いていなかった。逆である。彼女が見たり、経験したるすること、これは彼女にとってただ気持ち良かった。それは彼女自身の中に強くあるもの、生きる意志を励ました。

ほらね、と彼女は例えば考えた。この人は清潔な礼儀正しい人なのだ。それでも二人とも万事順調な人生ではなかった。私はようやく、二、三年前から最悪の状況から抜け出したばかり、勇気を失ったり、絶望していいものだろうか。

そのような風にアマンドは考えていた。しかし今や彼女は中断された。というのは隣の、事務所で、通りの良い、甲高い口笛が始まったからである。一 快適な満足状態のメロディー的音色ではなく、野蛮な戦闘的騒鳴音で、アマンドの非軍人的な精神にとってさえ、攻撃的合図と感じられるものであった。攻撃だ、進め、進め、一 敵にかかれ。そして勝利、名声、栄光。

同時にアマンドは丁度椅子から飛び上がった。ドアがさっと開かれた。パーゲルが寝室に頭を突っ込んで叫んだ、「アマンド、どうした、娘よ、どこにいる。腹減った、空腹だ、スープだ、一 さあ、早く」。

大衆出身の人がすべての仰々しい情動に対して抱くすべてのかの憤りと共に、アマンドは赤らんだ変貌したパーゲルの顔を見つめた。素っ気なく彼女は言った、「頭おかしいのじゃないの」。そして側を通り過ぎて、スープを満たした。

好奇心を抱いてパーゲルは皿を見つめ、好奇心を抱いて彼は尋ねた、「アマンド、何なのだい」。しかし明らかにその好奇心の質問に対する答えには全く上の空であった。

「丸麦入りの鶯鳥手羽臍物料理よ」とアマンドは説明した。

「いや、アマンド、今日もまた鶯鳥手羽臍物か。今日欲しかったのは、...いや、きっと落ち着いては、鶯鳥手羽臍物料理をパリパリ食っておれないな」。

「貴方が村の少年達に対して私の鶯鳥を」とボックス嬢は危険に落ち着いて、答えた、「石で永遠に仕留めないように手を打ってとれないと、毎日が鶯鳥手羽臍物料理となりますよ、パーゲルさん」。

「いや、アマンド」とパーゲルは情けなく頼んだ、「今日の昼だけは、いちゃもん付けを止めて、心静かに食べさせてとれないか。私は長いことかかって、初めてなんとか幸せな気分なのだ、...」。

「貴方が幸福をかみしめていて、私の鶯鳥の骨がこれからも折られ続けることになったら、パーゲルさん」とアマンドは言った、「貴方が不幸のまま走り回って、農業経営のために粉骨するのが、もっと良いわよ。だって貴方はそのためにここにいるのだから。幸福をかみしめるためではないのよ」。

パーゲルは見上げて、満足してきらきら光る目で、アマンドの怒った顔を見た、「まあ、そんな怒った振りをしなさんな、少しも貴女が怒っていないことは、私の更にパリパリも

のは何もおかず、ただ胃と心臓だけ置いていることから分かるぞ。これは実際私の好物だ。 — その他の件に関しては、更にもっと貴女を立腹させるつもりはない、アマンド、つまり私は、自分がそのうち父親になるであろうという知らせを受け取ったのだ、...」。

「あら、そう」とアマンドは言った。その調子は少しも穏やかではなかった。「パーゲルさんが結婚しているなんて、これまで全然知らなかったわ」。

この女性らしい返事に若いパーゲルはとてもびっくりして、スプーンをわざと鷲鳥丸麦に置いて、椅子を引き、アマンドを大きな目で見つめた。「既婚か、 — 私が既婚か」と彼はびっくりして尋ねた、「どうしてそんな奇天烈な考えに至るのか、アマンド」。

「だってそのうち父親になるのでしょうか、パーゲルさん」とアマンドは意地悪く答えた、「父親は大抵結婚しています、 — あるいは少なくともそうであるべきです」。

「阿呆だな、アマンド」とヴォルフガングは満足げに言い、また自分のスープにかかった。「私から聞き出したいのだろう、 — しかし今は食事」。

しばらく静かであった。両人は食べた。

それからアマンドが頑固に言った、「私はこう思うわけ、その若いレディーがおっそろしく口笛を吹いて、自分が母親になるであろうと気付いたとき、人々にそんな阿呆な説明をするだろうか、と」。

「貴女のその思いは全く正しい、アマンド」とパーゲルは答えた、「その若いレディーは先にはきっとそれほど満足はしていなかっただろう。 — もっともひょっとしたらそれでもほんのちょっぴりではあったが喜んだことだろう」。

「それだったら」とアマンドは決然として言った、「私なら即刻ここを離れて、結婚することでしょう」。

「私もそうしたいのだよ、アマンド」と若いパーゲルは答えた、「しかし彼女は残念ながら、私が彼女の目の前に来ることを、厳しく禁じているんだ」。

「貴方を禁じているんですか」とアマンドはほとんど叫んだ、「それでいて彼女は貴方の子供を生もうとしている」。

「その通り」とパーゲルは真面目に頷いた、「貴女は私が言おうと思っていることを完全に了解している」。

「だったら、...」と彼女は真っ赤になった。

「だったら、...」と彼女はそれを言う勇気がなかった。

「だったら私は、...」と彼女は黙った、「貴女ならどうする」とパーゲルはとても真面目に尋ねた。

彼女は彼を吟味して見つめた。彼女は自分がこのような好奇心の詮索にはまってしまっ、自分には分かつとも思えない事柄を知ることになって、自分に腹が立っていた。彼女は彼に腹が立った。彼がこのような事柄について話すすべての男達のように軽薄で愚かであったからである。自分は彼を全く別様に評価していたのに。

それで彼女は彼を吟味して、無慈悲に見つめていた。

しかし彼の目、彼の明るい目、それはきらきらして、そして目の隅、頬にかけて、多くの小皺が見られた。そしてこれらの小皺を見た瞬間、彼女は、彼が真面目な顔つきにもかかわらず、心底喜んでいと察した。彼は、彼女と彼女の愚かな好奇心をただからかっているだけであると察した。彼は自分が今まで評価して来た通りの若者であると察した。

そして或る人間が全く幸福に包まれていると、それは他人に移る習いであるように、幸福は何か伝染力があるもので、...それで彼女も何か彼の幸福を感じた。彼女は一度素早く呑み込んだ。

それから彼女は全くアマンダ・バックスらしく言った。「私が貴方だったらね、私の鷺鳥手羽臑物を十分につついた後、今は三十分ほど横になることでしょう。向こうは温かくしてあります。毛布も貴方のソファに置いてあります」。

パーゲルはアマンダを一瞬呆気に取られて見つめていた。しかしそれから全く従順に言った、「結構、今日は例外的にそうしようかな。しかし三十分したら起こしてくれ」。

しかしドアのところで、今一度振り返って、言った、「思うに、クリスマスに、結婚だな、アマンダ。息子はきっと三週間早く出て来よう」。

そう言って、彼は毅然とドアを閉めた、自分は返事に重きを置いていない、いや、この話題はそもそも終わりだという印であった。そしてアマンダは今や知りたいと思っていたことをすべて知ったので、彼女も更に話す必要を感じなかった。こっそりと彼女はテーブルを片付け、食器を運び去り、暖炉の側に腰掛けた。彼が今や本当に三十分休めるようにするためであった。

しかし彼は眠らずに、また自分の手紙を読むことだろう。

131

戦うゾフィー

パーゲルは本当にもう一度自分の手紙を読みたいと思っていた。しかし横になると、大きな、快適に温かい、快適に暗い波の如く、疲れが彼の上に押し寄せて来た。十二月の初旬に彼が父親になるであろう、そして、ペーターが彼宛に間もなく自ら手紙を書くであろうという文を、彼は夢の中に携えて行った。その文からは快適な軽やかさが生じて、彼は微笑して眠り込んだ。

彼の夢は一人の子供についての夢であった。彼自身がこの子供、自分である子供を見ていた。軽く訝しげに彼は自分を見つめた。青い襟と刺繍の錨の付いた白い水兵服姿で、彼は芝地に立っていて、彼の上にはミロバランすももがその枝を広げていて、その枝には一面一杯小さな[バターの]黄色の果実が付いていた。

彼は自分がその枝に手を伸ばす様を見た。彼はハイソックスとズボンの間の剥き出しの膝を見て、その一方の膝は切れていたが、しかしまたかさぶたになっているのを見た。これはすでに一度子供時分に夢見たことがあるに違いないと、彼は自ら夢の中で言った。そしてそこで子供として枝に手を伸ばす姿を見た。彼はつま先だっていて、そして枝に届かなかった。

すると一人の声が彼に呼びかけた。それは多分ベランダからの母親の声に違いなかった。しかし違う、その声は小さな木の密な樹冠から来ていて、それはペーターの声であった。

「小さな可愛い木、揺すって、揺すって、すももを一杯私の上に投げておくれ」。

するとミロバランすももは揺すって、小さなすももの黄金の雨を彼の上に振り撒いた。それらは落ちて来た、ますます多く、ますます密に、ますます黄金色に。緑の芝はそれらで全く黄色くなって、数十万のタンポポが咲いているかのようで、彼本人であるその子供

は、歓声を上げて、叫びながらそれを求めて身を屈めた。...

その子供は微笑して、その子供を見つめた。しかしゆっくりと彼に明らかになった。夢の中で、自分は一人の男であるが、ペートルから一個の果実も揺すって送られることはないのだ、と。その後、美しい夢は、穏やかな広大な暗闇へと散った。その暗闇は進めるもので、睡眠者は喜んでその中を進んで行った。こう考えながら進んで行った、また誰かの邪魔が入らなければいいのだがと、...

「駄目よ、今はあの人を起こしちゃいけないし」とアマンダは事務所で説明した、「もう一度ちょっと後に来てよ」。

彼女は戦闘的にゾフィー・コヴァレフスキーを見つめた。しかしゾフィーは少しも戦闘的でなかった。彼女は丁重に頼んだ、「ひょっとしてここで彼を待っていてもいいでしょう」。

「彼は起きたら、すぐ田畑よ。あなたに構っている時間ないのよ」とアマンダは拒絶して言った。

「私は父に言われて来ているの」とゾフィーはすべて本当とは言えなかったが説明した、「つまりパーゲルさんは、私にジャガイモ掘りをさせたいのよ」。彼女は辛辣に笑った。

「ジャガイモ掘りなの」とアマンダは繰り返した。二人は相変わらず立っていた。アマンダは暖炉の側に、ゾフィーは窓辺であった。「パーゲルさんの言う通りね。ジャガイモ掘りはあれよりはましだわね、...」。

彼女は効果的に打ち切った。

「何よりよ、お嬢。暖炉が倒れないよう、暖炉を支えていることよりかな。確かにその通りよね」。

「自分だけは抜け目ないと」とボックス嬢は拒絶して説明した、「そう思う人が中にはいるけど。でも余りに抜け目ないのは、愚かだと、フォン・クックホフ嬢がいつも言っていた。そんなものよ」。

「それではあなたは抜け目ないの、それとも愚かなの」とコヴァレフスキー嬢は愛想良く尋ねた。彼女は書き物机用の椅子に腰掛けた。

「そこはあなたの席ではありません、お嬢」とアマンダは怒って叫び、椅子の背もたれを揺すった、「あなたの席は別にあります、...」。

ゾフィーは相手の意向に気付いた。しかしすぐには素直になれず、まず座り続けた。「私に移らなければならないときには、パーゲルさんが私にそう告げるでしょう」と彼女は涼しく説明した、「あなたはここではただベッドの世話でしょう、お嬢」。

「でも私はベッドには入りません、そんなこと私はしません」とアマンダは叫んで、椅子をガタガタ動かした。

「あなたはお呼びでないのよ、お嬢。あの方は前任者よりももっと趣味が良いのかも」。

「私に向かってそんなこと言うの、お嬢」とアマンダは叫んで、顔を真っ白にして後ずさりした。

今や戦闘は最高潮であった。矢が放たれていた。そして幾つかが当たった。今や白兵戦が近付いていた。 — 若いパーゲルがこの戦闘騒ぎで目覚めなかったのは一つの不思議であった。

「私がどうしてそれを言うてはいけないわけ」とゾフィーは反抗的に言ったが、しかし

次第に弱々しくなった。というのは敵の顔の表情に不穏なものを感じられたからである。
「それはあなたが自ら晩禱のとき皆に述べたことよ」。

「お嬢」とアマンダは脅して言った、「他の人達は五まで数えることができなくても、私はできるのよ。五が姿を見せないとしても、夜ある窓の下に立ったら、その五の声が聞けるのだよ」。

今度はゾフィーが白くなる番だった。しばらく彼女は一撃を受けたかのように立っていた。しかし彼女は気を取り直した。

「礼儀正しい人なら」と彼女は全く別の調子で言った、「自分が耳にしたことすべてを知っていると人に言う必要ないのよ」。

「それなのに、ベッドの世話とか、趣味が良くてお呼びでないとか言うわけ」とアマンダは怒って叫んだ、「即刻あの人の許に行って、そのことを話そうかしら」。彼女は思案した、「本当にそうする必要がありそうね」。彼女は疑わしげにパーゲルの部屋へのドアを見つめた。

「どうしてあの人に知らせる必要があるのよ」とゾフィーは用心して尋ねた。「何の関係もないのよ」。

アマンダは相手を疑わしげに、決断しかねて見つめていた。

「あなたも男友達の経験はあるでしょう」とゾフィーは囁いた、「それと全く同じでね、... 男友達への肩入れは私も分かるわ」。

「あいつはもう男友達ではないよ」とアマンダは拒絶して言った、「私は屑野郎の恋人ではない」。

「男の人の中身は他の人々には分からないのよ」とゾフィーは彼女に説明した、「他の人々はただ外面ばかり見ているから。人生では不運な目に遭うこともあるのよ」。

「前科者はいつも悪人だと聞いています。全くの悪人どもが刑務所に入るのよ」。

「更生しようとする人もいるのよ。不当判決もあるし」。

「彼は不当判決なの、お嬢」。

ゾフィーは熟考した、「違う」と躊躇って言った。

「それは正しい言い方よ」とアマンダは頷いた、「そうでないと、ただ私を丸め込もうとしていると思ったことでしょう」。

「でも判決は厳しすぎたのよ。単に軽率なだけで、ひどくはないの」。

アマンダは熟慮した。思っていることを考え込むことができなかった。絶えずその間、ハンス君のイメージが浮かんで来た。彼女は、この男は軽率であるばかりでなく、ひどい男だと知ってからも、この男にまだ未練があったのである。しかし何を尋ねる気であったか、ようやく思い付いた。「何故彼は相変わらず二階にいるの」と彼女は尋ねた、「本当に更生する気があるなら、働くでしょう。怠け者なの」。

「そんなこと言うなんて」とゾフィーは熱くなって、叫んだ、「彼が二階にいるのは、...」。彼女は熟考した、「うちはまだ旅行代が足りないの。それに逃げる際、弾が当たって、...」。彼女はアマンダを見つめた。

「弾がなの。巡査長達は誰にも当たらなかったそうよ」。

「そう思われているだけよ。でも彼は一発脚に受けて、ここ太股。それで上に寝ていて、毎週ずっと、医師もいないし、ちゃんとした包帯もないまま。私が看病して来たの。でも

私はこれからジャガイモ掘りを命じられているの」。

アマンドは疑わしげに相手の顔を眺めた。

「今こちら一帯では盗みが多い」と彼女は言った、「あなたのところのせい、と思っていたのよ、お嬢」。

「だってあの人はいつもベッドに寝ていなきゃいけないのよ、ボックス嬢。それどころか生涯びっこかもしれない」。彼女は考え込んだ、「私の父が言うには、またボイマーが狼藉を働いているのだって」。

「でも、ボイマーはただの密猟者でしょう」とアマンドは尋ねた。

「そんなこと分かるもんですか」とゾフィーは熱くなって叫んだ、「ボイマーは何でもやるのよ。今はお尋ね者だし、アルトローエの親戚は彼の面倒を見ながらいないのよ。これからは何でもやるぞ、と彼は言ったそうよ、どこにいたらいいのか、分からないからには、と、...」。

「私は、...」とゾフィーはつかえた。しかしまた気を取り直した、「そうよね」と興奮して囁いた、「嘘ついていました。あの人は弾を受けていません。旅行費用を稼ぎにあの人はやっています。あの人はお尋ね者なのよ、他にどうしたらいいのか。あなたは男友達に肩入れして立ち上がって、それを恥とは思わなかったのよね。男友達が丁度苦しんでいるときには、その人の力になるべきよね。あなたがうちのことを裏切るとは思っていない、 — 男友達が裏切り者だからと言って、あなたは平手打ちまでした人なんだから」。

「そう、私は彼が裏切り者だから、平手打ちをしました」とアマンドは小声で答えた。「あなたの男友達は、...」。

しかしゾフィーは遮った、「裏切り者にはなりませんよね」と彼女は叫んだ。

二人の娘は見つめ合った。ゾフィーは熱くなって、囁いた、「ある人を好きになったら、どんな気分か、そして他の人々がその人のことをひどい奴だと口にしたら、どんなに切ないか、知っているわよね。その人は他の皆にとってひどい人かもしれないけど、私には優しいの。 — それなのにその人を袖にしていにかしら。あなたもそうはしないでしょ。裏切らないわよね」。

アマンド・ボックスは黙って立っていた。

「彼がノイローエで、もはや何にも手出ししないように、そして少しばかり金を手にしたら、二人で出来るだけ早く旅立つように、心がけます、 — でも、うちのことを裏切らないわよね、お嬢」。

「アマンド嬢は何を裏切っちゃいけないのだい」とヴォルフガング・パーゲルは尋ねて、二人の娘の間に立った。赤ら顔の、かなり興奮したアマンドとゾフィー・コヴァレフスキーとの間に立った。ゾフィーはこの訪問のために、実際、口紅と白粉で町娘の装いをしていて、それで彼女も確かに冷静ではなかったろうが、彼女の興奮はそれほど目立たなかった。

ゾフィーは彼の質問に答えなかった。その代わりに、アマンドが言った。「貴方のコーヒーをすぐ用意しましょう、パーゲルさん」。

彼女は、彼が答えないうちに、事務所を出た。

「あの娘はどうしたのだ」と呆気にとられてパーゲルは尋ねた、「喧嘩をしていたのか」。

「少しもしてません」とゾフィーは素早く答えた、「ただ私のために貴方に対し、言葉

添えをして欲しいと頼んだのです。でも、私が頼んだとは、貴方に知られたくなかったのです」。彼女は肩をすくめた。彼女はドアの方を見た。それから素早く言った、「検査官殿、私の父が申しました、貴方は私がジャガイモ掘りをするのを望んでおられる、と。でも、父の誤解じゃないでしょうか。私の両手を見てください。このような手ではジャガイモ掘りはできません」。

そして彼女は両手を彼に差し出した。この両手は素晴らしくマニキュアされていて、爪はピカピカに輝いていた。しかしそれでも勿論、以前はまことに粗野な田舎娘の手であつたろうことは、マニキュアや光沢でも消しようがなかった。

パーゲルはほとんど懇願するように差し出された両手をまことに興味深く見つめて、それどころか小さく、好意的にピシヤリと叩いて、言った。「とても可愛い」。しかしそれから言った、「それでは、ゾフィー、まずは向こうに腰掛けなさい。それから、分別を持って話そうじゃないか」。

ゾフィー・コヴァレフスキーは従順に彼の向かい側に腰掛けた。しかし彼女の突然拒むような表情は、分別を持って話す気でないことが明瞭であった。

「いいかい、ゾフィー」とパーゲルは好意的に話した、「貴女が数年前、ノイローエから町へ行ったとき、これらの優しい手は少しばかり別な風に見えていたことだろう、そうだろう。これらの手はとても優しくなったわけだ。そこでまたこの両手はしばらく必ずしもとても可愛くは見えなくなるかもしれない。その代わり貴女の父親に少しばかり加勢ができるわけだ。どう思うかい。貴女はまたベルリンへ行けば、すぐにまた両手はピカピカに綺麗になるだろう」。

ゾフィー・コヴァレフスキーは両手を引っ込めた、あたかもこの会話の主題は済んだと思っている風であった。彼女はほとんど泣き顔で言った、「でも、検査官殿、私は母の看病をしなければならぬのです。脚に水腫があつて、歩くことも立っていることもできないのです」。

「そうか、ゾフィー、そんな次第ならば」とパーゲルは悲しげに答えた、「私は明日母親の許へ医師を派遣しよう。医師が、貴女の母親は常に看護が必要か判断することになるう」。

彼は注意深くこの可愛い顔を見ていた。この顔は今や怒りで崩れた。彼はもっと威勢良く言った、「いや、ゾフィー、どうして私を騙そうとするのだ。最初は手のせいで働けないと言う。それから病気の母親のせいにする。最近、畑で貴女の父親は私に話していた、貴女はまた勤めに出るつもりだ、と。すべて本当のことではない。独身で、大きくなった子供と一緒に働く義務のある契約書のことを私は持ち出すつもりはない。しかし皆があくせく働いているときに、貴女が怠けてぶらぶらしていることは立派なことか。若い、力強い娘が、老いて、消耗した父親の財布に頼っているのは、立派なことか」。

「私は父の財布に頼っていません」と彼女は素早く叫び、よりゆっくりとこう言った、「私はベルリンから金を持参しました」。

「嘘言うな、ゾフィー」とパーゲルは言った、「また騙した。我々は同じ日にここノイローエに付いたな、覚えておろう。当時ドルはかくかくしかじかの数千マルクだった。それから今日かくかくしかじかの数十億マルクになっている。一 貴女の金の幾らが残っていよう」。

ゾフィーは話す仕草をした。

「装身具を売ったとか、女中として働いたとか、ベルリンにいたとき、外貨で貰っていたと話すかもしれませんが、――すべて嘘だ。いや、ゾフィー」と彼は決然と言った、「あれかこれかに決まっている。貴女が明日仕事に来るか、それとも黒いミンナがその子供皆連れて貴女の父親の家に入るかだ」。

ゾフィーの顔が変わった。苛立ちが生じ、それから立腹、怒りが生じた。パーゲルは注意深くこの顔を見ていた。可愛い顔であった。しかし何か合点が行かなかった。あたかも可愛さはほんの薄く上辺に留まっていて、今にも別の顔、善良でも可愛くもない顔が浮かび上がってくる気配であった。

しかし今回それでもゾフィーは自制した。いや、彼女は彼に微笑みかけた。あたかも物乞いの風情であった。「いや、検査官殿、私の好きにさせてください。私がジャガイモ掘りできるでしょうか。勘弁して頂戴」。

彼女はまた、横目で微笑して、彼は不審に思った。

「貴女がどれほどの働きを見せるか、ゾフィー、それは別問題だ」と彼は素っ気なく言い、自分がフォン・シュトゥットマン氏のように思われた。「示しが見つからないのだ」。

「でも私はこのような仕事には華奢すぎるのです」と彼女は嘆いた、「だから私は町へ行ったのです。野良仕事には華奢すぎるから。パーゲルさん、触ってみて、私には筋肉はないの、すべて柔らかくて、...」。

彼女は立ち上がり、すぐ彼の目の前に来て、彼に触れた。彼女は彼よりも小さかった。ある香りが彼女から漂って来た。――彼は腕を彼の前で動かして、上腕に二頭筋がないことを見せた。そして彼女は彼の目を、遜って、悪戯っぽく、請うように見ていた。

「筋肉は、畑でジャガイモ袋を運び人達には必要であろう」とパーゲルは拒んで、説明した、「貴女はただ集めさえすればいいのだ、ゾフィー、これは子供でもできる」。

「それに私の膝が」と彼女は嘆いた、「私はきつと最初の日に膝を擦りむくわ。ほら、検査官殿、こんなに柔らかいもので」。

彼女のスカートはとても短かった。しかし彼女はそれを持ち上げた。彼女は靴下留めに触れ、彼はそれが白く輝くのを見た。

ドアが開いた。「スカートを下ろしなさい」と彼は激しく命じた。

彼女の顔が変わった。その通り、今や可愛い顔から別の顔が浮かび上がって来た。――とても下品に見えるものであった。

「私を放してください。貴方の魂胆はこれだったのですね、嫌です、嫌です」と彼女は大声で叫んで、すぐドアから出て、アマンダ・バックスの側を抜けて行った。

動じぬ顔でアマンダ・バックスはコーヒー・カップをテーブルに置いた、「コーヒーです、パーゲルさん」。

「忌々しい女だ」とパーゲルは叫んだ、まだ息を弾ませていた。「アマンダ、ここで私を誘惑する気でおったぞ」。アマンダは黙って彼を見つめた。「それとも」と彼は思案して続けた、「私が誘惑しているかのように、貴女に対して見せかけようとしていた。――

これがその意図であったのかもしれない」。彼は立っていた。相変わらず、全くびっくりして、信じられないという微笑を浮かべていた。「それもすべてほんのジャガイモ掘りに関してだ。訳が分からん」。

「私なら放っておきます、パーゲルさん」とアマンダは短く言った。

「いや、そうだな、アマンダ。ゾフィー・コヴァレフスキーのために言葉添えを頼まれていると聞いたばかりだ。しかし何故だ。怠けたままでいいのか」。

「私は彼女のために言葉添えはしません、パーゲルさん。私はあの娘のことは気にしません。それが一番宜しい。貴方もあの娘のことを気にしないことです、パーゲルさん」。彼女はまた彼をちょっと素早く見つめた。それから言った、「コーヒーが冷めます」、そして事務所から出た。

パーゲルは彼女の後ろ姿を見た。かなり多くのことが彼には謎めいて見えた。しかし彼は、この謎を解くには、用事が多すぎた。むしろ彼はコーヒーの側に腰掛けて、ようやくフォン・シュトゥットマン氏の手紙を読むことにした。

132

沈黙するようになったクニーブッシュ

十五分後、ヴォルフガング・パーゲルは自転車で森に向かっていった。彼は急がなければならなかった。というのは、五時頃には暗くなって、黄昏になると森林官クニーブッシュはもはや森に留まらなかったからである。彼はこの点に関し何の説明もしなかった。森林官クニーブッシュは黄昏時になると我慢出来なくなり、郎党をそのままにして、森を出て、家に帰った。

「もう全く奇妙な風になってしまった」と他の者達が言った。

「暗い森がただ怖くてたまらないのだ」と他の者達が言った。

クニーブッシュは人々を好きに喋らせて、自らはほとんど何も話さなかった。何か話されるとき、もはや彼は耳を傾けなかった。彼はもはや何も知ろうとしなかった。彼自身もはや何も話さなかった。この老公の場合驚くべき変貌、生涯にわたって克服できなかった弱点のこの完全な放棄は、かの十月一日以来のことであった。この日森林官クニーブッシュは、静かに、しかし戦闘的にノイローエの百姓子息の一団と共にオスターデ要塞へ行軍して、赤い政府を大きな一揆で倒そうとしたのであった。

パーゲルはお喋り屋の森林官が沈黙の森林官に変身したと気付いたとき、惨めに失敗した一揆への屈辱感から、森林官はかくも不機嫌に黙するようになったのだと思っていた。

確かに森林官は軍事的演習について何も語らなかった。しかしそれならこの解釈で人はただ納得するだけであつたらう。口頭での知らせがなくても人々は新聞で読んで十分に知っていた。解散されていない武闘団の若干の部隊が、多くの武装した民兵を連れて、帝国国防軍の兵舎前に押しかけて、一緒に反政府の戦闘に加わるよう要請した次第を知っていた。

帝国国防軍からは冷淡な拒否の返事がなされていた。

多分に一揆派の人々はこの拒否を、一種の気取りの遠慮、体面を保つ意図と解していた。そして人々はちょっと躊躇った後、ずっと優柔不断のまま、再び明らかに体面を保つために、攻撃といったものを仕掛けたのである。

半ダース、あるいは一ダースもの発砲がなされた、一揆派の塊は、無様に押し戻されて、混乱し、四散して終わり、一ダースもの逮捕者が出て、残念ながら二、三名の死

者も出た。多くの有能な、しかし山師でもある男達が数ヶ月にわたってすべての力、思考、勇気、犠牲心を傾注してきた一つの演習であった。しかしそれは時代の一つの徴候であった。この時代にはすべてが解体するように見えた。すでに生成の半ばに朽ちていて、最良の意志は無気力なままで、犠牲心は何か滑稽なものに見えた。 — 誰もが自らを最上にしてはいたが、皆が一人に敵対していた。

(一人の少尉がある居酒屋の亭主から借りて、小心翼翼の憂慮の発作からすぐにまた返却されたかのウィンドブレーカーは、これは汚されることのないようにと返却されたのであったが、かの十月一日に、土と血で汚されることになってしまった、…。父親が小さな飲み屋を上品な居酒屋に仕上げた努力も無駄になった。しかし少尉が新しいウィンドブレーカーを返却していなかったら、居酒屋の息子は参加していなかったらどうか)。

つまり、そのような具合にこの一揆は経過した。多くの人々がその心を捧げた一つの美しい輝くような夢であった。 — そしてそれからそれは終わった。一人の人間がこの一揆について不機嫌になり、沈黙するようになることはあり得ることである。しかしそれからパーゲルがよく森林官クニブッシュと一緒にあって、沈黙の他にこの死んだような、それでいて絶えず怯えている視線を見、ますますまばらになって行くように見える髭、永遠に震える両手を見ると、 — そして一揆とこの男について少しばかりもっと厳密に考えてみると、彼は自らの裡で言った。すべては間違いだ、ともかくまた何か別のことだ、と。

優に三十分ほど森の中を自転車で行きながら、森林官クニブッシュのことだけを考えていた。若いヴォルフガング・パーゲルにとって思考におけるある種の穏やかな執拗さというのは全く縁を切れないことであった。最近の仰天する出来事のためにこの特性は抑制されていて、彼はほとんど考える暇なく行動する必要に迫られていたが、今やその反動がそれだけに強く作用し、彼はまた遠い道のある畑から別の森へと自転車で、ただ一人つきりになって、進んでいた。パーゲルはただ世間で共に働くだけでは満足せず、その世間を理解しようと思っていた。彼は今森林官クニブッシュが沈黙して不安げであると見ているだけでは、十分な気がせず、彼がなぜそんなに変わったか知ろうと思った。

そしてそこで彼が自分の記憶を詮索してみると、勿論ある森の道で、酔っ払った若造が、彼に千鳥足で向かって来て、この酩酊した小男の車にはなはだ酩酊した森林官クニブッシュが倒れていた或る秋の日のことを思い出さざるを得なかった。マイヤーというこの屑が、武器保管所の露見とそして同時に少尉の終焉の主要な科人となったこと、そのことをパーゲルは、アマンダ・バックスの平手打ち以来、ずっと承知していた。

しかし奇妙なことに、 — 彼は当時この森林官クニブッシュのことをまだ思い出さなかった。

しかし今彼のことを考えてみると、勿論彼は、クニブッシュがマイヤーへの情報提供者であったろう、進んで提供したか、それともこの方がもっと蓋然性が高いが、我知らず提供したのであろうと理解した。

それに若いパーゲルは更に別のことも思い出していた。彼は、囚人達の乱痴気騒ぎの行われた宮殿での荒れた広間を思い出し、 — スカートの下で泣きわめく女中を思い出し、

— そして広間にあの太った刑事が現れて、森林官を呼びに人を送ったことを思い出した。そのとき、森林官はいなかった。

いや、と突然パーゲルは自らに言った。何故あの刑事は森林官の許に人を送ったのか。刑事は森のどこに何が見つかることになるか、すでに承知していたのに。ただ刑事は森林官に会いたかったのだ。森林官を尋問したかったのだ。森林官に疑念を抱いていたのだ。

一 何故森林官は真夜中家にいなかったのか。何故、おとなしい臆病な男が一揆に参加したのか。一揆の不安よりも、武器保管所に関する尋問に対する不安の方が大きかったからだ、彼は姿を現そうとしなかったのだから。

さてパーゲルはまた森の中に立っている自分を思い出した。他の者達は先に進んでいた。太った刑事が更に彼に二、三の言葉をかけた。それから刑事は更に進んで、ずぶ濡れになって、疲れ果ててオスターデへ向かった。そこで森林官はまさに、自分が逃れようと思ったこの尋問者に会ったことだろう。この尋問者がいかに情け容赦ないか、これはヴォルフガング・パーゲルも承知している。これは森林官クニーツシュにとって苛酷な時であったことだろう。それでとうとう口を閉ざすことになった。ひょっとしたらすんでの所をかわして来たのだろう。事実かわして来たのだ。彼はまた家に帰って来た。では今なお何に対して不安を抱いているのであろう。何故黄昏時、森におれないのか。

パーゲルはその物思いで大きな進歩を見せていた。しかしこの物思いの成果にまだ相変わらず満足していなかった。解けないものが残っていた。彼自身実際かの夜の後、数日は暗くなって行く森の中に残っておれなかった。黄昏になり始めると、すべての彼の神経は震え始めた。彼は自転車に乗って、脚の能う限り、自由なところへ向かった。しかし彼はこの感情に対し、このパニック的不安に対し立ち向かって来た。再三彼は分別を持って自分に言い聞かせた。この森は九月三十日以前の森と変わらず、死者は幽霊となって出ないし、恐るべきは単に生きている者達である、と。そして次第に分別が不安を克服した。

さて、こうも考えられるであろうと、パーゲルは考えた、つまり森林官は秘密警察の知らせが村か森にいる彼の許に届いたあの厄災の夕べに、良心の呵責に苛まれて、黒い奥へ忍んで行き、そこで少尉を見つけたかもしれない、と。そして彼はこれを見つけてパニック的不安に襲われ家に帰ったかもしれない。そうだ、そうかもしれない。

しかしある声が出て、それは違う、森林官は、とうに死んで埋葬されている死んだ人間に対するよりも、何かはるかにより具体的なもの、より具象的なものに不安を抱いていると告げた。いや、死んだ少尉のことではない。そして太った刑事のことでもない。というのはこの太った刑事は即刻打撃を与える男であって、犠牲者を数週間も数ヶ月も苦しめるようなそんな男ではないからである。

差し当たりパーゲルが自らに課した課題は解けなかった。彼は好きなだけ詮索できた。小さなマイヤーに対する思いが一度浮かんできた。しかしこの思いを彼はすぐに退けた。この小マイヤーはこの一帯に再び現れることはきつとないであろう。小マイヤーは、再び森林官に接近する勇氣はないであろう。この老男性はだらしがないが、この拷問者に対してなら自己防衛できよう。

このようにパーゲルの詮索、物思いはほとんど成果なく経過して行ったが、しかしこの老公に対して格別優しく振る舞おうという自分の計画を強めることになった。彼は確かにお手本、模範となる人間ではないかもしれない、しかし墓場に行くまでの最後の地上の時に、余りに苛酷にこのような老公が自ら苦しむ必要もなかろう。この森林官は一体何に対してそもそも不安を抱いているのか、一度把握する試みをしていいだろう。ひょっとした

ら説得して取り除けられるかもしれない何か具体的なもののなのか、それとも彼自身の中に巣くっている何か得体の知れないもののなのか。

さてパーゲルは今森林官が両連隊と共に働いている狩りに加わった。勿論まだ伐採の時期ではなかった。ここに立っている大きな、古いブナの木はまだほとんど葉を落としていなかった。まだ多くの樹液があって、伐採できなかった。しかし森林官は、後に木樵達の連隊を率いることになる、それ故に連隊と呼ばれている二人の職長達と、朝から夕方まで森に出掛けていた。彼は伐採予定の木に印付けを行った。連隊の斧が煌めき、銀灰色のブナの樹皮の広い切片が地面に散った。黄色の、素早く赤みを帯びる傷跡を残してその白い木は輝いた。かくて、汝は冬の覚悟をするのだ、汝は春まで生き延びることはないであろう、木樵達が汝の斑点で見分けよう。

老森林官クニブッシュが刈り手、即ち死神の代理人として執行していることは、本来はなほだ叙事詩的活動であった。彼は生と死を差配する、そして死神が印付けられたものに即刻執行せず、その印付けられたものになお一種の猶予期間が設けられ、かつその印付けられたものは丁度発せられた判決について何も知らないという状況、— この状況はこの活動を少しばかり不気味なものにしていた。しかしパーゲルが、この森林官が幹の間を巡るのを見、つぶやきながら、空ろに咳をし、元来ただの小男となって、老齢と心配事と、克服できない人生の不安によって圧迫され、干涸らびてしまい、すでに震えている骨張った人差し指で、幹を指し示すその様を見ていると、この叙事詩的なものはグロテスクに思われるのであった。というのはこの刈り手の死神は、明らかに自らすでに死神によって印付けられていたからであり、自分の代理権力を単に定かならぬ猶予期間の中で執行していたからである。そして彼は、ひょっとしたらこのことをそれどころか承知していたのかも知れない。連隊は幹から幹へと進み、震える手が指し示し、斧が銀色に明るく響き、彼らは更に進んだ、ゆっくりと更に進み、後に白っぽく赤みを帯びて輝く傷跡があった。

パーゲルは森林官クニブッシュに丁重な「今日は」を言い、森林官は脇から観察する視線をその丸く浮き出たアザラシの目から若い男に投げかけた。彼は返事に何かをつぶやき、それから更に進み、更に示した。彼の横を今や無言で若いパーゲルが歩いた。彼は両手をポケットに入れて、煙草を吸っていた。彼は全く心地良く歩いて、老公が監視されているという感じを抱かないようにした。しかしパーゲルは気付かざるを得なかった。連隊の斧が今日何か仕事をするのは稀であり、指は稀にしか示さない、と。— ほとんどすべて、伐採可能な、いやほとんど古びた木なのである。別な日々と様子が全く違っていた。

それ故しばらくしてパーゲルは尋ねた、「貴方は今日、指し示すことがほとんどない、クニブッシュさん」。

森林官は顔を背けて、何かつぶやいた。しかし返事しなかった。それから一つ認めた。彼は指で或る幹を示した。しかし連隊の斧が上がると、彼は素早く叫んだ、「いや、止しておこう」。

しかしそれでも斧はまた下ろされず、打ち込まれた。幹は印付けられた。

「この幹はもう空洞になりかけ始めています、森林官殿」と連隊が叫んだ。

森林官は何か呪いのようなものを口ごもった。彼はパーゲルに怒った視線を向けた。それから彼はゆっくりと更に進んだ。頭を垂れて、あたかも仕事を忘れたかのように、幹の

ことを気にかけていなかった。

「貴方はただ、森林官に言われたことをすればいいのだ」とパーゲルはその連隊に呼びかけた。

「パーゲルさん」とその男は少しも悪びれず、答えた、「今日ここで我々がしていることは、全くの茶番です。先日まで、今日の午前中まで、まだ彼はあれこれ指示を出していました。しかし今日の昼から滅茶苦茶です。病んだ木、古びた木、腐りかけ、これを我々は彼に対し示してきました。彼は頭を振って、更に進んで行きます。彼が今していることは子供じみています。こんなことのために森を歩き回って、日当六百億マルク貰うなんて、...」。

「カール、御託を並べるな」と別な連隊が言った、「パーゲルさんは、この老公が変なのは分かっているのだ。遊びで毎日森へ自転車に乗って来られるものか。老公はおかしいよ、今日の昼から全くおかしい、...」。

「うるさいぞ」とパーゲルが叫んだ。

森林官は三人の二歩前で立ち止まっていて、すべての言葉を聞いていたに違いない。彼は頭を垂らしていた。粗野な言葉で彼が傷付いたか分からなかった。三人皆が彼に目をむけた。そしてこの視線で気が付いたかのように、彼は頭を上げて、言った。「仕事仕舞いだ」、そして一方の手で散弾銃の紐を持って、素早く立木から出て、区画線へ向かった。

「三時半にもなっていないのに」と時計を取り出しながら、分別ある連隊は言った、「四時四十五分まではまだ目の前の手を見られるぞ。パーゲルさん、我々をもう家に戻すのは、無茶です」。

「カール、ま、そう言うな」と別の男がまた言った。彼は自ら話したがっていた、「暗い森が何故不安なのか、自分では分かっているんだよ。噂では、黒い奥から死人の霊が徘徊するそうだ。この霊に襲われる者は、それが分かるから、暗くなる前に森から出ようとするのだ」。

パーゲルは募る怒りを抑えて、この連隊を鋭く見つめて、言った、「いいか、森林官は貴方の上司だ。彼に言われたこと、それをするのだ、分かったか」。

「ある人が狂ったら、その人に言われたことをする気にはなれません」とこの男は答えた、「森林官は狂っています。彼が森から逃げ出すまで、私はずっと彼にそう言ってやります」。

「いいか、...」とパーゲルはより激しく言った。

しかしこの連隊は彼を遮った、「奴が良心の呵責を感じていることは」と彼は説明した、「見てとれます。あの死人の銃を誰も見つけていません。多くの者が言っています、そもそもそれは猟銃だったと、...」。

「そうかい」とパーゲルは激しく叫んだ、「洗濯女のお喋りだ」。そして突然怒りを爆発させた、「いやはや、そんな愚かなお喋りを紡ぎ出して恥ずかしくないのか。一人の老いた、礼儀正しい男なのだ、この人の人生をこれまで以上に辛いものにしてはならんだろう」。

「その通りです、パーゲルさん」と別な連隊が言った、「私もいつも言っています、...」。

「カール、そう言うな」と相手がまた遮った、「役人は役人の味方をするとは分かっている。しかし何か臭うのだ。森林官の場合、何か臭う、...」。

「貴方は解雇だ」とパーゲルは激しく叫んだ、「即刻、無期限の解雇だ。一週間の猶予で、住まいから出るのだ。良い晩を」。

そう言って彼は向きを変え、ガサゴソとブルーベリーの茂みを抜けて、自転車まで向かった。彼は胸の中で快適ではなかった。ーしかし何ができよう。この哀れな奴は、自分が粗放で愚かであることに責任はない。しかし森林官もまた、自分が草臥れて病気であることに責任はない。この若い連隊は目下、伐採の時期、どこでも仕事を見つけられよう。しかし老森林官は二度と人生で見いだせまい、…。

彼は力強くペダルを漕いで、一瞬母親の手紙のことを考えようとした。自分がほぼ幸福だと思ってから、二、三時間も経っていなかった。しかしこの手紙はどんなに努めても、何か遠方のもの、小さな光のようなものに留まっていた。この明かりは夜、多くの森の木々を通じて見えるけれども、届かないものである。その間には再三、夜の茂みや暗い枝が混在していて、その小さな輝く点を消してしまう。

しばらくして彼は森林官に追いついた。彼は頭を垂れて、とぼとぼ道を歩いていた。全く、主人を失った犬のようであった。若い男が彼の横に自転車から飛び降りても、彼はやはり頭を上げず、全く一人っきりであるかのように、とぼとぼ歩き続けた。

しばらく二人は黙って並んで進んでいたが、パーゲルは言った、「クニーブッシュさん、あのシュミットはたった今解雇した。彼は明日もう仕事には来ないだろう」。

森林官は長いこと黙っていた。それから嘆息して言った、「パーゲルさん、何の助けにもなりません」。

「何故何の助けにもならんのか、クニーブッシュさん、うるさい者が一人少なくなれば、心配事も一つ少なくなろう」。

「いや」と老公は言った、「一難去って、新しい災難が十来ます」。

「それで今日来た災難は何だ」とパーゲルは尋ねた、「貴方が木に印を付けなくなったのと、関係あるのか」。

しかしこれは変貌したクニーブッシュにとって余りに圧迫する質問であった。彼は唇を結んで、答えなかった。

しばらくしてからパーゲルはまた始めた、「クニーブッシュさん、考えたのだけど、今晚医者に電話して、医者と話してみよう。明日貴方は医師の許へ行って、病気と診断して貰い、きちんと一度休みなさい。私はそれを薦める。二十六週間、貴方は医療保険金の権利を有しているのご存じであろう」。

「いや、誰が医療保険金で暮らせましょう」と老公は意気地なく言った。しかしもはや完全に絶望してはいなかった。

「貴方には現物支給がある、クニーブッシュ。我々は引き続き提供しよう。貴方を飢えさせはしないつもりだ」。

「誰が森での私の仕事をするのです」と森林官は叫んだ。

「私には木の印付けはできない、クニーブッシュさん」とパーゲルは好意的に言った。

「しばらくは農園中庭で貴方の数人の木樵を雇うことにしよう」。

「それは枢密顧問官殿が生涯了解なさらないでしょう」と再び森林顧問官が叫んだ。

「いや、枢密顧問官など」とパーゲルは投げ棄てるように言って、枢密顧問官は眼中にないことを森林官に分からせようとした。「この人は今一ヵ月以上、音信不通だ。それで

我々が正しいと思う仕方で、彼の仕事を片付けても、彼は文句言えないのだ」。

「しかし彼は便りを寄越しています」と森林官が小声で抗弁した、「一通の手紙を私宛書いています」。

「何だと」とパーゲルは呆気にとられて、叫んだ、「突然のことだな。枢密農業顧問官ホルスト＝ハインツ・フォン・テッシュォー殿は何のご意向だ。ひょっとして戻って来て、孫娘捜査の手伝いをする気にでもなったのか」。

しかし森林官クニーブッシュはこの嘲笑に反応しなかった。ヴィオレット令嬢ももはや彼の関心にはない。以前は彼女と調子を合わせることに、とても重きを置いていたのであるが。それ故、彼はパーゲルの質問にも答えず、長いこと経ってから、思案げに言った、「貴方は、医師が私を病人と見立ててくれると本当に思われますか」。

「勿論だ、貴方は病人だよ、クニーブッシュ」。

「それで貴方は医療保険金にもかかわらず、私に現物支給をこれからもしてくださいませか。これは禁止なのですが、パーゲルさん」。

「私がここにいる限り、貴方は引き続き現物支給を受けるよ、クニーブッシュさん」。

「それでは私は明日医師の許に行つて、病気と診断して貰います」と森林官は説明した。そして彼の声は全く別の調子になっていた。

パーゲルは辛抱強く待った。しかし更に何も明らかにならなかった。森林官は黙つて彼の横を歩いた。多分心配事、怒り、不安のない、落ち着いた生活への希望に満ちた物思いに紛れていたのであろう。

「それで枢密顧問官殿は何と書いてきたのだ」とパーゲルは最後に尋ねた。

森林官は自分の夢から飛び上がった、「私が病気になれば、彼が書いてきたことをする必要もなくなります」と彼は拒絶して言った。

「ひょっとしたら、私が、彼の所望してきたことを行えるかもしれない」とパーゲルはおとなしく提案した。

森林官はパーゲルをぎよつとして見つめた。それから本当にまことに、彼の顔に薄笑いが生じ始めた。彼は可愛くは見えなかった。むしろ死人が微笑しているように見えた。しかし微笑には違いない。 — 「貴方ならできましょう、...」と彼は言って、なお微笑していた。

「何ができるのだ」。

微笑は消えた。森林官は再び不機嫌になった、「いや、貴方はただ話しを漏らしてしまひましょう」と彼は拒絶して言った。

「私は口が堅いと承知しておろう、クニーブッシュさん」。

「でも恵み深い奥方様に伝えるでしょう」。

「恵み深い奥方は目下、人の話しを聞く気分ではない。その上、夫人にも何も話さないと私は約束しよう」。

森林官はしばらく考えていた、「やはりむしろ黙つてしまひましょう」とそれから彼は言った、「お喋りは少ないほど、よろしいということを私はやっとなら学びました」。

「それをオスターデで貴方は太った刑事から学んだのだろう、そうだろう」とパーゲルは尋ねた。

そしてそう言ったことをすぐに後悔した。粗野な連隊が嘲ったことよりも、粗放であつ

たろう。老公は雪のように白くなった。彼は震える手をパーゲルの肩に置いて、自分の顔をパーゲルの顔の間近に寄せた。「知っているのか」と彼は震えて尋ねた。「どこから知ったのだ。彼が貴方に伝えたのか」。

パーゲルは自分の自転車を倒して、森林官をしっかりと腕に抱いた。「クニーブッシュさん、言うべきではなかったな」と彼は悲しげに言った、「ほら、私の口も軽いものだ。いや、貴方は心配するに及ばない。私は何も知らなかったし、誰も私に何も言っていない。私はただ想像してみたのだ。貴方はオスターデから帰って以来、とても変わったからな」。

「本当にそうですか」と森林官は囁いた、未だに痙攣したように震えていた。「彼が貴方に伝えたのではないのですか」。

「違う」とパーゲルは言った、「誓って、違う」。

「貴方が考えついたのであれば、他人も想像できましょう」とクニーブッシュは絶望して叫んだ、「皆が私を指さして、私が祖国の裏切り者だと言います、私はフランス人に魂を売った、と」。

「貴方はそうしたのではなかったのか、クニーブッシュ」とパーゲルは真面目に尋ねた、「小マイヤーが、...」。

「小マイヤーが私を酔わせて、私から聞き出したのです」と相手は叫んだ、「私が老婆のようにお喋りだと彼は知っていたのです。それを彼は利用した。私を信じてください、パーゲルさん。太っちょも最後に私の言うことを信じました。『老いぼれの間抜けよ、家に帰れ』と彼は最後に言いました、『生涯二度と口を開くな』と」。

「そう言ったのか」とパーゲルは尋ねた、「しかしだったらもう不安を抱く必要はないだろう、クニーブッシュ」。

「いや、恐ろしい奴です」と老公は震えながら叫んだ。やっと心の重荷について話そうとできて、彼はほとんど陶酔状態であった。「奴が即刻私をぶちのめしてくれていたなら、その方がもっと有り難かったことでしょう。『貴方のお喋りで死んだ男の灰が、貴方の歯の間で歯ぎしりとなろう、貴方が口を動かすたびに』と彼は言ったのです」。

「しっ、しっ」とパーゲルは言って、手を穏やかに相手の歯の方に置いた、「無慈悲な男だ、それに不当な男でもある。その死者に対しては、貴方よりももっと他の者達の咎が大きい。一行こう、クニーブッシュ。私はここブルーベリーの木の茂みに私の自転車を置いて行く。明日早朝取りに来よう。貴方を家に送り、ベッドに寝かせよう。それからすぐに医者に電話する。医者は今晚にも貴方の許へ出掛けて来て、貴方は安心しよう、...」。

この男は重病人のように彼の腕にすがって歩いた。信頼できる一人の人間を今や見いだせて、彼の抵抗力の最後の残りが消えていた。彼を今まで頭を上げさせていたものは、彼の孤独であったろう。今や、気力もなく、一人のより強力な者が自分の面倒を見てくれると確信しつつ、弱さと病の中に滑り落ちていた。

堰を切ったように、彼は一切切切を喋り散らした。郎党が彼の恥辱を知るであろうという不安について、脱走した密猟者ボイマーに対する不安について、このボイマーの痕跡が森で見つかったように思うと述べ、そしてヴィオレット嬢が従者レーダーが発見されて、一切が明るみに出るであろうときの不安について、少尉が死んだ今、村長ハーゼが果たして更に利子を払ってくれるであろうかの不安について、小マイヤーが再び現れた際の不安について、枢密顧問官に対する不安について、この顧問官は自分の森が手紙に記載されて

いる通りになっていないと知ったら、今日明日にも彼を森林官地から追い出すかもしれないのである、…。

不安、不安、…この男の全生涯は不安であった。かくも多くこの些少の人生に関して、つまり強力な喜びも、偉大な思索も経験しなかったこの人生に関し、人は不安を抱けるのである。そしてこの人生は全く味気なく不幸になってしまったので、斜陽の人生となって、更に不安はひどくなったのである。四方八方から不安が彼に迫って来た。人生への意欲が彼の生命をなお支えているのではなかった、否、それは人生への不安であった。

すぐにヴォルフガング・パーゲルは、この老公を善意に慰めて説得することを諦めた。彼は慰めを望んでいなかった。老公は不安の最中に収まっていて、不安は波のように四方八方から押し寄せて、彼を持ち上げており、今にも彼を溺死させようとしていた、…。

「そうです、パーゲルさん、今毎日新聞で自殺について読んでおります。今では多くの年寄りが、七十代、八十代の者がそうしているのです。しかし私はできません。それすらできないのです。だって病気の妻がいるのです。いつも不安に思っています。妻より先に私が死んだら、妻はどうなることだろう。妻のことを案じる者は、一人もいないのです。奴等は妻をただ一匹の動物のように扱うことでしょう。だからとても心配なのです、…」。

「いや、もう喋るな、クニーブッシュ」とパーゲルは疲れて言った、「今はここ貴方のベッドで寝なさい。今晚にも医者来るだろう。まずは一眠りすることだ。すると万事別様に見えよう。貴方が着替えをする間に、その枢密顧問官の手紙を読ませて貰おう」。

老森林官クニーブッシュは少しばかりぶつぶつ言いながら、少しばかり嘆きながら、無器用に衣服を扱っていた。パーゲルは薄い明かりの下、枢密農業顧問官ホルスト＝ハイントツ・フォン・テッシュォーが自分の森林官に書き送った手紙を通読した。窓辺の大きな椅子に森林官夫人は座っていた。村の人々が、ますます風変わりになって行くと噂している夫人であった。太って、不格好な夫人は頭を背けて、動かずに夜の闇に見入っていた。夫人の膝には一冊の本があり、表紙に黄金の十字架があって、多分賛美歌集であった。

「誰が夫人をベッドに連れて行くのか」とパーゲルは尋ねて、閲覧を途中で止めた。

「いや、今日は多分ベッドに入らないでしょう」と森林官は答えた、「時に一晩中座っていて、歌います。しかしベッドに入りたいとき、 — 自分一人でそれはできます」。

この若い男は、ひたすら夜の闇に見入っている森林官夫人に素早い吟味の視線を投げかけ、読み続けた。

森林官は寝間着姿となって、ベッドに入り込み、静かに横になっていた。目を閉ざして、そして彼の頭が、陽と風とで赤く焼けた顔と共に、黄白色の髭と共に、白い枕の上に奇妙に彩りよく横たわっていた。

しかし丁度、若いパーゲルが森林官に課した、手紙の箇所に来たとき、つまりノイローエの荘園の各人に、娘婿の家族であれ、ノイローエの荘園管理部の誰であれ、あの生意気な若造のパーゲルであれ、枢密顧問官の森への立ち入りを一切禁ずるという箇所、丁度、この火急督促状、挑戦状、果たし状の閲覧にまで来たとき、老夫人が歌い始めた。

彼女は賛美歌集に指を一本入れていたが、中を覗いていなかった。彼女は夜の闇を見続けていて、甲高い、しゃがれた声で、小声で我知らず、古い歌を歌った。「汝の道と汝の心の悩みを天を司る者の誠実な計らいに委ねよ。雲と大気、風を起こし、道、軌道、軌跡を司る者、この者が汝の足に進むべき道を示し給う」。

パーゲルは森林官の方を覗き見た。しかし老公は動かなかった。静かに頭は枕の上にあった。

「もう行きます、クニーブッシュさん」と彼は言った、「手紙を返します。有り難う、申したように、誰にも話しません」。

「外からドアを閉めてください」と森林官は答えた、「鍵は錠の中にあります。医者がいらしたときは、もう一本鍵を私が持っています。医者が来たときは、分かるでしょう。私は眠りません」。

「歌は支障とならないのか」とパーゲルは尋ねた。

「歌ですか、何の歌です。いや、私の妻の歌ですか。これは支障なりません。私は全然聞いていません。私は絶えず考え続けています。－ 貴方が外に出たら、明かりを消してください。明かりは必要ありません」。

「何について考えているのだい、クニーブッシュさん」とパーゲルは尋ねて、森林官を見た。森林官は、目を閉じたまま、動かずにベッドに横たわっていた。

「いや、私は次のようなことを考え出したのです」と森林官はまことに気分良く言った、「私は考えてみるのです。私が自分の人生で、あれこれのことをしなかったら、とか、誰彼に会わないでいたら、と。－ その場合一切どうなっていたら、と。しかしこれは難しいことです、...」。

「いや、難しいことだろうな、...」。

「例えばこう考えるのです、あの屑、あのボイマーが隘路で私に自転車でぶつからないでいたら、全体どうなっていたら、と。ぶつからないことは全く簡単なことだったろう、でしょう、パーゲルさん。私がほんの少しもっと早く進んでいたら、済んだ話でしょう。隘路はただとても暗かったのです。この隘路から私が抜け出ていたら、奴は遠くからでも私が来るのを見つけて、私を避けていたことでしょう」。

「その場合、どんな風に別様になったら、クニーブッシュさん」。

「すべてです、ただすべてが変わります」と森林官が叫んだ、「すると、ボイマーが私にぶつからないでいたら、私は彼のせいでのフランクフルトでの裁判期日の必要がなくなっていたでしょう。それでフランクフルトでの裁判期日がなくなっていたら、私はマイヤーとも再会していなかったことでしょう。マイヤーに再会していなかったら、彼が武器保管所をばらすこともなかったことでしょう、...」。

パーゲルは彼の両手を強く、乾いて、骨張った老斑のある森林官の両手に置いた。

「私だったら、何か他のことを考えるようにするだろう、クニーブッシュさん」と彼は提案した、「私だったら、貴方が今、年金生活になったら、どうするだろうと考えることだろう。貴方は勤労者保険から年金を貰うわけだ。ひよっとしたら金に関して、本当に別な時代が来るかもしれない。枢密顧問官もその手紙でこれに触れていた。貴方も読まれたら、私なら、自分の生活をどのようにするか考えることだろう。何らかの恋愛を貴方もするかもしれない、...」。

「女の子か、...」と森林官は小声で言った。

「そうだ、結構。女の子はすごく大事なことと言われているぞ。女の子について、大概の本が書かれていると言われている。そんなことを試してみたらどうだ」。

「それもいいかもしれない」と森林官は言った。しかしそれから初めて両目を全く見開

いて、言った、「しかし私は何故別な風になっているのか、貴方はまだ理解されていない、パーゲルさん。ボイマーが私に自転車でぶつかったことにのみ、それが起因しているのであれば、私は自分の人生でそのような事例を百も見いだせます。すると私は別の事でも咎がないことになります。するとやはり良心の呵責もなくなるわけです、でしょう」。

パーゲルは憂わしげに老公を見つめた。老公はまたも静かに両目を閉じて、横になっていた。窓の隅では、顔を夜の闇に据えて、老夫人がまた、甲高い小声で、賛美歌を次々と歌っていた。あたかも全く一人つきりであるかのように。

「それでは、医者が出るまで、ちょっと安静にしてください」とパーゲルは突然言った、「医者にすぐ電話しよう」。

「しかし何故私の問いに答えないので、パーゲルさん」と老公は訴えるように叫んで、半ばベッドで身を起こし、浮き出た、明るい目で彼を見つめた、「私の申している通りではないですか。ボイマーが私に自転車でぶつからなかったら、万事変わっていただろう、と」。

「貴方は良心の呵責に悩まされていて、自ら無罪を言いたいのだ、だろう、クニーブッシュさん」と思案してパーゲルは尋ねた、「しかし無罪は、自分が全く罪がないと感じているときにのみ、妥当するものだ。私だったらむしろ女の子のことを考えることだろう。

ー お休み」。

そう言ってパーゲルは速やかに部屋から出て、明かりを消し、外のドアを施錠した。今や彼は外に出ていた。すでにまことに暗かった。ひょっとしたら彼はそれでもまだジャガイモ穴蔵の許の人々に会うかもしれなかった。

133

パーゲルの意気阻喪の時

穴蔵広場は莊園中庭からおよそ五分離れたところにあって、三本の田畑の道が合流し、二面が森と接している箇所にあった。運送に便利で、森によって穴蔵を凍てつく東風と北風から同時に守るこの立地は、以前から支持されていた。しかしすでに今、秋の終わり、この立地は危険に思われた。この土地が人里離れているため、ジャガイモ泥棒は人目に着かず接近できて、森が近いので、いとも簡単に逃走できた。

パーゲルはこれらの穴蔵に絶えず苛々していた。毎朝ここかしこで土の覆いに穴が掘られていた。この覆いはジャガイモを冬の寒さから守るためのものだった。すでに今一万ツェントナー以上貯蔵されていて、ー 三から五ツェントナーのジャガイモ窃盗は、開けられた箇所を閉ざす苦勞、それに五百ツェントナーの一つの穴蔵がこのような穴のために霜枯れる危険性と比べると腹立たしいものであった。パーゲルは自分の用心が足りず、ジャガイモ穴蔵を従来の広場に設定するという郎党の提案に同意してしまったことを百度となく後悔していた。経験豊かな役人なら、今年、食料品不足から生ずるすべての厄介事を予見していたことだろう。穴蔵が農園中庭のすぐ間近、絶えざる監視の下にあったら、アルトローエの人は全員、彼の許でのジャガイモ掘りに参加していたことであろうと彼は確信していた。しかし以前なら、厳しい勤勉な仕事を何日もした後によりやく得られるようなものを、夜間何の危険もなく奪うことが、今でははるかにより簡単であろう。そのこと

を人々に対し悪く考えることさえできない。この人々には必須のものが欠けているのである。彼らはしばしば空腹に苦しんでいるのであり、過剰にある中からほんの少し奪うだけである、 — これで誰が苦しみを感じよう。

心配して、思案して、パーゲルは薄暗さが募る中、穴蔵の長くて、ほとんど人の背丈の高さの築堤の間をうろついていた。郎党は勿論去っていて、泥棒はまだ現れていなかった。彼は今一度無駄なぶらつきを行った。

しかし全く無駄ではなかった。足で忘れられたシャベルを一本踏んだ。これは夜間濡れたままにしていると、必ずしも結構なことではないであろう。彼はそれを取り上げて、道具部屋に持って行こうとした。その一瞬後、二本の差し込まれたままの鋤にぶつかった。これも取り上げた。そしてすぐに二本のフォーク、更にシャベルを見つけた。これは難しい。一人では農園中庭まで運べない。

意気阻喪して彼は麦わらの巻き束に腰掛けた。突然、完全に果てしもなく意気阻喪していた。しばしばよくあることだが、一人の人間が長い期間、多くの厳しい仕事を果敢に耐えながら、突然或る些細な事で倒れてしまうのである。パーゲルは不屈の好意で、最近の週の多くのかかり困難なことに耐えてきた。しかし自分は朝の暗いうちから夜中まで走り回り、活動していると考え、そしてそれでも、ぞんざいさ、だらしなさ、怠けが増大していると考え、そして十五本のシャベル、鋤、フォークがこの夜錆びるであろうと考えると、彼は倒れてしまった。

彼は麦わらの巻き束の上に座っていた。手で頭を支えて、空は次第に暗くなった。彼の背後では森が神秘的にざわめき、木々から絶えず滴っていた。少しばかり彼は凍えた。彼がただ幾らかより新鮮で、活動的で、行動欲があったなら、今や農園中庭へ行き、責任者達を叱りつけ、彼らの道具を自ら持ち帰るよう、彼らを穴蔵広場へ追いやっていたことだろう。しかし彼は今日もはや誰かを叱りつける気力が少しもなかった。ぶつくさ言う憎しげな反抗の言葉を聞かざるを得ないと思うと、泣き出したくなった。彼は汲み尽くされて、空になった感じがした。彼は全く静かに座っていた。しばらく、自分の中には灰色の広大な荒れ地しかなかった。一本の煙草に火を点ける気力さえもはやなかった。

そのように彼は長いこと静かに座っていた。それから、また彼の脳の中に考えが忍び込み始めた。しかしそれは良き考えではなかった。心配事であった。彼はたった今読んだ枢密顧問官の手紙を思い出した。 — これは終わりの始まりだ、と彼は考えた。いや、全くの終わりだ。

娘の困窮から逃げた枢密顧問官は、今や自分自身のことを考えていた。彼自身とは即ち彼の金である。彼はまだ自分に支払われなかった請負料のことを思い出していた。彼は自分の金を欲していた。しかし自分の金を貰えないと確信したので、請負人を解こうと思った。彼は娘婿に関係する者達皆に、自分の娘のために働く者達皆に、森への立ち入りを禁じた。彼は荘園管理部の乗り物が森を経由する道を利用することを禁じたばかりでなく、かくて外部圃場区まで何時間もの遠回りが必要となったばかりでなく、いや、彼は森林官に、荘園管理部による売却に監視の目を向けるように委託もしていた。穀物が、ジャガイモが、家畜が売却されたら、 — 森林官は速やかに電話で老領主の弁護士に電話すべしとのことであった。この弁護士がそれからすぐに入金される金を押収することになるであろう。

今や明らかになった。商人的観点に立てば、フォン・シュトゥットマン氏が正しかった。つまり彼は老エアースに十月二日請負料を持たせて、ベルリンへ行かせるよう主張したのであった。一 老領主はすると静かにしていたに違いなかったはずである。

「今の私の状況で、私の父が私に面倒をかけると思いますか」とエーファ夫人は叫んでいた、「いえ、フォン・シュトゥットマンさん。請負料には時間があります。一 でも車を私は今すぐ必要としています。ずっと使います、いえ、私は車代を支払います」。

運転手フィンガーは車に関する清算を要求して、それが支払われないならば、すぐにフランクフルトへ戻ると脅しており、遠方の父親と間近の運転手との間で、エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人は車代の方に決めたのであった。

「ひょっとして借用の車で試みてはいかががでしょうか」とフォン・シュトゥットマン氏は提案した。

「それでは私が使うとき、いつも空いているとは限らないでしょう」と恵み深い奥方は苛立って答えた、「いえ、フォン・シュトゥットマンさん、貴方はとても慎重な、とても厳格な商人です。一 でも私は自分の娘を探さなければならないということをいつも忘れていらっしやいます、...」。

フォン・シュトゥットマン氏は青ざめて、唇を噛んだ。一 彼は、国中を回るこの捜査ドライブについての自分の考えをもはや一言も言わなくなった。彼は従った。

「恵み深い奥方様のご意向通りにどうぞ」と彼は言った、「では私は協定の支払いの方を行いましょう。お金の残りはまだ十分に請負料の四分の三あります、...」。

「もうこの請負料のことは仰有らないでください。申しましたでしょう、私の父は、...私の現在の状況では、...お分かり頂けませんの」とフォン・ブラックヴィッツ夫人はほとんど叫んでいた。いや、夫人はこれらの日々かくも自制が効かず、狂おしいほどに苛立っていた。パーゲルもすでに二、三度大声で叱られていた、夫人が彼を呼んだとき、すぐにすべてを放棄しなかったからである。しかし彼に対しては、フォン・シュトゥットマン氏の場合のようにかくも敵対的ではなかった。不可解に見えた、一 フォン・シュトゥットマン氏に対しては一度ほとんど偏愛を見せたのではなかったか。しかしひょっとしたらまさにこの偏愛のせいで、彼にかくも敵対的になっているのではないか。今夫人はわずかに母親のみになっている。一 そして自身の恋心のせいで娘を等閑にしたなら、母親としては失格というわけか。

それから夫人はより平静に言った、「早速貴方が車代をすべて支払ってくださることを望みます、フォン・シュトゥットマンさん。私は車を自由に使いたいです。このことをフィンガーさんとその会社に対して取り決めてください。そして彼を解雇してください。私は彼を運転手として必要としていません。もっと良く、私の希望を聞いてくれる他の者に心当たりがあります、...」。

フォン・シュトゥットマン氏はただお辞儀をした、髪の下まで蒼白になっていた。

「少し癪が高ぶっていて、済みません、フォン・シュトゥットマンさん」と彼女は言って、彼に手を差し出した。「私は気分が悪くて、一 でもこのことはやはり言う必要のないことでしょう」。

フォン・シュトゥットマン氏は、夫人がこのささやかな譲歩に費やした克己心も理解できなかった。彼は機械的にその手を取って、つかえながら、言った、「更に一つ質問をし

てよろしいでしょうか。]

「どうぞ、フォン・シュトゥットマンさん。]

「フィンガーさんと話しをつけるのであれば、彼とはどんな協定をしているのか、大体を知りたいのですが。]

「私は存じません」と夫人は抑揚なく言って、彼の手から自分の手を引っ込めた。「貴方が正しいと思われる具合にすべてを取り決めてください。貴方に何の苦情も申しません。

ー いや、フォン・シュトゥットマンさん」と彼女は突然泣き声で叫んだ、「私を苦しめるおつもりですか。気持ちというものが分からないのですか。]

彼女はほとんど事務所から走り出た。フォン・シュトゥットマン氏は若いパーゲルに対し、激しい身振りを示した。しかし彼はそれから黙った。一瞬彼は事務所の中で行き来して、その後、書き物机に向かって腰を下ろし、時計を鎖から外し、それを自分の前に置いた。パーゲルはまたタイプライターを打ち始めた。彼はこの諍いの間、事務所から出ることができなかった。恵み深い奥方がずっとドアの許に立っていたからである。できるだけ速やかに外に出たいかのように。

シュトゥットマンは静かに書き物机の許に座っていて、まじまじと時計を見つめていた。ほんのしばらくしてから、彼は時を計算していたのに違いない、別荘へ電話を切り替えて、受話器を取り、クランクを回して、ー それから激しい身振りでパーゲルに示した。パーゲルはタイプライターを打つのを止めた。

フォン・シュトゥットマン氏は恐ろしく惨めにやつれて見えた。彼がそのように座って、手に受話器を持ち、別荘からの返事を待っている姿を見た人は、この男は気持ちというものが分からない人とは思わなかったであろう。彼はひよっとしたらややこしく厄介な男であったかもしれない。妻のいない生活で、自らの気持ちに対して多くの障害物を築いていて、もはや一人では自由な気持ちの発露ができなかったのかもしれない。しかしそれでもパーゲルはこの男が震え、興奮の余りほとんど何も発声できないのを見ていた。彼は電話口で、エーファ夫人に対して、即刻の、全くプライベートな話しを切に願っていた。

パーゲルは一気に立ち上がって、自分の部屋へ去った。この不幸なシュトゥットマン、ー 彼は勿論先ほどは障害があって、心にあることを上手く言えなかったのである。今や戦に敗れ、ほとんど負けて、今や自分のなすべきことを承知していた。夫人と商人としてではなく、人間として話すということである。

思いがけず、すぐにフォン・シュトゥットマン氏がノックした。彼はパーゲルに、すぐに別荘へ出掛け、運転手フィンガーとの話しを決めるように頼んだ。ー 「フォン・ブラックヴィッツ夫人は早速ドライブを望まれている。多分貴方は同乗する必要がある。フランクフルトの会社までだ。いや、頼む、パーゲル。私自身は行きたくない、…。フォン・ブラックヴィッツ夫人は六時に私と話す意向だ。]

パーゲルは実際、金を入れたスーツケースを携帯して、フランクフルトまで同乗しなければならなかった。運転手フィンガーは、購入金額すべてを受領する全権委任を有していなかった。

パーゲルは運転手の隣りに座った。車の後部座席には恵み深い夫人のみが座った。しかし夫人は、心地良く、広い革の座席に寄りかかっていず、垂直に、席の端に座っていて、白い顔を窓ガラスに押し付け、目を据えていた。時々彼女は叫んだ、「止めて」。

それから夫人は下りた、どこか、国道の随意の場所で、夫人は脇道へ二、三步踏み込み、地面を注意深く観察して、それから再び戻って来た。

「ゆっくり進んで」。

再びそれから夫人は下りた。国道の溝に一枚の紙切れを見つけていた。夫人はそれを追い、開けて、思案して見つめた。彼女がそれを開けるときの失意の様で、実際そこに娘からの知らせが見つかる見込みはないことが見てとれた。それからまた夫人は乗り込んだ。

「ゆっくり進んで」。

再三彼女は呼びかけた、「もっとゆっくり、もっとゆっくり、顔を一人一人見分けたいの」。

エンジンが苛立って呻り、時速二十キロで強力な車が通りを這って行った。

「もっとゆっくりよ」。

十五キロ、...

「いつもこんな具合だ」と運転手が囁いた、「どこへ向かおうと、夫人にはどうでも良くて、ただ下りて、歩き回り、調べなきゃならないのだ。奴がまだここら一帯にいるかのように」。

「注意してください、 — ここで止めてください」。

夫人は下りた。夫人は国道管理棟へ行った。しばらく留まっていた。運転手が語った、「ただ村落や市街地だけ素早く運転していいのだ。そのとき夫人は窓から外を見ていない。夫人は、両人はいつも二人っきりと思っているのだろう。 — まあ、今日私はお仕舞いということで喜んでる」。

「夫人が気の毒ではないのか」とパーゲルはきちんとした模範運転手に尋ねた。

「気の毒、...勿論気の毒に思う」と彼は答えた、「しかし結局のところ、私は六十馬力のホルヒを運転しているわけで、子供の車ではない。こんなにのろのろ運転して回ることが、運転手に楽しいかということになる」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は国道管理棟から出て来た、「ゆっくり進んで」と夫人は言った。

パーゲルは運転手を急き立てたかった。彼らは十二時までにフランクフルトで車の支払いを済ませなければならなかった。シュトゥットマンは、十二時には新しいドル相場になると彼に念を押していた。...しかしパーゲルは一言も言わなかった、運転手にも、恵み深い夫人にも、...

彼らが町に着いて、清算したときには、三時になっていた。ドルは前日の二千四百二十億マルクに対して三千二百億マルクになっていた、 — 請負料のすべてが消えた。それどころかわずかな借用が残った、...

「構いません」と殿方達は丁重に言った、「この些少はご随意に片付けてください」。

パーゲルには、これはフォン・シュトゥットマン氏にとって応えるであろうと分かっていた。パーゲルはまだ大きな額を報酬支払いのために持ち帰るであろうとシュトゥットマンは期待していた。頼み込んだ六時の話し合いができなくなったことも、勿論フォン・シュトゥットマン氏にとってはそれ以上に痛手となろう。フォン・ブラックヴィッツ夫人はパーゲルを或る酒場に置き去りにして、新しい運転手を連れに出掛けた。二人が戻って来るまで、数時間経った。大きな美しい車は、路上に運転手がいなままであった。

ようやく、ほとんど薄暗くなっていた頃、夫人は新しい運転手と一緒に現れた。「パーゲルさん、こちらオスカル」と夫人は言って、疲れて腰を下ろした、「オスカルは、父の家政婦の息子です。彼のことを思い出したの、車の整備工になっていて、...」。

「運転免許も持っています」とオスカルは言って、テーブルの許に一緒に腰掛けた。

オスカルは若造で、二十代の初め、途方もない大きな両手とパン生地の塊から粗雑に造られたような顔をしていた。しかし彼は気立て良く見え、少しばかり単純に見えた。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は素早く一杯のコーヒーを次々に飲んだ。しかし夫人は何も食べなかった。

「しっかり食べなさい、オスカル。これから先、道は遠いのよ」。

「恵み深い奥方様、貴女も少しばかり召し上がってください」。

「いや、結構、パーゲルさん。 — オスカルはヴィオレットを知っているのよ。娘を見つける加勢をしてくれましょう。オスカル、あなたがノイローエから見習いに行ったとき、ヴィオレットは何歳でした」。

「八歳です」。

「少なくとも、私の希望の通りに運転してくれるわよね」。

「勿論です、フォン・ブラックヴィッツ奥方様。ずっとゆっくりで、皆を見つめて、 — 分かっていますよ。それを新聞で読みましたから、...」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は一瞬、両目を閉じた。それから強調してパーゲルに言った、「あのフィンガーは、私に意向通りに運転することをどんなに嫌がっていたか、気付いていました。皆が今ではよく私の意向には渋々です、 — 貴方もですよ、パーゲルさん」。

彼はある仕草をした。

夫人は言った、「私の望み通りにさせてください。私は娘を失ったのです、そうでしょう。あなた方のうちどちらかがその前、賢かったらと思いますよ、 — でも今となっては。どうします」。

パーゲルは黙った。

ようやく彼らは出発した。六時を過ぎていた。すでに全く暗かった。何故夫人は、ノイローエへの直接の道を通らずに、何マイルもの迂回をしたのか、何故暗くなったのにも関わらず、ほとんど二十キロ未満の速さで車を走らせたのか、何故夜なのになお停止しなければならなかったのか、 — 恵み深い夫人は二、三步、未知の森の中へ入ったのである。

— ヴォルフガングはこのすべてが分からなかった。

ひょっとしたら夫人は一人っきりになりたかったのかもしれない。ひょっとしたら暗い夜の中に立って、自分の体の中のエンジンの物音が消えて、自身の心臓の動悸をまた確かめるまで待っていたのかもしれない。夫人は自らの自我を感じながら、かつて自分の自我の一部であった娘をも感じ取ることができると思ったのであろうか。

それとも夫人は単に、夜の中、目を閉じて、夜の窮屈な闇の中に立って、森を通じてやって来るかもしれないある幻影を — 男と娘とを待っていたのであろうか。この行方不明の二人を夫人はどう考えているのか。前に行く男の姿、醜い、干涸らびた灰色の頭を垂れて、薄い唇を結んでいる男を見ているのだろうか。娘はその男の後、半歩下がって、娘はまた目を閉じて、相変わらず、母親が最後に見たときのように眠っているのであろうか。

夫人は両人が故郷を失って、余所の冷たい大地の上をさまよっている様を見ているのであろうか。 — 二人を客人として迎えるドアは一つもなく、二人には何ら好意的言葉もかけられないのであろうか。

夫人が最初恐れていたような、秘かな恋人はもはや現れず、事態はすべて違ふとパーゲルが夫人に教えたのはつい最近のことであった。半ば阿呆の、半ば恥ずべきしかめっ面の従者が、娘さんを奪った敵なのである、と。「そんなこと考えられない、信じられません」と彼女は叫んだのであった。

それ以来わずかな時間した経っていないのであるが、すでに夫人はそれを信じていた。すでにそれを承知し、すでに両者の姿を思い浮かべていた。 — あたかも二人がいつも無言で並んでいるに違いないかのようで、両人とも黙って、同等の地獄の苦しみに取り憑かれているかのようであった。夫人には二人が明瞭に見えて、夫人は、溝のあるゴム底の布地の灰色運動靴を男は履いていると見え、それで脇道に行くたびに、この靴底の痕跡を探すことにならなかつただろうか。彼女はヴィオレットがはっきりと見え、それで娘はしっかりと整っていないドレスの上に色褪せた灰色の紳士用コートを着ている、男が眠っている娘にそのドレスを着せたのだからと見えなかつただろうか。

いや、これらの男達、 — この警察、この検察、勿体ぶって、いつも呼び鈴を押して、使者を送り、あれこれ知りたがり、靴のサイズを測ろうとする。彼らがヴィオレットは見つけ出すことはなかろう、夫人には分かっていた。夫人は確信していた。自分一人がヴィオレットに会えるであろう、いつの日か、ある時、どんなに長く待つことになろうと構わない、ただそれは外に違いない、 — ある日、その時が来たら、夫人はきっと然るべき地点に立つことになろう。

これらの人々はそれどころか、ヴィオレットの部屋で一種の家宅捜査のようなものをするとし、窓台での指紋や手紙の調査を求めなかつただろうか。夫人はそれを許可しなかつた。彼女は部屋をただ施錠した。今更何のための調査か。すべて明白である。ヴィオレットの部屋は夫人一人のものである。夫人が家に帰って来ると、そのドライブで完全に草臥れて、それどころか疲れすぎていて、すぐアヒムを求めて会ったときも、泣くことすらできず、夫人はヴィオレットの部屋に入った。夫人はドアに施錠し、ベッドの側に腰掛け、両目を閉ざした。

勿論、最初夫人はなおも窓に対し猜疑の目を向けた。しかし窓は堅く閉ざされている。夫人はもはや不用心ではない。娘は落ち着いて寝られよう。娘は自分のベッドにいる。次第に母親も眠り込んだ。空のベッドの側の籐椅子に座っていて、願望は夢となる。最後に彼女はしっかりと眠って、目覚めた朝、ようやく夫人は着替えて、体を洗い、新しい一日の備えをする。

これらの朝、部屋全体が色褪せた慰めのない灰色に包まれて、騎兵隊長の看護人との子供っぽい、ガミガミ言う泣き叫びが、静寂の中、痛々しく明瞭に夫人の耳に響いて来て、死んだように眠った後、ゆっくりと目覚める脳内に夫人の喪失の思いが、燃え尽くす火災のように侵入してくると、 — これらの朝は、たまらない。しかし車はドアの前に止まっていて、すぐに夫人は出発することだろう。元来夫人は急がなければならない。ひょっとしたら娘との再会がほんの間近かもしれない。

この阿呆な銜学者、シュトゥットマンときたら。この人はこの車が夫人にとってどんな

意味があるのか、悟ってもいない。車は夫人の未来への架け橋なのであり、唯一の希望なのだ。それなのに、彼は緊急のとても急いだプライベートな話し合いを夫人に求めた。でも夫人はここ森の中にいる、もう九時か十時だ。 — あの人は、不幸に見舞われた人を人間手放しはしないということが分からない。あの人が向こうで夫人を待っているから、夫人はただここで待っているのかもしれない。

最後にまた夫人は車に乗り込んだ。夫人は車を走らせた。ノイローエに近付き、今や実際、十時になっていた。しかし彼女は小都市マイエンブルクを通るとき、再び止めさせた。夫人は空腹の余り倒れそうだ。ここには立派なホテル、「フォン・プロイセン王子」亭があって、夫人は若い娘の時分、よくここに両親と来ていた。

彼女はメニューを取り寄せて、注文する前に長く考えて選んだ。夫人の空腹に必ずしもぴったりのものはメニューには見つからなかった。しかし結局あれか、これか選んだ。夫人は手にワインリストを取った。夫人はメニューを若いパーゲルに渡した。夫人はワインを注文した。絶えず夫人は若いパーゲルを目の隅から窺っていた。彼は自分は空腹ではないと言った。彼はほとんど不機嫌であった。 — いや、人間が夫人にとって鏡となったように、夫人は完全に彼の心の中を覗くことができた。

夫人は、彼が苛々して倒れそうなのを察した。夫人は、フォン・シュトゥットマン氏に夫人が約束した話し合いのことを彼が承知しているのを察した。ひょっとしたら彼はもっと多くのことを、視線やある種の言葉、希望について承知しているのかもしれない。...女性というものはどれほど男達が互いの間で腹を割って話すか知らない、男達はとても信じられないことを仕上げる。その通り、若いパーゲルである。彼は苛々して、自分の友に共感して倒れそうである。このパーゲルさんは夫人のことを思っていないのかしら。ひょっとしたら、夫人が躊躇い、待っているのには理由があるかもしれないと思もしない。この人はそもそも夫人のことを考えていない。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は二、三杯ワインを飲んだ。少しばかり注文した食事も食べた。それから夫人は給仕に冬で使用されていないベランダを開けさせた。夫人はそこにしばらく立っていた。 — テーブルが上下に重ねられていた。窓の前は夜で、小さな庭園は見えず、小川の岸辺の柳もポプラも見えなかった。

夫人はしばらくベランダに立っていた。若いパーゲルは丁重に立っていた。ひょっとしたらその横でうんざりした様子がかすかに見られたかもしれない。夫人が何故ここに出なければならぬのか、彼には分からなかった。夫人は出ながら、小声で言った、「ここに私はアヒムと最初の遠出のとき、二人で来たの、丁度婚約したときよ」。

夫人は今一度振り返って、今一度ベランダを観察した。いや、そこにはその間にあるほぼ二十年間の経過は何も見られなかった。同じガラスのベランダに見えた。それ以来結婚生活のすべてが経過した、一人の子供が生まれた。一つの戦争よりも多くのものが失われた。 — さようなら、消えた生命の炎よ、もはやまた燃えることはない、 — 消え去った青春、失われた笑い声、 — さらば。

静かになって夫人はまたホテルの食堂のテーブルに着いた。物思いに耽って夫人は指の間でワインのグラスの脚を回した。若いパーゲルの態度で、夫人は彼がもはや苛立って、もはや不機嫌でもなく、もはや急いでいないことに気付いた。 — 彼は了解したのであった。青春は辛抱強くないというのは真実ではない。 — 真の気持ちを真の青春は

すぐに理解するのである。

少し遅れてどこかの殿方が彼らのテーブルに来た。以前付き合いのあった人々の一人で、一帯のどこかの騎士領所有者であった。...彼は多分若干耳に挟み、若干読んで、それに若干飲んでいたのであろう。今や彼が、一同の派遣者となって、同情を上辺に、聞き出すためにやって来た。彼は夫人がそこに座っていて、一人の若造とワインを飲んでいるのを見た。この両人はそれどころかベランダに消えた。 — これらの男どもの空想は歯止めがきかない。

夫人は起き上がった。怒りで蒼白になっていた。この殿方は夫人の食卓の許に腰を下ろして、酩酊者のしつこさで、策謀の戯れの問いに没頭していて、夫人がもう立ち上がっていることに気付いてもいなかった。

蒼白に立腹して、彼女は赤ら顔に向かって言った、「ご同情に感謝申し上げます、フォン、... 殿。私の娘が亡くなったら、最初に花輪を頂けることでしょう」。

若いパーゲルを従えて、夫人は酒場から出た。致命的沈黙が見られた。長いこと経ってから、完全に混乱した給仕が車に近寄って自分の金を受け取った。

彼らがノイローエに着いたのは、真夜中過ぎであった。「貴方の友にお伝えください」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は家の中に入るとき、言った、「明日早朝、私が話せるときに、彼に電話致します、と」。

フォン・シュトゥットマン氏は静かに事務所に座っていて、静かにその報告を聞いた、「パーゲル、私はいつもこう考えていた」と彼は言って、少しばかり苦笑していた、「信頼性はこの世で願わしい特性だとな。しかし貴方は何の特性があれ、ただ信頼できる者にだけはなるな」。

彼は一瞬、事務所内で行き来した。彼は老いて、疲れて見えた、「私はフォン・ブラックヴィッツ夫人宛に今晚一通の手紙も書いた」と彼は最後に言った。「夫人は向こうでそれを見つけることだろう。まあ、いい。明日まで待つことにしよう」。

しかし彼は自分の部屋へ行かなかった。彼は事務所に残った。彼はあちこち歩いた。彼の視線は意志に反して、時折電話機に落ちたが、彼の考えていることを暴露していた。ひょっとして夫人は今にも電話してくるのではないか。

パーゲルは寝床に横になった。彼は相手があちこち歩く物音を耳にしていた。絶えずあちこちしており、彼はそれを聞きながら眠り込んだ。

次の朝となった。朝食の時間からフォン・シュトゥットマン氏は事務所に座っていて、農園のことは構っていなかった。パーゲルはあちら、こちらと走り回った。しかしいつも、彼が事務所に戻って来るたびに、フォン・シュトゥットマン氏はまだ座っていた。最初は、何か働いているかのような、手紙を書いているかのような体裁を取り繕おうとしていた。

— しかしそれから一切を諦めた。彼はただ座っていた。自分の判決を待っている惨めな、不幸な人間であった。

十時半にパーゲルは、大きな車がノイローエを通過して行くのを見た。彼は事務所へ駆けた。「フォン・ブラックヴィッツ夫人はこちらにいらっしゃらなかったのですか。電話されなかったのですか」。

「違う、何故だ」。

「たった今車が出て行きました」。

フォン・シュトゥットマン氏は電話機を握った。今回彼の手は震えていなかった。彼の声は聞き取れて、こう尋ねていた、「こちらはシュトゥットマンです。 — フォン・ブラックヴィッツ夫人をお願いします、 — 今出て行ったのですか、 — 分かりました、 — 夫人は何か言い残されていますか。 — そう、調べてください、電話口でこのまま待っています」。

彼は座って、受話器を手に持って、顔を下げている、影の中において、 — 影の — 中であつた。それから言った、「はい、私はまだここにいます。 — 今日には戻らないということだけでですか、他には何も。 — 有り難う」。

彼は受話器を置いて、パーゲルを見ることなく、彼に対して述べた、「貴方に、フォン・ブラックヴィッツ夫人は昨晚何と言ったのだ」。

「夫人は今日貴方に話すことができたら、すぐに電話します、と」。

フォン・シュトゥットマン氏は背伸びをして、ほとんど微笑していた、「私はまたしても階段から転げ落ちたな、親愛なるパーゲルよ。ただ前回のホテルのときよりも若干傷みが強い。 — それでも私はこの世のどこかに、無条件に信頼性を評価するところがあると固く信じている。私は長いこと私に依頼されていた職に就くことに決めた。私はシュレック枢密顧問官の療養所で働くつもりだ。そこにいる患者達は、完全な信頼性、気質の均等性、尽きることのない忍耐を評価する術を心得ていると確信している」。

パーゲルはフォン・シュトゥットマン氏を見つめた。彼は、今から神経症患者、精神病患者の子守娘となるつもりであつた。 — 皮肉で言ったのか、それとも真面目に言ったのか。しかし彼は全く真面目に語っていた。これほど真面目なことは以前にもなかつた。彼は、この馬鹿げた時代の愚行を共にしようとか、自ら馬鹿になろうという気はなかつた。疲れを知らず、絶望せず、彼は更に進んで行った。彼が打撃を受けたこと、一つの希望が砕けたこと、それは確かであつた。しかし彼はそれに耐えた。

「私は女性向きの人間ではない」と彼は言ってパーゲルを見つめた、「いや、私は女性との交際に向いていない。私は女性達にとって、余りに規則正しく、きっちりしていて、 — 何故か女性達を絶望させてしまう。昔一度、随分昔のことだが」、 — 彼は漠然とした手の仕草をして、何という霧のかかった遠い昔のことであるか、暗示した、 — 「昔一度、私も婚約したことがあつた。私は、より若く、ひよっとしたらもっと柔軟であつた。そこで、いずれにしろ彼女は婚約を解約した。全く突然に、ある日のことだ。私には思いがけなかつた。彼女は私に向かって言った、『目覚まし時計と結婚しなければならぬような気がするの。 — 時計がチクタク言って、あなたは本当に信頼できる、あなたは早くもなく遅くもなく進む。あなたは正確な時間に呼び鈴を押す。 — あなたはただ絶望的だわ』と。貴方はこれが分かるか、パーゲル」。

パーゲルは、丁重な、関心を示した、微かに拒絶する表情で聞いていた。これはいずれにしろ同じシュトゥットマンである。彼は、パーゲルが上手く行かないとき、率直に打ち明けることをすべて素っ気なく拒絶する人であつた。この打撃は彼には辛く応えたのに違いない。多分今回も解消[問題解決法]は全く思いがけないものに思われたのであろう。

「それで、貴方は別なタイプだ、パーゲル」と変貌した、お喋り屋のシュトゥットマンは言った、「貴方は言わば直線の中には暮らしていない、 — むしろ、あちこち、行ったり、来たりだ。貴方は思いがけないことを自ら喜ぼう、 — 私は思いがけないことを

憎む」。

彼の声には何か冷たいもの、拒絶するものが感じられた。パーゲルは思った。フォン・シュトゥットマン氏は思いがけないことを、とりわけフェアでないと思い、それ故軽蔑すべきものだと思うのだ、と。

しかしそれ以上フォン・シュトゥットマン氏はやはりこの興奮した時にも、親しい打ち明け話しを進めなかった。すぐにまた彼は配慮する友となった。

「そこで貴方はここに一人残る、パーゲル」と彼は言った、「貴方には厄介なことだろう。しかし案ずるに、長くは続かないかもしれない。フォン・ブラックヴィッツ夫人は自分の父親についての判断を間違っていると思うのだ。請負料は是が非でも支払われなければならないだろう、法的理由から言っても、個人的理由から言っても。それで貴方はこの一切を更に骨身に感じて、手紙でこのことを知らせて欲しいのだ。私の関心は変わることがない。そしていつかある変化が生じたら、一 向こうの別荘でだ、一 私は本当に必要とされよう、...」。彼は一瞬躊躇った、そして素早く言った、「それで、そのことを私に書いてくれるだろう、な」。

「勿論です」とパーゲルは言った、「しかし貴方はいつ発つつもりです、フォン・シュトゥットマンさん。今すぐではないでしょう」。

「今すぐだ。つまり、午後の列車だ。枢密顧問官シュレック氏とは、その後ベルリンから連絡を取るつもりだ」。

「何ですって、もう今日ですか。フォン・ブラックヴィッツ夫人にはお別れの挨拶をしないのですか」。

「この後騎兵隊長を訪ねるつもりだ。ひょっとしたら私のことが分かろう。昨日はまだそうとは思われなかったが。フォン・ブラックヴィッツ夫人宛には、二、三行認めることにする。いや、そうだ、親愛なるパーゲル、貴方の件もこの機会にきちんとしておこう」。

「どの件です」とパーゲルは叫んだ、「片付いていないものはありません」。

「きっと思い当たろう。そうでなくても、私は、申したように、信頼出来る片付け方をするのだ、...」。

かくてフォン・シュトゥットマン氏は旅立った。メリットのある男で、信頼できる友であるが、少しばかり硬直している。自らを世界の隅石と見なす不運の鶏である。

そして勿論彼は、パーゲルのためになおも迅速にきちんとしてしようと思ったかの件のことで、善良なパーゲルを、まことに煮え湯を飲まされるような思いにさせた。

「本当のことでしょうか」と恵み深い奥方は翌朝極めて不機嫌に言った、「私の夫は外貨で二千金マルクの信用借りの金が貴方に対してあるとか。何のことでしょう」。

これは若いパーゲルにとって本当に辛いことであった。内心彼は友のシュトゥットマンを呪った。シュトゥットマンは彼の心の夫人宛てへの別れの手紙の中で、この件について黙っていることができなかつたのである。(この困難な日々に、興奮して絶望状態の夫人に、この件について話すとは信じがたい)。

パーゲルはフォン・シュトゥットマン氏をあっさりと見捨てた。この件は自分と騎兵隊長殿の間で片付いています。ちなみに決して二千金マルクではありません。極めて曖昧な件で、一 いわば半ば飲食費用、旅行費用に消えています。すべてこの件はもはや承知していません、...申しましたように、とうに片付いています。

フォン・ブラックヴィッツ夫人はまじまじと彼をその悲しげな目で見つめた。「どうして私に嘘を仰有ろうとなさるのです、パーゲルさん」と最後に夫人は言った、「フォン・シュトゥットマンさんは、偉大な心理学者で、少なくとも仕事上の件ではそうで、貴方がこの金の件では遠慮なさるであろうと、すでに予見されていたのです。これはフォン・ブラックヴィッツ殿に、ルーレットの賭けの際に貴方が貸した二千マルクのことなのでしょう、でしょう」。

「シュトゥットマンの知ったことではありません」とパーゲルは叫んだ、今や本当に苛立っていた、「私は自分の件は一人できちんとします。ちなみに警察がすべての賭け金を押収しました。 — すべて消えてしまったのです」。

夫人は彼を冷静に見つめた、「何故金の件で遠慮なさるのです」と彼女は尋ねた、「その必要はありません。ひょっとしたらこの点、私は父の実用的センスを受け継いでいるのかもしれない」。

「私はここに金のために来ているわけではありません」とパーゲルは不機嫌に言った、「まあ、まことにそのように見えますが、...」。

「嬉しいわ」と夫人は小声で言った、「ノイローエが少なくとも一人の方にとって気に入って貰えたら」。結びとして言った、「ご存じのように、そのお金を今はお渡しできません。でも私は覚えています。忘れません。それにまた貴方の給与問題も片付けるべきとフォン・シュトゥットマンさんは私に書いています、...」。

パーゲルは内心で荒れた。

「貴方はこれまで単に一種の小遣い銭のみを得ていました。これは勿論いけません。私は考えました。私の父の役人達はいつもおよそ十ツェントナーライ麦相当の月給を得ていました。貴方はこれから週ごとに、郎党に賃金を支払う際、御自身、二・五ツェントナーのライ麦相当を支払ってください」。

「私は正式に学んだ農業主ではありません。こちらは一人の検査官が必要でしょう」。

「今は新しい人を望みません、パーゲルさん。私を困らせないでください、私が申したようにしてくださいませんか」。

彼は夫人の手を取った。

「そして仕事のことは差し当たり、すべて貴方のお考え通りに、私に余り尋ねずに、片付けてください。ひょっとしたら私の夫は、思ったより早く、もう回復するかもしれません」。

夫人は今一度彼に好意的に頷きかけた。

彼は憂わしげに言った、「案じますに、そうは行かないでしょう。多すぎます。私には何の経験もありませんし」。

「いえ、上手く行きましょう」と夫人は頷いた、「貴方が精を出していただければ、フォン・シュトゥットマンさんの十分な代わりとなりましょう」。

哀れなフォン・シュトゥットマン氏、 — これがエーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人からの彼の別れであった。彼が尊敬し、それどころかひょっとしたら愛していたかもしれない夫人からの。しかし多分に想像されることだが、シュトゥットマンのかの別れの手紙には、給料問題とか賭博の借金といった仕事の事柄ばかりでなく、男どもの気恥ずかしい愛というよりは、傷付いた自尊心と思われるかの情熱的文章も書かれていたことで

あろう。これらの文章は女性達には、いつも侮辱的なもの、かつ滑稽なものに思われるものである。

フォン・ブラックヴィッツ夫人がシュトゥットマンの狼狽した退去を夫人の観点から観察したら、夫人はこう言えたであろう。この友は彼女が最も辛いときに、彼女を見棄てたのである、夫人が二つの支払いを、彼の願いとは別の順番で済ますようにと主張したがために、と。彼女はこうも言えよう、この友は無礼にも、恋愛感情の話し合いを要求しようとした。夫人の娘が命の危機に、夫人の夫が重い病に見舞われているときに、と。

いや、これらの事柄を女性の観点から見たら、どんな女性の観点から見ても、フォン・シュトゥットマン氏は完全に不当であろう。勿論商人的観点からは、正当と思われる進め方である。

今日の昼、ヴォルフガングは彼から一通の手紙を得ていた。 —

「それでは、親愛なる昔からの友よ、いや、親愛なる若い友よ、より率直に言えば、私はここ枢密顧問官シュレックの許で申し分ない具合だ。一人の気取った変わり者で、古参の少年であるが、時計のように進行する営みだ。...一度この食事療法を覗いて欲しいものだ。親愛なるパーゲルよ、計量、分割、添加、調理におけるこのような正確さは、最良の運営のベルリンのホテルでも見られないものだ。ついでに述べておくと、私は純然たるベジタリアンの食事を摂ることに決めた。その上、煙草もアルコールも止めた。 — このことは何故か私の全体質にもっと良く合っているように見える。もっと早くこうしなかったのが不思議だ。一度このことを考えてみて欲しい。煙草は南アメリカ、中央アメリカ、熱帯地方由来のものだ。アルコール、つまりワインは、聖書によれば、パレスティナ由来だ。 — それ故我々北方の質には合わない。もっとも貴方を改宗させる気はない。いづれにせよ、言わざるを得ないだろう、つまり肉食は、...」。このような次第で手紙の四頁以上続き、最後に考えるべき追伸がある。「枢密顧問官はまだ請負料のことで動いていないか。とても不思議に思える」。

ヴォルフガング・パーゲルは麦わら巻き束に座っていて、ますます湿っぽくなり、溜め息を吐いた。それでもポケットを探り、一本煙草を見つけ、それに火を点けた。つまりだ、フォン・シュトゥットマン氏は不思議に思う必要はない。フォン・シュトゥットマン氏の言う通りだ。枢密顧問官は請負料のことで動いた。それどころか極めて意地悪く動いた。最初の方策の手に次の手が続くことだろう。この件は緊迫しよう。お仕舞い、終わりだ、おまえの[夫人の]忠実な父のすることよ。

どの男の性質にも、それに若い男の性質に見られることだが、何もならないこと、没落の運命にあるような件に対しては尽力したくない。若干錆びて行くシャベルに直面して、若いパーゲルが陥った深い意気阻喪は多分とりわけこのことに由来していたであろう。枢密顧問官が、二、三週間後に、この営みを停止させるつもりであれば、彼が走り回って、農業経営を進めても、もはや面白くない。そうなれば自分はもう沢山、結構だ。そうなったら一歩も活動しない。そうなったら自分はもはや何の面倒も見ない、 — 選りに選って、多くの州と五十四の党派からなる、このドイツ帝国の破滅する片隅で、お休みなさい、だ。

この老枢密顧問官を或る未知数と考えるならば、つまりローデックロス地の服の、団子鼻、策謀的目つきの既知数の人物としてではなく、単に所有者として、請負人雇用者とし

て考えるならば、彼が不当であるとは少しも言えないだろう。(すでにまたより活気づいてきたパーゲルは考えた、大方の人間が大方の事柄において、正当であり、同時にかつ不当であるというのは、呪わしいことだ)。この請負人は明白に自分の金銭での責務を果たさなかった。請負人は高価の個人的嗜好に従って、農業経営に負担をかけている。請負人は経験の浅い協力者と共に劣等な農業経営をし、その上この請負人はもはや事業能力がない。このような請負人が自分の所有地を管理しているのを見たら、どのような請負人雇用者も不安一杯になるに違いない。

勿論、他方こう考えると、つまり老請負人雇用者は大層な金持ちであり、本来の請負人は自分の娘であり、この娘は目下かなりひどい目に遭っていることを考えると、この請負人雇用者はまたひどく不当なことをしている。いや、とパーゲルは考えた、この劣等な古参の少年にとっても、彼がこの件を全く無造作に森林官に指示したことは全く似つかわしくない、と。彼でも分かっている、自分が今、自分の娘から農業経営の更なる指揮を取り上げ、娘をいわば路上に放り出したら、自分はこの全一帯で、社会的に、そして人間的に終わりだ、と。...

いや、と若いパーゲルは考えた、この森林官への思い付きは青天の霹靂ではあるまい。何か自分が知らない前史があるに違いない。ますます活動的になりながら、若いパーゲルは考えた、恵み深い奥方にこの手紙のことを話さないと森林官に約束したのは迂闊だった。私は羊頭[間抜け]だった、と彼は考えて、今や麦わら巻き束から立ち上がった。私はアマンダが別荘へ持って行った個人的郵便を調べて見なければなるまい。ひょっとしたら、ほぼ確かなことであるが、枢密顧問官から娘宛の一通の手紙があったはずである。ひょっとしたら、ほぼ確かなことであるが、夫人はその手紙を読まずに、返事もしなかったのかもしれない。夫人はほぼ毎日車で世界中を回っている。一 別荘へ一度また騎兵隊長の許に尋ねてみる必要があるだろう。今は夫人は不在だ。私は目撃したことがあるぞ、かなりの束の手紙が開封されずに夫人の書き物机の上にあった。それを一度手に取って確認してみよう。郵便スタンプや筆跡から、あの古参の少年のものが中に入っているか確かめよう。その場合、この側面からこの件を開始できよう。

彼はあちこち歩いて、彼の人生を困難なものにしようとしている一本の鋤を一蹴りして、道から飛ばした。

いや、我が神よ、忌々しくもまたここで全く無駄な仕事をして終わりたくない、ペーターが私を呼び戻すまでの待機時間を単に無為に過ごしたくない。ここの人々のために何か果たしたと言いたい。一 世界の中に何らかの小さな隅石を置くのだ、残るもので、あの古参の少年がすぐには蹴飛ばせないものを。

別の、一つの喜ばしい考えがやって来た。煙草は弧を描いて、近くのジャガイモの穴蔵を越え、夜の闇の中に消えた。悪癖の、熱帯地方に由来するニコチンは止めてしまえ。私はすでに何か素敵なことを仕上げたぞ。私は我らの秘密の監視人を次の二十六週間ベッドに寝かせた。道路封鎖や売却監視は、まずは無効だ。親愛なる枢密顧問官、おぬしは抜け目なくしようとして、直に変わる紙幣状態に神秘的合図を送って、まずは彼の森の仕事、木の伐採を取り上げた。しかし私の方がもっと抜け目ない。私は森林官からすべて奪った。スパイのいる森か。いや、これはいかん。私は医者に電話しなければならない。大急ぎで事務所だ。

短い意気阻喪の時間は過ぎた。彼はもはや汲み尽くされて空ではなかった。彼は若い男で、仕事は楽しく、大団円へ導くつもりであった。急ぎ足で彼は夜の中、農園中庭へ向かった。

騎兵隊長は目覚める

勿論、 — いつものように、しかし慣れっこにもなろうが、 — パーゲルはすぐには事務所に行けなかった。至急の時でも、常に何か割り込んで来るものである。

今回のそれは郡中心都市からの獣医で、珍しい名前ホフアールト[希望性質]とか言う者で、しかし名前のように見えなかった。給餌長が、パーゲル不在の間に、呼んでいた。騎兵隊長の騎乗馬が朝から産気づいていた。イギリス産のサラブレッドの雌馬で、マーベルという名前であったが、お産が終わらなかった。雌馬は陣痛を訴えていたが、しかしお産は進まなかった。

人々は然るべきことをすべて行っていた。雌馬の房は密にカーテンが張られていた。産気づいた馬は羞恥心があって、人間の目が覗くと、それに堪えられないからである。好奇心で覗く視線が一つあると、何時間もお産が遅れる。

しかしこの隔離もすでに終わっていた。パーゲルが獣医と房に入ると、馬は彼らに、隅の方が赤くなった視線を向けた。苦悩を語り、助けを請う視線であった。痛みが耐え難くなって、人間の場合と同様、羞恥心は消えていた。

「三十分ほど前までは若駒の心音が聞こえました。今は一切静かです。確信していますが、死んでいます。多分ヘソの緒で窒息したのでしょう。 — 残念ながら呼ばれたのが遅すぎました」。

獣医ホフアールトはパーゲルを、すべての死を自分の借りとして帳簿に記すことに慣れている男の諦念の表情でパーゲルを見つめた。

「どうしたらいいのか」とパーゲルは尋ねた。パーゲルは借りの問題よりは動物の苦悩にもっと関心があった。

「調べてみたのです」と獣医はほっとして熱心に言った、「残念ながらこの雌馬の産道がとても狭い。私は中の若駒を切り刻んで、部分ごとに取り出す必要があります。少なくとも母体だけは救えます」。

「使いものにならないサラブレッドになるな」とパーゲルは思案して言った、「騎兵隊長がこれを数百マルクでどこかの競走馬の厩舎から買ったと言われている。彼はこの馬に愛着があった。 — それでは、ドクトル殿」と彼はより威勢良く言った、「もう十五分ほど、二十分間、待ってください。 — それから貴方にお伝えしましょう」。

「陣痛はほとんど止んでいます。動悸はとても弱い。その間この馬のために濃いコーヒーを準備してくれる人はいませんか。それにカンフル精も与えましょう。...すべて迅速にしなければなりません」。

「すべて迅速に処理しよう。コーヒーはこちらに届けましょう。どれほどです。ワインの瓶一杯にですか。ワインの瓶で、了解」。

彼は農園中庭を越えて、官吏の家へ向かった。暗がりの中で、誰かが彼に語りかけ、立

ち塞がった。多分黒いミンナであったろう。彼女は恵み深い夫人のこと、ゾフィーのことを何か嘆いていた。...彼は急いで側を通り過ぎて、事務所に向かった。...

彼はアマンダにコーヒーの指示を与えながら、すでに保険医に電話を繋ぐよう頼んでいた。医者にはできないと言い、事務所のドアに黒いミンナが現れて、また何かわめき始めた。...彼は憤然として彼女を追い払う仕草をした、医者にはそれでも何うことにすると決めて、九時か九時半に事務所に参ります、パーゲルさんに森林官の家への道を教えて頂きましょうと述べた。パーゲルは「了解しました」と言った。彼はアマンダに呼びかけた。「それでは迅速に馬小屋へコーヒーを届けてくれ」と。そして二人の女性の側を通過して、また夜の中に駆け出た。

彼は、黒いミンナは実際、何か伝えたいのだ、何か苦情とか注意、警告を述べたいのだという印象をおぼろに受けた。しかし今は、よくあるように、聞いている暇がない。彼は急がなければならない。彼の背中で、すでにまた女性間での結構なべちゃくちゃのお喋りが始まったという予感がした。それを止めさせることはできない。駆けなくてはならない。「十五分内」と自分は獣医に言った。すでに五分間を使った。ちなみにひよっとしたら自分の予感はずべて戯言でしかないかもしれない、今の自分の計画同様に。いや、それならそれで構わない。急げ、いずれにせよ、急げ。

別荘では彼の呼び鈴に対して、騎兵隊長の看護人がドアを開けた。この看護人は、シューマンと言ったが、中年の鈍い、若干太った男で、禿げた頭蓋の上に二、三の灰色になりかけのアンチョビを乗せていて、あたかも施設にいる風で、常に白と青の縞のジャケットに、革のサンダル、灰色の皺だらけのズボンを履いていて、このズボンは購入以来まだきつとアイロンを経験していなかったであろう。パーゲルはこの落ち着いた静かな男が好きであった。彼は数回この男とお喋りをした。看護人シューマンは、他人に語っていないことを、妻にさえも、医者にさえも語っていないことを彼に語ってくれと。

「パーゲルさん、騎兵隊長殿が病気であるとは」とこの男は小声で囁いて言った、「私は思いません。ドクトル殿は精神病と言っていますがね。騎兵隊長殿はショックを受けられたのです。　－　しかし精神病かというとは、違います。彼は話しませんし、彼に話しかける皆に対し微笑します。　－　しかしただ偽装しているのです。彼はもはや話したくないのです。何ももはや聞きたくも、見たくもない。彼はこの世にうんざりしたのです。これです。彼は眠っていても話せますし、...」。

「しかし」それはやはり一つの病ではないか」とパーゲル聞いたことがあった。

「ひよっとしたらそうかもしれません。私には分かりません。ひよっとしたら単に臆病で、意気消沈しているだけです。最初の日々、全く上手く話すことができ、アルコールを欲しがっているときは、私と喧嘩できました。それからただ睡眠薬を請うときのみ、話すだけになりました。我々がこれも出さなくなると、彼はこう言いました。話してももはや意味はない。人々は私には何も与えない、それじゃ黙っていよう、...」。

「シューマンさん、彼は、監視がないときにも、やはり何も飲まないでいると思いますか」。

「これは、いつも難しいことです、パーゲルさん。このような患者の場合分かりません。ひよっとしたら万事順調なときには、彼は飲まないで凌げましょう。しかしまた何か不快なことを耳にすると、　－　彼は何でも聞いています、とても注意深いのです、　－　す

ると彼がまた倒れてしまうことが考えられます。そのため私はまだここに残っているのです」。

そのようにかつて談話がなされた。両人は更に何度かこのテーマについて話し合っていて、本来まことに互いに親しくなっていた。

今やパーゲルは急いで尋ねた。「騎兵隊長殿は何をしている。ベッドに寝ているのか。起きているのか。恵み深い夫人は在宅か」。

「恵み深い夫人は遠出されています」と看護人は報告した。「騎兵隊長殿は起きています。私は服を着せました、襟とネクタイを付けて。今読んでいます」。

「読んでいるのか」とパーゲルは呆気にとられて尋ねた。彼は健康なときでも騎兵隊長が読んでいる姿をほとんど想像できなかった、 — 新聞は別であるが。

シューマン氏は薄く笑った。

「騎兵隊長殿が今夏、数週間狩猟客として気違い病院に滞在なさっていたということを貴方から聞いていなければ、私は本当に彼に騙されていたことでしょう」。今度は看護人はしっかりと微笑した、「私は彼を彼の仕事部屋に座らせました。彼の手に『挿絵入りスポーツ』の或る号を渡しました。私は彼に言いました、『騎兵隊長殿、まあ挿絵を御覧ください』と。私は彼がどうするだろうと気を揉んでいました。 — 勿論すぐに彼は気違い病院の阿呆どもを思い浮かべたのです。彼が落ち着かれたときには、新聞は眼前で逆さまになっていました、私はちゃんと彼の手に渡していたのです。彼はいつも同じ箇所を覗いていて、額に皺を寄せ、自らぶつぶつ言っていました、 — ただ私が『騎兵隊長殿、次の頁を』と言うと、 — するとめくりました」。

「しかし一体すべてどうしたことだ」とパーゲルは少し憤って尋ねた。

「彼は阿呆の振りをしているのです」とシューマンは忍び笑いをした、「彼はそれを上手くすると、ご満悦です。私が見ていないと思うと、彼は横から盗み見をして確かめるのです、自分が今から始めることに、私が注意しているか、...」。

「しかしこうした馬鹿げたことをしないで、彼を放っておいたらよかろう」とパーゲルは苛立って叫んだ。

「そうは行きません」と看護人ははっきりと言った、「彼の言う通りなのです。彼は全く正常であると貴方が気付かれたら、彼も少しは農園のことも考え、金に関して知恵を絞って欲しいと貴方は要求なさるでしょう。恵み深い夫人は娘のことでの心痛、加勢を願われるでしょう。...これを彼はまさにすべて欲していないのです。もはや一緒にやりたくないのです。空しく走り回って来て、寄与できるものが何もないのです」。

「だったらまさに病気だな」とパーゲルは叫んだ、「それでは、まあ見てみよう。ちょっと聞いて欲しいのだ、シューマンさん、...」。

そして彼は自分の計画を打ち明けた。

「試してみてもいいでしょう」と看護人は思案して言った、「勿論、失敗したら我々兩人大目玉を食らいます、 — 医師からも恵み深い夫人からも。まあ、行ってみましよう。彼がどのような反応をするか、すぐ分かりますよ」。

まことに悲しい光景であった、またまことに恥ずかしい光景であった、 — 仮にこの男が見せかけ通りに、実際そんな病気でないのであれば。騎兵隊長は非の打ち所のない英国産の仕立屋のスーツを着て、相変わらず黒っぽい目で、しかし髪と眉は雪のように白い

姿で座っていた。以前の褐色の顔は黄色く変色して見えた。彼は手に新聞を持っていた。彼は自分が目にしているものに満足していて、忍び笑いをしていた。新聞は彼の両手の中で揺れていて、騎兵隊長の全身が揺れていた。

「騎兵隊長殿」と看護人は言った、「新聞を置いてください。しっかり着て、少しばかり外出する必要があります」。

一瞬、額が縮こまって、白く密な眉毛が寄り合ったように見えた。しかし新たな忍び笑いをこの男は発し、新聞が彼の手の中でかさこそ音を立てた。

「騎兵隊長殿」と今やパーゲルが言った、「貴方の雌馬、マーベルが、若駒を産もうとしています。しかし上手く行っていません。獣医が来ています。獣医は、若駒は死んでいて、雌馬も駄目になろうと言っています。一度診て頂けませんか」。

騎兵隊長は額に皺を寄せて、新聞を見つめていた。もはや忍び笑いをしていず、挿絵を見つめているように見えた、...

両人は待っていた。しかし何も生じなかった。

「いらしてください、騎兵隊長殿」と看護人は最後に優しく言った、「私に新聞をください」。

騎兵隊長は勿論何も聞いていず、それで彼の手から新聞が取り上げられた。彼は玄関へ導かれ、外套を着せられ、スポーツ帽子を被せられた。彼らは家から出て、夜の中を向かった。

「私の腕を掴んでください、騎兵隊長殿」と看護人は、穏やかな、少しばかり職業的な優しさで言った、「パーゲルさん、貴方も騎兵隊長殿に腕を貸してください。一歩行はまだきついと思いますよ、ずっと病気でしたから」。

ほとんど無意識に「でした」が強調されていた。

ひょっとしたら偶然かもしれない、ひょっとしたら病人がこの強調に勘付いたのかもしれない。彼はそれを挑発と感じて、再び忍び笑いを始めた。

それから彼は静かに歩んだ、少しばかり覚束なく、両者の間で揺れていた。

少しばかりして、彼らは村の家々の間近までもう来ていて、パーゲルは騎兵隊長の腕が彼の腕の中で震えているのに気付いた。この男の全身が震え、揺れている。自分が計画したことに対する不安のようなものに若いパーゲルは襲われた。彼はよろめいている、最後に彼は言った、「騎兵隊長殿、震えておられますが、一寒いですか」。

騎兵隊長は勿論答えなかった。しかし看護人は、パーゲルの言ったことが良く理解できた。

「パーゲルさん、もうどうしようもありません」と彼は言った、「もはや引き返せません。敢行するまでです」。

彼らは荘園中庭を越えて行き、家畜小屋に入った。パーゲルはそこに立っている人々の顔に恐れを見いだした。騎兵隊長はお喋りの噂では狂人とされていた、一この狂人が彼らの家畜小屋に来たのである。

「全員、家畜小屋から出る」とパーゲルは命じた、「ただ貴方、給餌長は別だ、それにアマンダ、貴女もここに残って構わない。アマンダ、家畜小屋の戸を閉めろ」。

有り難いことに獣医は全く分別正しく振る舞った。彼は冷静に言った、「今晚は、騎兵隊長殿」、そして若干脇に寄って、房への入口を空けた。

パーゲルは自分の腕が軽く引かれたかのような感じがした。その通り、騎兵隊長は房へ進んだ。彼らは彼を手放すことができた。彼はそこに自由に一人っきりで立っていた。

馬は脇腹に寝ていた。脚は伸ばされていた。馬は頭を、悲しげな寄る辺ない目をして、回した。馬は自分の主人を認めて、小さくいなないた。今や主人から、これまでの孤立無援からの救出を期待している風であった。

獣医のホフアールトは報告した、「私が雌馬にコーヒーとカンフル精を与えてから、陣痛はまた強まりました。動悸も今は全く正常です。また微かに若駒の心音も聞こえるような気がします。しかし間違っているかもしれません。確信が持てません、...」。

獣医は黙った、彼らは皆黙した。騎兵隊長はどうするか。彼は外套を脱いだ。彼は振り向いた。給餌長が領主の外套を受け取った。皆が静まっていた。静かで、...。騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツは上着を脱いだ。給餌長がそれを受け取った。騎兵隊長はカフスのボタンを外した。 — アマンダが側において、袖をまくり上げる加勢をした。

その通り、これは真の助産師の手である。細くて、長くて、器用な指。手の関節は、薄くて、子供のようなものであるが、しかし鋼である。長くて細い腕、贅肉がなくて、腱と骨と筋肉からできている。

彼らは息もせず、静かであった。騎兵隊長は馬の背後で跪いた。 — ただ彼は躊躇った、彼は不機嫌に見回した、 — どうしたのか。何が足りないのか。何故彼は話さないのか。

しかし獣医ホフアールトは言葉はなくても彼の言うことを理解した。彼は騎兵隊長の隣で跪いて、腕に油を塗り込んで、滑らかで柔軟になるようにした。そのとき、囁いた、「少しばかり用心してください、騎兵隊長殿。陣痛が来たら、馬は蹴ります。蹄鉄を外すのを忘れていたのです、...」。

騎兵隊長は容赦なく額に皺を寄せて、ほとんど生氣ない唇を結び合わせた。それから仕事に取りかかった。その男の長い腕は肩のところまで馬の中に消えた。口は大きく開いていて、人々はその男の表情に、その手の神秘的探査や調査を読み取っていった。さて、その目が輝いた。馴染みの、燃えるようなきらめきで、彼は探していたものを見つけたのであった。

その通り、その通り、 — この騎兵隊長、この男は、人間達の一人であって、 — 彼は娘の不名誉な没落で、臆病に這いつくばってしまったのであった。彼は嘆いて、アルコールとヴェロナールを求め、痴呆を装っていた。 — しかし一頭の馬が危機に瀕して、彼は自ら選んだ孤立を棄て、人間達の許に戻って来た。彼は行動に値する何ものかをなおこの地上に見いだした。我が神よ、これが人間というものだ、人間はこのようなもので、 — 人間はより上等なものではない。しかしより劣等なものでもない。

数回騎兵隊長は自分の仕事を中断しなければならなかった。陣痛が来た。馬は痛みの余り、蹄で蹴った。しかし彼は腕を引っ込めなかった。彼は身を屈めた。というのは彼を危うくするこの陣痛は、また彼の加勢をするからで、母体からその子馬を放すのである。

それから騎兵隊長の顔は暗赤色になった。この陣痛は実際彼の腕を圧倒的威力で体から押し出そうとした。 — 全力で彼はそれに抵抗した。パーゲルは騎兵隊長の隣の麦わらに座り、自分の肩で自分の主人の肩を支えた。 — 一つの視線が彼を見た、黒々とした視線で、すべての暗闇から燃え出て来た。 — いや、これは痴呆の視線ではない。ひょ

っとしたら言い難い難儀をした一人の人間の視線であるかもしれない。...

若駒の蹄が現れた。周りに立っている者達の間で一つの動きが見られた。一 ほら、立派なビロードのような鼻面が、頭部が、肩がただ躊躇いがちに続いた。一 それから迅速に、とても長い体が続いた。若駒は死んだように床に横たわっていて、獣医が跪き、調べた。彼は言った、「生きています」。

一気に騎兵隊長は立ち上がった。空中に探るように手を伸ばした。看護人は言った、「騎兵隊長殿、しっかりと私に掴まってください。手始めにしては少しばかり過ぎました」。

騎兵隊長は理解して、しっかりと掴まった。

アマンダ・ボックスが鹽とお湯を持って来て、注意深く騎兵隊長の血で汚れた腕を洗った。隊長も何か新生児のような、傷付きやすいものであるかのようにであった。

それからフォン・ブラックヴィッツ氏は導き手と一緒に、馬小屋から出た。彼は一人の人間も見つめず、一言も言わず、足を引きずりながら、まだ眠っているかのように、進んだ。ゆっくりと彼らは荘園の家々の間を抜けて行った。それから別荘までの見通しの良い道に来ると、森から呻る十月の風が心地良く彼らに吹き付けて、騎兵隊長は立ち止まった。一回彼は身震いをして、一回体が痙攣した。ヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツは長い沈黙の後、最初の言葉を発した。単に叫び声で、悲嘆、絶望、正気の叫びであった。一

お分かりか。彼は叫んだ、「我が神よ」。

パーゲルとシューマンは何も言わなかった。しばらくして彼らはまた道を進んだ。病人は二人の間をようやく歩いた。彼らは別荘に着いた。パーゲルは更に、騎兵隊長を寝室まで案内する加勢をした。それから看護人が、フォン・ブラックヴィッツ氏を脱がせ始めると、彼は再び階段を下りて行き、玄関の間で、待機して腰を下ろした。

しばらく彼は無為に座っていた。心地良く疲れた感じに彼の肢体は包まれていた。彼は草臥れていた。しかし自分は何か正しいこと、何か良いことをしたと思った。彼は何か思い付いた。彼は立ち上がって、ちょっとノックした後、恵み深い夫人の部屋へ行った。明かりを点すと、彼は書き物机の上の手紙の山を見た。一すでに今や幾つかの山となっていて、うずたかく、多数の手紙が見えた。

彼は小さな嫌悪感を抑えた。しかし一そうではなからうか一人生では快適な事ばかりしているわけに行かない。彼は手紙を自分の手に滑らせて、枢密顧問官の筆跡を見分けようと思っていた。外国の切手、郵便スタンプを期待していた。自分の学校での知識に間違いがなければ、「ニース」とあるに違いない。

しかし最初の山をざっと見たが、無駄で、二つ目の山もそうであった。三番目の山にも何もなかった。四番目の山、最後の山にも成果なく、手から片付けられたとき、彼の視線はメモ帳に落ちた。彼は読む気はなかったが、しかしすでに読んでいた。一「父に手紙」と記されていた。彼は明かりを消して、再び玄関の間に腰掛けた。

この手紙は色々なことを意味している。恵み深い夫人は自分から父親に手紙を書こうとしていること、それにまた、父宛に手紙で返事することを忘れないようにしていることを。従って、自分の知識は先ほどと変わらない。自分はこの小さな、少しばかり落胆させるスパイ活動を行って、無駄に終わった。状況が余り良く分からない。ただ更に調べなければならぬことだけは分かる。...

しばらくしてそれから看護人が階段を下りて来た。

「彼はすぐに眠りました」と彼は伝えた、「実際何か力強いものでした。待つことにしましょう」。

「どう思いますか」とパーゲルは尋ねた。

「明日分かりましょう」と看護人はまた答えた、「よく分かりません」、そしてしばらくして言った、「どうします。恵み深い夫人に貴方は話されますか」。

「そうだな、それがいい」とパーゲルは同意した、「我々のどちらかが、夫人に伝える必要がある。他の人々の口から聞くのはまずい」。

シューマン氏はパーゲルを憂わしげに見つめた、「パーゲルさん、ご存じですか」と彼はそれから言った、「貴方の提案ではありましたが、しかし私が夫人に伝えましょう。私の責任と致します」。そしてパーゲルがある仕草をすると、「私は耳にしたのです。女達の陰口が始まっています。女達は奇妙なものです。少なくともこの件を貴方の負担にはさせません」。彼は微笑した、「勿論、騎兵隊長殿が上手く回復されたら、後で私の手柄となりましょう、...」。

「また何が始まったのか、さっぱり分らん」とパーゲルは苛立って言った、「しかし何であれ、構わん」。

「パーゲルさん、気にしないことです」と看護人は慰めた、「癪は、できたら、まず針でつつき開けなければなりません。それでは差し当たりお休みなさい」。

「お休み」とパーゲルは言って、再びまた官吏の家へ向かった。

すでに八時を過ぎていた。アマンダが夕食を用意してもう待っていよう。果てしない事務郵便を片付けなければならない。母親宛にも手紙を書きたい。医者がやって来て、森林官の許に行かなければならない。若駒はもう一度見る必要がある。 — しかし早速寝たいと一番に思う、 — しかし陰口が進行中という。

休ませてくれ、頼む、休ませてくれ。

いや、他の者どもが休ませてくれさえしたらいいのだが、...

今や晩の十時過ぎであった。パーゲルは賃金帳簿の前に座っていた。医療保険額が算定され、賃金税印紙が貼られなければならなかった。どうにかして帳簿が金庫と合うようにされなければならない。

こうしたことすべては疲労した男にとって、ほとんど克服しがたい厄介事であった。疲れていると、仕事は捗らない。その上金がますます面倒なものになって行く状況にあった。彼が一人の労働者に対して何らかの週賃金を計算しても、正確に料金表通りに、かくかくの数百万マルク、しかじかの数十億マルクでしても、 — その金を労働者に渡せなかった。十分な数百万マルク、数十億マルクの紙幣がないのである。パーゲルは何らかの多額の紙幣を、千億マルク、二千億マルクを越えるこれらの屑紙幣の一枚を手にとらざるを得なかった。彼は四人の男を呼び寄せた。「各人がこの紙幣の四隅を受け取ってくれ。これは四人共有のものだ。少しばかり多すぎるが、良く分らんが、二、三十億多いかもしれん、しかしこれを持って町へ行き片付けてくれ。一緒に購入するのだ。一緒に話し合っ

な。私のことを罵っても構わん、　－　もはや他の金はないのだ」。

結構、彼らは結局一緒に行って、一緒に買い物をした。彼らはこの紙幣を両替してくれる商人を見いだした。しかし彼、ヴォルフガング・パーゲルは自分の金庫を合うようにしてくれる者をどこで見つけたらいいのか。いや、自分は偉い男で、週に二・五ツェントナーのライ麦相当の給与を得ている。　－　しかしこの分毎週自分の金庫では欠けている。しばしばそれ以上に欠けている。彼は詮索し、熟考してみる。小マイヤーは決してこんな不正確な数字を帳簿に記したことはないだろう。　－　一度会計士が帳簿を点検したら、
　－　この横着者は刑務所行きだ。

パーゲルは頭を手で支えていた。この野蛮な数字には反吐が出る。この中には、ますます天文学的数字となっていくこの華麗さには、何か不潔なものが潜んでいる。どんなに取るに足りぬ男も百万長者だ。　－　しかし我々百万長女は皆それでも飢え死にするであろう。数字は増大し、　－　悲惨さは増大する。先ほど医師は森林官に何と言ったか。「間もなく一兆紙幣が導入されよう。　－　一兆とは十億かけ千です。　－　それ以上もはや高くはなりません。そうなったら固定した通貨となりましょう。貴方は年金生活に入ることになりましょう。　－　それまでゆっくりとベッドに休まれることです。貴方はとても疲弊されていて、私は良心も咎めず、責任を持てます。　－　こちらにいらっしゃる貴方の若い友の説得がなくてもそうできます」。

「それでは我々はいつか本当にまともなお金を得られるようになるのですか」と森林官は不安げに尋ねた、「私はそれを体験できましようか。ドクトル殿、本当に体験してみたいものです。店に買い物に行き、商人が何かを売って、そしてその紙幣を見て、詐欺師を相手にしているかのように憤然と見つめない日を」。

「親父殿、きっとその日を体験できましよう」と医師は請け合って、掛け布団を森林官の顎の下まで引き上げた、「ゆっくりと休まれるといい。　－　明日牛乳車で睡眠薬が届きましよう」。

しかし外で医師は若いパーゲルに向かって言った、「この老公がすっかり寝込んでしまわないよう見守ってください。軽い遊び仕事を与えてやることです。完全に疲弊して、燃え尽きています。この老公が毎日十時間森の中を駆け回っていたとは、信じられません。しかしこの老公は全く横になってしまえば、まず起き上がることはないでしょう」。

「それでは彼はこのインフレの終わりをもはや体験できないのですか」とパーゲルは尋ねた、「つまり学校時代からの知識では、千兆、百京[100万の3乗]、杼[100万の4乗]があって、...」。

「終止符を打ってください」と医師は叫んだ、「さもないと即刻貴方を私の打診槌で叩きのめします。貴方はこのとんでもないインフレをまだ体験したいのですか。若い方、貴方は生命欲が旺盛だ、胸くそが悪くなる。　－　いや」と彼は囁いた、「銀行のある殿方から聞いたのですが、　－　四千二百億マルクでドルは固定するそうです」。

「いや、そのようなお喋りは半年前から聞かされています」とパーゲルは言った、「私は一言も信じません」。

「若い方」と医師は莊重に宣言して、眼鏡のレンズ越しにパーゲルをキラリと見つめた、「貴方に申しておきましよう。ドルが四千二百億を超えた日には、私は仮面を被って、自らクロロホルムを吸ってこの世からおさらばします。もう沢山ですから」。

「それじゃー ー またお話ししましょう」とパーゲルは言った。

「いや、貴方の考えている通りには行かない」と医師は怒って叫んだ、「今日貴方らのような若者にはうんざりする。そのようなシニシズムは私の若い頃には百歳の老人でさえ有しなかったものです」。

「貴方が若かった頃とはいつのことです、ドクトル殿」とパーゲルはにやりと笑って尋ねた、「随分昔のことでしょう」。

「私は貴方のことは」と医師は悲しげに言って、オベルの雨蛙に乗り込んだ、「老公がどれほど持つか、冷ややかに尋ねた瞬間から信用していなかったのです」。

「声が大きいですよ、ドクトル」。

「まあ、構いません。この点では私もまたもっとシニカルですから。職業病です。お休みなさい。申したように、ドルが四千二百億で固定しないときには、...」。

「だったら、もう少し先になりますな」とパーゲルは出発する医師に後かた呼びかけた。

今コーヒーが一杯事務所にあったら、素敵なことであろう。勿論、今回コーヒーはないだろう。アマンダ・ボックスはとうに就寝していた。しかしパーゲルは今度もまたアマンダを過小評価していた。ー コーヒーはテーブルの上にあった。しかし残念ながらまたコーヒーも効かず、すっかり元気になれなかった、というかパーゲルの疲れは余りにひどく、ー いずれにせよ、鬱々と帳簿を見ていた。彼は抄らず、ベッドに入ろうとした。しかしまた母親宛に手紙を書こうと思って、自分の良心を次の文で嘆いた。私が余りに疲れていて、母親宛に手紙を書けないのであれば、私もこれほどにまだ疲れていなくて、賃金帳簿を片付けられないこともなかりうにと。

この阿呆な文は、すべての論理を欠如して、この面倒な文、疲れすぎた頭による出来損ないは、若いパーゲルをしつこく苦しめて、それで彼は計算も筆記も睡眠もできなかった。結局彼は苦悩の半覚醒、鈍い意識朦朧状態に陥り、自分の脳内で、恐ろしい思考が、人生に対する疑念、自身に対する疑念、ペートルに対する疑念が忍び込んで来た。

「畜生」とパーゲルは叫んで、起き上がった、「むしろ今、アオウキクサで一杯のご立派な枢密顧問官の身震いする寒さの白鳥池に飛び込んで、人生で最もガタガタ震える水泳をした方がまだ、ここでもっと長くうとうとぼんやり座っているよりは」。

この瞬間、電話の呼び出し音が鳴った。一人の女性が素早く、馴染みであったが余所余所しく聞こえる声で、告げた。パーゲル様は、すぐ別荘にいらしてください、恵み深い夫人が面会を希望されています、と。

「すぐ参ります」とパーゲルは答えて、受話器を置いた。

自分が話したのは一体どの女性だ。この声は偽装していたぞ。

彼は時計を見た。十時四十五分であった。五時、四時半、四時に起きる男にとっては、少し遅すぎる時間だ。多分向こうではまた騒いでいるのであろう。騎兵隊長の件がまずくなつたのか。それとも恵み深い夫人がようやく何かヴィオレットのことで知り得たのか。それとも単に夫人が今日幾らジャガイモが掘れたのか知りたいだけかもしれない。ー 時に夫人はそのようなことを思いつく。夫人も時に自分の父親の娘らしくなる時がある。その時は、自分は若い役人を監視する必要があると思っているのだ。

満足して口笛を吹きながら、パーゲルは莊園を通過して別荘まで歩いて行った。すぐに恵み深い夫人の許へ行くべきであったが、それでも馬小屋を通る迂回をした。家畜小屋の番

人は寝惚けて飛び上がった。ー しかし万事異常は何もなかった。雌馬はすでにまた自分の房に立っていて、元気な目で、パーゲルの方を見回した。信じられないほど長い脚の若駒は眠っていた。見張りの男も、パーゲルは今や眠りに就かせた。

別荘では恵み深い夫人本人がドアを開けた。夫人は最近の週の間にとっても変貌していた。悩み多い、血走った希望を抱いてのこの永遠のドライブ、物憂い帰還、決してやって来ない何かを待つというこの消耗、毎日悩み多く、不安の繰り返し、この不安よりは、最悪のことでさえ確実なことの方がましに思えてしまうもので、ー こうしたこと一切のために夫人の面影は鋭くなっていた。

彼女の目は、以前は好意的で、女性らしい目であったが、素っ気ない燃える視線になっていた。

しかしこのことだけではない。エーファ夫人はもはや養生しなくなって、もはや規則的に食事せず、夫人の桃のブロンドの調子の柔らかな肌は、何か弛緩したもの、崩れたものを帯びていた。首には皺が寄り、頬は垂れてきた、…。この変貌した女性は別の言葉遣いになっていた。夫人は以前素敵に笑った。夫人は、自分と世界との調和の中にいる女性であった。彼女の声は何か成熟したもの、柔らかな艶、微かな震動が見られた、…それが消えた、消えた、…急いだ、ほとんど抑揚のない、鋭い話しぶりとなった、ー その声は、喉が干涸らびたかのように聞こえた。

この鋭い、小さな声で、ヴォルフガングは素っ気なく「今晚は」と挨拶された。恵み深い夫人は玄関の間に立ったままで、彼を邪険な目で観察していた。それから素早く言った、「パーゲルさん、残念なことです、しかし我慢していることはできません。今日耳にしました。貴方は女性に対し汚いことをなされたそうです。貴方の立場を利用して、小間使いに強要して、…」。

いや、この女性、哀れな変貌した恵み深い夫人。確かにそれは残念なことではなく、夫人は憤然として、復讐心に駆られていた。このエーファ夫人は、まだ数週間前までは、いつも微笑している目で、大目に見る用意があった。今や男どもに自分の娘の復讐をしなければならぬ。すべて汚い、ー 汚い、どこへ行こうと、汚い。しかし自分の周りではこの汚さは容認できない。こうした事柄はもはやお仕舞い、終わり。すべて屑で、下劣なことだ。

パーゲルは立腹した夫人の厳しい視線を受け止めた。彼は微笑した。彼の目の隅に小皺が寄っていた。彼は本気になれなかった。彼は別な側面に立って、いわば客観的に考えた。彼は、自分の娘のことが心配で、ほとんど倒れそうなのに、そんな夫人が今、陰口を問題にしていることが解せなかった。…彼は微笑して頭を右から左に振った。彼は好意的に言った、「いいえ、恵み深い奥方様、私は全く確信しています。女性に対して汚いことをしていません」。

「でも私に対して話しがあったのです」と恵み深い夫人は叫んだ、「貴方は、…」。

「何故嘘の話しを聞かなければならないのです」とパーゲルは変わらず好意的に言った、「まさに私には何の恋愛沙汰もないからですか。奥方様、これ以上この問題ついて話したくはありません」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は苛立った仕草をした。というのは、まさにその話しをしたかったからである。夫人の中のある憎悪、憤激に駆られて、若いパーゲルに面と向か

って、彼について耳にしたことを言いたかった。そしてそれから夫人は、釈明を聞き、詫びを聞き、――一番ある告白を聞きたかった。

しかしパーゲルは素早く振り返って、何故この話し合いがここ玄関の間で行われているのかと理解していた。その通り、地階からのキッチンの階段の入口に、ゾフィー・コヴァレフスキーが立っていた。彼女は隠れようという動きをした。しかし遅すぎた。

「ゾフィー、出て来なさい」とパーゲルは叫んだ、「貴女が唯一の女性だ、貴女の口からその話しを聞きたいものだ。ここ恵み深い夫人の前で話しなさい、ジャガイモ掘りをしたくないばかりに、貴女が何をしたかを」。

エーファ夫人は次第に赤くなった。若い男の話しを止めさせるある仕草をした。しかし彼はすでに娘に向かっていて。少しも脅す素振りはなく、いや、心地良げで、好意的であった、...

「いや、ゾフィー」と彼は言った、「来なさい、可愛い娘、話しなさい。それとももっと良いのは、奥方様の前でして見せなさい、どのようにして自分の膝を見せようと思ったかを。どうだ」。

ここで、ゾフィー・コヴァレフスキーは中途半端なことが明らかになった、良いことでも、悪いことでも。彼女は逃げて、滅びてしまった。――結構、劣等だ、しかし本格的に劣等であるとさえ言えなくなった。彼女は悪を敢行する勇気すらない、彼女は臆病だ、...

若いパーゲルは全く優しく彼女に向かって行ったが、彼女は突然不安の叫び声を上げた。彼女は向き直って、キッチンの階段を下りて行って、パタンとドアを閉め、彼女は去った。

パーゲルはエーファ夫人の許へ戻って来た。いや、今や彼はこの得意気な屈託のなさを何ももはや見せず、釈明して、ほとんど詫びて言った、「つまり私は彼女に、早朝ジャガイモ収穫に出るよう、仕事を課したのでした。彼女は怠けていて、村で悪い見本となっていますので」。

フォン・ブラックヴィッツ夫人は彼を見つめた。怒りと羞恥の赤みは夫人の顔から消えていた。しかしすっかり消えたわけではなかった。若干残った。より健康な生命の色合いの痕跡であった。いや、人生は、老いて、醜くて、使い古されているばかりではない、――生命はまた若くて、新鮮で、清潔でもあり得る。

ほとんど詫びるように夫人は言った、「私はゾフィーを家の小間使いに採用しました。ゾフィーが私に申し出たのです。とても困っていました。しかし、どうぞお入りください、パーゲルさん」。

夫人は彼の先を行った。夫人は少し狼狽していた。――恥じていたのであろうか。夫人の不信、夫人の疑念、――これらは彼の信頼、彼の清潔さに比べれば、とても醜いものであった。

「私は事情を知らなかったのです」と今一度夫人は釈明して言った。

「確かにゾフィーはジャガイモ掘りよりは、家仕事にもっと向いていますよ」とパーゲルは言った、「肝要なことは、彼女がもはや怠けて、ぶらつかないことです」。

「でも私はその代わり黒いミンナを解雇しました」とエーファ夫人は自責の念を感じて報告した、「あの女性は感じが良くない、...」。

パーゲルの口は固く結ばれた。彼は怠惰な者が良いポストを得て、身を粉にして働く勤

勉な者が、また凍えるジャガイモ掘りに行かなければならないと思った。夫人とこの点について争うのは意味がない。夫人は仕事について判断していない。夫人は仕事分からない。夫人は外見を考えている。可愛いゾフィーが、草臥れた黒いゾフィーよりも夫人の気に入っている。

「貴女の了解が得られますならば、ミンナに宮殿での仕事をさせましょう」と彼は最後に提案した、「宮殿はまだ荒れていますが、いつか老領主ご夫妻もお戻りでしょう」。

「そうね、そうなさってください、パーゲルさん」と夫人は熱く叫んだ、「とても感謝致します。それがきっと最良の解決策でしょう」。ほとんど自責の念を覚えて、夫人は彼を見つめた、「先ほどの件で、怒ってはいらっしゃらないでしょう」。

「いいえ、でもこう私が申しますと、ひょっとしたら、貴女の怒りを買うかもしれませんが、...」。

彼女の目の中の明かりが消えた。

「ゾフィーがそれでも正しかったのですか」と夫人は抑揚なく尋ねた。

「つまりですね、私は、二、三時間前、ここ貴女の部屋に来たのです。私は」と彼は少しばかり当惑していた、「そこの手紙をざっと見たのです、或る手紙を探していました、...」。

夫人は疑わしげに彼を見つめていた。夫人は待った。

「その手紙はなかったのです。読もうと思ったわけではありません。その手紙があるかどうか見たかっただけです。それからたまたま貴女のメモ帳に『父に手紙』と書かれてあるのを読みました。まことに恥ずかしいスパイのようなことをしてしまいました。しかし私事でスパイをしたのではありません」。

「でも何故です」と彼女は合点が行かず尋ねた、「貴方は私にただ尋ねさえすれば良かったでしょうに」。

「いわば」と彼はうんざりして、自分の鼻をこすった、「面倒なケースです。まずこう考えたのです。森林官が寝込む事態になりまして、それ故どうしたらいいか、枢密顧問官殿に手紙を書く必要がありますと、貴女に相談することにしよう、と。 — しかしこれはまやかしののです。森林官は本当に病気ののですが、森のことは我々の心配の埒外ですから」。

「それで何が本当のことなんですか」と彼女は尋ねた。

「いや、それがまさに問題で、私は約束したのです、貴女にも、そして誰にも何も話さない、と。そうせざるを得なかったのです」と彼はより熱くなって言った、「さもないと何も聞き出せなかったでしょうから」。

「しかし一体何のことです」と夫人は落ち着かず尋ねた、「また新たな心配事が生ずるのですか」。 — 夫人は起き上がった。彼女はあちこち動いた、「パーゲルさん、何も仰有ることはできないのですか」。

「貴女にちょっとお尋ねしようと思います、奥方様。父親殿は旅立ってから貴女にお手紙を書かれましたか」。

「はい」と彼女は言った。それでは父親に関することだ、と彼女は考えた。しかし彼女の調子はより軽くなった。これを夫人は難しいことと思っていない。

「貴女は返事されましたか」。

「いいえ、返事をしなかったのです」と彼女は手短かに言った。すでにその手紙を思い出して、夫人が怒っているのに彼は気付いた。

夫人は彼を、待機して、見つめていた。しかし彼はもはや何も尋ねなかった。彼は自分が言いたいと思うことすべてを言ったように見えた。最後に夫人は決心して言った。「パーゲルさん、貴方にお話ししましょう。父は私が騎兵隊長殿と離婚するよう要求しています。父はずっとその希望でした。父は婿を愛していないのです、...」。

パーゲルはゆっくりと頷いた。...

「しかし私ができましようか」と夫人は叫んだ、「私が彼を袖にできますでしょうか。語る必要もないことでしょうか」と夫人は素早く言った、「貴方も夫のことをご存じです。

— しかし自分の友が困っているとき、自分の友を見棄てられましようか。夫が健康で、そして夫が私なしでも暮らせると私がそんな風に思えるのであれば、考えられましよう。

— しかし今、— 駄目です。まことにもってまず駄目です。良かろうと、悪かろうと、— 良かれ、悪しかれ、どんなことになろうとも、とイギリスの結婚式では言われます。私もそうです。まさに悪かろうと、まことにもって悪かろうとなのです」。

夫人はパーゲルを見つめた。夫人の顔はびくついた。

「いや、パーゲルさん」と彼女は嘆いて言った、「私は存じています、貴方が今晚、夫をまたこの人生に呼び戻そうと試みたということ。勿論貴方のお考えでしょう。看護人がそのようなことを思いつくはずがありません。最初はとても貴方に対し怒ったのです。夫が哀れな病人に過ぎないことは貴方もお分かりでしょうから。でもそれから私は考えてみました。これはやはりお友達としてお考えになったことだと。貴方もまだ夫のことを案じておられます。しかし私の父ときたら。父は私がただ夫を見棄てることを望んでいます。どこかの精神病院に入れて、後見人を立てることを望んでいます。— 片付けて、お仕舞いです。しかし私どもはほぼ二十年一緒に暮らして来たのです、パーゲルさん」。

「彼は一度『神よ』と言いました」。

「はい、私も聞きました。何のことでもありません。夫はもはや自分の言っていることを分かっています。貴方はお若い。貴方は希望を抱いていらっしゃる。— いや、パーゲルさん、今、国中を回り、国道を通る人々を見ていると、今このひどい天候のときです。多くの人々が通りにいます、浮浪者ばかりではありません。皆が、この恐ろしい時代、落ち着かないのです。— 今朝も、まさに冷たい雨が降っていましたが、二人の若い人達を見ました。男の方は乳母車を押していました。高い車輪の上の全く古い籐の車です。女の方は乳母車の横を歩いていて、子供に話しかけていました。— いや、私は何も恵んでいません」と夫人はほとんど情熱的に叫んだ、「私はこう考えたのです。ひょっとしたら私のヴィオレットもこのように歩き回っているかもしれない。でも娘には自分が話しかけられる子供はいない。娘には自分が話しかけられる者が誰もいない、と。いや、パーゲルさん、私はどうしたらいいのでしょうか」。

「希望を抱かれて、...」と彼は言った。

「まだそうしてよろしいのでしょうか。まだそうすべきでしょうか。そもそも娘が生きていると希望をまだ抱けるのでしょうか。私がそう願うのは、単に私の利己心ではないのでしょうか。そもそも私のヴィオレットの片鱗がどこかに残っているのでしょうか。娘に会うことをいつも願いながら、いつも会うことを怖がっています。パーゲルさん、娘がいな

くってから、もう四週間以上になります」。

「娘さんは自由意志がないのでしょうか」とパーゲルは小声で言った、「ある日その意志を取り戻したら、戻って来ましょう」。

「でしょう、貴方もそう仰有るでしょう」と夫人はほとんど喜んで叫んだ、「娘はまだ眠っているのです。まだずっと眠っています。眠ったら、しっかり眠ったら、何も感じなくなります。娘は変わらずに戻って来ることでしょう。娘は向こうの上の自分の部屋で目覚めることでしょう。そして、何も起きなかった、前の晩に眠りに就いたのだったと思うことでしょう」。

びっくりしてパーゲルは夫人を見つめた。夫人は輝いていた。希望、不屈の生命の意志で、夫人は目覚め、夫人は再び若返っていた。 — 人生は夫人にまだ大きな贈り物を用意していた。

「まだ貴方に話したいことがあります、パーゲルさん」と彼女は突然囁いた。ドアに視線を向けていた、「二人を探しているのは私だけではありません。もう一人男の方がいます。彼は私の車を止めさせました。太って、浮腫んだ顔の男の方で、強張った黒い帽子を被って、無表情の目をしています、 — ひょっとしてご存じですか」。

パーゲルは夫人を見つめた、「はい、存じています、...」と彼は小声で言った。

「いえ、彼については何も仰有らないでください」と夫人は急いで叫んだ、「彼については何も知りません。彼は私の車を止めて、何も尋ねず、挨拶もせず、ただ言いました、『とにかくあちこち行きなさい』と。それからまたどこかの国道で、ある小都市で見かけました。彼もまたいつも出掛けています。彼は、私が見つめていると、ただ頭を振り、更に進んで行きます。パーゲルさん、私が二人を見つけなくても、彼が見つけます。時々思います、人々は愛についてとやかや話す、と。 — でも憎しみがもっと強いものです」。

「そうです」とパーゲルは言った、「その男の人は悪を憎んでいます。彼は邪悪に見えます。しかし彼は悪意を憎んでいます。その憎しみで落ち着かず、彼はさまよっています」。

「彼のことは何も仰有らないでください」と夫人は再び叫んだ、「彼について何も知りたくありません」。そして全くの小声で、「だって男の方は今四週間以上、ヴィオレットと一緒にでしょう。この男が娘に対し何らかの面倒を見ているに違いないのです、...」。

パーゲルは夫人を見つめた。この母親は、永遠に母親で、 — 夫人は、娘を不幸に、悲惨な目に遭わせた虫けら野郎を嫌っている。しかしこの惨めな虫けら野郎が娘を相変わらず生かしているのです、娘にほんの少しでも食べ物を与えているのです、この男が、あの残酷な太っちょの手に落ちることを考えたくないのです。

パーゲルは立ち上がった。「奥方様、少なくとも枢密顧問官殿の件では何も心配なさらなくてください。差し当たり何も起きないでしょう。何かの間あったのでしょうか。多分計画があって、...」。

「そうでしょう、私どもはここから去るべきなのでしょう」。

「しかしこれらの計画は目下、実行できません。何かがありましたら、すぐにお知らせします」。

彼は一瞬思案げに夫人を見つめた。それから更に言い添えた、「父親殿にわざわざお手紙を書く必要はありません。父親殿のご要望に貴女は応ずる気がないので、それは書かれないことと同じことでしょう」。

「パーゲルさん、感謝申し上げます」と彼女は言った、「ご配慮に感謝致します」。夫人は彼に手を差し出した。彼に微笑みかけた。「貴方と話して、落ち着きました」。そして女性達のかの突然の説明しがたい、飛躍を行って言った、「パーゲルさん、もう一件よろしいでしょうか」。

「はい、何でしょう」と彼は言った、「喜んで承ります」。

「あの女性、ボックス嬢は遠ざけられたらどうです、貴方はそれどころか一緒に食事をなさるとか。いつも貴方の事務所に居座っているそうです。いや、怒らないでください、パーゲルさん」と彼女は急いで叫んだ、「貴方を信用していないのではありません。勿論気付いておられないでしょうが、あの娘は貴方に惚れています、...」。

「アマンダ・ボックスは私に惚れてはいません、奥方様」とパーゲルは言った、「私はただ彼女に優しくしています、一 つまり振られた小娘です」。より素早く言った、「彼女も私に優しくしてくれます。ノイローエの生活は私のような若者にとって時に少しばかり持て余します。時に一言話せる人間が回りにいて欲しいのです」。

「まあ、パーゲルさん」と正直に狼狽して夫人は叫んだ、「本当にそんな意味ではなかったのです。ただ言いたかったのは、ボックス嬢は、マイヤーと関係があって、一 マイヤーは本当にどうしようもない屑で、...」。

パーゲルは夫人を見つめた。しかし夫人は気付かなかった。夫人は本当に何も気付かなかった。夫人は何も当てこすっていなかった。

「ボックス嬢に会ったら、彼女に一言かけましょう」と夫人は和解して言った、「一、二回、彼女の挨拶に答えていなかったと思うの。今本当に残念に思っています、...」

部屋の外の玄関の間で時計が打ち始めた。真夜中であった。

「パーゲルさん、お帰りください」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は熱く叫んだ、「ベッドに就くようになさってください。本当に遅くなってしまいました。農園は時にお一人の方にとって少しばかりきついだらうと本当に思います。明日朝ともかく十分に寝てください。郎党だけに仕事を任せてみてください。何でも了承致します。貴方の裁量になさって。一 お休みなさい、パーゲルさん、重ねて感謝申し上げます」。

「お休みなさい、奥方様」とパーゲルは言った、「忝う存じます」。

「それでは存分に寝てください」と夫人は更に背後から声をかけた。

パーゲルは暗闇の中、一人微笑した。彼は夫人に対して悪く受け取らなかった。多くの事柄に関して、この賢明な大人の夫人は子供のようである。仕事に関して、夫人は相変わらず何か学校の宿題のように考えている。宿題は少し減らせよう。教師なら丸一日分の勉強を免除できよう。一 すると子供が喜ぶわけだ。夫人はまだ理解したことがないし、(将来も理解しないことだろうが)、人生は毎日その課題が課せられるもので、それは免除できないものなのだ。

官吏の家の上の階では窓辺に白い影があった。忠実な番人の女性が彼のために世話をしてくれていた。

「すべてきちんとしている、アマンダ」とパーゲルは小声で上の方へ言った、「ゾフィーの奮闘は無駄であった。お休み、温かくして寝て、明日は五時半に起こしてくれ、一 しかしモカを一杯頼むぞ」。

「お休みなさい、パーゲルさん」と上の方から声がした。

騎兵隊長がまた話すようになる

翌朝別荘前で次のようなことが起きた。フォン・ブラックヴィッツ夫人はすでに車の中に座っていた。夫人はオスカルに自分の指示を与えた。一　すると別荘のドアが開いた。騎兵隊長が出て来た。看護人が付いていた。

騎兵隊長は覚束ない、奇妙につまづきがちな足取りで車のドアの所まで来た。看護人のシューマンは階段の上の方で立ったままであった。

ゆっくりと、叱られることを覚悟している子供のように、臉を垂らして、騎兵隊長が尋ねた。「ひょっとして一緒に乗って行っていいかい、エーファ、頼む」。

エーファ夫人はとても驚いて、どう答えていいか分からなかった。夫人は看護人に途方に暮れた視線を向けた。シューマン氏は強く頭で頷いた。

「まあ、アヒム」と恵み深い夫人は叫んだ、「負担ではないの」。

彼は頭を振って、夫人を見つめた。彼の目は涙で一杯であった。彼の口は震えていた。

「まあ、アヒム」と彼女は叫んだ、「アヒム　一　とても嬉しい。注意して、万事また上手く行くわ。二人とも老けてしまって、一　そこに立っていないで、ここ私の横に掛けなさい。シューマンさん、加勢して騎兵隊長殿を車の中に入れてください。一　オスカル、もう一枚、毛皮の膝掛けを取って来て。一　シューマンさん、これからすぐにパーゲルさんの許に行って、このことを話してください。彼も喜ぶことでしょう。...まあ、アヒム、...」。

ようやく車は出発した。

騎兵隊長は首で詫げる仕草をした、「済まない、エーファ」と彼は小声で言って、再びとてもゆっくりとした口調であった。「私はまだ上手く話せない。すっかり分かるわけでもない、しかし、...」。

「アヒム、何も話すことはないわよ」と夫人は言って、彼の手を取った。「私ども二人と一緒にいさえすれば、でしょう、すべてもっと簡単に行くわよ」。

彼は激しく頷いた。

第十五章
最後の者でも一人ではない

137

ノイローエでの金の逼迫

今や十一月の末で、ほとんど十二月になっていた。凍てつく嵐や、濡れて惨めな降雪と共に一年が終わりに向かっていた。最後のジャガイモ掘りの者達が逃散した。大打撃で、一万ツェントナーのジャガイモとそれ以上の量がまだ大地の中に残っていた。こちらの方向へはヴォルフガング・パーゲルは自転車で向かいたくなかった。ジャガイモの茎葉が大地の上で腐っているのを見、根の馬鈴薯も大地の中で腐っているのを見ると、一種怒りの羞恥心に駆られた、 — 都会の人々は飢えて死に向かっているのである。

私は多くのことを間違ってしまった、と考えた。しかし前もってどうして予見できたろう。誰も教えてくれなかった。それに毎日の仕事に追われて、一日の仕事を越えて見通すことができなかった。畑からすぐにジャガイモを駅に直送すべきであったろう。そうしたら今頃少しばかりの金が手に入っていたかもしれない。金は相変わらず足りない。ジャガイモは今、穴蔵にある。霜と泥棒を避けなければならない。 — ジャガイモは春に売却される予定だ。そのときはここで誰が農業経営をしているだろうか。

外では脱穀機が歌い、音高い。 — しかし甲高過ぎるし、目立ちすぎる。フランクフルトに一人男ありけり。この男はかつて多額のインフレ時代の金を提供していた。この金は一台の車の購入費となった。 — 今やこの男は自分の商品[穀物]を欲している。時代は変わり始めていた。ベルリンでは今や本当に紙幣印刷が停止したそうである。つまり、マルクはもはやこれ以上下落しそうにない。アメリカのドルが、四兆二千億マルクとなったとき、マルクは下落を止めた。ひょっとしたら、マルクはこの状態で本当に停滞するのかもしれない、 — 結局これもどうでも良いことである。

脱穀機は音高く、歌った。 — 時にこの脱穀機はフランクフルトの男のために、ライ麦を作る。時にこの男の分が空となる。他の男がもっと素早いからである。枢密顧問官フォン・テッシュォーはコート・ダジュール[紺碧海岸]の素敵な地ニースから去った。彼は今快適な町、ドレスデンに住んでいる。より詳しく言うと、ロッシュヴィッツの「白鹿」亭である。ひょっとしたら痩せたいのかもしれない、それともノイローエのことを考えると胆汁で苦しめられるのかもしれない。それとも恵み深い老夫人の神経の具合かもしれない、...

いずれにせよ、彼からの使者が頻繁にノイローエにやって来る。上級裁判所を含む執行吏であった。赤い刃傷ととても薄いブロンド髪の陽気な弁護士もヴォルフガングにとっても馴染みの人物となっていた。ドレスデンから父親はばくっと食いついた。彼は嗅覚があって、食欲が旺盛であった。その上執行力のある判決を得ていた。万事怖いものなしであった。 — 再び彼は三百ツェントナーのライ麦に食いついた。これはフランクフルトの男が入手する予定の貨車であった。...

パーゲルはタイプライターの許に座っていた。ようやく朝の八時半であった。彼は一通の手紙をタイプした。郵便配達人に是非とも預けなければならない手紙であった。

「いとも尊敬する某々殿、遺憾ながらお伝えしなければなりません。貴方にすでにご連絡済みのライ麦貨車（バーデン326485、十五トン）は発送前に当地の積込み駅で、貴方にも周知の、フォン・ブラックヴィッツ氏の別の債権者によって押収されてしまいました。更に二、三日の猶予を願います。できるだけ早急の代替の供給を計画しています。その間、貴方のために用意する穀物を直接、脱穀機用のトレーラートラックで運送できないか、よろしく考慮して頂きたいものです。すでに口頭でも申し上げましたように、供給に関して、我々の善意の意志も、可能性も欠けているわけではありません、...」。

しかし領主一家は、このことに何と言ったか。別荘の両夫婦はこのことに何と言ったか。二人は何も言わなかった。

騎兵隊長はそもそも言葉を発したくなく、彼は自分の妻の横に静かに座っていることを最も好んでいた。エーファ夫人は頭で頷いた。「貴方が正しいと思うことを、その通りに行ってください、パーゲルさん。全権委任なのです、...」。

「しかし父親殿が、...」。

「あら、パパは。 — ひどいことをしようとは思っていないのよ。そのうち分かります。すべて全く混乱すると、私の父が出て来て、すべてを片付けるのです。 — そして自分は賢いと顔を輝かせるのです。そうでしょう、アヒム。パパはいつもそんなだったでしょう」。

騎兵隊長は賛同して頭で頷いた。彼は微笑した。

「しかし郎党への賃金代がないのです」とパーゲルは絶望して叫んだ。

「パーゲルさん、何か売却しなさい。 — 雌牛を売りなさい。馬を売りなさい。今、冬の始め、何が必要でしょう。仕事は終わっています。馬が必要ですか。でしょう、アヒム、冬に馬は必要ないでしょう」。

「要らない」。騎兵隊長は了承した。冬に馬は必要ない。

「請負契約は生ける属具[牛、馬]の売却を禁じています。生ける属具、死せる[無機]の属具、これらは貴方らのものではありません、奥方様。枢密顧問官殿のものです」。

「貴方はフォン・シュトゥットマンさんになったのですか。今頃また請負契約を持ち出して。 — 親愛なるパーゲルさん、面倒なことを仰有らないで。代わりに貴方には全権委任があるのです。それに今は、後、二、三日のことになっています、...」。

パーゲルはエーファ夫人を問うように見つめた。

「そうなの」と彼女は突然熱くなって叫んだ、「私は確信しています。私どものドライブもようやく成果を上げるでしょう。あの太った男が、その強張った帽子を被って再び現れました。...しばらくあの人の姿が見えなかった。ほとんど希望を棄てていました。...しかし今またあの人が現れたのです。私どもに頷きかけました、...」。

パーゲルは去った。

パーゲルは金を用意して、人々に支払った。パーゲルは金が手に入らなかった。彼は人々に穀物やジャガイモ、子豚、バター、鶯鳥を与えた。

パーゲルはタイプラーターの許に座って、タイプした。

「我々は更におよそ四千ツェントナーの穀物を脱穀しないままにしていました、...」。

これは本当のことか、それとも嘘か、とパーゲルは考えた。自分には分からない。自分は数週間前から穀物帳簿をもはや記していない。それを書いている暇がない。すべての管

理が行き届いていない。...彼は嘆息した。誰かが、私の後、この小屋を引き継いだら、私は軽率で、処罰に値すると思われるに違いない。いや、実際すべて合っていない。枢密顧問官殿がこれを目にすることになったら、...。パーゲルは嘆息した。いや、人生は少しも楽しくない、もはや私には美味しくない。ペートルのことを考えてさえも、もはや美味しくない。私がいつか本当に彼女の許に行くことになったら、私は確信している、私は全くの神経衰弱となって、おいおい泣くことだろう。...しかし今は逃げることもできない。私は夫妻を見棄てることはできない。夫妻はもはやあの忌々しい車のための燃料費も汲み出せないのだ。

彼は再び嘆息した。

「これで貴方は三回目の溜め息ですよ、パーゲルさん」と窓の所からアマンダ・バックスが言った、「今ようやく朝の八時半で、一日をどうやって切り抜けるつもりですか」。

「それを私も時に自問することがある、アマンダ」とヴォルフガング・パーゲルは答えた。気晴らしができて、感謝していた。「しかし一般的によくしたもので、一日自身が切り抜けるよう配慮している。大抵、私が朝、案じていたほどにひどくなる日はなかったし、また朝、希望していたほどに、上手く行った日もない、...」。

アマンダ・バックスは答えようとした。彼女は苛立って窓の外を眺めていた。彼女はこの賢い格言を聞きたくなかった。 — しかしこの時、彼女は叫び声を上げた、恐怖の叫び声であった。 — 「パーゲルさん、これを見て」。

パーゲルは窓辺に飛んで、見た、...。

彼は何かが這って来るのを見た。枢密顧問官の公園の草地を越えて、人間らしい動物で、腕と脚で這いながら、先の方には陰気な恐ろしい赤色があった。何か長いもの、褐色のものを背後に引きずっていた。

一瞬パーゲルは凝固して立っていた。

それから彼は叫んだ、「森林官だ、今度は奴等は森林官まで叩き殺した」。そしてドアから飛び出た。

138

ある臆病者の英雄的死

ヴォルフガング・パーゲルにとって、老森林官クニーブッシュを、病人として寝せつけから、再びベッドから出るようにすることは、少しも難しいことではなかった。 — 医者自身が想定していたその半分も面倒ではなかった。生涯を新鮮な外気の中で過ごして来た一人の男にとって、絶えず閉ざされた部屋の空気の中に横たわっていることは、頭が寂寞となることであった。「本当に不安になる、頭に壁が倒れてくるのではないかと思うのだ」と森林官はパーゲルに向かって嘆いた。「一切が窮屈だ、 — それに妻は、窓一つ開けることを望まない」。

ひょっとしたら、森林官をかくも速やかにベッドから追い出したものは、窮屈さのせいでもなく、呼吸の息苦しきのせいでもなく、冬には配慮の必要な蜜蜂のせいでもなく、毎日餌をやらなければならない猟犬のせいでもなかったろう。

ひょっとしたら、彼が部屋に留まっていることに我慢できなくなった最大の原因は、彼

の妻のせいであったかもしれない。二人は今まで生涯ずっと側に寄り添って過ごしてきた。

一 いや、二人は互いに余りに飽きがきていて、もはや姿を見たくなかった。いや、実際もはや会わずに、毎日すれ違って過ごし、一言も互いに話さなかった。今、彼がキッチンへ行き、自分用のコーヒーを沸かし、パンにバターを塗り、それから彼がキッチンを出ると、おもむろに妻が深く息をして、自分用のコーヒーを沸かし、パンにバターを塗るのであった。

これは極端な、どうしようもない倦怠であった。二人は夙に反吐、嫌悪、反撥を越えていて、二人はそもそももはや相手のために存在していないのであった。とうにもはや卒業である。夫が口を開ける前に、妻は、夫が何を言うか分かっていた。夫は妻のことすべてを分かっていた。豌豆が妻にとってどんなに体に良いか、妻は南風るとき、左耳が聞こえないこと、月桂樹の葉を添えたヤツメウナギは、その葉のないヤツメウナギよりもはるかに美味しいと分かっていた。

「別の部屋に移ったらどうだ」とパーゲルは提案した、「家には空いた部屋は十分にあるだろう」。

「しかし私のベッドはずっとこの部屋にあったのです。晩年の日々にもはや変更できません。眠れなくなります」。

「だったら少しばかり散歩したらどうだ」とパーゲルは答えた。「新鮮な空気と少しばかりの運動は体に良いと、医者が出ている」。

「本当に医者がそう言ったのですか」と森林官は不安げに尋ねた、「それでしたら私も試してみましよう」。

彼は、医者が指示したことすべてを行う気であった。医者は彼のために大変結構なことを用意してくれた。仕事からの休養、医療保険金、安心して入眠するための素敵な薬を準備してくれた。医者はその上はるかにもっと良いものを約束していた。つまりインフレの収束と年金生活であって、安心の晩年である。

そこで森林官は散歩した。しかしすぐに散歩はまた難しくなった。直接家に接している森の中へ、森林官クニブッシュは金輪際もはや行かなかった。彼はその生涯で森を十分に見て来ていた。十分過ぎるものであった。彼は実際木を見て、森を見ていなかった。彼はただ、かくかくしかじかの量となる薪の木々とか、枕木や木製輻、車大工のための輻、生垣の杭となる木々のみを見ていた。...それで彼が森を散歩すると、あたかも自分は病気ではなく、仕事をしているような風に見えた。病気の事務職員が息抜きに事務所に出掛けたような按配であったことであろう。

しかし別な側、村の方へも、森林官は歩まなかった。そこの人々は彼の生涯、彼の陰口を言っていた。彼は単にのらくら者で、散歩しかない奴だ、と。そこで彼はこの人々の前で散歩したくなかった。というのはこの人々の言うことが、結局本当であるかのように見えたからである。

かくて彼に残されたものは一本の道で、つまり森林官地からジャガイモ穴蔵広場を過ぎて、かなり直接に荘園ノイローエに、即ち農園中庭と官吏の家に通じている道であった。そこで森林官はこの唯一の道を歩いた。彼は大変規則正しく、日に何度も歩き、最も規則正しく森林官はこの道の最後に、日に何度か荘園事務所に入って来た。

森林官は、晩年になって更に一人の本当の友を見いだすという事態になっていた。 一

そしてパーゲルはこの善良な思いを裏切りたくなかった。彼は森林官が再び来るのを見るたびに、この老公が深く息をして、椅子に腰掛けて、半時間も若いこの役人から目を逸らさないでいるたびに、時々嘆息した。森林官は、パーゲルが仕事をしているとき、必ずしも邪魔はせず、一言も言わなかった。彼はせいぜい一度、感嘆の叫び声を発するだけであつた。例えば、パーゲルがタイプライターで書いているとき、一 いや、何という手の動きだ、機関銃の発射のようだ、すごい。

いや、彼は必ずしも邪魔はしなかった。しかし、この球状の色褪せたアザラシの目の視線をひたと自らに据えられていると感じ、無条件の恭順、熱狂した友情の視線を感じることが、少しばかり煩わしかった。パーゲルはこの感情に対して少しも報いなかったが故にひよっとしたらまさに煩わしかったのかもしれない。いや、彼はこの森林官、この老いた不安の臆病兎を格別好きではなかった。一 結局自分はこの友情に値するようなことを何かしてきたか。ほとんど何もしていない。医者に電話して、少しばかりの現物支給と、二、三回の短い病気見舞いだけである。

気詰まりになると、パーゲルは自分の仕事を中断した。「クニーブッシュさん、行きましょう。ジャガイモ穴蔵にまた鼠穴がないか、調べなければならぬ。ちょっとの距離行こう」。

いつも森林官はいそいそと立ち上がって、一緒に行った。この友は自分と離れたがっている、自分を遠ざけようとしていると森林官が思うことはなかった。一 三、四回そのようなことがあると、老クニーブッシュは、自分の友に対し少なくとも一つの仕事を軽減できるかもしれないと思いついた。彼は今や、朝の散歩を荘園事務所までするたびに、穴蔵から穴蔵へと歩いた。彼は伝えた、「穴蔵六、七、十一にそれぞれ一つの穴。北の端と中央、南の端に、...」。

彼はとても厳密に行っていた。

「いや、貴方は溜め息ですね、パーゲルさん」とアマンダは怒って言った、「ずっと座っていて、事務所でじろじろ見られていたら、たまらないと森林官に冷静に仰有ればいいのに。あの人はおとなしい人じゃなかったのですよ。しゃぶれる人とみたら、しゃぶってきた人ですよ。貴方は言いたくないのであれば、私が言いましょう」。

「放っておけばいいよ、アマンダ」とパーゲルは答えていた。彼はとても強調して言ったので、アマンダは本当にそのままにしていた。

森林官がこの日家から出たとき、完全な冬の凧の中、雨がとても細やかに天から降っていた。明るくもなく、暗くもなく、薄明かりでさえなく、ただ鈍く、悪夢のように若い人々の心に積もるこうした荒涼たる慰めのない秋の日々の一日であつた。しかし森林官はこの天候を喜んだ。これで彼は事務所の若い友に会えるのは確実だと思った。この悪天候では、この友は出掛けないだろう。むしろ乾いた部屋の中で文書の仕事を片付けるであろう。森林官は古いフェルト帽を頭蓋に被せて、雨用ケープをまとって、道に出た。

彼は両手を、腹の上、乾いたまま温かくケープの下で組んで、ゆっくりと快適な引きずり足で、農園中庭へ向かった。自分で正確に考えて見ると、自分の生涯でかくも上手く進行したことはなかった。とても上手く進行しているので、彼もそれを実感した。枢密顧問官の帰還すらも彼は恐れる必要はない。パーゲルの依頼で、医師がフォン・テッシュー氏に手紙を書いていた。そして老領主は、老いた森林官のことを悪し様に考えず、まことに

好意的に返事を寄越していた。再び自分の両脚で少しばかり立てるよう養生し、自分の後継者に森での策略や、猟区での要領、住民の抜け目のなさについて伝授できるよう心がけなさい。しかし仕事については実際何も考えなくてよろしいというものであった。

老領主は分かっているのか。森林官の自分はそもそもはや考えない、つまり心配をしないのだ。森のことなど知ったことじゃない。しかし自分はジャガイモ穴蔵に穴を見つけたら、若干残念に思うだろうか、ほんの少しでも立腹するだろうか。これは自分の最良の友、唯一の友パーゲルが心配し、悩むことだ。これは承知している。しかし森林官クニーブッシュは穴を見つけると、喜ぶのだ。穴があると、何か伝えるべきことが生じて、自分の友の役に立てるからだ。

かくて彼は全く満足して、ジャガイモ穴蔵の片側を上がり、もう片方を下って行った。しかし残念ながら、ほとんどこう考えるところであった。このひどい天候では誰も盗みに出る気はしない。服はわずかしかないし、戦争時からのものが残っているだけで、男どもは戦場から持参して来た灰色地の制服を濡らしたくはないだろう。

今日は何も伝えるべきことがないように見えて、これは面白くないことであった。とうとう老クニーブッシュは最後の穴蔵の所、その反対側の、森に面した側に来て、実に憧れの鼠穴を見つけたのであった。それも全く見事な穴で、少なくともその穴からは六から八ツェントナーのジャガイモが取り出されていたろう。

今や森林官は機嫌良く若きパーゲルに報告すれば良かったであろう。しかし彼はその代わり、憂わしげに小さな踏み跡の道を見ていた。その道は穴蔵の穴から直接唐檜の保護林へ通じていた。湿った天候で、土壌が柔らかくなっていて、土壌は明瞭に語っていた。ジャガイモは手押し車で直接穴蔵広場から固い通りへ出て、それから村へ運ばれたのではない、と。全く新鮮な痕跡は、ジャガイモはまず保護林へ運ばれて、多分まだそこにあると語っていた。

森林官は老人どもの好奇心に苛まれていた。むずがゆい湿疹のようにこの好奇心は苦しめるものである。森林官に猟師の追跡感覚が生じた。一 終生、野獣を追跡して、晩年の日々、無茶に足跡を追いかける人はいない。それに森林官にとって、自分の友パーゲルに何か格別のことを知らせられるという思いが疼いた。

この痕跡を追うことは危険であろうという考えは一瞬も思い浮かばなかった。ジャガイモ泥棒は害のない人々のすることである。ジャガイモ窃盗は単に飢えを凌ぐため、文書の罰金刑で済まされる。ジャガイモ泥棒は捕まっても指弾の対象とならない。森林官が若干躊躇ったとすれば、もはや他人事に巻き込まれたくないという固い決心のためであった。しかしパーゲルの気に入られたいという望みがあって、こっそりと、忍び猟の足取りで、森林官は獣道を進んだ。

ただフウフウ言いながら、ドタバタと保護林へ向かっても、心配する必要はなかった。ここらは人々が長い年月のうちに綺麗に片付けていた。多くの小木、柴、落ち葉が整理されて、この立木の間を間伐された高林のように行けた。

かくて森林官は思いがけず速やかに、眼前に小さなジャガイモの塚がある箇所に来た。赤いヴォールトマン教授だと森林官は満足げにその品種を確定した。多分豚を太らせたいたのであろう。

森林官は何かを感じた。自分が一人つきりではないと感じ、一つの視線を感じた。そこ

で彼が目を上げると、一人の男が唐檜の下に座っていて、この男はズボンのボタンを外して、うずくまっていて、冷静に森林官を見つめ、自分の仕事を果たしていた。

「何だ、何をしているのだ」と森林官は驚いて大声を出した。

「糞をしているのだ」と男は親しげににやりと笑って答えた。

「それは分かる」と森林官は満足して語った。パーゲルにすべて語ってやるぞ。「貴方はジャガイモをくすねたのか」。

「勿論」とこの男は釈明して、時間を稼いでいた。

「しかし貴方は誰だ、私は全然知らない」と森林官はびっくりして叫んだ。彼は材木販売で近隣二十キロのすべての人々を知っていると思っていた。しかしこの男を自分はまだ確かに見たことがない。

「私をよく見てみなされ」とこの男は言い、立ち上がって、平然と自分のズボンのボタンをしっかりと締めた。「きっと見覚えがあるだろう」。

すべては心地良く、上機嫌で進行した。 — ジャガイモ泥棒は実際悲劇的犯罪ではない。 — 森林官はその男を極めて冷静に観察した。森林官は先ほどと同じく、ケープの下、腹の上で、両手を組んでいて、立っていた。その男が心地良くより間近に歩み寄って来た。彼の中で不安の念は生じなかった。その代わりますます明瞭に或る奇異の念があった。灰色地の灰色模様の布製品ニッカーボッカーのこのモダンな服を自分は良く知っている。

「しかしこの服は騎兵隊長の服ではないか」とクニブッシュは呆気に取られて叫んだ。

「何でも良く気付くね、森林官殿」とこの男はにやりと笑った、「だろう、私に良く似合うだろう」。

その男は今や森林官の間近に立っていて、彼に笑いかけた。しかしこの笑いの中、言葉の調子の中、この男の接近の中に、何か森林官の気に入らないものがあった。

「それでは貴方の名前を教えてください」と彼はより厳しく命じた、「私は貴方を確かに知らない」。

「それでは教えて進めよう」と相手は叫んだ。

瞬時に彼の顔は薄笑いから憎悪に変わり、瞬時に彼は森林官を掴んだ。 — ケープの下、森林官は両腕を動かさなかった。

「何をやる」と森林官はうろたえて叫び、それでもまだ本気に受け取らず、ただ弱々しく防御した。

「これから貴方の友ボイマーからのご挨拶だ」とその男は直接、森林官の顔に叫んだ。

同じ瞬間、森林官は何か恐ろしいドカンという音を聞いた。直に自分の頭蓋で音がした。頭蓋内は真っ白にくらんだ。...

二人であったに違いない、一人が私の背後から頭の上に叩き付けた、と森林官はそれでも考えていた。...

それから一切は赤くなり、やがてゆっくりと黒くなった。 — 彼は自分が倒れるのを感じた。 — 自分は最期だ。

ゆっくりと森林官はまた我に返った。ゆっくりと記憶が脳に戻って来た。それ以前に考えていた最後のことと記憶とが結び付いた。

二人であった、と森林官は考えた。一方の者を自分は知らなかった。しかし私の頭蓋を

背後から叩き割ったのは、ボイマーであったに違いない。...

それから考えた、殺害されることはさほどひどいことではない。殺害されることを自分は生涯恐れていた。今となってみれば、そんなにひどいことではない。...

一瞬たりとも、森林官は自分の生命が救われるとは思っていなかった。自分はドカンという音を聞いた。奴は私の頭蓋を叩き割ったに違いない、あの屑、あのボイマーは。では奴は私を捕まえたわけだ。そんなに痛くない、むしろ圧力のようなものだ。...それから煩わしいものが来た。自分の頭蓋の上を流れる温かいものだ。それは、私から流れ出る血だ。自分はそれに気付いた、血が出て楽になった、少しも不快なことではない。...

奴等はそもそも逃げたのかと今ようやく森林官は考えた。

彼は聞き耳を立てた、彼は何も耳にしなかった。全く静まりかえっていて、足音も咳も聞こえない。小枝の音もしない。

苦勞して彼は頭を左右に動かした。彼は目を正しく回すことができなかった。彼は頭全体を動かさなければならなかった。しかし誰も見えない。二人は去っている。奴等は、私が死んだと思ったのだ、と森林官は考えた。しかしそんなに直ぐにはお陀仏にならなかったのだ。

本来このままの状態がいい。老森林官クニーブッシュ、自分は、生涯もっとひどい状態で臥せていたぞ。自分は少しばかりきつい。そして少しばかり楽だ。肢体はきつい、頭と胸のどこかが、次第に楽になって行く。

彼は一瞬、自分は何かなすべきか、何をなすべきか、思案した。...しかし何故そもそも何かしなければならぬのか。

寒さは、肢体の末端から上昇して来る氷の寒さは、確かにますます厳しくなるが、しかしこれは我慢できるものだ。結局午前中が経過するうちに、人々が穴蔵の所へやって来るだろう。自分は近くにいるから、自分はただ叫べば良い。すると人々が自分を見つけだし、家へ運び、ベッドに寝かせてくれよう。 — 自分は、自分のベッドの中で死ぬことをずっと願って来た。

最後の生命力がゆっくりとその恐ろしい頭蓋の外傷から漏れ出て行く老森林官は、一方の腕を頭の下に押し込み、ほとんど快適に横たわっていた。万事そんなにひどくない、と今一度彼は考えた。最悪のことでさえ、余りひどいものではないと知っていたら、そもそも人生で不安を抱く必要はないであろう。

彼は人々が穴蔵へいつやって来るか計算しようとした。豚番長のためにジャガイモを取りに来る必要がある。せいぜいまだ二時間ほどかかる。その間自分はまだ人生を得ていて、その後自分のベッドで死ぬわけだ。...

しかしパーゲルだ、と森林官は突然思いついた。私の友のパーゲルも私を待っていよう。毎朝私は早めに彼の許へ行って、穴蔵の穴のことを伝えて来た。 — 今日行っていない。パーゲルが私の不在を寂しく思っていよう。

彼は両目を閉じた。使用済みの、艱難辛苦の男にとって、自分がまだ誰かに不在を寂しく思われるというのは、甘い感傷であった。彼はパーゲルがボックスに尋ねる声を聞いた。彼が目を閉ざすと、いつも親切な若い男の音が響いて来た。今日我らの老クニーブッシュはどうしたのだ。彼はまだ報告に来ていないぞ、アマンダ。

彼は微笑した。

しかしそれからすぐに活気づいた。苦悩の感情が、彼の中で動き始めた。自分はまだ報告を済ませていない。今日は本当に何か知らせるべきことがある。それなのに自分はいかない。

でも人々はすぐに自分を見つけよう、彼は自分を慰めようとした。

しかしこの慰めは効果がなかった。私は次第に衰弱して行く、と彼は考えた。ますます冷たくなって行く。ひょっとしたら後ではもはや叫べなくなるかもしれない。もはや話せなくなるかもしれない。 — 人々に見つけられても、手遅れになろう。

彼は頭を振り動かそうとした。彼は流出した血の量から自分に残されている生命を算定しようとした。しかしできなかった。余りに面倒であった。

恐ろしい戦いが彼の中で始まった。臨終者としての彼はただ静かに横たわっていて、穏やかに散って行くのを感じ、休んでいたかった。...しかし男として、友としての彼は、言った。自分は起きて、伝えなければならない、と。ボイマーがまた現れて、別な男、未知の男が来ている、 — 二人の危険な者達、二人の貪欲な狼どもだ。

いや、私は行けない、と彼は嘆いた。私は歩けない。

おまえは歩けないのであれば、這えばいいと容赦ない声が語った。

私は生涯休んでおれなかった、少なくとも落ち着いて死なせてくれ、と彼は乞うた。

墓場で休めばいいのだ、今は知らせるのだ、と容赦ない声がした。

そしてこの老公、使用済みの男、臆病者、お喋り屋は、 — 腹ばいになって進み、背を丸め、氷のような手足を縮ませた。意志、義務への容赦ない意志が、彼を自分の全本性に対して絶えず高く抵抗させた。その意志が今一度、最後の極端な緊張を強いた。老森林官クニーブッシュは四つん這いになって森の土壌の上を進んだ。そして或る袋の上を這って進みながら、彼はこの袋を掴んで、これも一緒に引っ張って行った。証拠品を入手したとおぼろげに思っていた。

彼は這った。深紅の頭の緑色のぞっとする蝸牛のように、彼は森の土壌の上を這った。彼は穴蔵広場の上を這って進み、今や希望を一杯に頭を上げた。しかし誰も見えなかった。

彼は嘆いた。我が神よ、我が神よ。誰も私を助けてくれないのか。

しかし彼は更に這って行った。彼は穴蔵広場から下って道を這い、そして公園に沿って這い、下の垣根の所に、いつもは気付かない穴を見つけて、 — それは這っていたからまさに見えたもので、 — その穴を通り抜けて、自分の道を短縮した、...

彼はすべてを正しく、正確に行った、あたかもまだ脳は働いているかのように。しかし彼の脳はただ薄明かりの状態であった。体と精神が産出できるもの、これが途方もない意志によって消費され、この意志が彼を絶えざる匍匐前進へと強いた。彼はもはや、パーゲルのことも、ボイマーのことも、凍てつく寒さも、外傷も考えていなかった。苦悩の中、相変わらず引っ張っている袋のことも考えなかった。 — 彼はただ這わなければならないのみ考えていた。這って、這って、這って行く。...最後に彼は尽きた。彼はパーゲルが彼に呼びかけた瞬間に倒れた、「我が神よ、クニーブッシュ、親愛なるクニーブッシュ、 — 貴方は何を蒙ったのだ」。

この瞬間、この馴染みの友の声を聞いて、意志は終わった。彼は倒れ、匍匐は止んだ。...

アマダとパーゲルと一緒に森林官をヴォルフガングの部屋へ引きずって行った。二人は彼をヴォルフガングのベッドに寝せた。しかしその袋を二人は彼の手から離すことがで

きなかった。指が布地に生長して食い込んだかのようであった。

森林官クニブッシュが、自分が果たすべく英雄的に受難したその伝達を友人にすることができないまま、他人のベッドの中で死んでしまったら、世にも辛辣なイロニーと言えるものであったろう。しかし死の天使も彼に対しそれほどむごい目に遭わせなかった。彼は今一度目を開けることができた。自分のすぐ上に、大きな好意的目の友人の白い顔があった。彼は今一度善良な声を聞くことが許された。「いや、老クニブッシュ、何とびっくりさせてくれることか。まあ、待ちなさい。すぐ医師がこちらに来る。きっとまた治してくれよう。痛みがひどいかい」。

しかし森林官はただ不機嫌に頭を動かした。医師と痛みはもはや彼にとって用はなかった。彼はすでに黄泉路に落ちていた。ただ彼はそこから一度戻って来ていた。何かを、つまり伝達を済ませなければならないからであった。

そして彼は途切れ途切れの声で、パーゲルの耳に伝達を囁いた。そしてパーゲルは再三頷いて、言った、「分かった、分かった、クニブッシュ。もっと小声で、力を込めないで、すべて聞き取れるぞ、...」。

森林官は囁き続けた。一言一言彼にはきつかった。しかしどの言葉も必要であった。それ故発声されなければならなかった。しかし彼がようやく終わると、彼はパーゲルを、嘆願し、渴望する目で黙って見つめた。どんな鈍感な者でも、この視線にある切迫した問いは理解したであろう。実際ヴォルフガング・パーゲルは決して鈍感極まる者ではなかった。

「健気な男よ」とパーゲルは言って、穏やかに森林官の手を握った、「とても健気な男だ」。

そこで森林官は解放されて微笑した。ひょっとしたらこのように微笑したことは生涯なかったかもしれない。

それから彼は眠り込んだように見えた。そしてパーゲルは彼の側に座っていた。彼は緩んだ老人の手を握り、聴かされたことを考えた。それは手がかりの少ないものであった。森林官は一方の男を見ていなかったし、彼が見ていた男は彼の知らない人物であったからである。

パーゲルが悲しげにそこに座っていると、彼の視線は彼の足許の古い汚れたジャガイモ袋に落ちた。臨終者の手が、友の手を求めて握ったとき、それを離れたからである。彼はその袋を足で踏み付けた。そしてあちこち裏返した。袋に張り付いていたすべての汚れ物の下に名前のような黒い文字があるように見えた。郎党が現物支給袋に記している名前である。

そこでパーゲルは屈んで、空いた手で、袋を握った。彼はそれを膝の上に置いて、手で汚れ物を拭き取った。しかし臨終者の手をまだ彼は放していなかった。上手く行って、その文字を一字ごとに読めるようになった。判読は難しかったが、読めた。全体、読めるようになったとき、名前コヴァレフスキーが浮かんで来た。

ヴォルフガング・パーゲルは意気消沈してその名前を見つめていた。というのはすべて

がまた新たに混乱してきて、明瞭にならなかったからである。正直者の老代官コヴァレフスキーがジャガイモ泥棒と殺害と何の関わりがあるのであろう、となったからである。きっとこれは盗まれた袋であろう。

この瞬間、事務所のドアが開いた。アマンダ・バックスが入って来た。彼女はその間電話していて、医師は十五分したら到着するであろう、警察はひよっとしたら三十分してから来るかもしれないと伝えた。...

パーゲルは返事として袋を持ち上げて、彼女に名前を示して言った、「皆来るのが遅すぎる。彼は殺害者を見ていなかったし、彼を取り押さえている者の名前を知らないのだ。この袋の名前も更に参考にはならない、...」。

するとアマンダは真っ白になった。彼女はパーゲルを大きな、びっくりした目で見つめて、震え始めた。

「一体どうしたのだ」とパーゲルは尋ねた、「ジャガイモ袋のコヴァレフスキーの名前が何の関わりがあるのか、分かるのか」。

アマンダは黙っていた。彼女は胸に手を置いて、黙って臨終者から袋の方を見て、袋からパーゲルの方を見た。

「アマンダ、話してくれ」とパーゲルは迫った、「これについて何を知っているのだ」。

「私は承知しています」とアマンダは全くの小声で囁いた、「ゾフィー・コヴァレフスキーの寝室に脱走した囚人が住んでいるのです、...」。

パーゲルは頭を上げて、青白い顔で震えている女性を見つめた。

「そうなのです、知っていました」と彼女はより素早く言った、「このリープシュナーは盗みに出掛けていて、ボイマーと一緒になのを。それで両者のうちの一人が森林官を取り押さえていて、もう一人が打ち砕いたのです、...」。

「アマンダ」とパーゲルは叫んだ。

「そう、アマンダなの」と彼女は繰り返した、涙があふれ出てきた。「私は殺人者の片棒を担いだことになってしまった。こんな汚れた話とは縁を切ったとちょうど思っていたのに」。

しばらく室内は静かであった。静かにパーゲルはこの娘の涕泣を聴いていた。それから彼は頭を上げて、小声で言った、「それではアマンダ、勿論その話しを聞かせてくれ」。

「はい」と彼女は絶望して叫んだ、「今では私も話さなければならないと分かります。

— でもその頃は、— ゾフィーは私にとっても優しい言葉をかけてくれたのです。それに私はいつも私のハンス君のことを、パーゲルさん、検査官マイヤーのことです、考えなければならなかったのです。マイヤーのことを誰かが裏切って警察に引き渡していたら、私はどんな思いになったことだろうか、と。私はマイヤーがここから逃げ去るときも、手伝ったのです、彼は私に発砲したというのに。自分の友を袖にはできませんよね。彼女、ゾフィーは私に語っていたのです、相手は彼女に優しい、と。二人はすぐに出発する、ただまだ二人は旅行費を貯めなくてはならない、これは盗むことなんだけど、そしてこの相手はゾフィーに優しいのです。これはゾフィーが言ったから、そうなので、相手はゾフィーに優しい、それで私は黙っていることに決めたのです。— 私のハンス君は私に優しくなかったのに、...」。

「しかしアマンダ、黙っていることは良くないことだと」とパーゲルは固執した、「感

じておっただろう」。

「いや、今頃仰有っても」と彼女は野蛮に叫んだ、「ほとんど胸は張り裂けそうでしたよ、特にゾフィーが貴方に対して下種なことをして、貴方がゾフィーに乱暴をしたいかのように見せかけたときには。しかし私に、この世で何が正しく、何が正しくないか分かりましょうか。貴方は私にいつも仰有っていましたが、『アマンダ、それは品がない』とか、『アマンダ、むしろそれはよしてくれ』と。 — 貴方が黙って鼻を歪めるとき[小馬鹿にするとき]、それは最悪のときです。私が他の人々について何か話そうとすると、貴方はいつもそうしていました。結局私はこう考えたのです。黙っていることだ、この人は、自分にとって礼儀正しい唯一の人間だ。この人も考えることだろう、裏切りは裏切りだ、一人の囚人であろうとも、裏切ってはならない、と。私はもはや右も左も分からなくなっていました、...」。

彼女は泣いている目で請うように彼を見つめた。

「とても残念だ、アマンダ」とパーゲルは言った、「いや、貴女の言う通りだ。私はもっと別な風に貴女とは話す必要があったろう。とりわけ貴女の口を禁ずべきではなかった。多分私に大方の咎がある。 — しかし今は取りかかろう。貴女はここに腰掛けて、彼の手を握ってくれ。彼はこの違いに気付くまい。彼が目覚めたら、彼に言ってくれ。私は警察を待っておれない、ひょっとしたらまだ奴等をつまえられるかもしれない、と、...」。

そしてパーゲルは農園中庭に飛び出して、二、三人の屈強な男達を招集した。彼らはこっそりとコヴァレフスキーの家へ押しかけ、上の階でボイマーとリープシュナーを捕らえた。二人は自分達の品をまとめようとしていた。急ぐ必要はないと二人は思っていた。二人は森林官を完全に撲殺したと信じていて、森林官はすぐには見つからないと固く信じていたからである。

しかし二人は捕らえられ、圧倒され、縛られて、警察に引き渡された。 — かくて検察は殺人罪を主張した。そして二人は終身刑を受けた。二人は殺人罪の言い逃れができなかったからである。

別荘で暢気に家事をしていたゾフィー・コヴァレフスキーを逮捕することは、パーゲルは他の者達に任せた。彼は森林官の許に戻った。しかし彼の部屋には医師だけがいた。森林官クニブッシュはすでに逝っていた。

140

パーゲルは金の工面をしなければならない

この日の晩になってというのではなく、ようやく次の日の晩になって、ヴォルフガング・パーゲルはあっさりと明瞭に、ブラックヴィッツ家の人々の本性は何であるか、パーゲルの本性は何であって、本来この荘園ノイローエでどんな役割を果たしているのか、悟ることになった。何の価値があって、パーゲルはここで何をしたのか、と。人間は善行の決意をする前に、その善行についてしばらく考える必要があるばかりではない。下種な行為のためにも、大きなことであれ、小さなことであれ、時に時間を要する。エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人はおよそ三十六時間の熟慮を必要とした。

馴染みの大きな車が官吏の家の前に止まったとき、すでに暗くなっていた。しかし勿論

暗い時である。人間は日中の明るいときよりも、むしろ暗いときに罪を犯す。人間は、罪が見えないのであれば、恥ずかしく思う必要はないと考えているように見える。車は止まっていた。 — しかしエーファ夫人も騎兵隊長も降りて来なかった。誰も降りて来ない。

人々は待っていた。

「オスカル、クラクションを鳴らしてみて」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は苛立って叫んだ。「私どもがここに止まっていることは耳に入っているはずよ。何故彼は出て来ないの」。

パーゲルはその車が来て、止まるのを耳にしていた。今はクラクションも耳にした。しかし彼は出て行かなかった。彼は悲しくて怒っていた。彼は自分の陽気な無頓着さを失っていた。まことに人生は味気ない。人生は歯の間で、埃や灰の如く、ぎしぎし言った。彼は昨日と今日、十度も別荘のドアの呼び鈴を押し、二十回も電話口に恵み深い夫人を求めていた。亡くなった森林官の葬儀をどのように行うべきか、身寄りのない森林官夫人の世話のために何をなすべきか尋ねようと思っていた。

しかし恵み深い夫人は彼に対して話しに応じなかった。ひょっとしたら彼が小間使いのゾフィーを無遠慮に去らせて、今や彼が自分の意志を貫き、また黒いミンナを別荘の仕事に就けたことに恨みを感じていたのかもしれない。ミンナは一山の私生児の子供を抱えた汚れた女性である。

いや、皆、どうなとなれ。多分エーファ夫人は全くそんなにひどいとは言えない。以前はとにかく、夫人は彼にとって感じよく思われた。有能で、生来の機知があり、物分かりが良く、親切でもあり、他人のことも思っている。 — 夫人にとって順調な時に限ったことであるが。しかし多分に裕福なために夫人は駄目になっている。夫人は願うことすべてが意のままになった。 — 夫人は順調でなくなると、ただ自分のことのみを考えるようになった。自分の調子が悪いからと、全世界に対して悪し様に考えている。 — そしてそのことを皆に気付かせている。

いや、クラクションを鳴らすがいい。私はドアの前に出て行かない。根本的におまえさんは騎兵隊長にぴったりお似合いだ。おぬしら両人とも同じ素材でできている。戦前おぬしらは人類の高みを歩いていた。おぬしらは貴族で、金を持っていた。...更に所謂民衆というものがいるのだ、構わん、その民衆とはどういうものか、教えてやろうじゃないか。

確かに騎兵隊長と忌々しいほどそっくりだ。勿論夫人は彼ほどに粗野ではない。その代わりにまさに女性なのだ。夫人は、何か得たいとき、愛敬を、女性の魅力を振りまく、脚を前に出したり、声を艶っぽくしたり、 — 微笑する。しかし結局は同じことを目指している。車が必要になったら、それを買うのだ。そして若い役人が、賃金がなくなった五十人の家族をどのようにして満腹にさせるか、ハラハラすることになる。

そうでしょう、私のために尽くしてくれるわよね。私は金のことで煩わしい思いはしたくないの。貴方はとても有能だわ。しかしおまえさんの都合通りには行かないよ。御免だね。 — おまえさんは上から目線だ。おまえさんの郎党はそんな役回りだ。ヴォルフガング・パーゲルと黒いミンナの差異は（恵み深い夫人にとって）フォン・ブラックヴィッツ夫人とパーゲルの間の差異ほどに大きなものではない。この夫人との差異はただ途方もなく大きい。

私は公正ではない、とパーゲルは考えた。車は更にまたクラクションを鳴らして、まこ

とに執拗に彼の考えの中に入って来た。私は公正ではない。夫人はまことに大きな苦悶を抱えている。富が利己主義にするのであれば、幸福が利己主義にするのであれば、苦悶は更にはるかにもっと利己主義にする。 — 私はひょっとしたら、夫人の許へ出て行くべきか。

しかしすでに決心する必要はなかった。パン生地顔の運転手オスカルが事務所に入って来て、告げた。「パーゲルさん、車の中の奥方様の許へお出てください」。

パーゲルは立ち上がって、オスカルを思案げに見つめて、言った、「分かった」。

オスカルは、先の家政婦のこの息子は、フォン・ブラックヴィッツ夫人の引きで、領主御一家の運転手となった、とパーゲルは策謀的に観察していた。すると彼が囁いた、「ご注意ください、パーゲルさん、夫人はずらかるつもりです。 — しかし私から聞いたと漏らさないでください」。

そして行った。

パーゲルは微笑した。ほら見ろ、オスカル、熟練のエンジン工も、四週間前は恵み深い夫人を浄福の天使のように仰ぎ見ていたが、彼にとっても領主一家との日々の交際ではこの甘い菓子パンが不味いのである。彼も恵み深い夫人同様に、事態の推移を嗅ぎつけている。しかし逆の予兆だ。彼は、自分が百倍もむしろこの未知のパーゲルさんの一員である、日々仕えている恵み深い夫人よりもパーゲル側の一員であると感じているのである。

パーゲルは車のドア近くまで歩み寄って、言った、「今晚は、奥方様、 — 一度お話ししようと思っていました、...」。

「五分前からこの窓の前で、クラクションを鳴らしているでしょう」と暗い車の中から姿の见えない夫人が叫んだ、「眠っていらしたの。夕方八時にもうお休みな」。

「私は昨日」とパーゲルは動じずに、答えた、「奥方様、貴女にお目にかかるために、二十回ほど伺いました。森林官のために是非とも伺うべきことがございまして、...」。

「私の夫はまた病気です」と彼女は叫んだ、「私ども二人、こうした恐ろしい出来事すべてのせいで、病気です。こうした事柄については私に話さないよう切に願います、...」。より穏やかに夫人は付け加えた、「でも貴方は普段、いつも思いやりがありますよ、パーゲルさん」。

籠絡されず、パーゲルは言った、「奥方様、十五分ほどお話ししたかったのです」。

彼は、暗い車の内部をもはや覗かなかった。彼は車の端を覗いた、とてつもなく詰め込まれていた。オスカルが言ったのは、本当だ。このトランクの山は逃走を物語っている。

「私は今晚時間がないの。急がなければなりません」。

「いつ時間があると仰有るのです」とパーゲルは容赦なく言った。

「その時間は言えません」とエーファ夫人は話しを逸らして答えた。「私の行ったり来たりが不規則なのは、ご存じでしょう。 — ねえ、パーゲルさん」と彼女は突然、叫んだ、「私を困らせるおつもりですか。自立してやってください。貴方は全権委任なんですよ」。

パーゲルは黙った。その通り、自分は全権委任である。彼は一切を一人で片付けるという（つまり恵み深い夫人のご要望に沿って）、そして結局そのことで泣きを見るという（つまり全く枢密顧問官殿のご要望に沿って）、全権委任を得ていた。しかし彼はそのことを黙っていた。彼は若かった。人間は余りに下種だと思ふ必要もないだろう。夫人は結局、

彼を袖にはしないだろう。いや、それともするか。

「パーゲルさん」とフォン・ブラックヴィッツ夫人は言った、「貴方は一週間前から私に金を渡していません。金が必要なのです」。

「金庫にはほとんど幾らもありません」とパーゲルは答えて、何故車が官吏の家の前に止まったのか、今分かった。

「それでは私に小切手をください」と夫人は性急に叫んだ、「何と回りくどいのでしょうか。私は金が要るのです、...」。

「私どもは銀行にも、貯蓄銀行にも預金はありません」とパーゲルは抗弁した、「残念ながら、小切手は出せません」。

「でも私は金が要るのです。私を金のないまま見棄てないでしよう。どうお考えなのですか」。

「明日何か売却するようにして見ましょう、...。ですから、多額でないならば、明日には若干金を渡せましょう、奥方様、...」。

「でも沢山なのよ。それに今日のうちでないといけないの」と夫人は怒って叫んだ。

パーゲルはしばらく黙っていた。それから小声で尋ねた。「ご夫妻は旅立たれるのですか」。

「私は旅立つのではありません。誰がそんな事を貴方に言うのです。私にスパイを付けているのですか。そんなの御免です」。

「トランクが、...」とパーゲルは釈明して、車の隅を示した。

長い沈黙が生じた。

それからエーファ夫人が全く別の調子で言った。「親愛なるパーゲルさん、どのようにして金を用立ててくださいますか」。

「十分ほどの相談をお願いします」。

「でも話し合うことは何もないわよ。私どもは明日、遅くとも明後日には戻って来ます。

「ねえ、パーゲルさん、私に先日付の小切手をください。貴方は明日と明後日、売却なさる、そしてその金を銀行に入れる、そして私はその小切手を週の終わりにようやく呈示するという事にしましょう」。

「明後日には奥方様は遅くとも戻られるわけですか。私は従業員ではありません。私は荘園に来たとき、私と騎兵隊長殿の間では何の契約もありません。それで[辞職]予告期間もありません。従って私も明日ノイローエを去ります」。

「アヒム、この車で待っていて頂戴。オスカル、ヘッドライトを消しなさい。パーゲルさん、私が車から下りるのを手伝って」。

夫人は彼より先に事務所に向かって行った。夫人は振り返って、燃えるような目で、彼を見据えて、いや、その怒った様は華麗に見えた。「パーゲルさん、貴方は旗の許から逃げのおつもりですか。私を見棄てるつもりですか。一緒にさんざん苦労した後に」。

「奥方様、何も一緒に苦労していません」とパーゲルは陰気に言った、「貴女が私を必要とされたときには、貴女は私を呼びつけました。私を必要とされないときには、即刻私をお忘れでした。私が楽しいか、悲しいか、気にかけたことなどなかったでしょう」。

「私はしばしば貴方のことを嬉しく存じてきましたよ、パーゲルさん」と夫人は請うて叫んだ、「私のすべての不安、苦悶の最中、こう考えてきました。あそこに一人の人間が

農園中庭を駆け回っている。あの人は無条件で信頼できる方だ。清潔で、礼儀正しく、...」。

「奥方様、有り難うございます」とパーゲルは軽くお辞儀して行った、「しかしゾフィー・コヴァレフスキーのような女が来て、彼奴は女癖が悪いと貴女に報告すると、一この清潔で、礼儀正しい男に対して、その話しの方をすぐに信じましたよ」。

「パーゲルさん、何故そんなに私に対し立腹なさるのです。私が貴方に対して何かしましたか。まあ、私も女です。多分大方の女性と同じなのでしょう。陰口に耳を貸します。私は周囲の人々に確固たる判決を下せません。一でも私は正しくなかったと認めます。それでいいでしょう。だから私は許しを請います、パーゲルさん」。

「奥方様、私は許しを請うように求めています」とパーゲルは絶望して叫んだ、「そんなに頭を下げないでください。貴女が私に対して跪く姿を見たいのではありません。一そんなことでは全然ありません。今回初めて、私どもが知り合ってから以来、貴女も私のことを、私が感じていることを気になさって、機嫌の良い私を望んでおられます。...何故ですか。私が必要だからでしょう。私一人が貴女に金を工面できるからです。ノイローエから逃亡のために必要な金を、...」。

「それは別名頭を下げるではないですか。それは別名跪くように強いるではないですか」と夫人は叫んだ、「その通り、パーゲルさん。私どもは逃亡します。...ノイローエは私どもにとっておぞましい。ノイローエは私どもを不幸にしました。...私は、夫同様に私までもが没落してはならないのであれば、即刻去らなければならないのです。一秒ごとに私は怯えています。今度はまた何が起きるのだろうか。農園中庭で誰かが大声で叫ぶのを聞くと、すでに私の膝は震えます。また何が起きたのかと考えます。去らなければなりません。一それで貴方は私にその金を用意する必要があるのです、パーゲルさん。私をここで見殺しにはなさらないでしょう」。

「私も去らなければなりません」と彼は言った、「ここでの生活はもう沢山です。私も終わりです。奥方様、明日私を行かせてください。私がおこなう何の用がございましょうか」。

夫人は彼の言うことを聞いていなかった。ただ一つのことだけを考えていた。「私は金が要るのです」と彼女は絶望した叫んだ。

「金庫に金はありません。無担保の小切手は振り出せません。一それは私にとって、一危険すぎます。奥方様、私は二日間あっても、ノイローエから遠く離れた長目の滞在費用を工面できません。紙幣印刷がストップして以来、金は欠乏しています。まず新しい試み、レンテンマルクそのものがほとんどありません。一私が数日なお滞在しても、貴女の望みを叶えられそうにありません」。

「でも私は金が要るのです」と再び彼女は揺るぎなくめげずに叫んだ、「私どもが本当に何か必要なときには、いつでも金は工面できたのです。パーゲルさん、考えてみてください。どうにかして作り出す必要があります。一ほんの数マルク足りないからといって、私は破滅したくありません」。

数マルク足りないからといって、多くの人間が破滅したのだとパーゲルは考えた。しかし彼はそれを口にしなかった。そのように言うことは、何の意味もない。というのは勿論、彼女には妥当しなかったからである。一その代わり彼はこう言った。「恵み深い奥方様、貴女にはビルンバウムに裕福な弟君がいらっしゃいます。ビルンバウムまで三十分車

で走られたらどうです。 — きっと助けてくださるでしょう」。

「弟に金を頼めと仰有るのですか」と夫人は怒って叫んだ、「弟の前で頭を下げろ、と。嫌です、嫌」。

パーゲルは夫人に対して素早く荒々しく向かって行った。「しかし私の前では頭を下げられるのですか、ええ」と彼は怒って言った、「奴隷の前では女王は裸になっても平気だと。奴隷なんて人間じゃないのだからと」。

彼女は彼の怒りの前で後ずさった、雪のように白くなって、震えていた。

「あそこで」とパーゲルは叫んで、示した、「あそこの私のベッドの中で、昨日の朝、森林官クニーブッシュは亡くなりました。貴女にお仕えしてです、奥方様。彼を幼少の時からご存じのはずです。貴女が物を覚える頃から、貴女が話し始める頃から、この男は貴女と貴女の数マルクのために走り回って、不安を抱き、苦悩してきたのです。 — そもそも彼が何を悩み、どのようにして亡くなったか、どのように苦しんできたか、お考えになったことがありますか。ほんの一言でも。ノイローエは貴女にとって地獄になったそうですが。この老公にとっては一体どんな地獄であったか、以前に考えたことがありましたか。 — その彼は、彼は逃げ出せなかったのです。 — 彼は事実逃げ出さなかった。ほとんど腹ばいになって這いながら、最後の瞬間まで自分の責務を果たしたのです、...」。

夫人は白い顔で震えながら、壁際に立っていた。彼女は彼を大きな目で見つめた、...

「旗の許を去ると言われるのですか、臆病であると」と彼はますます野蛮になって叫び、ますます強く、神経が切れて行くのを感じ、言いたくなかったが、言わざるを得ず、とうとう、遂にとうとう言ってしまった。「貴女が臆病と勇気について何をご存じです。私もかつて考えて、自分は幾分分かっていると思っていました。私はかつてこう信じていました。勇気とは、たじろがずに立っていて、榴弾が弾けても、榴弾の破片を運ぶことだと。今、私は分かっています。それは単に愚かなことで、狂った大胆さだ、と。勇気とは、何かが全く耐え難くなっても、持ち堪えることです。勇気は老いぼれの臆病者が持っていました。あそこの中で死んだ老公が」。

彼は素早く明るい視線を夫人に向けた。彼は言った、「それは、勇気を持つに値する件でなければなりません。それがために戦うに値する旗でなければなりません。奥方様、貴女の旗はどこにありますか。貴女が真っ先に逃げています」。

長い、悲しげな、重たい沈黙が生じた。それからパーゲルは動いた。彼はゆっくりと書き物机の椅子へ向かって、腰を下ろし、頬杖を付いた。今はよろしい、今彼は先週以来心に溜まっていたことをすべて語っていた。話し尽くしていた。 — さてどうするか。

夫人は壁から離れた。夫人はこっそりと彼の許に寄って、穏やかに彼の肩に手を置いた。「パーゲルさん」と彼女は小声で語りかけた、「パーゲルさん、 — 貴方の仰有ったことはきっと真実でしょう。私は利己的で、臆病で、分別がない。 — 私はこの頃になって初めてこうなったのか、分かりません。でも私はこうなのです。貴方の仰有る通りです。でもパーゲルさん、貴方は違う、貴方は別だ、そうでしょう」。

夫人は長いこと待っていた、しかし彼は答えなかった。夫人の手の下の肩は動かなかった。

「今一度、これまでの貴方に戻ってください。若くて、信頼して、犠牲的である貴方に。パーゲルさん、私のためにばかりではありません。私は本当に貴方のための旗を持ってい

ません。でも私は貴方がまだ、私の両親が戻って来るまで、ここノイローエに残ってくださいであろうという希望を抱いています。お願いします。別荘へ移ってください、パーゲルさん。 — 私はヴィオレットがいつか別荘のドアをロックするであろうと相変わらず希望を持っているのです。 — 貴方まで去らないでください。娘が戻ったとき、荘園を全く寂しいものにしないでください、...」。

再び長い静寂となった。しかし別種の静寂、何か待機するものであった。フォン・プラックヴィッツ夫人は彼の肩から手を引いて、一步ドアへ進んだ。彼は黙っていた。夫人は二歩、三歩と進んで、手を取っ手に置いた。 — そこでパーゲルは尋ねた、「いつお父上は帰って来られるのです」。

「私は父宛の一通の手紙を車に置いています。今日のうちにもフランクフルトで投函します。私の父は、私どもが旅立ったと聞いたら、すぐに戻って来ると考えています。それで、およそ三、四日後になりましょう」。

「それまでは残ります」とパーゲルは説明した。

「有り難う、そう感じていました」。

しかし彼女は出て行かず、躊躇って、待っていた。...

彼は彼女を楽にさせた。彼は回りくどさが一切面倒になった。「それでは貴女の金の件となります」と彼は手短かに言った。「金庫に数百レンテンマルクあります。それをお渡ししましょう。近日中に売却可能なものをすべて売却しましょう。 — どこに滞在されるか分かっていますか」。

「ベルリンです」。

「そのどこです」。

「まずは或るホテルに」。

「シュトゥットマンのいたホテルですね。ホテル・レギーナ」と彼は言った、「私は毎日電報でホテルに金を送ります、 — どれほどの額をお考えですか」。

「あら、ほんの数千マルクです、 — ただ手始めの資金です」。

彼はぴくりともしなかった。「ご存じのように、道具[資産]は一切売却できません。禁じられています。それは貴女の私有物ではありません。そうすると私は罰せられます。奥方様、今は、釈明書に署名をされてはどうです、私が父親殿から罰せられないように。すべて不法な売却は、貴女の依頼でなされていると、私にお墨付きを与えることです。更に、不正確で、隙間が多く、時に間違ってもいる帳簿の記述は、貴女も承知の上でのことであり、要するに私の処置のすべては、貴女の全面的同意の上であると、お墨付きを与えてください、...」。

「パーゲルさん、とても私に厳しいですね」と夫人は言った、「私をそんなに信用なさっていないのですか」。

「貴女の父親殿が、私はある額を横領した、さくらの詐欺を行ったと仰せられる場合が考えられるのです。 — いや、何」と彼は性急に叫んだ、「何で説明するの必要があります。私は貴女を信用していません。一切信頼を失いました」。

「それでは釈明書を書いてください」と夫人は言った。

彼がタイプを打つ間、夫人はあちこち動き、手当たり次第、あれこれ掴んでいた。 — 物思いに耽って、何も思わず、結局彼が彼女の願い通りにしたことでほっとしていた。

突然夫人は何かを思い付き、彼に威勢良く顔を向けて、何かを言おうとした。...

しかし夫人は彼の拒絶的な陰気な顔を見ると、再び口を結んだ。夫人は書き物机に向かって腰掛けたが、インク壺にペンを浸けて、夫人も書いた。夫人の顔は微笑した。夫人は何かを思い付いたのであった。自分は利己主義者ではない、
— 彼は間違っている、
— 夫人は彼のことを思い、彼に一つの喜びを与えた。...

今や夫人はただ、まさに恥辱的だと思っていた釈明書をざっと読んだ。無造作に夫人は署名をした。それから自分の紙片を手を取った。...

「パーゲルさん、ここに貴方ために少しばかり書きました。私は何も忘れていないとお分かりでしょう。都合がつき次第、私はこれを片付けます。
— さようなら、パーゲルさん、重ねて感謝です」。

彼女は去った。

パーゲルは事務所の中央に立っていた。彼はドアを見つめ、手の紙切れを凝視した。まだ生涯これほど愚かに見えたことはなかったぞと彼は思った。

彼は手の中にある証明書を持っていた。そこでは、エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人が、自分の夫の名前と共に、ヴォルフガング・パーゲルから2000金マルク、文字で二千金マルクの貸付金を受領した旨、証していた。...

パーゲルは自分がとても滑稽に思われた。

憤然と彼はこの証明書をくしゃくしゃにした。

しかし彼はよく考えた。彼は丁寧にそれを平らにした。彼はそれを名誉の釈明書と共に札入れに入れた。

「得がたい旅の記念品だ」と彼はにやりと笑った。

今や彼はほとんど満足していた。

141

テッショー息子は遺産継承を夢見る

若いヴォルフガング・パーゲルが、ノイローエの活動での四ヵ月の間に郎党の許で得た、敬意と友情、これを当地滞在の最後の四日間で一気に失った。後になって随分経ってから人々はこう語り合った。小黒人マイヤーは十分ひどい奴であった。しかしパーゲルのようなあんな底知れない、偽善者の、無茶な若造、
— いや、こんな者は多分二度と現れることはないぞ、と。そもそも恥を知らない若造だ。彼は皆が見ている前で盗んだ、
— 白昼堂々と。

「私は怒りを抑えるつもりだ」とパーゲルは二日目の晩、アマンダ・バックスに決然と言った、「しかし時に爆発したい気になる。まことにあの老いぼれの阿呆、コヴァレフスキーが、私が肉屋に五頭の豚を売ったら、こうぬかしたのだ。『パーゲルさん、そんなことをなさらない方がいいでしょう。警察が知ったら、どうなります』と。
— 奴さんにそんなことを言われるなんて」。

「怒ればいいのですよ。しこたま怒ってください」とアマンダ・バックスは語った、「何故貴方はいつも皆に親切で優しいのです。それがお礼ですよ。村では私にも今日尋ねる人がいました。恵み深いご夫人のベッドでの寝心地はどうだい。そのうち奥方様の服も着る

のだろう、て。...」

「しみったれた世界だ」と苛立ってパーゲルは叱った、「即刻ならず者だと決めつける。領主一家の目を盗んで、家畜を自分の財布のために売却し、我々二人がここ別荘に許可なく僭越に越して来たと遠慮なく信じ込むのだ。私はたまたま領主一家の委託を受けているに過ぎないと思う者は一人もいないのか。洗濯婆を見つけては鼻先に全権委任状を突き付けるわけにも行くまい」。

「そんなことは思いもよらないのよ」とアマンダは勝ち誇って言った、「貴方が恵み深い奥方様のご依頼通りにしているとしたら、そんなことは当たり前で、面白くないのよ。でも貴方が白昼荘園を半分闇売りしていたら、それはすごいことで、一話しに尾ひれが付くのよ」。

「アマンダよ、アマンダ」とパーゲルは予言的に語った、「私はゾクゾク不安に駆られる。枢密顧問官の古狸が来て、私がここでやらかしたことを見て、その老夫人が、女どもの陰口を聞いたら、一私の札入れにある証文が十分通用するものか、自信がなくなる。恐ろしい、恐ろしい。雷鳴稲光の中、私はノイローエを去ることになるう」。

「まずは静かに待つことです、パーゲルさん」とアマンダは慰めて提案した、「これまでだっていつもそんな具合で、貴方が大方の怒りを皆から受けていました。最後になって変わるわけでもないでしょう」。

「そうだな」とパーゲルは言った、「夫人は今日二回、ベルリンから、金はどこにあると電話して来た。一夫人はもっと金が要ると話していた。思うに、夫人は店を購入したいのだ。一それでも商売とは、まだよく想像できない。エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人が、カウンターの奥に立っている姿なんて。案ずるに、明日は脱穀機を処分するよう、決心しなければならぬだろう、一すると老領主殿が何と仰有ることか、...」。

しかし誰かがまず何かを告げた。一翌日当地所管の警察が農園中庭に自転車でやって来て、脱穀機売却に割り込んで来た。警察はパーゲルに対しとても当惑して丁重で、わざと愛想良く、彼の意図がひどいものであることは疑いの余地がなかった。かくてパーゲルははなはだ無愛想に対応することにして、警察[役人]がようやく、自分は領主御一家の住所を知りたいと切り出すと、パーゲルはきっぱりとそれを教えなかった。

「フォン・ブラックヴィッツご夫妻はゆっくりと寛ぎたいご希望です。私のご夫妻の委託を受けています。貴方がご夫妻に伝えたいこと、これを私が承りましょう」。

これはまた警察が望まないことであつた。警察は立腹して去つた。

パーゲルは更に脱穀機売却の交渉をした。それは立派な物件であつた。しかし郡中心都市からの機械取引商は本当の価値の十分の一も支払う気がなかった。一つには、この日々、金のはなはだ欠乏していたためであり、もう一つには、すでに一帯で噂が広がっていたからである。狂った一匹の犬が、ノイローエを二束三文で投げ売りしている、と。

「ちょっと待った、貴殿」と突然怒った声が出た、「貴殿は脱穀機を売るつもりなのか」。

「貴方が買われますか」とパーゲルは尋ねて、興味深く、ハンターリンネル服で、ゲートルを巻いた脚の紳士を見つめた。これは誰か大体おおよそ見当がついた。かつて大いに噂された競争車が背後に止まっていた。

「済まない」と紳士は叫んだ、「私フォン・テッシュー枢密顧問官殿の息子だ」。

「それではフォン・ブラックヴィッツ夫人の令弟ですな」とパーゲルは満足して確定し、再び機械商の親父の方を向いた。「それでは、ベルトラムさん、今度はまともな言葉を述べてください。それとも機械は買いませんか」。

「その通り、機械はここに残ろう」と遺産継承人は怒って叫んだ、「ベルトラム殿、貴方が一言言ったら、二度と貴方とは取引しないぞ」。

機械商の親父はおずおずと一方の男から別の男の方を見た。パーゲルはただ微笑していた。かくてベルトラム氏は混乱して、悟った言葉を口ごもった、「そんな次第でありますれば、...」。そして納屋の三和土から消えた。

「八百レンテンマルクがパーだ」とパーゲルは残念そうに言った。「八百レンテンマルクなら、私は手放していたでしように。貴方の姉君にはお気の毒なことです」。

「姉にはとんでもないことになろう」と相手は叫んだ、「ほとんど真っさらの藁切り機に八百レンテンマルク、これはそのまま六千レンテンマルクの価値のあるものだ。貴方は、そうだな、...」。

「私に吠えないでくださいますようお願い、フォン・テッショー殿」とパーゲルは好意的に言った、「さもないとご説明は致しませんよ、きっと説明を求めて来られたのでしようが。でないと、貴方を農園中庭から追い出します」。

「私を父の農園中庭から追い出すというのか」と息子は呆気にとられて言い、パーゲルを凝視した。しかしパーゲルの目には、彼の言葉をもっと落ち着かせるものが何か見られた。「それではどこでこの件について話せるのだ」、そして威嚇して言った、「しかし貴方から騙されはせんぞ、名は知らんが、...」。

「パーゲルです」とパーゲルは、助け船は望まれていなかったが、助けた。そして先に事務所に進んだ。

「いや、勿論こんなものだろう」と若いフォン・テッショー殿は言って、今一度両文書、全権委任状と名誉の釈明書を覗いた。「それでは貴方は完全に弁解できよう。私は許しを請うことになる。 — しかし私の姉と義理の兄は、狂っているに違いない。ここで二人が仕出かしたこと、これを私の父は決して許さないだろう。何のために姉はそんなに金が必要なのだ。数百マルクあれば、最初の数週には十分であろう、 — その後の若干は私の父と話し合えばいいのだ。父も全くの無一文で姉を見棄てることはしないだろう」。

「昨日貴方の姉上様が電話口で話されたことでは」とパーゲルは慎重に言った、「一軒の店を購入したいようなことでした」。

「店だと」と遺産継承息子が叫んだ、「エーファは売り子になるつもりか」。

「私は存じません。しかしいずれにせよ、ささやかな創業資金を手になさりたいご要望に見えます。私が今、フォン・ブラックヴィッツ夫人のためにしていることは、法的には許されないことだと勿論私は承知しています。しかしご夫人は、二度とノイローエへは戻らないと固く決めておられます。恐らく夫人は自分の遺産部分を断念なさっているのでしよう。そうすることでこの不法行為への責めを負われるのであろうと私は考えたわけです」。

「貴方は」とフォン・テッショー息子殿は威勢良く叫んだ、「姉はノイローエを断るであらうと言うのか」。

「私はそう思います。最近色々ありまして、...」。

「なるほどな」とフォン・テッショー殿は語った、「確かにとても悲しい。 — 私の姪のヴィオレットについて何の知らせもないのか」。

「ありません」とパーゲルは答えた。

「そうか、そうか」とフォン・テッショー殿は考え込んで言った、「そうか、そうか」。彼は立ち上がった、「それでは重ねて貴方に許しを請おう。らちもない警告があつてな。

— 誰かが私の耳許に囁いたのだ。 — ここだけの話し — 私は全く貴方と同じ意見だ。私の姉のために若干のまとまった金を捻出してくれ。こうなつては全くどうでも良い。私の父はいずれにせよ、脱穀機があろうとなかろうと、怒りまくることだろう。八百レンテンマルクか」と彼は思案して語った、「私でもそれと引き換えにしよう。いや、駄目だ。残念ながらそうは行かん」。もっと大きな声で言った、「パーゲルさん、私が自分の父に対して私の姉の肩を持つわけに行かんということは勿論分かってくれるだろう。 — いずれにせよ、貴方のやり方は正しくない」。

パーゲルはほとんど嫌悪感を隠さずに相手の目を見た。若いフォン・テッショー殿にとって、これからひょっとしたら自分の遺産継承がどれほどのものになるか明瞭になったとき、自分の姪ヴィオレットについて何か知らせはないかという質問ほどに何か見苦しいものを聞いたことがないとパーゲルは思った。

しかしフォン・テッショー息子殿は、この嫌悪感について何も気付かなかった。彼は余りに忙しく、この若い男に注意を払っていなかった。彼は安心して言った。「それでは後若干捻出できるようにしてくれ。私の父は、三、四日後に戻って来ると思う」。

「分かりました」とパーゲルは言った。

「いや、本当に分かっているのか。ま、いずれにせよ、貴方は最悪の場合の対策は講じている。 — しかし私の父が本当に怒ったら、どういうことになるか分かっている、...」。

「その場合骨身にしてみ分かりましょう」とパーゲルは微笑して言った、「静かに待っています、...」。

しかしこの点、ヴォルフガング・パーゲルは間違っていた。この狂暴さを彼は知ることにならなかった。彼は静かに待っていなかった。

枢密顧問官が着いたとき、彼はすでに去っていた。

「逃げやがった、抜け目ない犬だ」と人々は笑った。

事務所で電話が鳴ることで始まった。

ヴォルフガング・パーゲルは丁度、恵み深い夫人宛に電報での[郵便]為替の記述に取りかかっている、アマンダ・バックスは階上で、郡中心都市への冬の風、秋雨の中、自転車走行に備えて、温かい防寒の身繕いをしていた。というのは向こうの郵便局で振り込みはなされなければならない、二人のこの孤独な鶏どもにとって、金を、およそ二千レンテンマルクの金を預けて任せられるような人を他には誰もノイローエでは知らなかったからである。...

そのとき電話が鳴った、...

電話は様々に鳴る。あるときは明るく、あるときは暗く、あるときは素っ気なく無関心に、そしてまた威圧的に忙しく鳴る、...。それに合わせて、一体どんな会話になろうか予感する。そして時にそれどころか予感が的中する場合もある、...

パーゲルはその暗く、威圧的に鳴る電話を手短に見上げた。ー これは何かだと彼は考えて、受話器を取り、ノイローエ荘園管理部と名乗った。

かなり粗野な声がフォン・ブラックヴィッツ夫人との話しを求めた。

「フォン・ブラックヴィッツ夫人は話されません」とパーゲルは答えた、「フォン・ブラックヴィッツ夫人は旅行中です」。

「そうか」と粗野な声が出て、若干がっかりしているように見えた。「選りに選って今、旅行中か。いつ戻って来られる」。

「私には分かりません。今週はもはや戻られません。夫人に何かお伝えしましょうか。こちらはノイローエの検査官です」。

「それでは貴方はまだいるのか」。

「貴方が何の御用か存じません」とパーゲルは若干苛立って叫んだ、「貴方は一体どなたです」。

「それでは残っていて貰おう」とその粗野な声は言った。パーゲルは気になった、相手は切った。

「待って」とパーゲルは叫んだ、「どなたか知りたいのですが、...」。

しかし受話器はただ切れた音がした。ツー、ツー、ツー、...

「いいかい、アマンダ」とパーゲルは言った、「今のはな、...」。

そして彼は彼女に説明した。

「何と思ったの」とアマンダは尋ねた、「貴方のことを恵み深い夫人に告げ口しようと思った人かしら。あるいは貴方を揶揄おうと思った人かしら。...」

「違う、違う」とパーゲルはぼんやりして言った、「ずっと感じていたのだ、...」。

「何を感じたの」とアマンダが尋ねた。

「ずっと感じがしていた、何かヴィオレット嬢と関係があるかもしれない、と」。

「ヴィオレット嬢と。でもどうして。ヴィオレット嬢のことでの電話で、何故そんな妙な振る舞いをするわけ。もういいから。二千マルクを私に渡しなさいよ、振り込みは仕上がったの。出掛けられるか、見て来ましょう。この天候では真っ暗な夜に自転車で戻りたくないわ」。

「ちょっと待ってくれ、すぐに筆記は終わる」とパーゲルは言って、再び取りかかった。電話が鳴った。明るく長く鳴った。きっと退屈で、上っ調子であろう。

「商人だな」とパーゲルはアマンダに言って、受話器を取り、ノイローエの荘園管理部と告げた。

しかしベルリンからであった。...

「恵み深い奥方からだ」とパーゲルはアマンダに囁いた。

しかし一人の商人であった。偉い商売人であった。

「貴方か、お若いの」と馴染みの甲高い声が出た。

「その通りです、枢密顧問官殿」とパーゲルは叫んで、にやりと笑って、アマンダに陽

気な視線を投げかけた。「ちなみにパーゲルと申します」。

「ま、それはよろしい、...すっかり忘れておったが、不作法だが、仕方がない。いいか、良く聞いてくれ、お若いの」。

「パーゲルが私の名前です」。

「ま、それは今承知した」と枢密顧問官は若干苛立って、叫んだ、「電話で暗記の練習をせんでも良からう。いいか、この会話は一マルク二十するのだ。それも残念ながらこちら持ちだ。...そこで良く聞いてくれ、...」。

「拝聴しています、枢密顧問官殿」。

「私は今晚十時の列車で着く。二頭の老鹿毛で駅までハルティヒの出迎えを頼むぞ、...」。二頭は売却しました、とパーゲルは言おうと思った。しかしこう考えた。止めとこう、自ずと分かることだ。

「それに毛布も付けてくれ、一馬用毛布だ、駅で老いぼれ馬が震えんようにな。ハルティヒは間抜けだ。一多くの子供がいて、分別が分散して消えてしまっている、...」。

パーゲルは笑い弾けた。

「おや、もう笑っているな」と枢密顧問官は満足して言った、「私が着いた翌日の朝になっても、笑えたらいいがのう。つまり私は更に一人の殿方を連れている。会計検査官だ...貴方を疑っているわけではないが、しかし私の婿殿がこっそり抜け出したというからには、在庫調べとか、金庫、帳簿の引き継ぎといったものをしなければならん。一それは分かるだろう、お若いの」。

「枢密顧問官殿、完璧に了解です、一拝聴した者の名前はパーゲルです」。

「すべて異常ないか、おい」と枢密顧問官は突然心配になって尋ねた。

「すべて異常ありません」とパーゲルはにやりと笑って、言った、「ご自分で確認できますでしょう、枢密顧問官殿」。

アマンダはほとんど声を発しそうであった。彼女は夙に一緒に電話を聞いていた。

「そうか」と枢密顧問官は語った、「いや、官職の小娘よ、良い知らせもあるぞ。更に三分間電話を繋ごう。一それで、お若いの、しっかり聞け。私の小屋の二部屋に暖房を入れるのだ。私の寝室と小さな客間だ。一私の妻はまずこちらに留まる。ノイローエの空気がまた綺麗になっているか、まず聞いてからだそうだ」。また心配になって言った、「そちらは何か起きたのではないのだろう」。

「結構、色々あります、枢密顧問官殿」。

「おいおい、そんなことは電話で話すな。それは明日すべてまだ早すぎるうちから聞こう。一アマンダという娘、ほっぺの赤い、太った娘だ、知っておろう、...」。

アマンダはほとんど「はい」と言いそうになった。...

「あの娘は小間使いとして何でもやれよう。そうだな、私の仕事部屋もあの娘に暖房を入れさせよう。しかし食堂は必要ない。儉約しないといかん。金はますます乏しくなっていく。それでおぬしらの農園経営だが、一パーゲルさん、金庫に少しばかり金があるか」。

「わずかです、枢密顧問官殿、より厳密に言えば、皆無です」。

「しかしおぬしらは何を考えているのだ。おぬしらは少しばかり請負料をせしめていると思うぞ。そう簡単になくなるとは、...いや、それについては明日真面目に話そう。一

おい、更にもう一言、パーゲルさん。森林官だ、老クニブッシュ、彼はまだベッドに怠けて病気なのか」。

「いや、枢密顧問官殿、貴方の娘さんが手紙に書かれたことでしょう。森林官は亡くなりました。森林官はあの、...」。

「もう良い」と枢密顧問官は憤然と叫んだ、「もう良い。三分間追加するんじゃないかった。悪い知らせは結構。...それじゃ、十時だ、十時に駅、じゃあな」。

「孫娘のことは何も尋ねないのだ」とパーゲルはアマンダに言って、電話を置いた、「この父にしてあの息子だ、ひどい」。

「そうね」とアマンダは言った、「あの人が何をするとするの。あの人はまた自分の莊園になって、ただ嬉しいのよ。でも私はどうしたらいいの。これから郵便局にも行って、それから宮殿の部屋片付け、少しばかり部屋も暖めなくちゃいけないだろうし、...」。

「その金は私にまた返してくれ」とパーゲルは言って、それを受け取り、アマンダを見つめ、それを自分の札入れに入れた、「私は明日追い出されそうな予感がする。すると結局恵み深い夫人に自ら渡せるわけだ。手数料を節約することにしよう」。

「そうね」とアマンダは言った、「私は村から数人の女性を集めてみましょう。結局何か食べ物も必要でしょう」。

「とにかく始めよう。私はまた少しばかり私の帳簿に取り組むことにしよう。確かにどうしようもないもので、片つくものではない。しかしともかく現金在高を確定するよう試みてみよう、...」。

彼は出掛けて、腰を下ろした。彼は枢密顧問官と話したとき、まだ全く陽気で上機嫌であった。しかし今やこの気分の良さは消えていた。今、あの老ひげもじゃ男を想像して見ると、彼の咆哮、顔に朱が差して、しつこく人に肉迫して来て、臭いを発し、どんな反論も叱り飛ばし、憤然となった場合、如何に口角泡を飛ばすか、考えると、...更に忌まわしくなった。自分は明日、最悪の日を迎えるであろう。一切合切に対する唯一のスケープゴートである。それ以上に最悪なのは、自分の神経の制御に関してもはや万全ではないということである。彼は、自制を失うことを憎んでいた。後で後悔しても遅い。

しかしだからと言って逃げるか。

嫌だ。

その間に老領主が今晚戻って来るという知らせが村中に野火のように広まった。そして女達はすでに宮殿を掃除した。...そして二十人の男女が仕事と称して、宮殿の側を通り過ぎ、実際老領主の部屋の窓に明かりが点いて、窓が開いているのを見ると、満足して頭で頷いた。彼らは明日の朝生ずるであろうことをとても楽しみにしていた。

皆は以前若いパーゲルを歓迎したことを、とても彼を好いて、「貴公子君」と呼んだことを、不作法な黒人マイヤーの後釜に上品なパーゲルを得て、幸せに思ったことをすっかり忘れていた。皆が事務室の窓辺を通り過ぎて、盗み見をしようとし、極めて好奇心旺盛な者は、口実を設けて来て、それでパーゲルはその百万、十億、一兆の数字の列の合計でかくも頻繁に無茶に妨害されたことはなかった。

好奇心の強い者達がまた出て行くと、他の者達が尋ねた、「彼はまだいるのか」。

そしてスパイ達が「座って書いている」と答えると、頭を振って言った、「全く鉄面皮だな。少なくとも荷をまとめているだろう」。

「何をまとめるのだい」と彼らは再び尋ねた、「奴は自分のものは、安全な所に運び出しているんだ。ここ数日、何度も町へ車で行ったからな」。

彼らは自分達が本来何を願っているのか、全く一致していなかった。パーゲルはここに残って、大喧嘩の末、刑務所に送られるのがいいのか、それともパーゲルが逃げて、老領主が頭に来るのがいいのか。どちらも素晴らしい。

「注意しろよ、明日の朝、彼はいなくなるぞ」とある者達が言った。

「いや違う」と他の者達が言った、「奴はずるい。一 奴を騙すことは老領主でもできない。奴はこの農園に出現した最大の抜け目のない奴だ」。

「だからさ、だから、奴は明日の朝いなくなるのだ」。

そして実際彼はいなくなった。

143

太った刑事が報告する

七時にパーゲルは帳簿を「一切どうしようもない」と嘆息して最終的に閉じた。

彼は更に事務所の明かりを消す前に一瞥した。アラベスク模様の金庫を眺め、帝国法令集と郡報の粗い文書書架を眺めた。タイブラーターは蓋が掛けられていた。彼はそれで母親宛に一 ペートルのために幾つもの手紙を書いたのであった。

明日私は首だ、と意気消沈してパーゲルは考えた。元来素敵な結末ではない。一 全体私は自分の仕事を喜んで果たして来た。明日ここに誰かが立って、有り難う、パーゲルさん、貴方は良くやったと言ってくれたら、もっと結構なことだろう。その代わり枢密顧問官は警察と裁判を求めて叫ぶことだろう。

彼は消灯し、施錠し、鍵をポケットに入れて、真っ暗な晩、別荘へ向かった。十一月末にしては、今日夕方、空気は珍しく暖かかった。一陣の風もなく、ただすべてがとても湿っぽかった。

「感冒日和だ」とパーゲルは言った。ドクトルが話していた、人々は古いも若きも蠅のように亡くなると。余りにも長く栄養失調で、まずは戦争でやられ、次はこのインフレでやられている。...哀れな民よ、とパーゲルは考えた。新しい貨幣で本当に改善されるのだろうか。

別荘ではアマンダがすでに食事と千もの陰口で待っていた。陰口は女達から聞いたものであった。「パーゲルさん、あの人達の考え出すことと云ったら。貴方はゾフィーとぐるだったことになっていますよ。一 それに森林官が貴方の許で丁度亡くなったのは、彼の口封じのために貴方が仕組んだことなんだから」。

「いや、アマンダ」とパーゲルはうんざりして言った、「そんなことはすべて阿呆なこととつまらん。何か気の利いたこと、そうだな、貴女の青春の話しを私に語ってくれないか」。

「気の利いたこと、私の青春」とアマンダは全く呆気に取られて、尋ね、まさに自分の青春はいかなるものであったか、猛然と語ろうとした。...

その時別荘の呼び鈴が鳴った。一 そして夕食のパン皿の上で二人は捕まった犯罪者のように見つめ合った。

「枢密顧問官じゃないかしら」とアマンダは囁いた。

「阿呆な」とパーゲルは言った、「まだ七時半にもならない。 — 何か家畜小屋で起きたのであろう。開けてくれ、アマンダ」。

しかしそれから彼も落ち着かず、彼女の後を歩き、アマンダが激しく抗議しながら、ある男に押し退けられている場面に出会った。そのごつい男は強張った黒い帽子を被っていて、種牛のような頭であった。 — そして今や、その視線、冷たく凍り付くような忘れがたい視線が若いパーゲルに放たれた。

「私は貴方と一言話すことがある」と太ったこの刑事は言った、「しかしこの女性を退けてくれ。おい、ぺちゃくちゃ喋るな、黙っておれ」。

そして即刻アマンダは黙った。

「アマンダ、玄関の間で待っていなさい」とパーゲルは頼んだ、「どうぞお入りください」。そして彼は心臓を高鳴らせて、その男の前を食堂へと進んだ。

その男は二人分の食器の揃ったテーブルを一瞥して、それからパーゲルを見つめた。「外のあの娘は貴方の恋人か」と彼は尋ねた。

「いいえ」と彼は言った、「検査官マイヤーの恋人だったのです。でも良い娘です」。

「私がまだ捕まえてみたいあの豚のか」と太っちょは語ってテーブルに着席した。「席は用意せんでいい。私は腹が減っていて、またすぐ行かなければならない。ここで起きたことを、何故恵み深い夫人は去ったのか、何故貴方はここの別荘に住んでいるのか、話してくれ。 — 一切を明瞭に、手短に、的確に」。

この太った男は性分のまま、苛酷に、見回さず、素早く、貪欲にむさぼった。パーゲルは然るべく語った。...

「それでは恵み深い夫人は結局気力を失ったわけか。仕方なからうな」と太っちょは言った、「それでは煙草を一本くれ。今日の午後、電話したのは私であったと貴方は気付いていたかな」。

「そう思いました」とパーゲルは言った、「それで？」

「それで貴方を自らここで厄介な事態を迎えているわけか」。私に恵み深い夫人の両証文を見せてくれ」。

パーゲルはそうした。

太っちょは読んだ、「きちんとしている」と彼は言った、「しかし貴方はただ忘れているぞ、夫人の旅立ち以降の売却に関しても保証して貰うことだな」。

「しまったな」とパーゲルは言った。

「構わんよ」と刑事は言った、「後から追加して貰え」。

「しかし枢密顧問官殿が今晚にも戻って来ます」。

「貴方が枢密顧問官に会うことはもはやない。貴方は今晚ベルリンに発つのだ。今夜にも恵み深い夫人に、夫人は最後の売却も了承していたと書いて貰うのだ。今夜のうちにもな。私に約束してくれるか。貴方はこのような事柄では軽率だぞ」。

「ヴィオレット嬢の知らせがあるのですか」とパーゲルは叫んだ。

「下の車の中に座っている」と太っちょは言った。

「何ですって」とパーゲルは叫んだ、震えながら飛び上がった。「何ですか。私をここに座らせておいて、彼女は待っているのですか」。

「待った」と太っちょは言って、彼の手を彼の肩に微動もしない鎖のように置いた。「待った、お若いの」。

パーゲルは彼を憤然と見つめて、自由になろうとした。

「貴方にたった今話したことは完全に正しいとは言えない。車の中に座っているのは、ヴィオレット令嬢の残滓だ。二ヵ月間、感覚と分別を作為的不安で消されてしまったのだ。感覚と分別をな。私の言うことが分かるか」。

彼はパーゲルを凍てつくように見つめた。

「私には分からん」と刑事は陰気に言った、「母親に娘を取り戻してやっても、それが母親のためになるのかどうか。それに私はわざわざ娘を探していたわけではない。一そんなことは考えないでくれ。しかし私のような者が広く国中を回ると、色々耳にする。古い刑事仲間はまだ私を一員と見なしてくれているのだ、偉いボスどもが私を首にしてもな。丁度娘と出会ったのだ。私がこの娘をどうしたらいいのか。貴方がこの娘をすぐさま母親に渡せられるか、私にも分からん。すべてを貴方が自ら決めてくれ。ただ娘をここ老いた人々の許に残すのは良くない。貴方がこの時間にも娘を一台の車で連れ去るのだ。...どこか、落ち着いた、安全な所だ。貴方も老いぼれの馬鹿に叱られるのを待っているつもりじゃないだろう、さっさと行け」。

「そうですね、...」とパーゲルは物思いに耽って言った。

「玄関の間の太ったあの女性と一緒に連れて行け。走行中女手が要るし、郎党はもはや貴方のことで噂することもあるまい」。

「分かりました」とパーゲルは言った。

「娘には穏やかに話すな、厳しく話してもいけない。ただ必要なことだけを言うのだ。『座りなさい』一『食べなさい』一『寝なさい』だ。するとすべてを子羊のように行う。もはや自らの意志のかけらもない。娘にはいつも『おまえ』で呼んで、ヴィオレットの名を出してはいけない。一さもないと不安がる」。

囁きながら言った、「彼はいつもただ淫売と呼んでいたのだ」。

「止めてください」とパーゲルは叫んだ、そして小声で尋ねた、「それで彼はどうなったのです」。

「彼か、誰だ。誰のことを言っている」と太っちょは叫んで、パーゲルの肩を叩いた。彼はよろめいた。一「それで以上だ」と彼はより静かに言った、「他には一何もない。何もない、一進めだ。貴方の小物をまとめなさい。貴方は下で止まる車に乗り込んだらいい。フランクフルトまで私も同乗する。それからもう一つ、お若いの、金があるか」。

「はい」とパーゲルは言った。最近初めて喜んで同意した。

「私には八十二マルクの立替金がある。それを今すぐ返してくれ。一有り難うよ一私は領収は出せない。署名したい名前をもはや持たないのだ。しかし恵み深い奥方が尋ねたら、こう伝えてくれ。新しい服を着せる必要があった。一かなり草臥れた服だったのだ。それに少しばかりの旅行費と食費だ。さあ、貴方は出発だ。荷物をまとめて、太った娘を急ぎ立てろ。一三十分後に私はここから森へ向かった百メートルの所で車を止めておく。郎党に何も気付かれてはならん」。

「しかしヴィオレット令嬢に今会えませんか」。

「お若いの」と太っちょは言った、「まあ、そう急ぐな。楽しい再会ではない。その後会ってもまだ十分に早いのだ。さあ、かかれ。三十分の猶予だ」。

そして彼は去った。

144

一人の娘の帰還

許された三十分のうち、八分は、アマンダ・ボックスに起きたことを知らせ、恵み深いご令嬢のために、アマンダの家禽を静かに、完全に不確かな未来の手に委ねるよう、アマンダを説得し、それから彼女を行動へと促すために費やされた。更に五分間、官吏の家までの道のりのために要した。ここで荷造りをする必要があった。車までの帰路、同じほどの時間を要するので、荷物まとめにはわずかに十二分しか残らない。かくて単に二つのスーツケースとなった。一つはアマンダ用、一つはパーゲル用である。

ヴォルフガング・パーゲルは巨大な衣装トランクでノイローエに入場したのであったが、ほとんど何も持たずに出て行くことになった。しかし彼はそのことを考えていなかった。彼は枢密顧問官に二、三行の釈明の文を残すべきではないかと考えた。明日早朝、不正な役人として、惨めな臆病者としてさんざん陰口を叩かれることはとても面白くなかった。彼はアマンダに尋ねた。

「書き置き」とアマンダは尋ねた、「何を書くつもりなの。この荒れよう[クラデラダーチュ]を見たら、あの人は貴方の言うことは何も信じません。まあ、恵み深い夫人に段々と説明して貰うことね。でも、パーゲルさん」と彼女はほとんど泣いて言った、「ここに私の素敵な品を置き去りにするよう、私に要求するなんて。後で黒いミンナのようなどこかの女がやって来て、すべてをいじり回して、多分私の素敵な下着をあの手汚い体にまとうかもしれないのよ、...」。

「いや、品物の心配は要らないよ、アマンダ」とパーゲルはとりとめもなく言った、「品物はいつでもまた買えるのだから、...」。

「そう思うの」とアマンダは怒って尋ねた、「貴方はひょっとしたらいつでも新しいものを買えるかもしれないけど、私は違うの。特別な機会のために特に選んだ対の絹の靴下を箆筒に仕舞ってあるのよ。そんなこと知らないでしょう。でも老いぼれが私の品を即刻貨物で私に送ってくれなかったら、私は自分でこちらにやって来て、老いぼれに言ってやるわ、...」。

「アマンダ、後三分しかない」。

「まあ、後三分だけなの。私にいと簡単なことのように言うわね。私の給料はどうなるの。そうよ、パーゲルさん、貴方は皆のことを考えていたけど、でも私だって仕事賃が欲しいことを、貴方は最近の月、ずっと完全に忘れていますよ。パーゲルさん、私どもは二人とも同じ病気ではありません。貴方は金の件では間抜けだけど、私まで間抜けにしないでください。三ヶ月間の遅滞の給料を、領収書付きで、一切然るべく、要求致します。このことを貴方の帳簿に記載してください。すべて正しく行われるよう、私は要求します」。

「いや、アマンダ」とパーゲルは嘆息した。しかし彼は彼女の望み通りにした。

それから彼はこれを最後に事務所のドアを施錠し、鍵を小さな金属製のドア郵便受けに

投入し、カタカタ音をさせた。そして、二人は、スーツケースを手を持って、村から真っ暗な夜の中、急いだ。そこかしこに、ほとんどまだすべての家々で明かりが点されていた。

一 かなり九時、間近であったかもしれない。ノイローエは緊張して枢密顧問官の到着を待っていた。

「用心して」とパーゲルは言って、アマンダを暗い隅の方へ引っ張った。

村道に沿って、誰かがやって来た。二人は本当の犯罪者のように不安げに暗がりの中に立っていて、この夜間の遍歴者の背後で、或る玄関のドアが閉まる音を聞いてから、ようやくまた歩き出した。

さて彼らは別荘を通り過ぎた。黒々と暗がりの中にあっただ。しかし今度は車の弱い明かりが目に入って来た。車はヘッドライトの明かりを下げて、森の側に止まっていた。

「八分の遅れだ」と太っちょはぶつくさ言った、「娘を連れて行く所が分かっていたら、出発していたところだ。一 いいか、小娘、娘の横に腰掛けろ。言うておくが、何かおまえが喋り始めたら、口にお見舞いするぞ。一 お若いの、こちらへ、我々は折り畳み座席だ」。

そう言って、彼は車のドアを開けた。その瞬間が来た。一 何も起きなかった。車の隅で何か暗いものが動いた。しかし太っちょはただ言った、「動くな、更に寝ていな」。そしてその暗いものはもはや動かなかった。

「出発」と刑事は運転手に叫んだ、「できるだけ急いで、フランクフルトへだ。十一時までに着いたら、この若造がチップを出すぞ」。

車は夜の中へ飛び出した。再び別荘を通り過ぎ、それから郎党の家々の明かりが見えた。パーゲルは努めて官吏の家を探した。しかし暗闇の中、分からなかった。さて更に宮殿となった、...

「明かりだ」とアマンダが興奮して叫んだ、「黒いミンナが私を待っている。いや、あの人一人で枢密顧問官の世話を今晚するのだわ、...」。

「うるさい」と太っちょは言った。しかしそう立腹していなかった、「お若いの、静かに煙草を吸ってよろしい。一 娘の邪魔にはならん。私も吸おう」。

しばらくしてパーゲルもその気になった。

郡中心都市の直前、彼らはほとんど事故に遭いそうになった。ほとんど馬車に衝突しそうになった。御者ハルティヒが馬の勝手を許したからであり、つまり御者は背後の枢密顧問官の方へ絶えず会話で頭を向けていたせいであった。顧問官は「爆弾号」の窓から頭蓋を突き出して、途中、郷里で生じた酔狂な事柄の若干を聞き出していた。

「あれは枢密顧問官です」と殿方達や御者の憤然とした悪罵を背後に聞き流しながら、パーゲルは説明した。

「そうか」と太っちょは思案げに言った、「今夜は私でもあいつのベッドにはなりたくないな」。

郡中心都市を後にして、彼らは国道に来た。これまでの脇道のガタガタ、ドッスン of 走行の後、車はほとんど軽快に、一層スピードを上げて、滑らかな本街道を進んだ、一 遠くへ、更に遠くへ。

パーゲルは悲しげに考えた、一体皆、何と奇妙な走行をしているのであろう、各人がまことにただ孤独である、そして、娘を今夜、どうしたものか、迷っていた。...

すると太っちょが言った、「二時前にはベルリンに着かないだろう。娘とどこに滞在するつもりか考えついたかな。母親の許か」。

パーゲルは緊張して車の隅の暗い人影を眺めた。しかし娘は動かなかった。

「私には分かりません」と結局彼は囁いた、「母親はホテルに泊まっています。真夜中に一病気の娘を連れて行っていいものか。私の母親の許にしても。私が連絡もしないで不意にやって来たら、母は十分に驚いてしまいましょう」。

太っちょは何も言わなかった。

「療養所も考えました」とパーゲルは再び始めた、「馴染みの知人、ほとんど友人と言っても良い人がいて、療養所で働いています。しかし今夜はそれほど遠くまでは行けません。本当にどうしたらいいか、...」。

「療養所は沢山金がかかろう」と太っちょは言った、「おぬしらの許では金は乏しいのだろう」。

「そうですね、どこへ連れて行ったらいいのでしょうか」とパーゲルは叫んだ。

「恵み深い夫人の許です」とアマンダが言った、「母親の許」。

「良きお喋りだ」と太っちょが称えた、「ホテルとか夜という貴方の言葉は、すべて無意味だ。夫人は母親だろう。夫人は逃げ出して、気力を失っていても、夫人は母親だ。会おうと気力が出てくるだろう」。

「結構ですね」とパーゲルは言った。

しかしまた彼はフォン・ブラックヴィッツ夫人の色々な問いかけにどう答えようかと考え込んでいた。というのは彼は何も知らなかったからであり、太っちょはこれ以上きつと説明しないであろうからであった。

太っちょは運転手の窓ガラスにノックをし、車の中が一層明るくなった。フランクフルトの街路のランタンが射し込んで来た。

「私はここで降りる」と彼は言った、「聞いてくれ、運転手、証明してくれ、...。この若い男が全走行費用を払う。一キロにつき八十ペニヒだな。一 お若いの、高いが、しかし帰りの空の費用も込みだ。我々が出発したときは、43750がキロ表示であった。お若いの、それで計算してくれ」。

「すべてその通りです」と運転手は言った、「十分お金をお持ちですか、旦那。三百マルク以上しますよ」。

「十分にある」とパーゲルは言った。

「それじゃ、結構です」と運転手は言った、「ちょっと心配だったのです」。

「娘にここフランクフルトで一杯の温かいコーヒーと何か食べ物を与えてくれ。しかし食堂は駄目だ。車の中で渡してくれ。一 お休み」。

そう言うと太っちょはすでに向き直っていて、立ち去った。...

「ちょっと、旦那」とパーゲルは叫んだ、無闇に興奮していた。

太っちょは手で合図した。固く肩の間に収まっている頭に強張った帽子を被って、彼は角を回り、夜の中に去って行った、一 二度と再会することはない。

「運転手さん」とパーゲルは言った、「かなり町を進んだら、どこか小さな食堂で止めてください。何か食べることにしよう」。

「了解」とその男は答えて、再び彼らは進んだ。

今や車の中が一層明るくなった。街灯が射し込んで来た。しかし暗い人影は動かなかった。それは単に暗い人影で、無名の乗車客で、顔を隅のクッションに押し付けていた。

「彼女と我々だけになったな」とパーゲルは重苦しく言った、「令嬢、一 ヴィオレット令嬢、何か召し上がりますか」。

彼は忘れていた、一 いや、彼は忘れていたわけではなかった。彼は彼女に対して、何か聞き分けのない子供のように、分別のない犬ころのように話しかけることができなかつたのである。

彼女は隅の方で震えていた。彼はそれを感じ、それを見つめた、一 何か彼女を刺激したのであった。彼女は理解しないのか、理解しようとしめないのか、理解できないのか。震えは一層強くなって、ある嘆声のようなものが聞こえた。何ら明瞭でない声で、一 時に小鳥が夜に一羽嘆くときのようなようであった。...

アマンダが彼女に対して或る仕草をした。パーゲルはアマンダの手に、自分の手を、警告して置き、努めて、あの太っちょの冷たい事務的調子で話しかけようとした。「静かにしなさい、寝なさい、...」。

後に車が止まった。

アマンダが店に入った。アマンダが必要なものを持って来た。しかしパーゲルは言った、「今度は食べなさい、一 飲みなさい」。

早速また車が進み出した。より急いで、夜の中、ベルリンへ向かった。パーゲルは語った、「今度はまた寝なさい」。

彼らは長いこと進んだ、暗くて、静かであった。パーゲルもまた一人の息子、放蕩息子 [ルカ、15,11-] であって、今家に戻るのではないか。彼女もまた家に戻るのだ。余所者に

一 余所者になってしまって、子供達は両親をもはや覚えていない。本当におまえなのか、と母親が尋ねる。いや、人生とは、人生とは。我々は望もうと、望むまいと、停止していない。我々は滑って行く、我々は急いで行く、一 休みなく、永遠に変身して。昨日に対して我々は問いかける、本当におまえなのか。一 おまえをもはや覚えていない。生まれ、生まれ。行くがいい。

車は進み、更に進んだ。時々、眠る村々の壁がエンジンの物音を撥ね返し、それから再び、国道での軽快な静かな物音になった。パーゲルは、自分は喜んで、興奮して、娘を母親の許に再び戻しに行くのだと考えていたであろうか。結局彼は単に疲れて、緊張が解けてきた。彼はアマンダとゆっくりした、眠気を誘う、時に苛立つ会話を行った。アマンダは、恵み深い奥方が彼女の手伝いを望まないとき、ベルリンで一体どうしたらいいか知っていたがっていた。

「私には分からない、アマンダ」とパーゲルは悩んで言った、「貴女の言う通りだ。何も考えていなかった。しかし私には分からない、...」。

それからこのことも尽きてしまった。あたかも車には、誰も格別なこともなく、百度となく死んだものと思われていて、また生き返った娘などいないかのように、あたかも何らかの、どうでも良いような、いや、少しばかり煩わしい走行のようであった。それ以上のものではない、...

結局彼は、ホテルのホールの中に立っていた。朝の二時半であった。苦勞して彼は、夜の守衛からフォン・ブラックヴィッツ夫人の部屋と電話をつないで貰うことになった。

「もしもし、一体どうしたのです」とびっくりした女性の声が尋ねた。

「こちらはパーゲルです、―― 私は下のホテルのホールにいます、―― ヴィオレット令嬢をお連れしました」。するとゆっくりした平静な調子の代わりに、「あら、恵み深い奥方の、...」。彼はまた語り止めた。それから先は分からなかった。

長い、長い静寂であった。とても静かであった、とても静かで、...

それから遠くの、小さな声がした、「私は―― 参ります」。

それ以上何もなかった。パーゲルは受話器を置いた。

すると、―― ほとんど数分もしなかったであろう、―― エーファ・フォン・ブラックヴィッツ夫人が階段を下りて来た。同じ幅広の、赤い絨毯を敷いた階段で、かつてフォン・シュトゥットマン氏が墜落した階段であった。(しかしそのことを今パーゲルは思い出さなかった。しかしこの墜落と―― それに更に若干の他の事柄で、彼はノイローエへ導かれて来たのであった)。

夫人はパーゲルに向かって来て、白く、とても平静であった。―― 夫人は彼をほとんど見ずに、単に尋ねた、「どこなの」。

「車の中です」とパーゲルは言って、夫人の先を行った。いや、自分は色んなことを話さなければならぬと思っていたのであった。夫人が色々尋ねるであろうと予期していた、

―― しかし違った、何もない。ただ、「どこなの」の一言であった。

彼は車のドアを開けた。

夫人は彼を脇に退けて、夫人は何も尋ねず、何も知らないままであった。夫人はただこう言った、「ヴィオレット、さあ出てきなさい」。

いや、これが多分病気の娘の対する、混乱した魂に対する親しい言葉掛けの正しいやり方なのであろう。

その人影は立ち上がった。彼女は車から出て来た。一瞬パーゲルはその横顔を見た、固く閉ざされた口と深く垂れた臉を見た、...

二人はホテルの中へ入って行った。二人はパーゲルの人生から出て行った。―― 彼は忘れられて、路上に立っていた。

「それでこれからどちらへ、旦那」と運転手は尋ねた。

「何だって」とパーゲルは目覚めて言った、「おや、そうか、ここの近くのどこか小さなホテルだ、どこでも良い」。

そして小声で、相手の女性の手を取りながら、言った、「アマンダ、泣くなよ。何故泣くんだい、アマンダ」。

しかし彼も泣かざるを得ない気分であった、泣いて、泣いて、―― しかし何故か。

いや、彼は分からなかった。彼も分からなかった。

第十六章 レンテンマルクの奇蹟

145
心機一転

我々は遠い道のりを進んで来た。しばしば我々は途中で立ち止まらなければならなかった。一 今や我々は急ぐことになる。我々が始めたとき、夏であった。それ以来ほぼ一年が経過した。再び外は緑で、花が咲き、収穫に向かって生長して行く。一 そして町の中ではトゥーマン夫人、おまる夫人の部屋で、窒息しそうな暑さの中、黄灰色のカーテンが再び微動もせず掛かっている。一 我々は存知しないが、そうだと思うことにしよう。外部と内部 一 すべてが同じである。

しかしすべてが全く変わってしまった。ほとんど何も起きていない。一人の男がやって来た。天文学的数字の無茶なだらしない紙幣の件は終わった。最初人々はその金を呆然と見つめた。その上には単に1とか2とか、10の数字があるだけである。数字の後に二つの零があれば、すでに大変な額の紙幣である。いや、おかしい。十億とか兆の金で計算することに慣れていたのである。

交易にまた硬貨が戻って来た。まともな貨幣硬貨である。人々はマルクで計算するだけではない。いや、またグロッシェンや、いや、またペニヒの貨幣でも計算する、一 すごい。報酬を貰ったら、新しい金で小さな塔を造る男達が見られた。男達はそれで遊んだ。あたかも野蛮な墮落した時代から今一度子供の国へ戻ったかのようにであった。恐ろしい混乱から単純、簡素に戻ったかのように、そこでは物事がようやく一つの表情をしているのである。

そして奇妙なことであったが、この低級な数字から、この硬貨と小さな紙幣から、一つの奇蹟が生じた。人間達は正気になった。一 彼らは計算し始め、突然了解した、合っているぞ、と。私はしかじかの給金を週に貰う。私はそこで、しかじかの支出をする、一 ほら御覧、合っている。人々は数年間計算して来た。一 合うことがなかった。人々は物狂おしく計算してきた。飢餓者のポケットに千マルク紙幣が見つかった。最貧浮浪者は百万長者であった。...

そこで今や皆が目覚めた。荒れて、重苦しい、悩み多い夢から目覚めた。彼らは静かに立っていて、周りを見回した。その通り、彼らは立ち止まることができて、周りを見回し、そして正気になった。金は彼らの許から逃げて行かない。時間は彼らの許から逃げて行かない。人生が彼らの許に留まった。びっくりして人々は親しい者達の、いやとても余所余所しくなった者達の顔を見つめ合った。これが汝かと人々は躊躇って尋ねた。これが私か。

一 ほとんどそう思われたが、しかしすでに霧のように、熱病時の夢のように、靄のように散り始めていた。

彼らはそれを払い除けた。これは私ではないと彼らは言った。新しい勇気を抱いて仕事に取りかかった。再び、働き、生活することに意味を見いだした。

いや、すべては、とても、とても変わってしまった。

一人の男が大学の建物を去った。彼は前庭を横切って、リンデン通りへ出た。

ウンター・デン・リンデン通りは陽を一杯に浴びていた。

その男は少しばかり陽光の中で目を瞬いた。躊躇いながら彼は一台の自動車を眺めた。自動車ならこの学生は家の妻子の許へすぐに帰れるであろう。しかし彼は別のことを考えた。彼は取っ手の所で握っている書類入れ鞆を少しばかり揺すった。平静な、しかし迅速な足取りで、彼はリンデン通りを下って、ブランデンブルク門へ向かい、ティアガルテンに向かった。

彼は生まれてからずっと町の間人間であった。それからしばらく田舎の間人間となった。さてまた都会人となったわけである。しかししばらくの田舎生活から、静かな、広大な、孤独な道のりへの欲求が残っていた。その道のりは、自分が田畑を駆け回って、人々を管理していた時代を思い出させた。今日彼はこのような道のりの途上、自らの思索、自らの仕事、世間との自らの関係を管理していた。彼は思索的な、好意的な顔つきをしていた。彼は真っ直ぐに平静に歩いた。しかし彼の目は明るく澄んでいて、中に明かりがあった。その目はまだ全く若い、...

劣悪な時代、彼にとってせいぜいできそうなことは、古美術商、あるいは画商であった。しかしそれから母親とこれらの事柄について話すとき、彼は言った、「母さん、力を貸してくれるなら、私が最もなりたいのは医者だ、精神科医、魂の医者だ。昔は将校になりたかった。その後は何にもなれそうになかった、賭博者で、空ろで色褪せていた。後では農業がとても楽しかった。しかし私になりたいものは、本当の医者だ」。

「まあ、ヴォルフィー」と彼女は全くびっくりして言った、「選りに選って学業が一番長い」。

「勿論、そうだ」と彼は微笑した、「私の息子が学校に行くとき、私は相変わらず学んでいる。父親として何かになって、金を稼ぐまで、少しばかり長くかかる。しかし母さん、私はいつも人々と関わっていたいのだ。私はいつも人々の心はどんなか、何故あれこれのことをするのか、それについて考えるのがいつも好きだった。私は人々を助けることができたら、幸せだと思う、...」。

彼は宙を見た。

「待って、ヴォルフィー」と母親は叫んだ、「またノイローエを思い出しているのでしょうか」。

「どうして思い出してはいけないのかい」と彼は微笑した、「私にとって辛いと思うのかい。私は余りに若すぎた。人々を本当に助けることができるためには、沢山知らなければならない、沢山経験しなければならない。 — 優しくある必要はないのだ。私は余りに優しくかった」。

「あの人らはあなたにひどい仕打ちをしたのだよ」。彼女は指関節でテーブルを叩いた。コツコツ、トントン。コツコツ、トントン。

「あの人達は、ありのまま振る舞っただけで、ひどい人達はひどく、良い人達は良く振る舞った。しかし優しい者達は余りに優しくすぎた。 — だから、母さん、何が何でもと

いうわけではない。しかし母さんが力を貸してくれるなら、...」。

「力貸してくれるならと言うけど、ヴォルフィー」と彼女は不平を言った、「あなたは阿呆よ。ずっと終生阿呆のままにいるつもりよ。あなたは何か請求するときも、おとなしいのよ。自分に何か請求権限がないときは、自分でそれにこだわってさ。あなたは患者から五十マルク請求すべきときに、長く考えて五マルクにするのよ、絶対そうだから」。

「計算係には今ペーターがいるから」とヴォルフガングは満足して叫んだ、「計算するのは今しばらく結構」。

「ペーターだなんて」と老母は不平を言った、「あの人はあなたよりももっと阿呆よ。あの人はあなたの言う通りにするだけよ」。

147

セイレーン[蠱惑の歌姫]としてのペートラ

シニアのパーゲル夫人は以前から若い娘ペートラ・レーディヒを認めていなかった。パーゲル若夫人と呼ばれるようになってからも、それは変わらなかった。夫人は、レーディヒ[独身]はとても似合っている、まさにこの娘に対して寸法通りの名前であると思っていた。夫人は以前の自らの過失を称賛へと変えて、自分の義母から文句も言わずにぶたれるような娘は、夫に対して平手打ちをしなくなるものだと釈明した。結局それで、シニアのパーゲル夫人はただ平日にだけパーゲル若夫人の家政を訪問することになった。日曜日はその必要はなかった。日曜日には若夫婦が食事に夫人の許へやって来た。

夫人はそのとき、呪わしい、破廉恥な作法で、白髪を飾って、仏頂面で木石のようにテーブルに着席して、テーブル面を指でコツコツ叩き、ペートラのすべての仕草を燃えるような黒い目で追った。他のどんな若夫人も気が狂ったことだろう。

「私だって夫人からそんな指図は受けませんよ」と老小間使いのミンナは怒って言った、「私は小間使いに過ぎません。でもあなたは嫁なのよ」。

「今日は天気がいいわね」。これは老夫人がヴォルフガングの妻と敢えて会話したときの最大の楽しいことであつたらう、「市場ホールには新鮮なカレイがあるよ。カレイでござんじ。これらの皮は引き剥かれて[ペテンにかけられて]しまうのよね。そうなの」。そして指で元気よく鼻をこすった。

夫人はミンナとヴォルフガングを完全に狼狽させ、絶望させた。しかしペートラはただ微笑していた。

「並の子だね」と赤ん坊を見たとき、義母は拒絶して言った。「パーゲル風じゃない。並の品」。

衰れなペートラ。 — 彼の母がやって来るとき、ヴォルフガングは大抵大学へ行っていて、そしてミンナがそうしょっちゅうは来られないとき、代わりに老母がはや面倒見に来るのであつた。ペートラはこの一切を大抵は一人でやり過ごさなければならなかつた。彼女が子供に胸で飲ませていると、老母はそこに居合わせて、見つめ、世にも破廉恥な調子で尋ねる一つの癖があつた、「ま、生娘さん、その子育っている？」

他の女性であれば誰でも、乳は怒りの胆汁に変わったことであろう。

「有り難うございます、育っています、奥方様」とペートラはただ微笑した。

「痩せたね」と老婆は主張して、コツコツ叩いた。

「まあ、そんな、三十グラム増えました。秤で見て、...」。

「私は乳飲み子は秤で判断しません。それは合わないよ。私は自分の目で判断します。これは合います。生娘さん、坊やは痩せたよ」。

「そうですね、痩せました」とペートラは答えた。

シニアのパーゲル夫人は、更に頑固に、戸籍課にもかかわらず、ペートラは独身の娘であるという見解を維持していた。「確かに半年前には張り出されていたそうだね。しかしやはり有効でなかった。いや、すべては単に目の錯覚、誤魔化しだよ」。

「でも母さん、私は本当に願ったのです」。

「息子よ、願い事はクリスマスにするものだよ」。

「皆あなた方は騙されたのですよ」とペートラは笑った、「お母さんはそれを考えるのが一番楽しいのです。時々、お母さんは私がそれを目にしていなないと考えると、笑って体が震えるのです」。

「その通り、夫人はあなたのことを笑い飛ばすけど、あなたが夫人の言うことを何でも我慢するからですよ」とミンナが怒って叫んだ、「あなたのような子羊は丁度虐めるのもってこいなよ」。

「本当に、ペートラ」とヴォルフガングは頼んだ、「何でも母親の言う通りにしなくていいよ。ますます増長するぞ」。

「まあ、ヴォルフィー」とペートラは満足して笑った、「私はあなたの言う通りにしてきたでしょう。そして結局私はあなたをやっつけたのだから」。

ヴォルフガング・パーゲルは当惑して黙った。

シニアのパーゲル夫人は古い西側地区、タンネン通りのノレンドルフ広場近くに住んでいること、そして若い夫妻は全く外側のクロイツナーハ通りのブライテンバッハ広場近くに住んでいたことを考えると、老夫人が毎日、遠出をして、不愉快な若い妻の許へ出掛けたその持久力を不思議に思わないわけに行かない。その家は新しく、その上全く新しく、インフレの創作物であって、一あたかもこのインフレに遅れじとしているように見えた。すでにまた消滅しつつあって、真新しいのにすでにまた解体しつつあった。

「まあ、御覧」と老夫人は怒ってペートラに向かって叱った。「あんたらのひどい小屋のせいで私は傷が出来てしまった」。

そして夫人はペートラに自分の手を見せた。掌に斜めに、大きなまだささくれだった木の棘が刺さっていた。

「階段の手すりよ」と老婆は怒って叫んだ、「このような小屋に上品な人間が住むものではありません。命の危険があります。敗血症を起こすかもしれない」。

「待ってください。その棘を取り出しましょう」とペートラは熱く言った、「私はそのようなことは上手にできます」。

「痛い目に遭わせないでしょうね。言っとくけど」と老婆は脅して叫んだ。

陰気な目で夫人は、ペートラが針とピンセットを取って来るのを見守っていた。大きな受難は嘆きもせず英雄的に耐える多くの人間のように、老パーゲル夫人は、人生の些細な不愉快事には、神経過敏で、軟弱、ほとんど臆病であった。...

「あなたからむごい仕打ちは受けないよ」と夫人は叫んだ。

「ただ手を静かに出してくださいであればいいのです、そうしたらほとんど痛みはありません」とペートラは言って、仕事にかかった。

「そもそも痛い思いをしたくないのだからね」とパーゲル夫人は叫んだ、「この厄介な棘だけでもひどいの。その上あなたのやっつけ仕事に付き合うなんて」。凝固した目で、その瞳は不安のせいで小さくなっていて、夫人は手を見つめた。

「手を静かに出してくださいよ」とペートラは今一度頼んだ、「目を逸らした方がいいですよ」。

「私は、…」とパーゲル夫人は一層弱々しく言って、再びピクツとした、「私はもういい、…棘はそのままでもいい、…ひよっとしたら自然に出るのかも、…」。

夫人は手を引っ込めようとした。

「静かにできないの」とペートラは苛立って叫んだ、「愚痴を言わないの。馬鹿なことばかり言って、…」。

「ペートラ」と老パーゲル夫人は固まって語った、「ペートラ、どうしたの、私にため口を喋ったよね」。

「ほら、出た」とペートラは熱く叫んで、勝ち誇ってその棘をピンセットで高く持ち上げた、「ただ静かにしていたら、すぐ出たでしょう、ほら」。

「私にため口言って」と老夫人は囁いて、腰を下ろした、「私は愚痴って馬鹿みたいと言った。いや、ペートラ、私が怖くないのかい」。

「全然」とペートラは笑った、「これからも私に生娘と言っていいですよ、そして坊やは育っていないと言っても構わない。一 気持ちは分かっていますから」。

「おかしな人」と老夫人は苛立って言った、「私があんたを認めていると自惚れちゃいかんよ」。

「自惚れません」。

「ねえ、ペーター」。

「何でしょう」。

「ヴォルフが、今うちのため口に気付いたら、ヴォルフに事の次第を話しちゃいかんよ。私がそれを許したと彼には言いなさい。そうするだろう」。

「いいえ」とペートラは微笑した。

「事の次第を話すつもりかい」。

「はい」とペートラは答えた。

「本当に阿呆だね」とパーゲル夫人は不平を言った、「多分彼に『すべて』話すつもりなんだろう。そのつもりかい」。

「勿論」。

「その方法でどんな目に遭うか思い知らされるよ。ただ彼を甘やかすだけだよ。男どもは甘やかされるのが嫌いなんだよ」。

「それでそちらは」とペートラは尋ねた。

「私かい」と夫人はそれに対して尋ねた。

「そちらは彼を甘やかさなかったですか、際限もなく」。

「私が、そんなことはありません。誓って、決して。何で笑うのよ。許しません。あんたなんかに笑われたくありません。止めなさい、一 止めてよ、一 ペートラ、平手打

ちだよ、ペートラ。 — いや、ペートラ、私のような老婆を揶揄って。今時はこんなものかい。以前は皆へいこらして、お母様の恵みを請うたものです、 — 少なくともそんな噂話を読んだことがあります。 — その代わりに、あんたは私のことを笑うなんて。ペートラ、嫌な歌姫だね、私もものにしてしまっさ、哀れなヴォルフガング」。

148

ファッションサロン・エーファ・フォン・ブラックヴィッツ

我々は長い道のりをやって来た。我々は先に進まなければならない。急ぐことにしよう。

クーアフルステンダム[選帝侯築堤通り]を記念教会からハーレン湖の方へ向かうと左側に小さな通りが分岐している。マイネケ通りである。 — その通りへ我々は行かねばならない。そこで知人に出会う。そこはクーアフルステンダムのほとんど角地で、マイネケ通りに一、二軒入るだけである。そこに小さな店があって、看板には「エーファ・フォン・ブラックヴィッツ」の名前がある。

そこは小さなファッションサロンで、レディーはそこでウィーン製のニットウェアを購入したり、絹のブラウスを仕立てて貰うことができ、殿方は素晴らしい手袋や対の洗練されたカフスポタンや、本絹のシャツが、体型に合わせて、四、五十マルクである。ここでは安さに重きは置かれていない。この店では何か既製品の購入を当てにできない。人々は入って行って、襟、幅四十と要求することはできない。テーブルの奥の綺麗にラックされた爪の若いレディー達がそのような購入者には単に冷笑的な表情を見せるだけであろう。ここには単に気まぐれ心を誘うような品々、小品があるだけである。突然の思い付きであって、 — まさに今までこのレディーは、このウールのジャンパーが欲しいと思っていたのであるが、今やこれがなければ自分の人生は嘆かわしく不毛になるであろうと悟るのである。

この店をフォン・ブラックヴィッツ夫人は支配していた。ドアの上にはブラックヴィッツの名前があるが、しかしそこにはテッショーとあったらもっと正しかったであろう。というのは、ここを管理しているのは老テッショーの実の娘に他ならなかったからである。夫人は自分の愛敬、自分の微笑を顧客のために取っておいて、夫人の従業員達は夫人に対して震え、夫人は冷たく鋭い調子で話した。夫人はケチケチして、超過勤務を強い、万事に目を光らせていた。

その通り、夫人は自分の父と仲違いしていた。夫人は遺留分しか受け取らないと決められていた。しかし夫人にはテッショーの血が流れている。夫人は目標があると、吝嗇家になれた。

夫人には目標があった。夫人は金を、沢山の金を稼がなければならない。夫人は二人の未熟者の世話をしなければならぬ。夫人が亡くなったとき、二人のために十分な金が必要ならぬ。夫人は今や、青春、無鉄砲、健康を憎んだ。夫人は自分の若い売り子達が殿方達と視線を交わすのを見ると、苛々した。夫人はただ夫と娘だけを考えていた。夫人はこの二人は、それに三人とも皆、人生に騙されてしまったとだけ考えていた。それで他の者達には何も恵まなかった。後は奪い取るだけである。夫人は奪った。

時々、夕刻に、一人の瘦身の、白髪の紳士が、店に立っていた。彼は黒っぽい目をして

いて、一 立派な容顔である。彼はほとんど話さない。しかし彼は愛想の良い、愛敬のある、若干空ろな微笑を浮かべている。一 彼は新しい西側地区のレディー達にとてゝ気に入られていた。古い作法の騎士で、一 貴人であり、一 貴族とは何かが見てとれた。

この老紳士は微笑し、レディーと一緒にほとんど店の戸口まで行き、外はまことに、まことに温かいと保証する。それから彼は小さなお辞儀をして、レディーが店のドアを開けるのを見守り、彼は戻って行く、彼は再び自分の夫人の許へ戻って行くのである。

彼の脳は眠っている。凍った時が始まっていた。彼は以前騎兵隊長であり、騎士領の請負人、ヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツであった。一 今や彼は単に高齢の男にすぎない。彼はもはや一人っきりでも、部隊としても行軍しない。彼は黄昏れている。

しかし以前の純な残滓が見られた。一 彼はレディー達に対し、店のドアを開かない。レディー達の出た後、閉めることをしない。それがブライプトロイ[忠誠]通りの住まいであれば、レディー達の用を務めたであろう。その場合、彼はホスト役、主人役、騎士役を果たしたであろう。しかし彼は顧客に「奉仕する」商売人ではなかったし、商売人になることもなかった。彼はその気がなかった。わずかな残滓のこの我意が見られた。これは大したことではなかったが、幾ばくかのことであった。

彼の娘にはこれすらも残っていなかった。ゆっくりと週ごとに、月ごとに、彼女はまた人間達に慣れて行った。彼女は今や一人の人間が親切に彼女に語りかけても、泣かずに、それに耐えることができた。彼女は店の奥間に日がな一日ずっと座っていた。そこはシャツを縫ったり、裁断したりして慌ただしく仕立て直す娘達が座る所であった。機械がうなり、娘達は互いにお喋りして、「恵む深い奥方様」はフロントの店にいた。

ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツは静かにいつも座っていた。彼女は娘達を見守り、窓から外を見たり、目の前の小さな花瓶の花々を見たりした。彼女は微笑した。時に彼女も少しばかり泣いた。しかし彼女は一言も言わなかった。以前彼女には一つの呪いが発せられ、生涯或るイメージを思い浮かべるように強いられた。一 彼女はその死んだ男を目撃した。それから、誰もそれについて何も承知していない或る時間があつた。

彼女はそれについて何か覚えていたのだろうか。彼女はまだ死んだ男とその呪いについて若干覚えていたのだろうか。医師達は「覚えていない」と言った。しかし何故彼女は時々泣くのか。彼女は無言で泣いて、周囲の娘達は最初しばしば、気付くことさえなかった。しかし一人の娘がそれに気づき、叫んだ、「恵み深いご令嬢は泣いていらっしゃる」。すると娘達は皆、黙って、その泣いている娘を見つめた。娘達は以前すでにあらゆることを試みていた。彼女に花を贈ったり、チョコレート菓子を贈ったり、洒落を言ったり、ある娘は鶏の鳴き声をしたり、別の娘は人台[ボディースタンド]と一緒に踊ったりした、一 しかし甲斐はなかった。

そこで恵み深い夫人が入って来た。夫人は呼ばれたのであつた。夫人は最良の顧客の女性を店に放置して、急いでやって来た。...夫人はもはや厳しくなく、時間も取って、大きな子供を腕に抱いて、娘の目の上に自分の手を置いた。「泣くことないよ、ヴィオレット、陽気になさい」。

次第にこの病気の娘は温かい母親の体の中で落ち着いて、夫人は微笑し、再び夫人は娘に目を向けた。フォン・ブラックヴィッツ夫人は店の方へ戻った。...

裁縫部屋の娘達、店のフロントの娘達はベルリン娘である。娘達は素早くお喋りし、自分達に難儀な、厳しい夫人の苛酷さをよく口にした、…。しかしいつもこう言う娘がいた。「でも夫人も難儀よ、 — あの夫にあの娘でしょう。うちらと変わらないわね、…」。

「いいえ、私どもは間に合わないでしょう。ヴィオレットはやっと十六歳で、まだ長い人生です、…」。

「そうですね」と医師達は言った、「それは分かりません。希望し、待つことです。 — 不可能ではありません、恵み深いご夫人」。

夫人は希望し、待った。夫人は備えをし、貯えた。彼女の中に優しさと善意としてあったものすべてを注入して、ただ娘のを感じ取ろうとした。夫の方を夫人はもうほとんど見なかった。彼はいたが、いたのではなかった。時にフォン・シュトゥットマンとかいう殿方を思い出すことがあったろうか、 — 何と疎遠な、 — 何と馬鹿げたことか。

すでに一回、パーゲルさんという殿方に路上で出会うことがあった。夫人は冷たく彼の目を見た。夫人は彼に挨拶しなかった、夫人は彼を透視した。夫人はやはりその父親の娘だけのことはあって、この若造を見抜くに至った。この若造は自分から全権委任を横領して、この全権委任を乱用したのであった。大層な額を彼は自分のポケットに流入させたのだ。この若者が売却した物品の価値についての夫人の父親の見積もりがあり、パーゲルが夫人に渡した額の算出があり、 — 途方もない差額があった。この差額が夫人の遺留分から差し引かれたのである。

その通り、夫人は次のことも思い出した。夫人はよく覚えていた。このパーゲルはまだ夫人の借用証を有している、二千マルク相当だ。彼が持っているように、自分は決してそれを払わないだろう。彼が私に対してなしたすべての劣等なことに対するささやかな懲らしめだ。

あの人はとても若く見えた。愛敬があって、上品に見えた、 — すべての青春、すべての愛敬、すべての礼儀正しさに用心してかかるべきであろう。皆が互いに欺いている、

— 自分は今晚また金庫を点検してみよう、 — デーゲロー嬢は新しい絹の靴下ばかり履いている。彼女には恋人がいるかもしれない。金庫に手を出すかもしれない、 — 注意だ。

149

アマンダ・バックスは婚約を解消する

「お入りよ、お若いの、立派な部屋にお入りよ。 — 勿論彼女はいるよ。いないことがあるかね」とクルーパス夫人は大きな陽気な声で叫んだ。しかし小声でこう囁いた、「しかし今日はほんの少し彼女に優しくするんだよ。今朝お役所から知らせがあったのだよ、昔のボーイフレンドが亡くなったって、…」。

「とうとうお陀仏か」と若い男はとても喜んで尋ねた、「ま、やれやれだ」。

「たまげたね、 — そんな心ないこと言うもんじゃないよ、シュルツェさん。たとえひどい男だったとしても、あの娘はそれでも悲しいのだから」。

「今日は、アマンダ」とその若い男、シュルツェ氏は言った。製紙工場コルテ兼コルティヒ社の貨物運転手である。しかし彼はそれを立派な部屋では言わず、アマンダ・バック

スがまだ洗い物をしているキッチンで言った。「おぬしらは何を食ったのだ。燻製ニシンか。この暑さに食う必要はなかろう。魚はいつだって臭うなあ、...」。

「何を言う、燻製なんだよ」とクルーパス夫人が反論した。

「何も知らないかのような」とアマンダが言った、「振りをしなくていいわよ。夫人があんたに囁いたことをしっかり聞いていたからね。その通り、彼は、私のハンス君は亡くなった。 — 彼はたとえ屑でも、彼なりに私を愛してくれたのよ。当時のありのままの私を、何もない私を、クルーパス夫人の右手しかない私をね、...」。

「アマンダ、私がそれだから、...と思っているのであれば」。

「誰がそんなこと言っています。誰があなたのことを話しています」とアマンダは言って、銅タワシを洗い水の中に投げ入れ、パシャと音させた。「男どもはいつも女はただ自分達のことについて話していると思っています。そんなことはありません。私は私のマイヤーのことを話していて、私は彼がやはり屑として死んだことが残念でなりません。ピルマゼンスの地区役所で撲殺されました。分離主義者だったの。 — いつもフランス人達と組んで、ドイツ人に敵対して、全くノイローエのときと同じで、そこでは私からそのことで二、三発貰ったのよ」。

「ピルマゼンスか」とシュルツェ氏は当惑して言った、「また血なまぐさい時代の話しだな、...」。

「二月一二日のことだったそうです。優に四ヵ月経っています。ただ彼はマイヤーとだけ名乗っていて、関係者はまず私を探さなくてはならなくて、それで役所から私に知らせが届くまで、長くかかったのです。彼の札入れに、私が彼の婚約者と書かれていたそうなの、...」。

アマンダ・バックス — ヴォルフガング・パーゲルの家政婦であった彼女の教養時代は遠く過ぎ去っていた。彼女はクルーパス夫人の貯蔵置き場でまた昔からの馴染みのベルリンにすっかり戻って来ていた。 — アマンダ・バックスは口をとがらせて言った、「でも私は婚約者ではなかったの。ただ彼と寝ただけよ、...」。

少し重苦しい静寂が生じた。その若い男はキッチンの椅子で前後に体を揺すっていた。結局クルーパス夫人が言葉を発した。「マンデーケン、あなたが開けっぴろげな人間であることは結構なことよ。しかし過ぎたるは及ばざるがごとしでね。あなたは不必要にシュルツェさんの感情を害しているよ。この人はとても真面目にあなたのことを考えているのだから」。

「ま、構わないで、クルーパスさん、構わないで」と運転手は言った、「私はアマンダのことは分かっている。アマンダはそんなつもりで言ったのじゃない」。

「私がどんなつもりで言ったのよ」と頬を赤らめてアマンダは叫んだ、「丁度私が言った通りに、私は思っているのよ。それ以外のアマンダはいないし、知っていると言われたくないわね」。

「分かったよ、結構」とその男は言った、「その通りの思いだったのだ。その点は争わないことにしよう」。

「クルーパスさん、聞いたでしょう。これで男だと思っているのですよ。嫌よ、シュルツィング」と彼女は叫んで、全く正直悲しかった、「あなたは良い人よ。でも私には余りにピシッとしていないのよ。あなたは堅くて、貯蓄していて、酒を飲まないと知っていま

す。順調に行ったら、トレーラトラックを買って、それで私は長距離運送屋夫人になると、そうあんたは言ったことがあるけど。...でもね、シュルツィング、一日中あれこれ考えたの。私どもは上手く行かないだろう。生活の不安がないことは、とても素敵よ。でもただ生活の不安がないだけでは、やはりつまらない。私はようやく二十三歳です。そんなに急ぐことはありません。ひょっとしたら更に別な人が一人現れて、心が少しばかりときめくかもしれない。あなたでは少しもときめかないの、シュルツィング、...」。

「いや、アマンダ、手紙を貰ったばかりだから、今そう考えているんだよ。私を振らないでくれ。私は分かっている、自分は少しばかりボーッとしている、と。しかし私の仕事では負けていないぞ。スマートな運転、これは皆ができる。しかし用心深く、このキッチンよりも大して広くない中庭で、貨物トラックにトレーラーを付けて、回転させること、擦り傷も付けずにな、これができるのは、私一人だ、...」。

「また自分の阿呆な車の話しを始めて、あなたのタイムラーと結婚しなさい」。

「勿論、私は自動車の話しをする。しかし最後まで聞いてくれ、アマンダ。私はボーッとしている、これは話した。しかしまさに私は自分の技能で車をものにしてるように、結婚生活もものにできるのだ。信じてくれ、アマンダ、まさにこの通りだ、つまり皆は大口を叩いて、スマートに乗り付ける。そして六ヵ月後の結婚生活を覗いてみる。一切ご破算だ。私の許では無事だぞ、アマンダ。私の許では何も起きない。私の運転免許同様安心なものだ」。

「あなたは良い人よ、シュルツィング」とアマンダは言った、「でもね、そうは行かないのよ。火と水、これは合わない。あなたは私には何も起きないと言うけど、一　素敵よ、シュルツィング、ただ私には、何も起きないことがいいことなのか、分からないの。余りに静かすぎるのは、やはり馬鹿みたい」。

「まあ、そうか」と若いシュルツェは言って、立ち上がった、「もう説得はしないよ。縁がないものは、ない。まさに私は馬鹿だった。一　いや、アマンダ、おまえのことを悪くは考えていない。そんなことはない。パン屋も皆、同じパンを焼くものじゃない。おまえはまさに火で、私は技能だ。おまえも悪くない、私も悪くない。良い晩を、クルーバス夫人。晩にはここに座らせて貰って有り難う、素敵な食事もすべて有り難う、...」。

「食事のことも話している」。

「食事について話しちゃいけないのかい。人生で贈られたものに対しては皆、感謝すべきだろう。私は人生でまだ沢山贈られたことはなくて、感謝しきれないほどではないのだ。

一　お休み、アマンダ。ご多幸を祈るよ」。

「有り難う、シュルツィング、私も　一　とりわけ優しい奥さんをあなたにお祈りします」。

「そうだな、多分別な女性を見つけることになろう。でもアマンダ、惜しかった。お休み」。

二人は、ドアが閉まる音を聞いて、彼の足取りが中庭へ向かうのが聞こえるまで待っていた。そして彼が外の広場の監視人のルドルフにお休みと言うのを聞いてから、クルーバス夫人が言った、「それで良かったのかい、アマンダ。彼はとても実のある男だよ」。

アマンダ・ボックスは黙っていた。

クルーバス夫人はまた始めた、「私は嘆いているんじゃないよ。あんたがまだ十年ここ

の広場に私と暮らしても、私にはただ都合がいいだけだ。ペートルも私はとても好きだったけど、しかしあんたと一緒のようにペートルとは話せなかった。それに仕事でもあんたはペートルよりも有能だよ。 — ただ筆記はね、この点はペートルが上だ」。

「クルーパスおっ母さん、私をパーゲル夫人と比べないでよ」とアマンダが言った、「お似合いというのが全然分かっていないんだから」。

「私がペートルの悪口を言ったかね。あんたも自分が何を言っているか分かっていないよ。あんたの方がもっと私には合っていると私は言ったのだ。それは本当だ」。

「ま、そうだね」とアマンダは言って、「雌牛は舞踏会に行っちゃいけないと言うんでしょう」。

「マンデーケン、私の言うことが良く分かっているよ」とクルーパス夫人は言って、あくびしながら立ち上がった、「ただ私の言うことを分かってほしいだけだ。つまり、昔の彼が、上等な奴じゃなかったと言って、皆に八つ当たりしているんだよ。 — いや、私はこれから寝床に行く。明日は瓶の貨物車だ。五時に起きなきゃならない。 — あんたも寝ないのか」。

「私はここにもうしばらくいて、窓から外を見えています。あなたに八つ当たりしているわけではありません。私一人が彼との関係で悪いのだともう分かっています」。

「そんなに沈み込んでいいじゃないよ。ペートルを考えなさい。あの娘はぶち込まれてたんだよ、あんたよりひどい目に遭っている。その娘が今はどうだ、正真正銘のレディーだよ」。

「いや、レディーだなんて」とアマンダは軽蔑して言った、「レディーには憧れません。でも彼は彼女を好いていて、それが良いのよね。 — あのシュルツェはボーツとしていても、もっとあなたの貯蔵置き場のことを考えていたのよ。それなのに、愛なんかよりも、生活が安定するよと私にあなたは言ったのです」。

「まあ、マントヘン、愛なんて。愛なんか言うのは止めなさい。夕方空を見て、更に愛だなんて、 — それは健康に良くないよ。鼻風邪を引くだけだよ。すぐにベッドに入りなさい。しっかり熟睡すること。これが愛のすべてよりも上等だよ。愛だなんて考えていたらただ馬鹿になるだけだよ」。

「お休み、クルーパスおっ母さん。でもあなたに四十年前誰かがそのことを言ったら、あなたは何と言っただろうかとただふと思ったの」。

「そうだね、それは全く別な話だ。四十年前と愛か。やはり別の時代のことだね。しかし今では、 — 今は愛も通用しないね」。

「そうかしらね」とアマンダは言って、窓際にキッチン用椅子を持って行って、ペルリンの空を見上げた。

我々は先に進もう。我々は急いでいる。ノイローエにも戻る必要があるのか。

ハロー、ハロー、注意しろ、道を避ける。 — 荷物車のお通りだ、袋を一杯載せている。馬がないのだ。すべての馬が野良仕事に出掛けている。一頭の馬も欠かせない。 —

それで郎党がでこぼこの農園中庭を五十ツェントナー分、押している。スポークに触れたり、両肩を柵柱に押し付けたりしている。ゆっくりと荷車は餌置き場まで進んで行く。

農園中庭をやって来るのは誰か。もっと早くしろと叫んでいるのは誰か。老枢密顧問官フォン・テッシュォーである。彼は自らが検査官、森林官、書記となって、今は更に自らが輓馬となって轅につながれている。「出発だ、郎党。私は七十だぞ。おぬしらは二、三ツェントナーすらできないのか、意気地なし」。

荷車が着くや、すぐに彼はまた行かなければならない。いや、多くのすること、叱咤し、監督し、計算することがあって、毎朝始まることで、彼は過労で半死半生であった。しかし彼は全く幸せであった。彼には一つの使命があった。いや、二つの使命があった。彼はノイローエを再建しなければならない。彼の婿、彼の実の娘は、泥棒や犯罪者達と徒党を組んで、ノイローエを略奪していた。それに彼は現金をまた一杯にしなければならない。これはこの徒党に盗まれたものだ。

倦まずに彼は活動した。彼はしみつたれて、ケチであった。自分自身の妻の貯蔵庫から、彼は卵を盗んで、売却した。彼はいつも新たに蓄財方法を発明した。人々が「枢密顧問官殿、我々を生かしておいてください」と嘆くと、彼は叫んだ、「誰が私を生かしておいてくれるのか。私にはもはや何もないのだ。哀れな男だ。借財を負っている。奴等が私から盗んだのだ」。

「いや、枢密顧問官殿、貴方には森がありましょう」。

「森だと、森か。二、三の松林だ。おぬしらは、財務局がいかにも私に請求してくるか、知っているのか。戦前は十八マルクの収入税を支払っていた。それが今ではどうだ、数千マルクをこの同志は私に要求するのだ。そんなことができるものか。いや、切り詰めることだな。私も切り詰めるぞ」。

すでに彼は先に駆けている。彼の頭は思い付きで一杯である。彼は毎朝鐘を五分早く、始業時間よりも鳴らすようにさせて、六十人の郎党の許で、五時間分の未払いの超過勤務を剥ぎ取った。彼は賃金支払いのとき騙した。一人につき毎週一ペニヒだけでもごまかせば、年に三十マルクの貯えとなる。彼は急がなければならない。彼は株をしくじっていた。彼がインフレのとき購入した株は、やはり無価値になった。その株は今や、「束にされる」。そう盗賊達は呼んで、千マルクが五十ペニヒだ。

「いや、エアラス爺さんよ、それでもおまえさんが褐色の千マルク紙幣と引き換えにするものよりは少しばかりましだ」。

「待ってください、枢密顧問官どの、待ってくださいよ」。

いや、彼は待てなかった。老枢密顧問官は素早くしなければならなかった。株と現金の財産が溶解していた。彼が死んだとき、少なくとも自分の父から受け継いだ分はなければならない。何故か。誰のためか。娘は遺留分と定められた。この遺留分には先に受け取った額がすでに含まれている。息子とも彼は仲違いしていた。誰のためか。彼には分からなかった。彼はそのことを考えなかった。彼は走り回り、計算した。その上、彼は超年取っていた。自分は次の二十年間に身罷るとは考えなかった。彼はなお幾多の若者の死を見届けるつもりだった。

宮殿の上の階、窓辺に老いた夫人、彼の妻が座っていた。しかし以前のように女友達のユッタ・フォン・クックホフ嬢はいない。ユッタは不興を買った。ユッタは退けられた。

ユッタはこの世はいかなるものか知らなければならなかった。彼女は自ら天上的救いに反抗したのであった。つまりヘルツシュリュッセル氏に逆らったのである。

ヘルツシュリュッセル氏をベリンデ夫人はドレスデンから連れて来た。彼は黒い制服の髭の男であった。ある厳格な宗派の指導者で、この宗派はすでにここ現世でただ後悔と懺悔に身を捧げるものであった。彼は指導者で、多分彼一人からなる宗派であった。ヘルツシュリュッセル氏はベリンデ夫人を「石灰化した」教会から解放した。彼は夫人に、自分一人がイエスの真の教義を体現していると証明した。今やベリンデ夫人は好きだけ、晩禱を挙行することが許された。夫人はもはや牧師に対しても、教区監督に対しても恐れる必要はない。

ユッタはヘルツシュリュッセル氏に対し抵抗した。彼女は主張した、彼は盗み、飲み、女癖が悪い、と。しかしユッタは単に不機嫌な老嬢に過ぎなかった。ヘルツシュリュッセル氏は美しい手入れされた髭と穏やかな声の持ち主であった。彼がベリンデ夫人をその強力な腕でデッキチェアに運ぶと、ベリンデ夫人は、この現世で罪深い肉に許される限りの幸せを感じた。

最後の戦闘で、ユッタ・フォン・クックホフ嬢は、ヘルツシュリュッセル氏に対し枢密顧問官を向かわせようとした。しかし枢密顧問官はただ笑った、「あのヘルツシュリュッセルか」と彼は甲高い声を出した、「いや、ユッタ、あの男はよろしい。少なくとも一人の小間使いの役を果たしている。ようやく我々は教会から離れて、教会税をもはや払わなくなっている。ベリンデはいつも上機嫌だし、— このすべてがちょっと食事を出すだけで済むのだ。いや、ユッタ、あの男にはいて貰おう」。

「いつまでも少しの食事では済みませんよ、— 子牛はすぐに雄牛になるのです」。

「金か— 金のことか。ユッタ、私には金はない。その代わり、妻が文書を何も出さないよう注意するつもりだ。ヘルツシュリュッセル[心の鍵]に金庫の鍵は渡さないよ」。

かくて、両老人は、自分達の励む仕事を確保することになった、— 自分の子供達のことをもはや考える必要はなかった。

151

水泳の心得がない

自分の暇な日、散歩の時に、フォン・シュトゥットマン氏は好んで近隣の村の墓地へ行った。彼はあるベンチに腰掛けた。彼のすぐ前に古い墓があった。彼がそれを見つけたとき、蔦で一面覆われていた。フォン・シュトゥットマン氏はその墓石をまたきれいにした。

墓石はこう読めた。ヘレーネ・ジーベンロート、享年十六、溺れる子供を助けようとして自ら溺死。最後に簡単にこうあった、「水泳の心得がなかった」。

フォン・シュトゥットマン氏はここに座るのを好んだ。静かで、夏の時には、誰も墓地へ来る暇はない。誰も彼の邪魔をしない。小鳥達が歌い、荒石壁の向こう側、村道では、収穫の荷車がガラガラ行く。シュトゥットマンはその墓石を眺め、その若い少女のことを考えた。ヘレーネ・ジーベンロートという名前であった、十六歳、彼女は水泳の心得がなかった。彼女は助ける用意があった。しかし彼女は自ら救助を必要としていた。自分も助ける用意はある。— しかし自分も水泳の心得がない。

枢密顧問官シュレックはとても彼に満足していた。患者達も彼が好きであった。従業員は彼に何も難点を見いだせなかった。 — フォン・シュトゥットマン氏はこの療養所に長く滞在できよう。彼はここで年を取って、この療養所で死ぬことができよう。

この考えは、彼にとって、何ら恐ろしいものでなかった。彼は自分の生き方に満足していた。彼は再び外の健康な者達の世界に戻りたくなかった。 — 彼は水泳の心得がない。彼は、自分には他人が持っているもので欠けているものがあると気付いた。彼はこの人生に適應できない。彼は自身にある尺度を持っていた。彼は人生がこの尺度に適應することを求めた。しかしこの人生はそうしなかった。フォン・シュトゥットマン氏は挫折した。大きな事柄や、小さな事柄で、挫折した。彼は譲歩できなかった。

「いや、何」と老衛生顧問官は叫んだことだろう、「貴方は単にズボンを履いたオールドミスだよ」。

フォン・シュトゥットマン氏は単に微笑した。彼は答えなかった。彼は今となっては、教えられないものには手の施しようがないという境地にあった。

水泳の心得がないということである。

ちなみにフォン・シュトゥットマン氏はパーゲル夫妻の子供達にとって、優秀な卓越した叔父さんとなることだろう。彼は、休暇をパーゲル夫妻と過ごすという計画を立てた。ただ、若い、彼にとっては未知の夫人を思うと、煩わしかった。女達は、 — 自分には分からない。いや、彼自身には、女性自体の要素、オールドミスの要素は何もなかった。衛生顧問官の話はナンセンスである。女達は、既婚であれ、未婚であれ、すべて彼には縁遠い者である。しかし結局、 — この難しい付き合いはなくても、叔父さんにはなれよう。多分彼はパーゲル夫妻と旅もしよう。水泳の心得がないまま。

152

夜の夫と妻

少しばかり都会は夜で涼しくなった。少しばかり爽やかな風が白いカーテンを揺すった。妻は目覚めた。彼女は小さなサイドテーブルの明かりを点して、 — よくそうしたが、 — 隣のベッドを見やった。

夫は眠っていた。彼は脇腹に寝ていて、少しばかり縮こまり、顔は安らいでいて、静かである。少しばかり縮れた、ブロンドの髪の毛が、子供のような、少年のような外見を与えていた。下唇が突き出ている。

妻はこの慣れ親しんだ面影を眺めていた。不安の気持ちに揺れることはなく、心配事はなかった。

幾多の夜、彼は話し始めることがあって、彼は不安がり、叫んだ。...すると妻は彼を起こして、ただ言った、「また思い出したのね」。

二人はしばらく語って、それからまた眠った。

彼にとって、負担の大きい時代があった。しかし彼は耐え抜いた。ただ耐え抜いただけか。いや、彼は強くなった。彼は何か自らの裡に発見した。それが彼の支えとなって、何か不壊のもの、一つの意志となった。彼は以前、単に愛敬があったに過ぎない。 — それから彼は愛に値する者となった。

若い妻は微笑した、 — 彼女は人生に対し、夫に対し、そして幸せに対し、微笑した。

それは外的事柄に依存している幸せではなかった。その幸せは彼女の中に休らっていた。胡桃の中の芯のようであった。愛していて、そして愛されていると承知している女性は、ずっと自分の許にある幸福を知っている、 — 日中の喧噪を上回る耳の中の至福の囁き声のようなものである。愛している女性の恋人は、これ以上望むものはない平静な幸福である。

彼女は今一度部屋を一瞥した。穴蔵ではなく、一つの部屋である。彼女は夫の呼吸を聞いた。それからもっと微かな、もっと早い子供の呼吸を聞いた。白いカーテンが穏やかに揺れた。

すべては全く別様になった。

彼女は明かりを消した。

お休み、静かにお休み。

ジャン・パウルの一連の翻訳の後、付録としてフォンターネの『嵐の前』とフライタークの『貸しと借り』を訳してきた。今回ファラダの『豺狼の群れ』（1937年）を第三の付録として選び、翻訳付録三部作の一応の完結とすることにした。この三作はいずれも騎士領の話、舞台は主にプロイセンで、作家はFontane、Freytag、Falladaと3Fであり、ジャン・パウルにもFriedrichの名前が大王然とあり、何となく縁起がいい。リヒテンベルクは「化学しか知らない者は、化学も分かっていない」と記している。ジャン・パウルしか知らない者は、ジャン・パウルも分かっていないということになる。ジャン・パウルだけ読んでみると、何故ドイツ人がユダヤ人を虐殺するに至ったのか、さっぱり分からないのであるが、これらの後年の作品を読んで行くと、ある種の流れといったものが見えてくるようである。ジャン・パウルの経験したフランス革命、ナポレオン戦争から、ヒトラーの台頭に至るまで、ドイツの歴史が俯瞰できるように思われる。三作とも作中人物が多彩で、騎士領を中心に貴族、市民、百姓、従者とすべての階層の関心事が描かれている。

ジャン・パウルの後継者といえば、普通にはケラー、シュティフター、ラーベといった作家であろう。ジャン・パウルの小説を「社会」における「個人」の受難と捉えれば、これは、シェークスピアの『ハムレット』以来、そしてゲーテの『ヴェルター』以来、近世の文芸すべてに妥当するもので、自明のことであろうが、そして力点を「個人」に置けば、ケラー、シュティフター、ラーベが後継者と見え、力点を「社会」に置けば、オーダー川に近い騎士領のこの三作品の3F作家が後継者と見えるようである。もっともこれはこの三作を三部作として勝手に関連付ける筆者の方便であって、単にケラーの『緑のハインリヒ』、シュティフターの『晩夏』はすでに邦訳されている事情があり、翻訳の意欲が湧かなかったからにすぎない。『晩夏』に至っては、よくドアを閉めて、閉じこもる主人公だったという印象しか筆者には残っていない。

1. 作者の履歴

「ハンス・ファラダ（本名ドルフ・ディツェン）は帝国裁判官ヴィルヘルム・ディツェンとその妻エリーザベト（旧姓ローレンツ）の息子として1893年7月21日にグライフスヴァルトで生まれた。1911年自殺に失敗した後、精神病院に入院。1913年ギムナジウムを未修了のまま退学し、農業の見習いとなる。その後、主に農業検査官、ジャーナリスト、出版社編集者として働く。1947年2月5日ベルリンで死去」[ネット検索]。

没年が特に訳者にとっては重要で、死後70年経っているわけで、従って翻訳著作権は必要ない。翻訳に当たってはHans Fallada: Wolf unter Wölfen. Edition L'Aleph. Wischouse - Schweden 2020を底本としたが[原題は直訳すると、『狼どもの中の狼』]、出版社に連絡すると、自由に翻訳発表して良いということだった。原作は1937年出版で初版一万部らしい。ただ翻訳で利用した版は誰が責任編集者か不明で、Projekt Gutenbergのテキストと比較すると、各章の見出し等新たに工夫したものと思われる。

小説家の育ちはやはり作品世界に影響を与えるもので、例えばジャン・パウルでは牧師の生活は自然に描かれているが、宮廷生活の描写は読書や伝聞、後年の乏しい経験を基にしたもので、必ずしも説得的ではない。ファラダの場合、この『豺狼の群れ』しか知らな

いのであるが、警察、裁判所、精神疾患、騎士領を中心とした農業生活が自然に描かれているようである。またジャン・パウルの訳す中で気付いたのであるが、翻訳していると、作者の書齋に忍び込んで作者の思いを盗み見ている錯覚が生じ、それが楽しいのであるが、ファラダの場合も常に一方の目が笑っている感じで、今回の騎士領三部作の作者はいずれも日本人ならば一通り落語の見習いをした作家先生のように思われる。

一例を挙げる、主人公が夜、警察から釈放されて、自分の母親の家からトランクを未明にタクシーの運転手とこっそりと運び、新しい地に旅立つときの場面である。

<「いや、少なくともこれだけはだな。この老いたご夫人に数行書きなさい。何か思いやりのあるものをな。まやかしてもな。母親はいつも喜ぶものだ、子供は騙していると分かっているもな。私にづらい思いをさせたくないのだ、と思うのだよ、...」。

「それじゃ、ずらかろう。...こっそりと兄ちゃん、ドアの所はそつとな。...今、母親を起こしたら、やんぬるかなだ。...逃げるとき捕まったら、恥ずかしい。用心して、注意、阿呆じゃないか、起こしてしまうぞ。やれやれ、上手く行った。...ただそつと玄関のドアは閉めるんだ。こっそりと、言ったらう、兄ちゃん。こっそりというのはびっくりさせることじゃないぞ。 — いやおたくの心臓もどきどきしたか。老いたご夫人を起こすんじゃないかと心配したぞ。いや、わしもおかしいのう。おたくのような男の顔は殴って構わんと、わしは思わんが、しかしご夫人は思うだろう、...」>[335、引用はこのpdfファイル]。この運転手は自分一人で運び、持ち逃げする気でもあるのだが、勿論主人公はそうはさせない。

これは孫引き[ネット検索]であるが、ファラダに『我が先祖』という本があって、その中で、自分の保証人、あるいは先祖として、次の作家を挙げているらしい、「セルバンテス、フロベール、ドーデ、ジャン・パウル、そしてE.T.A.ホフマン」。これらの作家が精神的履歴と言えよう。

作者の実生活の履歴からは、自殺未遂が作者の心に終生影響を与えているであろうと推測されるが、そう思って読んで行くと、次の文がその影響かもしれないと思った。

「まだ本当に若い時には、過去は本当に過ぎ去っており、つまり完全に片付いたと思ってしまうからである。毎日『新しい生活』を始めることができると思うもので、すべての周りの人々にも同じこの信仰を前提とするのである。 — 殊に母親に対してはそうである。人生が生涯後に引きずるであろうあの鎖についてはまだ何も自覚していない。毎日が、体験のすべてが、この鎖に新しい部分を繋ぐのである。若者はまだこの鎖の音を聞かない、まだ次の文の意気消沈させる希望のない意味を理解していない。汝はこのことをなしたが故に、こうでなければならないのだ、と」[485f.]。この関連で、終わりの方で森林官が密猟者のボイマーと出会わないでいたら、自分のお喋りの罪は生じなかったであろうにと自己反省する場面があるが、この作者ならではの諧謔的反省と思われる[692f.]。

2. あらすじ

『豺狼の群れ』は一見無造作に多彩な登場人物が登場しているが、話しは密接に絡んでいて、偶然と因果の連鎖であり、筋の紹介は難しい。しかし筋は話しの「ネタ」とか、無数の書籍の中から文献として選ぶ際の一応の判断基準となるので、記しておく。ちなみに筆者の判断基準は、古ければ古いほどいいである。

主人公ヴォルフガング・パーゲルは、良家の息子であるが、未亡人の母親と仲違いして、賭博[ルーレット]で生活している。選りに選って自分の結婚式[結婚届け]の前夜、すべての金を失い、ハイパー・インフレのベルリンで金策に回ることになる。ヴォルフガングが時間を費やしている間に、恋人のペートラ・レーディヒは宿の女将トゥーマン夫人によって、みっともない服のまま、住まいから追い出される。そして服装の廉で、警察に逮捕される。ヴォルフガングは後手に回ってしまい、金は用意したものの、ペートラに面会できず、結局酒場で会った以前の軍の上司、フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長の許、ノイローエ[虚構、ノイマルクの地、現ポーランド]で、ホテルマンを止めたばかりの元中尉フォン・シュトゥットマンと共に、荘園経営[請負]の手伝いをするようになる。第一部はこの旧知の三人が再会し、パーゲルが最後の賭けをし、まさかの大勝ちをしながら、警察に踏み込まれ、皆逮捕され、未明に釈放され、ノイローエへ向かうこの一日[1923年七月]に収斂している。

荘園の経営では、騎兵隊長の義父との請負契約はかなり厳しいものであることが、シュトゥットマンの指摘で明らかになる。問い質して行くと、娘夫婦の仲がこじれても、娘を守るための婿いびりと思われる。騎兵隊長は短気で、思慮が浅く、義父はこれをからかいながらも、案じている。第二部は主に請負料納入の日十月一日に向かって話が進められる。この日はまた一揆の日と後に分かる。収穫作業員として結局、監獄分遣隊の囚人達を頼ることになる。一方騎兵隊長の娘ヴィオレットは、非合法の「黒い帝国国防軍」の少尉と秘かに付き合っている。先の検査官マイヤー、従者レーダー、森林官はそのことを知っているが、両親は知らない。その間囚人の脱走がある。代官の娘ゾフィー・コヴァレフスキーが関わったものである。またサイコパスの従者レーダーの画策で、ヴィオレットの少尉宛恋文が利用され、文面にある一揆の武器保管所が先の検査官マイヤーによって密告される。かくて一揆は瓦解し、少尉は自殺し、騎士領もパーゲルらの必死の努力にかかわらず、家庭的に破局を迎える。その一方「艱難汝を玉にす」で、パーゲルは成長し、ベルリンへ戻り、自活して、出産していたペートラや、母親と和解し、ベルリン大学で精神医学を専攻することになる。

本作はテレビでドラマ化[旧東ドイツ、1965]されており、ネットでも見られるようである。その配役に従って最初の20名ほどを紹介しておく。

(1)ヴォルフガング・パーゲル (Wolfgang Pagel)。主人公、ヴォルフイーとも呼ばれる。亡父は車椅子の病の間だけ、評価される画を描いた画家。ルーレットでインフレ時代凌いでいるが、結婚届けの手数料も失ってしまい、亡父の画を売った金も間に合わず、最後に賭博して勝つが、警察に手入れされ、心機一転、その晩出会った、旧上司の騎兵隊長の騎士領で再起を計ることになる。

(2)ペートラ・レーディヒ (Petra Ledig)。レーディヒは独身の意で、「運命であるように見える名前があるものである」[14]。ペーターと男名で呼ばれたりする。母子家庭で貧しく育ち、売春行為で主人公と出会い、何故か気に入って、同棲するが、着る服がない状態(半裸に紳士もの上着)で通りにふらふら出て、警察に捕まり、拘置所で古物商の老婆に見いだされ、この老婆の仕事を任される。妊娠していると分かり、後にまた主人公の騎

士領での更生を知らされ、最後に精神科医を目指す主人公と結ばれる。

(3)騎兵隊長ヨアヒム・フォン・ブラックヴィッツ(Rittmeister Joachim von Prackwitz)、夫人からはアヒムと呼ばれる。「強力な権勢欲と脆弱な知性の混在」[530]とされる。義父の騎士領ノイローエの請負人で、婿殿の立場であるが、「上等志向、462」であり、「ポーランド語を学ぶなんて、一バーカ」[20]、無骨な田舎貴族[Ostelbier、580]の義父との折り合いが悪い。乾坤一擲、高価な車を購入して、一揆に駆けつけようとするが、一揆は軍が動かず頓挫、娘の不始末から立ち直れない。

(4)エーファ・フォン・ブラックヴィッツ(Eva von Prackwitz)パーゲルの言では、「確かに騎兵隊長と忌々しいほどそっくりだ。勿論夫人は彼ほどに粗野ではない。その代わりまさに女性なのだ。夫人は、何か得たいとき、愛敬を、女性の魅力を振りまく、脚を前に出したり、声を艶っぽくしたり、一微笑する。しかし結局は同じことを目指している。車が必要になったら、それを買うのだ」[735]。しかし夫も、娘も倒れたとき、一家を支えて行くのは夫人である。ベルリンでファッション・サロンを経営するに至る。「夫人には目標があった。夫人は金を、沢山の金を稼がなければならない。夫人は二人の未熟者の世話をしなければならない」[761]。名前に関しては「それはエーファ、昔からの永遠に若いエーファ[イヴ]」[457]。

(5)ヴィオレット・フォン・ブラックヴィッツ(Violet von Prackwitz)、ヴァイオとも呼ばれる。騎士領の将来の後継者と目されている。普通騎士領は男性が継ぐものと思われるが、時代と共に変わったのかもしれない。一揆のために水面下で活動している「少尉」に出会い、十五歳で初体験。恋文を書き、最初それを検査官マイヤーに届けるよう依頼し、横領される。少尉と従者と共に夜出かけ、恋文を少尉回収。更に、武器保管所に関し言及する恋文を書き、これを従者レーダーに横領される。武器保管所が密告され、それを知った少尉は自殺。「あなたなしでは生きて行けない」[593、596]と囁いた相手の少尉の呪詛と、サイコパスの従者の監禁を受け、精神を病む。

(6)フォン・シュトゥットマン(von Studmann)、騎兵隊長の元同僚、部下、中尉。第一次大戦後、ベルリンのホテルに勤めていた。そのホテルに精神のおかしい兵役忌避の男爵が現れて、従業員を部屋に集めて、ピストルで酒を無理矢理飲ませる事件が起きる。シュトゥットマン氏は最後に酒瓶を投げて、男爵を沈めるが、その直後、人前で階段からシュトゥットマン氏は落下して、ホテルでの勤務が難しくなる。その場にいた騎兵隊長に説得され、騎士領で騎兵隊長の補佐をすることになる。パーゲルも一緒である。農業は初めての二人であるが、十分に、あるいは騎兵隊長の面目がないほどに、騎兵隊長の代役を務める。ただシュトゥットマン氏は、「目覚まし時計と結婚しなければならないような気がするの」[702]と言われて、結婚を断られたことがあり、女心が分からないとされる。エーファ夫人からも結局、夫人の心労への理解が足りず、嫌われてしまう。

(7)従者フーベルト・レーダー(Diener Hubert Räder)、先のことを見越して、ヴィオレ

ットにまず第一に奉公しようと思っている。しかしヴィオレットはただ軽く見ている。ヴィオレットに少尉への手紙の伝達を頼まれると、引き換えに、ヴィオレットの体（心臓の箇所とうなじ）への手のタッチを求める。圧力だけの痴漢行為である。その後手紙の返還に応じない。手紙の内容は武器保管所に関し、この従者がマイヤーに告げたと見られる。少尉の自殺の際には、少尉の依頼でピストルを購入し、少尉の自殺も確認し、その後、ヴァイオを拉致したと思われる。多分最後、元刑事の「太っちょ」に殺されたと推定される。

(8)少尉フリッツ(Leutnant Fritz) 「少尉は常に、目的は手段を浄化するという命題を信じていた」[609]。ヴィオレットの連れ合いとしては、パーゲルの判断では、「将校ではある、従って、彼が望むと望まないと、一種の名誉ある枠組みにある男である、これはちょっとした安心材料だ」[418]。ヴァイオを誘惑したときの科白は、「このために生まれて来ているのだ」[261]である。従ってバランスとしては、一揆とかでは死なず、このために[性愛のために]死ぬであろう。彼は自殺を覚悟したとき、自分の死骸を目に焼き付けるよう、ヴァイオに呪詛している。彼の死の場面は、コニャックを飲みながらのもので、『巨人』のロケロールの舞台上の死を思わせ、観客にレーダーが潜んでいて、独白が芝居がかっている[636ff.]。

(9)検査官マイヤー(Inspektor Meier)、彼は小柄な醜男とされる。しかし村の女には人気があって、「一人の男と寝た者は、一緒に寝た男以上のものではない。貴族の出自といえども、…」[96]とうそぶくほど、自信を得ている。それで正直にヴィオレットの手紙を届けない。しかし少尉に森でピストルを突き付けられ、自殺として処理してやると脅された経験を有する。森林官と出会って窮地を脱したのである。この死の恐怖を少尉に対して晴らすために、多分レーダーから武器保管所について知らされると、森林官からその場所を聞き出し、フランス寄りの秘密警察にその報告をし、一揆を潰し、同時に少尉を追い詰めている。最後は、分離主義者として、「ピルマゼンスの地区役所で撲殺」[764]されている。

(10)森林官クニーブッシュ(Förster Kniebusch)、臆病でお喋り屋とされている。インフレがなければ、悠々自適の年金暮らしの筈が、当てが外れ、小心翼翼と暮らしている。昔一万マルクした村長の農園中庭への抵当権に対する利子もインフレで値崩れし、村長からは元本の一万マルク払うと言われたりするが、少尉の命令で、ライ麦の現物支給を利子として受け取れるようになる。(『貸しと借り』の抵当権のペテンもハイパー・インフレほどひどいものではない)。森林官はジャガイモの穴蔵泥棒の脱走囚人リープシュナーと密猟者ボイマーとによって頭を一撃されるが、最後必死で這いながら検査官のパーゲル許に行き、その報告をして、事切れる。

(11)フォン・テッシュォー(von Teschow)、フォン・ブラックヴィッツ騎兵隊長の義父。現世の利益を中心に考える。一揆の首謀者からは、「有能だ、商品をまず手にしてから、初めていつも支払おうとする人間の一人だ」[533]と評されている。自ら夫妻で旅立ちながら、娘に一揆の前、夫婦共にノイローエを離れるように言う、「[フランスの]クレマンソ

ー[1841-1929]」とかポワンカレ[1860-1934]といったお歴々が、我々がここで殺し合うのを見ると、互いに腹を抱えて笑うということが、奴等には分からないのだ。だから、エーフヘン、おまえの夫を上手く説得して、ここから離れろ。ここにいたら、何らかの立場表明をしなければならない。厄介事に巻き込まれてしまうぞ。むしろ車で離れろ」[580]。

(12) 巡查長マロフケ(Oberwachtmeister Marofke)、監獄の囚人達五十人を連れて作業分遣隊第五として収穫作業に従事する。監督者として、五人の囚人達の脱走計画を嗅ぎつけながら、上手く監獄事務局との交渉ができず、その間に脱走されてしまう。パーゲルはその能力を評価しているが、現実の結果責任の世界で、パーゲルは、「有能さだけではとても足りない。有能に見えることがはるかに大事なのだ」[526]と悟る。

(13) ハンス・リーブシュナー(Hans Liebschner)、模範囚として空腹騒動のとき、報道の記者が来ても、所長に迎合したコメントを述べる。紳士詐欺師。ゾフィー・コヴァレフスキーといい仲になっていて、作業分遣隊の一員となり、ノイローエで脱走。ゾフィーは枕探しをして言う、「早速彼女は紙幣を財布に戻そうとした。でもあのハンスなら私のことを笑いそう、と彼女は突然考えた。ハンスはそんな馬鹿ではない。すべてかっさらえと彼はいつも言っている。礼儀正しい者は馬鹿だ。いい気味だ、この人は次回もっと注意するようになるだろう」[331]。

(14) ゾフィー・コヴァレフスキー(Sophie Kowalewski)、ベルリンで、いかがわしい伯爵夫人と称する家の侍女として勤めている。騎士領の代官の娘。休暇と称して、郷里へ帰り、囚人ハンスの逃走を手助けする。ハンスが森林官を殺害したため最後逮捕される。駅で騎兵隊長を助けたり、水泳中のシュトゥットマンとパーゲルの服が森林官に押収されそうになったとき、阻止したりもしている。またハンスのために、パーゲルにセクハラ疑惑を仕掛けたりしている。「良いことでも、悪いことでも、中途半端」[717]。フィーケンとも呼ばれる。

(15) 代官コヴァレフスキー(Leutevogt Kowalewski)、騎士領の代官、実直。

(16) トゥーマン夫人(Frau Thumann)、「バクテリア」退治のため、便所掃除に熱心なベルリンの宿の女将。よく喋る。

(17) イーダ(Ida)、トゥーマン夫人、おまるマダムの許に住んでいる売春婦。

(18) パーゲル夫人(Frau Pagel)、ヴォルフガングの母親、夫の病を治そうと懸命に尽くす。ペートルには厳しい。

(19) ミンナ(Minna)、パーゲル夫人に長年仕えている女中。夫人、夫人の息子をよく理解している。

(20)アマンダ・バックス(Amanda Backs)、フォン・テッショ一家の利発な家禽番の娘。検査官マイヤーの恋人、ヴァイオの手紙の件を知ると、マイヤーに騎士領を離れるように勧める。官吏の家のマイヤーの許に忍び込んだことを、晩禱で領主の老夫人に咎められると、皆の前で反論する。しかしマイヤーが密告したことを知ると、皆の前でマイヤーに平手打ちをする。マイヤーはアマンダを許嫁として書き残している。マンデーケンとかマントヘンと呼ばれる。ノイローエではパーゲルの話し相手。

本作は主に1923年の話しであり、小説の中に新聞からの引用が見られ、時代背景が描かれている。そのまま引用しておく。

「そして帝国印刷所、五十や百もの補助印刷所で紙幣印刷機がうなり、新しい一日に備えている。新しい一杯の金が、途方もない洪水となって気前よく、飢餓のロンペンの民に振る舞われる。すべての名誉心が、すべての礼節が日ごとに失われて行く民に、...」[319]

「しかしこうしたやり方にかかわらず、またフランスのやり方を違法と宣言したイギリスやイタリアの異議にもかかわらず、フランスは平和時に戦争を継続した。ドイツ人には嫌がらせをしなければならぬと宣言された。さもないとドイツは支払わない、と。この嫌がらせはすでに今次の状況の謂であった。百人を越える死者、十もの死刑判決、半ダースもの終身刑、人質、銀行強盗、十万人を越える人々の家屋敷からの追放。ドイツは破滅して構わん、しかし払え」[404]。

「そして奇妙なことであったが、この低級な数字から、この硬貨と小さな紙幣から、一つの奇蹟が生じた。人間達は正気になった。一 彼らは計算し始め、突然了解した、合っているぞ、と。私はしかじかの給金を週に貰う。私はそこで、しかじかの支出をする、一 ほら御覧、合っている。人々は数年間計算して来た。一 合うことがなかった。人々は物狂おしく計算してきた。飢餓者のポケットに千マルク紙幣が見つかった。最貧浮浪者は百万長者であった。...」[756]

以下はネットで検索した情報である。「1923年1月には1ドル＝1万7792マルクのレートであったが、7月には1ドル＝35万3410マルク、8月には1ドル＝462万455マルク、9月には1ドル＝9886万マルク、10月には1ドル＝252億6020万3000マルク、11月には4兆2000億マルクに達した」。

本作では、「一九二三年七月のことで、今ドルは 一 朝の六時に 一 差し当たりまだ 414000マルクであった」[5]。「アメリカの一ドルが、四兆二千億マルクとなったとき、マルクは下落を止めた」[723]。

ベルリンの一風景、「貧しい一帯、ゲオルゲ教会通りである。ガス協会の集金人とか既製服の仲買人、郵便配達人、一 彼らは娘が立っているのを見ると、単にわずかにより急ぐのみである。彼らは顔をしかめないし、破廉恥な言葉も、冗談も言わず、娘どものことを考えない。ただ更に急いで通り過ぎるだけである。一言、一つの嘆願、一つの心に響く

嘆願のせいで、自分らの心が与えてはならぬ贈り物へと心動かされてはならないからである。どの人も家では同じ心配事が待っているのであり、どの人も心に邪悪な小鬼を住まわせている。― いくつか自分の妻が、自分の娘が、自分の少女がこのように立つかもしれないのである」[108]。

「いじめっ子、見ている君もいじめっ子」という看板を近所の学校で見たりするが、ヒトラーをユダヤ人のいじめっ子と見れば、ドイツに対する第一次大戦の戦勝国のいじめを本書で知ると、いじめの連鎖を思わないわけに行かない。

3. 真実一路

ハンス・ファラダの筆名はグリム童話由来らしい。ファラダは「鷺鳥番の女」からで、召使いの女に騙され、身分を取り替えられた王女の話で、それを目撃していた馬[Fallada]が、処刑された後も、王女を王女と証言し続けたという話のようである。(Falladaにはもう一説あり、裁判官の父親が口にしたという、„Fall ad a.“ = Fall ad acta 棚上げ事件、ファイル化された事件にちなむ)。従って、ファラダは真実を告げる使命を有するようである。しかし今は20世紀以降であり、相対性原理の発表された後の世界で真実と言っても、そう簡単に人は信じないであろう。召使いと王女の差があるのかといった問題、真相は「藪の中」といった問題がある。ファラダは何を伝えるべき真実と見ているか、そして同時に相対的視点、複眼的視点を有するか、それがこの名前から問題となろう。まず何を肯定的なものとして伝えたいと思っているのか。名前からまず気になるので、それを問題にしたい。一読して、そのキーワードとなるのは永遠という言葉のようである。

パーゲルの父親は立てなくなってから、暇つぶしに絵を描き、それがともかく画商達の間では評価される作品となったとされている。例えばパーゲル夫人をモデルとした作品、これをパーゲルは売却するのであるが、次のように形容される。「今やそれらの絵を凝視するのは彼女であった。今や、その絵の中の真実の彼の模写を見るのは、彼女であった。彼の速やかさ、彼の陽気さ、彼の穏やかな真面目さ、― それは消え去った、過ぎ去った、去った。ここにそれらはいる、高められて、永遠が生命に与える光輝を帯びて」[30]。芸術は永遠。普通の価値観であろう。しかしパーゲルの父親が入神の技を発揮するには、病気という制約が必要であったというのが、ファラダの言いたいことのように、近代の芸術家の前提条件に病気の経験を考えているようにも思われる。

次に主人公達の恋愛、腹の子供を予感したのかもしれないが、ペートルは次のような感懐をまず述べている。

「つまり突然、鏡の前での認識が彼女に生じた、即ち、彼は確かに出掛けるが、しかし彼は彼女のものであり、永遠に不壊に彼女の中に残るといった思いが生じたのであった」[112]。

これに呼応するヴォルフガングの感懐は随分後になってからで、十五歳のヴァイオと接吻してからの気付きである。

＜「貴方の発見の話しです、…」とヴァイオは促した。

「そのことだ、つまり私は言ったろう、私は別の女性のものだと。信じて貰えないだろう

が、その数分前にはそんな自覚はなかったのだ、...」。

「まあ何てこと」とヴァイオは叫んで、立ち止まった、「ぬけぬけと、ご馳走様」。

(中略)

「今私が考えているのは、ただ一人の女性だ」とパーゲルは言った、「私はこれを発見して、とんでもなく嬉しい」>[488ff.]。

恋人達は取り替えの出来ない唯一無二のカップルであるというメッセージである。主人公達の発見で、おめでとうと言う他ない。精神の問題と、肉欲、金の世界の方程式を上手く解いているのであろう。

少尉とヴァイオの関係は、倒錯したものである。少尉は単に自分では、村のドン・ファン気取りであるが、一揆の行く末、武器保管所の密告を予感すると、すぐに自殺を覚悟しヴィオレットに囁く。「一 更に三十年間、おまえがこの星から消えた後でも脈打つのだ。まだこの世の光の中でさまよう女の裡での、亡き男のささやかな永遠だ。存命の女の裡での、昔の男の痕跡だ」[624]。十五歳のヴァイオは恋人の少尉には自殺され、その後従者に拉致、監禁される。「以前彼女には一つの呪いが発せられ、生涯或るイメージを思い浮かべるように強いられた。一 彼女はその死んだ男を目撃した。それから、誰もそれについて何も承知していない或る時間があった」[762]。従者レーダーの仕打ちは明らかにされていない。次の一文だけである。「彼はいつもただ淫売と呼んでいたのだ」[750]。従者を抹殺したと思われる必殺仕掛け人の元刑事の太っちょは、更にこう述べている、「車の中に座っているのは、ヴィオレット令嬢の残滓だ。二ヵ月間、感覚と分別を作為的不安で消されてしまったのだ。感覚と分別をな。私の言うことが分かるか」[750]。ヴァイオは精神を病んだまま余生を過ごすことになる。これはパーゲルの父の場合と同じく、病気を代償にしてしか、真実が見えてこない場合があることを物語るものであろう。少尉が精神の問題として、金、肉欲の世界を棄てると、ヴァイオは精神と金、肉欲世界の方程式が解けなくなる。作品として、手紙を悪用するのは、シラー、特に『たくらみと恋』以来お馴染みのもので、ヴルムや従者レーダーといったヒロインの無視するものに復讐される手法もシラー以来お馴染みで、ドイツ文学らしい純愛悲劇の幕間劇『サイコ』となっている。『フィガロの結婚』が20世紀ではサイコパスの従者の登場になっている按配である。

次に政治的事柄について、一揆についての作者の判断。

「(しかし少尉にも、また裏切りについて話している彼の上司にも、一人の十五歳の小娘の話して倒壊するような案件は、詰まらぬものに違いないという考えは生じなかった。そのような事案は、一つの理念による生命付与の光輝のない単なる冒険にすぎないであろうに。彼ら自身、この劣等な時代の玉虫色の墮落した魔法に取り込まれていて、単にその日凌ぎを考えていて、その後の永遠のことを考えていなかったのである。一 ベルリンの紙幣印刷機がその日暮らしの仕事をしていたように)」[599]。

小説世界では一揆は失敗する。作者はこの一揆のことを「永遠のことを考えていない」現世的な野望にすぎないと一応批判できよう。しかし現実にはヒトラーはいわばこの小説世界での一揆を成功させていったのであり、ひょっとしたら少尉、ヴァイオ、騎兵隊長の輩が実権を握ったと思われるのである。『豺狼の群れ』が思いがけず、ナチ、ゲッベルス

に認められたというのは、作者にとって皮肉な現実でもあったろう。しかしナチの悪はともかく、この小説読めば、いかにハイパー・インフレは人心を荒廃させたか、納得出来ると同時に、一揆の失敗を教訓に、権力を奪取するには、軍と手を結び、有力者に立場表明を強い、フランス寄りの秘密警察[分離主義者]を排除すれば成功するであろうと分かる。

更に幼年時代の真実。ドイツ文学、特にジャン・パウルでの十八番である。これはゾフィーの少女時代の話しである。普通の世であれば、ゾフィーも普通に幸せであったかもしれないと思わせる。「それは生きている生の喜び、幸福であった。－ 大人が今やそれを承知していようとしまいと、大人が永遠に郷愁を感じるあの感情である。大人が後に再三求める幸福で、どこにあるか、誰も答えたがらず、二度と見いだせないもの、子供時代と共に消えた幸福である。－ 後に、ある弱い反映の中にのみ、つまり恋人との幸せな抱擁の中とか、ある作品への喜びの中に見いだされるものである」[371]。

フォン・テッシュー枢密顧問官の森愛好に対する作者のコメントは何を作者は大事にしているかはっきり語っている。作者は現在ならば、「緑の党」の支持者かもしれない。「しかし彼が森を愛するのは、やはりまた彼の流儀であって、彼は何か生命あるもの、生長するもの、永遠のものを愛しているのではない、－ 彼は儲け心で愛している。彼はかくかくしかじかの量[フェストメートル]の伐採可能な木材を愛しているのである」[668]。

以上は「永遠」という語に限定して作者の真意を推定して見た。

次に主人公の言動を見て行く。最初はルーレットや、売春婦、コカインといった語が頻出して、大学のリポジトリに翻訳登録するにはちょっとまずいなと思っていたところ、次第に本格的教養小説の言説が見られ、安心した。

主人公は「五分五分の豹[Pari-Panther]」という綽名の博徒である。赤か黒、確率50%の勝負の世界でせこい勝利を目指しているのであろう。この主人公の性格を次のようにコメントしている箇所がある。「この顔には反抗心が見られた。頑迷な頑固さが見られた。書記は引きつったような顔の表情について熟知していた。一人の制服着用者が一人の市民服のものに対して権力をかざそうものなら、この表情を浮かべる手合いである。このような男達は－ 権威に無駄な抵抗を生まれながらに試みる者達で、－ その場合、赤くなり、少しばかり酔っている場合、格別にそうなる」[175]。男気のある性格で、『嵐の前』のバメ將軍の「我々は横槍派[フロンド派]だ」の言葉を思い出したが、作者ファラダによると、男はすべてそういうものらしい。シュトゥットマン氏の行動について作者の次のようなコメントがある。「単にどこのまともな男にも生まれついている反抗心からであった。彼は、この老公が彼を永劫永久に追い払おうとしていることに気付いた。それ故彼は留まった。自分は自分の都合の良い時に去る。この老公が欲する時ではない。まさに今は違う。(そこの男も言う)」[460]。ジェンダー論で男を去勢する必要はなからう。

拘置所でクルーパスおっ母さんという世慣れた古物商の女将が、ペートルに、世間の「男」の定義を教える。「子供にはちゃんとした男の人を父親に欲しいのです。少しばか

り食い扶持の手配ができる人で、何か食べるものが得られて、ひもじい思いをさせず、付き合っていて、路上で倒れる心配のない人がいい、と…」[299]そう言えと教える。

第二部では主人公が健気に、小説ではなく、教科書でしか読まないような感慨を述べる。以下列挙する。

「その通り、ヴォルフガング・パーゲルよ、今汝は理解している。昔汝は、自由で、躊躇しないこと動物のようであった、と。人間世界は自分の欲することをやる世界ではない、自分のなさなければならぬことをやる世界なのである」[519]。

「初めて彼は内心で、自分の全本性と共に、心身と共に、理解した。つまり、人生は或る仕事を果たす者にのみ、喜びをもたらす、と。その仕事は小さなものであれ、大きなものであれ、間違いなく喜びをもたらす。人生の実現はただ自分の自我の中から生じ得るのであって、周囲からではない、賭けの儲けからではない、…」[644]。

ジャン・パウルの『ヘスペルス』では主人公は啓蒙思想と体現して、眼科医である。『豺狼の群れ』では最後に、主人公は精神科医を目指す。「人々を本当に助けることができるためには、沢山知らなければならない、沢山経験しなければならない。一 優しくある必要はないのだ。私は余りに優しくかった」[757]。

最終頁、「彼にとって、負担の大きい時代があった。しかし彼は耐え抜いた。ただ耐え抜いただけか。いや、彼は強くなった。彼は何か自らの裡に発見した。それが彼の支えとなって、何か不壊のもの、一つの意志となった。彼は以前、単に愛敬があったに過ぎない。一 それから彼は愛に値する者となった」[769]。

4. 藪の中

真実と思われることを述べることも大事であるが、それが世間の人々を納得させるためには、様々の視点からの検討を経たものであることが望ましいであろう。日本語には「盗人にも三分の理」という言葉があるが、作者はこの「三分の理」への目配りも忘れていないようである。

「すでにまたより活気づいてきたパーゲルは考えた、大方の人間が大方の事柄において、正当であり、同時にかつ不当であるというのは、呪わしいことだ」[706]。

「全く劣等そのものである人間はいない、ゾフィーもそうである」[370]。

「我が神よ、これが人間というものだ、人間はこのようなもので、一 人間はより上等なものではない。しかしより劣等なものでもない」[711]。

別の視点ということになると、勘違い、邪推も含むことになろう。

「しかしパーゲルは雷に打たれたように立っていた。老人の言葉は、全く別のことを意味していたが、ペートルの白状に新たな明かりを投げかけた。その通り、その通り。何か

もっとひどいことを避けるために、何か白状したのだ、病気と路上の[男]拾いを白状した、ヴォルフガングを避けるために。一緒にいるより拘置所がましなのだ。終わりだ、終わり。信じ合うことが失われた、信頼が最終的に失われた、一 彼から去った、この世から去った、耐え難いものから、耐えられるものへと移った。またしても得がたい勝利を失った、無一文、すべて、...」 [328]。

同じ出来事でも、立場が違えば、解釈も微妙に異なる。かろうじて畑泥棒を捕らえての印象、「役割が交換されていた。パーゲルの中ではまだ冒険の興奮、案じていた敗北のせいで、震えが収まらず、想定された威嚇者達の中に、劣等な者達、ほとんど犯罪者を見ていた。彼らに対してはどんな措置も合法に見えた。シュトゥットマンは三十名が罪もなく、羊のように煙草箱でおとなしくなっているのを見ていて、そのことから彼らの行為の罪のなさを結論づけていた。万事は些事にすぎない、と。

二人のうちどちらも、シュトゥットマンもパーゲルも間違っていた。確かにアルトローエの者達は犯罪者ではなかった。しかし同様に確かに、彼らは自分達は飢えたくない、自分達の食い物を得られる所から取って来ようと固く決心していた。何も買えないからである。最初の奇襲を彼らはほぼ諧謔的に受け入れたが、二度目の奇襲を受けたら、彼らは怒り、立腹することだろう」 [401]。

「フォン・テッシュー夫人は座って固まっていた、これは侮辱なのか、優しい配慮なのか、見極めようとした。両方ともそれらしく見え、全くそれを判断する観点次第であった」 [444]。

騎兵隊長はウオッカを飲むと、統合失調症的關係妄想に陥る。妄想ではあるが、盗人の三分の理に等しく、自分の追い込まれた状況を一面では反映しているわけである。

＜騎兵隊長は手紙と腕と友を押し退けた。

「巧みに考えられている。しかし私も馬鹿じゃない。見抜けないと思うのか。その手紙はやらせだ、一 私の義父との陰謀だ。私を蹴落とそうとして、私を離婚させるつもりなのだ。一 代わりの男はいる、だろう、エーファ。狂っているぞ。しかし今すべてお見通しだ。今朝の契約についてのお喋り。一 そもそも本当の契約だったのか。あの契約はこの手紙同様仕組まれたのではないか。ただ私を苛立たせるために。それから鷺鳥、一 多分おまえら自身がこちらへ誘い出したのだろう。散弾銃、何故散弾銃が装填されてあったのだ。棚に銃を置いていたときには、抜いてあったのだぞ。すべて準備されていたのだ。それで私がおまえらの罠にかかると、実際私は発砲した。私の意志に反してな、...誓って言うが、私の意志に反してなのだ。一 そこで私は狂人と宣告される、追放される、一 気違い病院に。禁治産宣告され、一 ゴムの房に入れられ、...」。

(中略)

不屈の決然さの最後の発作と共に騎兵隊長は彼を見送った。「私は一 断固旅しない」。騎兵隊長フォン・ブラックヴィッツがそれでも旅したのは、少しも不思議なことではなく、元来自明のことであった。一 翌日の正午、それどころかとても上機嫌で、それも枢密顧問官シュレックの許に、三台の散弾銃のケースを持ち、右手に絆創膏を貼って向かった>

[480]。

逆説的真相も複眼的思考から生まれるものであろう。

「何故この親切的な、有能な、頼りになるフォン・シュトゥットマン氏がひとり身なのか、中年のまことに孤立した独身者なのか、若いパーゲルは理解した。人間は自分の救援者を愛さない、一 人間は危機から脱すると、その救援者の卓越さを悪く受け取るのである」 [645f.]

5. その他

(1) 狼のモチーフ

タイトル原題『狼どもの中の狼』は特にトーマス・ホブズの称える「人間は人間にとって一匹の狼、homo homini lupus」を踏まえている[そうである]。

まずは言葉遊び、「ヴォルフ[狼]は羊だ。私でも彼に言えよう。彼は娘が自分に惚れて自分を受け入れていると思っている。しかしこの娘はこの住まいと絵とを見たのだ」[78]。

『『ひどい、...』と母親は叫んだ。しかし彼の中でただ深い喜びが解放された。飢餓の時代で、狼の時代であった。息子どもは自身の両親に刃向かった。飢えた狼の群れが互いに歯をむき出した。一 強い者が生きよ、しかし弱い者は、死ぬ。その者は私がかみ殺す」 [129]。

「ヴィオレット嬢は半ば子供であるが、実生活の何の予感もなく、賭けに負けて、この人生の狼の大きな口に迎えられた。ただわずかな暗闇、薄明かりが見られた。この深淵から、一つの永遠に繰り返される叫び声が響いてきた。不安でたまらない」 [612]。

少尉の自覚、「私はありのままの自分で丁度良いのだ。噛みつくための歯を持った、豺狼どもの中の狼でいいのだ」 [637]。

病める騎兵隊長に対するパーゲルの覚悟、「一 人間が人間に対峙していて、豺狼どもの中の狼で、汝が自らに対して矜持があるならば、自ら決心しなければならない」 [642]。

従者レーダーについて、元刑事の言葉、「パーゲル、これは人間であるとか、人間と同じように感じ、考えると思わないことだ。一 これは怪物だ。殺害する狼だ、むさぼり食うためではなく、殺すために殺すのだ」 [662]

逃亡囚人と密猟者ポイマーについて、森林官の言葉、「しかし男として、友としての彼は、言った。自分は起きて、伝えなければならない、と。ポイマーがまた現れて、別な男、未知の男が来ている、一 二人の危険な者達、二人の貪欲な狼どもだ」 [731]。

(2) 裸の女

「その日、私は部屋に入り掃除をしようとして驚いた。一人の女が全裸で鏡の前に立つ

て髪をすいていたからである。ドアの音にうしろをふりむいたが、日本兵であることを知るとそのまま何事もなかったようにまた髪をくしですき始めた。(中略)彼女たちからすれば、植民地人や有色人はあきらかに人間では無かったのである。それは家畜に等しいものだから、それに対し人間に対するような感覚を持つ必要は無いのだ、そうとしか思えない」 — 『アーロン収容所』、会田雄次[ネットからコピー]、アーロン収容所のエピソードは有名であるが、『豺狼の群れ』ではこのエピソードを思い出させる「裸の女」が二回言及されている。「奴隷を前にした裸の女王」というのは、西洋では普通のイメージらしい。

自殺前の少尉に対して、従者のレーダーが語る。真偽は定かではない。<「つまり」と従者は再び全く生氣なく報じた、「御令嬢が私を一人の人間として扱わなかったからです。令嬢は私のいるところで、着たり脱いだりされました。私が一片の材木であるかのように。そして御領主夫妻が外出されると、ご両親のことですが、すると御令嬢は私をいつも浴室へと命じまして、私はお体を拭くのです」>[631]。

次はパーゲルとエーファ夫人の会話。<「弟に金を頼めと仰有るのですか」と夫人は怒って叫んだ、「弟の前で頭を下げろ、と。嫌です、嫌」。

パーゲルは夫人に対して素早く荒々しく向かって行った。「しかし私の前では頭を下げられるのですか、ええ」と彼は怒って言った、「奴隷の前では女王は裸になっても平気だと。奴隷なんて人間じゃないのだからと」>[739]。

その他、騎兵隊長は「裸の女」に過敏に反応するらしく、笑いを誘う。

「ここでの件は、何らかの厭わしい、裸の女がらみではなく、 — これは恐怖である、 — 単に些細な遊び、もっと良く言って、賭けのことであると耳にした瞬間から、…」[276]。

ませたヴァイオの、作法にうるさいパーゲルに対するからかいも見られる。

「ベルリンでは娘達が全く裸で踊る酒場があるというのは本当ですか。貴方はそこにいらしたんでしょう。だからさ、貴方が私の体の一部を見たからといって、貴方は失神するとお話しになってもですね。おかしいですよ」[499]。

「女王」という言葉でマリー・アントワネットを思い出した。シュテファン・ツヴァイクの伝記によるとアントワネットは、お産のとき、人々が詰めかけた部屋で出産した、それは然るべく生まれたことを証明するための慣習だったと記されていたように記憶している。ところが『豺狼の群れ』では精神を病んだ騎兵隊長を立ち直らせるために、パーゲルが騎兵隊長に馬のお産を任せる場面がある。馬のお産について、次のような説明がある。

「雌馬の房は密にカーテンが張られていた。産気づいた馬は羞恥心があって、人間の目が覗くと、それに堪えられないからである。好奇心で覗く視線が一つあると、何時間もお産が遅れる」[707]。人間の王妃のお産は馬よりもひどい扱いに思える。衆人環視の中で生まれた王子が、その後フランス革命で行方不明というのは、何とも無情なものである。このツヴァイクの伝記で最も印象的な箇所は、アントワネットは、牢に入ってから、女王らしい威厳が見られたという箇所である、[記憶による]。女王と召使いはやはり違いがある

のであろう。『豺狼の群れ』では貴族のエーファ夫人が、最後にベルリンで、ファッション・サロンを切り盛りして行くと描かれている。ノイローエにいる頃は、パーゲルに、夫人は仕事を学校の宿題程度に考えていると批判されている[721]。しかし最後、夫人は牢の中のアントワネットと同じく、毅然と変貌したように思える。

(3) 都市と田舎

都会でも個々人はお喋りである。例えば宿の女将のトゥーマン夫人はお喋り好きで、パーゲル夫人の従姉妹の閣下と呼ばれる元陸軍少将の未亡人もとめどもなく喋る。しかし田舎と比べて都会で個々人の噂話が流布するとは思われない。これに比べ、騎士領ノイローエでは、すぐ村中に噂話が広がるとされる。例えば、

「だって、孫達の暮らし向きが悪いというようなことが書かれていたら、すぐに村中に知れ渡って、孫達のことは話題にされたくねえ」[383]。

「若いパーゲルは一つ閃いたのであった。刈り手兵舎の五十人が笑った、五人の役人が笑い、石工達が笑った。 — 直に村全体が笑うことだろう」[446]。

「多分村中が、両親も含めて、このことをすでに承知していよう」[572]。

騎士領の貴族、騎兵隊長は市民から見れば、娘のヴァイオがホテルの食堂で少尉に出会い、手紙の件で責められ、失神したとき、奇妙な振る舞いをする。娘の看病をしない。ポートワインを飲み続け、自滅する。「 — 彼は娘の不名誉な没落で、臆病に這いつくばってしまったのであった。彼は嘆いて、アルコールとヴェロナールを求め、痴呆を装っていた」[711]。

宮殿に住むフォン・テッシュー夫妻は、ベルリンのホテルからニースに移っている。電話でこのことを確認したパーゲルの印象、「彼は死んでいる、夫人も死んでいる。 — しかし人々は、二人は少なくとも娘を愛している、孫娘を愛していると思っていなかっただろうか。この愛の正体が今分かる、 — 恥ずかしい話しに巻き込まれることを恐れて、二人は逃げた、助けもせず、善良でもなく、恵みもなく、ヨーロッパの別の片隅に。ちなみにこれはかのフランスだ。フランスは、ルール地方を相変わらず占領して放さず、ドイツ政府と交渉することを敵対的に拒み続けている国だ」[668]。市民のパーゲルは孫娘を案ずるのが、普通だと思っているのであるが、地方貴族はまず体面を重んじ、口うるさい村人の餌食になるのを恐れているのである。

エーファ夫人がノイローエを棄てて、ベルリンに転居するのも、結局は失墜した評判を懸念してのものと思われる。

地方貴族にとっては、何が大事か。フォンターネの『嵐の前』では第一に「評判」を上げている。「彼女は系統樹の支障にはなろうが、評判[*die Profile*]の支障にはならない。評判も志操も妨げない。そしてこの二つのことが、貴族の有する最良のものだ」。

しかし、先に記したように、エーファ夫人は起死回生のベルリン・ファッションサロンを開いて、女王の真価を発揮するわけである。

あとがき

「すべて良きものは三つ揃い」とジャン・パウルは言っている。作品に付録を付けることは、ジャン・パウルをよくすることで、翻訳付録をただらと続けて行くことも可能であるが、しかし一応けじめを付けるべきであろう。解説でも記したが、付録はプロイセン騎士領の歴史の変遷を一望できるように、フォンターネ、フライターク、ファラダの三Fの三長編小説とした。偶然ではあったが、オーダー河畔の近辺の歴史、ナポレオンからヒトラーの流れを知ることになった。七十歳過ぎまでこの三作を知らなかったのであるから、日本のゲルマニストは暢気なものである。最近、Falladaはジャン・パウルに私淑していたことを知って、『豺狼の群れ』の主人公のように、偶然ルーレットで勝ったような気がした。翻訳は、論文のように難儀ではなく、適当に頭を使うので、晩年の外国語教師にとっては、暇つぶしに最適と思える。ジャン・パウルの付録シリーズとしてはFalladaでお仕舞いであるが、これからも認知症予防兼共存の翻訳を続けて行きたい。

2022年8月2日

恒吉法海